

上野国分僧寺・ 尼寺中間地域

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・
中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵
文化財発掘調査報告書 8分冊中の第2分冊。

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第20集 —

本 文 編

1987

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

正誤表

(本文編)

頁	行・図等	正 誤
凡例	3. 遺構図縮尺	埋設土器遺構 1 : 6 0 → 1 : 2 0
1 9	3 3 行	二彩 → 三彩
5 4 2	6 4 9 図	板番号 → 枝番号
6 7 1	図中住居番号	
	2 段目	F 区 1 号住 → H 区 2 7 号住
	3 段目	H 区 2 7 号住 → F 区 9 号住
	4 段目	F 区 9 号住 → G 区 1 3 6 号住
6 8 3	参考文献	
	1 0 行	否能性 → 可能性
6 8 3	1 2 行	2 2 5 軒 → 2 2 4 軒

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-320
	調査事業団保管	41-1
NO. 63-587	昭和63年7月26日	(5)

上野国分僧寺・ 尼寺中間地域

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書 8分冊中の第2分冊。

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第20集 —

本 文 編

1987

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 G区第22号住居跡出土三彩薬壺



2 F区第43号址出土埴塼



3 F区第17号溝出土飾り金具



4 G区第77号住居跡出土古銭「富壽神宝」



5 G区第50号住居跡出土白磁



6 F区第1号井戸跡出土白磁



7 G区第48号住居跡出土白磁



8 G区第21号住居跡出土白磁



軟質陶器 胎土A類
第628図-12



軟質陶器 胎土B類
第608図-9



軟質陶器 胎土C類
第608図-8



軟質陶器 胎土D類
第608図-14



軟質陶器 胎土E類
第609図-5



軟質陶器 胎土F類
第609図-2



軟質陶器 胎土G類
第609図-17



軟質陶器 胎土H類
第609図-11



軟質陶器 胎土I類
第609図-7



軟質陶器 胎土J類
第609図-8



軟質陶器 胎土K類
第609図-10



軟質陶器 胎土L類
第609図-3



軟質陶器 胎土M類
第738図-12



軟質陶器 胎土N類
第728図-8



内耳鍋底面 離砂
1-第464図-5



土師質土器皿 胎土A類
第606図-7



土師質土器皿 胎土A類
第690図-2



土師質土器皿 胎土B類
第637図-2



土師質土器皿 胎土C類
未掲載



土師質土器皿 胎土D類
第654図-11

序

関東平野西部を北上し日本海側と太平洋側を高速自動車道路で結ぶ関越自動車道新潟線が計画され、昭和60年にはその開通をみました。新しい動脈は、新しい政治、経済、文化の波を群馬県にもたらしつつあります。

この道路の通過する榛名山麓は、原始古代より東国の政治、文化の中心地であり、埋蔵文化財の宝庫であります。現在に伝えられる史跡も数多く遺されています。

この建設予定地に埋蔵されている文化財の発掘調査が、昭和55年4月から58年3月にかけて4年間にわたり実施されました。すでに、第一分冊で報告しましたように遺構、遺物量は膨大なものがあり、整理作業も着々と進行しつつあります。

この地域は遺跡名である国分寺中間地域の名が示すように律令国家の地方支配の拠点である国府の北に位置し、国家権力の象徴であり、鎮護国家のため建立された国分僧寺、国分尼寺に挟まれた場所です。また、周知されていますように、上野国は古代におきましては東国経略の中心地でもあり、東北（蝦夷）征圧の軍団や移住者である開拓団が集結した地域でもあったと予想される地域であります。

整理事業は8年計画の4年目でその途上ではありますが、ここに第二分冊として報告しますのは、奈良・平安時代を中心とするF・G・H区の掘立遺構等を持つ集落遺跡で同時に存在した上野国分僧寺、国分尼寺とのかかわりを直接持つ重要な内容も含んでいます。また記録の乏しい上野古代史に文字瓦、墨書土器等の貴重な資料を加えることができました。

長期にわたります発掘事業、整理事業に、ご協力いただきました道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会並びに関係市町村等の関係各位に感謝申し上げます。また、事業を遂行されました各位の労をねぎらうと共に、記録保存として作成されました本報告書が県民、教育者、研究者に広く用いられ、古代社会究明の資料として活用されることを念じつつ序とします。

昭和62年11月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は関越自動車道（新潟線）建設工事に伴い、記録保存のため事前調査された前橋市元総社町小字小見・群馬郡群馬町大字東国分小字村前・薬師道南・中道南・上野道南（植野道南）・高井道東地区に所在する「上野国分僧寺・国分尼寺中間地域、（小見・村前・薬師道南・中道南・上野道南（植野道南）・高井道東地区）の埋蔵文化財発掘調査報告書8冊の内の第2冊である。
2. 委託者 日本道路公団東京第2建設局 群馬県教育委員会
3. 発掘調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 調査期間 昭和55年4月～昭和59年3月31日
5. 調査担当者 昭和55年度 石井克己（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員・昭和57年退職、現 北群馬郡子持村教育委員会）
木津博明（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員）
桜岡正信（ ）
石北直樹（ ）
現 利根郡昭和村立東中学校教諭）
麻生敏隆（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員）
昭和56年度 佐藤明人（ ）・石井克己・
徳江秀夫（ ）・木津博明・
桜岡正信・麻生敏隆
昭和57年度 石井克己・木津博明・桜岡正信・関根慎二（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員）
昭和58年度 木津博明・桜岡正信・麻生敏隆
6. 調査嘱託員 昭和55年度～昭和58年度 黒沢はるみ（旧姓田辺）（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員）
昭和55年度～昭和56年度 間庭 稔（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員・現高崎市立西部小学校教諭）
7. 事務担当者 昭和61年度 白石保三郎（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団常務理事）
井上唯雄（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団事務局長）
大沢秋良（ ） 管理部長）
上原啓己（ ） 調査研究部長）
定方隆史（ ） 庶務課長）
平野進一（ ） 第一課長）
国定 均（ ） 主事）
笠原秀樹（ ）
須田朋子（ ）
吉田有光（ ）
柳岡良宏（ ）

昭和62年度 白石保三郎・井上唯雄

田口紀雄（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団管理部長）・上原啓己・定方隆史・平野進一・国定 均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏

※ 昭和60年度以前の事務担当者については、上野国分僧寺・国分尼寺中間地域報告書第一冊を参照

8. 整理事業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

整理事業は昭和59年4月～昭和67年3月までの8ケ年にわたり実施する。

本報告書は昭和61年4月～昭和62年10月までの1年7ヶ月間に整理を実施した調査報告書であり、後年にわたり実施・発刊する8冊中の第2冊目の調査報告書である。また、本報告書では、F・G・H区（一部）の古墳時代（中期）～奈良・平安時代及びF・G・H・I・J区の鎌倉時代以降の検出された遺構・遺物を掲載した。

9. 整理事業担当者 木津博明・桜岡正信

10. 整理事業作業員 黒沢はるみ・福島恵理子（嘱託員）

阿部和子・石井弘子・飯塚妙子・小野寺仁子・岡田美知枝・大川明子・金子吉江・川原嘉久治・金子ミツ子・小池洋子・小林泰子・桜井繁美・嶋崎しづ子・新谷さかえ・柴田敏子・須田育美・杉本万里子・鈴木紀子・高橋順子・土田三代子・角田桂子・蜂巢綾子・蜂巢滋美・原島弘子・茂木順子（50音順）を中心に以下の方々の協力を得た。吉田恵子・吉田笑子・野島のぶ江・並木綾子・今井もと子・松井美智子・大沢美佐保・大島敬子

11. 遺物保存処理 関 邦一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）

北爪健二（ 〃 嘱託員）

小材浩一（ 〃 補助員）

12. 写真撮影 遺構 発掘調査担当者

遺物 佐藤元彦（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）

一部の遺物についてはシン航空写真株式会社による。

13. 現場コンサルタント 並木秀行（三陽測量株式会社）

14. 出土遺物の化学分析・鑑定について以下の方々に依頼した。（敬称略）

獣骨鑑定 大江正直（前 群馬県家畜登録協会常任理事）

石材鑑定 飯島静男（群馬県地質学協会）

15. 発掘調査及び本書を作製するにあたっては、群馬県教育委員会及び同関係機関・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・前橋市教育委員会・群馬町教育委員会・同町都市計画課及び以下の方々の御指導・御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

林部 均（奈良県立橿原考古学研究所）、進藤秋輝・白鳥良一（宮城県多賀城跡調査研究所）、笠原信男（宮城県東北歴史資料館）、橋本澄朗（栃木県立博物館）、井口 崇・光江 章（財団法人君津郡市文化財センター）、梁木 誠（宇都宮市教育委員会）、田熊清彦（財団法人栃木県文化振興事業団）、柳沼賢治（郡山市文化財調査事業団）、住谷隆次（故人）、住谷宗七（東国分地区地権者会代表）、新井房夫（群馬大学教育学部学部長）、近藤義雄・山崎 一（県文化財専門員）、大江正直（前 群馬県家畜登録協会常任理事）、大塚初重（明治大学文学部教授）、須田 茂（新田町教育委員

会)、矢部良明(東京国立博物館)、松尾宣方(鎌倉市教育委員会)、斉木秀雄・原 廣志・小林康幸(鎌倉市文化財研究所)、上原真人(国立奈良文化財研究所)、池上 悟(立正大学文学部講師)、遠藤政孝(落川遺跡調査会調査員)、瀬谷昌良(茨城県協和町教育委員会町誌編さん委員)、岡崎正雄・種定淳介(兵庫県教育委員会)、増田 修(桐生市教員委員会)、前原 豊(前橋市教育委員会)、関口功一(新潟大学)、田崎通雅(三重県尾鷲市教育委員会)、大川 清(国土館大学文学部教授)、大塚昌彦(渋川市教育委員会)、羽鳥政彦(富士見村教育委員会)

16. 発掘調査及び整理事業に関する業務委託は以下のとおりである。

遺構実測、遺構・遺物トレース 株式会社測研

遺物実測・トレース シン航空写真株式会社

井戸跡の調査 株式会社原沢ポーリング(調査所見は同社有賀正明による)

17. 調査に至る経緯については、上野国分僧寺・国分尼寺中間地域報告書第1冊に詳述されているので、同報告書を参照願いたい。

18. 本書の執筆は以下のとおりで、文責は別記した。

大江正行、神谷佳明、黒沢はるみ、木津博明、桜岡正信

19. 発掘調査においては群馬町、吉岡村、榛東村、榛名町、渋川市、赤城村、前橋市、高崎市の多くの方々ならびに、ふるさとを知る会の方々の御協力を頂いた。また、群馬町立中央中学校、南中学校の社会科学クラブの生徒諸君の参加を得た。

20. 本遺跡の図面・写真・遺物は、現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 本書中に掲載した地形図は、国土地理院、1：25,000、群馬町・前橋市都市計画図 1：2,500を縮小し使用した。

2. 本書中の方位記号の方向は真北を指す。

3. 本書中の遺構実測図の縮尺は以下のとおりである。

竪穴住居跡 1：60 掘立柱建物跡 1：60 埋設土器遺構 1：60 土壌墓 1：60

土坑 1：60 井戸跡 1：60 サク状遺構 1：80 溝 1：80 遺構分布図 1：250

溝全体図 1：200を基準としたが、総てがこの限りではない。

4. 遺構挿図中の等高線・断面基準線は海拔で表示し、断面基準線高はL＝で示した。

5. 土層断面図中のI～VII…は、基本層序のI～VII層…に準じ、覆土の層序は1～nとした。

6. 本書中にある火山灰は以下のとおり略記した。

浅間山噴出B軽石層→B軽石・B、浅間山噴出C軽石層→C軽石・CP・C

榛名山二ッ岳噴出火山灰層→FA、FP

7. 遺構挿図中に使用した遺物の記号は以下のとおりである。

● 土師器・須恵器・土師質土器 ○ 灰釉陶器・緑釉陶器・白磁 ▲ 石器 △ 金属製品
▲ 紡錘車 ◎ 白玉 回 土錘 ■ 瓦 ★ 鞆の羽口 □ 炭化物 ☆ 骨

8. 挿図中に使用したスクリーンは以下のとおりである。

遺構実測図

	焼土・焼土層		灰・灰層		粘土
	礫の断面		B軽石		C軽石
	FA		砂礫		掘り方

遺物実測図

	灰釉陶器		緑釉陶器		鉄釉
	白磁		軟質陶器・いぶし		黒色処理・炭化物
	羽口の鉄分付着		赤色塗彩		磨滅部分

9. 遺構実測図中の遺物番号は出土遺物実測図の番号と一致し、挿図番号―遺物番号の順で記載した。

10. 遺物実測にあたっては、当事業団拡大整理委員会歴史部会で編集した「仕様書―遺物編」(未刊)に準拠したが、全てがこの限りではない。

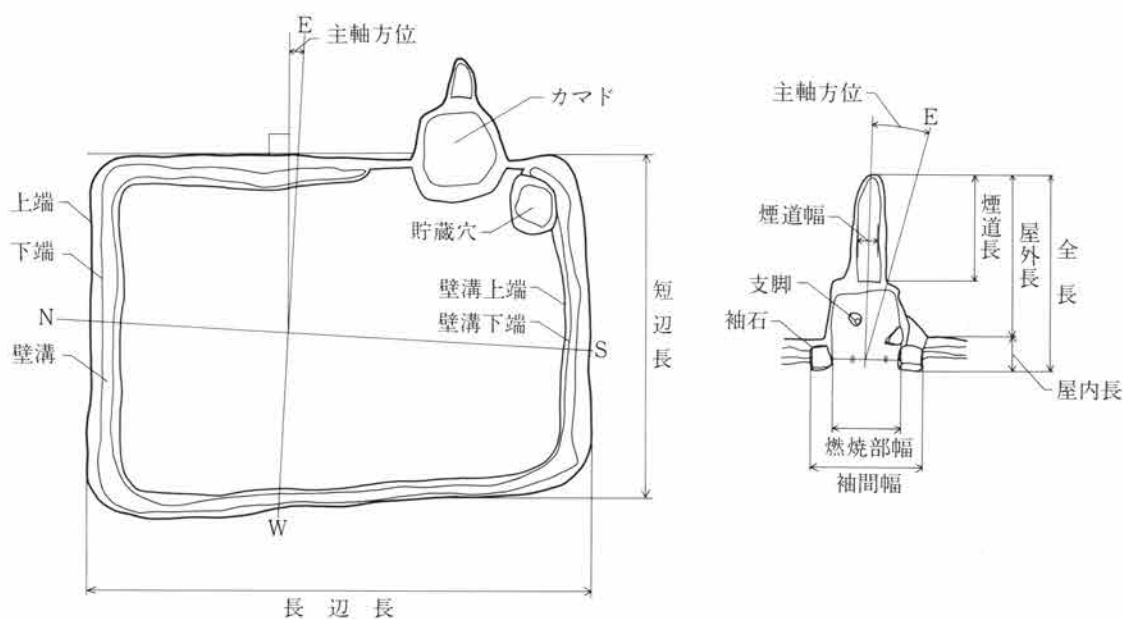
11. 本書中の遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器・土製品 1：3 (大形 1：6、瓦 1：5) 石器・石製品 1：3 (白玉 1：2)

金属製品 1 : 3 (古銭 1 : 1 鎌倉時代以降の遺構内出土古銭 1 : 2)

上記以外の縮尺のものについては、個別に明記した。

12. 遺物観察表中の「度目」「度・量目」は、度は長さを、量は重量を示す。また、()は完存品以外の推定値・復原値を表わし、量目では残存量を計測した。金属製品については、錆等の除去後の数値である。
13. 遺物観察表中の「色調」は、「標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、1976年9月発行を使用し記載したが、細部では観察者の個人差がみられる部分もある。
14. 遺構の計測位置は下図のとおりである。



15. 遺物計測位置は、図表編に別記した。
16. 土器の種別については、原則としてロクロ使用・還元焰焼成のものを須恵器、非ロクロ使用・酸化焰焼成のものを土師器として扱ったが、中間的なものについては判断をさけたものがある。
17. 土器の器種については、原則として高台を付すものを埴、付さないものを坏、口径に比較して器高の著しく低いものを皿とし、その他、甕・壺等使用したが、文献にあたって使用したものではなく、また、特に概念規定を明らかにした上で使用したわけではなく、あくまでも整理上便宜的に使用した。
18. 本遺跡出土遺物の注記は、「KK17」を冠し区名・遺構名称を記入した。初めのKは「関越自動車道」のKanetuのKで、次のKは KousokuclouのKで、17は群馬県内で南から17番目の遺跡であることを示す。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
対照目次	

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査経過	……………(桜岡正信)……………	1
第2節 調査の方法		
第1項 基準杭とグリッドについて	……………(桜岡正信)……………	2
第2項 基本層序	……………(木津博明)……………	3

第2章 遺跡の位置

第1節 遺跡立地	……………(桜岡正信)……………	4
第2節 周辺遺跡	……………(木津博明)……………	5

第3章 検出された遺構・遺物

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要	……………(桜岡正信)……………	19
第2節 鎌倉時代以降	……………(木津博明)……………	488

第4章 考 察

第1節 古墳時代(中期)～奈良、平安時代の遺物		
第1項 土器の分類と時期設定	……………(桜岡正信)……………	649
第2項 足高高台を有する土器について	……………(//)……………	669
第3項 青・白磁について	……………(//)……………	674
第4項 奈良三彩陶について	……………(神谷佳明)……………	675
第2節 古墳時代(中期)～平安時代の遺構		
第1項 住居形態について	……………(桜岡正信)……………	679

第2項	カマドについて	……………(黒沢はるみ)……………	683
第3節	鎌倉時代以降の遺構について		
第1項	検出遺構について	……………(木津博明)……………	691
第4節	鎌倉時代以降の出土遺物について		
第1項	出土遺物の一括性について	……………(木津博明)……………	704
第2項	中・近世の陶・磁器について	……………(大江正行)……………	706
第3項	在地系土器について	……………(木津博明)……………	716
第4項	腰刀について	……………(大江正行)……………	750
第5項	石製品・石造品について	……………(木津博明)……………	751
第6項	総括	……………(〃)……………	759

対 照 目 次

名 称	本 文 編					図 表 編	写 真 図 版 編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
調査経過	1			1				
基準杭とグリッドについて	2			2				
基本層序について	3			3				
遺跡の立地	4						1~4	
周辺遺跡	5~18			4				
調査の概要	19		19				5	
F区遺構配置図	20			5			6	
F区第1号住居跡	21~23	21		6	6~8	1	8	92
F区第2号住居跡	23・24	23		9	10	1・2	8	92
F区第3号住居跡	24・25	24		11	12	2	9	92・93
F区第4号住居跡	26・27	26		13	13・14	2・3	9	93
F区第5号住居跡	27~30	27		15	16・17	3・4	9	93
F区第6号住居跡	31	31	31	18	18	4	10	94
F区第7号住居跡	32~35	32	34	19	20~22	4・5	10	94
F区第8号住居跡	35	35		23	23	5	11	
F区第9号住居跡	36~38	36	38	24	25~27	5・6	11	94・95
F区第10号住居跡	38	38		28	28	6	11	95
F区第11号住居跡	39・40	39		29	30・31	6・7	12	95
F区第12号住居跡	40・41	40		32	33	7	12	
F区第13号住居跡	41・42	41	42	34	35	7	12・19	95
F区第14号住居跡	42・43	42		36	37	8	12	95
F区第15号住居跡	44	44		38	39	8	13	
F区第16号住居跡	44~46	44		40	40・41	8・9	13	95
F区第17号住居跡	46~49	46	48・49	42	43	9	13	95・96
F区第19号住居跡	51	51	51	48	49	11	14	96
F区第20号住居跡	52	52	52	50	50	11		
F区第21号住居跡	52~54	52	52	51	51・52	11・12	14	96・97
F区第22号址	54・55	54		53	54	12		97
F区第23号住居跡	55~59	55	57・58	55・56	56~59	12~14	15	97・98
F区第24号址	60・61	60		60	61	14・15	15	98・99
F区第25号住居跡	62・63	62	62	62	63	15	15	99
F区第26号住居跡	64~67	64	67	65	66~68	16・17	16	99・100
F区第27号住居跡	62~64	62	62	62	63・64	16	15	
F区第29号住居跡	67~70	67		69	70~72	17	16・19	100・101
F区第30号住居跡	70	70		73	73	18	16	
F区第31号住居跡	70・71	70		74	74	18	16	
F区第32号住居跡	71・72	71	71	75	76	18	17	101
F区第33号住居跡	72・73	72		77	77	18・19	17	101
F区第35号住居跡	73・74	73	73	78	78	19	17	
F区第36号住居跡	74	74		79	79	19	17	
F区第37号住居跡	75	75	75	80	80	19	18	101
F区第38号址	75・76	75		81	81	19・20	18	
F区第39号住居跡	76・77	76		82	82	20	18	
F区第40号住居跡	77・78	77	78	83	84	20	18・19	101
F区第41号住居跡	78・79	78		85	85	21	19	
F区第42号住居跡	79・80	79	79	86	86	21	19	
F区第43号址	80~82	80	80	87	88・89	21・22	19	101
F区第44号住居跡	80~83	80	80	87	90・91	22	19	102
F区第45号住居跡	83	83	83	92	92	22	20	
F区第46号住居跡	84・85	84		93	93・94	23	20	102
F区第47号住居跡	85・86	85	85	95	96	23	20	
F区第49号住居跡	86~88	86		97	97~99	23・24	20・21	102
F区第50号住居跡	88~90	88	90	100・101	102・103	24	21	102・103

名 称	本 文 編					図表編	写真図版編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
F区第52号住居跡	90~92	90		104	105・106	25・26	21	103・104
F区第55号址	92・93	92	93	107			21	
F区第56号住居跡	93・94	93		108	109	26	21	104
F区第57号住居跡	94・95	94		110	110・111	26	22	104
F区第58号住居跡	95・96	95		112	112・113	26	22	105
F区第59号住居跡	96~99	96	96	114	115~117	27・28	22	105
F区第61号住居跡	46~49	46	48・49	42	44	10	13・14	96
F区第62号住居跡	47~50	47	48・49	42	45・46	10	13・14	96
F区第63号住居跡	47~50	47	48・49	42	47	10・11	13・14	96
F区第64号住居跡	99・100	99		118	118	28	22	105・106
F区第65号住居跡	62~63	62	62	62	63	16	15	
F区第75号址	100・101	100		119	119	28・29	23	106
G区遺構配置図	102			120			5~7	
G区第1号住居跡	103・104	103		121	121・122	29	23	106
G区第3号住居跡	104・105	104		123	124	29・30	23	106
G区第4号住居跡	106	106	106	125			24	
G区第5号住居跡	106・107	106	106	126	126	30	24	107
G区第6号住居跡	107~109	107	107	127	128・129	30・31	24・25	107
G区第7号住居跡	109・110	109		130	131	31	25	107
G区第8号住居跡	110・111	110	110	133	132・133	31・32	25	107・108
G区第10号住居跡	112・113	112	113	134	135	32	26	108
G区第11号住居跡	113・114	113	113	136	136	32	26	108
G区第12号住居跡	114・115	114		137	138	33	26	108
G区第13号住居跡	115・116	115		139	140	33	26	108
G区第14号住居跡	116・117	116		141	142	33・34	27	108・109
G区第15号住居跡	118	118		143	144	34	27	109
G区第16号住居跡	119・120	119	120	145	146・147	34・35	28	109
G区第17号住居跡	121・122	121	122	148	149・150	35	28	109・110
G区第18号住居跡	123・124	123	123	151	151・152	36	29	110
G区第19号住居跡	124・125	124		153	154	36	29	110
G区第20号住居跡	125~127	125	125・126	155	156	36・37	30	110
G区第21号住居跡	127~129	127	127・129	157・158	159・160	37・38	30	110・111
G区第22号住居跡	130・131	130	130	161	162	38	30	111
G区第23号住居跡	132	132		163	163	39	31	111
G区第24号住居跡	133・134	133		164	164・165	39	31	111
G区第25号住居跡	135・136	135	135	166	167	39・40	32	111
G区第26号住居跡	136~138	136		168	169・170	40・41	32	111・112
G区第27号址	138・139	138	138	171	172	41・42	32	112
G区第28号住居跡	139・140	139		173			32	
G区第29号住居跡	140~142	140	140	174	175・176	42	33	112・113
G区第31号住居跡	142	142	142	177			33	
G区第32号住居跡	142~144	142	144	178	178・179	42・43	34	113
G区第33号住居跡	144・145	144	144	180	180	43	34	113
G区第34号住居跡	146・147	146	146	181	182	43・44	34	113
G区第37号住居跡	148	148	148	183	183	44	35	113
G区第39号住居跡	148・149	148		184				
G区第41号住居跡	149・150	149	150	185	186	44	35	113
G区第42号住居跡	150・151	150	151	187	187	44	35	
G区第43号住居跡	151・152	151		188	189	44	35	113
G区第44号住居跡	152	152		190	190	45		114
G区第46号住居跡	152・153	152	153	191	192	45	36	114
G区第47号住居跡	154~157	154	157	193・194	195~197	45~47	36	114・115
G区第48号住居跡	157~159	157	158	198	199・200	47	37	115
G区第49号住居跡	160~162	160		201	202~204	47・48	37	115・116
G区第50号住居跡	163・164	163	164	205	206	48・49	38	116
G区第51号住居跡	165・166	165	165	207			38	
G区第52号住居跡	167・168	167		210	210・211	49・50	39	

名 称	本 文 編					図表編	写真図版編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
G区第55号住居跡	168	168		212			39	
G区第56号住居跡	169~171	169		213	214・215	50・51	39	116・117
G区第57号住居跡	171~173	171		216	217	51	39	117
G区第58号住居跡	173・174	173	173	218	219	51	40	117
G区第59号住居跡	174~176	174	174	220	221・222	52	40	117
G区第60号住居跡	176~179	176	176・177	223・224	225・226	52・53	40	118
G区第61号住居跡	179~184	179		227	228~232	53・54	41	118・119
G区第62号住居跡	165~167	165	165	207	208・209	49	38	116
G区第64号住居跡	185~188	185		233	234~237	55	41	119・120
G区第65号住居跡	189・190	189	189	238	239	56	41・42	120
G区第66号住居跡	190~193	190		240	241~243	56・57	42	120
G区第67号住居跡	193・194	193		244	245	57	42	
G区第69号住居跡	194	194		246	247	57	42	
G区第70号住居跡	195・196	195		248	249・250	57・58	43	120・121
G区第71号住居跡	196~199	196	196	251	251~253	58・59	43	121
G区第72号住居跡	196~200	196	196	251	254・255	59・60	43	121
G区第73号住居跡	200・201	200	200	256	257	60	43	
G区第74号住居跡	201~203	201	202	258	259・260	60・61	44	121
G区第77号住居跡	204・205	204		261	261・262	61	44	121・122
G区第78号住居跡	206・207	206		263	264・265	61・62	44	122
G区第79号住居跡	207~210	207	207	266	267~269	62・63	45	122・123
G区第80号住居跡	211・212	211	211	272	272	63・64	45	
G区第81号住居跡	212・213	212	212	273	273	64	41	123
G区第83号住居跡	213	213	213	274				
G区第85号住居跡	214・215	214		275	275・276	64	45・46	
G区第89号住居跡	215~218	215		277・278	279~281	64・65	46	123
G区第90号住居跡	218	218		282	282	65	46	123
G区第91号住居跡	219	219		283	283	65・66	46	123・124
G区第92号住居跡	219・220	219		284	285	66	47	124
G区第95号住居跡	221・222	221	222	286	287・288	66	47	124
G区第98号住居跡	222・223	222	222	289	289	67	47	
G区第99号住居跡	148	148	148	183			35	
G区第100号址	223~225	223	225	290	291・292	67・68	47	124・125
G区第101号住居跡	225・226	225	225	293	293	68	48	125
G区第102号住居跡	226・227	226	226	294	295	68	48	125
G区第103号住居跡	227・228	227	227	296	297	69	48	125
G区第104号住居跡	228・229	228	228	298			48	
G区第105号住居跡	230	230	230	299	300	69	48・49	125
G区第109号住居跡	231	231	231	301	301	69	49	125・126
G区第111号住居跡	231・232	231	231	302	302	69・70	49	126
G区第113号住居跡	232・233	232	233	303	303	70	49	126
G区第114号住居跡	233~235	233		304	304・305	70・71	49	126
G区第115号住居跡	235	235		306			50	
G区第117号住居跡	236・237	236		307	308・309	71	50	126
G区第118号住居跡	238	238		310	310	71	50	126
G区第119号住居跡	238・239	238	238	311	312	72	50	
G区第120号住居跡	239~241	239	239	313	314・315	72	50	126
G区第122号住居跡	242	242		316	316	72	51	
G区第124号住居跡	242・243	242		317	318	73	51	
G区第125号住居跡	244	244	244	319	319	73	51	
G区第126号住居跡	244	244		320			51	
G区第127号住居跡	242・243	242		317	318	73	51	
G区第128号住居跡	245	245	245	321			51	
G区第131号址	245・246	245	245	322	322	73	52	
G区第133号住居跡	246・247	246		323	324	73	52	
G区第134号住居跡	207~211	207	207	266	270・271	63	45	123
G区第135号住居跡	247・248	247		325	326	74	52	126

名 称	本 文 編					図表編	写真図版編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
G区第136号住居跡	248~252	248	248	327	328~331	74・75	51・52	127
G区第138号住居跡	252・253	252	253	332	332・333	75・76	52	127
G区第139号住居跡	253・254	253	253・254	334	335	76	52	127
G区第140号住居跡	255・256	255	255	336	337・338	76・77	53	127
G区第141号住居跡	256~258	256	256	339	340・341	77	53	127・128
G区第142号住居跡	256~259	256	256	339	342	77	53	
G区第143号住居跡	259	259	259	343			53	
G区第144号住居跡	259・260	259	259	344	344	78	53	128
G区第145号住居跡	260	260	260	345			54	
H区遺構配置図	261			346			5・7	
H区第10号住居跡	262~264	262	262・264	347	348・349	78・79	54	128・129
H区第13号住居跡	264・265	264	264	350	351	79	55	129
H区第14号住居跡	265・266	265		352・353	353	79	55	129
H区第15号住居跡	267・268	267	268	354・355	356	79・80	55・56	129
H区第16号住居跡	269~271	269		357	357~359	80・81	56	129・130
H区第17号住居跡	272・273	272	273	360	360・361	81	57	130
H区第18号住居跡	273・274	273		362	363	81	57	130
H区第19号住居跡	274~276	274		364	365	81・82	58	130
H区第20号住居跡	276・277	276		366	367	82	58・59	131
H区第21号住居跡	278	278		368	368	82	59	
H区第22号住居跡	278~281	278		369	369~371	83・84	59・60	131
H区第23号住居跡	281・282	281		372	373	84	60	
H区第24号住居跡	282	282		374	374	84	60	
H区第25号住居跡	283	283		375			60	
H区第26号住居跡	283~286	283	283	376・377	377・378	84・85	61・62	131・132
H区第27号住居跡	286~288	286		379	379・380	85・86	62	132
H区第28号住居跡	288・289	288		381	381	86	63	
H区第29号住居跡	289・290	289		382・383	383	86	63	132
H区第30号住居跡	290	290		384				
H区第32号住居跡	290・291	290		385	385	87		132・133
H区第33号址	291~298	291	298	387	386~390	87~90	63・64	133・134
H区第34号住居跡	298・299	298		392	392	90・91	64	135
H区第37号住居跡	299・300	299		393	393	91	64・65	135
H区第40号住居跡	300	300		394	394	91	65	
H区第48号住居跡	300・301	300		395	395	91	65	135
H区第52号住居跡	302	302	302	396	396	91	65	
H区第55号住居跡	302~304	302	302	397	397・398	92	65・66	135
H区第56号住居跡	304~307	304	304	399	399~401	92・93	66	135・136
H区第58号住居跡	307・308	307	308	402・403	403	93	66	136
H区第59号住居跡	308~313	308	312	404・405	405~409	93・94	66・67	136
H区第60号住居跡	313・314	313		410	410	94	67	
H区第70号住居跡	314・315	315		411	412	94	67・68	136
H区第74号住居跡	316	316		413	414	94	68	136
H区第75号住居跡	316・317	316		415	415	95	68	136
H区第78号住居跡	291~298	291	298	386	391	90	63・64	135
H区第79号住居跡	318~320	318	320	416・417	418・419	95	68・69	136
H区第80号住居跡	320・321	320		420	420	95・96	69	137
H区第81号住居跡	321~323	321		421	422	96	70	137
H区第82号住居跡	324・325	324	325	423	423・424	96・97	70	137
H区第85号住居跡	325・326	325		425	425	97	70	
H区第86号住居跡	326	326		426	426	97	70	137
H区第88号住居跡	326・327	326		427			71	
H区第90号住居跡	267・268	267		354・355				
H区第91号住居跡	327・328	327		428	428・429	97・98	71	
H区第93号住居跡	328~330	328		430・431	431・432	98・99	71・72	137・138
H区第94号住居跡	330~332	330	332	433	434・435	99	72・73	138
H区第95号住居跡	332~334	332		436	437	99・100	73	139

名 称	本 文 編					図表編	写 真 図 版 編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
H区第96号住居跡	334・335	334		438			73・74	
H区第110号住居跡	335・336	335	335	439	440	100	74	
H区第111号住居跡	336・337	336	337	441	441・442	100	74	139
H区第113号住居跡	337・338	337		443	443	100	74	139
H区第114号住居跡	338・339	338	339	444	444	100	75	139
H区第115号住居跡	338・339	338	339	444	444		75	
H区第150号住居跡	340	340		445	446	101	75	139
H区第151号住居跡	341・342	341		447	448・449	101	75	139・140
H区第152号住居跡	342・343	342		450	451	101・102	76	140
H区第153号住居跡	343・344	343		452	453	102	76	140
H区第155号住居跡	344・345	344		454	454	102		
H区第1号掘立柱建物跡	345・346		345	455	455	102・103	76	140
H区第2号掘立柱建物跡	347		347	456			76	
H区第3号掘立柱建物跡	348		348	457	457	103	76	140
G区第1号埋設土器	349		349	458			76・77	
G区第2号埋設土器	349		349	459	459	103	77	140
G区第7号土壙墓	350		350	460	460	103	77	140
F区第1号土坑	351			461			77	
F区第2号土坑	351			461			77	
F区第3号土坑	351			461	461	103	77	
F区第4号土坑	351			461	461	104	77	
F区第5号土坑	352			462				
F区第7号土坑	352			462			78	
F区第8号土坑	352			462			78	
F区第9号土坑	352			462				
F区第13号土坑	352			462				
F区第21号土坑	352・353		353	462	462・463	104	78	140・141
F区第22号土坑	354			464	464	104・105	78	141
F区第25号土坑	355			465	465	105	79	141・142
F区第29号土坑	355			465				
F区第94号土坑	355			465				
F区第95号土坑	355			465				
F区第96号土坑	355			465				
F区第113号土坑	356			466	466	105		142
F区第116号土坑	356			466	466	105・106		
F区第117号土坑	356			466	466	106		
F区第118号土坑	356・357			466	466・467	106		142
F区第119号土坑	356			466				
F区第120号土坑	356			466	466	105・106		
F区第121号土坑	356・357			466	467	106		
F区第122号土坑	357		357	467	467	106	79	142
F区第123号土坑	358			468	468	106		
F区第208号土坑	358			468				
F区第212号土坑	358			486				
F区第523号土坑	358			468	468	107		
G区第1号土坑	358			468	468	107	79	
G区第5号土坑	359			469				
G区第11号土坑	359			469				
G区第12号土坑	359			469				
G区第28号土坑	359			469				
G区第30号土坑	359			469	469	107		142
G区第49号土坑	359			469	469	107		142
G区第50号土坑	360		360	470				
G区第52号土坑	360			470	470	107		
G区第55号土坑	360			470			79	
G区第70号土坑	360			470				
G区第74号土坑	360			470			79	

名 称	本 文 編					図表編	写 真 図 版 編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
G区第75号土坑	360			470				
G区第79号土坑	361			471				
G区第80号土坑	361			471				
G区第92号土坑	361			471				
G区第93号土坑	361			471				
G区第94号土坑	361			471				
G区第96号土坑	361			471				
G区第97号土坑	361			471				
G区第107号土坑	361			471				
G区第108号土坑	362			472	472	107・108		142
G区第109号土坑	362			472	472	108	79	
G区第111号土坑	362			472	472	108	79	
G区第112号土坑	363			473		108	79	
G区第113号土坑	363			473	473	108	80	
G区第116号土坑	363			473				
G区第120号土坑	363			473			80	
G区第121号土坑	364			474			80	
G区第122号土坑	364			474	474	108		
G区第136号土坑	364			474	474	109		142
G区第147号土坑	364			474				
G区第148号土坑	364			474			80	
G区第149号土坑	365			475				
G区第150号土坑	365			475				
G区第153号土坑	365			475				
G区第154号土坑	365			475				
G区第156号土坑	365			475	475	109		
G区第159号土坑	365			475				
G区第169号土坑	365・366			475	476	109		
G区第178号土坑	366			476	476	109	80	142
G区第187号土坑	366			476				
G区第189号土坑	366			476				
G区第866号土坑	366			476				
H区第3号土坑	367			477	477	109		
H区第24号土坑	367			477				
H区第26号土坑	367			477				
H区第27号土坑	367			477				
H区第31号土坑	367			477				
H区第32号土坑	367・368			477	478	110	80	142・143
H区第33号土坑	369			479	479	110		
H区第34号土坑	369			479			80	
H区第35号土坑	369			479			80	
H区第36号土坑	369			479				
H区第106号土坑	369			479				
H区第121号土坑	370			480	480	111		
H区第161号土坑	370			480				
H区第162号土坑	370			480	480	111		
H区第163号土坑	370			480	480	111		
H区第299号土坑	370			480				
F区第1号井戸跡	371~385	371	371	481	482~495	111~114	80・81	143・144
G区第4号井戸跡	386~409	386	386	496	497~519	114~119	81	145・146
G区第5号井戸跡	410	410	410	520			81	
G区第6号井戸跡	410~443	410	410	521・522	522~553	119~128	81	146~148
H区第3号井戸跡	444	444	444	554			81	
G区第1号サク状遺構	445		445	555・556			81	
G区第2号サク状遺構	445・446		445	555・557			81	
F区溝配置図	447			558				
F区第5号溝	451~453			562・563				

名 称	本 文 編					図表編	写 真 図 版 編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
F区第10号溝	448・450・453～455		453	559・561	565・566	128・129	82	149
F区第12号溝	448・450・453・455		453	559・561	566	129		149
F区第13号溝	449・450・453		453	560・561				
F区第14号溝	453		453	564				
F区第16号溝	451・453		453	562			82	
F区第17号溝	449・453・455		453	560	566	129	82	149
F区第18号溝	449～453・455		453	560～563	566	130		
G区遺構配置図(1)	456			567				
G区遺構配置図(2)	457			568				
G区第10号溝	457・462～464		457	573・574	576	130		149
G区第25号溝	457～461・464		457	569～572	576	130	82	
G区第26号溝	457・459～461 464～466		457	570～572	576～578	130・131	82	149・150
G区第37号溝	457～461・466		457	569～572	578	131・132	82	150
G区第38号溝	457・463・464・467		457	574・575	579	132		150
G区第41号溝	457・460・461・467		457	571・572	579	132	82	150
H区第8号溝	453・468		453	580			82	
遺構外出土遺物	469～477		477		581～589	132・133		150
遺構内・外出土遺物	478・479		479		590・591	133・134		150
文字瓦集成	480～482				592～594	134～140		156～165
スタンプ等集成	483				595	140～142		166・167
叩き集成	484～486				596～598	143		168～173
瓦技法集成	487				599	143・144		174
調査の概要(鎌倉時代以降)	488・489		488・489					
D区概要	489		489					
D区第8号溝状遺構	489～491		489・490	600	600	156	84	
F区概要	492		492				83	
F区第1号溝状遺構	491・493～505		493～496	600	605～614	156～162 203・204	83・84	175～177・203
F区第2号溝状遺構	506～509		506・508 509	615	616～618	162～164 204・205	83・84	177・178
F区第3号溝状遺構	509～512		509	619	620～622	164～166 205	83・84	177～179
F区第6号溝状遺構	513～515		513～515	623	624	166・167 205	83・84	179
F区第8号溝状遺構	515		515	625	625	205	83	179
F区第9号溝状遺構	516		516		626	167	83	179
F区第19号溝状遺構	509		509	619			83	
F区第48号址	517～519		517～519	627・628	629	168	85	179
F区第51号址	520	520	520		630	168	85	180
F区第53号址	520・521	520	520・521		631		85	
F区第54号址	520～522	520	521		632	168・169 206	85	179・180・203
F区掘立柱建物跡とピットについて	522・525・526・528		522	635・636				
F区第1号掘立柱建物跡	523		523		633		83	
F区第2号掘立柱建物跡	523・524・527		523・524 527		634		85	
F区第3号掘立柱建物跡	525～527		527		635			
F区第4号掘立柱建物跡	525～527		527		635		85	
F区第5号掘立柱建物跡	527・528		527		636		85	
F区第6号掘立柱建物跡	525～527		527		635		85	
F区第7号掘立柱建物跡	525・526		526		635			
F区第2号井戸跡	529～534	529	529・530		637	637～642	169～171 206	180・181
F区第3号井戸跡	535・536	535	535		643	643・644	171	181

名 称	本 文 編					図表編	写 真 図 版 編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
F区土坑について	536・537		536・537					
F区第20号土坑	537				645	172		180
F区第23号土坑	537・538		537・538	646	646	172		203
F区第1号埋設陶器	538		538	647	647	206		181
G区概要	538・541		538・541					
G区溝状遺構について	539～541・560		541	648	663	179・207	86	186・203
G区第2号溝状遺構	539～543・546・560		541	648・649	650・663	208	86	181・186
				651		173・179		
						206・207		
G区第3号溝状遺構	541・542・544・560		541・544	649	663	179・207	86	186
G区第16号溝状遺構	539・540・545		545	648				
G区第17号溝状遺構	542・544・560		544	649	663	208	86	186
G区第20号溝状遺構	539・540・544～547 560		544・545	648・651	652・663	174・179	86・87	181・182 203
						180		
G区第27号溝状遺構	545・560		545		663		86	
G区第28号溝状遺構	545		545				86	
G区第29号溝状遺構	545		545				86	
G区第31号溝状遺構	545・548		545・548				86	
G区第32号溝状遺構	545		545				86	
G区第34号溝状遺構	539・540・546 548～559		548・551 553・559	648・651 653	654～662	175～179 207	86・87	182～185
G区第39号溝状遺構	539・540・545		545	648				
G区第42号溝状遺構	542・544		544	649			86	
G区方形区画の溝状遺構 について	545		545				86	
G区第9号址	561～563		563	664	664	180・208		186・203
G区第36号址	563～565	563	564・565	665	666	180	88	
G区第38号址	565	565	565	667	667	180	88	
G区第63号址	566		566	668	668	180・181	89	203
G区第82号址	567	567	567	669	669	181	88	203
G区第92号址	570・571		570・571		674	181		186
G区第93号址	570・571		570・571		674	181		
G区第106号址	568	568	568	670				
G区第110号址	568・569	568	569	671			88	
G区第116号址	569		569	672				
G区第130号址	570	570	570	673			88・89	
G区堅穴状遺構について	571		571					
G区西側ピット群	572		572		675	181・208	88・89	186
G区1号地下式土坑	573		573	676			89	
G区土坑について	574・575		574		679	182・209		190・203
						210		
						209		
G区第84号土坑	574		574	677	677	209		
G区第118号土坑	574		574	678				
G区第1号井戸跡	576～579	576	576・579	680	681・682	182・210		186
G区第2号井戸跡	576・578・579	576	576・579	680	682	183		186
G区第3号井戸跡	579	579	579	683				
G区第7号井戸跡	579～582	580	579	684	684～686	183・210		186・187
G区第8号井戸跡	583	583	583	687				
G区第9号井戸跡	546・583～585	583	583・584	651・688	688・689	184・185		187・188
						210		
G区第11号井戸跡	586～589	586	589	690	690～692	185・186		188～190
						211		
G区第12号井戸跡	589・590	589	589・590	693				
G区第13号井戸跡	589・590	589	590	693				
G区第14号井戸跡	591	591	591	694				
G区第15号井戸跡	591～593	592	591	695	695・696	186		189

名 称	本 文 編					図表編	写真図版編	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺 物	遺 構	遺 物
H区概要	594		594					
H区第1号溝状遺構	594・595		594		697	187・211 212	91	190・191
H区第2号溝状遺構	608		608				91	
H区第11号溝状遺構	596～607		596・606	699	698 700～708	187～193 212・213	90・91	191～193 203
H区第12号溝状遺構	594・596		594・596				91	
H区第20号溝状遺構	608		608					
H区第21号溝状遺構	608・609		608		709	193・213		194
H区溝状遺構について	609				709	193・213	91	193
H区第2号址	608・610・611	608	610・611	710			90	
H区第49号址	608・610・611	608	610・611	710			90	
H区第1号井戸跡	611・612	611	611	712	711	193		194
H区第2号井戸跡	611・612	611	611	712	711	193・215		194・203
H区土坑について	611～613・630		611～613			727		194
H区第132号土坑	630				726	215		194
H区第148号土坑	613～615・621～629		613		713・714 717～725	194～197 214		194～198
H区瓦類	613・616～620・629 630		613 618～620 629・630		715・716			
I・J区概要	630・631		630・631				83	
I区第1号溝状遺構	631・632		631・632				91	198
I区第2号溝状遺構	631		631			197	91	203
I区第6号溝状遺構	631～633		631・632		728	197	91	198
I区第8号溝状遺構	631～633		631・632		728	197・198 215・216	91	198・203
I区第11号址	634		634	729				
I区第3号井戸跡	635・637	635	635・637	730				
I区第5号井戸跡	635～637	635	635・637	731	731	198		
I区第6号井戸跡	635～637	635	635・637	731	732	216		199
I区第7号井戸跡	635～637	635	635・637	731	732	198		199
J区第4号溝状遺構	632・637		632	733		198・216	91	199
J区第32号掘立柱建物跡	638		638	734			91	
J区第1号井戸跡	638	638	638	735				
J区第51号址	638				736	198・217		199
I・J区溝状遺構・土坑 について	639		639					
北側調査区溝状遺構 遺構外出土遺物	639 639～646		639		737～743	198～201 217～220		200～203
追補（南側調査区）	646～648		646		744～746	202・203		

第4章

題名	総頁	挿図 (番号)	図表 (番号)
古墳時代(中期～平安時代)	649～690	747～763	
土器の分類と時期設定	649～668	747～756	1
足高台を有する土器について	669～674	757～759	
青・白磁について	674		
奈良三彩陶について	675～678	760・761	2・3
住居形態について	679～682	762・763	4
カマドについて	683～690		5

題名	総頁	挿図 (番号)	図表 (番号)
鎌倉時代以降	691～765	764～778	
検出遺構について	691～704	764～767	
出土遺物の一括性について	704～706		
陶磁器について	706～715	768	6・7
在地系土器について	716～750	769～778	8
腰刀について	750・751		
石造品・石製品について	751～758	779	
総括	759～765		

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査経過

上野国分僧寺・国分尼寺中間地域の発掘調査は、昭和54年度後半に群馬県教育委員会文化財保護課により試掘調査が実施され、その結果をもとに昭和55年5月から2班体制（I班D区以南、II班F区以北）で本調査を実施した。この試掘調査や調査に至る経緯については、上野国分僧寺・国分尼寺中間地域報告書第1冊に詳しいので、ここでは本報告書の対象とするF区以北の調査経過について記述する。

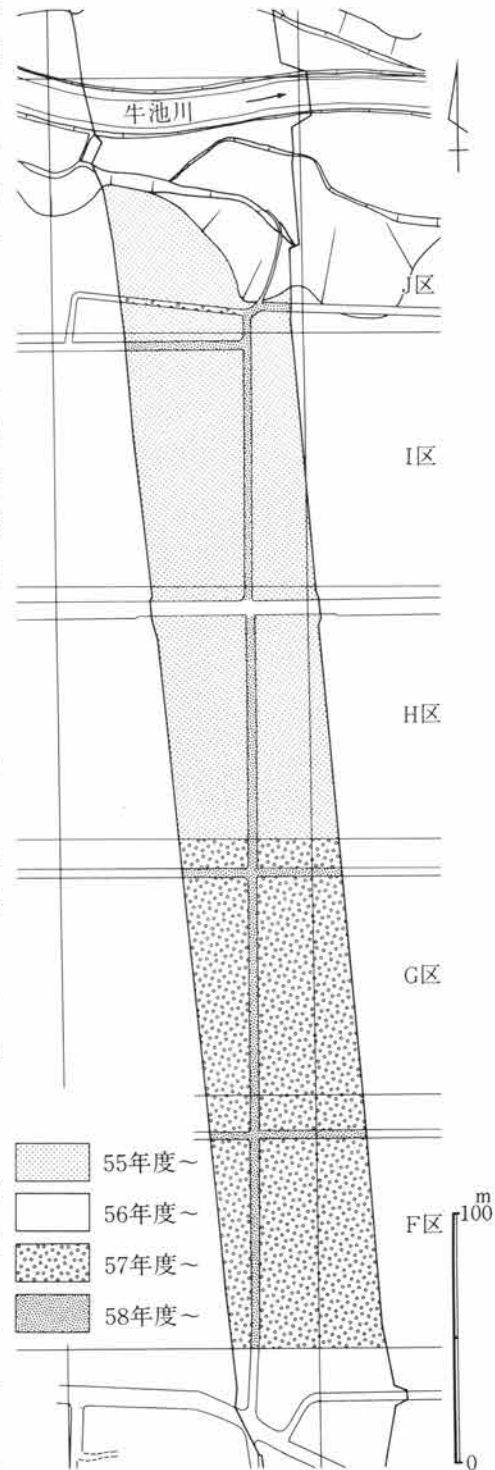
F区以北の区画は、南北に農道が走り、調査区を東西に2分する上に、東西農道がほぼ100mピッチで走るため、さらに細かな区画に分けられている。これらの農道は一部生活道路であり、全面的に撤去することができなかつたため、本線部分と、農道部分に分けて2次の調査を実施した。つまり本線部分を先行調査し、埋め戻し後農道をつけ替え、農道下の調査を実施した。

J区本線部分は、昭和55年度当初から開始した区画で、II班(石井・桜岡)が担当した。当区画内中央には「神明宮」と呼ばれる社があったため、この部分については移転後調査を行った。

I区本線部分は、J区からの継続で昭和55年10月から着手し、II班(石井・徳江・桜岡)が担当した。この時点で山王線以南のH区についても表土剥ぎ、遺構確認を併行させた。また、昭和56年5月には、J区の牛池川河川敷の微高地を中心としてトレンチ調査を実施し、数本の溝及び住居跡等を検出し調査した。昭和56年度は、前年度の継続調査を行った。

昭和57年度は、調査班が2班から1班(石井・木津・桜岡)に縮小されたが、班を2分し前年度の継続区画を併行して調査を実施した。この体制の中で5月段階でF・G区の表土剥ぎ及び遺構確認を開始し、継続して調査を進めた。同年7月には群馬県教育委員会主催の埋蔵文化財専門職員養成講座の発掘調査実習がF区を対象とし、約1カ月の日程で実施された。

農道部分は、J区の一部が昭和57年度に実施した以外、本線部分の調査がほぼ終了した昭和58年度に実施し、木津・桜岡・麻生が担当し、昭和58年度前半でほぼ調査を終了した。



第1図 調査区

第2節 調査の方法

第1項 基準杭とグリッドについて

調査区のグリッド設定は、史跡上野国分寺跡の保存整備事業との関連も考慮して、国家座標を使用した。基準としたのは、調査区南の染谷川左岸に位置するIX系X=43400、Y=-72100である。この位置を00として南北100m、東西200mを大グリッドとして南からY(河川敷)・Z・A～J(Eを除く)の11区を設定した。また、大グリッド内は、南東コーナー部を基準として北方向に0～50(50=次大グリッドにおける0)、西方向に0～100の数字を与えた2m×2mの小グリッドに区分した。杭の設定は、調査の便宜上10mごとに行ない、必要に応じて増設した。

小グリッド名称は、大グリッド同様南東コーナー杭名称をもって呼称することとし、(X軸上の数字)－大グリッド名－(Y軸上の数字)として表記した。



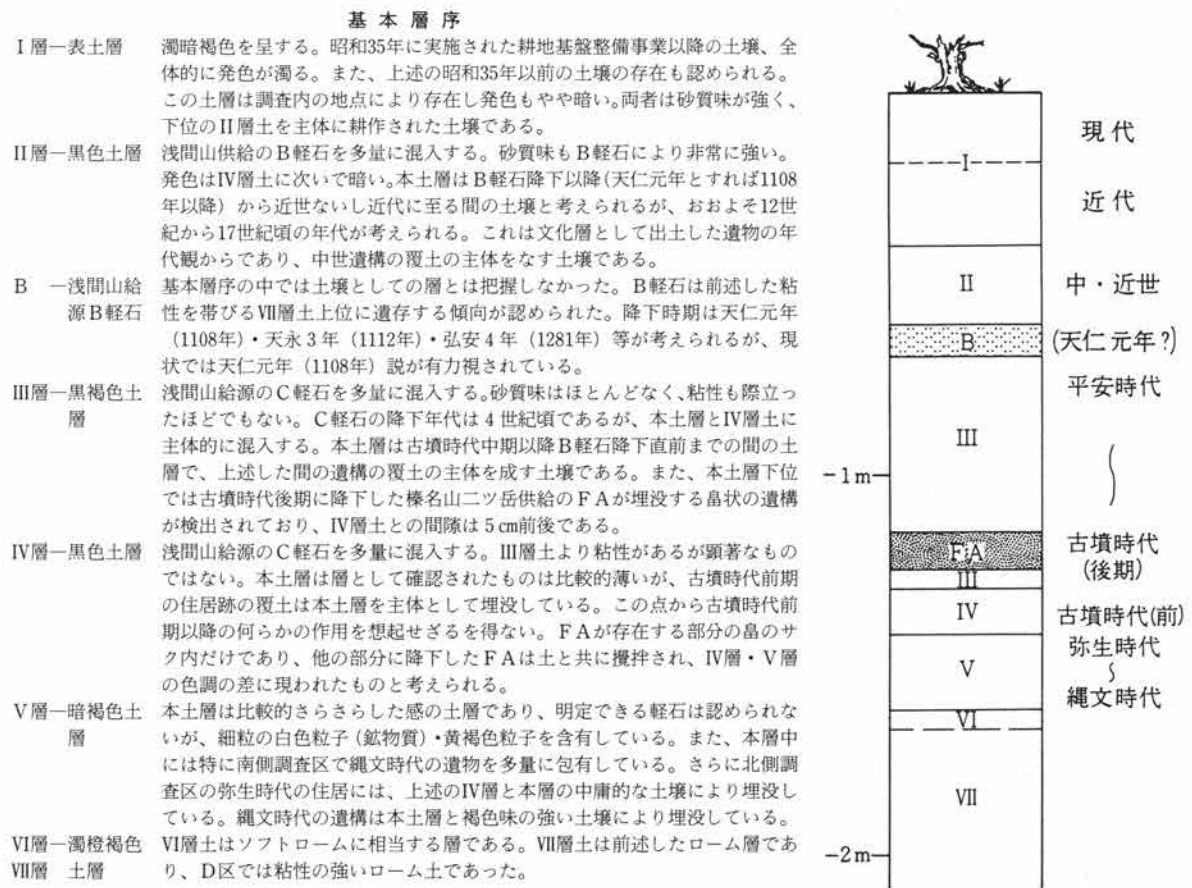
第2項 基本層序

当遺跡は榛名山東南麓・浅間山東方に位置し、両山の火山活動の痕跡は土層中において顕著に認められた。基本層序は上述の火山活動時に噴出された「火山灰・軽石」を含有するもので、その種類の含有等により分層できる。

基本層序は第3図に示したとおりであるが、各調査区の地点により層厚等差異が認められるが、おおよそ図示した状況であり、図はD区での状況を模式図化したものである。

上層は7層に分層できる。地山はローム土層であり、同層下位は火山系のシルト層でその粒子・色調によって分層できるが、ここではローム土層を地山と呼称し、ローム土層下位の土層については井戸跡の断面図を参照されたい。ローム土層は堆積時の状況により2分される。これは黄褐色を呈する部分と濁橙褐色を呈する部分である。前者は比較的乾燥状態での堆積で、後者は水性ないし水の流路部であった可能性が指摘されている。さらに前者は砂質味を帯びる部分等も認められ、後者は粘性に富んでいる。これらの状況は、両者が調査区内を横断する様に認められる点で、地形の傾斜方向に沿うと考えられる。また、この両者のあり方は上位の層にも影響を及ぼしており、前者の上位層のIV・Vは粗粒質土であるのに対し、後者の上位層のIV・V層は比較的微粒質で粘性に富んでいる。

このローム土層の堆積した段階では地山の起伏が著しく、上位層はこの起伏を埋める様な状態で堆積しており、おおよそ平坦になったのは奈良時代に至っての頃と考えられる。また、調査区の部分によってはV層土の層厚の変化が著しいが、倒木痕の調査によりV層土は調査区全体に均一的に堆積していたことが判明した。



註1 新井房夫先生の御指摘による。

第3図 基本層序

第2章 遺跡の位置

第1節 遺跡立地

当遺跡は、渋川市付近で吾妻川と合流し南流する利根川右岸の、前橋市街中心部から西へ4 km付近の前橋市元総社町、および群馬郡群馬町東国分の両地区にわたる地域に所在する。当地は上野国分僧寺・国分尼寺の造営された土地で、赤城山・榛名山・妙義山の三山をはじめとして、浅間山等の山々を四周に見渡せる土地である。

当遺跡の立地する地域は、榛名山麓に扇頂部を有する相馬ヶ原扇状地から前橋台地へとスムーズに移行する部分であり、南方向に5/1000程度の傾斜率を有している。

この相馬ヶ原扇状地は、火山性の扇状地形と考えられており、標高約140m程度の等高線を境として漸次前橋台地へと移行している。そのため相馬ヶ原扇状地末端部と前橋台地の境界を明確にとらえることは困難である。この扇状地上面には、浅間A・浅間B・FPを含む黒色土が覆っている。この黒色土下の扇状地を構成する層は、前橋台地の上部を覆う水性上部ロームと対比されるもので形成時期も近いと考えられている。また、扇状地内に群を形成してみられる陣場泥流丘群と呼ばれる泥流堆積物は、当遺跡付近にはおよんでいない。

前橋台地は、南流する利根川によって東西に分断されているが、本来利根川は旧利根川の氾濫原とみられる広瀬川低地帯に沿って東流し、台地縁辺をまわっていたと考えられている。したがって台地の範囲は広瀬川低地帯から烏川によって切られる部分までであり、前橋市街地から高崎市街地を含む広範で平坦な台地である。

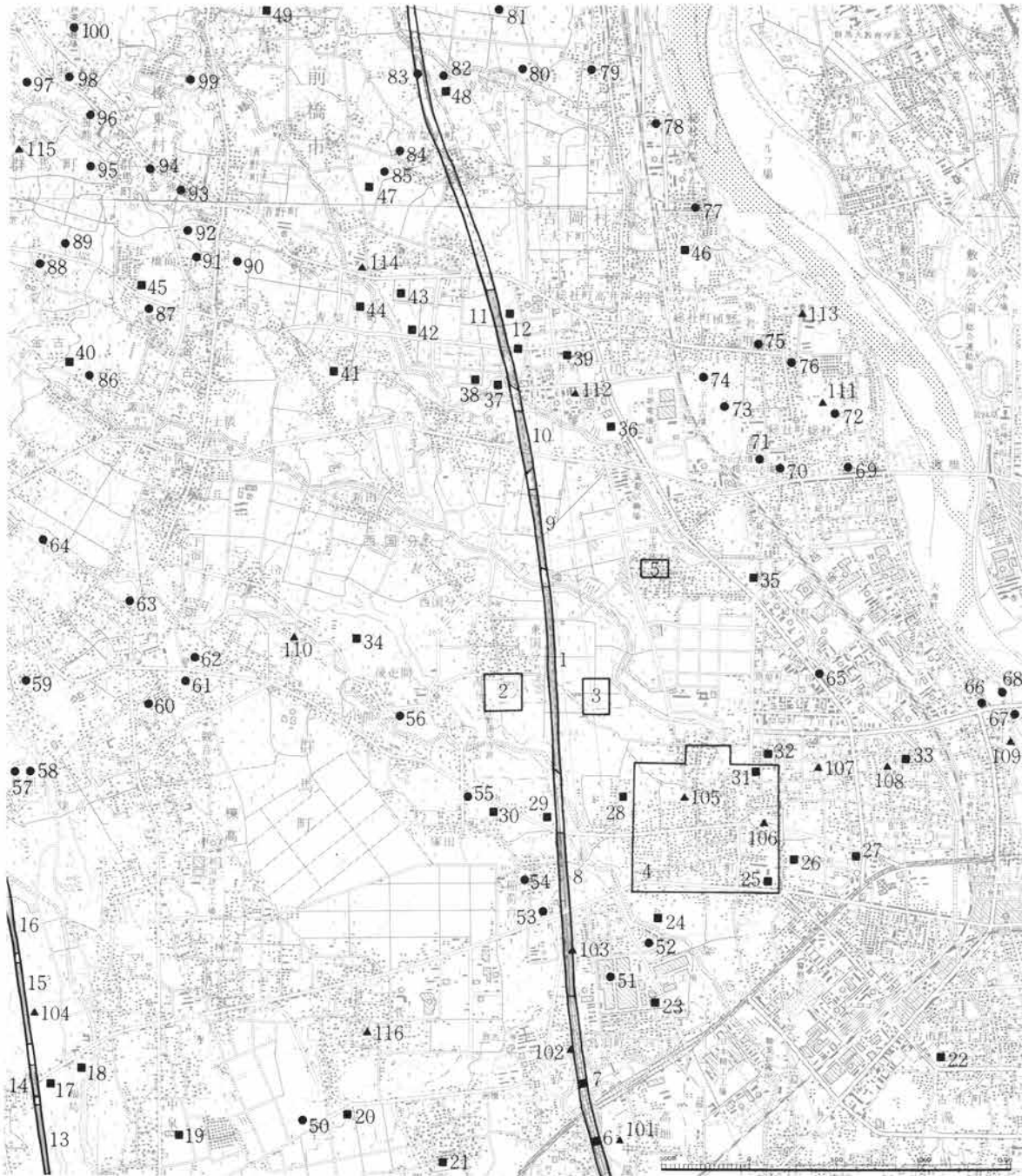
この台地の構成は、前橋砂礫層上に前橋泥流とよばれる火山泥流堆積物をのせ、その上に数mにわたって整合に、シルト層・砂層・粘土層等で構成された水性上部ロームが堆積している。この水性上部ローム中には、1～2枚の前橋泥炭層と呼ばれる黒色の泥炭質粘土シルト層がみられる。この層中の埋木の放射性炭素年代測定によれば、13,130±230 B・Pという数値が得られており、ほぼ洪積世最終氷期に対比されている。

当遺跡は、この前橋台地を開析している数本の河川のうち、北を牛池川、南を染谷川によって開析された台地上に立地している。牛池川は、群馬郡群馬町の東牛池沼に端を發し、東南から南に流れを変え前橋市元総社町落合付近で染谷川と合流している。染谷川は、相馬ヶ原扇状地内に位置する北群馬郡榛東村に端を發し前橋市元総社地区を経て高崎市内で井野川に合流している。両河川共に現状は河川改修によって流路が限定されており、当遺跡の立地する台地と南北の台地間は、幅約30～40m、河床面との比高差約4 m程度の谷を形成している。

この台地上の遺跡立地面は、先述のごとく南に向かって若干の傾斜を有しているが、表面的に感じとることはむずかしい。また、水性上部ローム上層において土層に大きな変化が認められる。つまり黄褐色砂質ロームの部分と、灰褐色粘質土の部分交互にみられることである。これは、上部ローム堆積過程において、灰褐色粘質土部分は、水で洗われる等の黄褐色砂質ロームの残りえないような要因があったものと考えられる。これは、当台地上において黄褐色砂質ローム残存部がほぼ一定の間隔をもって、榛名山方向に指向性を有するうね状の微高地となっていることから窺い知ることができる。

当遺跡検出の遺構は、調査区全域にわたって分布が認められるが、この黄褐色砂質ローム残存部に密度が高い傾向がみられる。

第2節 周辺遺跡



第4図 周辺遺跡 (国土地理院 1:25,000 前橋・渋川・伊香保・室田)

遺跡No.	遺跡在名地	遺跡の概要	文献
1	上野国分僧寺・国分尼寺中間地域 (群馬郡群馬町東国分・前橋市元総社町地内)	当報告書参照	『上野国分僧寺・国分尼寺中間地域』 第1冊 群馬県埋蔵文化財調査事業団1986

第2章 遺跡の位置

遺跡 No	遺 跡 在 地	遺 跡 の 概 要	文 献
2	上野国分僧寺跡 (群馬郡群馬町東国分村前引間石堂)	寺域は東西・南北各二町程で、中央に基壇の遺存する金堂、その西南方に心礎の露出する塔、金堂の中軸上北方に講堂と推定される遺構等が、現在までに確認されており、これらは共に礎石建物とみられている。出土遺物としては大量の瓦、墨書須恵器碗・鉄釘・塑像仏・奈良三彩等がある。	『史跡上野国分寺跡発掘調査概要2～6』群馬県教育委員会 1981～1985 『群馬県史』資料編2 群馬県 1986
3	上野国分尼寺跡 (前橋市元総社町小見・群馬郡群馬町東国分)	南北一直線上に位置する三棟の建築遺構が検出されており、それらは、中門跡、金堂跡、講堂跡と推定される。他に東門跡と推定される掘立柱の建築遺構跡が検出されている。	『上野国分尼寺跡発掘調査報告書』群馬県教育委員会 1970・1971
4	上野国府跡 (前橋市)	閑泉樋南遺跡の調査で東西走行する溝状遺構が検出されている。この遺構が国府城の北縁に相当する部分と考えられ、恐らくは国府城を示す溝状遺構である可能性が濃厚である。	尾崎喜左雄「第三編 古代下 第一章 国司政治」『前橋市史』前橋市教育委員会 1971『閑泉樋南遺跡』山武考古学研究所 1986 関口功一「平安中期上野国の一様相―群馬郡の分割をめぐる二つの史料―」『群馬県史研究250号』
5	山王廃寺跡 (前橋市総社町総社昌楽寺廻り)	現在までに検出されている遺構には、3間9間の僧房ないし食堂と推定される掘立柱建物跡、金堂と推定される基壇建物跡、一辺の長さ14m程の基壇をもつ塔跡、円筒埴輪を利用した暗渠排水路的な施設等がある。7世紀後半の白鳳期～11世紀の平安時代中期頃までの存続と思われるが、この廃寺の性格、規模、形状、並びに伽藍配置等については不明な点が多い。	『文化財調査報告書 第五集』前橋市教育委員会 1975 『山王廃寺跡発掘調査報告書 第3次～第5次・第7次』前橋市教育委員会 1977～1979 1982 『群馬県史』資料編2 群馬県 1986
6	吹屋遺跡 (高崎市中尾町)	平安時代前期の水田に伴うと考えられる溝跡2本、同期井戸跡1基、B軽石によって埋没された水田跡、村東館址と呼称された中世館址が調査された。出土遺物には、中国磁器、邦製陶器、在地製軟質陶器、土師質土器のほか、木製遺物として呑口刀柄、板草履、曲物、小皿、箸等がある。	『元島名B・吹屋遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
7	中尾遺跡 (高崎市中尾町)	ほとんどは奈良・平安時代の遺構で、竪穴住居跡279軒、掘立柱建物跡5棟、土坑123基、井戸22基、溝16本、墓壇、及び城跡の一部等が、検出されている。出土遺物としては、灰釉・緑釉陶器、石製の巡方等がある。	『中尾』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 『日本考古学年報29』 1976
8	鳥羽遺跡 (前橋市鳥羽町・元総社町・群馬郡群馬町稲荷台・塚田)	竪穴住居804棟、特殊掘立柱遺構(神殿遺構)、小鍛冶工房跡4棟分、中世館跡、掘、中世墓等が検出されており、遺物としては鍛冶関係、はさみ、銅鏡、鉄、羽口、砥石等がある。	『鳥羽遺跡』G・H・I区 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
9	国分境遺跡 (群馬郡群馬町北原)	奈良・平安時代を中心に古墳時代末期から中世以降までの遺構が検出されている。	『年報1～3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982～1984
10	北原遺跡 (群馬郡群馬町北原)	縄文時代の土坑3基、集石遺構、弥生・古墳時代の水田跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡100軒、掘立柱建築遺構17棟、溝2本、井戸3基、土坑54基、近世の墓壇25基等が検出された。	『北原遺跡』群馬郡群馬町教育委員会 1986
11	下東西遺跡 (前橋市青梨子町、群馬郡群馬町北原)	連結された住居や張り出しを有する住居等を含めて住居跡200軒、掘立跡20、棚列5列、官衙的遺構、溝、土坑、墓壇、縄文埋蔵、12世紀頃の遺物が多少、大形の須恵甕等を検出。	『下東西遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
12	清里南部遺跡群(下東西遺跡) (前橋市青梨子町下東西)	古墳時代の溝1本、奈良・平安時代の竪穴住居跡37軒、溝1本、土坑2基等が検出されている。	『清里南部遺跡群III』前橋市教育委員会 1986
13	井出村東遺跡 (群馬郡群馬町井出)	弥生時代の住居跡20軒、古墳時代後期の住居跡89軒、平安時代の住居跡14軒、掘立柱建物跡13棟、溝状遺構31本、地下式竪穴土坑2基、火葬土壇2基、土坑152基、井戸21基、畑状遺構24、水田跡1、ピット群多数が、検出されている。	『井出村東遺跡』群馬町井出村東遺跡調査会 1983

第2節 周辺遺跡

遺跡No	遺跡名(所在地)	遺跡の概要	文献
14	三ツ寺I遺跡 (群馬郡群馬町三ツ寺)	周囲に幅約40m深さ約3mの濠をもち、一辺が86mの方形の区画の居住区で、5世紀後半～6世紀中葉頃まで大古墳被葬階層の居館が存在したと考えられる。館内に工房の存在も推定され、金属器生産に関する祭祀が行われた可能性がある。	『三ツ寺I遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981 『群馬県史』資料編2 群馬県 1986
15	三ツ寺II遺跡 (群馬郡群馬町三ツ寺西原道他)	古墳時代後期の竪穴住居跡284軒、土坑8基、溝10本、畑跡2ヶ所、奈良・平安時代の竪穴住居跡99軒、掘立柱建物群跡3群、溝1本、水田跡1ヶ所、中世の居館の濠跡、墓壇2基、土坑4基、溝2本、井戸4基が検出されている。	『年報1・3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982・1984
16	三ツ寺III遺跡 (群馬郡群馬町三ツ寺鍛冶街道他)	古墳時代後期～奈良時代の住居跡、平安時代の住居跡14軒、その他、墓壇2基、溝5本、土坑11基、掘立柱跡10棟、竪穴状遺構2軒、井戸6基、道状遺構1本等が検出されている。	『三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
17	福島遺跡 (群馬郡群馬町福島)	古墳時代の前・中期の遺物や、平安時代のB軽石が堆積する水田跡等が検出されている。	『福島遺跡』 群馬郡群馬町教育委員会 1984
18	中林遺跡 (群馬郡群馬町三ツ寺)	鬼高期の遺構が最も多く検出され、住居跡が51軒、他に平安時代の住居跡6軒、B軽石層下の水田17、同時の遺物として、子持ち匂玉、丸軋、鉄製の鋤先2点、滑石製の紡錘車、剣形模造品、匂玉模造品、鉄鏝、北宋銭等が出土している。	『中林遺跡調査概報』 群馬郡群馬町教育委員会 1983
19	中泉遺跡 (群馬郡群馬町中泉)	二つのトレンチ調査が行われ、平安時代の水田遺構が検出されている。	『中泉遺跡発掘調査報告』 群馬郡群馬町教育委員会 1983
20	菅谷遺跡 (群馬郡群馬町菅谷石塚)	9世紀初頭の住居跡5軒、溝7本、籾の羽口、鉄銃、墨書土器、その他土壘2基等が検出されている。	『菅谷遺跡発掘調査報告』 群馬郡群馬町教育委員会 1980
21	正観寺遺跡群 (高崎市正観寺町、小八木町)	古墳時代中期～奈良・平安時代の竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑、石櫛、巨石遺構、ピット群等が検出され、鏡、鎌、用途不明の石製品、鉄製品が1住居跡から一括して出土している例がある。	『正観寺遺跡群I～III』 高崎市教育委員会 1979～1981
22	赤鳥遺跡 (前橋市古市町)	古墳時代前期の住居跡1軒、土坑4基、溝1本、同時代中期の土坑1基、畝状遺構、古墳時代以後の溝1本、その他段状遺構1基、瓦片等が検出されている。	『赤鳥遺跡』 前橋市教育委員会 1985
23	早道遺跡A・B (前橋市鳥羽町)	2個体分の壺形土器の口縁部が出土した他、多数の土器片が発見された。住居跡も検出されている。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
24	染谷川遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代の土器片が散布している。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
25	元総社小学校校庭遺跡 (前橋市元総社町)	国府跡推定地として発掘調査が行われ、柱列痕による建築遺構2棟が検出され官庁用の舎屋と推定された。校舎下からは溝4本と柱痕と見られるものが群在して検出された。上記のものに重複して、土師器使用住居跡が7～10戸検出された。	尾崎喜左衛門「第三編 古代下 第一章 国司政治」『前橋市史』前橋市 1971
26	元総社明神遺跡 (前橋市元総社町)	石田川期の住居跡2軒、鬼高期の住居跡13軒、平安時代の住居跡30軒、他に土坑10基、井戸8基、溝10本、ピット50基、中世墓壇1基等が検出されている。	『元総社明神遺跡I』 前橋市教育委員会 1980
27	樋越遺跡 (前橋市元総社町)	土坑と溝が検出された。	『樋越遺跡』 前橋市教育委員会 1986
28	草作遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代後期の住居跡4軒、平安時代の住居跡7軒、中世の井戸3基が検出されている。8世紀後半～10世紀前半代の住居跡が、存在していないという特徴が見られる。遺物は、方頭太刀柄頭、埴輪、金属製品、鉄滓、羽口、金属性の鉸具、中世陶磁器、龍楽窯系の青磁等が出土している。	『草作遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985

第2章 遺跡の位置

遺跡 No	遺 跡 在 名 地 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
29	塚田村東遺跡 (群馬郡群馬町塚田村東)	9世紀・10世紀の遺構が中心で、住居跡15軒、溝3本、土壇9基、井戸1基、頁岩製の打製石斧が2点等が検出されている。	『塚田村東遺跡調査概報』 群馬郡群馬町教育委員会 1986
30	国分寺参道遺跡 (群馬郡群馬町塚田・稲荷台・村東・中原)	古墳時代から平安時代の土器・瓦等が、出土している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
31	閑泉樋南遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代の住居跡4軒、溝2本、土坑、竪穴状遺構、中・近世の溝から内耳鍋の破片、片口注口の鉢片、掘り鉢片、古銭等が出土している。特に、国府城の北縁に相当すると思われる溝状遺構が検出され、流れ込みの国分寺瓦が出土している。	『閑泉樋南遺跡』 山武考古学研究所 1986
32	閑泉樋遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代の住居跡3軒、奈良・平安時代の溝跡1本、中世の溝跡1本が検出された。	『文化財調査報告書第13集』 前橋市教育委員会 1983
33	長尾氏遺跡 (前橋市大友町村内)	長尾山長見寺旧境内、現在長見寺前の水田から、須恵製の骨蔵器が発見されているが、出土状態は不明である。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
34	後足間遺跡 (群馬郡群馬町後足間)	F Aの水成堆積が確認された鬼高期の住居跡3軒、真間期3軒、国分期8軒が検出された。	『後足間遺跡I』 群馬郡群馬町教育委員会 1986
35	昌楽寺廻村東遺跡 (前橋市総社町総社昌楽寺廻村東)	多数の柱痕が発見され、その内16個は一定の方向性をもち、元総社小学校校庭出土のものと同類似する1棟の建築遺構と考えられる。	尾崎喜左雄「第三編 古代下 第一章 国司政治」『前橋市史』前橋市 1971
36	八幡川遺跡 (前橋市総社町高井観音鍛冶)	土師、須恵器片が多量に発見され、それらにまじって施釉陶器の破片がみられる。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
37	北原遺跡 (群馬郡群馬町北原)	平安時代の集落や住居跡等が検出されている。	『昭和55年度埋蔵文化財調査略報』 群馬郡群馬町教育委員会 1981
38	トウノコシ (前橋市総社町高井池田)	総社町光蔵寺境内に現存する「伝東覚寺層塔」の故地で、トウノコシ(塔残し、塔の腰)なる地名の由緒となっている。調査では、遺構は検出されなかった。出土遺物には五輪塔空風輪、宝篋印塔の破片、瓦片、石臼片、陶磁器がある。	『清里南部遺跡群III』 前橋市教育委員会 1980
39	柿木遺跡 (前橋市高井町)	縄文・弥生時代の土器片の他に、奈良・平安時代の住居跡、土坑、溝等が検出され、この時期集落として利用されていたと考えられる。中世にいたって堀が開削されている。	『柿木遺跡』 前橋市教育委員会 1984
40	諏訪遺跡 (群馬郡群馬町金古諏訪)	古墳時代の土師器片が多数発見されている。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
41	清里南部遺跡群(柳原遺跡) (前橋市青梨子町柳原)	竪穴住居跡1軒、溝2本、内1本は水流の跡あり。埋土より元祐通宝出土。	『清里南部遺跡群III』 前橋市教育委員会 1980
42	中島遺跡 (前橋市青梨子町中島・中原)	奈良・平安時代を中心に、近世以降に至る複合遺跡で、竪穴住居跡87軒、ピット15基、溝状遺構6本を検出、鉛釉陶器、風字硯、円面硯、帯金具状の鉄製品等が出土した。	『中島遺跡発掘調査概報』 前橋市教育委員会 1980
43	清里南部遺跡群(薬師前遺跡) (前橋市青梨子町薬師前)	縄文時代のピット1基、平安時代(国分期)の住居跡28軒、ピット18基、溝3本、井戸1基、中世の地下式土壇2基、江戸時代の柱穴状ピット群、溝5本、井戸5基を検出し、鉛釉陶器、硯、墨書土器、雁道、古銭等が出土した。	『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』 前橋市教育委員会 1980
44	清里南部遺跡群(松ノ木遺跡) (前橋市青梨子町松ノ木)	国分期の竪穴住居8軒、溝1本、近世以降の土坑2基等が検出されている。	『清里南部遺跡群III』 前橋市教育委員会 1980

第2節 周辺遺跡

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
45	愛宕遺跡 (群馬郡群馬町金古愛宕)	古墳時代の土師器片が多数発見された。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
46	桜ヶ丘遺跡 (前橋市総社町植野)	C軽石下より弥生時代後期(樽式土器)の住居跡1軒、他に中世墓壇2基等が検出された。	『日本考古学年報21・22・23』(1968・1969・1970年度版)日本考古学協会 1981
46	桜ヶ丘遺跡 (前橋市総社町植野)	平安時代の住居跡14軒、土坑3基、中世以後の溝2本、近世以後の畝状遺構1が確認されている。	『総社桜ヶ丘遺跡』 前橋市教育委員会 1985
47	清里・庚申塚遺跡 (前橋市上青梨子町)	弥生時代中期後半の環濠集落を中心に、平安時代の住居跡1軒、井戸、溝、土坑等が検出されている。	『清里・庚申塚遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
48	清里・長久保遺跡 (前橋市池端町、北群馬郡吉岡村大久保)	縄文時代の住居跡11軒、土坑2基、土器だまり、集石1、歴史時代の住居跡1軒、墓壇2基、石製丸柄、緑釉輪花碗・皿、灰釉耳皿等が検出され、他に古墳が12基調査され、耳環、玉類、小刀、円筒埴輪等が出土している。	『清里・長久保遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
49	清里・陣場遺跡 (前橋市池端町 北群馬郡吉岡村陣場)	縄文時代の土坑1基、奈良時代の住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡63軒、溝6本、土坑1基、灰釉陶器片1703個以上、緑釉陶器片168個、金銅製丸柄、石製丸柄、中世の土坑1基、井戸2基、集石遺構1、天目釉の埴、等を検出。	『清里・陣場遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
50	菅谷古墳群 (群馬郡群馬町菅谷石塚)	5基の円墳が現存し、円筒埴輪が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972 『群馬町の遺跡』群馬町教育委員会 1986
51	弥勒遺跡(墳墓) (前橋市鳥羽町弥勒山)	中世墳墓と思われる。地下約30cmの地点で自然石の割石が埋めてあり、その中から陶器片と板碑片が発見された。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
52	弥勒山古墳 (前橋市元総社町字弥勒)	1924年発掘時は高さ8尺・径66尺の円墳で金環・刀等の出土が認められた。1964年時には墳丘はほとんど削り取られ、石室もすでに破壊されていた。古墳の基盤の地層は沼地が自然堆積土によって埋ったような、極めて不安定な様相である。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』前橋市 1971
53	墳墓 (群馬郡群馬町稲荷台北金尾)	土師・須恵器等が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
54	墳墓 (群馬郡群馬町稲荷台北金尾)		『全国遺跡地図 群馬県』 文化庁 1977
55	散布地・墳墓 (群馬郡群馬町引間松葉)	奈良時代の骨壺、土釜、瓦、陶器片が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
56	散布地・古墳 (群馬郡群馬町引間古屋敷)	古墳・奈良時代の石製蔵骨器身部、板碑片、土師、須恵器等が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
57	古墳 (群馬郡群馬町中里昆沙門)	古墳中腹に大石が露出し、葺石も残存する。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
58	古墳 (群馬郡群馬町中里昆沙門)		『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
59	薬師さま古墳 (群馬郡群馬町足門・稲荷台)	径16mの円墳で葺石がめぐっている。剣が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
60	観音寺古墳 (群馬郡群馬町棟高)	円墳で古墳上に庚申様が祀られている。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
61	薬師さま (群馬郡群馬町)		

第2章 遺跡の位置

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
62	北寝保窪古墳群 (群馬郡群馬町棟高北寝保窪)	古墳7基が群在している。埴輪片、須恵器が相当量出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
63	鶴巻・東原・蓋古墳群 (群馬郡群馬町足門鶴巻・東原・蓋)	かつてはこの地域に6基の古墳が存在していたが、現在は大部分滅失。埴輪片、須恵器片等が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
64	如来古墳群 (群馬郡群馬町金古如来)	かつて14基程の古墳が群在していたが、1972年には4基程になっている。埴輪片、須恵器片等が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
65	稲荷山古墳 (前橋市総社町稲荷塚東)	墳丘は殆んど平坦化され、その中央部のみが径10数m・高さ2m程残っている。稲荷祠が祀ってある。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
66	王山古墳 (前橋市総社町総社)	古墳構築の時期は6世紀前半で、群馬県に横穴式石室が現われる最初のもの。当初「積石塚」とよばれる円墳であったものを、後に前方後円墳に改築。墳丘の全長は72m。両袖型の横穴式石室で全長は県内最長の16.40m。	『文化財調査報告書』 前橋市教育委員会 1975
67	王山陪塚墓一 (前橋市総社町総社)	墳丘は大部分崩され、その中心を僅かに残すのみである。出土品は不明。都市計画区域で1972年滅失。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
68	王山陪塚墓二 (前橋市総社町総社)	王山古墳の北方約100mの地点に在り、墳形は円墳とみられる。盛土は平坦化され現存する部分はその中心部のみである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
69	薬師様古墳 (前橋市総社町総社栗島)		『全国遺跡地図 群馬県』 文化庁 1977
70	蛇穴山古墳 (前橋市総社町総社)	1辺約39m前後の大形の方墳で、羨道を欠き、玄門を直接墳丘外に開き前庭を付したものである。主体部は両袖型の横穴式石室で、玄室、奥壁、左右壁とともに硬質な安山岩の一枚石で構成されている。7世紀後半頃の構築で最末期古墳である。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』 前橋市教育委員会 1971
71	宝塔山古墳 (前橋市総社町総社)	1辺54m前後の二段築造で載頭、角錐形の方墳形態をとり、方位はほぼ真北をさす、主体部は、複室構成をとり、載石切組積の横穴式石室、前庭を備える。石室には角閃石安山岩が用いられ、漆喰が塗られた痕跡がある。玄室部分には横口式の家形石棺を安置。7世紀後半頃の構築の最末期古墳である。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』 前橋市教育委員会 1971
72	遠見山古墳 (前橋市総社町総社)	前方後円墳で主軸の長さ約70m。後円部東南の部分は、封土が流れ石室の位置を示す。墳丘の南側には、周濠の一部と葦石が認められる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
73	愛宕山古墳 (前橋市総社町総社大屋敷愛宕山)	大型の円墳である。主体部は巨石使用の両袖型横穴式石室で南に開口している。石室内にはその長軸線に直角、奥壁に沿って家型石棺が安置されている。7世紀初頭の構築。	尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』 前橋市教育委員会 1971
74	総社二子山古墳 (前橋市総社町植野二子山)	墳丘の規模は、自然堆積土をかぶったままで全長98m、前方部幅63m、後円部径49mで基壇をもった二段構造とみられる。両袖型の横穴式石室を前方部、後円部各別に有する。両者は石材、構造、規模を異にする。前方部石室の構築は6世紀終わり頃、後円部は7世紀頃とみられる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』 前橋市教育委員会 1971
75	稲荷山古墳 (前橋市総社町総社)	墳丘は大部分破壊され、横穴式石室の石材も一部露出している。頂上部には、穂積稲荷が祀られている。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
76	大小路山古墳 (前橋市総社町総社)	墳丘の規模が径20m、高さ2m程の円墳である。頂上は平坦化され稲荷・庚申等が祀ってある。石室に使用されたとみられる石及び石片が、石塔や頂上部に散在する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971

第2節 周辺遺跡

遺跡 No.	遺 跡 在 名 地	遺 跡 の 概 要	文 献
77	大神宮様古墳 (前橋市総社町植野)	現状では丘体はほとんど確認できず、北東部から西南部にかけて盛土が残っているのみである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
78	植野薬師塚古墳 (前橋市総社町植野)	墳丘の東半分と南の一部が削りとられ、残存部は南北17m、東西10mで旧状は円墳であった。直刀、鏡などが出土したと伝えられる。浮石質紡錘状角閃石安山岩使用の横穴式石室。	尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』 前橋市教育委員会 1971
79	古墳 (北群馬郡吉岡村大久保下町)	積石のみ残存する乱石積円墳。玄室巾1.6m、高さ1.0m、奥行2.7m、天井石2枚。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
80	古墳 (北群馬郡吉岡村大久保大松)	墳丘の規模は、直径18m、高さ2m。玄室は崩壊している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
81	源平山古墳 (北群馬郡吉岡村大久保熊野)	墳丘の規模は、直径15m、高さ2.5mの円墳である。玄室は完存し、羨道は一部残存している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
82	大久保山古墳 (北群馬郡吉岡村大久保吉開戸)	直径12m、高さ2mの墳丘のみが残存している。玄室等は崩壊している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
83	上青梨子古墳 (前橋市池端町)	墳丘の現高3m、径40m。自然地形を利用したいわゆる山寄せ古墳である。	『年報1』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
84	池端古墳 (前橋市池端町南耕地)	点在する自然丘陵の高所に石室の用材らしきものがみられることがあり、埋葬の施設を示すものと思われる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
85	清里・庚申塚古墳1号・2号 (前橋市上青梨子町)	墳丘の規模が南北12.7m、東西12.6mの円墳。周堀の規模は墳丘北西で幅1m、東で1.2m。主体部の構造は自然石を使用した両袖型の横穴式石室で、主軸は北方向をさす。墳丘の規模が径約15.9mの円墳。「環状周堀」が墳丘の東及び西において確認された。主体部の構造は、自然石を使用した横穴式石室である。主軸方位は北より14°程東を向いている。	『清里・長久保遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
86	諏訪古墳群 (群馬郡群馬町金古諏訪)	円墳1基、古墳跡3基。内1基は径30m、周濠があり封土中より須恵器破片が出土している。	『群馬県の遺跡』 群馬県教育委員会 1963
87	金古愛宕様古墳 (群馬郡群馬町金古愛宕)	墳丘の規模は現径30m、高さ4m、主体部は自然石乱石積、両袖型横穴式石室で南に開口している。墳頂に愛宕神社社殿がある。円筒埴輪列をとまなう。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972 『日本考古学年報12』 日本考古学協会 1964
88	金井古墳群 (群馬郡群馬町大字金古金井)	現在4基は破壊され1基のみ古墳が残っている。須恵器片が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
89	平塚古墳 (群馬郡群馬町金古中原)	墳丘は削平されている。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
90	諏訪山古墳 (前橋市青梨子町諏訪廻)	丘陵頂上社殿には、石室の石材らしきものが散在し、その中腹にも古墳が寄せて造られている。埴輪片が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
91	長久保古墳群 (群馬郡群馬町)		
92	橋向古墳群 (群馬郡群馬町金古橋向円林)	主軸長約100mの前方後円墳3基、径約30mの円墳3基、自然丘陵利用の小円墳を含む古墳群。	『清里・長久保遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
93	観音山古墳 (北群馬郡榛東村新井判塚)	墳丘の規模が直径7m、高さ3.5mの円墳で開口している。石室は完存している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971

第2章 遺跡の位置

遺跡No	遺跡名(所在地)	遺跡の概要	文献
94	いなり山古墳 (北群馬郡榛東村新井判塚)	墳丘の規模が長さ63m、前方部の高さ4.3m、後円部の高さ6.6mの前方後円墳であったが、現在は後円部を残すのみ。円筒埴輪、直刀の出土があった。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
95	内金古古墳群 (群馬郡群馬町金古内金古)	主軸100m前後の自然丘利用の前方後円墳2基、小円墳5基の群在する古墳群。埴輪等が出土している。	『群馬県の遺跡』 群馬県教育委員会 1963 『群馬町の遺跡』 群馬郡群馬町教育委員会 1986
96	柿の木坂古墳群 (北群馬郡榛東村新井)	古墳総覧によれば、28基の古墳が散在していたが、現存するものは9基のみである。内1基は石室、封土の保存が良い。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
97	立畦古墳群 (北群馬郡榛東村新井立畦)	6基の古墳がみとめられたが、内1基は滅失。埴輪の破片が多く出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
98	北原古墳群 (北群馬郡榛東村新井・北原長久保)	25基の古墳が散在する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
99	長久保古墳群 (北群馬郡榛東村新井梨子木長久保)	前方後円墳2基、円墳20基の内末調査の2基を除き主体部は横穴式石室である。太刀、刀子、鉄鏃、耳環、各種の玉類等が出土している。本古墳群は古墳時代後期に属する。	『長久保古墳群発掘調査略報』 日本竊業史研究所 1978
100	高塚古墳 (北群馬郡榛東村新井)	墳丘は後円部主体の企画施工で高麗尺が厳格に使用されている。巨石使用の横穴式両袖型石室で、羨道・前庭を具備する。墳丘は封土、基壇ともに整然と葺石を葺いている二段築造である。封土頂上、基壇面には、形象埴輪、円筒埴輪列によるかなり整然とした表飾が推定される。出土遺物は鉄鏃、刀子の断片、金銅製の耳環1個、武装男子・盛装女子の埴輪等がある。6世紀後半頃の築造と推定される。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
101 102	中尾城跡 (金尾城跡) (前橋市鳥羽町・高崎市中尾町)	中尾城は、金尾城を包括する状態のものである。この中尾城は、山崎氏の示す図からは、室町前半の館址の形態から戦国期の形態に変化した状況が看取される。中尾城・金尾城共に近接する状態で存在した館址が戦国期に至り城としての形態を有するに至ったものに思われる。しかし、構造的に主郭の部分で「折」等を具備してもこれらを囲む郭(輪)が備えとしては貧弱であり、城としての形態では際立った存在では無いと思われる。蒼海城にほど近い城であることからその始めは、長尾氏に關係する有力な被官層の館であったと思われる。山崎氏の論によると、初期の城主は金尾佐渡守と思われるが確かではなく、天正期頃には金井淡路守秀景であったと推定されている。	山崎一『群馬県古城址の研究』上巻 1978
103	鳥羽城跡 (前橋市鳥羽町)	関越道鳥羽遺跡の調査で検出された方形区画を有する溝二堀の存在により呼称しているが、「城」、「館」の区別は分明できない。時期的には14～16世紀の遺構である。	『年報Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
104	三ツ寺II館址 (群馬郡群馬町三ツ寺西原道他)	No15三ツ寺II遺跡 参照	『年報Ⅰ・3』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982・1984
105	蒼海城跡 (前橋市元総社町)	城郭型式上は列郭式の平城である。 築城の始めは判然としていないが、修築が永享元年(1429)に長尾景行により行なわれたとされている。 貞治(1363)上杉憲路が關係管領に補任された時に長尾景忠が上野守護代に任ぜられており、上野国衙の中心地に蒼海城が占地する点では、景忠入部段階に元総社の他に入ったことが考えられる。このことにより、蒼海城の城としての前身は、この守護代の居館であったと考えられ、蒼海城そのものが、居館からの発展形態であることが判断される。	山崎一『群馬県古城址の研究』上巻 1978

第2節 周辺遺跡

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
106	八日市場城跡 (前橋市元総社町巢鳥分明神裏)	慶長6年8月から慶長15年までの9年間、蒼海に封ぜられた秋元長朝が植野に城が築かれるまでここを仮の居城とした。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』上巻1978
107 108	村山館址 (前橋市大友町村山) 大友館址 (前橋市大友町村内)	村山・大友館址は発掘調査が実施されていないため不明な部分が多いが、長尾憲明の系譜を引く高津長尾氏の居館として存在は推定出来る。ただ戦国期に至り、館に改修が施され、城的な備えになったと考えられる。また、両館址の地割りは昭和20年代ぐらいまでは明確に看取されたようであるが、現状では確認する方法が無いに等しい。時期的には長尾氏の入部以降、長尾憲明以降の高津長尾氏系の館と推定される。	
109	石倉の砦跡 (前橋市総社町総社小川原大山)	永禄7年(1564)武田信玄の上野侵攻により西上野が一時的に武田氏の支配下に入る。この時、和田城の背後にある厩橋城の押えとして修築し配下の武将を配している。この砦自体常時前戦基地としての性格を有することにより、その帰属が不安定であった。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』上巻1978
110	引間城跡 (群馬郡群馬町引間)	引間城は具体的な事は判然としない。ただ占地の状態から、染谷川と弁天川に挟まれた部分であり、地形上の特徴を能く利用し防御には適した城である。形態上「折」等の施設が認められない点で、室町時代中頃のものかと思われる。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』下巻1978
111	総社城跡 (前橋市総社町総社)	城郭型式上は囲郭式構造である。秋元長朝が天狗岩堰と並行して築城したが、秋元氏が甲州谷村へ移封後廃城となる。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』上巻1978
112	桧田城跡 (前橋市総社町高井桧田)	勝山城主関口政次の二男福島政則の居城で、勝山城の支城であったが、天正3年(1574)勝山城と共に武田勢に攻略された。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』上巻1978
113	勝山城跡 (前橋市総社町立石)	天正3年(1574)武田勝頼の上野侵攻の折落城し廃城となる。城主は赤松則景の4世の後裔関口能亮であった。落城時は8世の後裔清房であった。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』上巻1978
114	青梨子砦(中内出)跡 (前橋市青梨子町鶴鳥)	現状の地形からは当時の形状を想定することは不可能に近い。山崎氏は、東西120m、南北80m程の規模を想定している。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』上巻1978
115	金古城跡 (群馬郡群馬町金古内金古)	現状の地形上からは、城として構造を窺うことは難しい。山下歳信氏は、山崎氏の金古城説に対し否定的な見解を示している。ただ当該地域の15～16世紀頃の社会背景から、箕輪城の支城的な館を多数構築したことが考えられる。この点では物見台等の占地に大形古墳は適しており、これを利用した縄張りをとったとも思われ、看過出来ないと考えられる。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』下巻1978
116	菅谷城跡 (群馬郡群馬町菅谷堀)	当該の城は、第2次大戦中旧日本陸軍により飛行場用地となり、旧状のものを窺い知ることが出来ない。山崎氏は、古文書等により長野業政の系譜を引く長野一族の、須賀谷筑前守居城としている。	山崎一『群馬県古城墓址の研究』下巻1978

第2章 遺跡の位置

古墳時代

古墳時代の遺跡は、近年の大規模開発に伴う調査によってしだいに明らかにされつつあり、古墳・集落跡・居館跡・生産跡等が知られている。古墳は、王山古墳・蛇穴山古墳等に代表される現利根川右岸の一群、この北側に位置する薬師塚等を含む一群、さらに北西方向に位置する南下古墳群、その南側には高塚古墳・長久保31号墳等の前方後円墳を含む、長久保古墳群・橋向古墳群・柿の木坂古墳群等の小円墳を主体とする古墳群が集中している。さらにその南側には、金井古墳群・金井沢古墳群等の一群があり、この染谷川沿いの南東方向には、北寝窪古墳群が位置している。また、この北寝窪古墳群の南西方向には、井野川に沿って愛宕山(二子山)古墳・八幡塚古墳・薬師塚古墳の保渡田3墳を中心とする一群がみられる。その南側には、稲荷山古墳・小星山古墳等の一群、その東側に菅谷古墳群が位置している。これらは相馬ヶ原扇状地から前橋台地を開析する小河川単位の群に分けられるものと考えられる。以上の古墳群は、ちょうど当遺跡を含む一帯を囲むように位置しており、この地域が集落及び生産域であったことが想定される。

集落跡は、大規模なものは新幹線や関越自動車の調査部分に偏在しており、全体像は明らかにされていない。前期の遺跡と考えられるものは、鳥羽遺跡・井出村東遺跡・保渡田II遺跡・赤鳥遺跡・元総社明神遺跡等がある。『群馬町の遺跡』(3)古墳時代によれば、金子町金井・棟高字東弥三郎街道等の地区に前期遺物の散布が認められている。この前期の立地について、鬼形芳夫氏は「いづれも小規模な分布範囲をもち、標高125m以下の微高地に立地」とし、生産地に近い遺跡立地を想定すると共に、弥生時代から継続する遺跡の多いこと及び、遺跡規模が縮小する傾向のあることを述べている。中期の遺跡は、調査によって確認されたものでは、下東西遺跡・福島遺跡・三ツ寺I遺跡の3例ほどである。その他前出の文献によれば、後疋間字薬師・棟高字南八幡街道・三ツ寺字大下の各地区を中心とする地区に遺物の散布がみられるようである。遺跡立地及び数は前期と大きな違いは認められない。後期の遺跡としては、国分境遺跡・井出村東遺跡・三ツ寺I・II・III遺跡・福島遺跡・中林遺跡・元総社明神遺跡・草作遺跡・閑泉樋遺跡・後疋間遺跡などがある。その他散布地としてとらえられている場所が、古墳群の描く円の内側に一部重複しながらみられるようである。この後期遺跡の分布は、前期遺跡分布と比較すると、明らかに標高の高い部分へ広がっていることがわかる。この遺跡数の増加及び遺跡地の拡大は、生産地の拡大を意味しており、この生産を基盤として後期古墳の飛躍的増加が成しとげられたものと考えられる。しかし、生産跡は、当地域にあつてほとんど明らかにされていない。調査例としては、熊野堂遺跡でC軽石埋没の畠が、北原遺跡でFA下水田に近い様相の水田が、同道遺跡で、FA下及びFPF-2下水田が検出されている。この3遺跡は井野川及び八幡川に沿って位置しており、水田については今後各河川及び埋没河川部分に検出される可能性がある。後期遺跡の拡大には水田よりも当地域の台地平坦部を利用した畠作が大きく関与したことは、黒井峰遺跡等の例からも容易に想定されるが、それを裏付ける生産跡は明確にとらえられていない。

次に居館跡として位置づけられている三ツ寺I遺跡は、保渡田3墳との関連が考えられている。この三ツ寺I遺跡周辺からは、水田・畠等を含む遺跡が検出されている他、散布地も広がっており集落の存在も予想されている。つまり、こうした水田・畠等の生産地とその集落、その中心たる長の居館とその墓というように、有機的関係をもった地域社会が復原される可能性を秘めている。しかしこの地域社会がどの程度の広がりをもっていたかについては、三ツ寺I遺跡のような遺跡の今後の検出を待たなければならない。

奈良・平安時代

古墳時代末から奈良時代初頭頃は、律令制が地方にも及んだ時期であり、それに伴い国衙・郡衙が整備さ

れた。また、聖武天皇の詔勅(741年)によって造営された国分僧寺・尼寺は、奈良時代から平安時代初期にかけての国を上げた一大事業であった。この国府・国分二寺という時代を象徴するものが当地域に位置しており、当時この周辺が政治・文化の中心的地域であったことがわかる。

この奈良・平安時代に属する遺跡は、近年の開発に伴う調査によって多数が検出されている。この調査事例をみると、奈良時代に属すると考えられる遺構が主体であっても、ほとんどの場合平安時代と考えられる遺構も検出されており、奈良時代の単純な遺跡はとらえられていない。その反面平安時代の単純な遺跡はみることができることは、平安時代にあって、新たに開発されていった地域のあることを意味するものと考えられる。この時代の遺跡としては、国府関連・国分寺関連の他、集落跡・生産跡がみられる。

国府関連の遺構は、推定国府域内には住宅等が建ち並び、系統だった調査はできない現状にあり、明確にはとらえられていない。しかし、元総社小学校校庭遺跡・昌楽寺廻村東遺跡で検出された建物跡は、平城京でのあり方に近似しているとされており、国府関連の遺構である可能性がある。また、草作遺跡の調査では8世紀後半から10世紀前半代の遺構が検出されず、10世紀後半から11世紀代の遺構が主体であることは、国府域における規制と、国府の存続時期にかかわるものと考えられる。

国分寺関連では、群馬県教育委員会により国分僧寺の整備事業として調査が行われており、寺域の確定に併行して、塔・金堂跡の調査が行われた。また、国分尼寺についても、昭和44年度の調査によって南北一直線上に位置する三棟の遺構が確認され、それぞれ中門・金堂・講堂と推定されている。さらに寺域については、国分僧寺より小規模の範囲が推定されているが、疑問も出されている。直接はこの国分寺と関連するとは断定しがたいが、鳥羽遺跡から多数の鍛冶遺構が検出され、その所属時期から一部国分寺の造営に係わるものもあったと推定されている。

集落遺跡としては、中尾遺跡・鳥羽遺跡・国分境遺跡等では、他に比較して圧倒的多数の住居跡が検出されているが、これらは国府・国分寺に隣接する地域に立地することの特殊性によるものであるか、調査規模の違いによるものであるのか現状で明確にし難いが、先述のごとく特に平安時代の遺跡が前時代に比較して増加し、また、相馬ヶ原扇状地内へ拡大されていくことは確実である。こうした集落遺跡と若干異なる様相を呈する遺跡に下東西遺跡がある。この遺跡からは柵列及び大溝、その他張り出しを有する住居、通路状のもので連結された住居等が検出された他、その出土遺物にも他の遺跡とは若干違った様相が認められている。これらの遺構・遺物の所属時期とされる7世紀末から8世紀初頭という位置づけ等から、官衙的色彩の強い遺跡とみられている。以上のように、国府と国分寺、国分寺造営関連とみられる鳥羽遺跡、近隣を統括するための官衙的性格の想定される下東西遺跡というように、遺跡の性格づけが可能と考えられるものがみられそれらが国府を頂点として、相互に密接に関連していたことは容易に想像されることである。

生産遺跡では、火山灰という鍵層によって検出されており、明確にされているのは、吹屋遺跡・日高遺跡・大八木遺跡・御布呂遺跡・寺の内遺跡・同道遺跡・芦田貝戸遺跡・正観寺遺跡・井出村東遺跡・三ツ寺II遺跡・福島遺跡・中林遺跡等から、B軽石下の水田が検出されている。これらの水田は時期的には12世紀代にかかる時期が考えられており、それ以前のもは、吹屋遺跡から10世紀代の水田に伴うとみられる溝が検出されているにすぎない。これらの遺跡は、当遺跡の南寄りに集中しており、当遺跡周辺から明確なものは検出されていない。この地域は、古墳時代にあっては生産と居住の場であったことは確かであり、この時代にあってその性格が変わっていった可能性がある。

以上概観したが、一部で相互の有機的關係の考えられる遺跡の存する一方、大多数の遺跡では、居住域と生産域の關係もとらえきれていないのが現状である。

第2章 遺跡の位置

鎌倉時代以降

鎌倉時代以降の周辺遺跡を記述するにあたり、予め御断りしておく。当該の鎌倉時代以降は、古代の如く多くの遺跡・遺物が周知になっている状態に相反し、殆ど分かっていない状態である。特に、近世・近代については軽視される状態でもあり、考古学的な解明は一部でしか成されていない。しかし、この場合においても、現状では遺物にのみ偏重される嫌いがある。

本稿では、特に鎌倉・室町時代の実像をより鮮明にさせるため、近代から遡り一事象の以前・直前での状況を繰り返し求めることによりその方法を求めたい。この方法は、前刊書付図16及今次の付図11で試みた。主眼としては、古代の土地制度・遺跡の占地状態を把握する前段階として、古代の残影を求める点にある。これは、当遺跡の主体的存在でもある古代の住居群が、律令機構の形骸である国府・国分二寺に係わる遺跡として、住居群の実態は、律令社会でどの様な意義が存在したかを考究する点で不可欠な要素でもあると考えた点にある。また、各遺跡等については前出の一覧表を参照して載きたい。

当遺跡は前橋市元総社町字小見。群馬郡群馬町東国分字村前・薬師道南・中道南・上野道南・高井道東地内に存在する。この現在の行政区分の以前は、群馬郡元総社村・群馬郡国府村であって、前者は昭和29年に前橋市に合併され、後者は、昭和30年に金古町・堤ヶ岡村と合併し、昭和32年には上郊村が加わった。

調査区内では、C区第1号溝状遺構の立ち上がりの南約1m程に行政区分が在り、溝の走行と行政区境が平行した状態で認められる。

遺跡地周辺に認められる字名は、群馬町分は比較的細分される状態で認められ、特に調査に係わった部分では、“道”を付するものが全てである。この反面前橋市分では小見の名称しか認められず、かなり広い範囲を示している。また、小見を含め周辺の草作・草作・小見内・西川などの字名の地と比較すればその大きさが比較出来る。

大字地名は、群馬町分では東国分・西国分・引間・後疋間・冷水・塚田、前橋市分では、元総社・稲荷台・大友・大渡・内藤分・鳥羽、高崎市分では、中尾が散見され、この大字地名は近世から継続した一つの村単位で把握される。この中で元総社村は近郷中で最大のもので、中心的存在であった。その一端を窺うことの出来る様子が“元総社村誌”に見られる。特に、新市は近世から昭和時代まで盛んであったようである。また、総社神社の存在や多くの寺院（竜松寺・徳蔵寺・昌楽寺）からも、物質面でも精神面でも繁栄の様子は窺えよう。

これらの村の様子を江戸時代に求めると、上述した“村”が全て江戸時代初期から存在したものでないことが確認出来、新開のものも在ることが分かる。このことについては“群馬県郡村誌、(以下郡村誌と略する)”に詳述されているが、その概要を記し村の存在意義と江戸時代における当該地域の様子を窺ってみたい。

東国分・西国分は、慶長6年(1601年)の検地帳には国分村の記載があり、寛永12年(1635年)に東国分の初例が認められる。郡村誌では“此時分レテ東西二分レシナルヘシ、とある。引間村については判然としないが、著名な“妙見寺”の存在がある。後疋間村は引間村と同様である。冷水村も判然としない。この引間・後疋間・冷水村は、村としての存在を把握し難いが、東国分以下の地域自体は、天正17年(1589年)以降慶長6年(1601年)の間には諏訪因幡守頼永が領地としていることは確認出来る。元総社村は、古代は国府の地として、室町時代から江戸初期には、蒼海城・八日市場城などが上野国の政治の中心地として存在していた点から、必然的に村としての条件を備えたものと考えられる。そして、この元総社の名称は、秋元氏が総社城を築城してより元の総社の地としての“元総社”があるものである。

この元総社村が拡大化する過程であろうか、寛永年間中には塚田村・稲荷台村が分村し、元禄10年(1697

年)には鳥羽村を分村させている。また、郡村誌には、「此地昔時数村ヲ分支セント口碑アレドモ其村名年暦等詳伝ヲ得ズ、とあるが、現在「口碑、なるものは確認出来ない。また、前橋市史に、旧元総社町の役場に有った書類等から、これらのことを明らかにせんと調査された旨の記載があるが、現在は未だ明らかになっていない。

大友・大渡村は前述の引間村等と同様である。内藤分・中尾村は古くから在ったようである。内藤分の内藤は、元龜年間に武田の家臣内藤修理亮昌豊が、保渡田の砦に居住し、西上州七郡を支配しており、この頃、石倉城がこの支配下に入り、この時の名残として内藤修理亮昌豊の内藤が残ったとされている。そして、石倉城近辺の村が内藤分村になったという。現在では石倉の地名で称されている。

中尾村は、小字の金尾・高畑・吹屋・中尾・原・天神の六ヶ村を元禄年間に、中尾・金尾・高畑で上中尾村とし、吹屋・原・天神で下中尾村としたが、明治5年(1872年)に一村の中尾村になった。だが、六ヶ村は天正年間に出来たものと郡村誌は記している。

この江戸時代を通して当該地域の水田耕作に非常に有益に役目を果たした用水堀が天狗岩用水である。この天狗岩用水は、元総社に入部した秋元氏が主体となって開鑿した。秋元氏は、長朝・泰朝の二代30年程の間(慶長6年～寛永10年)(1601年～1633年)総社の地を領有した。領地は一万石であった。

秋元長朝は、慶長6年には検地を実施し、後に天狗岩用水の開鑿に3年を要し、この間百姓の年貢を免除している。この用水により石高は2万7千石に上がっている。

これらの村の中で、天正年間に確認出来るものは、国分・元総社・内藤分(石倉)・中尾である。この4者の内当遺跡と係わる国分以外は、何れも室町時代に「城」の存在が確認される場所である。ここに、「村」としての存在が室町時代末期乃至安土・挑山時代に遡って確認されるものは、それ以前は城下町的な町屋の形成に近いものがその初源であったと推定出来る。大友村は、その前身に大友館の存在が考えられ、江戸初期に村としての形成が確認出来るものは、前代は比較的規模の大きな城館跡であったことが類推される。

この天狗岩用水の開鑿は、多面的な要素を含んでいる。1. 開田余地がある土地が開鑿以前に対し1.5倍程存在したこと。2. 用水堀掘鑿という新しい技術が導入されたこと。3. 江戸時代を迎える以前に、「村」としての共同体構成の足場となった点である。

ここで国分について若干考えてみたい。国分村としては秋元氏が検地を実施した慶長6年には、東西の国分村は認められないことは前述した。東西国分村を確認出来る資料が有る。これは、高井福島家文書中に有り、北原村を起こすに当たったの文書で、この中に、高井・青梨子・東国分の3ヶ村から18町余りの土地を取り上げていることから分かる。これは、慶長13年に秋元氏が命じたことによるが、慶長6年から7年後には東西国分村の存在が確認出来る。この慶長13年が東西国分村の分岐の下限であるが、秋元氏の入部後慶長9年に総社城築城が終わっており(上毛傳説雑記巻39)、天狗岩用水の完成直後のことである。この天狗岩用水は、新田開発という前提が有り、この用水の完成後、新田開発と前後した頃に「村」の再編があったことが推定され、開発に掛かる年月等を考慮し慶長13年以前に求めれば、総社城完成直後ぐらいの年代が想起される。そして、国分村が東西に分村される状況は室町時代に遡って求められる。

「国分」の地名は、近世頃では慶長年間で確認されるが、前代の室町時代では、「鎌倉大草紙」の中で認められる。これは、結城合戦の起きた永享12年(1440年)に、結城方に参戦せんとした大井国光に対して、上杉三郎重方が国分に陣取っている。この時に国分と称されたかは不明と言わざるを得ないが、鎌倉大草紙の成立は室町末期と考えられている。また、他の資料では、永禄元年(1558年)に記された「上野国群馬郡箕輪城主長野信濃守在原業政家臣録」の中に「国分岩右衛門」の名が見られ、「塚田文右衛門」など地名に係わ

第2章 遺跡の位置

る氏名が多い。この地名に係わる氏名が多い点から、この“国分岩右衛門、の“国分、も地名を現しているものと考えられる。現状では、この二者の資料のように室町時代末期が上限であり、具体的には永禄元年が示せる。

国分の他には、“国府、“小窪、と呼ばれている場合がある。前者は“北国紀行、の中で、「前略・国府長野陣所・後略」の記載が認められる。この国府は、蒼海城より西側の地であったことは明らかで恐らくは現在の東国分と西国分の間であったと考えられる（前刊書参照）。他に“群馬縣史、では、“鎌倉大草紙、を引用し、文安4年（1447年）上杉顕定が永寿王（足利成氏）を迎える準備に“上野の國府に出て、とあり、国分村誌では、群馬縣史の記載より“國府、を国分と考えている。しかし、“鎌倉大草紙、には、「上野國府中へ參」とあり、前後する文意からは、上野國、府中と解した方がいいと思われ、この三者の資料では、国府＝国分とは考え難い。

この国府とは別に“小窪、を国分と考える説がある。“上毛沼田記、に「前略・町屋數千軒と稱した小窪を焼きはらひ、・後略」とあり、沼田町史ではこの“小窪、を国分としている。これは、“上野名跡志、には、国分村についての記載の中で「國府ハ往昔國司ノ住玉ヒシ地也土人コクボト唱フ」とあり、これを引用し小窪＝国分としているが、“上毛沼田記、等の記載内容では、村上出羽守と沼田景朝との戦いを示しているが、年代的に永禄13年（1466年）に上野守護代の居住地（元総社）周辺に火を放つことは考え難い点があり、上毛沼田記自体の信憑性自体に問題もあると思われる。ただ、地形的に、現在の東国分自体“小窪、の通り窪んだ状態であることは事実である。この点に何らかのことが潜んでいると思われる。

ともあれ、永禄元年の資料に認められる様に、室町時代末期には、“国分、が確認出来る。

近世における国分村・東国分村は、元総社に次ぐ規模を有している。また、慶長年間に存在の確認出来る村は、その前身は城館跡であった可能性が高い点が挙げられる。

ここで室町時代の状況から考えてみたい。ただし、当該の時代についての詳細は前刊書に記したのでそちらを参照していただきたい。

室町時代では、蒼海城の存在が最も大きい。城と称する状態以前は、守護代惣社長尾氏の拠点として白井長尾氏の白井城と共に重大な存在であった。しかし、室町後半には、長尾氏の弱体化により小勢力としての存在でしかない。これは、16世紀前半には長野氏の台頭により顕現化している。また、永禄6年には長野氏の滅亡と共に蒼海城も落城している。この永禄6年には、箕輪・蒼海両城と共に落城した館は多くに及んだものと考えられ、これらが現在知られるものの一部であると考えられる。これは、付図に示した如く、方形の地割が多く見られる点と、慶長年間に存在した“村、からも類推される。さらに、16世紀前半には長尾氏の弱体化により、蒼海城周辺に居館を備えた中小国人層の長尾氏からの離反により一部には閑散とした状況もあったものと考えられ、後述する当遺跡の状況も、これらの歴史経過を現しているものと考えられる。

また、反面には、15世紀以前には蒼海城を中心とした長尾氏の繁栄と同じくして多くの館が存在したものと思われる。このことは、前述した“国分村、が近世初頭段階で元総社村に次ぐ規模の点で、前代での繁栄を僅かながらも残した現象であったと考えられる。さらに、中小の館跡は現在知られる余地が無いのは、慶長年間に存在した“村、自体の前身が長尾氏の有力被官層の館であったことが示唆され、この跡地に居住域を求めたことは、世情不安の中での独特な共同体を形成させ、基盤となる耕地を無駄なく利用したことが想起される。この状況下で自生したものとも考えられる“村、が、当該地域の郷村制の在り方であったかもしれない。そして、この前身は、長尾氏の支配下にあった中小国人層であったとも想定される。

第3章 検出された遺構・遺物

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

本報告書に記載した地区は、F・G・H（H区第11号溝以南）区で、調査対象区の中央から北寄りに位置する地域であり、長さは約250m、幅約60mの約15,000㎡が対象面積である。

当地区において検出した遺構のうち、攪拌されたBを主体的に含む覆土を有する鎌倉時代以降に属すと考えられる遺構を先行調査し、その後にC Pを含む覆土を有する遺構の調査を行った。このC Pを含む遺構の確認は、一面的なものではなく、場所によっては2～3段階の確認を実施した。

調査は本線・側道部分を含めて、東西及び南北に走る農道部を除く部分を先行調査し、その後段階的に農道を撤去して、2次の調査を実施した。そのため先行調査した部分と2次調査した部分では、遺構検出面に微妙な段差を生じ、平面プランが完全に把握できなかつたり、先行調査した遺構とズレがでたものもある。

この結果検出した遺構分布には、遺構密度の密な部分と疎な部分が帯状に交互にみられるという、顕著な偏りがみられた。このことについては、上野国分僧寺・国分尼寺中間地域報告第1冊（関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集）の中でも指摘したところであるが、遺構占地場所の基盤となる層のあり方と密接な関係を有しているものと考えられる。しかし、F区における遺構のあり方は、先述したことと必ずしも一致しておらず、G・H区とは違った分布を示している。つまり、東西に延びる該期の溝を境にして、南側には該期遺構の分布が著しく少ない。また、この部分には鎌倉時代以降に属す遺構、特に大規模な溝が顕著に分布している。こうしたあり方は、遺構分布が基盤層の問題というような外的要因だけでなく、他の規制のもとにある例とみることができよう。

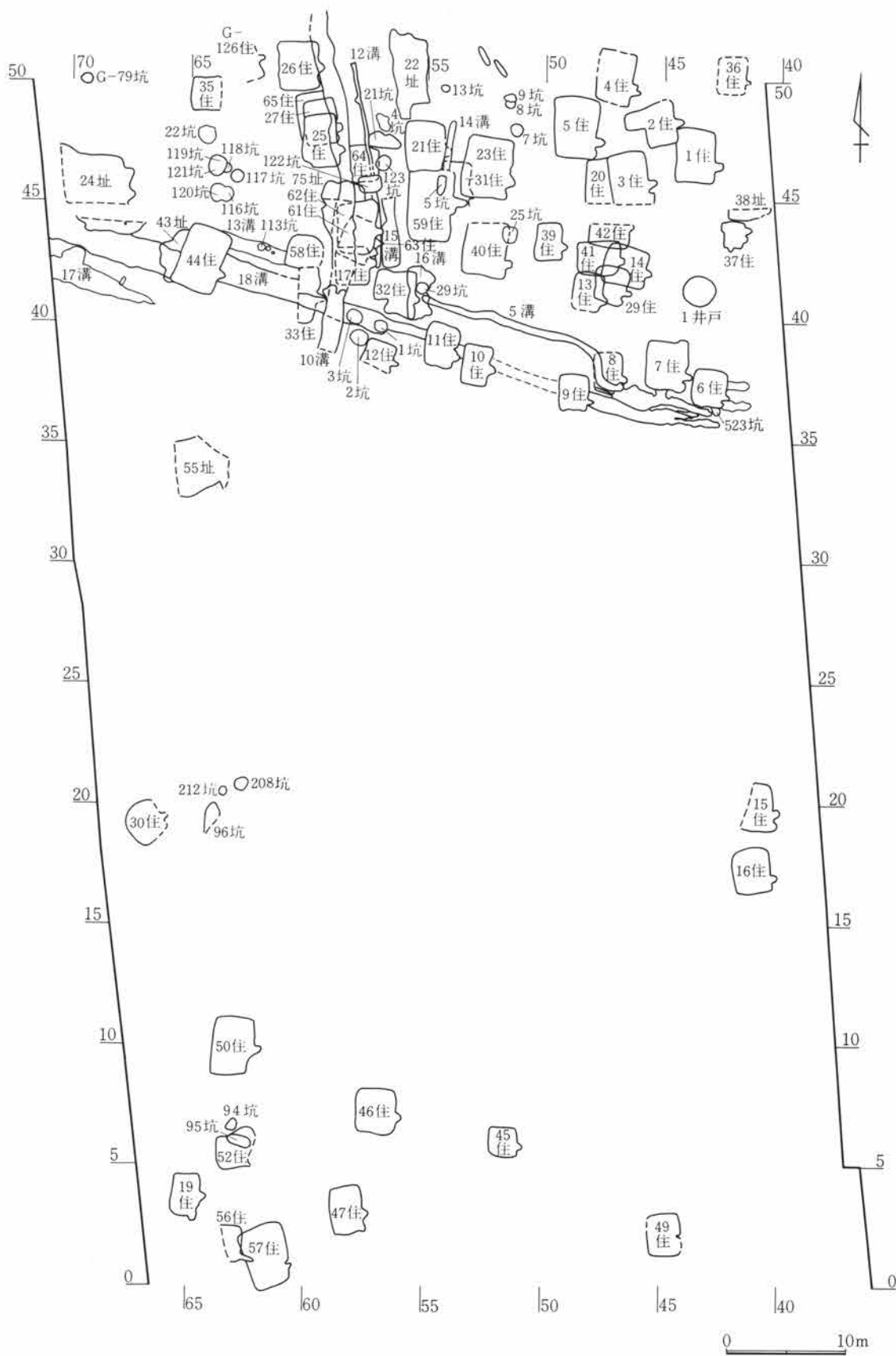
時期別の遺構分布については、H区北及びI・J区を含めた形であれば、より明確に傾向を指摘することができるが、F・G・H区の3区にあっても、北寄りに古い時期の遺構が多く分布する傾向がみられる。

その他G区については、農道部以外の調査終了時に、4m×4mのグリッドを設定し、該期遺構の再確認及びさらに古い時期の遺構の有無の確認を目的として、VII層面で全体の50%に及ぶ精査を実施した。その結果、該期住居跡の掘り方の一部を検出した他に新たな検出は認められなかった。

以上の調査の結果検出した遺構・遺物は下記のとおりである。

竪穴住居跡（址を含む）は、F区57軒、G区109軒、H区58軒の合計224軒。掘立柱建物跡は、H区3棟、井戸跡は、F区1基、G区3基、H区1基の合計5基。土坑は、F区25基、G区43基、H区16基の合計84基。埋設土器遺構は、G区2基。土墳墓は、明らかと思われるものはG区1基。溝は、F区9本、G区6本、H区1本の合計16本。サク状遺構は、G区2ヶ所であり、遺構総数は、337基である。

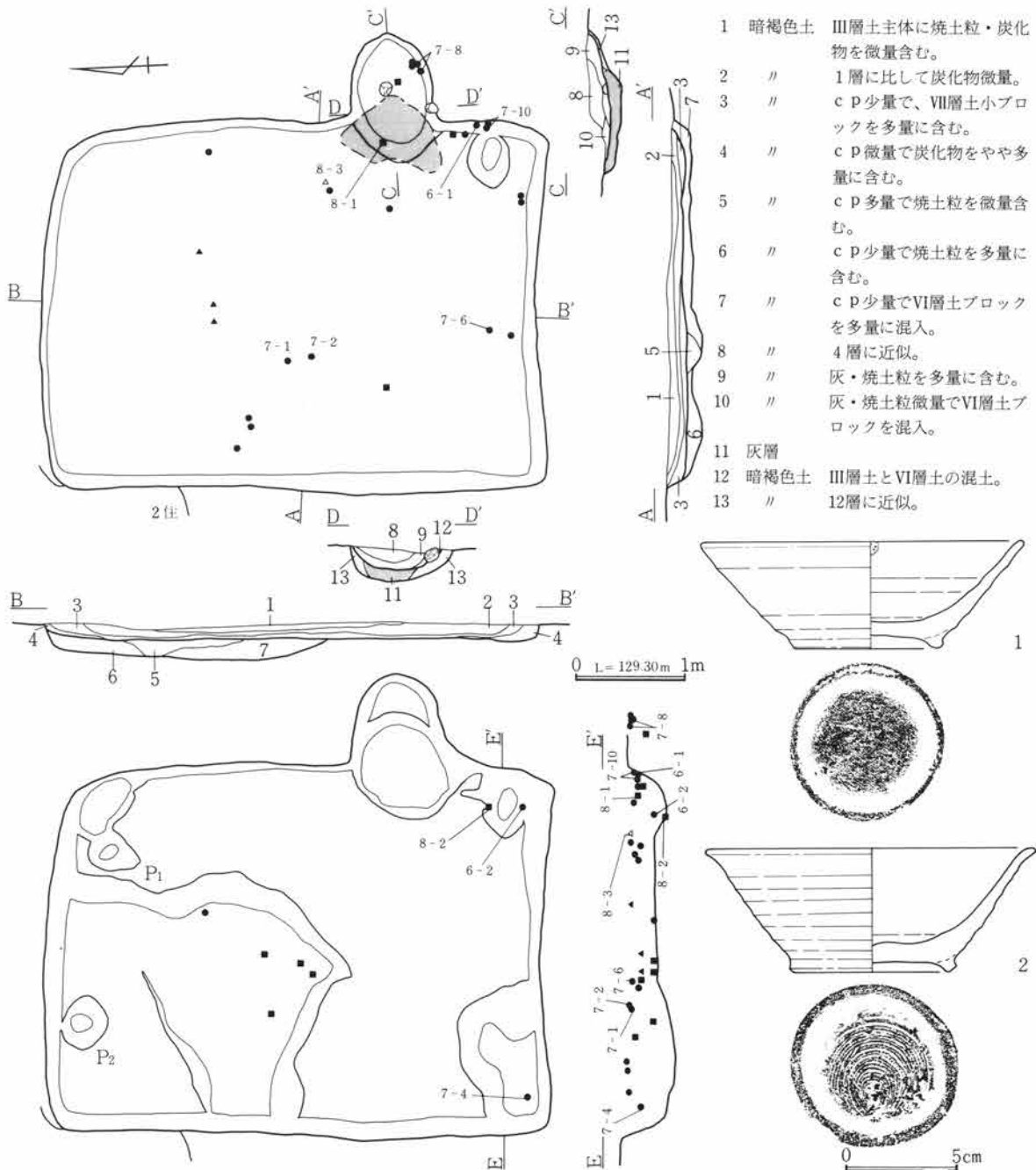
遺物は、遺構内出土のものを主体に掲載した。これらの遺物を、土製、石製、金属製に大別して述べると土製遺物では、土師器・須恵器の坏・碗を主体として、高坏・皿・甕・壺等の他、羽釜・土釜が検出されている。その他、灰釉・緑釉陶器・二彩陶器・とりべ・鞆の羽口・土錘等が出土している。また、竪穴住居跡を始めとして、井戸跡その他の遺構についても瓦が多数出土していることが特徴である。石製遺物では、こも編み石と仮称されている石器の他、砥石・臼玉・紡錘車等が出土している。金属製遺物では、釘・古銭・刀子の他、不明の工具状の鉄製品・飾り金具等が出土しており、本報告中には、遺物総数約2,600点を掲載した。



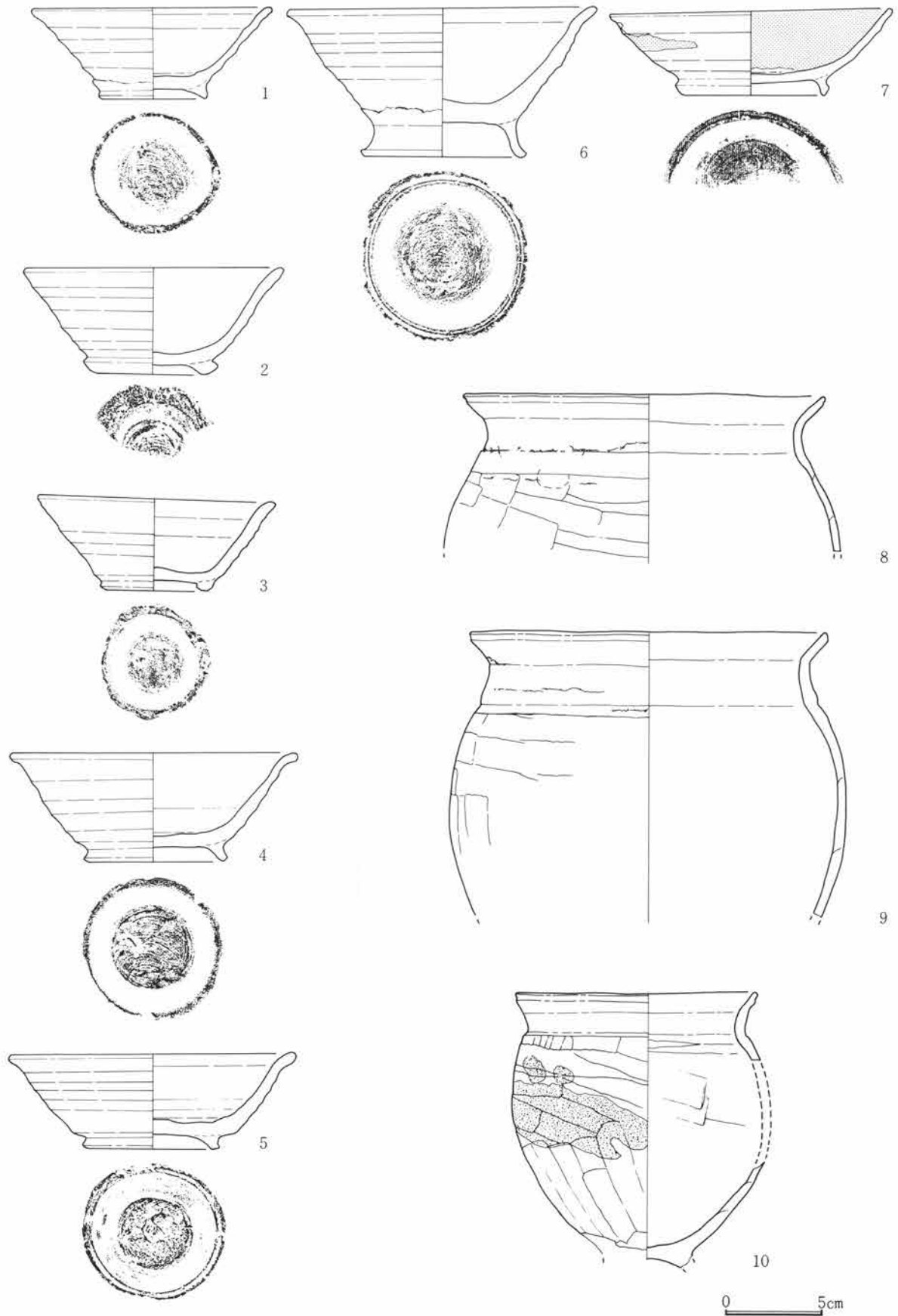
第5図 F区遺構配置図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	F区第1号住居跡	位置	45～48-F-42～44グリッド内	分類	C-11	時期	VII
平面形態	長方形	規模	3.30m×4.50m	軸方位	東-3度-南	残存深度	約12cm程
備考	壁の残存状態は不良、床面はVI層中に平坦に構築され、硬化面はみられない。壁溝・柱穴は無い 貯蔵穴は、南東コーナー部ややカマド寄りに位置、不整形形で径約40cm、深度約24cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			軸方位	東-4度-北	
規模	全長 115cm	屋外長 80cm	屋内長 35cm	袖間幅 — cm	燃烧部幅 75cm	煙道幅 — cm	
備考	焚口は床面から約8cm程の浅い掘り込みで、袖は右袖部に角柱状截石を検出。燃烧部は、屋外部が主体で、中央部わずか北寄りに石製の支脚を検出。灰面は支脚部からカマド前面に1枚検出。						

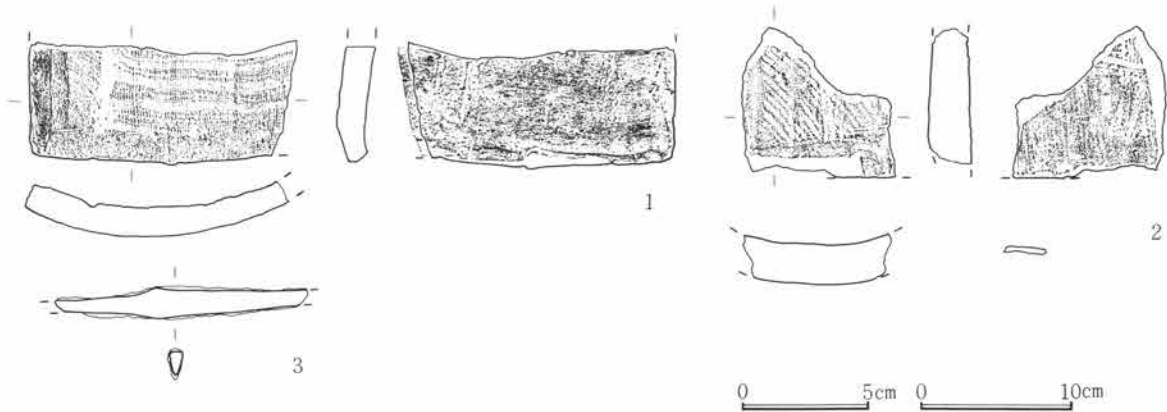


第6図 F区第1号住居跡・出土遺物実測図



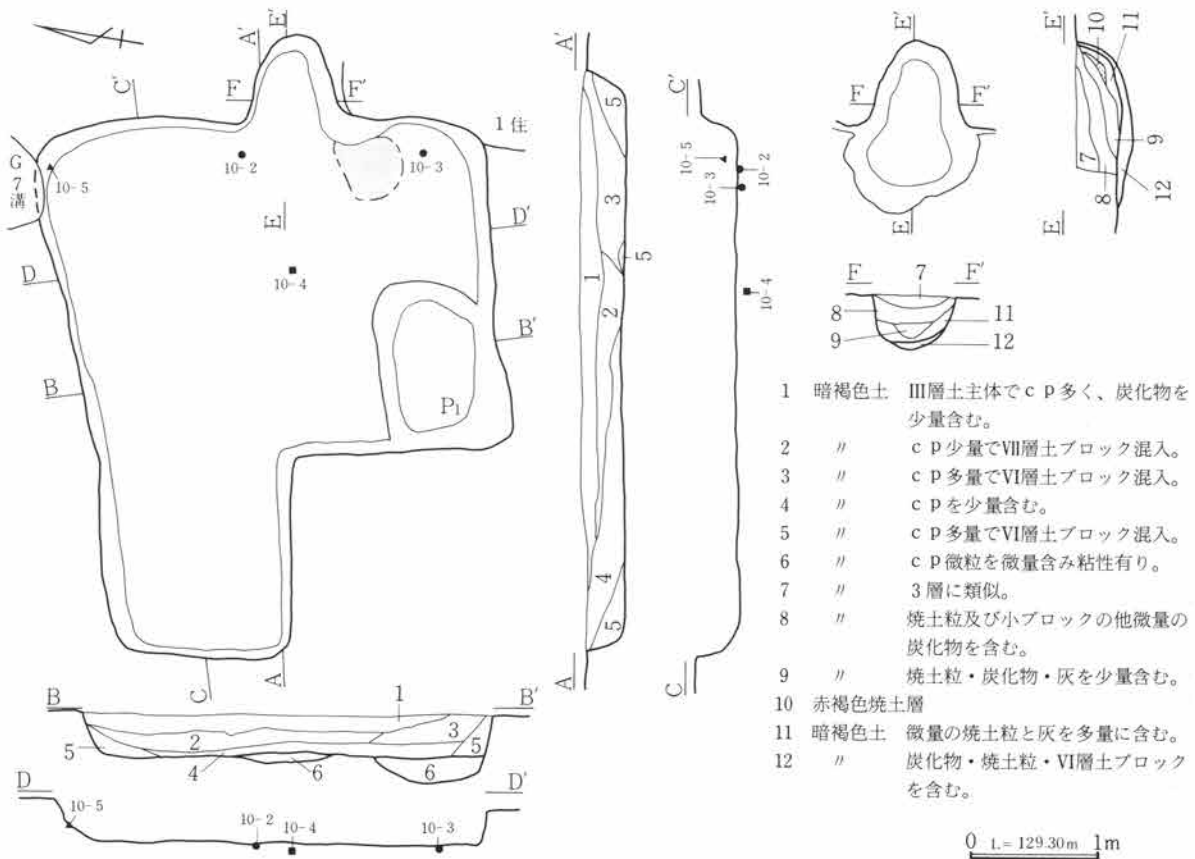
第7図 F区第1号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



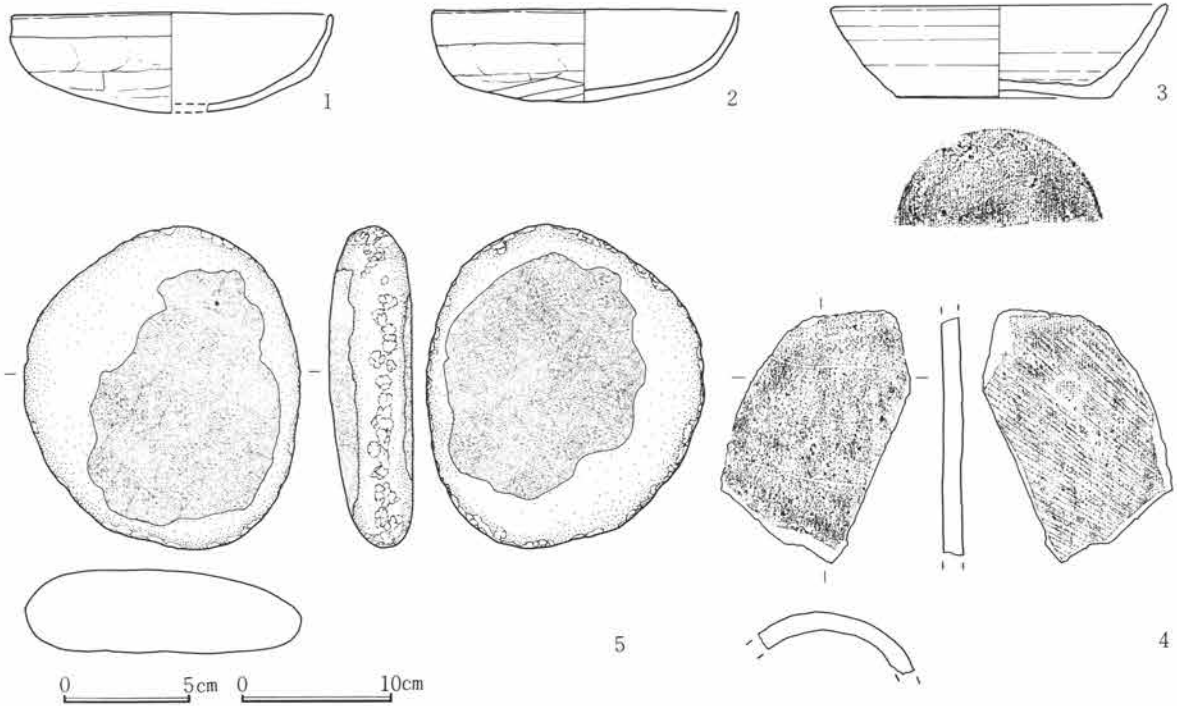
第8図 F区第1号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第2号住居跡	位置	47～49-F-44～46グリッド内	分類	D-1	時期	IV
平面形態	隅丸の鍵形	規模	4.30m×3.50m	主軸方位	東-9度-北	残存深度	約35cm程
備考	平面形が特異で西壁北側に張り出しを有する。壁はほぼ垂直で残存状態は良好、床面はVI層中に平坦に構築され、硬化面はみられない。壁溝・柱穴・貯蔵穴は無、南東コーナー部に方形土坑状掘り方。						
カマド	位置・形状	東壁やや南寄り・馬蹄形		主軸方位	東-10度-北		
規模	全長 80cm 屋外長 65cm 屋内長 15cm 袖間幅 140cm 燃烧部幅 85cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、南側に灰面を検出。袖は右袖のみが顕著で、壁の掘り浅しか？燃烧部は屋外部に主体があり、焼土粒と灰を多量に含む厚さ約7～8cmの層を検出。						



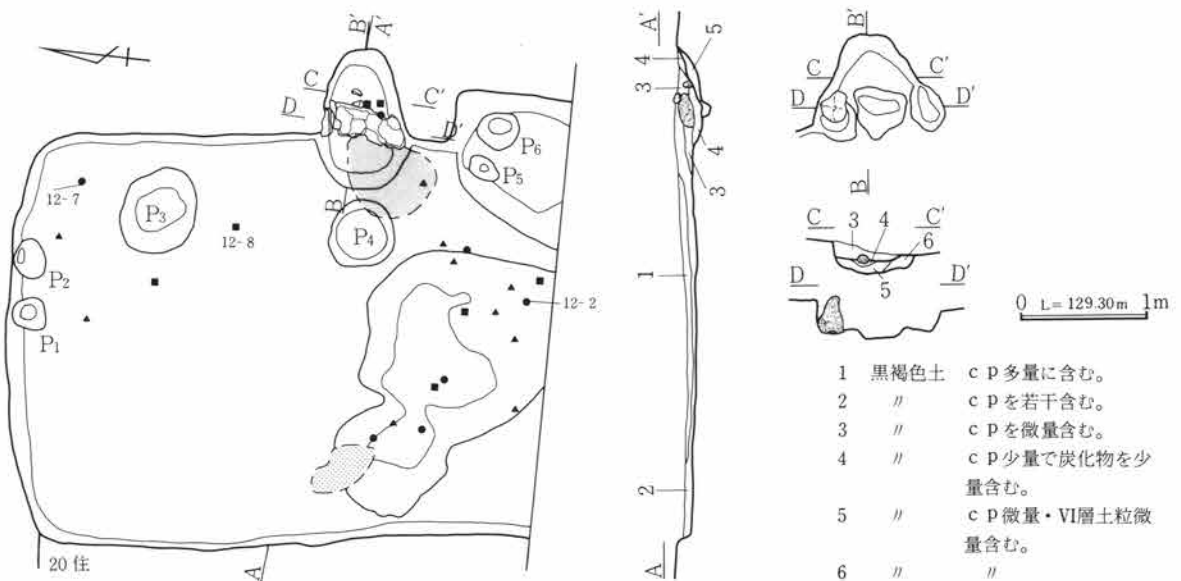
第9図 F区第2号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



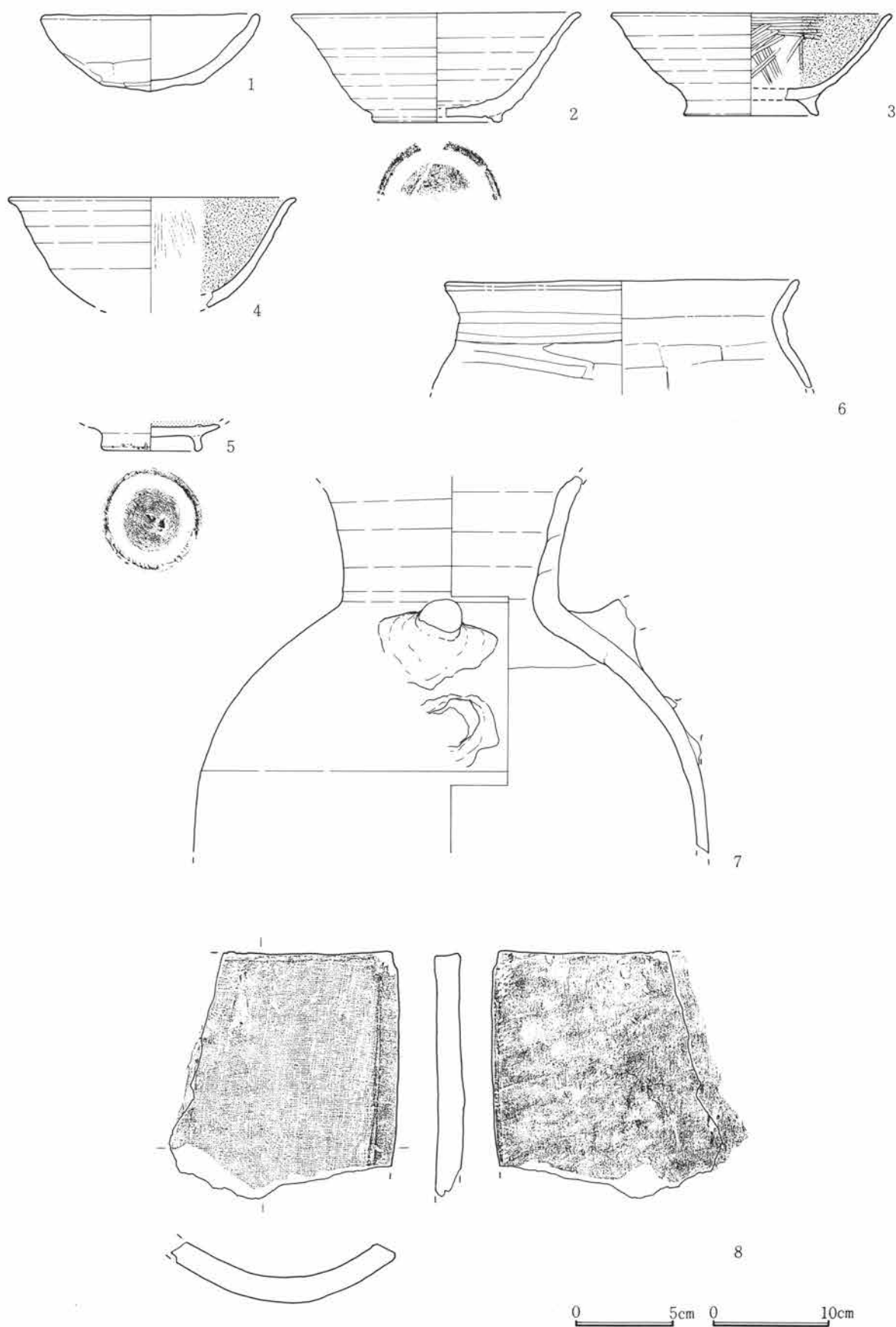
第10図 F区第2号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第3号住居跡	位置	53~55-F-37~39グリッド内	分類	C-11	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形	規模	3.30m×—m	主軸方位	東—7度—北	残存深度	約13cm程
備考	南側の一部未調査、壁は南東コーナー部でやや突出。床面はVI層中で比較的硬化、壁溝・柱穴は無。貯蔵穴は、南東コーナー張り出し部で、不整円形、径約110cm、深度約14cm。						
カマド	位置・形状	東壁やや南寄り・馬蹄形		主軸方位	東—9度—北		
規模	全長110cm 屋外長70cm 屋内長40cm 袖間幅80cm 燃烧部幅45cm 煙道幅—cm						
備考	焚口部は浅い皿状の掘り込みで、天井石が落下、灰面は南側に1面検出。袖は、角柱状の截石が左袖部のみ残存。掘り方は右袖部にもあり。燃烧部は屋外部が主体で、灰と焼土粒の層を検出。						



第11図 F区第3号住居跡実測図

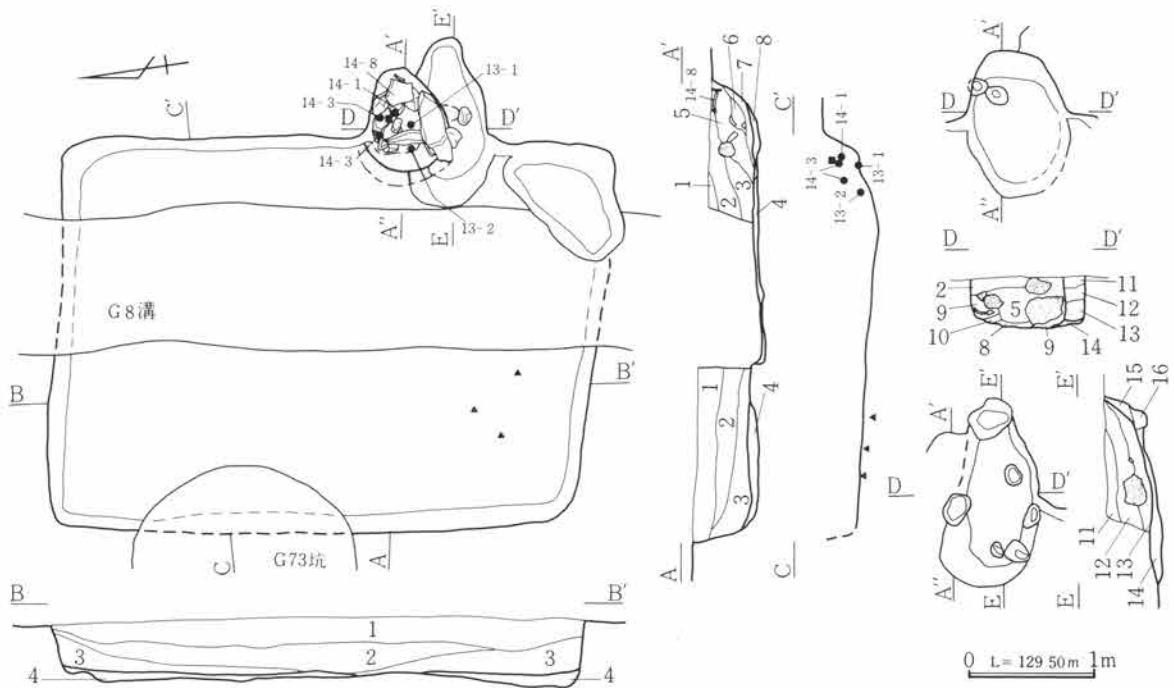
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



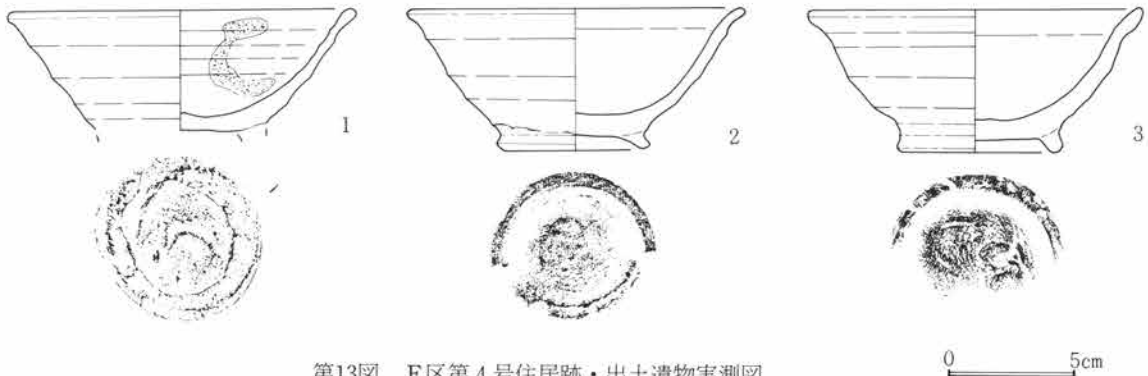
第12図 F区第3号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	F区第4号住居跡		位置	59-F~1-G-46・47グリッド内		分類	C-11	時期	VIII
平面形態	長方形	規模	3.05m×4.25m	主軸方位	東-10度-南	残存深度	約45cm程		
備考	壁・床面共に、G区第8号溝、G区第73号土坑に一部削平され、壁溝、柱穴は無。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置し、不整形で径約75cm、深度約19cm。								
カマド	位置・形状	東壁南寄り、新旧2基検出。新一馬蹄形				主軸方位	東-10度-南		
規模	全長90cm 屋外長55cm 屋内長35cm 袖間幅90cm 燃烧部幅65cm 煙道幅1cm								
備考	新についてのみ述べると、焚口は皿状の掘り込みで上面に灰面、袖は両袖共に角柱状の載石で、上部に河原石を天井石としてのせている。燃烧部は屋外部主体で、灰・焼土等はほとんど検出無。								

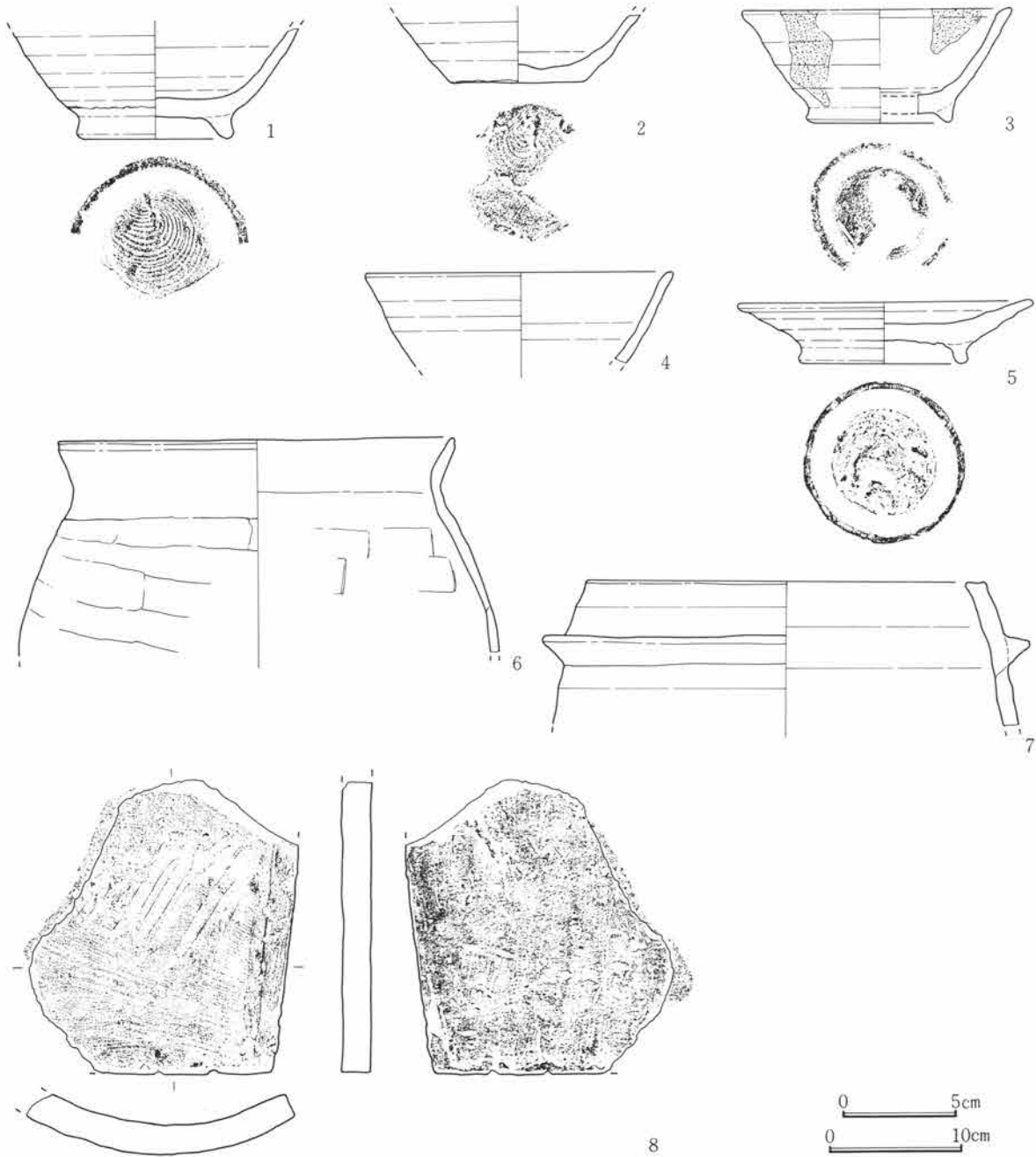


- | | | |
|---------------------------|-------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 c P多量で粘性強い。 | 6 暗褐色土 焼土粒少量、灰を多量に含む。 | 11 暗褐色土 c Pを微量含み粘性弱い。 |
| 2 // c P微量で粘性弱い。 | 7 // 焼土粒・灰共に多量に含む。 | 12 // c P微量で粘性弱い。 |
| 3 // c Pごく微量でVII層土ブロック混入。 | 8 // 多量の灰と、焼土粒を微量含む。 | 13 // 焼土粒は微量で粘性弱い。 |
| 4 // VII層土ブロックを多量に混入。 | 9 // VII層土主体で、焼土粒を微量含む。 | 14 // 灰を多量に含む。 |
| 5 灰褐色土 VI層土ブロックと暗褐色土混入。 | 10 // 灰を多量に含みしまりが弱い。 | 15 // c P微粒を微量含む。 |
| | | 16 // 焼土粒・灰共に含まず粘性が強い。 |



第13図 F区第4号住居跡・出土遺物実測図

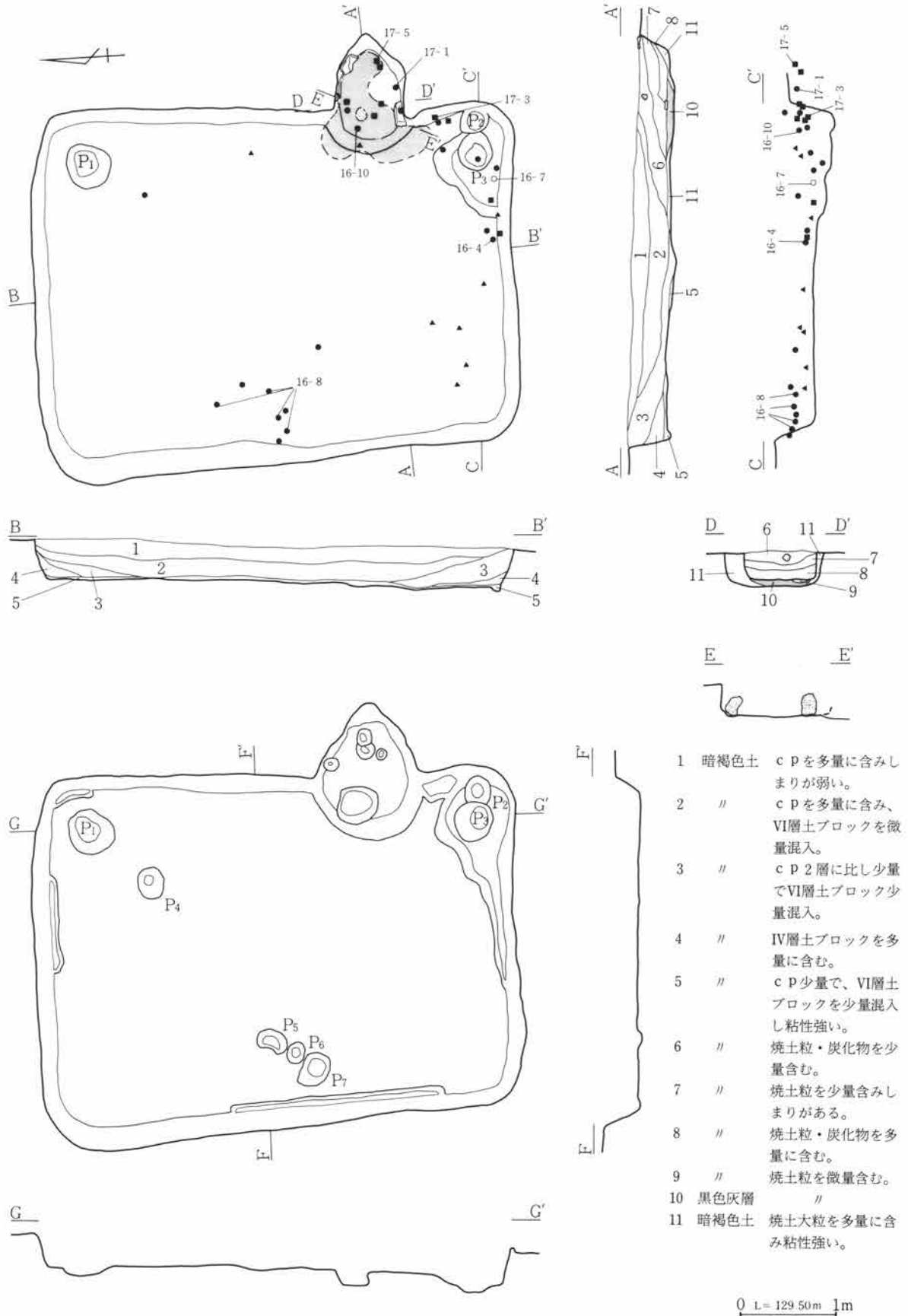
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第14図 F区第4号住居跡出土遺物実測図

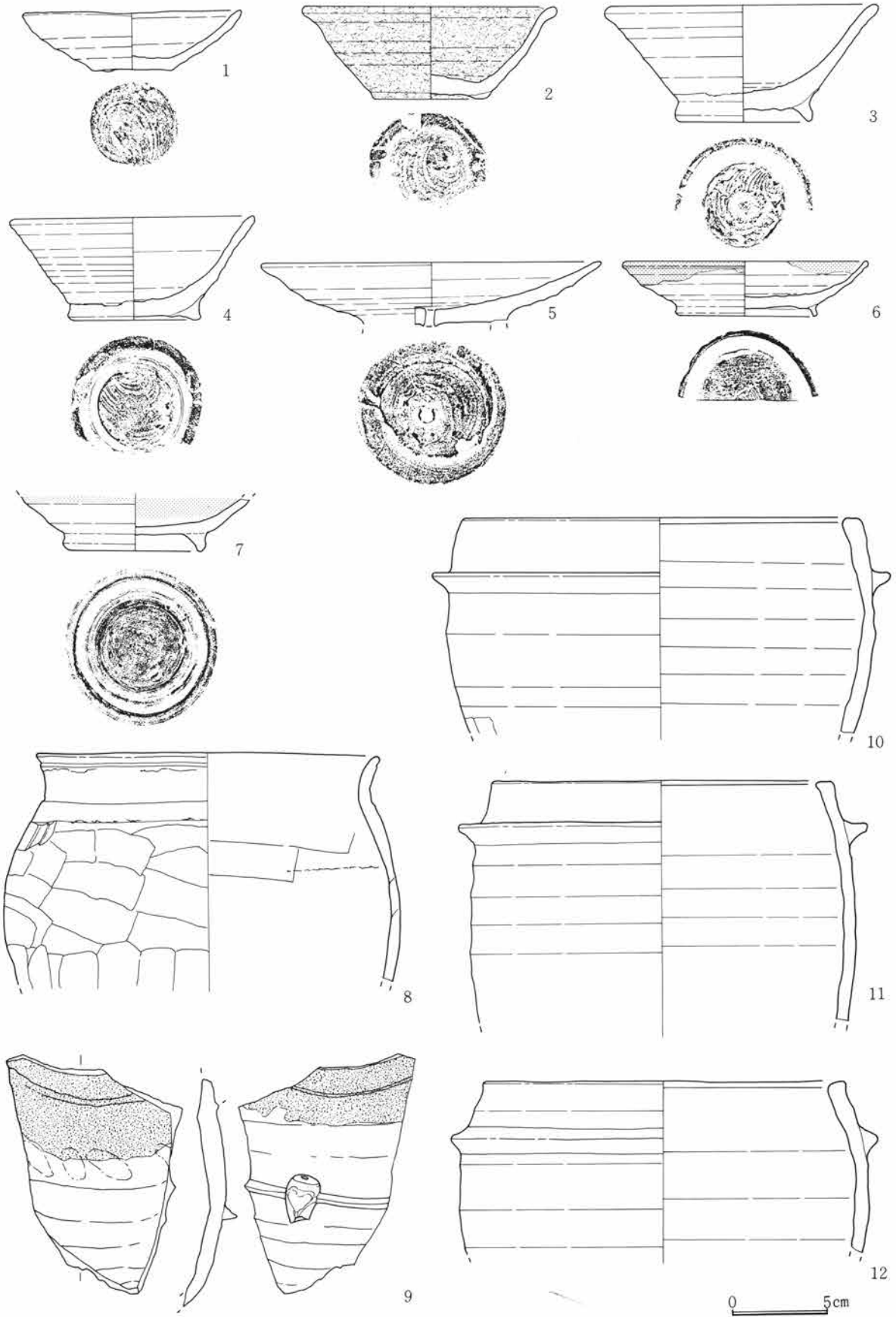
遺構名称	F区第5号住居跡	位置	46～49-F-47～49グリッド内	分類	C-12	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形	規模	3.70m×5.05m	主軸方位	東-4度-南	残存深度	約40cm程
備考	壁・床面は残存状態良好、床面の硬化は認められない。壁溝は掘り方で一部に検出。柱穴無、貯蔵穴は南東コーナー部で不整形、最大径約70cm、深度約14cm、内部2カ所に円形小ピットを有する。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・先端の突出した馬蹄形。			主軸方位	東-3度-南	
規模	全長125cm 屋外長70cm 屋内長55cm 袖間幅95cm 燃烧部幅50cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は浅い皿状の掘り込みで、灰面は左右にやや広がり燃烧部に連なる。袖は左袖が自然礫、右袖は角柱状の截石、燃烧部袖石奥の両側約30cmの間が焼土化。煙道は、突出部にとりつくものか？						

第3章 検出された遺構・遺物



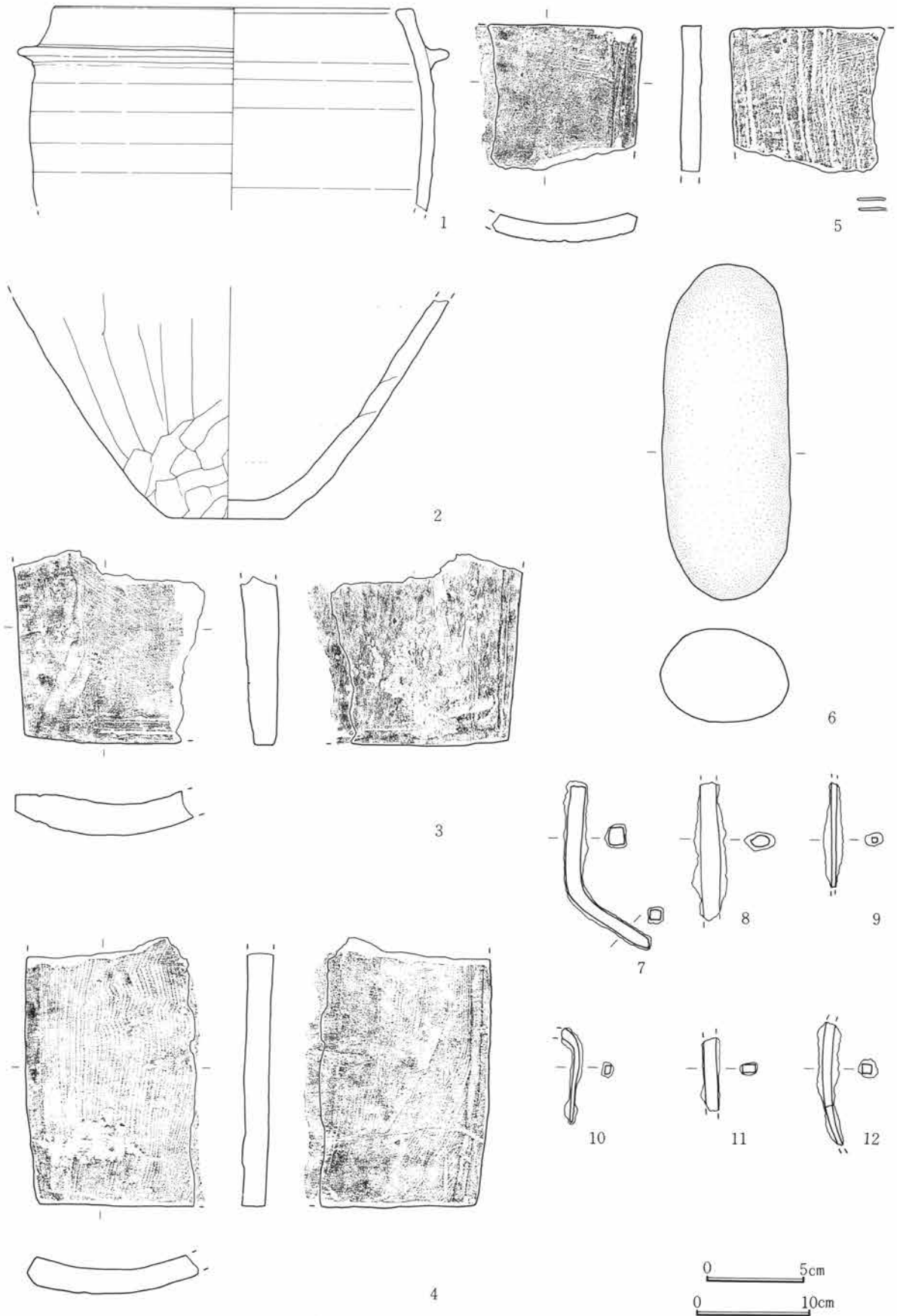
第15図 F区第5号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第16図 F区第5号住居跡出土遺物実測図

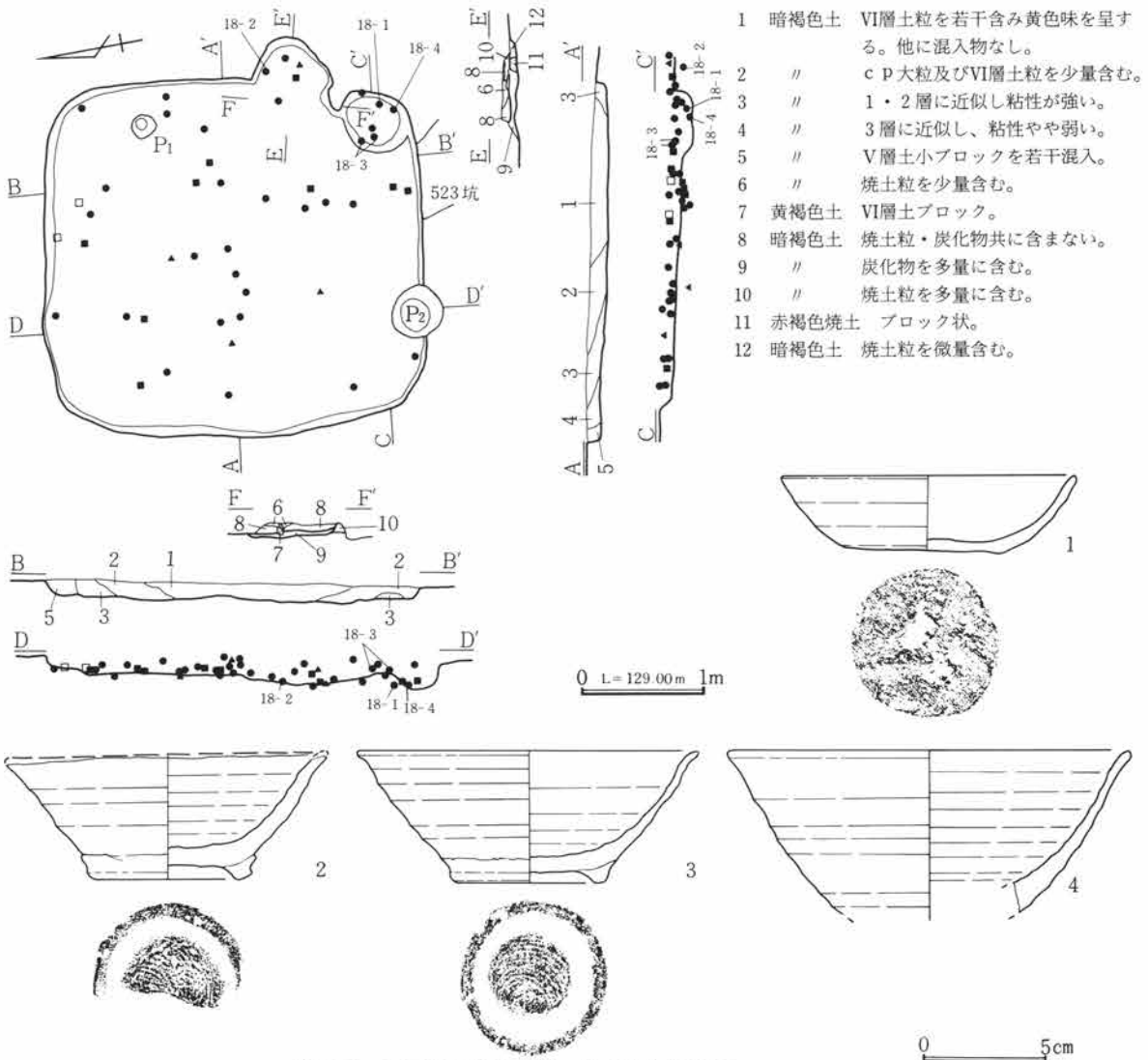
第3章 検出された遺構・遺物



第17図 F区第5号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	F区第6号住居跡	位置	36～38-F-42・43グリッド内	分類	A-9	時期	VII?
平面形態	隅丸方形	規模	2.9m×3.1m	主軸方位	東-12度-南	残存深度	約12cm程
備考	壁は全周を検出したが残存状態は不良。床面はVI層中で、硬化面は認められない。壁溝、柱穴は無。貯蔵穴は、南東コーナー部に円形、規模は径約50cm、深度約7cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-12度-南	
規模	全長 50cm 屋外長 40cm 屋内長 10cm 袖間幅 80cm 燃烧部幅 75cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は床面との段差無、袖は右袖のみ明確で掘り残し状を呈する。燃烧部は屋外部が主体で、焼土ブロックを検出。						



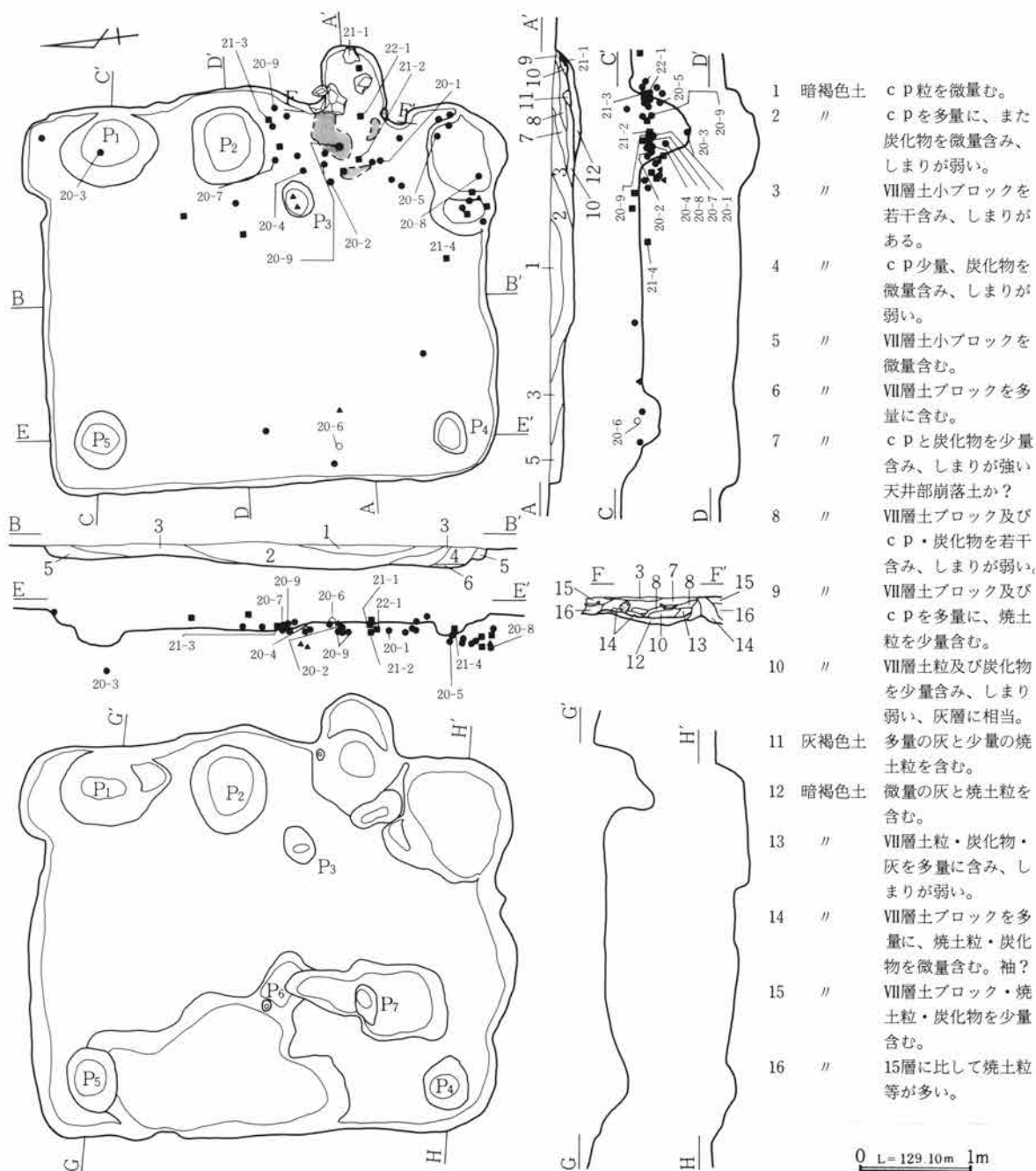
第18図 F区第6号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡は、床面にわずかな段差が認められ、土層面にも一部不自然さがあったため、当初2軒の重複ではないかとして調査を進めた。しかし遺物の垂直分布の上には、重複を裏付けるような事実は認められず、カマドも1基しか検出されておらず、重複とは考えられない。しいて言うならば拡張例ともみることが出来るが、ここでは、単純な1軒としておく。

遺物は、貯蔵穴内に比較的大形破片が検出された他は、小片が全面から出土したが完形品は含まれない。

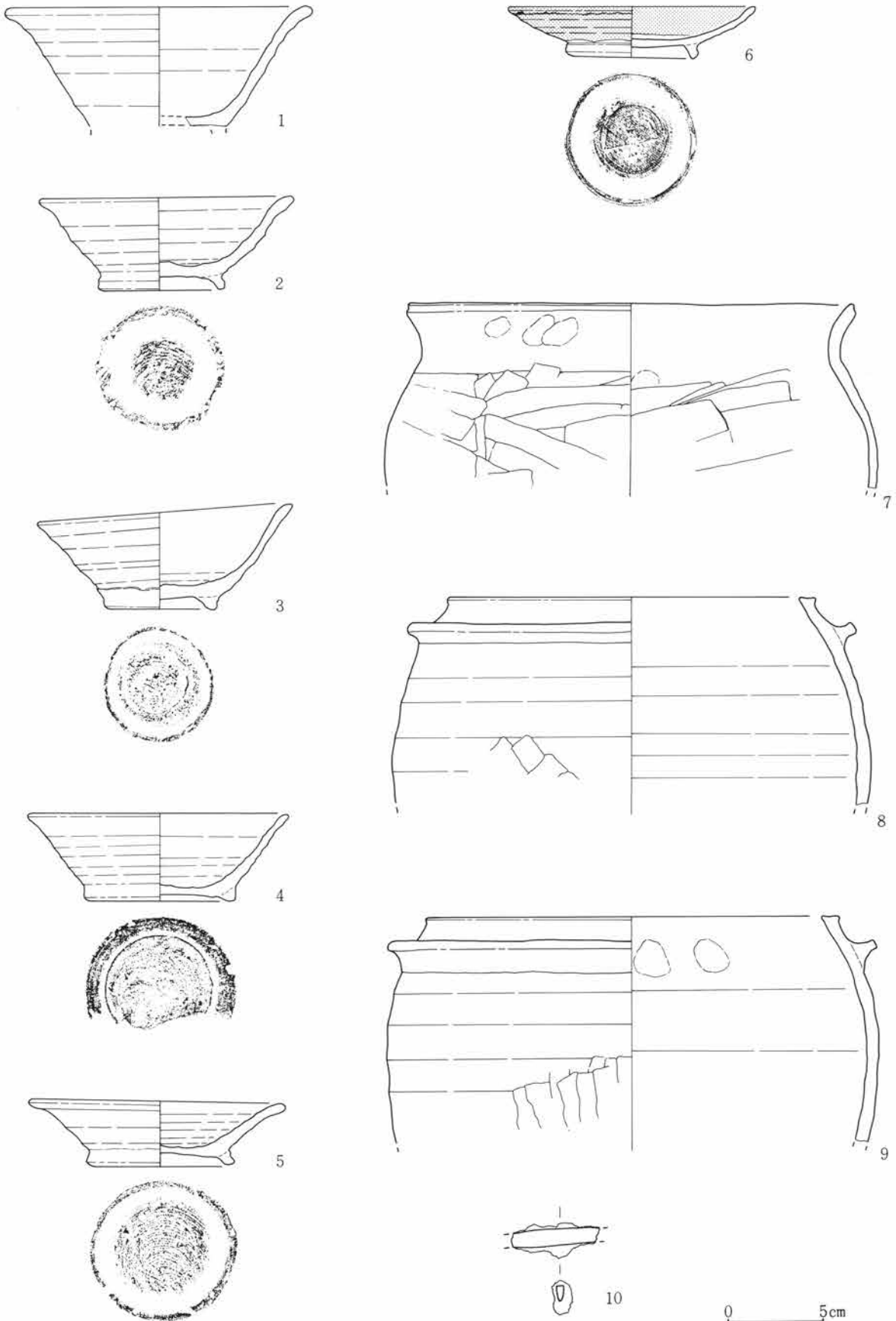
第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	F区第7号住居跡	位置	37~39-F-43~45グリッド内	分類	C-5	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形	規模	3.45m×4.00m	主軸方位	東-5度-南	残存深度	約13cm程
備考	壁は浅く北東及び南東コーナー部にわずかな張り出しを有する。床面は平坦で硬化は認められない。壁溝は無く、柱穴は各コーナー部近くの4基のピットの可能性がある。貯蔵穴は南東コーナー部。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-9度-南	
規模	全長 65cm	屋外長 50cm	屋内長 15cm	袖間幅 125cm	燃烧部幅 50cm	煙道幅	— cm
備考	焚口は掘り込みはなく、北寄りに灰面を検出した。袖は、両袖共に自然礫で構築している。燃烧部は、屋外部が主体で中央南寄りに支脚と考えられる礫を検出。						

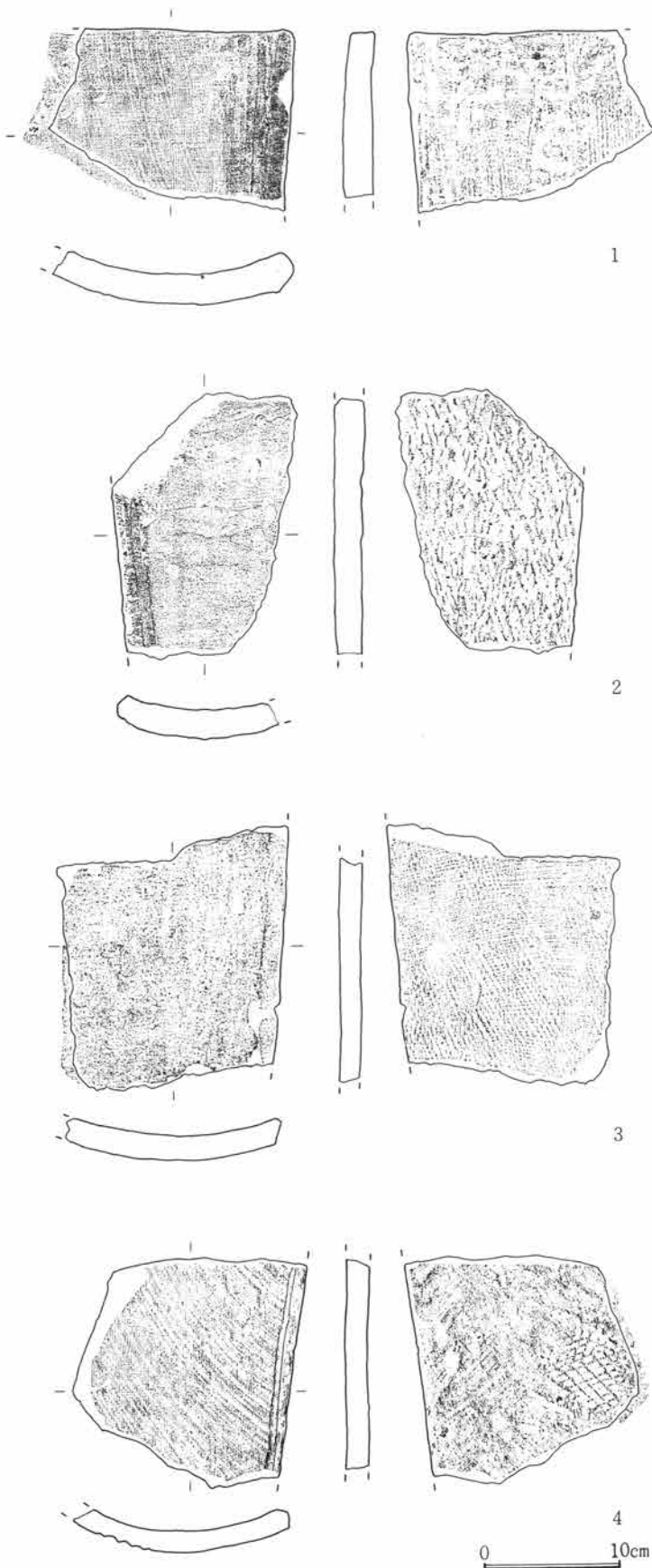


第19図 F区第7号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第20図 F区第7号住居跡出土遺物実測図



第21図 F区第7号住居跡出土遺物実測図

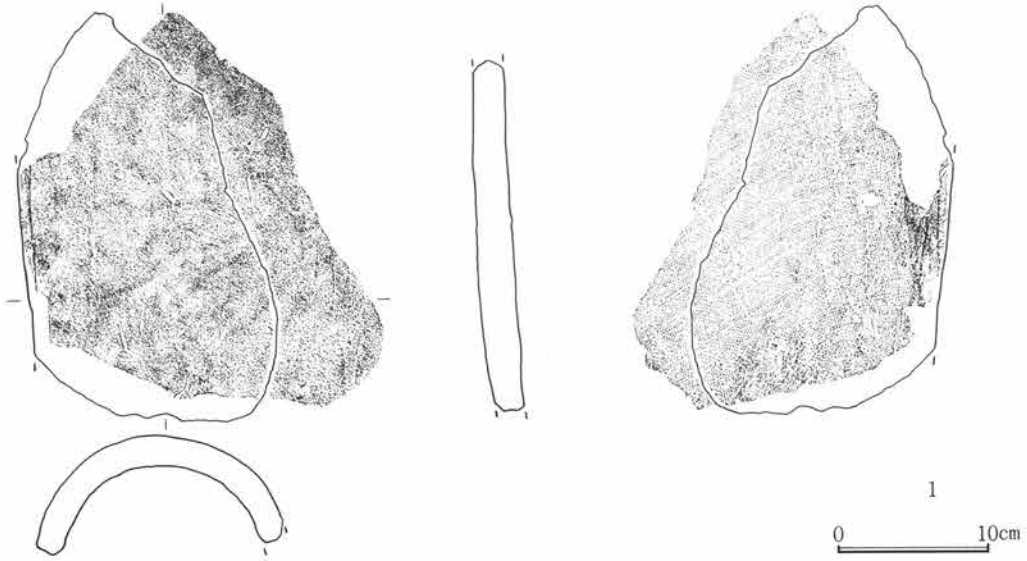
当住居跡は、F区第6号住居跡のすぐ西側に位置し、カマド先端から西壁までの距離は、約20cm程度である。残存状態は、F区第6号住居跡と確認面が同じこともあって、ごく近い状態である。

床面上で検出したピットは、貯蔵穴を除いて6基あり、うち各コーナー部近くに位置している P_1 ・ P_4 ～ P_6 を支柱穴として想定した。しかし P_4 ～ P_6 が径・深度共にほぼ同規模であるのに対して、 P_1 の規模は両方共に大きく、同機能であるかは疑わしい。土層の詳細な検討のない中で、多くのことを述べるのは危険であるが、一応位置的な関係から支柱穴または、土坑との重複としてとらえておきたい。

遺物は、カマド周辺から住居内南寄りに特に顕著な出土が認められた。また、遺物の大半は床面直上からの出土で、ほとんど間層はみられず、F区第6号住居跡のあり方と違って完形品の出土が比較的多い。特に北東コーナー張り出し部及び P_1 底面からは、口縁部を下に向けた状態で各1個ずつ出土したのが特徴的である。

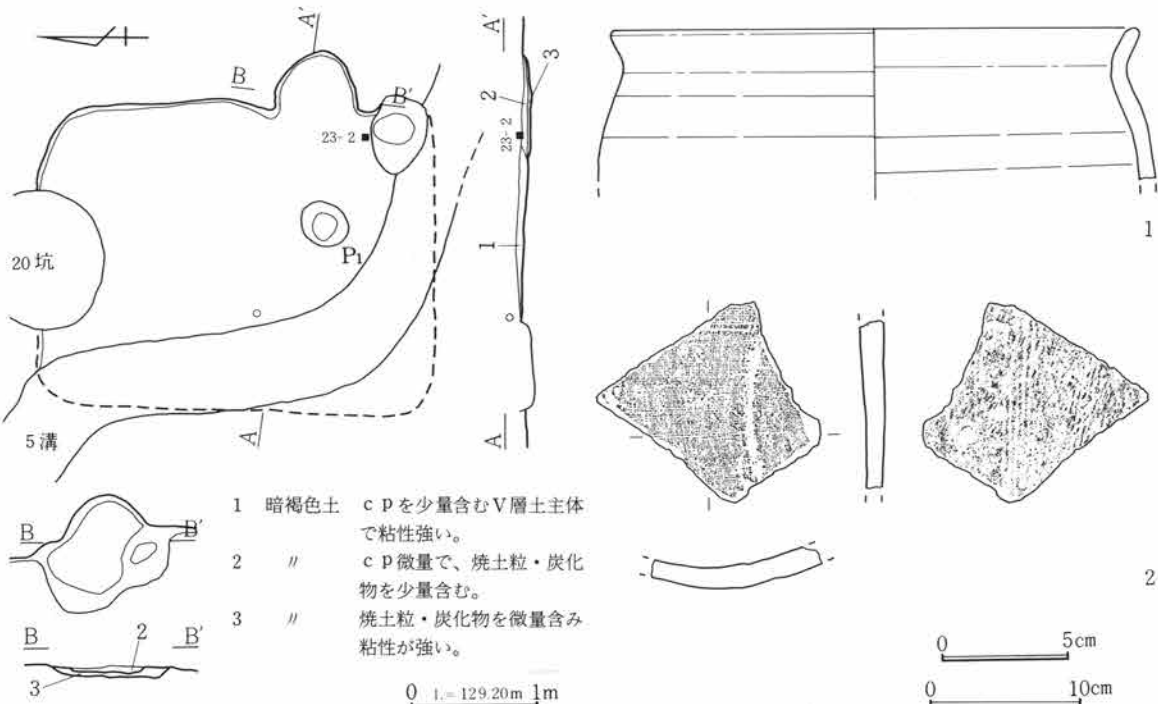
こうした遺物分布等から、当住居跡もF区第6号住居跡同様、南東コーナー部を共有する2軒の住居の重複例として調査を進めた。しかし、カマドのあり方や、土層の堆積状態には、何ら重複を示す事例は認められず、各場所から出土した遺物の比較からも、ほぼ同形態であり時間差は感じない。したがってこの場合も単純に1軒としてとらえておくに止

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第22図 F区第7号住居跡出土遺物実測図

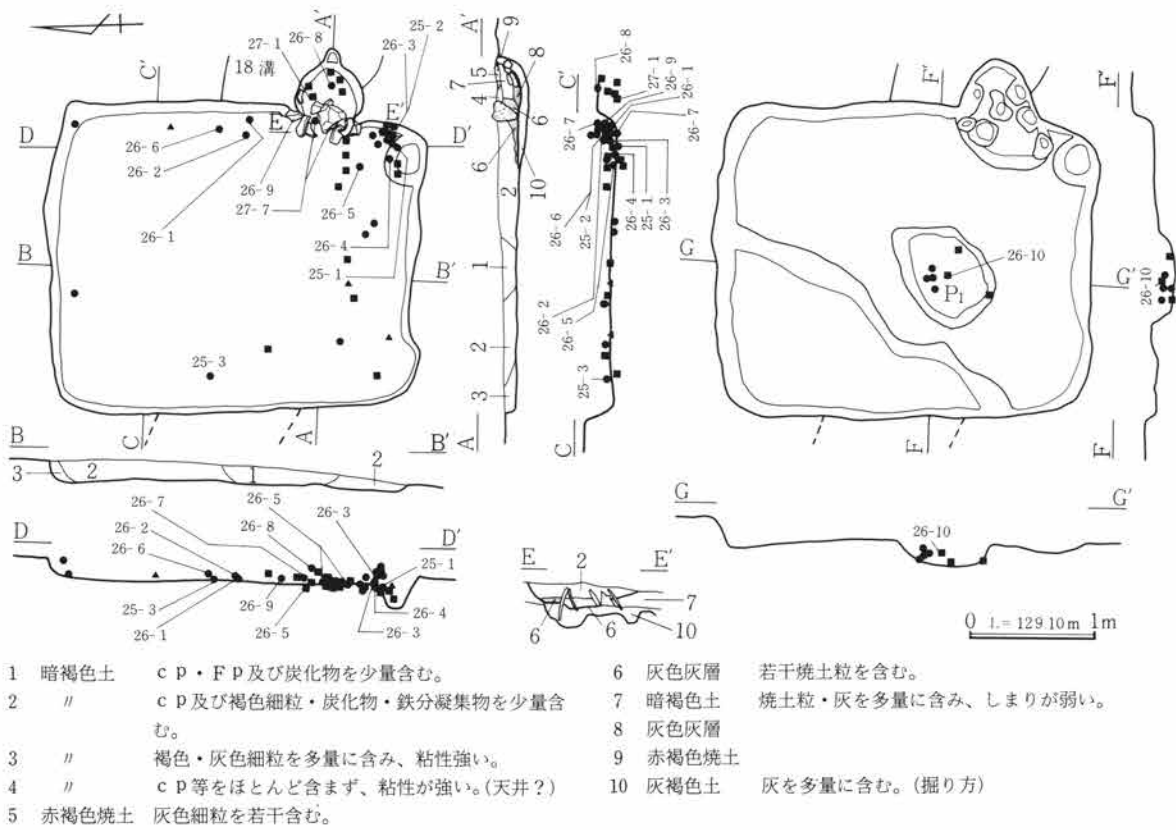
遺構名称	F区第8号住居跡	位置	37・38-F-46・47グリッド内	分類	C-10	時期	IX?
平面形態	隅丸長方形?	規模	—m×—m	主軸方位	東—2度—南	残存深度	約4cm程
備考	東壁と北壁を検出、西壁・南壁はF区5号溝との重複等になり未検出。床面は、VI層中で東側が比較的良好な残存状態を示す。貯蔵穴は南東コーナー部で円形、規模は径約45cm、深度約10cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形		主軸方位	東—2度—南		
規模	全長 55cm 屋外長 45cm 屋内長 10cm 袖間幅 110cm 燃烧部幅 57cm 煙道幅 —cm						
備考	カマドの残存状態は不良で、焚口・燃烧部共に、灰・焼土等の残存は認められていない。袖は両袖共に住居内に若干突出し、暗褐色土で構築。						



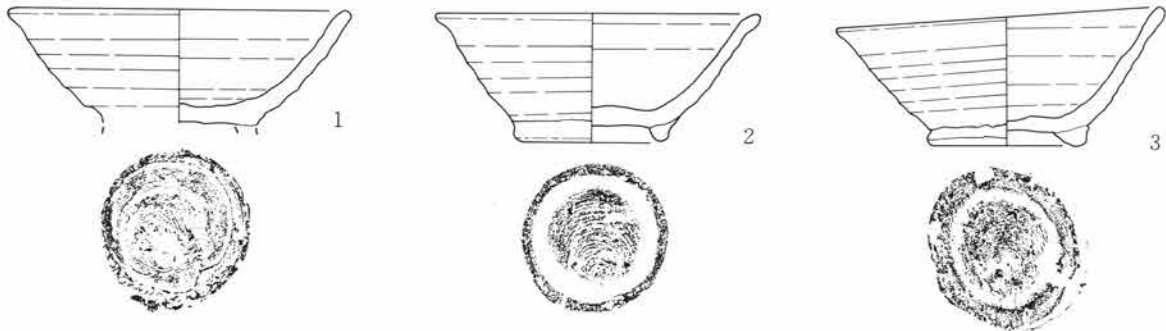
第23図 F区第8号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	F区第9号住居跡	位置	36・37-F-48・49グリッド内	分類	C-10	時期	VIII
平面形態	長方形	規模	2.45m×2.95m	主軸方位	東-2度-南	残存深度	約8cm程
備考	壁は全周検出し、南西コーナー部が若干南側に突出。床面は、VI層中で平坦で若干硬化が認められた。壁溝・柱穴は無。貯蔵穴は、南東コーナー部で円形、規模は径約32cm、深度約17cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・先端部が若干突出した馬蹄形			主軸方位	東-7度-南	
規模	全長 70cm 屋外長 50cm 屋内長 70cm 袖間幅 60cm 燃烧部幅 45cm 煙道幅 10cm						
備考	焚口と燃烧部との段差はほとんどなく、連続した灰面を検出。袖は両袖共、瓦を2~3枚立てて構築、燃烧部に落下した天井部と思われる焼土ブロックを検出。煙道は瓦組であった可能性がある。						

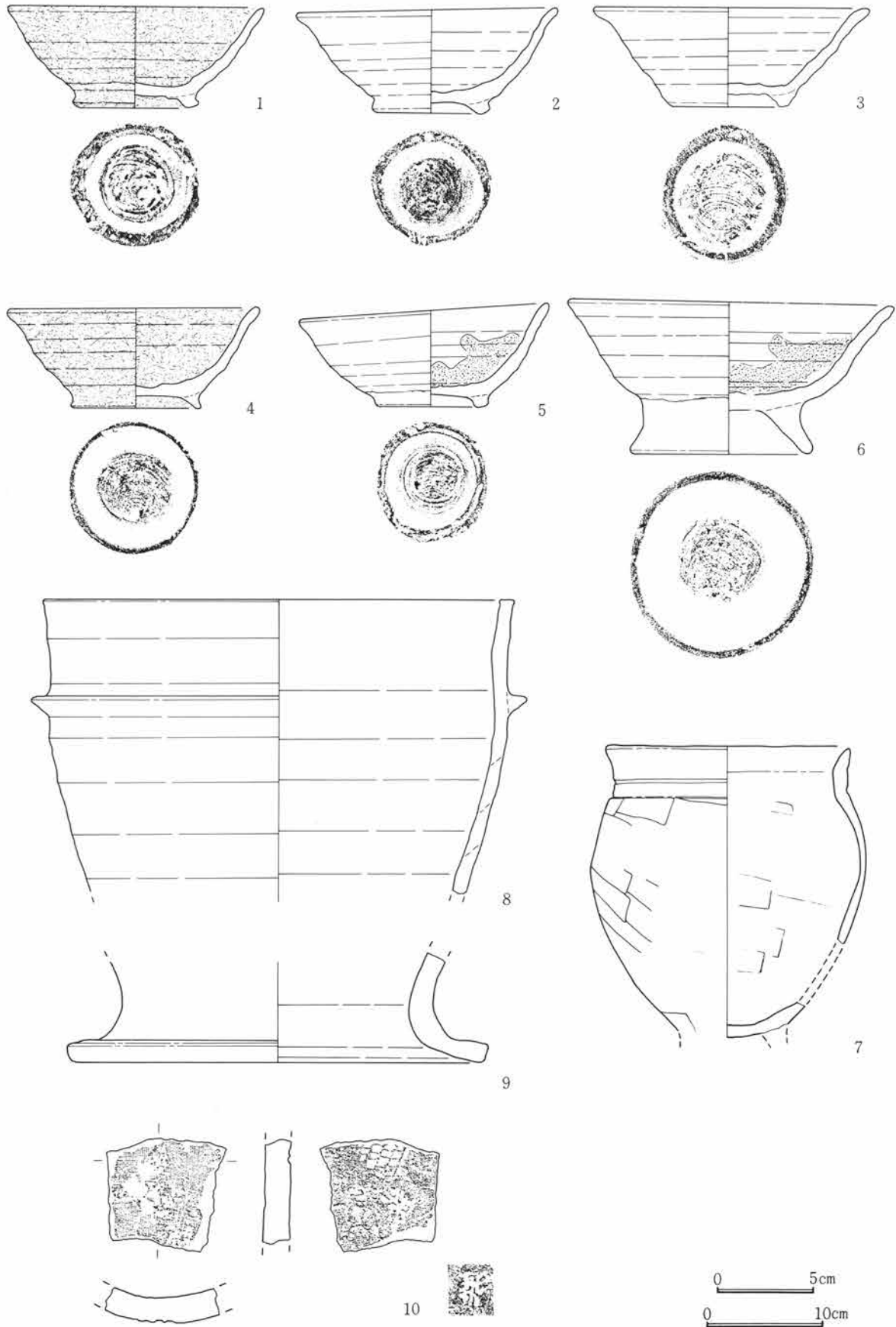


第24図 F区第9号住居跡実測図



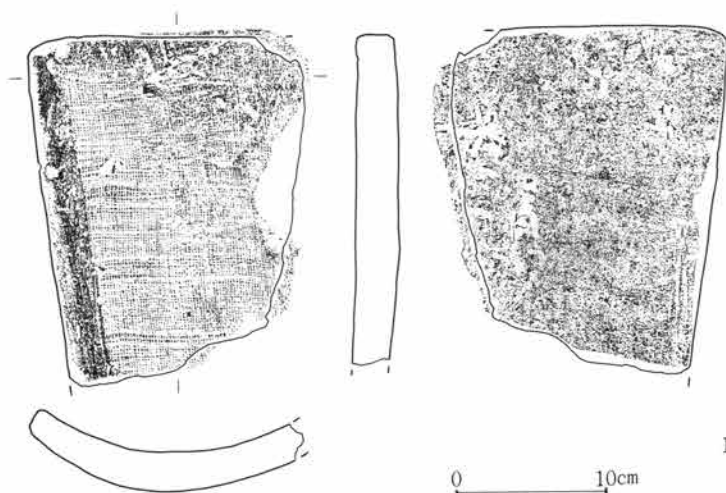
第25図 F区第9号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第26図 F区第9号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第27図 F区第9号住居跡出土遺物実測図

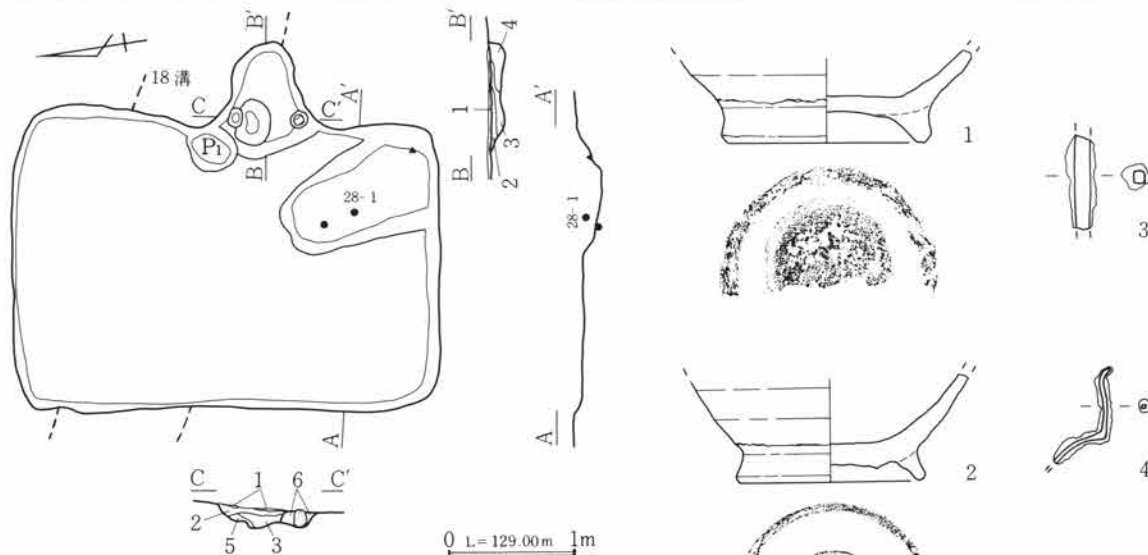
める。

遺物は、床面上では壁際でしかもわず南寄りの部分からの出土が顕著である。また、掘り方の段階で検出した、楕円形の土坑内にも比較的まとまりをもって遺物出土がみられた。



器種は、須恵器の碗を主体として、土師器の台付甕・羽釜が出土した他、カマドの袖構築材として、多数の瓦が出土している。

遺構名称	F区第10号住居跡	位置	37~39-F-52・53グリッド内	分類	C-2	時期	-
平面形態	隅丸長方形	規模	2.40m×3.40m	主軸方位	東-12度-南	残存深度	約10cm程
備考	全周検出したが残存状態は不良。床面はVI層中でほぼ平坦。壁溝・柱穴は無。南東コーナー部の掘り込みを貯蔵穴としてとらえたが、カマド正面近くまで広がっており不自然さも残る。						
カマド	位置・形状	東壁わずか南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-8度-南	
規模	全長 90cm	屋外長 65cm	屋内長 25cm	袖間幅 - cm	燃烧部幅 70cm	煙道幅 - cm	
備考	焚口は若干掘り込まれた形跡があり、袖は、右袖のみ残存し礫を使用して構築している。掘り方の段階では、両袖部に礫を据えるためのピットが検出された。						



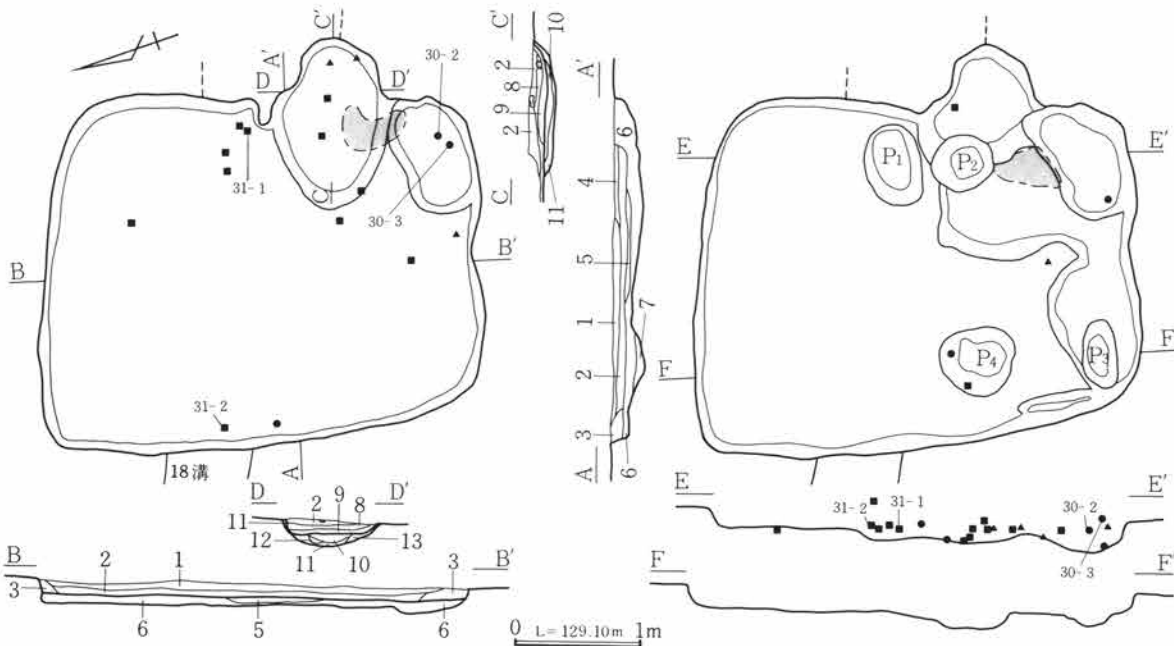
- 1 黒褐色土 炭化物・VI層土粒を少量含む。
- 2 // c Dを少量及びVI層土粒を微量含む。
- 3 // c Dを含まず、灰及び炭化物主体。
- 4 // 2層に近似。
- 5 // //
- 6 // 炭化物を若干含む。

0 5cm

第28図 F区第10号住居跡・出土遺物実測図

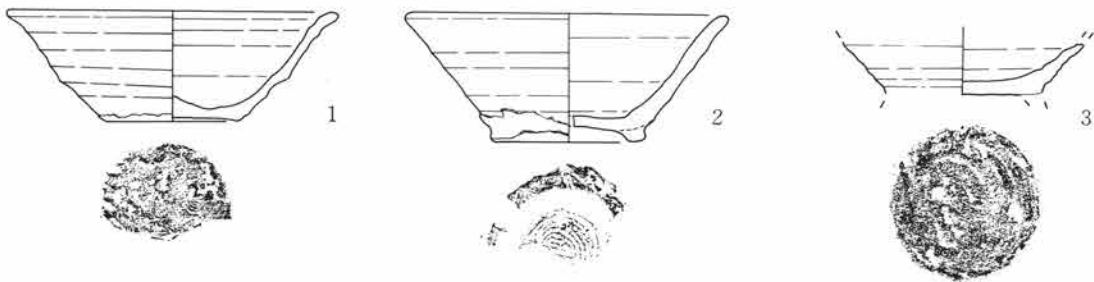
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	F区第11号住居跡	位置	38～40-F-53～55グリッド内	分類	C-10	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	2.80m×3.40m	主軸方位	東-17度-南	残存深度	約10cm程
備考	壁は全周検出され、床面はVI層中で平坦であるが、硬化は認められない。壁溝・柱穴は無。貯蔵穴は、南東コーナー部で楕円形、規模は長軸約65cm、深度約19cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-15度-南	
規模	全長135cm 屋外長50cm 屋内長85cm 袖間幅105cm 燃焼部幅80cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は半円形の皿状の掘り込みで、南寄りに灰面を検出。袖は左袖のみ残存し、粘土を含まない暗褐色土で構築。燃焼部底面には、焼土部分及び焼土粒・灰を多量に含む層を検出。						



- | | | | |
|--------|--------------------------|---------|-----------------------|
| 1 暗褐色土 | c P細粒を多量に含み、しまりが弱い。 | 8 暗褐色土 | c P及びVI層土粒を少量含む。 |
| 2 // | c P細粒を若干含む。 | 9 // | c Pは微量で、炭化物粒を少量含む。 |
| 3 // | c P細粒を微量含み、比較的しまりが強い。 | 10 // | 灰と焼土粒を多量に含む。 |
| 4 // | c Pを少量及びVI層土粒を微量含む。 | 11 // | 焼土粒を微量含み、粘性強くしまりがある。 |
| 5 // | c P少量と、炭化物を微量含む。 | 12 赤褐色土 | 焼土ブロック主体。 |
| 6 // | c P・VI層土共に微量含み、粘性比較的強い。 | 13 暗褐色土 | VI層土主体で、わずかにc P細粒を含む。 |
| 7 // | c P及びVI層土粒を混じり、炭化物を微量含む。 | | |

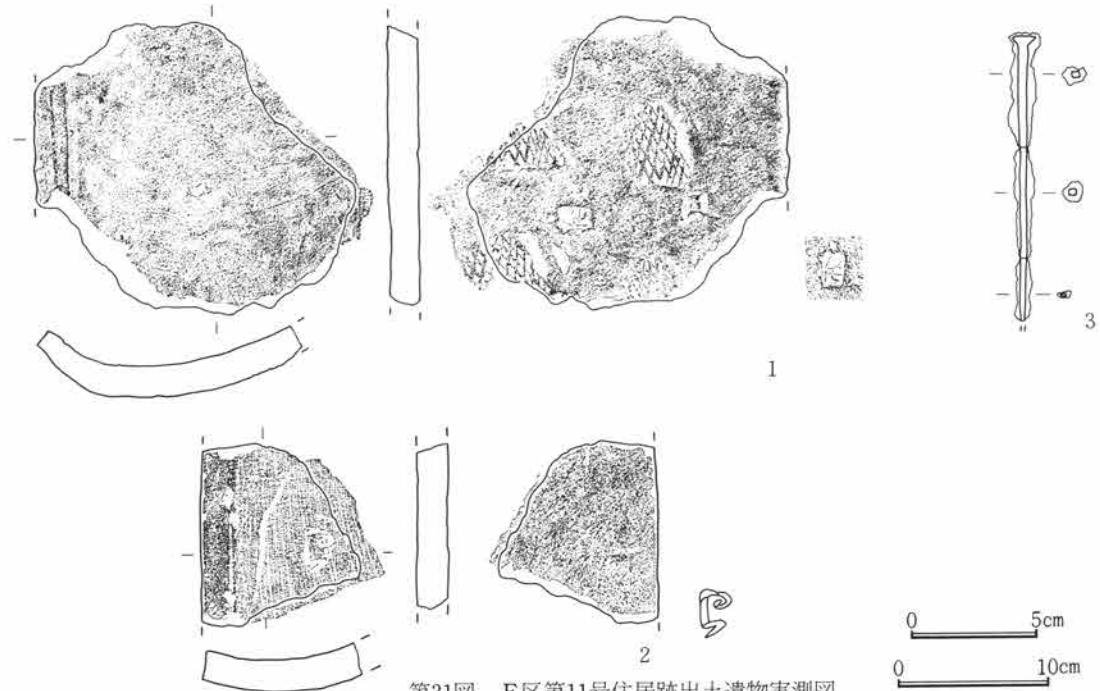
第29図 F区第11号住居跡実測図



第30図 F区第11号住居跡出土遺物実測図

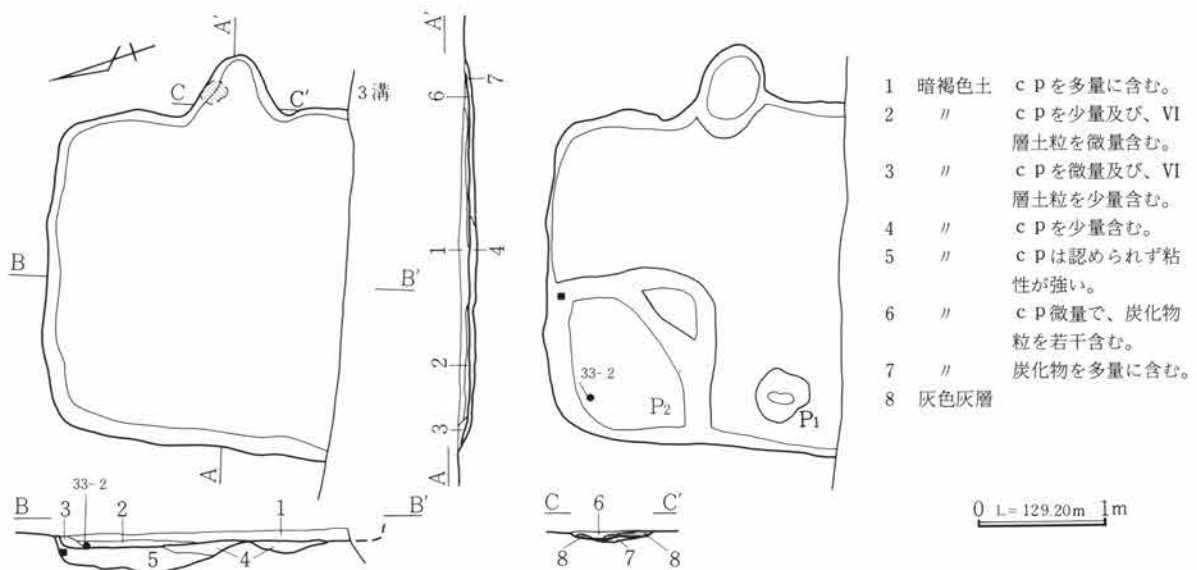
0 10cm

第3章 検出された遺構・遺物



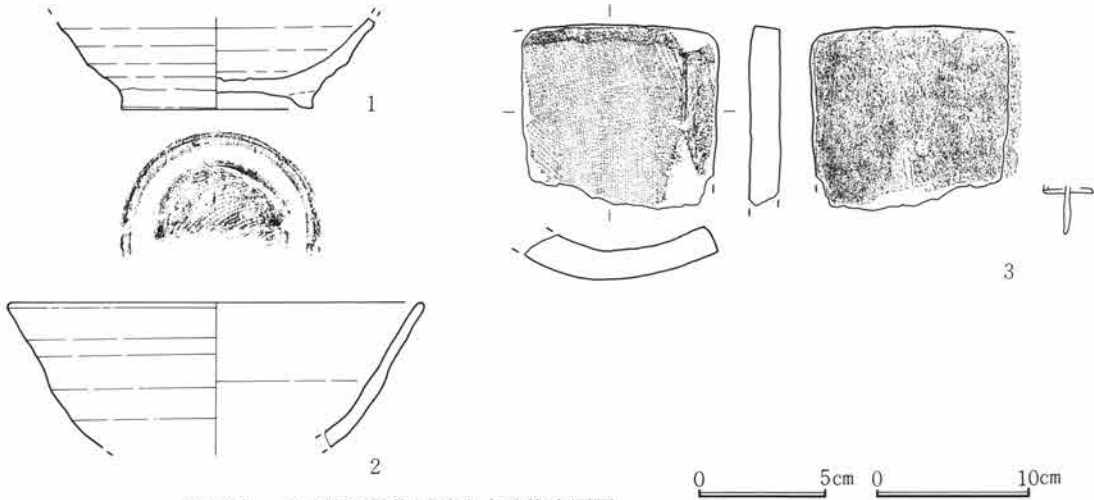
第31図 F区第11号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第12号住居跡	位置	38・39-F-56・57グリッド内	分類	A-3	時期	—					
平面形態	隅丸方形?	規模	2.50m×—m	主軸方位	東—18度—南	残存深度	約11cm程					
備考	壁は、南壁と東西両壁の一部がF区第3号溝と重複のため未検出。貯蔵穴も同溝重複部にあったものと考えられる。壁溝・柱穴共に無。掘り方段階で北西コーナー部に方形の掘り込みを検出。											
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央部・三角形		主軸方位	東—19度—南							
規模	全長	55cm	屋外長	55cm	屋内長	—cm	袖間幅	80cm	燃烧部幅	70cm	煙道幅	—cm
備考	焚口は不明確で灰面は認められない。袖構築材等残存せず暗褐色土で構築していたものか? 燃烧部は、地側面の一部に焼土が検出された。											



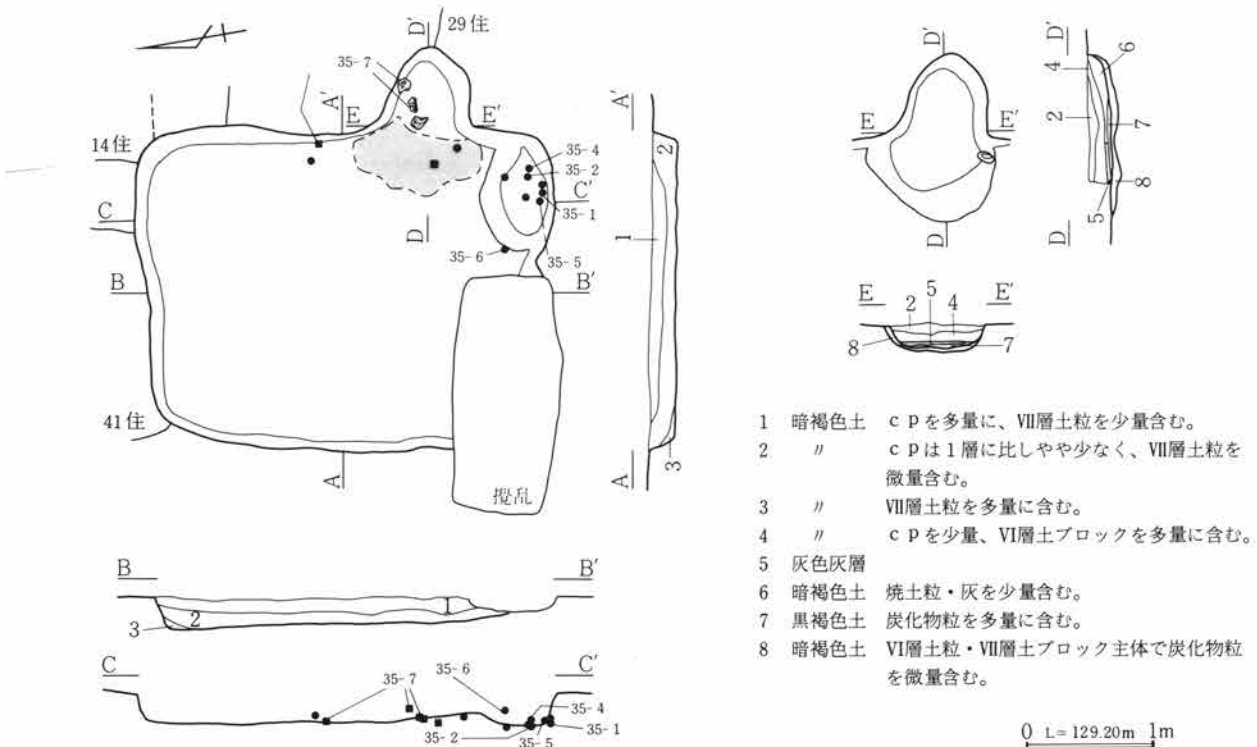
第32図 F区第12号住居跡実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



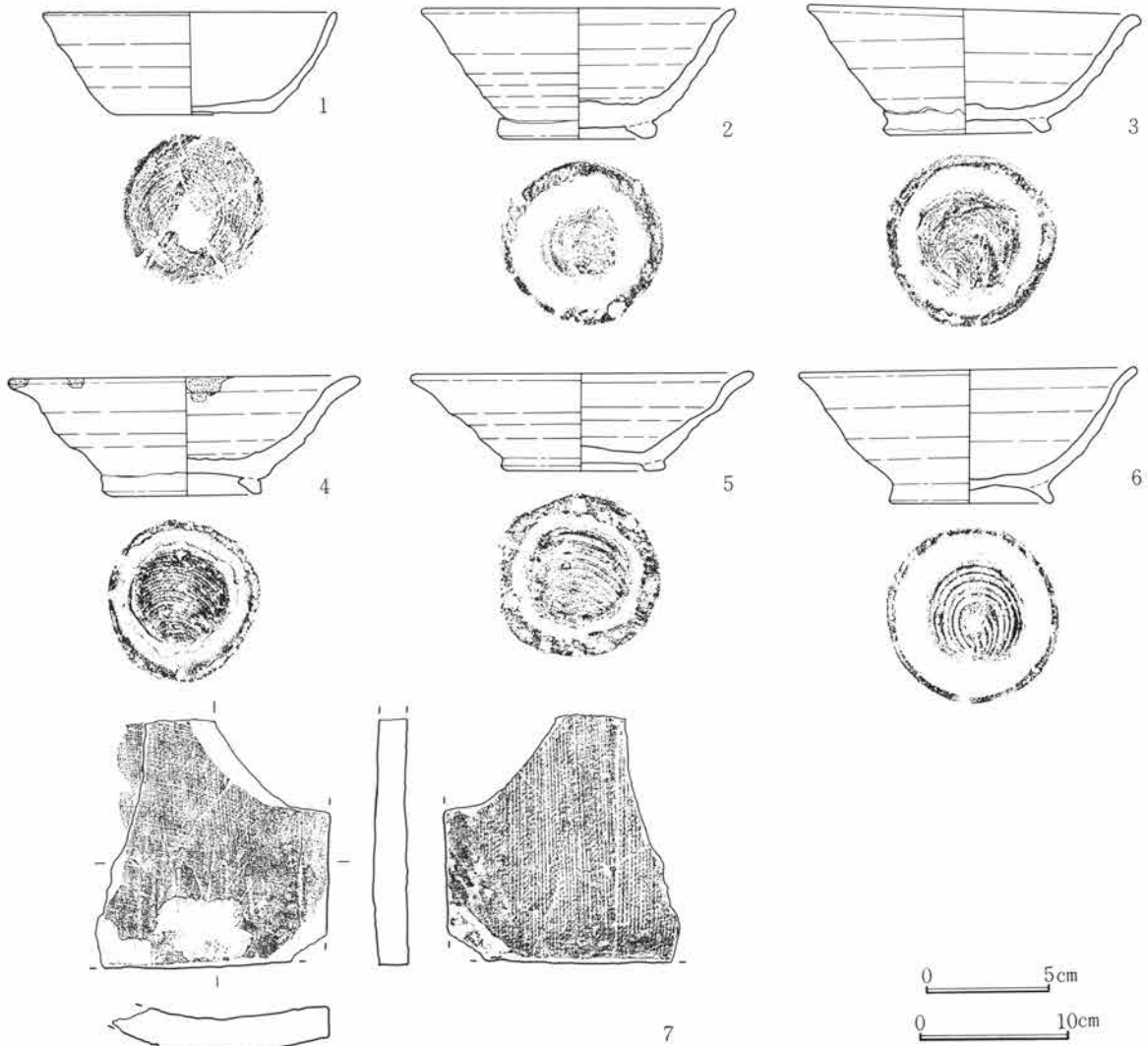
第33図 F区第12号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第13号住居跡	位置	40～42-F-47・48グリッド内	分類	C-10	時期	VIII?					
平面形態	隅丸長方形	規模	2.50m×3.20m	主軸方位	東-8度-南	残存深度	約25cm程					
備考	壁は南西コーナー部を除き検出し、南東コーナー部が若干突出している。床面はVI層中で平坦。壁溝・柱穴は無。貯蔵穴は、南東コーナー部で東西に長い楕円形、規模は長軸約60cm、深度約10cm。											
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-8度-南						
規模	全長	65cm	屋外長	65cm	屋内長	—cm	袖間幅	80cm	燃烧部幅	60cm	煙道幅	—cm
備考	焚口部全面に灰面を検出。袖構築材等は検出されず、掘り方でも痕跡は認められていない。燃烧部は、屋内側に若干の傾斜を有しており、燃烧部に焼土・灰等は残存していない。											



第34図 F区第13号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



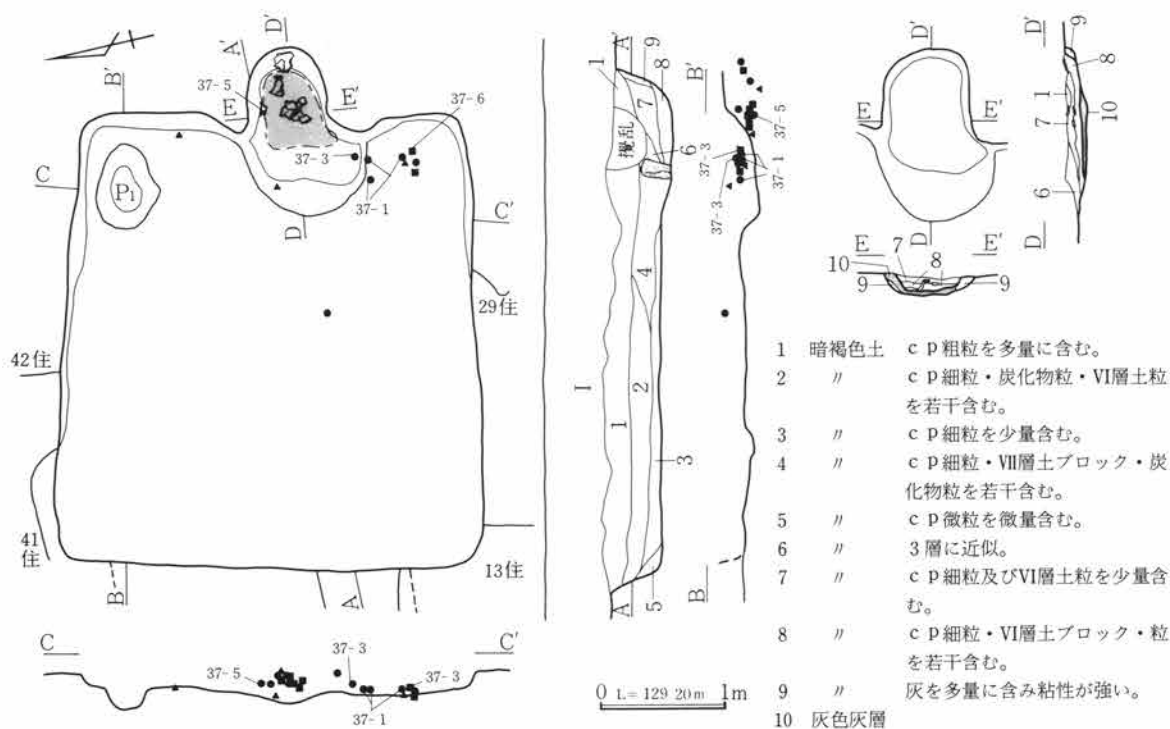
第35図 F区第13号住居跡出土遺物実測図

当住居跡の覆土の堆積状態は、浅いながらも比較的良好な状態で観察された。その結果基本的には、3層に別けることができ、自然埋没と思われるようなレンズ状堆積の状態を呈している。また、床面は、カマド焼面との間に若干の差が認められ、屋内に向って傾斜している。これは床面の下け過ぎとも考えられたが、焼面から床面に移行する焚口にあたる部分に、傾斜に沿った灰面が検出されたことによって解消した。

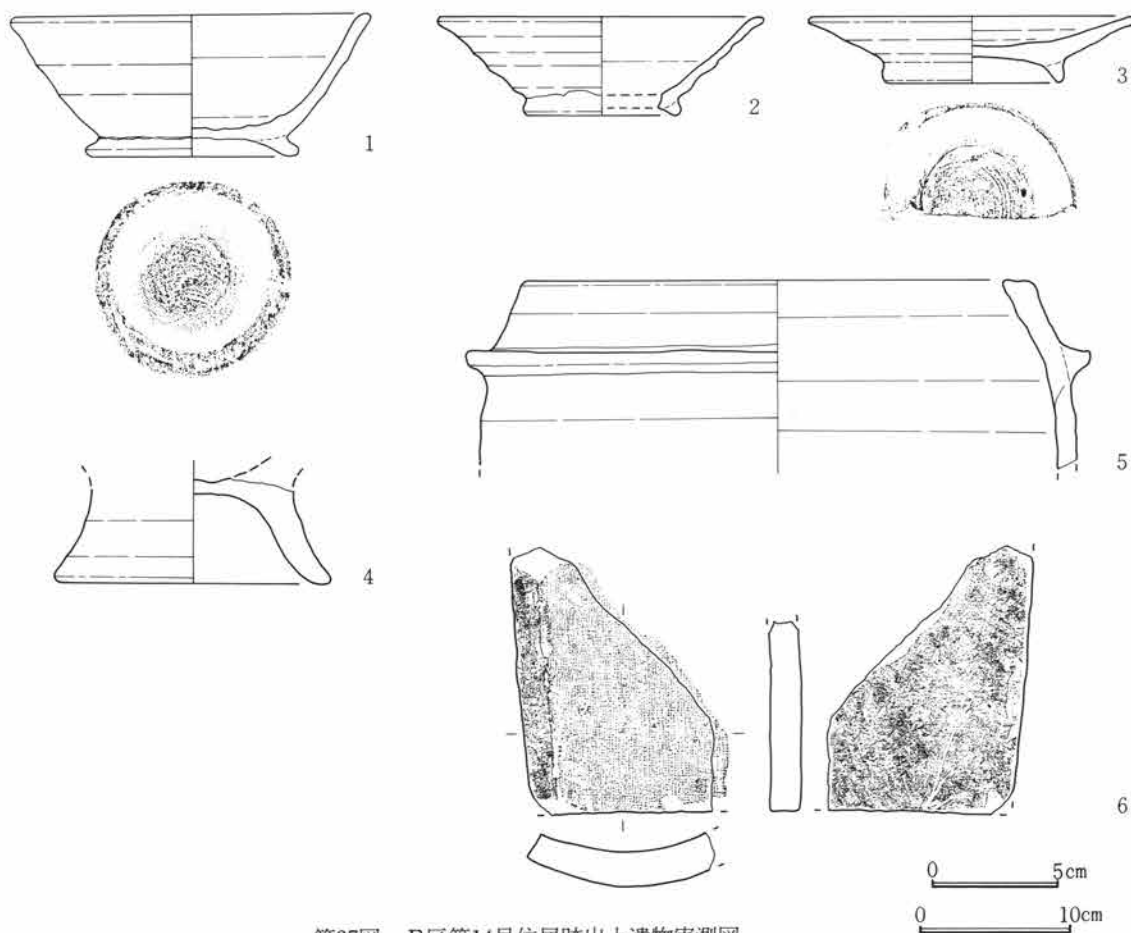
遺物は、完形及び完形に近いもの全てが、貯蔵穴内から出土したことが特徴である。

遺構名称	F区第14号住居跡	位置	41～43-F-45～47グリッド内	分類	B-1	時期	IX
平面形態	隅丸方形	規模	3.50m×3.20m	主軸方位	東-13度-南	残存深度	約20cm程
備考	西側でF区第13・29・41・42号住居跡と複雑な重複をしており、検出したのは東側約1/2である。壁は農道面の観察から最大で約45cm程度で、I層による攪乱のため掘り込み面の特定はできない。						
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央・馬蹄形			主軸方位	東-2度-南	
規模	全長135cm 屋外長65cm 屋内長70cm 袖間幅135cm 焼面幅65cm 煙道幅1cm						
備考	焚口は、床面との差約3cm程の皿状の掘り込みであり、袖はVI層土の掘り残しと考えられる。焼面は、屋外部が主体で約5cm厚の灰層を検出した。この灰層は焚口部まで及んでいない。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



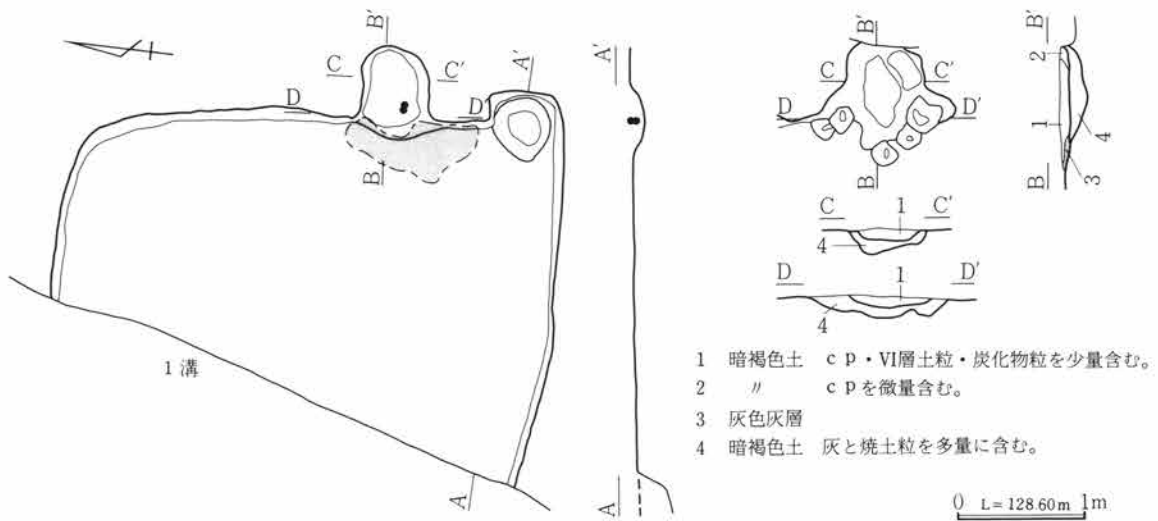
第36図 F区第14号住居跡実測図



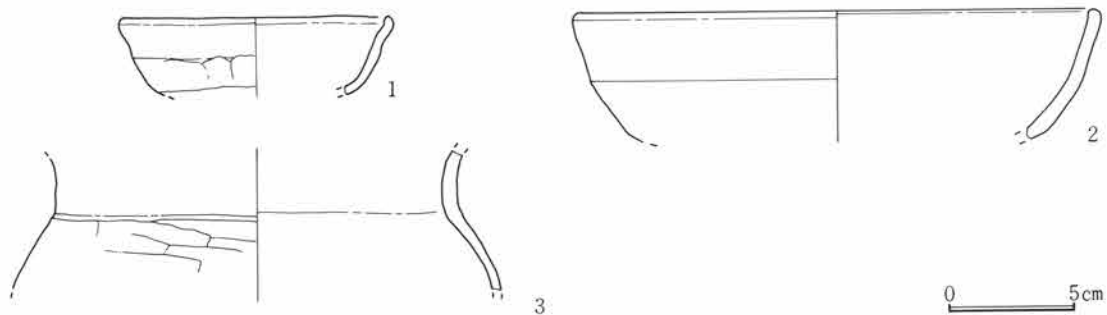
第37図 F区第14号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	F区第15号住居跡	位置	19・20-F-40・41グリッド内	分類	C-11	時期	VI
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×4.00m	主軸方位	東—4度—北	残存深度	約3cm程
備考	西側約½がF区第1号構との重複で削平、南東コーナー部が方形状に若干突出し、この部分に円形の貯蔵穴が位置している。規模は径約50cm、深度約10cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東—4度—北	
規模	全長 75cm 屋外長 55cm 屋内長 20cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 60cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口部の特に南側に広く灰面が残存、袖の構築材等は全く検出されていないが、掘り方の段階で焚口部の掘り込みに沿って小ピットが検出された。燃烧部は中央部がやや掘り窪められている。						



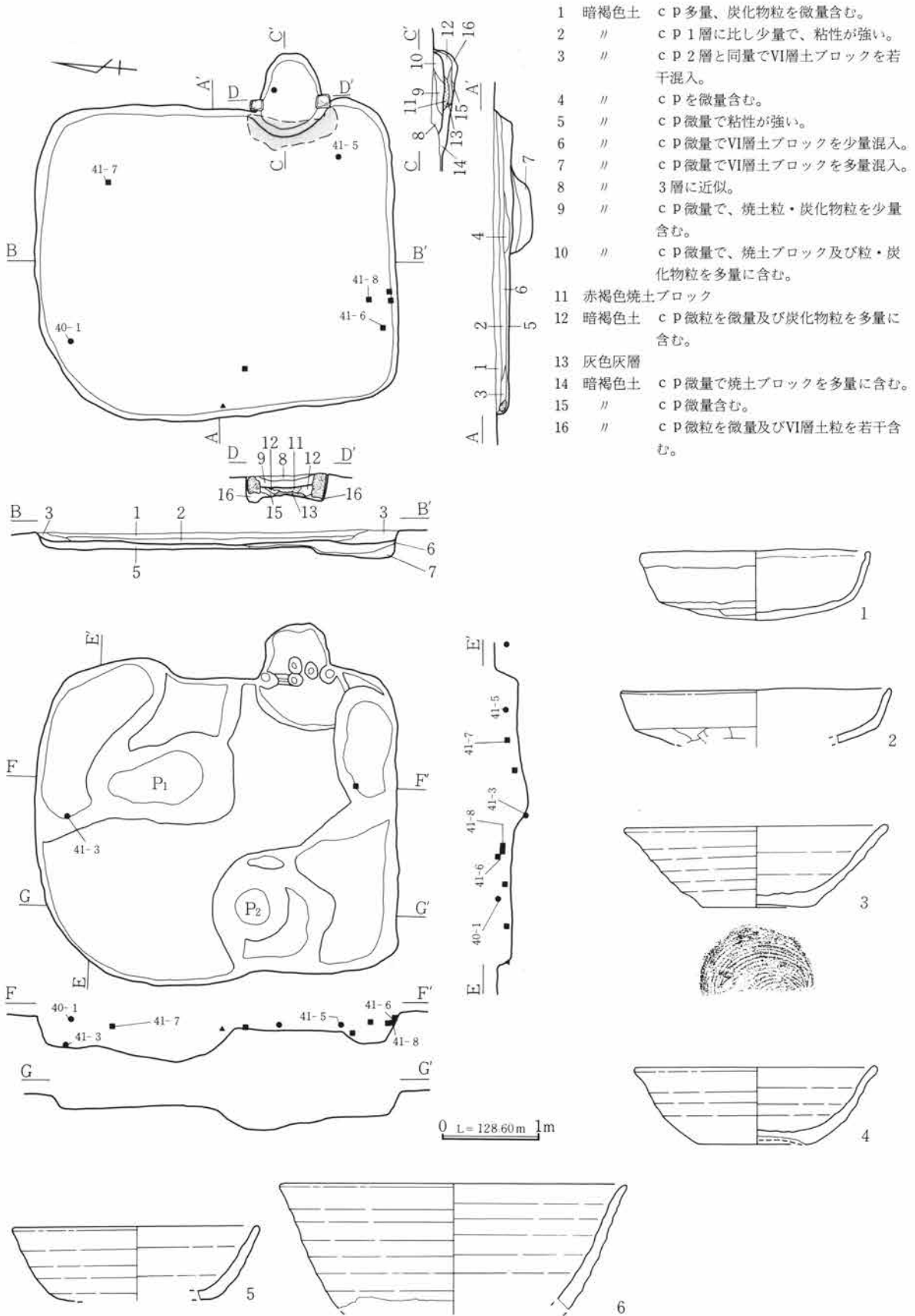
第38図 F区第15号住居跡実測図



第39図 F区第15号住居跡出土遺物実測図

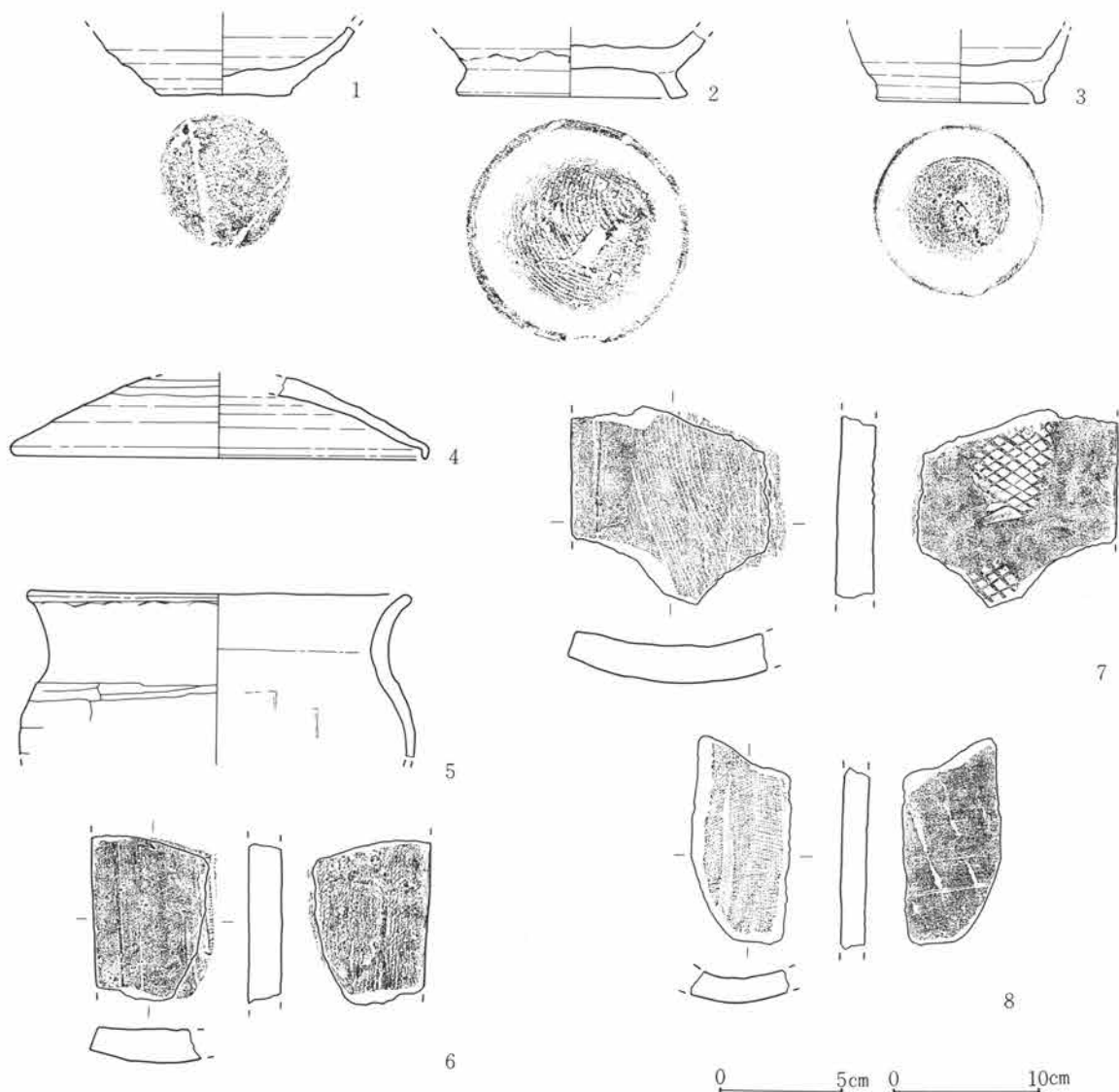
遺構名称	F区第16号住居跡	位置	16~18-F-40・41グリッド内	分類	C-10	時期	VI
平面形態	隅丸方形	規模	3.10m×3.70m	主軸方位	東—6度—北	残存深度	約18cm程
備考	他の遺構との重複は全く認められず、検出面からの壁高はわずかであるが、状態は比較的良好である。床面はVI層中で平坦である。壁溝・柱穴は無、貯蔵穴は掘り方段階で検出したものに可能性有り。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東—7度—北	
規模	全長 85cm 屋外長 55cm 屋内長 30cm 袖間幅 85cm 燃烧部幅 55cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口はごく浅い皿状の掘り込みで、灰面を検出。袖は両袖共に、角柱状の截石を立てて構築。燃烧部は屋外部に主体があり、焚口部から連なる約5cm厚の灰層を検出した。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第40図 F区第16号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



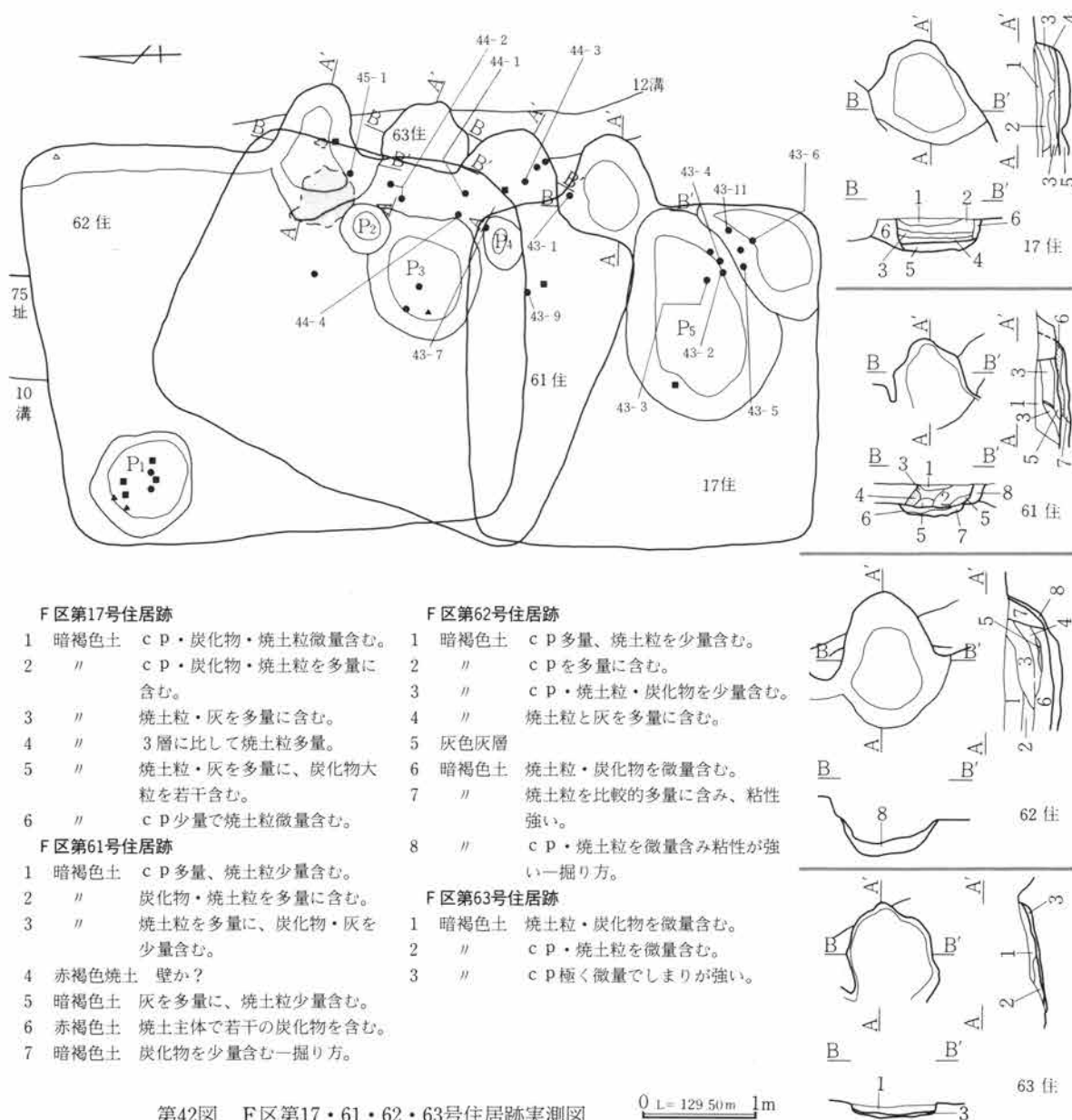
第41図 F区第16号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第17号住居跡	位置	41～43-F-67・68グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形	規模	—m×—m	主軸方位	東—3度—南	残存深度	約—cm程
備考	F区第61・62・63号住居跡及びF区第10・12号溝と重複し、カマド部分及び、南側に掘り方と考えられる2基の土坑状掘り込みを検出した。遺物はほとんど土坑状掘り込み内から出土した。						
カマド	位置・形状	東壁やや北寄り・馬蹄形			主軸方位	— — 度 — —	
規模	全長 — cm	屋外長	60cm	屋内長	— cm	袖間幅	— cm
		燃烧部幅	45cm	煙道幅	— cm		
備考	土層面としての観察はできたが、本体の残存は不良であり、両袖は検出されていない。また、燃烧部には面としては確認されていないが、断面で、焼土・灰を多量に含む層が認められている。						
遺構名称	F区第61号住居跡	位置	42～44-F-67・68グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約—cm程
備考	F区第17・62・63号住居跡, F区第10・12号溝との重複によって、カマドの残存部を検出し、全体形を想定した。						

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	F区第62号住居跡	位置	42～45-F-66～68グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形?	規模	—m×—m	主軸方位	東—4度—南	残存深度	約25cm程
備考	F区第17・61・63号住、F区第10・12号溝との重複、特にF区第10号溝により上面の大半を削平され、カマド及び、掘り方と考えられる土坑、径約40cmの円形ピットを2基検出したに過ぎない。						
カマド	位置・形状	東壁中央わずかに南寄り・馬蹄形			主軸方位	東—8度—南	
規模	全長120cm 屋外長60cm 屋内長60cm 袖間幅100cm 燃焼部幅50cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は、半円形状の浅い掘り込みで、南寄りに灰面を検出した。袖は両方とも痕跡すらなく、燃焼部にはわずかに灰が残存していた。						

遺構名称	F区第63号住居跡	位置	43-F-67グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	不明	規模	—m×—m	主軸方位	—度—	残存深度	約—cm程



F区第17号住居跡

- 1 暗褐色土 c P・炭化物・焼土粒微量含む。
- 2 // c P・炭化物・焼土粒を多量に含む。
- 3 // 焼土粒・灰を多量に含む。
- 4 // 3層に比して焼土粒多量。
- 5 // 焼土粒・灰を多量に、炭化物大粒を若干含む。
- 6 // c P少量で焼土粒微量含む。

F区第61号住居跡

- 1 暗褐色土 c P多量、焼土粒少量含む。
- 2 // 炭化物・焼土粒を多量に含む。
- 3 // 焼土粒を多量に、炭化物・灰を少量含む。
- 4 赤褐色焼土 壁か?
- 5 暗褐色土 灰を多量に、焼土粒少量含む。
- 6 赤褐色土 焼土主体で若干の炭化物を含む。
- 7 暗褐色土 炭化物を少量含む一掘り方。

F区第62号住居跡

- 1 暗褐色土 c P多量、焼土粒を少量含む。
- 2 // c Pを多量に含む。
- 3 // c P・焼土粒・炭化物を少量含む。
- 4 // 焼土粒と灰を多量に含む。
- 5 灰色灰層
- 6 暗褐色土 焼土粒・炭化物を微量含む。
- 7 // 焼土粒を比較的多量に含み、粘性強い。
- 8 // c P・焼土粒を微量含み粘性が強い一掘り方。

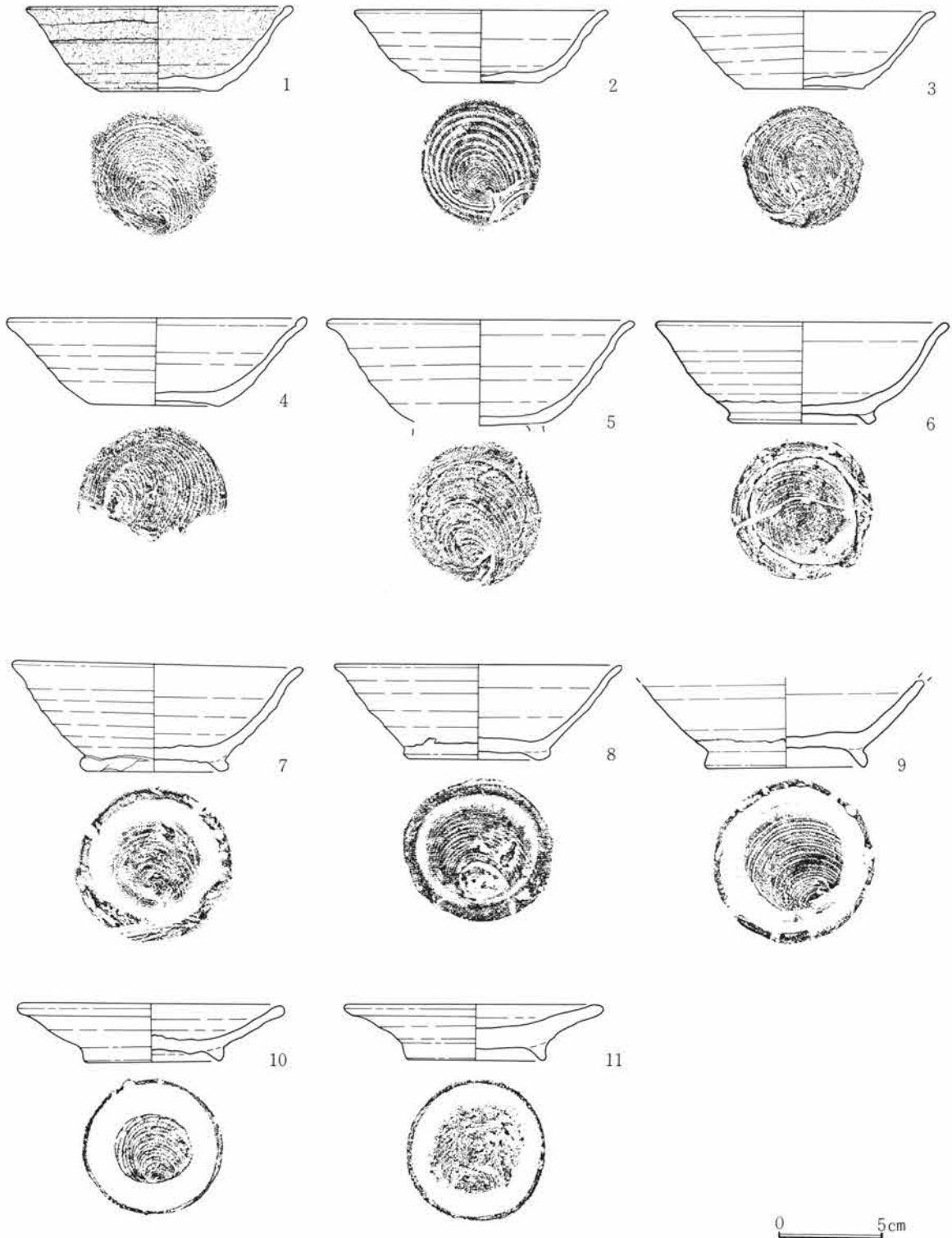
F区第63号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土粒・炭化物を微量含む。
- 2 // c P・焼土粒を微量含む。
- 3 // c P極く微量でしまりが強い。

第42図 F区第17・61・62・63号住居跡実測図

0 L=129.50m 1m

第3章 検出された遺構・遺物



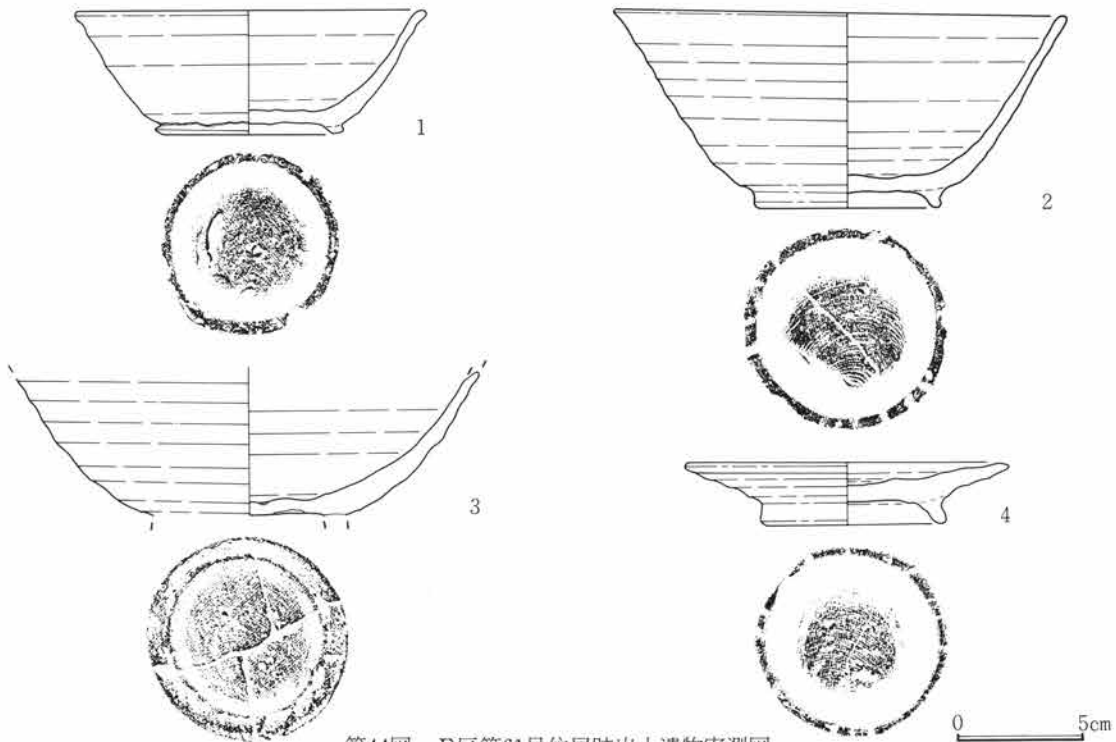
第43図 F区第17号住居跡出土遺物実測図

第17・61・62・63号の各住居跡は、互いに重複している上に、屋内部分の大半は第10号溝によって削平され、カマド部分は、第12号溝と重複しているため、残存状態はいずれもきわめて不良である。したがって4軒の住居跡として認定したのは、わずかに残存したカマドの存在からで、住居平面形及びその範囲を明確にとらえることのできた住居跡は皆無である。ただし、第62号住居跡の東壁の一部が残存していることと、第10号溝調査後に、その底面精査によって4基の土坑と2基のピットを検出することができたことによって、

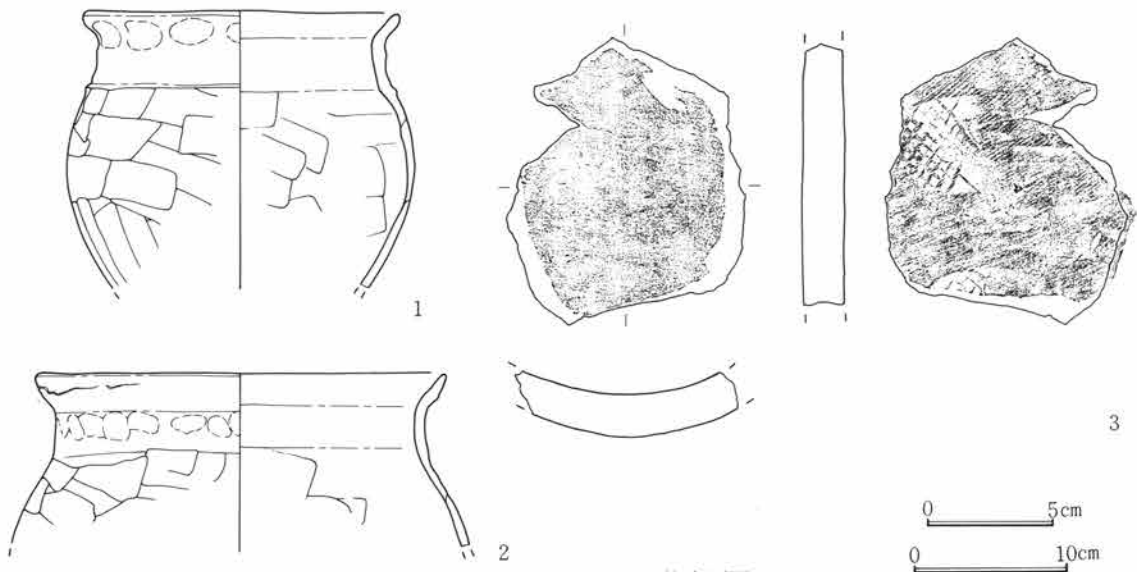
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

これらの土坑とピットの帰属関係から範囲の想定をした。つまりカマドとの位置関係から、南側の2基の土坑中最も南に位置する土坑を貯蔵穴として第17号住居跡があり、中央の土坑を貯蔵穴として残りの土坑及びピットを含め第62号住居跡があり、第17・62号住居跡の間に第61・63号住居跡が位置することになる。こう想定すると、土層断面での新旧関係の検証はできなかったが、残存状況から考えると、第63号住居跡→第61号住居跡→第17号住居跡→第62号住居跡という関係が想定される。

遺物は、第17号住居跡は、土坑内出土のものが大半であり、第61号住居跡は、カマド周辺からの出土が主体となり、第62号住居跡は、貯蔵穴とした土坑及び北西コーナー部に位置する土坑内の出土が主体である。第63号住居跡については、カマド調査前に上面で検出したものであり、他遺構と混っている可能性がある。

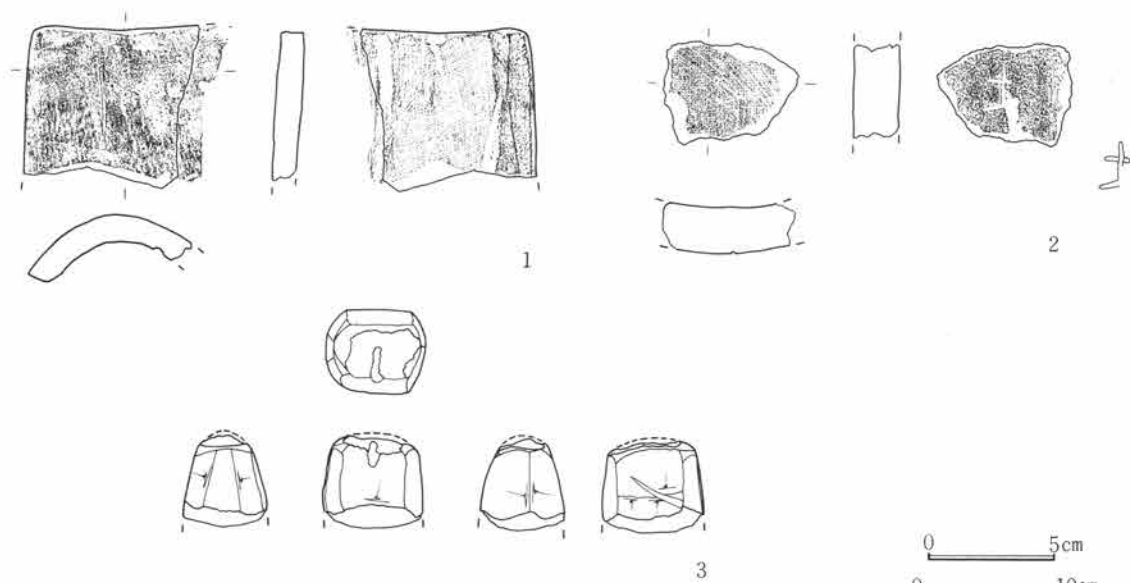


第44図 F区第61号住居跡出土遺物実測図

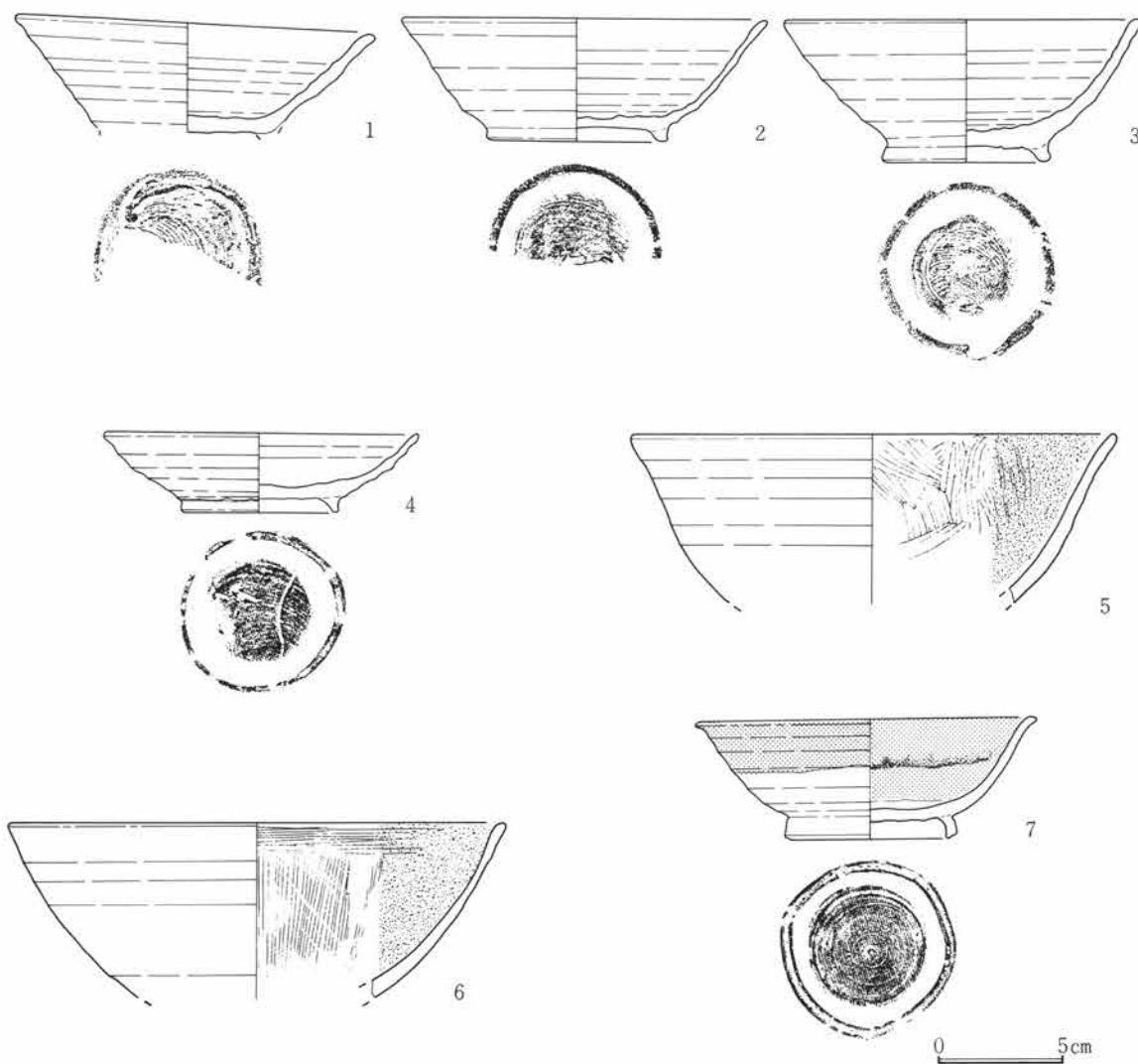


第45図 F区第62号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



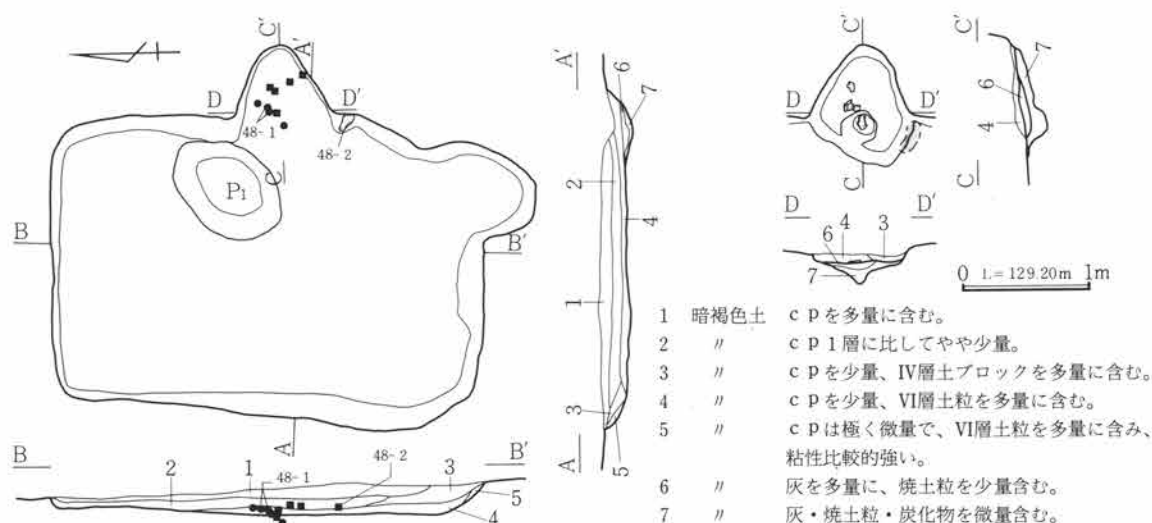
第46図 F区第62号住居跡出土遺物実測図



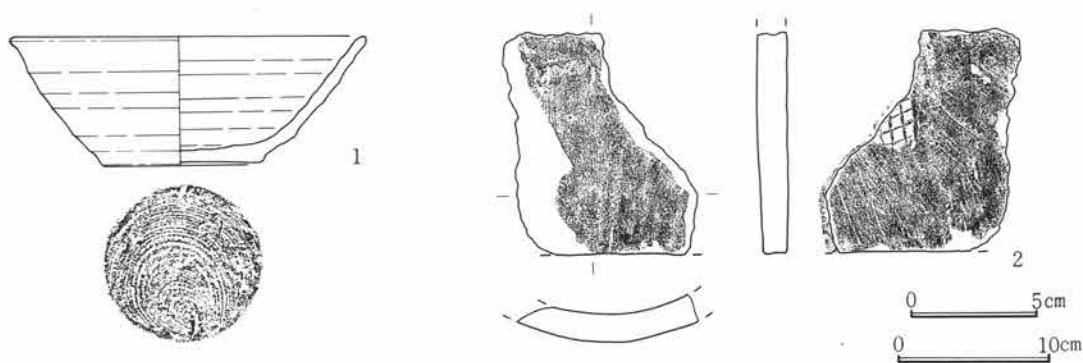
第47図 F区第63号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	F区第19号住居跡	位置	2～4-F-64・65グリッド内	分類	C-2	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	2.25m×3.45m	主軸方位	東-1度-南	残存深度	約23cm程
備考	壁は、全周検出し南東コーナー部が円形土坑状に突出。床面はVI層中で平坦であるが、硬化面は検出されなかった。壁溝・柱穴・貯蔵穴は無。						
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央・馬蹄形			主軸方位	東-7度-北	
規模	全長70cm 屋外長55cm 屋内長15cm 袖間幅110cm 燃烧部幅70cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は、床面と同レベルで掘り込み未検出、袖は構築材等残存せず不明、燃烧部は屋外部に主体があり、約5cm厚の灰層を検出。						



第48図 F区第19号住居跡実測図



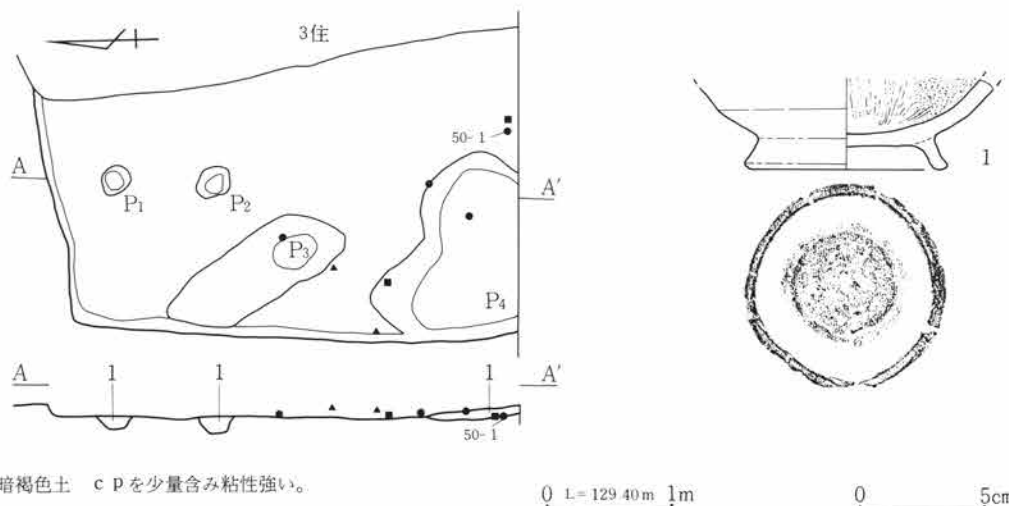
第49図 F区第19号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、南北農道の西側に位置している。この周辺は、国分僧寺に通ずる舗装道路下にかくされた大溝に向って若干の傾斜がみられる場所で、表土層は非常に浅く約20～30cm程でVI層上面に達する。したがって当住居跡の検出面もVI層上面である。しかし住居跡の残存状態はきわめて不良であって、全体形をほぼ知りえなすぎない。この遺構検出面の浅い傾向は、南北農道の東側でも同様の傾向がみられ、VI層土(黄褐色軟質ローム)の比較的良好に残存している場所にあたる。これらのことから当住居跡の位置している場所一帯の上面の攪乱が比較的下層まで及んだ上に、土の流出が激しかったものと考えられる。

遺物はほとんど全てがカマドの調査時に出土したものである。

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	F区第20号住居跡	位置	45・46—F—47・48グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	長方形？	規模	—m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 10cm程
備考	カマド等主要施設は未検出であるが、北西コーナーは比較的しっかりと残存しており、整った形態が想定されることから住居跡とした。						



第50図 F区第20号住居跡・出土遺物実測図

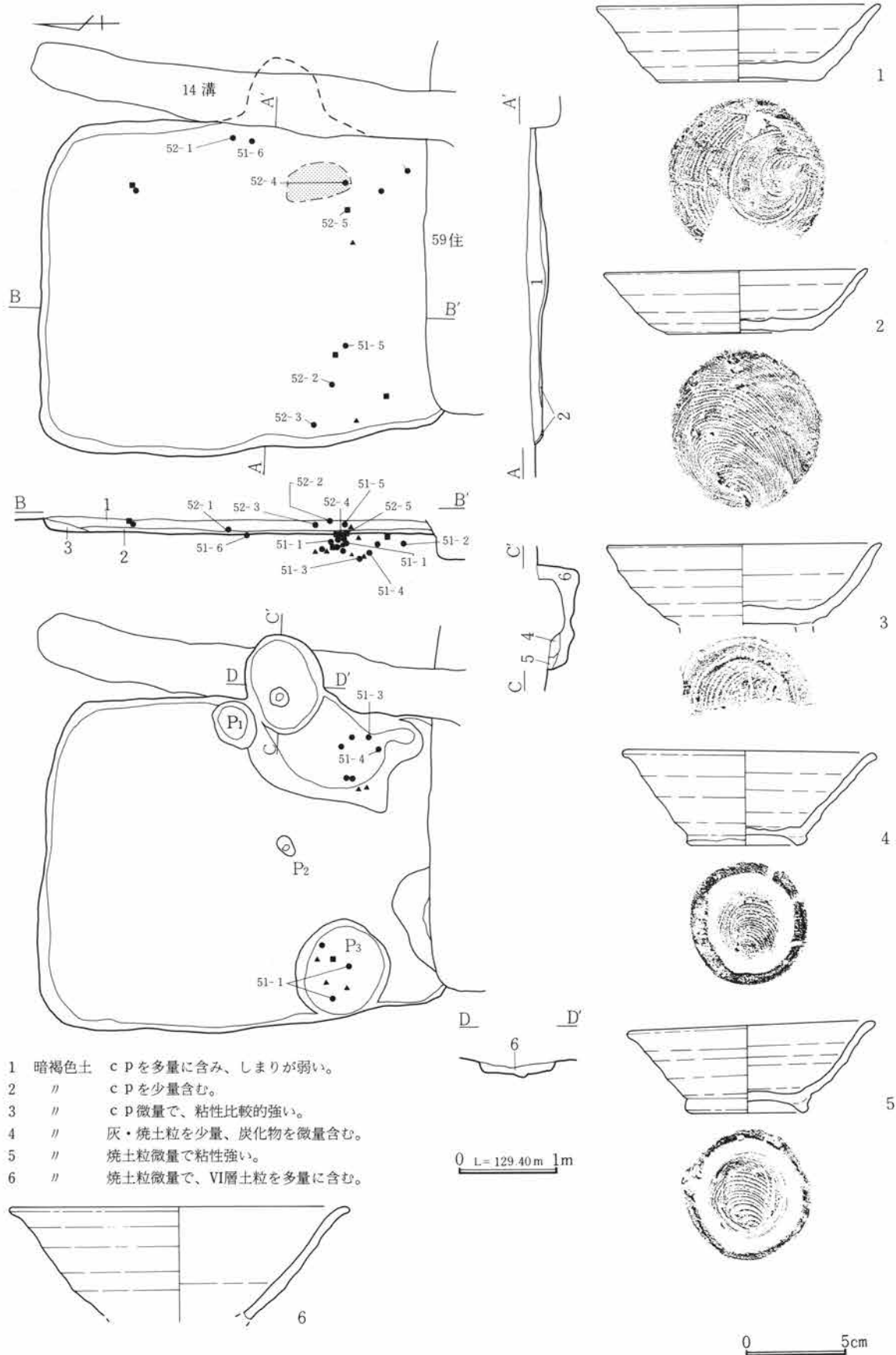
当住居跡は、南側は東西農道下で未調査のうえ、東側は、第3号住居跡との重複によって未検出であり、主体となる部分の大半は失われてしまっている。検出部分の残存もあまり良好ではなく、掘り方まで一気に下げて調査を行った。その結果、北側に小ピット2基、西壁に接して不整形の土坑状の掘り込みを2基検出した。遺物は、南側の土坑内及び周辺から特に顕著な出土がみられた。

遺構名称	F区第21号住居跡	位置	46～48—F—54・55グリッド内	分類	C—3	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	3.35m×(4.10)m	主軸方位	東—2度—北	残存深度	約 11cm程
備考	壁は、北・西壁及び東壁の一部を検出。床面はVI層中ではほぼ平坦に構築されている。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は、南東コーナー部未検出であるため不明。						
カマド	位置・形状	東壁わずかに南寄り・馬蹄形？			主軸方位	東—0度—北	
規模	全長 100cm	屋外長 60cm	屋内長 40cm	袖間幅 — cm	燃烧部幅 — cm	煙道幅 — cm	
備考	焚口部と考えられる部分近くの床面上に焼土を検出、燃烧部の掘り方段階で、中央やや北寄りの位置から、支脚の据え方と考えられる小ピットを1基検出。						

当住居跡は、南側で第59号住居跡と重複し、カマド部分を第14号溝によって削平されている。確認面からの残存深度は浅く、残存状態は良好でない。特にカマド部分は、先述のごとく第14号溝との重複で主体が消滅しているが、掘り方段階で、位置、形態等を明らかにすることができた。

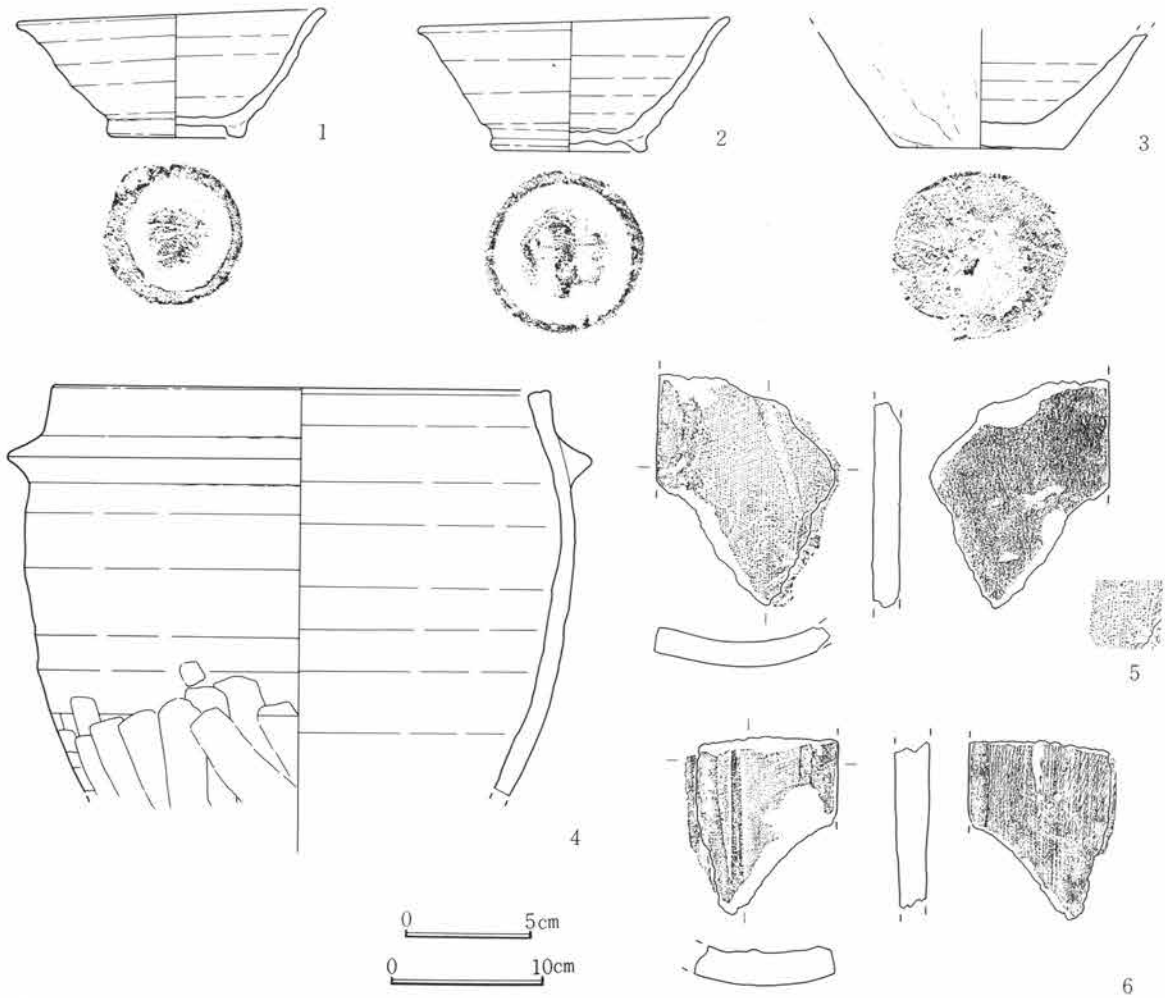
覆土は浅いが、CPの多少・粘性等によって3層に分離することができ、中でも3層は、CP含有量が少なく粘性が他層と比較して強いことから、壁を構築しているVI層土主体の第1次埋没土と考えられ、順次生活面を構成したCP混じりの土が埋没していったものと考えられる。

遺物は、床面上では南半に顕著な出土が認められたが、掘り方段階では、カマド掘り方から貯蔵穴の想定される場所までの掘り込み、及び、西壁際の円形土坑内から、完形に近い遺物が集中的に出土している。



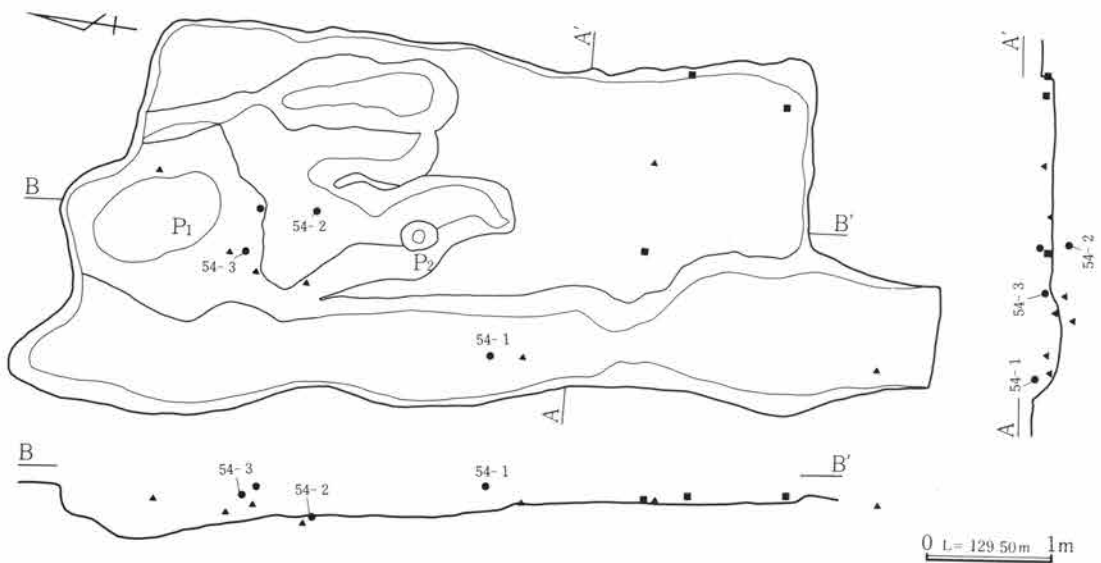
第51図 F区第21号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



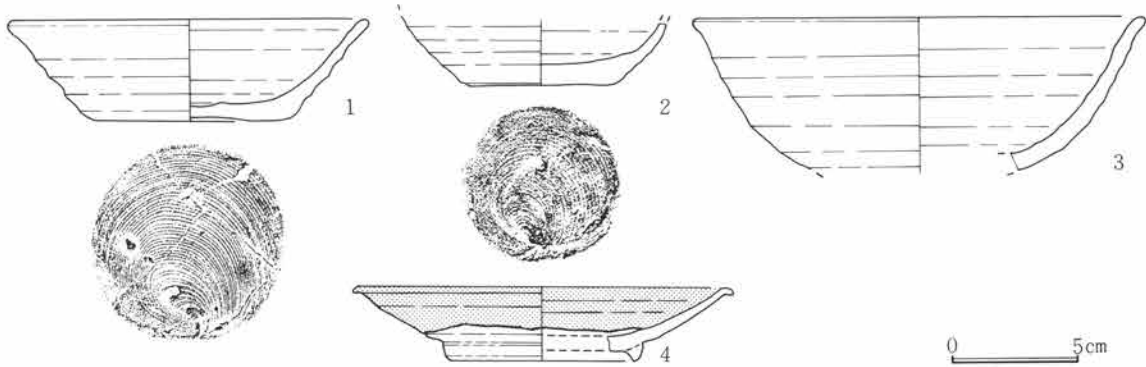
第52図 F区第21号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第22号住居跡	位置	48-F~1-G-54~56グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	長方形？規模	5.35m×—m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 7cm程	



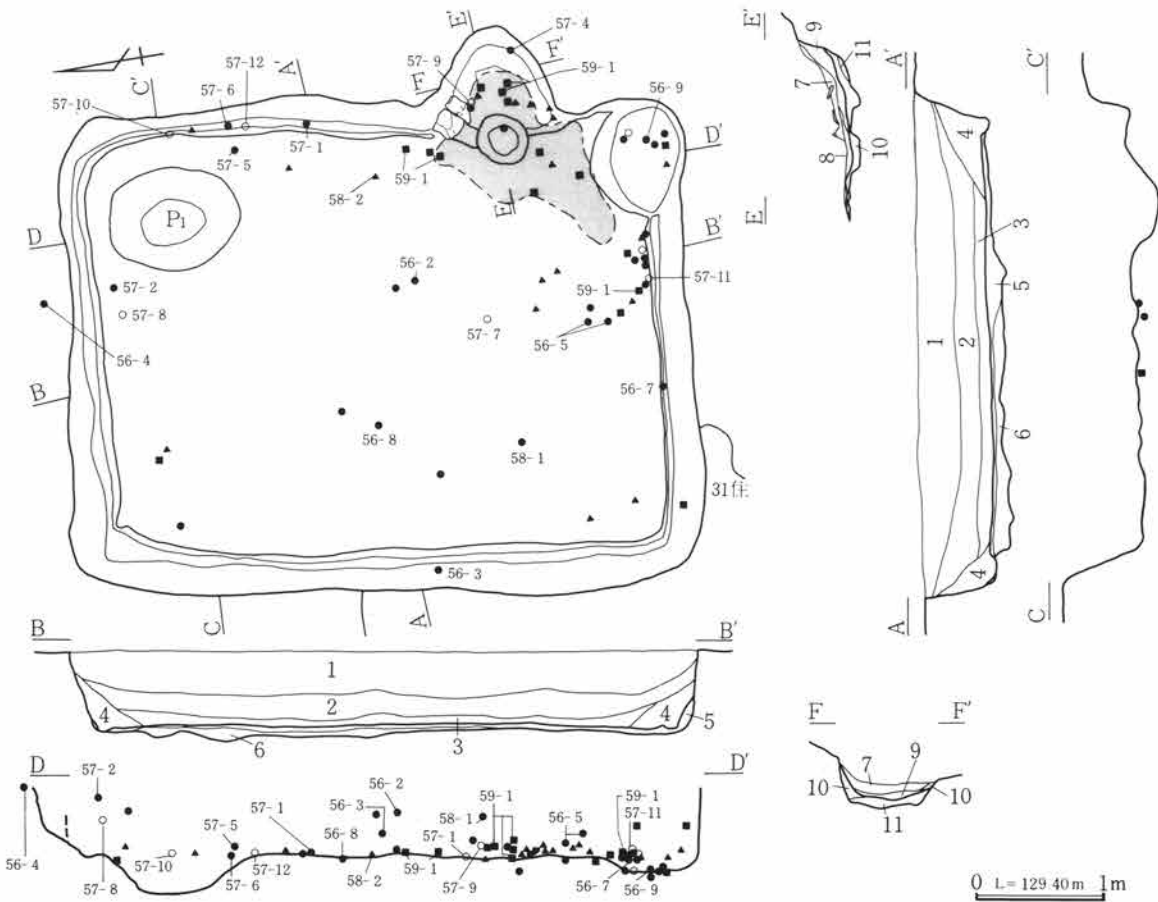
第53図 F区第22号址実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



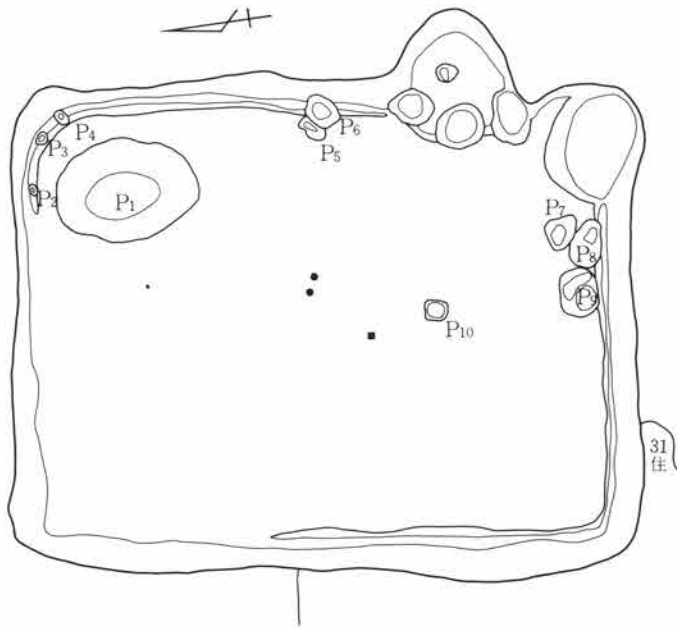
第54図 F区第22号址出土遺物実測図

遺構名称	F区第23号住居跡		位置	45～47-F-51～53グリッド内		分類	C-11	時期	VIII
平面形態	長方形	規模	3.85m×4.95m	主軸方位	東-9度-南	残存深度	約60cm程		
備考	壁は全周検出されほぼ垂直でVII層に達している。床面はVII層中まで掘り込まれわずかに暗褐色土を貼床している。壁溝はカマド部分を除き全周、貯蔵穴は南東コーナー部、円形で径約90cm、深度7cm。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形				主軸方位	東-6度-南		
規模	全長 95cm 屋外長 65cm 屋内長 30cm 袖間幅 115cm 燃烧部幅 70cm 煙道幅 1cm								
備考	焚口部は浅い掘り込みで中央に径約40cmの円形ピットを検出、灰面は燃烧部から焚口部、特に南側に広く分布している。袖は左袖のみ残存、角礫2個で構築。燃烧部は屋外部が主体と考えられる。								



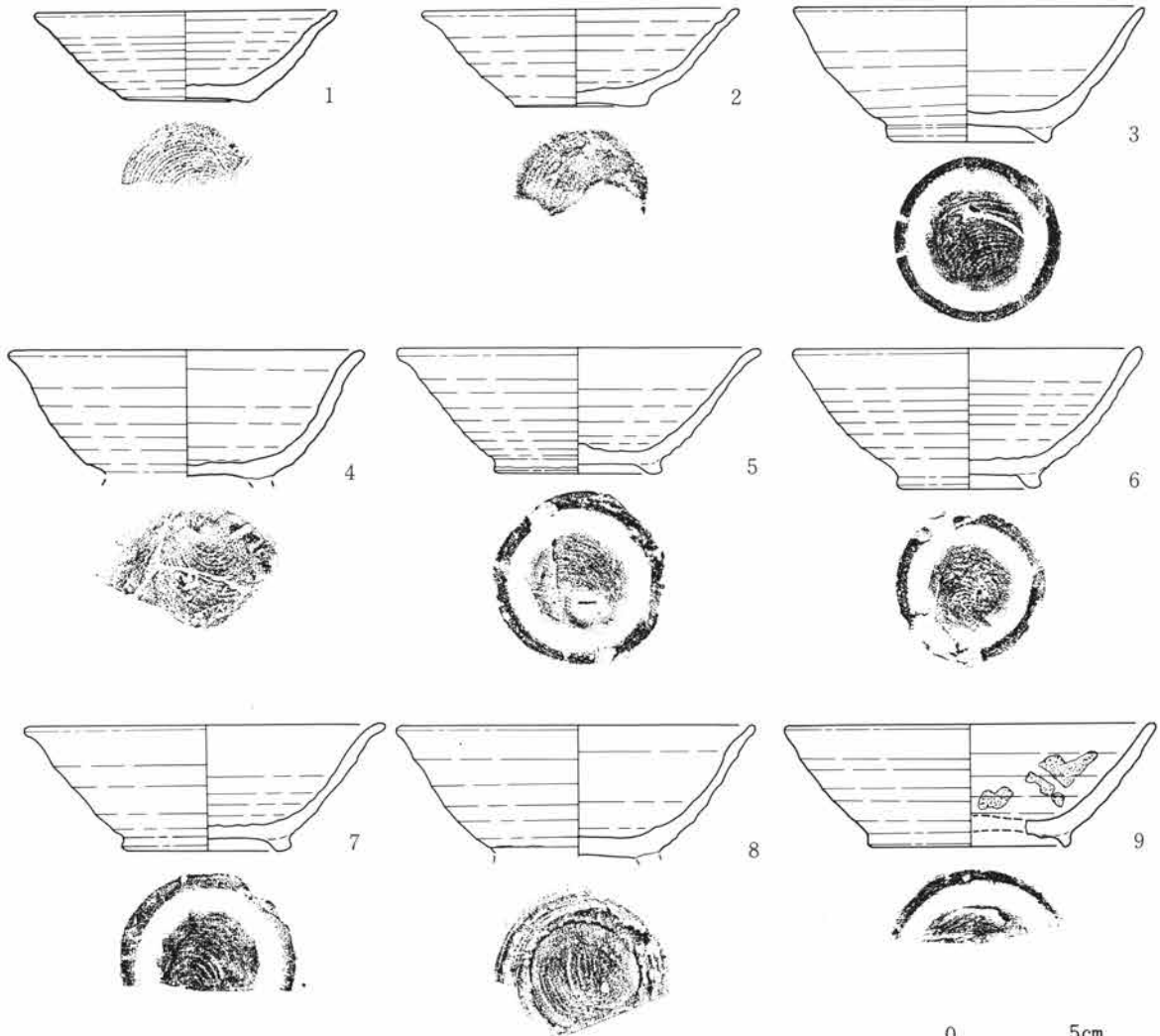
第55図 F区第23号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



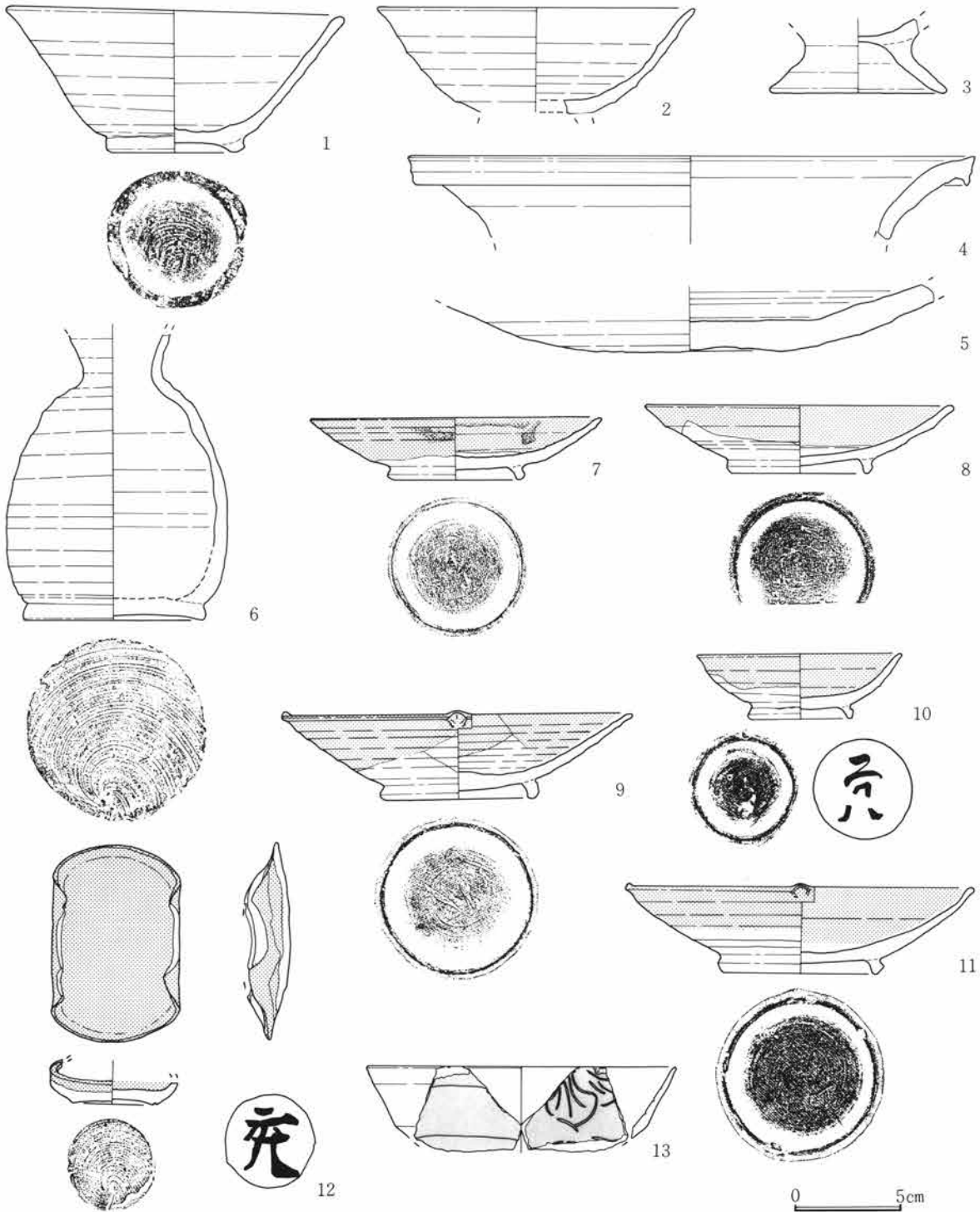
- | | | |
|----|------|-----------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c P粗粒及び細粒を多量に、炭化物・VII層土ブロックを少量含む。 |
| 2 | // | c P・炭化物ブロックを若干含む。 |
| 3 | // | c P細粒を少量含む。 |
| 3 | // | c P細粒を微量、炭化物粒を少量含む。 |
| 5 | // | c P細粒を少量、炭化物ブロックを微量含む。 |
| 6 | // | c P細粒を微量含み、粘性強い。 |
| 7 | // | c P細粒、VI層土粒微量で、炭化物を若干含む。 |
| 8 | 灰色灰層 | |
| 9 | 暗褐色土 | 焼土粒、炭化物を多量に含む。 |
| 10 | // | 炭化物ブロック、焼土粒を少量及び、黒褐色土ブロックを微量含む。 |
| 11 | // | 焼土粒微量で、VII層土ブロックを含む。 |

0 L=129.40m 1m



第56図 F区第23号住居跡・出土遺物実測図

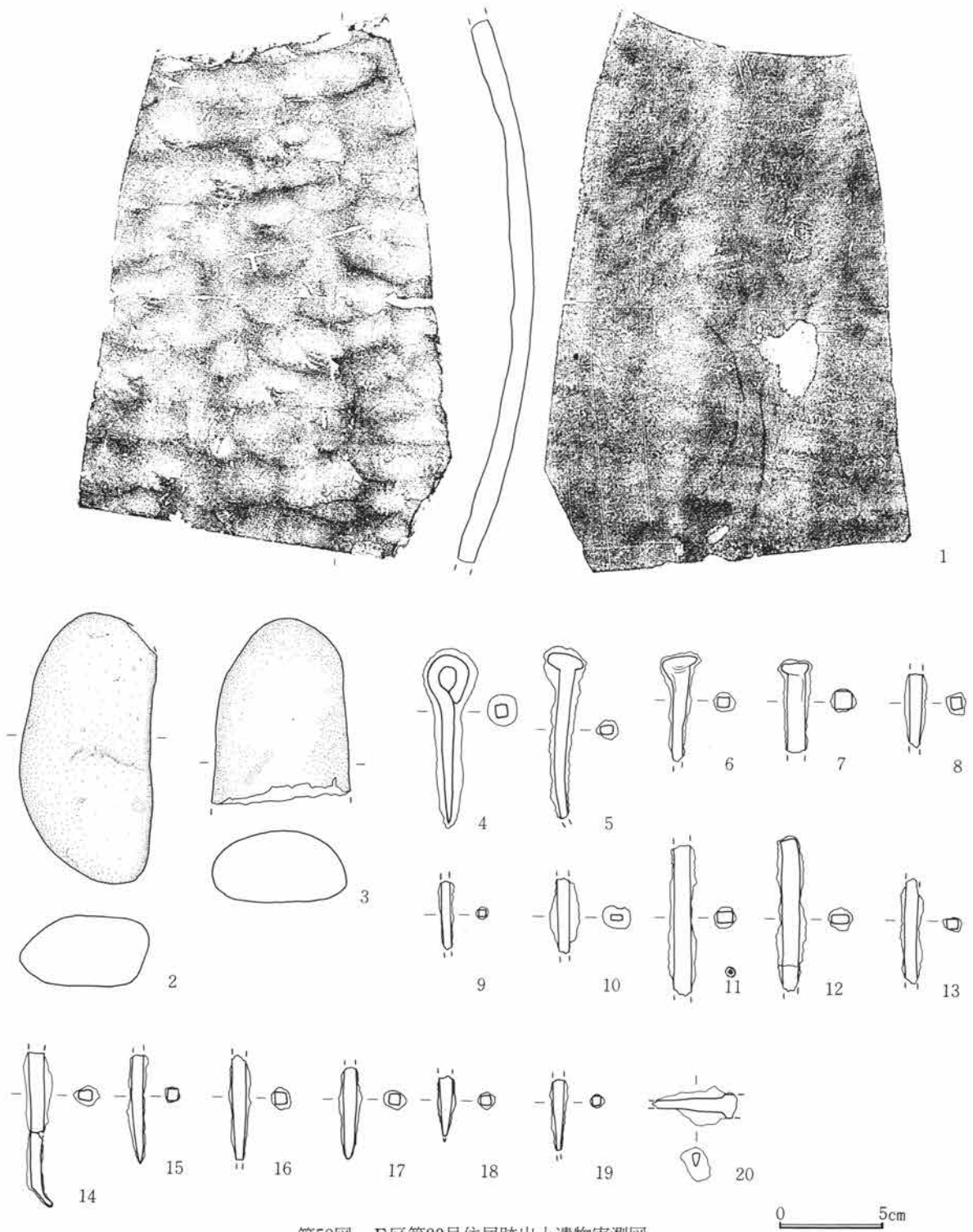
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第57図 F区第23号住居跡出土遺物実測図

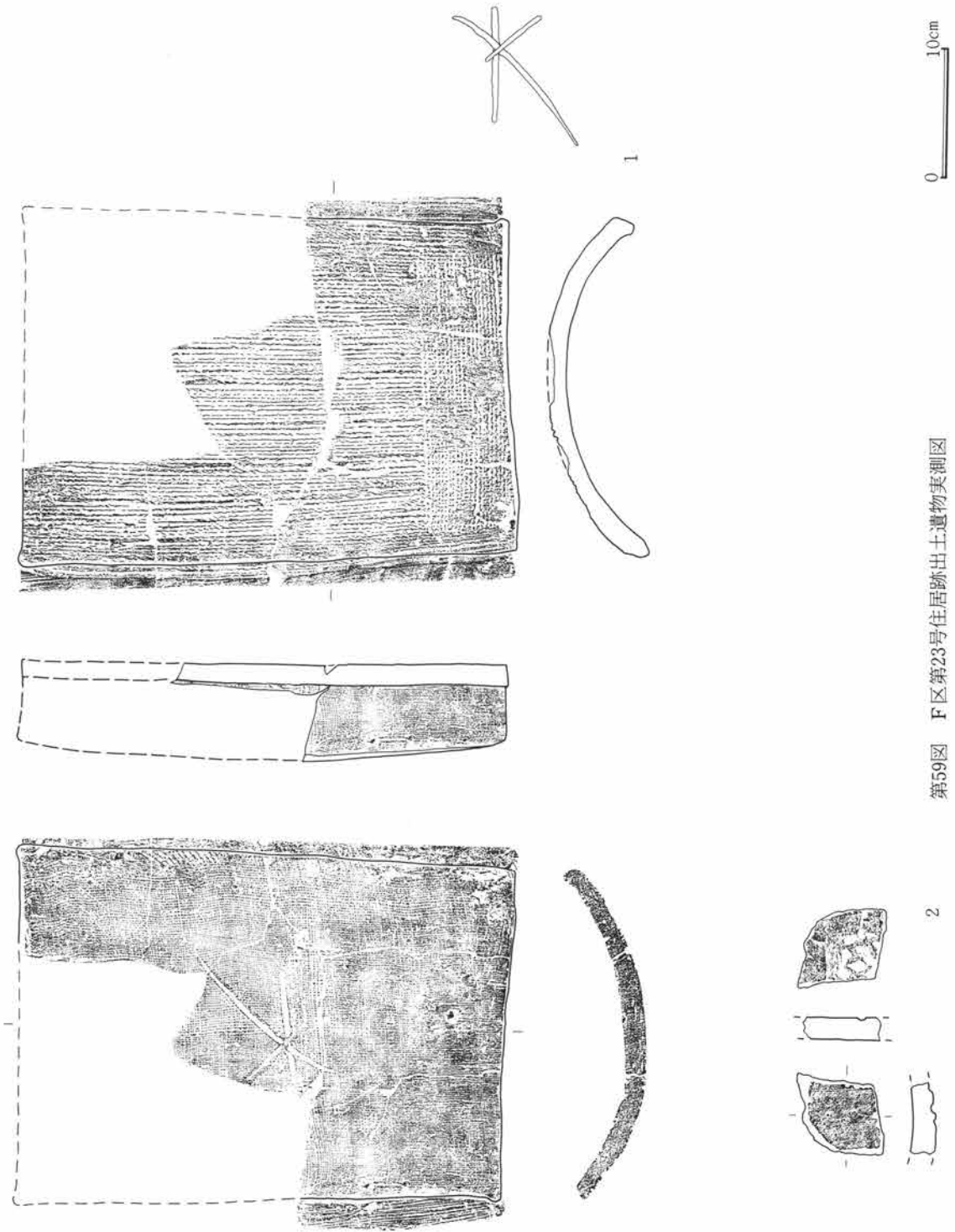
当住居跡は、周辺の他の住居跡に比して掘り込みがきわめて深く、残存状態は非常に良好である。ほぼ同様の遺物の出土している住居跡でもほとんど検出されなかった、壁溝が浅いながらも全周して検出されていることは特筆されるべきことである。また、土層断面の観察から、第21号住居跡同様CPの多少によって4層に分離したが、各層に共通して炭化物が含まれていることが特徴であるが、焼失等の結果とは考えられない。

掘り方面は細かな凹凸が比較的多く、CPをわずかに含む暗褐色土を貼床することによって、床面を平坦化している。北東コーナー部に検出された楕円形土坑も当住居跡に伴うものと考えられ、床面で確認した。



第58図 F区第23号住居跡出土遺物実測図

遺物は、大半が床面上からの出土で、カマド周辺に集中する傾向と合わせてほぼ全面にその分布が認められる。そうした中で、北東コーナー近くの壁溝内より、灰釉の小型の皿・耳皿・平子が出土しているのが特徴的である。その他、全遺物に占める灰釉の割合が、他の住居跡に比較して高いようである。また、陰刻文をもつ緑釉の壺の破片も出土している。さらに覆土中の出土で位置を明確に特定することはできないが、釘と考えられる鉄製品が多数出土しているのも特徴である。

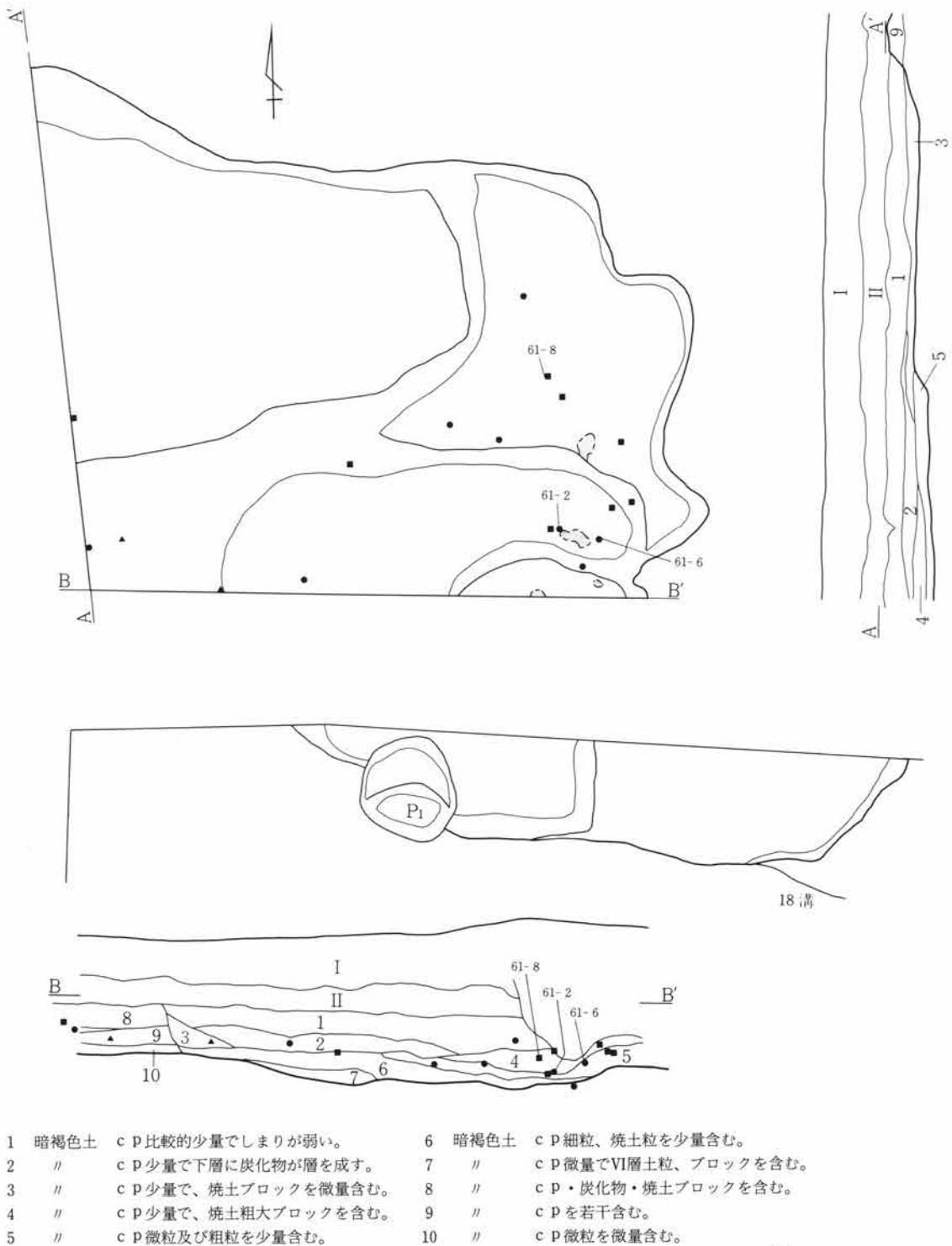


第59図 F区第23号住居跡出土遺物実測図

2

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	F区第24号址	位置	46~50-F-66~70グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	不明	規模	—m×—m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 2cm程
備考	壁は緩傾斜で曖昧で、全体形も不明、全体的に中央に向かって傾斜しており、住居跡の床面とは違っていているようである。						

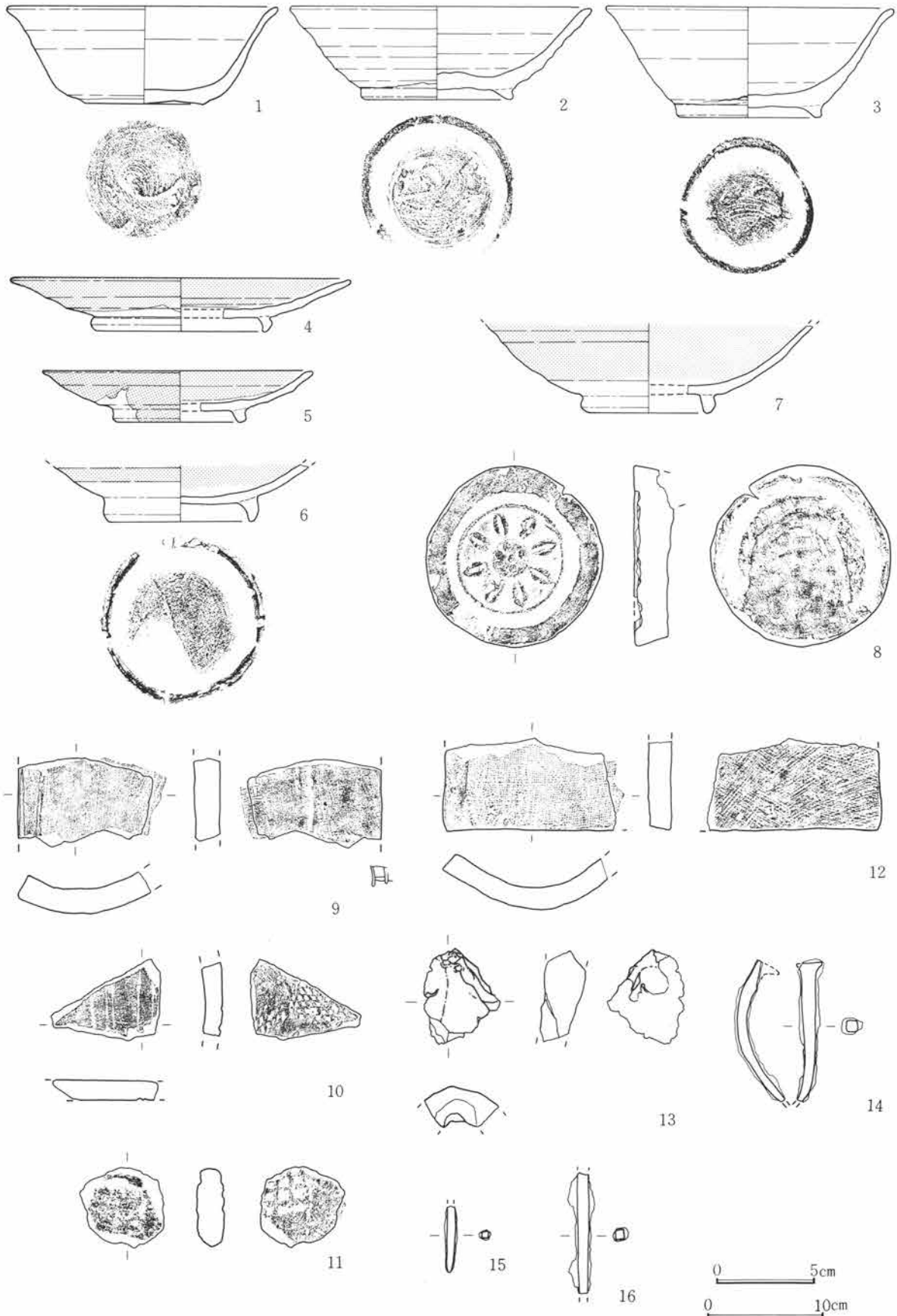


- | | | | |
|--------|----------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色土 | c P 比較的少量でしまりが弱い。 | 6 暗褐色土 | c P 細粒、焼土粒を少量含む。 |
| 2 // | c P 少量で下層に炭化物が層を成す。 | 7 // | c P 微量でVI層土粒、ブロックを含む。 |
| 3 // | c P 少量で、焼土ブロックを微量含む。 | 8 // | c P・炭化物・焼土ブロックを含む。 |
| 4 // | c P 少量で、焼土粗大ブロックを含む。 | 9 // | c P を若干含む。 |
| 5 // | c P 微粒及び粗粒を少量含む。 | 10 // | c P 微粒を微量含む。 |

第60図 F区第24号址実測図

0 L=129.80m 1m

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



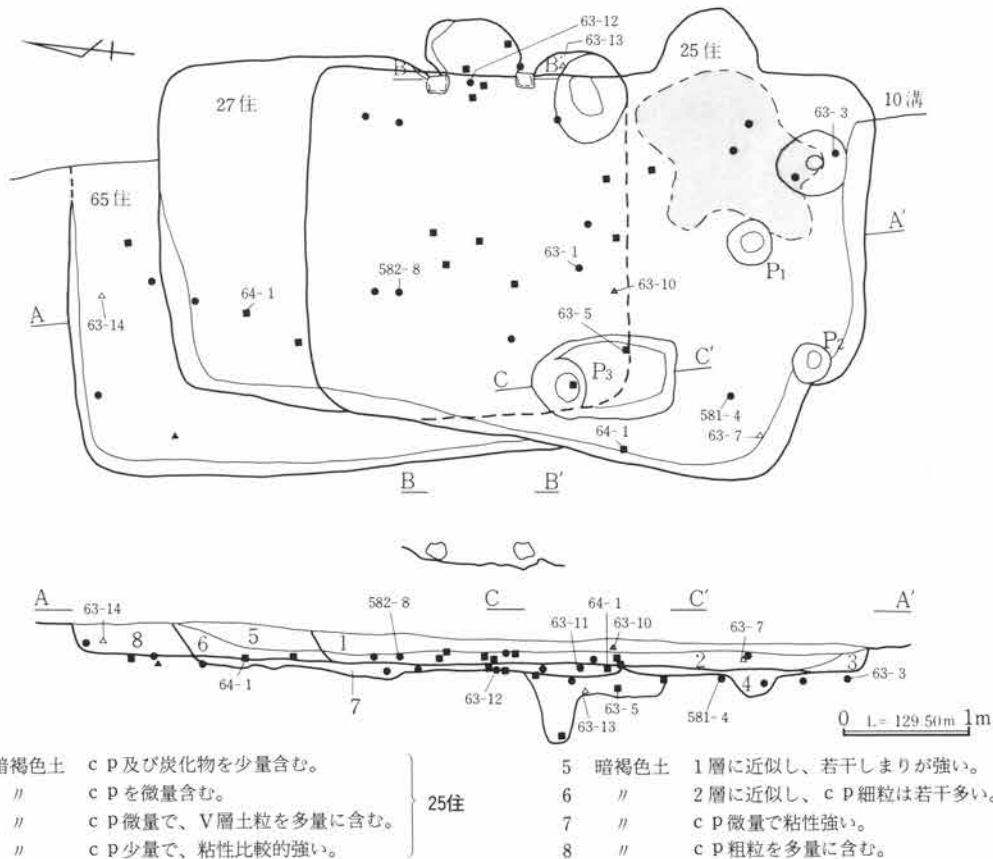
第61図 F区第24号址出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	F区第25号住居跡	位置	46~48-F-58~60グリッド内	分類	C-11	時期	—	
平面形態	隅丸台形?	規模	3.00m×4.45m	主軸方位	東-8度-北	残存深度	約20cm程	
備考	第27・65号住居跡との重複により、南壁と西壁のみを検出、床面は南半が残存しており、平担である。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は、南東コーナー部やや西寄り、円形で規模は径約50cm、深度約22cm。							
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-8度-北		
規模	全長	—cm	屋外長	—cm	屋内長	—cm	袖間幅	—cm
	燃烧部幅	—cm	煙道幅	—cm				
備考	第10号溝によって削平され、位置を特定するに止った。焚口部から貯蔵穴付近まで、カマド南側により広く灰面を検出。							

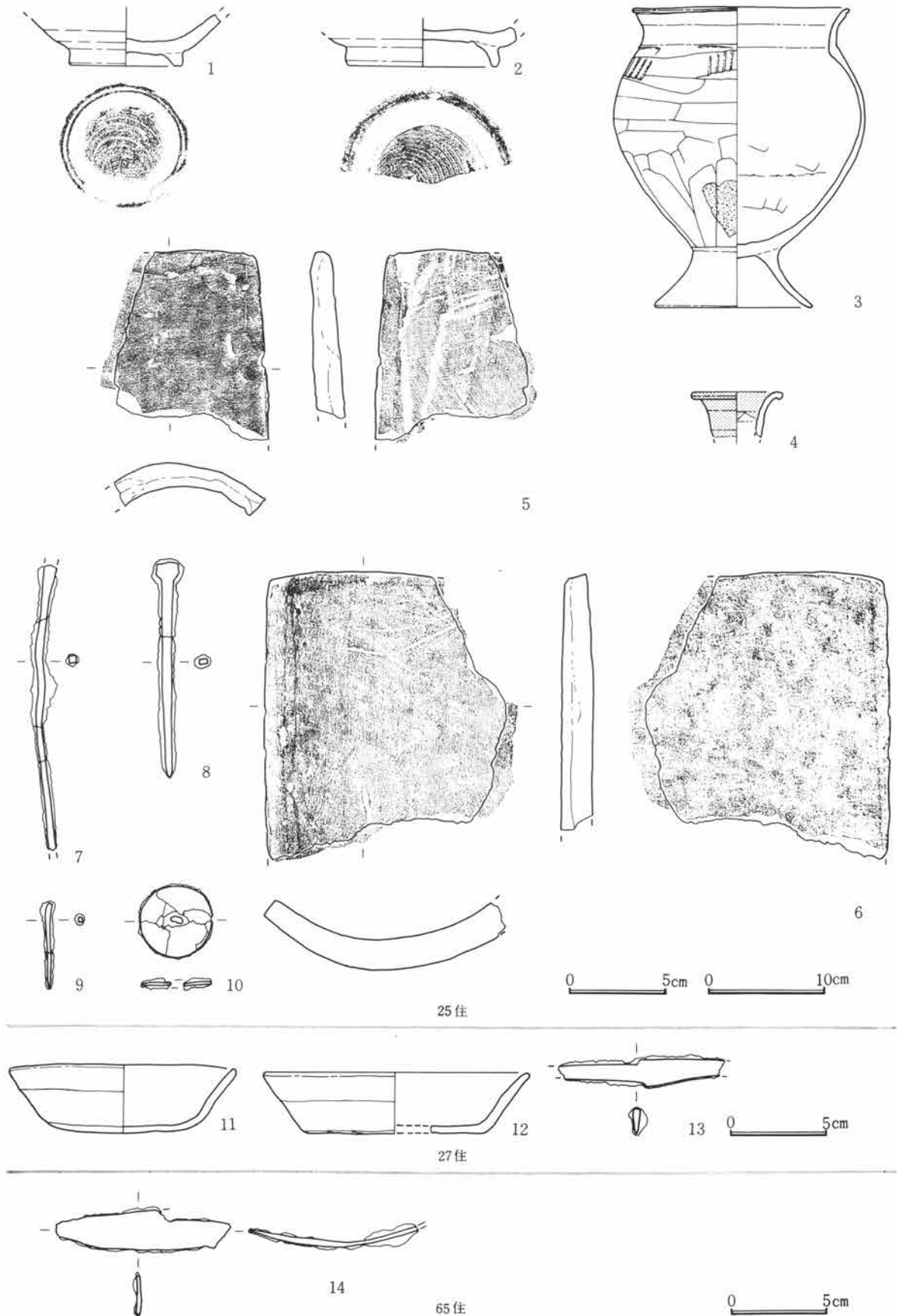
遺構名称	F区第27号住居跡	位置	47~49-F-58~60グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	2.80m×—m	主軸方位	東-9度-北	残存深度	約35cm程
備考	第25・65号住居跡及び第10号溝との重複によって北西コーナー部及び、カマドの一部を検出。カマドは東壁南寄り、両袖共角柱穴截石を据えて構築している以外は不明。						

遺構名称	F区第65号住居跡	位置	47~49-F-59・60グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×—m	主軸方位	東-14度-北	残存深度	約25cm程



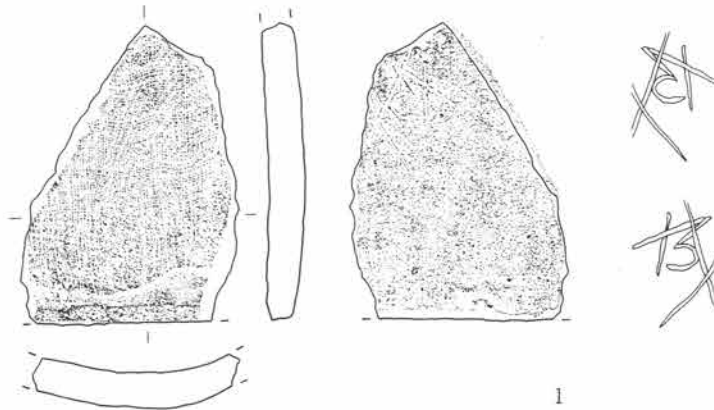
第25・27・65号住居跡は、互いに重複する上に第10号溝によって東側の大半を削平されているため、全体形を明確にとらえることのできるものはない。しかし、土層断面の観察から、第65号住居跡→第27号住居跡→第25号住居跡という新旧関係を明らかにすることができた。また、第25号住居跡の平面形について、西側で1段の段を有しており、2軒の重複のような感を呈しているが、それを裏づける積極的証拠がない。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第63図 F区第25・27・65号住居跡出土遺物実測図

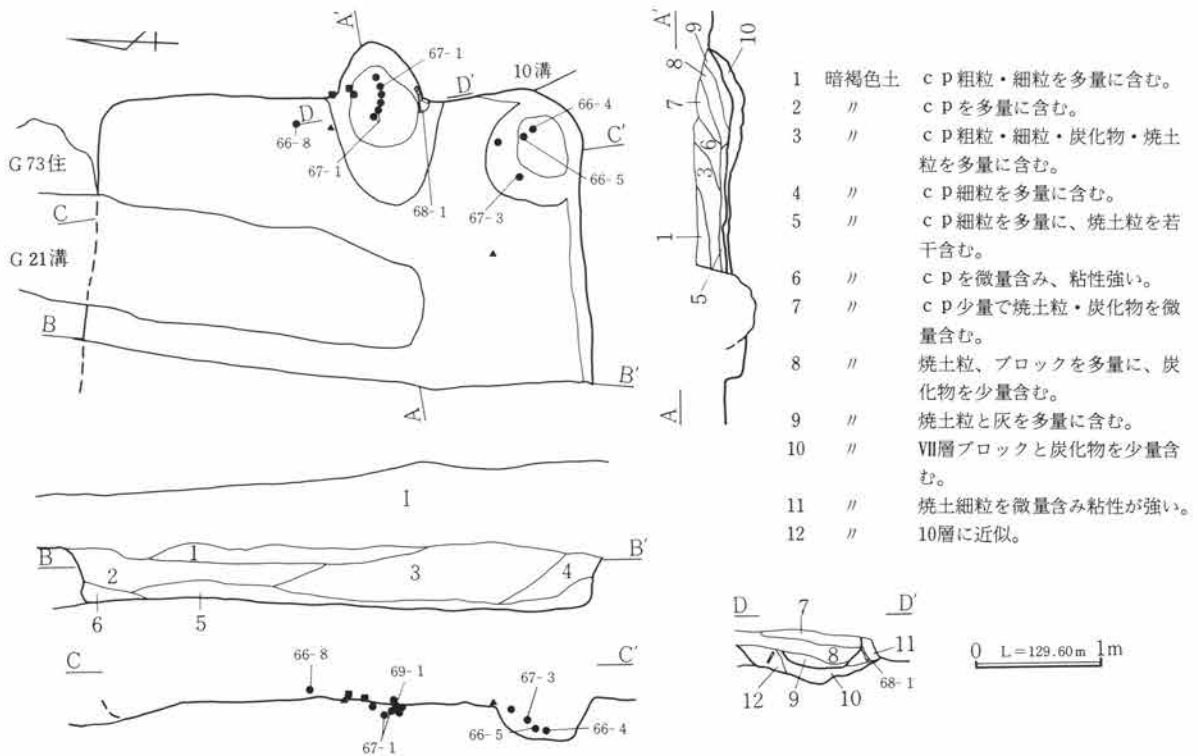
第3章 検出された遺構・遺物



第64図 F区第27号住居跡出土遺物実測図

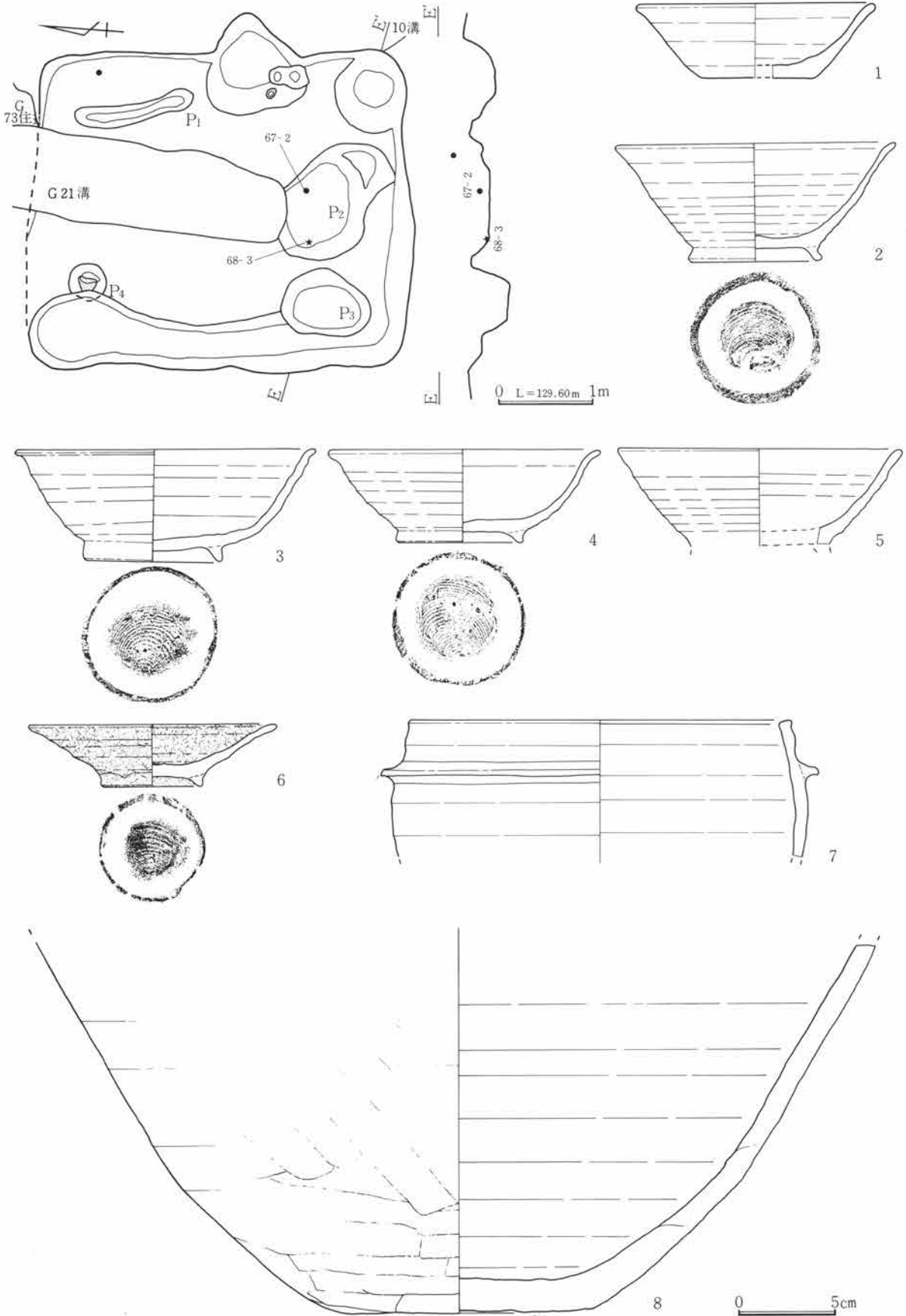
0 10cm

遺構名称	F区第26号住居跡	位置	49-F~1-G-59~60グリッド内	分類	C-2	時期	IX
平面形態	隅丸方形	規模	1m×3.90m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約45cm程
備考	G区第73号住居跡・G区第9号溝と重複し、南壁とカマドの検出に止った。また西側は、南北農道にかかり、東西2度の調査によって全体像を明らかにした。貯蔵穴は南東コーナー部、円形。						
カマド	位置・形状	東壁わずか南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-13度-北	
規模	全長130cm 屋外長45cm 屋内長85cm 袖間幅65cm 燃烧部幅80cm 煙道幅1cm						
備考	焚口は皿状の浅い掘り込みであり、袖は、両袖共瓦を立てて構築している。燃烧部は屋外部に主体があり、約6cm厚の焼土粒と灰の層を検出。						

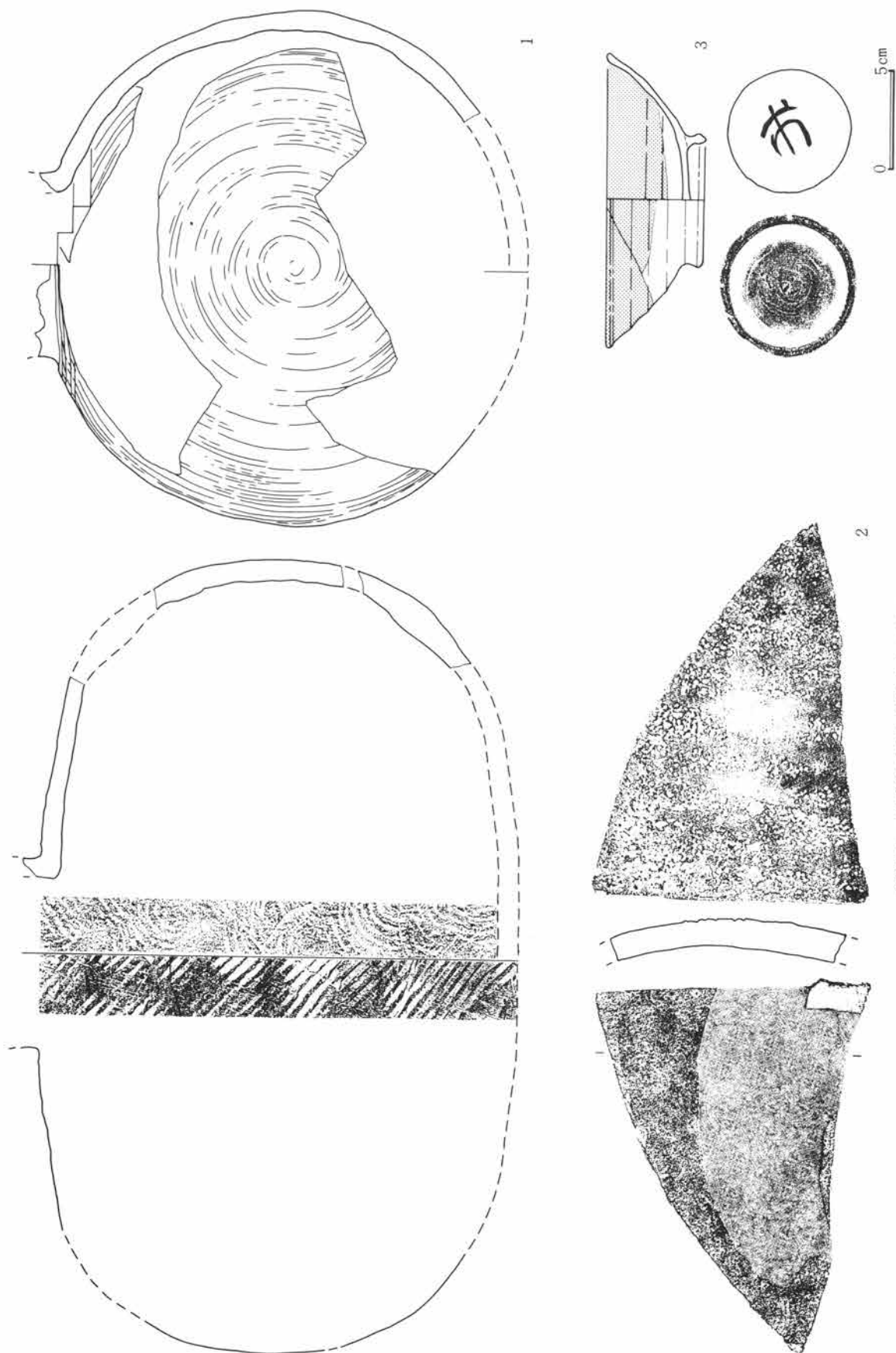


第65図 F区第26号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

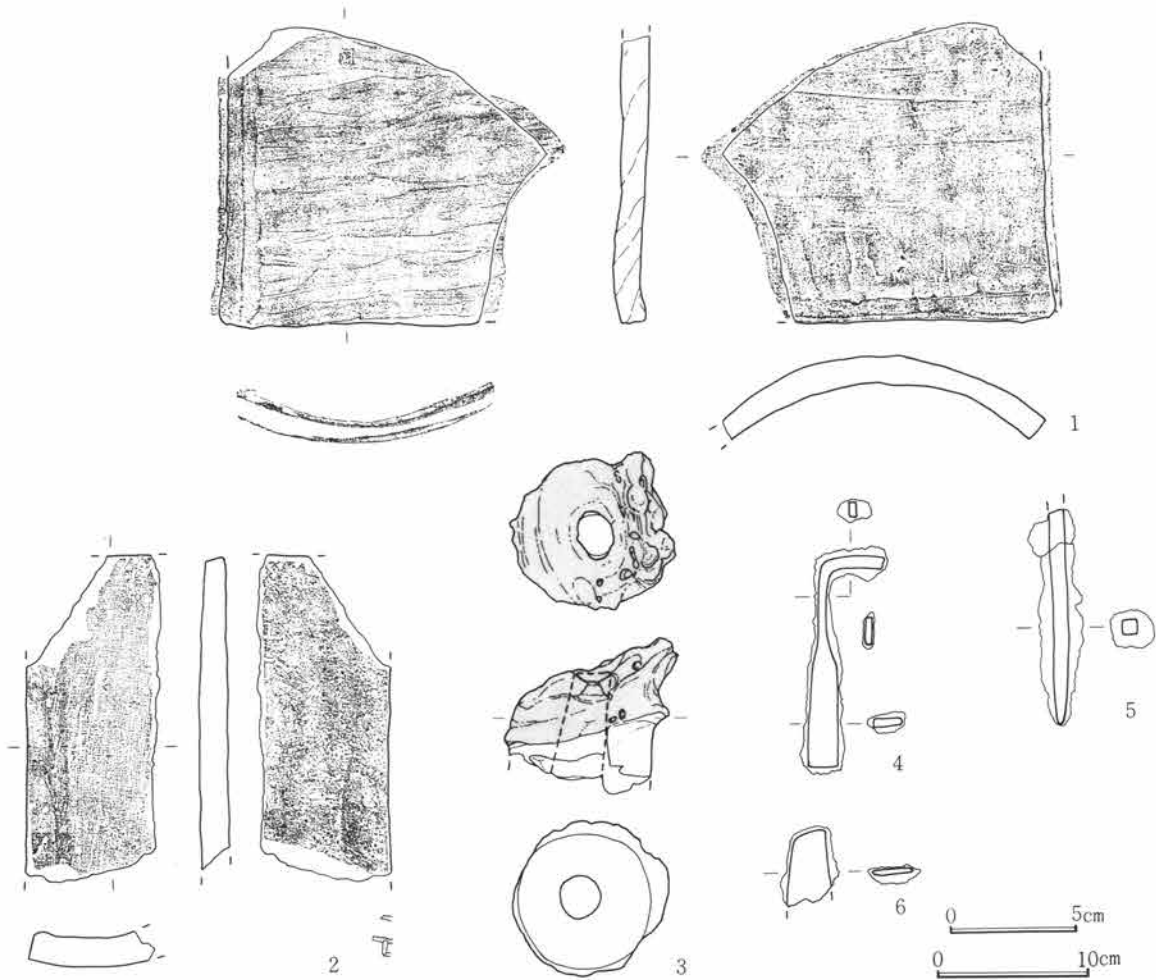


第66図 F区第26号住居跡・出土遺物実測図



第67図 F区第26号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



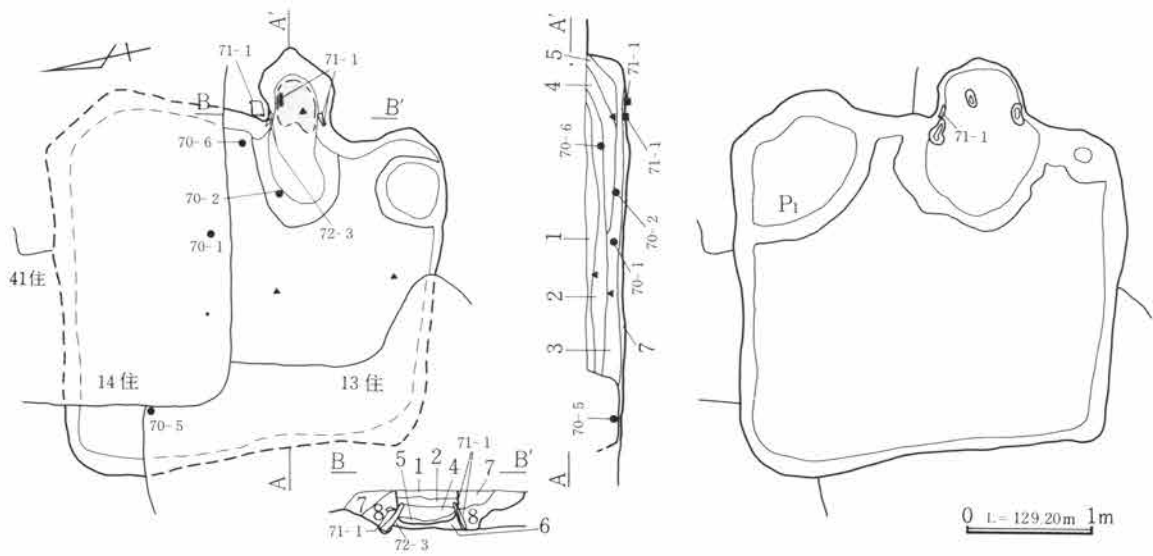
第68図 F区第26号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、南北農道下にかかっていたため、前後2回の調査によって全体像を明らかにした。その結果東側部分においては、他の住居跡と何ら変わるところはなかったのであるが、農道下にかかっていた西壁に沿って幅広の溝状の掘り込みが検出された。また、この溝に接して北西コーナー部近くに円形の皿状の掘り込みが検出され、内部はかなりの高温にさらされたものと思われる、全面が赤褐色焼土化していた。出土遺物の中に、1点であるが羽口が床直より出土していることと考え合わせると、鍛冶的な性格の遺構であった可能性がある。同様の施設は、G区第62号住居跡としたものにもみられ、同様に羽口が出土している。

遺物は、横瓶と考えられる大形破片の他、転用硯かと考えられる須恵器大甕の破片等が出土している。

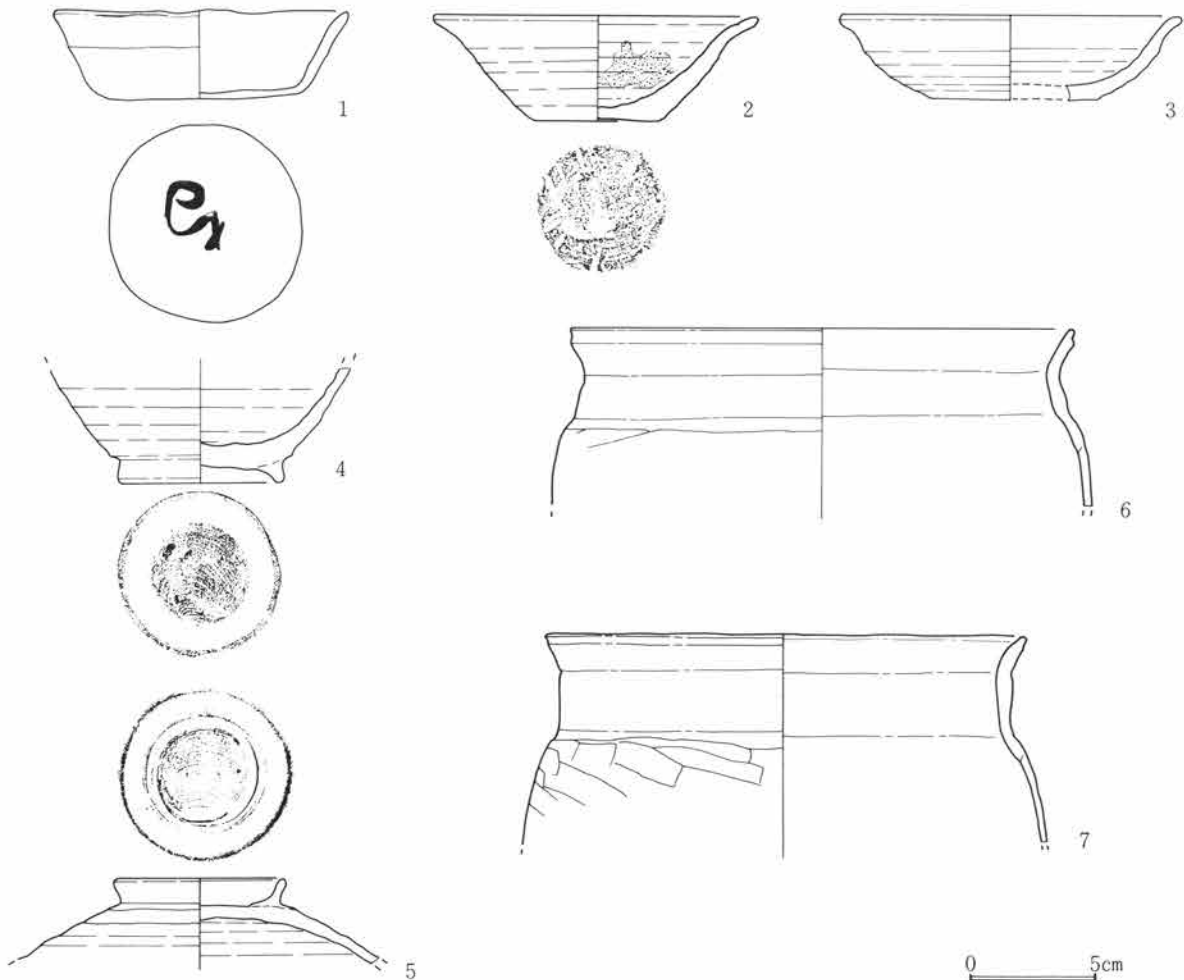
遺構名称	F区第29号住居跡	位置	40～42-F-46・47グリッド内	分類	A-9	時期	VII
平面形態	隅丸方形	規模	3.00m×3.00m	主軸方位	東-21度-南	残存深度	約30cm程
備考	第13・14号住居跡と重複しているため、北西及び南東コーナー部・カマドの検出に止った。貯蔵穴は、南東コーナー部で、円形、規模は径約55cm、深度約14cmである。						
カマド	位置・形状	東壁わずか南寄り、先端の突出する馬蹄形			主軸方位	東-11度-南	
規模	全長140cm 屋外長60cm 屋内長80cm 袖間幅90cm 燃烧部幅40cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は浅い皿状の掘り込みで灰は残存していない。袖は、両袖共に瓦を立てて構築しており、燃烧部は屋外部が主体で灰層が1枚検出された。煙道は先端突出部がとりつきと考えられる。						

第3章 検出された遺構・遺物

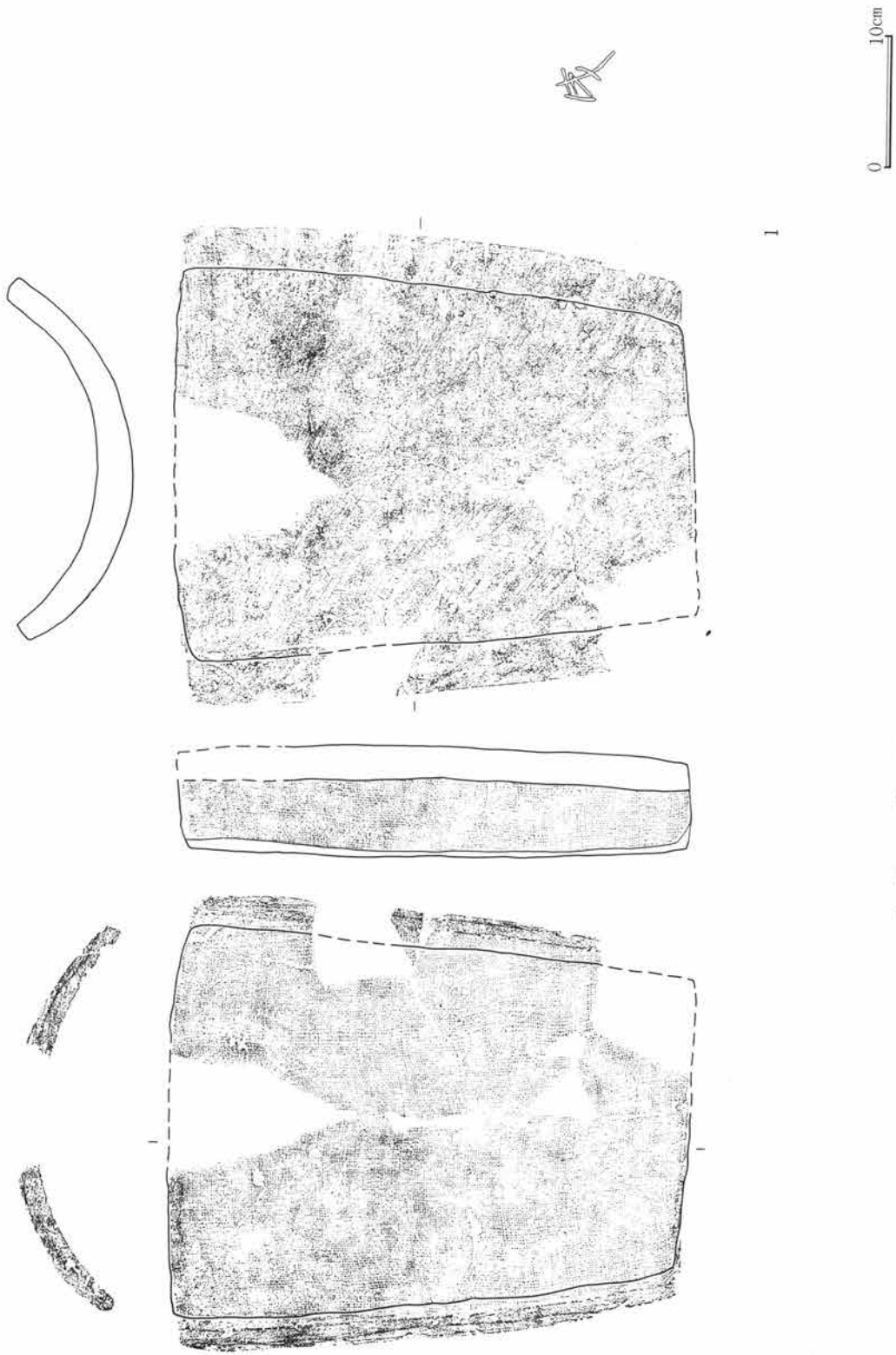


- | | | | | | |
|---|------|--------------------------|---|----|--------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c P 大粒を多量に含む。 | 5 | // | c P 微量で、焼土粒を多量に含む。 |
| 2 | // | c P を少量、VII層土ブロックを多量に含む。 | 6 | // | c P 微量で、焼土粒・炭化物を多量に含む。 |
| 3 | // | c P 少量で、炭化物を微量含む。 | 7 | // | c P 細粒、VI~VII層土ブロックの混土。 |
| 4 | // | c P 微量で、炭化物を多量に含む。 | 8 | // | c P 微量で、VII層土ブロックが斑状に混入。 |

第69図 F区第29号住居跡実測図



第70図 F区第29号住居跡出土遺物実測図



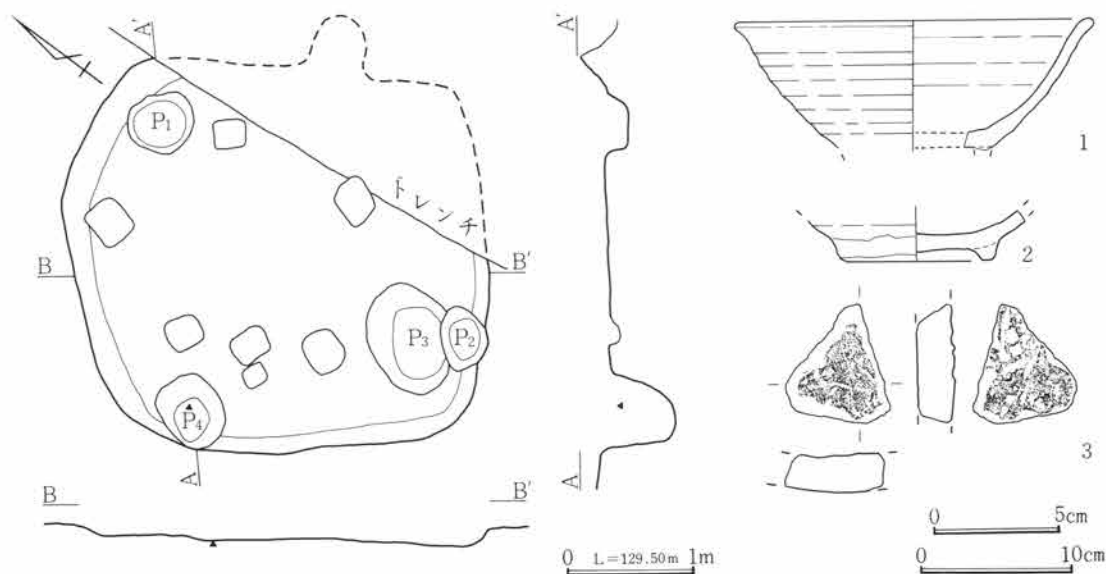
第71図 F区第29号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第72図 F区第29号住居跡出土遺物実測図

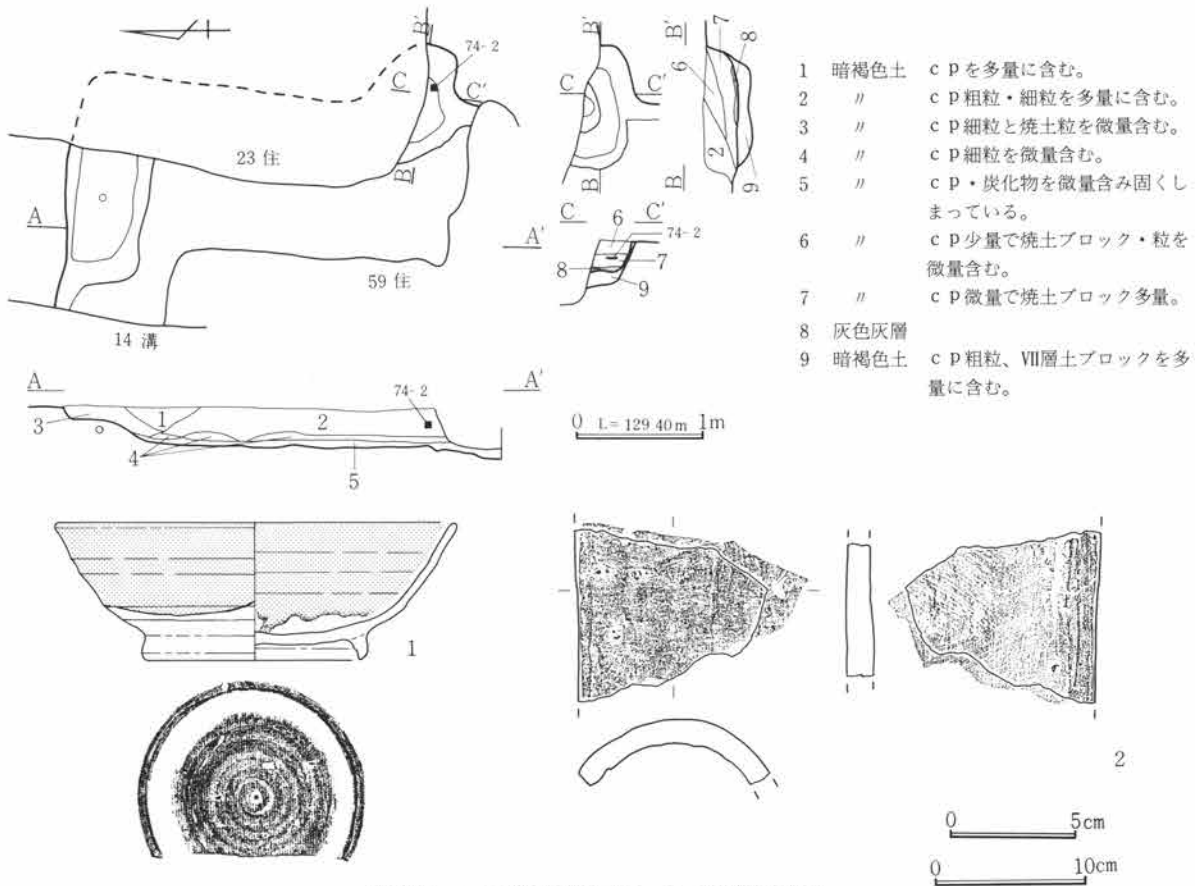
遺構名称	F区第30号住居跡	位置	18~20-F-65~67グリッド内	分類	A-9	時期	-
平面形態	隅丸方形	規模	3.30m×3.00m	主軸方位	東-38度-北	残存深度	約15cm程
備考	カマドはトレンチによって消失している。床面精査で中世ピットの他に検出された各コーナー部近くに円形のピットを4基検出したが、そのうちP ₁ ・P ₂ ・P ₄ を支柱穴と想定した。						



第73図 F区第30号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	F区第31号住居跡	位置	44~46-F-53・54グリッド内	分類	-	時期	-
平面形態	長方形?	規模	-m×-m	主軸方位	-度-	残存深度	約12cm程
備考	第23・59号住居跡、第14号溝の重複により大半は失われ、カマド半分と北壁の一部の検出ができただけであり、全体形は不明である。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在か?・馬蹄形?			主軸方位	東-9度-南	
規模	全長 - cm 屋外長 - cm 屋内長 - cm 袖間幅 - cm 燃烧部幅 - cm 煙道幅 - cm						
備考	焚口部はわずかに掘り込まれており、右袖部が残存しているが構築材等は検出されていない。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



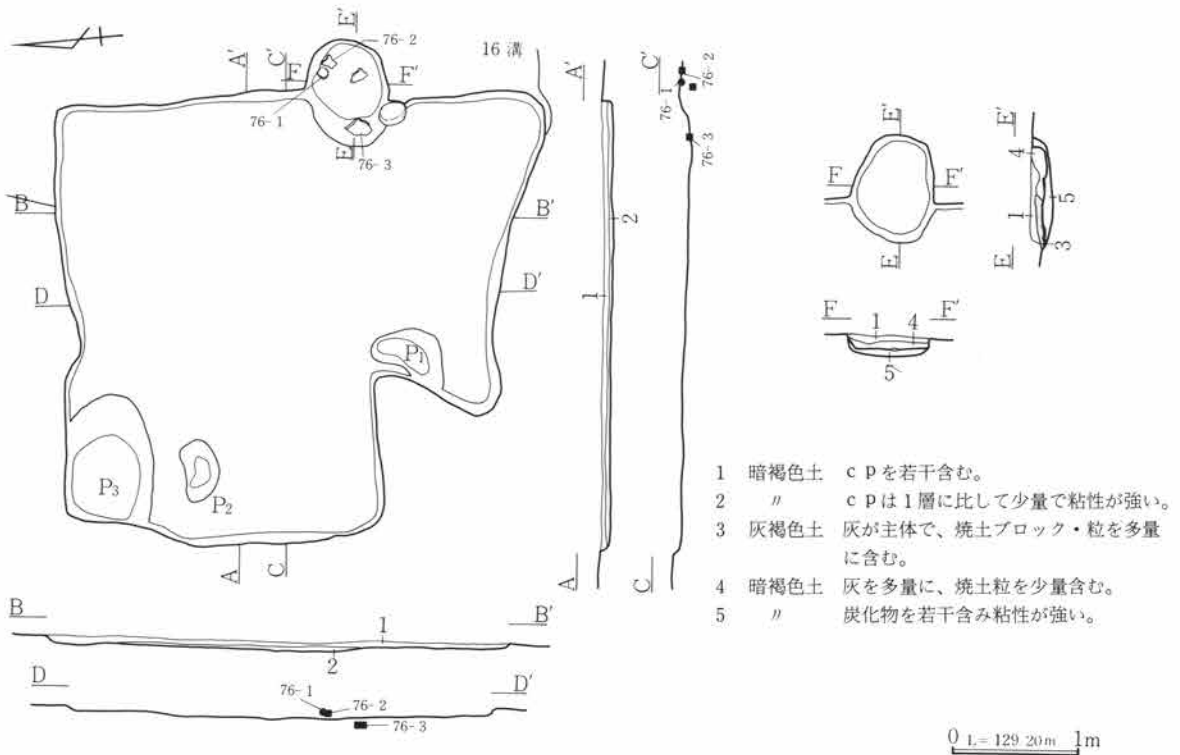
第74図 F区第31号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	F区第32号住居跡	位置	40～42-F-55～57グリッド内	分類	D-1	時期	-					
平面形態	鍵形	規模	3.55m×3.55m	主軸方位	東-5度-南	残存深度	約8cm程					
備考	第16号溝と重複しているが、壁は全周検出した。壁溝・柱穴・貯蔵穴はいずれも検出されなかった。掘り方はほとんどみられない。											
カマド	位置・形状	東壁中央わずかに南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-5度-南						
規模	全長	85cm	屋外長	40cm	屋内長	45cm	袖間幅	85cm	燃烧部幅	55cm	煙道幅	-cm
備考	焚口は、床面から半円形に掘り込んでおり、灰層は検出されなかった。袖は右袖のみ検出され、扁平な河原石を据えて構築、燃烧部も焚口部同様、焼土・灰等は検出されなかった。											

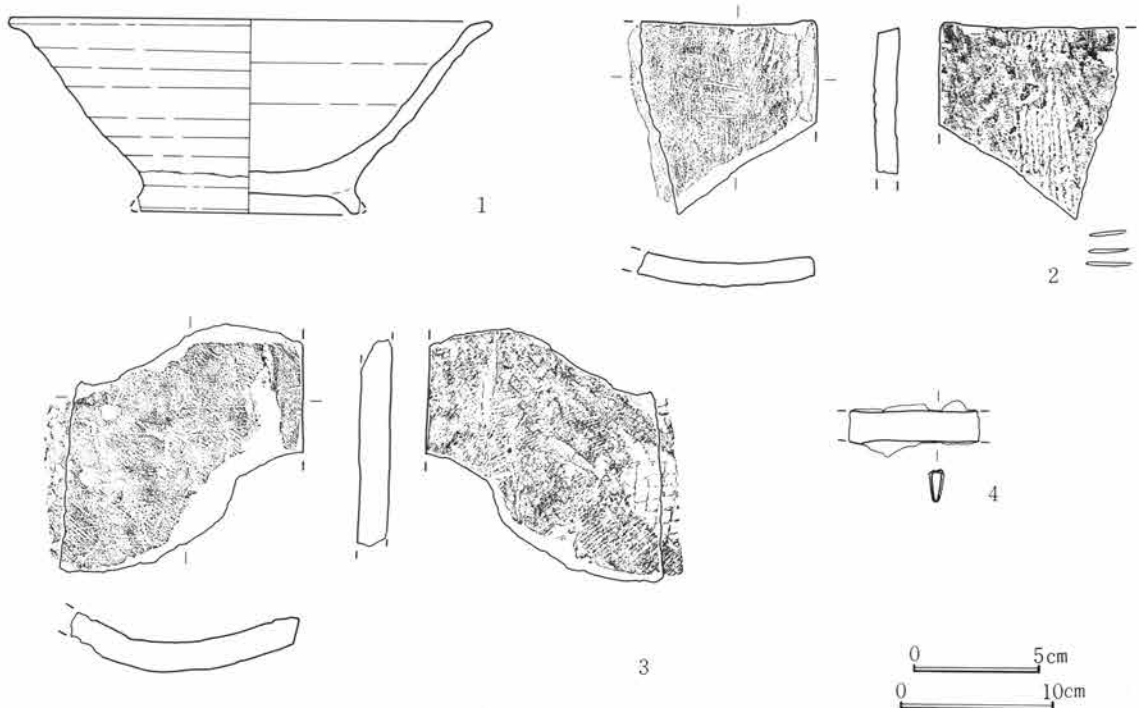
当住居跡は、第2号住居跡同様「鍵形」と形容したような特異な形態をしている。つまり、西壁北側の約3/5にあたる部分が西に張り出している。この部分が張り出しとして当住居跡に付属するののか、他の遺構との重複の結果であるのかを、明確にするにはあまりにも残存状態が不良である。しかし、わずかに残存したその覆土から検討を加えると、仮にカマドが南北に長い長方形の住居跡に伴うものとするれば東西セクション上に変化がみられるはずであるが、そうしたものは全くみられない。また逆もみられず、両セクションは単にC Pの多少及び粘性の違いから上下2層に分離することができるだけであることから、張り出し部は、当住居跡に伴うものとみることができ。その他わずかにみられる掘り方部分等、第2号住居跡と共通する要素がみられる。

遺物は、屋内からはほとんど検出されず、カマド内から出土したものが多く。

第3章 検出された遺構・遺物



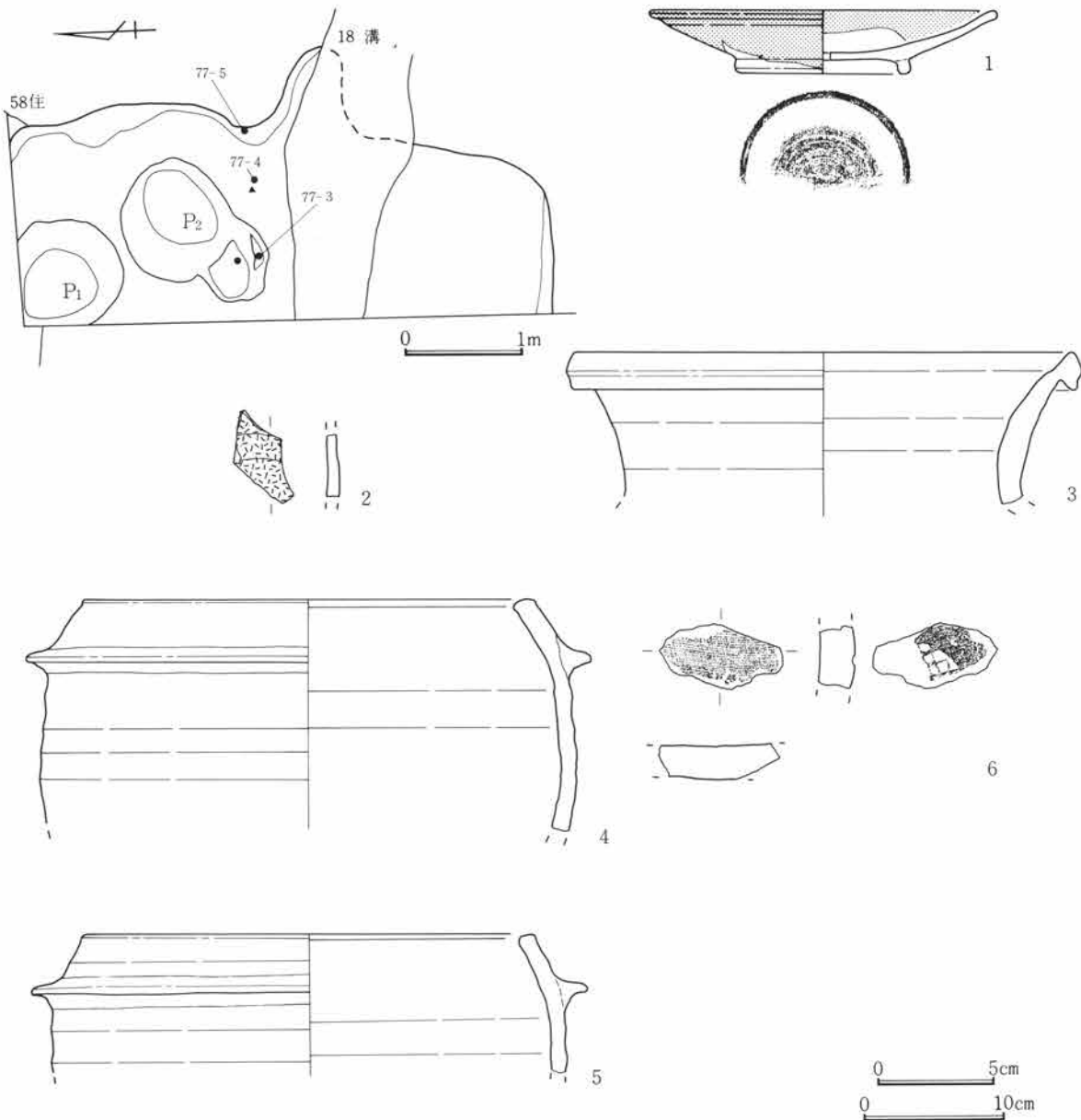
第75図 F区第32号住居跡実測図



第76図 F区第32号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第33号住居跡	位置	40~42-F-59・60グリッド内	分類	—	時期	IX
平面形態	隅丸方形？	規模	—m×—m	主軸方位	東—5度—南	残存深度	約—cm程
備考	南北及び東西農道の交叉する部分にかかっている上に、カマド部分は第18号溝によって削平を受けており、検出した部分のごくわずかである。						

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

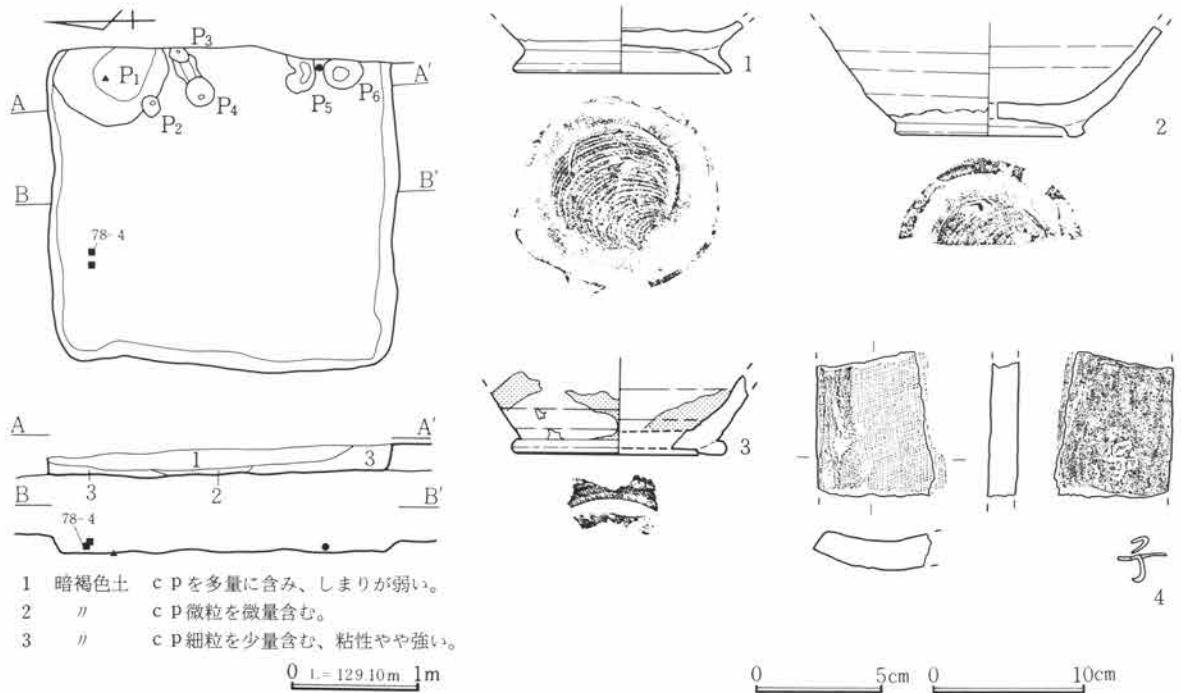


第77図 F区第33号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	F区第35号住居跡		位置	48～50-F-63・64グリッド内		分類	—	時期	—
平面形態	方	形	規模	—m×2.75m	主軸方位	東—1度—南	残存深度	約 20cm程	
備考	東壁を除いて3面を検出した。壁高は低く残存状態は不良である。床面は、VI層中で細かな凹凸が多数みられる。								

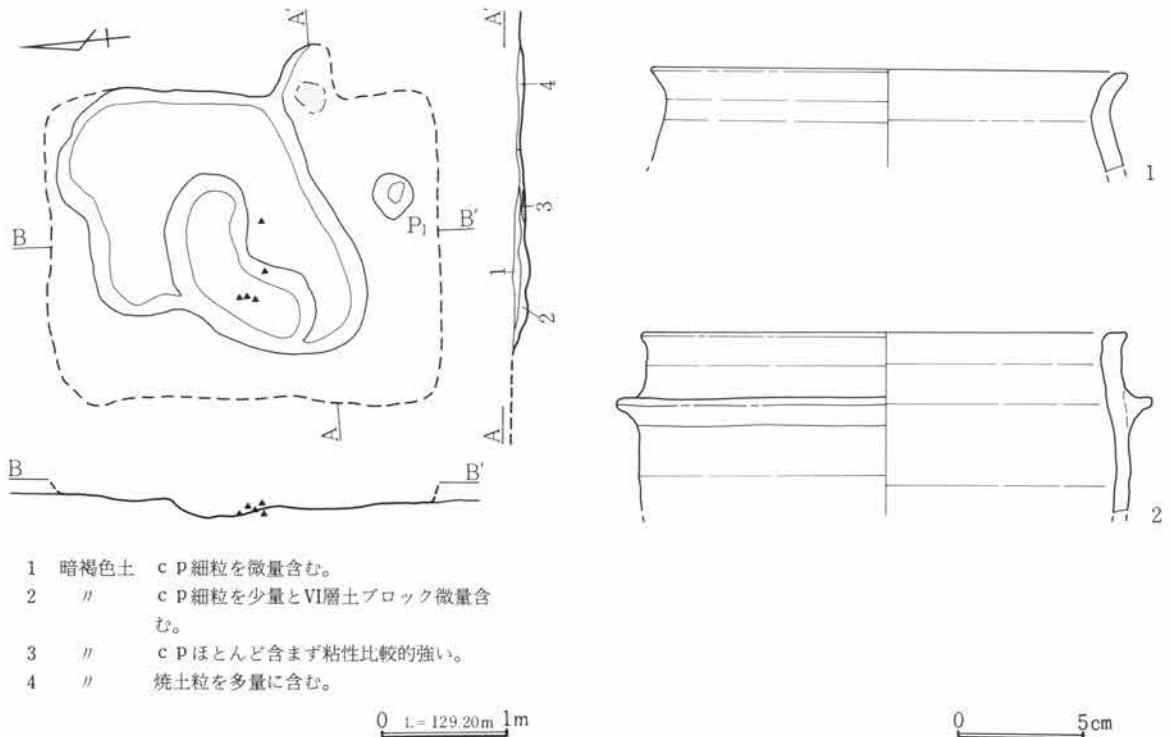
当住居跡は、F区の最北部西側に位置し、東壁は攪乱によって消失している。したがって壁3面と床面だけしか検出されておらず、本来カマドを有する住居跡であるのか否かも明確には判断できない。しかし、覆土の埋没状態は、壁際から順次埋没していったと思われる、他の住居跡によく見られるオーソドックスな状態であり、住居跡である可能性は、その残存している平面形態からもまちがいはないと思われる。また、掘り方段階で検出されている北東コーナー部の土坑及び東側中央部にみられる細い溝状の施設は、未検出の部分がどのようなになっているのか不明であり、性格も何に付属するものかも不明である。

第3章 検出された遺構・遺物



第78図 F区第35号住居跡・出土遺物実測図

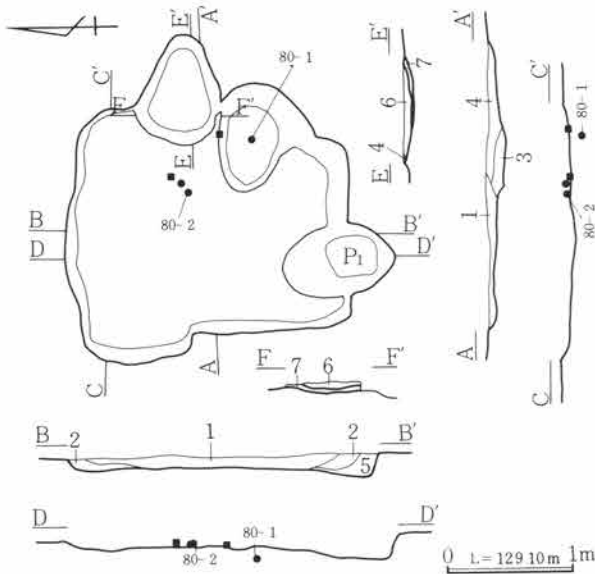
遺構名称	F区第36号住居跡	位置	49-F~0-G-41・42グリッド内	分類	—	時期	IX
平面形態	不明	規模	—m×—m	主軸方位	— — 度—	残存深度	約 4cm程
備考	確認面の下げ過ぎによって大半は消失し、中央部の住居掘り方及びカマドのごく一部を検出、カマドは形態は不明であるが、底面に円形の焼土が検出された。遺物は掘り方内より若干出土。						



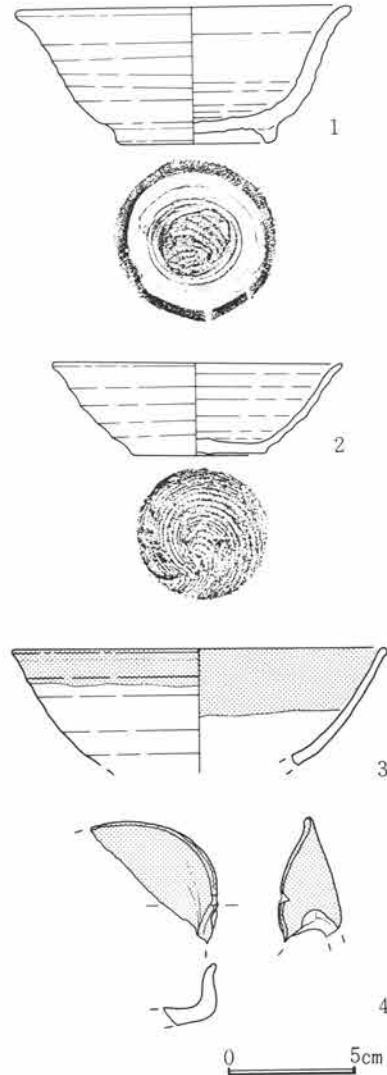
第79図 F区第36号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	F区第37号住居跡	位置	42・43-F-41・42グリッド内	分類	C-13	時期	—
平面形態	長方形?	規模	1.50m×2.20m	主軸方位	東-1度-北	残存深度	約12cm程
備考	残存状態は良好でないが、壁は全周検出した。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は、カマドすぐ南側に位置する楕円形で径約85cm、深度約5cmの土坑状掘り込みを想定した。						
カマド	位置・形状	東壁北寄り・三角形状			主軸方位	東-1度-北	
規模	全長 90cm 屋外長 55cm 屋内長 35cm 袖間幅 70cm 燃烧部幅 50cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は、半円形状の浅い掘り込みで、両袖部に構築材等は検出されていない。また、燃烧部にも焼土、灰等の層は1枚も検出されていない。						



- 1 暗褐色土 c Pと炭化物を多量に含む。
- 2 // c P・炭化物・VI層土ブロックを多量に含む。
- 3 // c Pは2層に比してやや少なく、VI層土ブロックを微量含む。
- 4 // c Pは3層と近似し、灰を多量に含む。
- 5 // c Pは微量で粘性が強い。
- 6 // c Pは微量で、炭化物・焼土粒を多量に含む。
- 7 // c Pは微量で、VI層土粒を多量に含む。

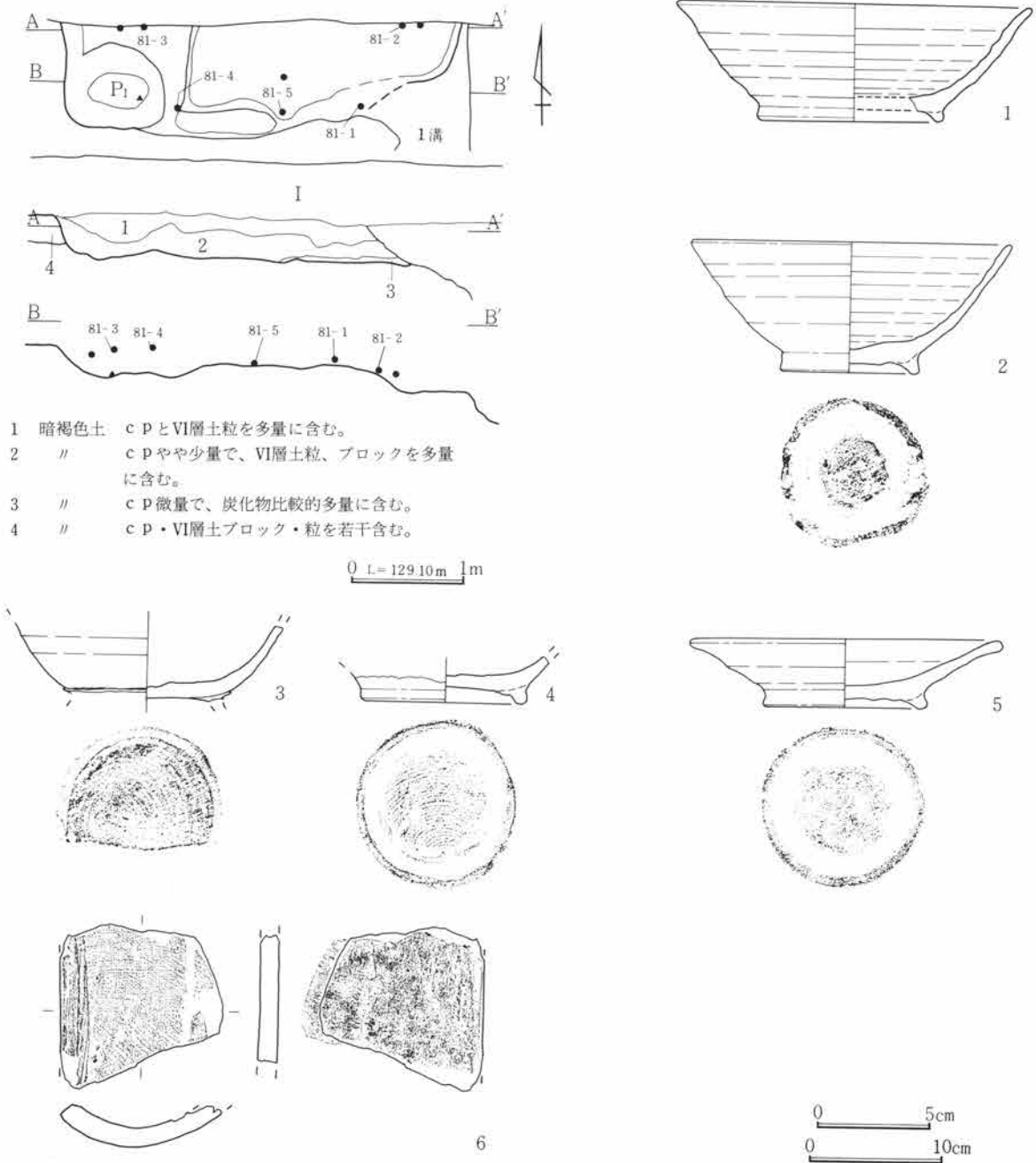


当住居跡は、規模的に今回報告中で最小の住居跡と考えられ、その形態も特異である。基本的には、南北にやや長い長方形プランの東壁北寄りにカマドが付設されたものであるが、西壁の北側約 $\frac{1}{3}$ 程度がわずかに西に張り出している上に、貯蔵穴としたものが、コーナー部になく全体として異形となっている。

第80図 F区第37号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	F区第38号址	位置	43・44-F-40～42グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	方形?	規模	3.60m×—m	主軸方位	— — 度 —	残存深度	約16cm程
備考	南側の $\frac{1}{3}$ 程度のみ検出したもので、床面としてとらえた面は平坦でなく、掘り方面である可能性がある。しかし農道面のセクションでは、判断することができなかった。						

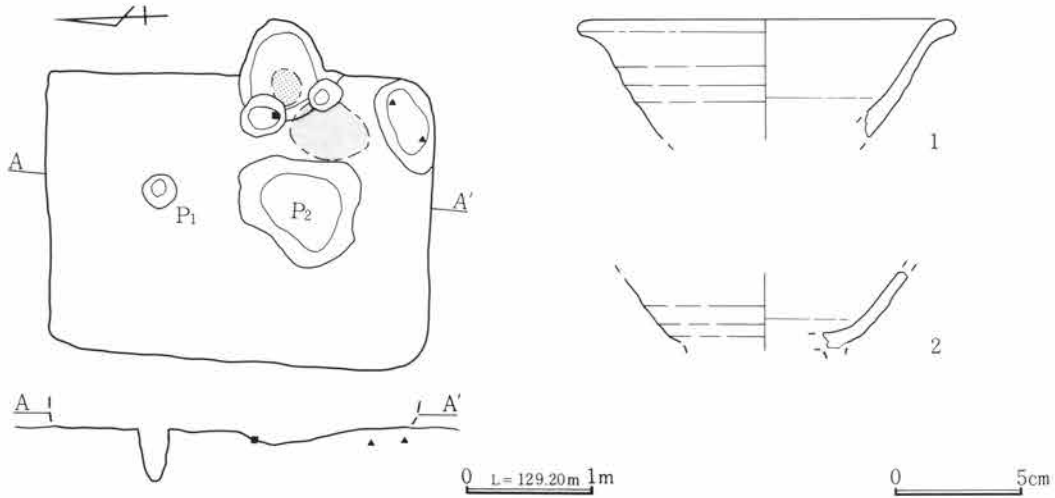
第3章 検出された遺構・遺物



第81図 F区第38号址・出土遺物実測図

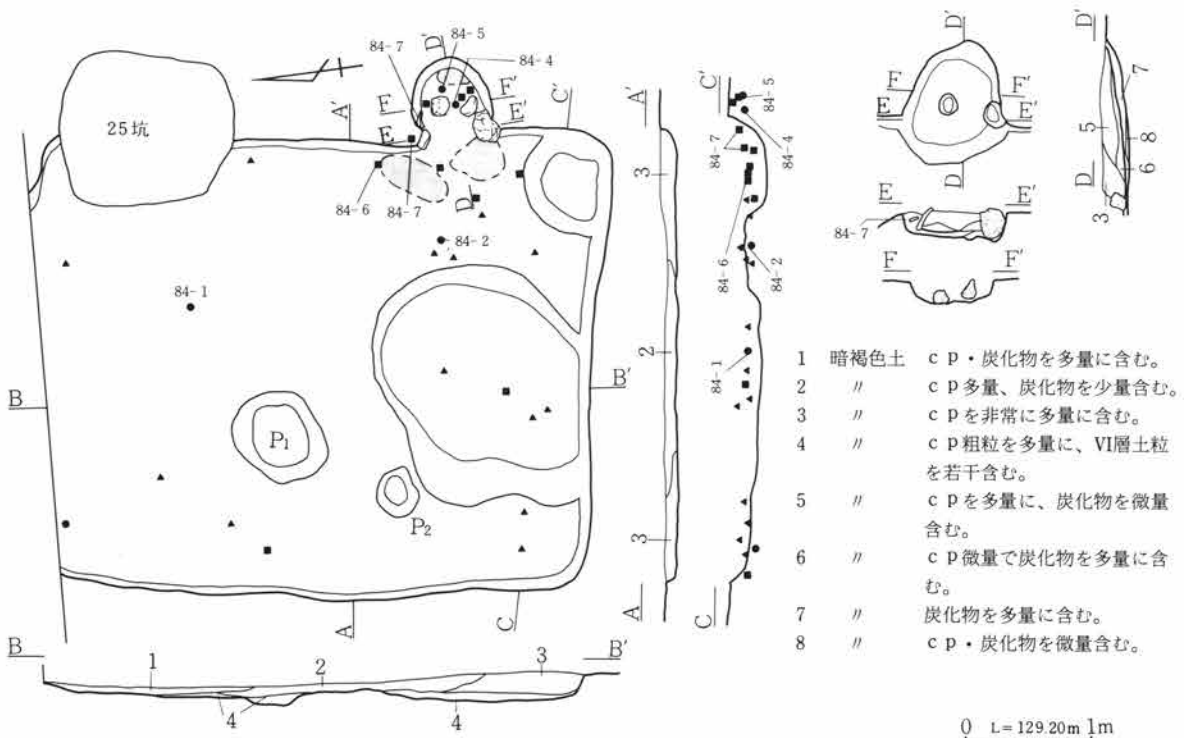
遺構名称	F区第39号住居跡	位置	42~44-F-49・50グリッド内	分類	C-10	時期	-
平面形態	長方形? 規模	- m × - m	主軸方位	- - - 度 - -	残存深度	約 - cm程	
備考	壁の立ち上がりは全く検出できず、床面はVI層中である。貯蔵穴は南東コーナー部、楕円形で規模は径約75cm、深度約13cmである。掘り方段階で中央に土坑状掘り込み及びピットを1基検出した。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り?・馬蹄形		主軸方位	東-5度-北		
規模	全長 80cm 屋外長 45cm 屋内長 35cm 袖間幅 - cm 燃烧部幅 50cm 煙道幅 - cm						
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、南側に灰層を検出、袖は両袖共に未検出であるが、掘り方段階で袖構築材据え方と考えられるピットを検出。燃烧部には円形の焼土化した部分が検出された。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



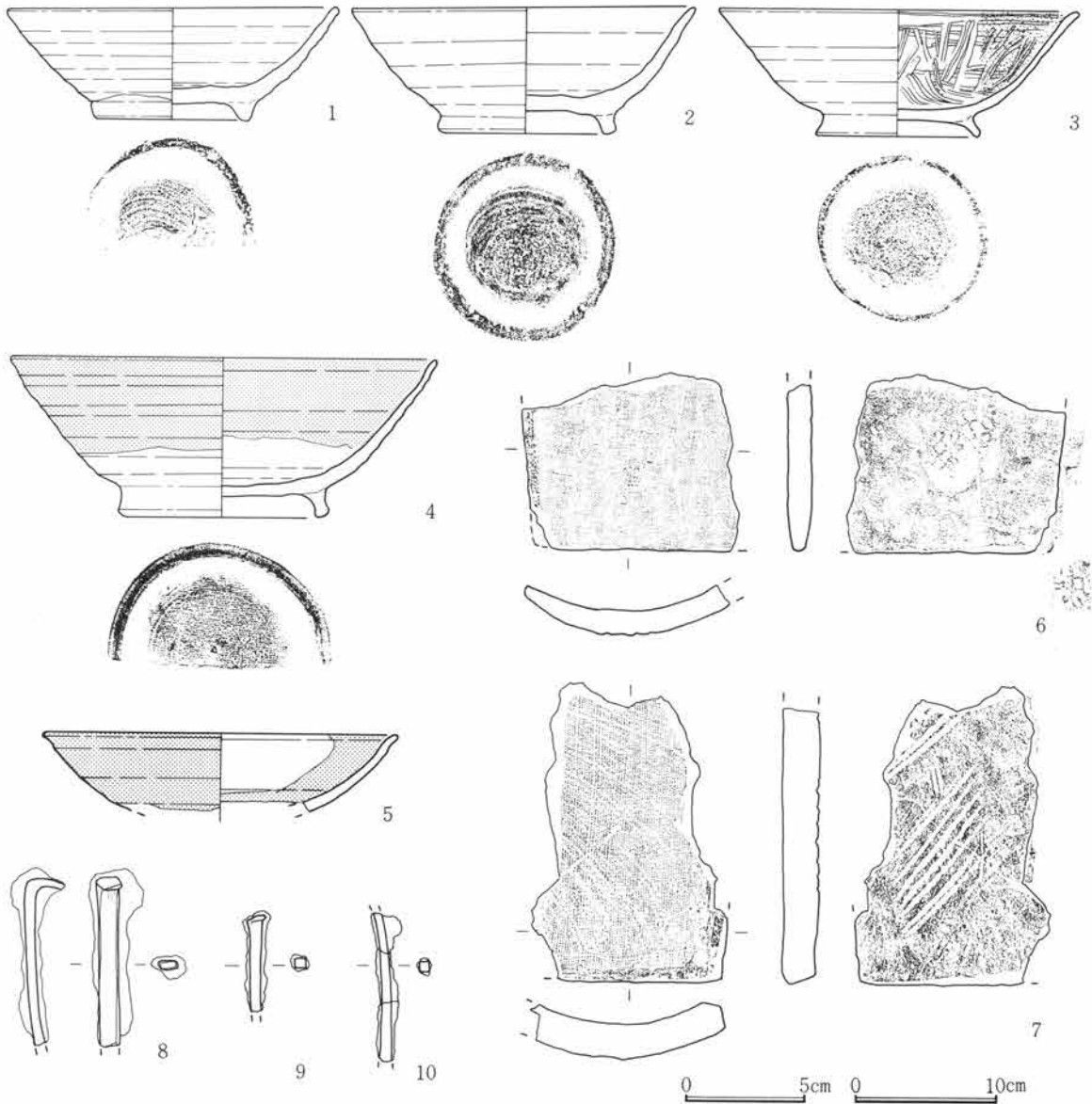
第82図 F区第39号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	F区第40号住居跡	位置	41～44-F-51～53グリッド内	分類	C-11	時期	VII?					
平面形態	隅丸長方形	規模	3.60m×4.55m	主軸方位	東-7度-南	残存深度	約12cm程					
備考	北壁部は東西農道にかかり不明、北東コーナー部で第25号土坑と重複している。南壁に接する土坑は、床面で検出した。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は南東コーナー部で円形、径約80cm、深度約13cm。											
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形		主軸方位	東-6度-北							
規模	全長	65cm	屋外長	65cm	屋内長	—cm	袖間幅	70cm	燃烧部幅	50cm	煙道幅	—cm
備考	焚口に掘り込みはなく、灰面は左右袖前面及び燃烧部奥に残存。袖は、右袖は礫を、左袖は瓦を据えて構築。燃烧部中央に2個の礫を左右に据え支脚としたものと思われる。											



第83図 F区第40号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物

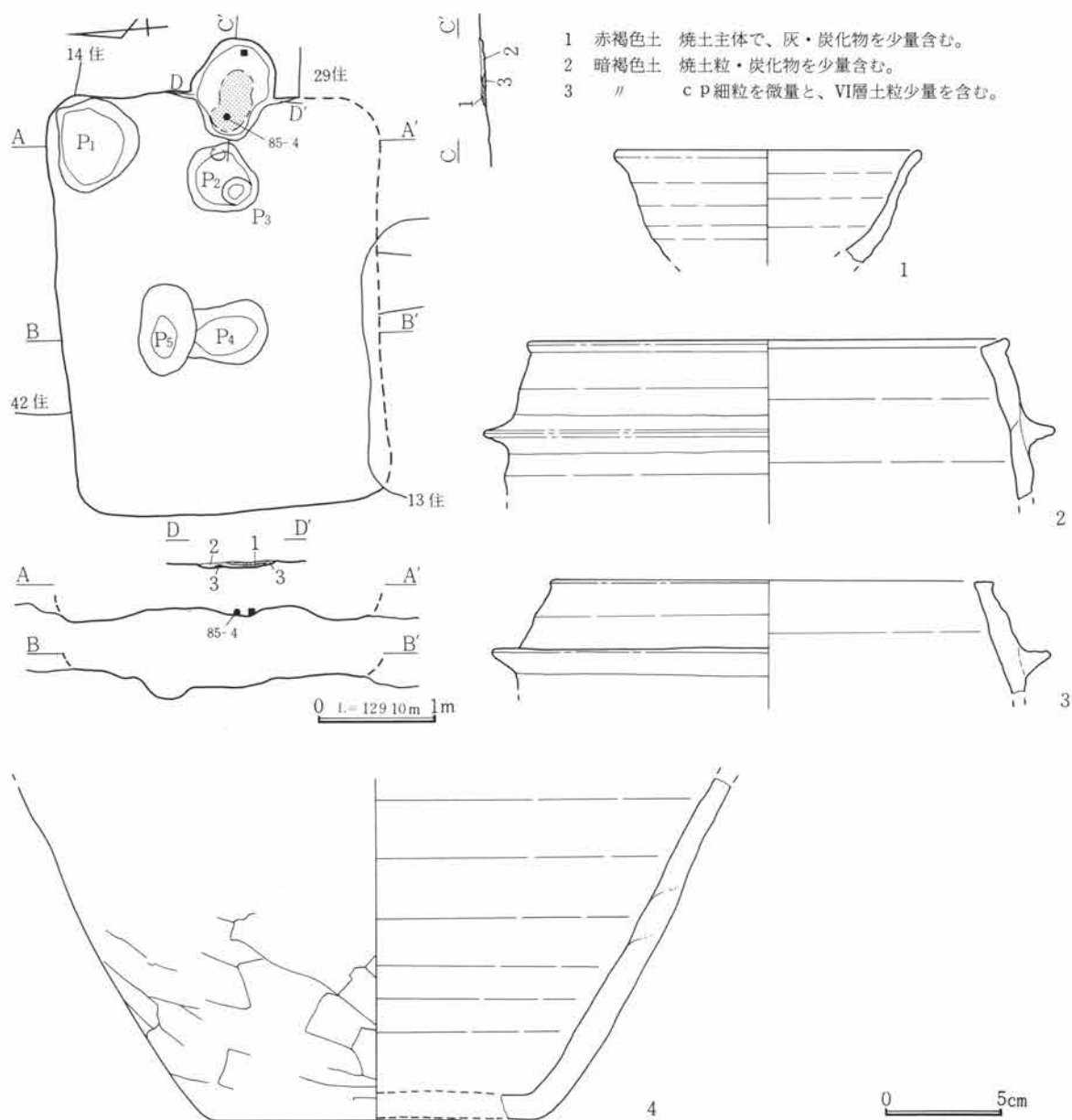


第84図 F区第40号住居跡出土遺物実測図

住居中央部西壁寄りから検出された土坑は、床面検出時に同時に掘り下げてしまったものであるが、土坑充填土の検討から、南壁に接して検出された土坑とほぼ同じ土が充填しており、ほぼ同時期に埋められたものと思われる。当住居跡に明確な貼床は認められないことから、どの段階のものかは不明である。

遺構名称	F区第41号住居跡	位置	42・43-F-47・48グリッド内	分類	D-1	時期	IX
平面形態	隅丸長方形?	規模	3.60m×2.65m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 — cm程
備考	床面は、両側のごく一部分を検出したが壁及び形態は推定である。壁溝・柱穴は残存部分には検出されておらず、なかったものと思われる。貯蔵穴は北東コーナー部検出の土坑が想定される。						
カマド	位置・形状	東壁中央に位置するものか?・馬蹄形			主軸方位	東-10度-南	
規模	全長 90cm 屋外長 50cm 屋内長 40cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 70cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は浅い掘り込みで、焼土主体の層が検出されており、燃烧部がかなり前面であった可能性がある。袖は、両袖共残存せず、痕跡も検出されていない。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

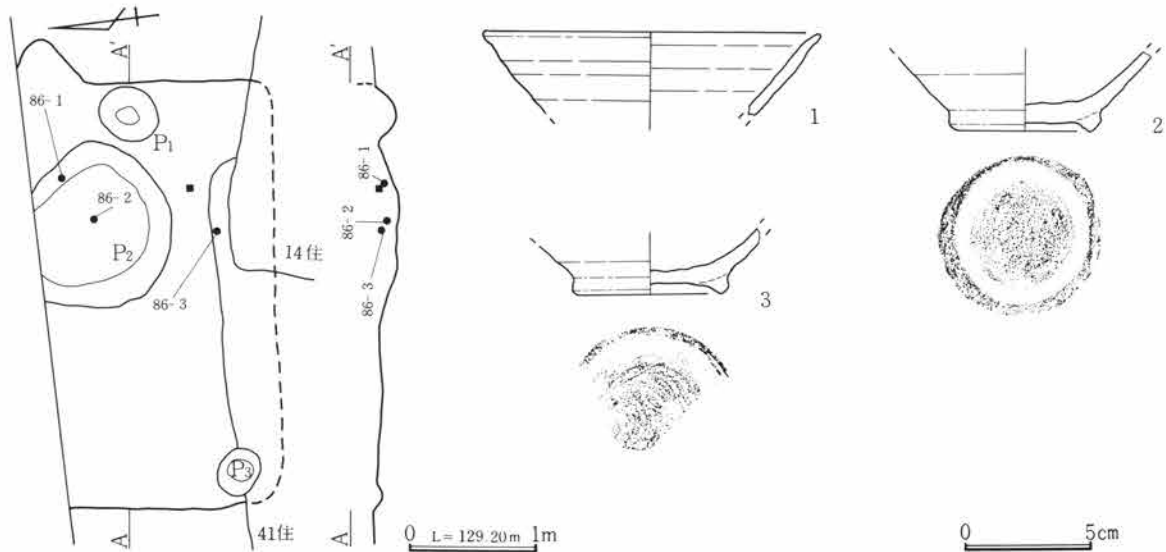


第85図 F区第41号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	F区第42号住居跡	位置	43・44-F-46～48グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形？	規模	3.40m×—m	主軸方位	東—5度—南	残存深度	約—cm程
備考	南側で第14・41号住居跡と重複し、北側は東西農道下にかかり、住居全体像を把握することができなかった。						

東西農道の南側部分の特に当住居跡の位置する付近は、遺構検出面が深く、遺構の残存状態はいずれの場合も良好とはいえない。そうした中で当住居跡は上述のごとく、他遺構との重複等で、残存状態はきわめて悪く、全体形も推定した。遺構検出面はVI層中であり、当住居跡は床面も残存せず、床下の土坑と考えられる径約1.3mの円形土坑、及び径約40cm程の円形ピットを2基検出したに止った。カマドは平面上に位置を推定してあるが、焼土等が残存していたわけではない。農道南面の土層面においても、カマドを想定させるものは検出されていないことから、F区第3・20号住居跡との重複によって失われたものと思われる。

第3章 検出された遺構・遺物



第86図 F区第42号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	F区第43号址	位置	41～43-F-65・66グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	不整形	規模	—m×—m	主軸方位	— 度—	残存深度	約 17cm程
備考	第44号住居跡との重複によって主体は失われたと考えられる。浅存部中央に径約25・35cm、深度約5cm程の円形ピットが2基南北に並んで検出された。						

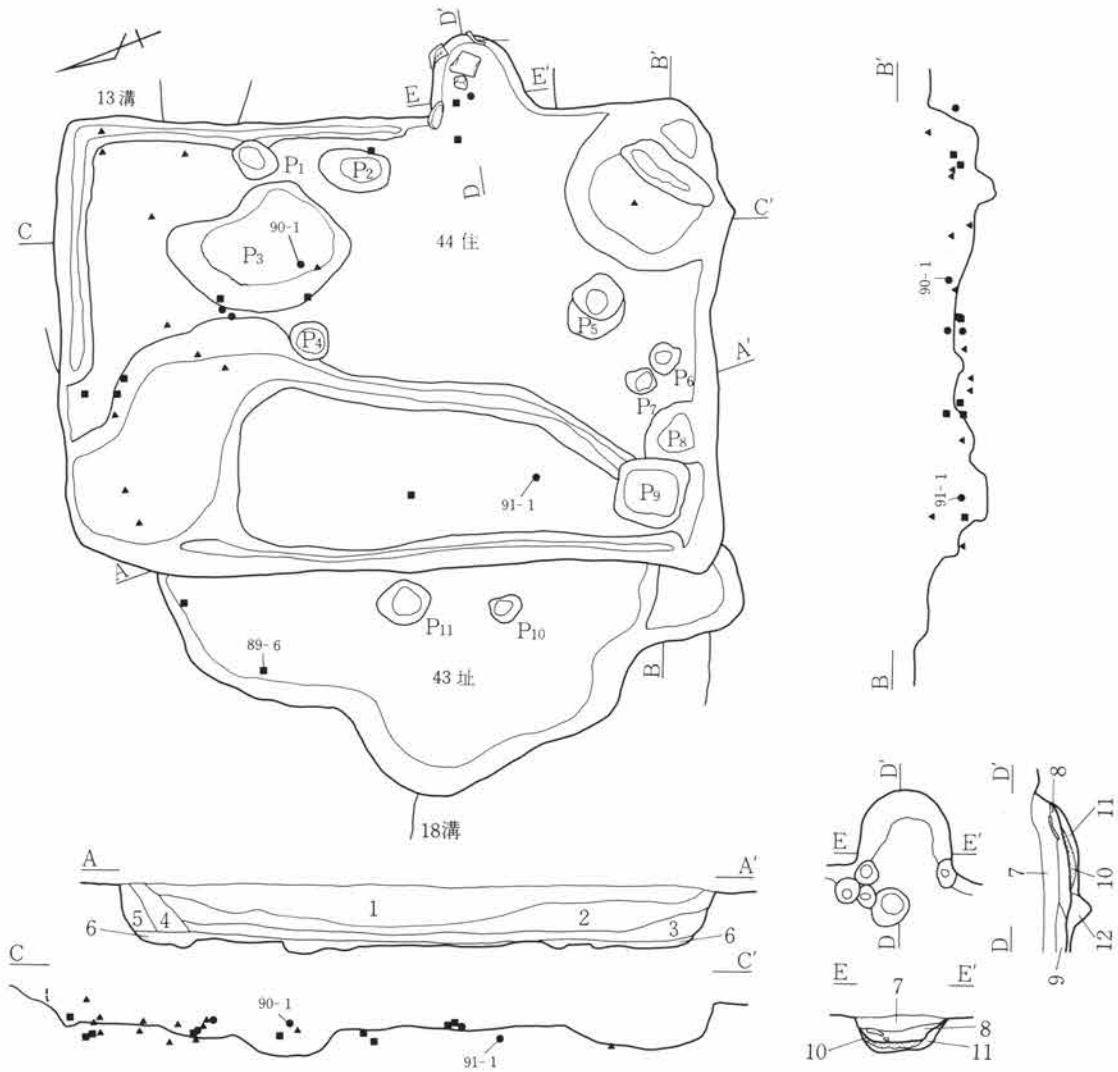
遺構名称	F区第44号住居跡	位置	41～43-F-63～65グリッド内	分類	C-8	時期	IX
平面形態	長方形	規模	3.60m×5.20m	主軸方位	東-22度-南	残存深度	約 45cm程
備考	西側で第43号址・第18号溝と重複している。壁溝は、カマドから北東コーナー部及び北壁の約½程度まで検出された。貯蔵穴は、南東コーナー部で円形。規模は径約135cm、深度約10cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-8度-南	
規模	全長 70cm	屋外長 70cm	屋内長 — cm	袖間幅 90cm	燃烧部幅 60cm	煙道幅 — cm	
備考	焚口は掘り込み、灰等は全く検出されていない。袖は左袖のみ残存し、扁平な河原石を据えて構築。燃烧部には、焼土層が1枚検出され、中央部北寄りに支脚を検出。						

第44号住居跡は、南北農道下にかかっており、当初は西側調査区分約½を先行調査した。この段階で第43号址が検出され、併行調査を行った。さらに第43号址及び第44号住居跡は、第18号溝と重複しており、新旧関係を把握するために、土層面での観察を行った。その結果、第44号住居跡の覆土に他遺構との重複を示すような痕跡はみられず、いわゆるレンズ状堆積の状態を呈していることから、第43号址・第18号溝が先行するものと判断した。第43号址と第18号溝との関係は、第18号溝確認段階で第43号址が検出されたことから、第18号溝が先行するものとみられる。つまり第18号溝→第43号址→第44号住居跡という関係が考えられる。

第43号址は、第44号住居跡によって削平されているため、全体像をつかむことはできず、したがってその性格を特定することは困難である。しかし、当址出土遺物の中に1点ではあるが、埴塼の破片がみられる他、砥石・鉄器等が含まれていることは、鍛冶関連遺構のような、いわゆる一般的な住居跡とは違った性格を有する遺構であることを示唆するものと思われる。

第44号住居跡は、後日農道を撤去し先行調査分と合わせて、全体を検出した。その結果、北西コーナー部から南西コーナー部を連結する形で溝状の施設を検出したが、性格は不明である。

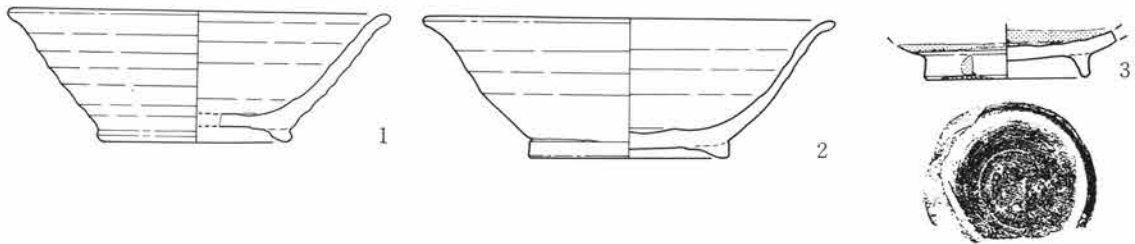
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



- | | | | |
|--------|-----------------------------|-----------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | c P と炭化物を少量含む。VI層土粗粒を斑状に混入。 | 7 // | c P 細粒を少量含む、溝による攪乱か? |
| 2 // | c P と炭化物を少量含む。 | 8 // | c P 微粒を微量、焼土粒を少量含む。 |
| 3 // | c P と炭化物、VI層土ブロックを斑状に混入。 | 9 // | c P 少量で粘性比較強い。 |
| 4 // | c P を少量とVI層土ブロックを若干含む。 | 10 赤褐色焼土層 | |
| 5 // | c P 微量で、焼土粒を微量含む。 | 11 暗褐色土 | 焼土粒を微量、白色スコリア少量含む。 |
| 6 // | c P 微量で、粘性比較強い。 | 12 // | c P 粗粒と炭化物を若干含む。 |

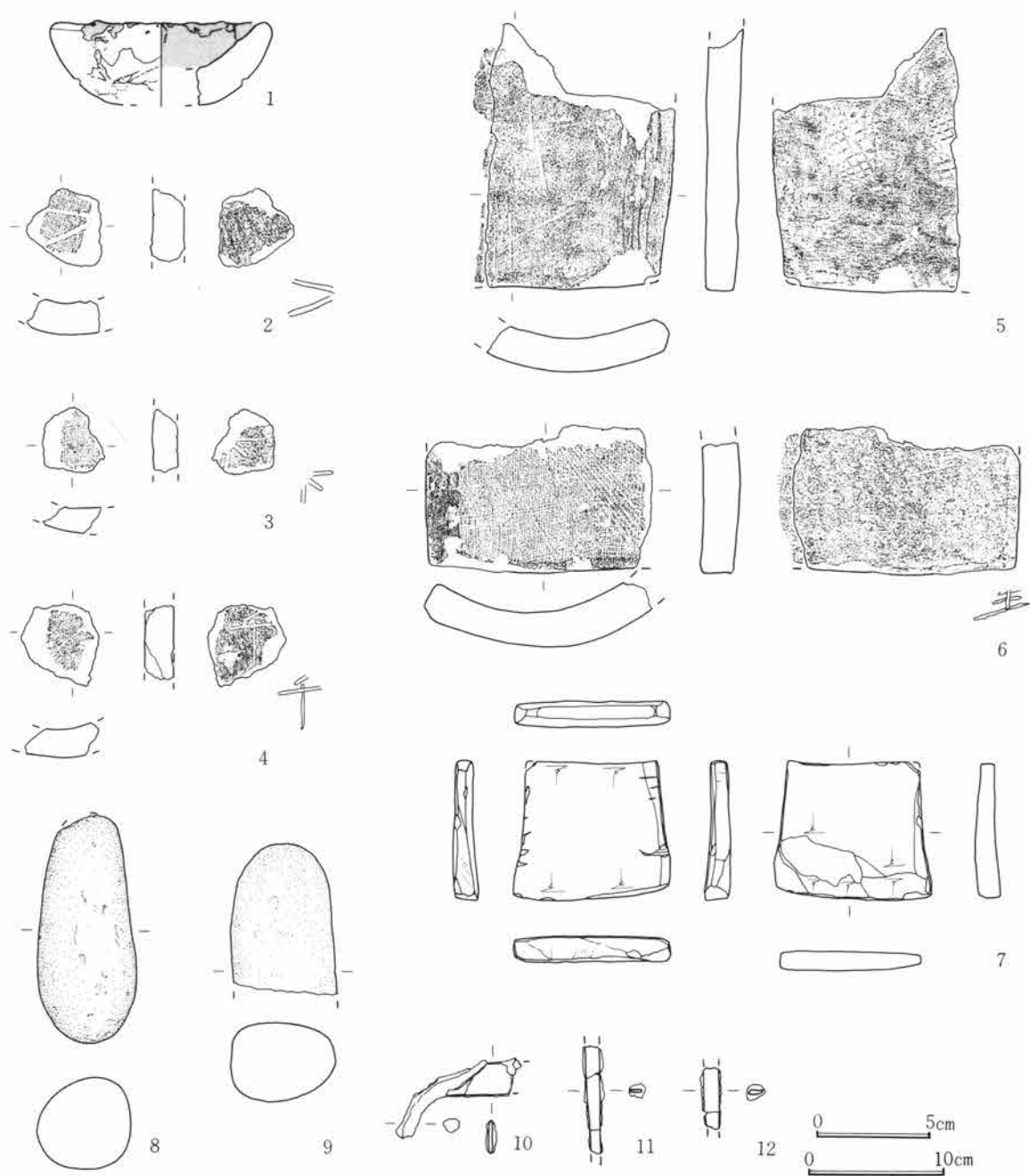
第87図 F区第43号址・44号住居跡実測図

0 L=129.50m 1m

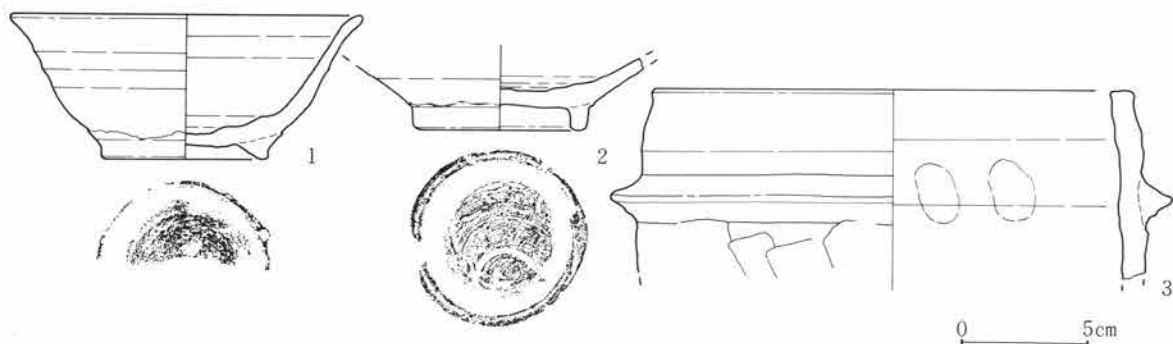


0 5cm

第88図 F区第43号址出土遺物実測図

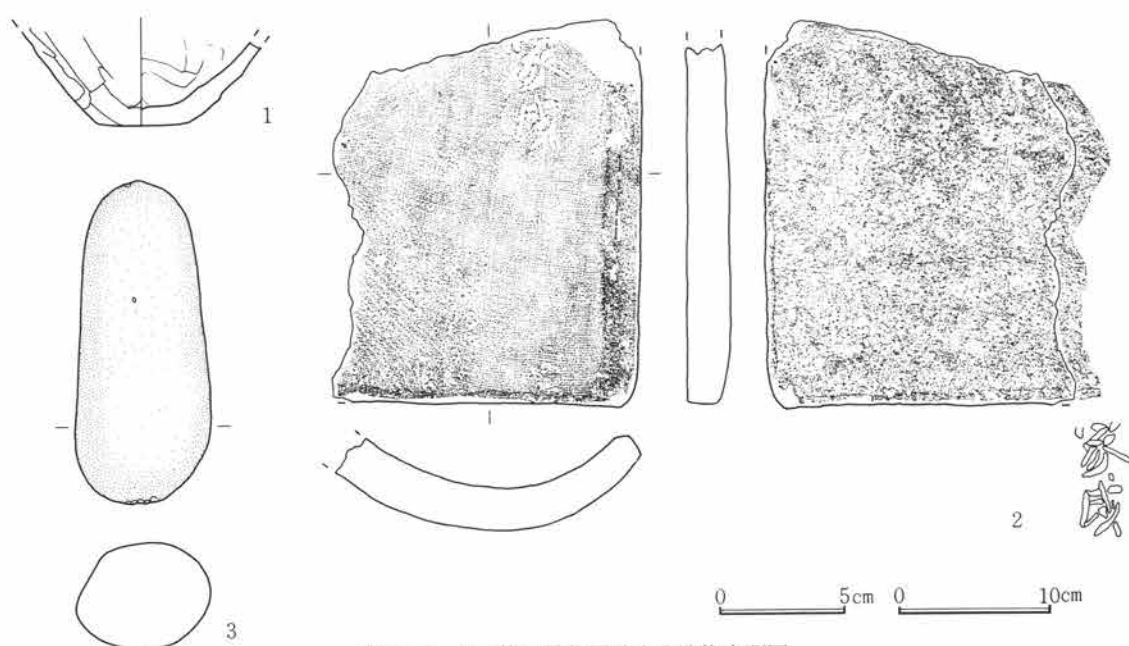


第89図 F区第43号址出土遺物実測図



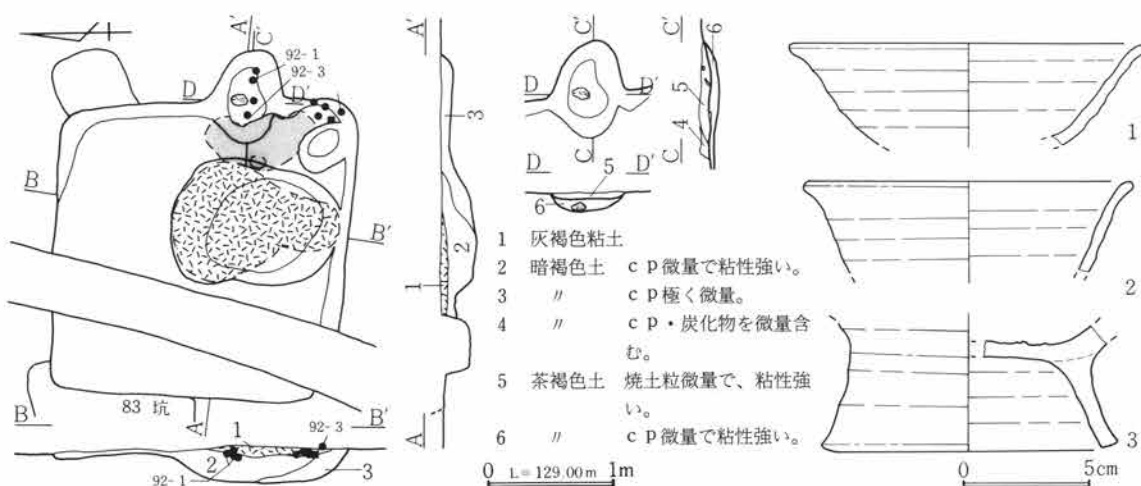
第90図 F区第44号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第91図 F区第44号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第45号住居跡	位置	5・6-F-50～52グリッド内	分類	A-9	時期	IX
平面形態	隅丸方形	規模	一m×2.35m	主軸方位	東-1度-北	残存深度	約10cm程
備考	西側を中世溝と重複し、掘り込みも浅いことから東側約1/2の検出に止った。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は、南東コーナー部やや西寄り。円形で径約45cm、深度約7cm。中央南寄りに粘土範囲検出。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-2度-南	
規模	全長 75cm 屋外長 40cm 屋内長 35cm 袖間幅 95cm 燃烧部幅 30cm 煙道幅 一 cm						
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで前面に灰面が検出された。袖は両袖共に残存せず、燃烧部には焼土層が残存し、中央北寄りに礎を据えて支脚としている。						

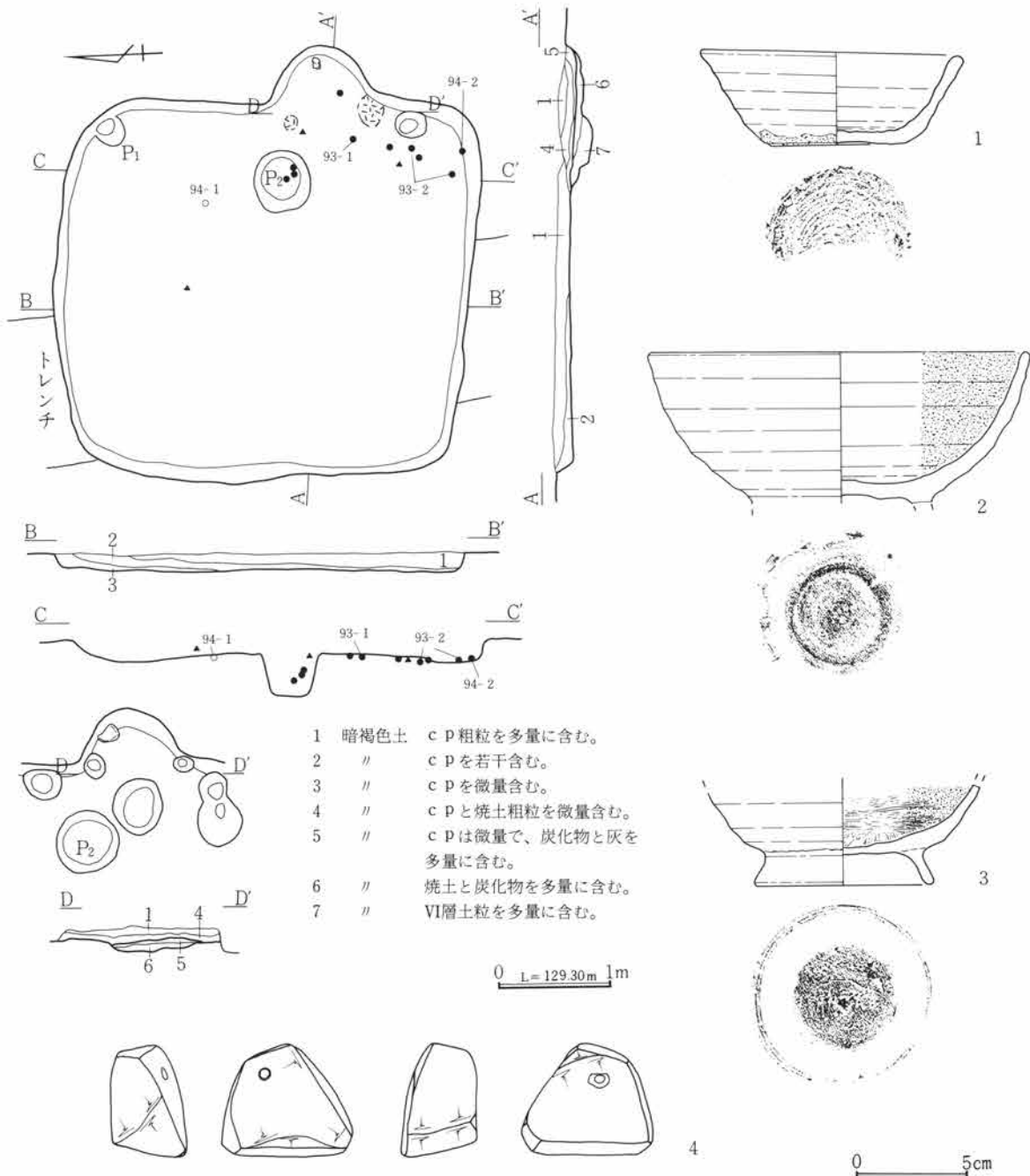


第92図 F区第45号住居跡・出土遺物実測図

カマド前面の住居中央南寄りに粘土が面的に広がった部分を検出した。厚さは約5cm程度で、下部に径約140cm程の不整円形の土坑が検出された。土坑充填土中に粘土はみられず、土坑平面形と粘土範囲は一致しないが、土坑上面に貼られたものと考えられる。また、粘土面の一部にカマドからの灰面がかかっている。

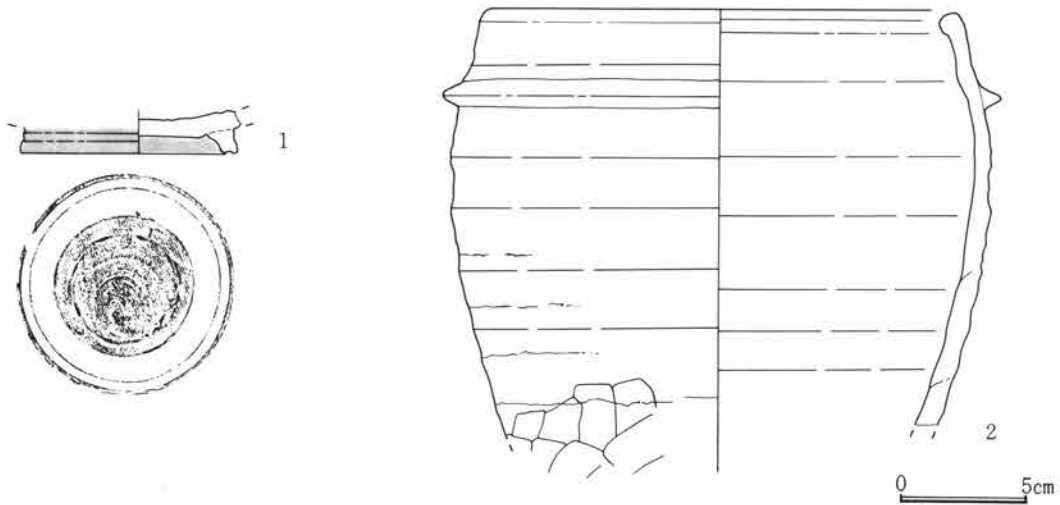
第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	F区第46号住居跡	位置	6～8-F-55～57グリッド内	分類	A-3	時期	IX
平面形態	隅丸方形	規模	3.40m×3.75m	主軸方位	東-7度-南	残存深度	約15cm程
備考	壁は全周検出され状態は比較的良好である。床面はVII層にごく近いVI層中と考えられる。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴も明確な掘り込みとしては検出されていない。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-2度-北	
規模	全長 55cm	屋外長 55cm	屋内長 1cm	袖間幅 110cm	燃烧部幅 80cm	煙道幅 1cm	
備考	焚口は床面と同レベルで焼土・灰は検出されていない。袖は、やや屋内側に2カ所粘土が残存していた。燃烧部は、焚口から同レベルで焼土等は残存していない。						



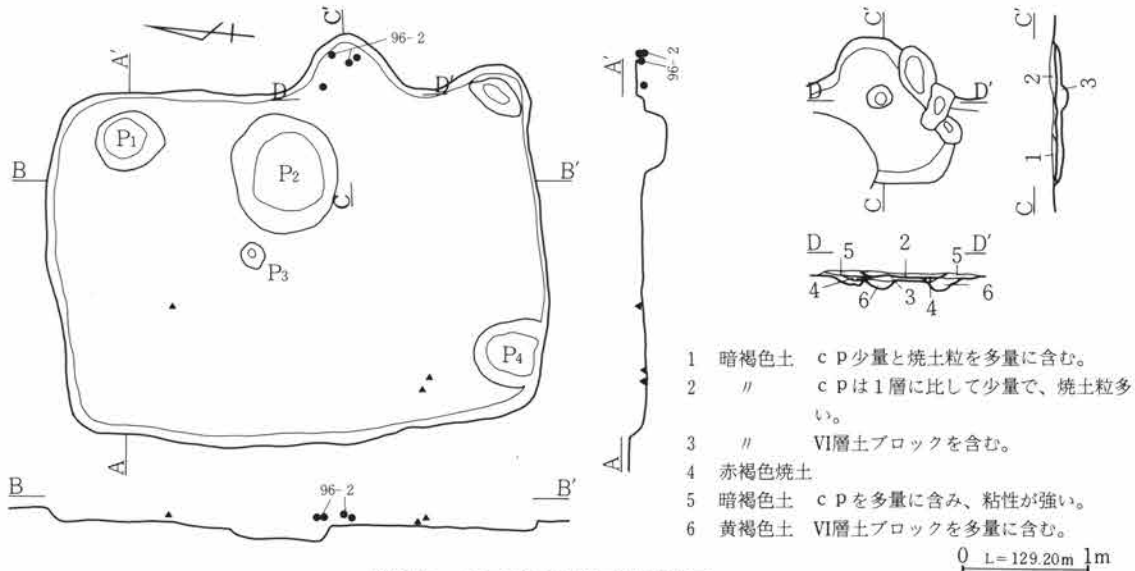
第93図 F区第46号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第94図 F区第46号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第47号住居跡		位置	2～4-F-57・58グリッド内		分類	C-10	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	2.75m×3.95m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約10cm程		
備考	壁は全周検出したが残存状態は不良。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は南東コーナー部に検出され、楕円形で規模は、径約45cm、深度約3cmである。カマド前面北寄りに円形土坑を検出。								
カマド	位置・形状	東壁やや南寄り・三角形			主軸方位	東-7度-北			
規模	全長 50cm	屋外長 50cm	屋内長 — cm	袖間幅 120cm	燃烧部幅 65cm	煙道幅 — cm			
備考	焚口は、掘り込み、灰面等は検出されず、袖は両袖共に未検出。燃烧部には両側近くに焼土層がわずかに検出された。								



第95図 F区第47号住居跡実測図

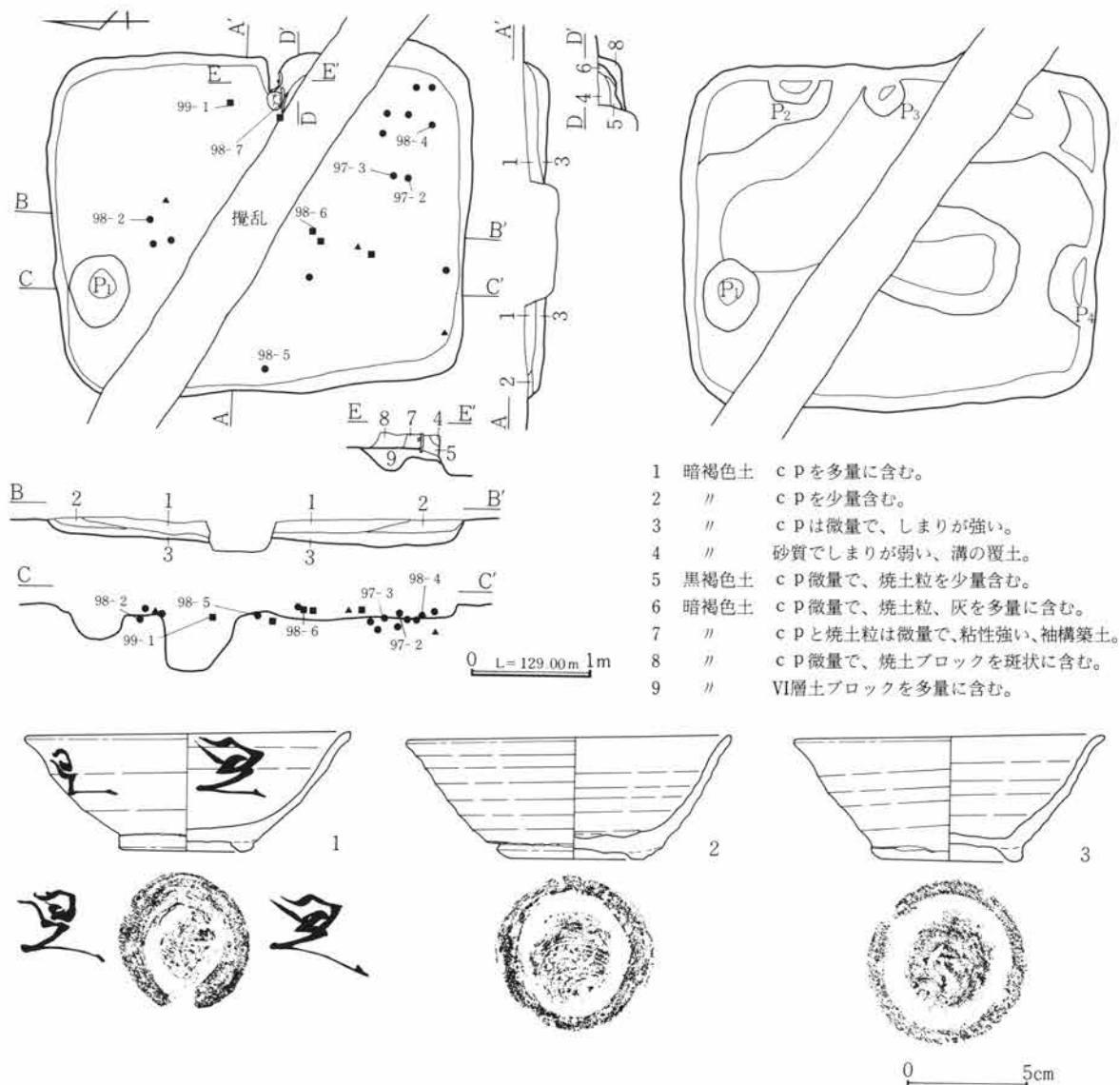
当住居跡は、床面検出時確認した床下の土坑も、併行して調査した。その結果北東コーナー及び南西コーナーに円形の土坑を2基検出した。また、カマド前面やや北側に検出された土坑は、円形で規模は径約90cm 深度約10cmである。底面は平坦でわずかに遺物が出土している。この土坑上面にはカマド構築時の土が上を覆っており、カマドの再構築の痕跡が認められないことから、住居構築時の掘削と考えられる。

第3章 検出された遺構・遺物



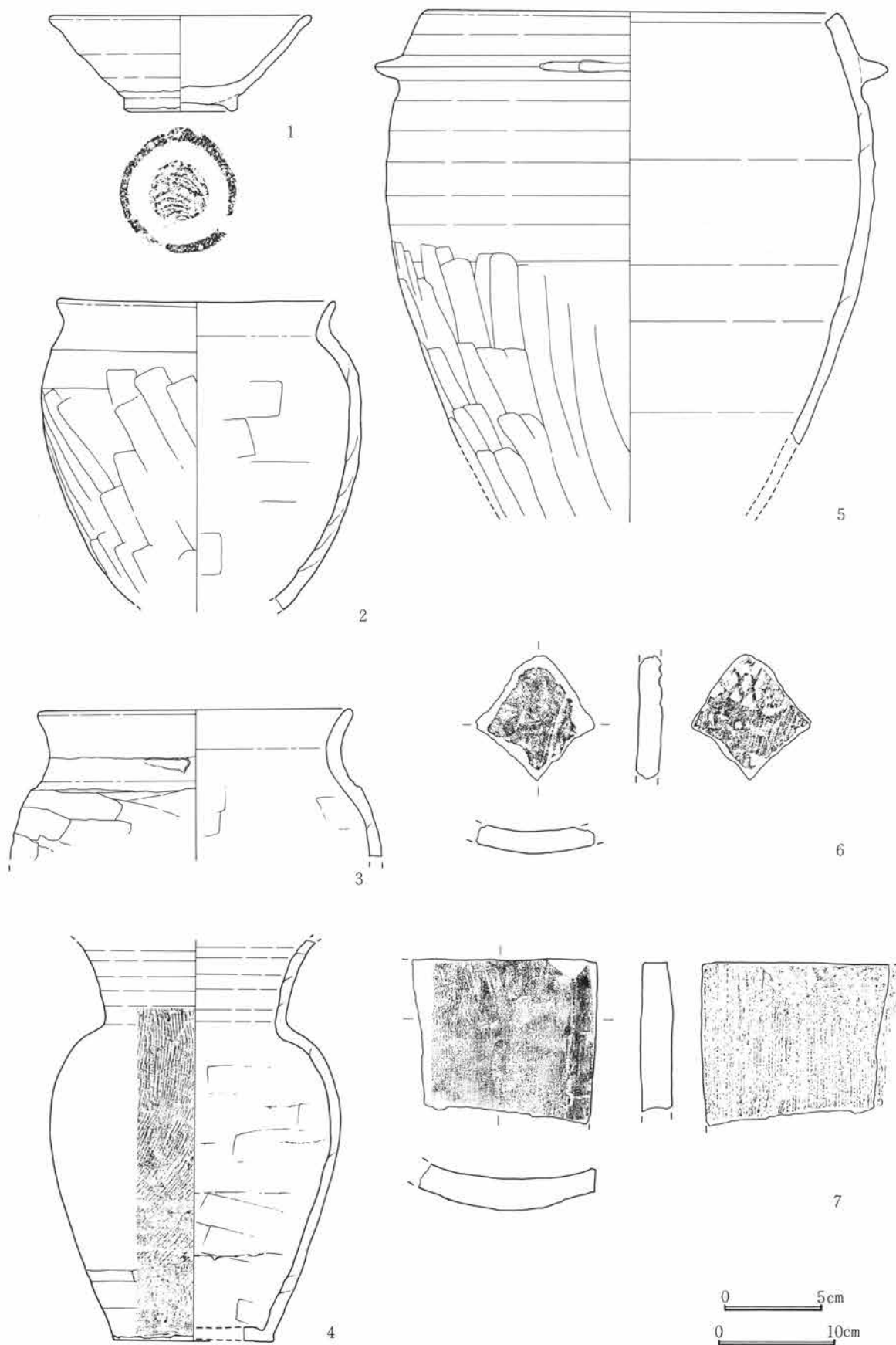
第96図 F区第47号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第49号住居跡	位置	1～3-F-44・45グリッド内	分類	C-10	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形	規模	2.80m×3.55m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約13cm程
備考	カマドは後世の溝によって攪乱され、左袖部のみ残存している。位置は東壁やや南寄りで、袖には礫と瓦を使用している。遺物は床面上に面的広がりをもって検出された。						



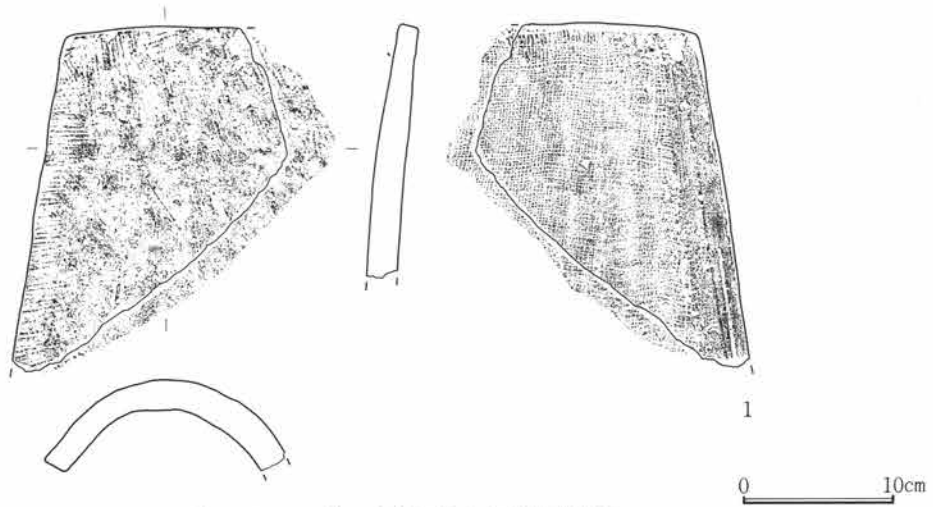
第97図 F区第49号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



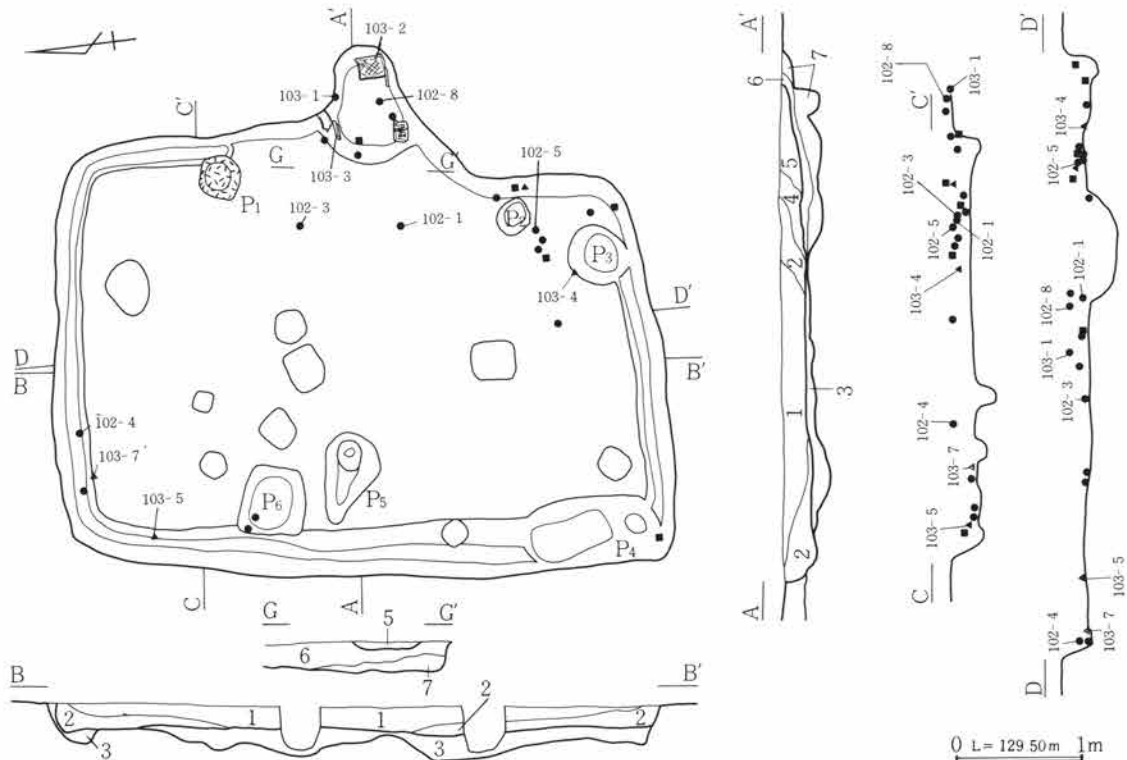
第98図 F区第49号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



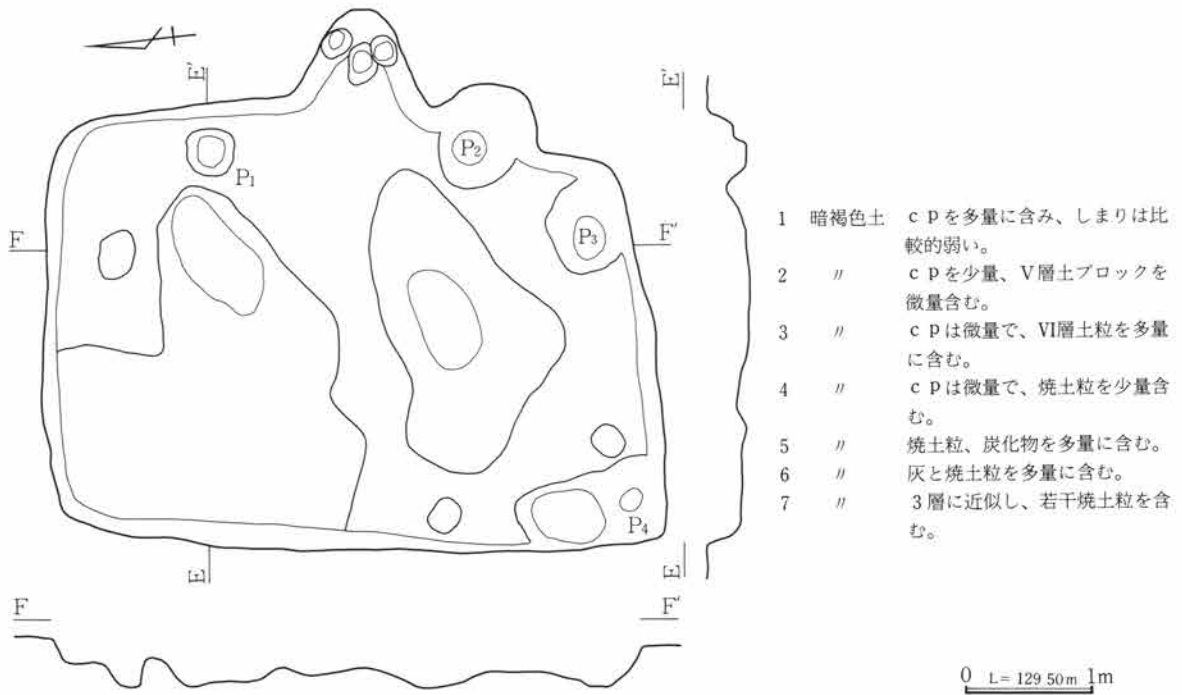
第99図 F区第49号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第50号住居跡	位置	8～11-F-61～63グリッド内	分類	C-1	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	3.40m×4.90m	主軸方位	東-6度-南	残存深度	約25cm程
備考	壁は全周検出したが、東壁のカマド南側部は、北側部の延長上になく、形は整っていない。壁溝はカマド両側部を除き検出され、両端部に円形小ピットがみられることが特徴である。						
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央部で若干屋外に張り出す・馬蹄形		主軸方位	東-3度-南		
規模	全長 95cm 屋外長 1cm 屋内長 1cm 袖間幅 100cm 燃烧部幅 50cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、灰面は検出されていない。袖は両袖共に平瓦を2枚ずつ組んで構築している。燃烧部には灰と焼土を多量に含む層が残存し、奥壁部に瓦が検出されている。						

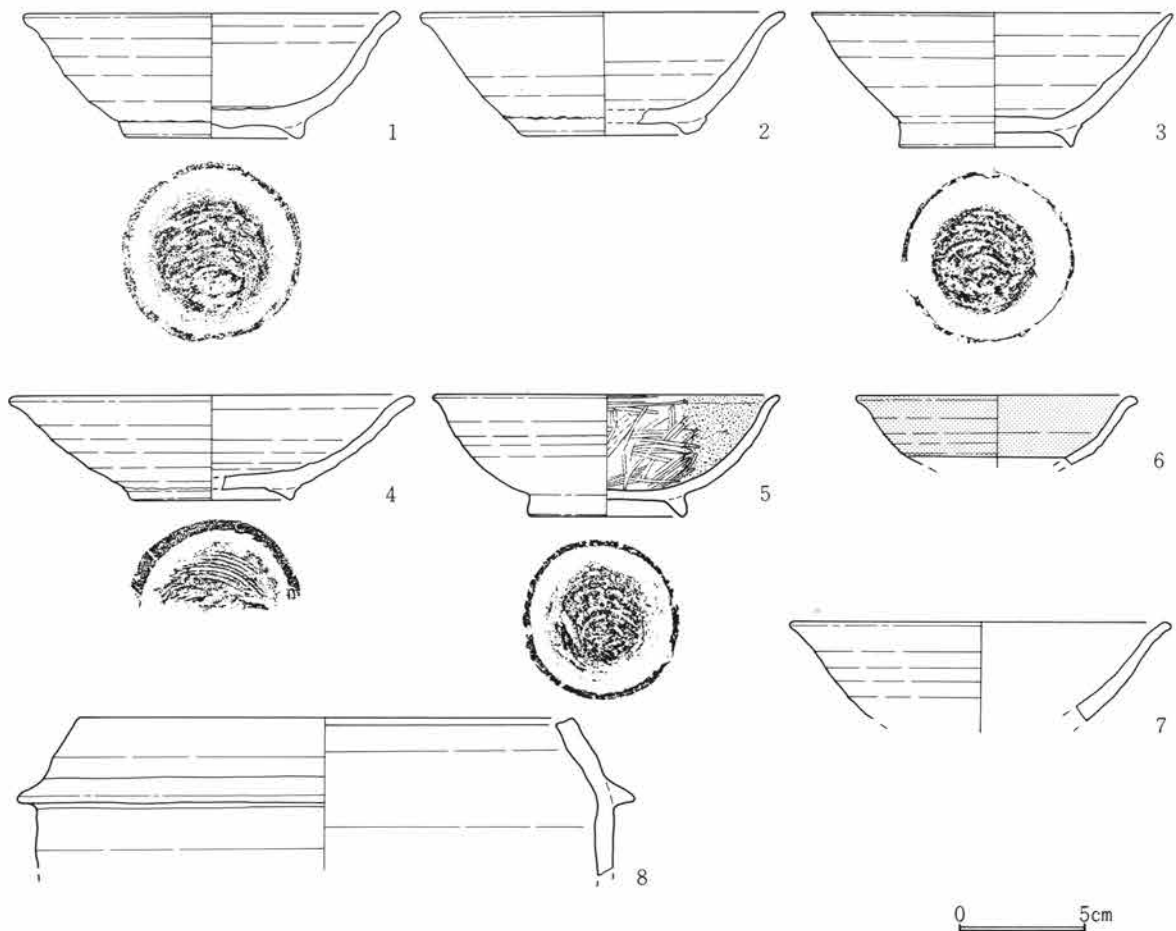


第100図 F区第50号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

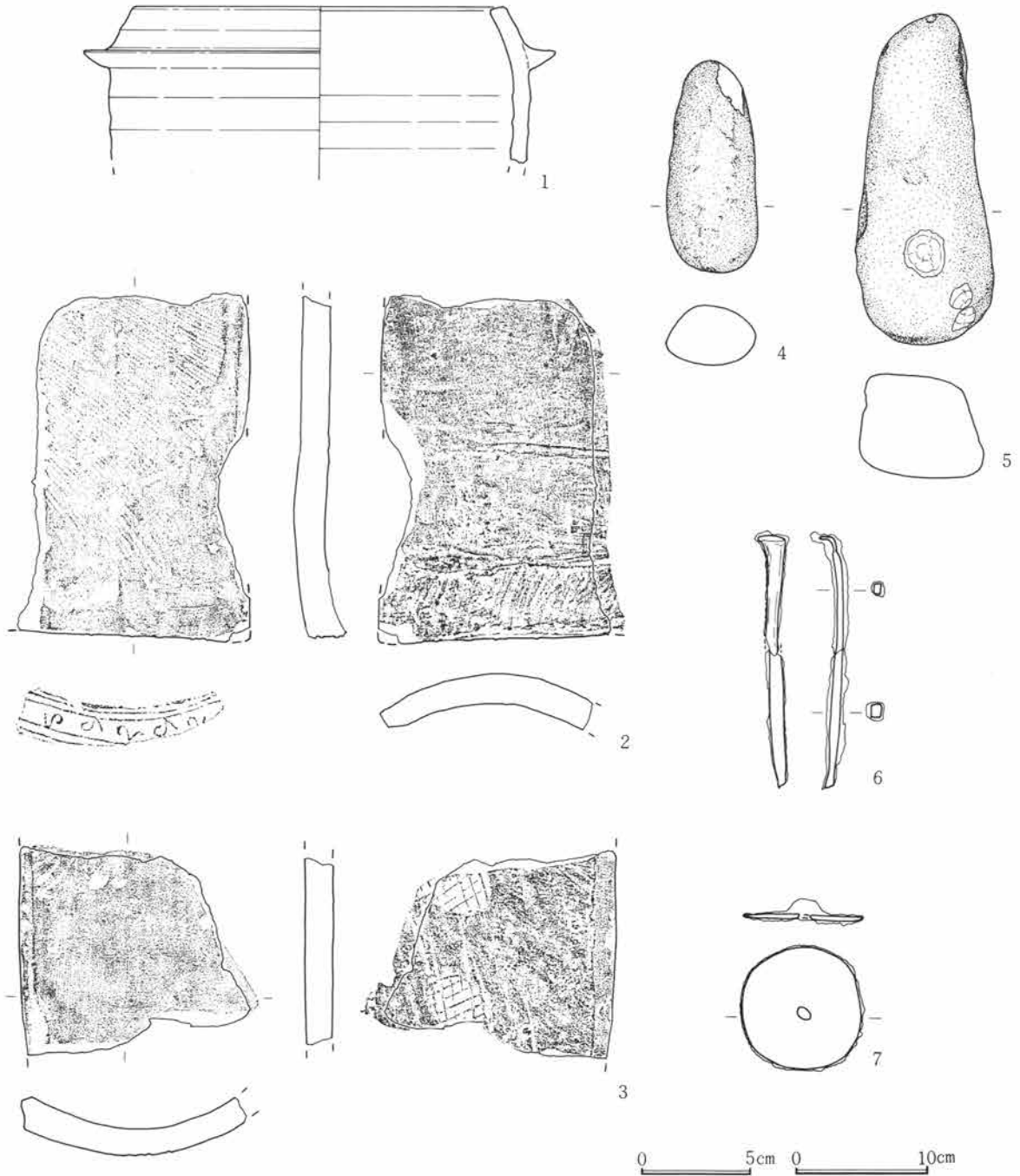


第101図 F区第50号住居跡実測図



第102図 F区第50号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

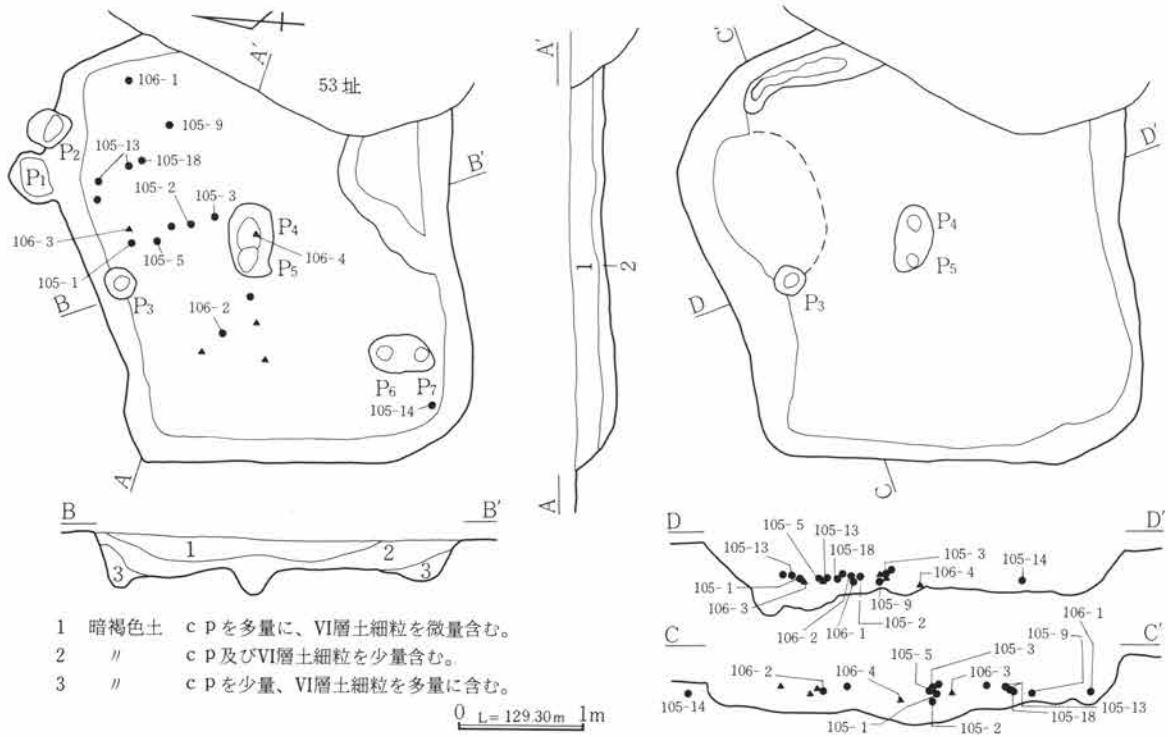


第103図 F区第50号住居跡出土遺物実測図

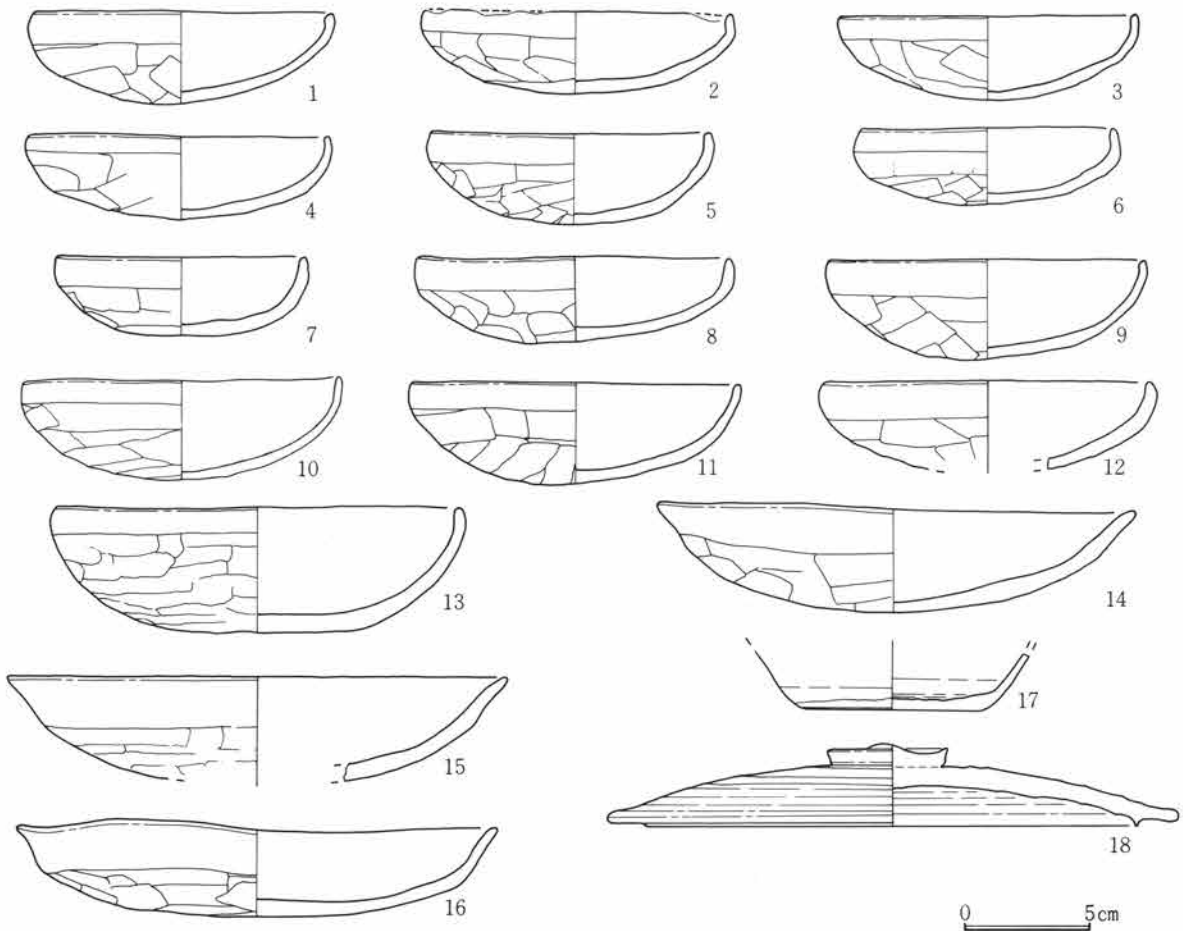
当住居跡の掘り方は、ほぼ全面にわたっておりVI層土粒主体の土を貼って平坦に構築している。この掘り方は南東コーナー部の不整な部分にも及んでおり、覆土に乱れが認められないことと合わせて、この不整形が、他住居跡等との重複の結果でないことを裏づけている。遺物はカマド内及び南東コーナー部から出土。

遺構名称	F区第52号住居跡	位置	4～6-F-62・63グリッド内	分類	—	時期	IV
平面形態	隈丸方形	規模	3.40m×2.95m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 37cm程
備考	東壁から南東コーナー部は第53号址(中世)との重複で、カマド・貯蔵穴は未検出である。壁溝・柱穴は無く、遺物は北側寄りに多数出土しており、特に土師器坏の比率が多いのが特徴である。						

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

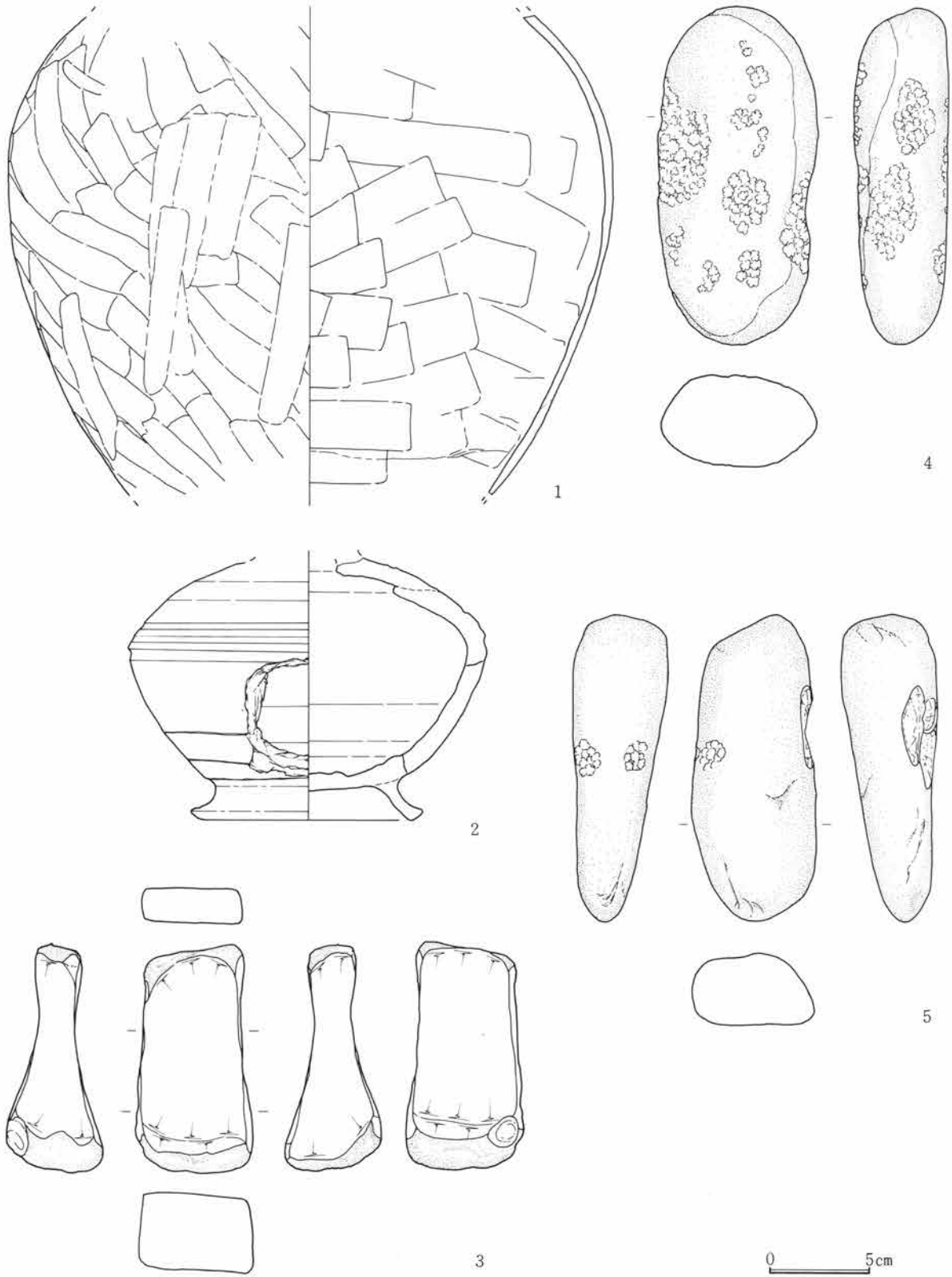


第104図 F区第52号住居跡実測図



第105図 F区第52号住居跡出土遺物実測図

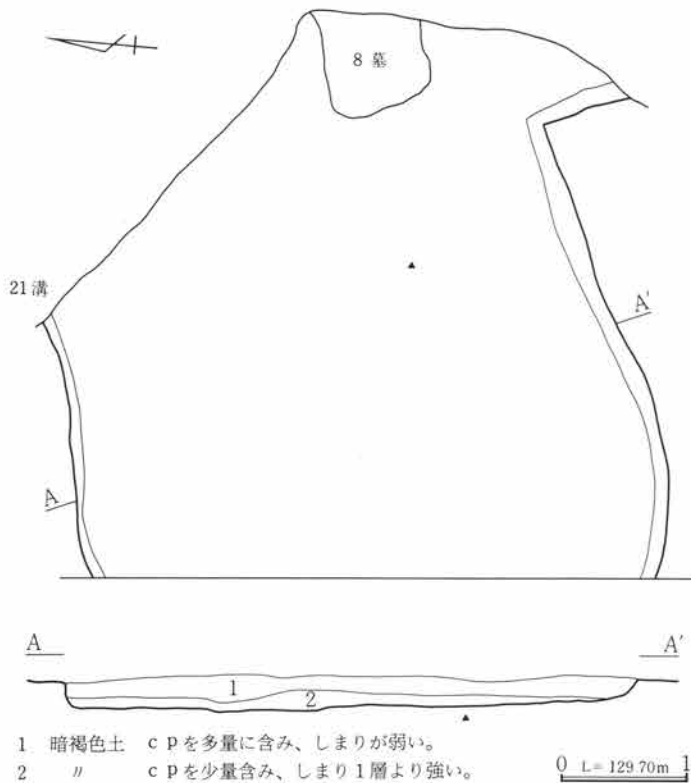
第3章 検出された遺構・遺物



第106図 F区第52号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第55号址	位置	32~35-F-63~65グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	不 明	規模	—m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 20cm程

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

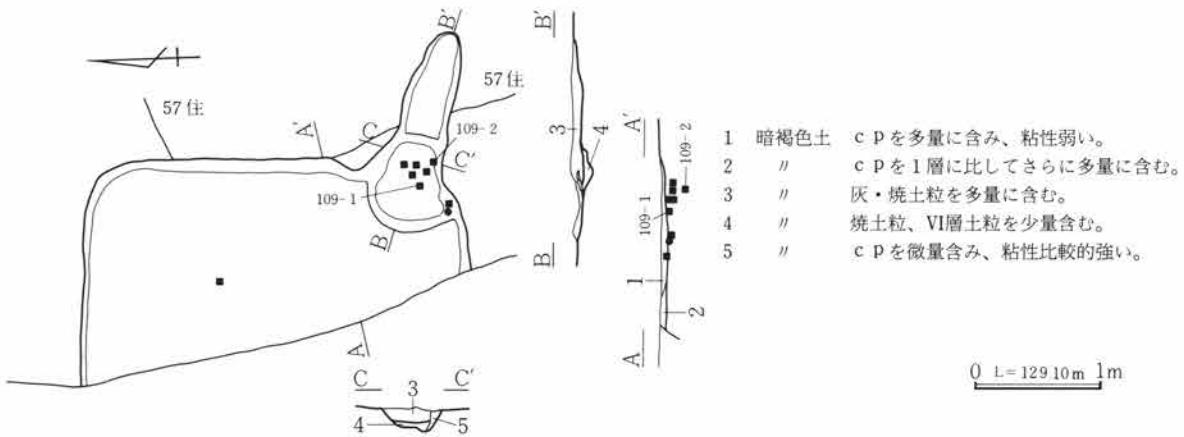


当址は、南北農道西側の調査時には検出することができず、南北農道撤去時に第20号溝等の検出に伴い確認したものである。したがって西側部分は全く不明であり、東側で第20・21号溝、第8号土墳墓等の中世遺構と重複し、北壁及び南壁の一部しか検出されていない。このことから全体形は不明であり、全体のどの部分が検出されたのかについても結論が出せない。しかし北壁と南壁はほぼ平行していることから本来は整形の遺構であった可能性がある。

当址の時期についても、示唆しうるような遺物が出土せず不明であるが、覆土中にB・Tは含まれていない。

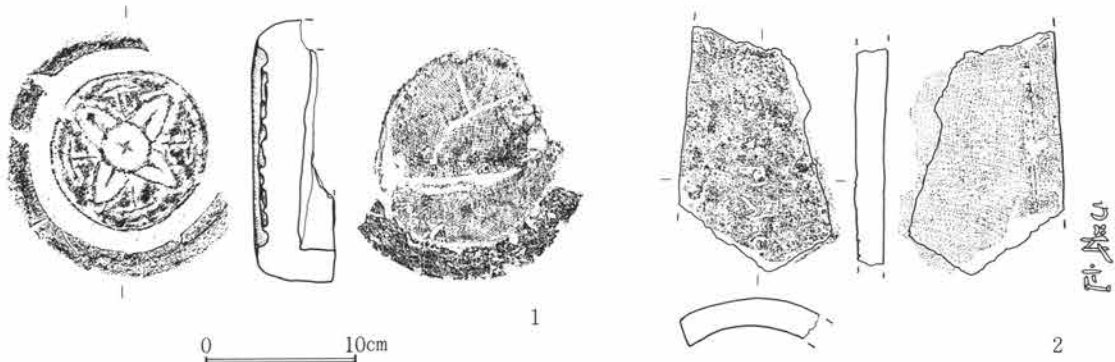
第107図 F区第55号址実測図

遺構名称	F区第56号住居跡	位置	0～2—F—62・63グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×3.05m	主軸方位	東—0度—南	残存深度	約5cm程
備考	当住居跡は農道下の調査によって検出したため、西側部分は失われた。壁溝・柱穴は無いものと思われ、貯蔵穴も調査部分では検出されていない。						
カマド	位置・形状	南東コーナー部・長い舌状			主軸方位	東—17度—南	
規模	全長160cm 屋外長125cm 屋内長35cm 袖間幅105cm 燃烧部幅50cm 煙道幅28cm						
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、灰面は検出されていない。袖は両袖部に共に痕跡も認められない。燃烧部は不整形形で、段を有して煙道部へ続いている。煙道部は約85cmの長さである。						



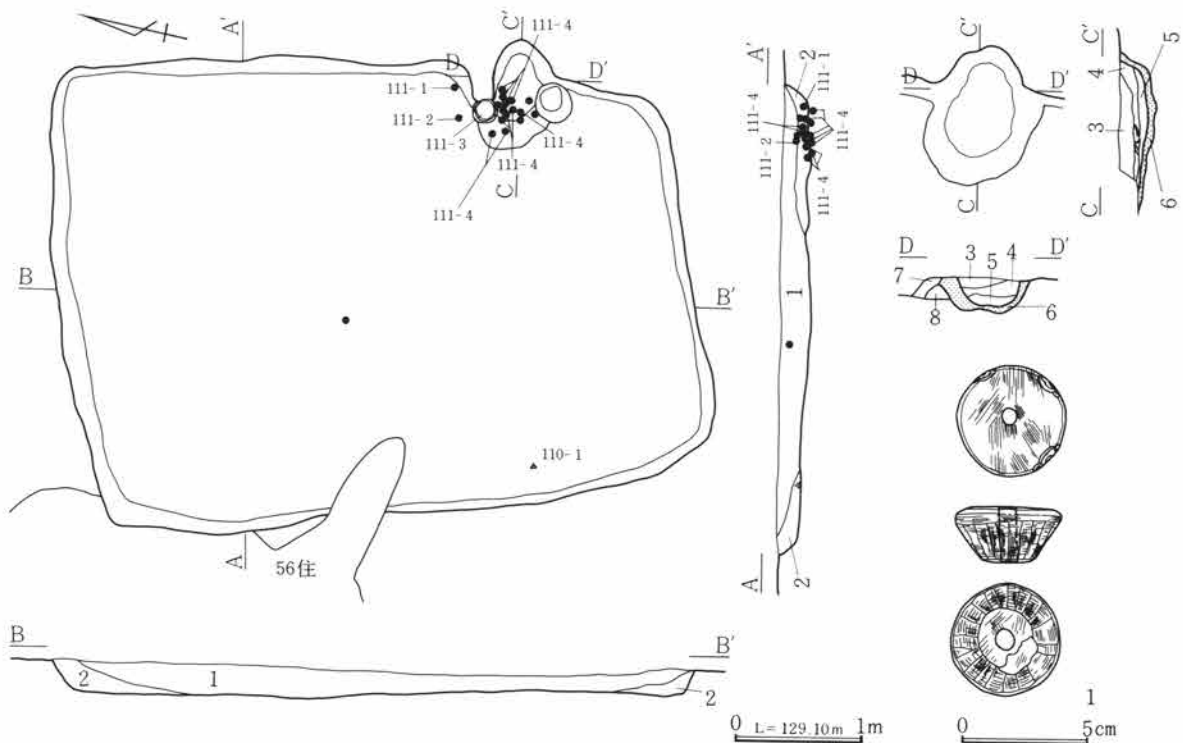
第108図 F区第56号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第109図 F区第56号住居跡出土遺物実測図

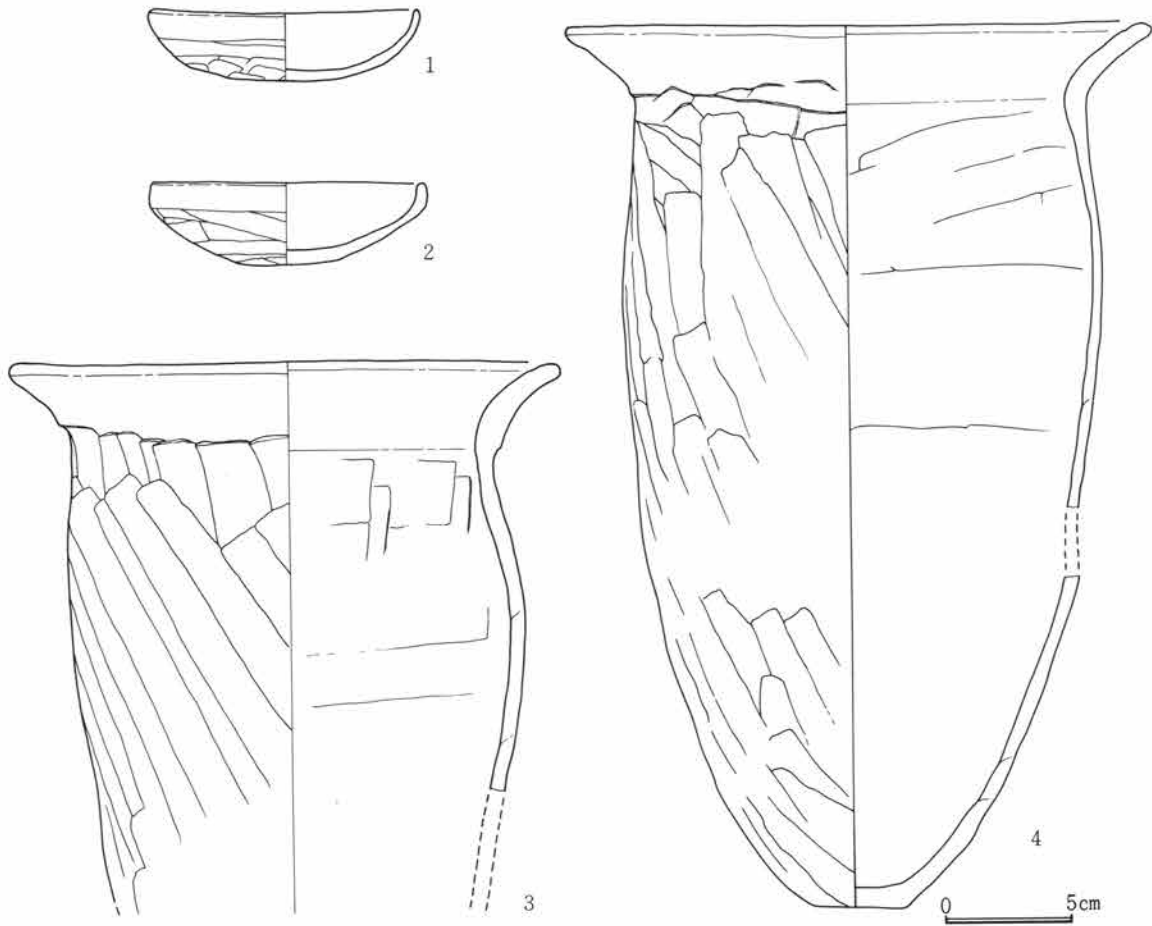
遺構名称	F区第57号住居跡	位置	49-D~2-F-60~62グリッド内	分類	C-11	時期	IV
平面形態	長方形	規模	3.70m×5.00m	主軸方位	東-18度-北	残存深度	約28cm程
備考	北壁に比して南壁がやや短く整形ではない。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。床面はVI層中で平坦であり、掘り方は全く認められない。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-15度-北	
規模	全長 80cm 屋外長 20cm 屋内長 60cm 袖間幅 90cm 燃烧部幅 40cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口は半円形の掘り込みで、灰面は検出されていない。袖は左袖のみ残存し、土師器甕を伏せて構築している。右袖は据え方のピットを検出。燃烧部には焼土層が明瞭に残存していた。						



- | | | | |
|--------|--------------------------|---------|--------------|
| 1 暗褐色土 | c p・VI層土粒・IV層土ブロックを少量含む。 | 5 // | 焼土粒と灰を多量に含む。 |
| 2 // | c p微量・VI層土粒を多量に含む。 | 6 赤褐色焼土 | |
| 3 // | 焼土粒を少量含む。 | 7 暗褐色土 | 2層に近似。 |
| 4 // | 焼土粒を多量に含む。 | 8 // | VI層土粒を多量に含む。 |

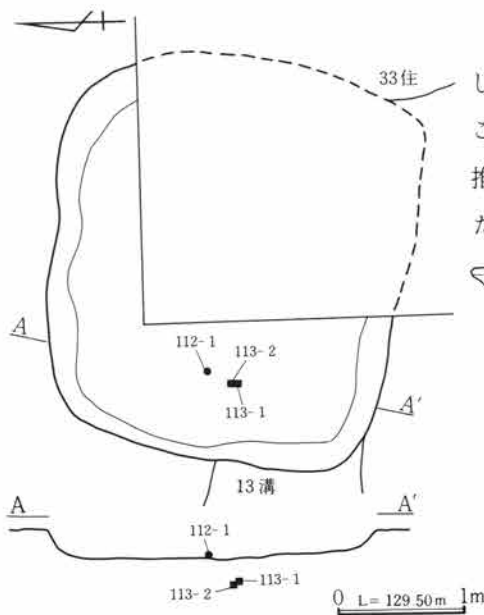
第110図 F区第57号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

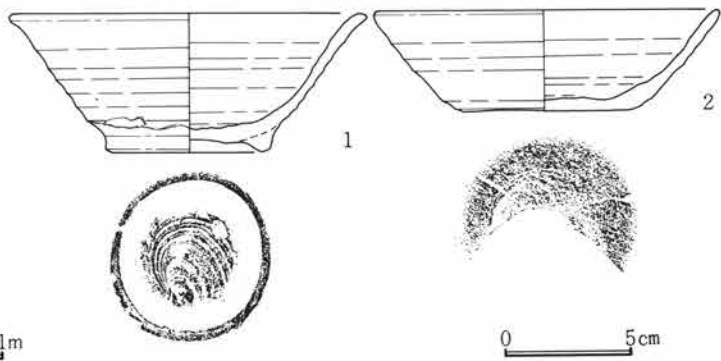


第111図 F区第57号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第58号住居跡	位置	42・43-F-59~61グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形	規模	3.00m×2.75m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 27cm程

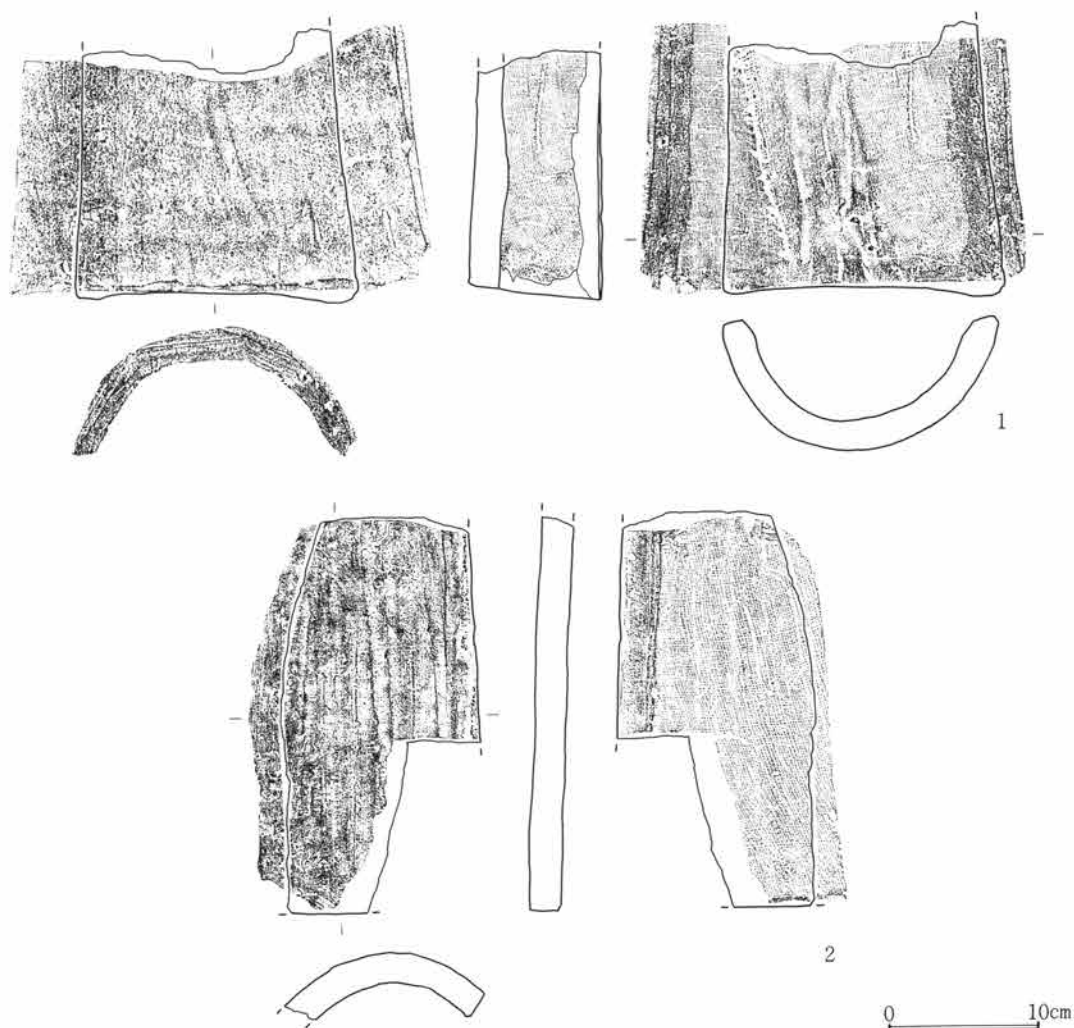


当住居跡は、南北及び東西農道の交叉部分の調査によって検出したもので、農道東側の調査時にカマド等は検出されていない。これは南壁の一部で第33号住居跡と重複しているものの、カマド推定部分までは至っていないことから、遺構検出面を下げ過ぎたために失われたものと考えられる。



第112図 F区第58号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

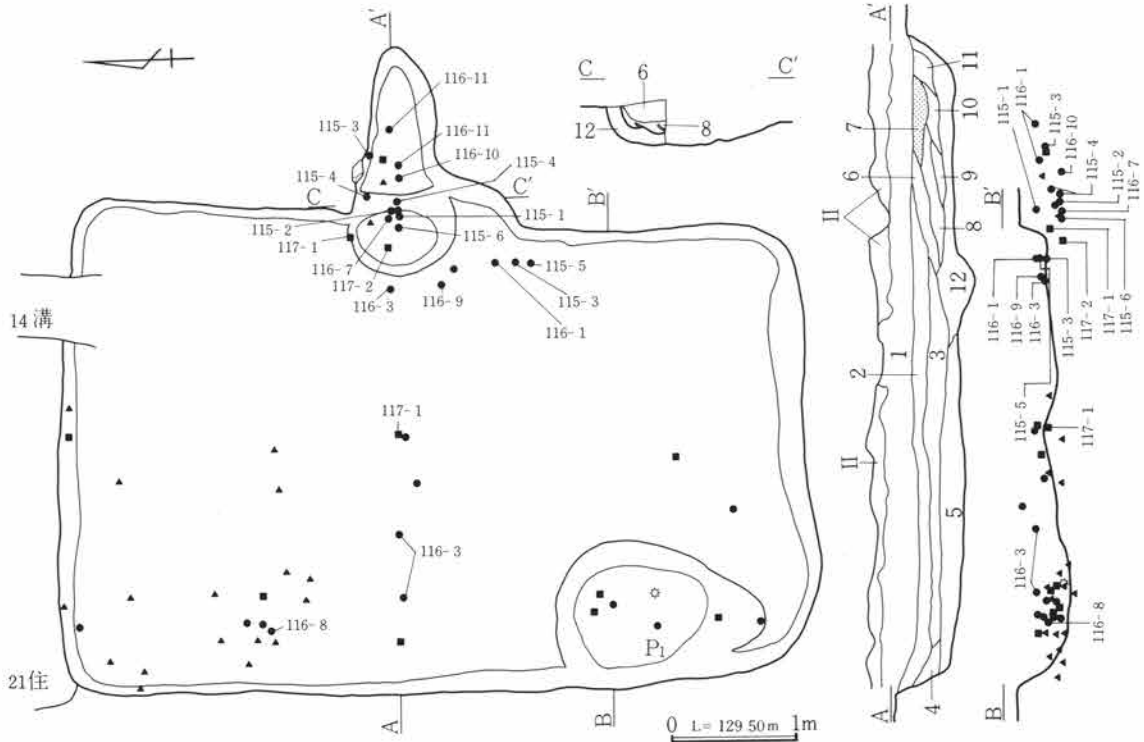


第113図 F区第58号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第59号住居跡	位置	43~46-F-53~55グリッド内	分類	—	時期	VIII?
平面形態	隅丸長方形?	規模	3.60m×5.95m	主軸方位	東-2度-北	残存深度	約45cm程
備考	壁は全周検出した。床面はVI層中でほぼ平坦である。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。西壁の南西コーナー近くに、楕円形の土坑が床面上で検出された。						
カマド	位置・形状	東壁中央やや北寄り・舌状			主軸方位	東-0度-南	
規模	全長180cm 屋外長130cm 屋内長50cm 袖間幅150cm 燃烧部幅115cm 煙道幅30cm						
備考	焚口は楕円形状の掘り込みで、灰面は検出されていない。袖は左袖部奥の側壁に石と考えられる構築材を据えた痕跡を検出。燃烧部は屋内部に主体があったものと考えられるが、焼土等は未検出。						

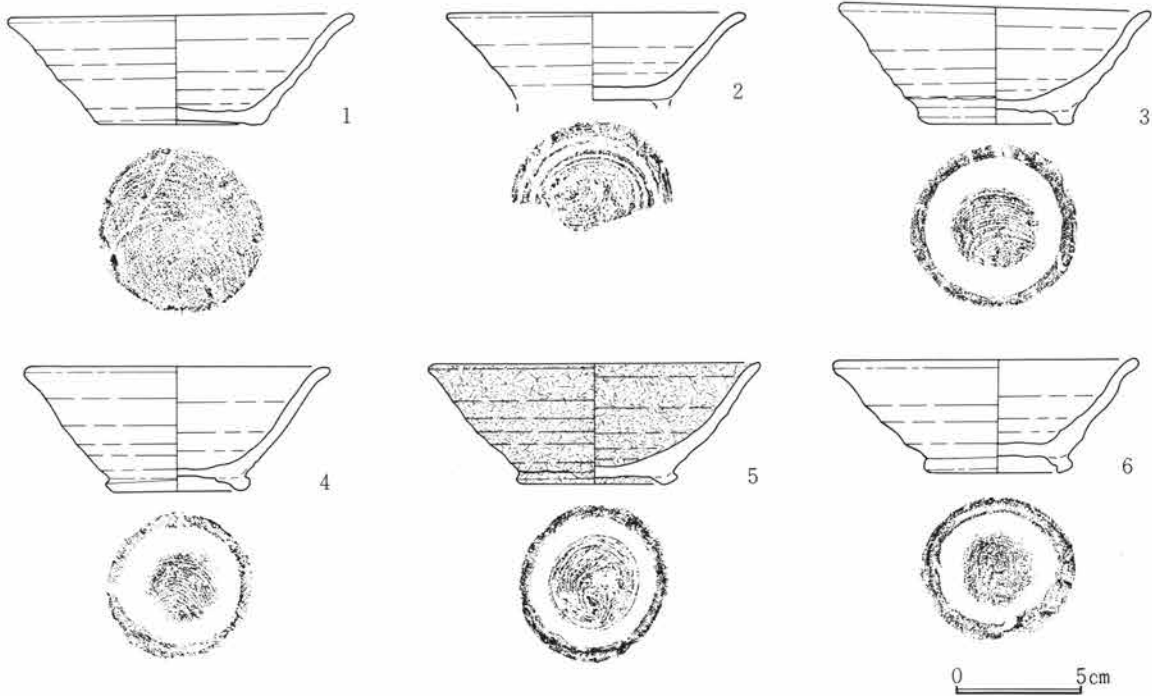
当住居跡は、ほぼカマドを通る主軸線を境にして、南半は東西農道下にかかっていたため、農道北側約½を先行調査した。したがって平面図上南北でやや不連続な部分が見られる。特にカマドについては、北側部分は残存状態も良好で、遺物出土もかなりみられたのであるが、南側部分は、形態的にも合わず遺物出土もほとんどみられなかった。これは東西農道の北寄りに水路が設置されており、この水路用U字溝埋設に伴う攪乱が及んだものとも考えられる。また、住居形態上も南北にかなり長く、不自然な形態を呈しているが、他遺構との重複とする積極的な証拠もみられないことから、1軒として扱ってみたい。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



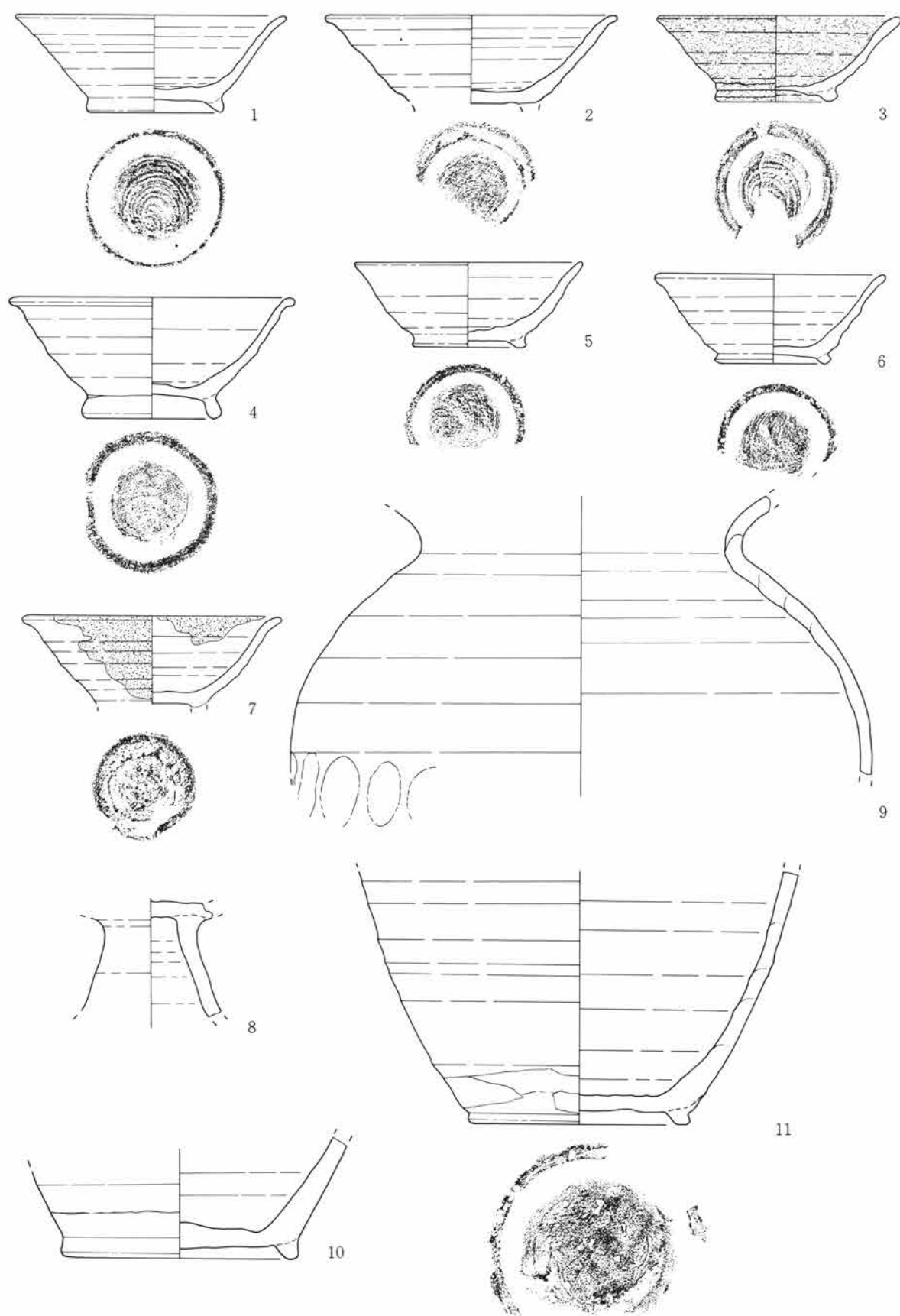
- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 c Pを多量に含み、しまりが弱い。 | 8 暗褐色土 c Pは少量で、炭化物・焼土粒を若干含む。 |
| 2 // c Pは1層に比較して若干少ない。 | 9 // c Pは少量で、炭化物・焼土粒主体。 |
| 3 // c Pはさらに少なく、しまりも弱い。 | 10 // c Pは微量で、炭化物・焼土粒はごく微量含む。 |
| 4 // c P微量で、粘性比較的強い。 | 11 // c Pを少量含み、粘性強い。 |
| 5 // c P少量でVII層土ブロックを多量に含む。 | 12 // c Pと炭化物を若干含む。 |
| 6 // c Pは少量で、焼土粒を少量含む。 | 13 // c P・炭化物・焼土粒を微量含む。 |
| 7 赤褐色焼土 ブロック状を呈する。 | |

第114図 F区第59号住居跡実測図



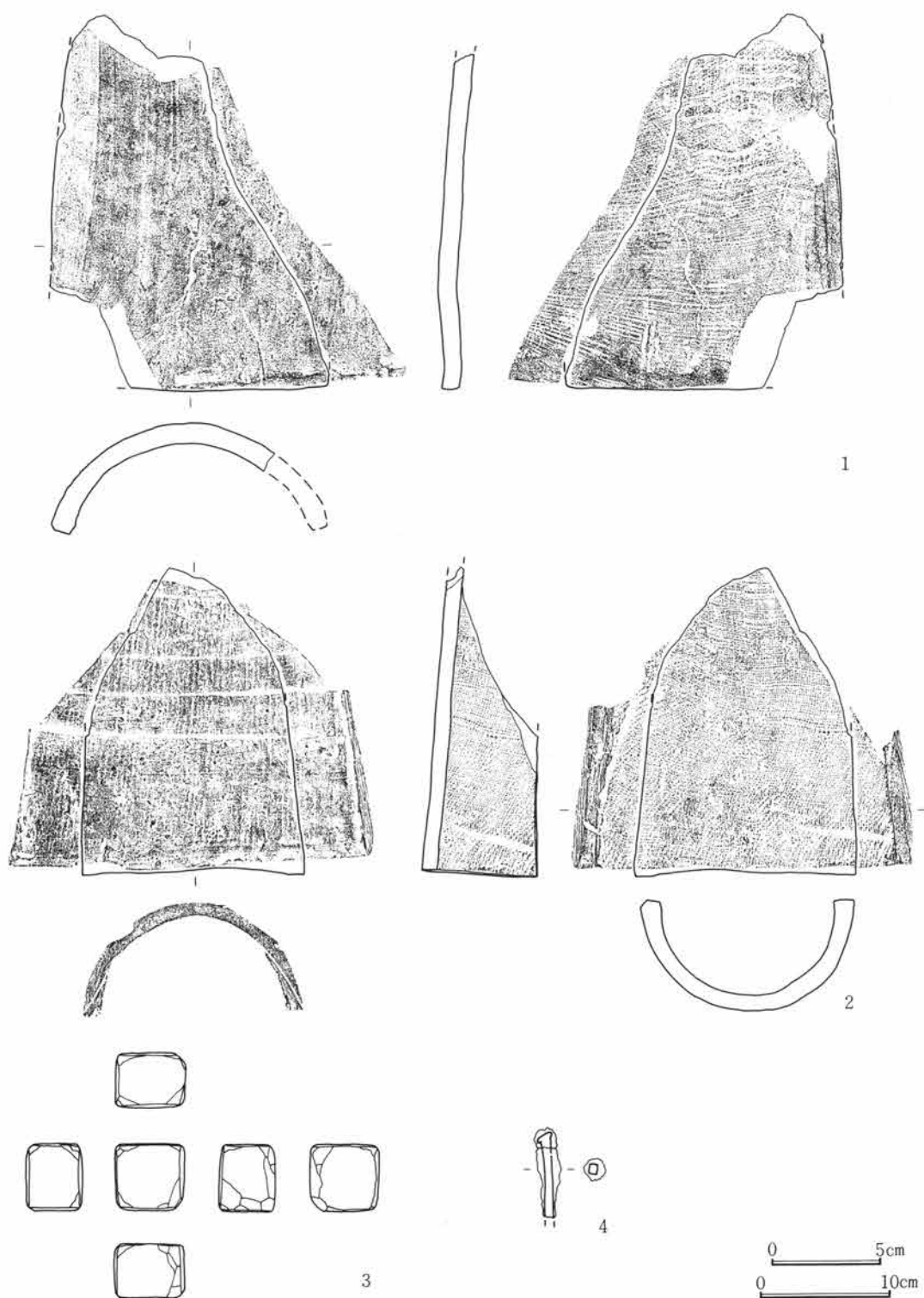
第115図 F区第59号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第116図 F区第59号住居跡出土遺物実測図

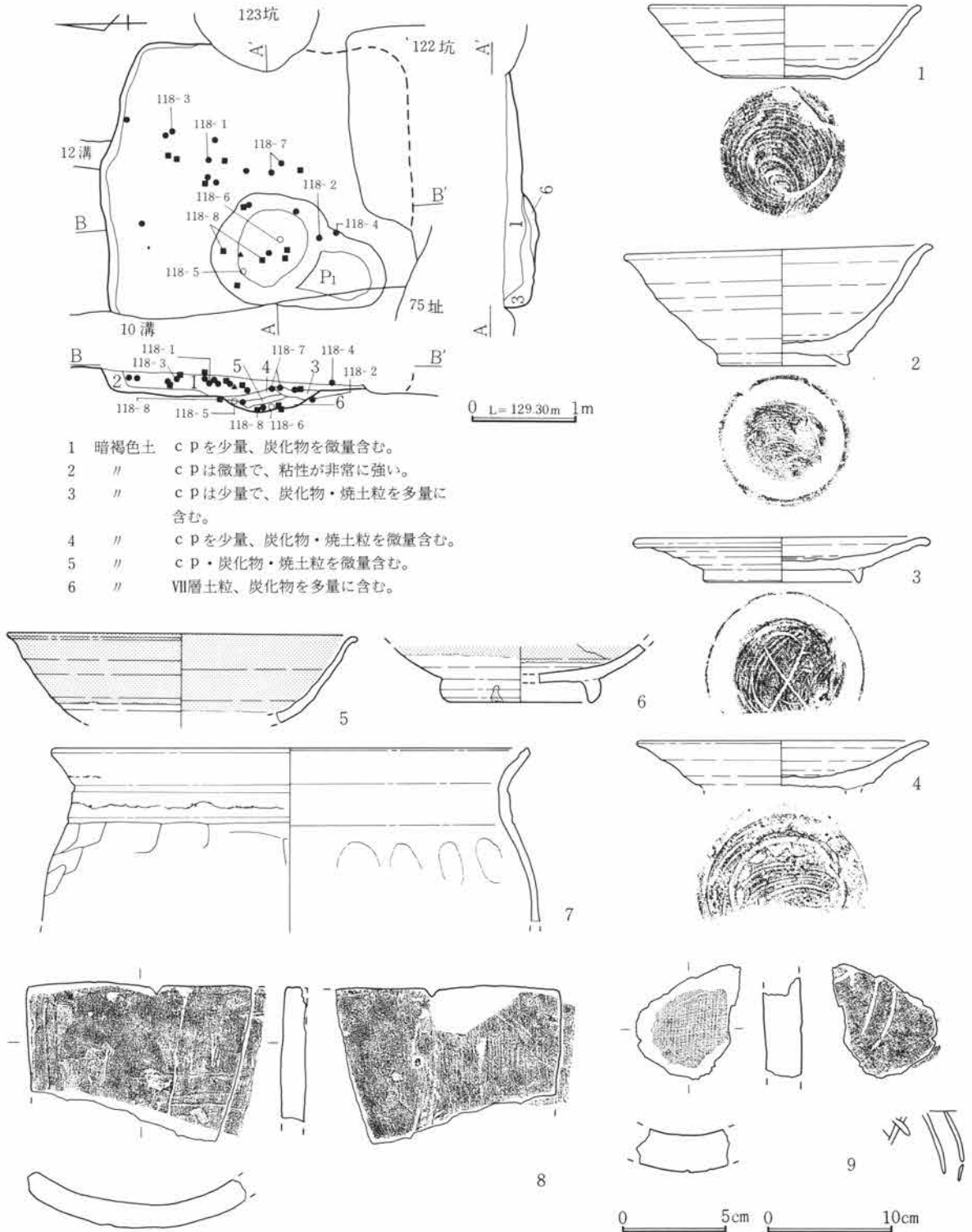
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第117図 F区第59号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	F区第64号住居跡	位置	45～47-F-47・48グリッド内	分類	—	時期	VII
平面形態	隅丸方形	規模	3.40m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 20cm程
備考	第75号址・第23号土坑・第10号溝等の重複により、北壁及び西寄りの土坑状の掘り込みを検出したに止った。遺物は北寄り床面上及び掘り込み内より出土したものである。						

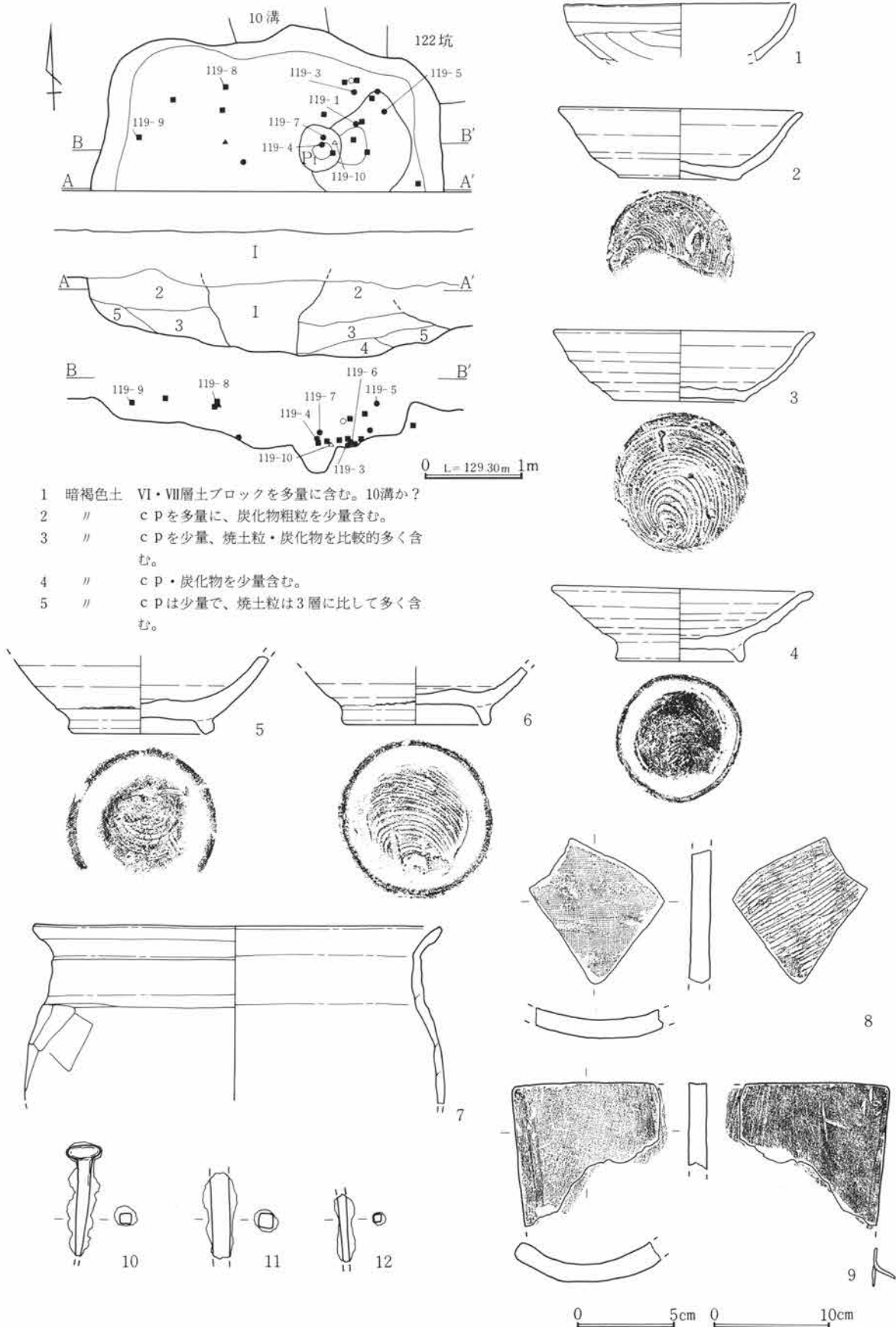
第3章 検出された遺構・遺物



第118図 F区第64号住居跡・出土遺物実測図

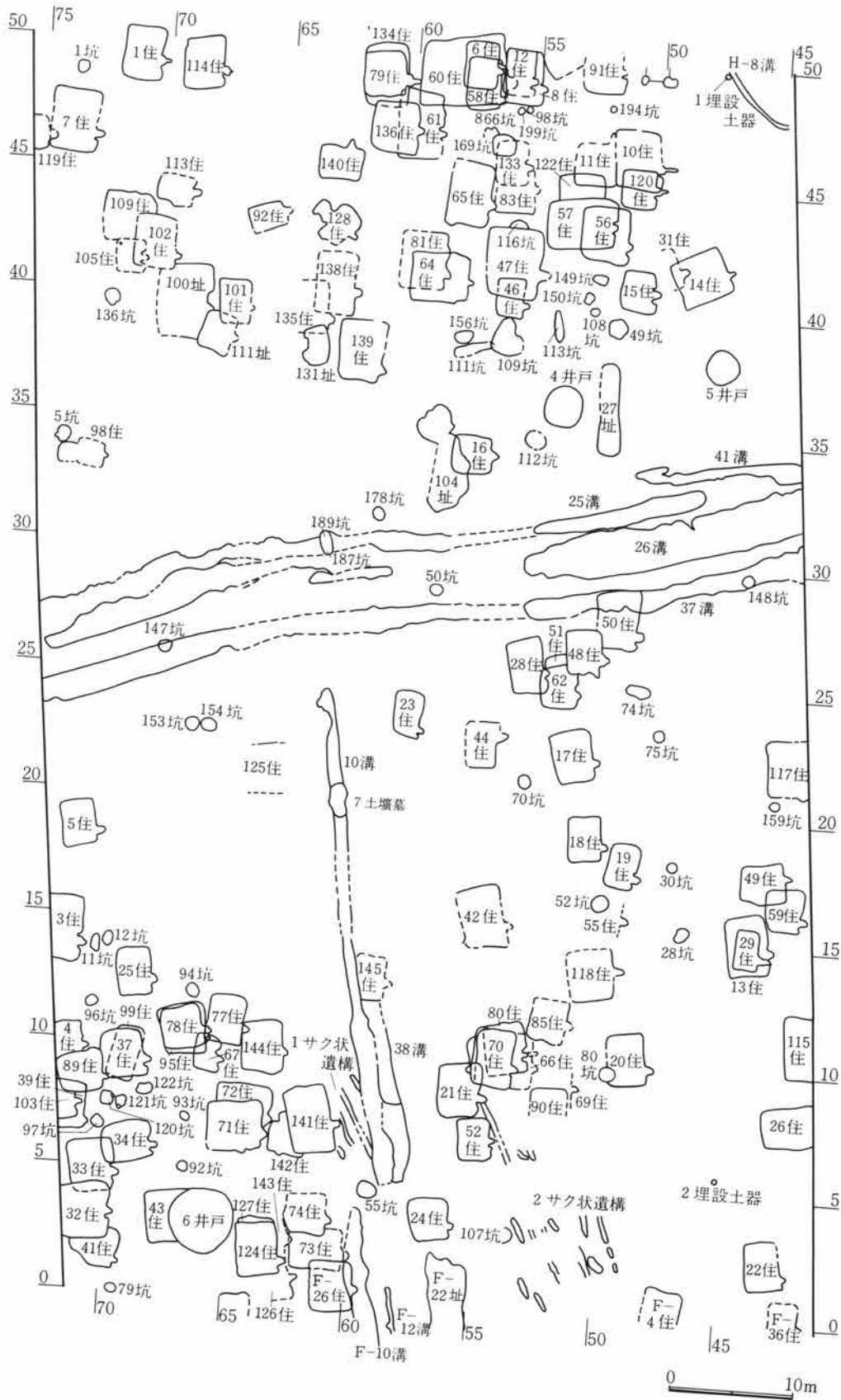
遺構名称	F区第75号址	位置	45-F-57~59グリッド内	分類	—	時期	VI
平面形態	隅丸方形? 規模	3.65m×—m	主軸方位	— — 度 —	残存深度	約 50cm程	
備考	東西農道下の調査で検出した。南側で第61・62号住居跡と重複しているのであるが、重複関係をとらえることはできなかった。						

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第119図 F区第75号址・出土遺物実測図

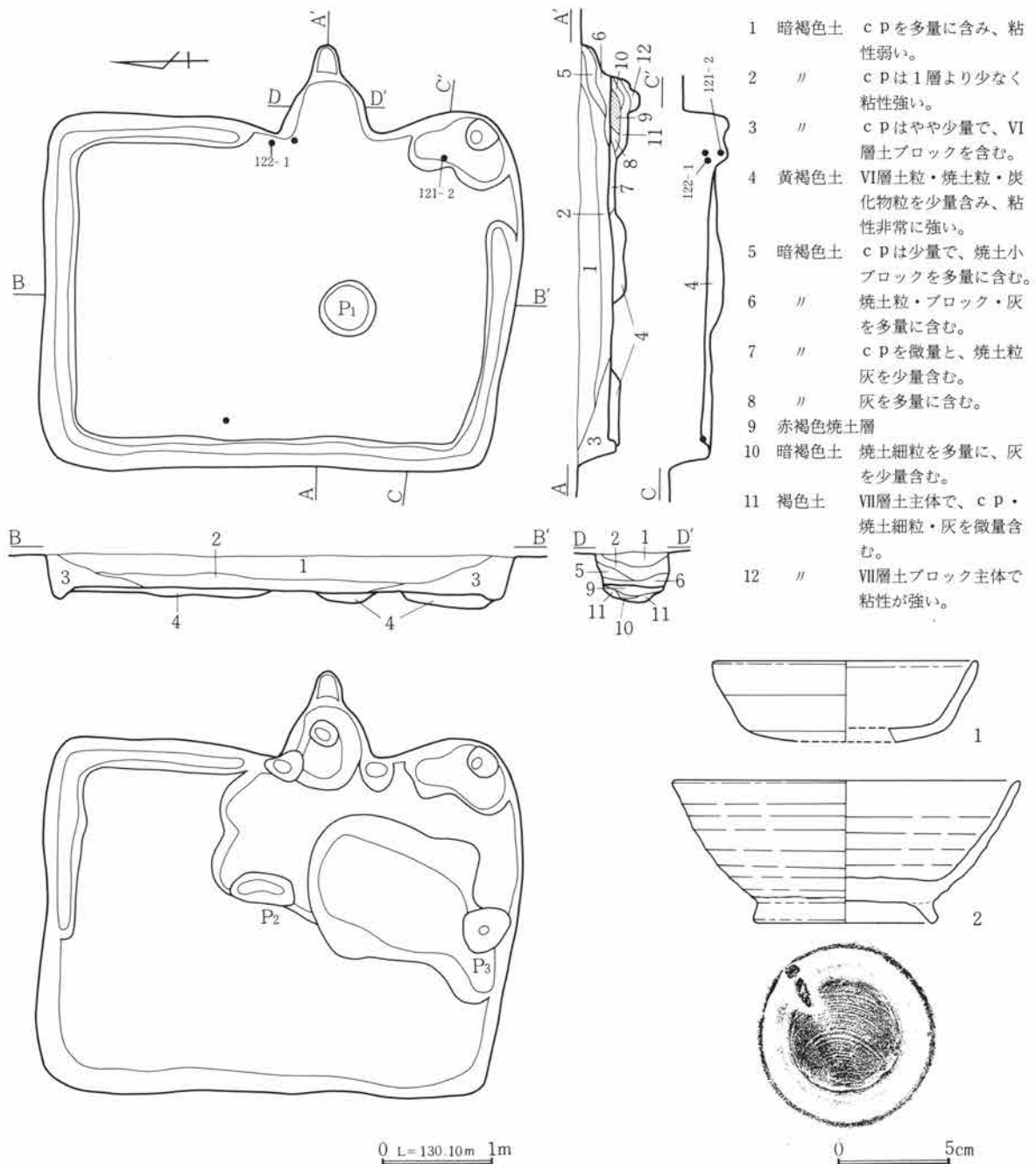
第3章 検出された遺構・遺物



第120図 G区遺構配置図

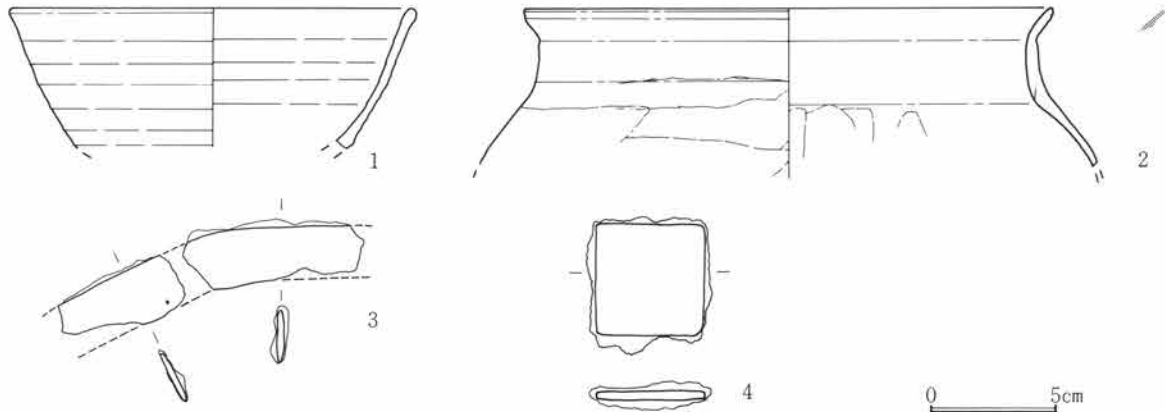
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第1号住居跡		位置	48～50-G-70～72グリッド内		分類	C-1	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	3.20m×4.40m	主軸方位	東-4度-南	残存深度	約30cm程		
備考	壁は全周検出され残存状態は良好。壁溝はカマド部及び南東コーナー部を除き全周。幅約20～33cm、深度約5cm、貯蔵穴は南東コーナー部で、不整形。規模は径約90cm、深度約43cm。								
カマド	位置・形状	東壁やや南寄り・先端の突出した馬蹄形				主軸方位	東-5度-南		
規模	全長 85cm 屋外長 67cm 屋内長 18cm 袖間幅 115cm 燃烧部幅 80cm 煙道幅 25cm								
備考	焚口は平坦でわずかに灰層が残存。袖は残存せず掘り方段階で両形に円形ピットを検出。燃烧部には焼土層が1枚残存し、掘り方段階で中央やや北寄りに支脚据え方と思われるピットを検出。								



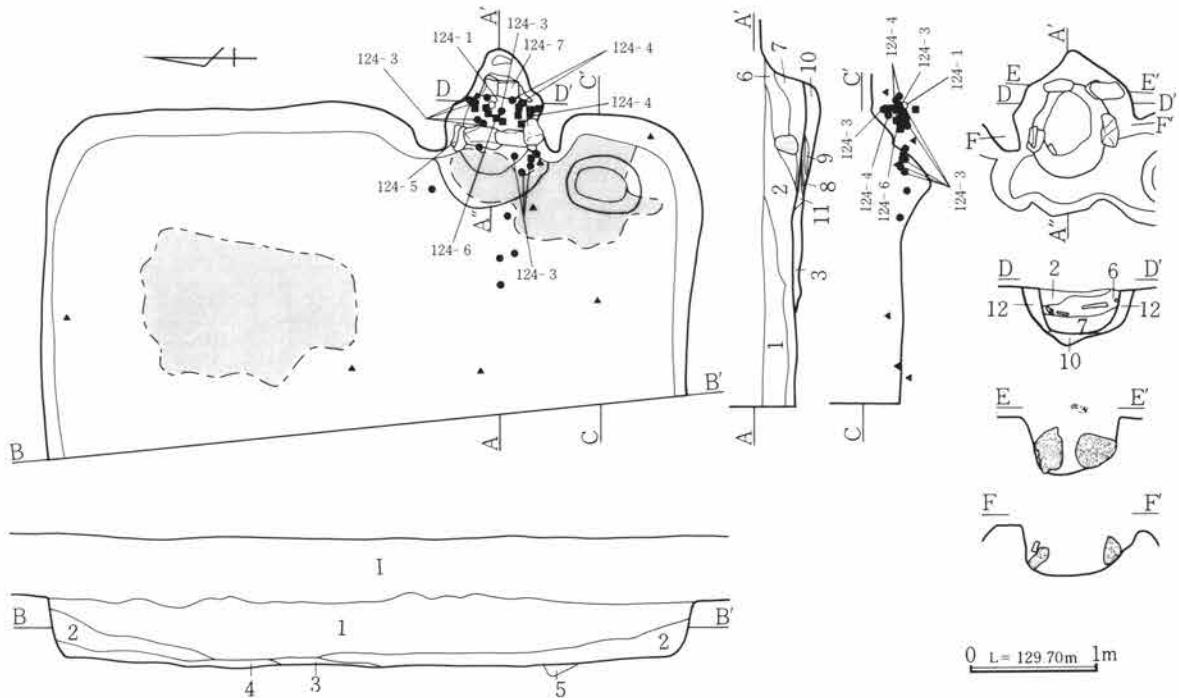
第121図 G区第1号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第122図 G区第1号住居跡出土遺物実測図

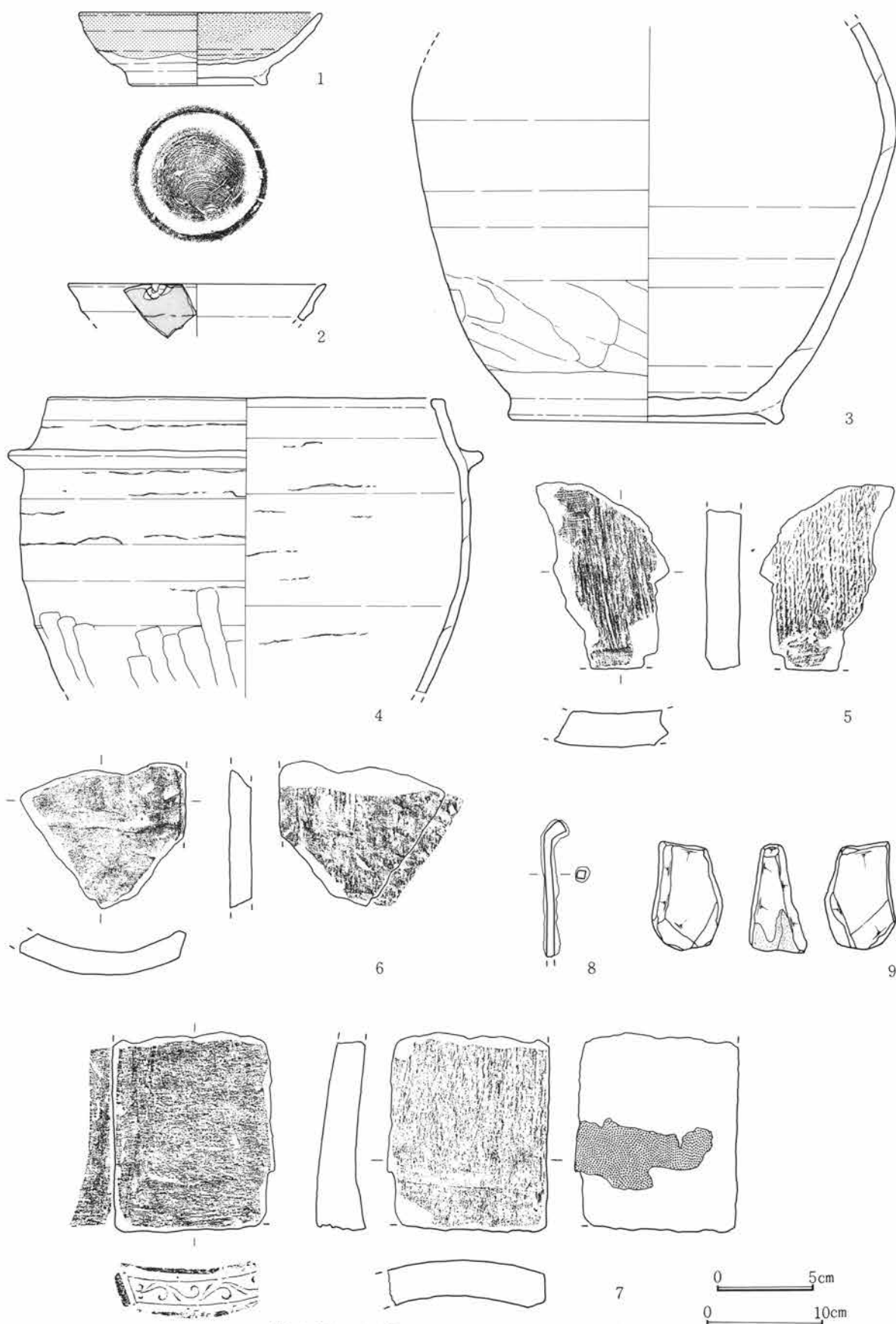
遺構名称	G区第3号住居跡	位置	12~15-G-71~72グリッド内	分類	C-12	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	—m×5.20m	主軸方位	東—1度—南	残存深度	約20cm程
備考	記査区西端に位置し西側約½が調査区外にかかり未調査。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は南東コーナー部ややカマド寄りで楕円形。規模は長径約60cm、深度約14cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・先端の突出する馬蹄形			主軸方位	東—5度—南	
規模	全長 125cm 屋外長 50cm 屋内長 75cm 袖間幅 130cm 燃烧部幅 72cm 煙道幅 28cm						
備考	焚口は半円形の掘り込みで、灰面が焚口部から貯蔵穴上面まで広がっている。袖は左袖が河原石と灰、右袖を据え天井石をのせ、煙道部との接続部にも2個石を据え、上に羽釜の破片をのせている。						



- | | | | |
|--------|---------------------------|----------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 | c P粗粒を多量に含み粘性は弱くしまりは強い。 | 7 // | 焼土粒と灰を多量に含み、粘性が強い。 |
| 2 // | c P粗粒を多量に、炭化物を微量含む。 | 8 黒灰色灰層 | |
| 3 // | c Pは少量で、炭化物を多量に含む。 | 9 赤褐色焼土層 | |
| 4 // | VI層土ブロックを多量に含み、粘性・しまりが強い。 | 10 暗褐色土 | 焼土粒と灰を若干含み、しまりが弱い。 |
| 5 // | 4層に近似。 | 11 // | c P微量で、焼土粒を少量含み、固くしまっている。 |
| 6 // | c Pは少量で、微量の焼土粒を含み、粘性が強い。 | 12 // | c Pを少量含み、焼土粒は微量で、粘性が強い。 |

第123図 G区第3号住居跡実測図

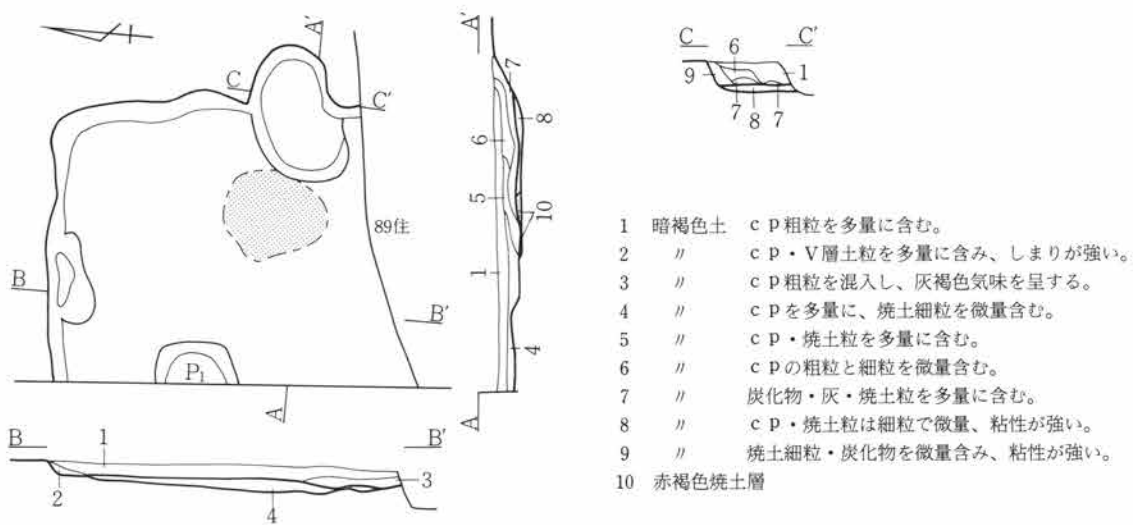
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第124図 G区第3号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第4号住居跡	位置	9・10-G-70~72グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	方形 ?	規模	—m×—m	主軸方位	東—7度—北	残存深度	約 12cm程
備考	調査区西端で、南側で第89号住居跡と重複し、カマド及び北東コーナー部を含む東・北の両壁の一部を検出。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は重複によって失われたものと思われる。						
カマド	位置・形状	東壁中央部?・馬蹄形			主軸方位	東—6度—北	
規模	全長 96cm 屋外長 48cm 屋内長 48cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 75cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は半円形の掘り込みで、袖は両袖共に痕跡もない。燃烧部からは焼土等は検出されず、カマド前面の床面上で、焚口掘り込みに接するように焼土層が1枚検出された。						



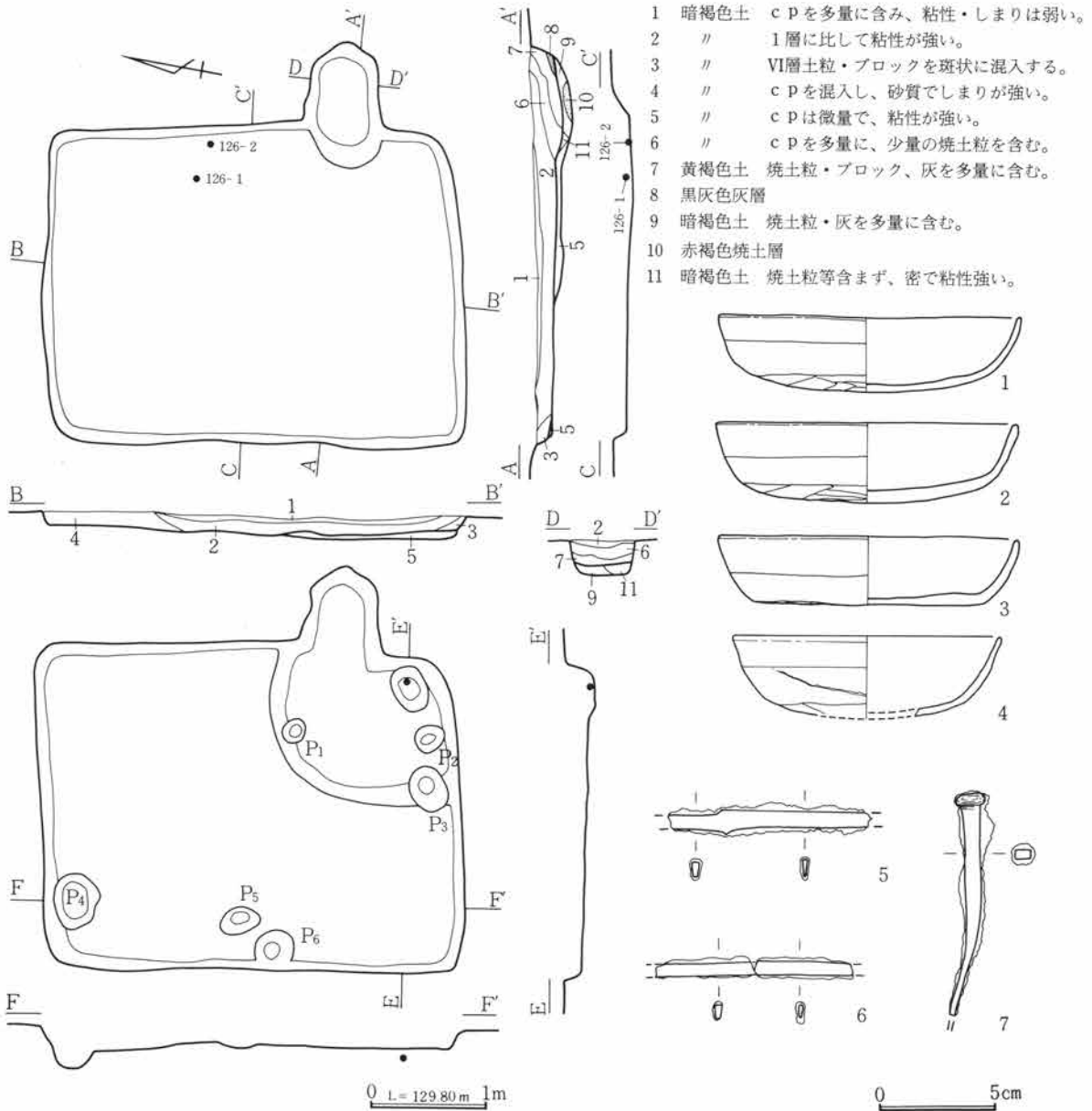
第125図 G区第4号住居跡実測図

当住居跡は、西側約 $\frac{1}{3}$ が路線外で、この西側土層断面で観察を行った。当住居跡の位置する南北農道西側は、農道東側に比較して確認面が浅い。しかし住居跡の残存状態は良好でなく、残存深度も浅い。これは掘り込みが浅かったことによるよりも、当住居跡の位置する場所全体の表土層の動きが大きかったことに由来するのではないかと考えられる。

遺構名称	G区第5号住居跡	位置	17~19-G-70~72グリッド内	分類	C-10	時期	V
平面形態	隅丸長方形	規模	2.80m×3.70m	主軸方位	東—10度—北	残存深度	約 10cm程
備考	壁は全周検出され、床面はVI層中で平坦である。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は床面の段階では検出されず、掘り方段階で南東コーナー部に楕円形で、長径約35cmのピットが検出された。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・先端が若干突出する方形。			主軸方位	東—8度—北	
規模	全長 110cm 屋外長 65cm 屋内長 45cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 65cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は半円形に掘り込まれ、灰層は検出されていない。袖は両袖共に残存せず、燃烧部にはわずかに灰層と焼土層を検出。						

当住居跡の掘り方は、住居全体に及ぶのではなく、カマドを含む南東コーナー部が方形に掘り込まれている。また、床面では検出することができなかった貯蔵穴と思われる円形土坑が、掘り方調査段階で検出された。このことから貯蔵穴として扱ってきたものの性格を再考する必要がある。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

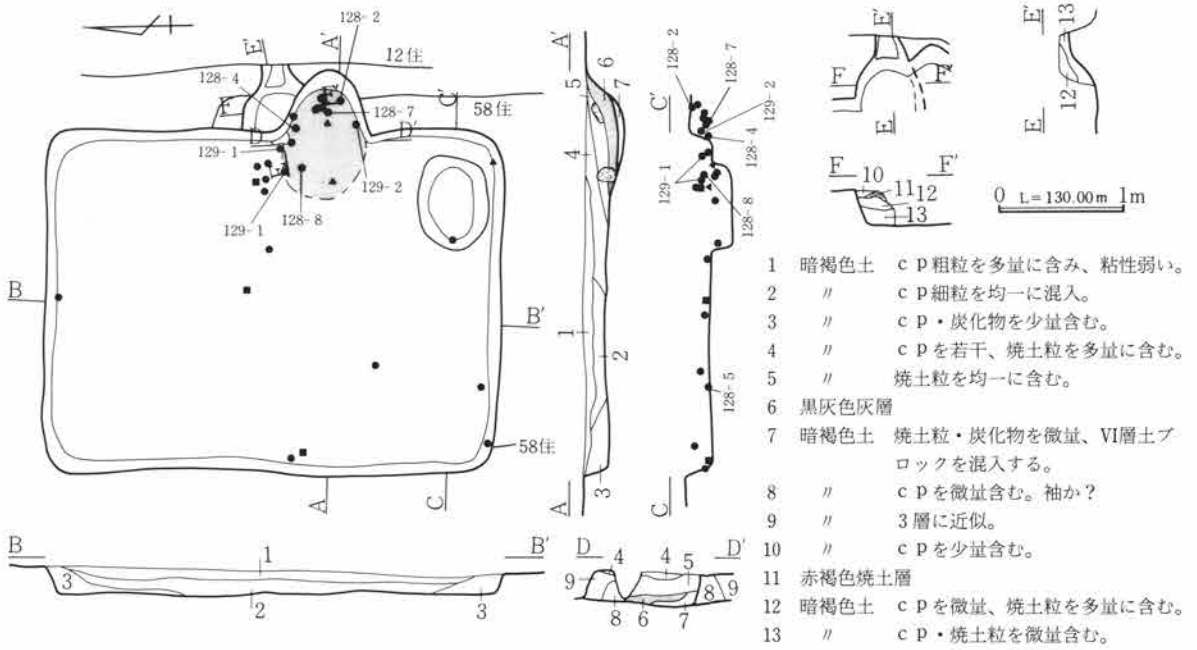


第126図 G区第5号住居跡・出土遺物実測図

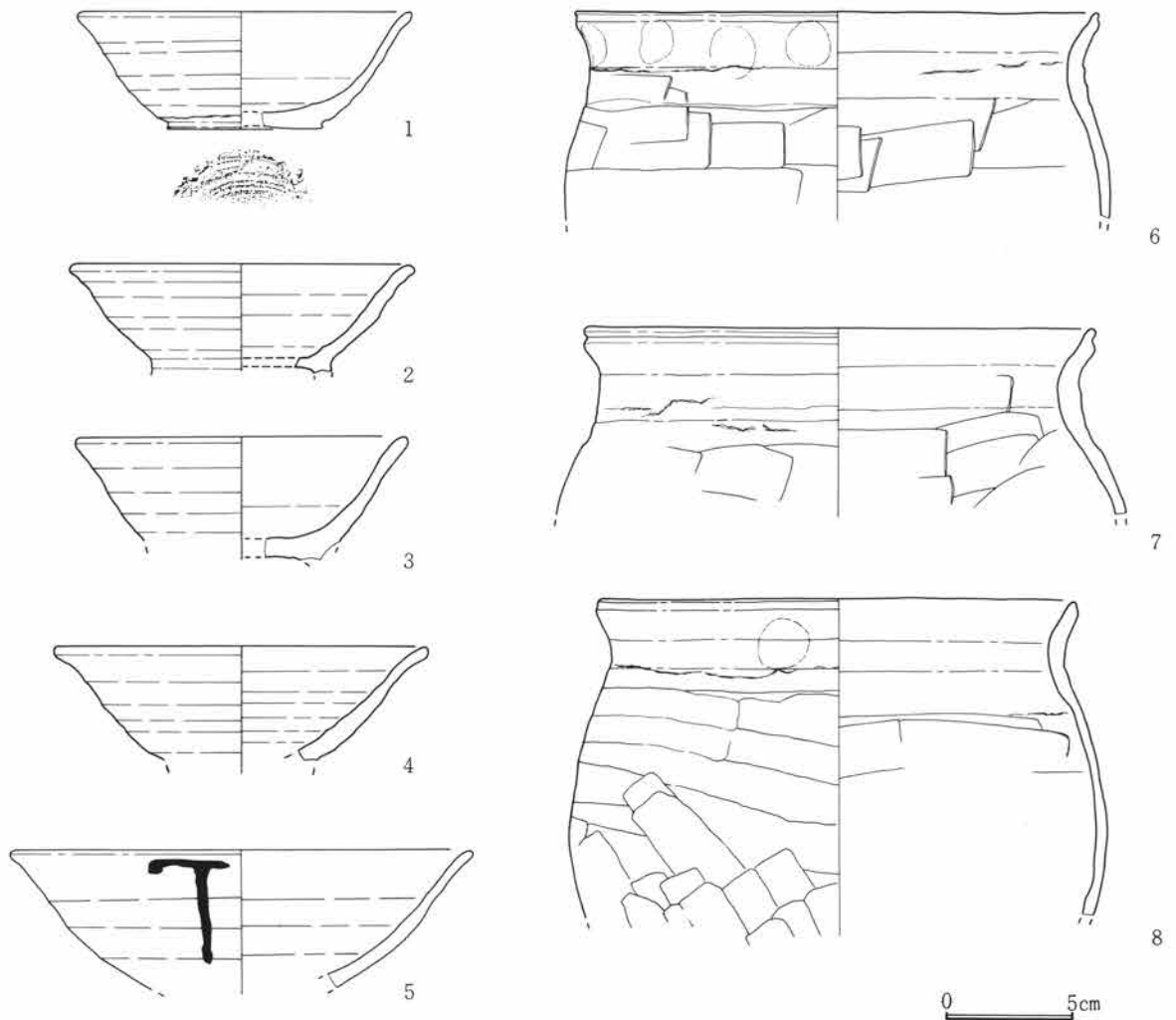
遺構名称	G区第6号住居跡		位置	48～50-G-56～58グリッド内		分類	C-2	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形	規模	2.70m×3.60m	主軸方位	東-1度-南	残存深度	約 6cm程		
備考	壁は全周検出され、壁溝・柱穴は無い。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出され円形で、径約73cm、深度約20cmである。遺物はカマド内及び周辺から集中して出土した。								
カマド	位置・形状	東壁やや南寄り・馬蹄形				主軸方位	東-3度-南		
規模	全長 105cm	屋外長 105cm	屋内長	— cm	袖間幅	— cm	燃烧部幅 128cm	煙道幅	— cm
備考	焚口は明確でなく、かなり床面側に入った位置に支脚様な礫が検出されている。灰は屋外部に厚く堆積している。袖は、左袖部に礫が据えられて検出されている。								

カマドは東壁に接するようにして2カ所検出された。住居土層観察等から2軒の重複とは考えられず、カマドの改築例と理解した。袖石のあり方等から明らかに南側のカマドが最終使用であり残存状態も良好。

第3章 検出された遺構・遺物

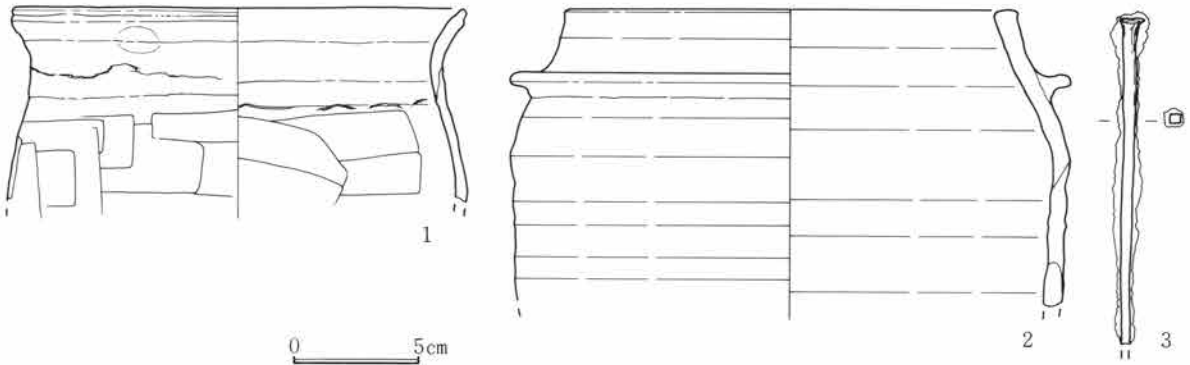


第127図 G区第6号住居跡実測図



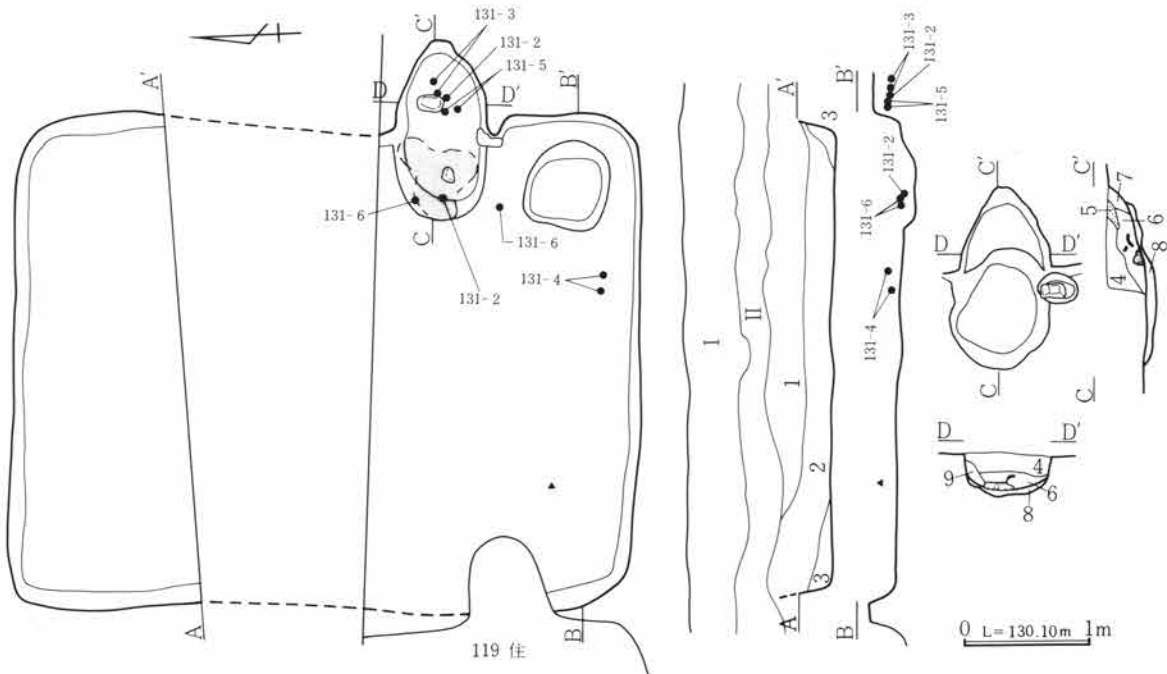
第128図 G区第6号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第129図 G区第6号住居跡出土遺物実測図

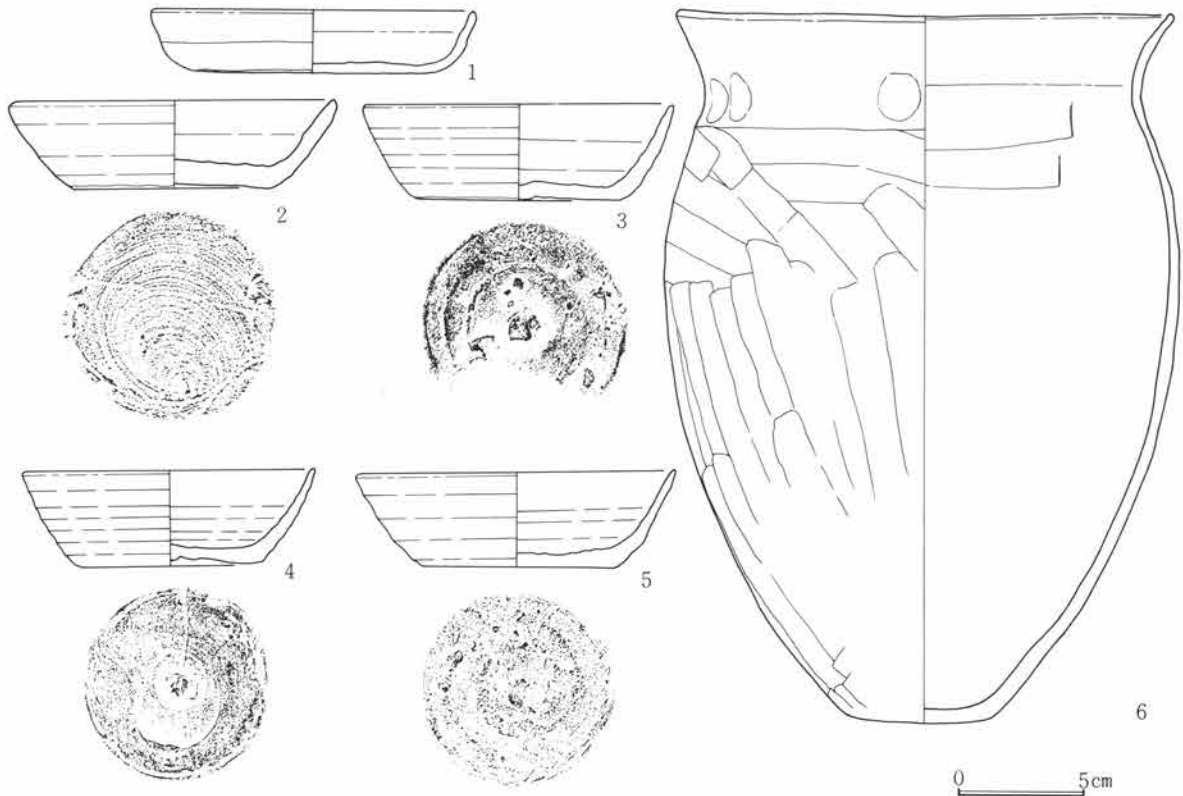
遺構名称	G区第7号住居跡		位置	45～47-G-72～74グリッド内		分類	C-11	時期	V
平面形態	隅丸長方形	規模	3.90m×5.00m	主軸方位	東-3度-南	残存深度	約23cm程		
備考	水路部分を除きほぼ検出。西側で第119号住居跡と重複。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は南東コーナー部やや内側に隅丸方形に掘り込まれている。規模は約65×70cmで、深度約10cmである。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・先端のやや突出した馬蹄形			主軸方位	東-0度-北			
規模	全長140cm 屋外長60cm 屋内長80cm 袖間幅115cm 燃烧部幅72cm 煙道幅—cm								
備考	焚口は半円形掘り込みで灰面を1枚検出した。また、灰面上に砂岩質の支脚が出土。袖は右袖が残し、角柱状の截石が検出された。遺物はカマド内及び周辺からの出土が多い。								



- | | | | |
|--------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | c pを多量に含み、しまりが強い。 | 6 暗褐色土 | c p微量で、下面は灰層となっている。 |
| 2 // | c p粗粒を多量に含み、しまりが弱い。 | 7 // | 焼土粒を微量含む。 |
| 3 // | VI層土ブロックを混入し、粘性が強い。 | 8 // | 焼土粒・炭化物を多量に含む。 |
| 4 // | c pを混入する。 | 9 // | 焼土粒・ブロックを多量に含む。 |
| 5 赤褐色土 | 焼土粒を多量に含む。 | | |

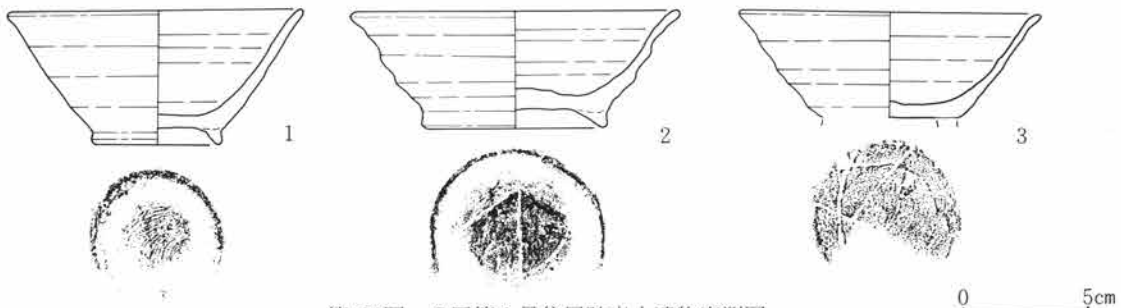
第130図 G区第7号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第131図 G区第7号住居跡出土遺物実測図

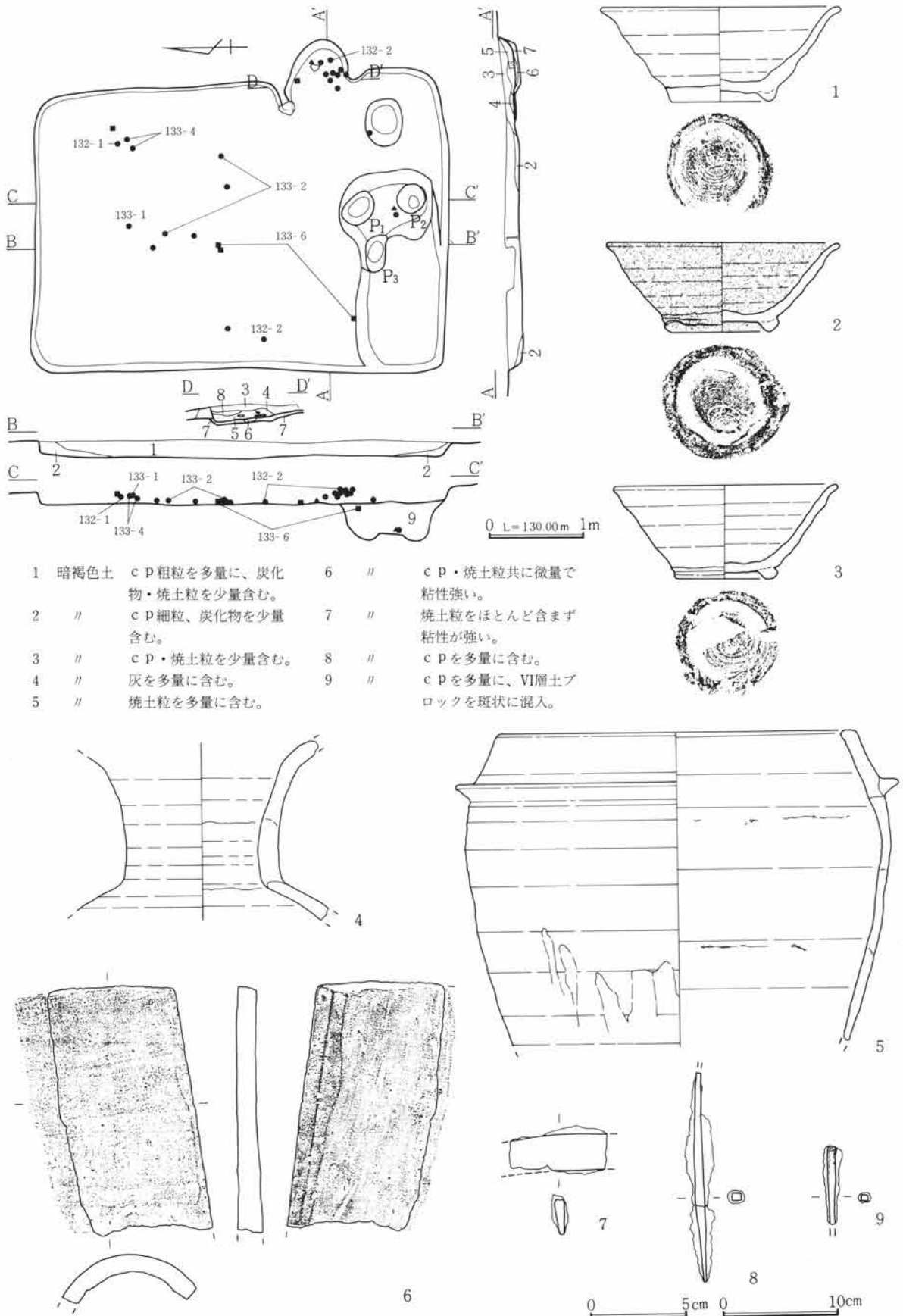
遺構名称	G区第8号住居跡		位置	48～50—G—54～57グリッド内		分類	C-11	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×4.40m	主軸方位	東—0度—北	残存深度	約14cm程		
備考	壁は全周検出され、壁溝・柱穴は無い。床面はVI層中で平坦に構築され、遺物は住居中央北寄りから多く出土している。貯蔵穴は南東コーナー部から中央に寄っており、円形で径約48cm、深度約17cm。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形				主軸方位	東—0度—北		
規模	全長 75cm	屋外長 38cm	屋内長 37cm	袖間幅 102cm	燃烧部幅 66cm	煙道幅	— cm		
備考	焚口に掘り込みはみられず、灰層を1枚検出した。袖は左袖のみ残存し先端部に截石を据えている。燃烧部には羽釜片が集中し、中央やや北寄りに支脚として礫を据えている。								



第132図 G区第8号住居跡出土遺物実測図

当住居跡の掘り方は、住居全面に及ぶのではなく、南西コーナー部だけが掘り下げられている。この掘り方は隅丸長方形で、東側1段さらに下がり3個の円形小ピットが検出された。掘り方覆土は、CPとVI層土ブロックを含む土であり、住居掘り上げ土が埋め戻された可能性が高い。

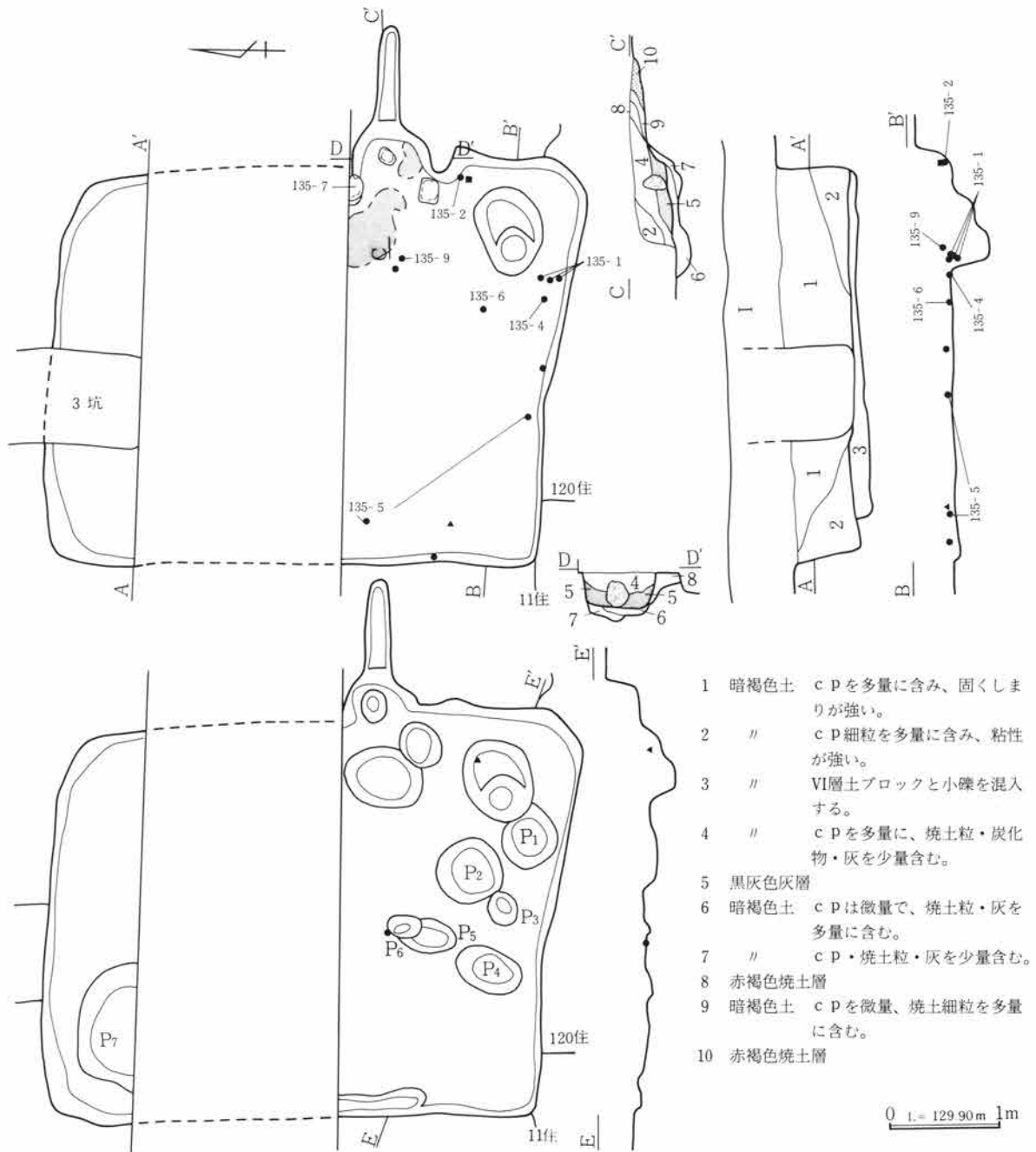
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第133図 G区第8号住居跡・出土遺物実測図

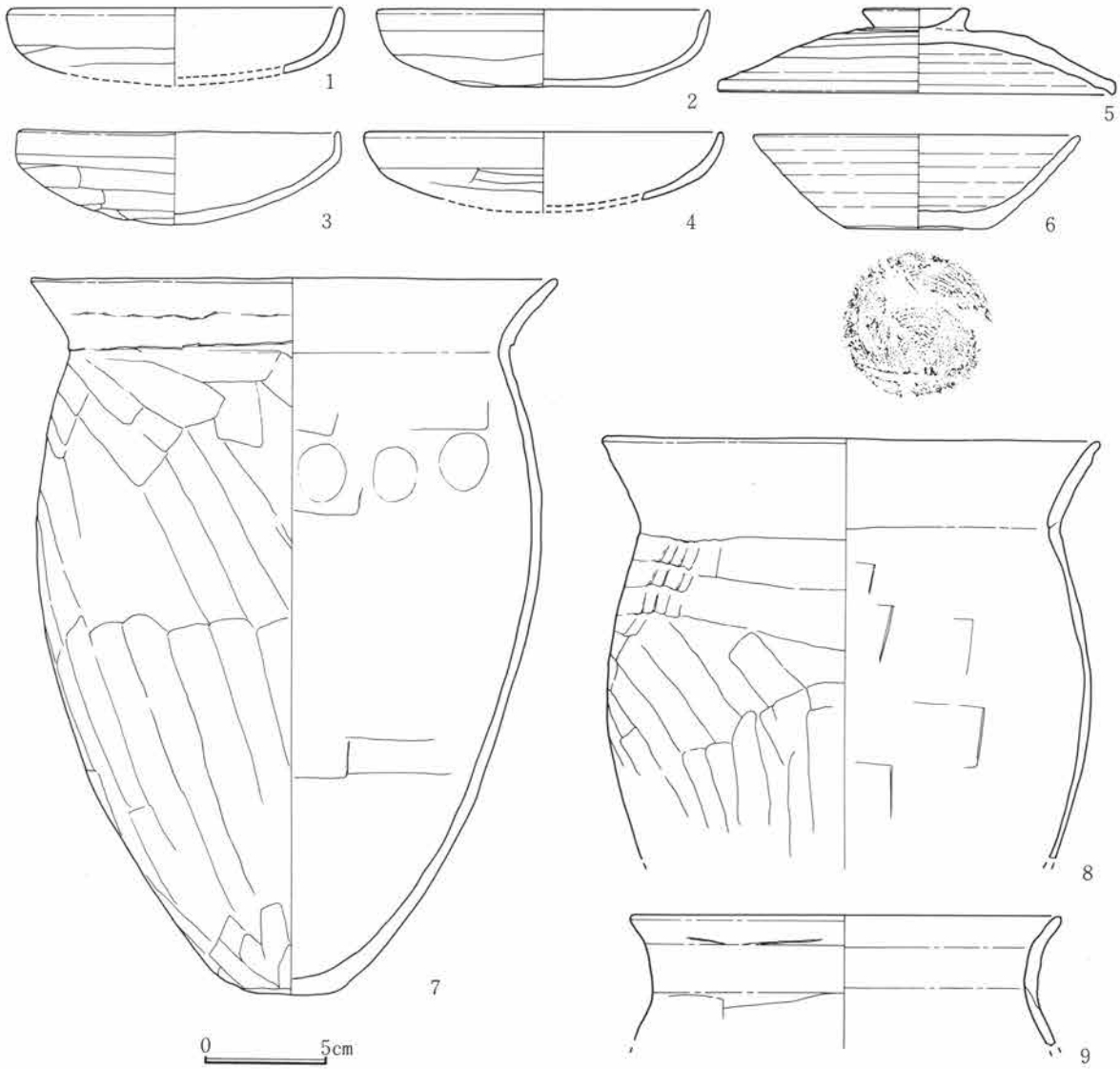
第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第10号住居跡		位置	45~47-G-49~51グリッド内		分類	C-11	時期	V
平面形態	隅丸長方形	規模	3.70m×4.70m	主軸方位	東-2度-北	残存深度	約20cm程		
備考	東西に通る水路部分以外検出。南壁で第120号住居跡と重複している。壁溝・柱穴は検出されておらず、貯蔵穴は南東コーナー部やや内側に検出。楕円形で規模は長径約80cm、深度約34cmである。								
カマド	位置・形状	東壁やや南寄り・凸字形				主軸方位	東-3度-北		
規模	全長160cm	屋外長110cm	屋内長50cm	袖間幅100cm	燃烧部幅68cm	煙道幅26cm			
備考	焚口に掘り込みはみられず、中央やや左寄りに灰面が広がっている。袖は左袖が土師器の甕を逆位に据え、右袖は角柱状の截石がわずかに残存。燃烧部には中央やや北寄りに截石の支脚を検出。								



第134図 G区第10号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



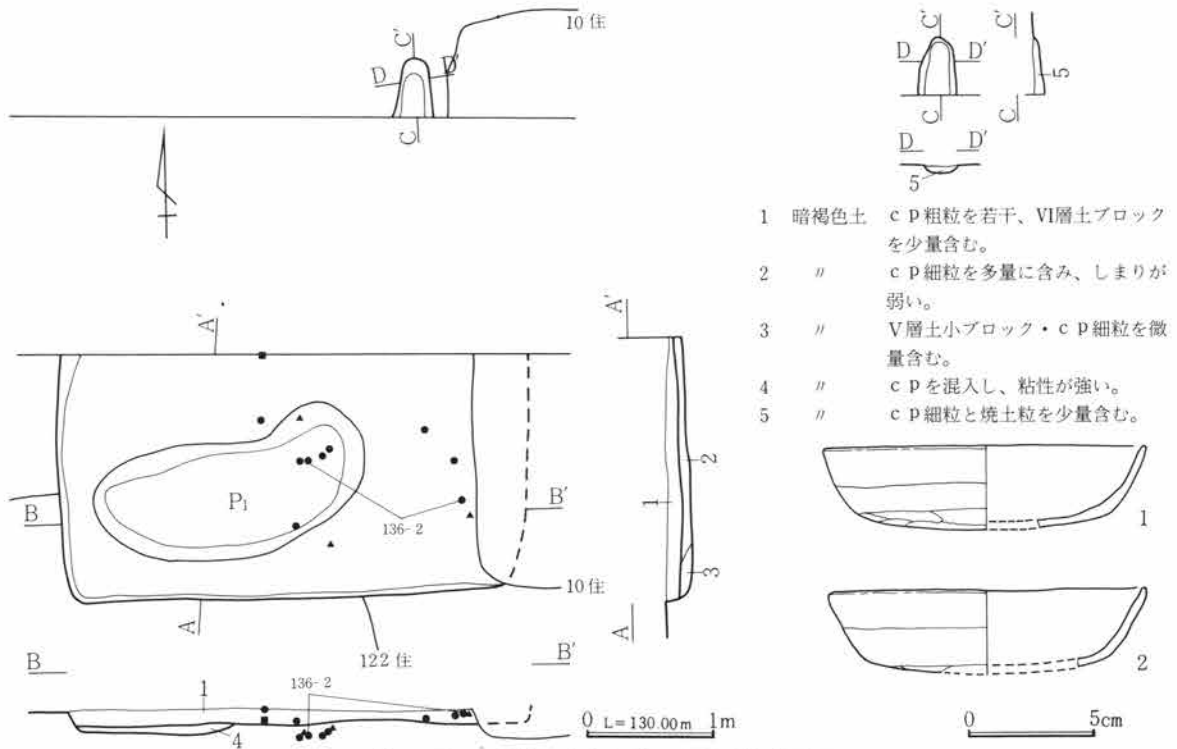
第135図 G区第10号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は南側½が東西農道下であるため、水路を挟んで南北に二次の調査で全体像を把握した。全体形では、南東コーナーがやや南に突出するため南壁が直線的でないのが特徴である。掘り方は、全体にわずかづつ下がり、北西コーナーに径約115cm程の円形掘り込みが検出された他、住居南寄りに円形・楕円形のピットが検出された。カマドは煙道部の明瞭に残存している例で、天井部の崩落と考えられる焼土層が2枚検出された。また、右袖部の検出されない例が多いが、当住居跡では掘り方段階で痕跡を検出した。

遺構名称	G区第11号住居跡	位置	45～47-G-51～53グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	方形 ?	規模	—m×—m	主軸方位	北—0度—東	残存深度	約10cm程
備考	東西農道部にかかり水路部分は未調査。第10・122号住居跡と重複し、南西コーナー及び南壁の大半と、カマド煙道部先端を検出した。南西コーナーには長軸約215cmの不整楕円形の浅い掘り込みを検出。						

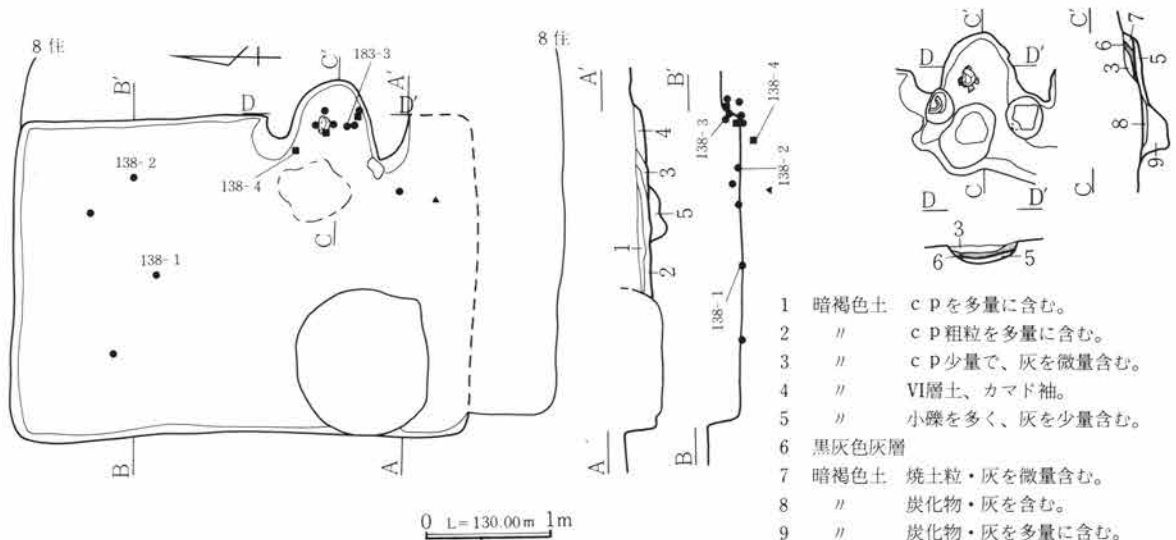
当住居跡のカマドについては、水路北側で検出された焼土粒の混じった土の充填した部分を煙道部と推定した。カマド主体部分が未検出であるため、明確にすることはできないが例外的に北壁にカマドを構築したものと考えられる。しかし東壁が第10号住居跡との重複で失われており、この部分の有無については不明。

第3章 検出された遺構・遺物



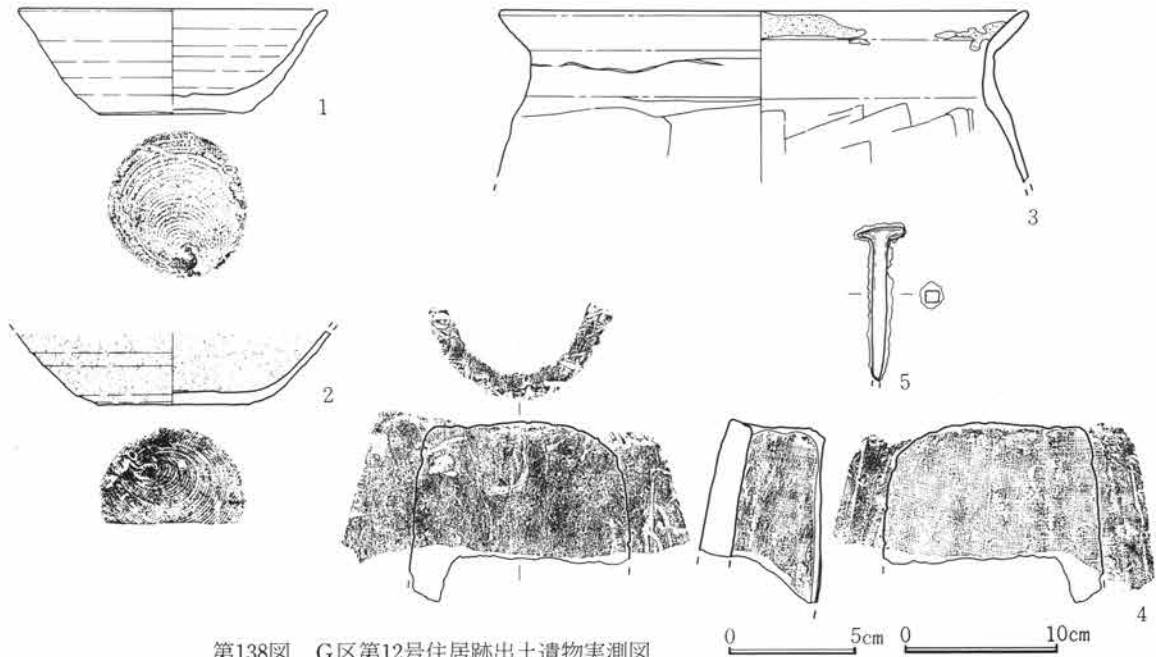
第136図 G区第11号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第12号住居跡	位置	48～50-G-54～56グリッド内	分類	C-10	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	3.10m×4.30m	主軸方位	東-3度-北	残存深度	約14cm程
備考	第8号住居跡と重複し南壁が失われている。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出で、掘り方段階でカマド反対側の西壁に接して、円形の掘り込みを検出した。これは当住居跡よりも新しい可能性がある。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-2度-北	
規模	全長 70cm 屋外長 30cm 屋内長 40cm 袖間幅 120cm 燃烧部幅 60cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口は平坦でやや北寄りに灰面を検出。袖は両袖共掘り方段階で検出した。左袖は丸瓦を右袖は角柱状の截石を使用していた。燃烧部中央やや北寄りに支脚を据えている。						



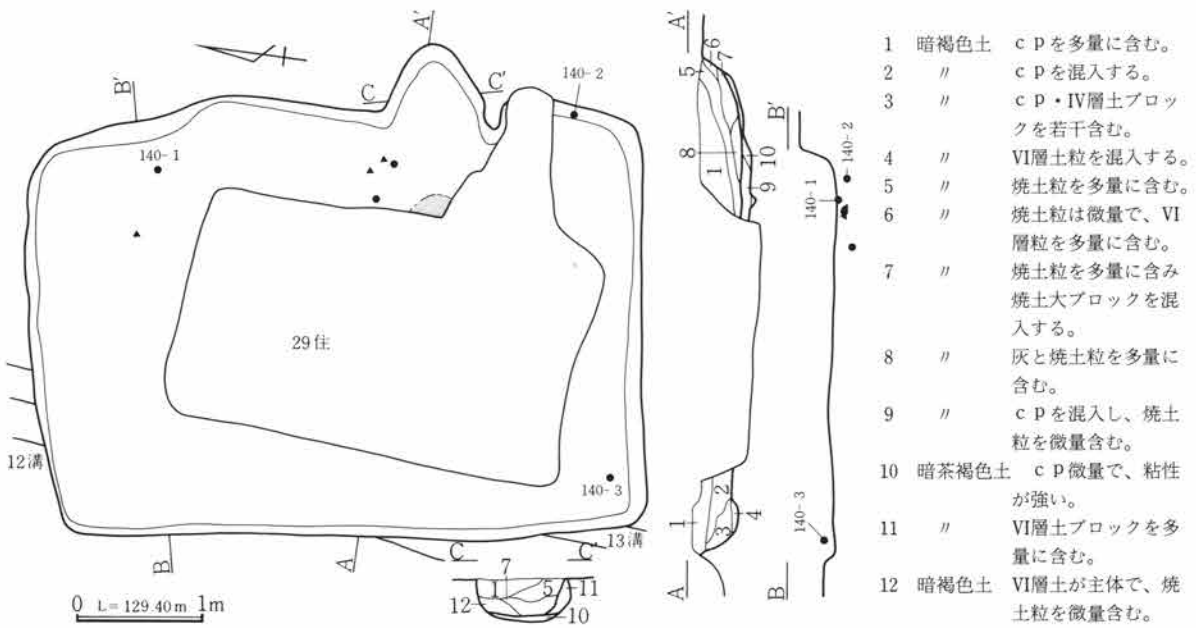
第137図 G区第12号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



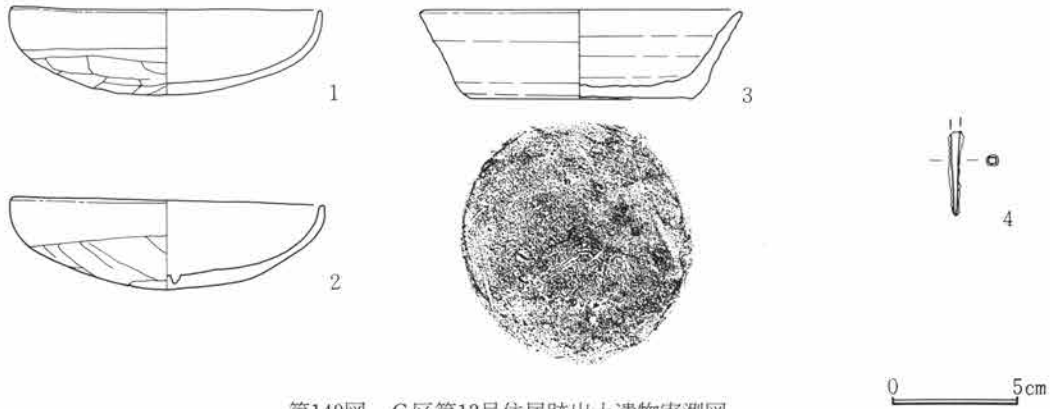
第138図 G区第12号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第13号住居跡	位置	13～16-G-43～45グリッド内	分類	C-11	時期	IV
平面形態	隅丸長方形	規模	3.30m×4.90m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約30cm程
備考	壁はほぼ全周検出し住居中央部で第29号住居跡と重複している。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出である。土層断面観察から明らかに第13号住居跡→第29号住居跡という関係がとらえられた。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-7度-北	
規模	全長 80cm 屋外長 50cm 屋内長 30cm 袖間幅 98cm 燃烧部幅 80cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口は平坦で第29号住居跡と接する位置に灰面を検出。袖は両袖共に残存せず、燃烧部に焼土等も明確には検出されなかった。						



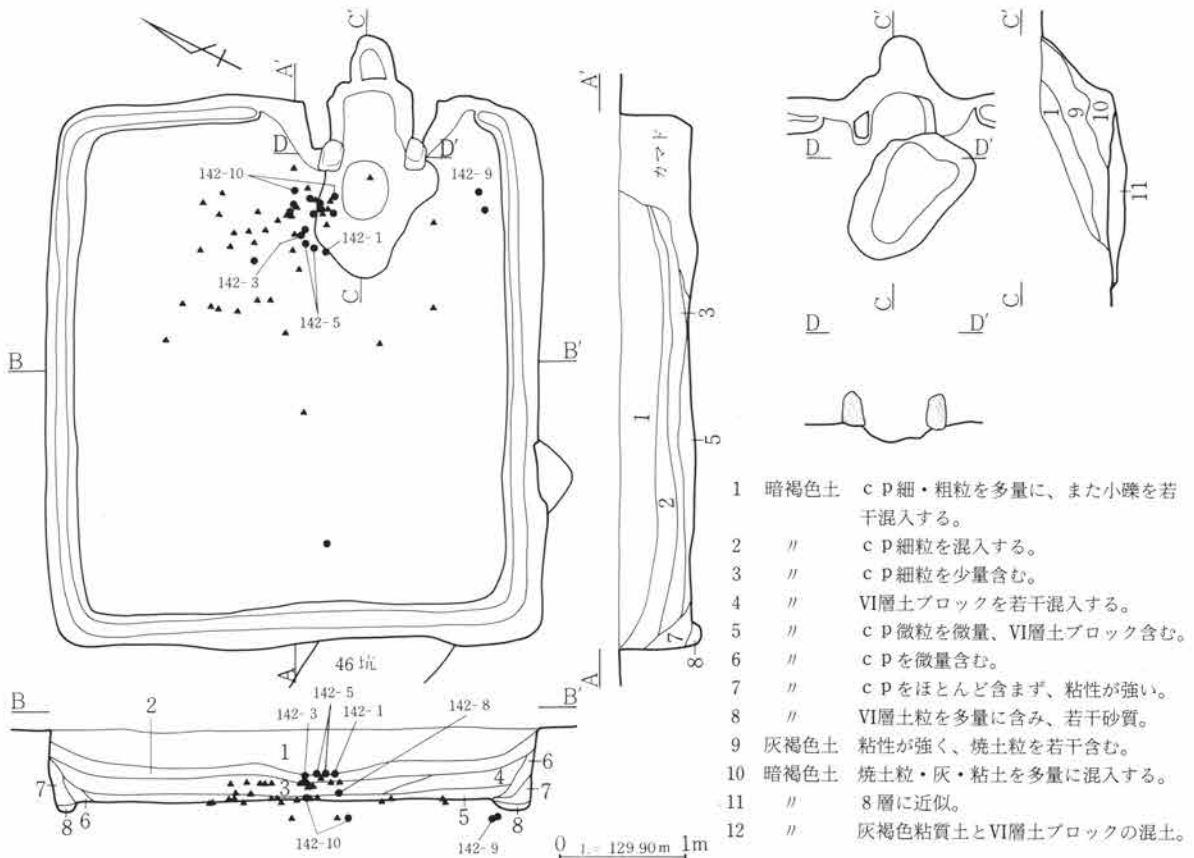
第139図 G区第13号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物

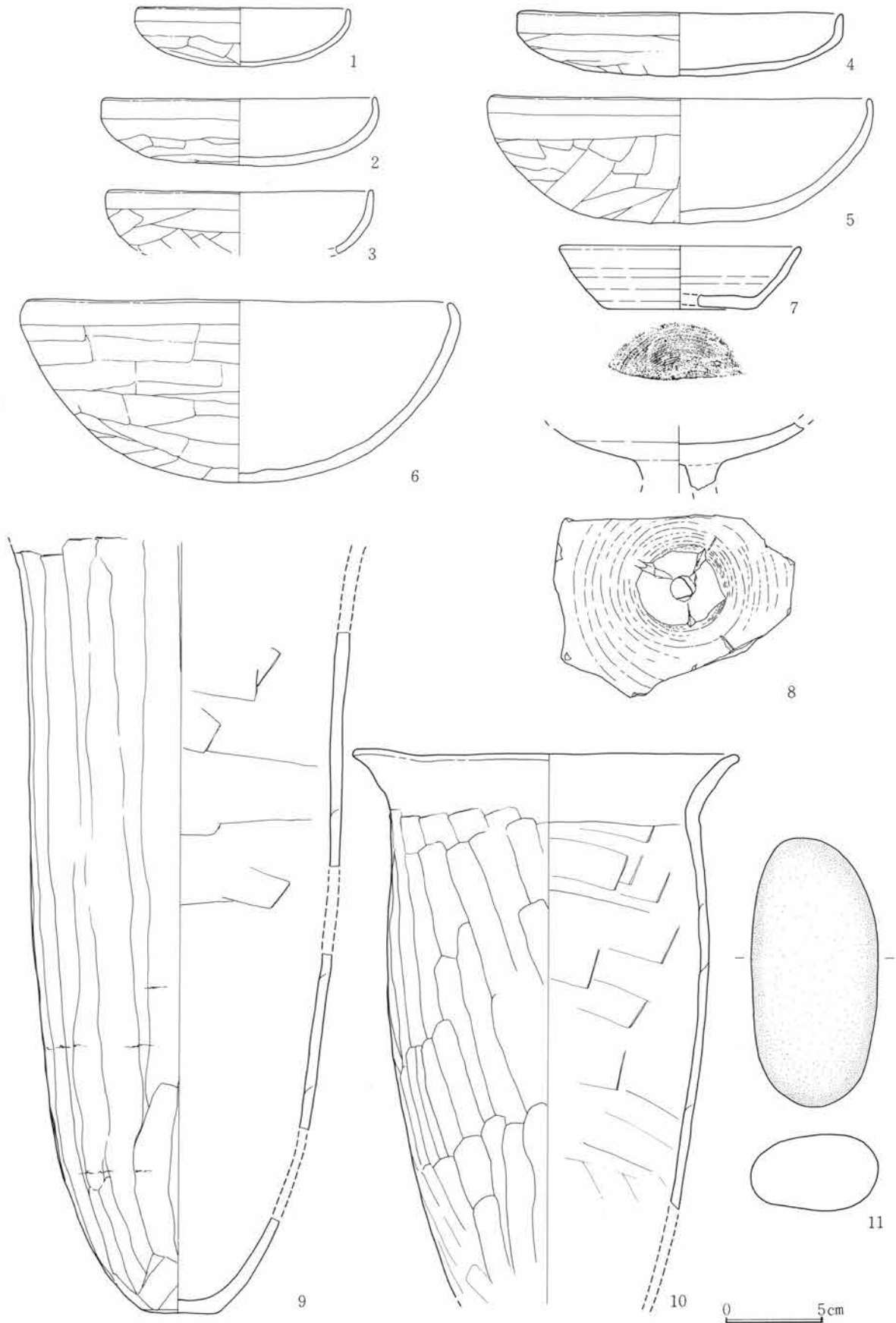


第140図 G区第13号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第14号住居跡		位置	40~42-G-46~49グリッド内		分類	B-4	時期	IV
平面形態	隅丸長方形	規模	4.30m×4.00m	主軸方位	東-25度-北	残存深度	約56cm程		
備考	壁は全周検出され掘り込みも深く垂直である。壁溝はカマド部分を除き全周し、幅は約23~30cmである。柱穴は無く、貯蔵穴は未検出である。遺物はカマド前面北寄りに礫主体で約10cm程遊離し出土。								
カマド	位置・形状	東壁南寄り・凸字形				主軸方位	東-25度-北		
規模	全長 107cm	屋外長 50cm	屋内長 57cm	袖間幅 150cm	燃烧部幅 43cm	煙道幅 35cm			
備考	カマド構造は、壁から煙道を掘り込み、取り付け部から左右に約15cm程度の距離から、灰褐色粘土を使用し袖を構築し、先端部には角柱状の截石を芯にしている。支脚は検出されていない。								



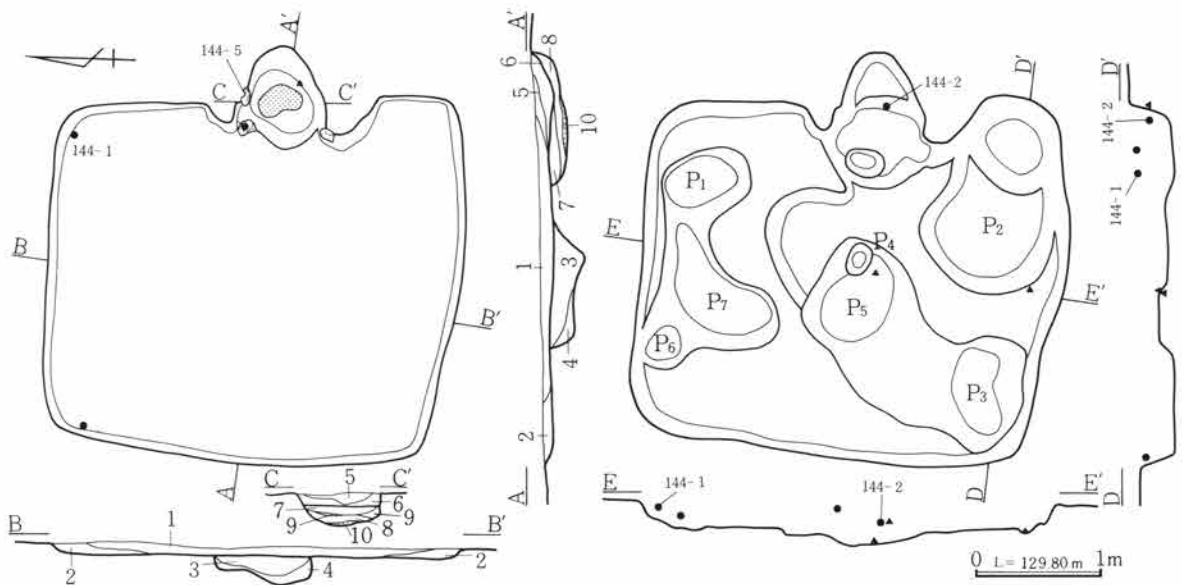
第141図 G区第14号住居跡実測図



第142図 G区第14号住居跡出土遺物実測図

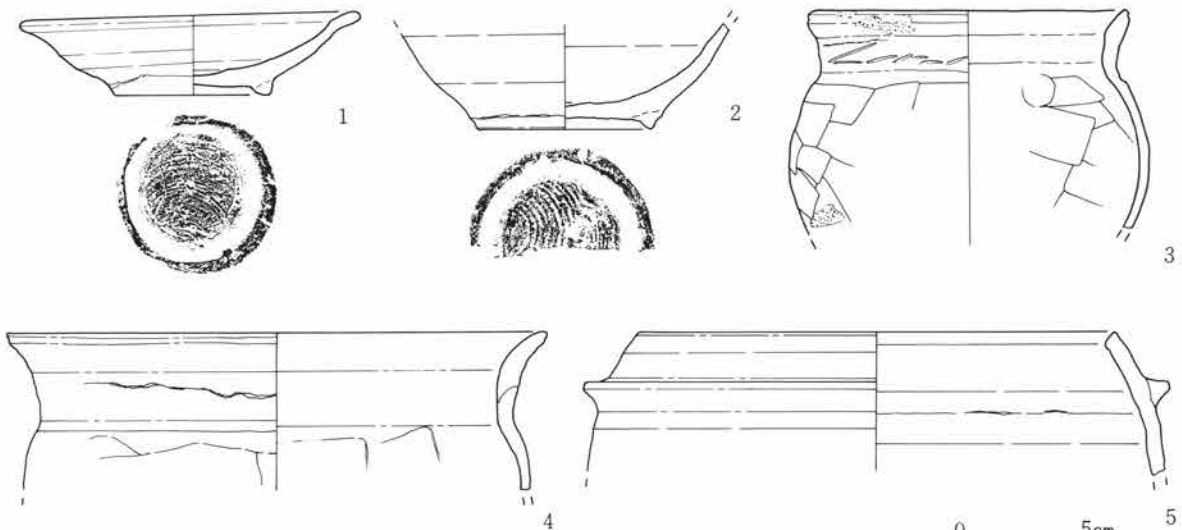
第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第15号住居跡	位置	40・41-G-49~51グリッド内	分類	A-3	時期	VIII
平面形態	隅丸方形	規模	2.80m×2.80m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約8cm程
備考	壁は全周検出し南壁が若干南側に張り出す。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は掘り方段階で検出し、南東コーナー部、円形で、径約80cm、深度約34cmであり、床構築時埋められた可能性がある。						
カマド	位置・形状	東壁中央・馬蹄形			主軸方位	東-5度-北	
規模	全長 82cm 屋外長 40cm 屋内長 42cm 袖間幅 285cm 燃烧部幅 80cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで灰面は検出されず、袖は両袖共先端に礫を使用している。燃烧部中央には焼土面が検出された。支脚は検出されていない。						



- | | | | |
|--------|---------------------|-----------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | c P大粒を多量に含み、しまりが強い。 | 6 // | 焼土粒・ブロックを多量に含む。 |
| 2 // | c Pを若干、VI層土粒を微量含む。 | 7 // | 焼土粒を多量に含み、粘性が非常に強い。 |
| 3 // | c Pを微量含み、粘性が強い。 | 8 // | 焼土粒・灰を多量に含む。 |
| 4 // | c Pはほとんど含まず、砂質。 | 9 // | 焼土粒・炭化物・灰を若干含む。 |
| 5 // | 焼土細粒を少量含み、粘性が強い。 | 10 赤褐色焼土層 | |

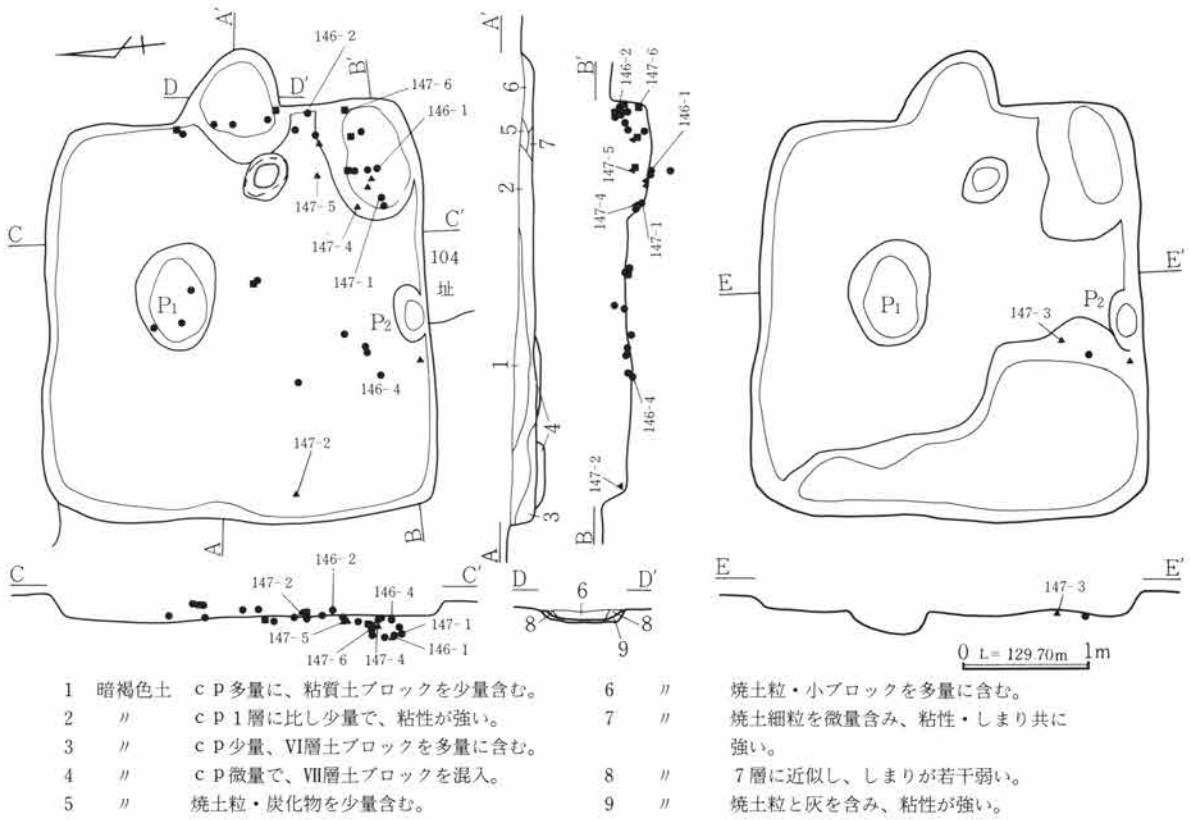
第143図 G区第15号住居跡実測図



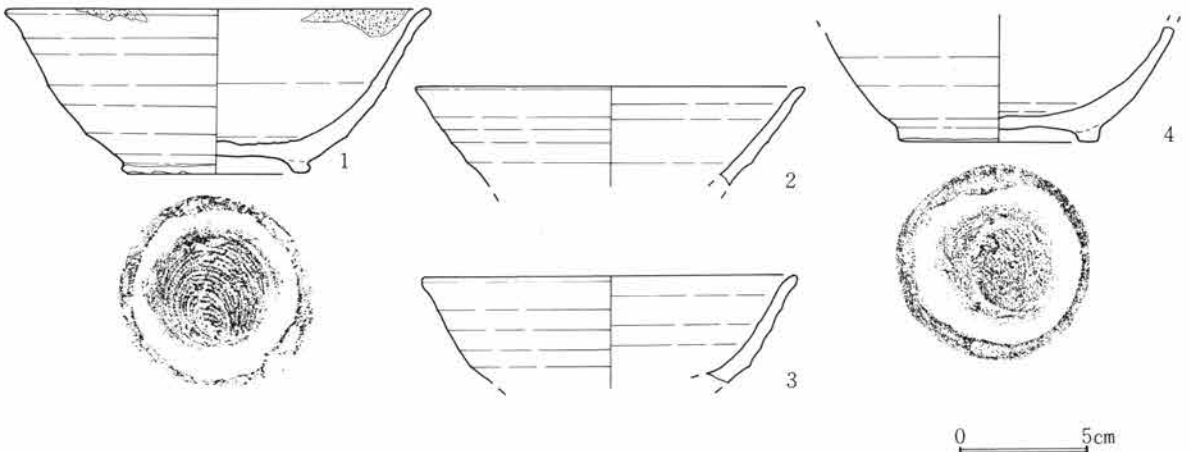
第144図 G区第15号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

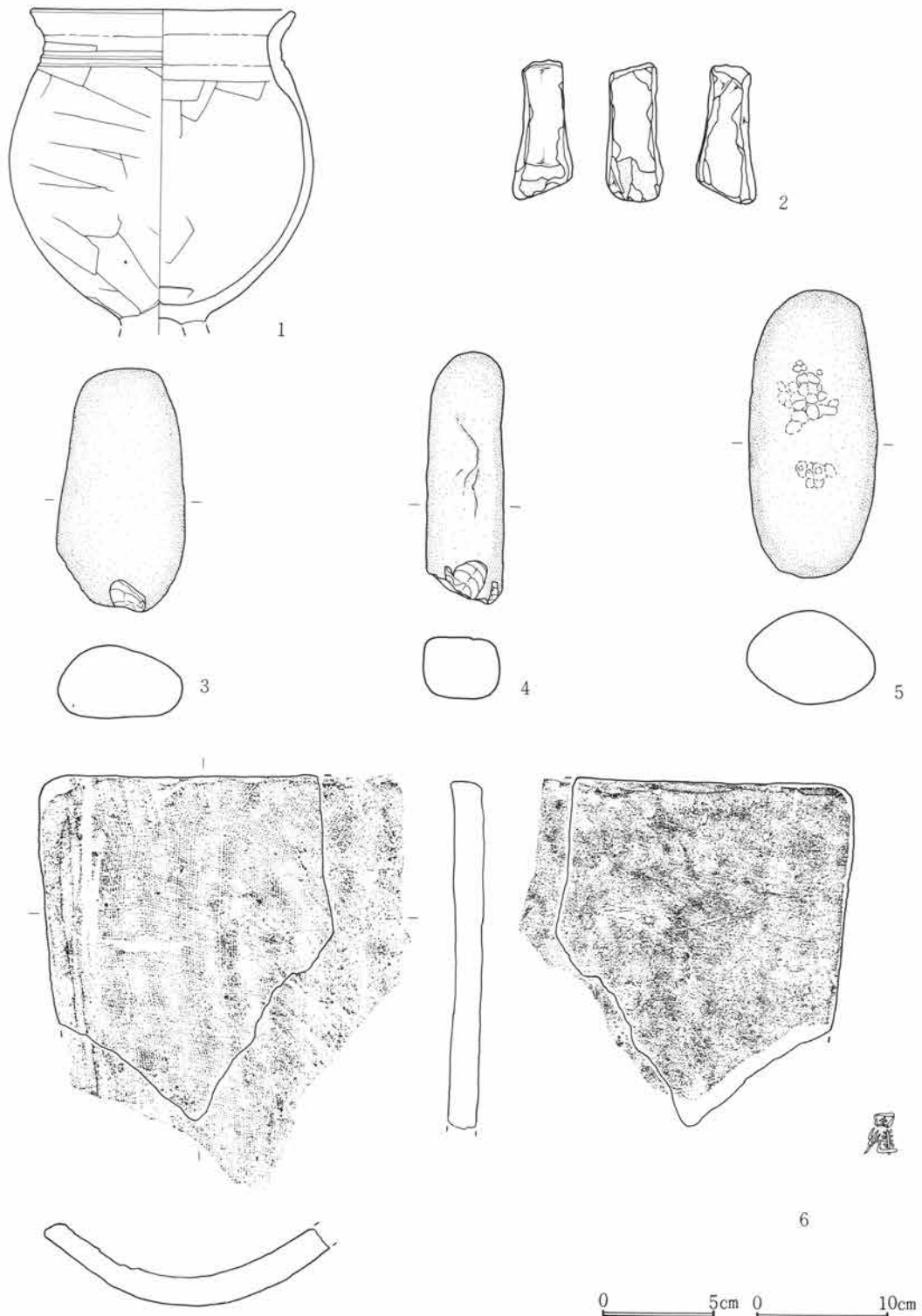
遺構名称	G区第16号住居跡		位置	33・34-G-65~67グリッド内		分類	A-3	時期	—			
平面形態	隅丸方形	規模	3.20m×3.10m	主軸方位	東-2度-北	残存深度	約11cm程					
備考	壁は浅いが全周検出された。壁溝・柱穴は無く、貯蔵穴は南東コーナー部で、楕円形。規模は長軸約97cm、深度約20cmである。掘り方段階で住居中央北寄りに円形プランの掘り込みを検出。											
カマド	位置・形状	東壁中央部・馬蹄形				主軸方位	東-15度-南					
規模	全長	60cm	屋外長	46cm	屋内長	14cm	袖間幅	—cm	燃烧部幅	75cm	煙道幅	—cm
備考	焚口は半円形の掘り方で、前面の小ピット上を覆うように灰層が検出された。袖は袖部位置両側に瓦が検出されている。燃烧部は平坦で灰・焼土等は明瞭には検出されていない。											



第145図 G区第16号住居跡実測図



第146図 G区第16号住居跡出土遺物実測図



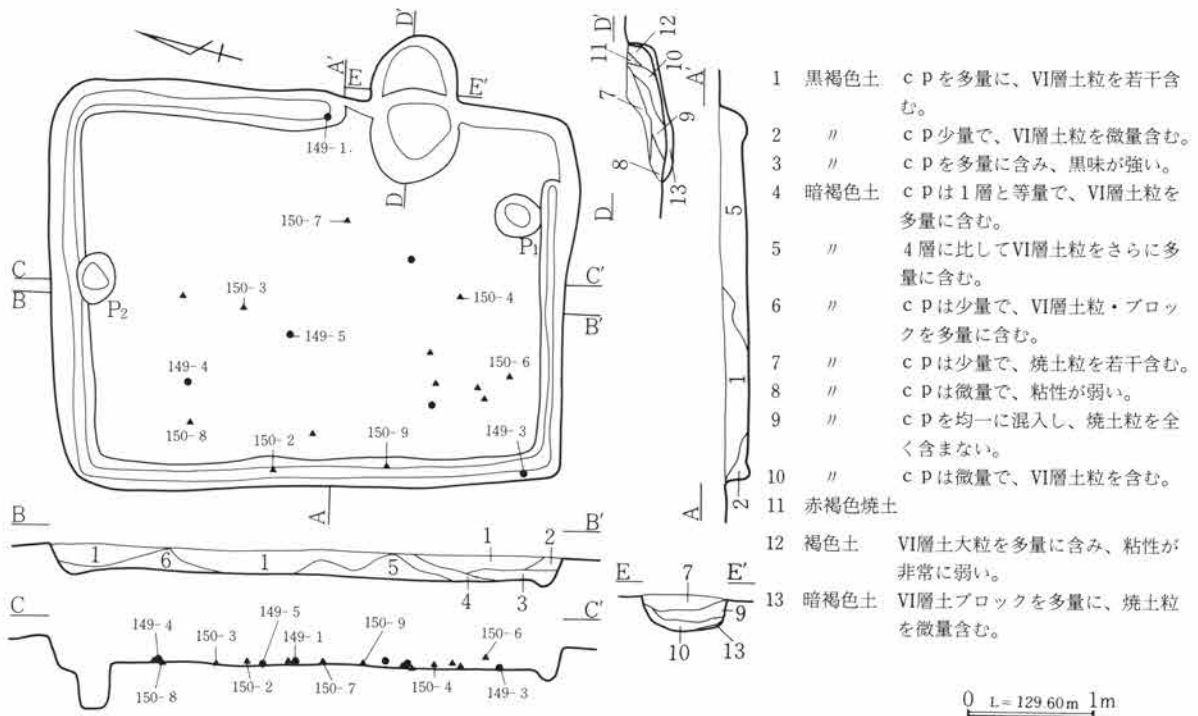
第147図 G区第16号住居跡出土遺物実測図

当住居跡の残存状態はあまり良好でなく、南西部に比して北東部は浅い。掘り方は、全面にみられるのではなく、南西コーナー部を含め西壁に沿った部分に浅い掘り込みが検出された他、住居中央部やや北側に円形の土坑状掘り込みを検出した。この掘り方内充填土は、VII層土ブロックを含む土であり、住居掘り上げ時の土を主体として埋め戻されたものと考えられる。

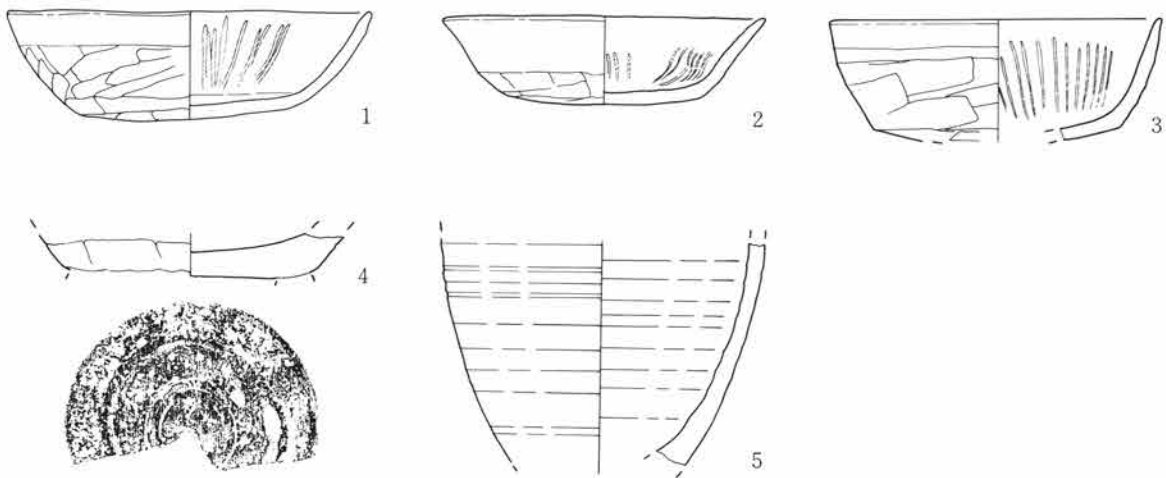
遺物はカマド周辺から貯蔵穴までは連続して出土している他、中央部出土のものは若干遊離している。

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第17号住居跡		位置	21～23-G-50～52グリッド内		分類	C-8	時期	VI?
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×4.10m	主軸方位	東-16度-北	残存深度	約17cm程		
備考	壁は全周検出し、壁溝は床面検出時はわからず掘り方段階で南東コーナー部を除き検出、幅は約17～30cmで浅い。柱穴・貯蔵穴は未検出で、南北両壁壁溝に接するように円形ピットを検出した。								
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形				主軸方位	東-10度-北		
規模	全長117cm	屋外長53cm	屋内長64cm	袖間幅—cm	燃烧部幅75cm	煙道幅—cm			
備考	焚口は半円形の掘り込みで明確な灰面は残存していない。袖は両袖共構築材は検出されず掘り方段階で両側に据え方と考えられる円形ピットを検出。燃烧部先端にわずかに焼土層を検出した。								

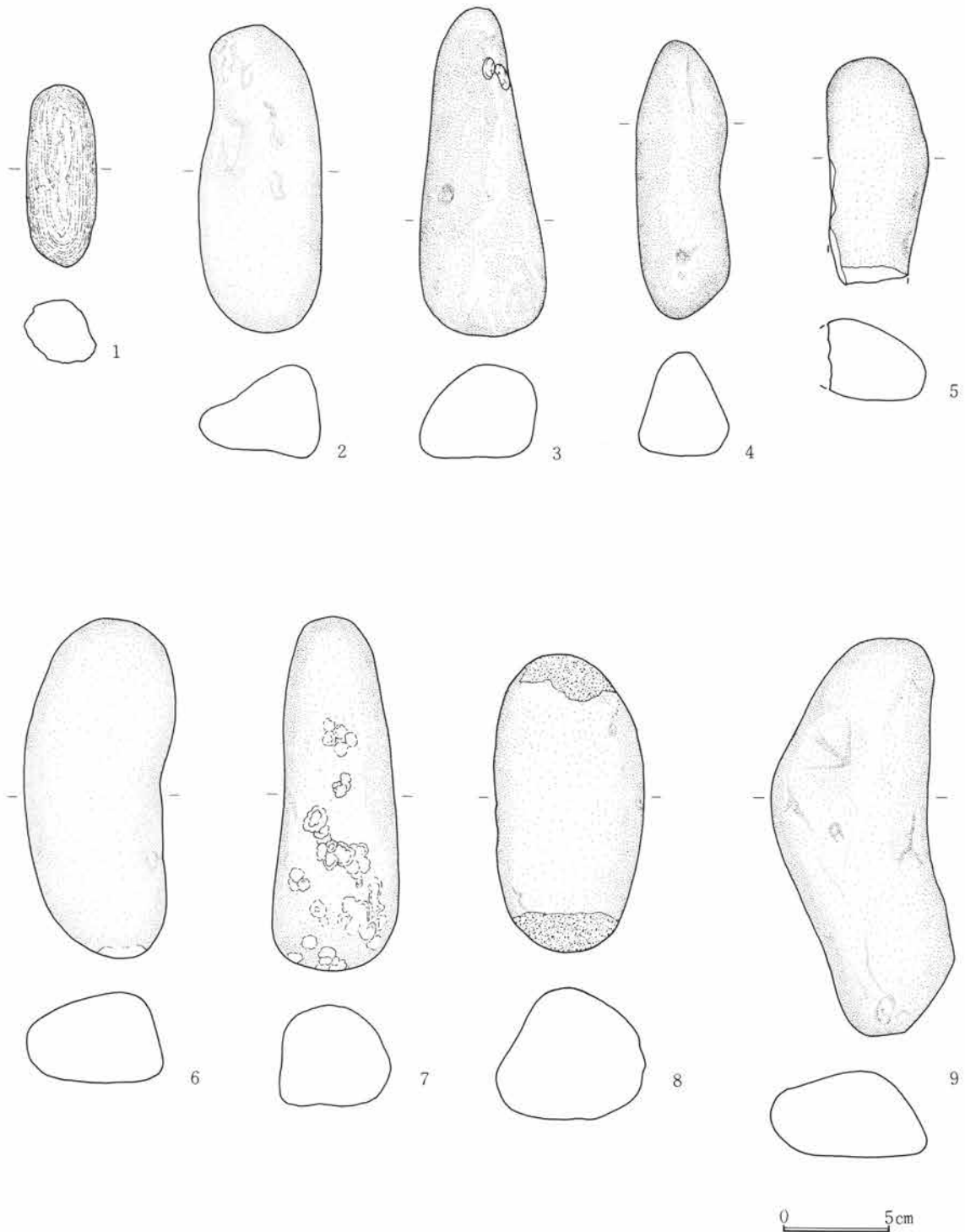


第148図 G区第17号住居跡実測図



0 5cm

第149図 G区第17号住居跡出土遺物実測図

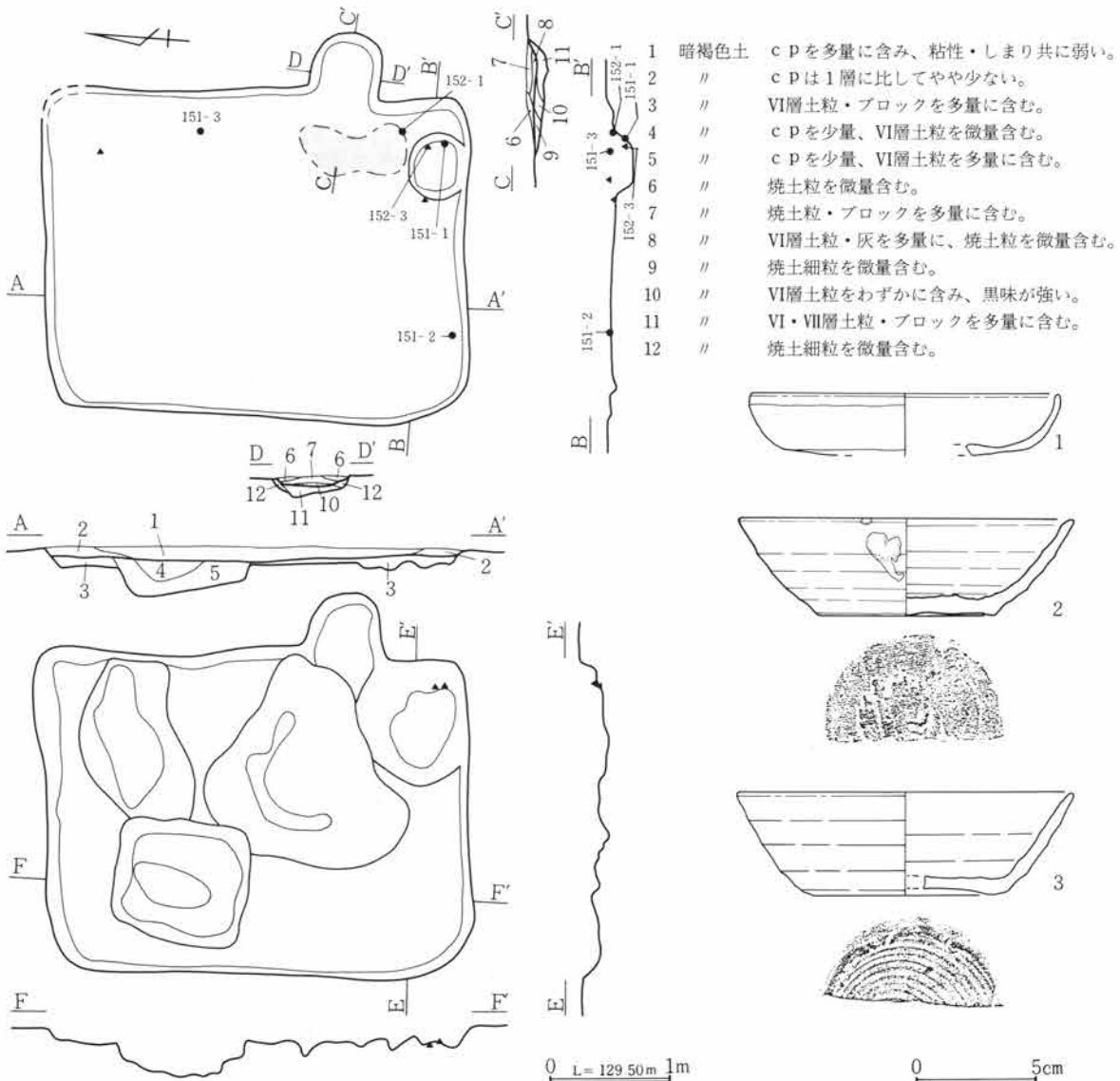


第150図 G区第17号住居跡出土遺物実測図

当住居跡における遺物出土は、全体として少なくその中において土器に比して楕円形の川原石が多いことが特徴である。これらの遺物は、他の住居跡の出土と違って、カマドの周辺にはほとんど出土せず、西壁寄りの床面上に貼り付くような出土の状態を呈している。また、川原石の出土状態は、円を意識したかのようなあり方を示しており、円内の西壁寄りに台石とも思われるような扁平な礫が出土している。このあり方は廃棄時の偶然によったものではなく、生活時に近い状態を示しているのではないだろうか。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第18号住居跡		位置	18～20-G-50～52グリッド内		分類	C-10	時期	V			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.70m×3.60m	主軸方位	東-3度-北	残存深度	約6cm程					
備考	壁は全周検出したが浅い。壁溝・柱穴は掘り方段階でも検出されておらず、無たものと考えられる。貯蔵穴は、南東コーナー部やや西寄りに検出され、円形で規模は径約53cm、深度約14cmである。											
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形				主軸方位	東-2度-南					
規模	全長	50cm	屋外長	50cm	屋内長	—cm	袖間幅	—cm	燃烧部幅	58cm	煙道幅	—cm
備考	焚口に掘り込みはみられず、前面やや右寄りに灰面が広がっている。袖は両袖共に痕跡も残存していない。燃烧部は灰を比較的多量に含む層は検出されたが、純灰層は1枚も検出されなかった。											

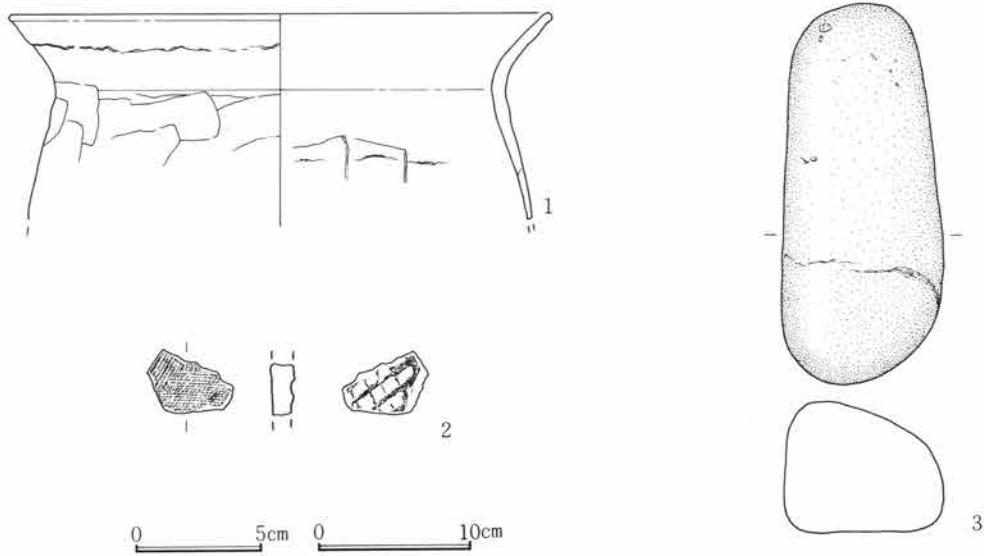


第151図 G区第18号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡の掘り方は、北東コーナー部及びカマド前面に顕著である。また、北西コーナー部やや内側に長方形プランで2段の掘り込みを有する土坑が検出された。この土坑は、土層断面観察によれば床面構築後に掘り込まれたものと判断された。しかし機能を示すような遺物出土等は全くみられない。

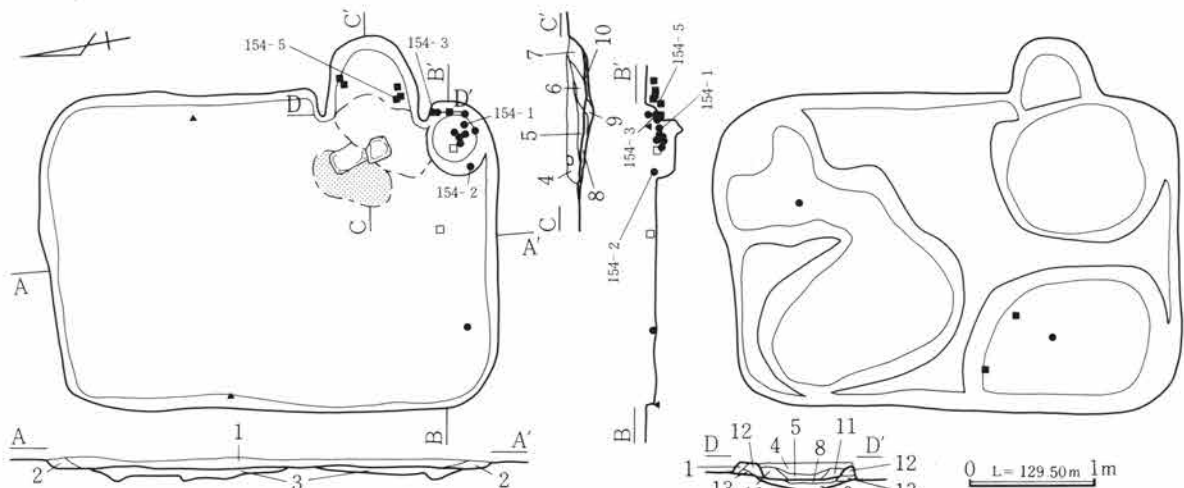
遺物はごく少なく、貯蔵穴周辺及び壁際からの出土が多い。

第3章 検出された遺構・遺物



第152図 G区第18号住居跡出土遺物実測図

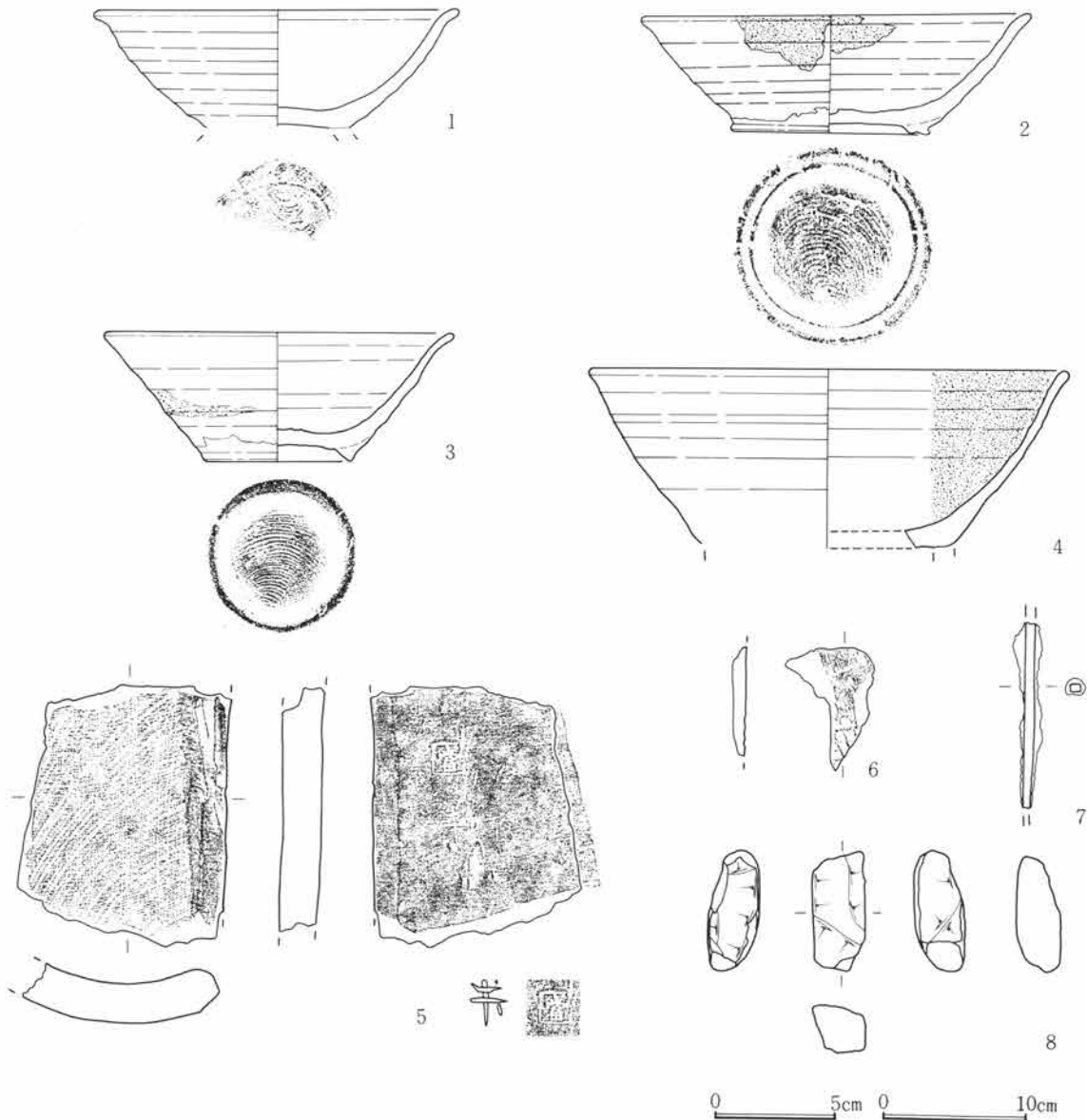
遺構名称	G区第19号住居跡	位置	17~19-G-48~50グリッド内	分類	C-10	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	2.50m×3.60m	主軸方位	東—9度—南	残存深度	約6cm程
備考	壁は全周検出され、各コーナー部には楕円形または円形の掘り方がみられる。壁溝・柱穴は掘り方段階でも検出されず、貯蔵穴は南東コーナー部で円形であり、規模は径約60cm、深度約16cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東—0度—北	
規模	全長 70cm 屋外長 47cm 屋内長 23cm 袖間幅 100cm 燃烧部幅 67cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口に掘り込みはみられず灰面は、右側貯蔵穴部縁に及んでいる。また、灰面よりさらに屋内側に焼土層があり、上に角柱状の截石を検出。袖は右袖が顕著で瓦を使用したものと考えられる。						



- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 c Pを多量に含み、粘性が弱い。 | 7 // 焼土粒を少量含む。 |
| 2 // c Pを多量に含み、VI層土ブロックを少量含む。 | 8 // 炭化物を多量に、焼土粒を微量含む。 |
| 3 // c Pを少量含み、粘性・しまり共に弱い。 | 9 // c Pを多量、炭化物・焼土粒を微量含む。 |
| 4 // VI層土小ブロックと焼土粒を微量含む。 | 10 // 焼土粒・灰・VI層土粒を含み、粘性弱い。 |
| 5 // 灰を多量に、VI層土大ブロックを微量含む。 | 11 // 灰と炭化物を多量に含む。 |
| 6 // 焼土粒・ブロックを多量に含む。 | 12 褐色粘質土 袖？ |
| | 13 黒褐色土 炭化物・灰・焼土粒を多量に含む。 |

第153図 G区第19号住居跡実測図

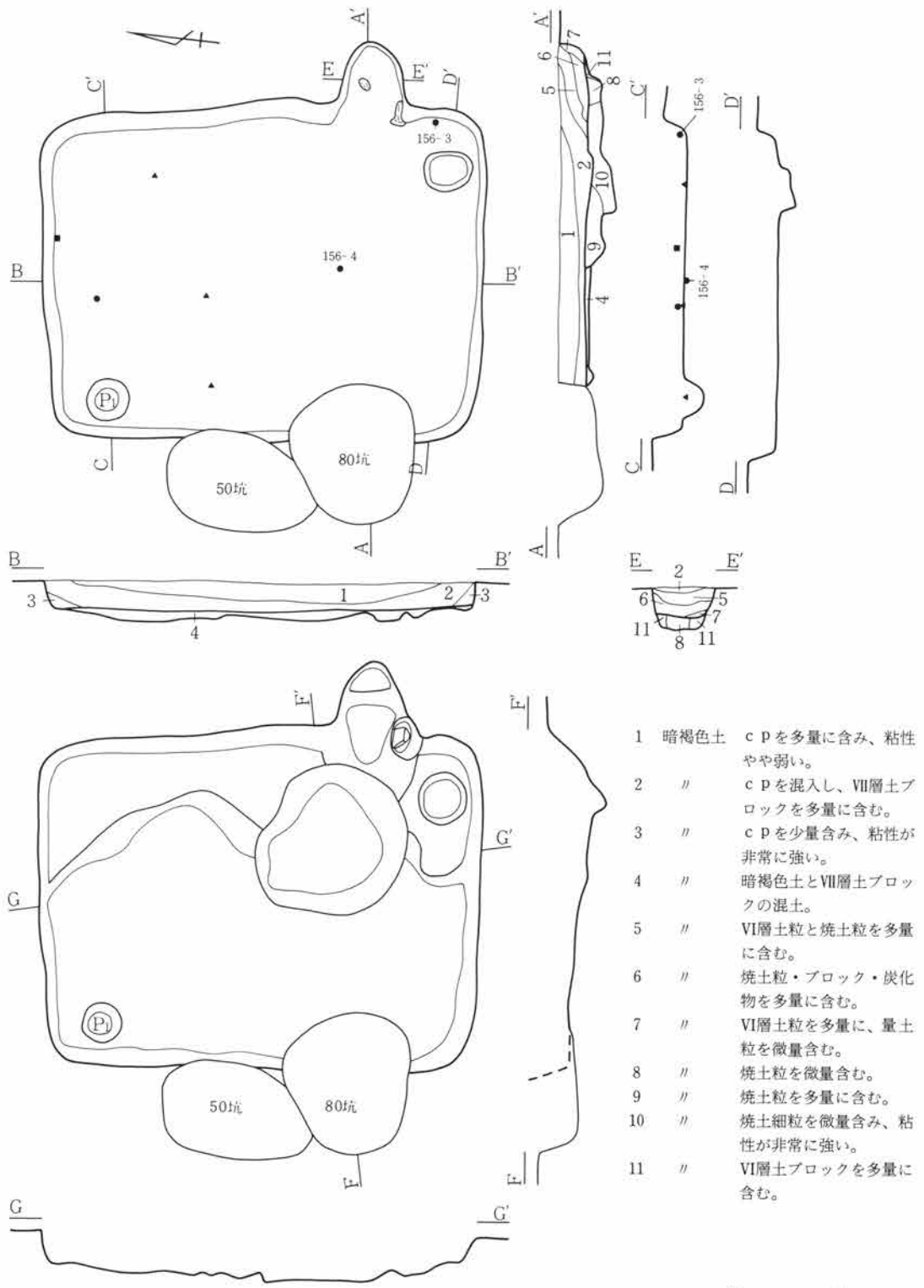
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第154図 G区第19号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第20号住居跡	位置	9～11-G-47～49グリッド内	分類	C-11	時期	V
平面形態	隅丸長方形	規模	3.10m×4.20m	主軸方位	東-6度-北	残存深度	約20cm程
備考	西壁で第50・80号土坑と重複し一部を失っている。壁溝・柱穴は検出されず無たものと考えられる。貯蔵穴は、南東コーナー部やや西寄りに検出され、円形で径約43cm、深度約9cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-4度-北	
規模	全長 76cm 屋外長 55cm 屋内長 21cm 袖間幅 115cm 燃烧部幅 66cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口に掘り込みはみられず、灰面も検出されていない。袖は右袖のみ残存し、角柱状の截石が壁取りつき部に据えられていた。燃烧部中央北寄りに截石の支脚を据えている。						

第50・80号土坑との重複関係については、遺構検出時両土坑が当住居跡を切っていることが確認された。これは、第50・80号土坑覆土中には明確なBTの含有が認められ、全体に灰褐色を呈し、住居覆土とは容易に区別することができる。この違いは土層断面観察によっても確かめられた。



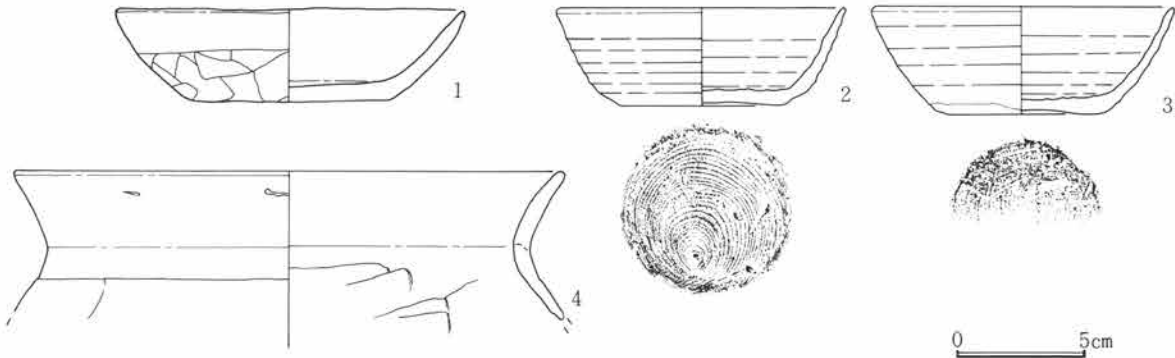
第155図 G区第20号住居跡実測図

0 L=129.50m 1m

当住居跡掘り方は、カマド全面に径約135cm程の不整形の掘り込みがみられる他、西側½が1段掘り下げられている。また、床面上で検出された北西コーナー部の円形ピットは、掘り方面まで達している。このピットは1個しか検出されておらず、位置的にみても柱穴とみるには無理がある。

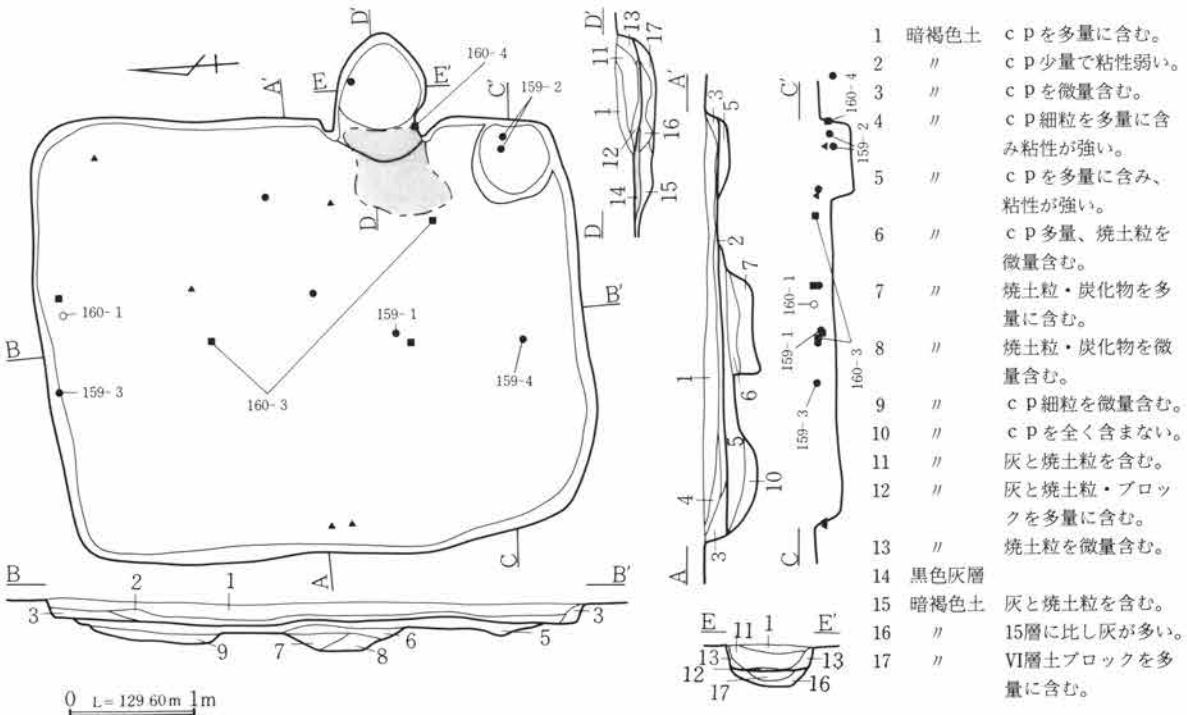
遺物は、ごくわずかししか出土しておらずカマド周辺からの出土はほとんどみられない。

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



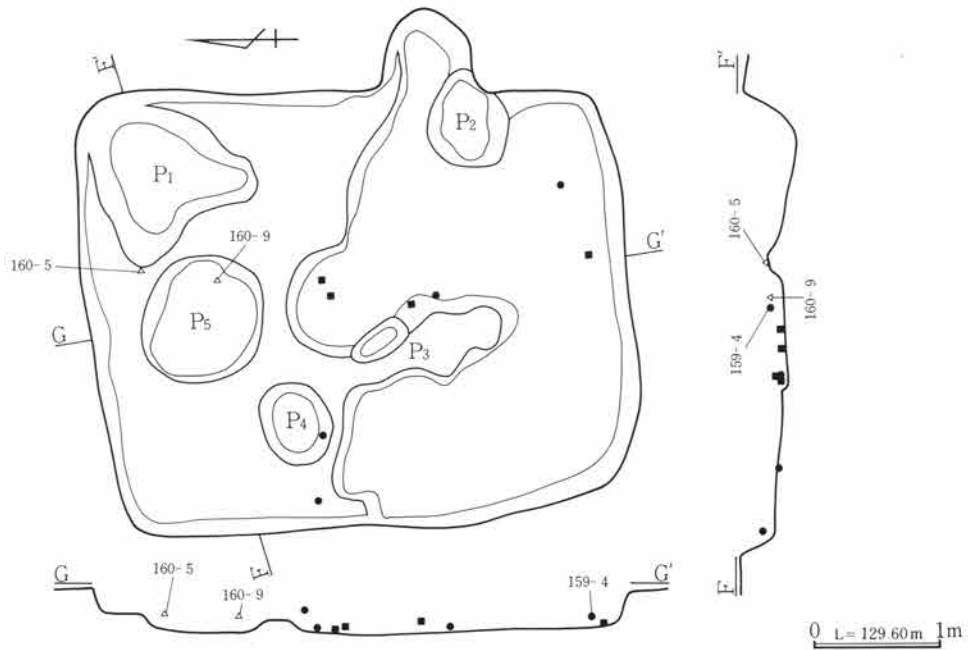
第156図 G区第20号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第21号住居跡	位置	7～9-G-54～56グリッド内	分類	C-11	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	3.50m×4.30m	主軸方位	東-2度-南	残存深度	約16cm程
備考	壁は全周検出され、北東コーナー部がやや突出するため、東西方向にややズレがみられる。壁溝柱穴は検出されず、貯蔵穴は南東コーナー部に検出され、円形で規模は径約65cm、深度約14cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・先端が尖った馬蹄形			主軸方位	東-3度-南	
規模	全長 97cm 屋外長 65cm 屋内長 32cm 袖間幅 95cm 燃烧部幅 72cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口はごく浅い掘り込みで、灰層は約5cm厚で焚口前面からわずかに南側に広がりが認められる。袖は右袖部に瓦が検出された他はみられない。燃烧部内に支脚等の他、焼土・灰等は検出されていない。						

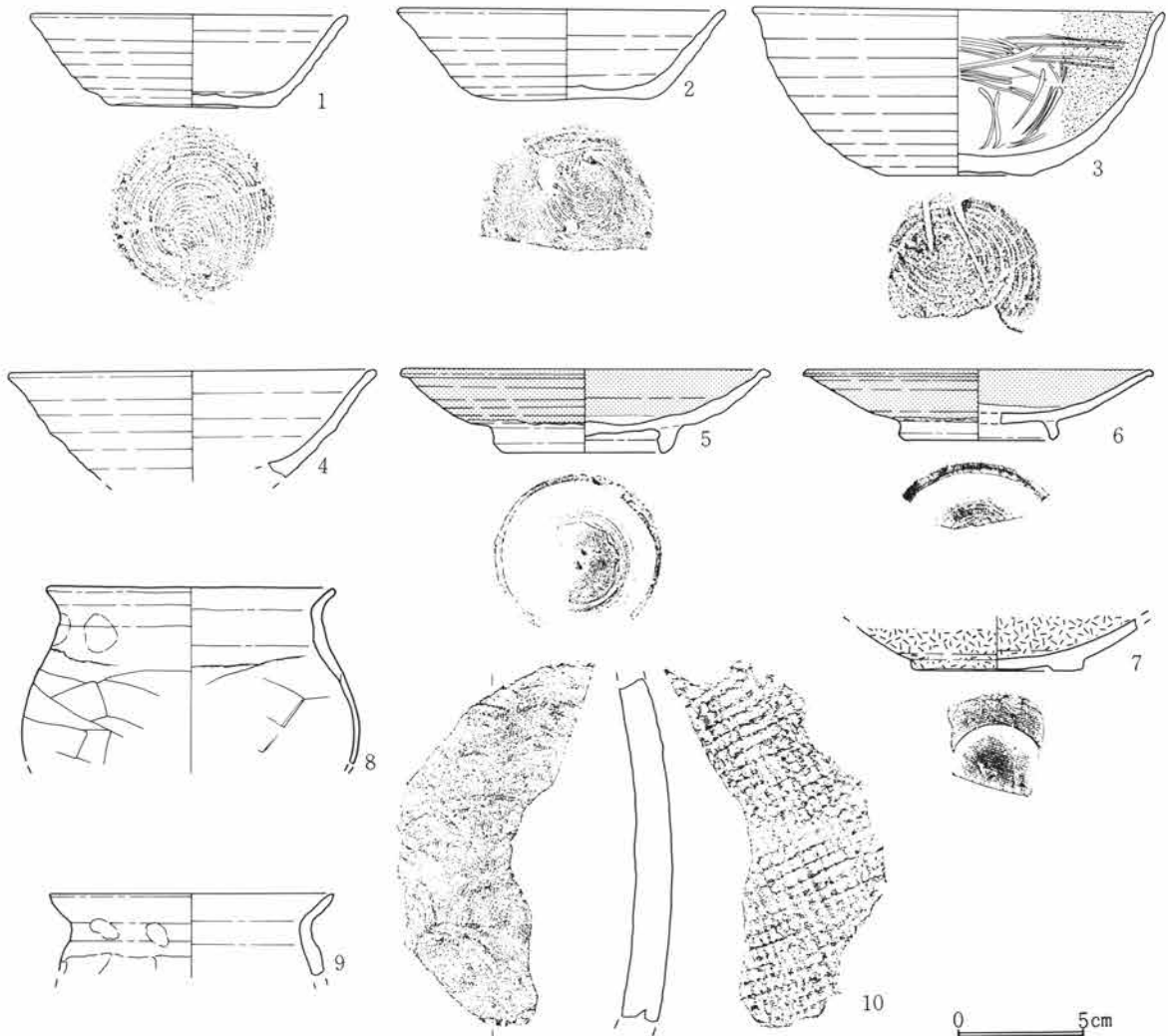


第157図 G区第21号住居跡実測図

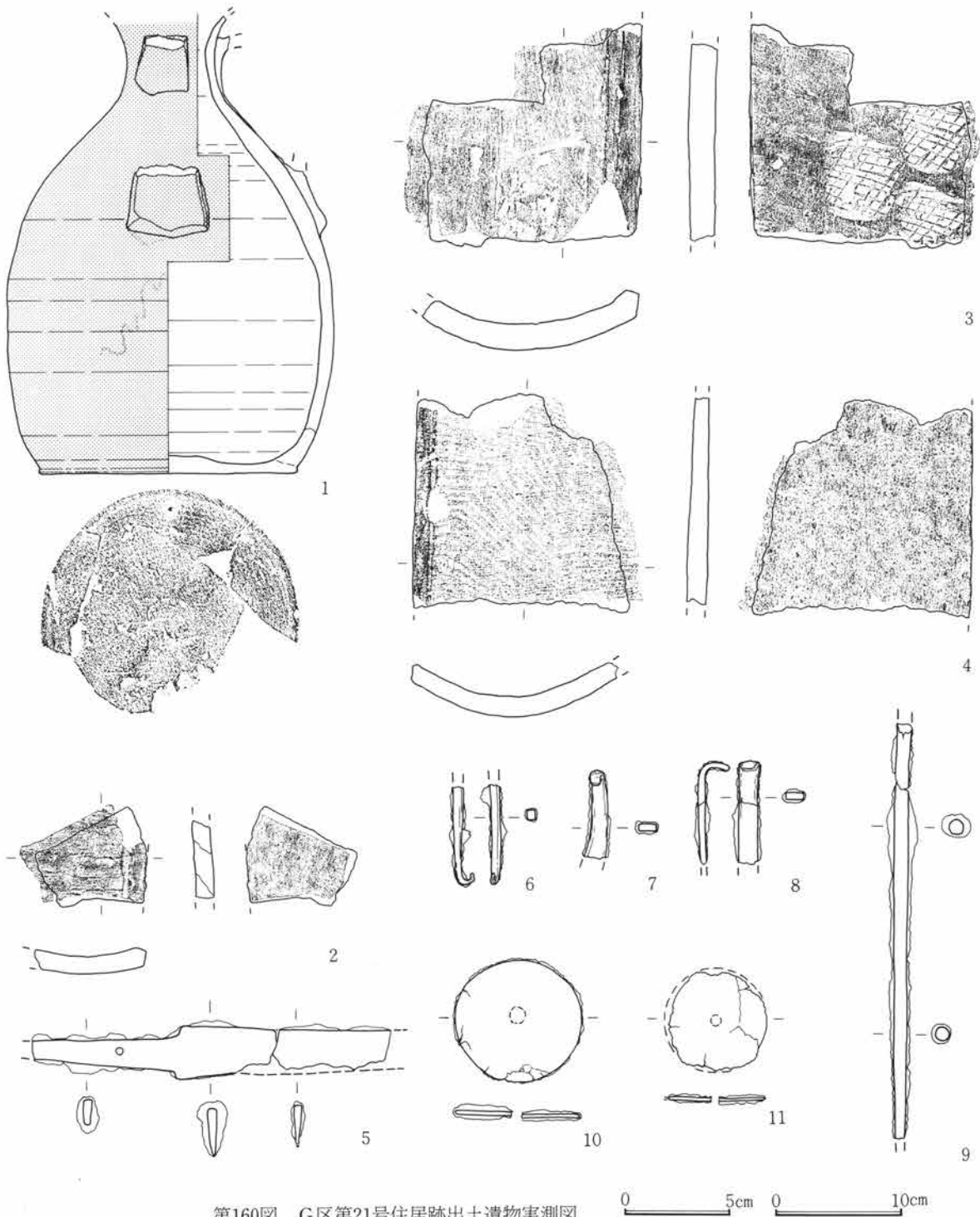
当住居跡の掘り方は、南側約 $\frac{1}{3}$ が全体に掘り下げられ、北側には4カ所に円形及び不整形の土坑状掘り込みが検出されている。特に住居中央部で検出された土坑内覆土には、焼土粒・炭化物粒を含む土が充填しており、他の場所から検出されているものと若干性格を異にするものと思われる。しかし住居構築当初に掘り込まれていることは確かで、これらの焼土粒を含む層の上面に床面を構成する層が1枚みられる。



第158図 G区第21号住居跡実測図



第159図 G区第21号住居跡出土遺物実測図

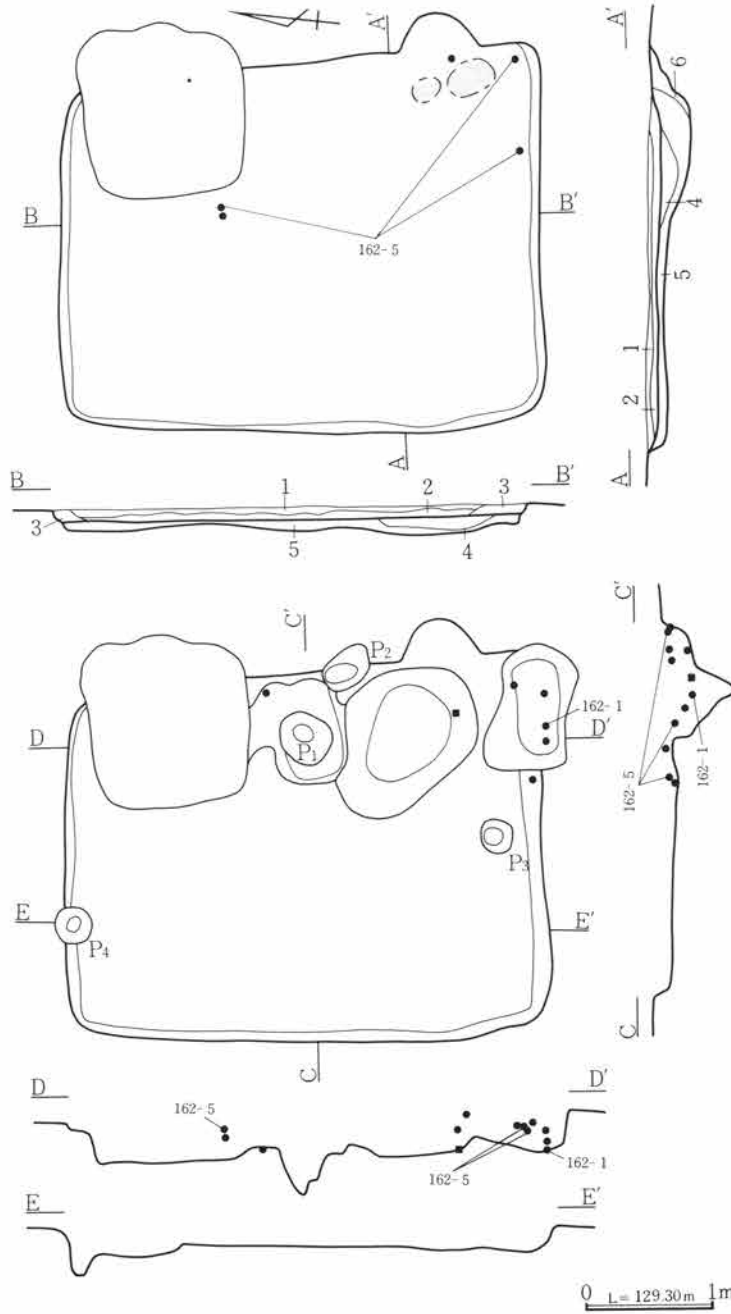


第160図 G区第21号住居跡出土遺物実測図

当住居跡出土遺物の中で、第160図1は、北壁に接し床面から若干遊離した位置に、口縁部を住居内に向け横転して出土した。これは壁上からの落ち込みともみられるが、底部・把手・口縁部共に破損しており、二次的な使用にも耐え得るものではないことから、住居埋没段階での廃棄と判断した。その他の遺物では、住居構築時の資料として第159図7、第160図5・9が掘り方内より出土していることから考えられる。また、住居廃棄直後の資料としては、第159図1が、住居中央床面直上に全く間層を挟まずに、口縁を下に向け押し潰されたような状態で出土している。

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第22号住居跡		位置	1～3-G-42・43グリッド内		分類	C-10	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×3.80m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約10cm程		
備考	カマドは東壁南寄りに扁在していたと思われるが、東側の残存状態が極めて悪く、明確にすることはできなかった。								



- 1 暗褐色土 c P細粒を若干含む。
- 2 // c P細粒を微量含む。
- 3 // c P微粒子を微量含む、粘性が強い。
- 4 // VI層土ブロックと暗褐色土の混土。
- 5 // VI層土粒を多量に含む。
- 6 // c P細粒、炭化物・焼土粒を混入。

第161図 G区第22号住居跡実測図

当住居跡の確認は、VI層中であり、掘り込みはVII層に若干かかる程度しか掘り込まれていないため、残存状態は極めて悪い。特に東側のカマド部は、ほとんど残存していないため、形態、構造等については全く不明である。しかし位置については、床面上に灰面が2カ所検出されていることから特定することができる。

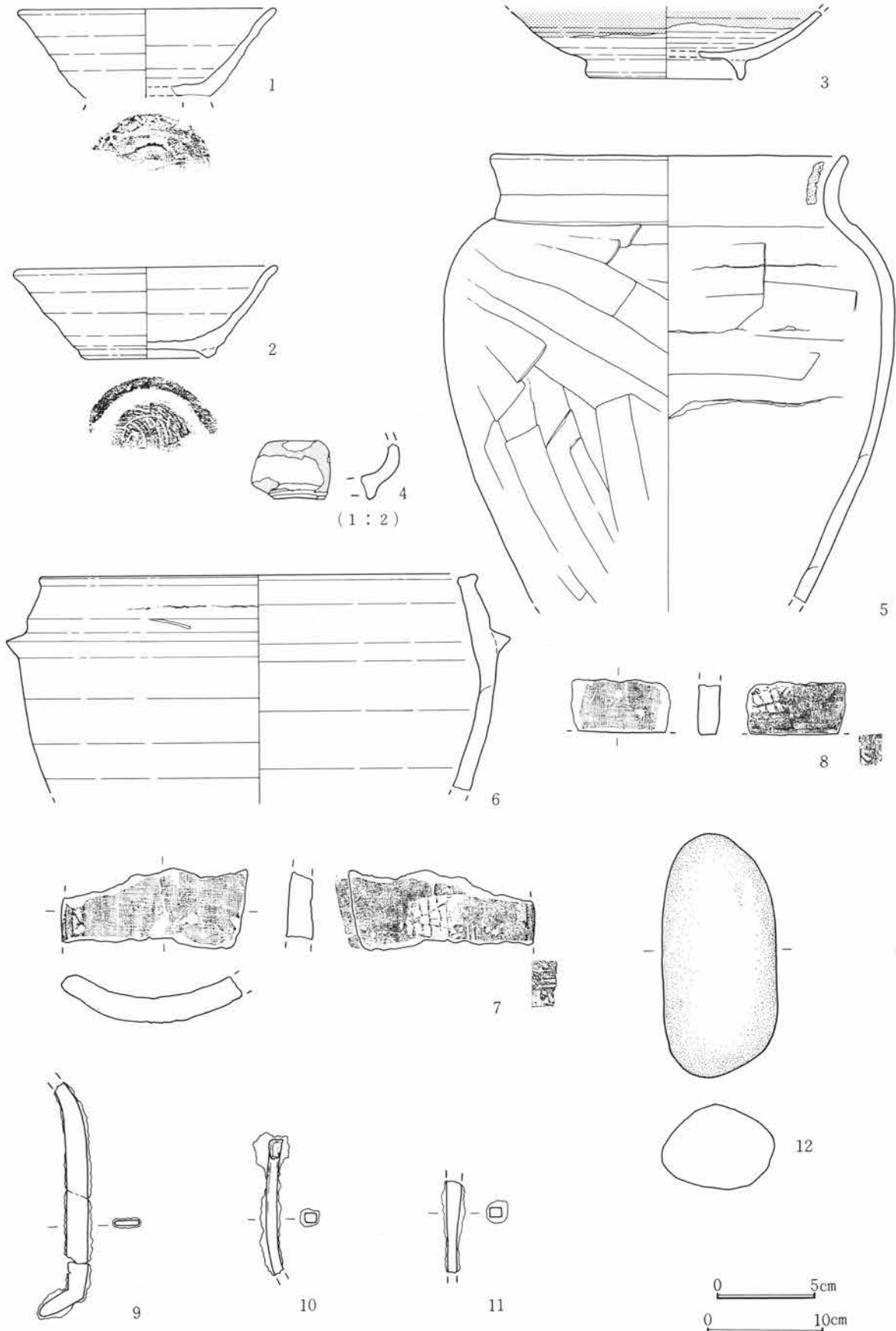
住居内の施設については、床面精査時には何ら検出されなかったが、掘り方段階で土坑の掘り込みを3基、円形小ピットを2本検出した。土坑状掘り込み中、南東コーナー部に張り出した位置から検出されたものは、隅丸方形で長辺約100cm、深度約12cmで、その位置関係から貯蔵穴と判断した。

壁溝は掘り方段階でも検出されておらず、当住居跡には無ったものと思われる。

柱穴は、4本柱穴というような明確なものではないが、北壁に接したものと、南壁近くから検出されたピットは、ほぼ同形・同規模であり、2基のピットをつなぐ線は、当住居跡の主軸にほぼ直行し、中央部を通っていることから、この2本を柱穴として上屋が構築されたものと思われる。

出土遺物中最も注目されるのは、掘り方覆土中より検出された第162図4で、約1/4程の残存であるが三彩の葉壺と考えられる。

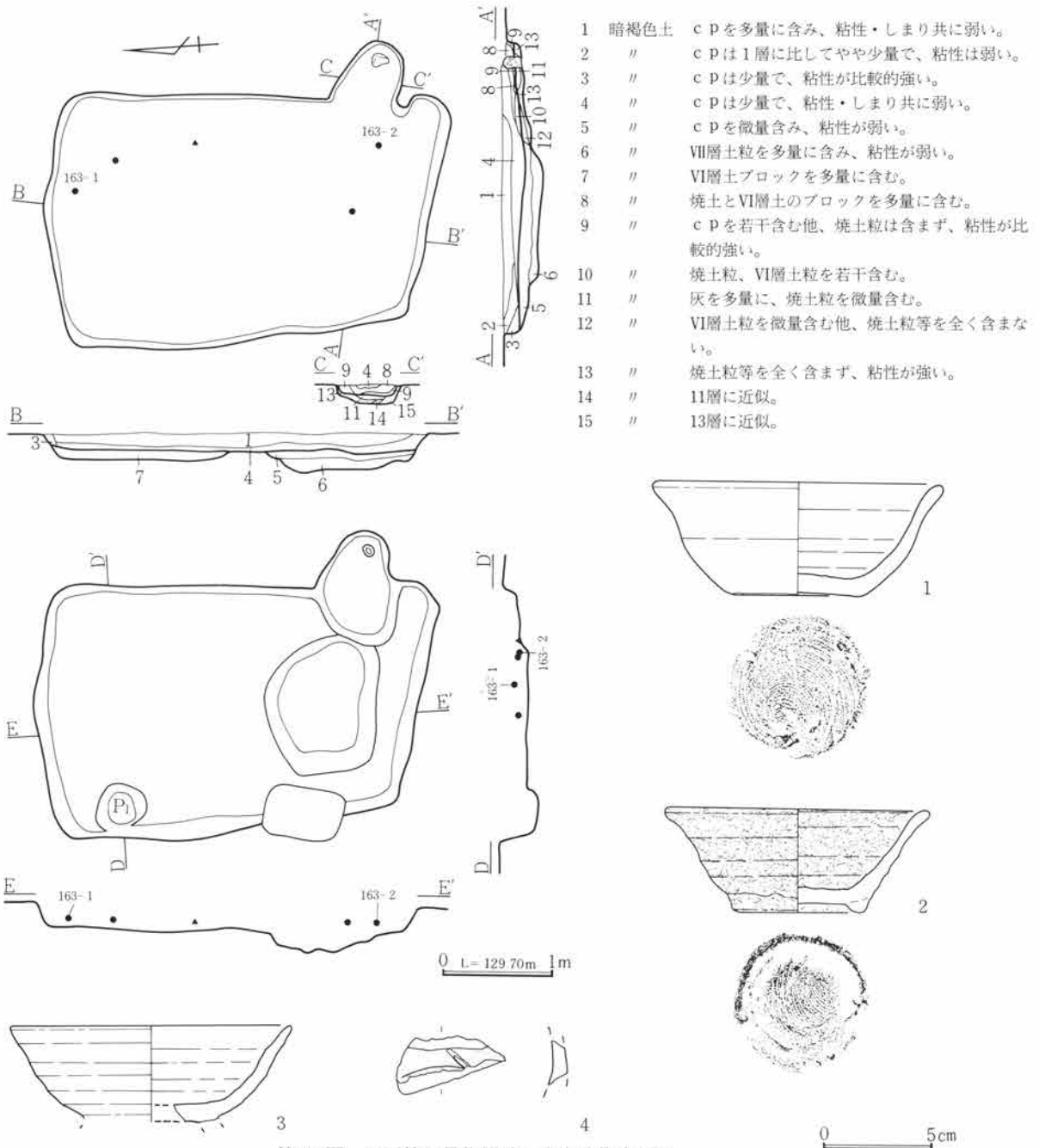
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第162図 G区第22号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

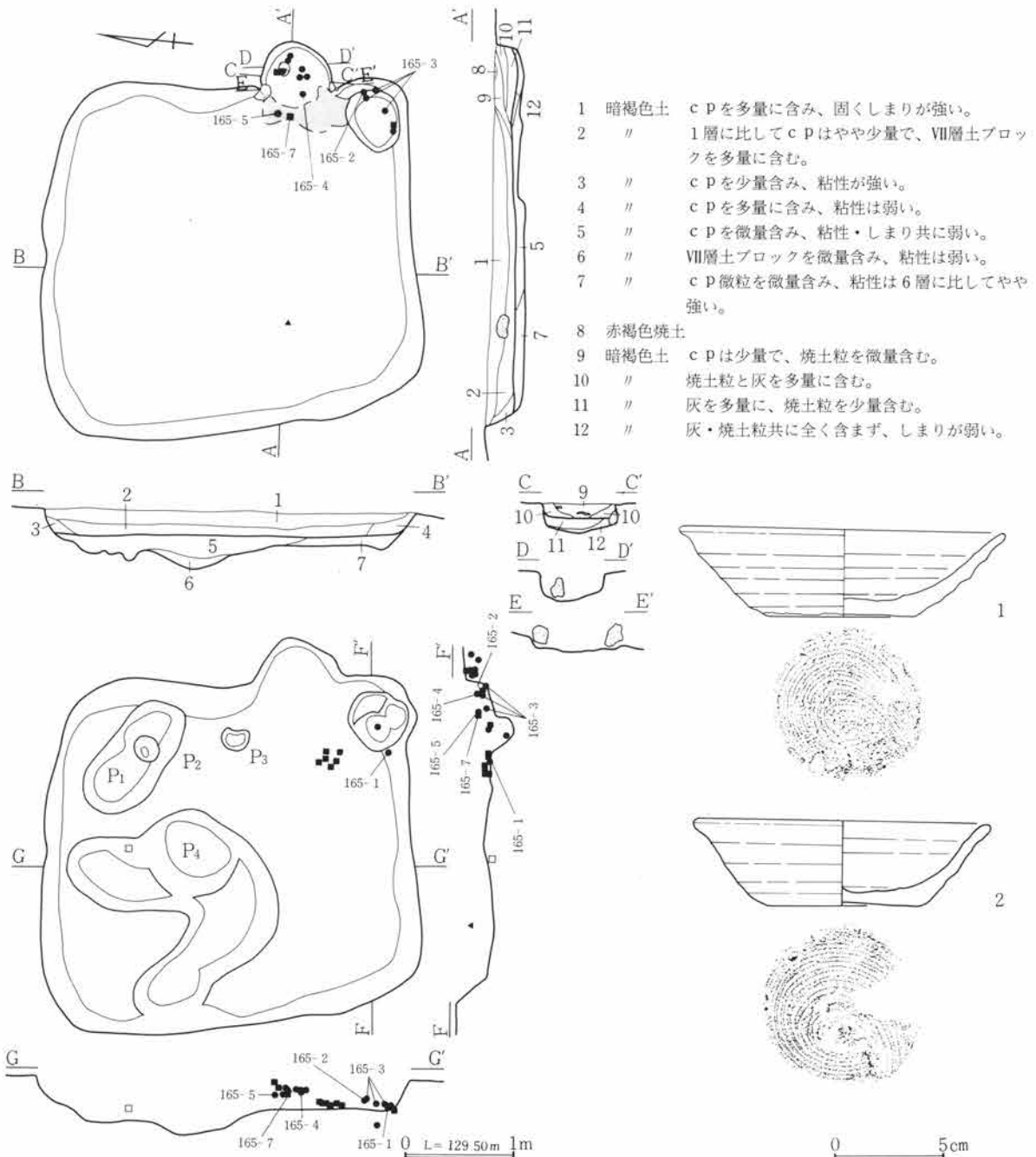
遺構名称	G区第23号住居跡	位置	22~24-G-58・59グリッド内	分類	C-10	時期	VIII?
平面形態	隅丸長方形	規模	2.20m×3.60m	主軸方位	東-5度-南	残存深度	約15cm程
備考	壁は全周検出され、北壁と南壁が並行せず台形状を呈する。壁溝・柱穴・貯蔵穴は掘り方段階でも検出されておらず無たものと思われる。掘り方はカマド前面に不整楕円形掘り込みを1基検出した。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-20度-南	
規模	全長 65cm	屋外長 52cm	屋内長 13cm	袖間幅 80cm	燃烧部幅 59cm	煙道幅	— cm
備考	焚口は床面と同レベルで灰面は検出されていない。袖は右袖部に痕跡がありVI層土主体の土で構築されたものと考えられる。燃烧部中央には礫を支脚として据え、焼土等は検出されていない。						



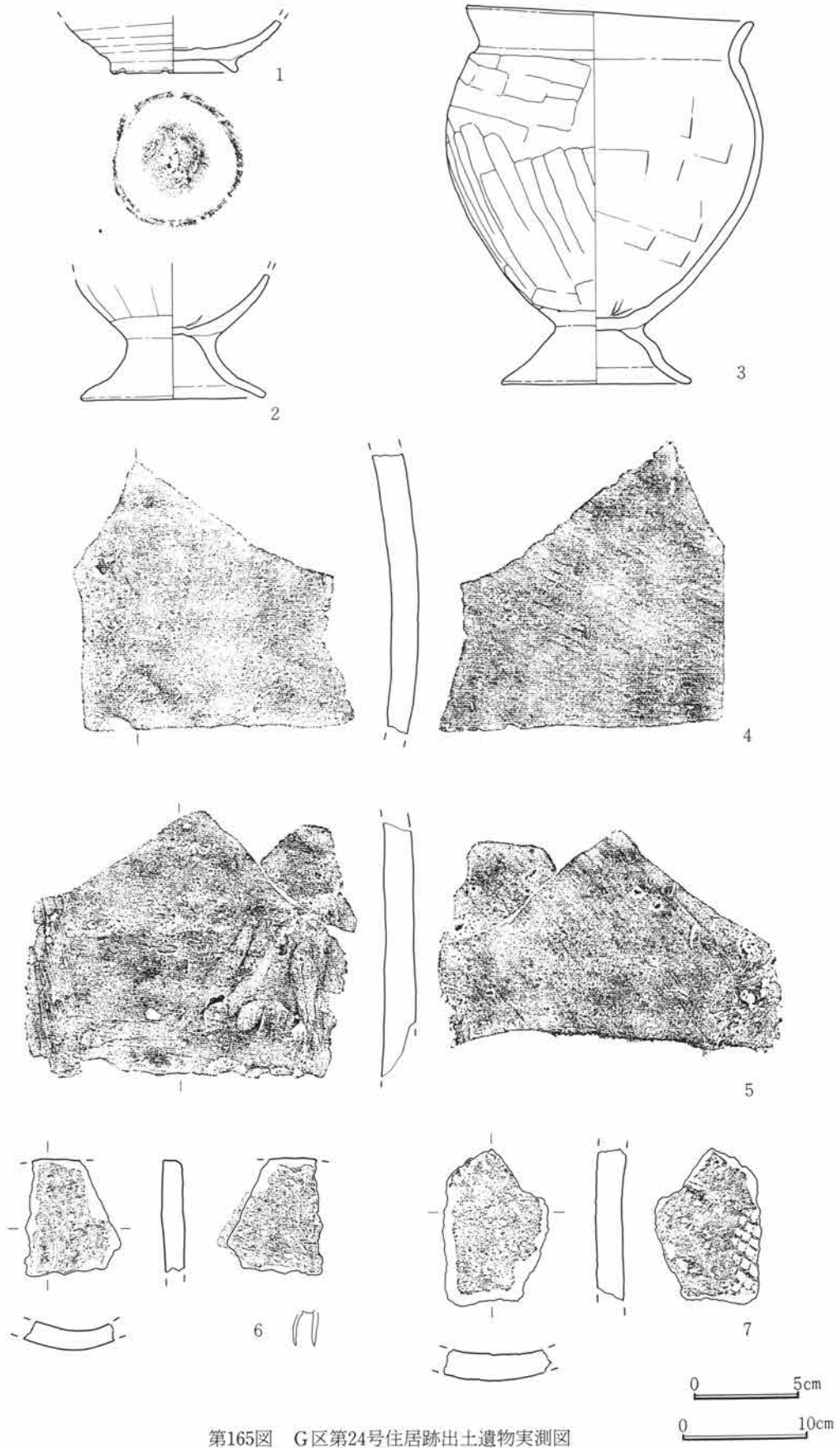
第163図 G区第23号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第24号住居跡	位置	2～4-G-55～57グリッド内	分類	A-9	時期	VII
平面形態	隅丸方形	規模	3.00m×3.40m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約20cm程
備考	壁は全周検出され、床面はVI層土主体と思われる土で貼床されている。壁溝・柱穴は掘り方段階でも検出されず、無ったものと考えられる。貯蔵穴は南東コーナー部、円形で径約55cm、深度約30cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-6度-北	
規模	全長 53cm 屋外長 40cm 屋内長 13cm 袖間幅 84cm 燃烧部幅 65cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、灰面は焚口部前面で右寄りに広く分布している。袖は両袖共磔を据えて構築し、燃烧部北寄りに磔を据え支脚としている。遺物はカマド周辺に集中して出土した。						



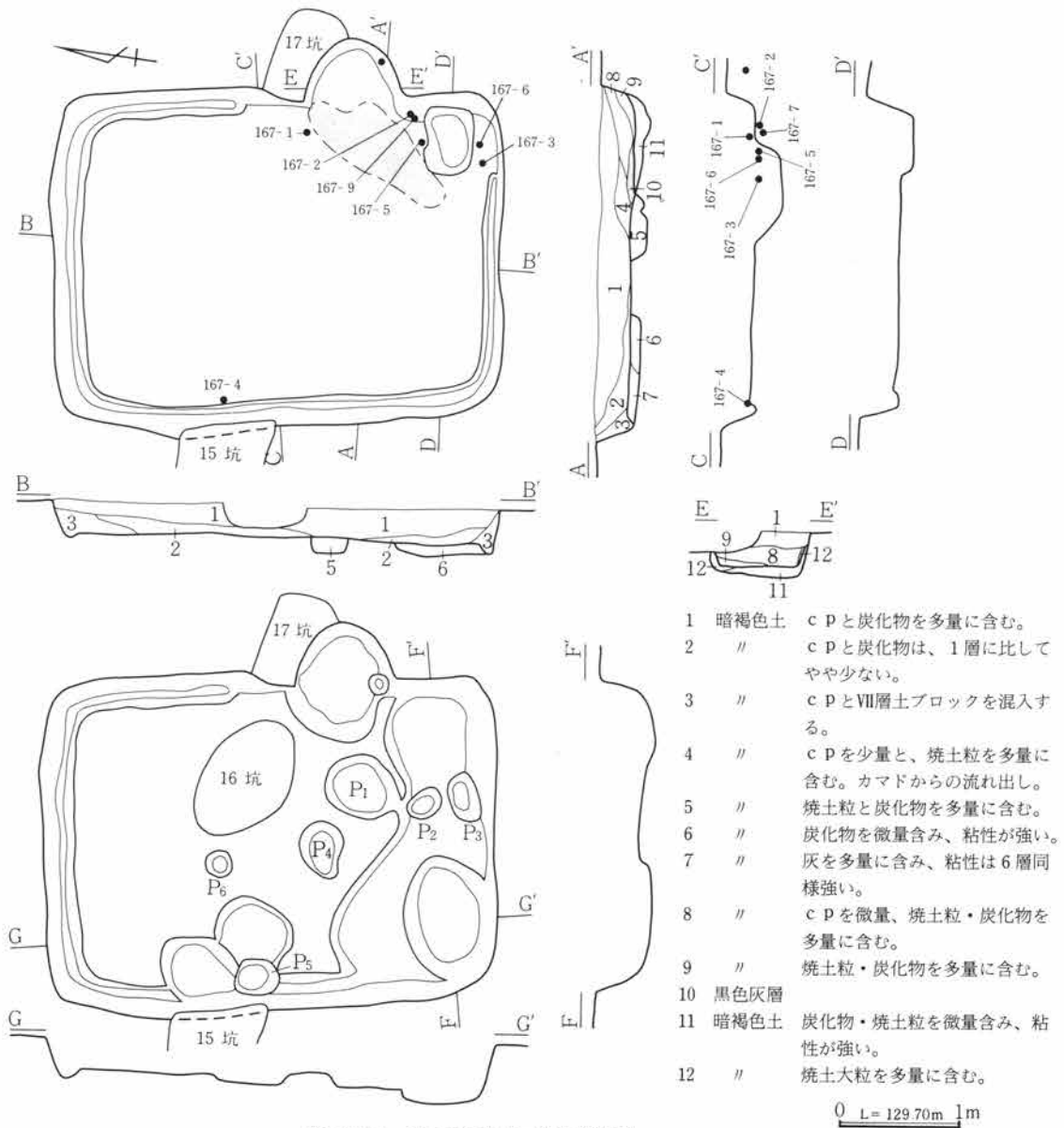
第164図 G区第24号住居跡・出土遺物実測図



第165図 G区第24号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

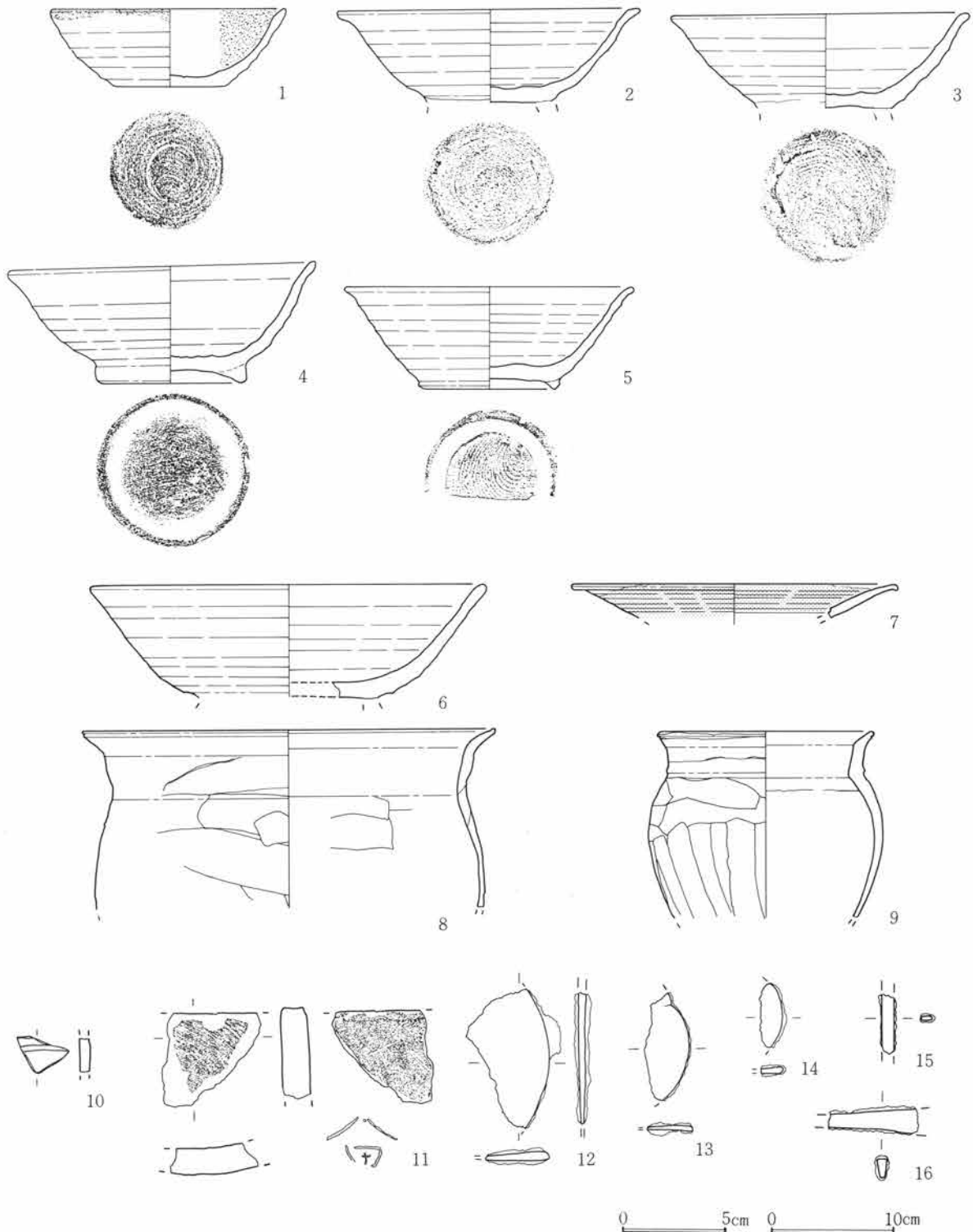
遺構名称	G区第25号住居跡		位置	11～13-G-68～70グリッド内		分類	C-7	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	2.70m×3.80m	主軸方位	東-8度-北	残存深度	約28cm程		
備考	壁は残存状態良好で全周検出し、壁溝はカマドを含む南東コーナー部を除き全周し、幅は約15～30cmであり、第1次埋没土が充填。貯蔵穴は南東コーナー部で楕円形。長軸約58cm、深度約10cmである。								
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形				主軸方位	東-8度-北		
規模	全長 55cm 屋外長 45cm 屋内長 10cm 袖間幅 - cm 燃烧部幅 85cm 煙道幅 - cm								
備考	焚口は床面と同レベルで焚口前面から貯蔵穴まで灰面が広がっている。袖は両袖共不明であるが掘り方段階で右袖の位置に円形ピットが検出され、何らかの構築材が据えられていたものであろう。								



第166図 G区第25号住居跡実測図

当住居跡の遺物は、カマド両袖部にあたる部分と貯蔵穴周縁部から完形及び大形破片が出土している。これらは全て口縁部を上に向けた状態で、床面からほとんど間層を挟んでいない。また、西壁壁溝やや内側に口縁を下に向けた状態で壺が1個体出土し、カマド部分のあり方とは対照的である。

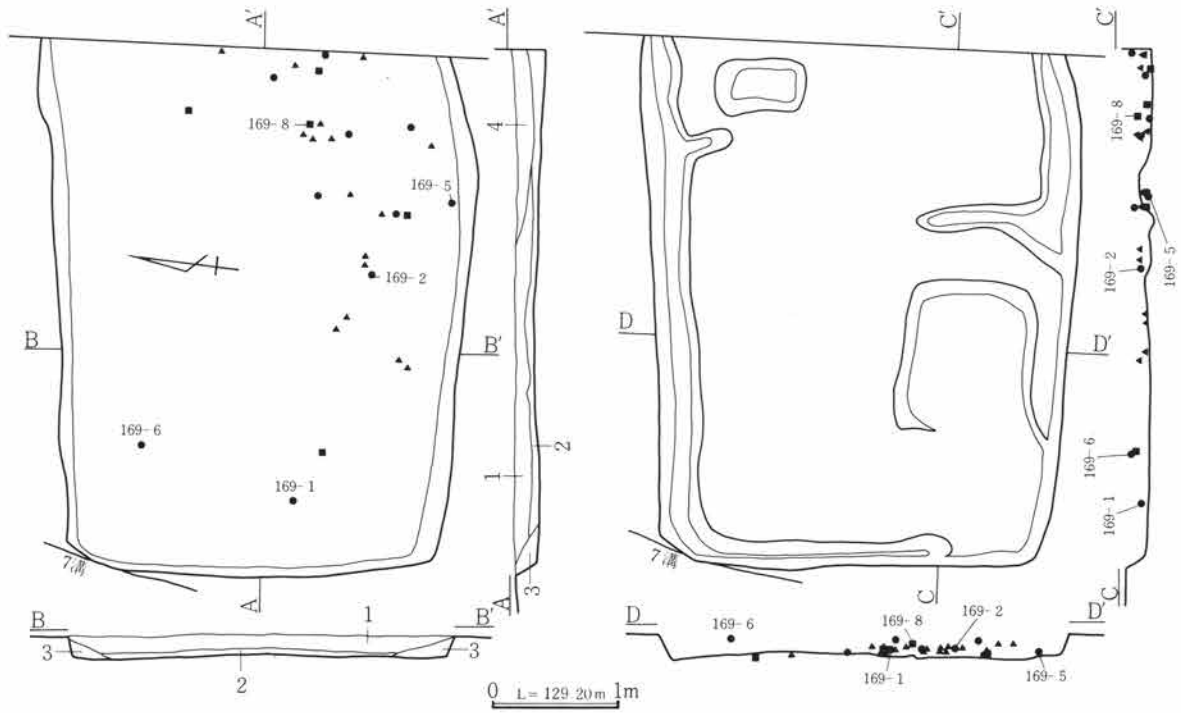
第3章 検出された遺構・遺物



第167図 G区第25号住居跡出土遺物実測図

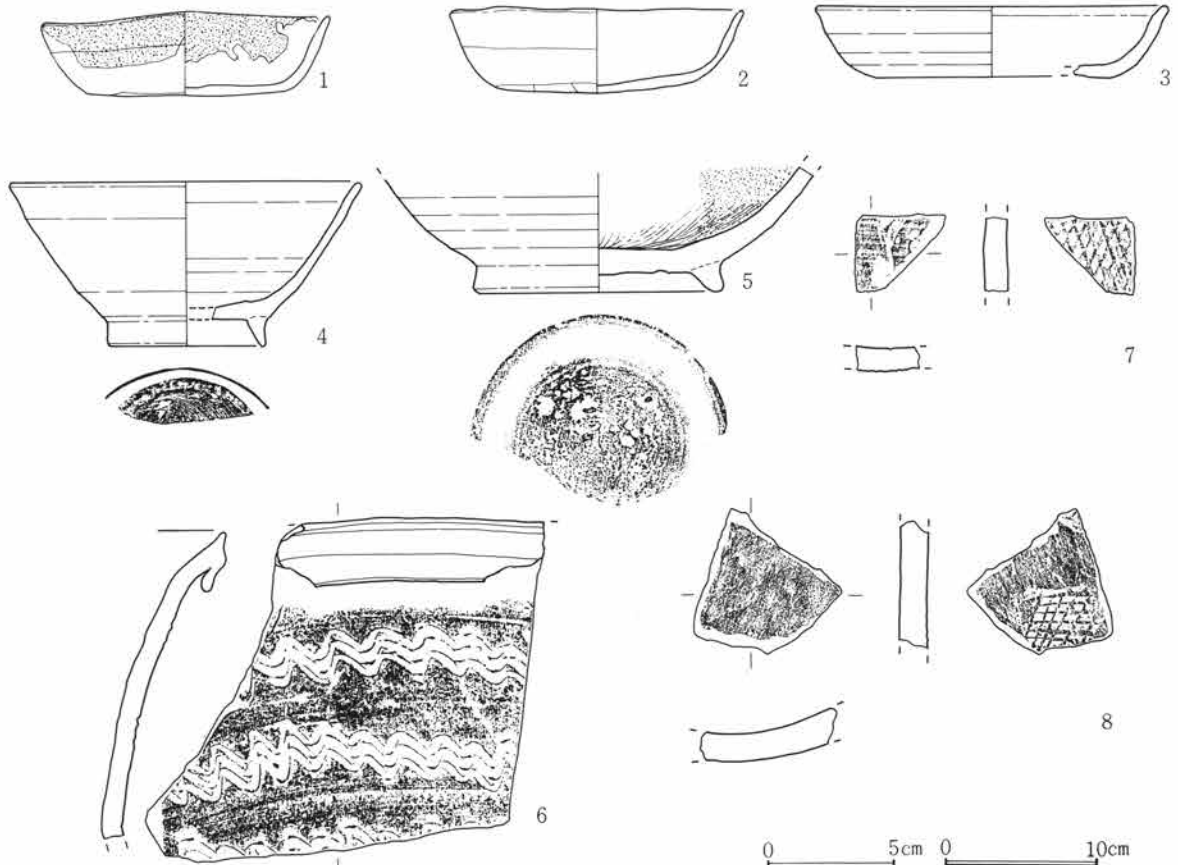
遺構名称	G区第26号住居跡	位置	7～9-G-41～43グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	—m×3.20m	主軸方位	東—7度—北	残存深度	約15cm程
備考	東壁は調査区外でカマドは未検出である。掘り方段階で壁溝と思われる溝を一部検出した。遺物は中央より南寄りに多く出土している。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



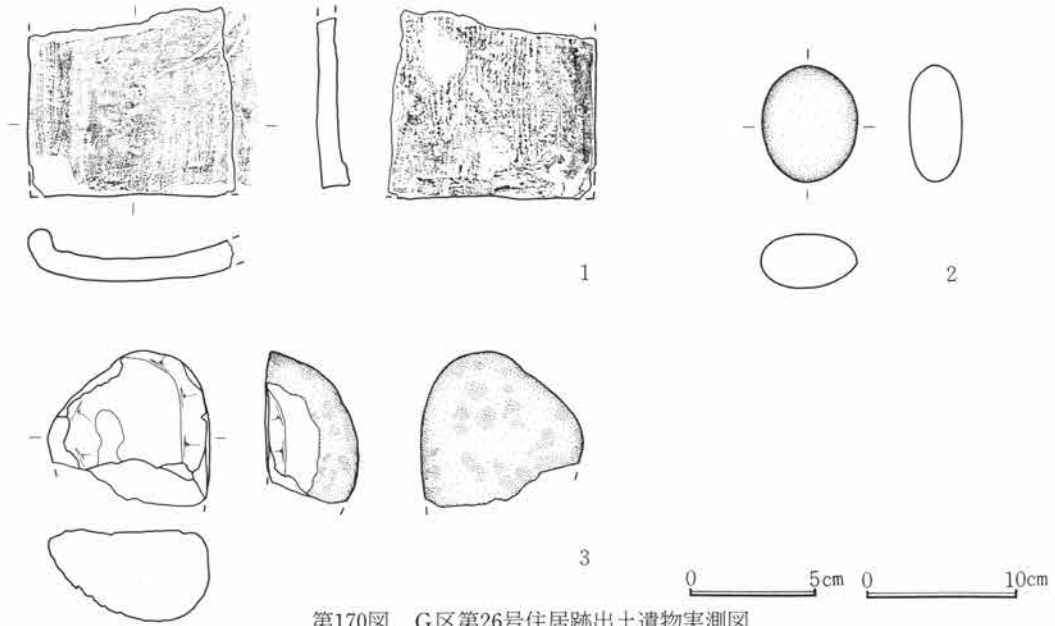
- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 c Pを多量に含む。 | 3 // c P細粒を微量含み、粘性は弱い。 |
| 2 // c P細粒を若干含み、粘性は弱い。 | 4 // c Pを多量に、焼土粒を若干含む。 |

第168図 G区第26号住居跡実測図



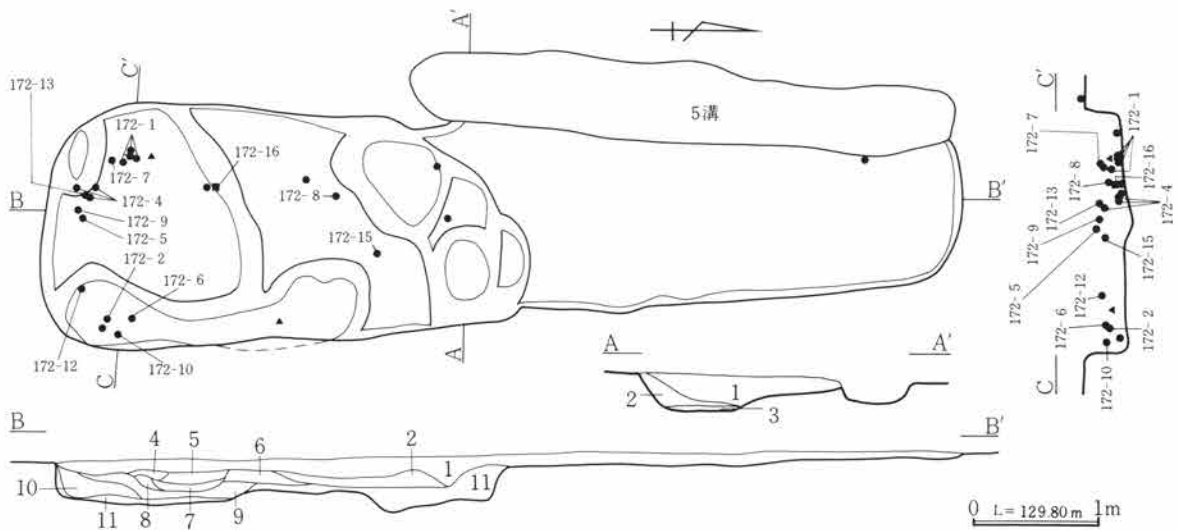
第169図 G区第26号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第170図 G区第26号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第27号址	位置	34~38-G-50・51グリッド内	分類	—	時期	IV
平面形態	長方形	規模	7.40m×1.90m	主軸方位	北—2度—西	残存深度	約15cm程
備考	西側で第5号溝と重複している。南側は略形状に1段低くなっており、また、東壁にも段差が生じていることから、北側とは別遺構の可能性はある。						

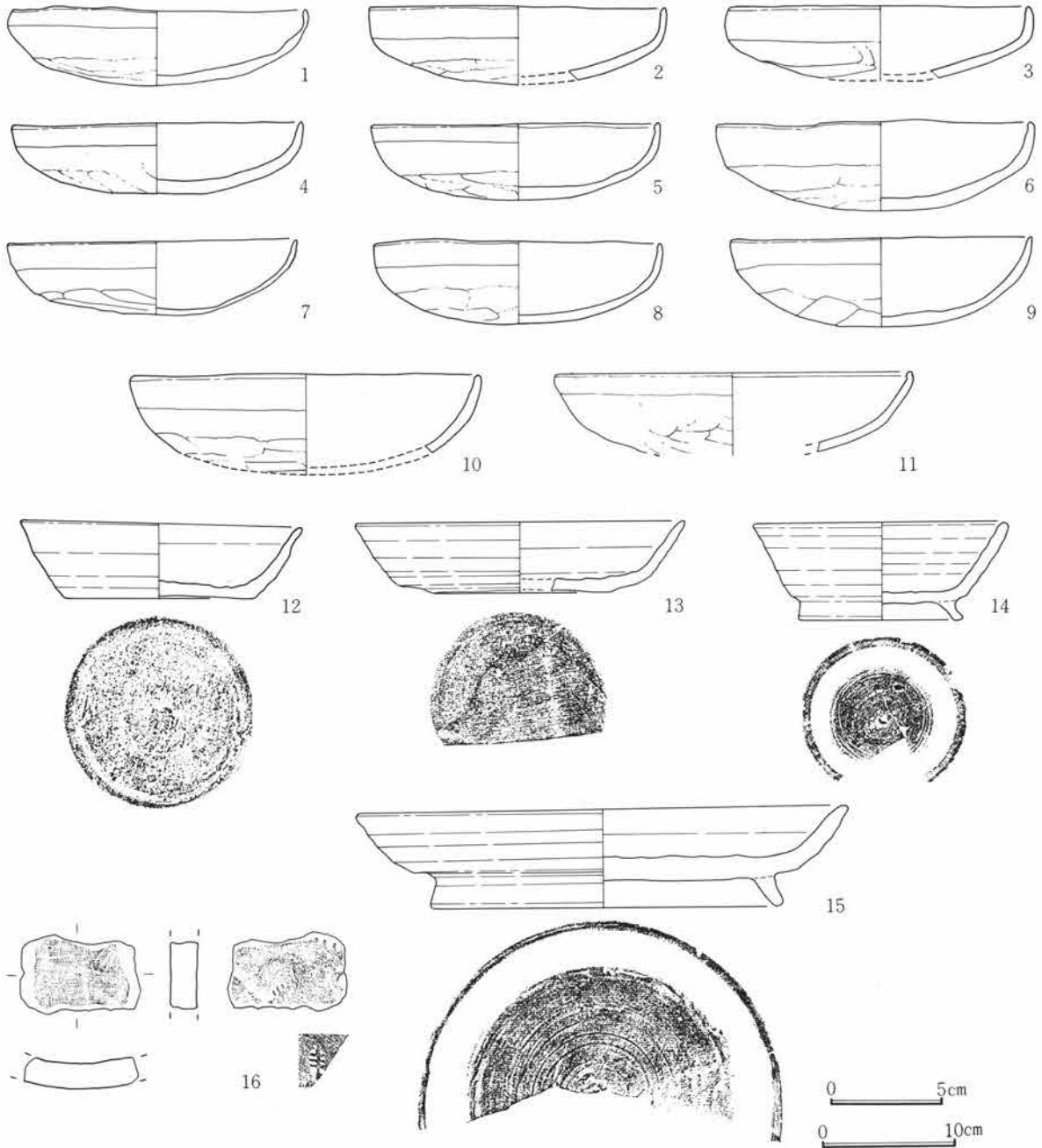


- | | | | | | |
|---|------|--------------------------|----|----|----------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c P 細粒を多量に、粗粒・焼土粒微量。 | 6 | '' | c P・VI層土粒を混入。 |
| 2 | '' | c P を多量に、炭化物を微量含む。 | 7 | '' | c P・焼土粒を微量含み、しまりが強い。 |
| 3 | '' | c P を若干、焼土粒を多量に含む。 | 8 | '' | c P と焼土粒を若干含む。 |
| 4 | '' | c P 細粒・焼土粒を若干含む。 | 9 | '' | c P を若干含む。 |
| 5 | '' | c P を混入し、焼土粒、ブロックを多量に含む。 | 10 | '' | c P を微量含む。 |
| | | | 11 | '' | c P 微量で、粘性非常に強い。 |

第171図 G区第27号址実測図

遺物は南側の略形状の部分に集中し、土師器の坏を主体としている。出土状態は、全て破片で等しく底面から遊離しており、一面的な出土ではない。また、斜位の出土が多く、置かれたものとも考えられない。

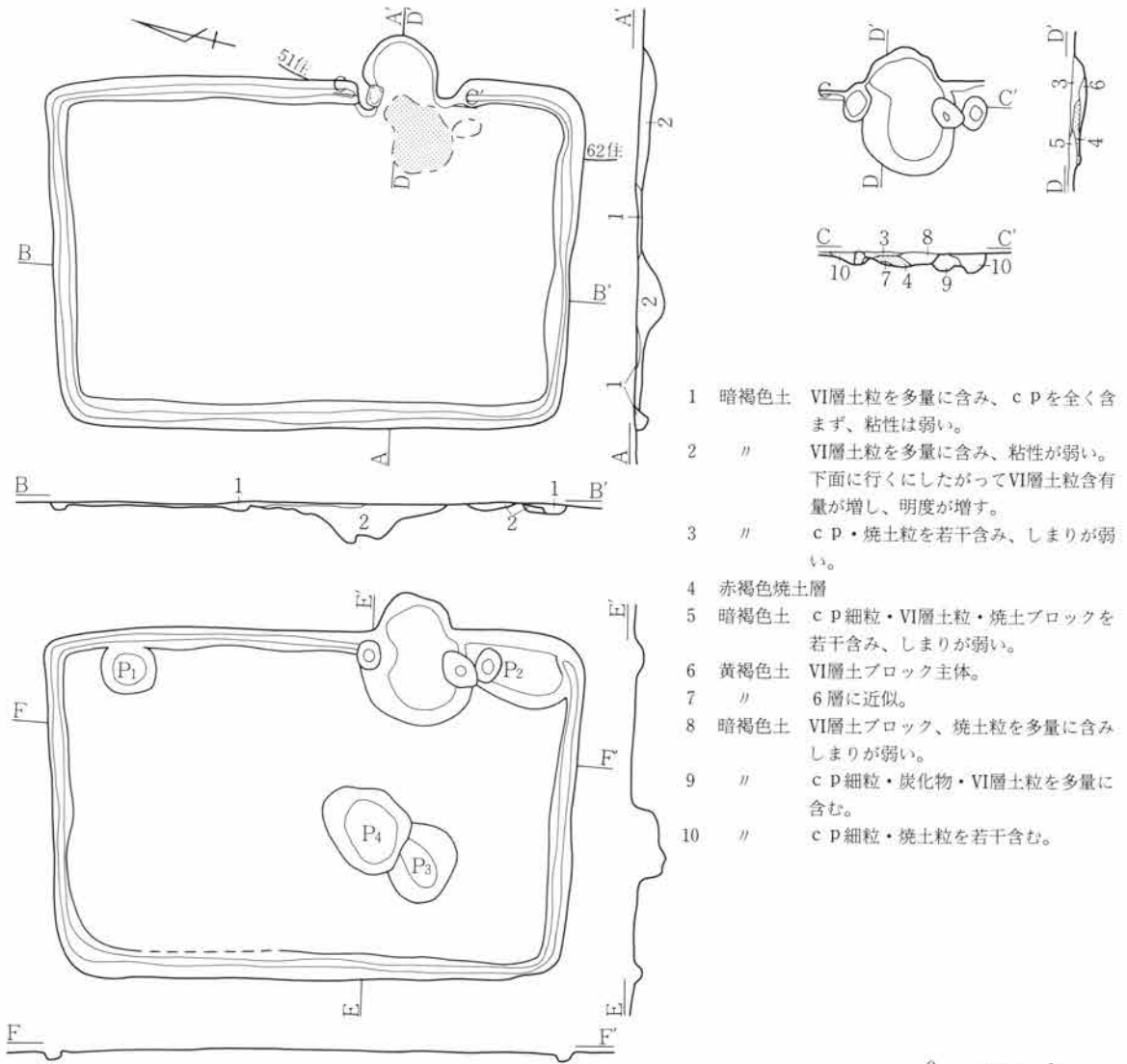
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第172図 G区第27号址出土遺物実測図

遺構名称	G区第28号住居跡		位置	24~26-G-53・54グリッド内		分類	C-8	時期	-			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.80m×4.40m	主軸方位	東-14度-北	残存深度	約 2cm程					
備考	壁は明確でないが、壁溝（幅約18cm）が全周検出され、全体を把握することができた。柱穴は全く痕跡すら検出されず、貯蔵穴は南東コーナー部。											
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形				主軸方位	東-7度-北					
規模	全長	45cm	屋外長	35cm	屋内長	10cm	袖間幅	120cm	燃烧部幅	64cm	煙道幅	-cm
備考	焚口は床面と同レベルで一面に焼土層が検出された。袖は左袖のみ残存し、角柱状の截石の痕跡を検出した。燃烧部には灰・焼土共に検出されていない。											

第3章 検出された遺構・遺物



第173図 G区第28号住居跡実測図

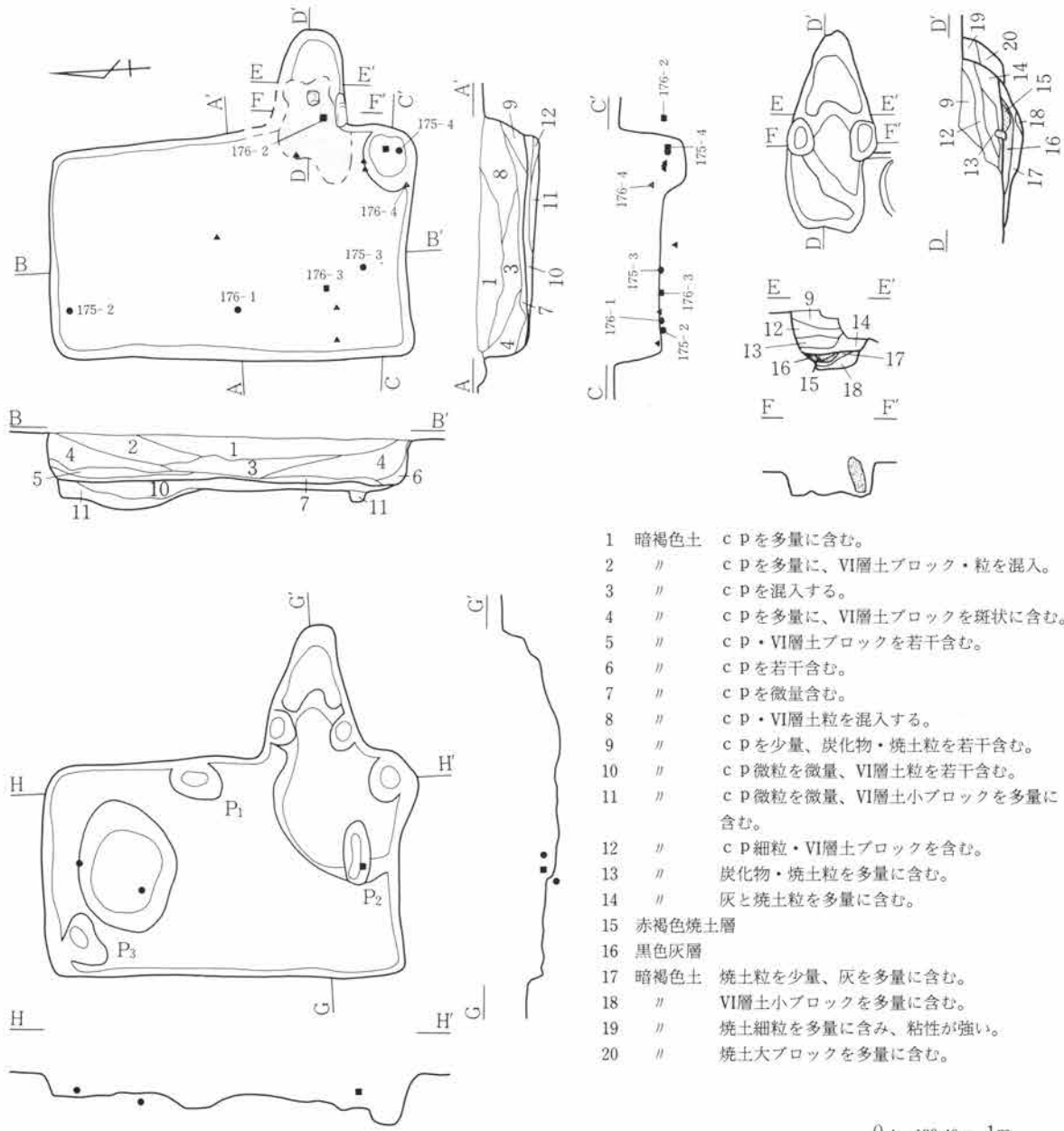
0 L=129.50m 1m

遺構名称	G区第29号住居跡		位置	14・15-G-43~45グリッド内		分類	C-10	時期	VI			
平面形態	長方形	規模	2.00m×3.10m	主軸方位	東-1度-北	残存深度	約10cm程					
備考	壁は全周検出され、確認面からの深度は約40cm程で垂直である。壁溝・柱穴は検出されず、無たものと思われる。貯蔵穴は南東コーナー部に検出され、円形で径約55cmで、深度約15cmである。											
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・舌状				主軸方位	東-4度-南					
規模	全長	85cm	屋外長	81cm	屋内長	4cm	袖間幅	—cm	燃烧部幅	60cm	煙道幅	—cm
備考	焚口は床面と同レベルで、燃烧部から貯蔵穴近くまで灰面がある。袖は右袖のみ残存し、川原石を使用している。掘り方段階では左袖部にも据え方を検出。燃烧部中央に焼土層が検出された。											

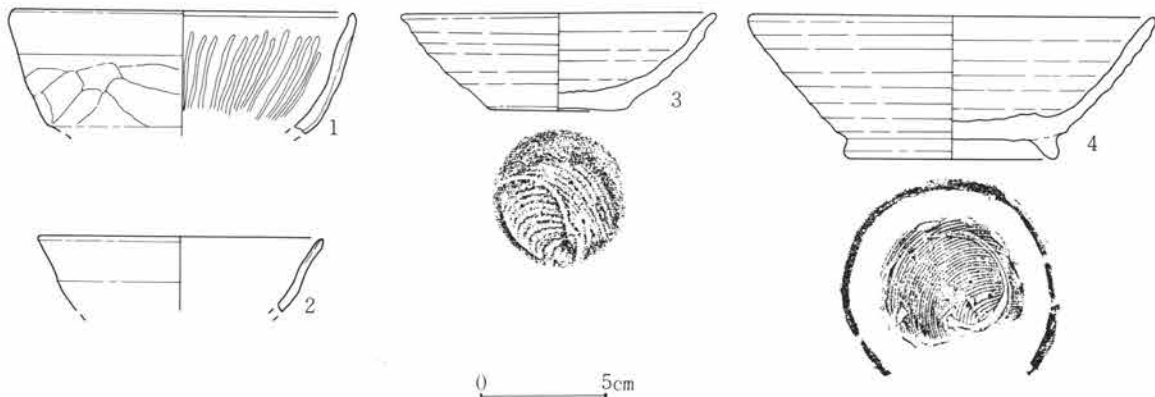
当住居跡は、第13号住居跡と重複しているが、遺構検出面で2軒を分離することはできず、同時に調査した。床面は第13号住居跡床面よりも下位に構築されている。2軒通して設定したセクションベルトの土層断面観察によれば、当住居跡が第13号住居跡埋没後に掘り込んでいたのは明らかである。

遺物は、床面直上から若干出土した他、貯蔵穴に接するように転用の鋤垂車出土している。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

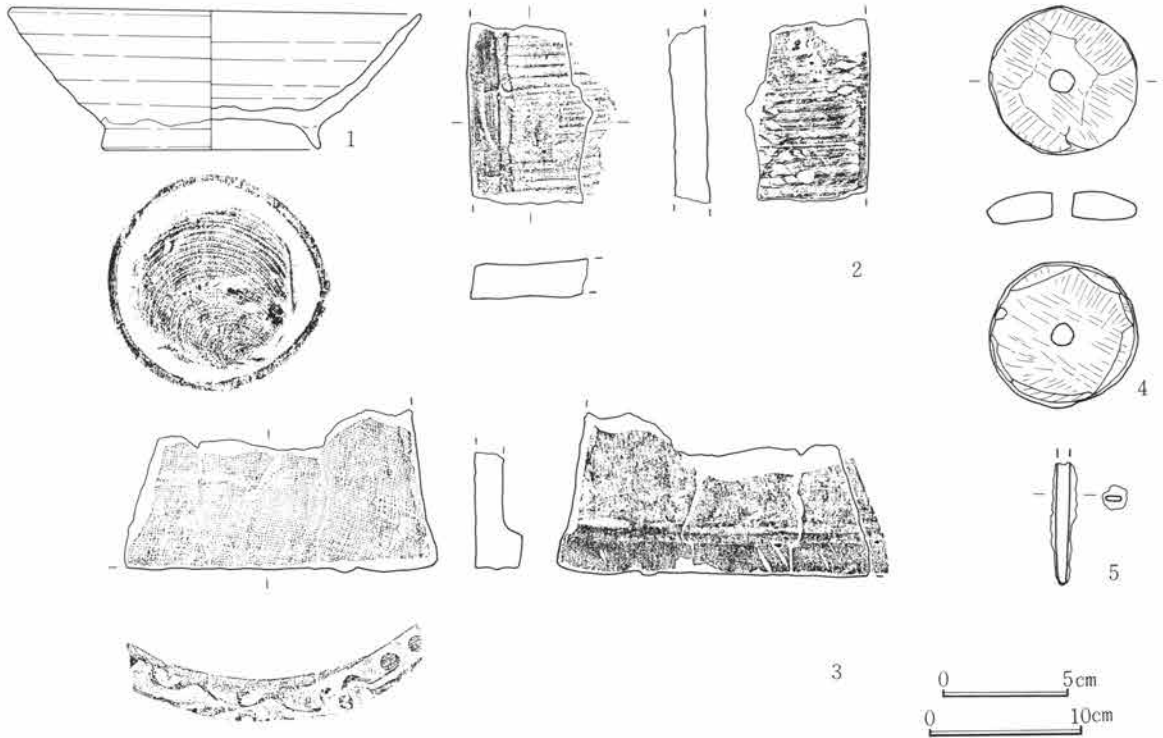


第174図 G区第29号住居跡実測図



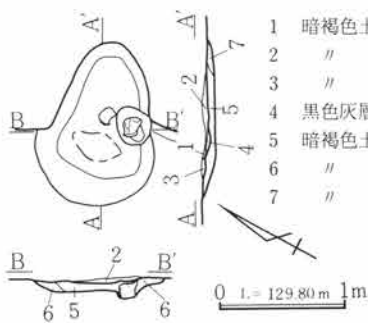
第175図 G区第29号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第176図 G区第29号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第31号住居跡	位置	41-G-48・49グリッド内	分類	—	時期	—
カマド	位置・形状	東壁と考えられる。馬蹄形		主軸方位	東—16度—北		
規模	全長 40cm	屋外長 30cm	屋内長 10cm	袖間幅 — cm	燃焼部幅 48cm	煙道幅 — cm	

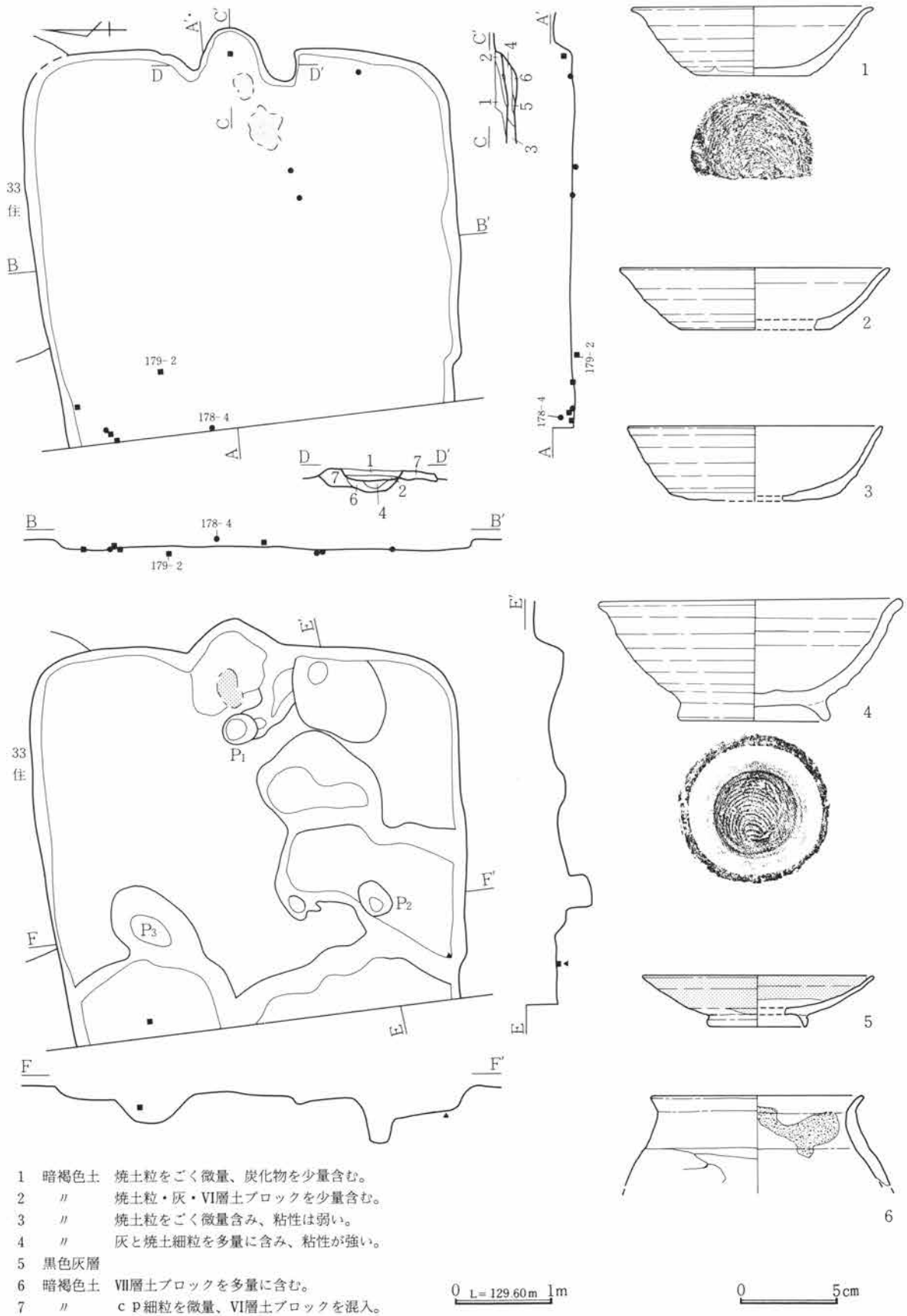


第177図 G区第31号住居跡実測図

1 暗褐色土 c P微粒を微量、炭化物を少量含む。 当住居跡は、掘り込みが浅かったもの
 2 // c P微量、焼土粒を多量に含む。 か、遺構検出段階でカマドとわずかに壁
 3 // 炭化物を多量に含む。 取り付き部を検出したに止った。
 4 黒色灰層
 5 暗褐色土 c Pと焼土粒を若干含む。
 6 // c Pと焼土の細粒を含み、粘性が強い。 焚口はごく浅い半円形の掘り込みであ
 7 // 灰と焼土粒を多量に含む。 る。袖は右袖部に角柱状の載石の下半部
 が残存していた。燃焼部中央にはわずかに
 灰面が検出された。

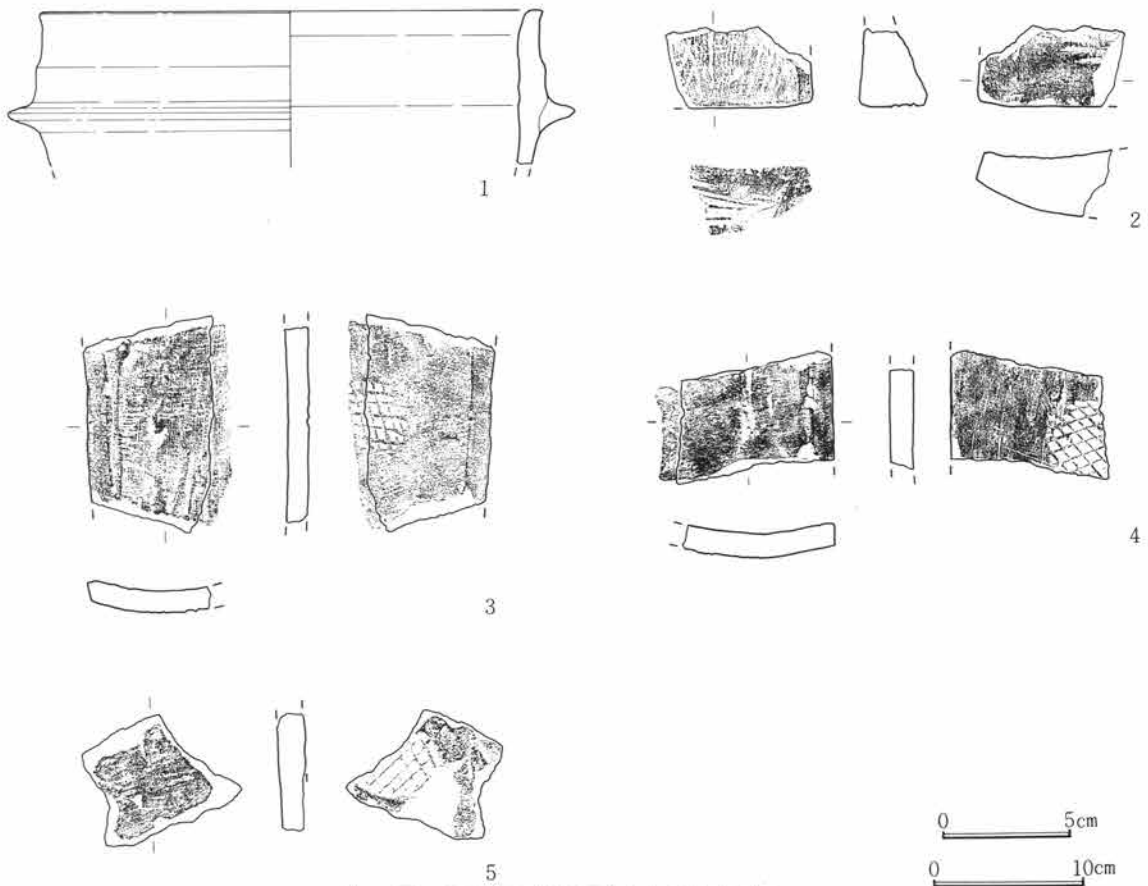
遺構名称	G区第32号住居跡	位置	1～4-G-69～71グリッド内	分類	B-2	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形	規模	—m×4.40m	主軸方位	東—1度—北	残存深度	約 10cm程
備考	西壁は調査区外で未検出。床面はVII層まで掘り込まれた中に貼床されている。壁溝・柱穴は未検出で無たものと考えられる。貯蔵穴は掘り方段階でも検出されていない。						
カマド	位置・形状	東壁中央部・馬蹄形		主軸方位	東—5度—北		
規模	全長 60cm	屋外長 22cm	屋内長 38cm	袖間幅 130cm	燃焼部幅 56cm	煙道幅 — cm	
備考	焚口は掘り込みは無く、右寄り2ヵ所に灰面を検出した。袖は両袖共に暗褐色土で屋内にわずかに突出するように構築している。燃焼部に明確な焼土等は検出されなかった。						

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第178図 G区第32号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第179図 G区第32号住居跡出土遺物実測図

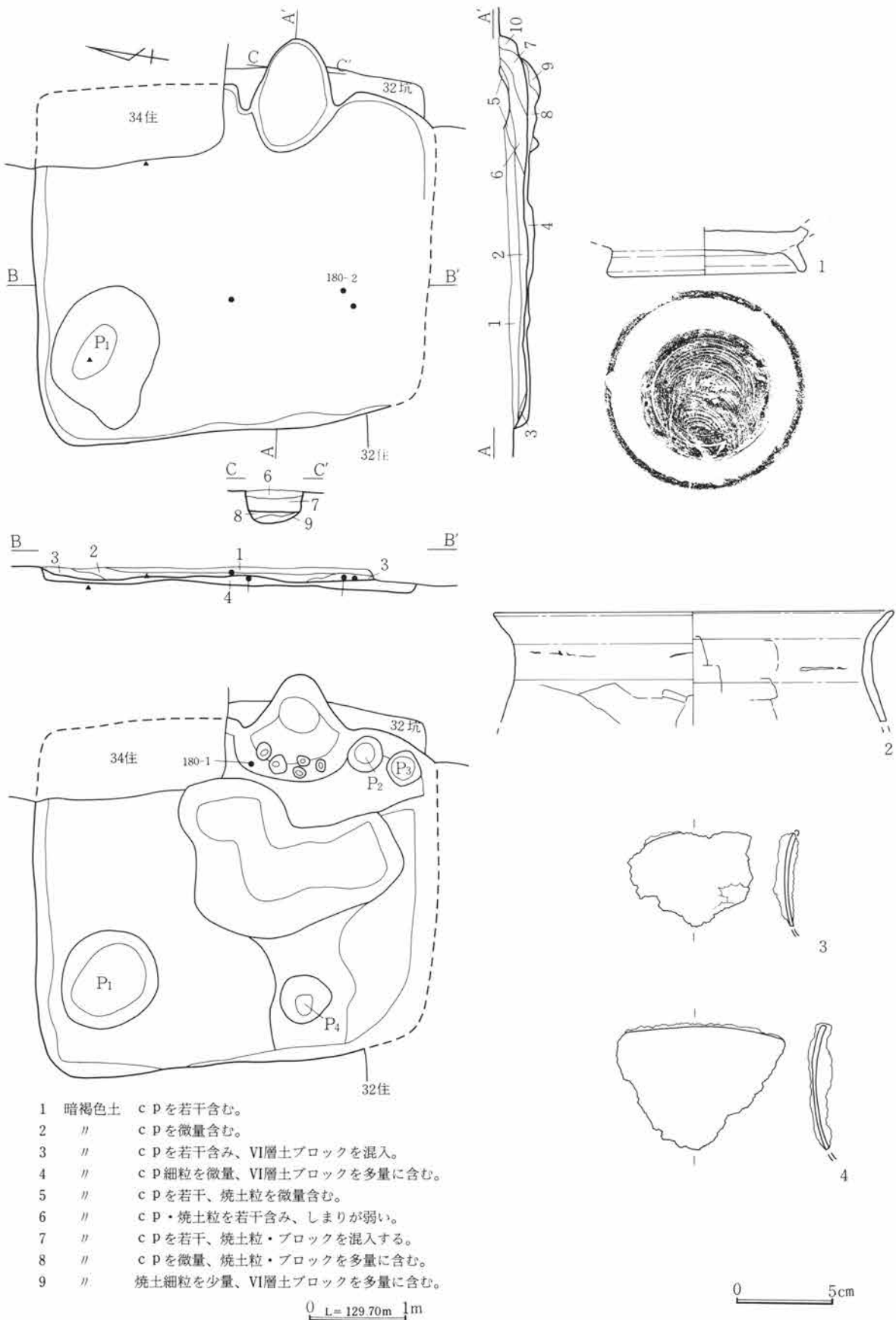
当住居跡の掘り方は、南及び西寄りに顕著で、4カ所ほどの不整形の土坑状掘り込みがみられる。また、この掘り込み部には3個のピットが検出されているが、カマド前面から検出された円形ピットを含めても、それらの配置に規則性は認められず、規模も一定しないことから柱穴とは思われない。

遺物は床面上で検出されたものは希少で、西寄りからの出土が多く、カマド周辺からの出土が逆に少ないのが特徴といえる。

遺構名称	G区第33号住居跡		位置	3～5-G-69～71グリッド内		分類	C-11	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	3.40m×4.20m	主軸方位	東-6度-北	残存深度	約10cm程		
備考	第32・33号住居跡と重複し、北東コーナー及び南壁が未検出である。床面はVI層中で平坦であり壁溝・柱穴は未検出である。貯蔵穴は南東コーナー部にも検出されていない。								
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形				主軸方位	東-4度-北		
規模	全長 113cm	屋外長 50cm	屋内長 63cm	袖間幅 120cm	燃烧部幅 75cm	煙道幅	— cm		
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、灰面は検出されていない。袖は両袖部共構築材は検出されず、暗褐色土で構築したものか。燃烧部にも焼土、灰等の純堆積は全くみられなかった。								

当住居跡掘り方は、住居中央から南側半分に検出されているが、この部分は第32号住居跡との重複部分にも一致していることから、第32号住居跡の掘り方と理解すべきなのかもしれない。明らかに当住居跡のものと考えられるのは、カマド正面の不整形プランの掘り込みであるが、VI層土ブロックを多量に含む暗褐色土が充填していた以外に特筆すべきことはみられない。

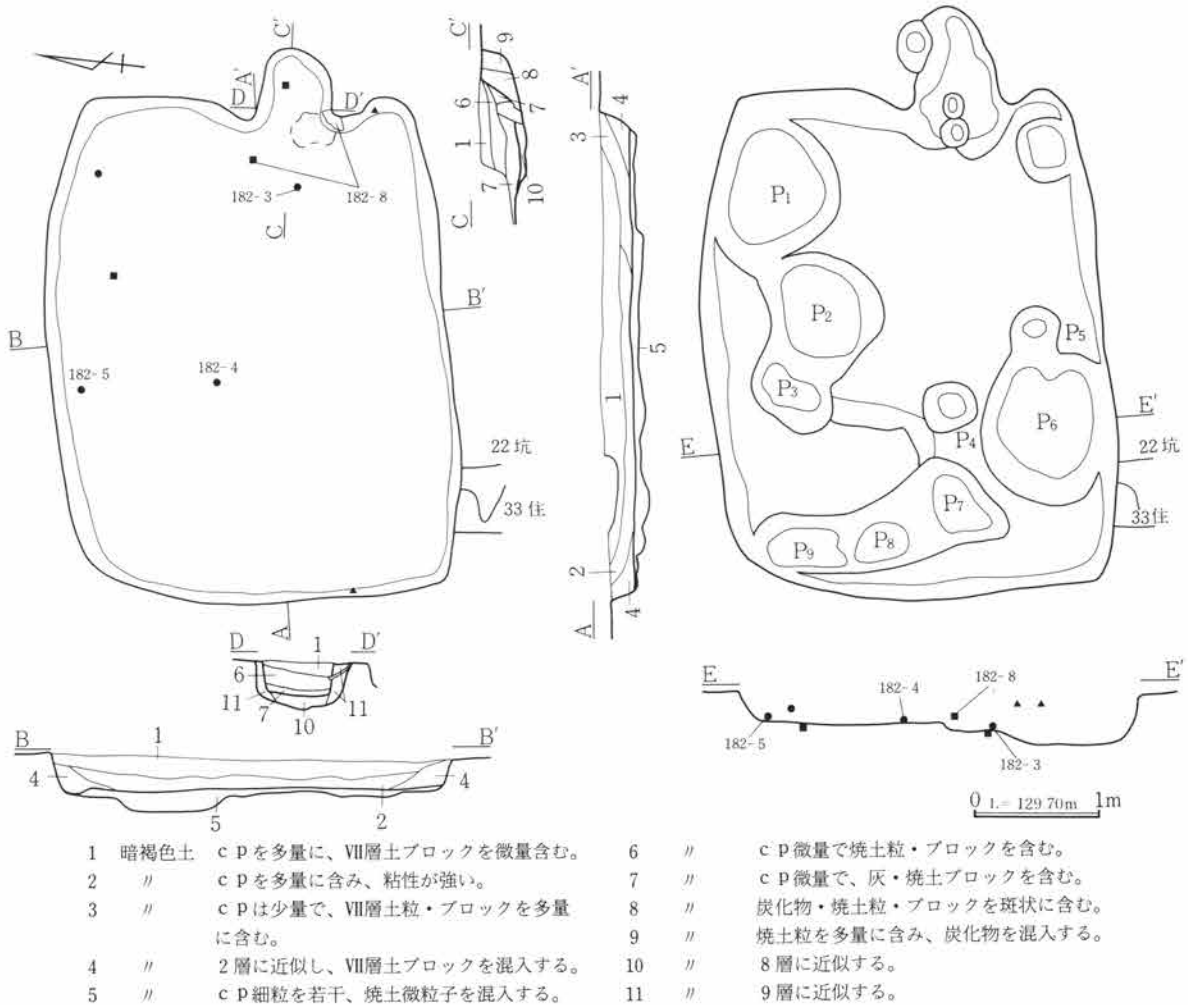
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第180図 G区第33号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第34号住居跡		位置	.5・6-G-67~70グリッド内		分類	B-6	時期	VI			
平面形態	隅丸長方形	規模	3.80m×3.20m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約26cm程					
備考	壁は全周検出され、残存状態も比較的良好である。壁溝・柱穴は未検出であり、貯蔵穴は掘り方段階で南東コーナー部に検出した。形状は円形で、規模は径約48cm、深度約17cmである。											
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形				主軸方位	東-9度-北					
規模	全長	65cm	屋外長	40cm	屋内長	25cm	袖間幅	130cm	燃烧部幅	58cm	煙道幅	—cm
備考	焚口に掘り込みはみられず、右袖前面に灰面を検出した。袖は明確には残存していないが、右袖部に瓦を検出した。燃烧部に焼土等の純堆積はなく、中央北寄りに瓦を北傾して立て支脚としている。											

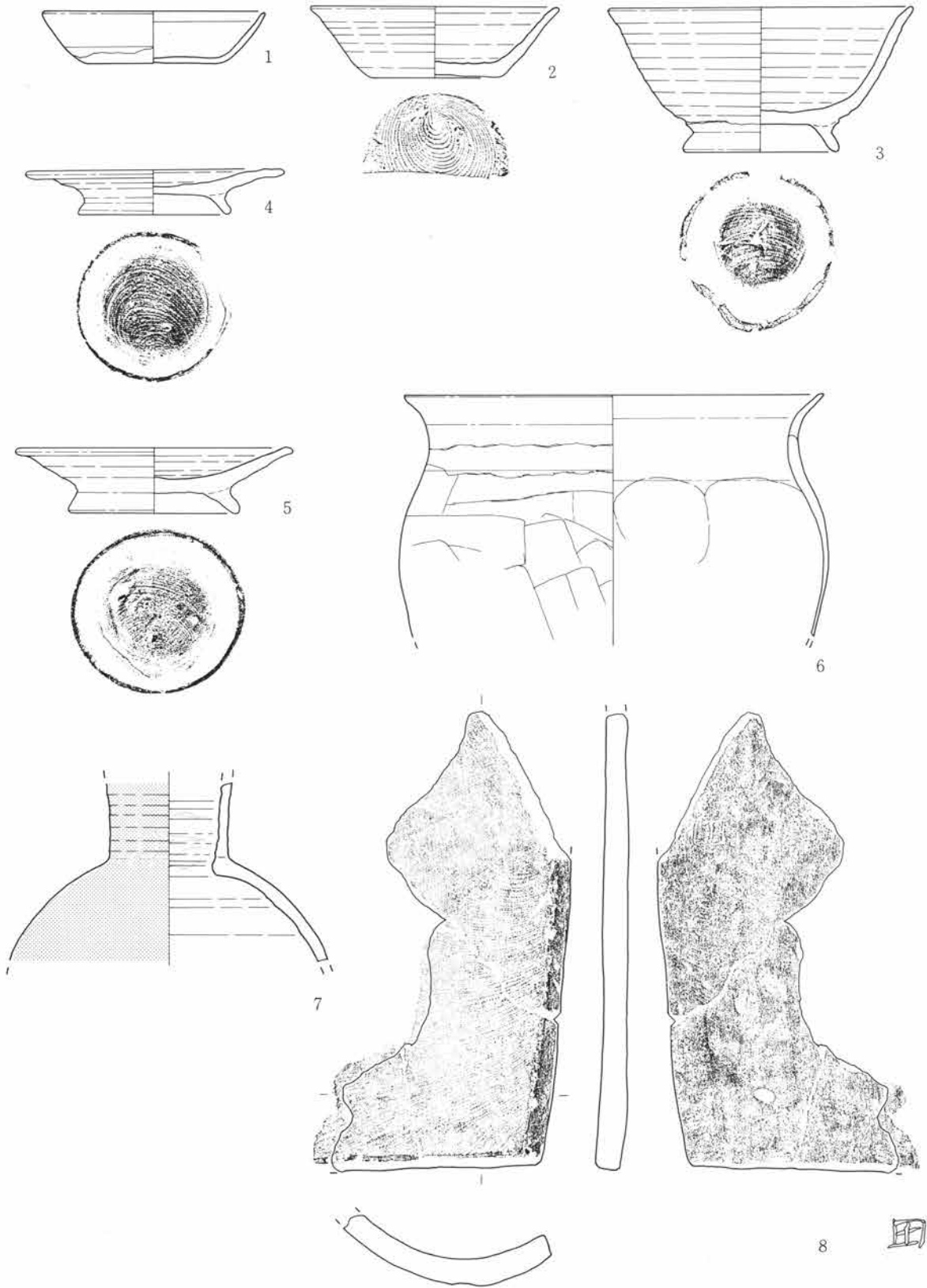


第181図 G区第34号住居跡実測図

当住居跡掘り方は、カマド正面の一角を除き全面に検出されている。しかし、全体的に掘り下げられているというのではなく、円形の土坑状掘り込みの集合したような状態を呈している。中に円形ピットが数個検出されているが、柱穴とは考えられない。また、貯蔵穴としたものは、床面精査の段階では検出できなかったもので、先に何例かあったように、床面構築時に埋められていた可能性がある。

遺物は、覆土中出土のものを含めてもあまり多くなく、床面直上出土のものとなると、カマド構築材を含め5例である。特に第182図4の高台付皿は、口縁部を下に向け床面に貼り付くような状態で出土しており当住居跡の時期を最も良く示す資料といえる。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



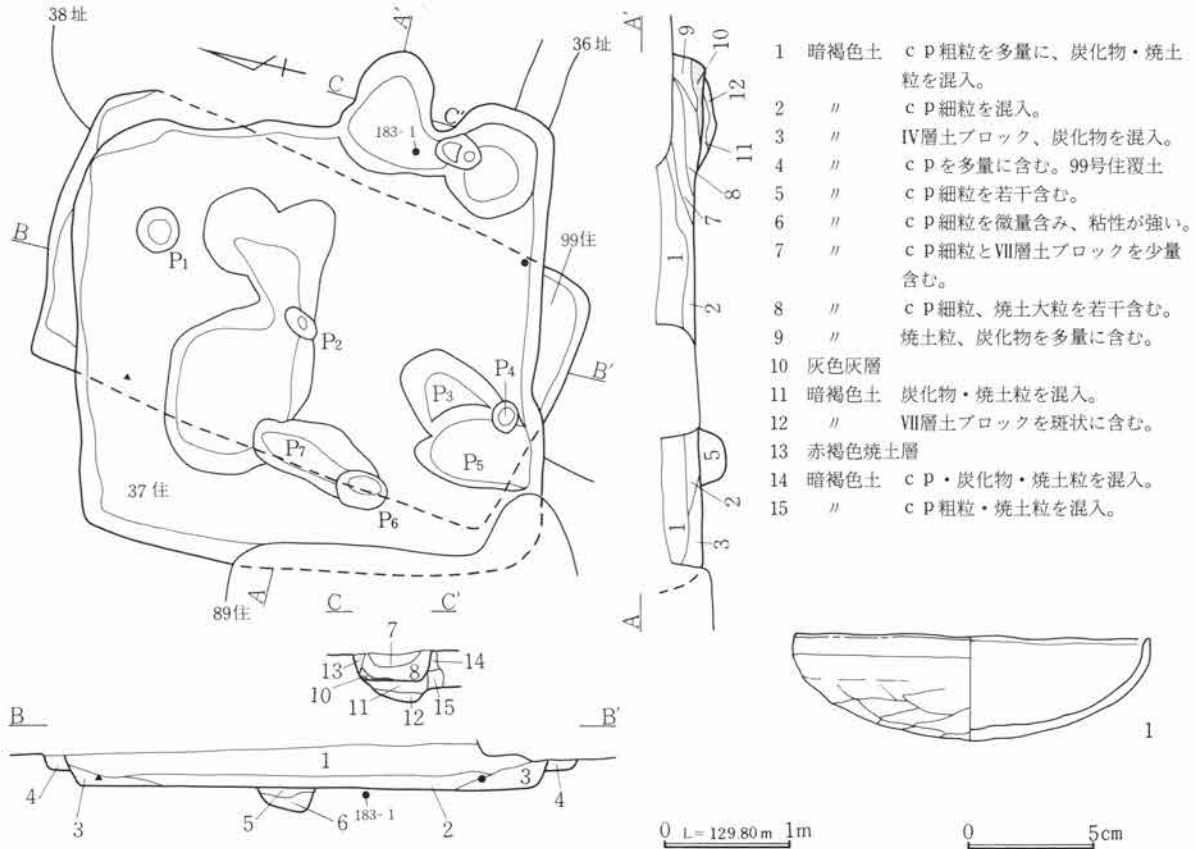
0 5cm 0 10cm

第182図 G区第34号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第37号住居跡	位置	8～10-G-68～70グリッド内	分類	A-9	時期	—
平面形態	隅丸方形	規模	3.50m×3.70m	主軸方位	東—10度—北	残存深度	約25cm程
備考	壁は南西コーナー部を除き検出した。壁溝・柱穴は掘り方段階でも未検出で、無たものと思われる。貯蔵穴は南東コーナー部に検出し、円形で径約75cm、深度約12cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東—2度—南	
規模	全長100cm 屋外長57cm 屋内長43cm 袖間幅115cm 燃烧部幅65cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は浅い掘り込みで、燃烧部に灰面を検出した。袖は両袖部共に残存せず、構築材の痕跡のみ見られない。燃烧部北壁の一部は焼土化していた。右袖部先端近くに土師器の坏が出土している。						

遺構名称	G区第99号住居跡	位置	8～10-G-68・69グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	2.20m×4.20m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約10cm程

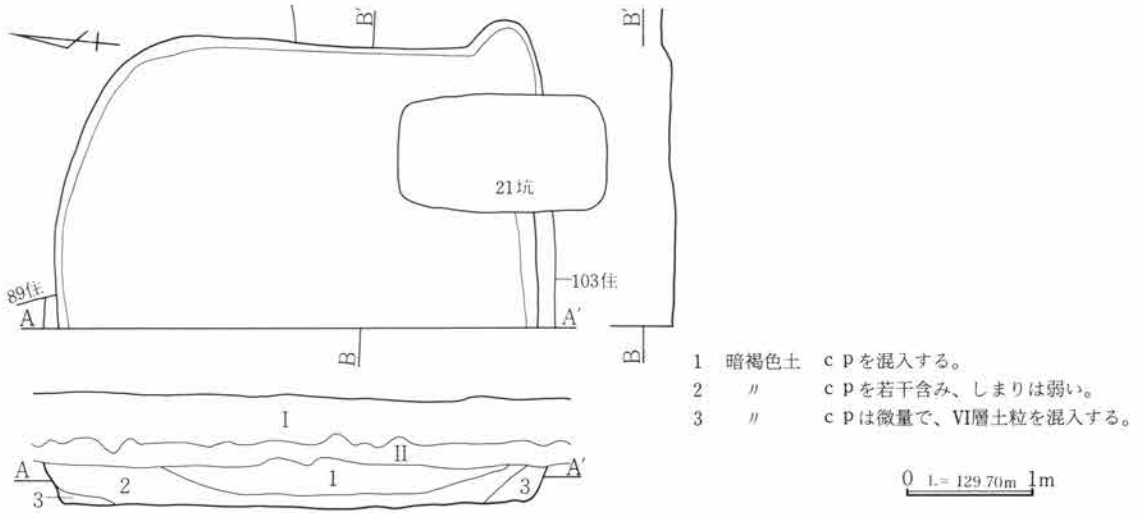


第183図 G区第37・99号住居跡・出土遺物実測図

第99号住居跡は中央部を第37号住居跡によって切られており、第37号住居跡は南西コーナー部を第89号住居跡との重複によって失っている。その他東壁と南壁で、中世以降の遺構と考えられる第36・38号址と重複しているが、第37号住居跡とのレベル差が大きく、床面近くまで及んでいない。

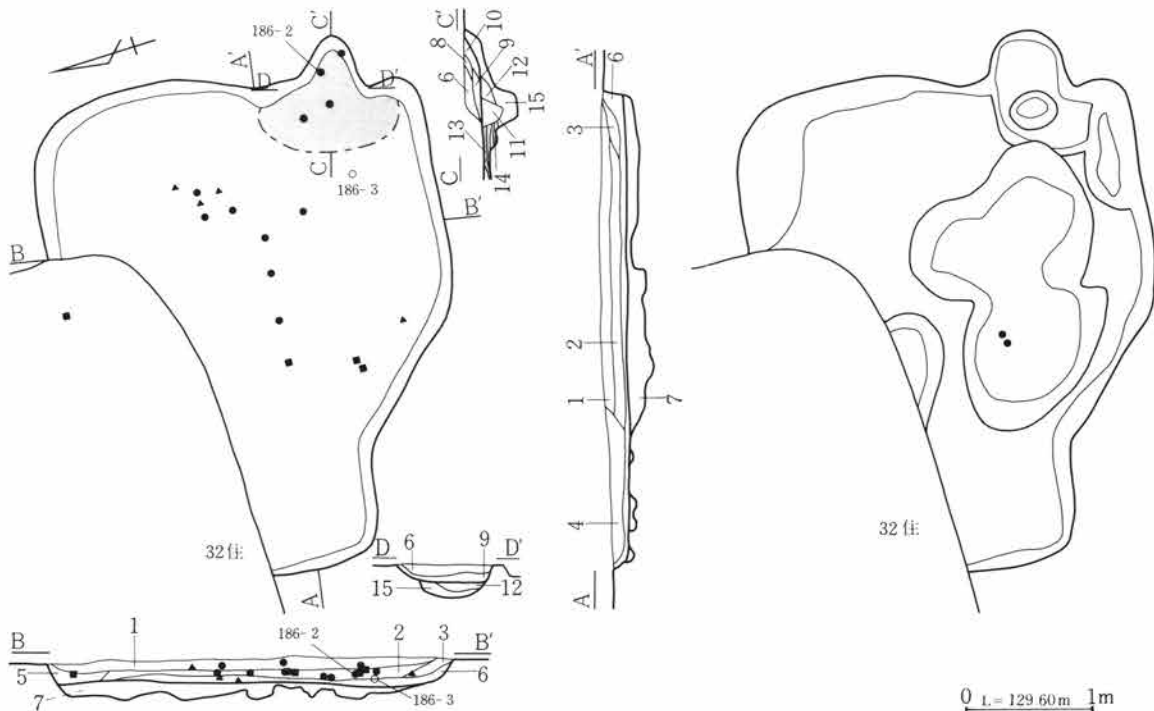
遺構名称	G区第39号住居跡	位置	6～8-G-70～72グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×3.80m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約3cm程
備考	西側は調査区外で未検出。北東コーナー部で第89号住居跡と重複し、中央部で第103号住居跡と重複し、調査区土層面で観察したセクションは、当住居跡のものか、第103号住居跡のものか不明。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第184図 G区第39号住居跡実測図

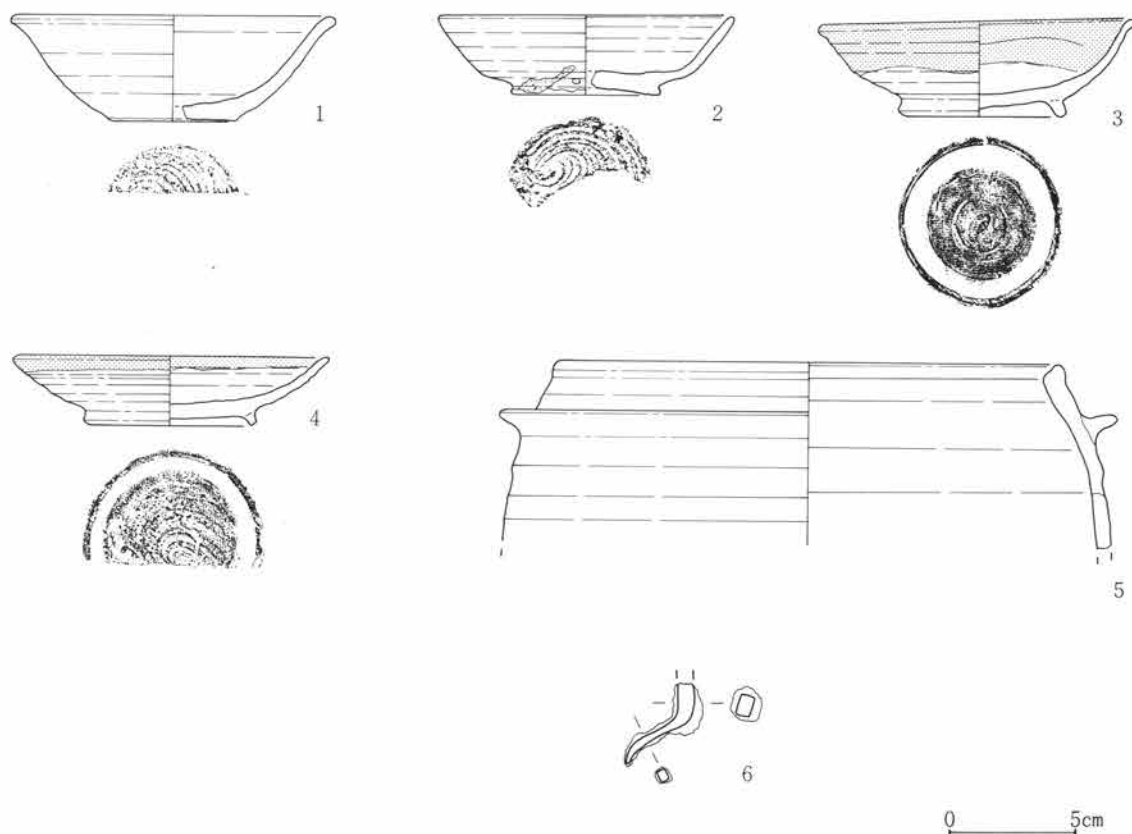
遺構名称	G区第41号住居跡	位置	0～2-G-69～71グリッド内	分類	D-2	時期	IX
平面形態	隅丸の鍵形	規模	3.80m×3.20m	主軸方位	東-16度-南	残存深度	約12cm程
備考	北西コーナー部で第32号住居跡と重複している。壁溝・柱穴は掘り方段階でも検出されず、無たものと考えられる。貯蔵穴も残存部には検出されていない。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・三角形状			主軸方位	東-18度-南	
規模	全長 55cm 屋外長 38cm 屋内長 17cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 55cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口に掘り込みは認められず、床面と同レベルで燃烧部から焚口部前面一面に灰面を検出した。袖は両袖とも残存せず、燃烧部には灰面以外何ら検出されていない。						



第185図 G区第41号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物

- | | | | | | |
|---|------|--------------------------|----|------|-----------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c P粗粒を若干含む。 | 9 | // | c P微量で、炭化物を混入し、粘性は弱い。 |
| 2 | // | c Pを微量含み、粘性が強い。 | 10 | // | c Pは微量で、焼土粒を多量に含む。 |
| 3 | // | c P細粒を若干、焼土粒を少量含み、粘性弱い。 | 11 | // | VI層土粒・ブロックと暗褐色土の混土。 |
| 4 | // | c Pを多量に含む。他の遺構か？ | 12 | // | c Pは微量で、炭化物・焼土粒を若干含む。 |
| 5 | // | c Pを混入。 | 13 | 黒色灰層 | |
| 6 | // | c P細粒・VI層土粒を多量に含み、粘性が強い。 | 14 | 暗褐色土 | c Pは微量で、灰を多量に含む。 |
| 7 | // | c Pを混入し、VII層土ブロックを含む。 | 15 | // | 12層に近似。 |
| 8 | // | c P・焼土粒を混入。 | | | |



第186図 G区第41号住居跡出土遺物実測図

当住居跡の平面プランは、F区第2号住居跡及び第32号住居跡と共通するもので、西壁の北寄り部分が西側に張り出す特異な形態である。この形態の住居跡は当区内には類例がない。この3例共に残存状態等共通する要素が認められるが、主軸方位などは微妙に違っている。

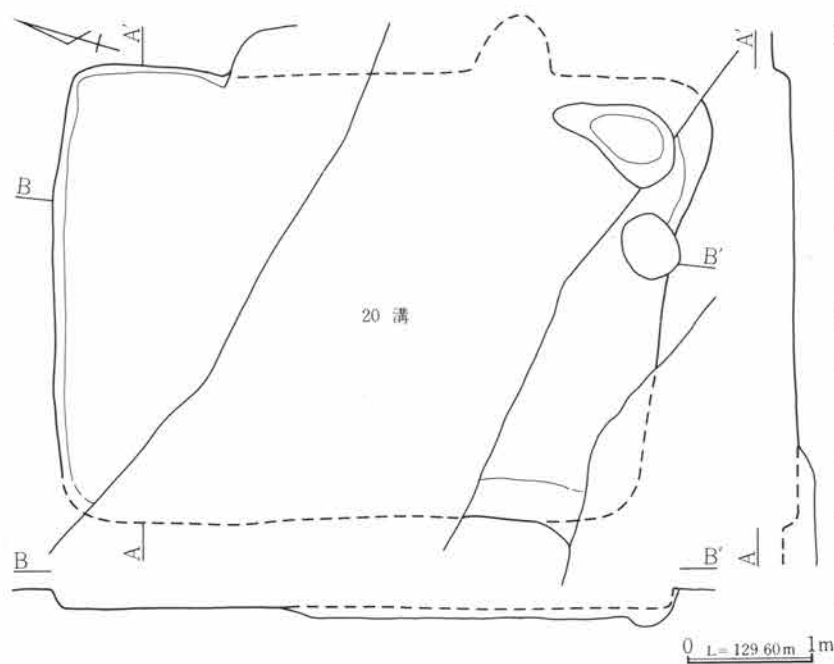
当住居跡掘り方は、カマド正面部に特に顕著で、不整円形の土坑状掘り込みが連結した様な掘り込みが検出され、中からわずかな遺物出土が認められた。この掘り方内には、VII層土ブロックを多量に含む暗褐色土が充填しており、住居掘り上げ土を埋め戻していることによるものと考えられる。

当住居跡のあり方を、一般的な形態の住居跡と比較すると、その特異な形態の違い以外にきわだった違いを指摘することはできない。つまりはその果たした役割も一般的な住居跡と変わらないと考えて差し支えないものと思われる。

遺物は住居中央部床面上に比較的集中して出土したのに対して、カマド内からの出土はわずかである。

遺構名称	G区第42号住居跡	位置	14~17-G-54~56グリッド内	分類	—	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	—m×5.00m	主軸方位	東—12度—北	残存深度	約15cm程

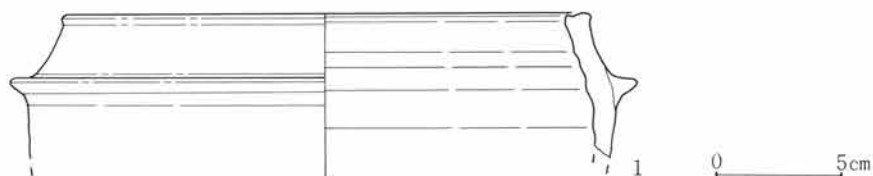
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



当住居跡は中央部で第20号溝と重複し、主要部分の大半を失っており、わずかに残った北東コーナー部を含む北壁は、比較的良く形状を止めている。

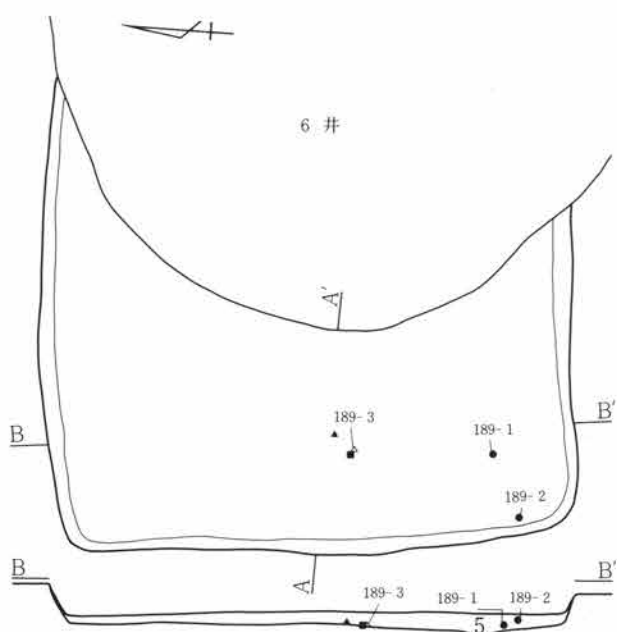
床面はVI層中で平坦であり壁溝・柱穴等は検出されていない。

貯蔵穴は、第20号溝底面で不整形形のピットを検出した。位置的に南東コーナー部にあたると思われる、貯蔵穴と考えられる。



第187図 G区第42号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第43号住居跡		位置	1～4-G-66～68グリッド内		分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	—m×4.20m	主軸方位	東—5度—北	残存深度	約	18cm程	

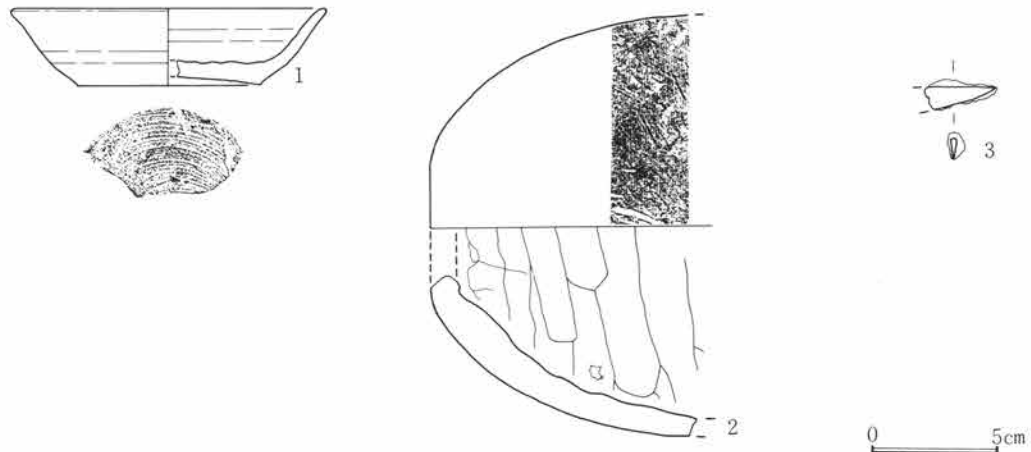


- | | | |
|---|------|---------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c P 細粒を多量に含み、しまり・粘性共に弱い。 |
| 2 | // | c P は1層に比してやや少量で、しまり・粘性共に弱い。 |
| 3 | // | c P を少量、VI層土粒を多量に含みしまりがやや強い。 |
| 4 | // | c P ・焼土粒を多量に含み、しまりが強い。 |
| 5 | // | c P ・VII層土ブロックを多量に含み、しまりは比較的強い。 |
| 6 | // | c P 大粒をわずかに含み、粘性が比較的強い。 |



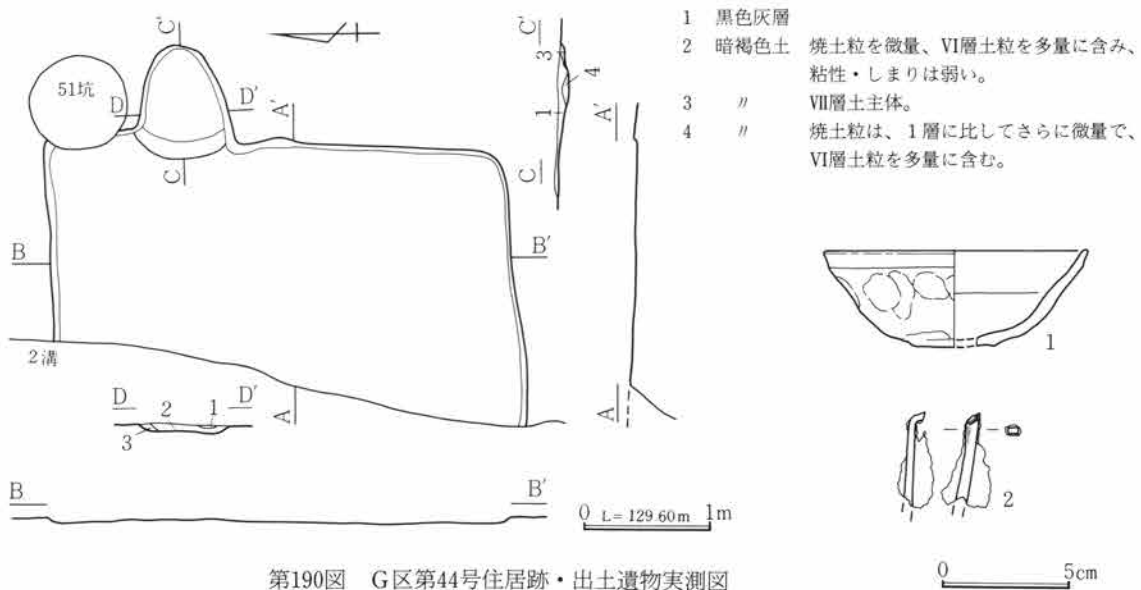
第188図 G区第43号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第189図 G区第43号住居跡出土遺物実測図

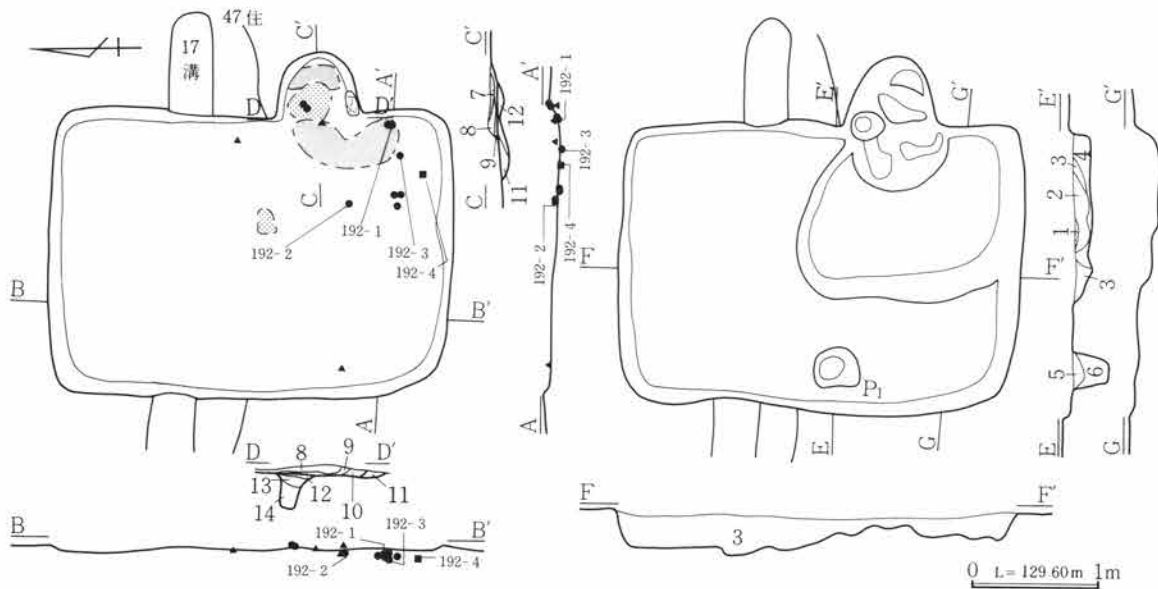
遺構名称	G区第44号住居跡	位置	21~23-G-54~56グリッド内	分類	C-13	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形	規模	1m×3.60m	主軸方位	東-5度-南	残存深度	約5cm程
備考	西側約1/3は第2号溝との重複で失われている。カマドは東側の北寄りに扁在し検出されたが、残存状態は悪く痕跡にすぎない。壁溝・柱穴・貯蔵穴は残存部には検出されていない。						



第190図 G区第44号住居跡・出土遺物実測図

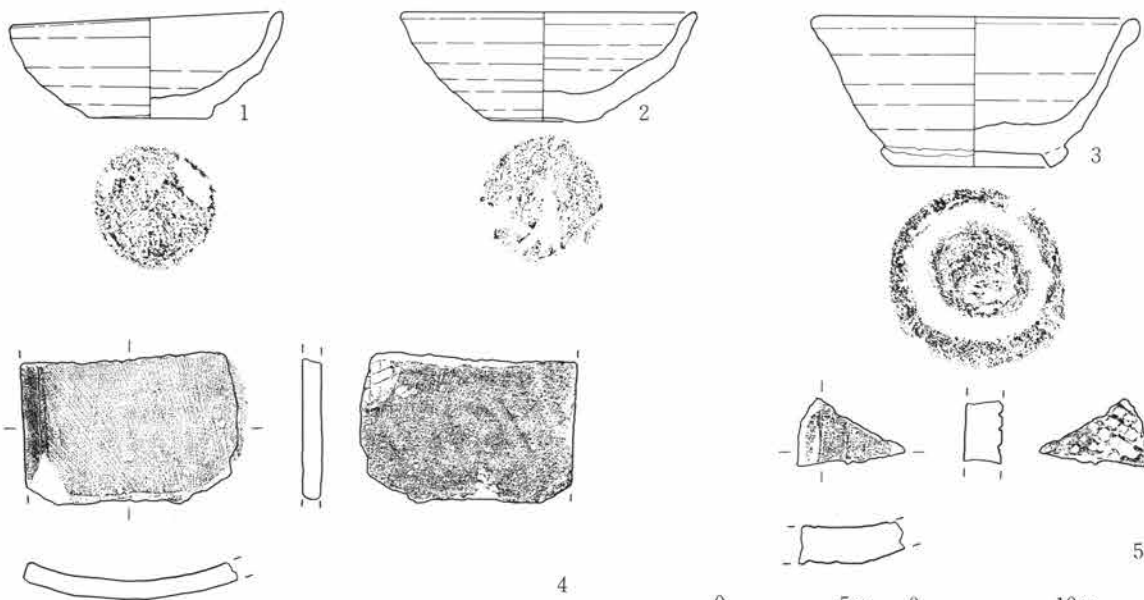
遺構名称	G区第46号住居跡	位置	39~41-G-54~56グリッド内	分類	C-10	時期	X					
平面形態	隅丸長方形	規模	2.20m×3.20m	主軸方位	東-2度-北	残存深度	約5cm程					
備考	壁は第17号溝との重複で失われた部分以外全周検出したが、かろうじて平面プランがわかる程度の残存状態である。壁溝・柱穴は検出されず、無たものと考えられる。											
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形		主軸方位	東-0度-北							
規模	全長	55cm	屋外長	49cm	屋内長	6cm	袖間幅	1cm	燃烧部幅	70cm	煙道幅	1cm
備考	カマドは、ほとんど掘り込みが残存せず、燃烧部の焼土面及び燃烧部から焚口にかけての灰面が比較的良好な状態で検出された。袖は右袖が残存し、角柱状の截石を据えていた。左袖部に円形ピット。											

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 赤褐色焼土 プレート状に固くなっている。 | 8 暗褐色土 焼土粒をごく微量含む。 |
| 2 暗褐色土 c Pを微量含み、粘性・しまり共に弱い。 | 9 // 焼土粒を微量、灰を多量に含み、しまりは弱い。 |
| 3 // c Pを微量含み、粘性2層に比してやや強い。 | 10 // 焼土粒をごく微量と、炭化物を混入する。 |
| 4 // c P細粒を微量含み、VI層土粒が混入。 | 11 // c Pを少量、炭化物を多量に含む。 |
| 5 // c Pを多量に含み、粘性が強い。 | 12 // 焼土粒・灰・炭化物を少量含む。 |
| 6 // c Pは5層に比して少量で、粘性が強い。 | 13 // c Pを若干、焼土粒を微量含む。 |
| 7 赤褐色焼土層 | 14 // c Pを少量、焼土粒を混入し、粘性は弱い。 |

第191図 G区第46号住居跡実測図

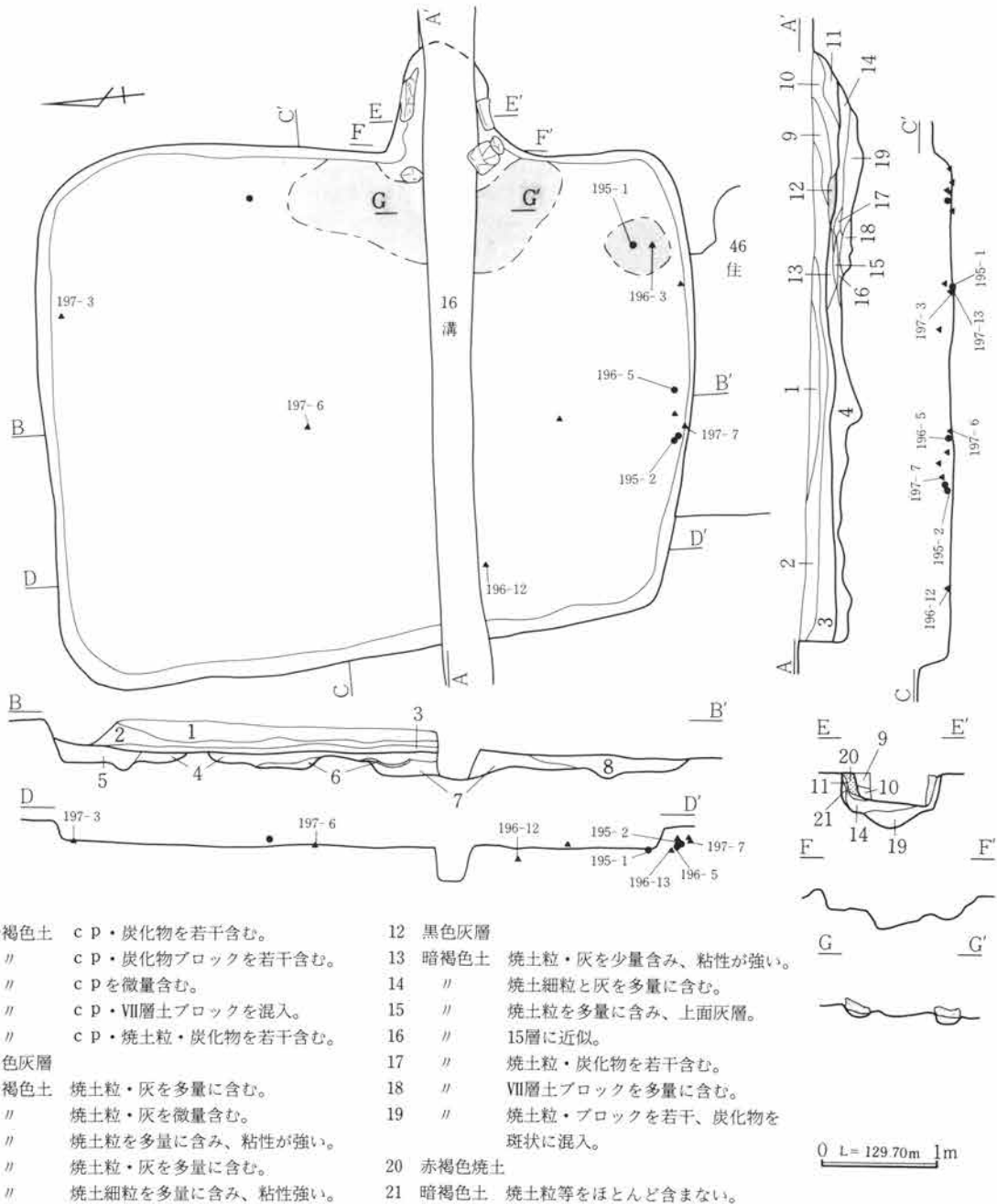


第192図 G区第46号住居跡出土遺物実測図

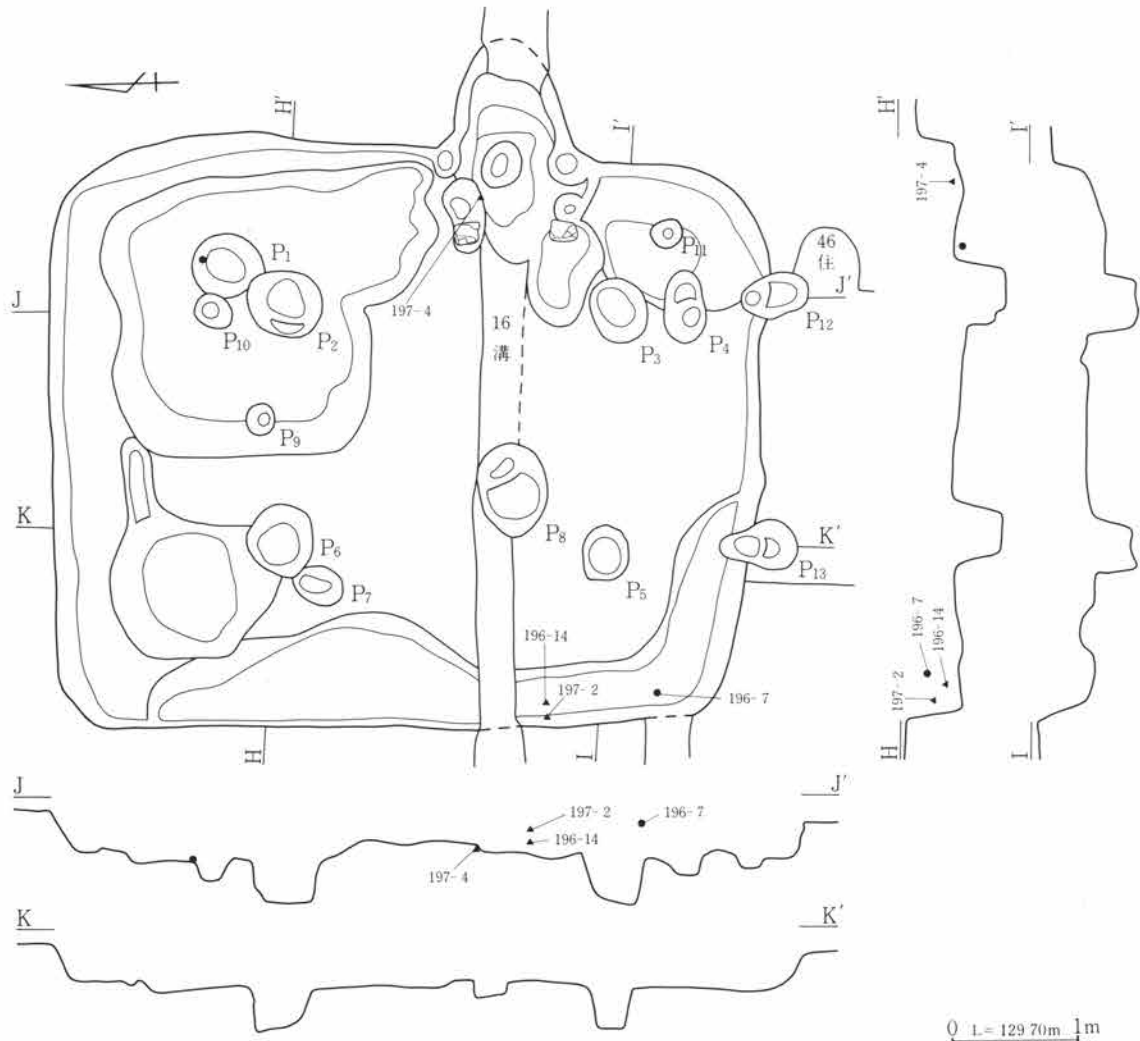
当住居跡の掘り方は、カマドを含む南東コーナー部に顕著で、全体の約 $\frac{1}{4}$ にあたる面積が方形に掘り窪められている。一部上面に焼土層が検出されているが、位置的にカマド近くであり、かき出しの堆積と考えられる。また、カマド正面の西壁際に円形ピットが1個検出されたが、柱穴とは考えられない。貯蔵穴は、明確なプランでは検出されていないが、南東コーナー部に完形坏類が出土しており、その出土面は床面より若干低位であることから、この位置が貯蔵穴としての意識の働いた場所なのであろう。

第3章 検出された遺構・遺物

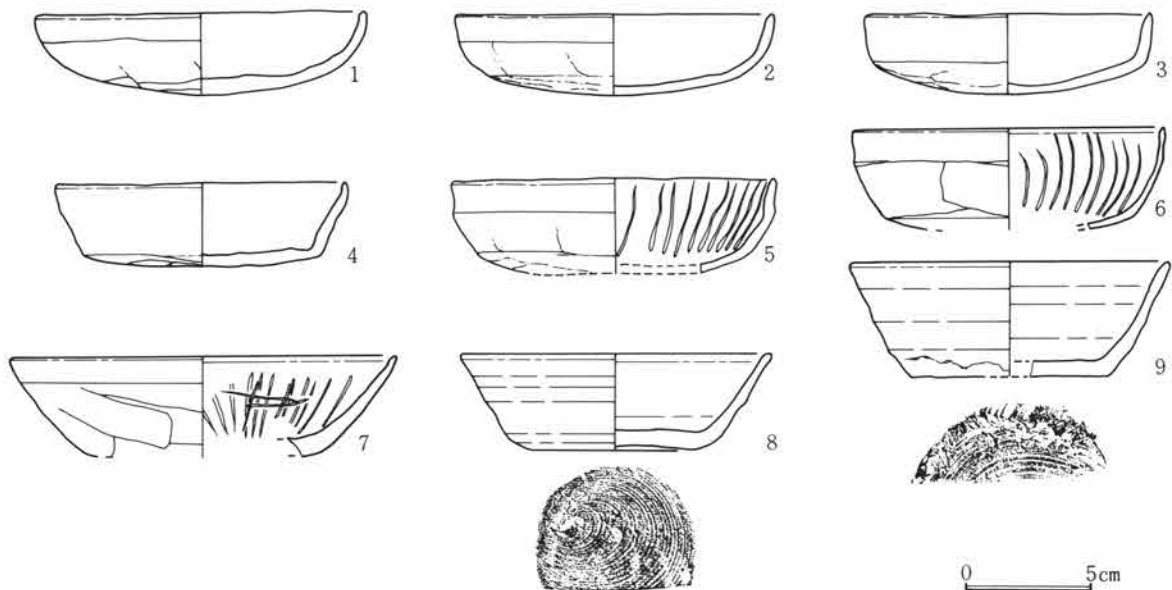
遺構名称	G区第47号住居跡		位置	40~43-G-54~56グリッド内		分類	C-6	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	4.40m×5.80m	主軸方位	東-6度-南	残存深度	約16cm程		
備考	壁は第16号溝との重複部を除き全周検出。壁溝は掘り方段階でも未検出であり、柱穴は、掘り方で検出した。4ヵ所中3ヵ所には新旧2時期の柱穴が認められる。南壁に入口部ピットを1対検出。								
カマド	位置・形状	東壁わずか南寄り・舌状				主軸方位	東-5度-南		
規模	全長110cm 屋外長90cm 屋内長20cm 袖間幅105cm 燃烧部幅85cm 煙道幅—cm								
備考	カマドの中心部は第16号溝によって失われている。袖は両袖共かなり屋内に入った部分に角柱状截石を据え構築している。灰面は焚口部広範囲にみられる。燃烧部北壁にも截石を据えている。								



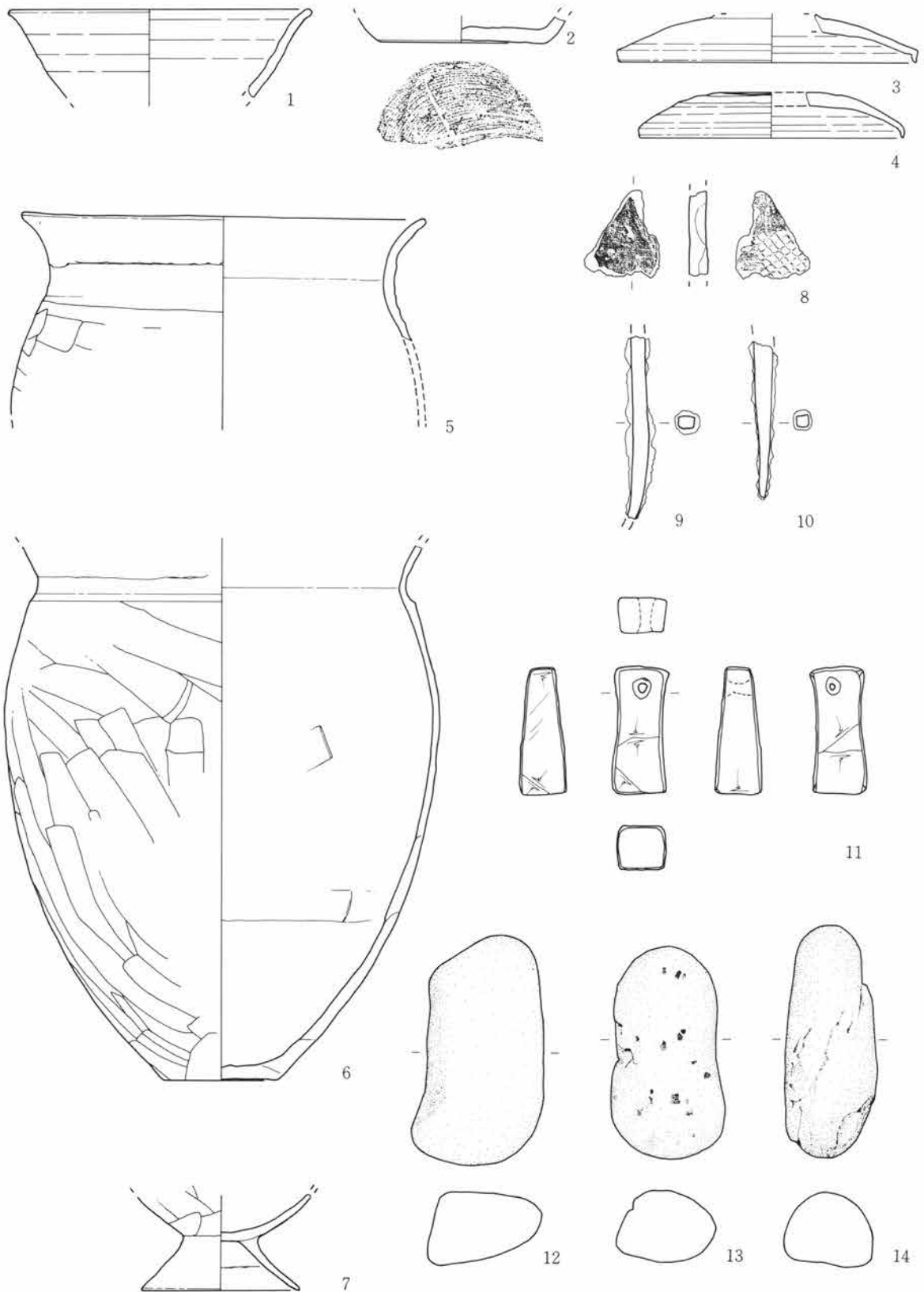
第193図 G区第47号住居跡実測図



第194図 G区第47号住居跡実測図



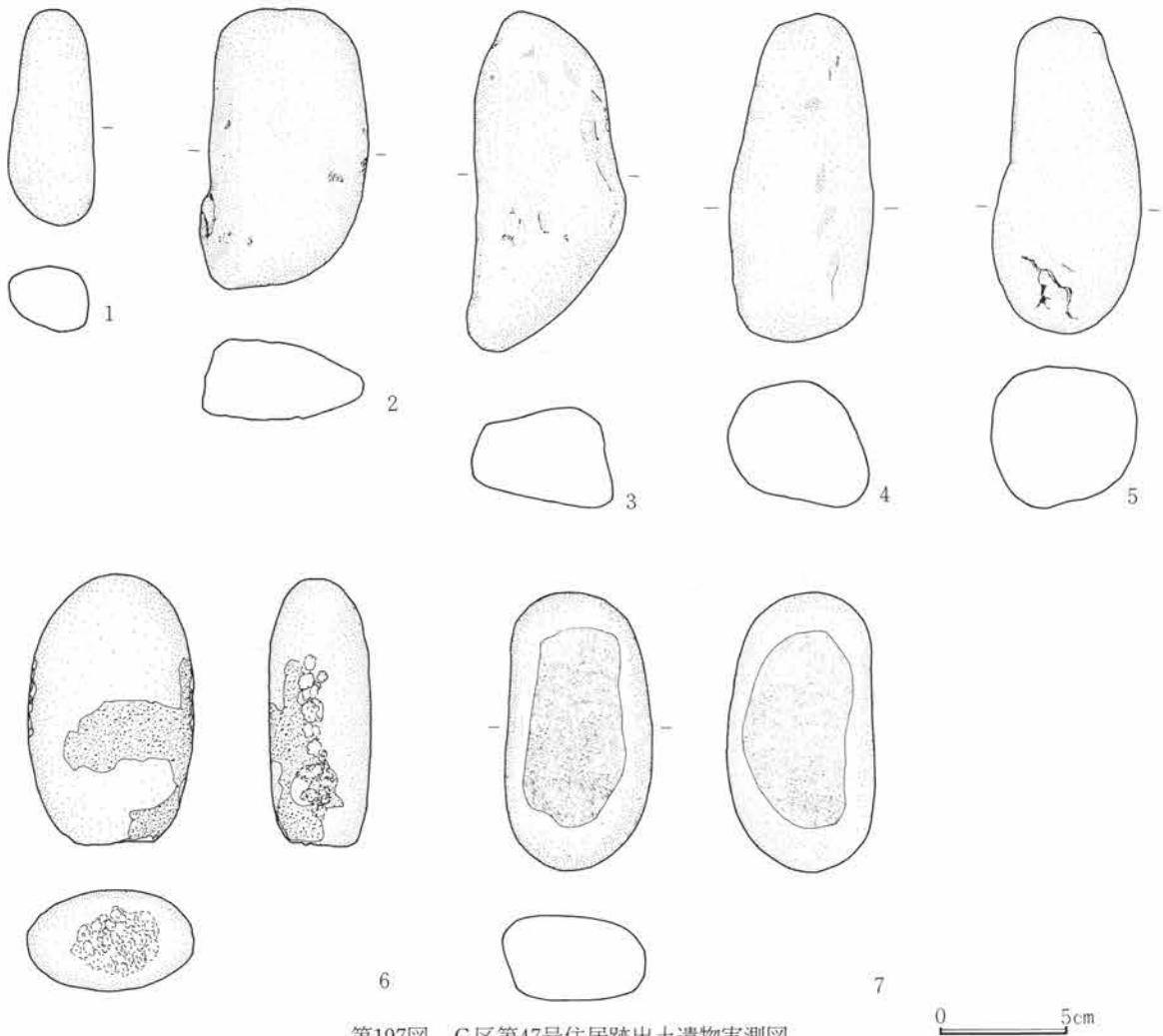
第195図 G区第47号住居跡出土遺物実測図



第196図 G区第47号住居跡出土遺物実測図

0 5cm 0 10cm

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



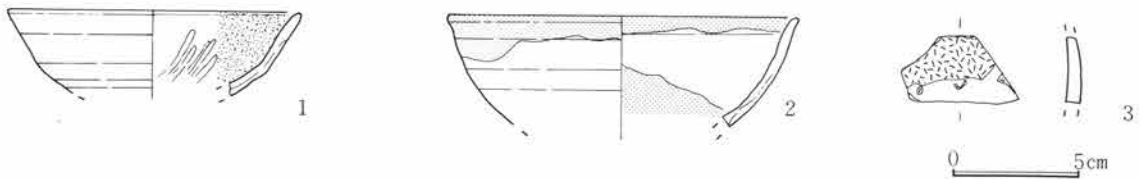
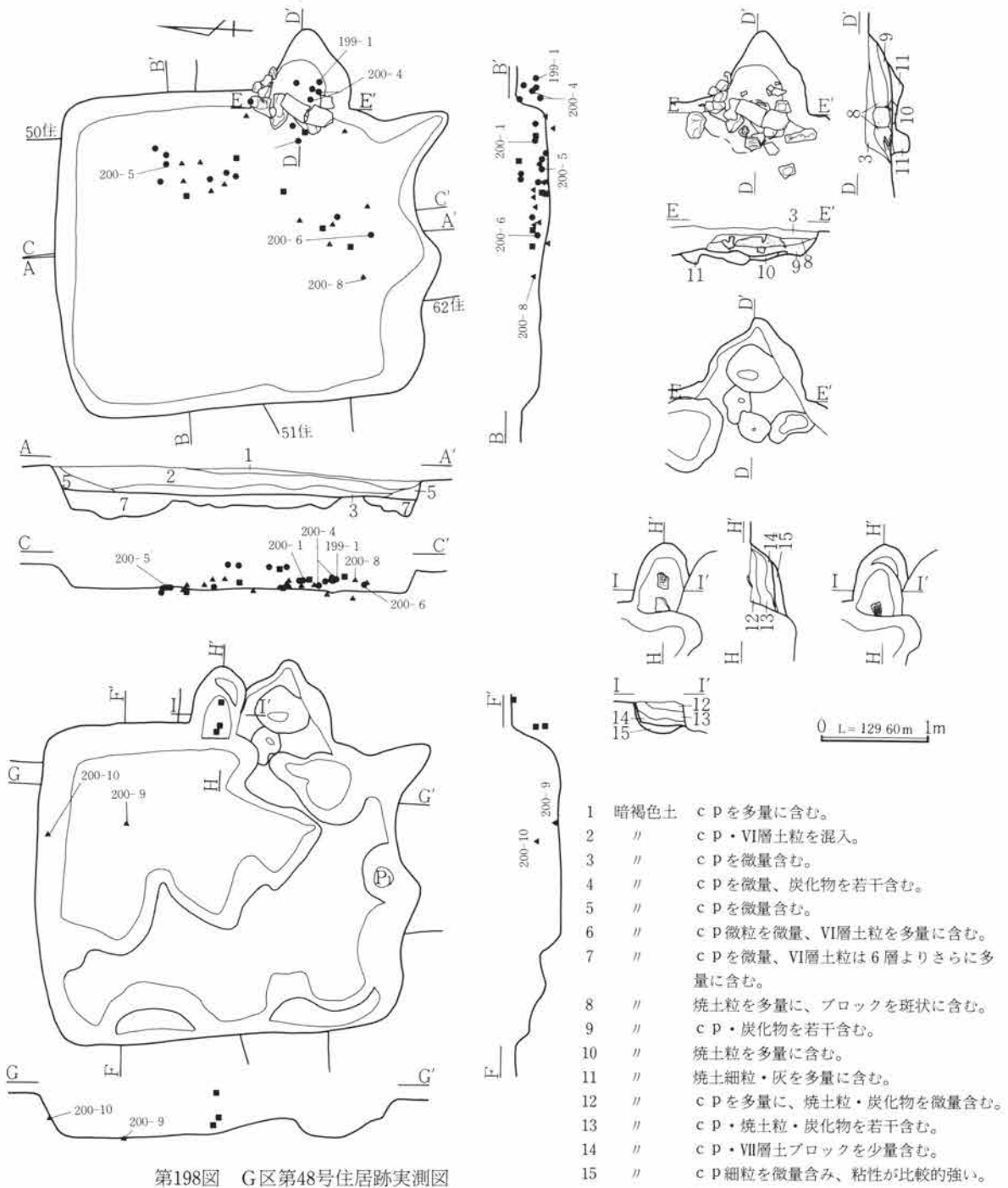
第197図 G区第47号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は南壁部で第46号住居跡と重複している。その新旧関係は、第46号住居跡掘り方調査時に当住居跡南壁を検出していることから、当住居跡が明らかに先行している。また、掘り方段階で検出したピットは合計13個あり、そのうち7個が支柱穴と考えられるもので、入口部の対ピットとしたもの以外のピットについては性格不明である。入口部対ピットは、今回の調査区においては他に例がなく特異である。間隔は約2m程あり、壁から外側に掘り込まれており、深度はどちらも床面レベル程度までの深さで共通している。

遺物は、南壁中央壁際に礫を中央にして東に甕の口縁部、西に坏が2枚重ねて出土したのが特徴である。

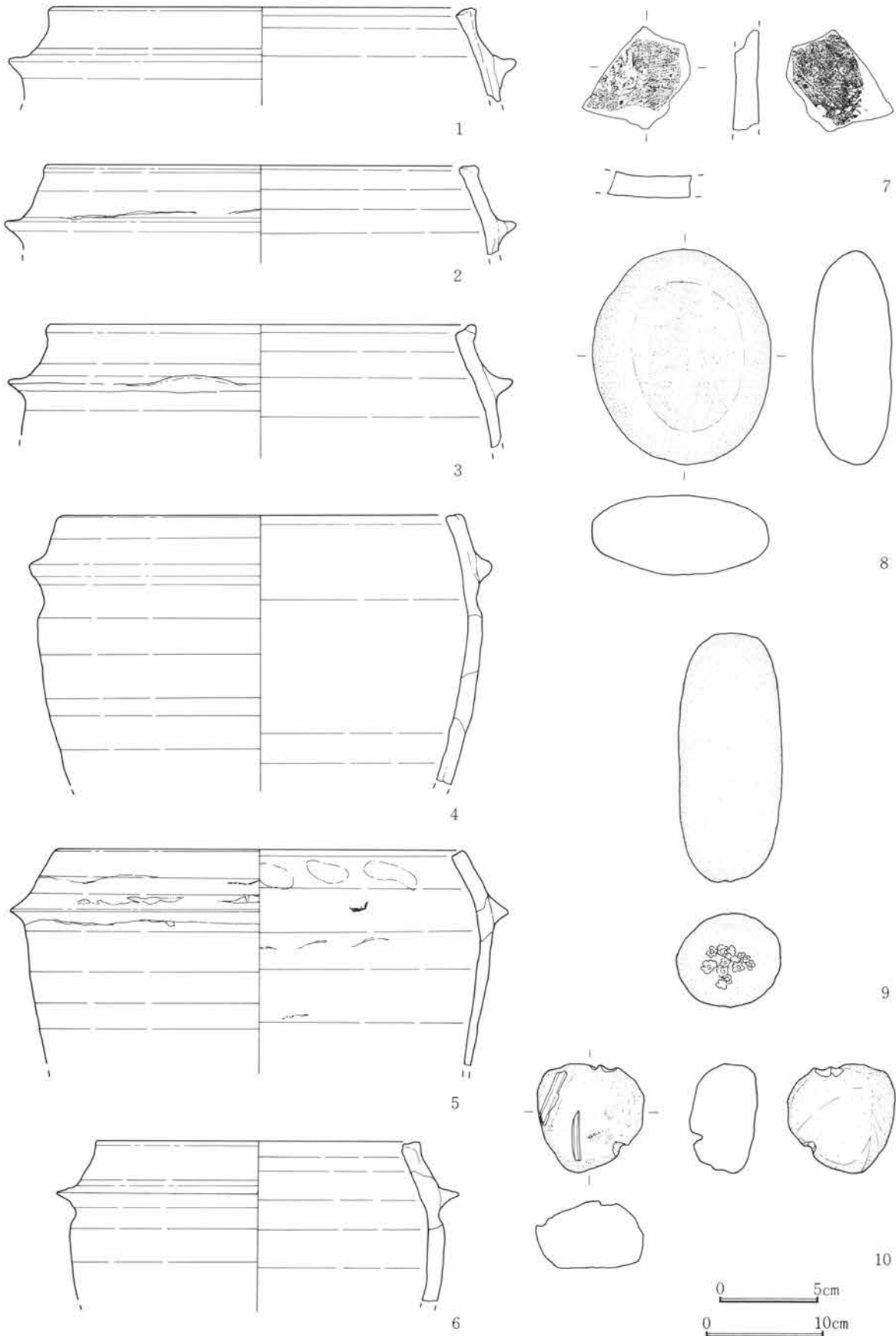
遺構名称	G区第48号住居跡		位置	25～27-G-50～52グリッド内		分類	C-10	時期	IV
平面形態	隅丸長方形	規模	2.90m×3.40m	主軸方位	東-1度-南	残存深度	約20cm程		
備考	南壁は直線的でなく南東コーナー部は鋭角的に突出する。壁溝は掘り方段階でも検出されず、柱穴は床面精査によっても検出されていない。貯蔵穴も未検出。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに2基・馬蹄形、舌状				主軸方位	東-2度-北		
規模	全長 90cm	屋外長 70cm	屋内長 20cm	袖間幅	— cm	燃烧部幅	90cm	煙道幅	— cm
備考	焚口左寄りに多く灰面があり、角柱状截石の天井石が折れて乗っている。袖は両袖共角柱状截石を据えて構築している。燃烧部には灰・焼土等の純層は検出されず、掘り方段階でピットが検出された。								

第3章 検出された遺構・遺物



当住居跡のカマドは2カ所検出された。平面プラン・土層断面の状態から、2軒の住居の重複とは考えられず、カマドの改築例として理解した。新旧関係は、袖石・天井石のあり方から、北側のカマドを壊して南側のカマドが構築されているのは明らかで、規模の拡大を伴う改築であったものと思われる。

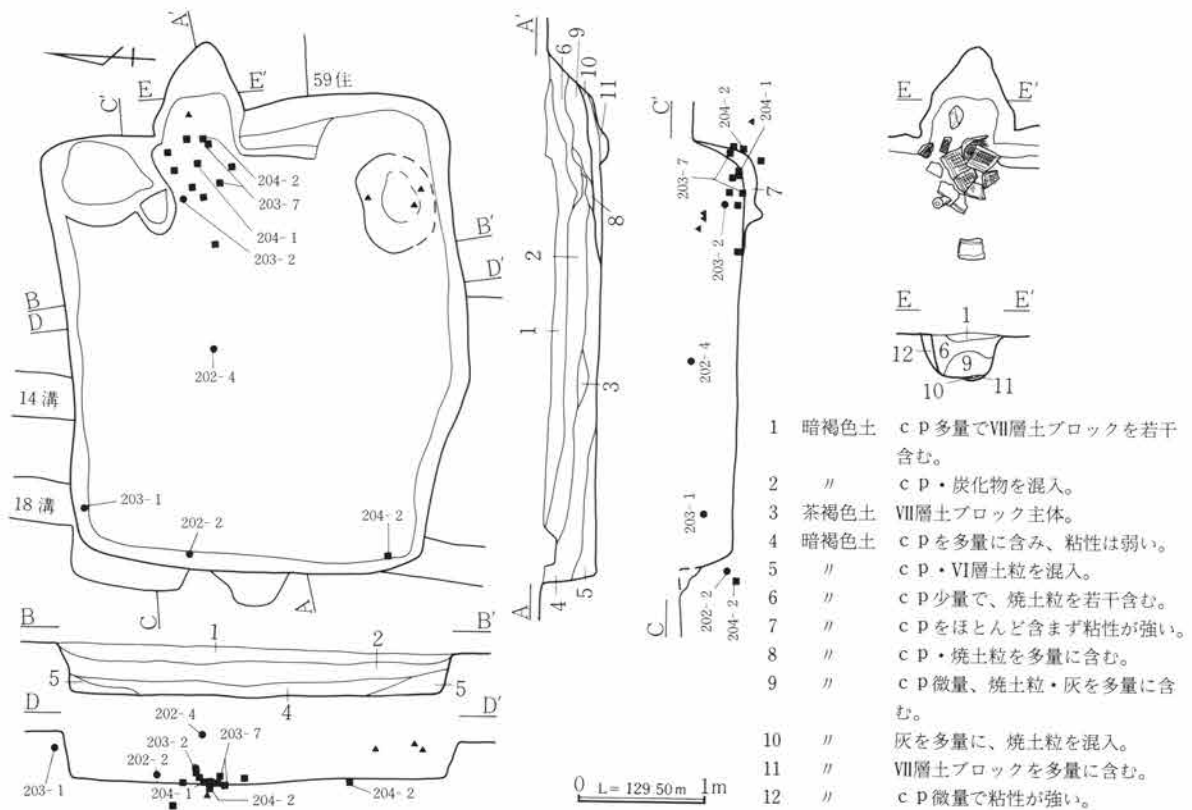
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



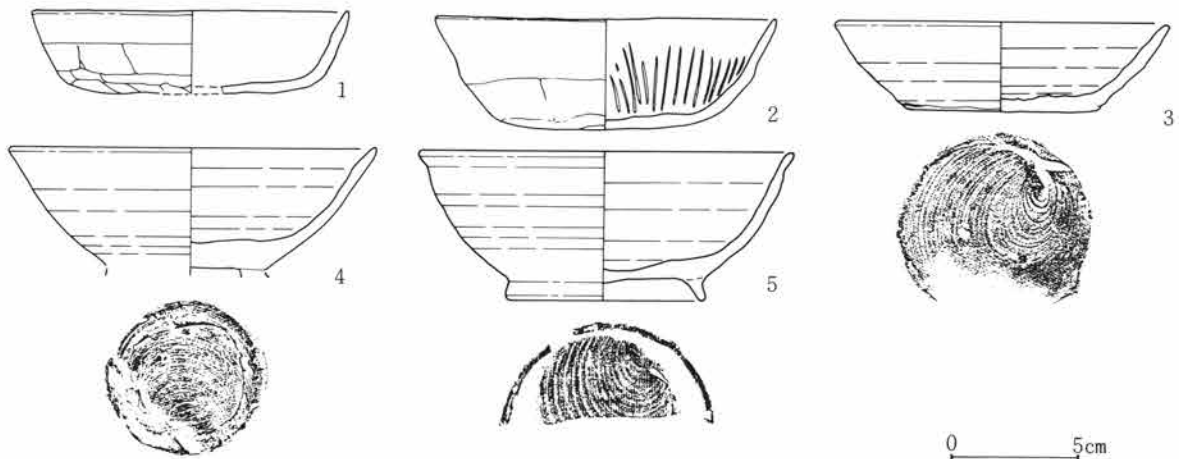
第200図 G区第48号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第49号住居跡		位置	16~18-G-42~44グリッド内		分類	B-9	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	3.80m×3.20m	主軸方位	東-9度-北	残存深度	約30cm程		
備考	壁は良く残存しており、南壁が「く」字状に南に突出する。床面はVII層に達し、掘り方は全く認められない。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出。遺物はカマド内から出土したもの以外は覆土上位出土。								
カマド	位置・形状	東壁北寄り・三角形状				主軸方位	東-0度-北		
規模	全長80cm 屋外長60cm 屋内長20cm 袖間幅—cm 燃烧部幅74cm 煙道幅—cm								
備考	焚口には瓦が集中して出土し、灰面は未検出。袖は左袖のみ残存し、平瓦を内傾して据え構築している。燃烧部に焼土等は明確に残存せず、中央北寄りに礎を据えて支脚としている。								

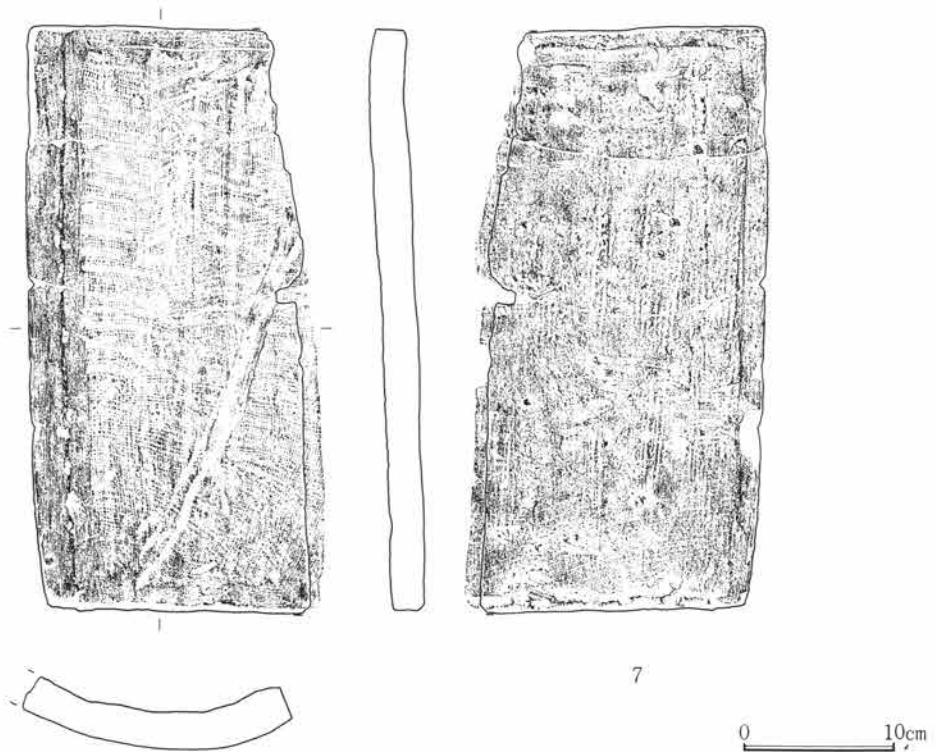
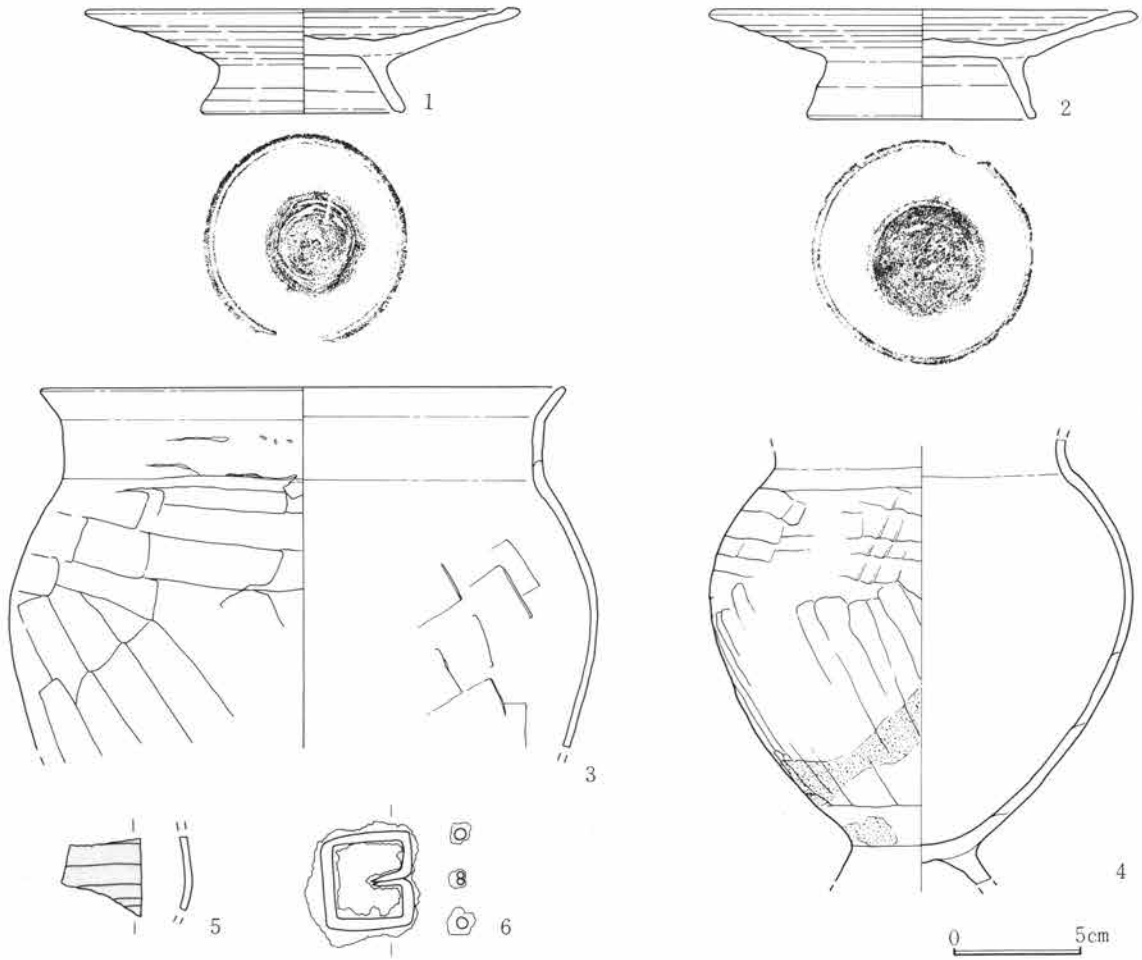


第201図 G区第49号住居跡実測図

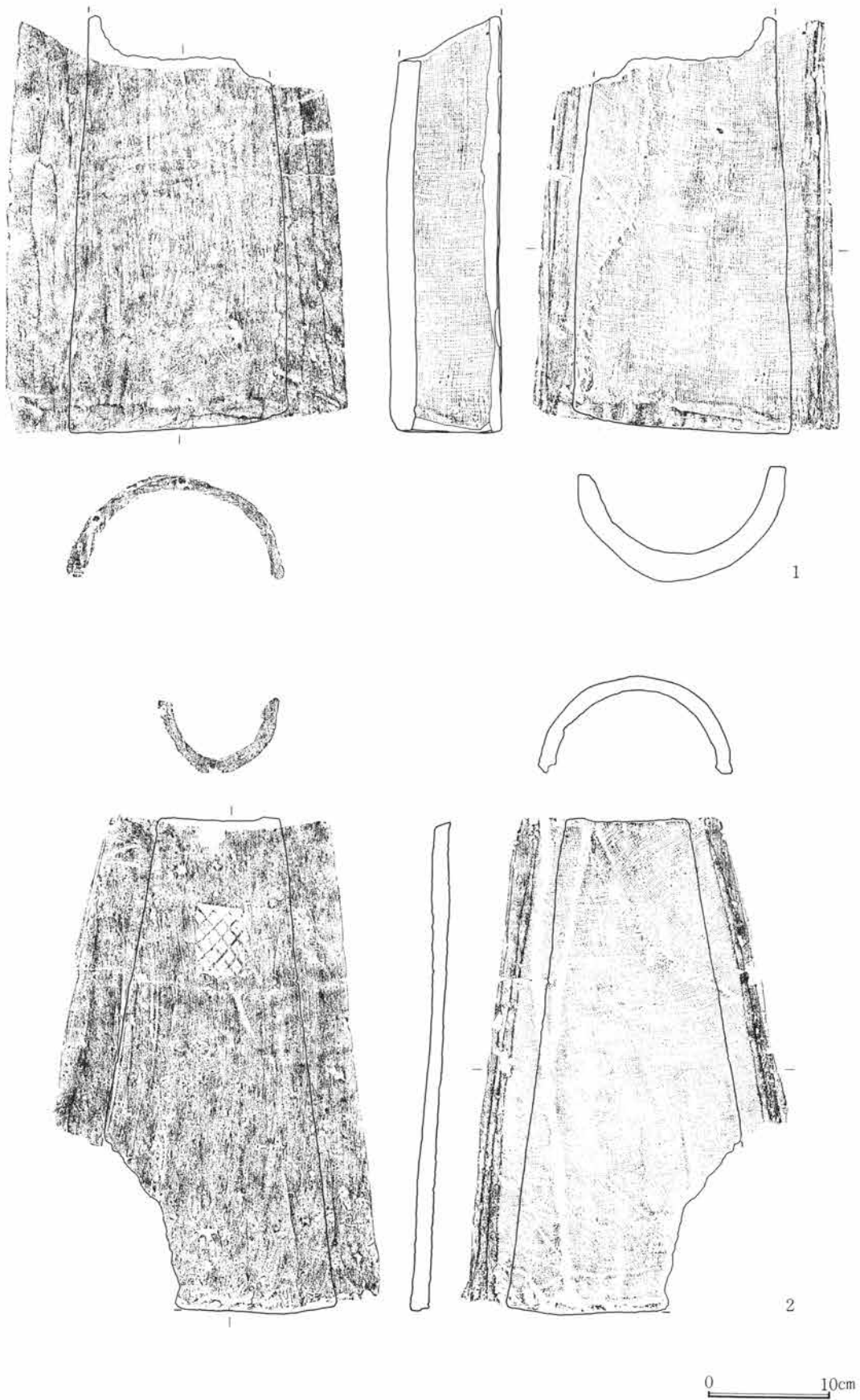


第202図 G区第49号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



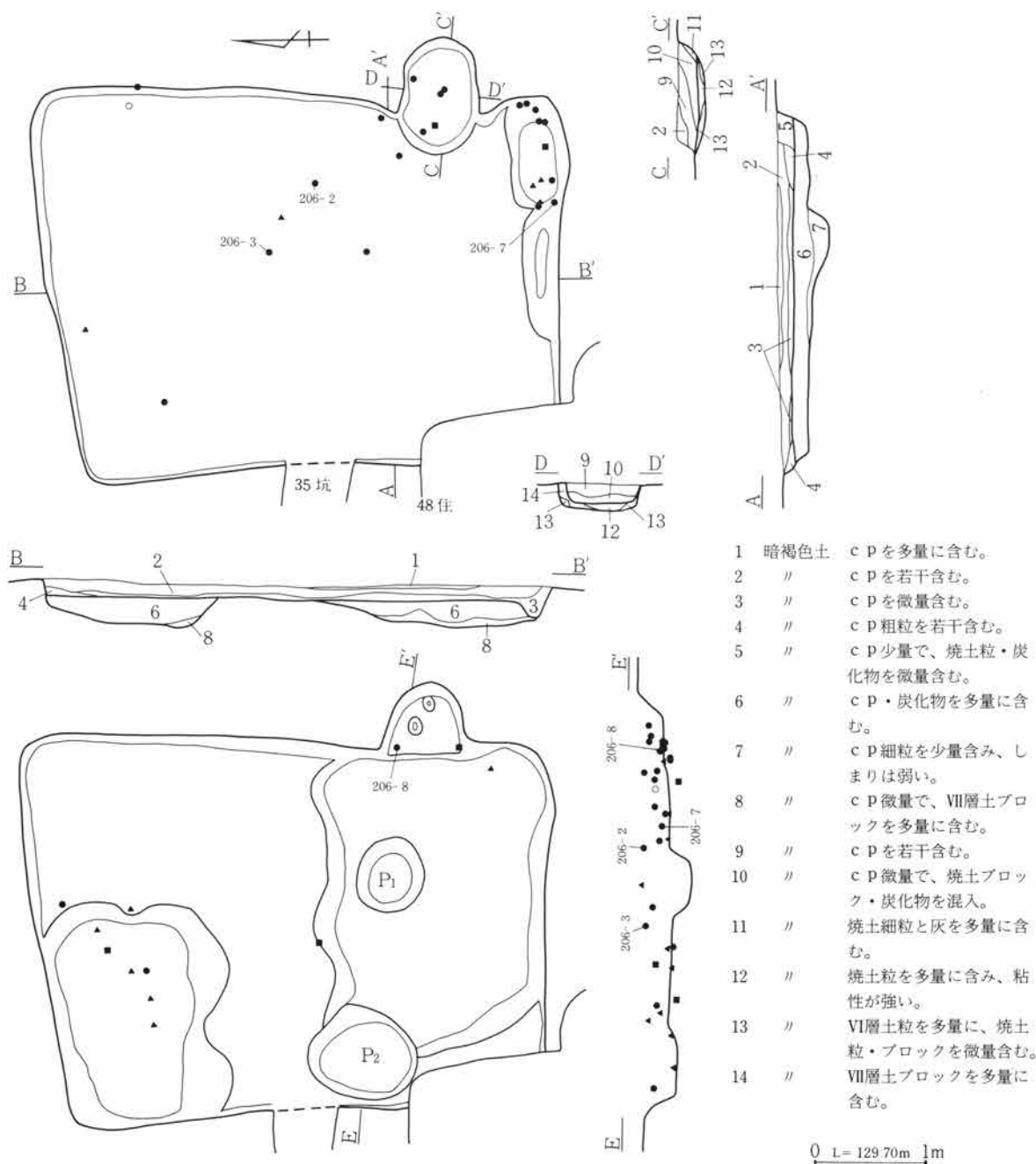
第203図 G区第49号住居跡出土遺物実測図



第204図 G区第49号住居跡出土遺物実測図

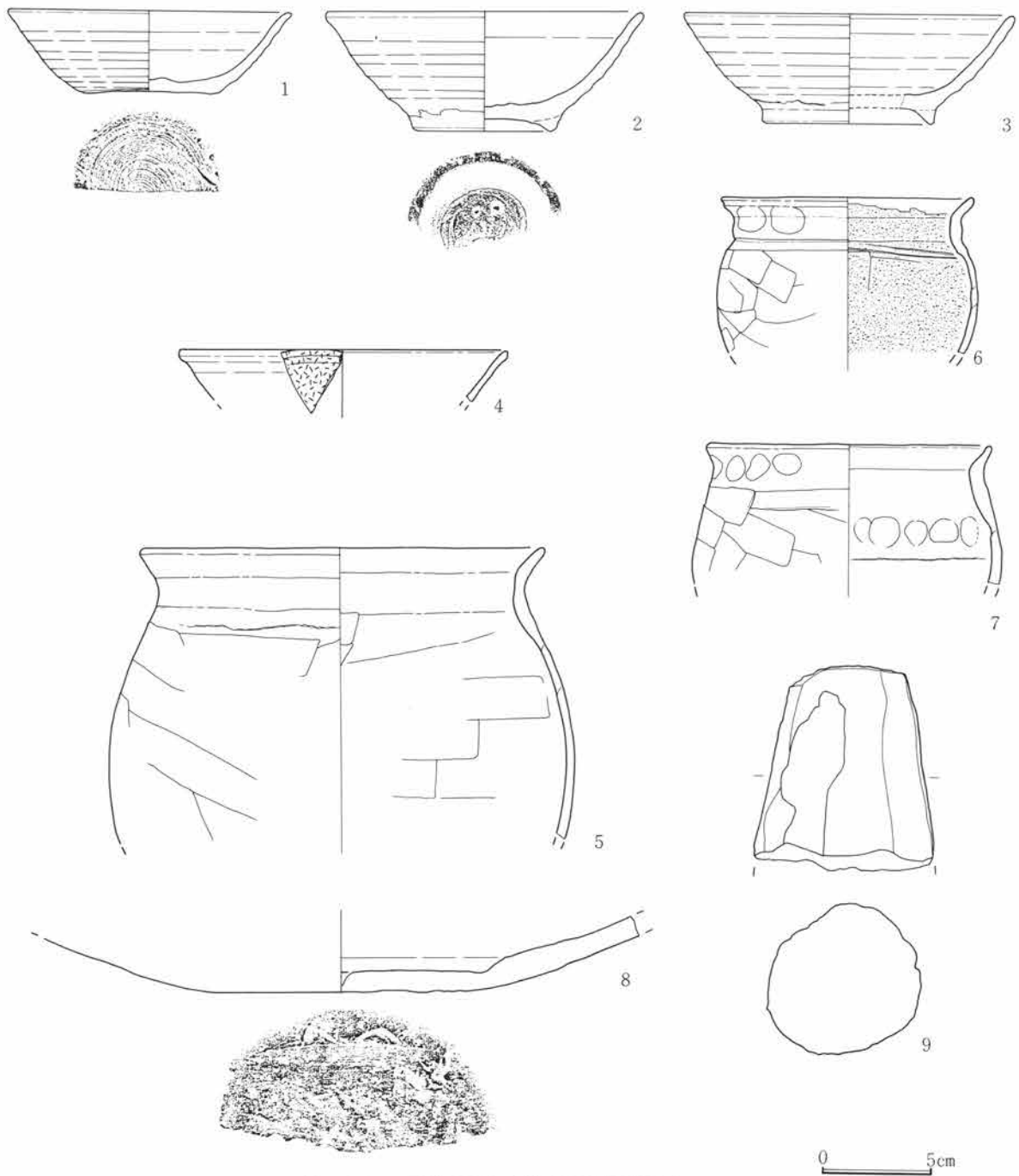
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第50号住居跡	位置	26～29-G-49～51グリッド内	分類	C-11	時期	VII
平面形態	隅丸長方形	規模	3.40m×4.70m	主軸方位	東-2度-南	残存深度	約 10cm程
備考	南西コーナー部で第48号住居跡と重複。壁溝は南壁中央の一部分に検出されただけであり、柱穴は全く検出されていない。貯蔵穴は南東コーナー部に検出され、楕円形で長軸約103cm、深度約11cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-2度-南	
規模	全長 105cm 屋外長 57cm 屋内長 48cm 袖間幅 115cm 燃烧部幅 70cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は浅い半円形状の掘り込みで、灰面は未検出。袖は両袖共構築材は検出されず、暗褐色土で構築されていた。燃烧部には焼土等は検出されず、掘り方段階で中央北寄り截石の支脚を検出。						



第205図 G区第50号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第206図 G区第50号住居跡出土遺物実測図

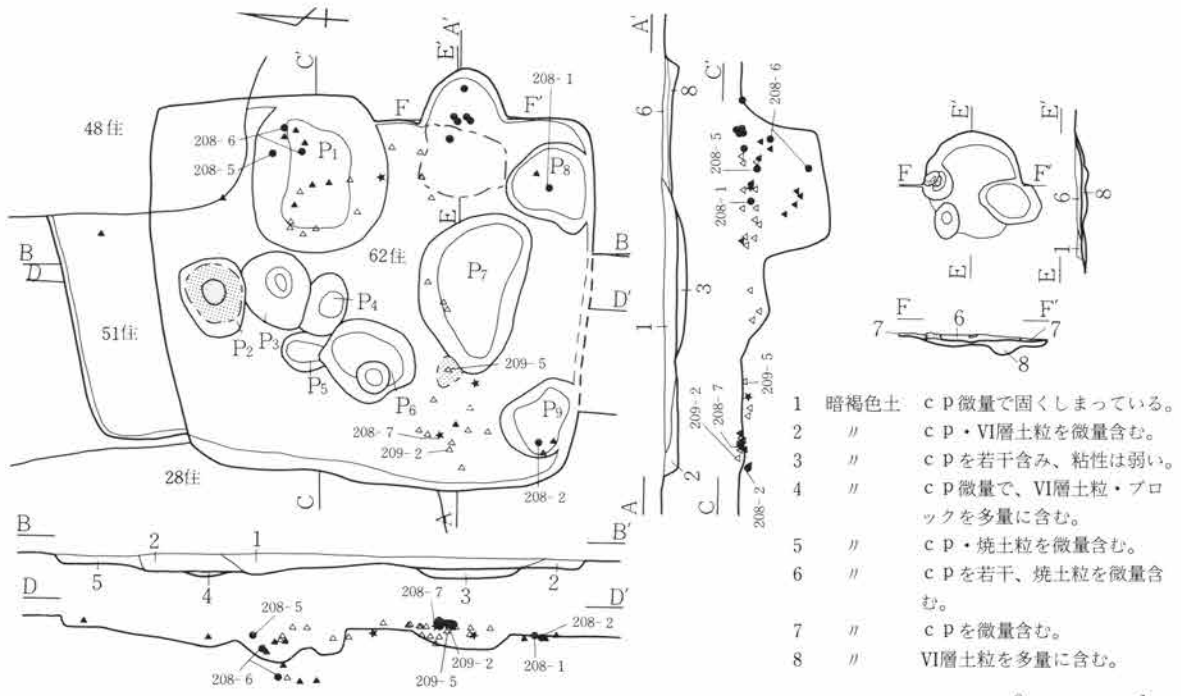
当住居跡の掘り方は、中央部を除き南北壁寄り約 $\frac{2}{3}$ が平坦に掘り込まれている。北側の掘り込みは、隅丸方形に2段に掘り込まれており、南側は、北側よりやや広範な掘り方であり段差はみられない。この掘り方中には、2カ所の円形掘り込みがみられ、それぞれP₁は径約70cm、P₂は径約90cmで、断面は鍋底状を呈している。これらの掘り方は、カマド掘り方面より若干下位まで下っており、カマドは貼床構築後に掘り込まれている可能性が高い。

遺物は、床面からの出土はごく少なく、貯蔵穴内からの出土が多い。第206図5～7が東寄りに集中して出土した他、第206図4の白磁片が出土している。また、貯蔵穴南寄りに礫が若干出土した。その他は北側の掘り方内に若干集中しているが、ほとんど底面から遊離しており故意に置かれたものとは考えられない。

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

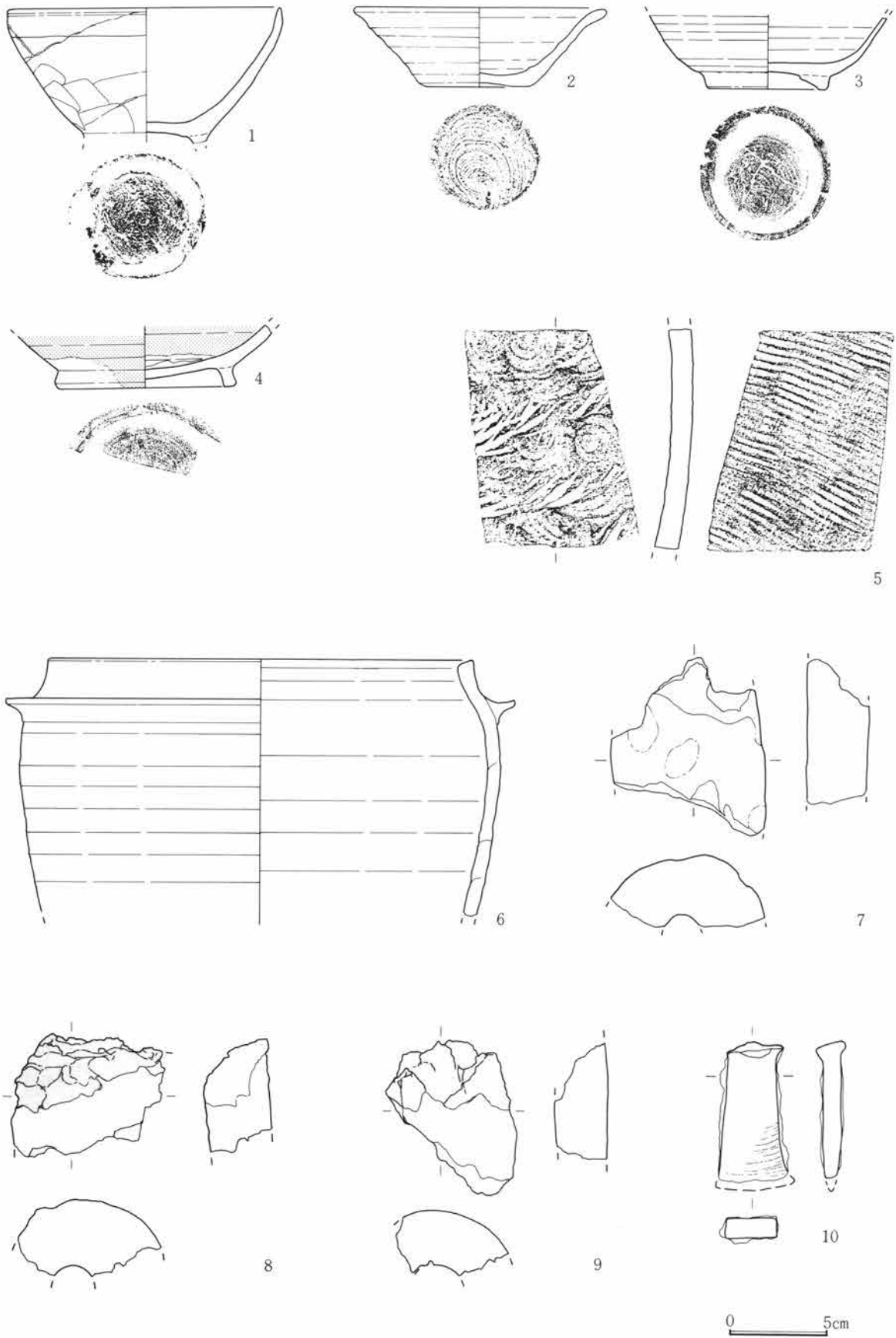
遺構名称	G区第51号住居跡	位置	25・26-G-52・53グリッド内	分類	—	時期	VIII
平面形態	隅丸方形? 規模	—m×—m	主軸方位	— 一度—	残存深度	約	5cm程

遺構名称	G区第62号住居跡	位置	24・25-G-51～53グリッド内	分類	C-10	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形 規模	2.90m×3.40m	主軸方位	東— 1 度—南	残存深度	約	3cm程
備考	北壁で第28・51号住居跡を切り、北東コーナー付近で第48号住居跡に切られている。壁溝は検出されず、掘り方も認められない。ピット7カ所、土坑2カ所が検出されている。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形		主軸方位	東— 1 度—北		
規模	全長 42cm 屋外長 40cm 屋内長 2cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 68cm 煙道幅 — cm						
備考	カマドはかるうじて平面形がわかる程度の掘り込みしか残存しておらず、焚口に灰面が広がっている以外、焼土等は未検出である。						



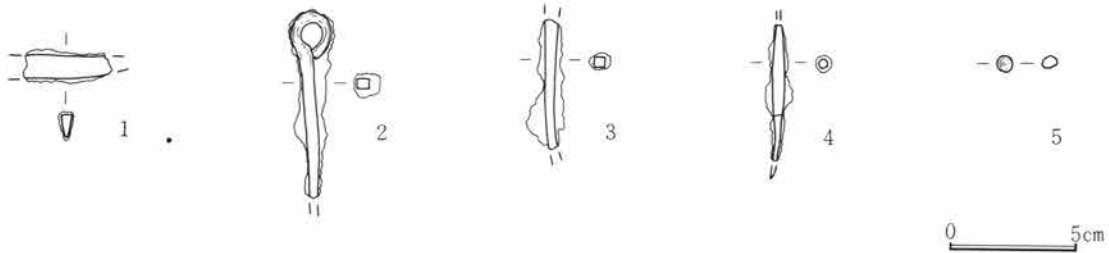
第62号住居跡は、VI層土中で検出したため、残存状態は不良であるが、床面で9個の大小のピットを検出した。そのうちP₈としたものはその位置から、貯蔵穴とみられる。その他特徴的なものとして、P₁・P₂がある。P₁は、検出中最大の土坑状の掘り込みで、楕円形を呈している。規模は、長軸約125cm、短軸約110cm、深度約65cmで、底面は平坦である。中には礫に混って鉄と思われるチップが多量に出土している。P₂はP₁に近接した円形ピットで、不整形を呈している。規模は径約60cmで、挿鉢状の断面形をしている。この内面は、周囲が赤褐色に焼土化し、底面中央部が青灰色に還元されている。また、P₁内及びP₈付近からは鞆の羽口が出土している他、鉄器の中に第208図10のような工具状のものがみられることなどから、小鍛冶的な遺構である可能性が高い。しかし、他の同時期の遺物出土する住居跡とほぼ同じような形態・規模を呈する他、東壁にはカマドが設置されていることなど、生活の痕跡も残していることは、住居としての機能も果たしていたことが考えられる。今回の報告の対象地区には、鞆の羽口を出土した住居跡は数軒あるが、同様の施設を有する遺構は例がないことから、いずれにしても特殊な存在である。

第3章 検出された遺構・遺物



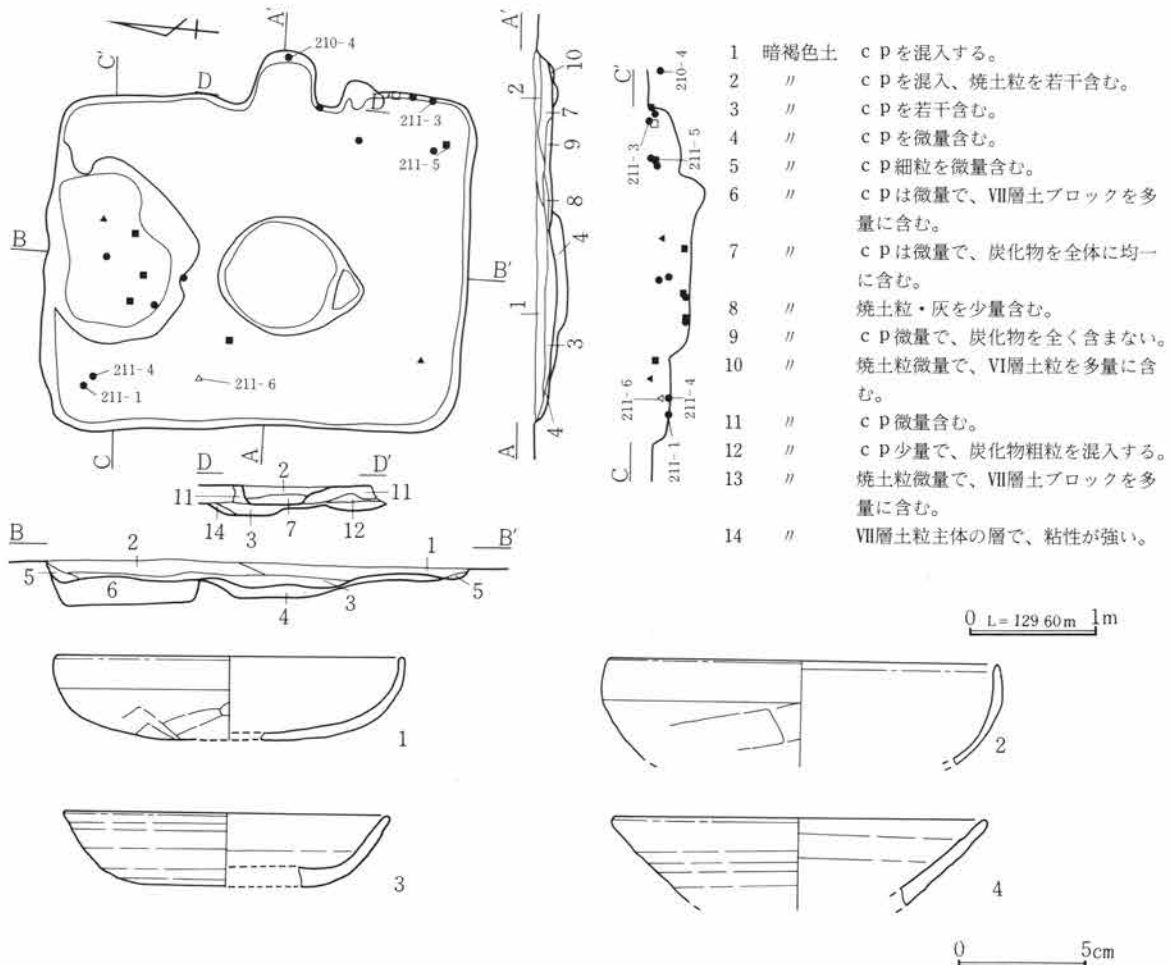
第208図 G区第62号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



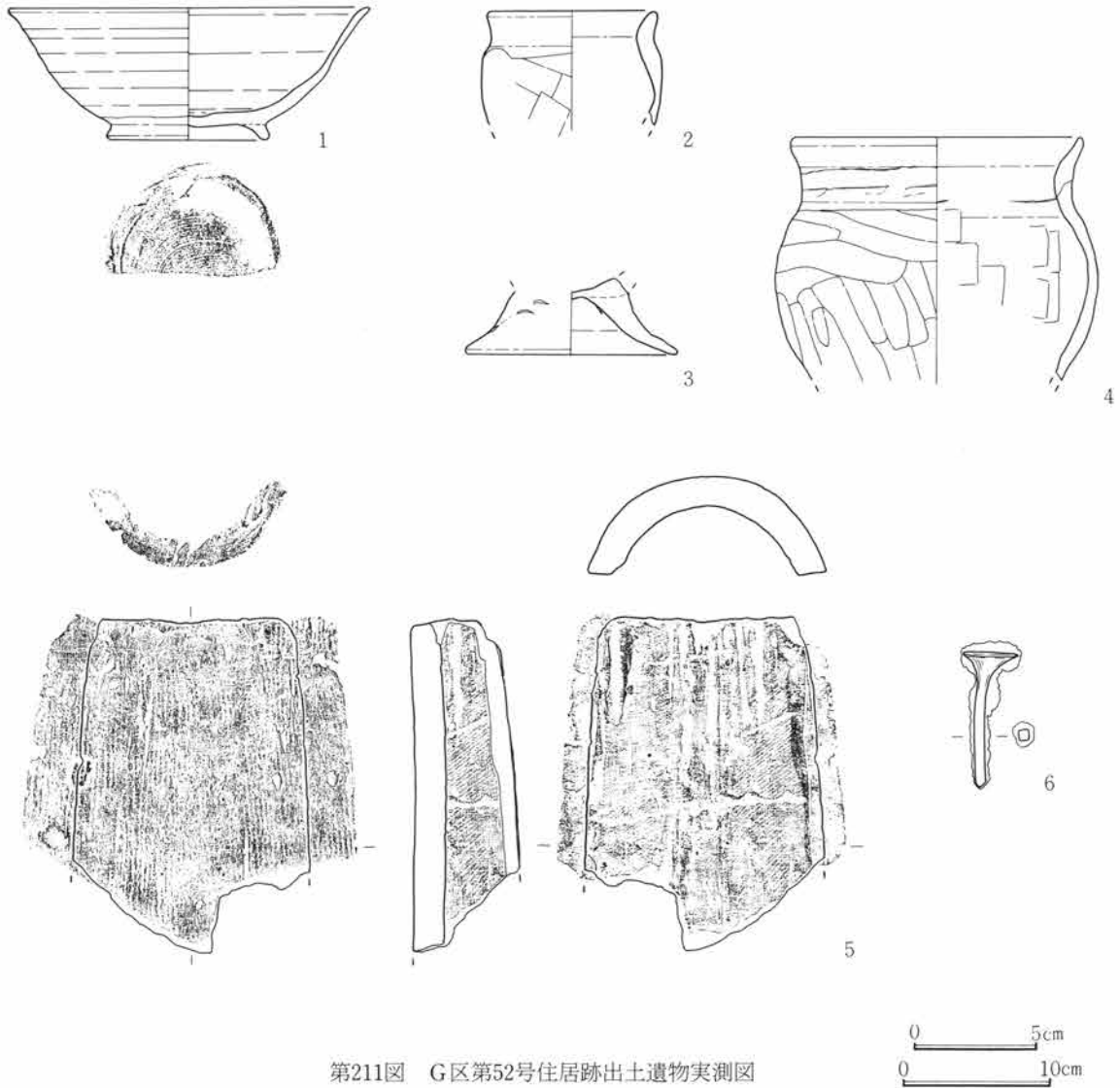
第209図 G区第62号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第52号住居跡		位置	6・7-G-54~56グリッド内		分類	C-2	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	2.60m×3.30m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約 8 cm程		
備考	壁は全周検出され、南東コーナーを含む東壁の一部が東側に突出している。壁溝・柱穴は掘り方段階でも検出されず、無たものと思われる。貯蔵穴も張り出し部を含め検出されていない。								
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央部・馬蹄形				主軸方位	東-4度-北		
規模	全長 50cm	屋外長 35cm	屋内長 15cm	袖間幅 115cm	燃烧部幅 53cm	煙道幅	1 cm		
備考	焚口は床面と同レベルで灰面等は全く検出されていない。袖は両袖共痕跡だけであるが、VI層土の掘り残しであった可能性が高い。燃烧部には灰・焼土共に検出されず、支脚の痕跡もない。								



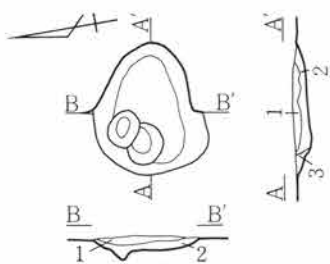
第210図 G区第52号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第211図 G区第52号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第55号住居跡	位置	15・16-G-59グリッド内	分類	—	時期	—
カマド	位置・形状	東壁部と思われる。馬蹄形		主軸方位	東—8度—南		
規模	全長 104cm	屋外長 52cm	屋内長 52cm	袖間幅 — cm	燃烧部幅 72cm	煙道幅 — cm	
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、灰面は検出されず、掘り方段階で2個の円形ピットを検出した。袖は残存せず、燃烧部は焚口から緩傾斜を有して立ち上っている。						



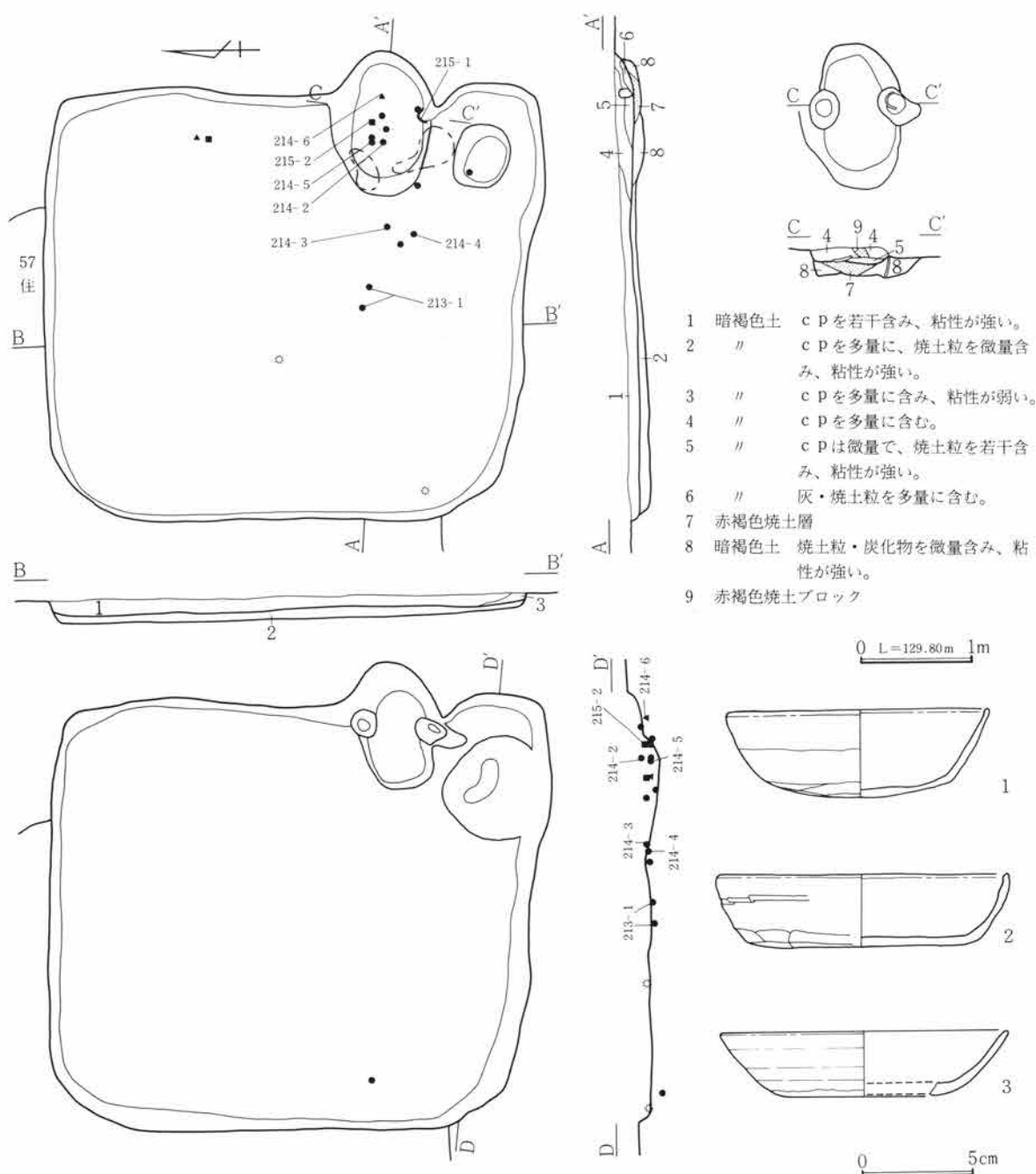
- 1 暗褐色土 c D細粒、炭化物を若干含み、粘性・しまり共に弱い。
- 2 // c D細粒を微量、炭化物を若干含む。
- 3 // c D細粒を微量含み、VI層土主体。

0 L= 129.50m 1m

第212図 G区第55号住居跡実測図

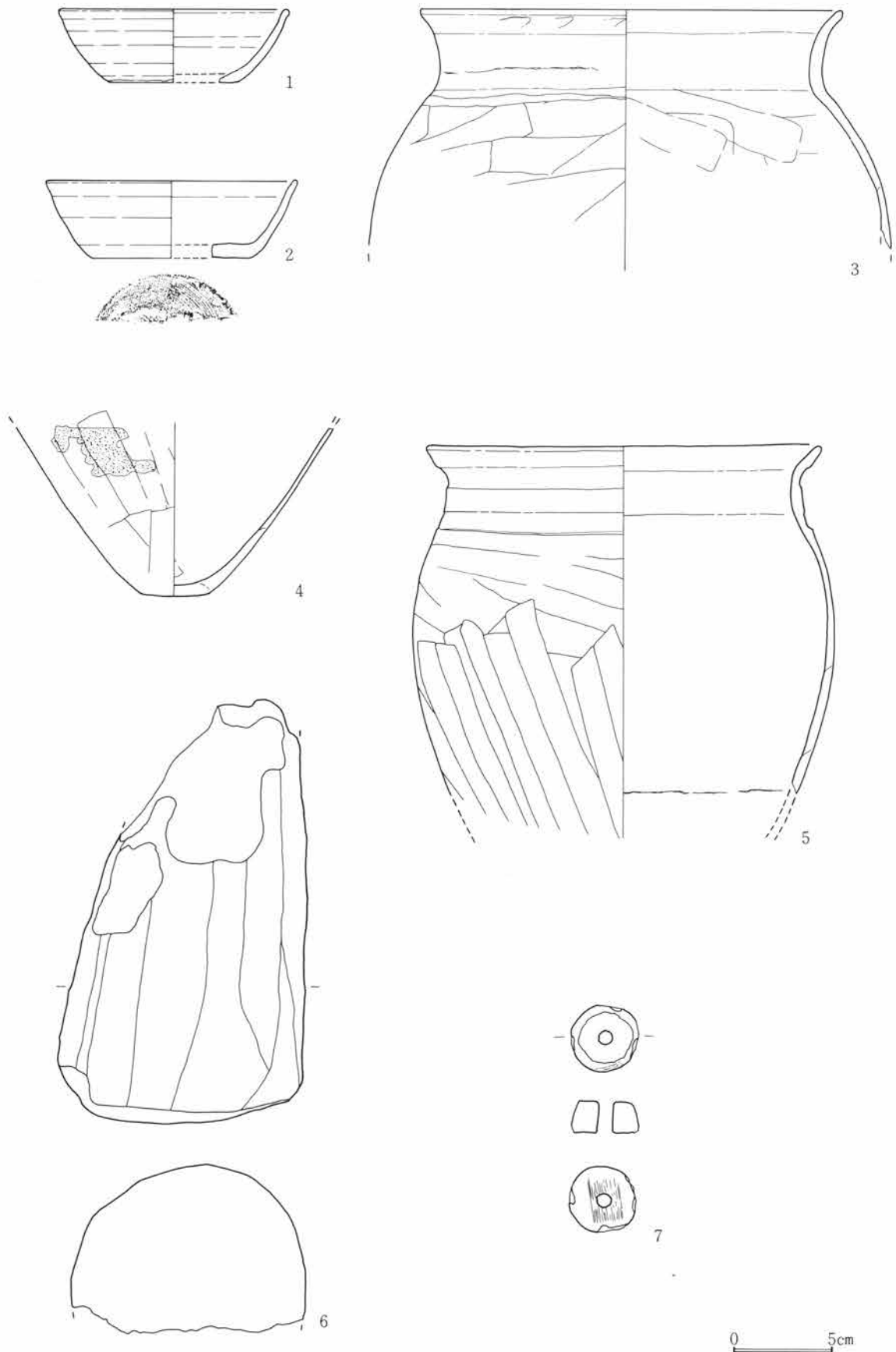
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第56号住居跡	位置	42～44-G-50～53グリッド内	分類	A-10	時期	VI
平面形態	隅丸方形	規模	3.80m×3.80m	主軸方位	東-0度-南	残存深度	約16cm程
備考	北壁の一部は東西農道にかかり、2次の調査で全体像を明らかにした。壁溝・柱穴は、掘り方段階でも検出されていない。貯蔵穴は、南東コーナー部で楕円形を呈する。長軸約55cm、深度約25cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-3度-南	
規模	全長127cm 屋外長47cm 屋内長80cm 袖間幅115cm 燃烧部幅73cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、左右に灰面を検出した。袖は右袖のみ顕著で、丸瓦を据えて構築している。燃烧部中央北寄りに截石の支脚を据えていた。また、中央部に2枚の焼土層を検出した。						



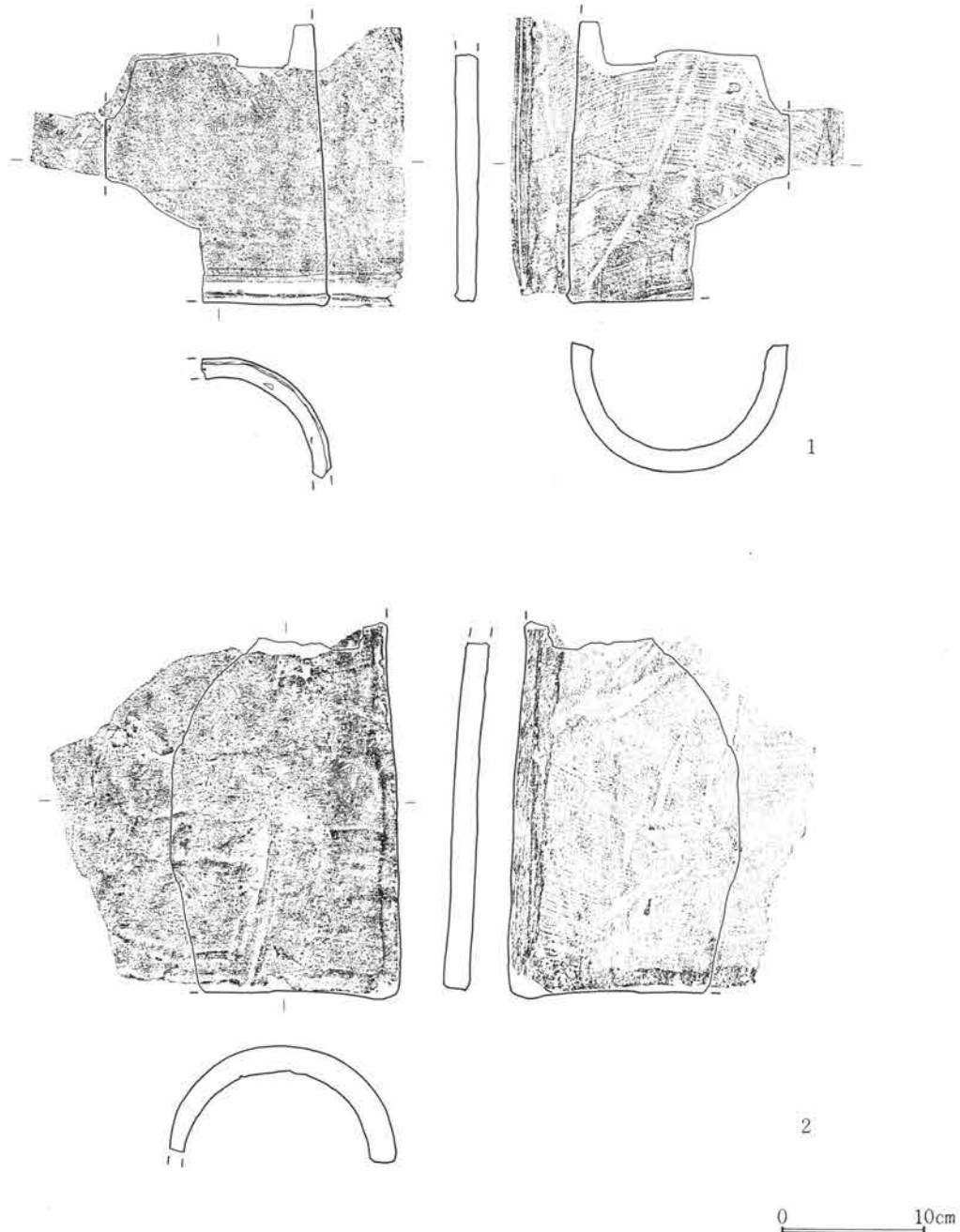
第213図 G区第56号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第214図 G区第56号住居跡出土遺物実測図

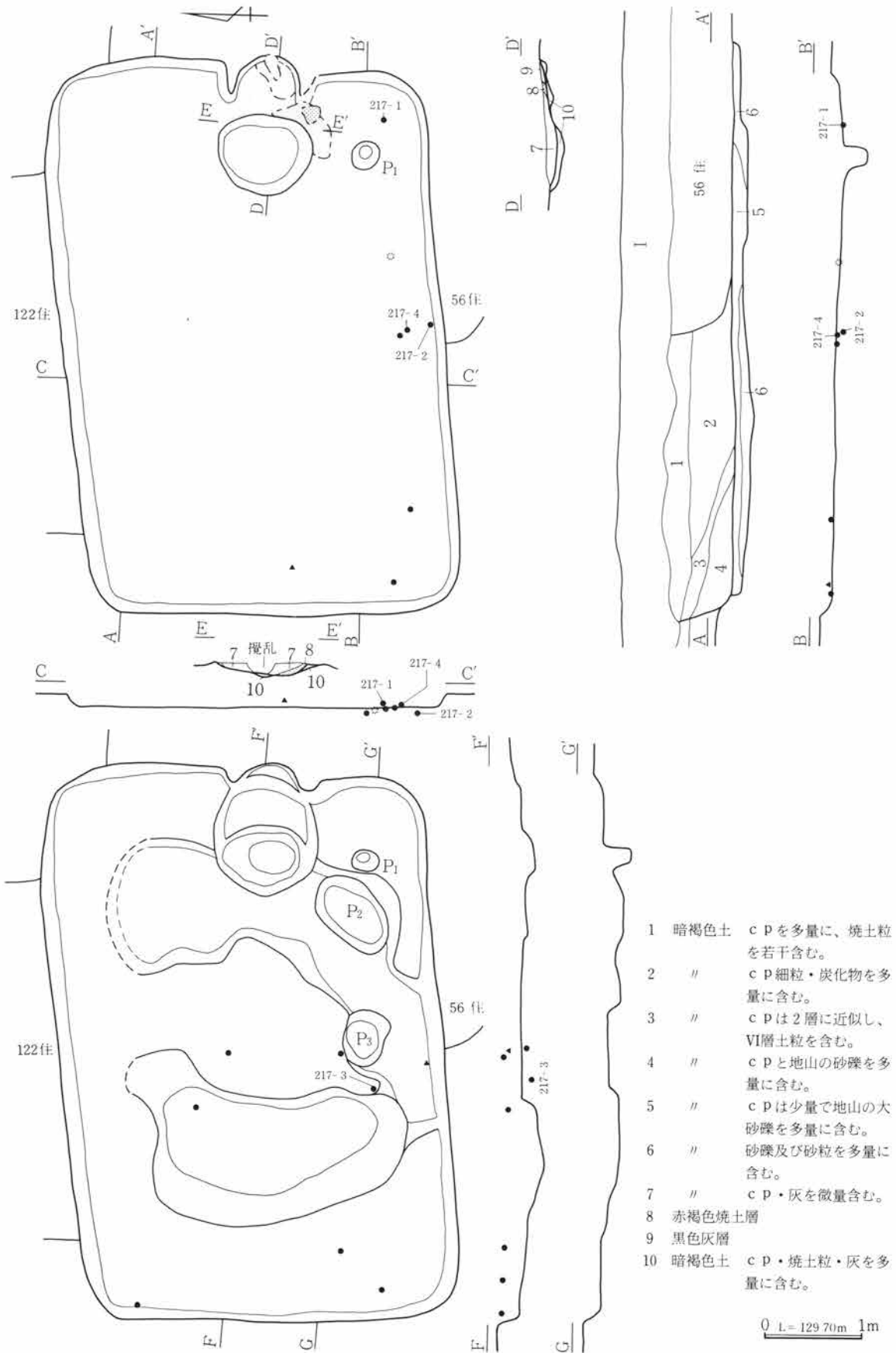
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第215図 G区第56号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第57号住居跡		位置	42～44-G-54～57グリッド内		分類	B-3	時期	V			
平面形態	隅丸長方形	規模	5.50m×3.90m		主軸方位	東-1度-南	残存深度	約15cm程				
備考	北壁が東西農道下にかかり、2次の調査で全体像を明らかにした。北で第122号住居跡、東で第56号住居跡と重複し、第56号住居跡に先行すると思われる。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出。											
カマド	位置・形状	東壁やや南寄り・馬蹄形				主軸方位	東-2度-南					
規模	全長	50cm	屋外長	—cm	屋内長	50cm	袖間幅	103cm	燃烧部幅	62cm	煙道幅	—cm
備考	焚口は掘り方段階では広範に掘り込まれている。灰面は燃烧部奥と焚口南側に検出した。袖は両袖共暗褐色土で構築。燃烧部は屋内部で屋外部に張り出さず、奥の灰面上に焼土面をわずかに検出した。											

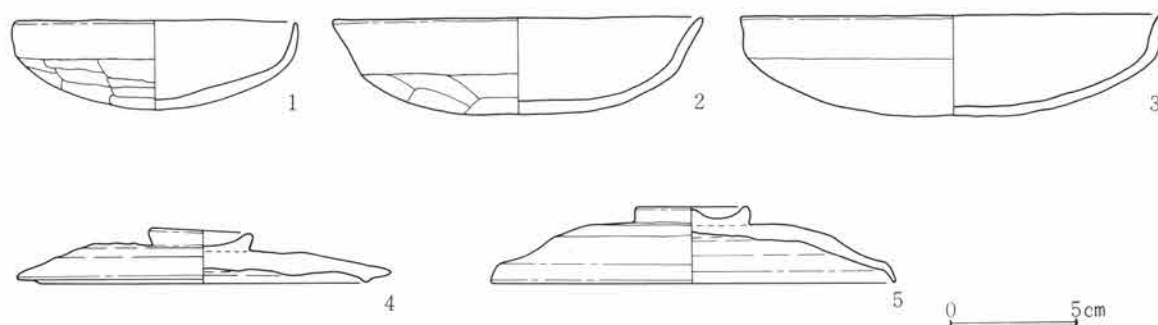
第3章 検出された遺構・遺物



- 1 暗褐色土 c Pを多量に、焼土粒を若干含む。
- 2 " c P細粒・炭化物を多量に含む。
- 3 " c Pは2層に近似し、VI層土粒を含む。
- 4 " c Pと地山の砂礫を多量に含む。
- 5 " c Pは少量で地山の大砂礫を多量に含む。
- 6 " 砂礫及び砂粒を多量に含む。
- 7 " c P・灰を微量含む。
- 8 赤褐色焼土層
- 9 黒色灰層
- 10 暗褐色土 c P・焼土粒・灰を多量に含む。

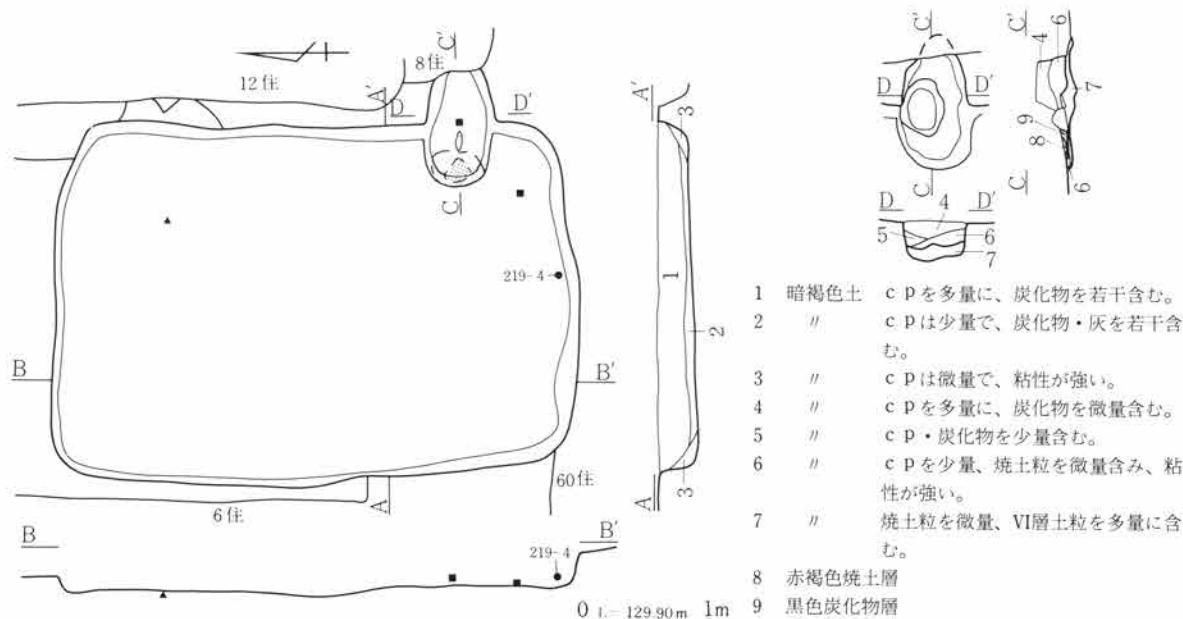
第216図 G区第57号住居跡実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第217図 G区第57号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第58号住居跡		位置	47～49-G-56～58グリッド内		分類	C-11	時期	VII
平面形態	隅丸長方形	規模	2.80m×4.10m	主軸方位	東-1度-南	残存深度	約 28cm程		
備考	壁は全周検出したが、北側を第6号住居跡に切られている。壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴もどこにも検出されなかった。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・舌状				主軸方位	東-0度-南		
規模	全長(85)cm 屋外長(35)cm 屋内長 50cm 袖間幅 一 cm 燃烧部幅 50cm 煙道幅 一 cm								
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、灰面と焼土面が重なって検出された。また、支脚もこの灰面に接する位置から検出されており、他の住居例と違って、燃烧部主体がかなり屋内側にあったことがわかる。								



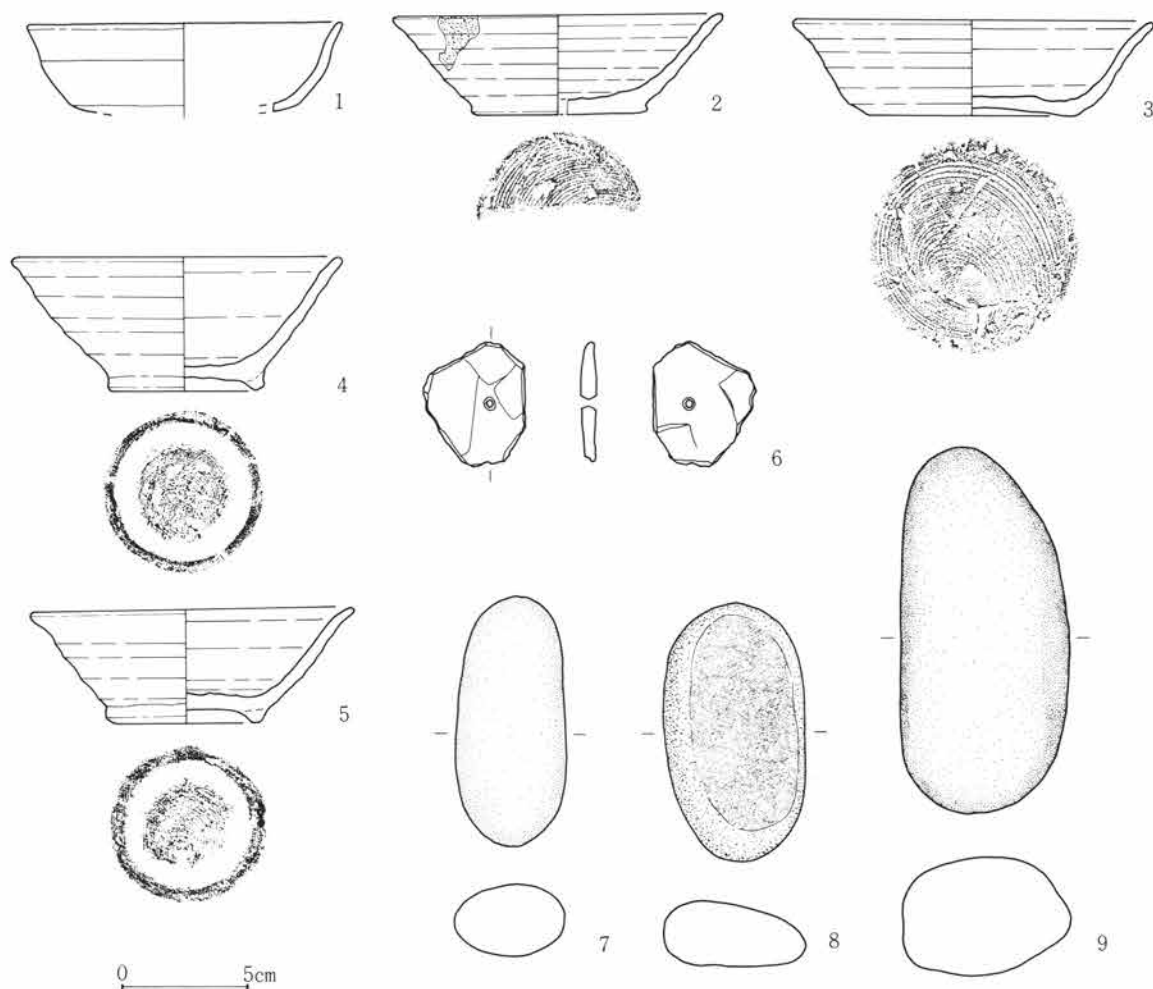
第218図 G区第58号住居跡実測図

当住居跡の覆土は、3層に大別される。このうち3層としたものは、壁または壁上からの崩落土と考えられるものであり、C P含有量、粘性共に1・2層とは明確に区別される土である。1・2層の間の違いは、あまり顕著でなく、1・2層は連続的に堆積した感が強い。

掘り方は、屋内部には全くみられず、カマドだけ検出されている。焚口部の掘り込みは、床面での確認と形態・規模共にほぼ同じであるが、左袖の位置に楕円形のピットが検出された。しかし、構築材等は痕跡もみられず、袖構築材等の据え方とは別の用途であったものであろう。

遺物は、床面上で検出されたものはごくわずかで、南壁際から第219図4が口縁を上向きで出土している。

第3章 検出された遺構・遺物



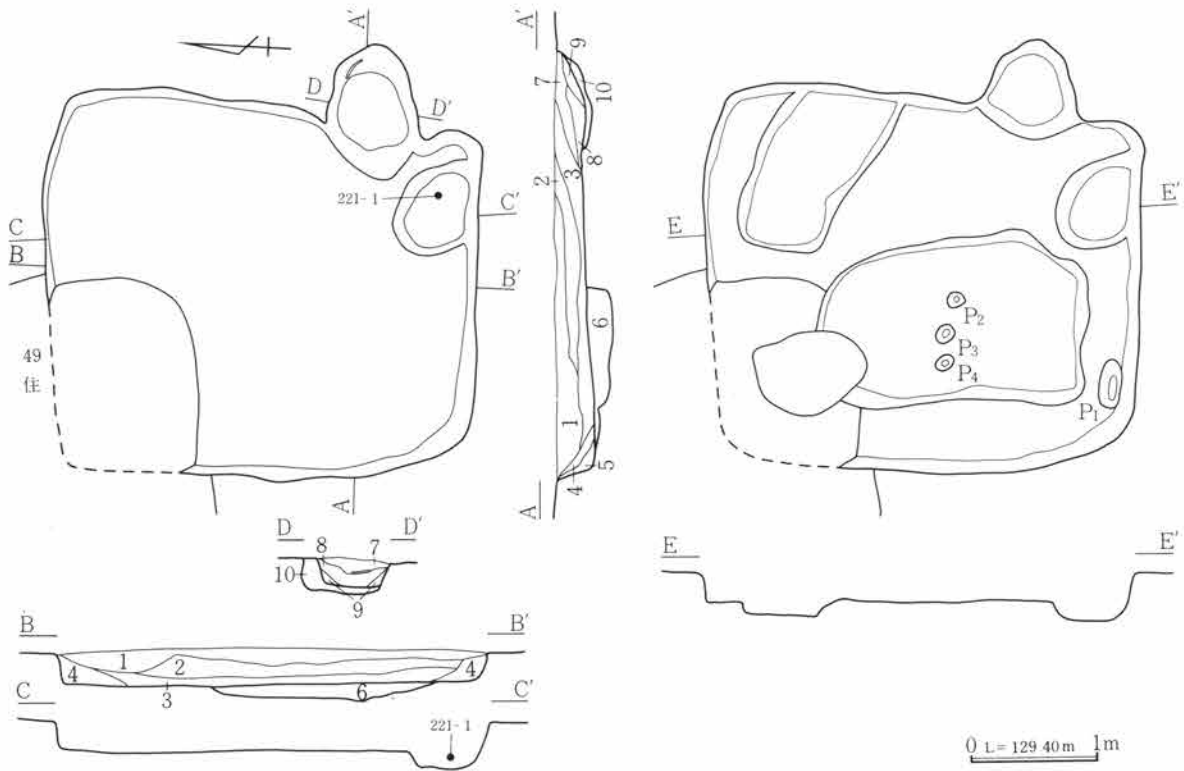
第219図 G区第58号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第59号住居跡		位置	15～17-G-52・53グリッド内		分類	C-10	時期	IV
平面形態	隅丸方形	規模	3.00m×3.40m	主軸方位	東-4度-南	残存深度	約22cm程		
備考	北西コーナー部は第49号住居跡と重複している。床面はVI層中で平坦であり壁溝・柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、径約70cm、深度約12cmである。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形				主軸方位	東-0度-南		
規模	全長 75cm	屋外長 60cm	屋内長 15cm	袖間幅 115cm	燃烧部幅 70cm	煙道幅	— cm		
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、灰面等は全く検出されていない。袖は右袖がわずかに張り出したように残っているが、明確でない。燃烧部は平坦で、焼土等は検出されていない。								

当住居跡の覆土は、5層に大別され、4・5層が壁及び壁上からの崩落による第1次埋没土である。その後の堆積は、東側からのものが顕著で、全体的に東から西への傾斜を有している。

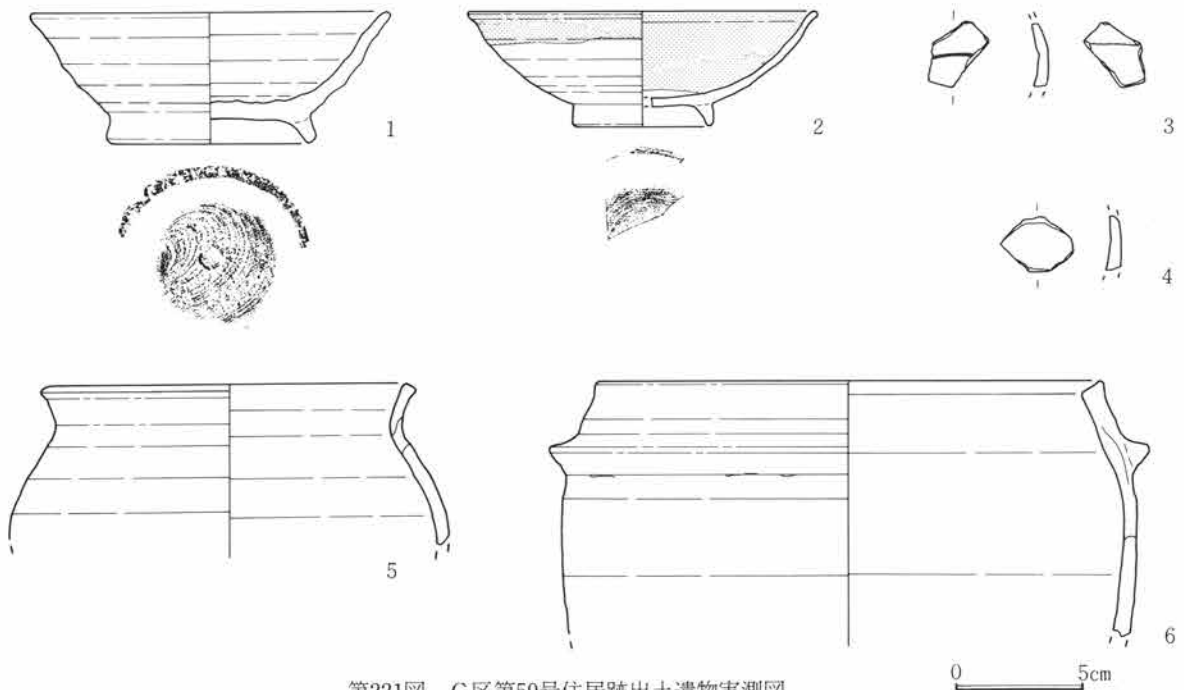
掘り方は、全体に掘り下げられたものではなく、2カ所隅丸方形の掘り込みとして検出された。1方は北東コーナー近くで、東壁に接し北壁に平行して屋内部に向かって掘り込まれたもので、長軸約135cm、短軸約85cm、深度約10cm程で、底面は平坦である。他方は、カマド正面、住居中央部に掘り込まれたもので、長軸約220cm、短軸約118cm、深度約18cmである。底面は平坦で、中央部に東西に並んで3個の円形小ピットが検出された。遺物は大半がカマド調査中出土したもので、掘り方内出土はなかった。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



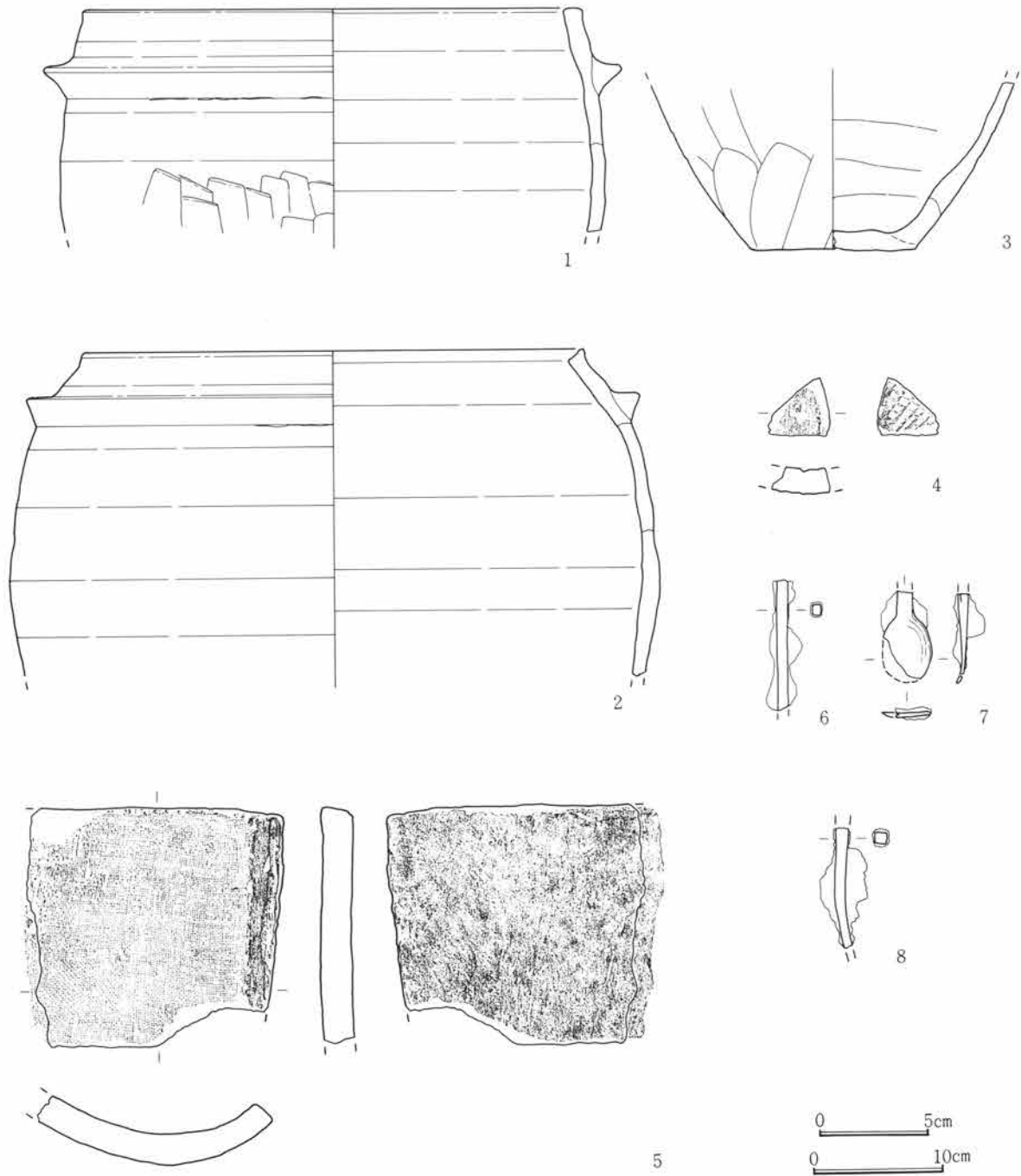
- | | | |
|-------------------|-------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土。c Pを多量に含む。 | 6 // | c Pを若干、VII層土ブロックを若干含む。 |
| 2 // | 7 // | c P細粒・焼土粒を若干含む。 |
| 3 // | 8 // | c P微粒を微量、炭化物を若干、焼土ブロックを斑状に混入。 |
| 4 // | 9 // | c Pを少量、VI層土粒・焼土粒を微量含む粘性が強い。 |
| 5 // | 10 // | c P細粒をごく微量含む、粘性が強い。 |

第220図 G区第59号住居跡実測図



第221図 G区第59号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

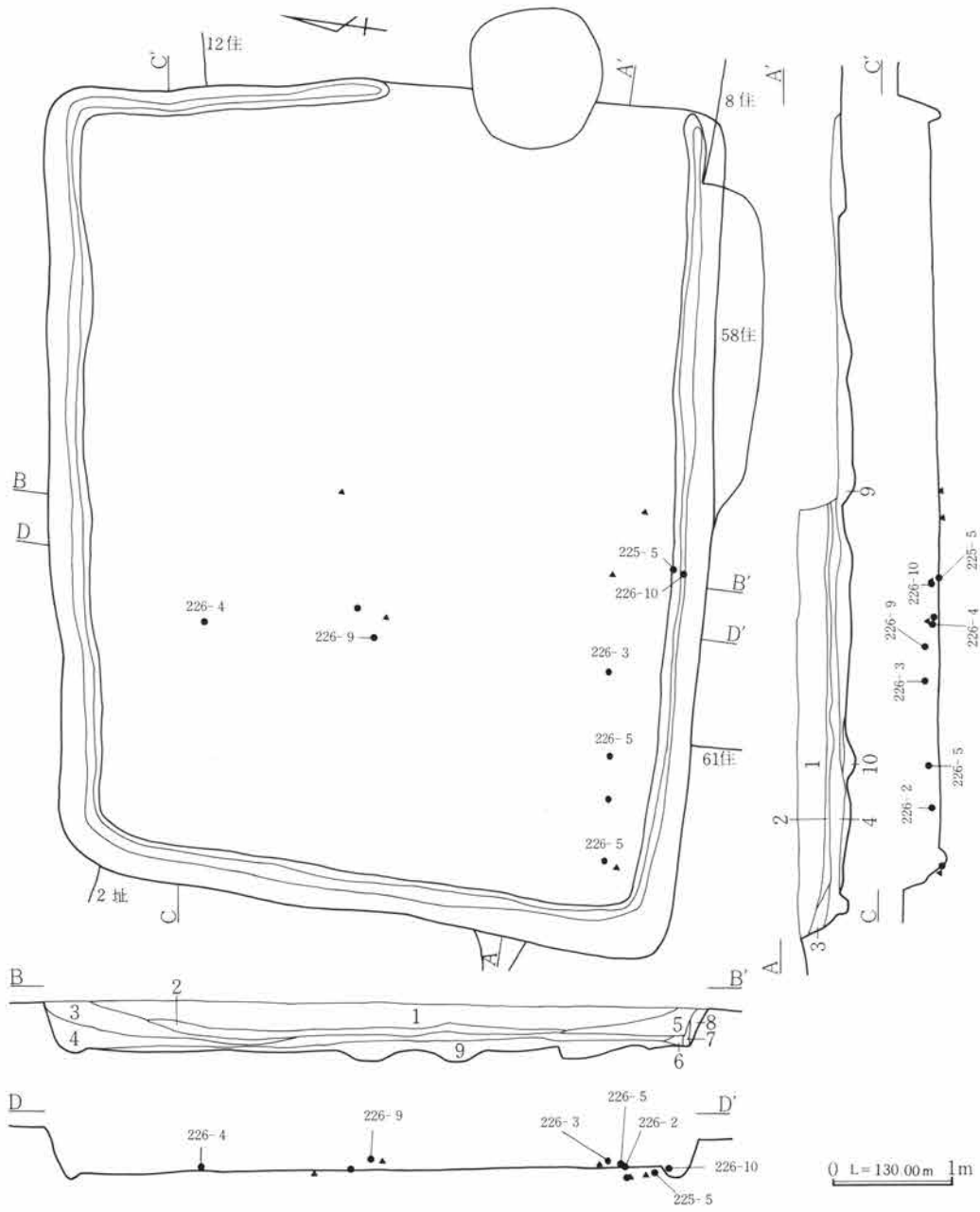


第222図 G区第59号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第60号住居跡	位置	47~49-G-0・1-H-56~59	分類	B-5	時期	V
平面形態	隅丸長方形	規模	6.90m×5.40m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約30cm程
備考	東側で多くの住居跡と重複し、残存状態は悪い。壁溝は東壁の一部を除きほぼ検出され、幅は約30~35cm、深度は約8cm程度である。カマドは東壁と考えられるが、重複のため未検出。						

当住居跡は東側で第8・12号住居跡及び南側で第58・61号住居跡、西側で第2号址と重複している。これらの遺構との新旧関係は、第2号址が中世遺構で明らかに新しい他、4軒の住居跡についても、遺構検出段階では、当住居跡のプランはほとんどわからなかったことから、5軒中当住居跡が最も古い時期のものともみこ

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



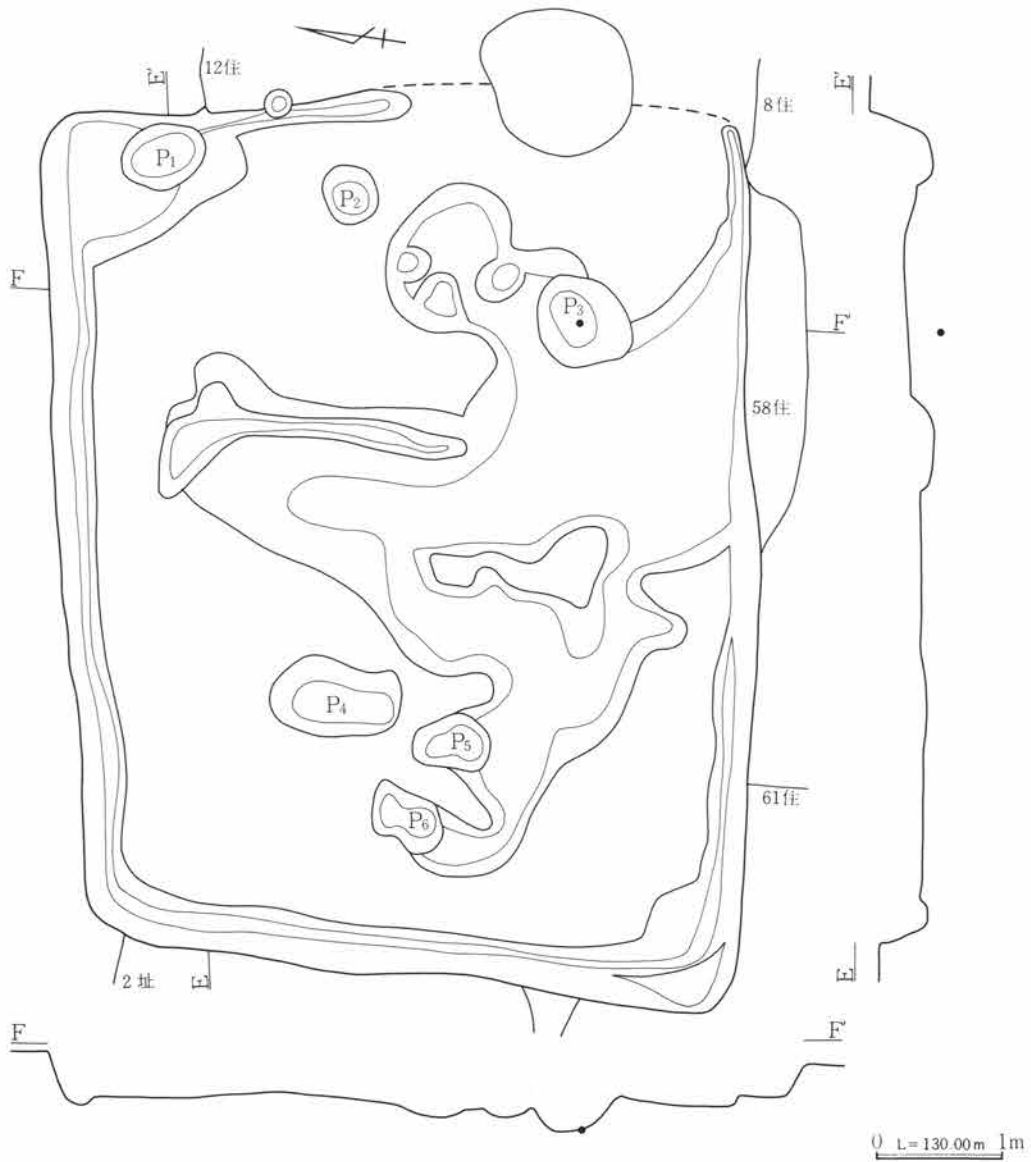
- | | | | |
|--------|---------------------------------|--------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 | c P・炭化物を多量に、焼土粒を微量含み
しまりが弱い。 | 6 暗褐色土 | VII層土ブロックを多量に含む。 |
| 2 // | c P・炭化物共に1層よりやや少量。 | 7 // | 鉄分を多量に含有すると思われる赤褐色土
を多量に含む。 |
| 3 // | c Pを混入。 | 8 // | 5層に近似。 |
| 4 // | c Pを少量、VII層土粒・ブロックを多量に
含む。 | 9 // | c Pを少量、焼土粒・炭化物を多量に含み
粘性が強い。 |
| 5 // | c Pを多量に、炭化物・焼土粒を若干含む。 | 10 // | 砂質土を多量に含む。(VII層土か?) |

第223図 G区第60号住居跡実測図

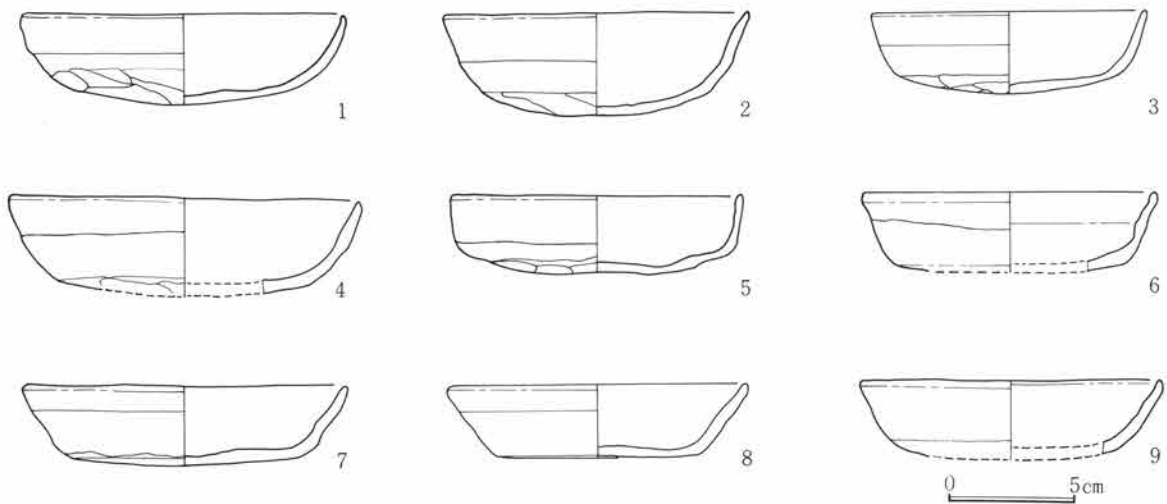
とができる。このことは、出土遺物の比較からも言えることで、土師器の坏の出土比率が高い。

掘り方は、中央部分が不整形に掘り込まれている他、6個の円形及び不整形ピットを検出した。しかしこれらのピット配置に規則性はみられず、柱穴とする積極的根拠に欠ける。

遺物は大半が覆土中の出土である。わずかに床面近くで出土したものも第226図10の須恵器の蓋を除いて床面との間に若干間層を狭んでいる。また、南壁に平行するように遺物が点々と出土するのが特徴的である。

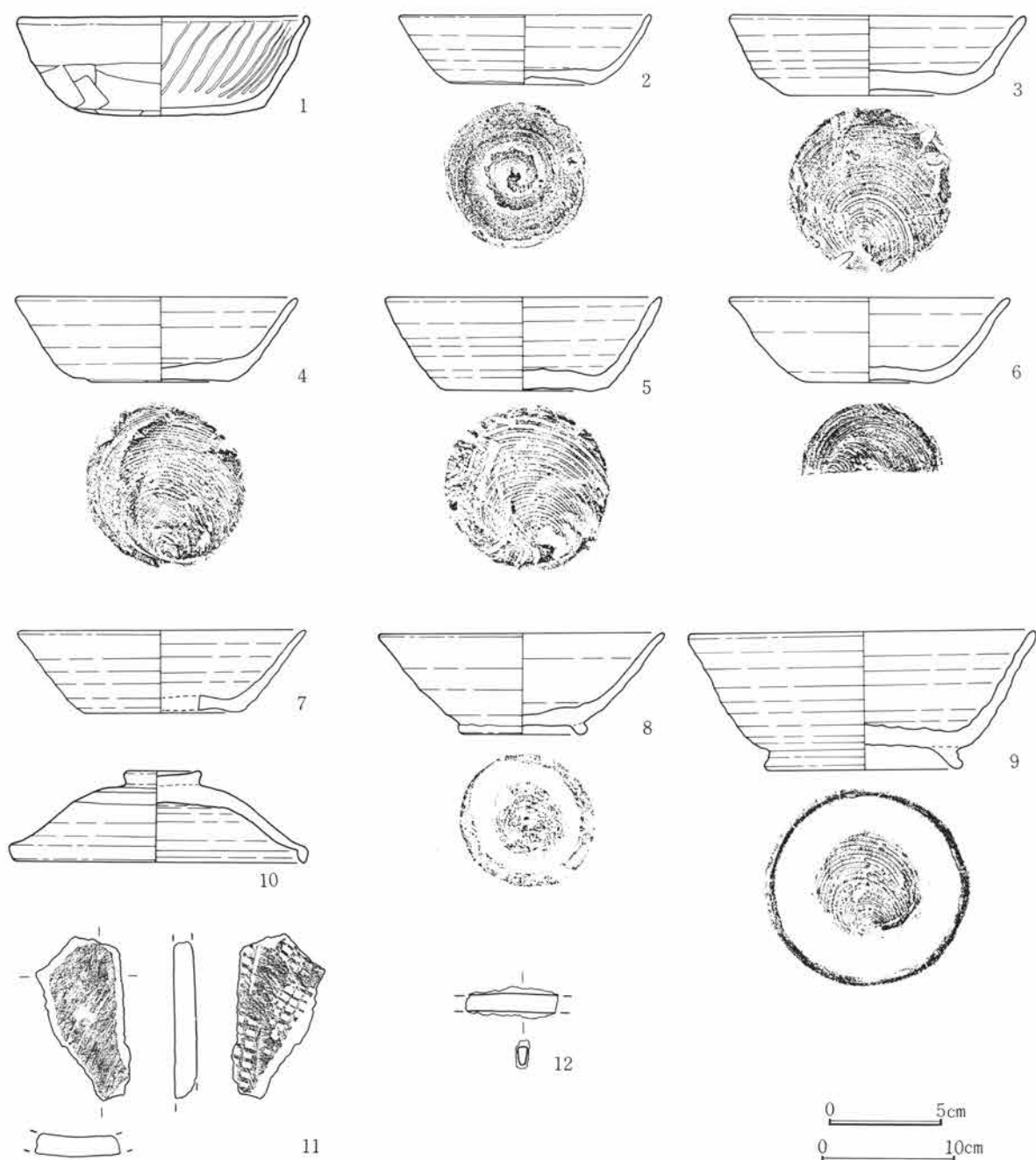


第224図 G区第60号住居跡実測図



第225図 G区第60号住居跡出土遺物実測図

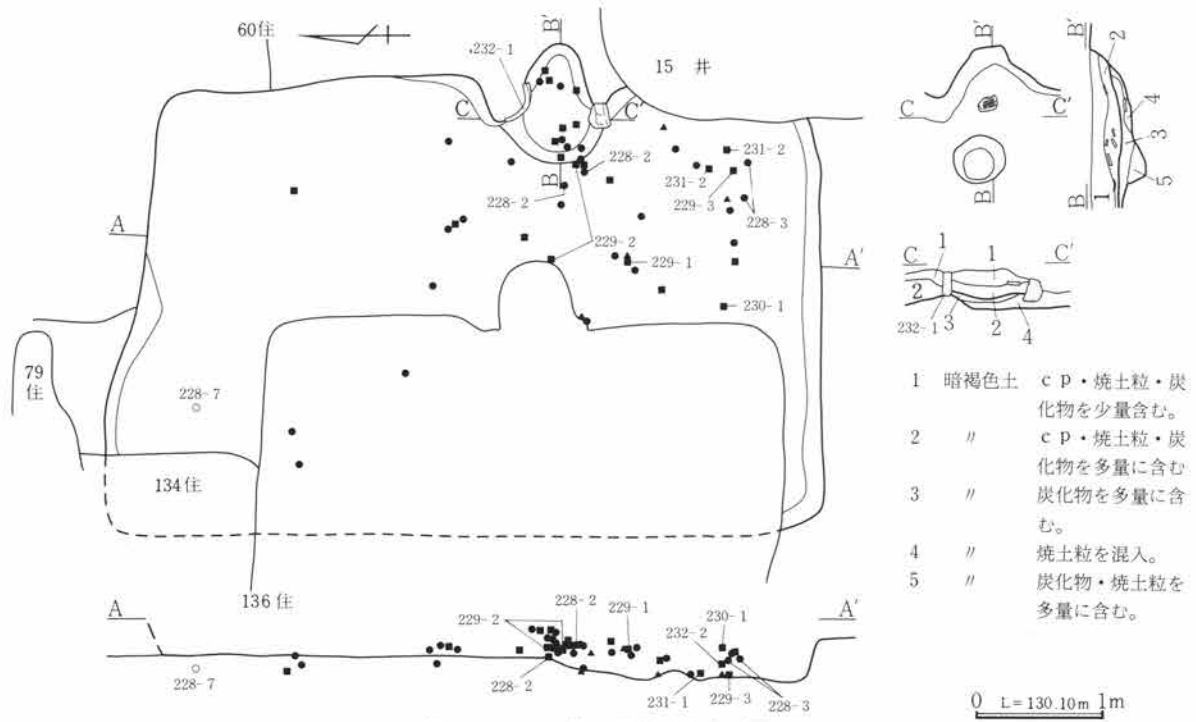
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



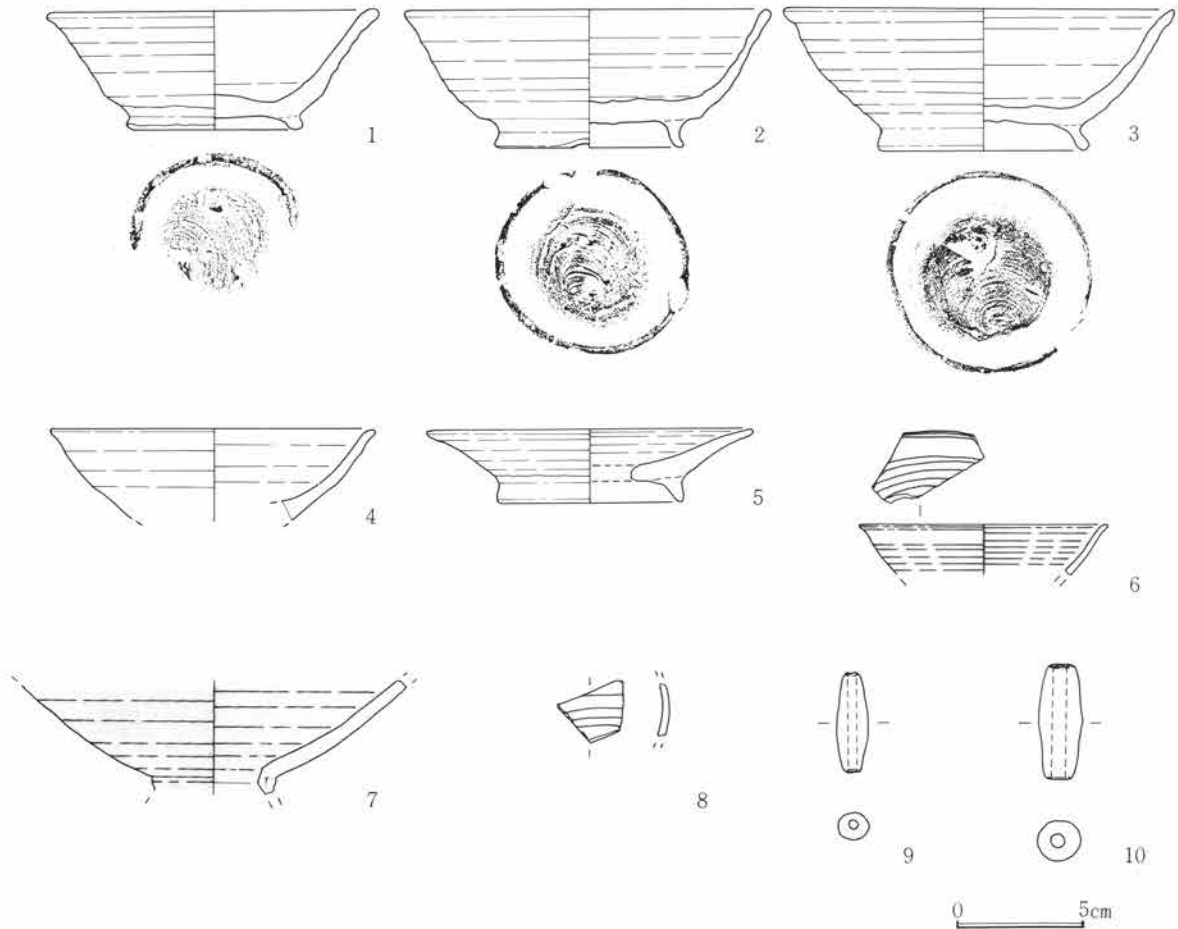
第226図 G区第60号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第61号住居跡		位置	45～48-G-58～60グリッド内		分類	C-4	時期	Ⅶ?
平面形態	隅丸長方形	規模	3.60m×5.50m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約 23cm程		
備考	第60・134・136号住居跡及び第15号井戸と重複しているため、カマドとカマド正面の床面及び南壁を検出した。遺物はカマド内及び正面の床面上より多量に出土した。								
カマド	位置・形状	東壁わずかに南寄り・三角形状				主軸方位	東-0度-北		
規模	全長 90cm 屋外長 25cm 屋内長 65cm 袖間幅 105cm 燃烧部幅 50cm 煙道幅 ー cm								
備考	焚口は半円形の掘り込みで灰面は未検出。袖は両袖残存し、右袖は礫を、左袖は瓦を据え暗褐色土で構築している。燃烧部に焼土等は検出されず、掘り方段階で円形ピットを1個検出した。								

第3章 検出された遺構・遺物

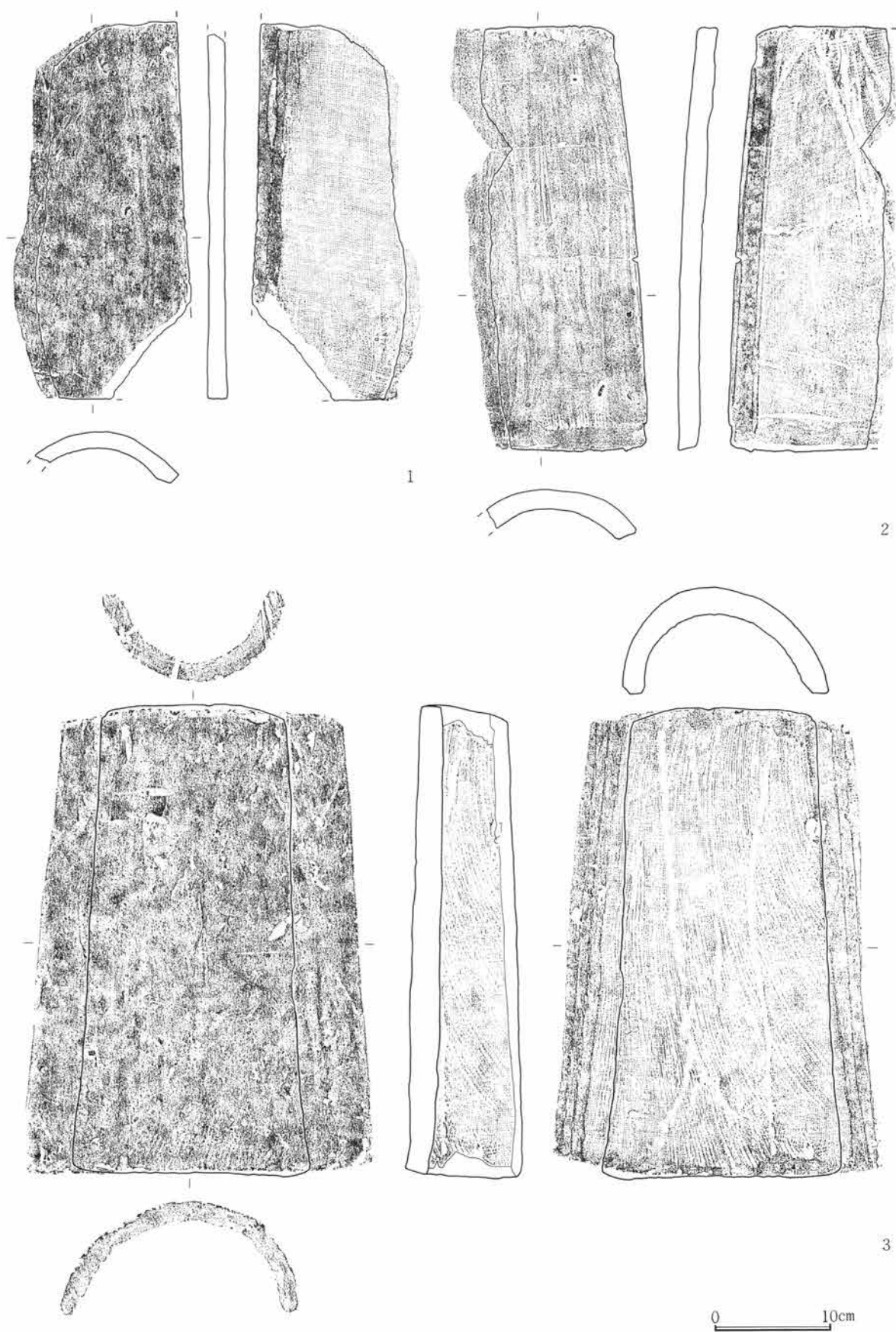


第227図 G区第61号住居跡実測図

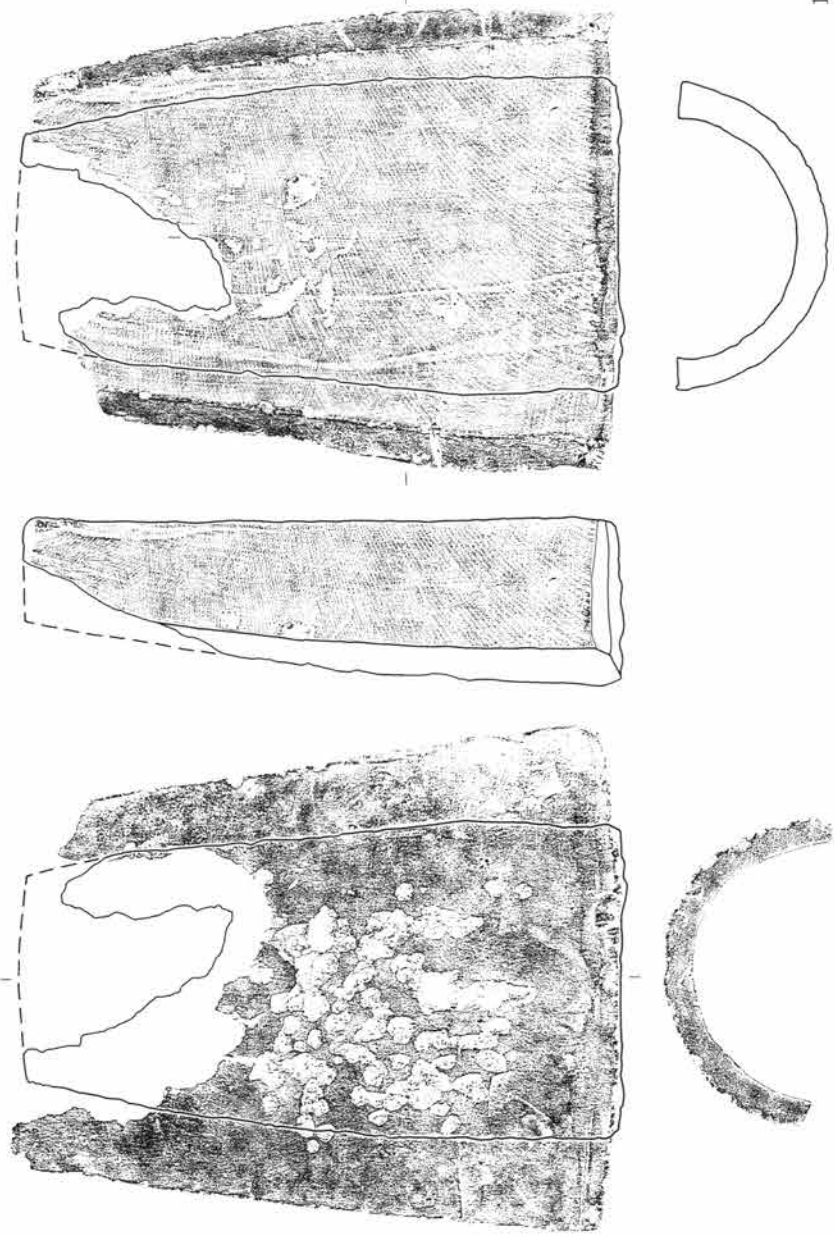


第228図 G区第61号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



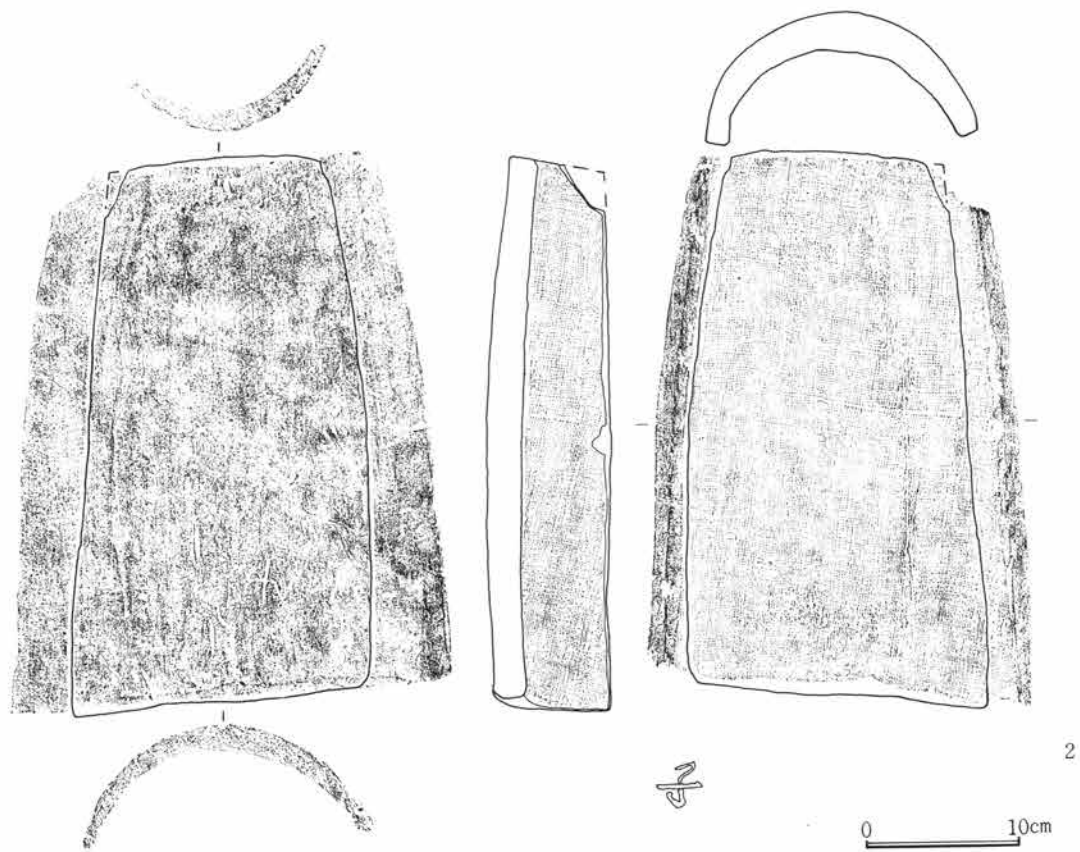
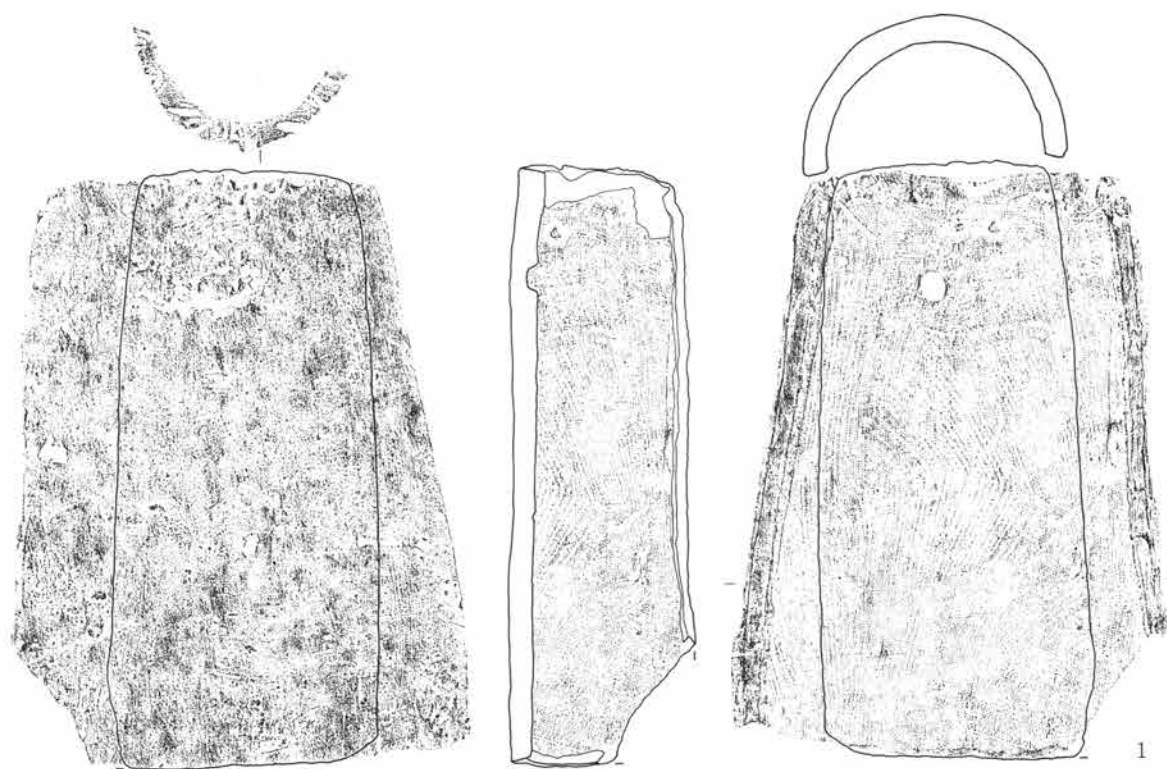
第229図 G区第61号住居跡出土遺物実測図



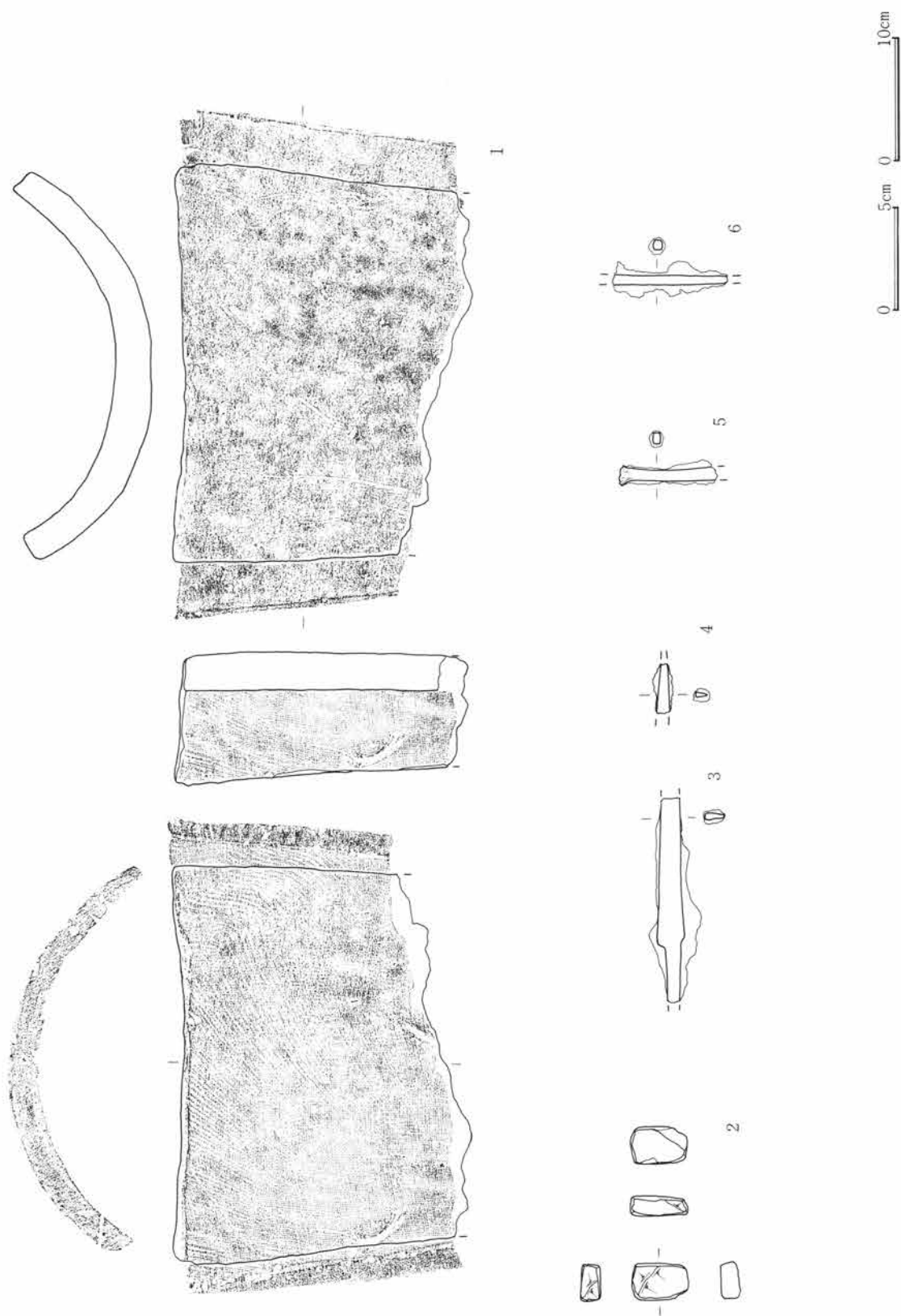
0 10cm

第230図 G区第61号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



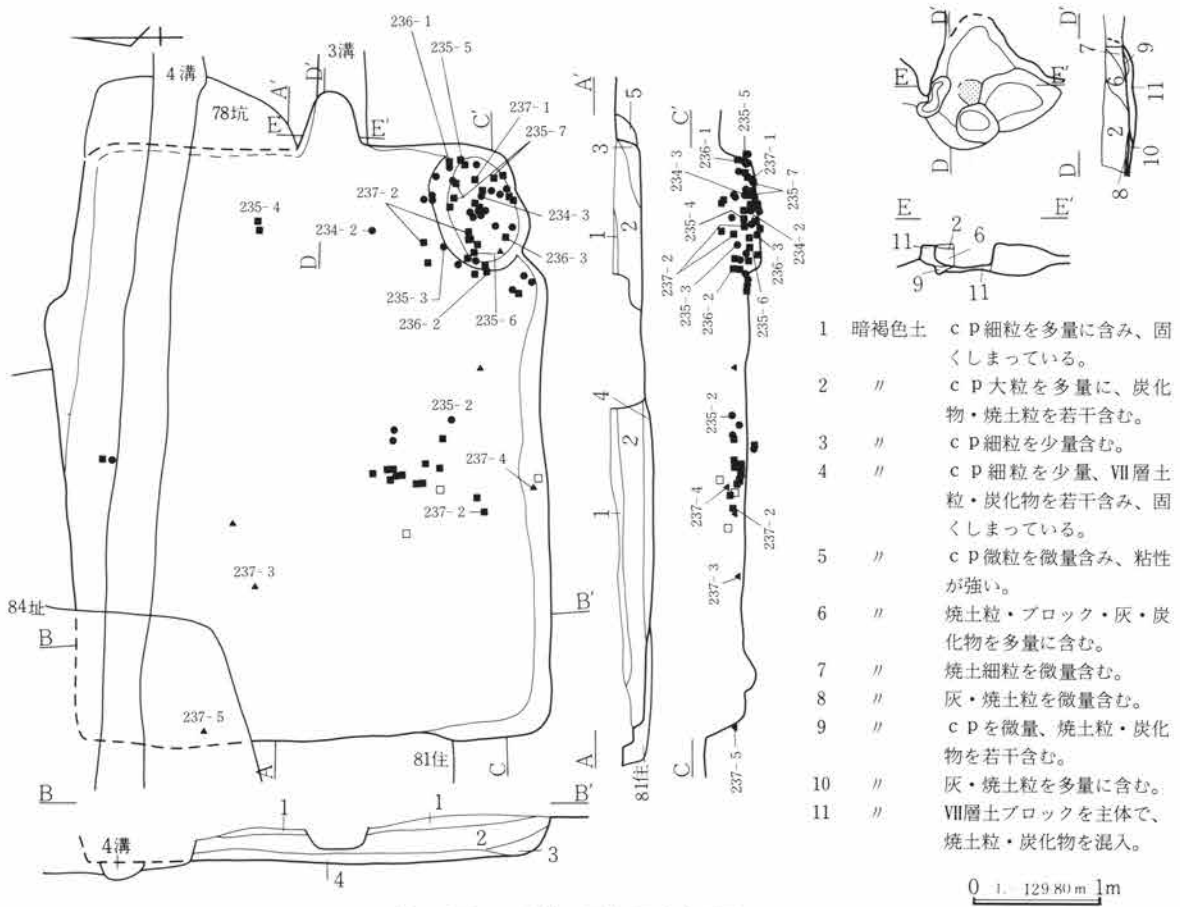
第231図 G区第61号住居跡出土遺物実測図



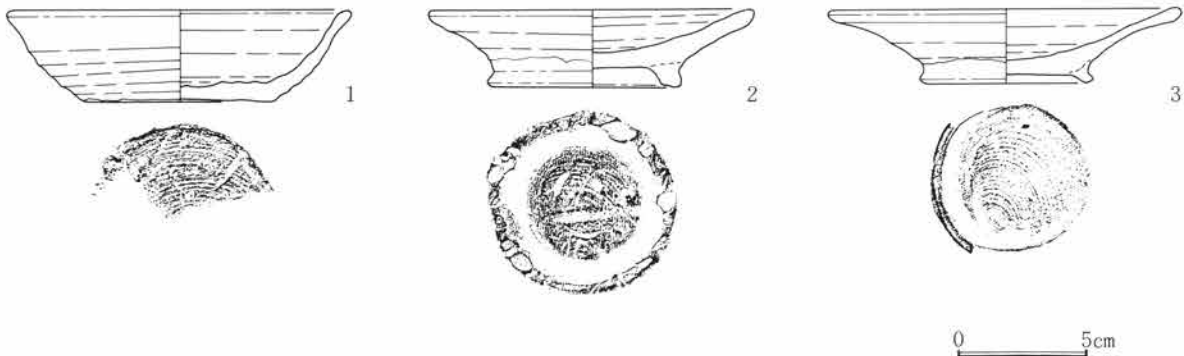
第232図 G区第61号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

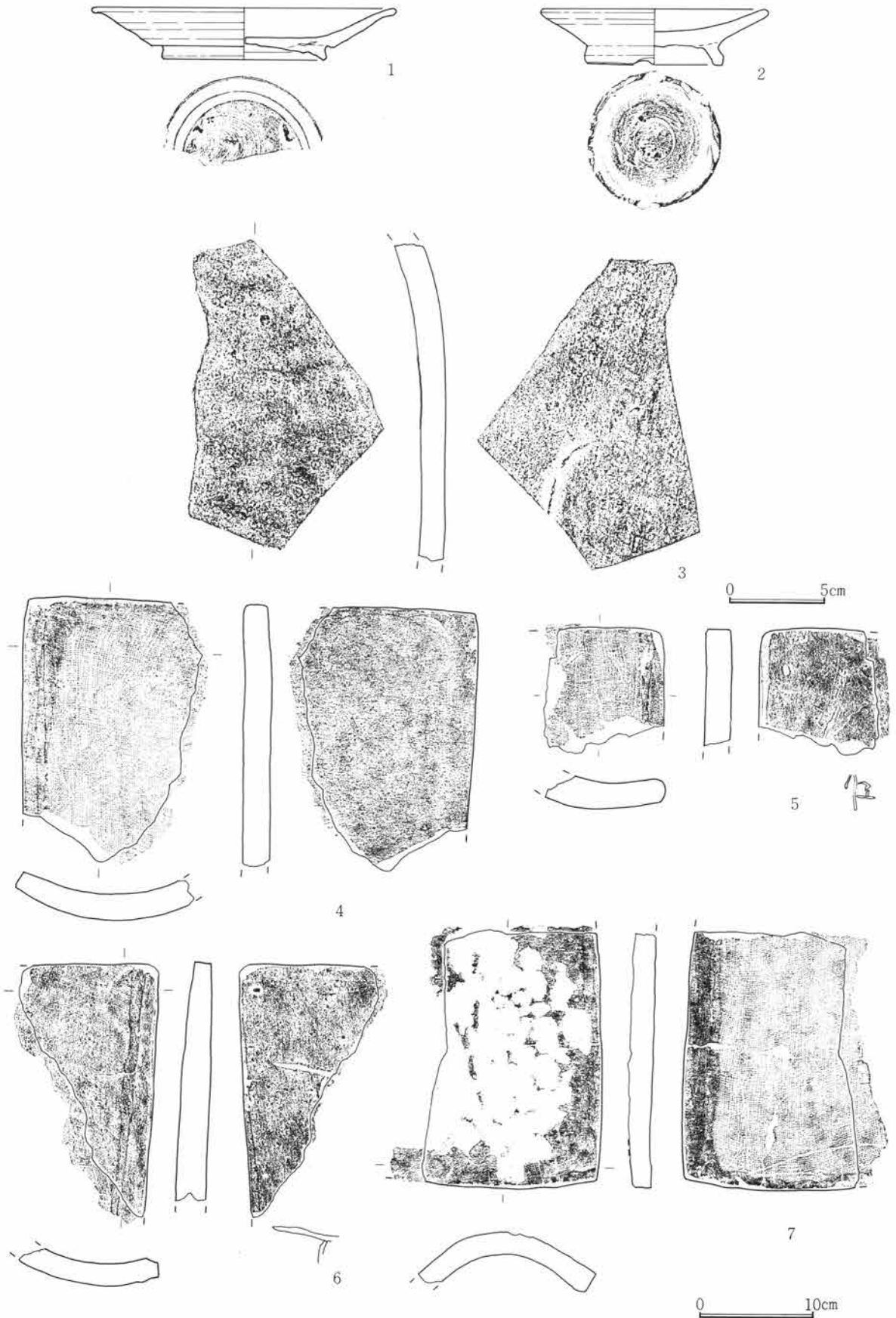
遺構名称	G区第64号住居跡		位置	40～42-G-57～59グリッド内		分類	B-2	時期	Ⅶ?
平面形態	隅丸長方形	規模	4.70m×3.70m	主軸方位	東-0度-南	残存深度	約20cm程		
備考	北側で第81号住居跡, 第84号址, 第3・4号溝と重複し, 南壁のみ明確に検出した。特に南東コーナー部に位置する貯蔵穴は, 残存状態が良好で楕円形を呈し, 長軸約95cm, 深度約16cmである。								
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央・三角形				主軸方位	東-0度-北		
規模	全長 50cm	屋外長 40cm	屋内長 10cm	袖間幅 1cm	燃烧部幅 45cm	煙道幅 1cm			
備考	カマドは第3号溝によって削平され北側壁を除き, 掘り方しか残存していない。掘り方は焚口部に円形小ピットを検出した他, 左袖部には袖構築材の据え方と思われる不整楕円形ピットを検出した。								



第233図 G区第64号住居跡実測図

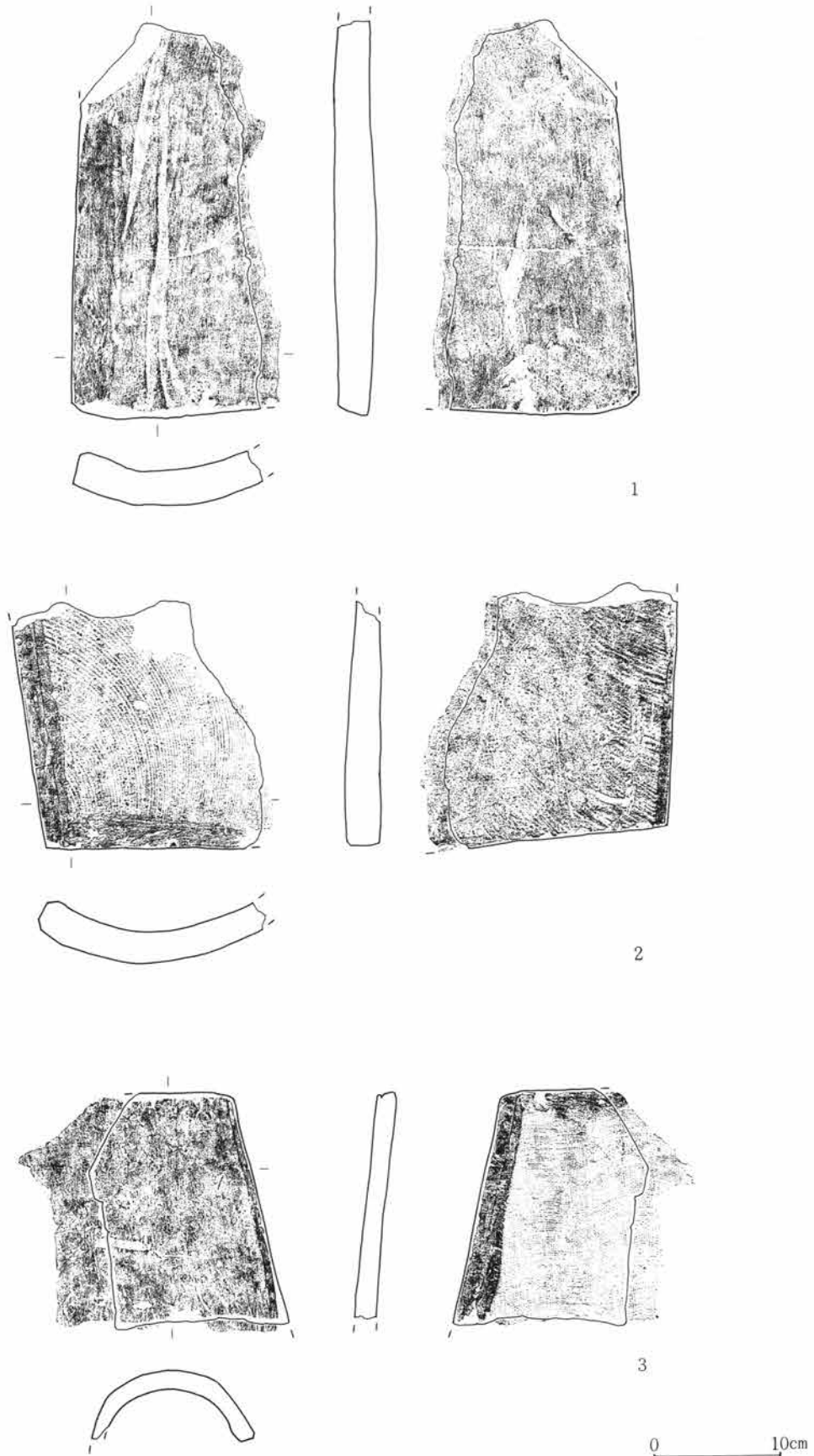


第234図 G区第64号住居跡出土遺物実測図



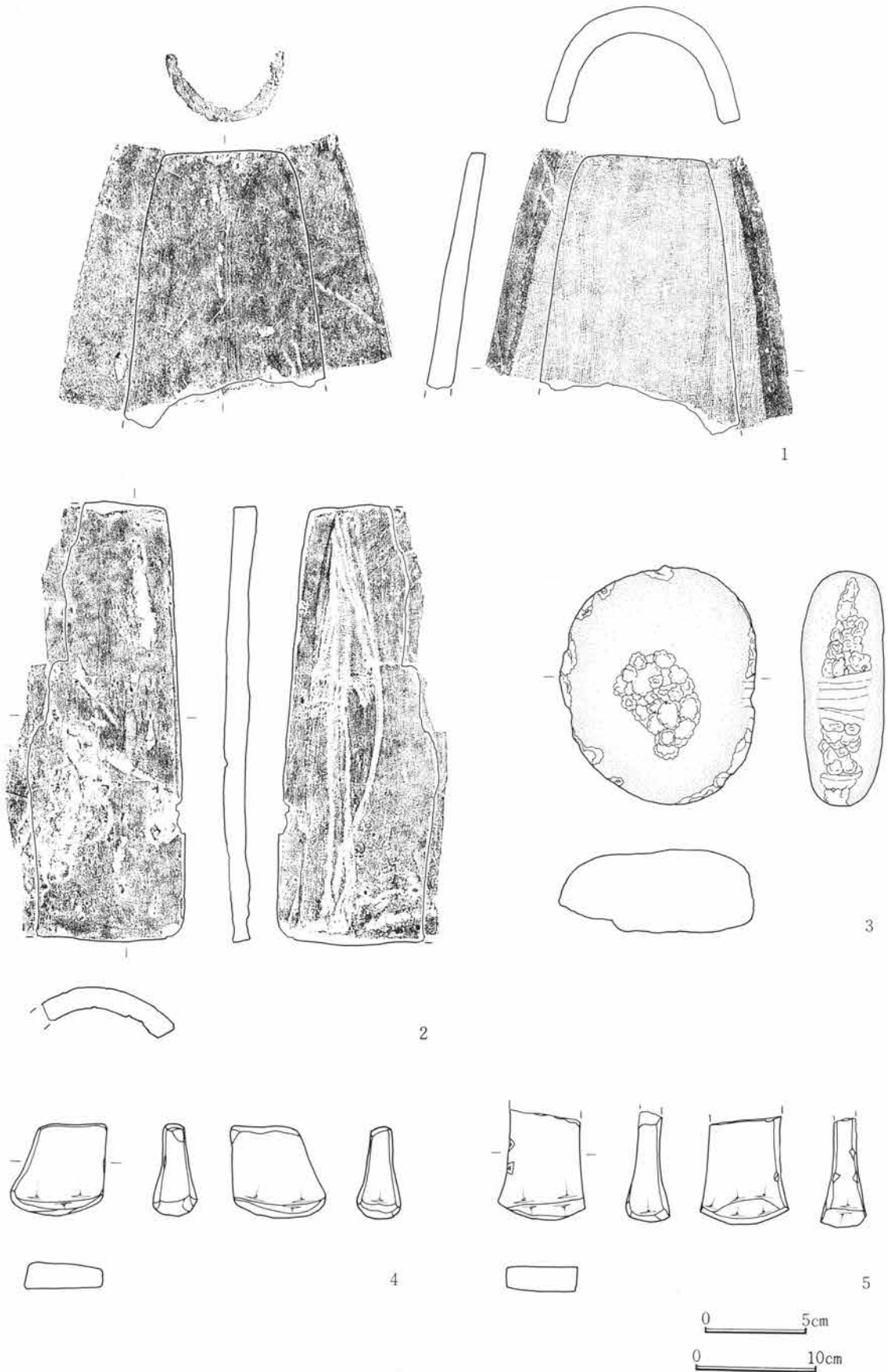
第235図 G区第64号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第236図 G区第64号住居跡出土遺物実測図

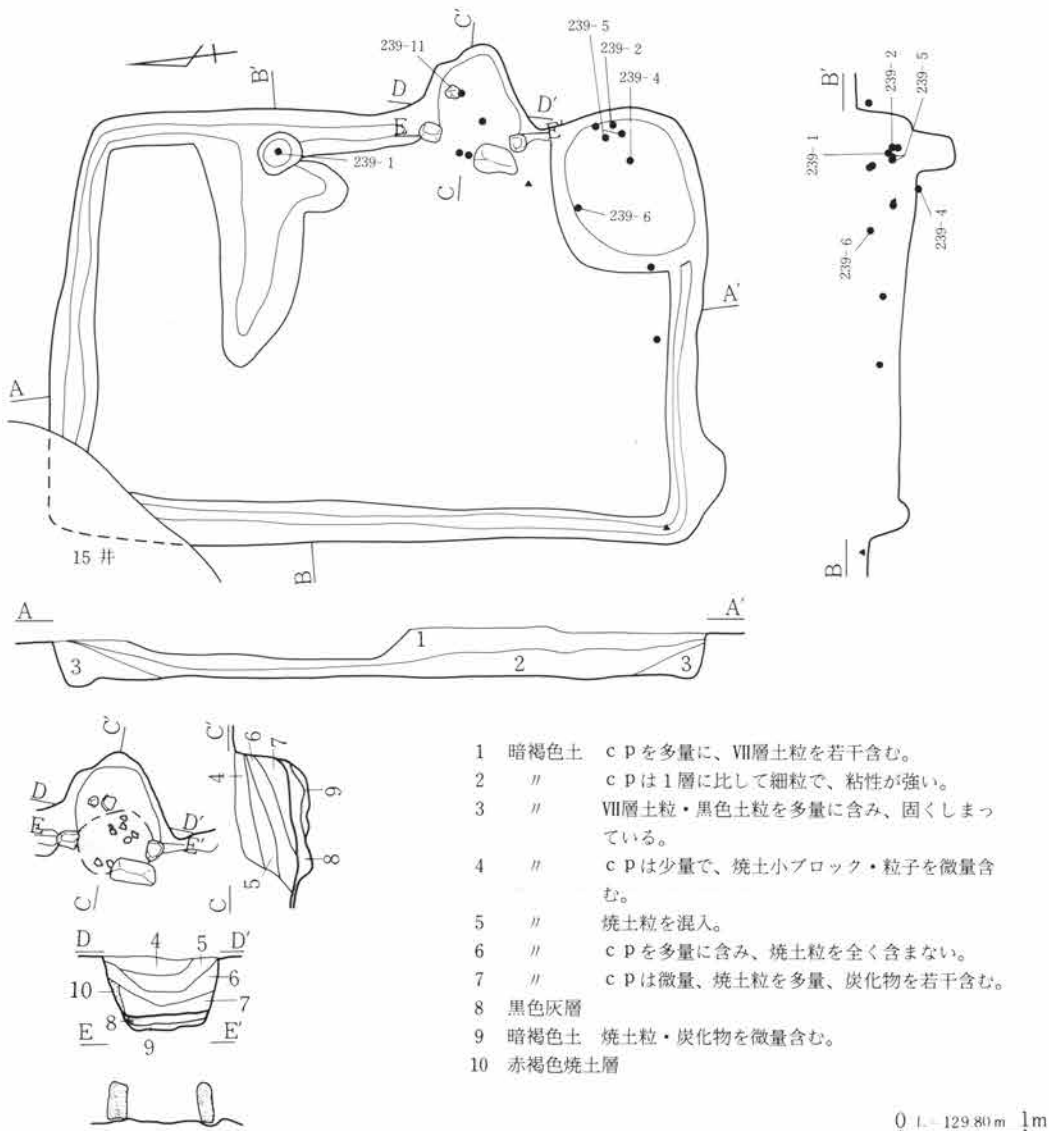
第3章 検出された遺構・遺物



第237図 G区第64号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第65号住居跡	位置	43～45-G-56～58グリッド内	分類	C-9	時期	V
平面形態	隅丸長方形	規模	3.40m×5.10m	主軸方位	東-5度-南	残存深度	約30cm程
備考	北半が東西農道下にかかるため2次の調査で全体像を明らかにした。壁溝はカマドと貯蔵穴を除き全周し、幅は約20～40cmである。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、径約130cm、深度約20cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・三角形状			主軸方位	東-12度-南	
規模	全長 80cm 屋外長 55cm 屋内長 25cm 袖間幅 87cm 燃烧部幅 105cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、掘り方段階で燃烧部に及ぶ灰面を検出した。袖は両袖共角柱状載石を据え構築している。燃烧部北壁は一部焼土化しており、中央北寄りに小礫を検出した。						

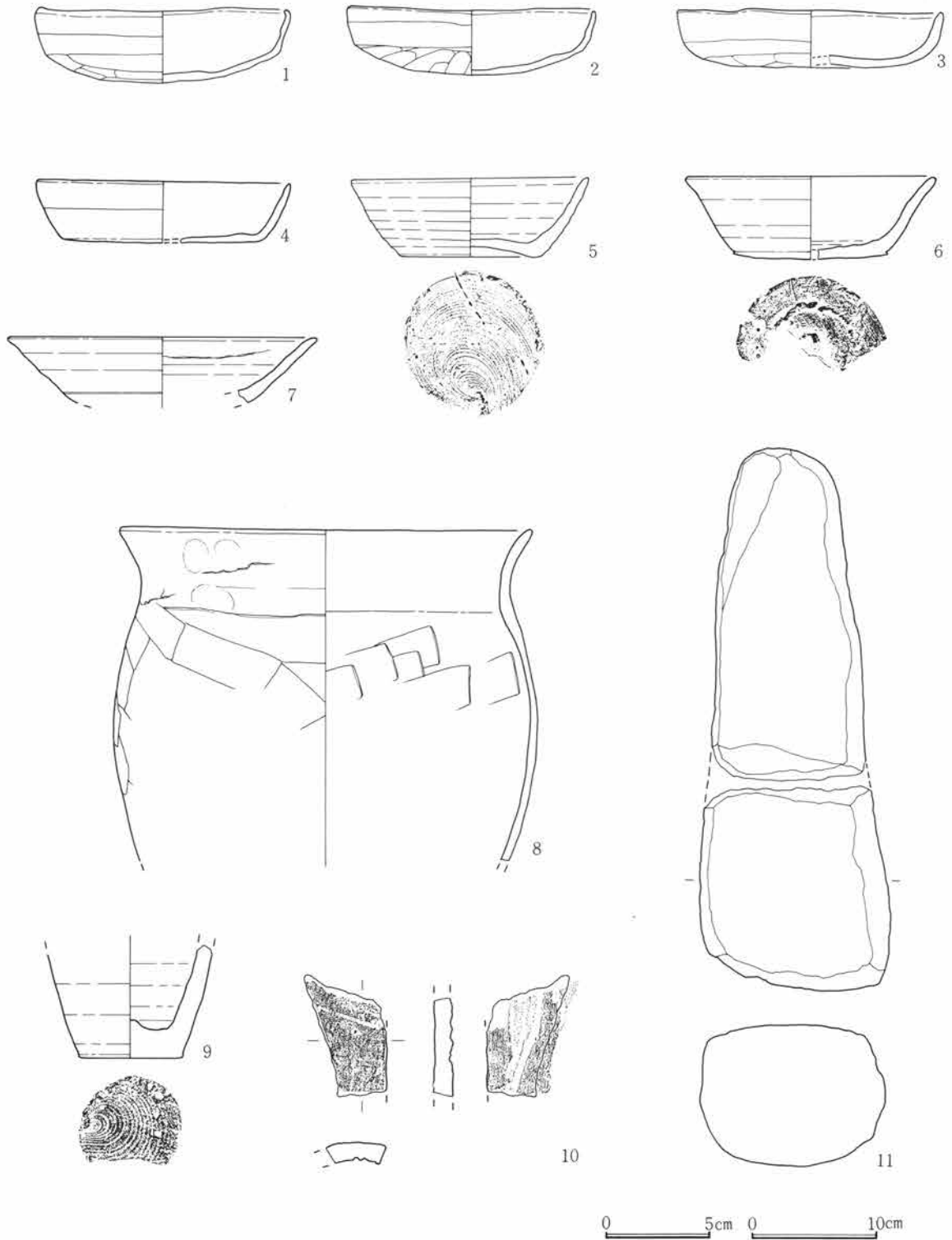


第238図 G区第65号住居跡実測図

当住居跡の掘り方は、北側のごく一部に限られる。つまり、東壁北寄りの壁溝から直角に住居内に溝が掘り込まれている。何のための施設なのかは不明であるが、充填土は壁溝のものとの違いは認められず、同時に掘削・埋没した可能性が高い。

遺物は、大半がカマド内及び貯蔵穴内出土で、覆土中出土遺物もさほど多くない。

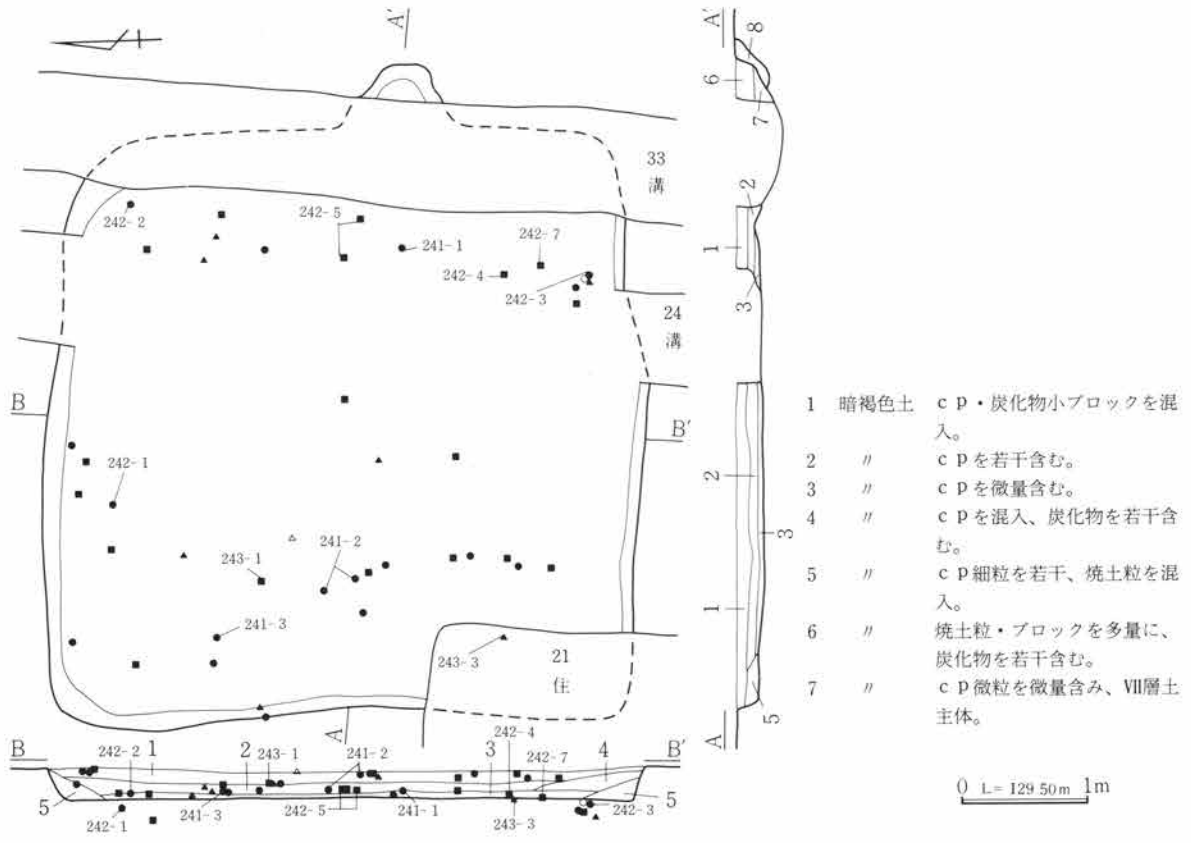
第3章 検出された遺構・遺物



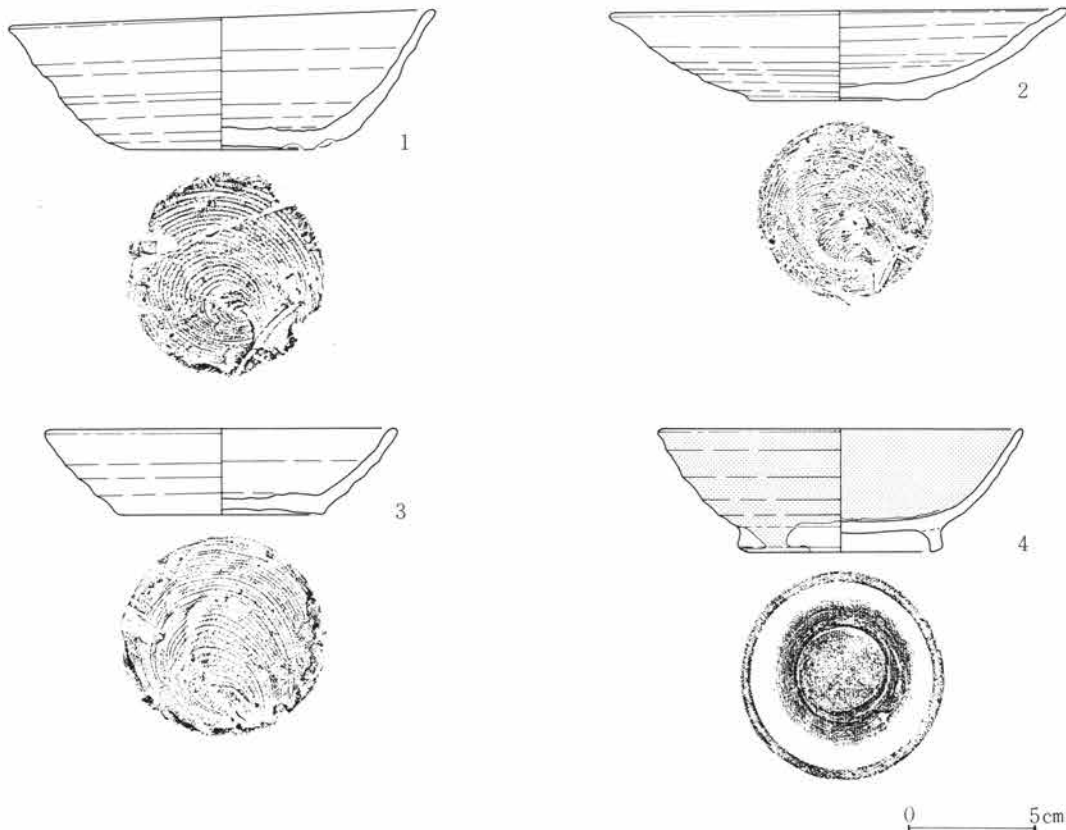
第239図 G区第65号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第66号住居跡	位置	8～11-G-52～55グリッド内	分類	C-3	時期	VI?
平面形態	隅丸長方形	規模	—m×4.70m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 25cm程
備考	第21号住居跡, 第23・24号溝と重複し、カマドの大半は失われ、その他も部分的な検出である。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出である。遺物は床面上から多量に出土した。						

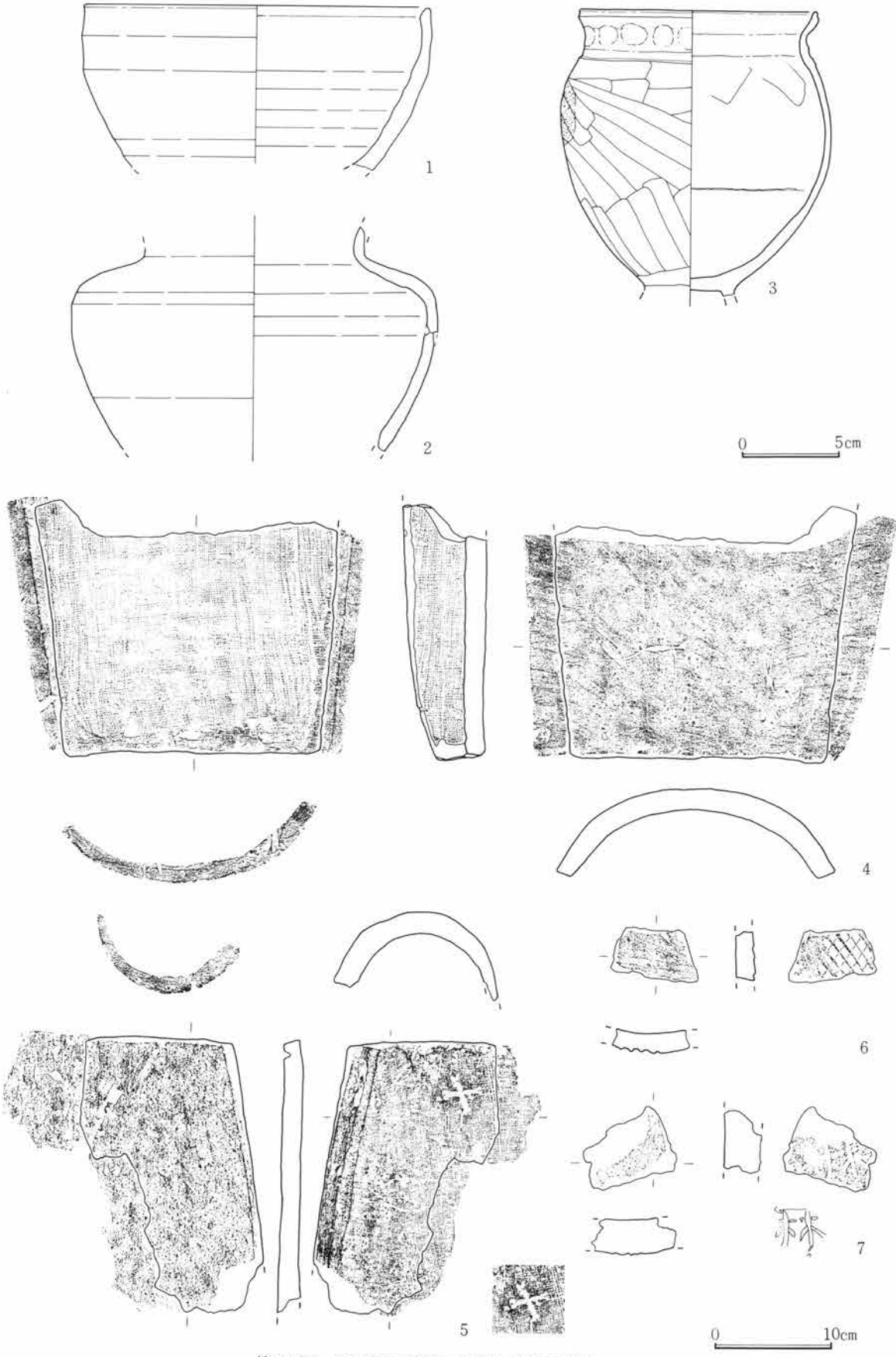
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第240図 G区第66号住居跡実測図

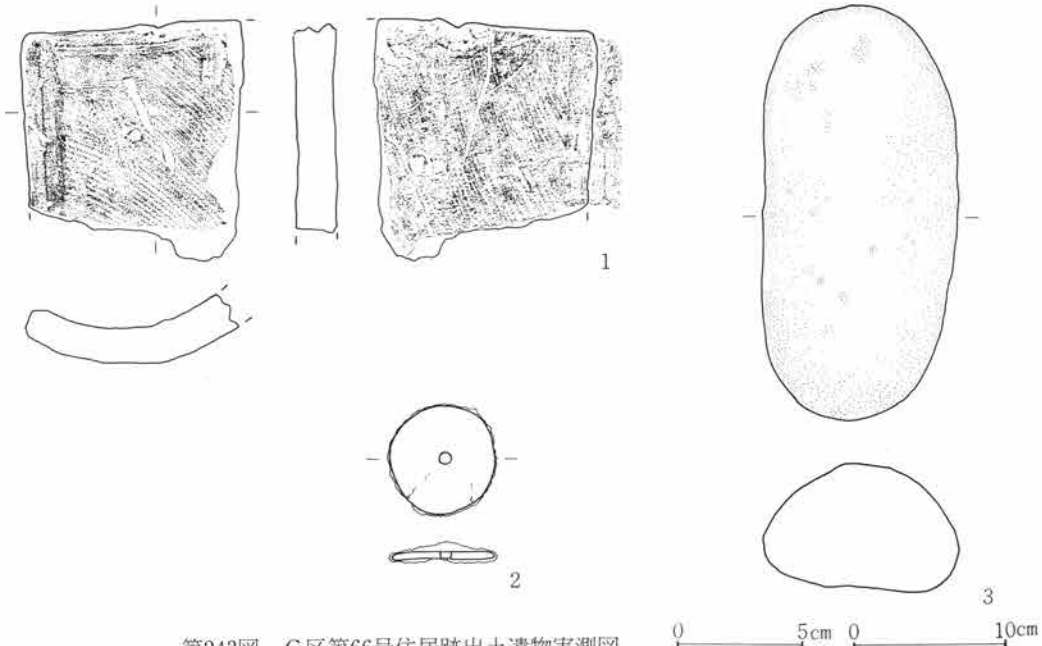


第241図 G区第66号住居跡出土遺物実測図



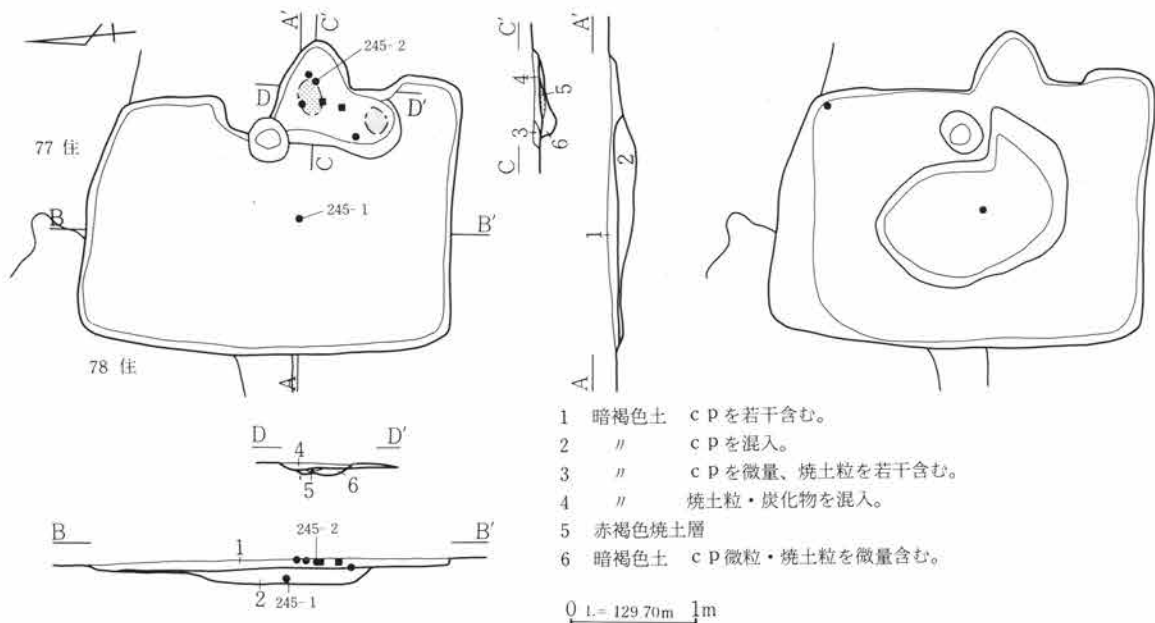
第242図 G区第66号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第243図 G区第66号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第67号住居跡	位置	8～10-G-65・66グリッド内	分類	C-2	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	2.00m×2.90m	主軸方位	東—1度—南	残存深度	約5cm程
備考	北西コーナー部で第78号住居跡と重複している。壁溝・貯蔵穴は未検出で、柱穴は、カマド左袖前面に円形ピットを検出したが、1個であり柱穴とは考えられない。						
カマド	位置・形状	東壁やや南寄り・三角形			主軸方位	東—5度—南	
規模	全長 85cm 屋外長 35cm 屋内長 50cm 袖間幅 155cm 燃烧部幅 58cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は左袖部から南にかなり延びており、先端部に円形の灰面及び、燃烧部中央に灰面と同程度の焼土面を検出した。袖は左袖が暗褐色土で構築されていた他、右袖は痕跡も残存していない。						

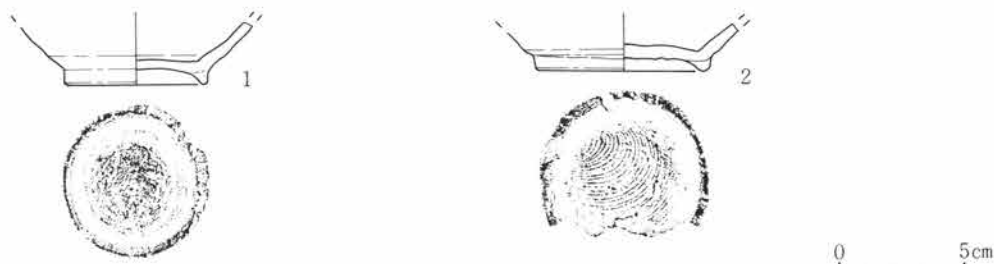


- 1 暗褐色土 c Pを若干含む。
- 2 // c Pを混入。
- 3 // c Pを微量、焼土粒を若干含む。
- 4 // 焼土粒・炭化物を混入。
- 5 赤褐色焼土層
- 6 暗褐色土 c P微粒・焼土粒を微量含む。

0 L= 129.70m 1m

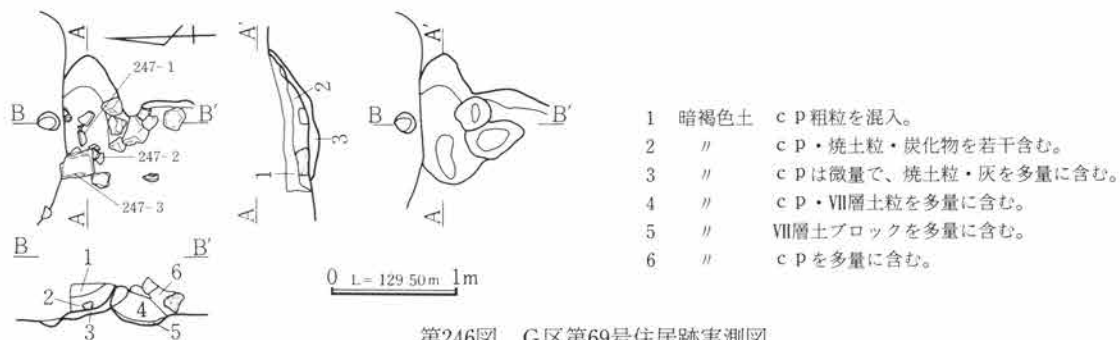
第244図 G区第67号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



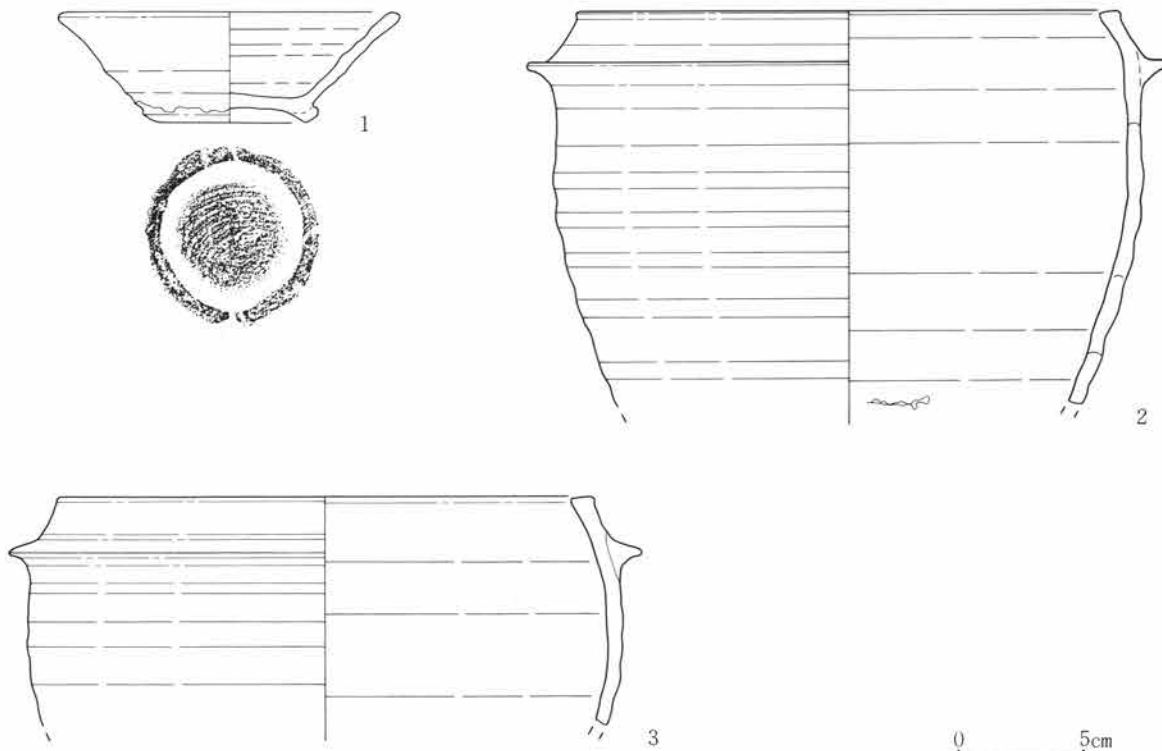
第245図 G区第67号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第69号住居跡	位置	8・9-G-60・61グリッド内	分類	—	時期	IV
カマド	位置・形状	東壁と考えられる・三角形状		主軸方位	— — 度 —		
規模	全長 80cm 屋外長 55cm 屋内長 25cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 — cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口に明確な掘り込みは認められず、天井石と思われる截石を検出した。袖は右袖のみ残存し、礫を5個程度据えて構築している。燃烧部に焼土等は検出されず、礫が出土しただけである。						



- 1 暗褐色土 c P粗粒を混入。
- 2 // c P・焼土粒・炭化物を若干含む。
- 3 // c Pは微量で、焼土粒・灰を多量に含む。
- 4 // c P・VII層土粒を多量に含む。
- 5 // VII層土ブロックを多量に含む。
- 6 // c Pを多量に含む。

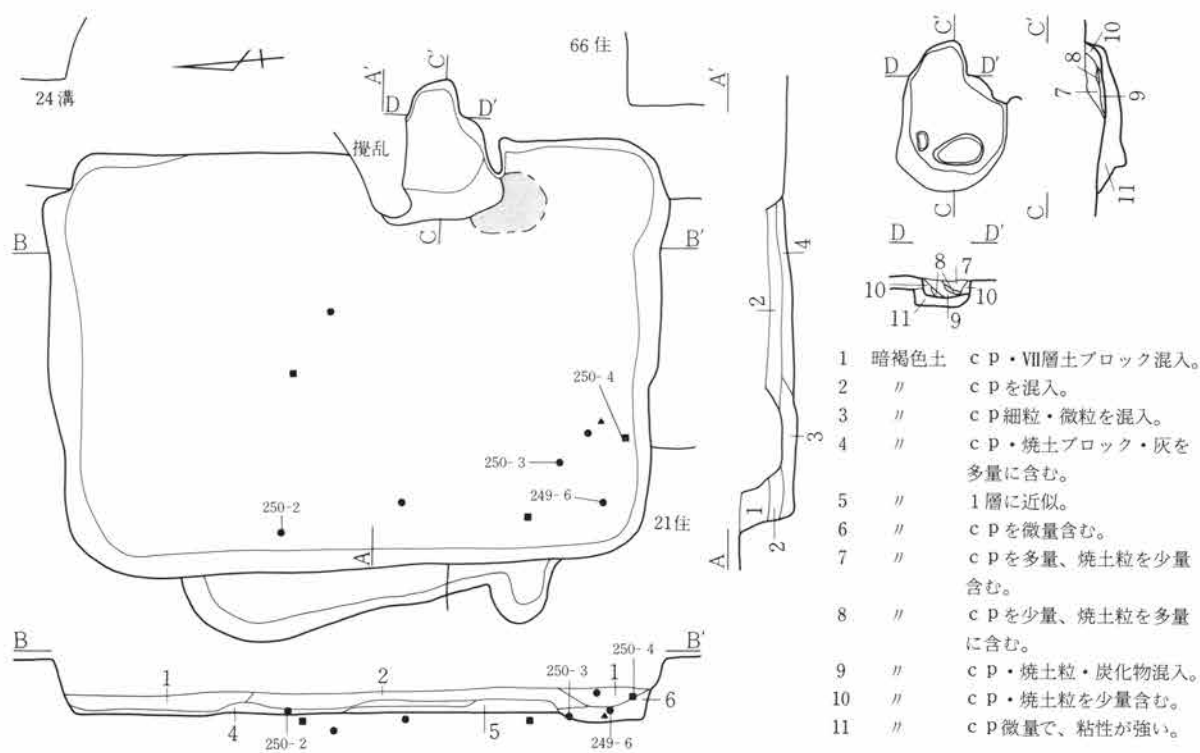
第246図 G区第69号住居跡実測図



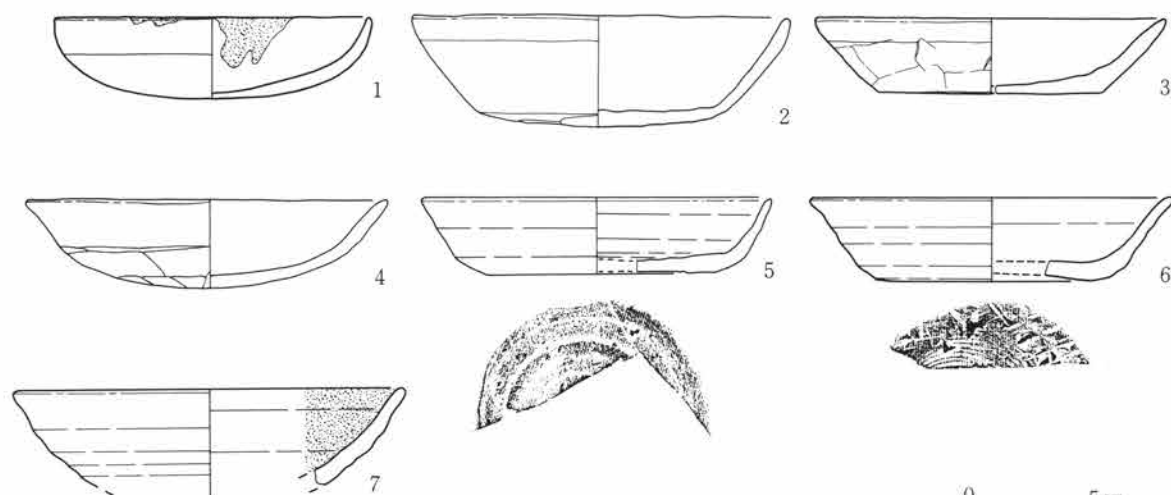
第247図 G区第69号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第70号住居跡	位置	8～11-G-63～65グリッド内	分類	C-11	時期	V
平面形態	隅丸長方形	規模	3.30m×4.90m	主軸方位	東-2度-南	残存深度	約30cm程
備考	西側に他遺構が重複しているが、性格、形態共に不明。東壁の残存は不良であり、この部分を含めて壁溝・柱穴・貯蔵穴は、いずれも検出されなかった。						
カマド	位置・形状	東壁わずかに南寄り・不整凸字形			主軸方位	東-6度-南	
規模	全長110cm 屋外長52cm 屋内長58cm 袖間幅112cm 燃烧部幅70cm 煙道幅39cm						
備考	焚口は浅い掘り込みで、南側床面に灰面を検出した。袖は右袖のみ残存し、暗褐色土が検出された他、構築材等はみられない。燃烧部は中央部が若干低くなっており、焼土等は認められなかった。						

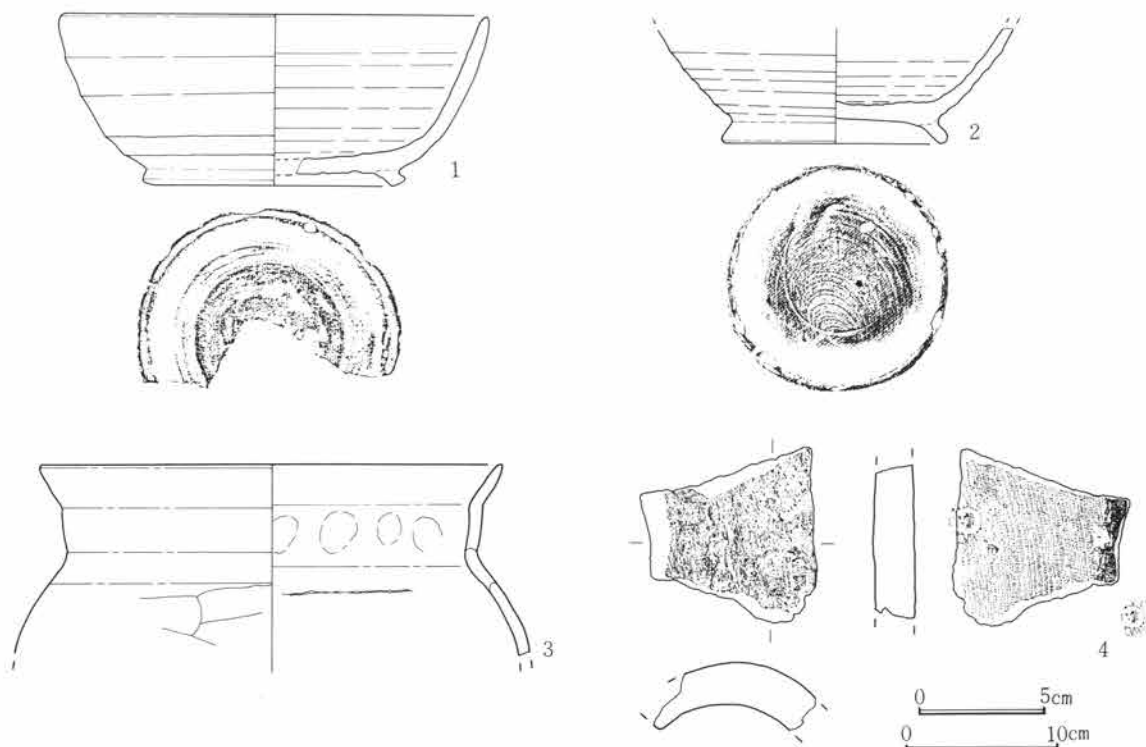


第248図 G区第70号住居跡実測図



第249図 G区第70号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第250図 G区第70号住居跡出土遺物実測図

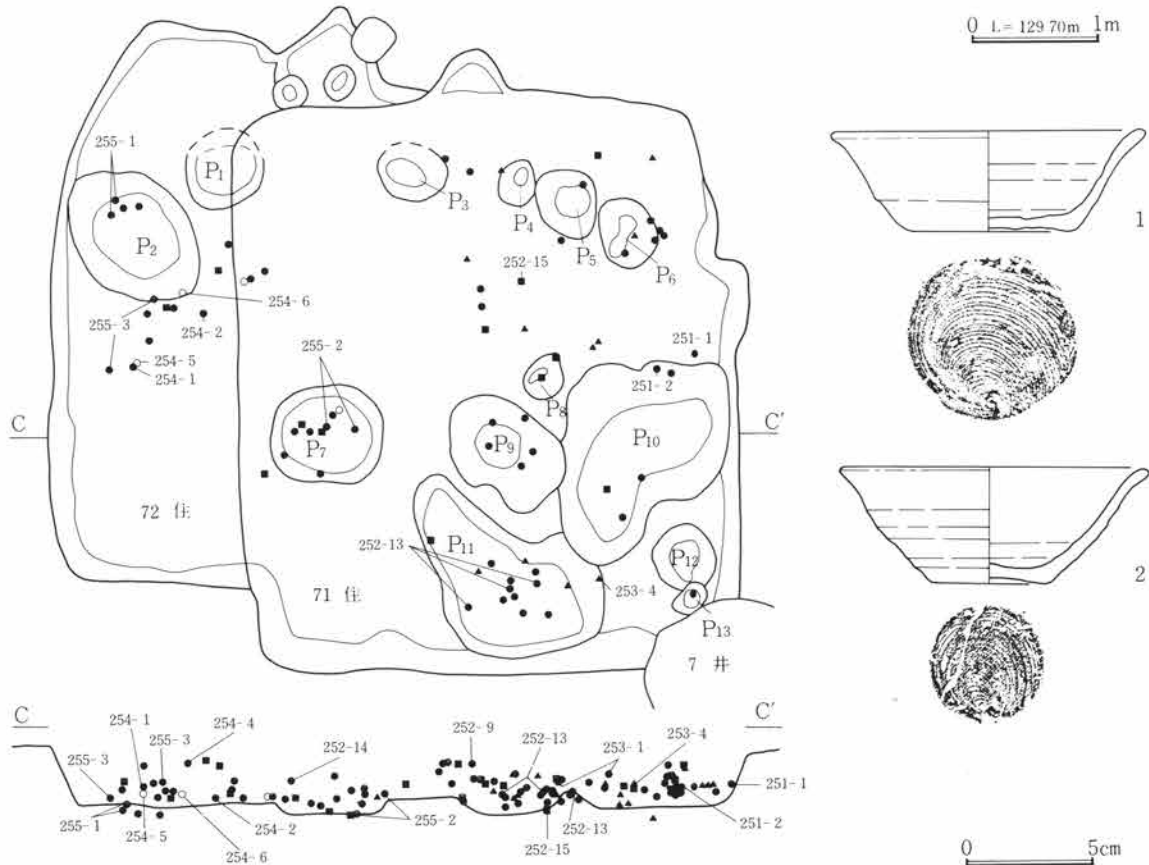
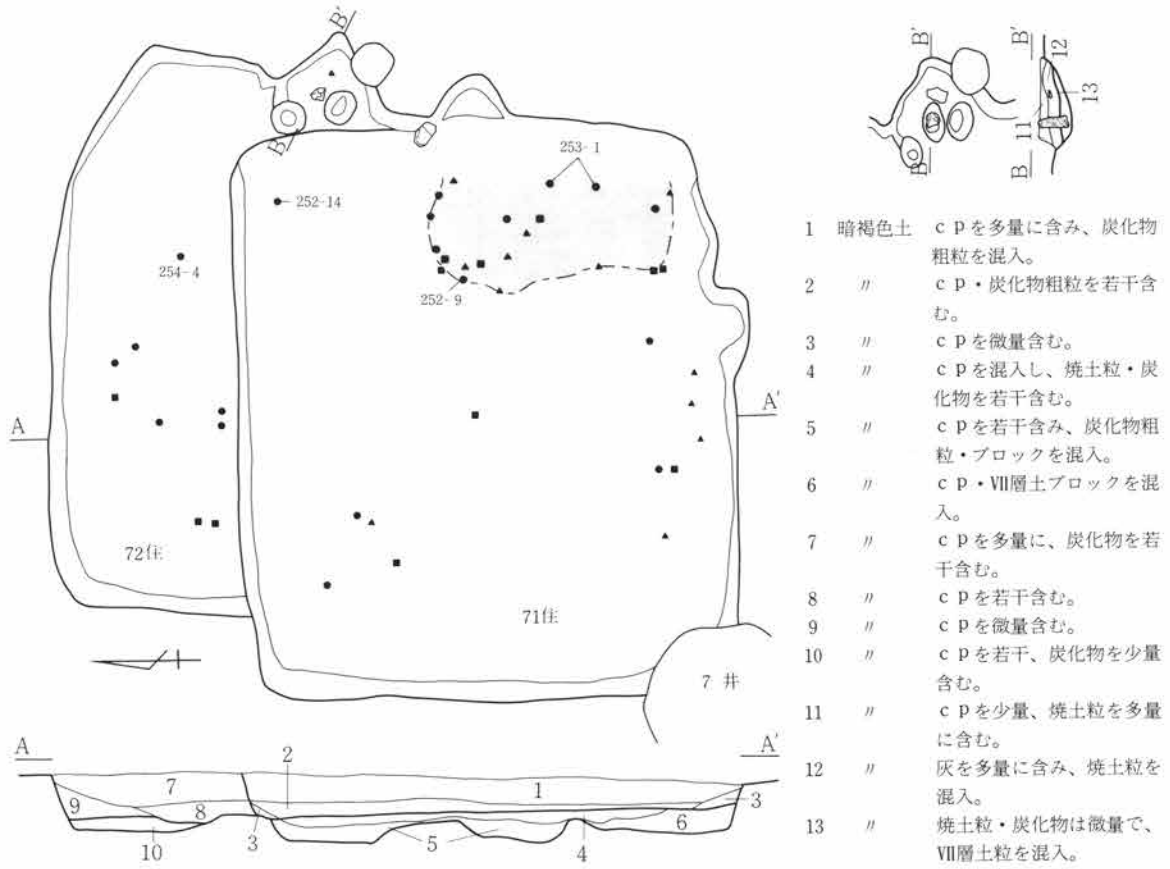
遺構名称	G区第71号住居跡	位置	5～7-G-63～65グリッド内	分類	B-2	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	4.60m×4.00m	主軸方位	東-1度-南	残存深度	約30cm程
備考	北側で第72号住居跡と重複し、カマド部分が南北農道下にかかるため、2次調査で全体像を明らかにしたが、カマドの残存は不明で、広範な灰面及び左袖の痕跡らしい礫を検出した。						

遺構名称	G区第72号住居跡	位置	6～8-G-63～65グリッド内	分類	B-2	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	4.50m×-m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約33cm程
備考	南側を第71号住居跡との重複によって失っており、第71号住居跡同様、東側が南北農道下にかかるため、2次の調査によって全体像を明らかにした。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出。						
カマド	位置・形状	東壁やや北寄り?・三角形状		主軸方位	東-10度-南		
規模	全長 87cm 屋外長 37cm 屋内長 50cm 袖間幅 - cm 燃烧部幅 76cm 煙道幅 - cm						
備考	カマドは検出時ほぼ掘り方の状態まで下げてしまったため、灰面等は検出できなかった。袖は左袖構築材の据え方と思われるピットが検出されただけである。燃烧部中央やや北寄りに礫の支脚を検出。						

第71・72号住居跡は先述のように、東側が南北農道下にかかるため、2次の調査で全体像を明らかにした。当初は西側部分のみの検出で、2軒を同時に調査した。その結果床面レベルはほぼ同じであり、新旧関係は判然としなかった。しかし、セクション面の土層観察から、第71号住居跡の壁の立ち上がりが検出され、第72号住居跡→第71号住居跡と判断した。このことは南北農道下の調査時に、第71号住居跡のカマドは残存状態からも裏づけられた。つまり、第71号住居跡のカマド残存状態は不良であるが、左袖が明確に残存していることから、第72号住居跡による攪乱を受けていないと判断された。

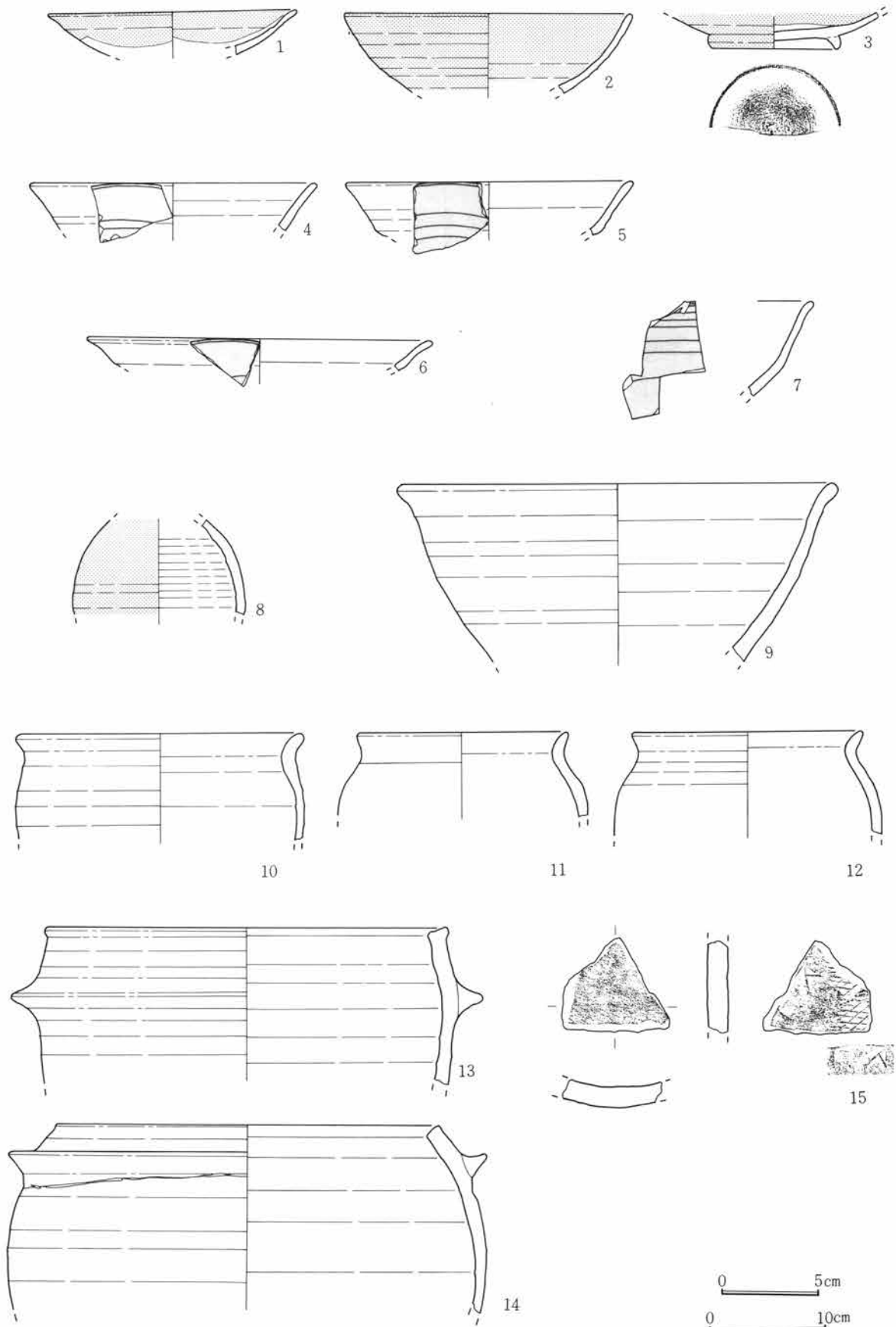
遺物は、床面上にも検出されているが、あまり量的に多くなく、掘り方段階で検出されたピット内及び、不整形の土坑掘り込み内に集中して出土している。

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



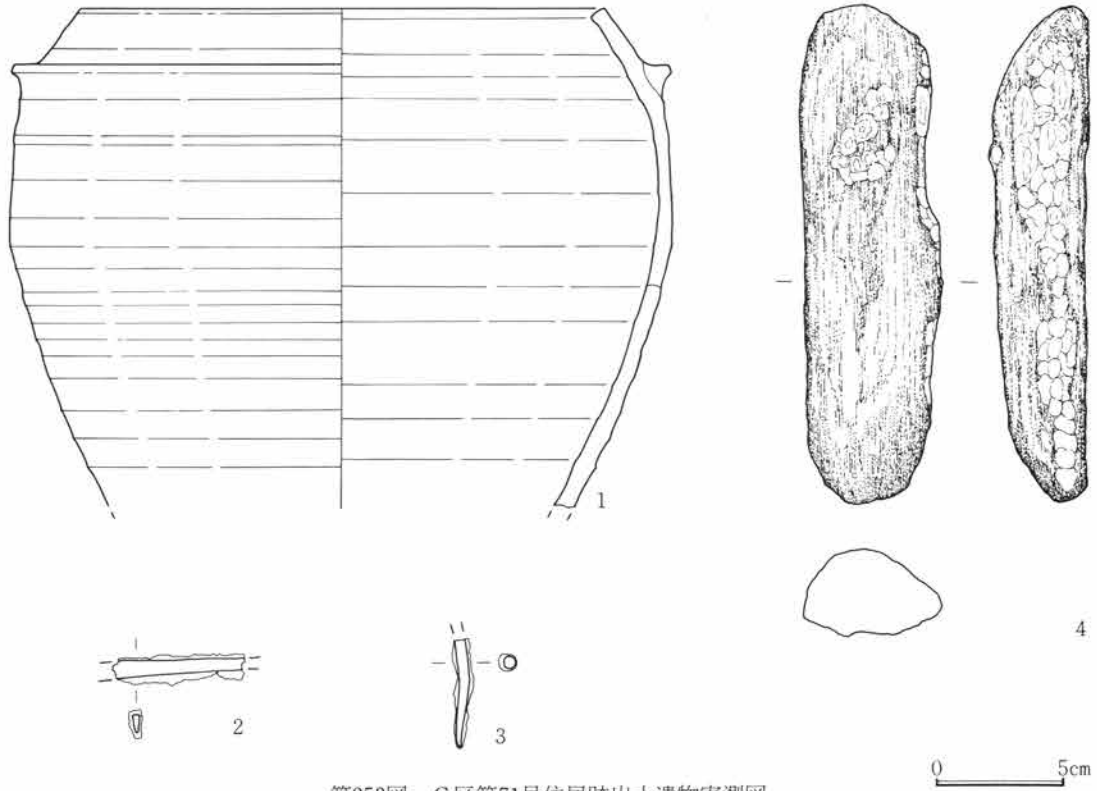
第251図 G区第71・72号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

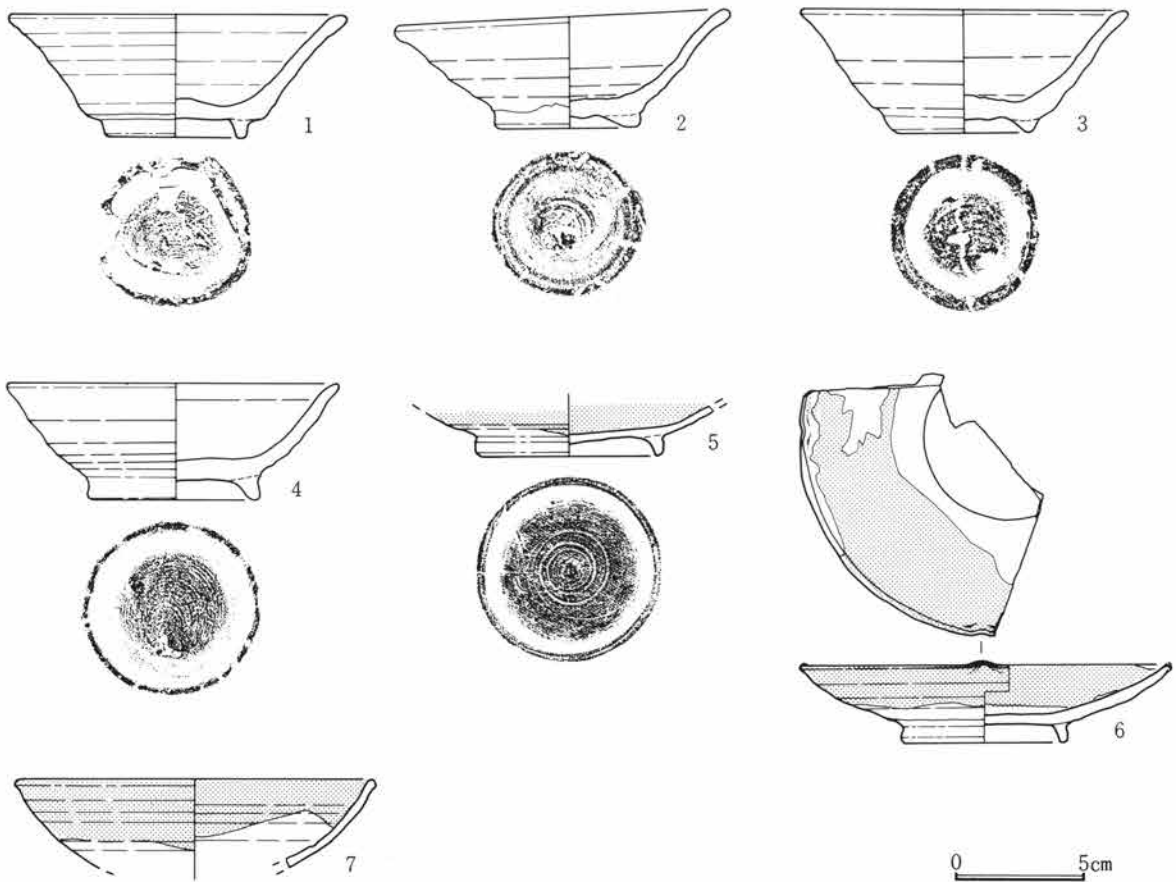


第252図 G区第71号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

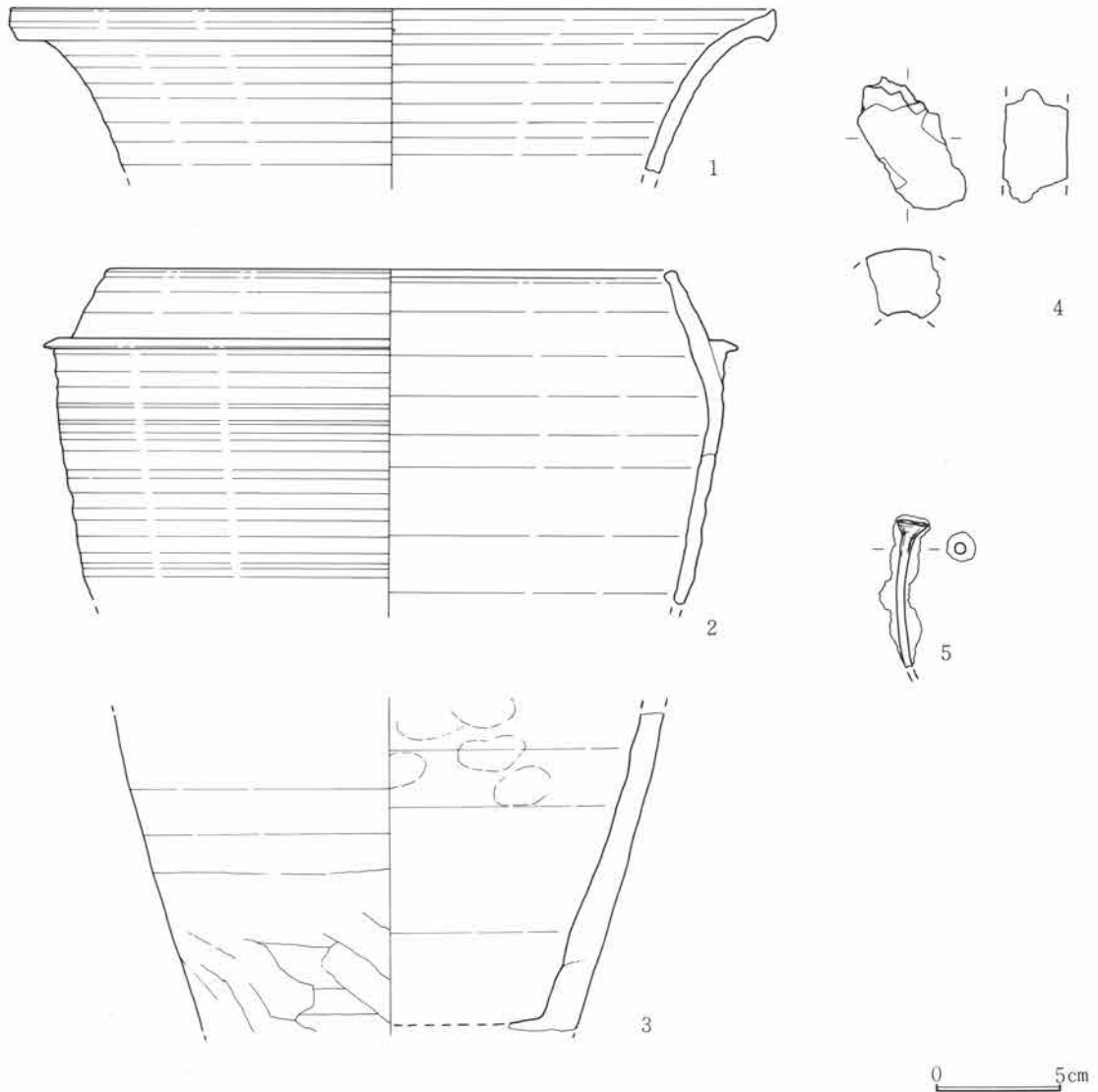


第253図 G区第71号住居跡出土遺物実測図



第254図 G区第72号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

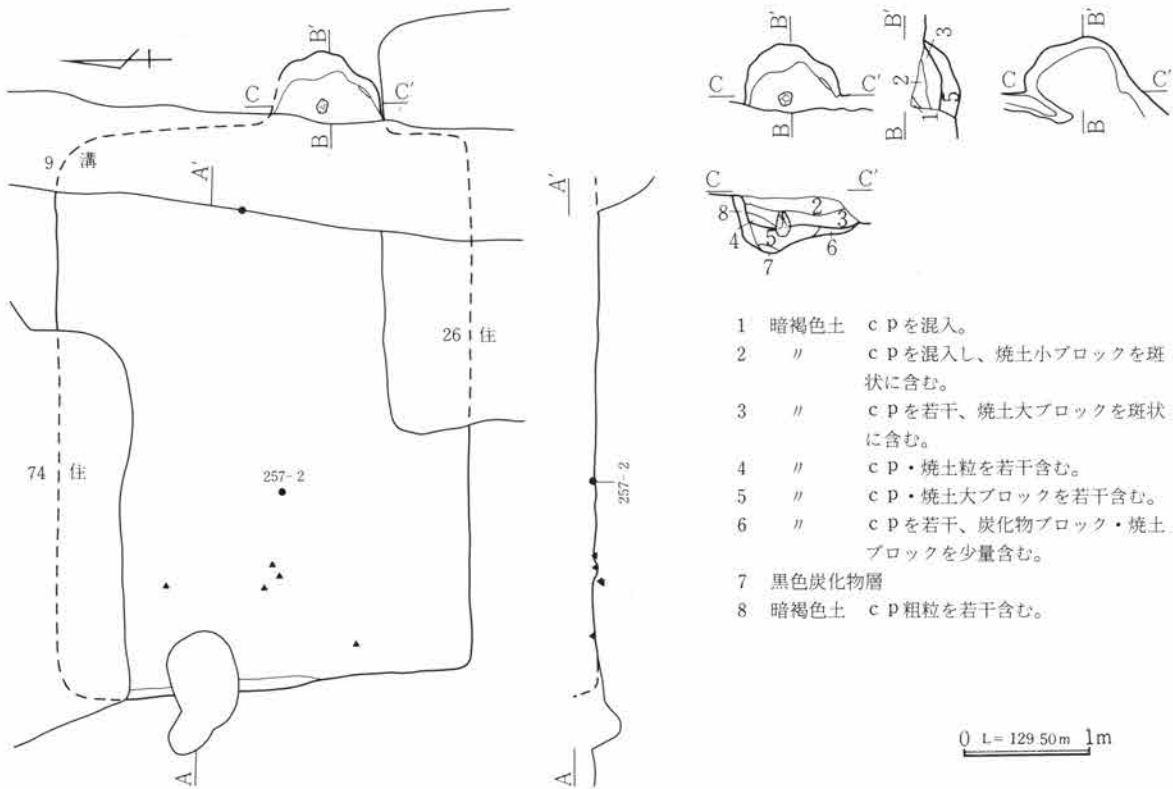


第255図 G区第72号住居跡出土遺物実測図

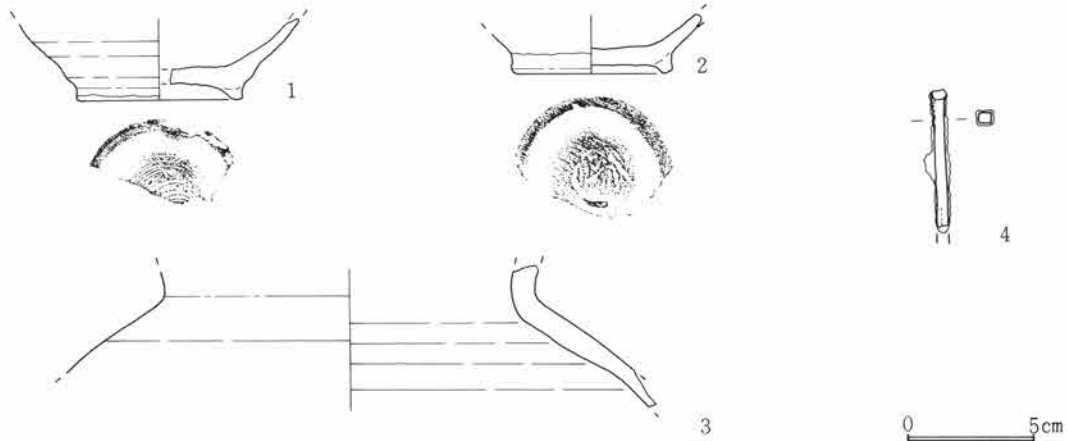
遺構名称	G区第73号住居跡		位置	1・2-G-59~62グリッド内		分類	B-7	時期	IX	
平面形態	隅丸長方形	規模	(4.40)m×(3.30)m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 10cm程			
備考	壁はF区第26号住居、G区第76号住居跡、第9号溝と重複し、残存していない。床面も中央部が若干検出されただけである。壁溝・貯蔵穴は不明で、柱穴は未検出である。									
カマド	位置・形状	東壁中央わずかに南寄り・馬蹄形				主軸方位	— 度 —			
規模	全長	— cm	屋外長	— cm	屋内長	— cm	袖間幅	— cm	燃烧部幅	— cm
備考	焚口及び袖は第9号溝との重複によって失われ、燃烧部中央に磔を据えて支脚している。灰面焼土等の検出は皆無である。									

当住居跡は、カマドと床面の一部を検出したもので、全体像は明らかでない。F区第26号住居跡及びG区第74号住居跡、G区第9号溝との重複は、各遺構の検出状態から当住居跡が先行するのは明らかである。遺物の出土は、西寄りの若干壁面の残存する周辺にわずかにみられたが、当住居跡の時期を示すような明確な遺物は得られていない。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



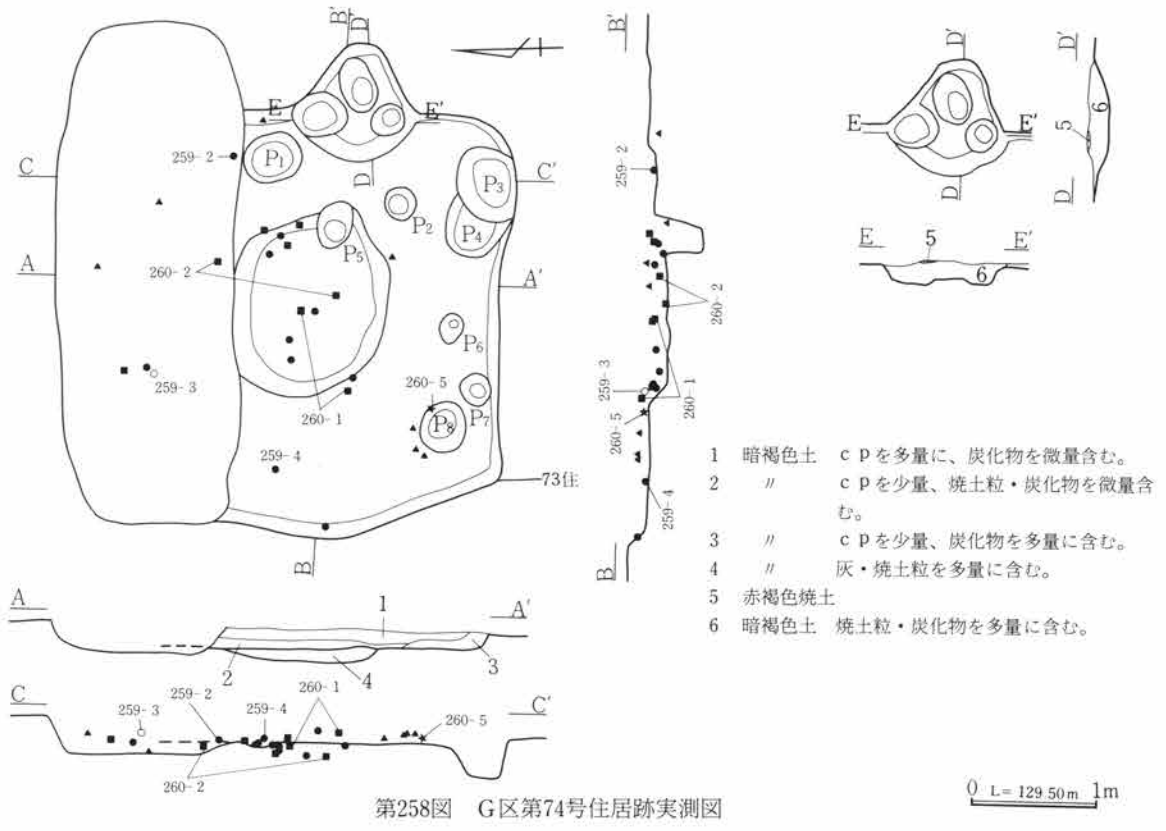
第256図 G区第73号住居跡実測図



第257図 G区第73号住居跡出土遺物実測図

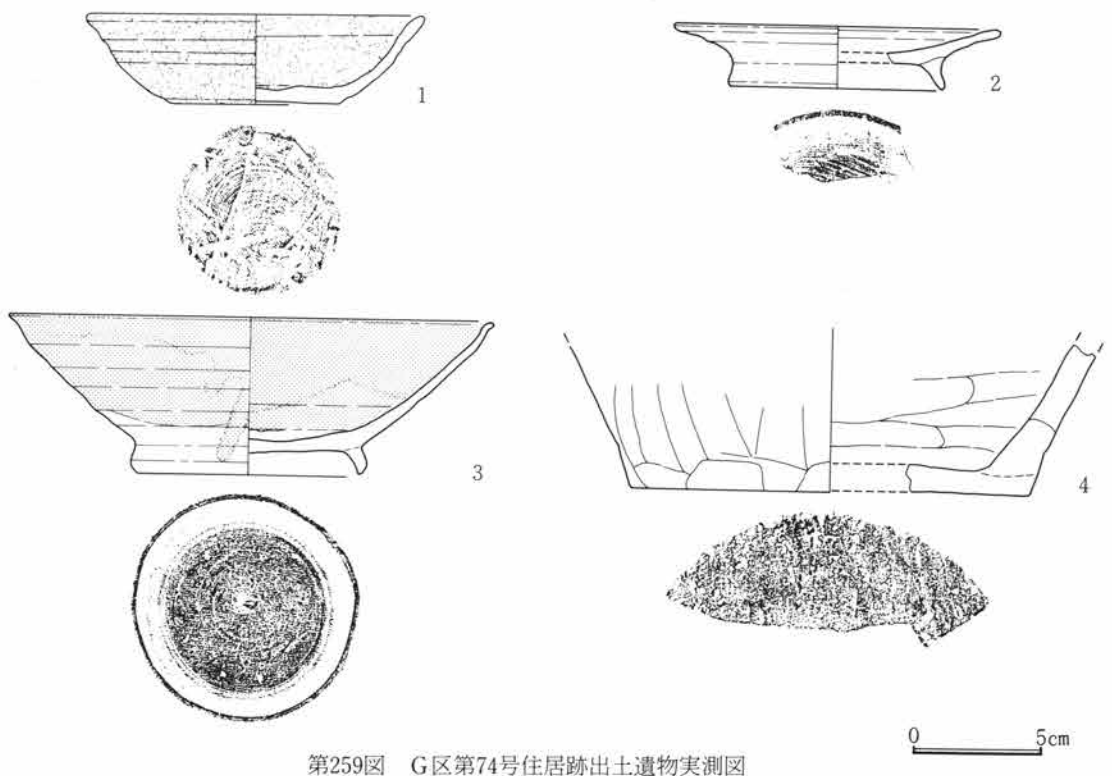
遺構名称	G区第74号住居跡		位置	1・2-G-60～62グリッド内		分類	A-9	時期	VI?
平面形態	隅丸方形?	規模	3.30m×-m	主軸方位	東-2度-南	残存深度	約 20cm程		
備考	北側で土坑と重複し、全体の約8%を検出した。壁溝は検出されず、床面でピットが8個検出されているが、配置等から柱穴とは考えられない。掘り方段階でカマド正面に円形土坑を検出した。								
カマド	位置・形状	東壁中央南寄り?・三角形				主軸方位	東-3度-南		
規模	全長 91cm	屋外長 52cm	屋内長 39cm	袖間幅 1cm	燃烧部幅 76cm	煙道幅 1cm			
備考	焚口と思われる面に焼土層を検出。袖は構築材は検出されていないが、据え方と思われる1対の円形ピンを検出した。また、燃烧部中央わずかに北寄りに、支脚据え方と思われるピットを検出。								

第3章 検出された遺構・遺物



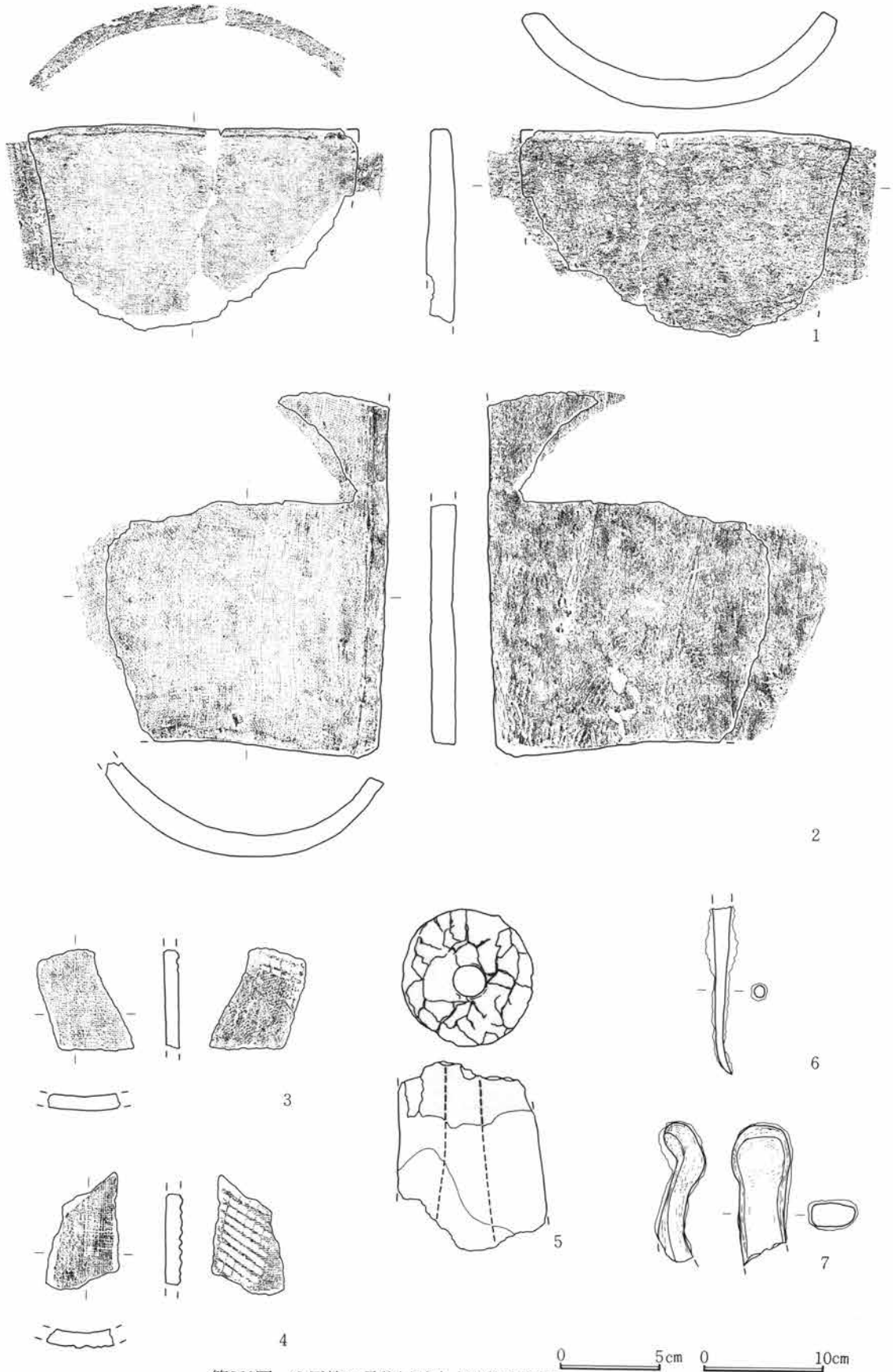
第258図 G区第74号住居跡実測図

当住居跡の遺物は、大半が掘り方段階で検出した円形土坑内からの出土である。土坑規模は経約140cm、深度約20cmで平坦な底面を有し、東側には径約35cmの円形ピットが検出されている。その他の遺物はP₈周辺に多く、同地点から鞆の羽口が出土している。



第259図 G区第74号住居跡出土遺物実測図

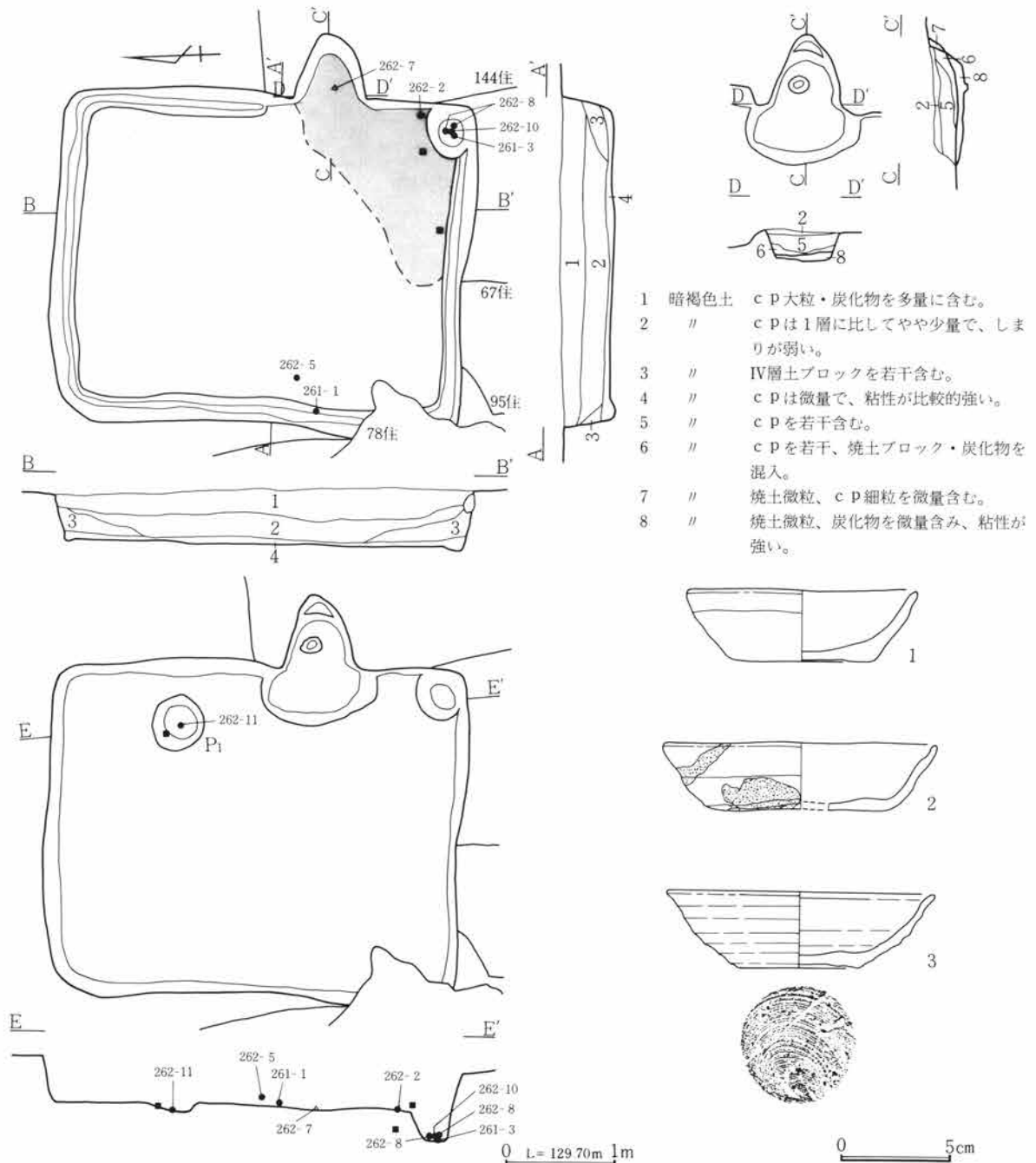
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第260図 G区第74号住居跡出土遺物実測図

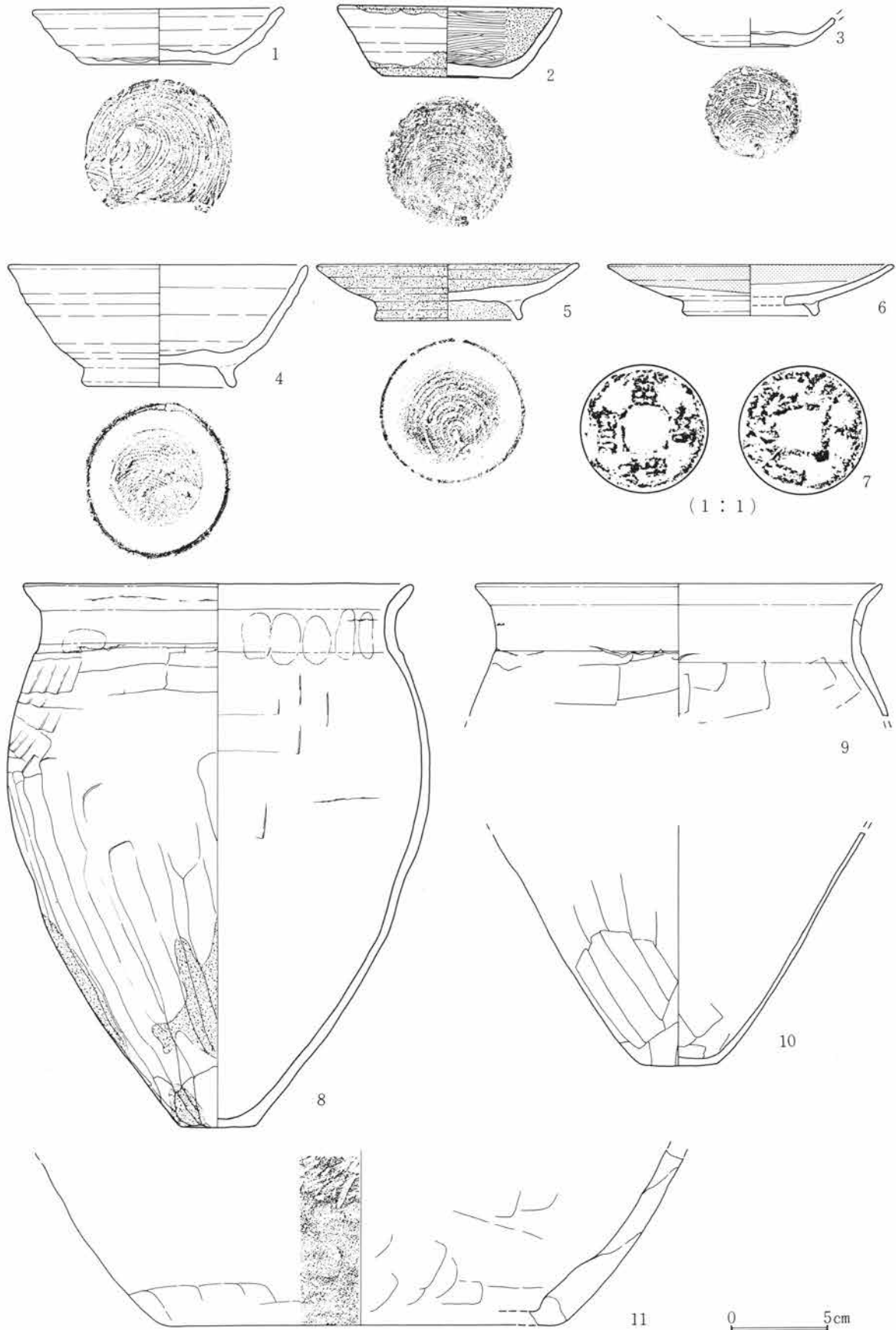
第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第77号住居跡	位置	10~12-G-64~66グリッド内	分類	C-7	時期	VII
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×3.80m	主軸方位	東-5度-南	残存深度	約35cm程
備考	南西コーナー部を第78号住居跡との重複で失っている。壁溝はカマド部分を除き全周検出し、幅約22cm、深度約5~10cmである。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、径約50cm、深度約26cmである。						
カマド	位置・形状	東壁中央南寄り・舌状			主軸方位	東-2度-南	
規模	全長 63cm 屋外長 49cm 屋内長 14cm 袖間幅 1cm 燃烧部幅 60cm 煙道幅 1cm						
備考	燃烧部・焚口から南東コーナー部まで広範に灰面を検出。袖は残存しておらず、燃烧部は掘り方段階で、中央北寄りに支脚据え方を検出。中央灰面で「富寿神宝」を検出。						



第261図 G区第77号住居跡・出土遺物実測図

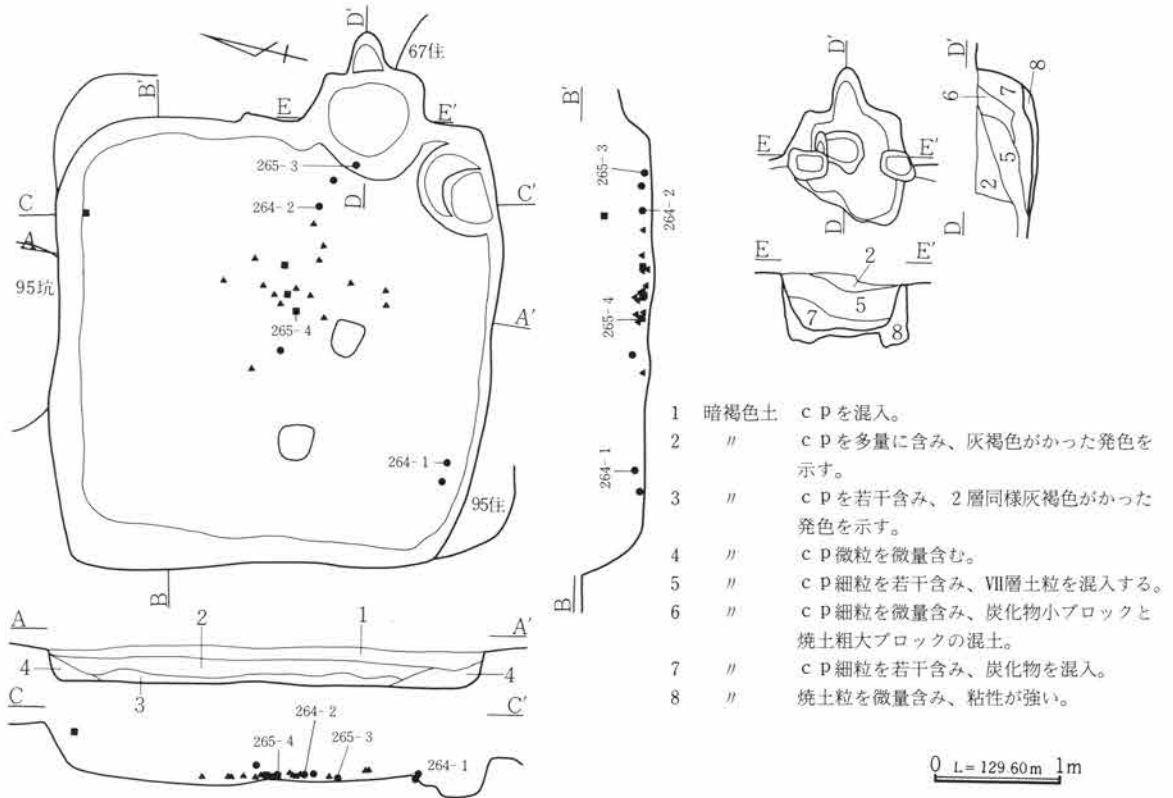
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



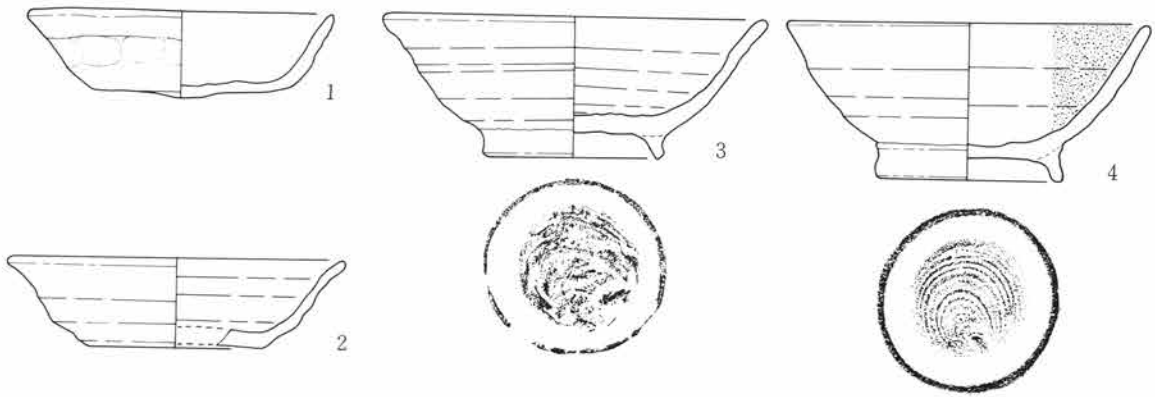
第262図 G区第77号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第78号住居跡		位置	9～11-G-65～68グリッド内		分類	A-9	時期	VII
平面形態	隅丸方形	規模	3.50m×3.50m	主軸方位	東-13度-北	残存深度	約35cm程		
備考	南側で第95号住居と重複している。壁は全周検出され、壁溝・柱穴は検出されていない。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、規模は径約70cm、深度約18cmで2段に掘り込まれている。								
カマド	位置・形状	東壁中央南寄り・凸字形				主軸方位	東-12度-北		
規模	全長 114cm 屋外長 70cm 屋内長 44cm 袖間幅 100cm 燃烧部幅 95cm 煙道幅 30cm								
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、袖は残存していないが、袖構築材の据え方と思われる方形ピットを検出。燃烧部中央北寄りに支脚据え方を検出。煙道は燃烧部から段を有し掘り込まれている。								

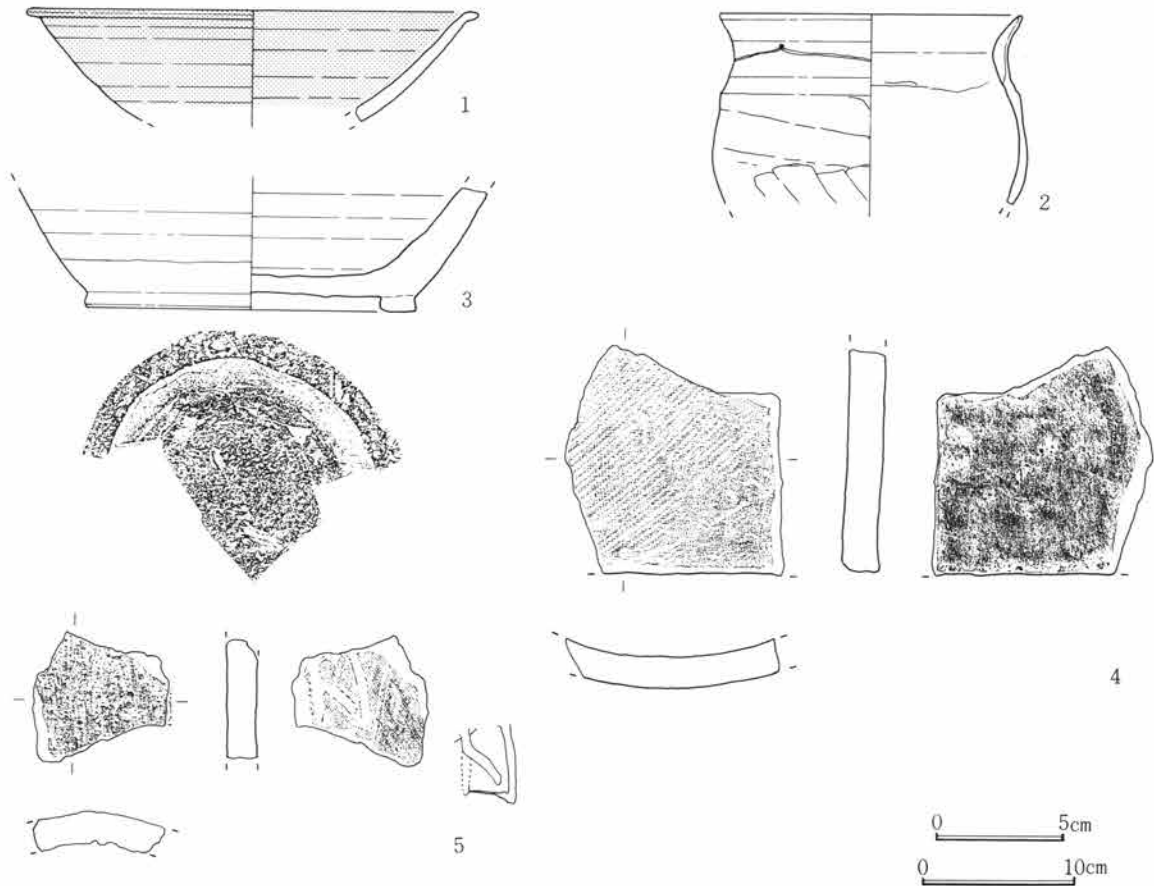


第263図 G区第78号住居跡実測図



第264図 G区第78号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第265図 G区第78号住居跡出土遺物実測図

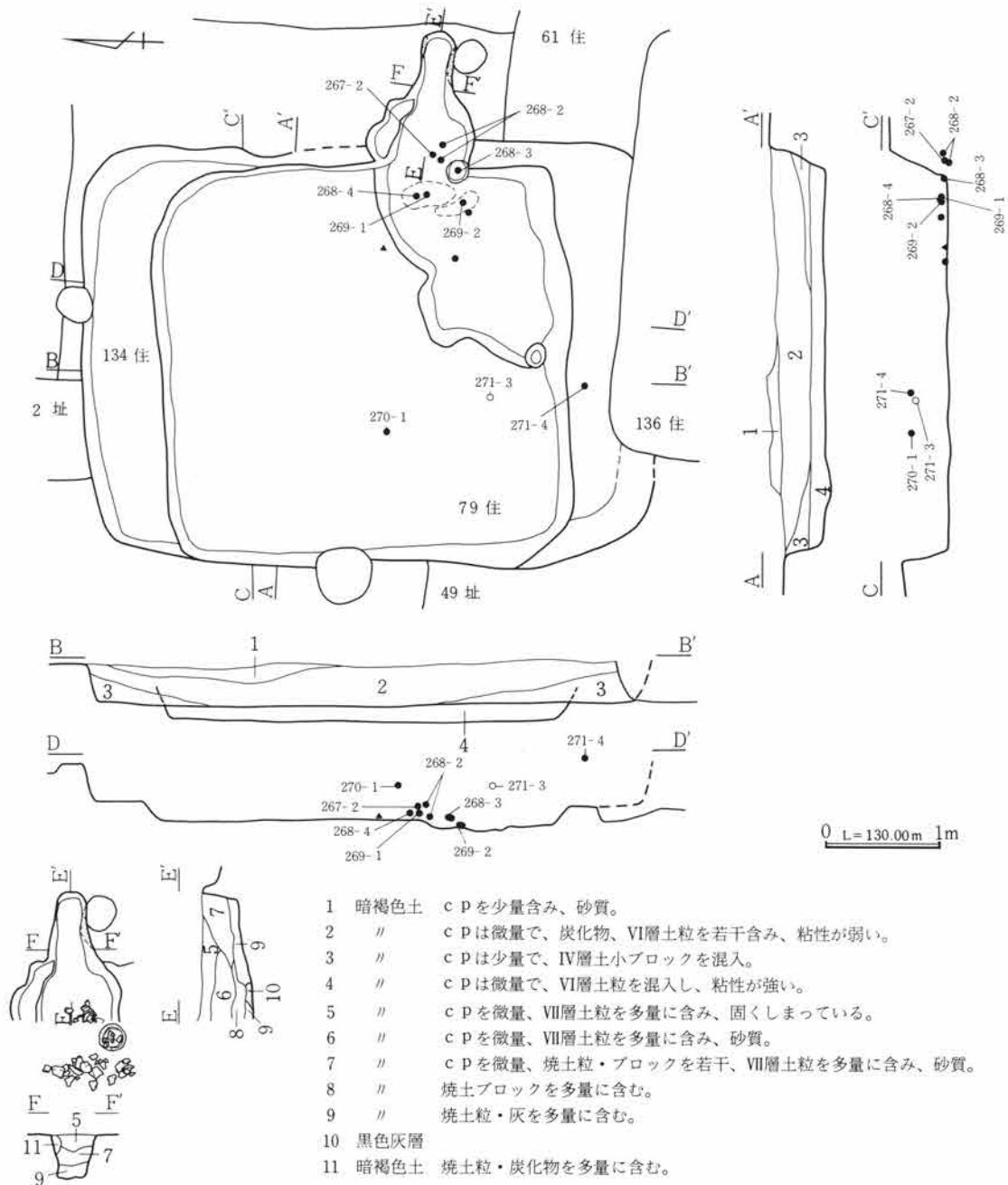
遺構名称	G区第79号住居跡		位置	48～50-G-60～62グリッド内		分類	A-9	時期	III
平面形態	隅丸方形	規模	3.50m×3.60m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約 35cm程		
備考	第134号住居跡と同軸上で重複する他、北側で第2号址と、南側で第136号住居跡と重複している。壁溝・柱穴・貯蔵穴はいずれも未検出である。								
カマド	位置・形状	東壁南寄り・凸字形				主軸方位	東-5度-南		
規模	全長 125cm 屋外長 116cm 屋内長 9cm 袖間幅 85cm 燃烧部幅 95cm 煙道幅 33cm								
備考	焚口は掘り込み等は不明である。袖は右袖のみ残存し、第235図3の土師器の甕を伏せて構築している。燃烧部から煙道部底面は同レベルで、燃烧部中央に灰面、煙道部南壁に焼土を検出した。								

遺構名称	G区第134号住居跡		位置	47～50-G-60～62グリッド内		分類	—	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	3.50m×(4.90)m	主軸方位	東-3度-北	残存深度	約 30cm程		

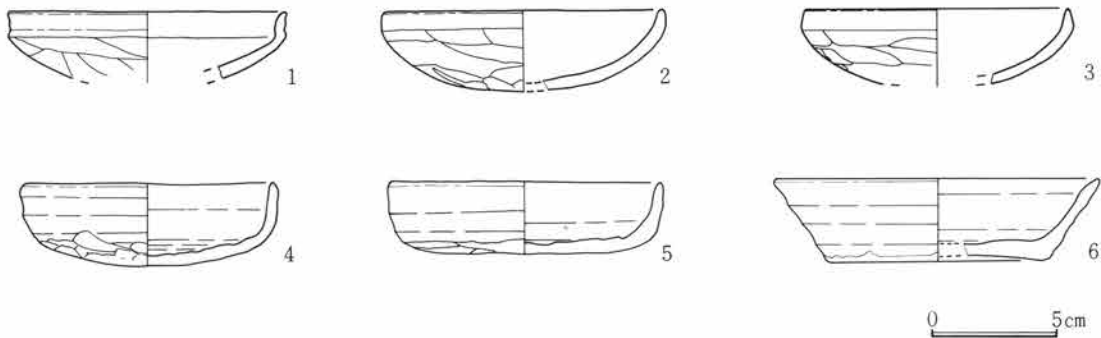
第79号住居跡及び第134号住居跡は、南北農道下の調査で検出したものであるが、第79号住居跡のカマド東側半分は、先行調査で検出した。

第79号住居跡と第134号住居跡の新旧関係は、セクション面の観察から第134号住居跡の方が新しいと判断した。遺物のあり方は、土師器主体の一群と、灰釉陶器・羽釜と伴う一群の2時期あり、それぞれ土師器主体の一群が第79号住居跡に、灰釉陶器・羽釜の一群が第134号住居跡との関係が考えられる。しかし唯一検出されたカマドは、袖に土師器の甕を使用している上、カマド覆土中からも近似の遺物を出土していることから、明らかに第79号住居跡に伴うものである。このことは新しい時期の第134号住居跡のカマドが失われている

第3章 検出された遺構・遺物

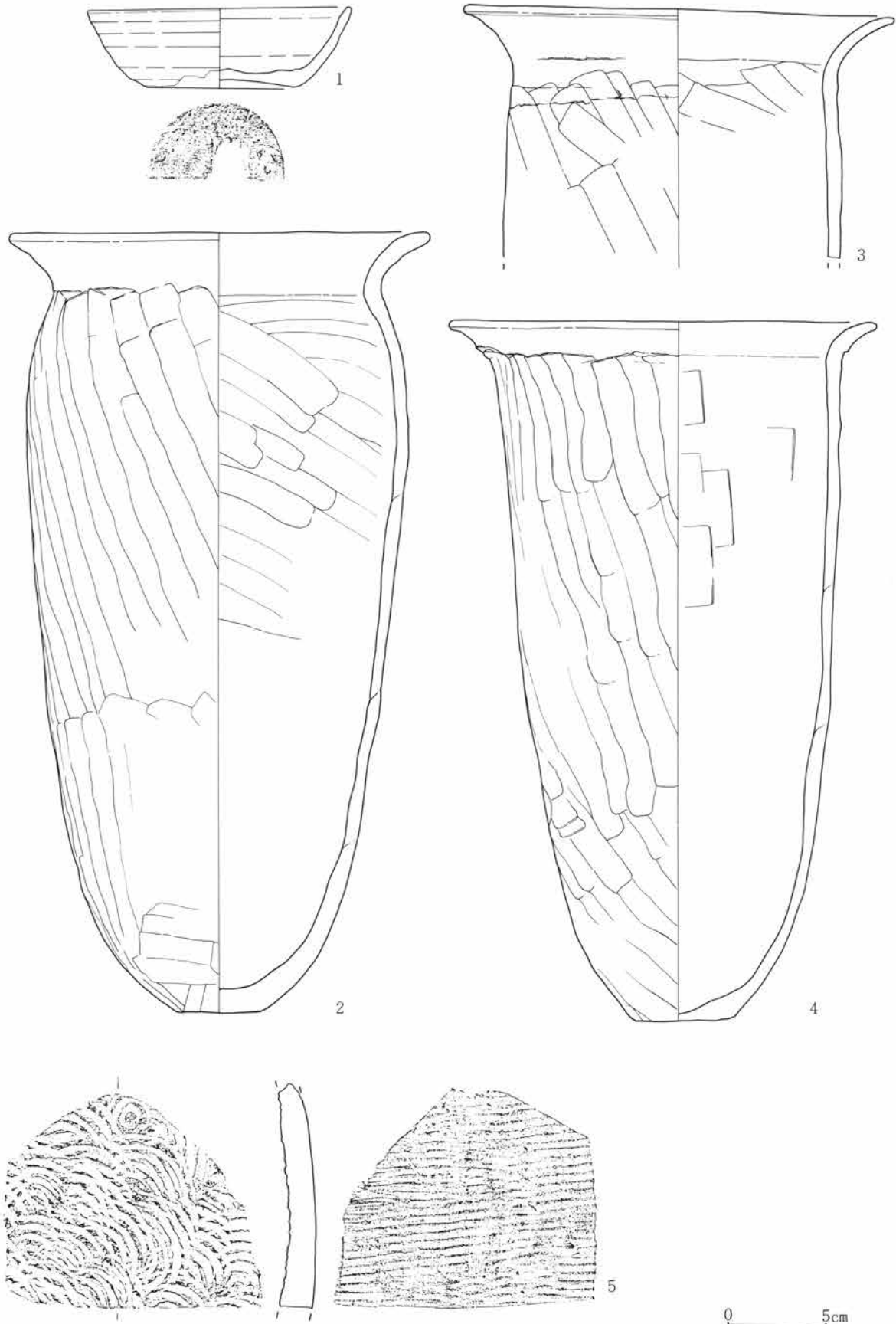


第266図 G区第79・134号住居跡実測図

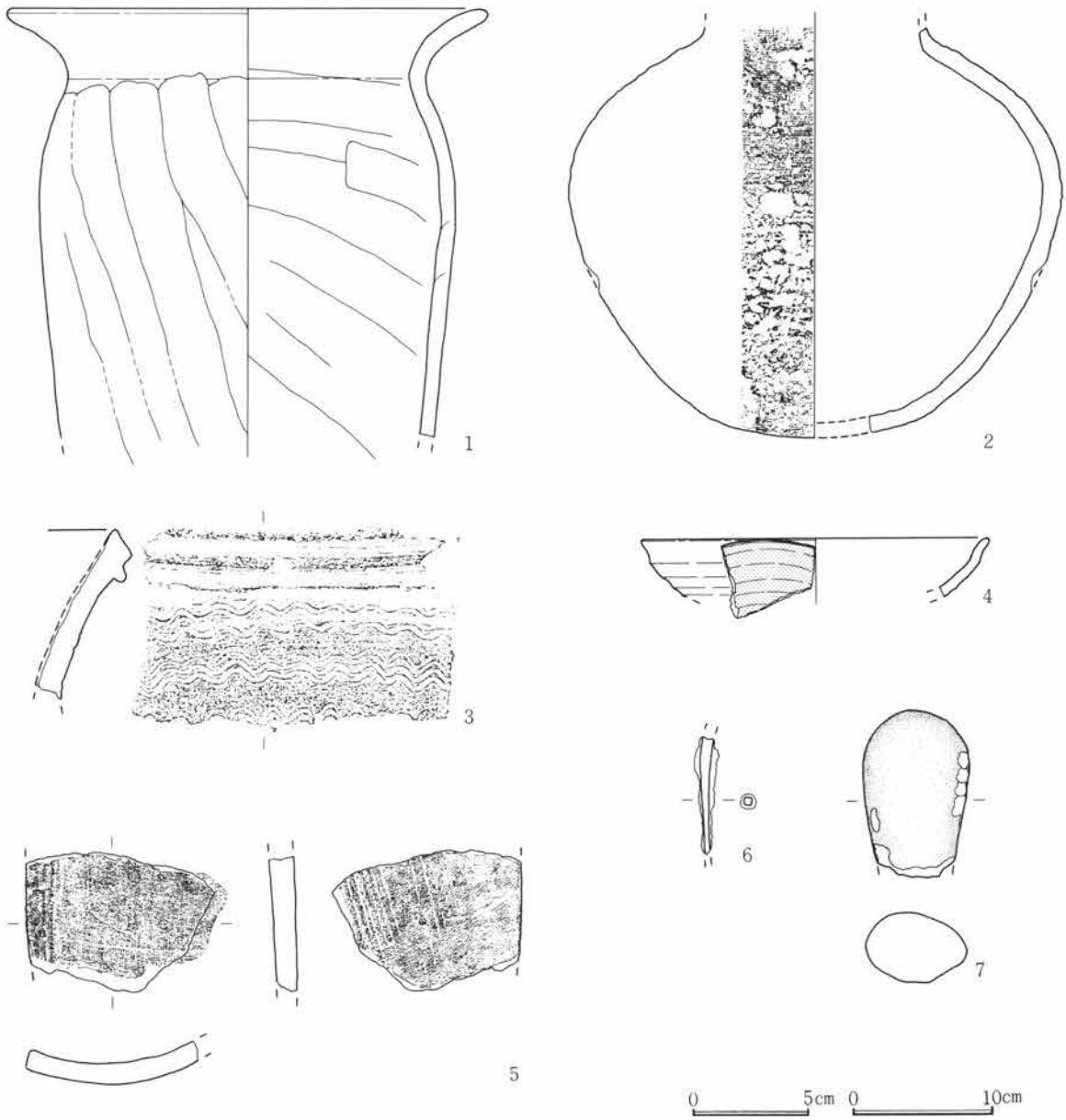


第267図 G区第79号住居跡出土遺物実測図

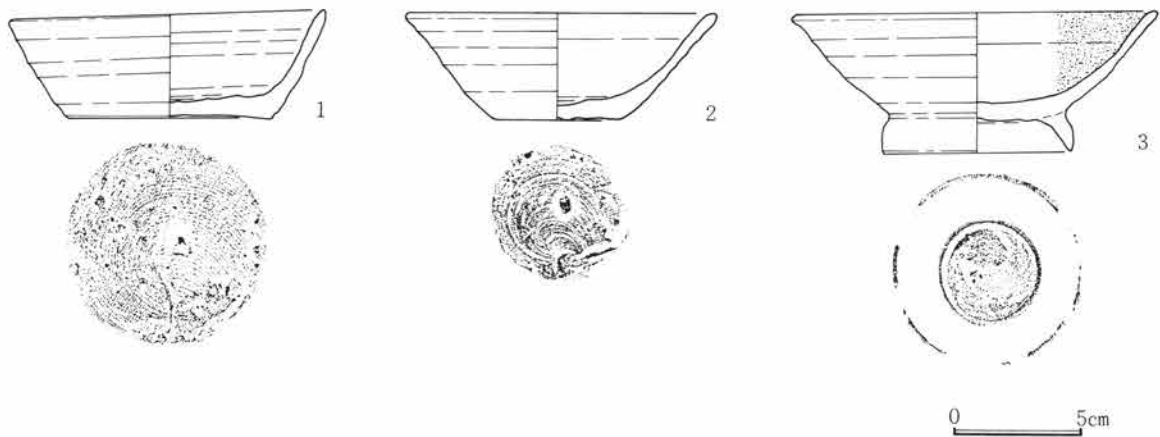
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第268図 G区第79号住居跡出土遺物実測図

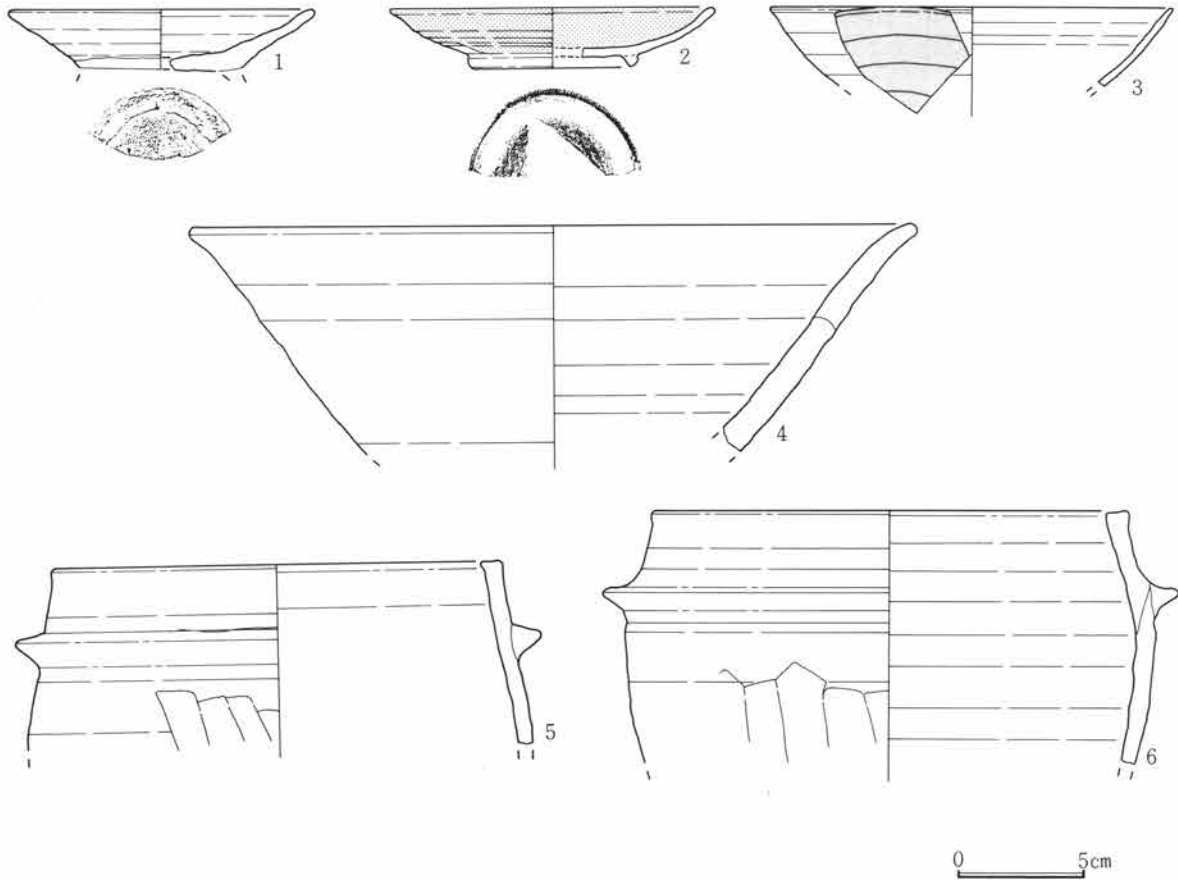


第269図 G区第79号住居跡出土遺物実測図



第270図 G区第134号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第271図 G区第134号住居跡出土遺物実測図

ることになるが、最初からなかったものか、何らかの攪乱によって失われたものかは不明である。

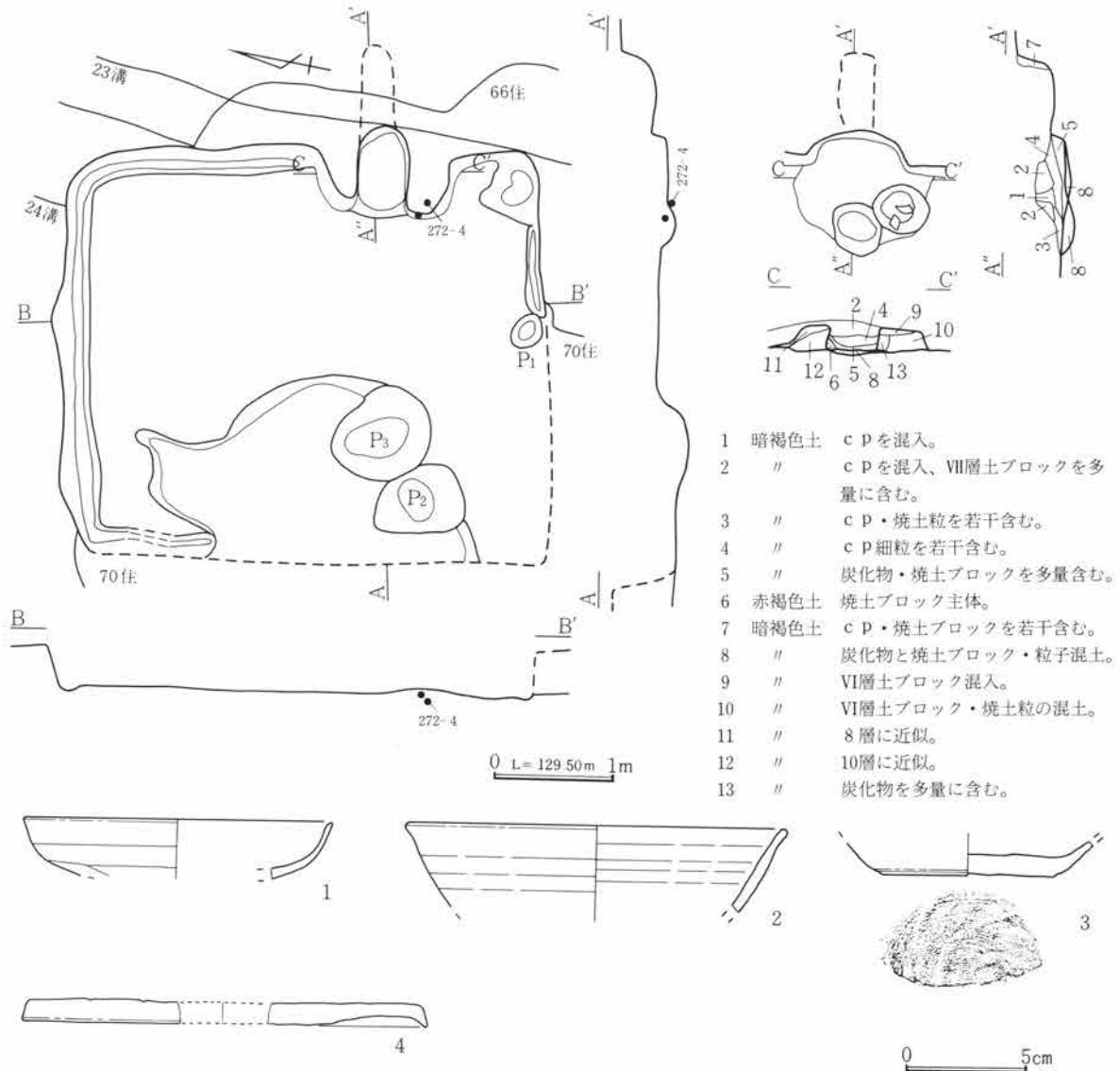
掘り方は、第79号住居跡に検出されている。南東コーナー部が約10cm程掘り込まれたもので、南壁との接点に円形の小ピットを検出した。

遺物は、第79号住居跡からの出土が顕著で、特にカマド焚口部に密集して出土した。これらは土師器の甕が主体で、復元したものも含めて4個分に及んでいる。

遺構名称	G区第80号住居跡		位置	9～11-G-52～54グリッド内		分類	A-7	時期	VI?
平面形態	隅丸方形	規模	3.40m×4.00m	主軸方位	東-11度-北	残存深度	約1cm程		
備考	壁は南西コーナー部を除きほぼ検出した。壁溝も南西コーナー部及びカマド部を除き検出した。幅は約12～35cm、深度約7cm程である。柱穴は未検出で、貯蔵穴は南東コーナー部で径約55cmである。								
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-10度-北			
規模	全長 145cm 屋外長 88cm 屋内長 57cm 袖間幅 117cm 燃烧部幅 46cm 煙道幅 1cm								
備考	焚口はごく浅い掘り込みで灰面は未検出。袖は両袖共暗褐色土で構築し、構築材等は検出されていない。燃烧部には焼土等は検出されず、1段、段を有して屋外に煙道が延びていたと考えられる。								

当住居跡の掘り方は、西壁側に顕著であり、VII層上面に構築された床面から、深度約15cm程の不整形の掘り込みが行われている。掘り方充填土は、VII層土ブロック混じりの暗褐色土であり、掘り方掘削時の土を埋め戻したのは明らかである。また、掘り方南寄りからは、径約90cm程の不整円形のピットが2個検出されている。遺物は掘り方内出土は皆無に等しく、大半が覆土中からの出土である。

第3章 検出された遺構・遺物



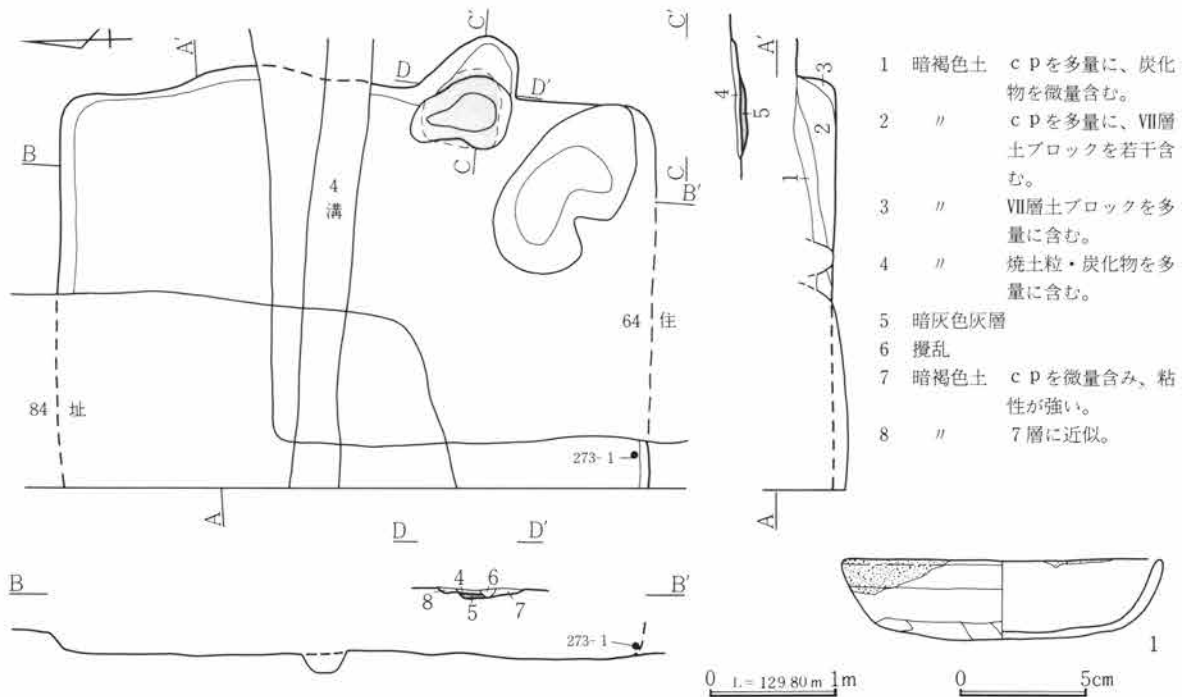
第272図 G区第80号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第81号住居跡		位置	40～42-G-58～60グリッド内		分類	C-11	時期	V?
平面形態	長方形?	規模	1m×4.70m	主軸方位	東-1度-南	残存深度	約30cm程		
備考	東壁及び北壁の一部を検出。壁溝・柱穴は残存部においては、検出されていない。貯蔵穴は南東コーナー部にあたる位置に検出され、楕円形を呈し、規模は長軸約150cm、深度約8cmである。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-14度-南			
規模	全長 57cm 屋外長 50cm 屋内長 47cm 袖間幅 1cm 燃烧部幅 77cm 煙道幅 1cm								
備考	カマドは掘り方が残存している。焚口には不整楕円形の掘り込みがあり、灰面が覆っていた。袖の痕跡は全く検出されず、燃烧部に焼土等も認められていない。								

当住居跡は、西側が一部南北農道下にかかり、その他、第64号住居跡、第84号址、第4号溝等との重複によって上面の大半を攪乱されている。

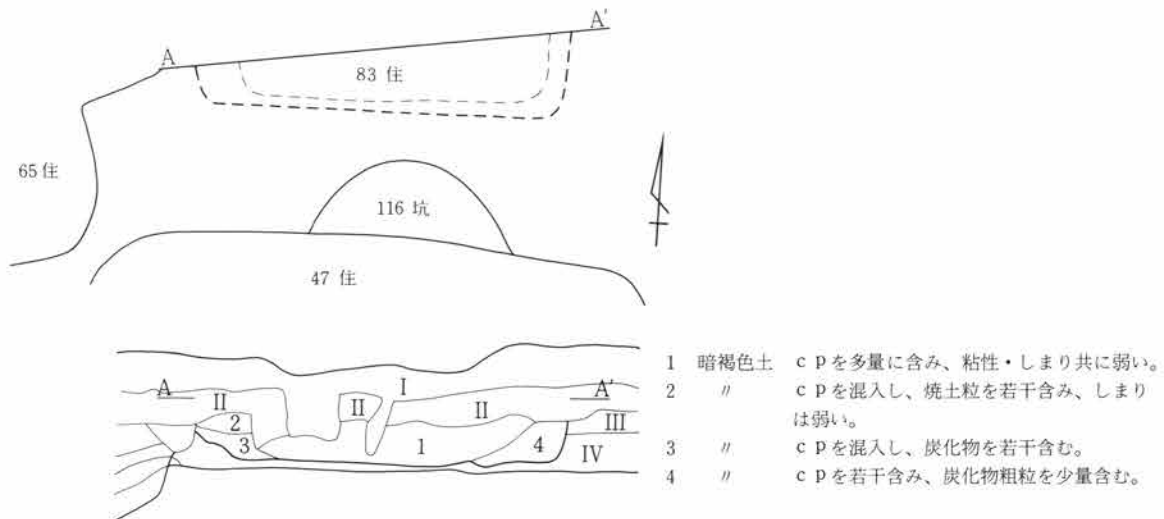
掘り込みはVII層上面までで、掘り方は全く検出されていない。遺物は、残存部床面上及びカマド掘り方内からは出土せず、覆土中からわずかに出土したものである。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第273図 G区第81号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第83号住居跡		位置	44-G-55・56グリッド内		分類	—	時期	—
平面形態	方 形 ？	規模	—m×3.1m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約	0cm程	



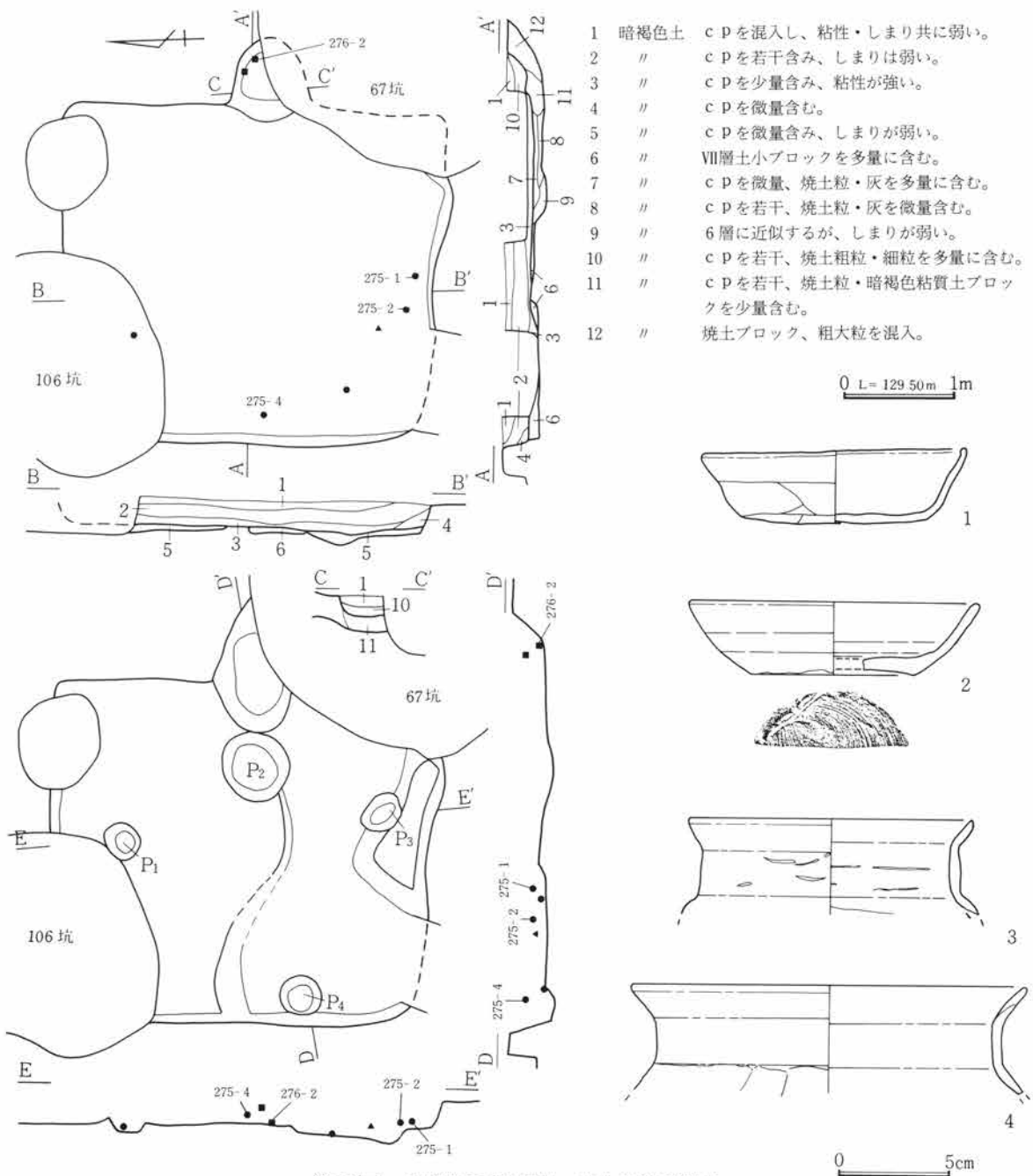
第274図 G区第83号住居跡実測図

当住居跡は大半が東西農道下にかかっており、農道側面の土層面では、掘り込みが明確に認められた。しかし、農道下の調査時、確認面を先行調査部分のレベルまで下げたため、検出できないまま終わってしまった。したがって形態が認識できるのは、先行調査部分だけである。また、土層断面の観察から、当住居跡はIII層中または上面から掘り込まれたものと考えられ、上面はII層によって攪乱されている。

当住居跡は西側で第65号住居跡と重複している。当住居跡との新旧関係は、同断面の観察から第65号住居跡のカマドが、当住居跡を切っているのは明らかであるため、当住居跡が先行するものと判断した。

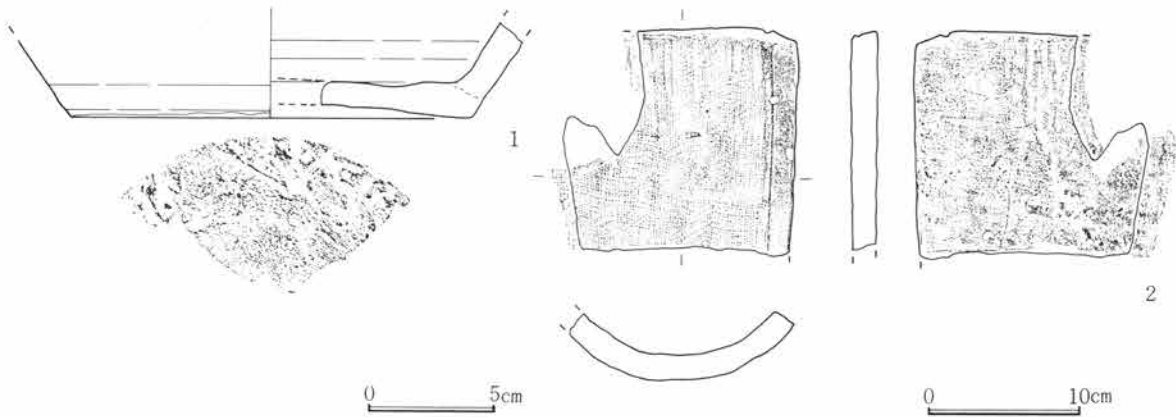
第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第85号住居跡	位置	10~12-G-51~53グリッド内	分類	A-3	時期	VI
平面形態	隅丸長方形?	規模	(3.00)m×-m	主軸方位	東-6度-南	残存深度	約15cm程
備考	住居中央部に試掘時のトレンチが入り、北西コーナー部で第105号土坑と重複し、カマド南側半分が第67号土坑によって攪乱されている。壁溝・柱穴・貯蔵穴は、残存部には未検出である。						
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央・馬蹄形			主軸方位	東-3度-南	
規模	全長122cm 屋外長65cm 屋内長57cm 袖間幅- cm 燃焼部幅- cm 煙道幅- cm						
備考	焚口は浅い掘り込みで、掘り方はさらに屋内に延びている。燃焼部北壁際に瓦が据えられたような出土状態を呈して検出されているが、支脚であるかどうかは不明。						



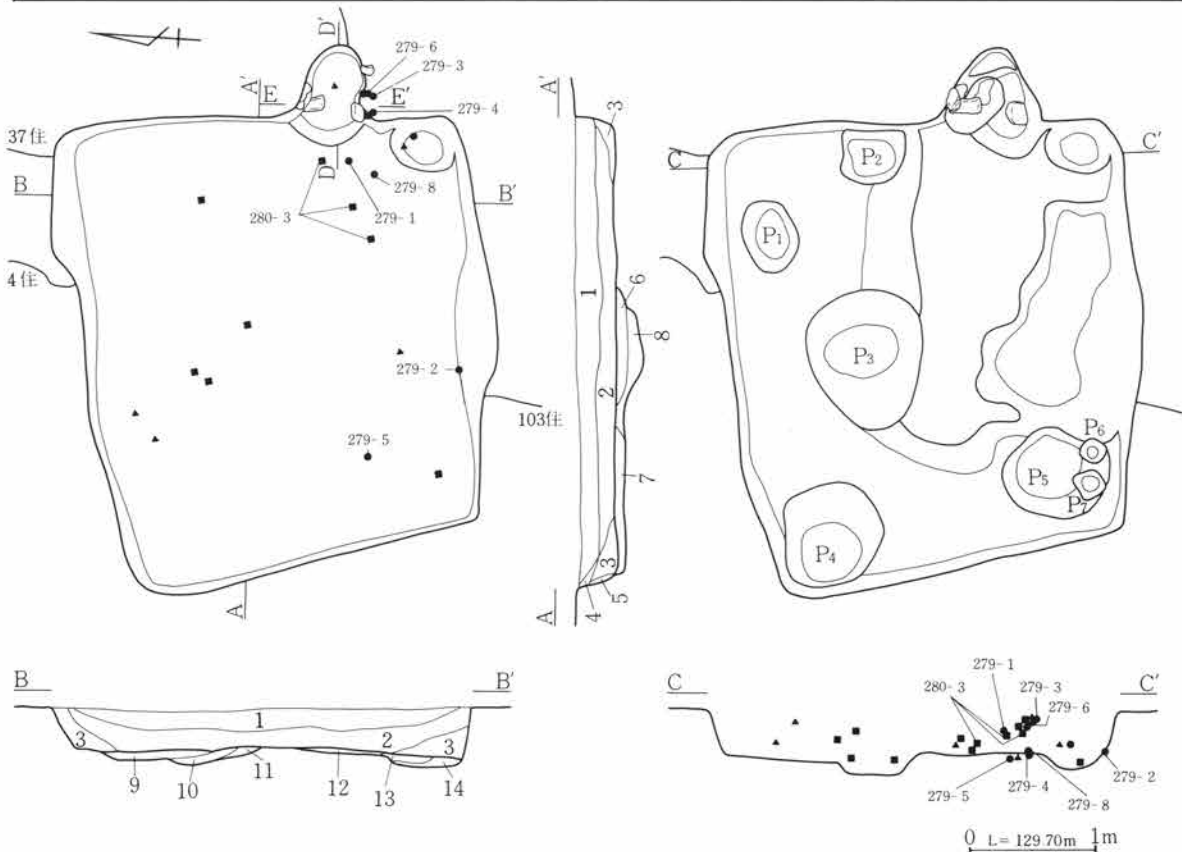
第275図 G区第85号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



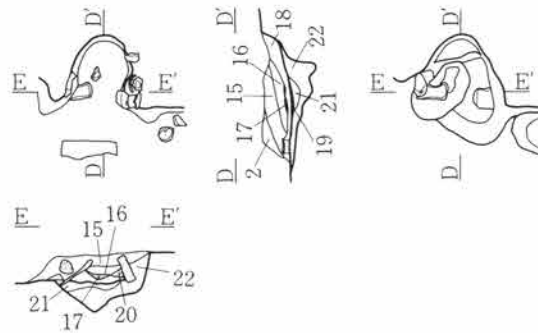
第276図 G区第85号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第89号住居跡	位置	7～9-G-70～72グリッド内	分類	B-6	時期	VII
平面形態	隅丸長方形	規模	3.60m×3.20m	主軸方位	東-8度-北	残存深度	約30cm程
備考	東側で第37号住居跡と重複しているが、壁はほぼ全周検出した。壁溝は掘り方でも未検出である。柱穴は、掘り方段階でピットが7個検出され、P ₁ ・P ₄ ・P ₅ は配置から可能性がある。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-7度-南	
規模	全長 70cm 屋外長 55cm 屋内長 15cm 袖間幅 95cm 燃烧部幅 50cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は半円形状の掘り込みで、袖は両袖共瓦を内傾させて据え構築している。特に左袖は瓦2枚と礫を組み合わせている。燃烧部中央北寄りに礫を据えて支脚としている。						



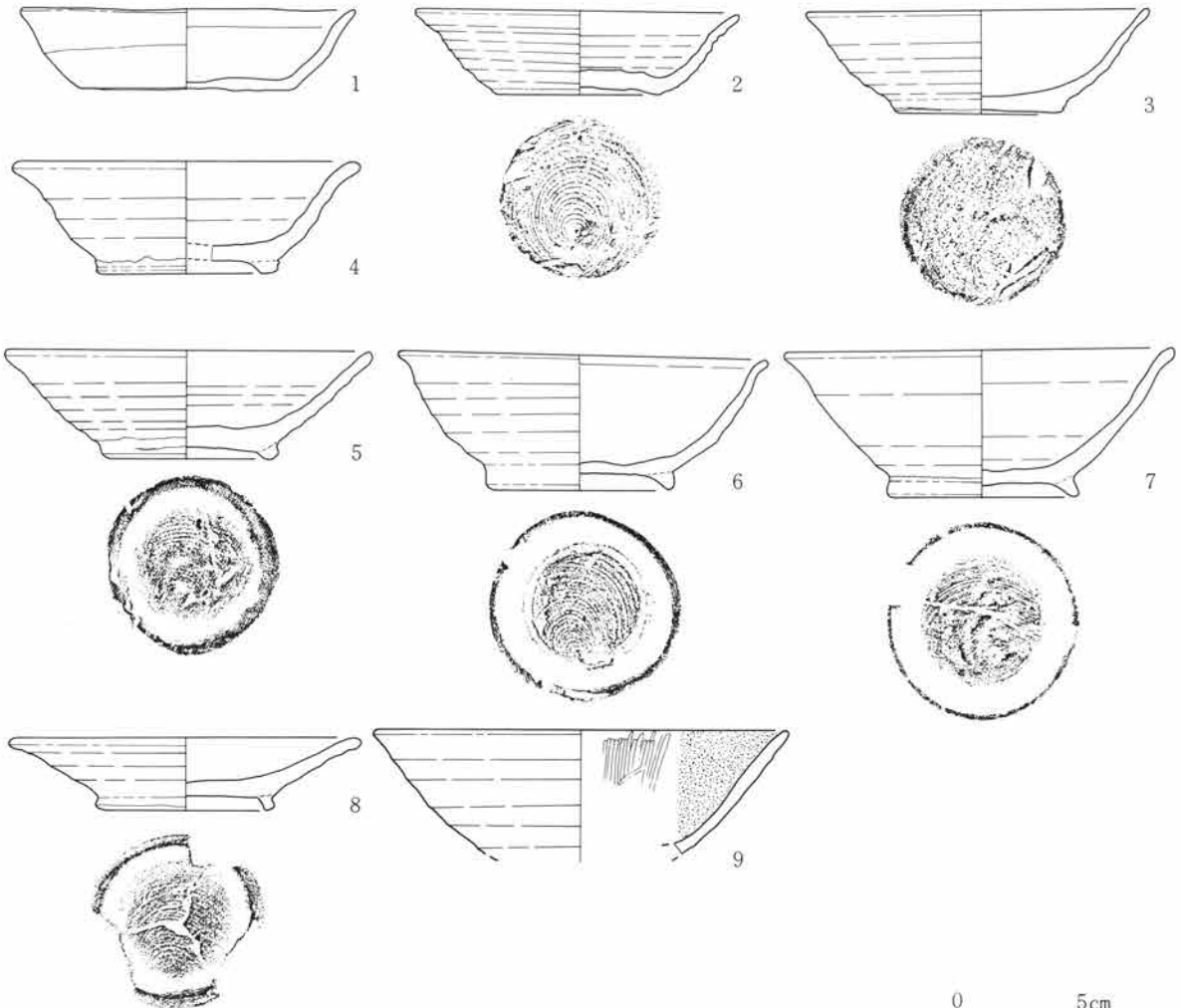
第277図 G区第89号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



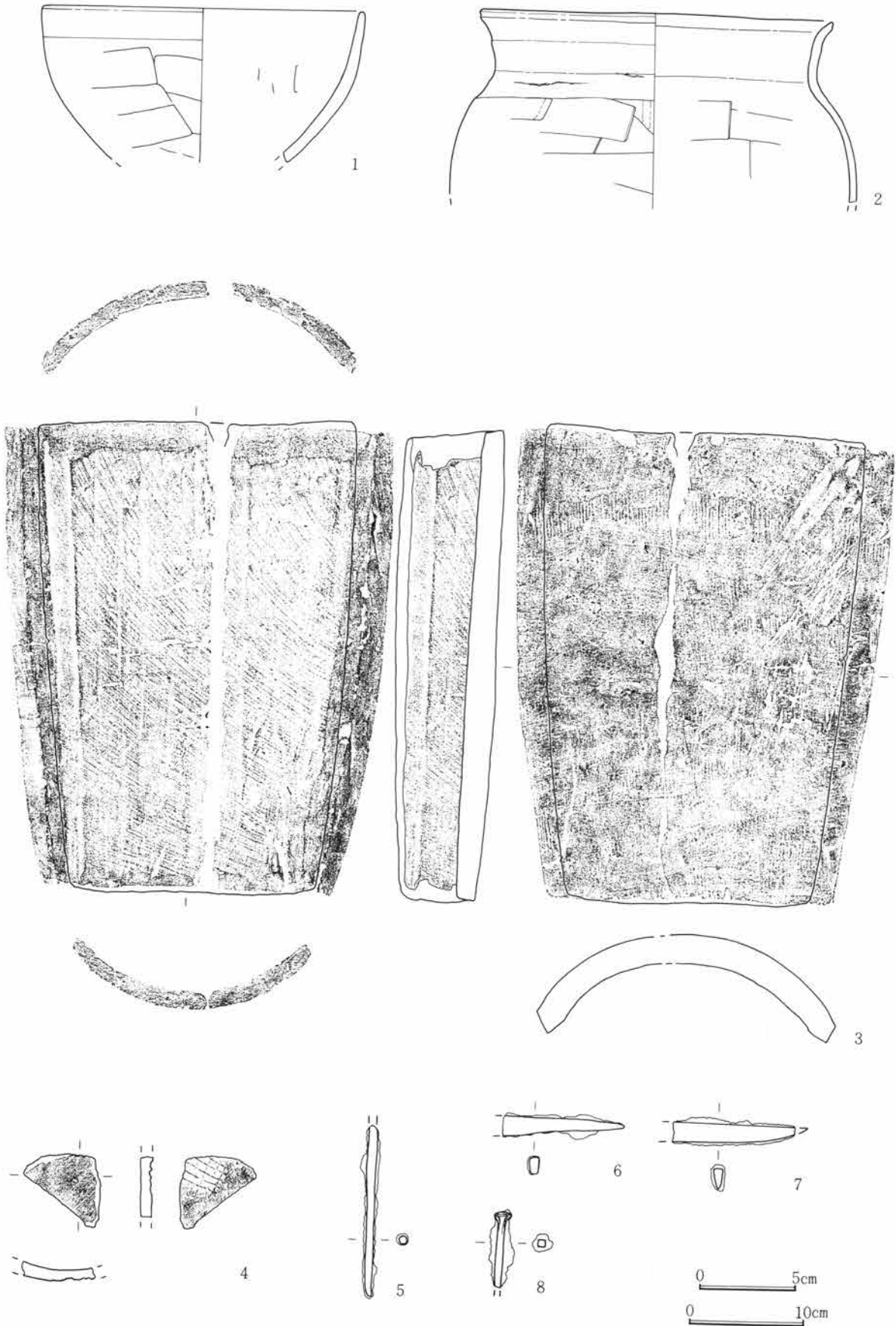
- | | | | |
|--------|------------------------|--------------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | c P・VII層土粒を多量に含む。 | 12 // | c Pを若干、焼土粒を多量に含む。 |
| 2 // | c Pを少量、VII層土粒を多量に含む。 | 13 // | c P粗粒、炭化物を若干含む。 |
| 3 // | c Pを少量、炭化物を微量含む。 | 14 // | 7層に近似。 |
| 4 // | 3層に近似。 | 15 // | c P・VII層土粗粒を混入。 |
| 5 // | c Pを含まず粘性が強い。 | 16 // | c Pを若干、焼土粒・炭化物を混入。 |
| 6 // | c Pを若干含む。 | 17 黒色灰層 | |
| 7 // | c Pを含まず、炭化物を混入。 | 18 暗褐色土 | c Pを微量、焼土粒・炭化物を混入。 |
| 8 // | c Pを微量、焼土粒を若干含み、粘性が強い。 | 19 黒色灰層 | |
| 9 // | 焼土粒、炭化物を若干含む。 | 20 赤褐色焼土ブロック | |
| 10 // | c P・炭化物ブロックを若干含む。 | 21 暗褐色土 | 灰・焼土ブロックを多量に含む。 |
| 11 // | c Pを若干含む。 | 22 // | c Pを含まず、焼土粒・灰を微量含む。 |

第278図 G区第89号住居跡実測図

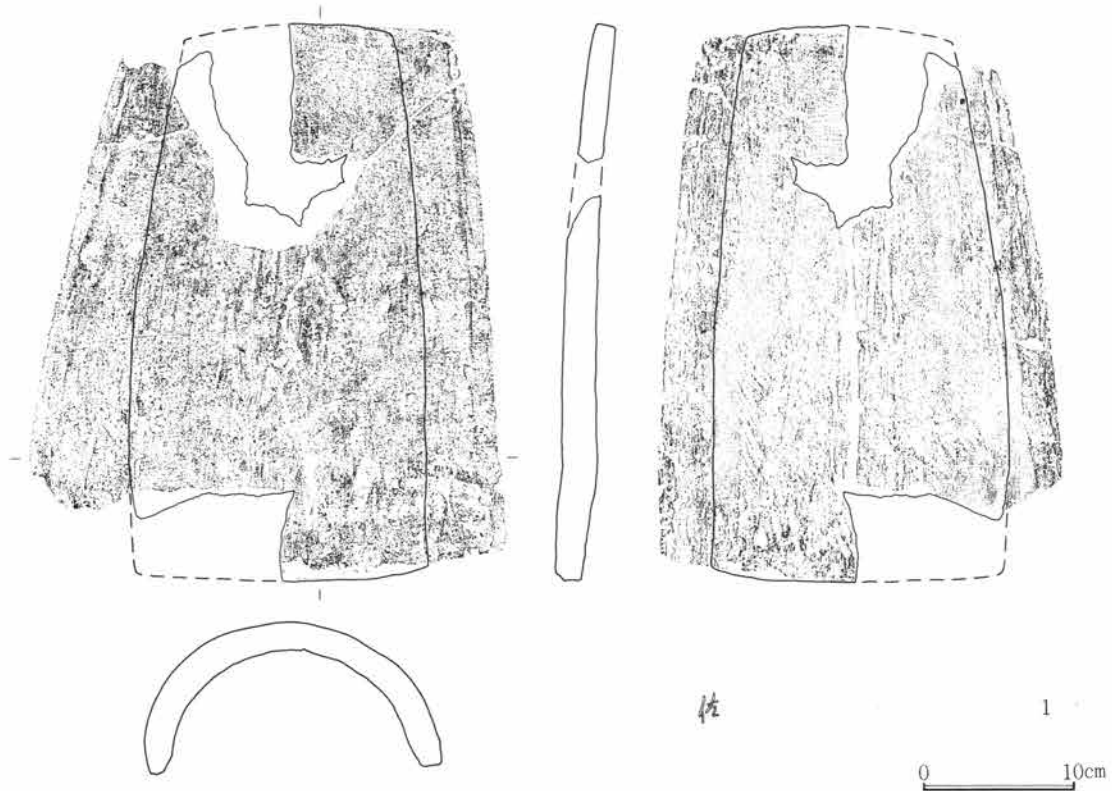


第279図 G区第89号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

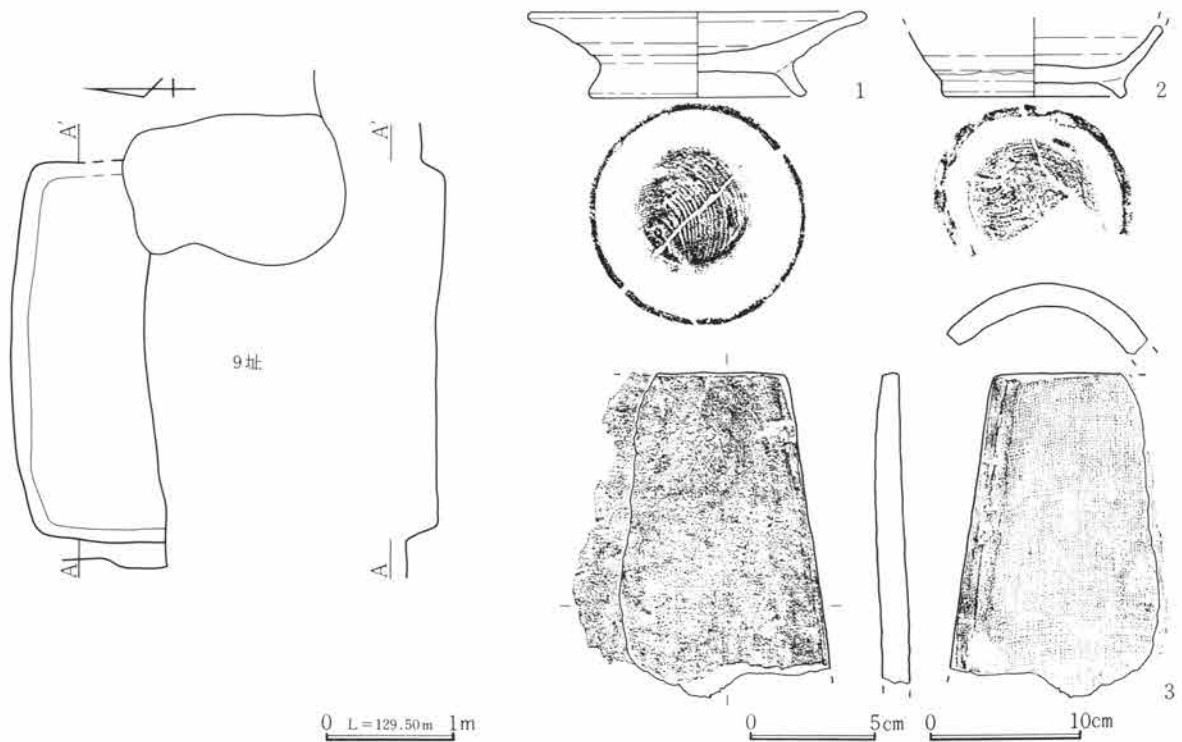


第280図 G区第89号住居跡出土遺物実測図



第281図 G区第89号住居跡出土遺物実測図

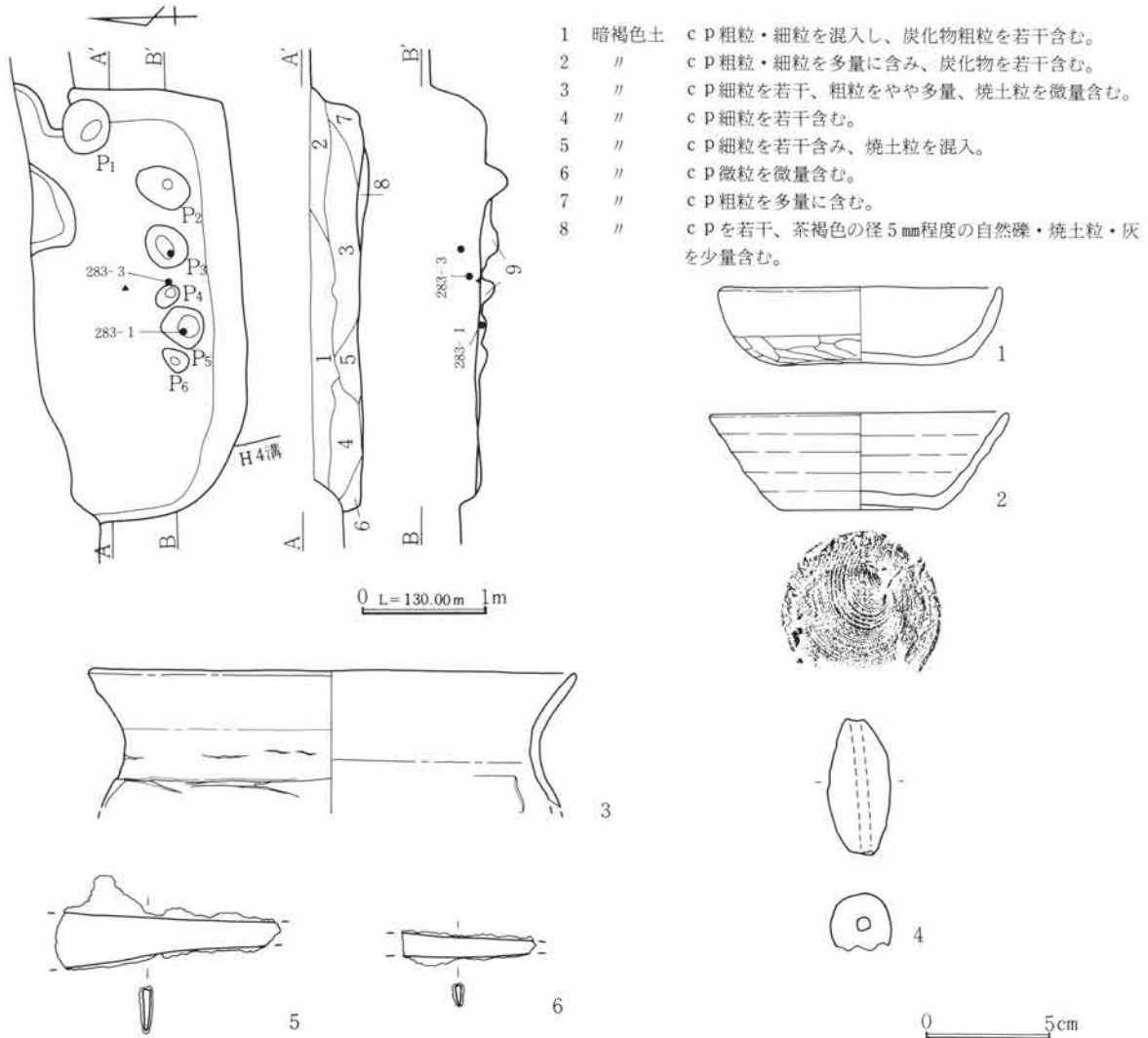
遺構名称	G区第90号住居跡	位置	8・9-G-51・52グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	方形？	規模	3.0m×—m	主軸方位	東—0度—南	残存深度	約20cm程



第282図 G区第90号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

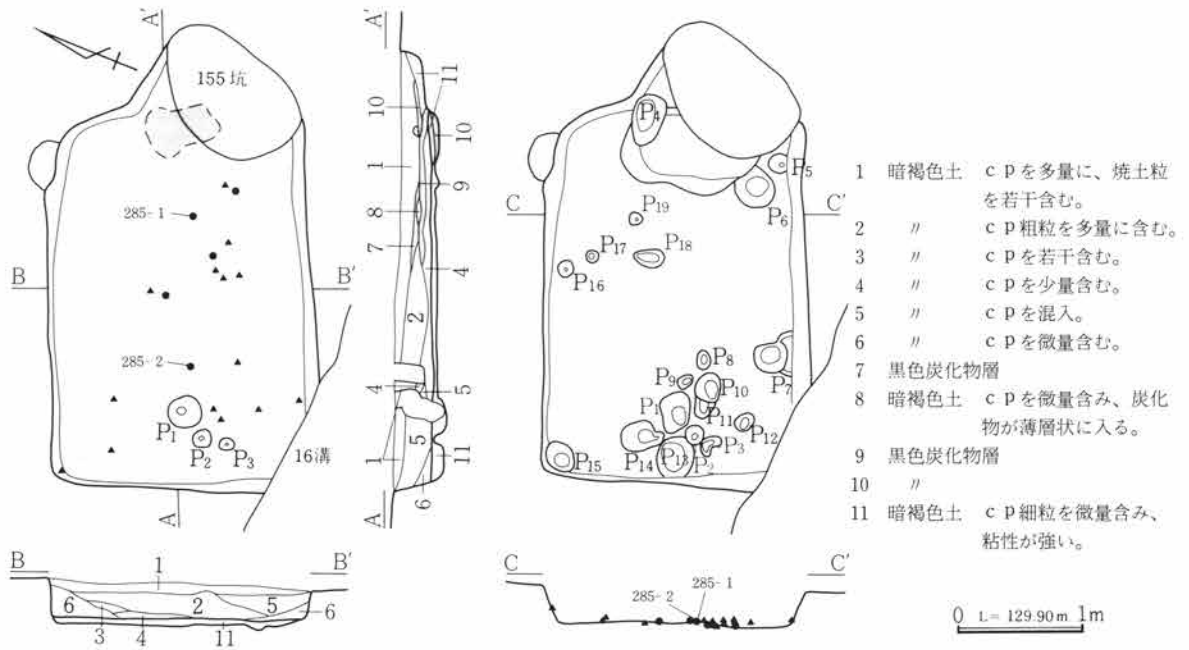
遺構名称	G区第91号住居跡	位置	48・49-G-51~53グリッド内	分類	—	時期	VI
平面形態	隅丸方形	規模	3.40m×—m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 30cm程
備考	北半は攪乱を受け、カマドは南半の痕跡が残っているにすぎない。掘り方段階で南壁に沿って円形ピットが5個並んで検出されたが、機能は不明である。壁溝・貯蔵穴は未検出である。						



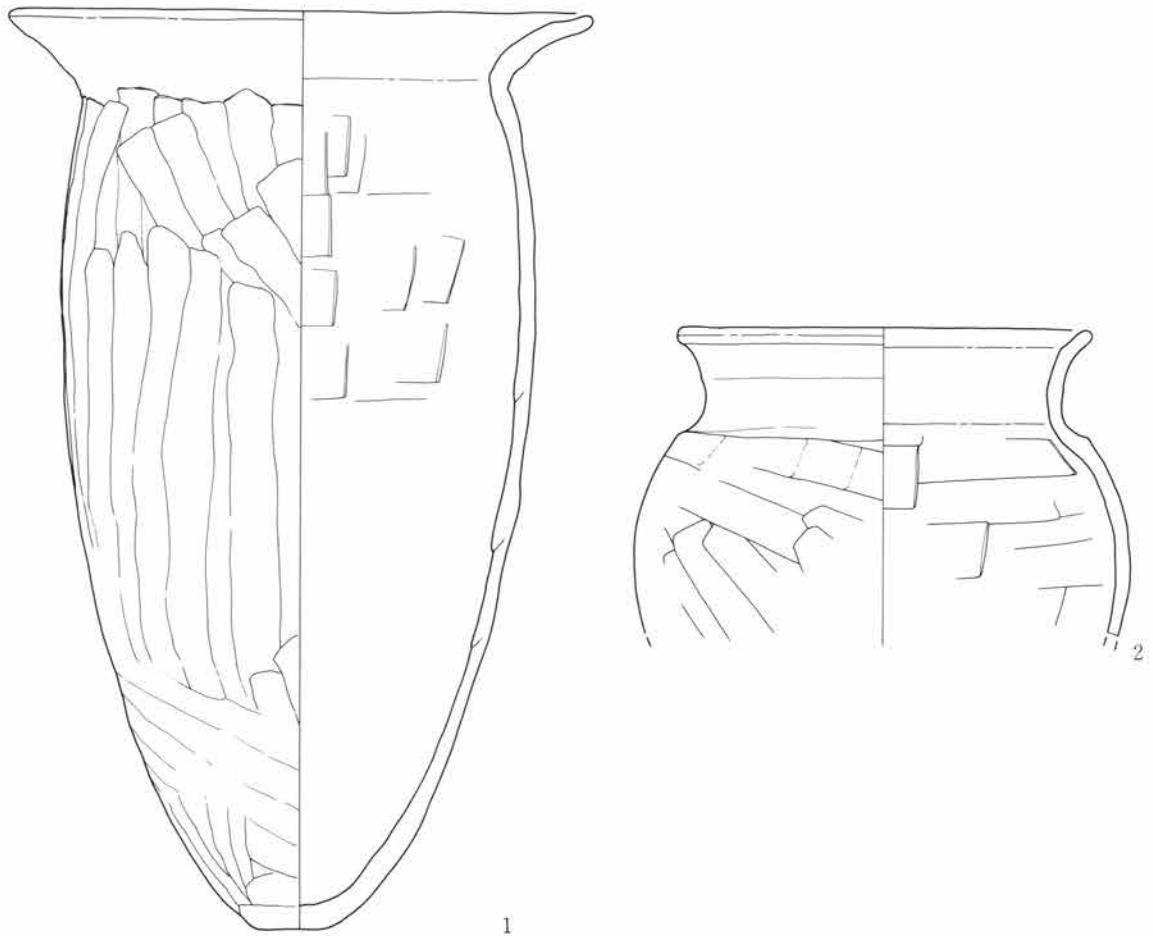
第283図 G区第91号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第92号住居跡	位置	42・43-G-64~66グリッド内	分類	B-1	時期	IV
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×2.10m	主軸方位	東- 22度 -北	残存深度	約 30cm程
備考	カマド部で第155号土坑と重複し、南西コーナーは第16号溝との重複で失われている。壁溝は未検出であり、掘り方段階で西寄りに小ピットを多数検出したが、配置に規則性はない。						
カマド	位置・形状	東壁中央・三角形状？			主軸方位	— 度 —	
規模	全長 — cm	屋外長 — cm	屋内長 — cm	袖間幅 — cm	燃焼部幅 — cm	煙道幅 — cm	
備考	焚口と思われる位置に灰面を検出した。掘り方は、焚口部に半円形状の浅い掘り込み、及び左袖部に袖構築材据え方と思われる楕円形ピットを検出した。						

第3章 検出された遺構・遺物



第284図 G区第92号住居跡実測図

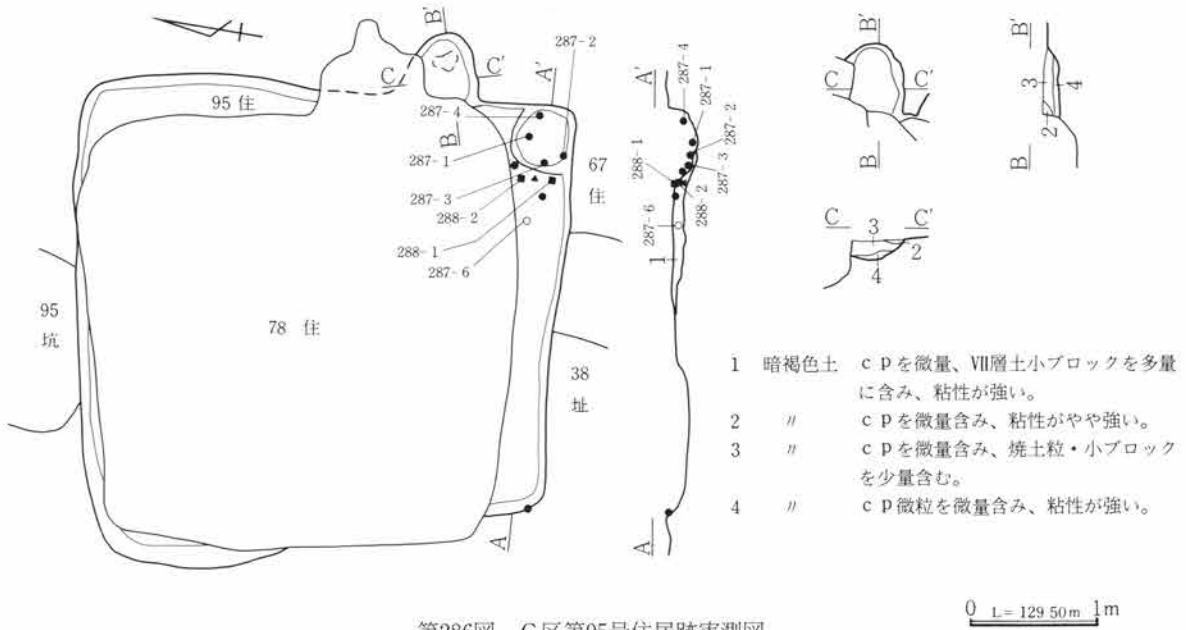


第285図 G区第92号住居跡出土遺物実測図

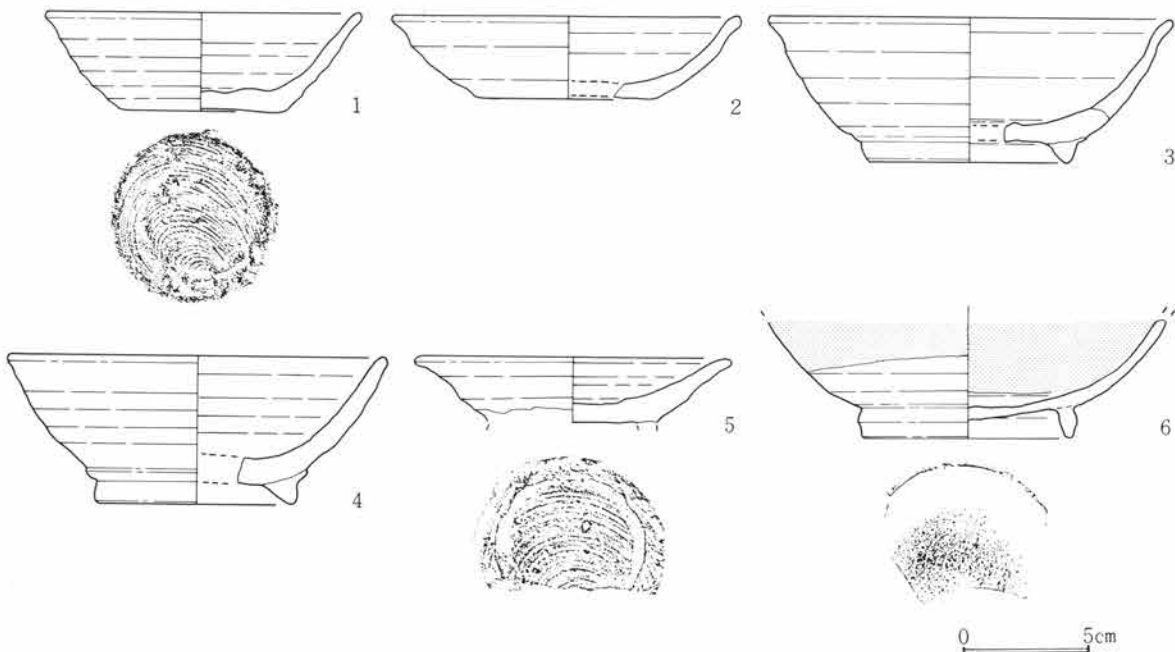
0 5cm

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第95号住居跡	位置	9～11-G-65～68グリッド内	分類	A-9	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	3.30m×3.80m	主軸方位	東-6度-北	残存深度	約20cm程
備考	西壁の一部を除き、ほぼ全周を検出。壁溝は残存部には検出されず、柱穴の有無は全く不明である。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置し、円形を呈し、規模は径約55cm、深度約14cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東-6度-北	
規模	全長(51)cm 屋外長(51)cm 屋内長—cm 袖間幅—cm 燃烧部幅(65)cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は重複によって失われ、袖部も大半は失われているが、わずかに残存した右袖部にも、構築材等の痕跡は認められない。燃烧部中央東寄りにわずかに灰面を検出した。						

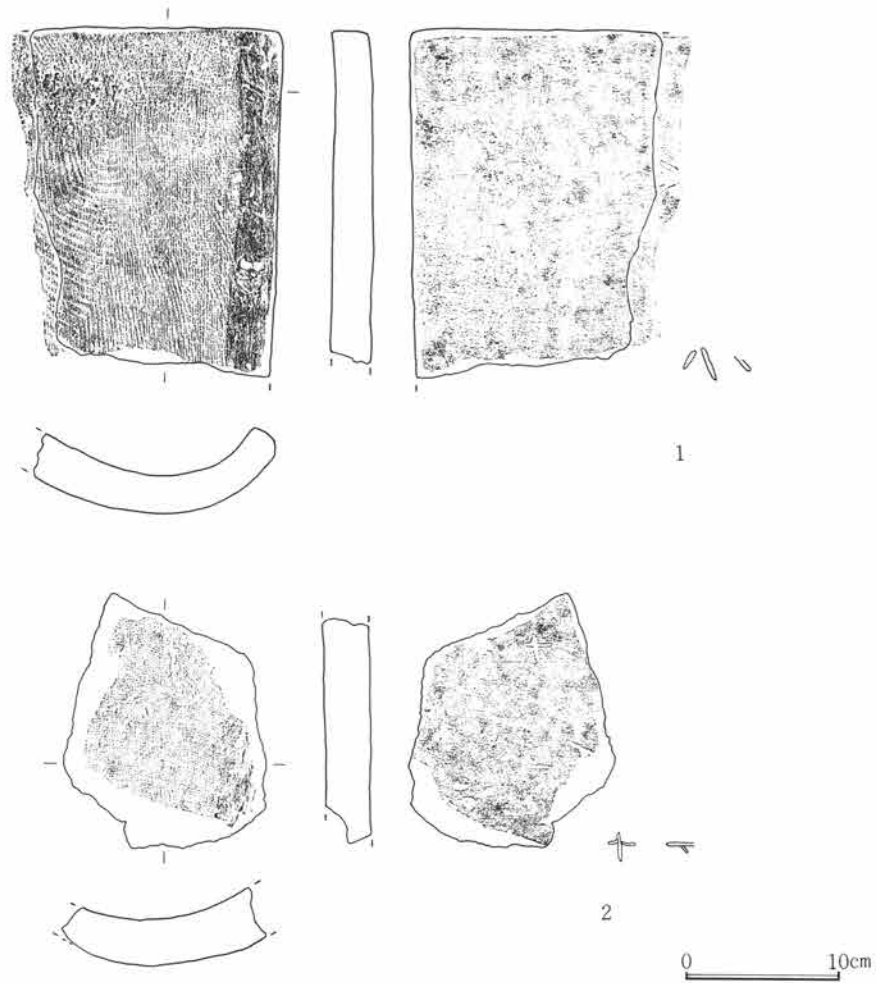


第286図 G区第95号住居跡実測図



第287図 G区第95号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第288図 G区第95号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、ほぼ同規模の第78号住居跡と重複し、第78号住居跡の掘り込みが、当住居跡よりも約15cm程深いため、中央部分は全く残存していない。したがって新旧関係は、当住居跡→第78号住居跡と判断される。

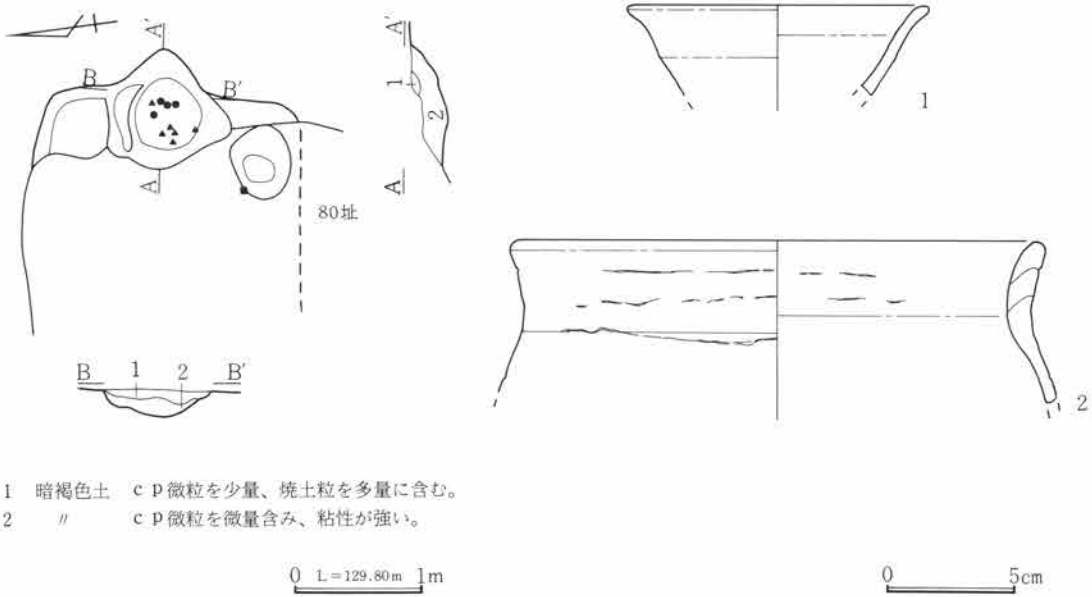
遺物出土は、カマド内からわずかに出土した他は、全て貯蔵穴内及び周囲から出土したものであり、特に貯蔵穴西の上端から出土した瓦2枚と礫は、廃棄されたものではなく据えられたものと思われる。

遺構名称	G区第98号住居跡		位置	32・33-G-71・72グリッド内		分類	—	時期	VIII			
平面形態	隅丸方形	規模	2.20m×—m	主軸方位	東—6度—南	残存深度	約5cm程					
備考	壁は、第80号址と第31号溝との重複によって、南壁及び西壁が失われている。壁溝は、残存部には検出されていない。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置し円形で、径約58cm、深度約16cmである。											
カマド	位置・形状	東壁中央・三角形状				主軸方位	東—6度—南					
規模	全長	90cm	屋外長	30cm	屋内長	60cm	袖間幅	—cm	燃烧部幅	70cm	煙道幅	—cm
備考	焚口・燃烧部を含め、不整形の掘り方を有している。この掘り込み内から焼土・灰等は検出されていない。袖は両袖部共に痕跡も認められない。											

当住居跡の掘り方は、西側に若干認められるが、南限は第80号址底面とのレベル差がないため不明である。また、西側の限界についても、第31号溝の底面レベルが当住居掘り方面よりも低位であり、不明である。

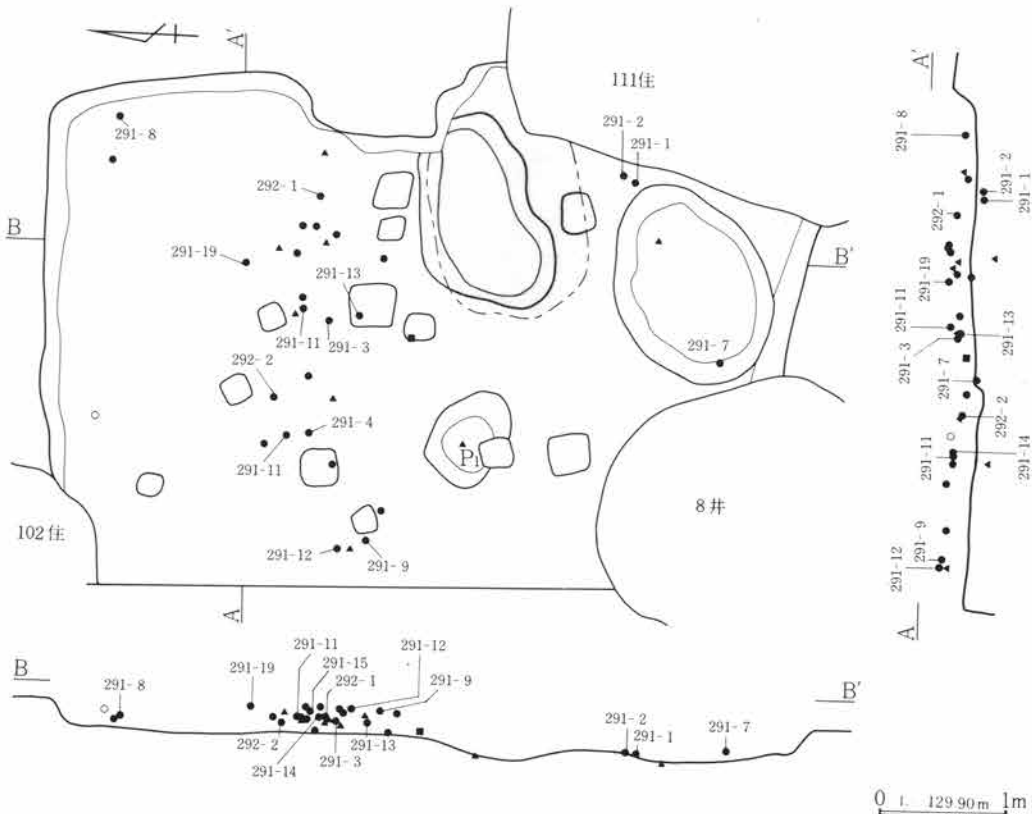
遺物は覆土中からわずかに出土した。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



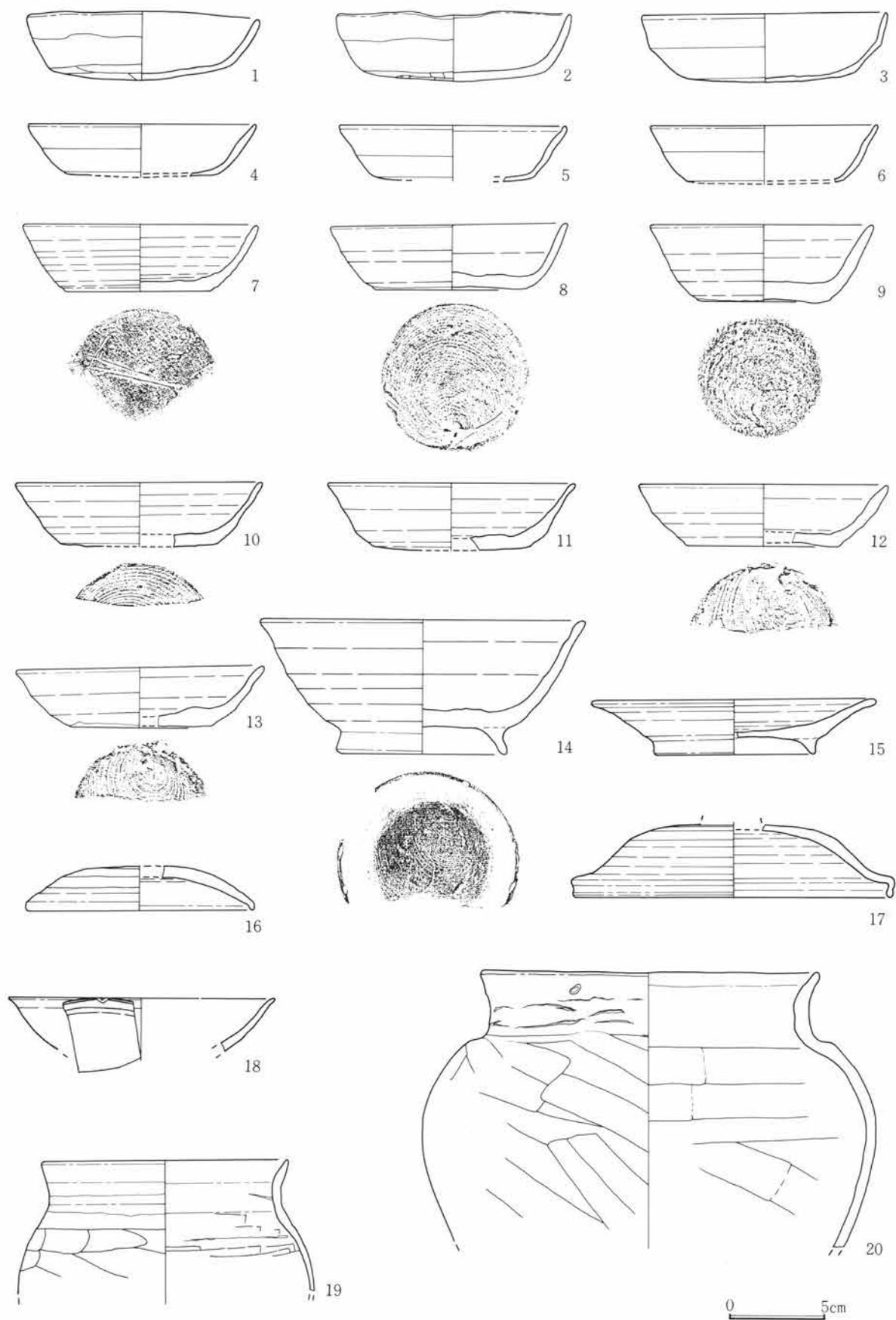
第289図 G区第98号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第100号址	位置	38～41-G-67～69グリッド内	分類	C-4	時期	V
平面形態	隅丸長方形?	規模	(4.10)m×5.90m	主軸方位	東-0度-南	残存深度	約 20cm程
備考	壁は、北東コーナー部が東側に「コ」字状に突出している。床面はⅦ層土上面に構築されたものと考えられる。壁溝・柱穴共に検出されず、南壁に接して検出した楕円形の土坑が貯蔵穴と思われる。						

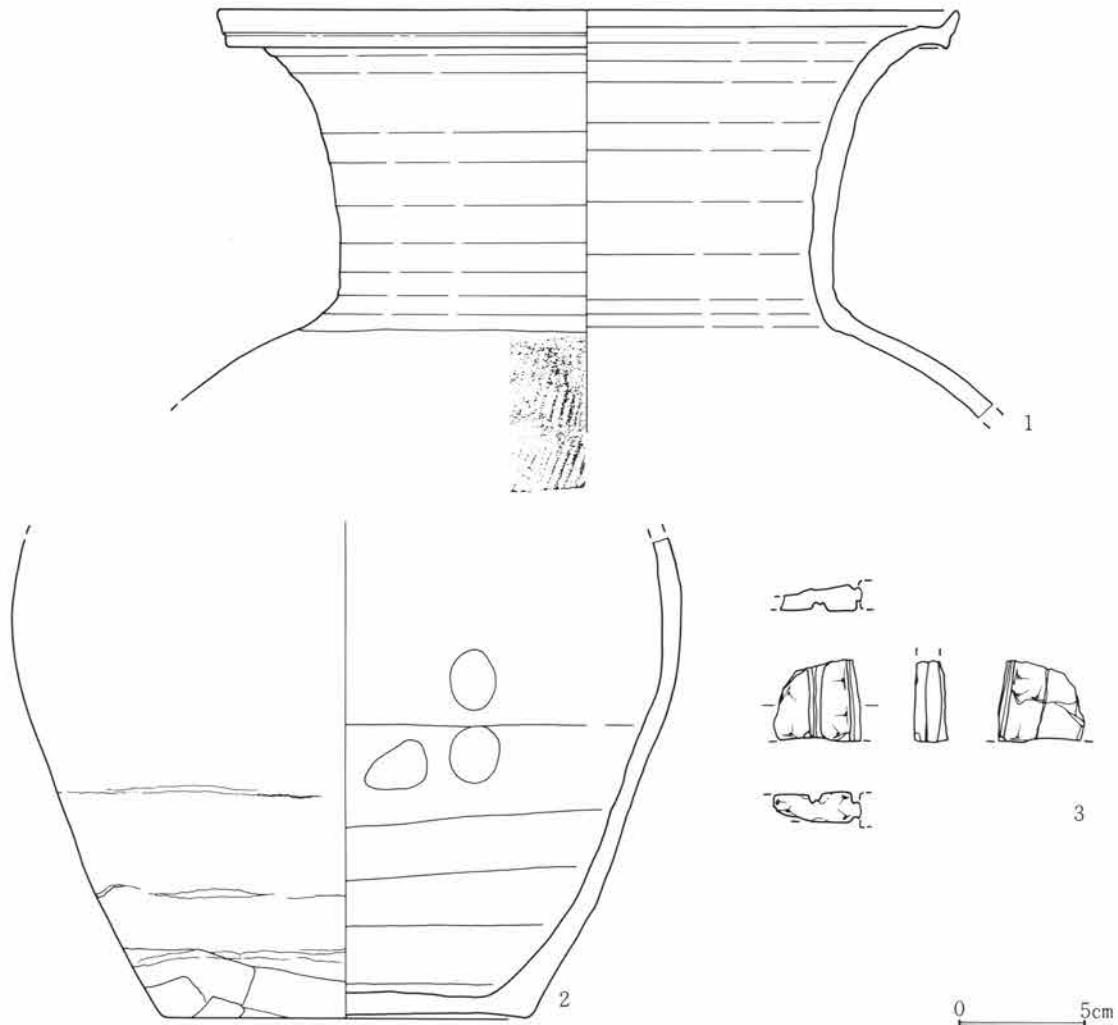


第290図 G区第100号址実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第291図 G区第100号址出土遺物実測図



第292図 G区第100号址出土遺物実測図

当住居跡は西側を試掘時のトレンチで削平され、北で第102号住居跡、東で第111号址、西で第8号井戸等と重複し、周囲の大半を失っている。

カマドは東壁に位置すると思われるが、残存状態は不良で形状及び規模等を把握できない。しかしVII層土面で、楕円形の掘り込みを検出し、上面に灰が検出されたことからこの位置に想定した。

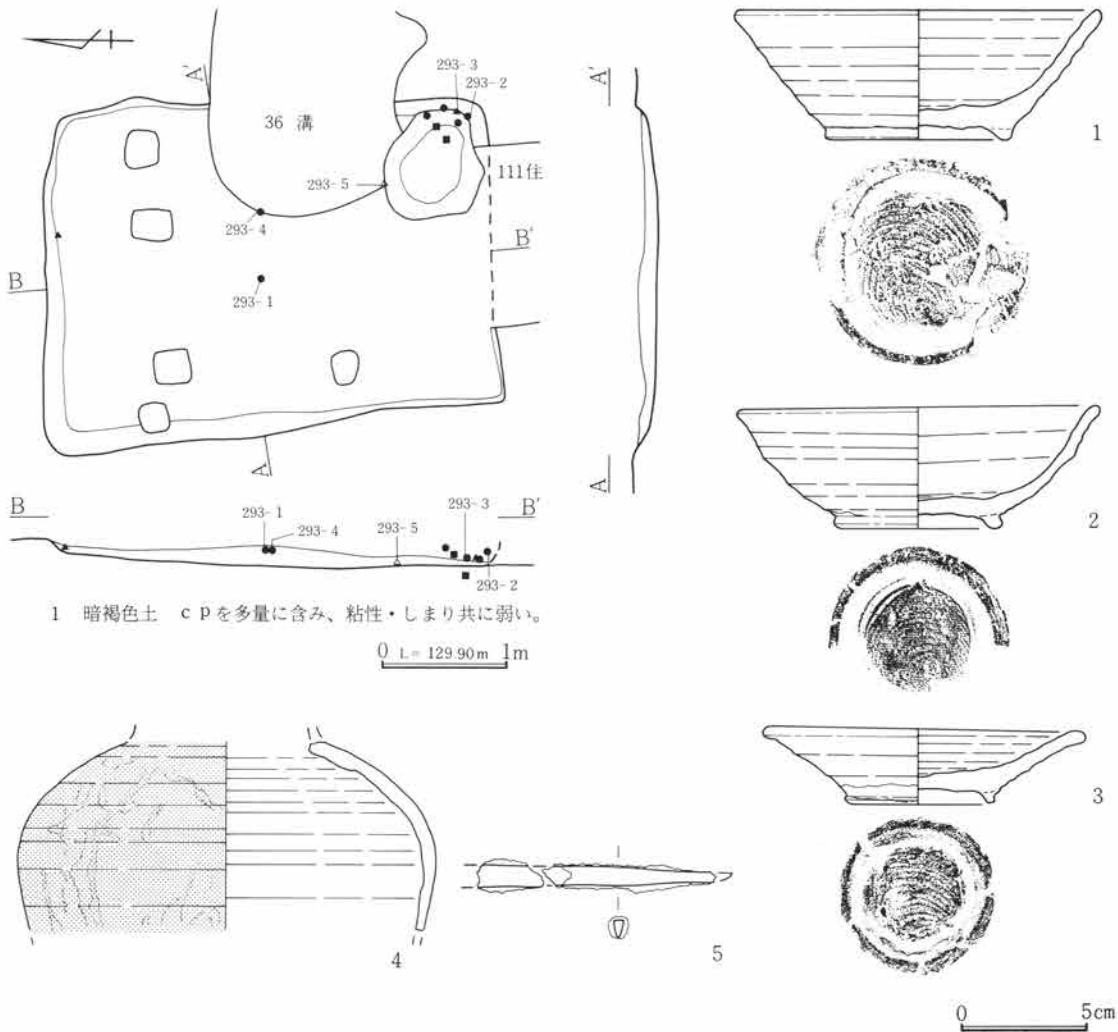
遺物は、床面から若干遊離した位置の住居中央部に集中して出土した。

遺構名称	G区第101号住居跡	位置	38～40-G-66・67グリッド内		分類	C-2	時期	一
平面形態	隅丸長方形	規模	2.60m×3.60m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約8cm程	
備考	壁は南壁中央部及びカマド部を除き全周検出した。壁溝・柱穴は未検出であり、貯蔵穴は、南東コーナー部に検出され、円形を呈する。規模は、径約81cm、深度約15cmである。							

当住居跡は、カマド部で第31号溝と重複し、カマドは完全に失われている。また、南壁は試掘時のトレンチによって一部削平されている。その他当住居跡を含む一帯は、中世遺構が多く検出された場所にあたり、屋内北寄りに4個並んだピットも方形プランで、浅間B軽石混じりの土が充填していた。

遺物は、覆土中出土のものを含めても、きわめて少量で、床面中央部及び、貯蔵穴内からわずかに出土しているだけである。

第3章 検出された遺構・遺物



1 暗褐色土 c Pを多量に含み、粘性・しまり共に弱い。

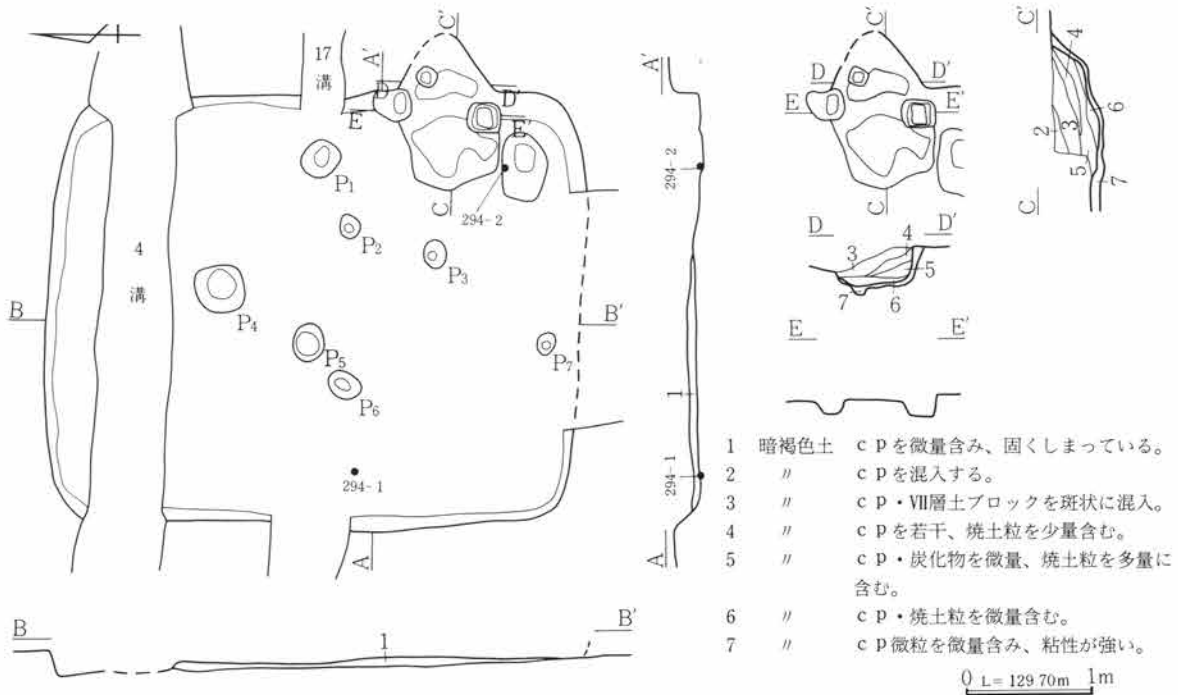
第293図 G区第101号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第102号住居跡		位置	40～42-G-69～71グリッド内		分類	C-10	時期	VI?
平面形態	隅丸長方形	規模	3.40m×3.90m	主軸方位	東-1度-南	残存深度	約 20cm程		
備考	壁は溝等との重複部を除き全周検出した。壁溝・柱穴は検出されていない。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置し、長方形を呈している。長辺約40cm、短辺約35cm、深度約17cmである。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・三角形状				主軸方位	東-1度-南		
規模	全長 135cm	屋外長 45cm	屋内長 90cm	袖間幅 100cm	燃烧部幅 69cm	煙道幅	— cm		
備考	カマドは掘り方しか残存せず、焚口は不整楕円形の掘り込みを有している。両袖の位置には、補構築材の据え方と考えられる方形ピット状掘り込みを検出した。燃烧部は焚口より一段上位である。								

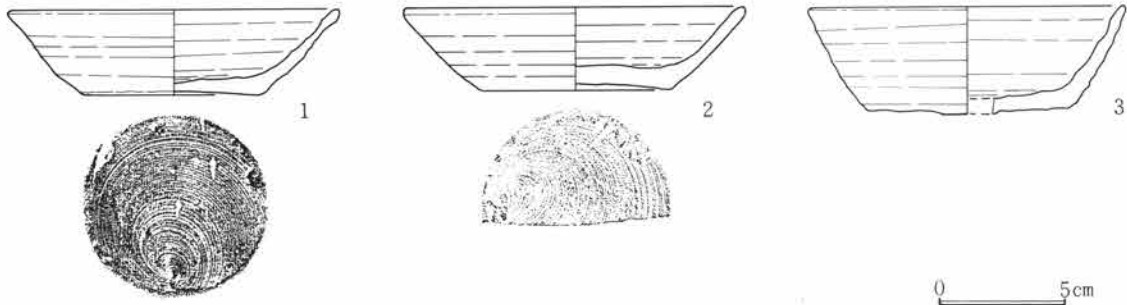
当住居跡は、北寄り第3号溝と、中央部で第43号溝と重複し、南壁中央部は、試掘時のトレンチによって削平されている。しかし、壁は下半がVII層中に掘り込まれていることもあって、残存状態は比較的良好で垂直であり、残存部における壁の崩落は認められない。

床面は、VII層中に平坦に構築されており、掘り方は全く認められない。床面で検出したピットは、全て円形プランで、配置に規則性は認められないが、P₁・P₅が同規模で、当住居跡の主軸方向に並んでいることは柱穴に類する施設である可能性もある。

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第294図 G区第102号住居跡実測図



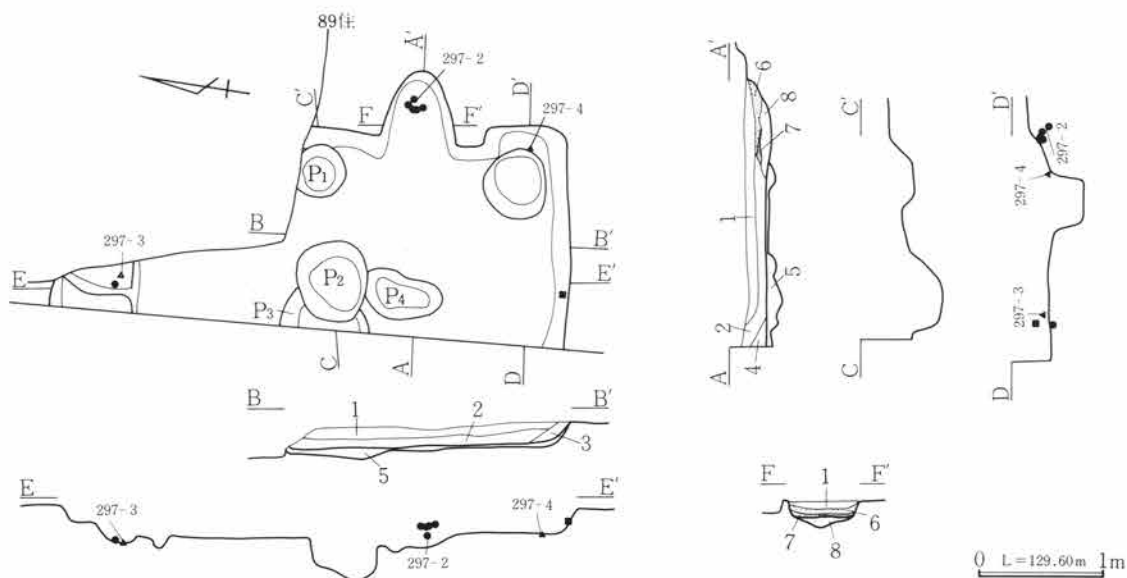
第295図 G区第102号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第103号住居跡	位置	6～8-G-71・72グリッド内	分類	C-10	時期	—
平面形態	長方形?	規模	—m×3.50m	主軸方位	東—8度—北	残存深度	約20cm程
備考	壁は南東コーナー部が東側に「コ」字状に突出し、この位置に貯蔵穴が位置している。形態は円形で、規模は径約40cm、深度約23cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東—6度—北	
規模	全長 70cm 屋外長 45cm 屋内長 25cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 62cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、灰面等は未検出である。袖は両袖共構築材等は残存せず、その痕跡もない。燃烧部はほぼ全面に焼土面を検出し、焚口寄りにわずかに灰面を1枚検出した。						

当住居跡は調査区の西端に位置し、西側半分が調査区外にかかっている。また、北側は第89号住居跡との重複によって、北東コーナー部が失われている。

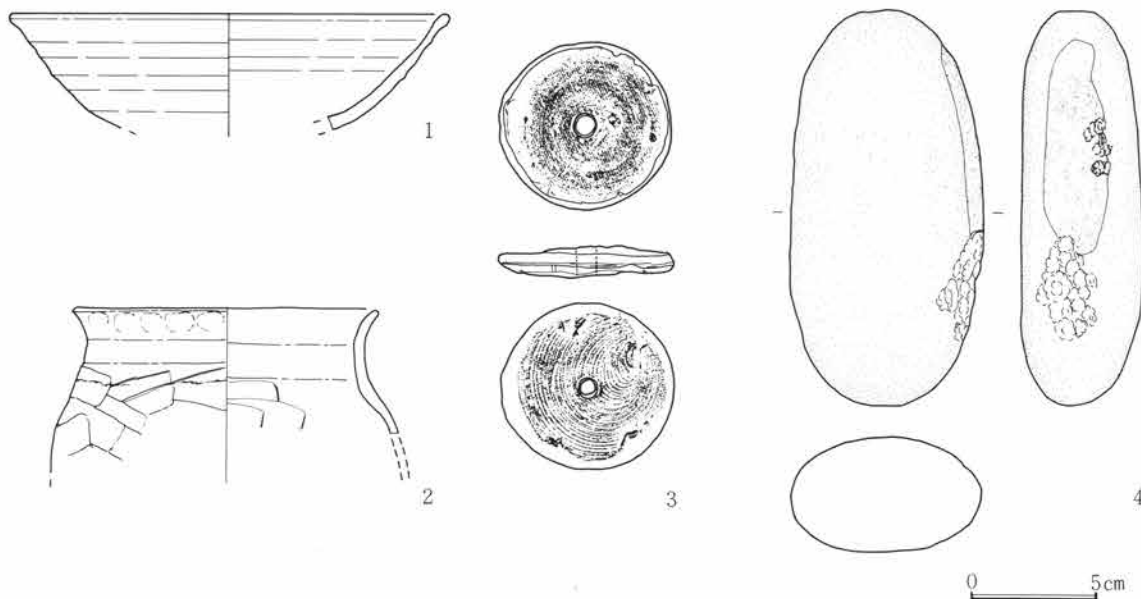
掘り方は全体に及ぶものではなく、住居中央部に円形及び楕円形プランのピットが3個検出された。また東壁に接するように円形ピットが1個検出された。これらは貯蔵穴としたものと、径は近似するが深度は約40cmと倍近く深い。しかし、配置に規則性がなく柱穴とは判断できなかった。

第3章 検出された遺構・遺物



- 1 暗褐色土 c Pを混入し、粘性・しまり共に弱い。
- 2 // c Pは1層に比して、やや少ない。
- 3 // c Pを若干含み、粘性・しまり共に弱い。
- 4 // c P・焼土粒を若干、炭化物を少量含む。
- 5 暗褐色土 c P微粒、VII層土粒を多量に含む。
- 6 赤褐色焼土層
- 7 黒色灰層
- 8 暗褐色土 灰を多量に、焼土粒を微量含み、粘性が弱い。

第296図 G区第103号住居跡実測図

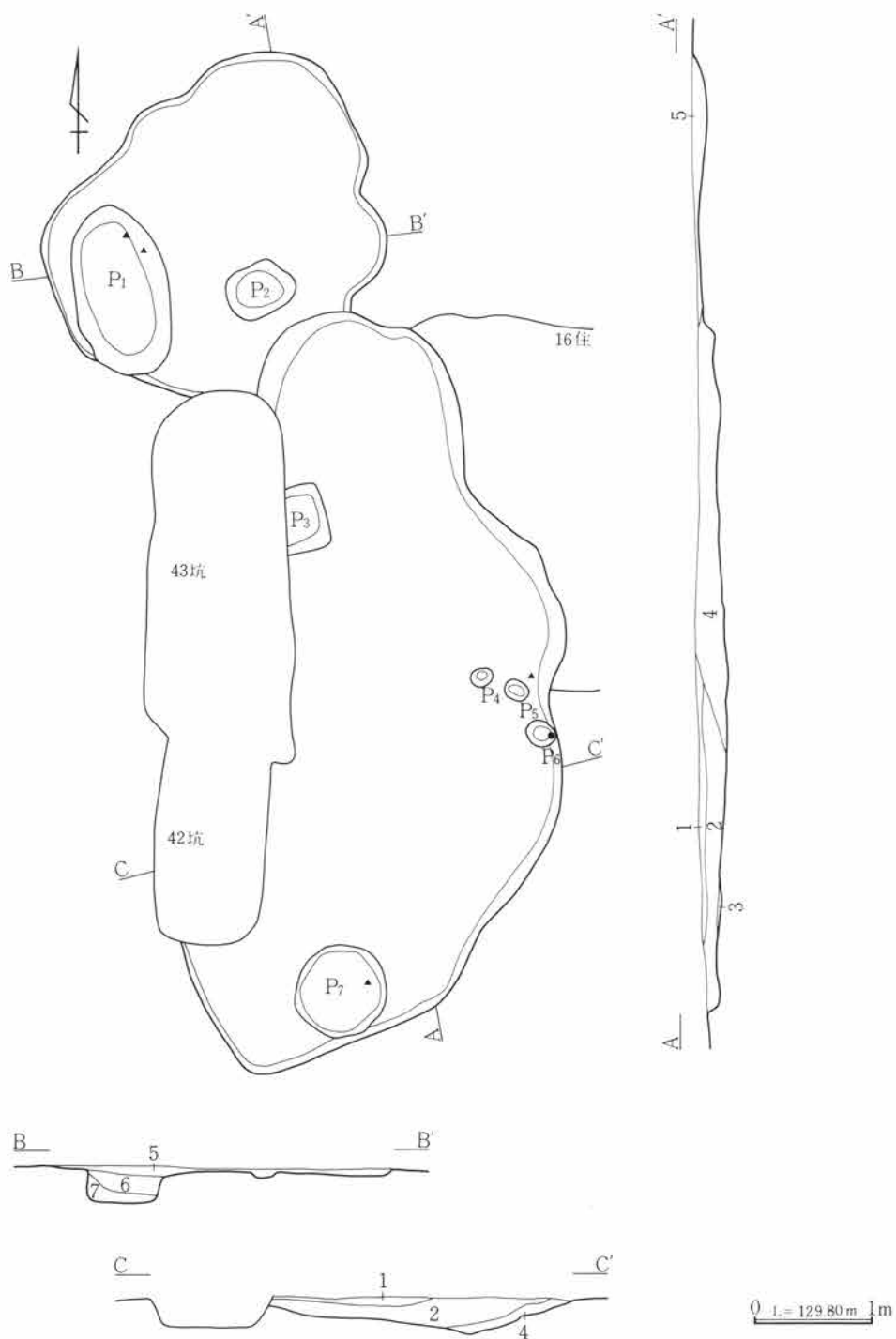


第297図 G区第103号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第104号址	位置	31~36-G-56~58グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	不整楕円形	規模	8.50m×3.30m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 5cm程

当址は、平面的には不整円形プランの掘り込みと、不整楕円形プランの掘り込みが重複した様な形態をしている。しかしセクション面の観察からは、新旧関係を明確に把握できず、同時期に埋没した可能性があることから、1つの遺構として扱った。西側は第43号址によって削平され、東側で第16号住居跡と重複している。掘り込みは第16号住居跡よりもわずかに深く、重複部分の外形も把握することができたが、遺構検出面では、第16号住居跡の平面プランが完全に把握されていることから、当址→第16号住居跡という関係である。

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

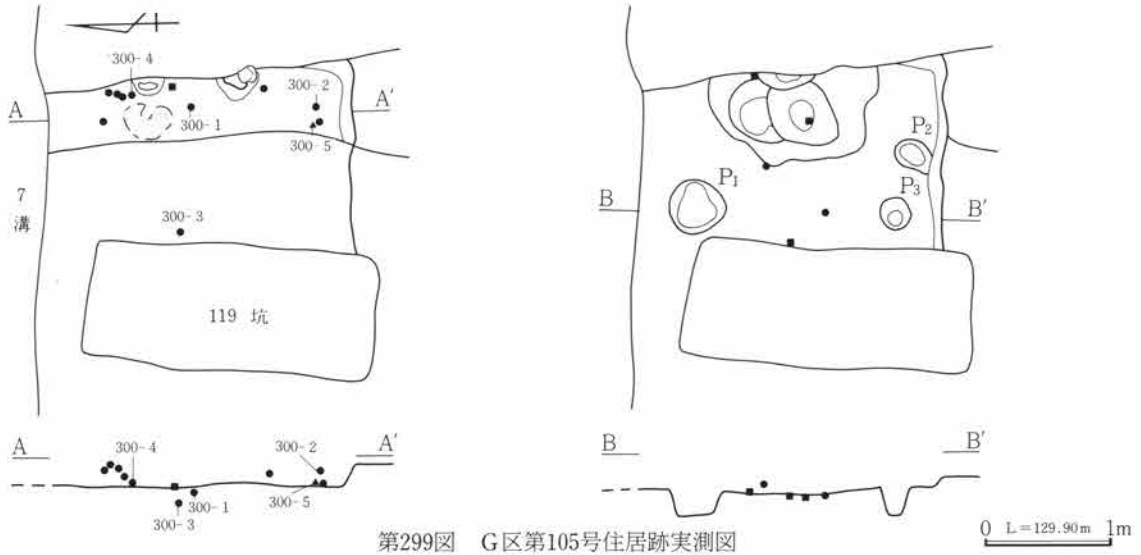


- | | | | | | |
|---|------|--------------------------|---|------|---------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c Pをほとんど含まず、しまりが弱く砂質。 | 5 | 暗褐色土 | 1層に近似。 |
| 2 | 〃 | c P細粒を少量、VII層土ブロックを微量含む。 | 6 | 〃 | c Pをごく微量含み、粘性・しまりに弱い。 |
| 3 | 〃 | c Pを少量、茶褐色土ブロックを多量に含む。 | 7 | 〃 | c Pをごく微量、VII層土小ブロックを微量含む。 |
| 4 | 〃 | 3層に近似。 | | | |

第298図 G区第104号址実測図

第3章 検出された遺構・遺物

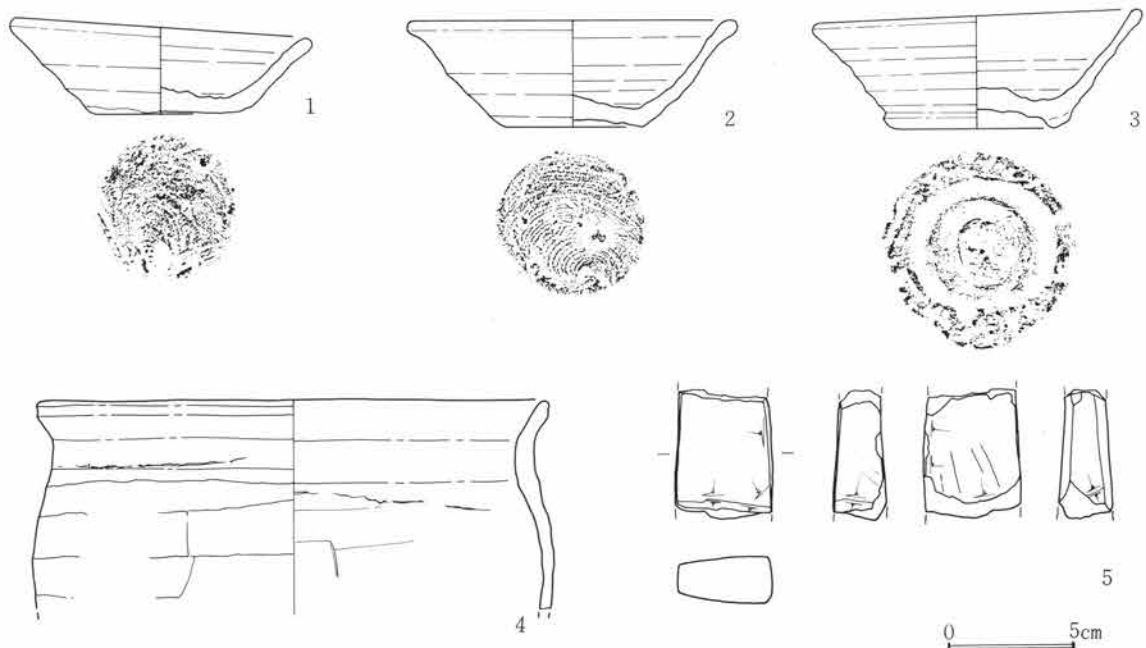
遺構名称	G区第105号住居跡	位置	40・41-G-70・71グリッド内	分類	—	時期	VIII
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 20cm程
備考	壁は南東コーナー部を除き未検出。かろうじて床面の一部とカマドの痕跡を検出した。カマドは両袖の先端部と考えられる痕跡、及び北寄りにわずかに1枚の灰面を検出した。						



第299図 G区第105号住居跡実測図

当住居跡は、西側半分が上面を中世段階に攪乱され、その上北側を第3号溝に、西壁と考えられる位置を第119号土坑によって床面下まで削平されている。また、カマドを含む東壁は、試掘時のトレンチによって失われており、極めて残存不良な状態である。

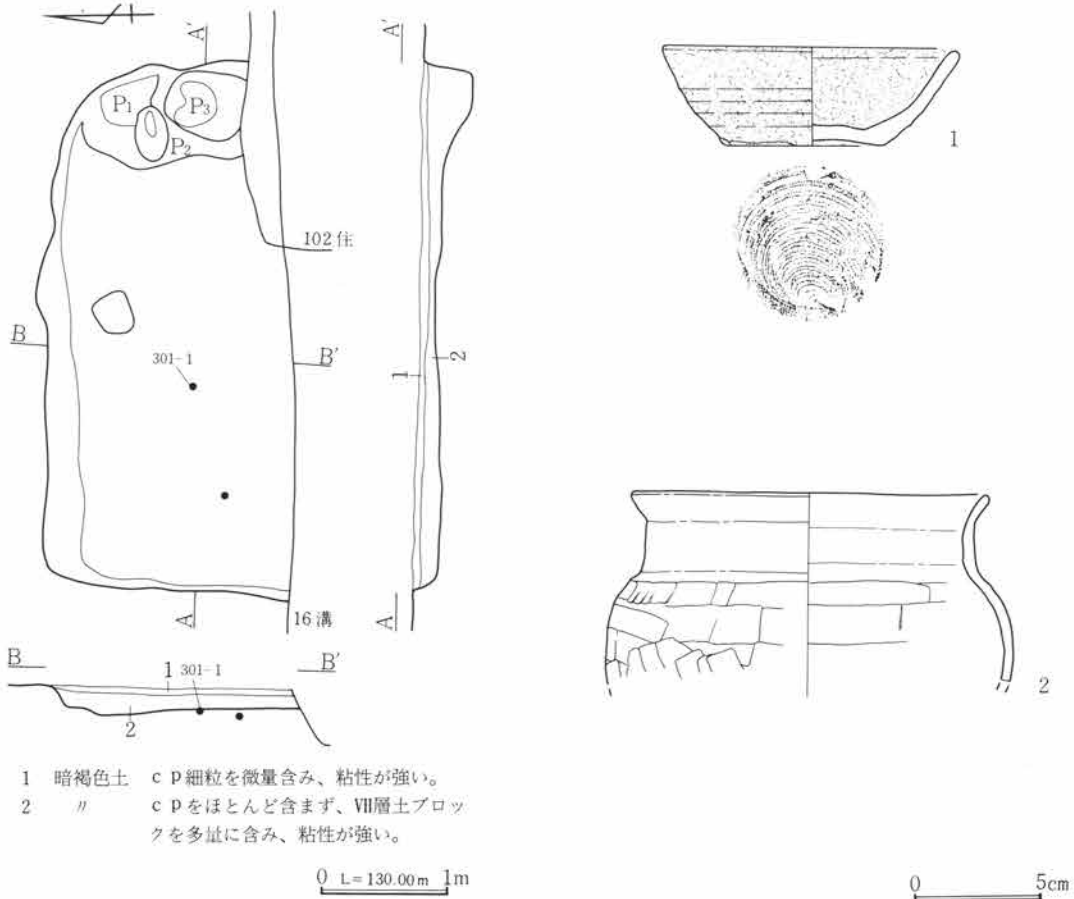
掘り方は、残存床面上に3個の円形ピットを検出した。規模は25~40cm、深度約25cmである。このうちP₁・P₃は径に違いがあるが、深度はほぼ同じで、主軸に直行し住居中央にあり、柱穴の可能性はある。



第300図 G区第105号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第109号住居跡	位置	42・43-G-70~72グリッド内	分類	B-7	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	4.20m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 5cm程
備考	壁は北側約 $\frac{1}{3}$ 程度が検出された。壁溝・柱穴は残存部には検出されず、貯蔵穴とすべきものも検出されていない。						



第301図 G区第109号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡は、南側を第16号溝等との重複によって南北に分割されているが、南側は中世段階に上面を削平されており、不明である。また、カマド部は第102号住居跡との重複で失われている。

床面は2層上面と考えられ、中央部から須恵器の坏が底部を2層上面に接するようにして出土している。

掘り方は、全体に約10cm程度下がる他、東壁際に不整形プランの土坑が検出されている。

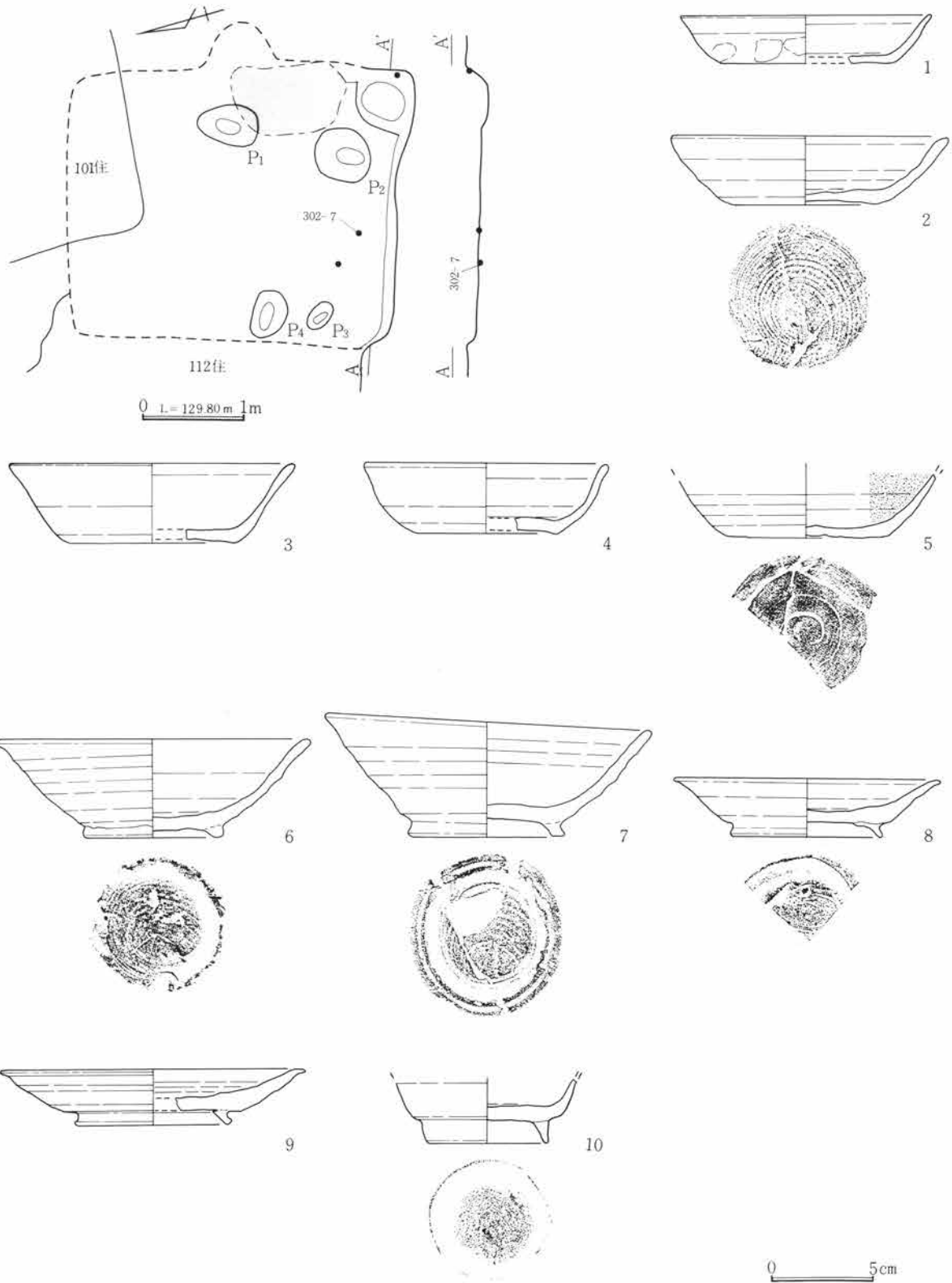
遺構名称	G区第111号住居跡	位置	37~39-G-66~68グリッド内	分類	C-2	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	2.60m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 7cm程

当住居跡は、北側で第100・101号住居跡と重複し、上面と中世段階に攪乱を受けているため、南壁を検出したに止った。

カマドは、形態、構造等は全く不明であるが、残存部床面上に灰面が1枚検出されたことから、位置はほぼとることができた。南東コーナー部と思われる位置には、円形プランを呈し、径約58cm、深度約7cmの貯蔵穴と考えられる施設を検出した。

掘り方はみられず、わずかにVII層中に掘り込まれた4個のピットを検出したただけである。

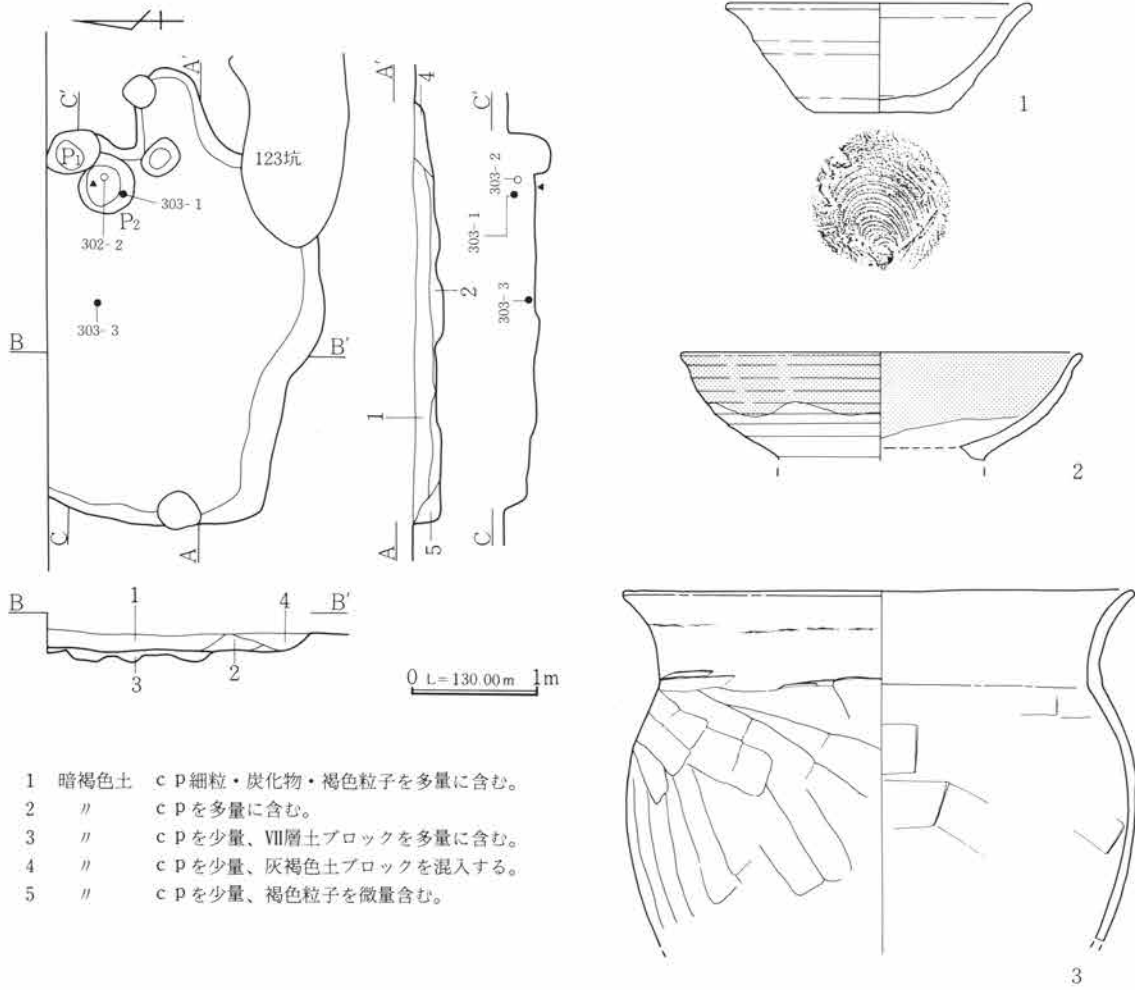
第3章 検出された遺構・遺物



第302図 G区第111号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第113号住居跡	位置	42・44-G-68~70グリッド内	分類	—	時期	VI
平面形態	隅丸長方形?	規模	2.90m×—m	主軸方位	— — 度—	残存深度	約 14cm程

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



- 1 暗褐色土 c P細粒・炭化物・褐色粒子を多量に含む。
- 2 // c Pを多量に含む。
- 3 // c Pを少量、VII層土ブロックを多量に含む。
- 4 // c Pを少量、灰褐色土ブロックを混入する。
- 5 // c Pを少量、褐色粒子を微量含む。

第303図 G区第113号住居跡・出土遺物実測図

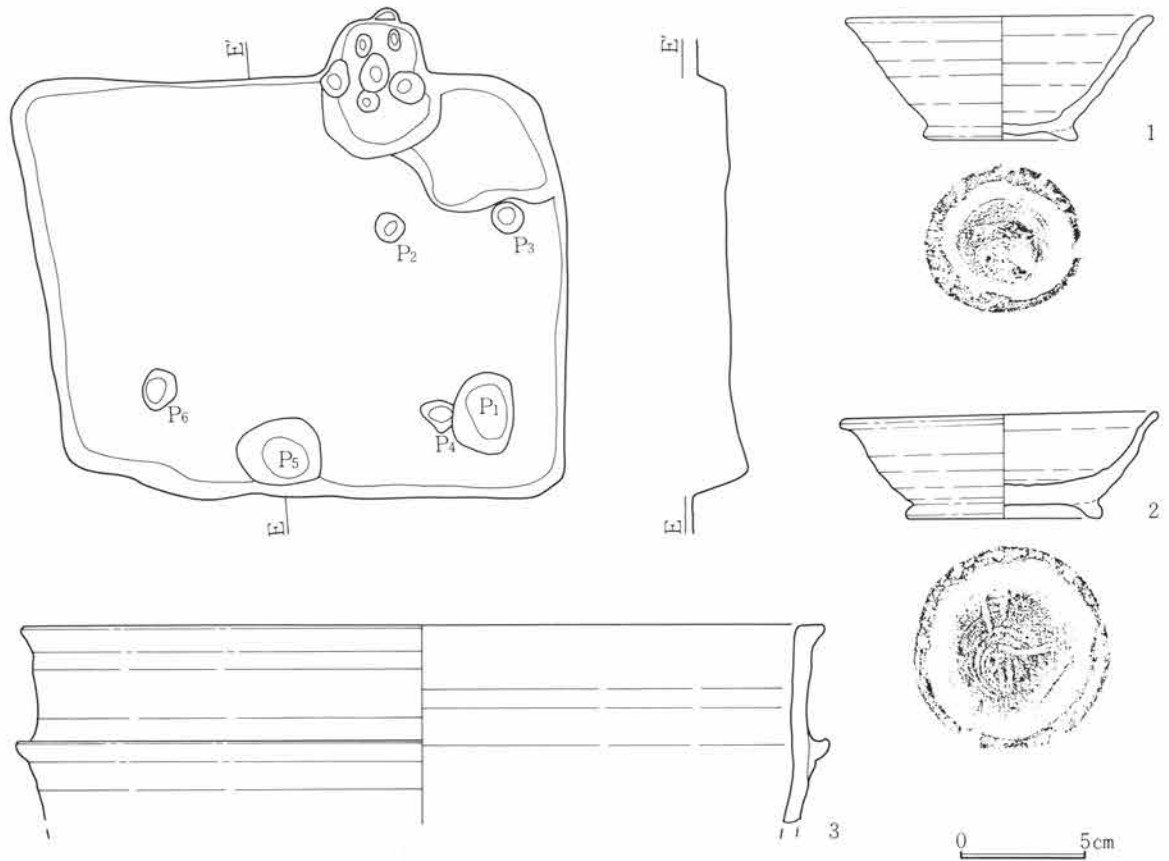
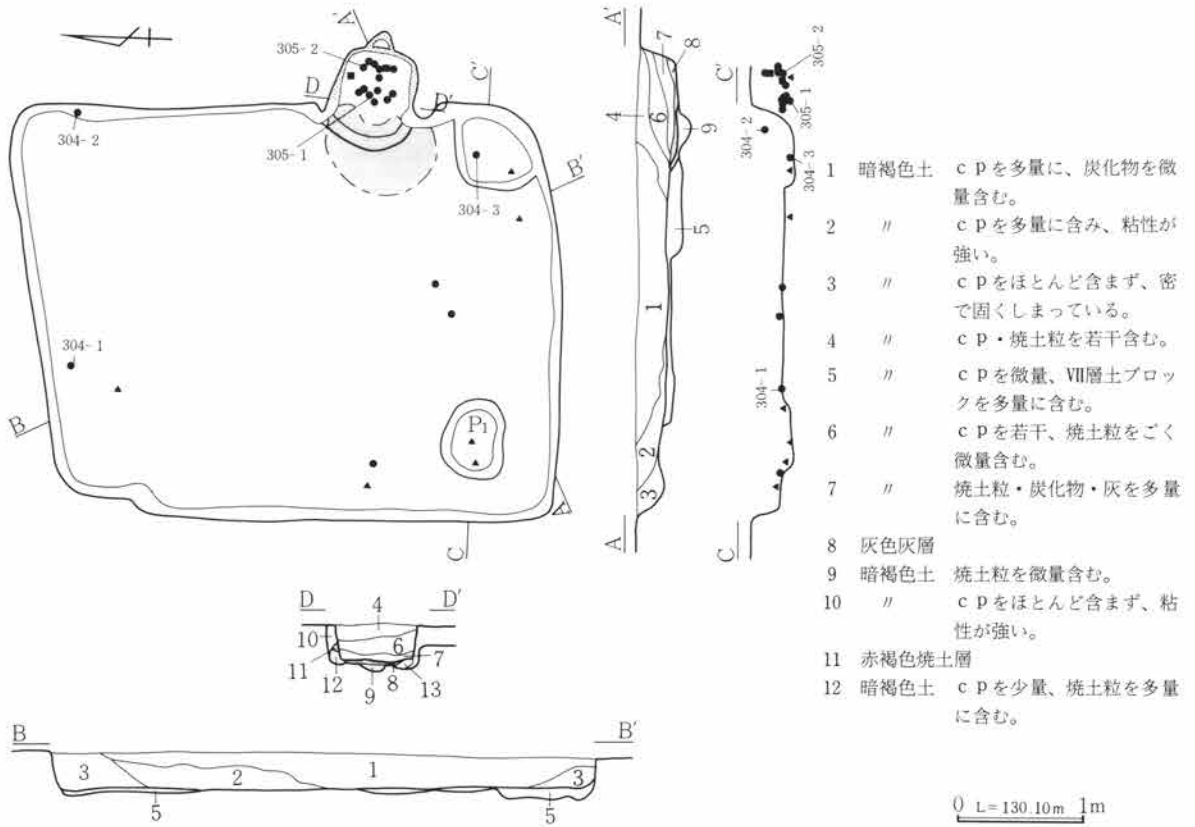
0 5cm

当住居跡は、北側が東西農道下にかかり、全体像を明らかにできなかった。その他、南東コーナー部は、第123号土坑との重複によって失っている。東壁の南寄りに掘り込まれている方状のものは、位置的にはカマドの存する部分にあたるが、焼土等は全く検出されず、カマドとは考えなかった。

壁溝は残存部には検出されず、掘り方段階で検出したP₁・P₂は位置からも柱穴とは考えられず、その他のものは壁を切っており、住居検出面で検出していることから、当住居跡よりも新しい時期のものである。

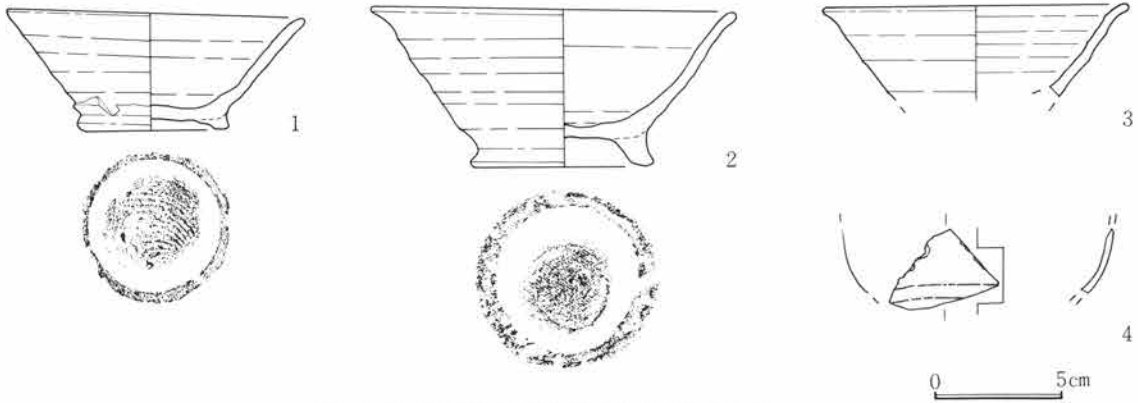
遺構名称	G区第114号住居跡		位置	48～50-G-67～69グリッド内		分類	C-11	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	3.30m×4.20m	主軸方位	東-2度-北	残存深度	約20cm程		
備考	壁は全周検出され、西壁北寄りに段差が認められる。壁溝は検出されず、柱穴は掘り方段階で検出した円形ピットは該当しないと思われる。貯蔵穴は南東コーナー部、円形。径約65cm、深度約10cm。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・凸字形				主軸方位	東-6度-南		
規模	全長100cm 屋外長53cm 屋内長47cm 袖間幅105cm 燃烧部幅62cm 煙道幅20cm								
備考	焚口は半円状の浅い掘り込みで一面に灰面を検出した。袖は両袖共暗褐色のみ残存しているが、掘り方段階でピットを検出。燃烧部両側壁及び奥壁部が焼土化している。中央南寄りに石製支脚検出。								

第3章 検出された遺構・遺物



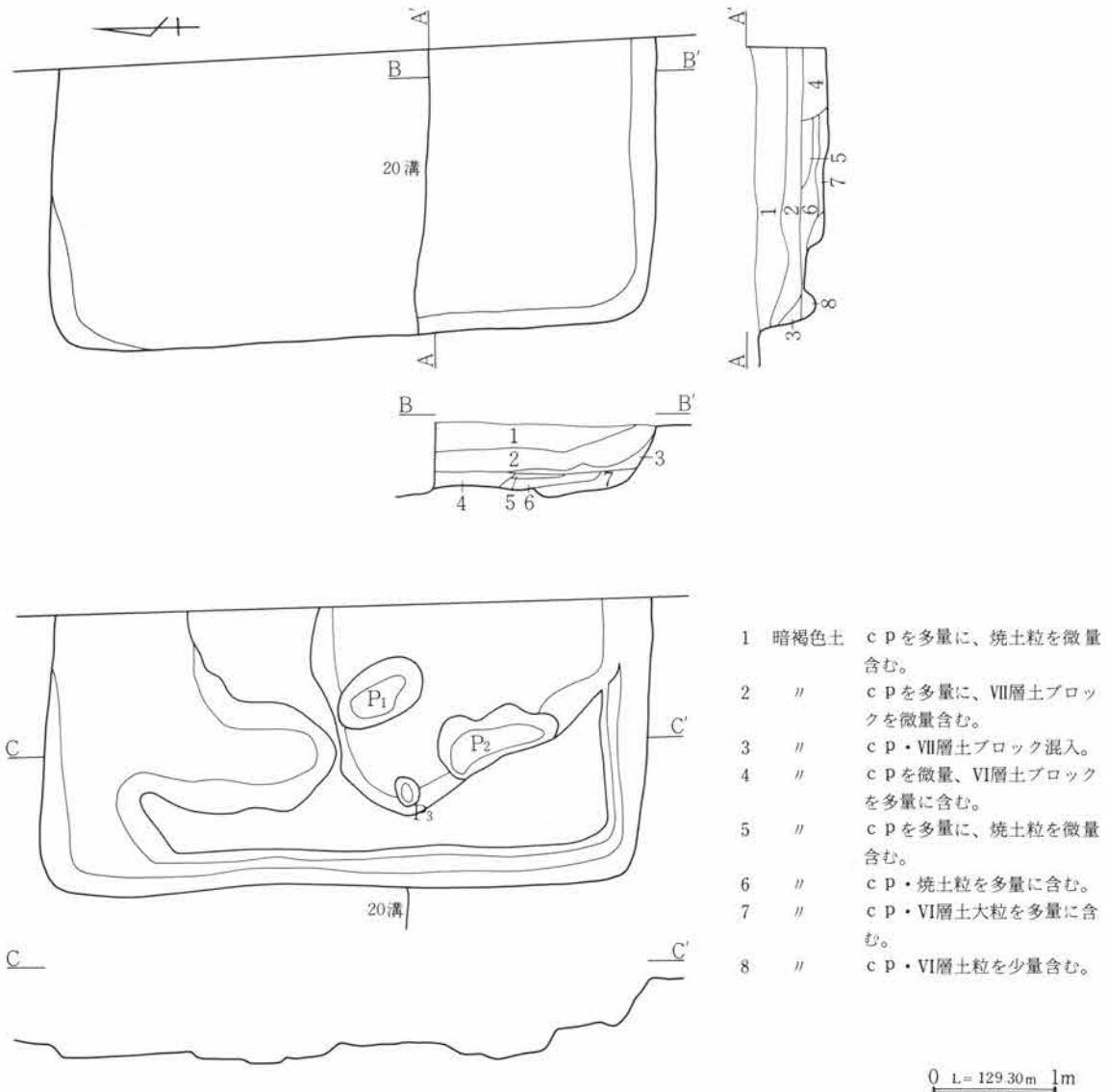
第304図 G区第114号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第305図 G区第114号住居跡出土遺物実測図

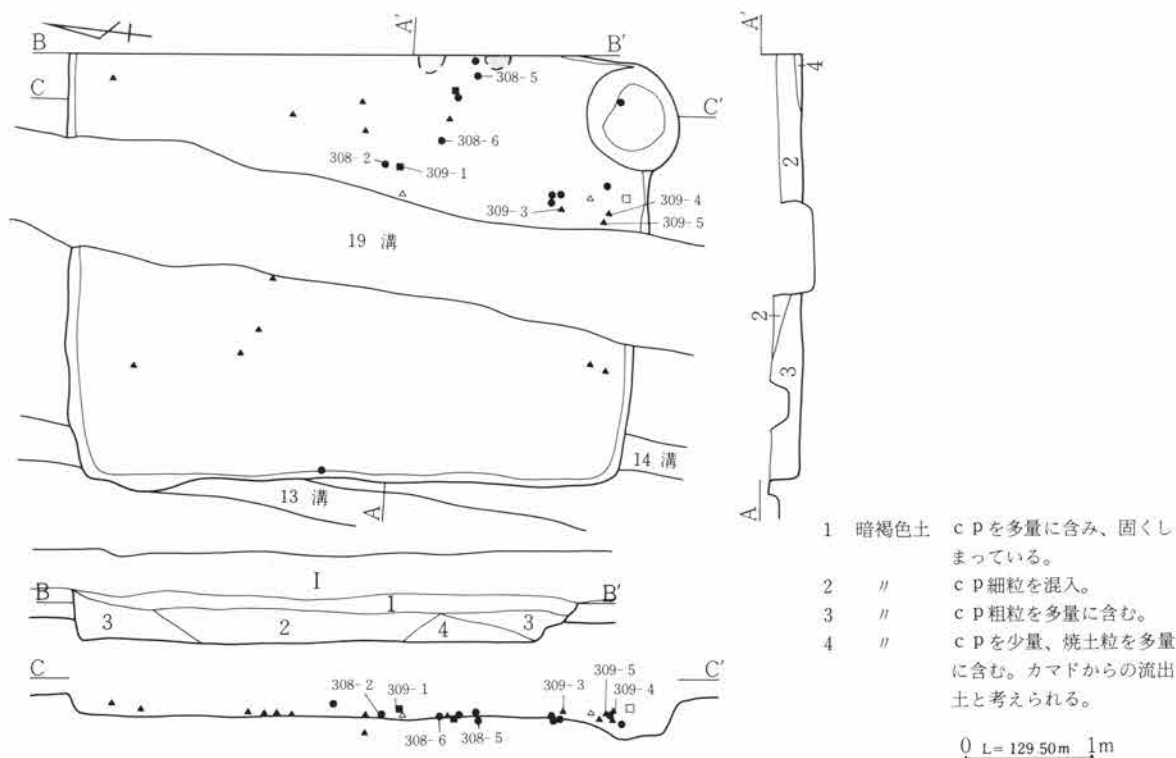
遺構名称	G区第115号住居跡	位置	10～12-G-41・42グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×5.00m	主軸方位	東—3度—北	残存深度	約30cm程



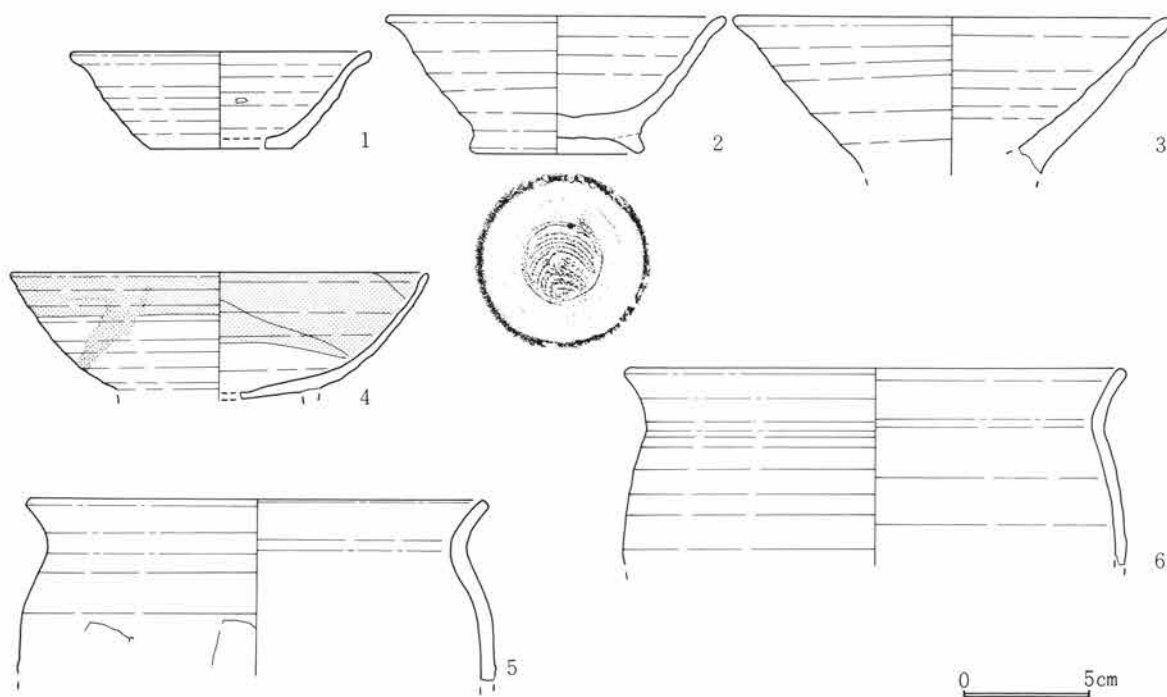
第306図 G区第115号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第117号住居跡	位置	21~23-G-42~44グリッド内	分類	—	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	3.40m×4.50m	主軸方位	東—4度—北	残存深度	約40cm程
備考	調査区東側に位置し、カマド及び東壁の大半は調査区外にかかり未調査である。壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴は、南東コーナー部に位置し円形を呈する。規模は径約80cm、深度約11cmである。						

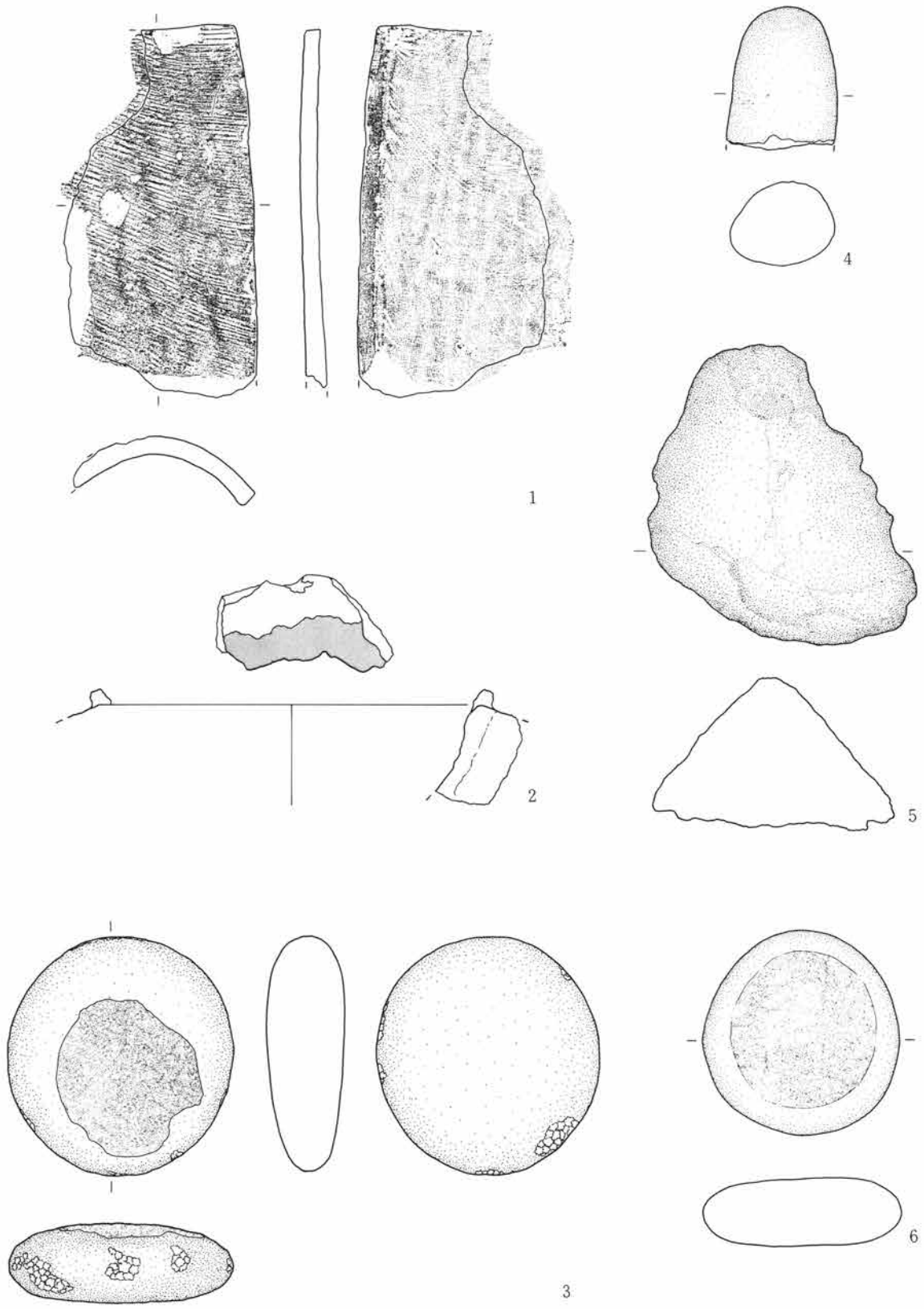


第307図 G区第117号住居跡実測図



第308図 G区第117号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

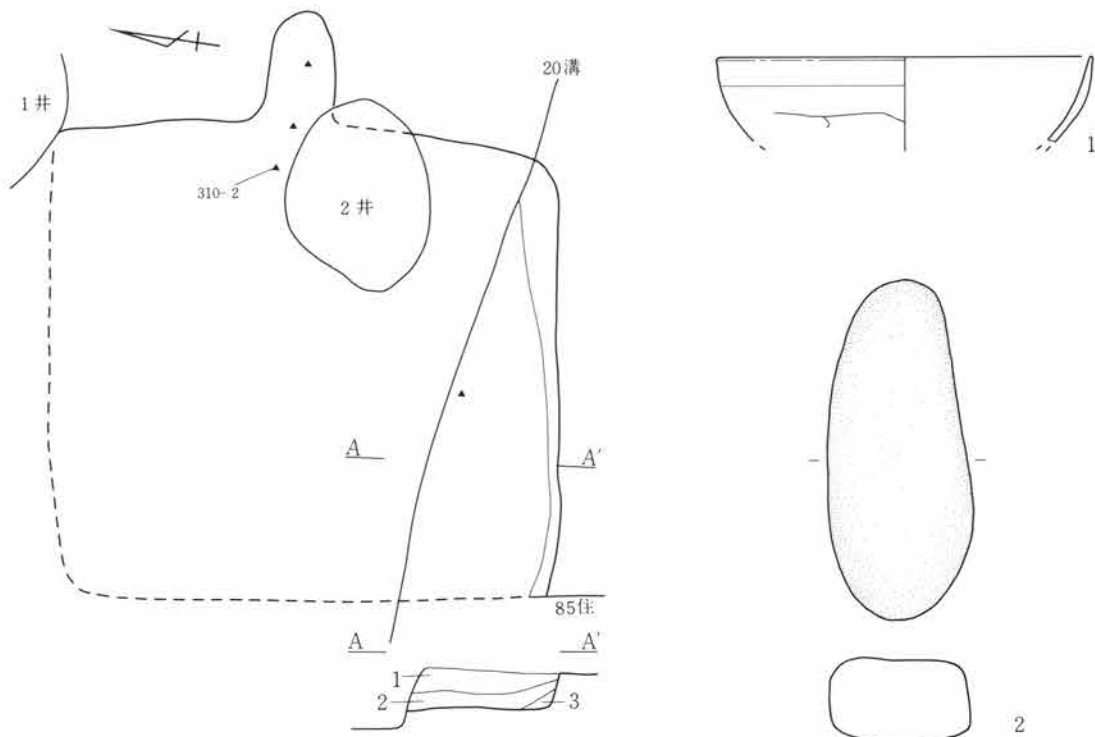


0 5cm
0 10cm

第309図 G区第117号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第118号住居跡	位置	12・13-G-49~51グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	—	規模	—m×—m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 27cm程
備考	大半は第20号溝によって削平されており、南壁際のごく一部を検出した。残存部には、壁溝・柱穴は検出されず、カマドも残存していない。						



- 1 暗褐色土 c Pを多量に、炭化物を微量含む。
 2 // c Pを多量に、褐色粒子を微量含む。
 3 // c Pを混入し、VII層土ブロックを多量に含む。
- 0 $\frac{1}{2}$ 1m 0 5cm

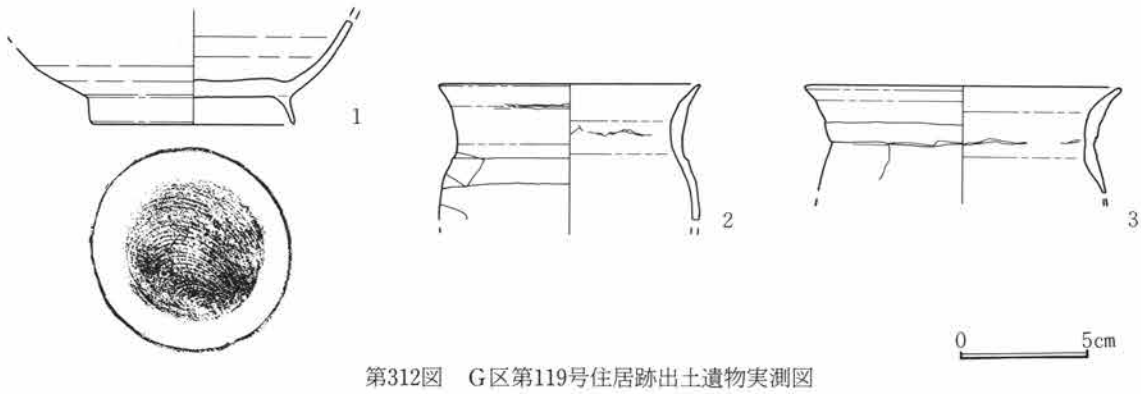
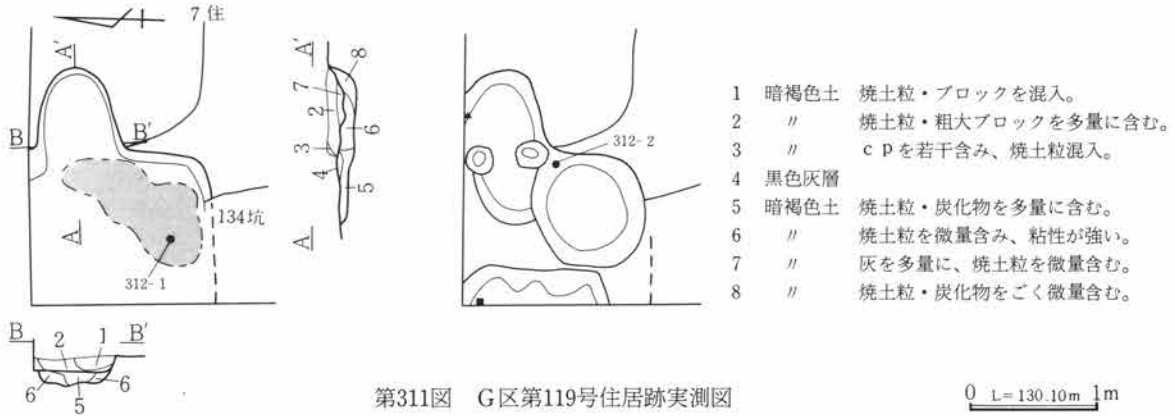
第310図 G区第118号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第119号住居跡	位置	45・46-G-74・75グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×—m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 10cm程
備考	カマドを含む南東コーナー部を検出。南壁は第134号土坑との重複で失われている。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出され、円形を呈する。規模は径約90cm、深度約10cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りと思われる・馬蹄形		主軸方位	東— 7 度—北		
規模	全長 80cm 屋外長 61cm 屋内長 19cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 67cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、中央から貯蔵穴上面まで灰面が広がっている。袖は両袖共残存していないが、掘り方段階で円形小ピットを検出した。燃烧部に焼土等は未検出である。						

当住居は調査区西側の東西農道取り付き部に位置するため、全体の¼程度しか検出できなかった。掘り方は、西側調査区際に隅丸方形とも考えられるような掘り込みが検出されているが、全体形は不明である。また、床面上で柱穴、壁溝等は全く検出されておらず、当住居跡にはなかったものと思われる。

遺物は、調査範囲が狭いこともあって、覆土中出土のものを含めてもごくわずかである。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



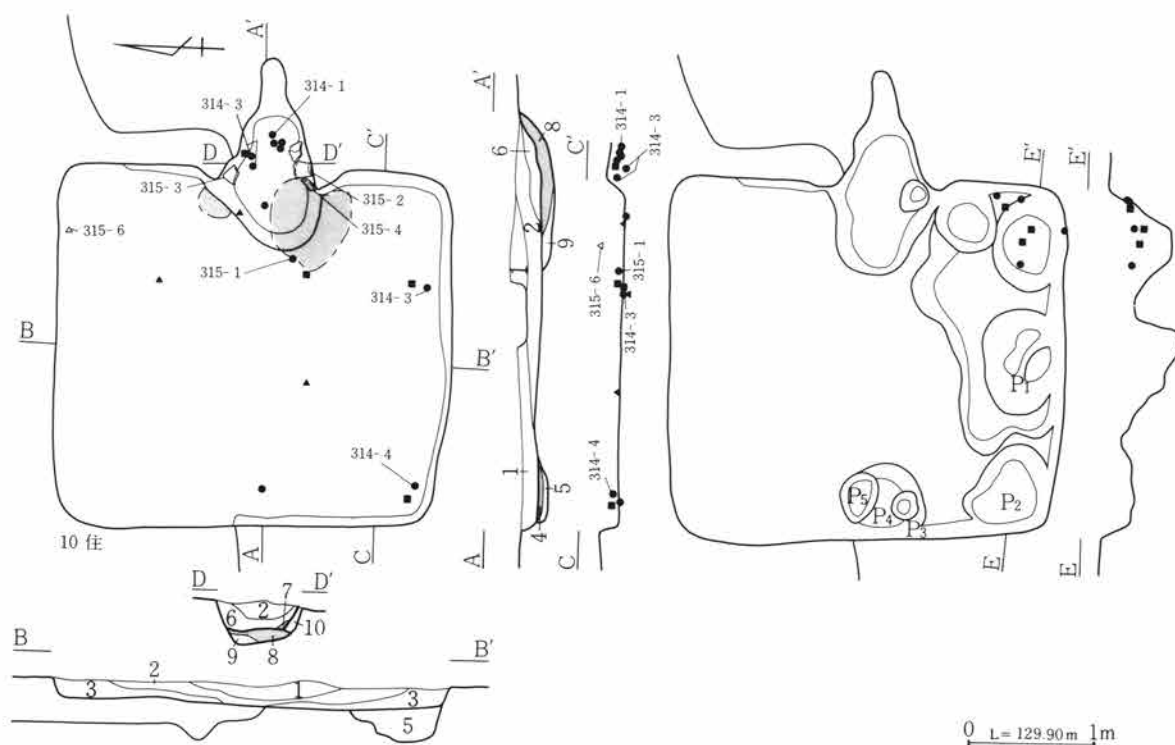
遺構名称	G区第120号住居跡		位置	44・45-G-49～51グリッド内		分類	A-3	時期	VIII
平面形態	隅丸方形?	規模	2.80m×3.10m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約12cm程		
備考	壁は北側の第10号住居跡との重複部分を除き検出した。壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴は、床面段階では確認できず、掘り方段階で南東コーナー部に検出した。円形で径約75cm、深度約37cm。								
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央・凸字形			主軸方位	東-1度-北			
規模	全長148cm 屋外長90cm 屋内長58cm 袖間幅115cm 燃烧部幅55cm 煙道幅20cm								
備考	焚口は浅い掘り込みで、灰は南北2カ所に分かれている。袖は左右共瓦を使用し、特に右袖は2個並べていた。燃烧部に焼土等は明確に残存していない。煙道は範囲を把握しただけである。								

当住居跡の貯蔵穴は、南東コーナー部に位置して検出されたが、床面精査時には検出することができなかった。これは貯蔵穴充填土が、床面を構築している土とほとんど変化がないということであり、貯蔵穴上面にカマドからかき出された灰が一面的に検出されている例同様、貯蔵穴としているものが、住居使用段階埋められた状態であった可能性を指摘しうる資料である。

掘り方は、第10号住居跡との重複部分は不明確であるが、南壁寄りの一角のものは顕著である。つまり南東コーナー部から南西コーナー近くまで広範囲に掘り込まれ、その中に貯蔵穴を含む円形のピットが3個検出されている。また、南西コーナー部にも不整形プランのピットがみられ、ちょうど貯蔵穴と相対する位置となっている。規模は、径約75cm、深度約10cmである。

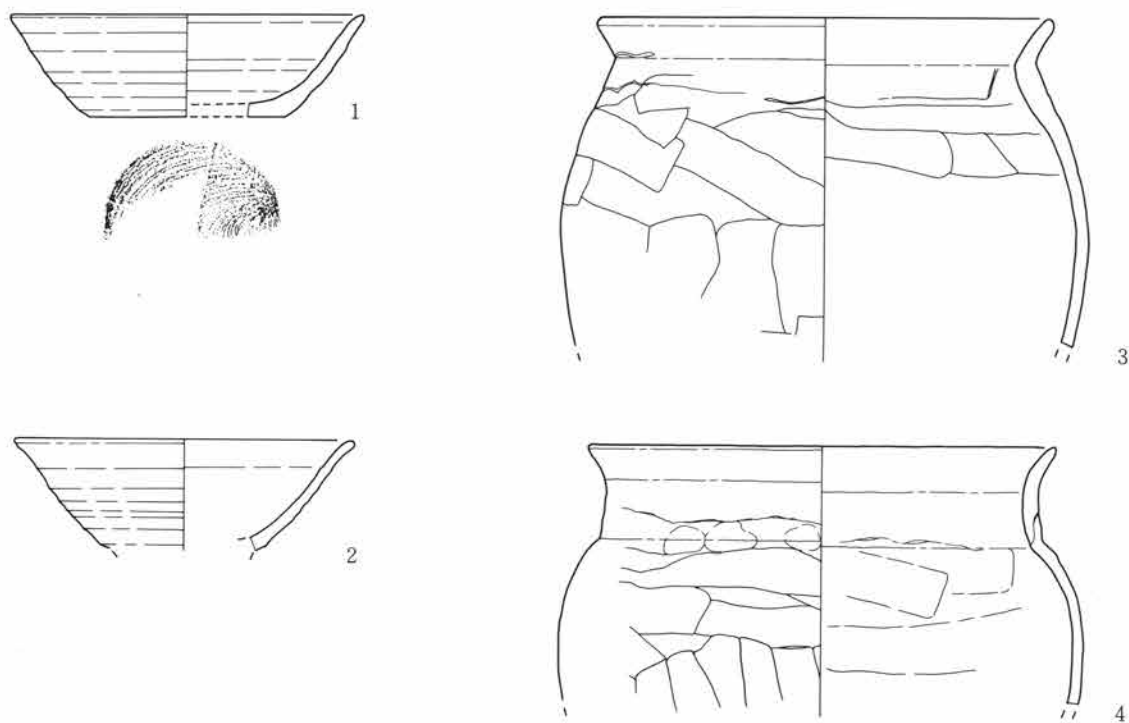
遺物は、カマドの中に集中している他、焚口前面にも瓦が出土している。また、掘り方段階では、貯蔵穴内及び周辺から若干出土している。

第3章 検出された遺構・遺物



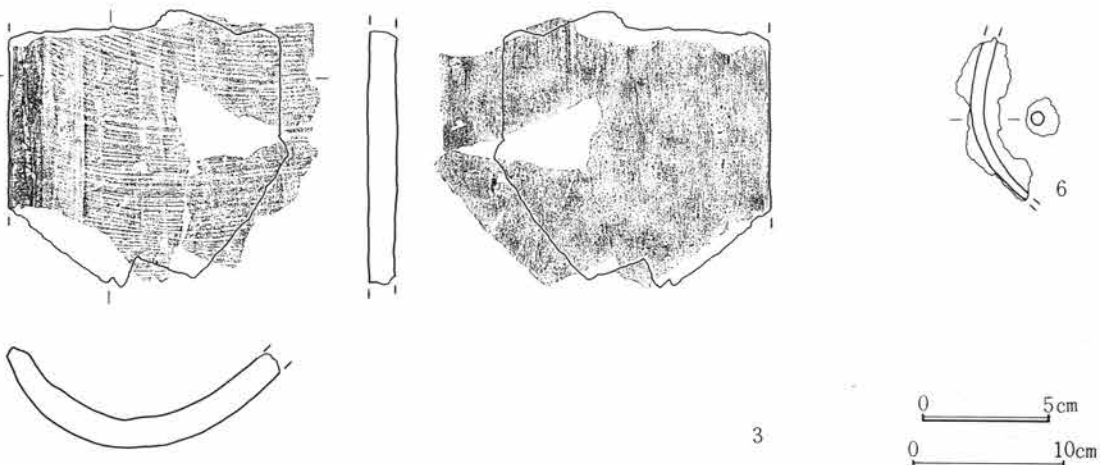
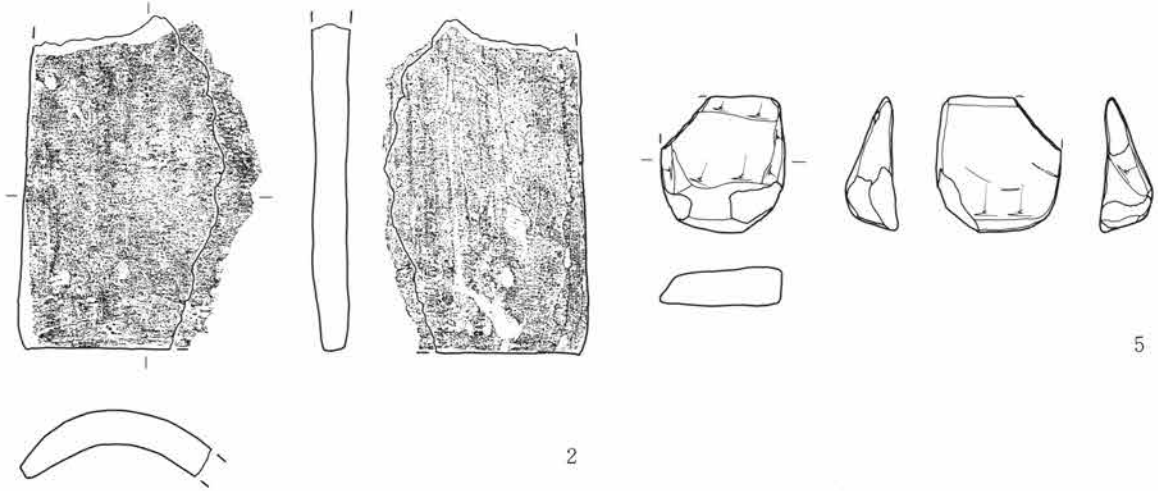
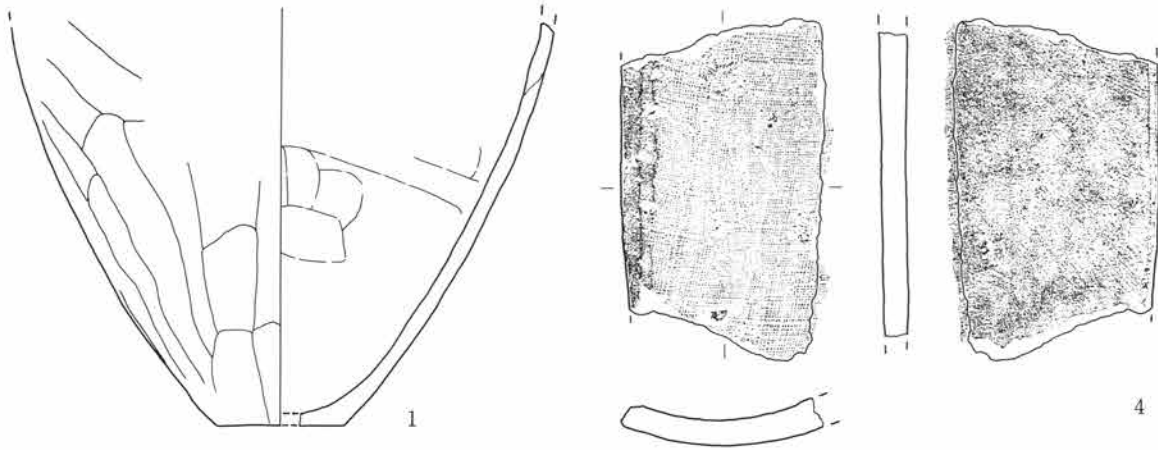
- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 c Pを多量に含む。 | 6 // c P・焼土ブロックを多量に含む。 |
| 2 // c P・焼土粒を多量に含む。 | 7 黑色灰層 |
| 3 // c P・焼土粒を多量に、炭化物を少量含む。 | 8 // 間に焼土の薄層を狭む。 |
| 4 灰色灰層 | 9 暗褐色土 c Pを混入し、粘性が強く灰を全く含まない。 |
| 5 暗褐色土 c Pを少量含み、粘性が強い。 | 10 // c Pを含まず、粘性が強い。 |

第313図 G区第120号住居跡実測図



第314図 G区第120号住居跡出土遺物実測図

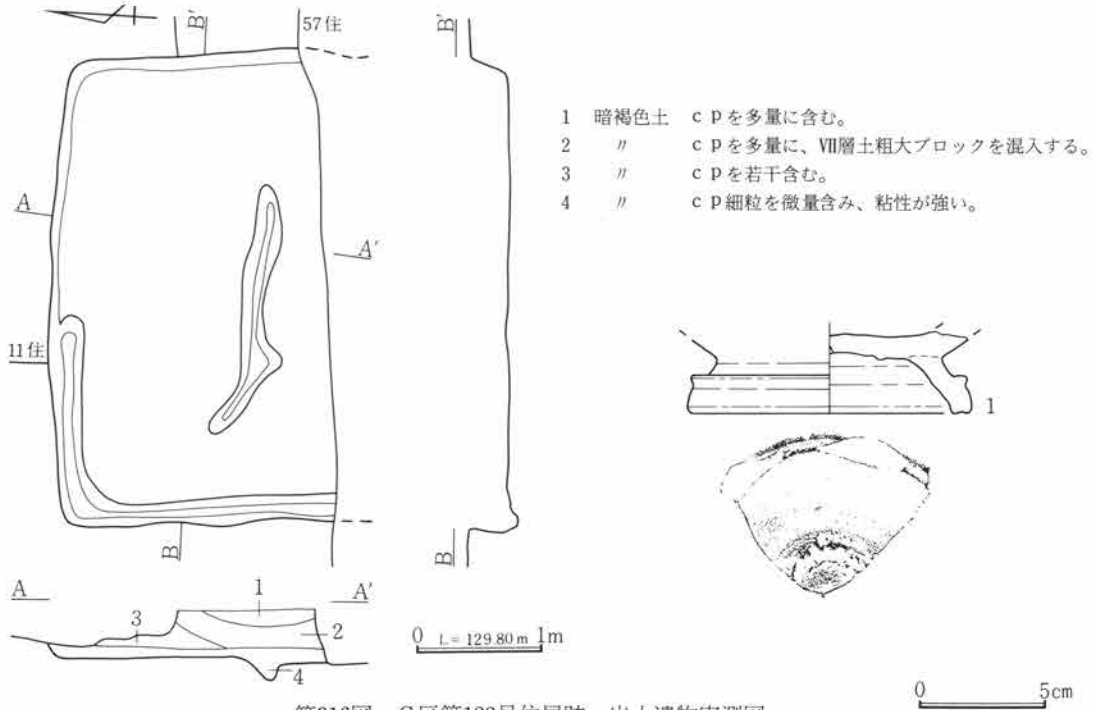
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第315図 G区第120号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第122号住居跡	位置	44・45-G-52~54グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	方形?	規模	3.70m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 30cm程
備考	南側約½は第57号住居跡との重複により失われている。床面はVI層中で、北壁の中ほどから西壁にかけて幅約20cm程の壁溝を検出した。また、中央部に東西方向の約2m程の溝を検出した。						

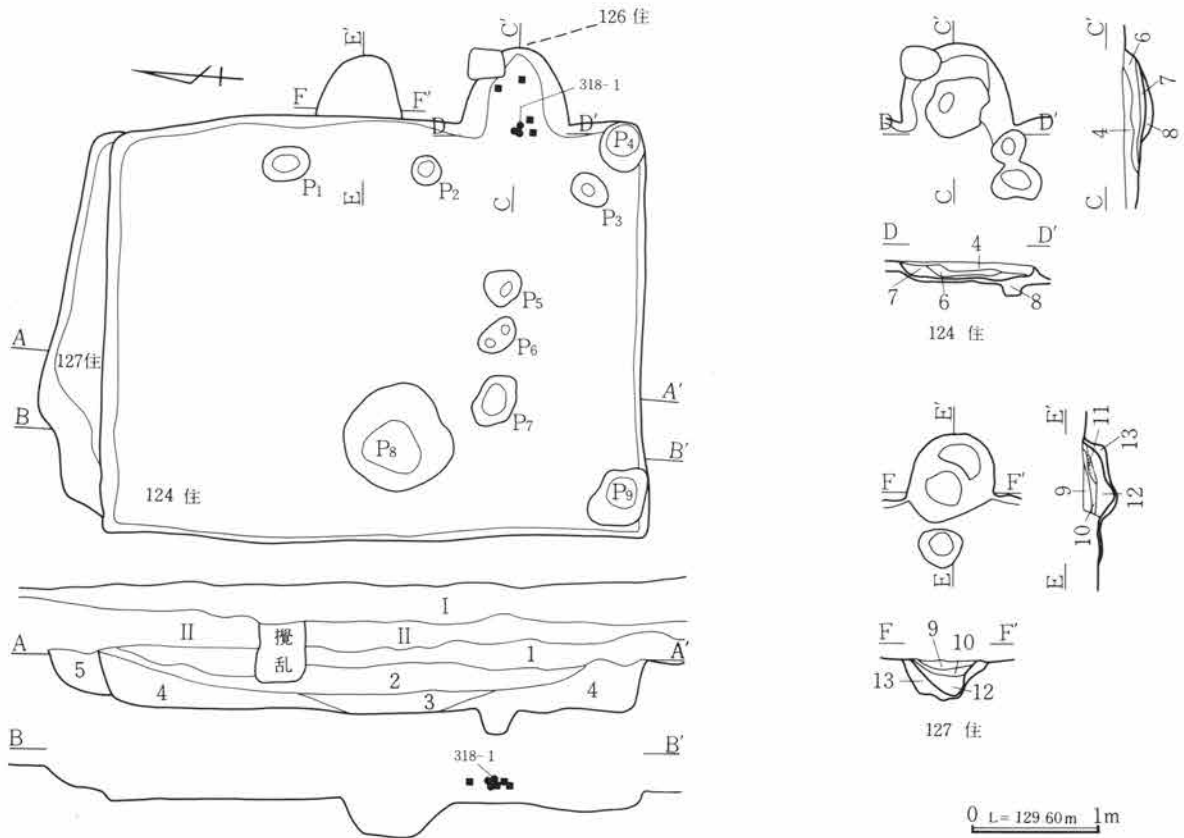


第316図 G区第122号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第124号住居跡	位置	49-F~2-G-61~63グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	長方形	規模	3.30m×4.30m	主軸方位	東—7度—北	残存深度	約 25cm程
備考	第127号住居跡と重複しているが、壁は全周検出し、壁溝は未検出である。床面で検出したピット中、P ₁ ・P ₄ ・P ₉ 及びP ₂ ・P ₃ には規則性が認められそうであるが、柱穴であるかどうかは判断できない。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東—5度—北	
規模	全長 75cm 屋外長 60cm 屋内長 15cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 65cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、燃烧部を含め灰面等は未検出である。袖は両袖共残存していない。掘り方段階では、燃烧部中央及び右袖部に2個のピットを検出した。						

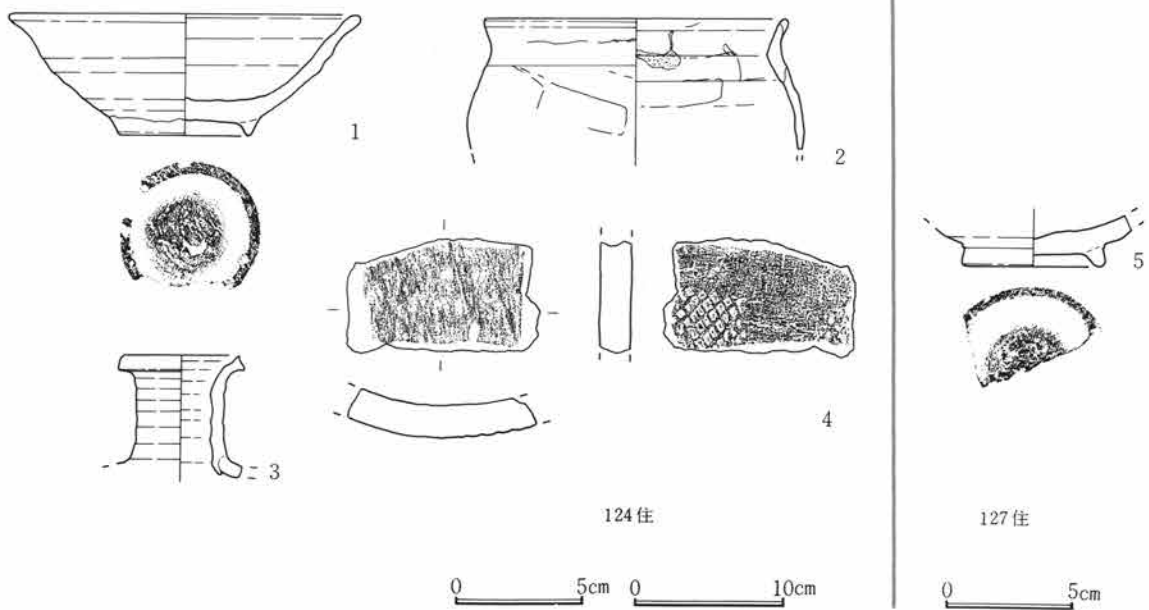
遺構名称	G区第127号住居跡	位置	0~2-G-61~63グリッド内	分類	C-11	時期	—
平面形態	隅丸長方形?	規模	3.00m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 15cm程
備考	第124号住居跡と重複し大半が失われ未検出である。結局残存したのは北壁のわずかであり、残存部に壁溝は検出されていない。柱穴・貯蔵穴は全く不明である。						
カマド	位置・形状	東壁中央南寄りと考えられる・馬蹄形			主軸方位	東—2度—北	
規模	全長 65cm 屋外長 48cm 屋内長 17cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 60cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は第124号住居跡との重複で失われ、それ以外の部分も残存は不良である。燃烧部は掘り方のみ明確で、わずかに掘り窪められている。しかし、焼土・灰等は未検出である。						

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



- | | | | |
|--------|-------------------------|-----------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 | c p 細粒を微量、BPを多量に含む。 | 8 // | 焼土細粒を微量含み、粘性が強い。 |
| 2 // | c p・炭化物を少量、VII層土粒を若干含む。 | 9 // | c p・焼土粒を少量含む。 |
| 3 // | c p・炭化物・VII層土小ブロックを混入。 | 10 // | c p・焼土粒を少量、灰を多量に含む。 |
| 4 // | c p 細粒を2層よりやや少量含む。 | 11 赤褐色焼土層 | |
| 5 // | c p を4層に比してやや多量に含む。 | 12 暗褐色土 | c p を少量、焼土粒を微量含む。支脚覆土か? |
| 6 // | 焼土化した粘土主体。 | 13 // | 8層に近似。 |
| 7 // | 灰を多量に、焼土粒を少量含む。 | | |

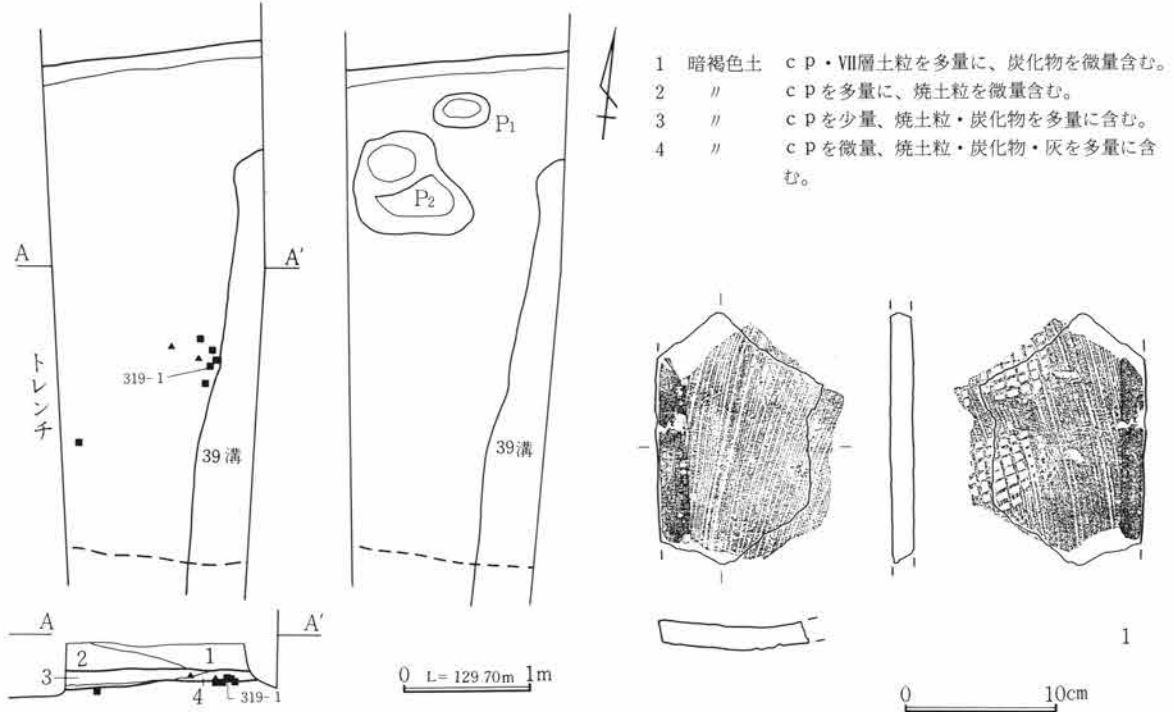
第317図 G区第124・127号住居跡実測図



第318図 G区第124・127号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

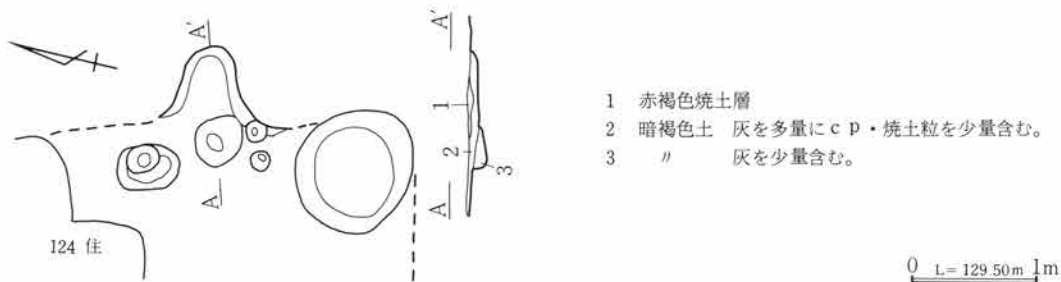
遺構名称	G区第125号住居跡		位置	20~22-G-63・64グリッド内		分類	—	時期	—	
平面形態	不	明	規模	—m×—m		主軸方位	— — 度 — —		残存深度	約 30cm程



第319図 G区第125号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡は、東側で南北農道にかかり、西側を試掘時のトレンチによって削平されているため、ごくわずかの部分を調査したにすぎない。遺物は検出部中央床面にわずかに集中して出土したが良好な資料がない。

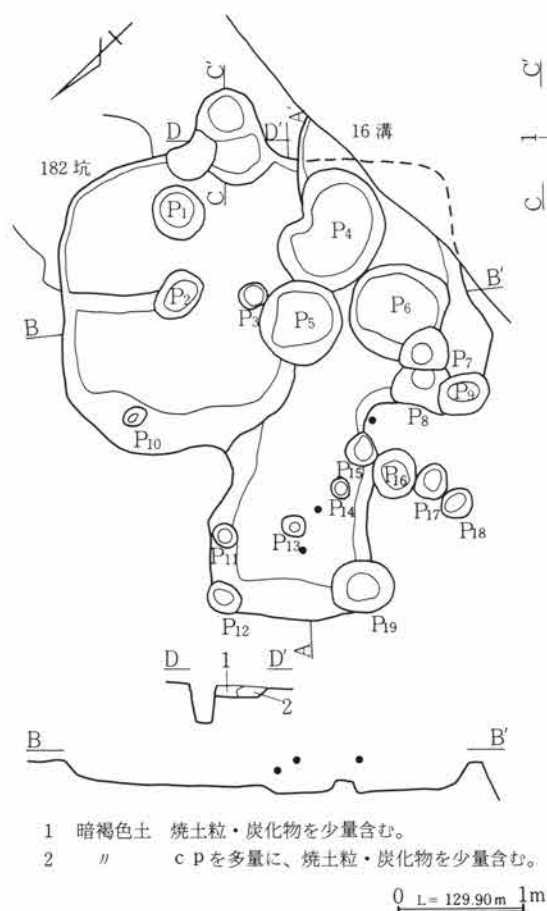
遺構名称	G区第126号住居跡		位置	48-F~1-G-61~63グリッド内		分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×—m		主軸方位	— — 度 — —		残存深度	約 5cm程
備考	北側で第124号住居跡と重複している。全体的には遺構検出面を下げたためか、カマドと貯蔵穴を含む掘り方の一部を検出した。貯蔵穴は円形で、規模は径約95cm、深度約30cmである。								
カマド	位置・形状	東壁部・舌状				主軸方位	東— 8 度—北		
規模	全長 70cm 屋外長 60cm 屋内長 10cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 70cm 煙道幅 — cm								
備考	カマドは、ほとんど掘り方しか残存していない。焚口には径約45cm程の円形ピットが検出されたのみで、灰面等は未検出である。袖は残存せず、燃烧部も焼土等の検出はなかった。								



第320図 G区第126号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第128号住居跡		位置	42・43-G-62・63グリッド内		分類	D-1	時期	—
平面形態	凸字形	規模	3.60m×3.20m	主軸方位	東-45度-南	残存深度	約15cm程		
備考	壁は西側中央部で西に突出し、特異な凸字形を呈する。壁溝は未検出であり、柱穴も不明である。貯蔵穴は、南東コーナー部が第16号溝と重複し失われていることもあり、検出されていない。								
カマド	位置・形状	東壁中央わずか北寄り・馬蹄形				主軸方位	東-45度-南		
規模	全長 65cm 屋外長 50cm 屋内長 15cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 65cm 煙道幅 — cm								
備考	カマドは掘り方しか残存しておらず、灰面・焼土等は未検出である。焚口は半円状にわずかに掘り込みがみられ、左袖部に径約40cm、深度約30cmの円形ピットを検出した。								



第321図 G区第128号住居跡実測図

当住居跡は、南東コーナー部で第16号溝と重複し、この部分を失っているが、ほぼ全形を把握することができた。つまり、西壁中央部から幅約125cm、長さ130cmの範囲が西側に突出している。それ以外の形態は、他の住居跡にみられるような隅丸長方形を呈している。

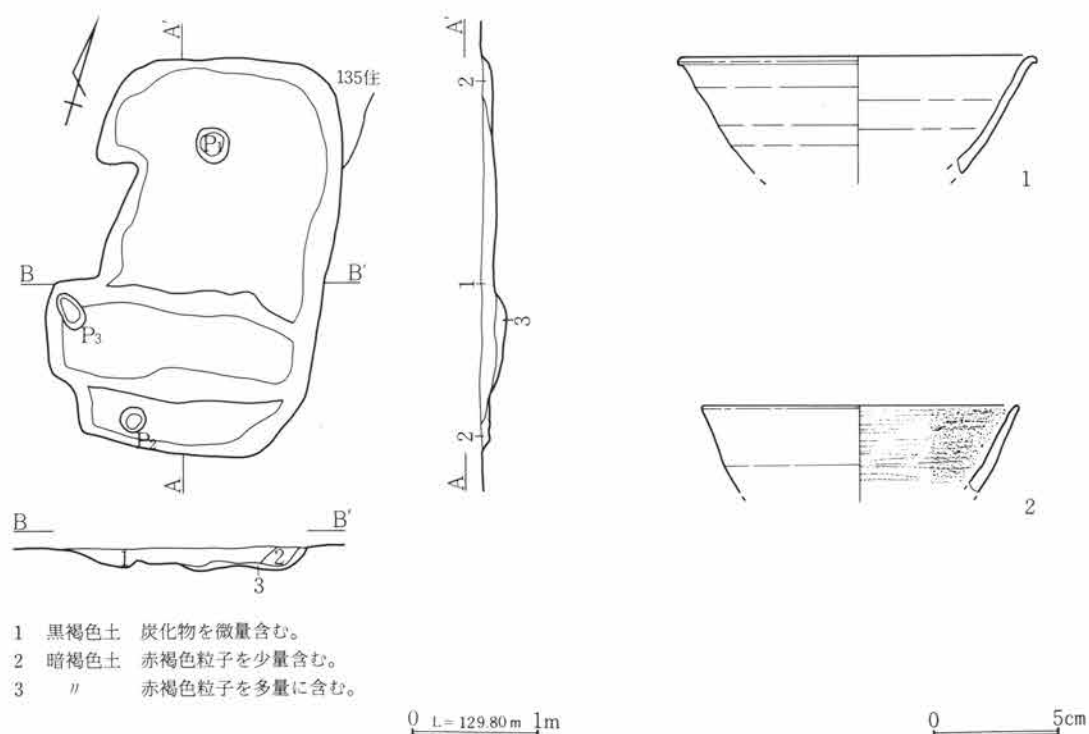
この張り出しが他遺構との重複の結果でないことは、掘り方においてもほぼ段差なく連っていること、及び覆土が区別できなかったことなどから明らかであるが、今回の調査区内からは、西壁の北側約1/2の部分が西に突出する例は数例あったものの、当住居跡のような例は全くみられない。

掘り方段階ではピットを19個検出した。うち壁外のP₁₆～P₁₈は当住居跡に伴うものとは考えられないが、残りは一応伴うものと判断した。しかし規則性は認められず、柱穴と判断したものはない。

遺構名称	G区第131号址		位置	37・28-G-62～64グリッド内		分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	3.10m×1.80m	主軸方位	北-7度-西	残存深度	約20cm程		
備考	西壁の北側と、中央やや南寄りの部分が西側に突出している。底面上で検出したピットは3個でいずれも円形を呈し、規模は小さい。底面はほぼ平坦であり、遺物は覆土中出土のものである。								

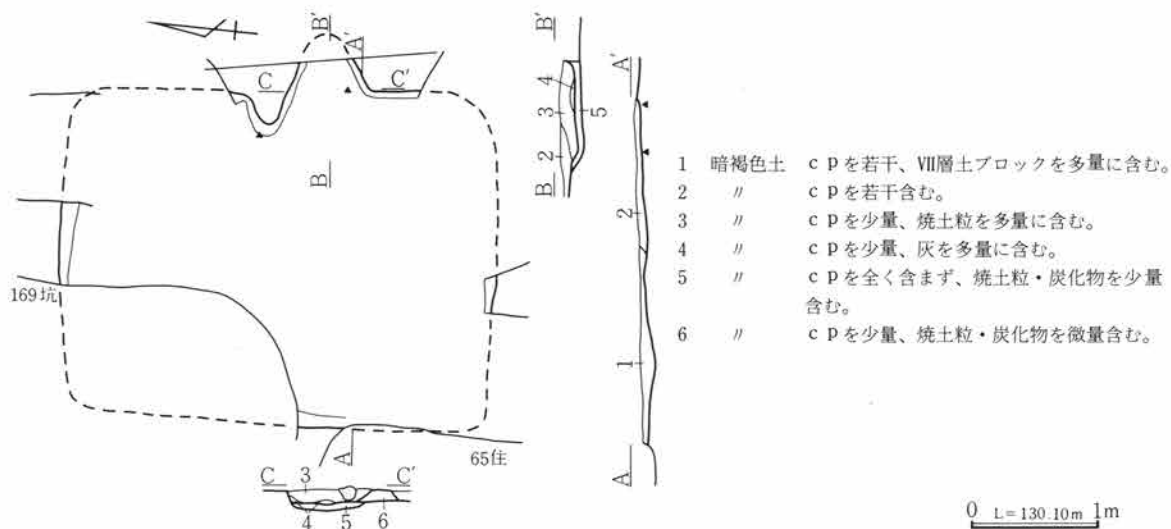
当址は、南北に主軸を有する隅丸長方形の大形の土坑と、東西に主軸を有する小形の土坑が重複したような形態を呈している。この二者に新旧関係があるか否かについては、両者を通るセクション面の観察からも判断しかねるのが現状である。仮に別遺構であるとすれば、東西に主軸を有する方が先行することになる。いずれにしても形態的にもその他の要素からも他の要素からも住居跡とは考えられない。

第3章 検出された遺構・遺物



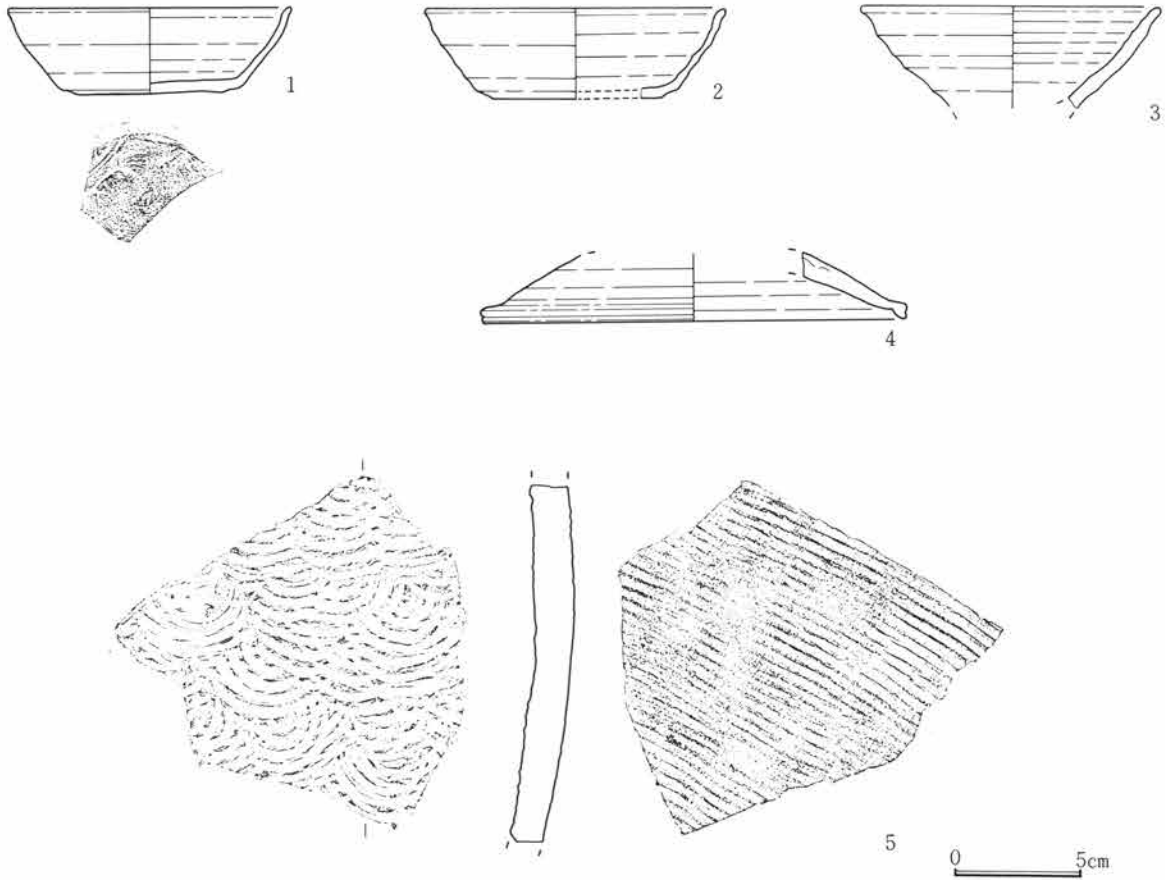
第322図 G区第131号址・出土遺物実測図

遺構名称	G区第133号住居跡	位置	45・46-G-55・56グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形?	規模	2.60m×3.50m	主軸方位	東—2度—北	残存深度	約6cm程
備考	当住居跡は南で第83号住居跡、南西コーナー部で第65号住居跡、北西コーナー部で第169号土坑と重複し、残存しているのは各壁のごく一部と、カマドの一部のみである。						
カマド	位置・形状	東壁中央わずかに南寄り・三角形状			主軸方位	東—2度—北	
規模	全長—cm	屋外長—cm	屋内長—cm	袖間幅—cm	燃烧部幅	60cm	煙道幅—cm
備考	焚口は床面と同レベルで、掘り方はない。燃烧部にはごくわずかに灰面を検出した。袖は、左袖がわずかに残存しているが、構築材は未検出で暗褐色土で構築されている。						



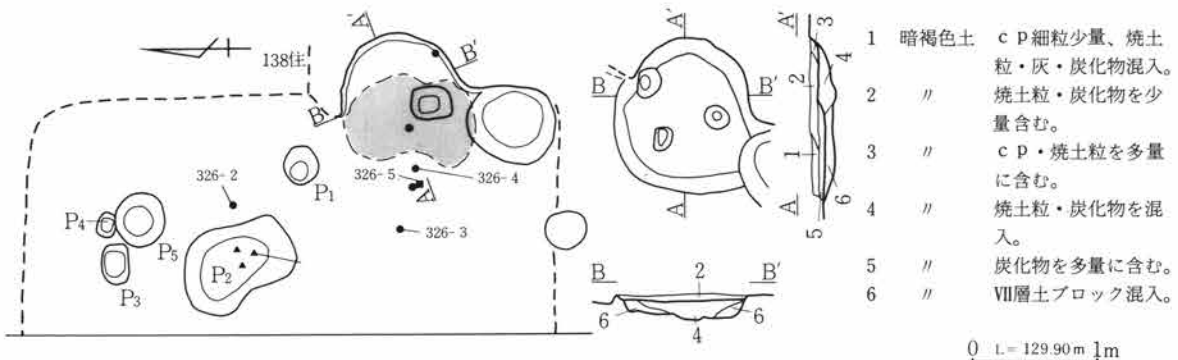
第323図 G区第133号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



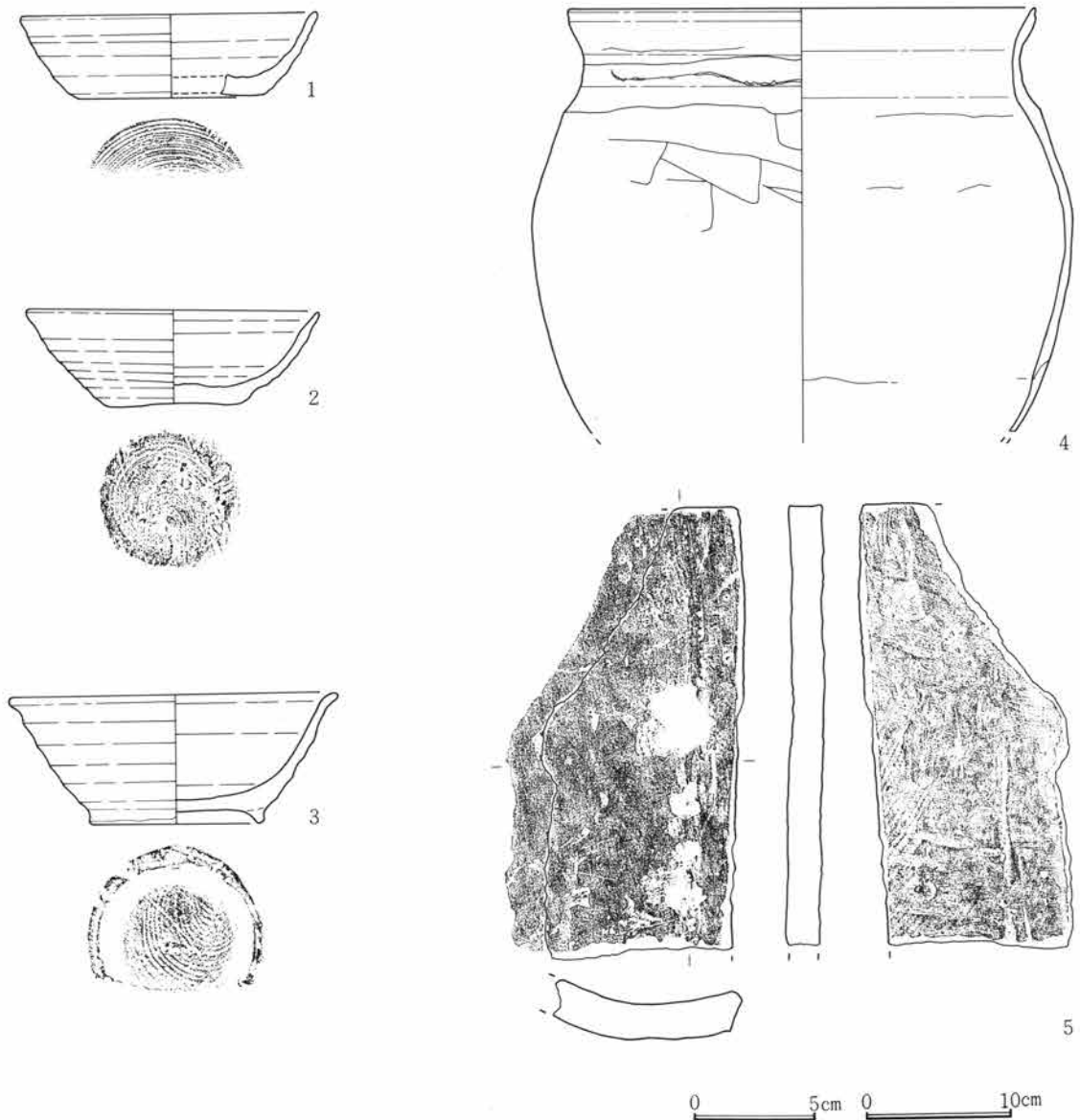
第324図 G区第133号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第135号住居跡	位置	38～40-G-62～64グリッド内	分類	—	時期	VII
平面形態	不明	規模	—m×—m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 5cm程
備考	西側は南北農道下にかかり未検出であり、検出した部分も遺構検出面が下位であったため、残存したのはカマド・貯蔵穴・掘り方のピットである。貯蔵穴は円形で、径約60cm、深度約20cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りと考えられる・馬蹄形			主軸方位	東— 0 度—北	
規模	全長 40cm 屋外長 — cm 屋内長 — cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 100cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、焚口から燃烧部までの灰面を検出した。袖は残存せず、右袖部近くに方形ピットを検出した。燃烧部に焼土面は検出されていない。						



第325図 G区第135号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物

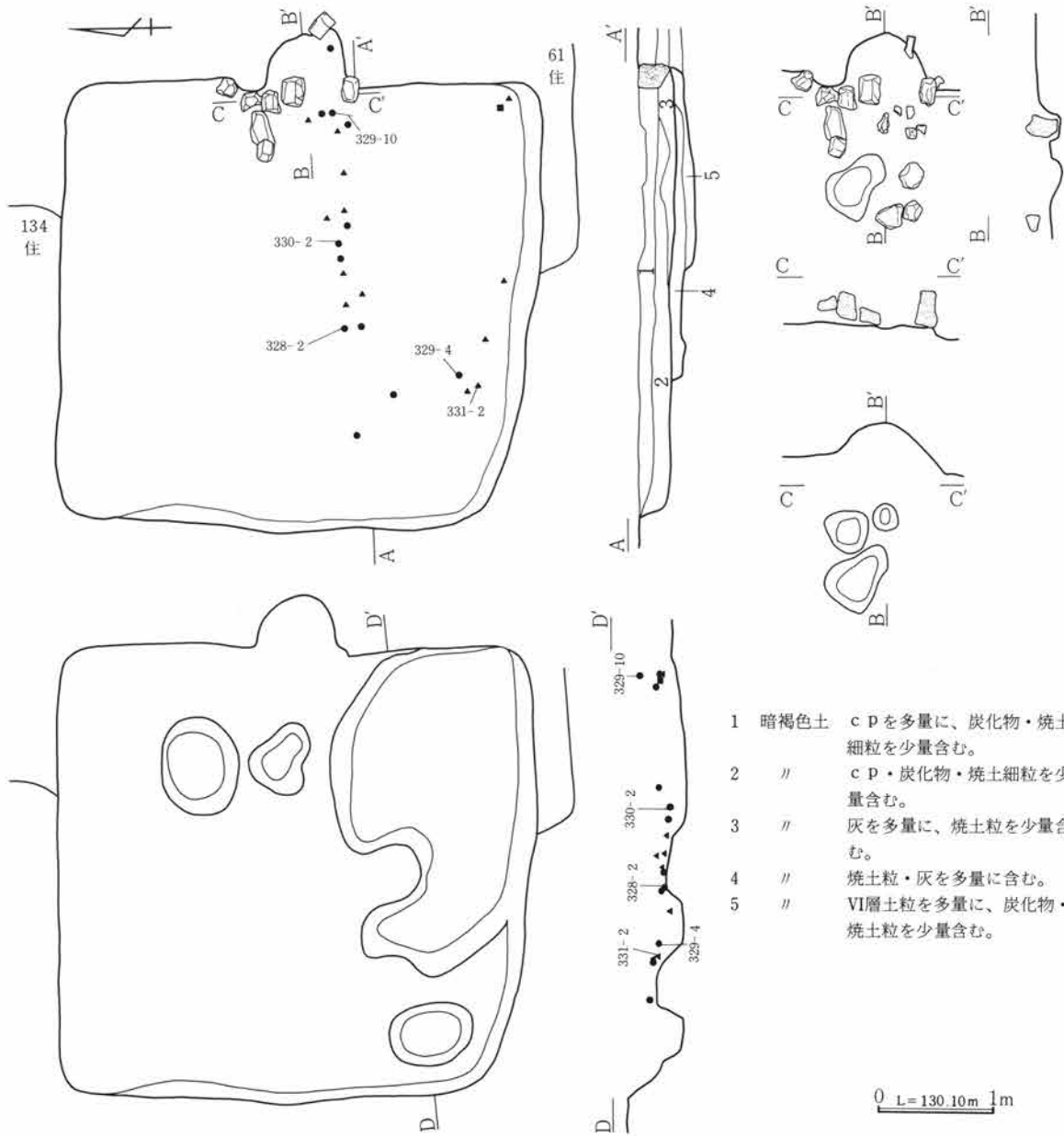


第326図 G区第135号住居跡出土遺物実測図

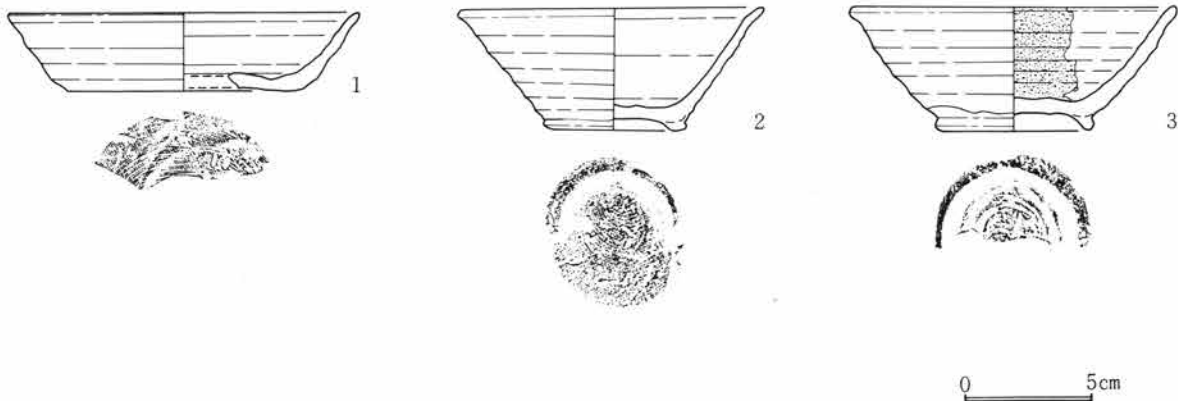
遺構名称	G区第136号住居跡		位置	45～47-G-69～71グリッド内		分類	A-3	時期	IX		
平面形態	隅丸方形?	規模	3.90m×-m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約23cm程				
備考	東側で第61号住居跡と重複している。壁は南壁と西壁の一部を検出した。壁溝は残存部には未検出であり、貯蔵穴は、掘り方段階で第61号住居跡の掘り方にかかり、明確にできなかった。										
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央・馬蹄形?				主軸方位	東-0度-北				
規模	全長	-cm	屋外長	-cm	屋内長	-cm	袖間幅	85cm	燃烧部幅(65)cm	煙道幅	-cm
備考	カマド周囲には礫が多く検出されている。そのうち袖部位置にそれぞれ1個ずつ礫が立てられており、袖構築材と考えられる。焚口前面に掘り方段階でピットを検出した。										

当住居跡は、遺構検出段階ではプランが不明確で、第61号住居跡と同時に調査した。その結果、当住居跡の東側約1/2の部分まで第61号住居跡がかかっているにもかかわらず、当住居跡のカマド袖構築材が残存していたことは、第61号住居跡→当住居跡という新旧関係が考えられる。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

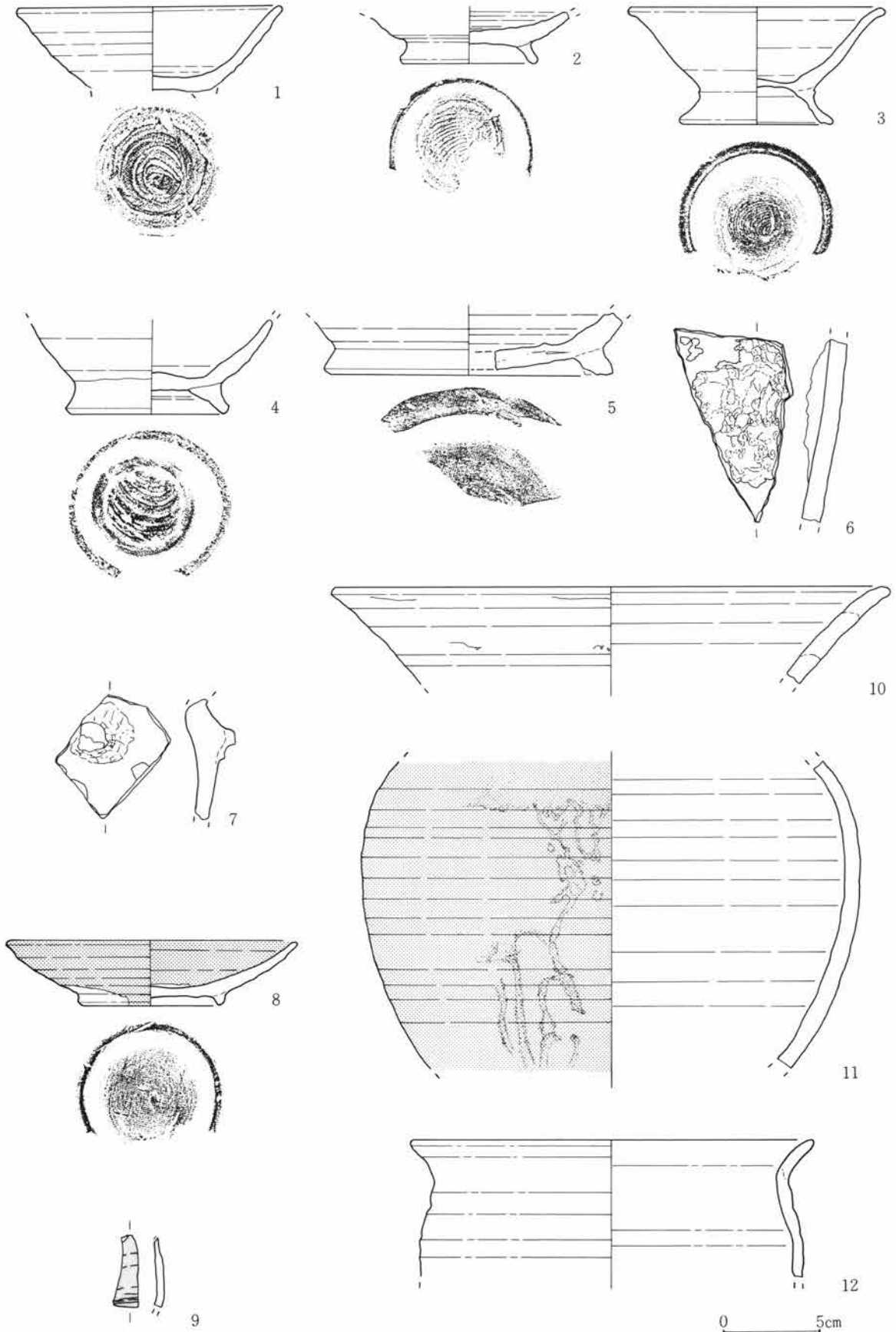


第327図 G区第136号住居跡実測図



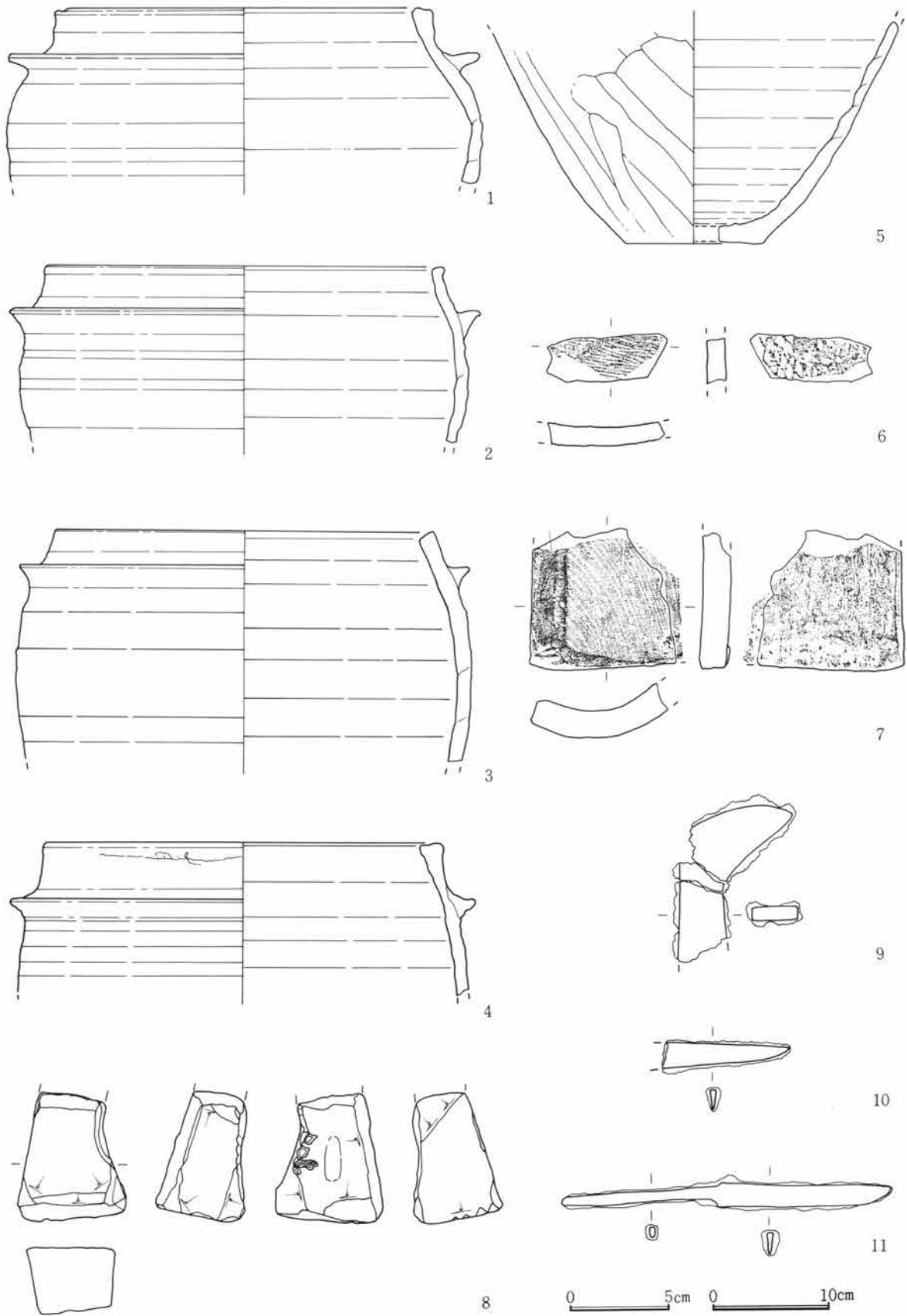
第328図 G区第136号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



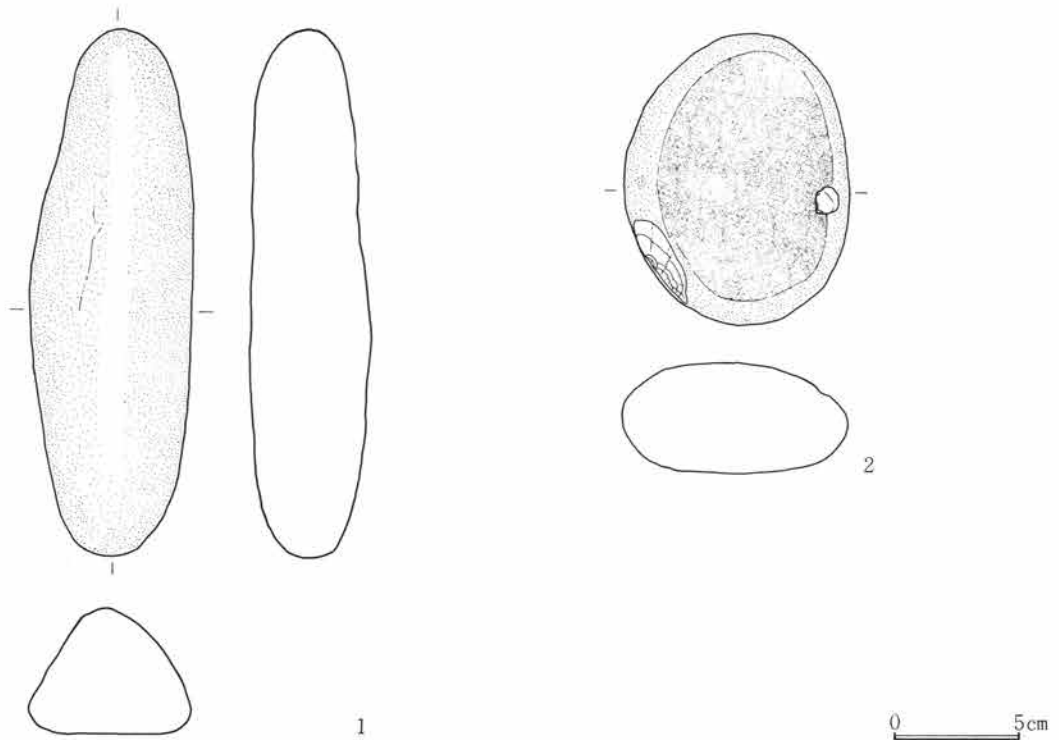
第329図 G区第136号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



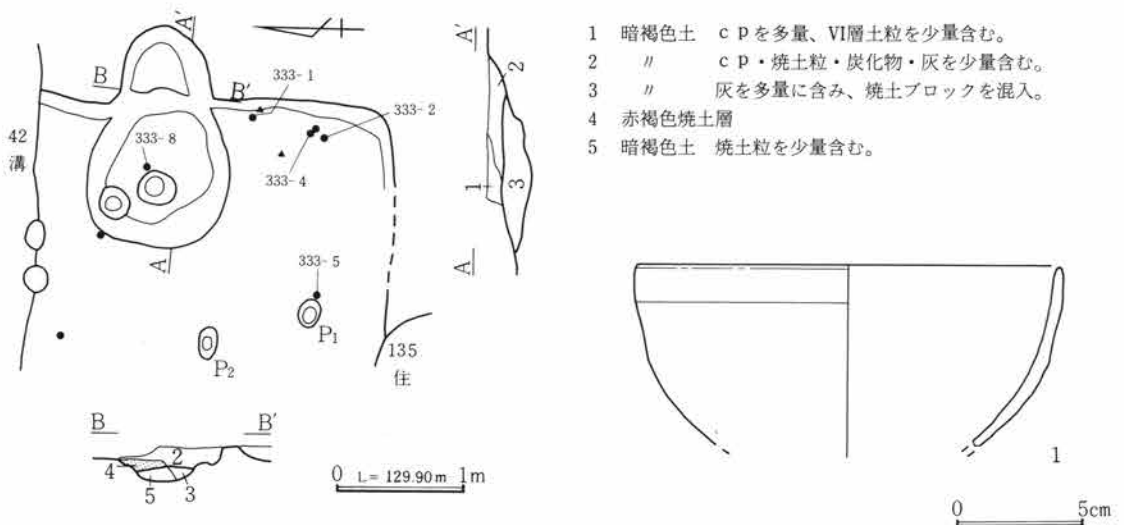
第330図 G区第136号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第331図 G区第136号住居跡出土遺物実測図

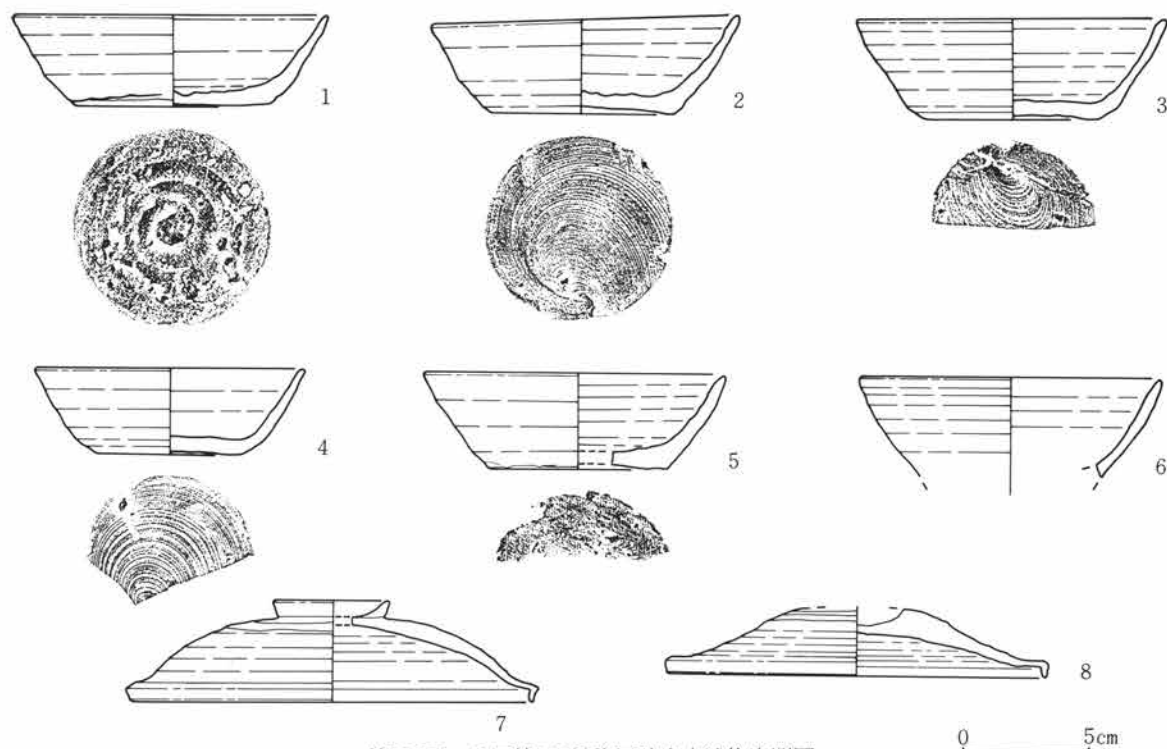
遺構名称	G区第138号住居跡	位置	39・40-G-61~63グリッド内	分類	—	時期	V
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×—m	主軸方位	東—0度—北	残存深度	約15cm程
備考	西側は、南北農道下にかかり未検出である上、北側は中世溝と重複しており、残存状態は良好でない。したがって壁は東壁の一部のみ検出した。						
カマド	位置・形状	東壁中央部か?・馬蹄形			主軸方位	東—0度—南	
規模	全長 70cm 屋外長 60cm 屋内長 10cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 77cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は床面とほぼ同レベルで、灰面は未検出である。燃烧部地寄りに焼土ブロックを検出した。袖は全く残存せず、掘り方段階でも構築材等の痕跡は未検出である。						



- 1 暗褐色土 c Pを多量、VI層土粒を少量含む。
- 2 // c P・焼土粒・炭化物・灰を少量含む。
- 3 // 灰を多量に含み、焼土ブロックを混入。
- 4 赤褐色焼土層
- 5 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

第332図 G区第138号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第333図 G区第138号住居跡出土遺物実測図

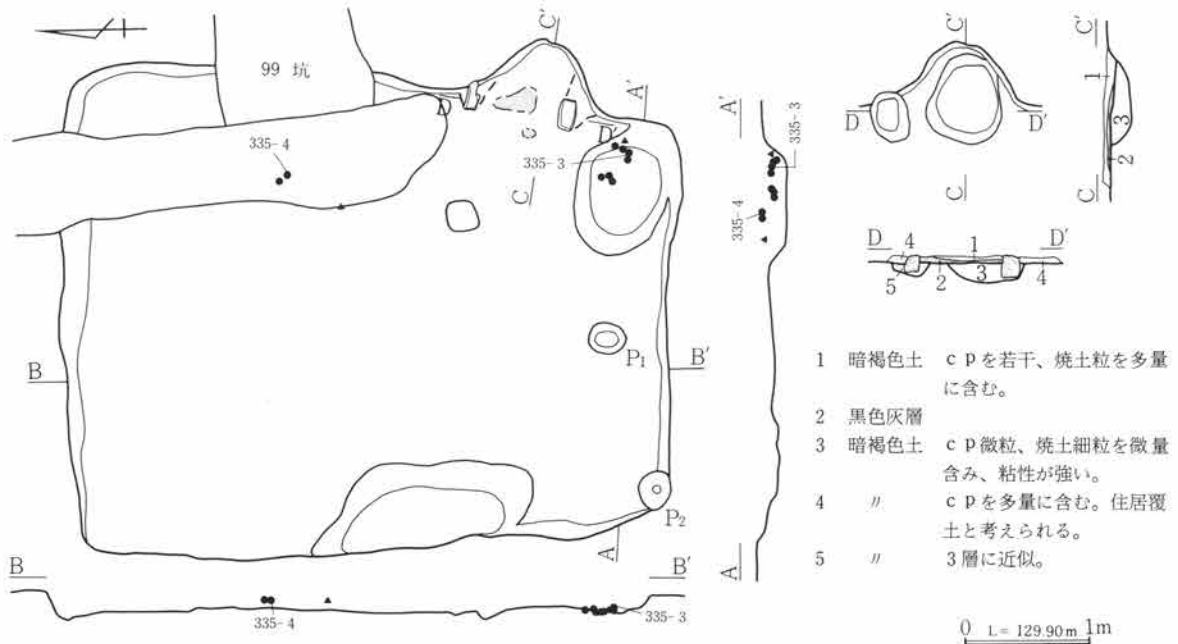
当住居跡の東側検出部分は、南北農道下にかかっており、この農道下調査時に調査した。しかし、先行調査した部分は、遺構検出面が若干下位だったためか、当住居跡の西側半分は検出されなかった。したがってカマド及び南東コーナー部を含む約¼部分のみの調査となった。

カマドの掘り方は、屋外部が特に顕著で、焚口と燃焼部を含めた径約120cm程の円形の掘り方を有しており、中央部及び北寄りに円形ピットを検出した。

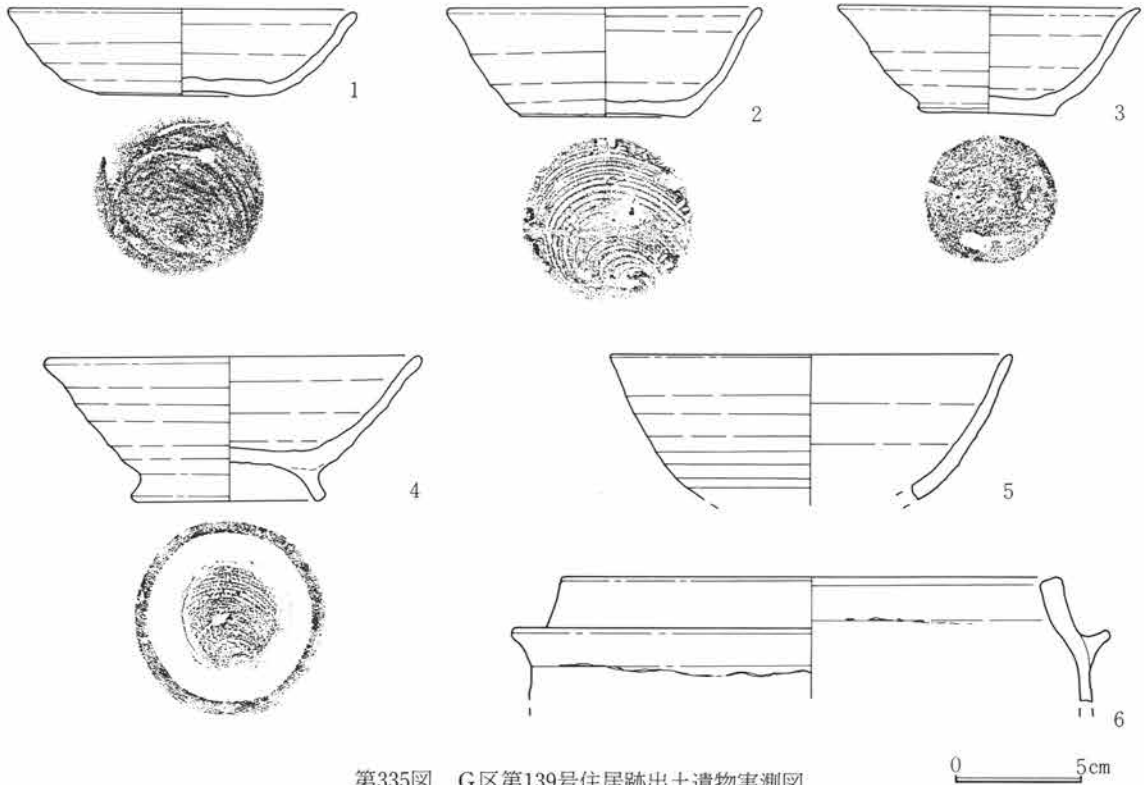
遺構名称	G区第139号住居跡		位置	36～39-G-60～62グリッド内		分類	C-11	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	3.20m×4.80m	主軸方位	東-9度-南	残存深度	約10cm程		
備考	西壁は未検出で、残り3方の壁はわずかであるが立ち上がりを検出した。床面はVII層中で平坦である。壁溝・柱穴は、掘り方段階でも未検出である。貯蔵穴は南東コーナー部で、円形を呈する。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・三角形状				主軸方位	東-14度-南		
規模	全長 60cm	屋外長 60cm	屋内長	— cm	袖間幅 95cm	燃焼部幅 60cm	煙道幅	— cm	
備考	焚口にごくわずかに、また、袖間に灰面を検出した。袖は両袖共角柱状の截石を据えて構築している。燃焼部には焼土、灰等の純層は検出されていない。								

当住居跡は、南北農道下の調査時に検出したもので、東壁北寄り第99号土坑と重複している。また、北壁部で中世溝と重複している。西壁は他住居跡との重複は全く認められないが、ちょうど南北農道部分と、先行調査部分との境になっており、先行調査時には検出されていない。これは第138号住居跡同様、南北農道下の遺構検出面に比較して、先行調査部分の遺構検出面が若干下位であったことによると思われる。

掘り方は、住居中央部には全くみられず、わずかに西壁に接して、不整楕円形の土坑を1基検出した。規模は長軸約180cm、深軸約70cm、深度約12cmである。その他床面上で検出したピットは3個で、南壁寄りに検出したものはほぼ同規模の円形のもので、カマド正面に検出されたものは方形プランで中世のものである。



第334図 G区第139号住居跡実測図



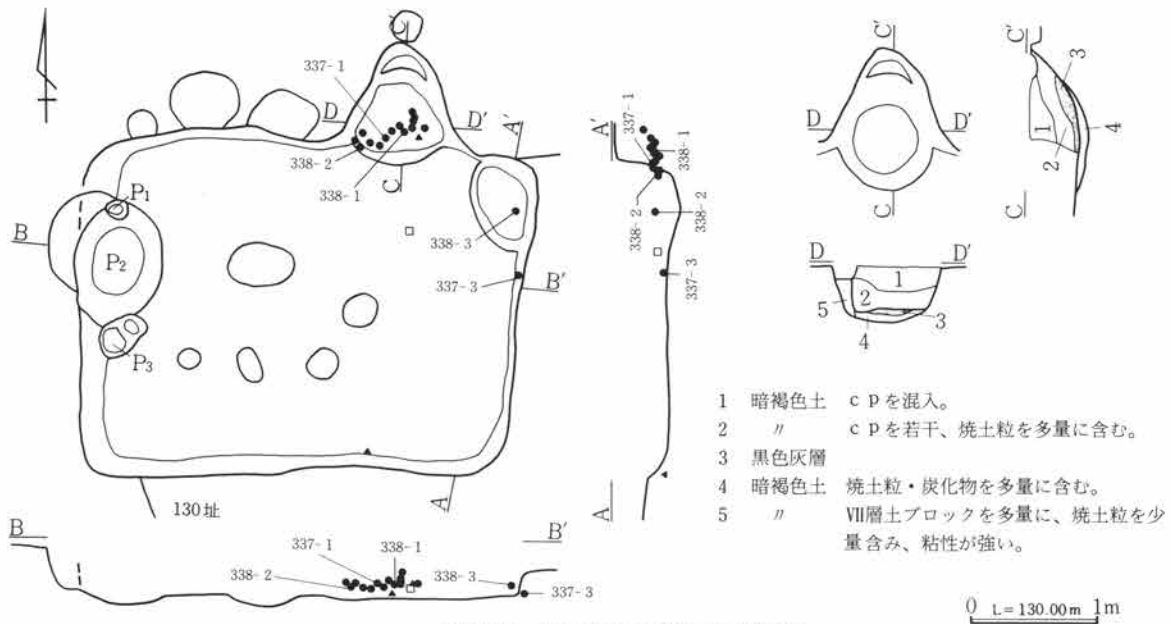
第335図 G区第139号住居跡出土遺物実測図

カマドの掘り方は、焚口には全くみられず、左袖部に楕円形プランで、長軸約40cm、短軸約30cm、深度約10cmの袖構築材の据え方を検出した他、右袖部にはなく、燃焼部中央に楕円形で長軸約65cm、短軸約60cm、深度約15cmの掘り方を検出した。この楕円形掘り方の南寄りに、右袖の構築材の角柱状截石が据えられていた。したがってカマドの主軸は、調査時検出したものよりもかなり南向きになるものと考えられる。

遺物は、覆土中出土のものを含めてもわずかで、特に貯蔵穴中からの出土が顕著である。

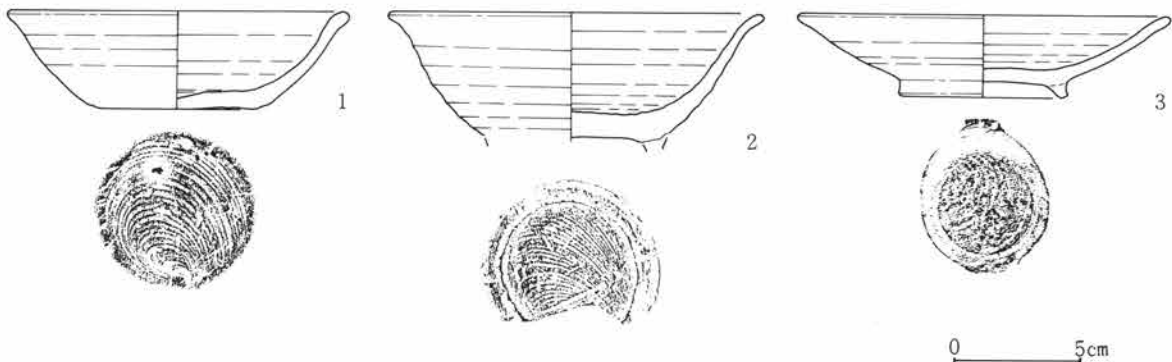
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	G区第140号住居跡	位置	44～46-G-62・63グリッド内	分類	C-10	時期	VII
平面形態	隅丸長方形	規模	2.70m×3.40m	主軸方位	北-3度-東	残存深度	約30cm程
備考	壁はほぼ全周を検出し、VI層中に掘り込まれ残存状態は良好である。壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴は、北東コーナー部で楕円形を呈する。規模は径約70cm、深度約10cmである。						
カマド	位置・形状	北壁東寄りに扁在・三角形状			主軸方位	北-4度-東	
規模	全長 75cm 屋外長 75cm 屋内長 20cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 80cm 煙道幅 40cm						
備考	焚口は浅い掘り込みで、灰面は未検出である。袖は左袖のみわずかに残存し、瓦を据えて構築されている。燃烧部は周囲より若干掘り窪められており、1段の段を有して煙道部へと連なる。						

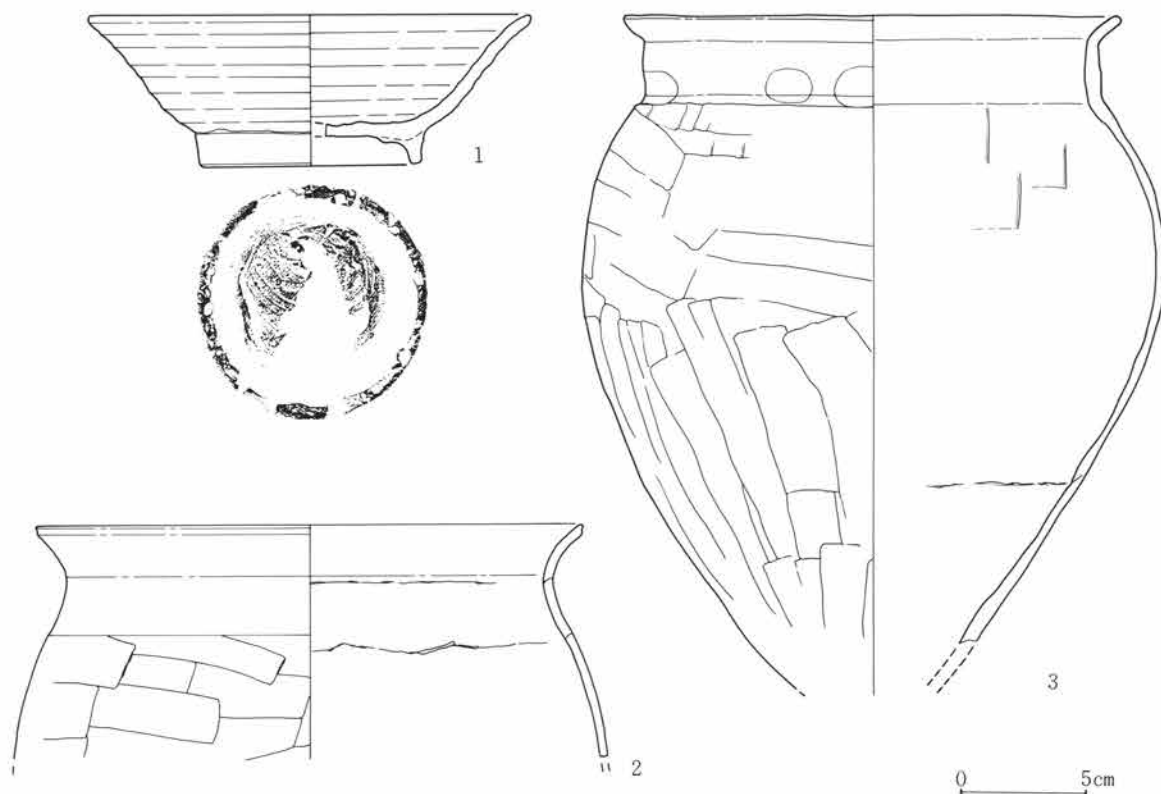


第336図 G区第140号住居跡実測図

当住居跡は、南側で第130号址と重複しているが、掘り込みが比較的深度のため、壁は全周残存していた。当住居跡を最も特徴づけている北壁にカマドを有するという例は、今回報告する区画内には全く検出されていない。しかし、カマドは明らかに北壁に掘り込まれており、東壁には痕跡もみられない。また、他の住居跡では、かなりの検出率で南東コーナー部に貯蔵穴が付設されているのであるが、当住居跡の場合は、北東コーナー部に検出されている。つまりカマドの右側に位置することになり、一般的に検出されている住居跡の主軸を約90°北に向けた状態を呈することになる。いずれにしても当遺跡にあっても特異な例である。



第337図 G区第140号住居跡出土遺物実測図



第338図 G区第140号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第141号住居跡	位置	5～8-G-60～63グリッド内	分類	C-4	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	3.50m×5.40m	主軸方位	東-13度-北	残存深度	約 5cm程
備考	西壁南寄りで第142号住居跡と重複し、壁の一部が不明。壁溝・貯蔵穴は未検出である。柱穴は掘り方段階で検出したピットも該当しないと思われる。						
カマド	位置・形状	東壁中央南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-13度-北	
規模	全長 103cm 屋外長 64cm 屋内長 39cm 袖間幅 68cm 燃烧部幅 68cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は浅い掘り込みで、前面に灰面は検出されていない。袖の左袖は瓦、右袖は角柱状截石を据えて構築していた。燃烧部は、全面に灰面があり、中央部やや北寄りに焼土面を検出した。						

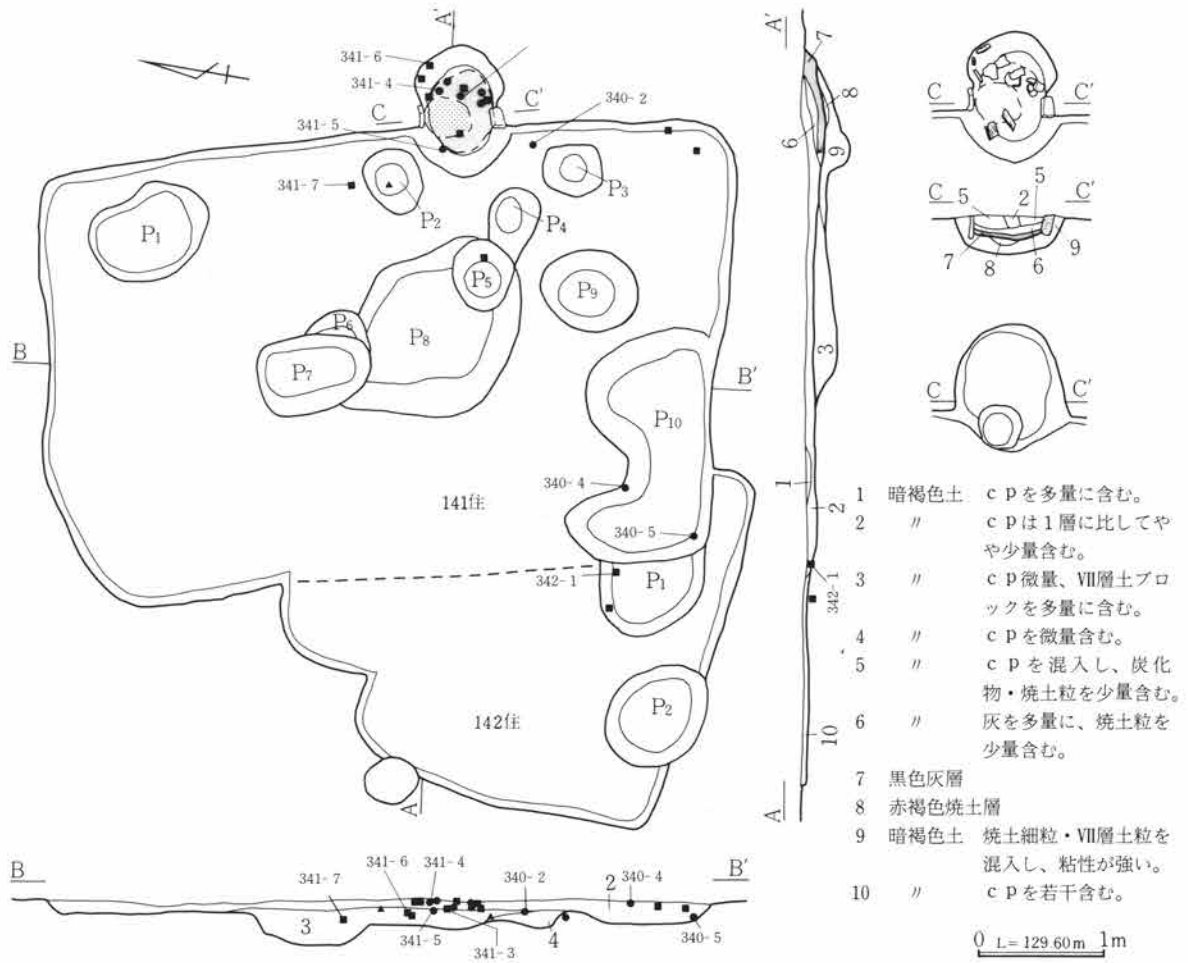
遺構名称	G区第142号住居跡	位置	5～7-G-62・63グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	鍵形 ?	規模	2.90m×3.40m	主軸方位	東-9度-南	残存深度	約 4cm程
備考	カマドを含む東壁部で第141号住居跡と重複し、西・南壁のみ検出した。壁溝・柱穴は未検出であり、貯蔵穴も不明である。壁は西壁南側が西側に張り出す。						

第141・142号住居跡の新旧関係は、東西に設定したセクション面の観察からは、明確に判断することはできない。しかし第142号住居跡のカマドが、第141号住居跡との重複によって失われており、このことによって、第142号住居跡→第141号住居跡という関係がとらえられる。

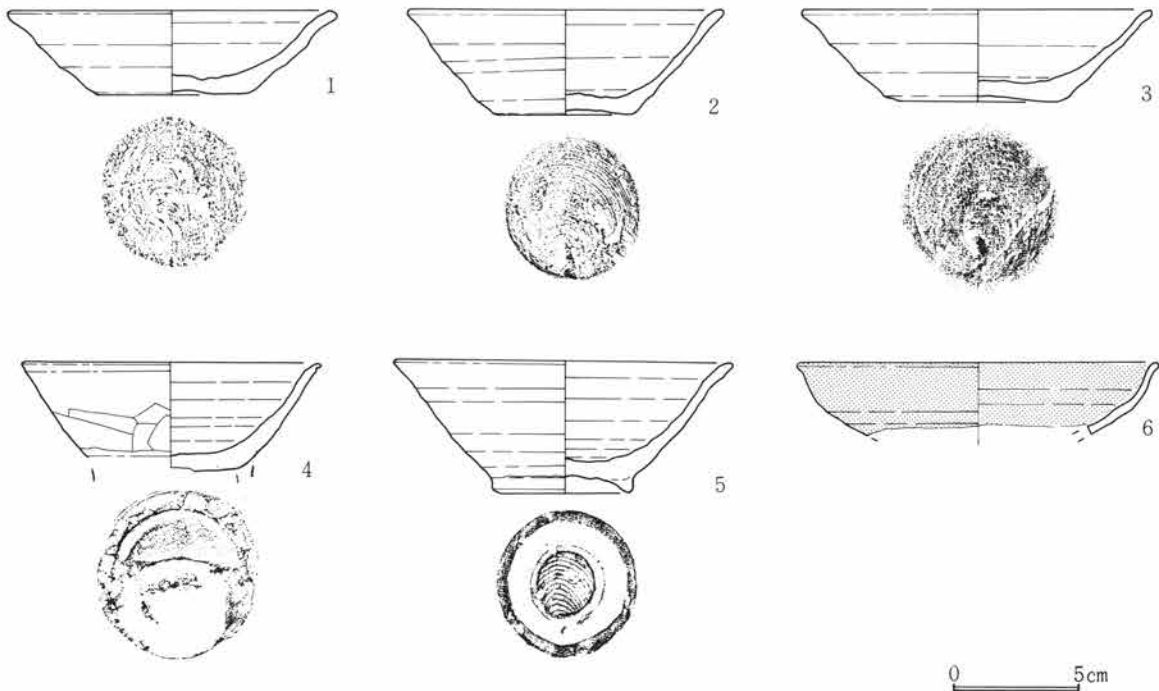
第141号住居跡の掘り方は、ピットと土坑の集合したような状態を呈している。このうちP₂・P₃とした円形ピットはカマドを挟んで両側に位置し、配置に規則性がありそうであるが、柱穴と考えられるような配置のピットはみられない。

第142号住居跡の平面形態は、西壁の南寄りが張り出すもので、他に例はみられない。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

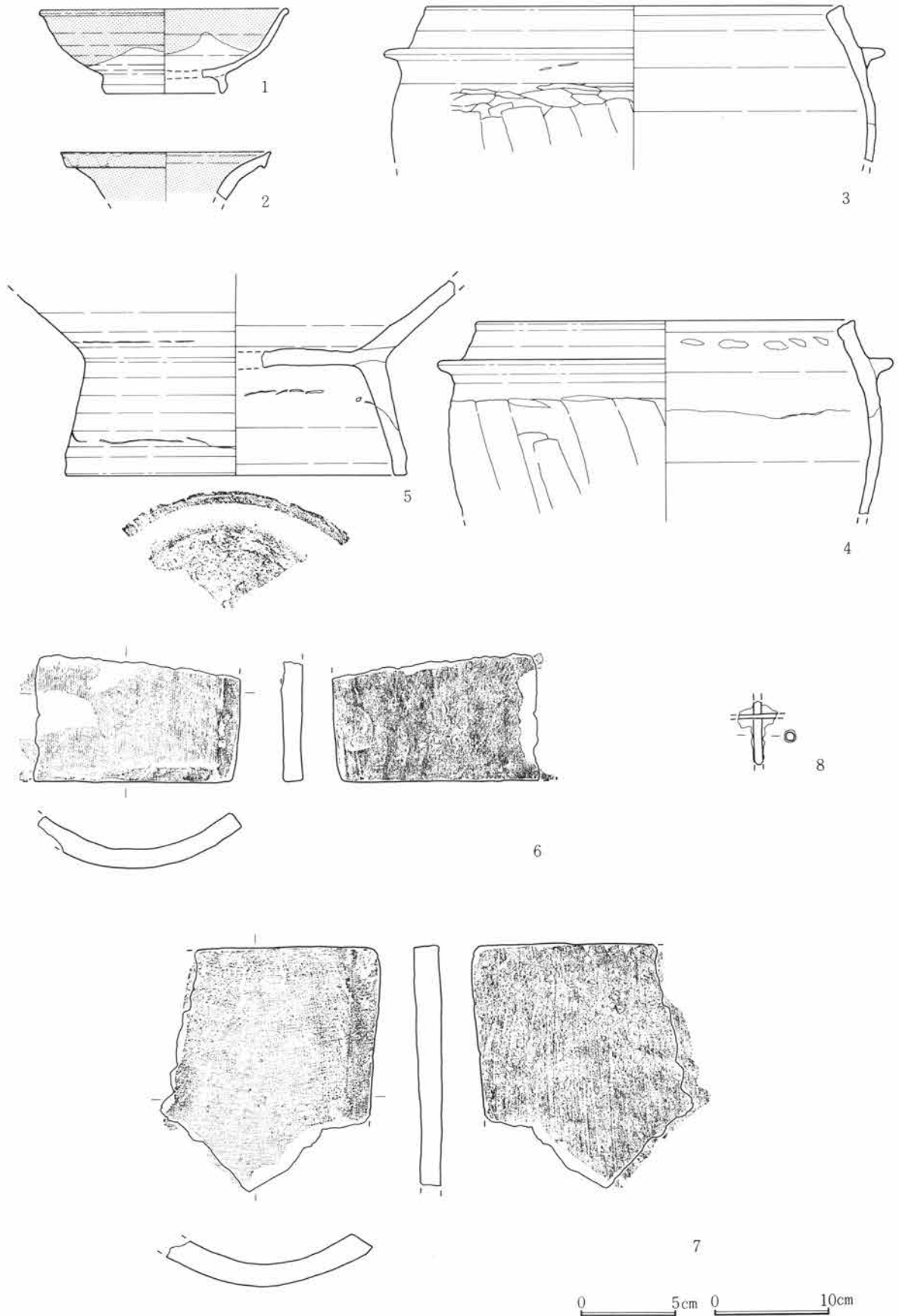


第339図 G区第141・142号住居跡実測図



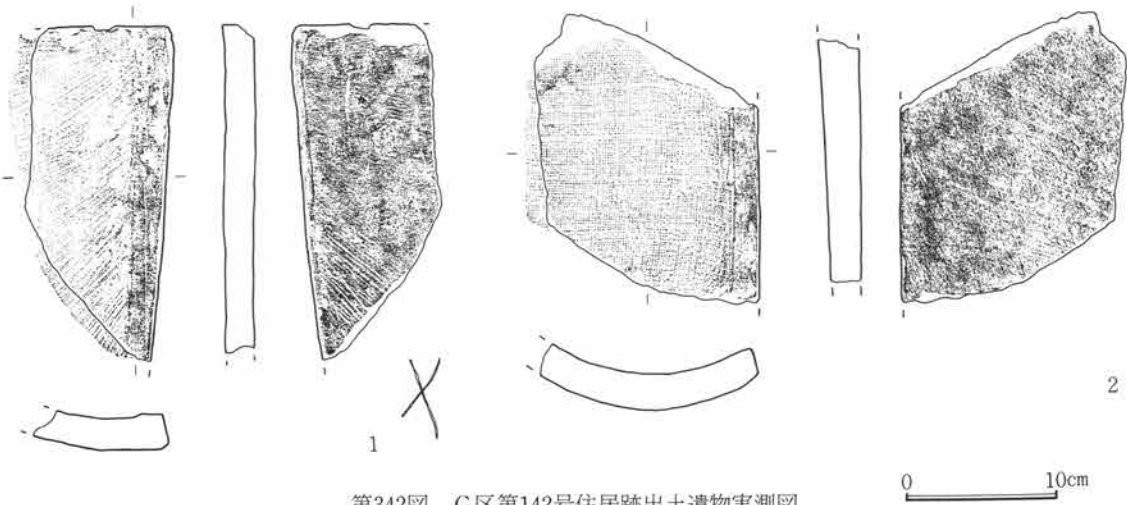
第340図 G区第141号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



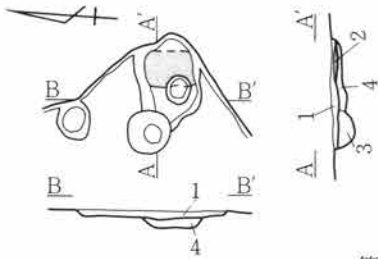
第341図 G区第141号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第342図 G区第142号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	G区第143号住居跡	位置	2-G-62グリッド内		分類	—	時期	—
平面形態	不明	規模	—m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 — cm程	
備考	住居平面プランは、遺構検出面が低かったため未検出であり、カマドのみわずかに痕跡を残している。カマドは、すでに燃焼面近くまで下がっており、掘り方主体に調査した。							



第343図 G区第143号住居跡実測図

当住居跡のカマドは、平面形態は三角形状を呈し、燃焼部最奥部底面にわずかに灰面を検出した。また、掘り方段階では左袖部及び中央部に円形ピットを検出した。このうち左袖部に位置するものは、袖構築材の据え方と考えられるが、対応するものが右袖部には未検出である。

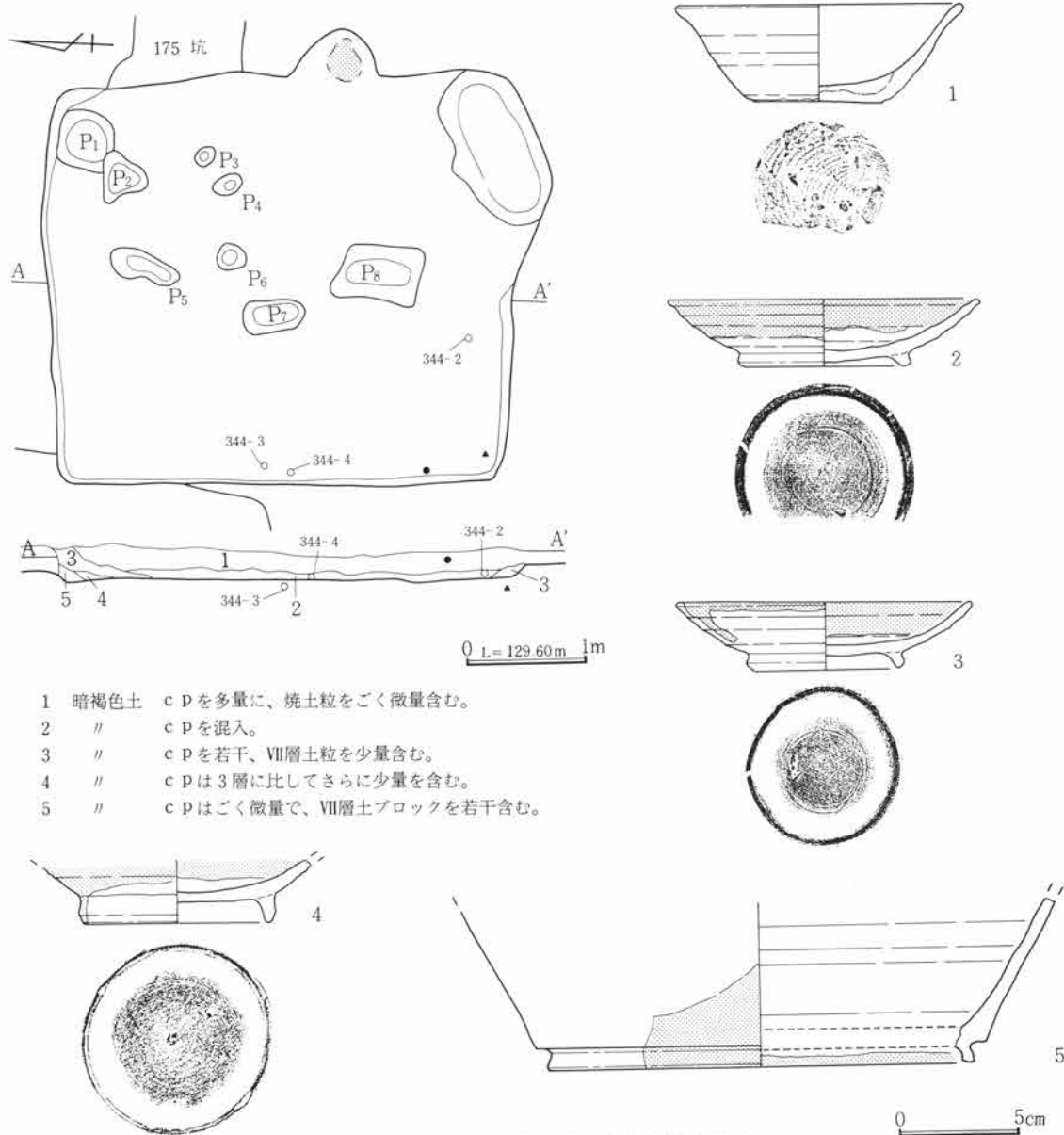
遺構名称	G区第144号住居跡	位置	9～11-G-62～64グリッド内		分類	A-3	時期	—
平面形態	隅丸方形？	規模	3.40m×3.90m	主軸方位	東— 4 度—北	残存深度	約 20cm程	
備考	東壁は、南北農道下にかかり、また、第175号土坑との重複によって失われており、カマドも燃焼部底面の焼土面を検出したにすぎない。							

当住居跡の壁は、北壁・西壁及び南壁の一部が残存している。残存深度は浅く、覆土のセクション面観察では、北側からの埋没が顕著であり、南側は1層そのもののあり方が曖昧となっている。

カマドは、東壁の中央やや南寄りに位置していたものと考えられ、焼土面だけが検出され、形態その他細部の構造は全く不明である。南東コーナー部と考えられる位置には、貯蔵穴と判断した楕円形の土坑を検出した。規模は長軸約120cm、短軸約65cm、深度約23cmで、遺物出土はみられなかった。

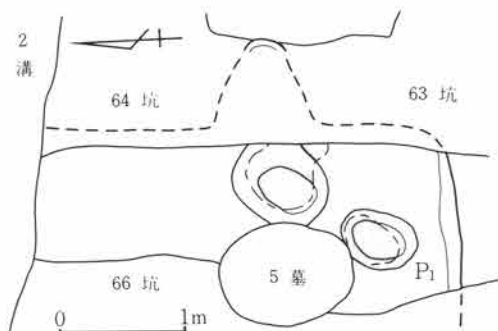
掘り方は、床面全体には及ばず、中央から北寄りに不整形プランのピットが8個検出された。しかし規模配置は一定せず、柱穴と想定されるものは皆無である。

第3章 検出された遺構・遺物



第344図 G区第144号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	G区第145号住居跡	位置	12・13-G-58・59グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	不明	規模	—m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 — cm程

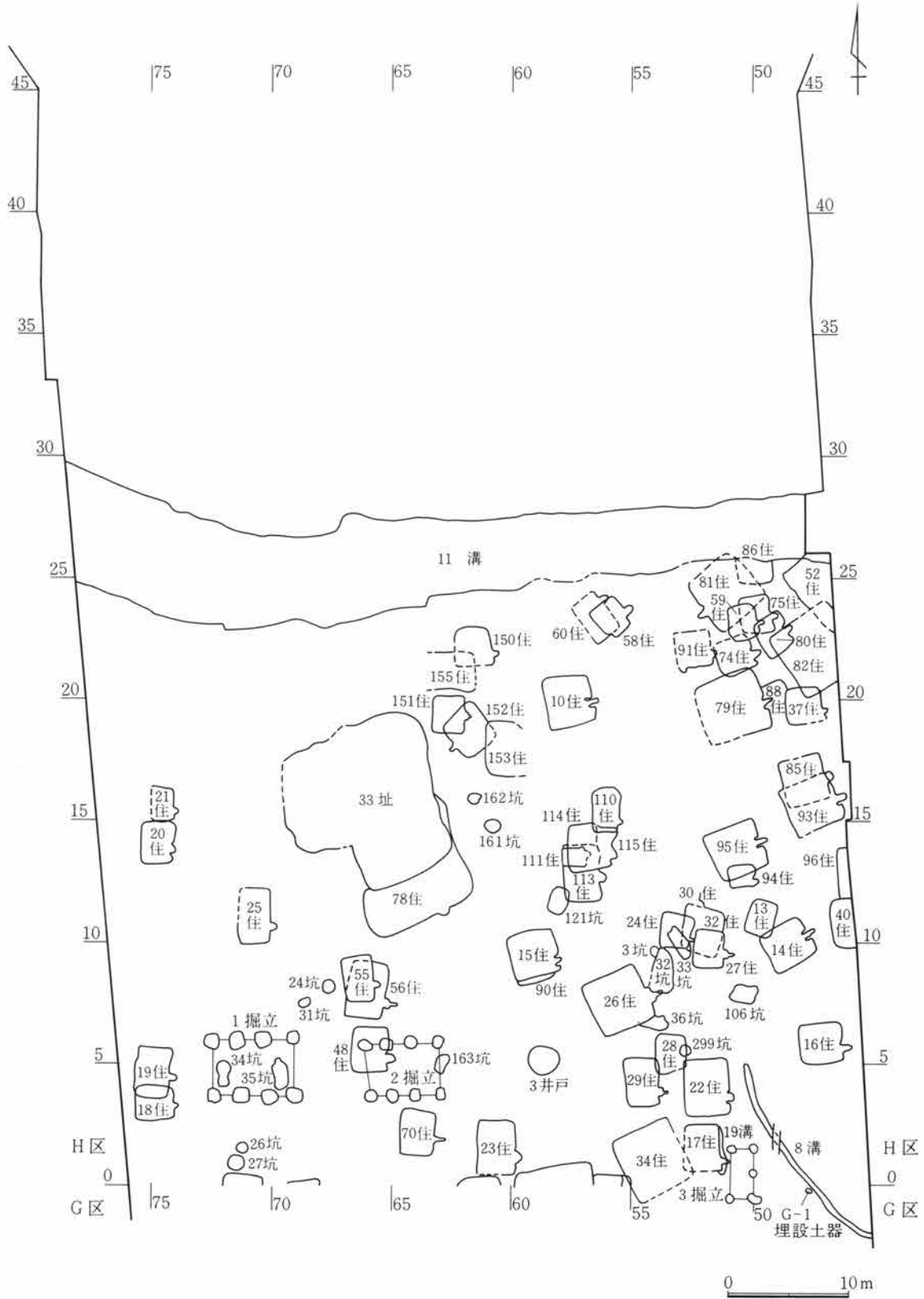


第345図 G区第145号住居跡実測図

当住居跡は、北側で第2号溝と、東側で第21号溝と重複する他、第63・64・66号土坑、第5号土壇墓と重複し、主体の大半を失っている。

カマドは東壁の中央付近に位置すると思われるが、主体は第21号溝により削平を受け、焚口の位置すると思われる位置に円形の掘り込みと、上面の灰面を検出した。灰面は南寄りのピット上にも検出された。

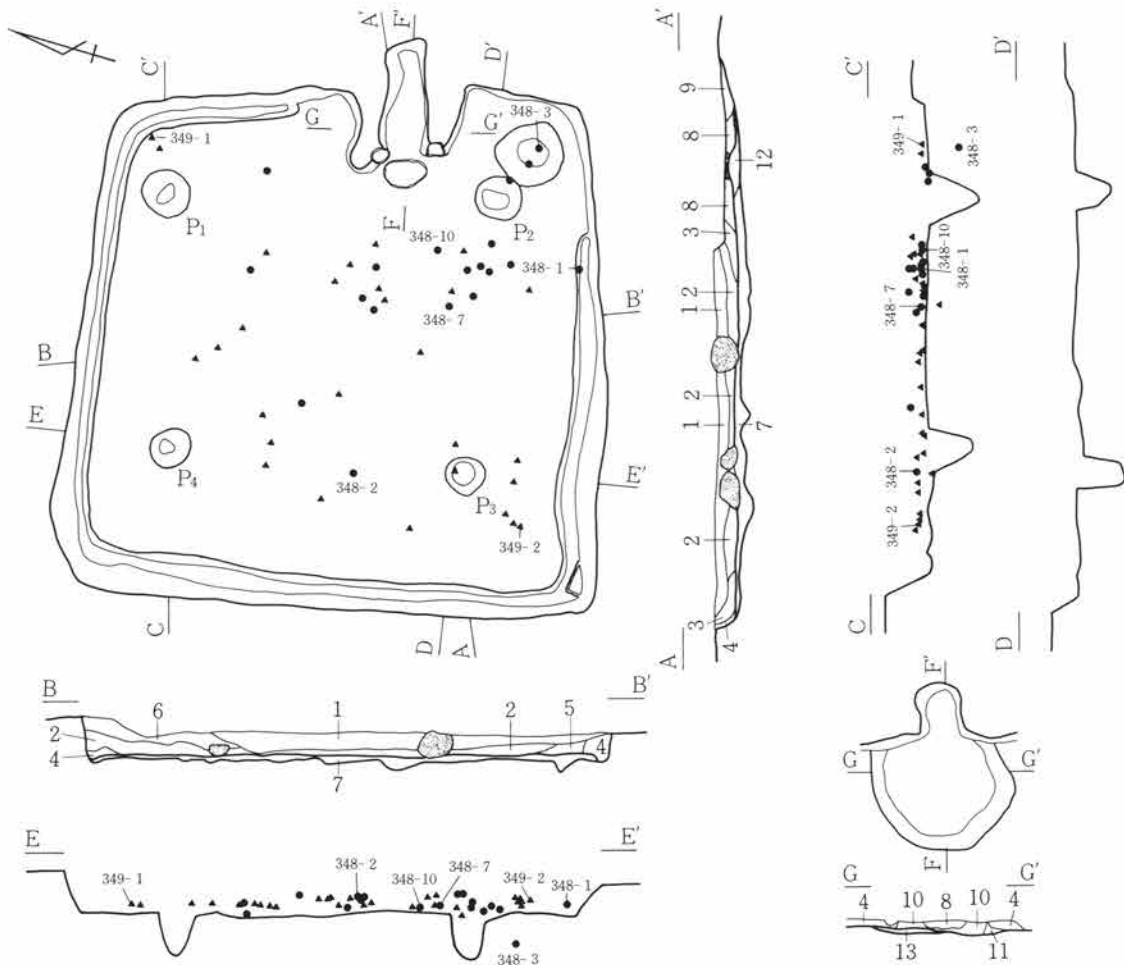
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第346図 H区遺構配置図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	H区第10号住居跡		位置	18~21-H-56~58グリッド内		分類	A-5	時期	II
平面形態	隅丸方形	規模	4.10m×4.20m	主軸方位	東-10度-北	残存深度	約30cm程		
備考	壁は全周検出し、壁溝はカマドと南東コーナー部を除き全周し、幅約16~35cm、深度約5cmである。柱穴は4本検出され円形を呈する。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、径約50cm、深度約38cm。								
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り・舌状				主軸方位	東-14度-北		
規模	全長113cm 屋外長37cm 屋内長76cm 袖間幅86cm 燃烧部幅40cm 煙道幅30cm								
備考	焚口には天井石と思われる截石の痕跡があり、両袖共屋内に突出し、先端に截石の痕跡を残している。燃烧部から煙道部へはほぼ同じ幅で連なる。燃烧部に灰・煙土等は明確に残存していない。								



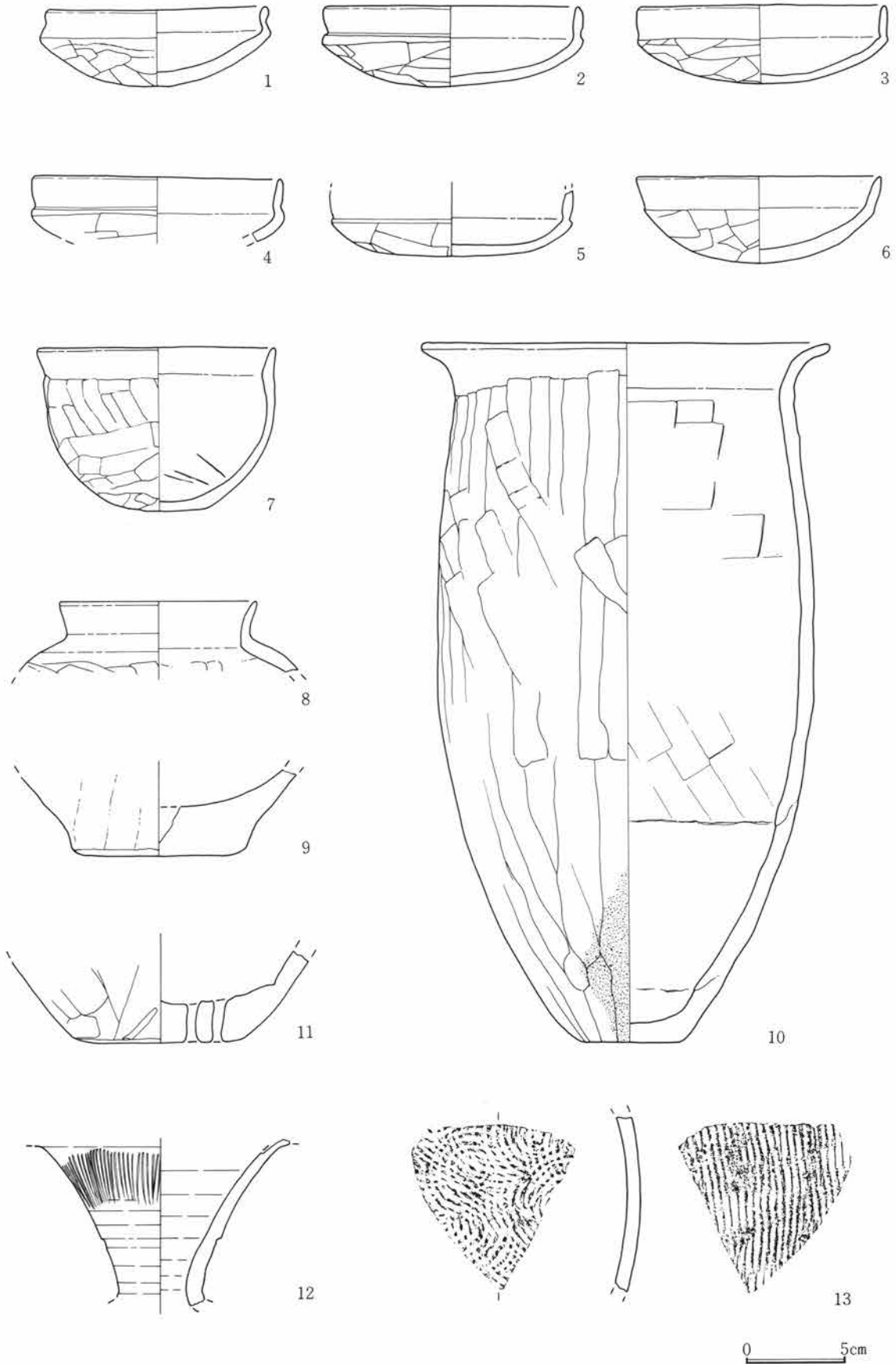
- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 c p とVI層土粒を極微量含む。 | 8 暗褐色土 焼土粒・炭化物を多量に含む。 |
| 2 // 1層に比してVI層土粒が大粒が多い。 | 9 // 焼土粒と灰白色粘土粒を多量に含む。 |
| 3 黒褐色土 c p を多量に含む。 | 10 黄褐色土 粘性の強い袖。 |
| 4 暗褐色土 VI層土粒をやや多く含む。 | 11 暗褐色土 粘土ブロックを含む。 |
| 5 黄褐色土 VI層土粒と小ブロックを多量に含む。 | 12 // 焼土粒と灰を少量含む。 |
| 6 暗褐色土 1層に比してVI層土粒がやや多い。 | 13 // 黒色の灰を多量に含む。 |
| 7 // VI層土ブロックを多量に含み、粘性が弱い。 | |

第347図 H区第10号住居跡実測図

0 1=130.30m 1m

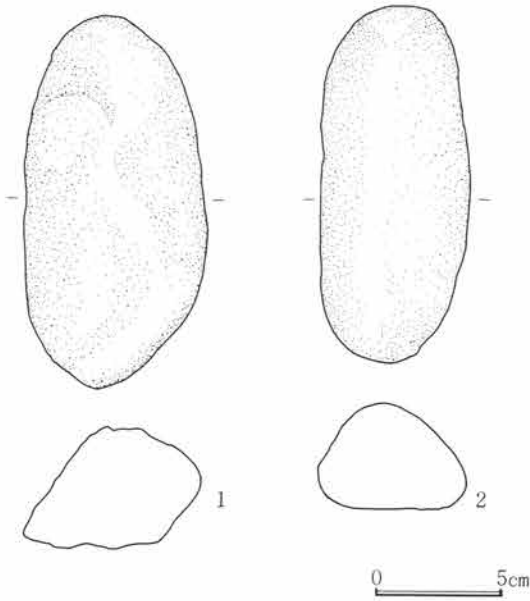
当住居跡のカマド構造は、東壁から煙道部だけを掘り込み、燃烧部は屋内に約50cm程の袖を延ばして、空間を形成している。したがって煙道部幅と燃烧部幅にあまり差がなく、底面のレベルにも変化がないことが

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第348図 H区第10号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



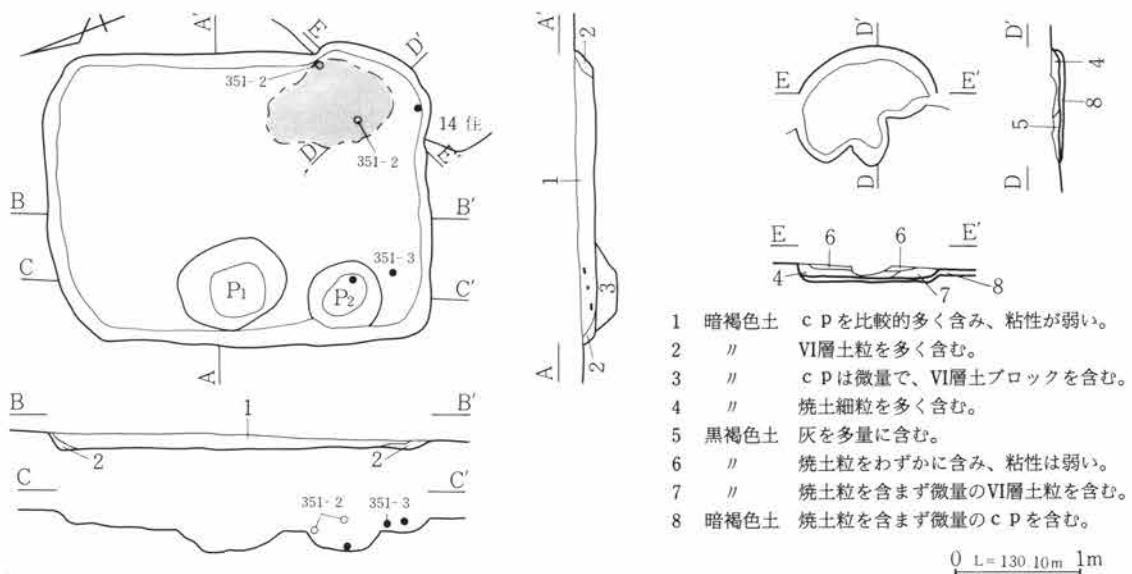
ら、煙道部と燃焼部の境は不明確である。

覆土は、壁際からの堆積の状態を明確に示しており、下層などVI層土粒及びブロックの含有率が増す。

掘り方は全面に及んでいるが、特に深く掘り込まれたような場所は全くみられず、わずかに凹凸が検出されたにすぎない。貼床に用いられた土は、VI層土ブロック主体のもので、掘り上げ土をそのまま使用したものと思われる。

遺物は、住居中央部に集中する傾向が認められる。大半の遺物は床面近くからの出土で、地山中に含まれる大礫の出土量の多いのが特徴である。これらの礫の出土に配置されたような規則性は認められず、下位に土器片等が出土しているものもあることから、住居埋没過程における周囲からの廃棄と思われる。

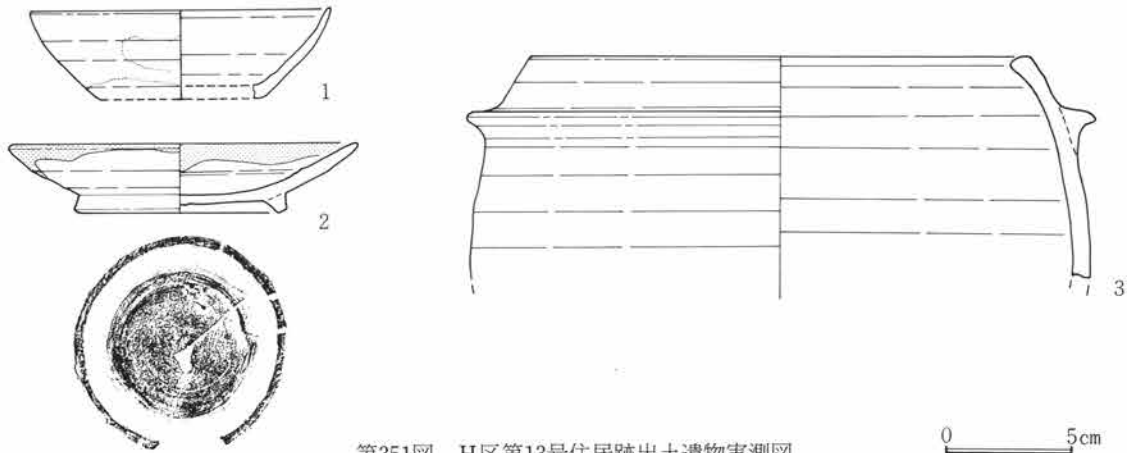
遺構名称	H区第13号住居跡		位置	10・11-H-48~50グリッド内		分類	C-14	時期	IX			
平面形態	隅丸長方形	規模	2.30m×3.00m	主軸方位	東-17度-南	残存深度	約 10cm程					
備考	壁は全周検出したが、壁溝・柱穴は未検出である。貯蔵穴は、カマドが南東コーナー部に位置するため、南西コーナー部近くに掘り込まれたものと思われる。円形で径約65cm、深度約15cmである。											
カマド	位置・形状	南東コーナー部・半円形			主軸方位	南-28度-東						
規模	全長	— cm	屋外長	— cm	屋内長	— cm	袖間幅	— cm	燃焼部幅	125cm	煙道幅	— cm
備考	コーナー部カマドで範囲は不明確である。燃焼部と思われる部分から北東寄りに灰面の広がりが見認められた。袖は痕跡も検出されなかった。											



第350図 H区第13号住居跡実測図

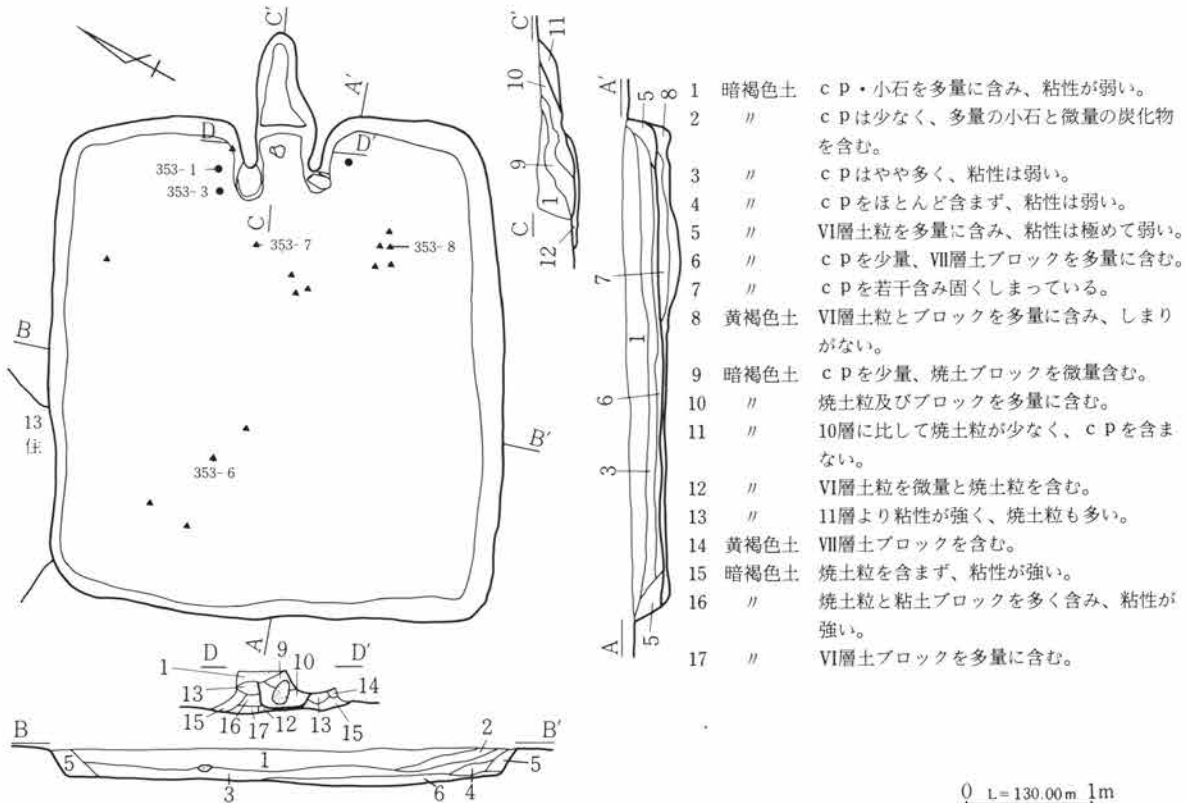
掘り方は、西壁中央に接して円形の土坑を検出した。規模は径約90cm、深度約15cmで、遺物出土はみられなかった。遺物はカマド内及び貯蔵穴からごくわずかに出土しただけである。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



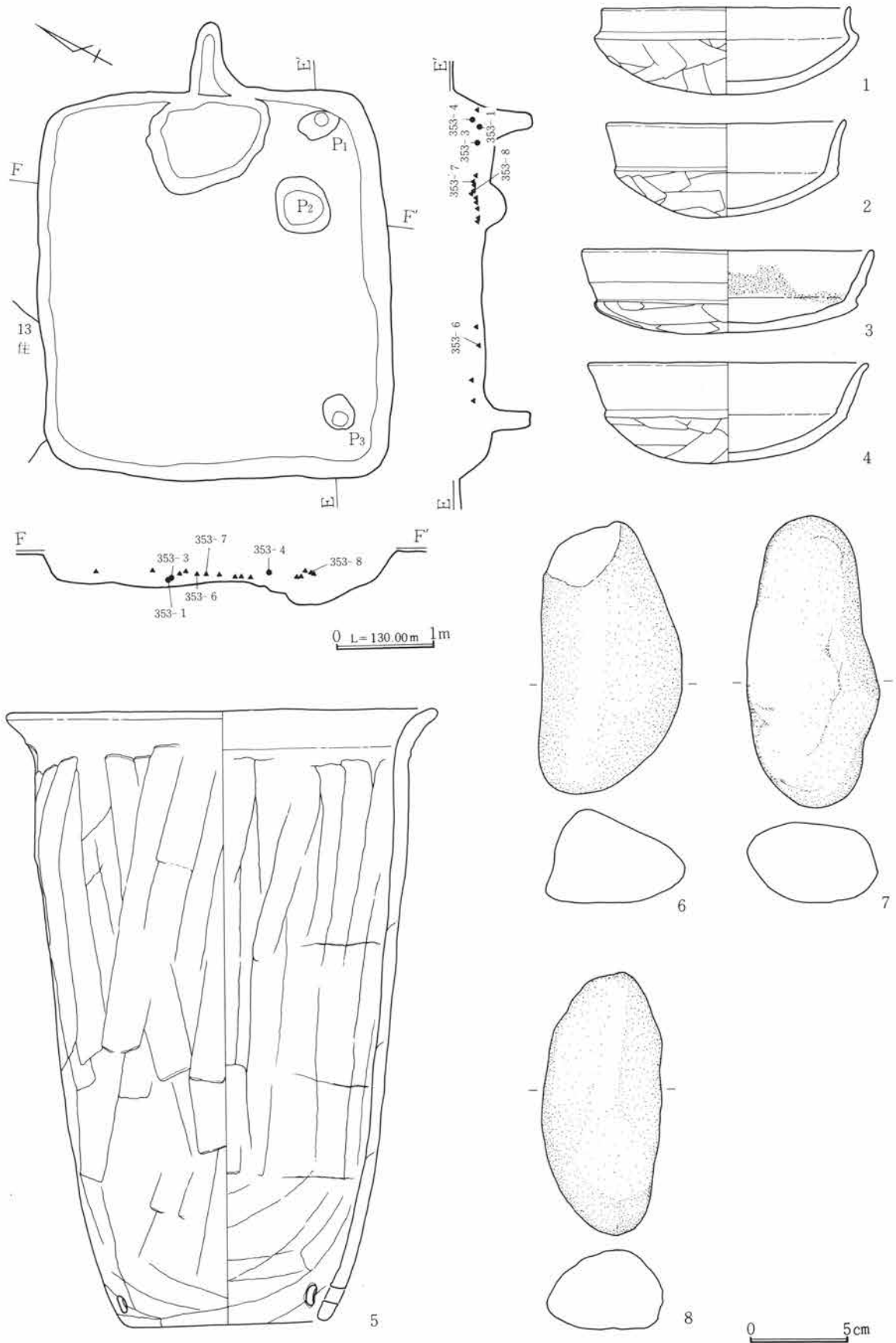
第351図 H区第13号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第14号住居跡	位置	8～11-H-47～49グリッド内	分類	A-3	時期	II
平面形態	隅丸方形?	規模	3.90m×3.60m	主軸方位	東-30度-北	残存深度	約20cm程
備考	壁は全周検出し、壁溝は掘り方段階でも未検出である。柱穴は南東及び南西コーナー部に検出した2本だけで、ほぼ同規模である。他に土坑を一基検出したが貯蔵穴であるかは不明である。						
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央部・舌状			主軸方位	東-30度-北	
規模	全長 132cm	屋外長 70cm	屋内長 62cm	袖間幅 96cm	燃烧部幅 45cm	煙道幅 33cm	
備考	燃烧部は壁から屋内に袖を延ばし空間を形成し、中央やや北寄りに礎を立てて支脚としている。左袖先端には甕を伏せ、右袖には甕の破片を使用している。煙道は燃烧面から段を有し、長さ約65cm。						



第352図 H区第14号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物

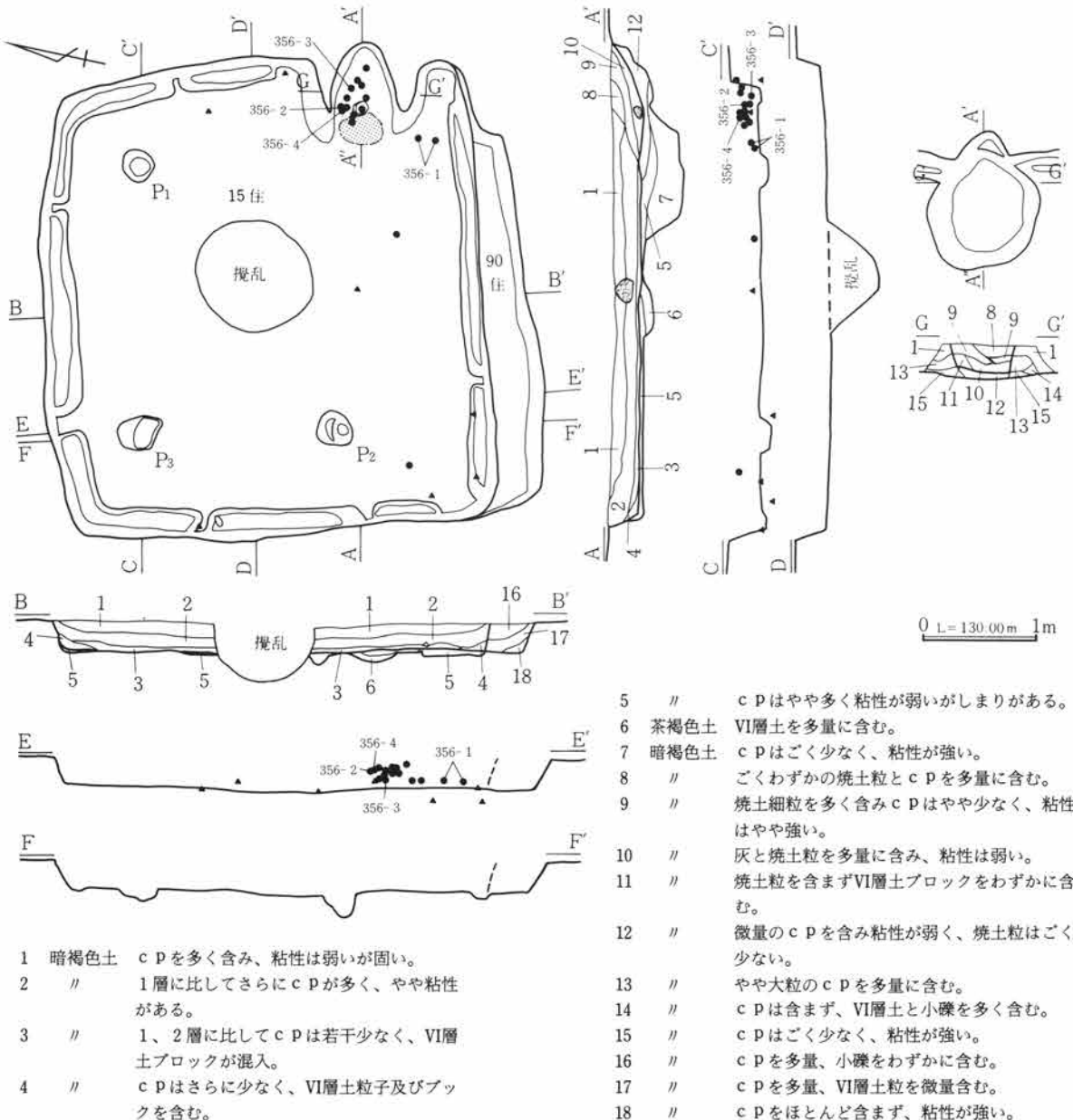


第353図 H区第14号住居跡・出土遺物実測図

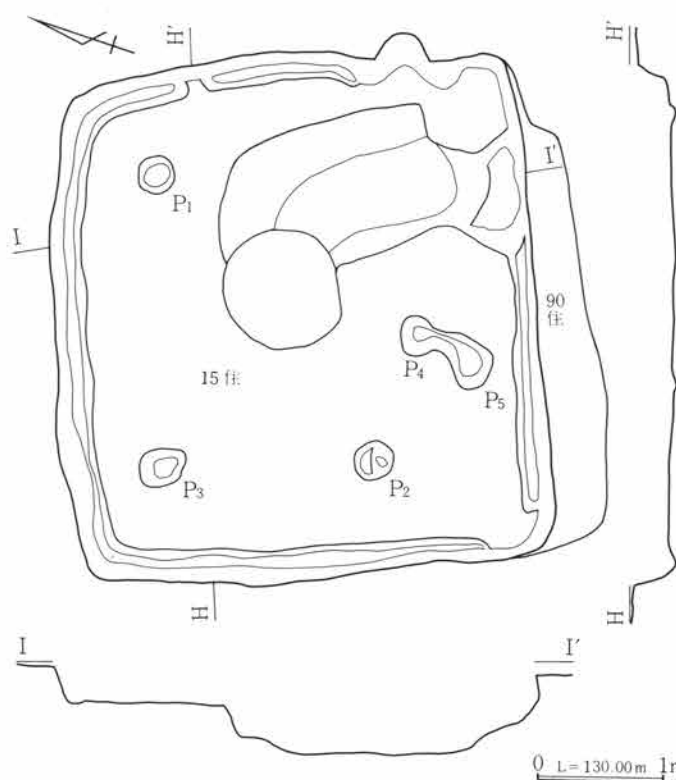
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

遺構名称	H区第15号住居跡	位置	8～10-H-56～59グリッド内	分類	A-4	時期	III?
平面形態	隅丸方形	規模	4.00m×3.80m	主軸方位	東-13度-北	残存深度	約20cm程
備考	壁は全周検出し、壁溝は断続的ながらカマド部分を除き検出した。幅は約15～30cm、深度約5cmである。柱穴は3本は検出したが、南東部の一本は掘り方覆土との区別がつかず、未検出である。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・舌状		主軸方位	東-10度-北		
規模	全長 84cm 屋外長 16cm 屋内長 68cm 袖間幅 115cm 燃烧部幅 56cm 煙道幅 — cm						
備考	壁外へ突出する部分のごくわずかで、屋内に袖を延長することによって空間を確保している。袖に構築材は検出されず、暗褐色土で構築されている。煙道は明確に分離できない。						

遺構名称	H区第90号住居跡	位置	8-H-56～59グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	3.35m×—m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約25cm程



第354図 H区第15・90号住居跡実測図



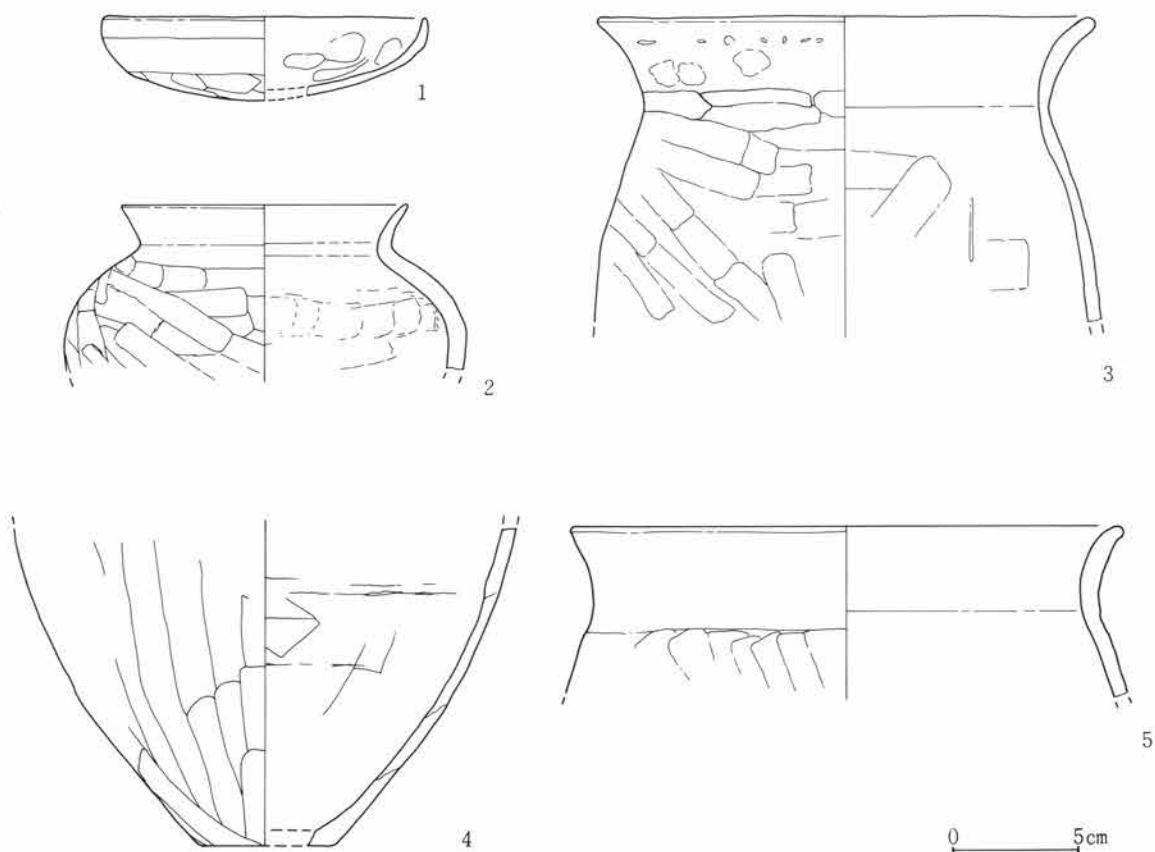
第355図 H区第15・90号住居跡実測図

第15号住居跡は、南壁で第90号住居跡と重複している。セクション面の観察から、第90号住居跡を第15号住居跡が切っているのは明らかであり、第90号住居跡のカマドが痕跡すら残存しないことからわかる。

掘り方は、南東コーナー部寄りの一角が掘り窪められている。柱穴の未検出分がこの掘り方と重っているはずであるが、柱穴掘り込みより掘り方が深いので、検出することはできなかった。

住居中央床面上で検出した円形土坑はセクションからすると、明らかに住居覆土上面から掘り込まれており、当住居跡に伴うものではない。

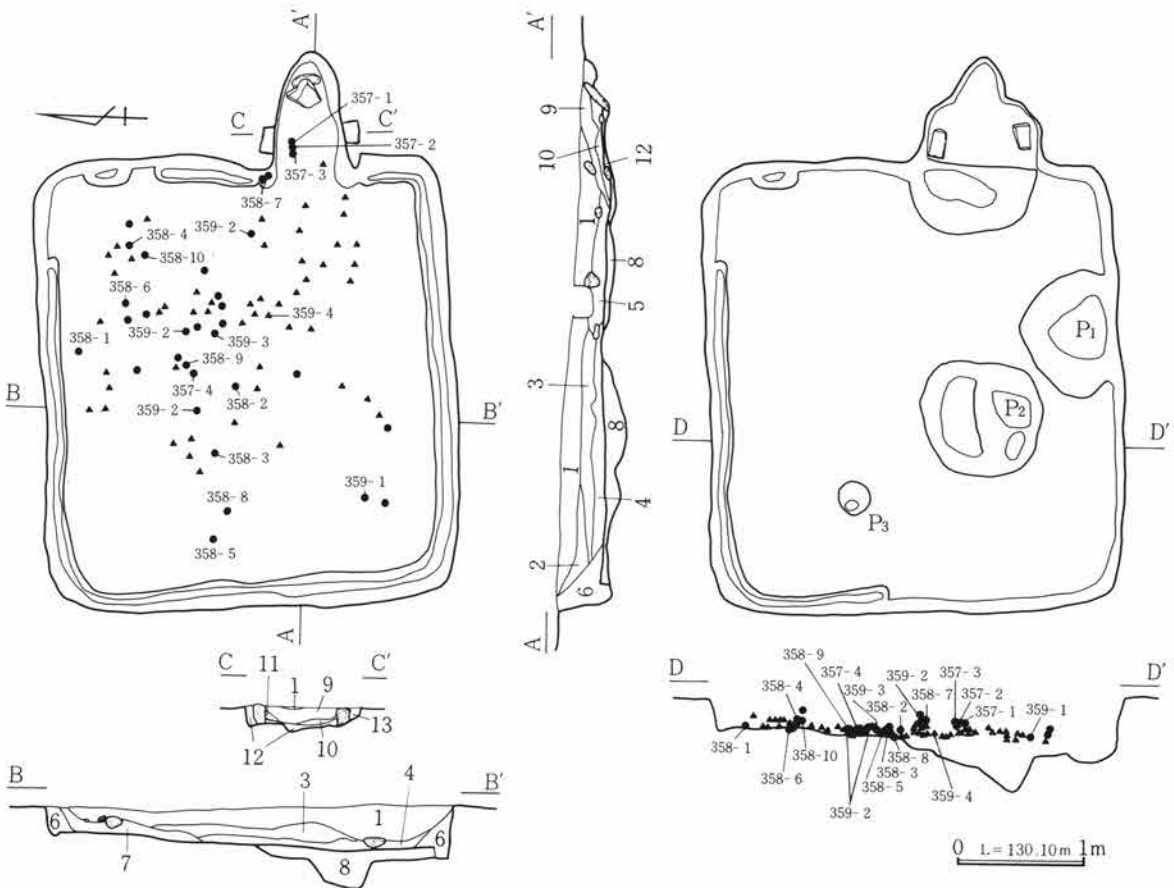
遺物は、カマド燃焼部及び南東コーナー部に集中して出土しており、その他の場所は希薄である。



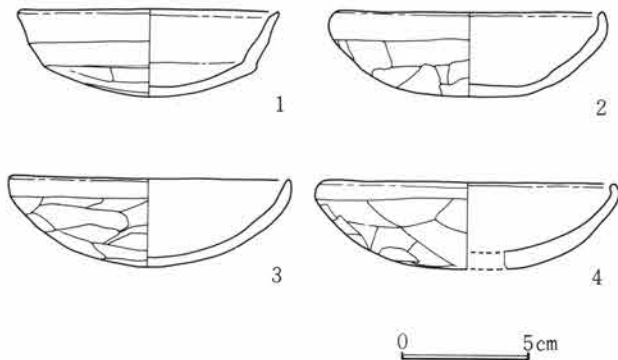
第356図 H区第15号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

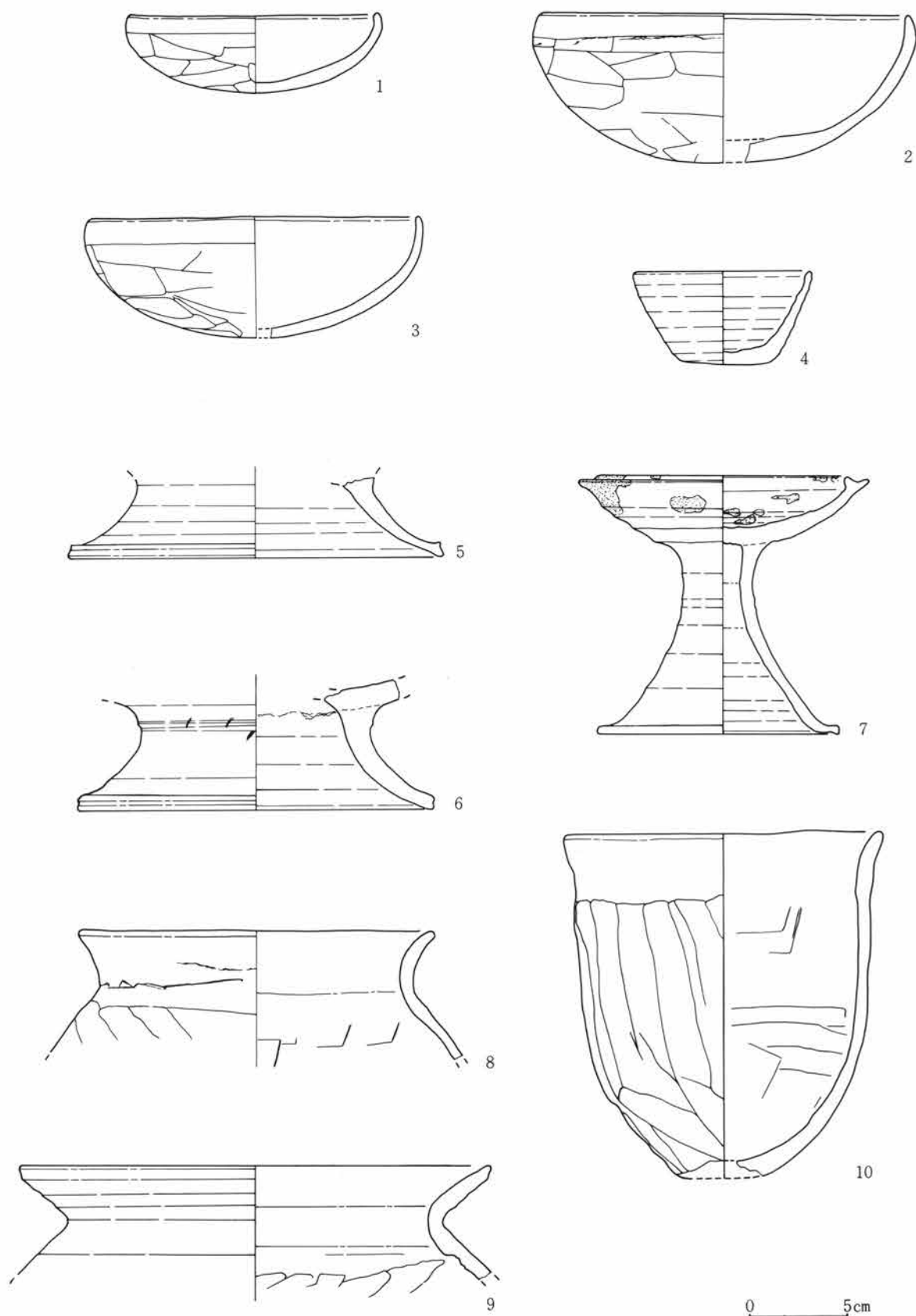
遺構名称	H区第16号住居跡	位置	4～6-H-45～47グリッド内	分類	A-7	時期	III
平面形態	隅丸方形	規模	3.50m×3.30m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約30cm程
備考	壁は全周検出し、壁溝は北東コーナー部を除き検出した。床面はVI層中で平坦であり、柱穴は掘り方段階でも未検出である。貯蔵穴はなく、遺物は住居中央部に多く第13号住居跡の出土状態に近似。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・舌状			主軸方位	東-3度-北	
規模	全長 106cm 屋外長 79cm 屋内長 27cm 袖間幅 85cm 燃烧部幅 56cm 煙道幅 37cm						
備考	焚口は床面と同レベルで灰面は未検出。袖は残存しないが、左袖位置に第358図7の須恵器の高杯が逆位に出土し、右袖位置前面に礫が検出された。燃烧部と煙道の境には礫を検出した。						



- 1 暗褐色土 c P粗粒を多量に含み、焼土粒混入。
- 2 // c P粗粒を含む。
- 3 // c Pを若干含む。
- 4 // c P微粒を微量含む。
- 5 // c P微粒と焼土粒をわずかに含む。
- 6 // IV層土ブロック、c P粗粒若干c P細粒多量、焼土ブロックを含み、しまりは少ない。
- 7 // c P細粒を含む。
- 8 // VI層土及び小礫を多量に含み、c Pはほとんど含まない。
- 9 // 微量の焼土粒と粘土を多く含む。
- 10 // 小礫と焼土粒をごくわずかに含む。
- 11 // 微量の焼土粒と小礫を多量に含む。
- 12 // VI層土ブロックと小礫を多量に含む。
- 13 // 焼土粒は含まず、ごく微量のc Pを含む。

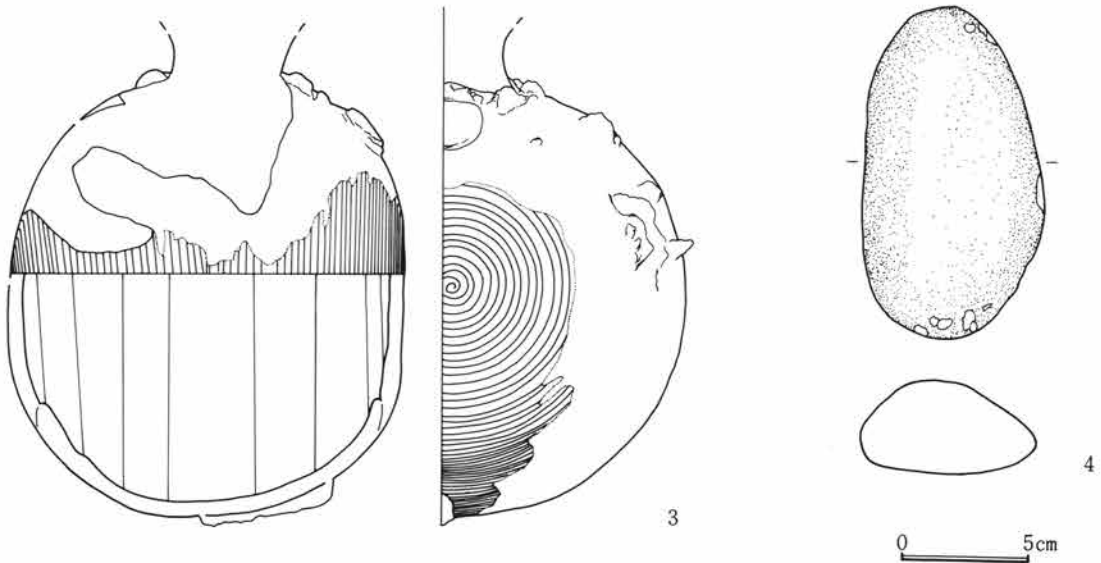
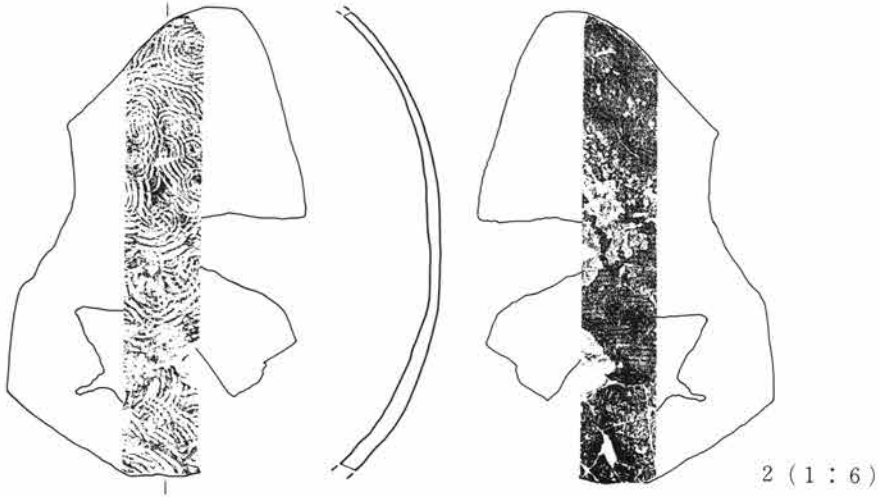
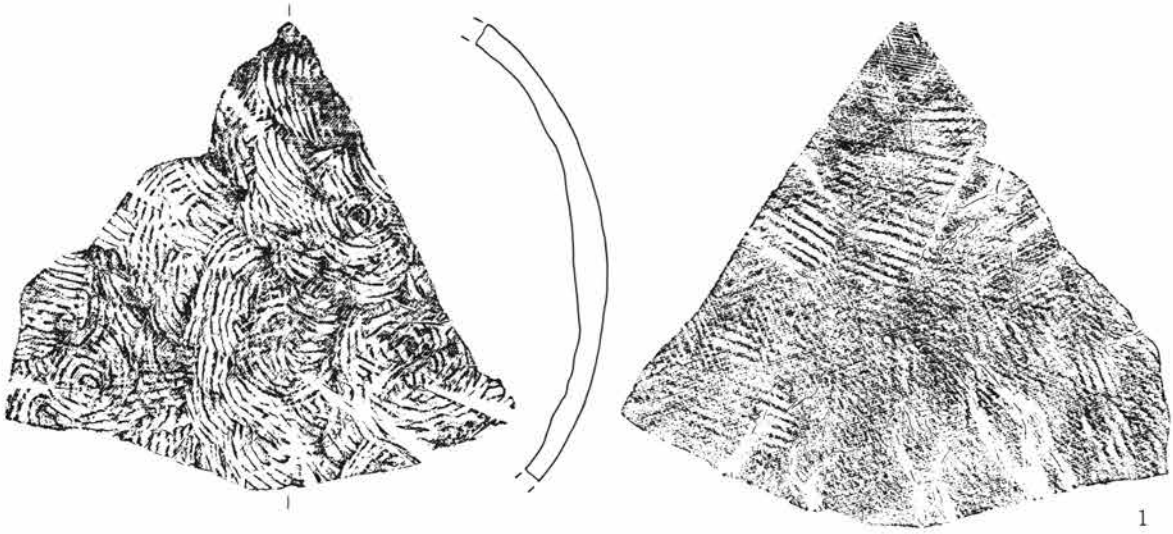


第357図 H区第16号住居跡・出土遺物実測図



第358図 H区第16号住居跡出土遺物実測図

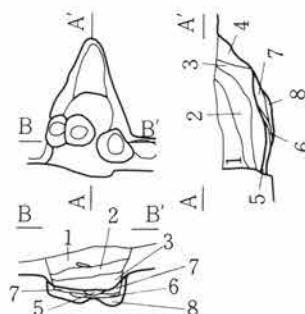
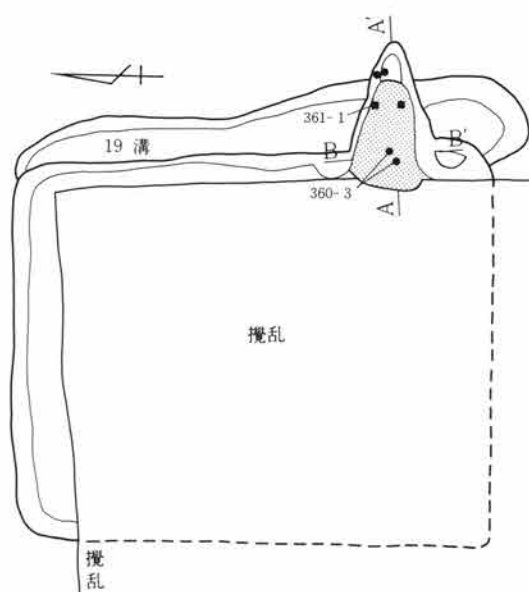
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第359図 H区第16号住居跡出土遺物実測図

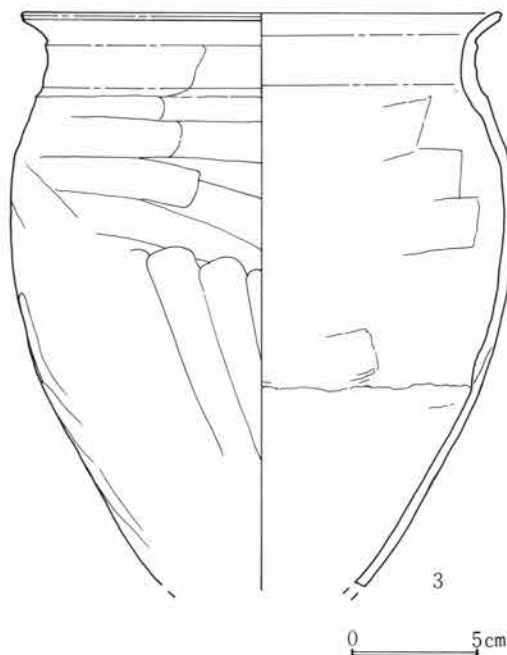
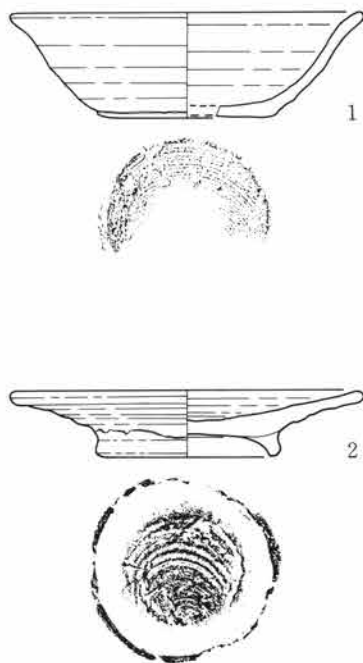
第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	H区第17号住居跡	位置	0～2-H-50～52グリッド内	分類	C-10	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	2.90m×3.80m	主軸方位	東-4度-北	残存深度	約40cm程
備考	カマドを含む東壁及び北壁を除き、住居の大半は広範囲の攪乱によって失われている。この攪乱は、住居掘り込みよりはるかに深く、住居は掘り方の痕跡もない。壁溝は残存部では未検出。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・三角形状			主軸方位	東-1度-北	
規模	全長 102cm 屋外長 78cm 屋内長 24cm 袖間幅 120cm 燃烧部幅 65cm 煙道幅 27cm						
備考	焚口と思われる部分から燃烧部にかけて灰面が広がっている。袖は両側にわずかに暗褐色土が残存している。掘り方段階で両袖位置及び中央北寄りに円形ピットを検出したが、据え方と考えられる。						



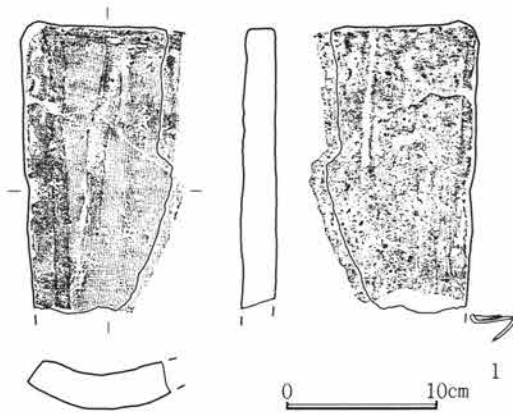
- 1 暗褐色土 c Pを多量、炭化物と焼土粒をわずかに含む。
- 2 // c Pは1層に比してやや少なく、粘性は強い。
- 3 // 多量の焼土粒を含み、粘性は弱い。
- 4 // 焼土粒を微量含み、粘性は弱い。
- 5 // c Pをほとんど含まず、微量の焼土粒を含む。
- 6 // VI層土粒を多量に含み、しまりが弱い。
- 7 // 焼土粒と炭化物を多量に含む。
- 8 // VI層土粒を多量に含み、粘性が強い。

0 L=130.10m 1m



第360図 H区第17号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



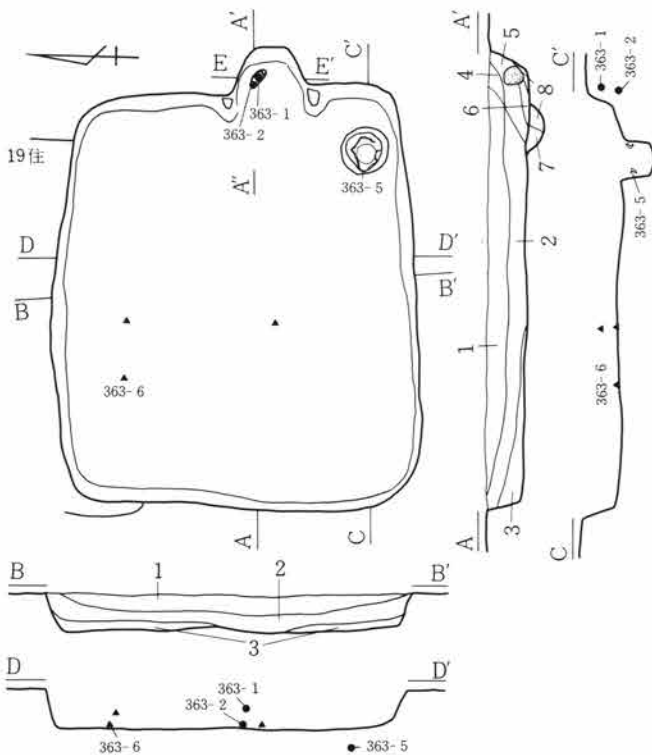
第361図 H区第17号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、東壁及び北壁寄りのごくわずかの部分に床面を残している。この床面はVI層中に構築され、掘り方は全く認められず、したがって貼床はみられない。

南東コーナー部は、東壁の延長線上にあり、このまま南壁に続くものと判断したが、そうすると南東コーナー部に右袖が付くような形式となり、コーナー部カマドのあり方も違った特異な形態となってしまふ。このことからこの南東コーナー部としたものが、カマドの掘り方である可能性があることを指摘しておきたい。

遺物はカマド覆土中層から出土したものである。

遺構名称	H区第18号住居跡	位置	2～4-H-73～75グリッド内	分類	B-6	時期	IV
平面形態	隅丸長方形	規模	3.30m×2.90m	主軸方位	東-1度-北	残存深度	約25cm程
備考	壁は全周検出し、壁溝・柱穴は未検出である。貯蔵穴は南東コーナー部やや屋内寄りで、第363図5の甕を逆位に据えていた。これは貯蔵穴内空間の確保と、蓋の存在を想起させるものである。						
カマド	位置・形状	東壁中央わずかに南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-0度-北	
規模	全長 56cm 屋外長 31cm 屋内長 25cm 袖間幅 90cm 燃烧部幅 56cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口は床面と同レベルで灰面は未検出。袖は両袖共わずかに屋内に突出し、暗褐色土で構築。燃烧部奥のやや北寄りに支脚と思われる礫を検出した。支脚据え方のピットは掘り方段階に検出した。						

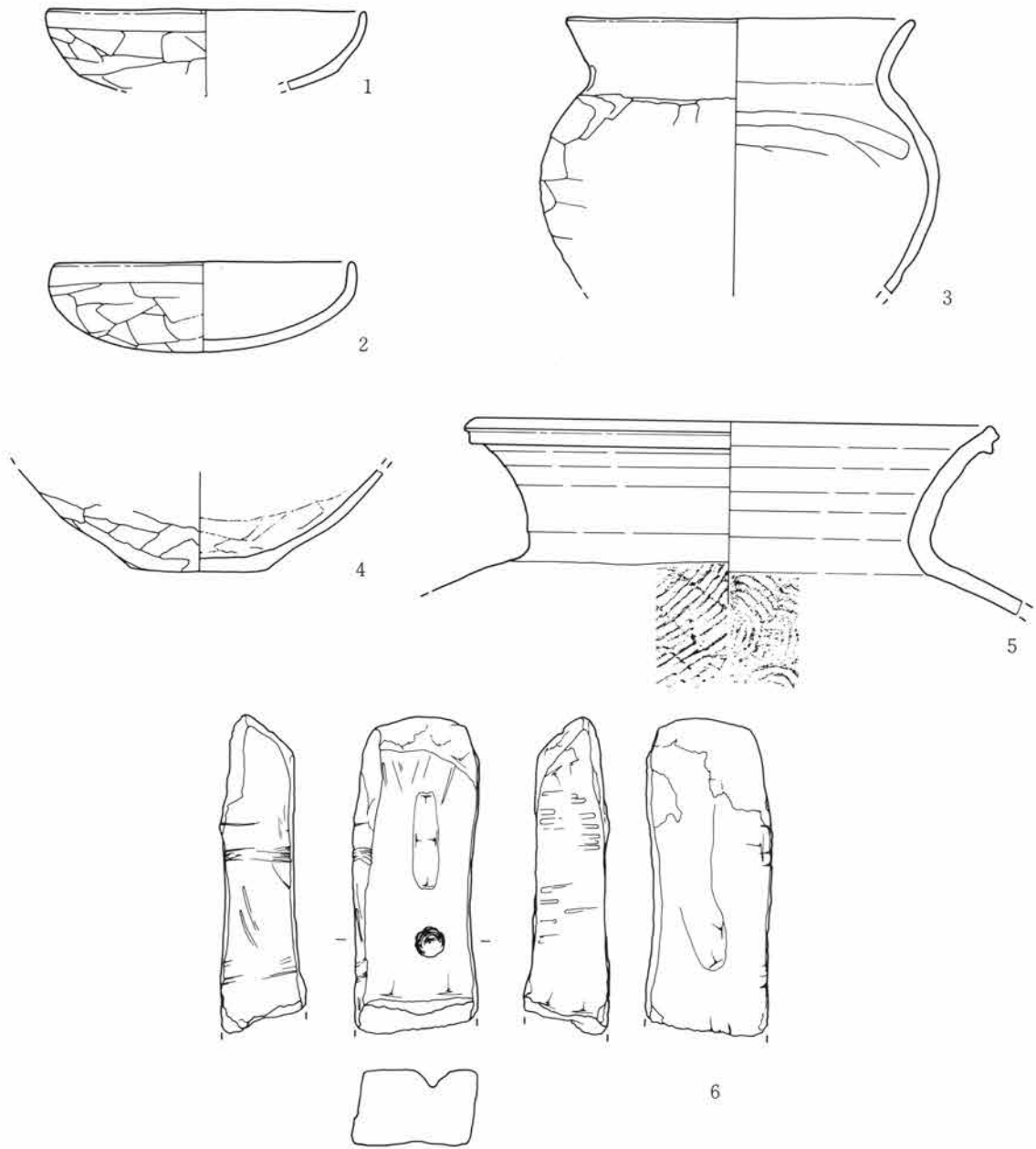


- 1 暗褐色土 c Pを多量に含み、粘性は弱い。
- 2 " 1層に比してc Pがやや少なく、VI層土ブロックをわずかに含む。
- 3 " c Pはさらに少なく、粘性が強く、VII層土ブロックを含む。
- 4 " c Pを多量に含み、焼土粒とVI層土ブロックをわずかに含み、粘性はない。
- 5 " c Pを少量、焼土を多量含み、粘性がある。
- 6 " 灰とVII層土ブロックを多く含む。
- 7 " c P・灰・焼土粒を含み、やや粘性がある。
- 8 " VII層土ブロックを多量に含んで粘性がある。

第362図 H区第18号住居跡実測図

0 L=130 20m 1m

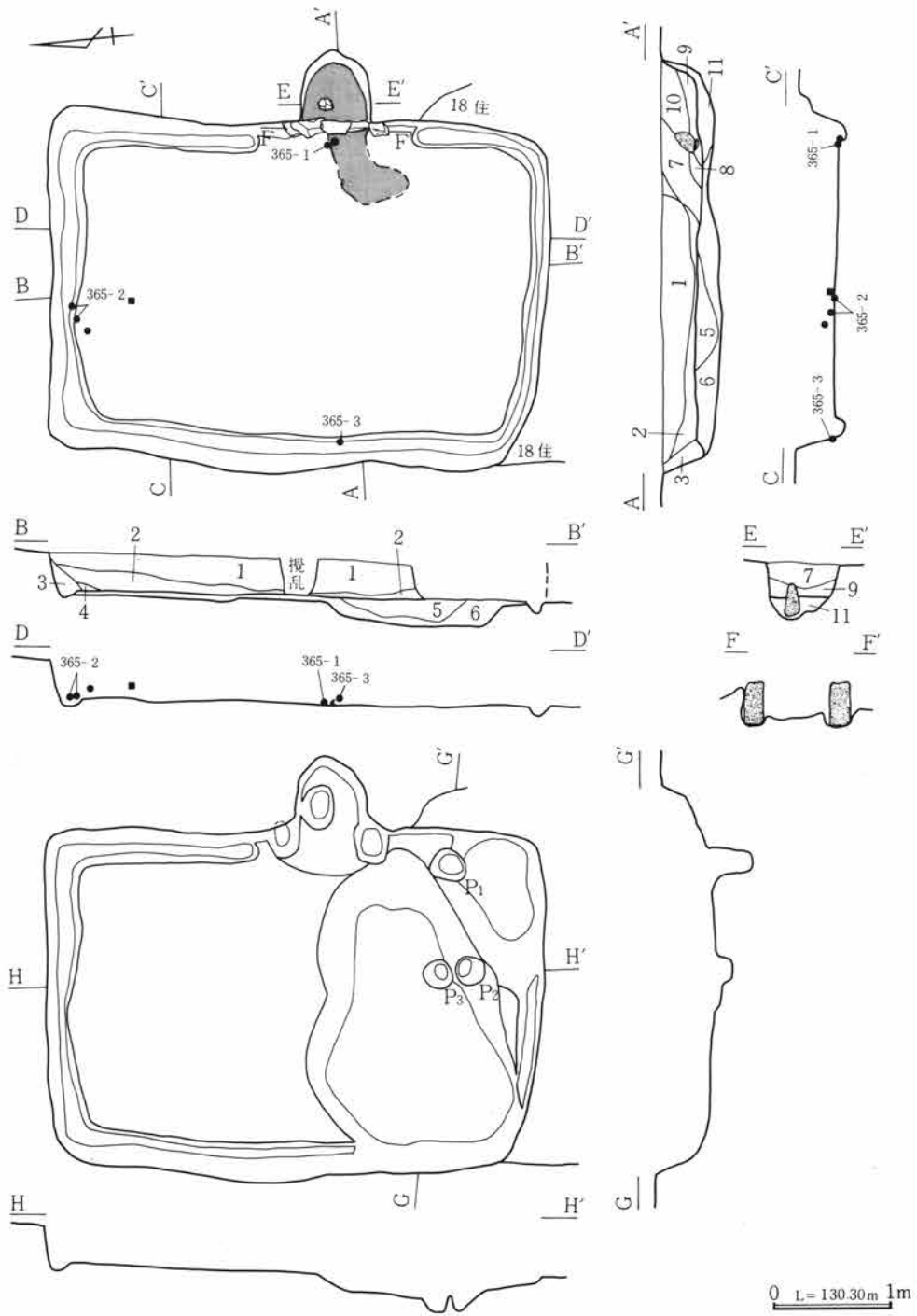
第3章 検出された遺構・遺物



第363図 H区第18号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第19号住居跡	位置	3～5-H-73～75グリッド内	分類	C-1	時期	VII
平面形態	隅丸長方形	規模	2.90m×4.20m	主軸方位	東-7度-南	残存深度	約 33cm程
備考	壁は全周検出し、壁溝はカマド部を除き全周している。幅は約15～35cm、深度約5～10cmである。柱穴は掘り方段階でも検出されず、貯蔵穴も該当するような土坑は未検出である。						
カマド	位置・形状	東壁中央わずかに南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-7度-南	
規模	全長 80cm 屋外長 60cm 屋内長 20cm 袖間幅 90cm 燃烧部幅 61cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、灰面は中央部から屋内南寄りに広がっている。袖は両袖共角柱状の載石で、間に天井石と思われる載石が検出された。燃烧部に灰は及んでおらず、中央北寄りに支脚を検出。						

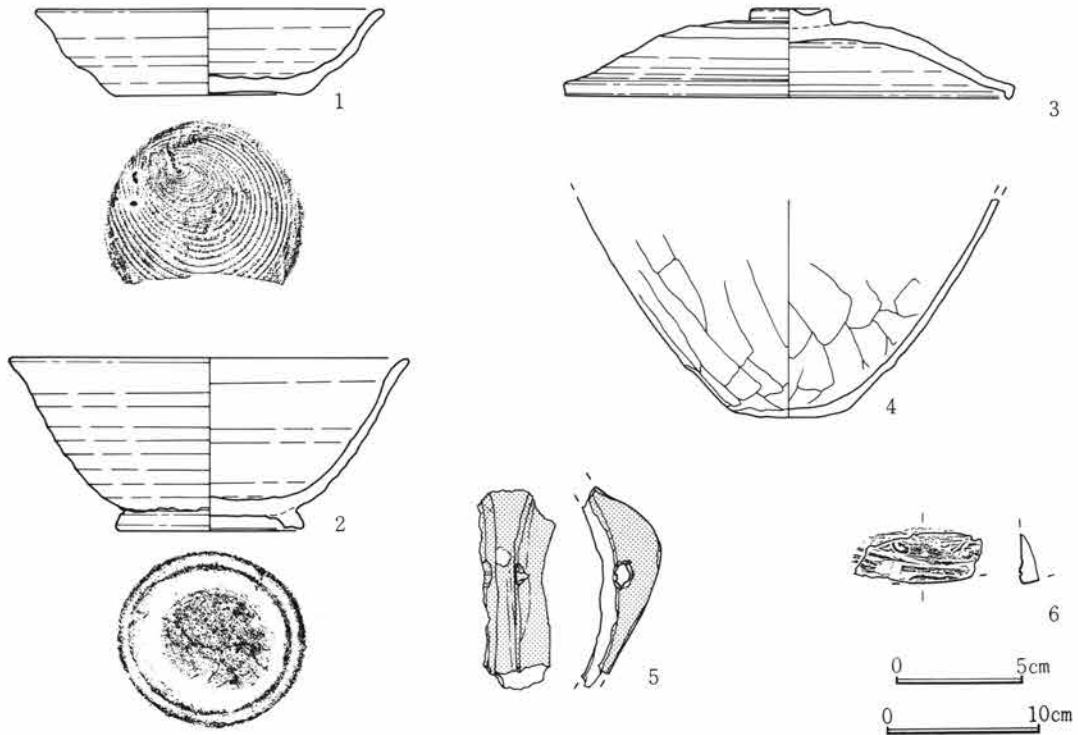
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



- | | | | | | |
|---|------|-----------------------|----|----|-------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c Pを多量に含み、粘性が比較的強い。 | 7 | // | c P・炭化物・焼土粒を含み粘性はあまりない。 |
| 2 | // | c Pを多量、IV層土ブロックを若干含む。 | 8 | // | 天井石がくずれ多量に混入。 |
| 3 | // | c Pは少なく、粘性が強い。 | 9 | // | 焼土ブロックと灰を多量に含む。 |
| 4 | // | c Pが非常に多い。 | 10 | // | 7層に比して、焼土が多い。 |
| 5 | // | 焼土粒と炭化物を多く含み、粘性が強い。 | 11 | // | 焼土・灰を含み、粘性がある。 |
| 6 | // | 焼土粒と炭化物をわずかに含 | | | |

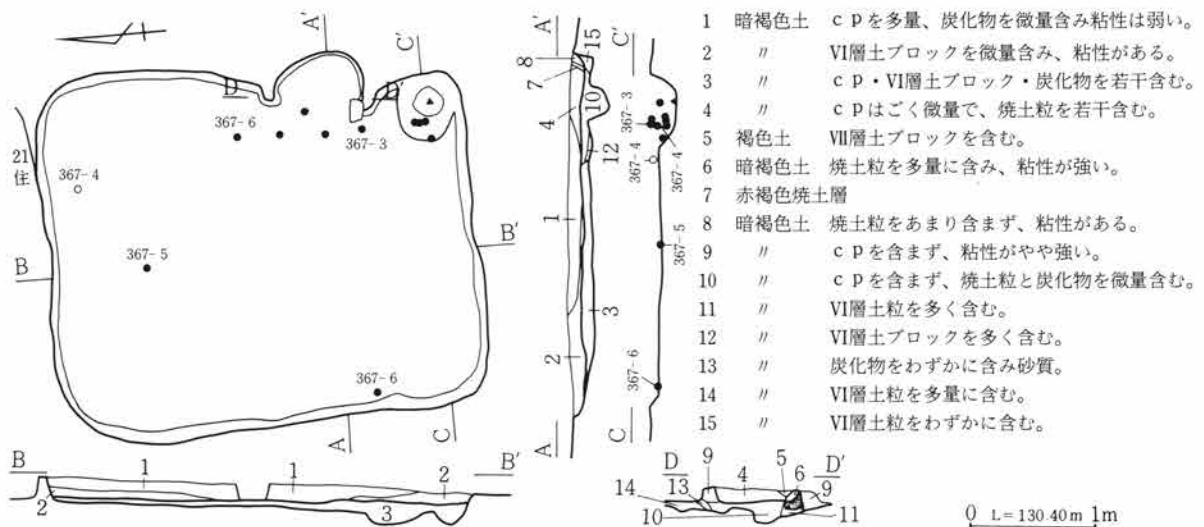
第364図 H区第19号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



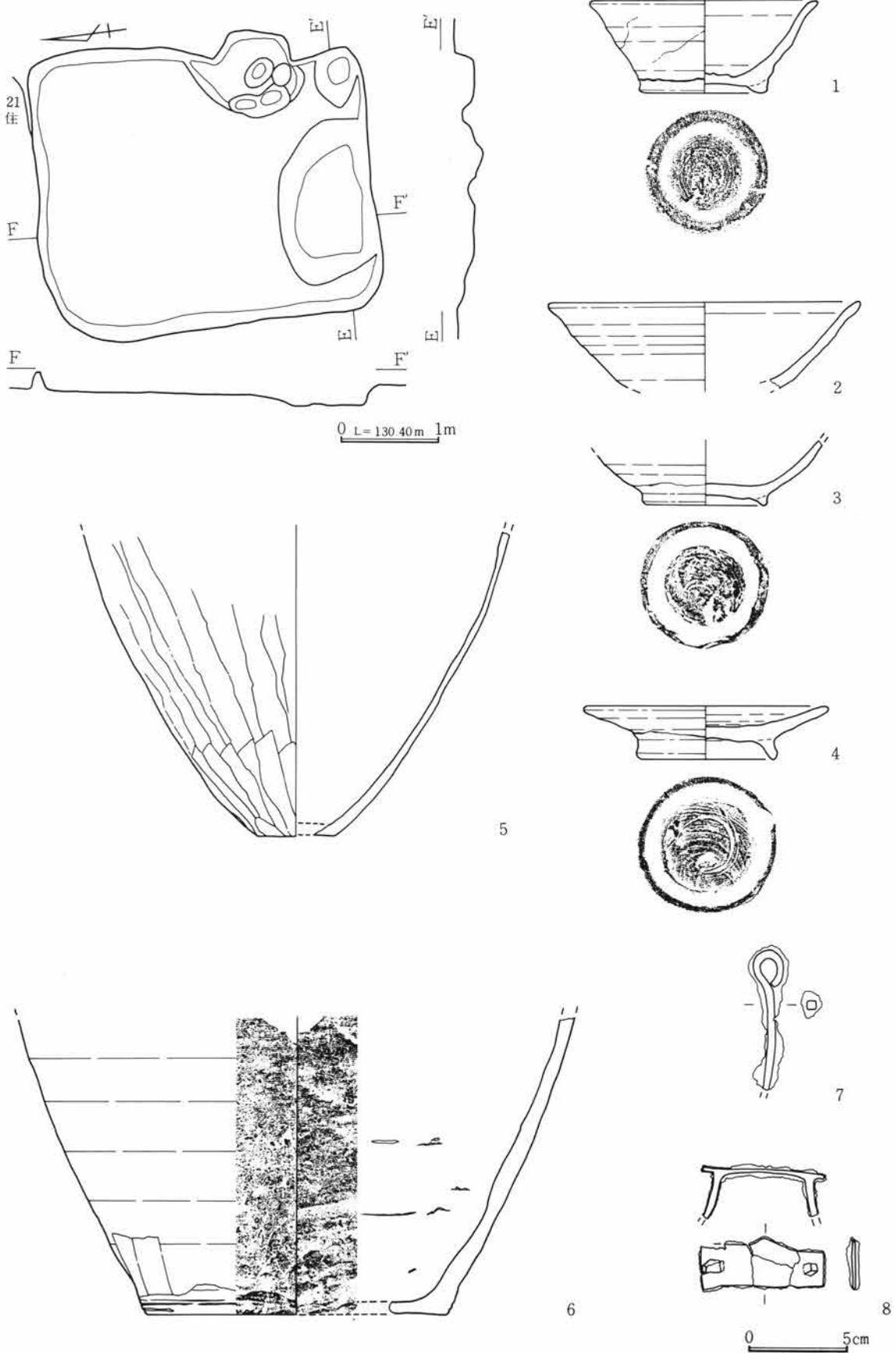
第365図 H区第19号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第20号住居跡	位置	13・14-H-74・75グリッド内	分類	C-10	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	2.80m×3.40m	主軸方位	東—5度—南	残存深度	約10cm程
備考	壁は全周検出され、壁溝は掘り方段階でも未検出。床面はVI層中で平坦であるが硬化はみられない。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、径約53cm、深度約10cmで、礫と土器片が出土した。						
カマド	位置・形状	東壁中央南寄り・馬蹄形			主軸方位	東—9度—南	
規模	全長 47cm	屋外長 21cm	屋内長 26cm	袖間幅 103cm	燃烧部幅 68cm	煙道幅	— cm
備考	焚口に灰面は未検出で、わずかに土器片が出土した。袖は右袖が明瞭で、先端部に角柱状の截石を据えている。燃烧部に灰等は未検出であるが、掘り方段階で支脚据え方と思われるピットを検出した。						



第366図 H区第20号住居跡実測図

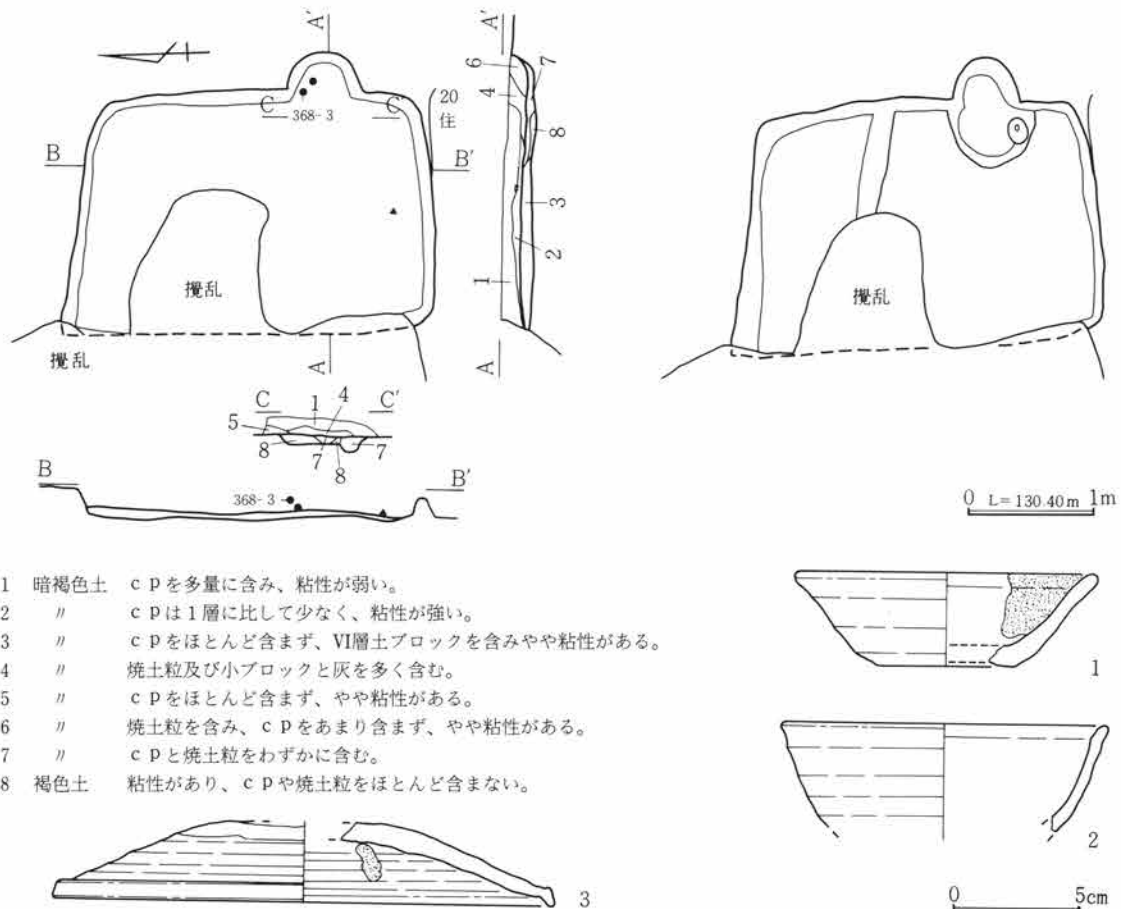
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第367図 H区第20号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

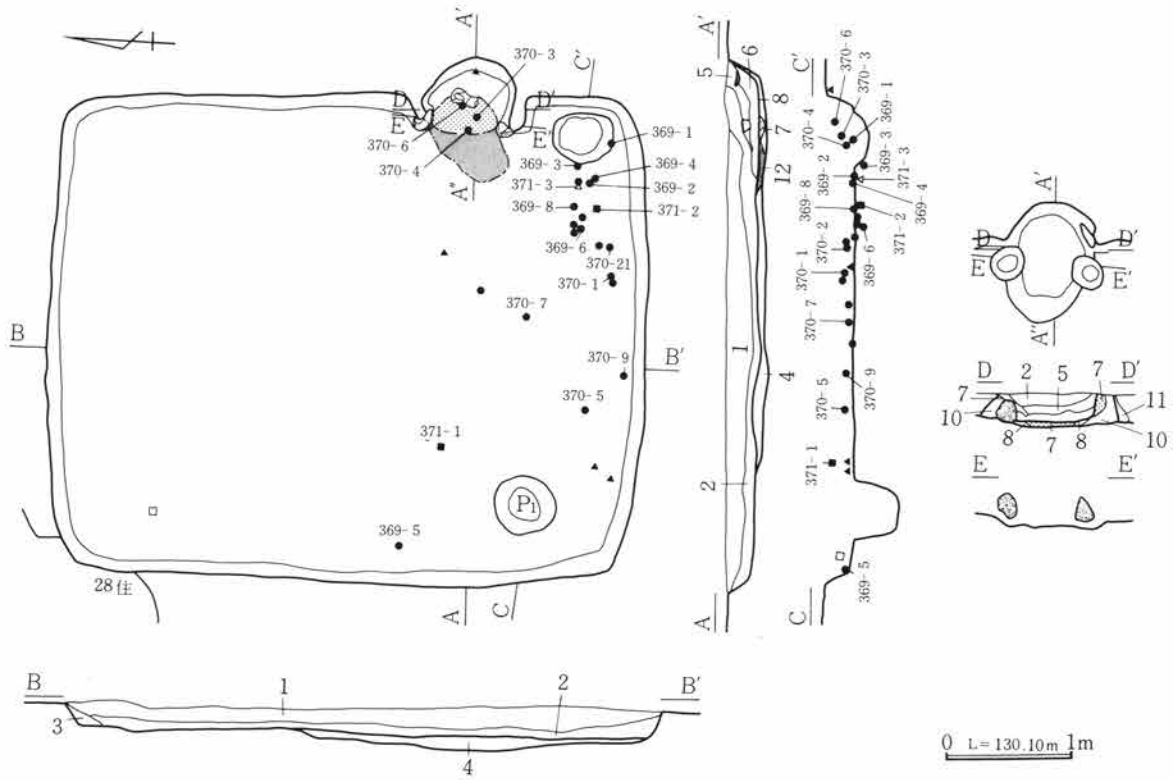
遺構名称	H区第21号住居跡	位置	14～16-H-73～75グリッド内	分類	C-10	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	(1.80)m×2.80m	主軸方位	東-1度-南	残存深度	約15cm程
備考	西壁は攪乱のため未検出。壁溝・柱穴は残存部には検出されず、貯蔵穴も掘り方段階でも検出されなかった。掘り方は、北壁側が幅が約100cmの範囲で掘り下げられている。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-0度-北	
規模	全長 35cm	屋外長 28cm	屋内長 7cm	袖間幅 — cm	燃烧部幅 48cm	煙道幅 — cm	
備考	焚口は床面と同レベルで、灰面は検出されず、袖は両袖共に残存せず、左袖の位置からわずかに遺物出土がみられた。燃烧部に灰等は残存せず、掘り方段階では、わずかの窪みを検出したにすぎない。						



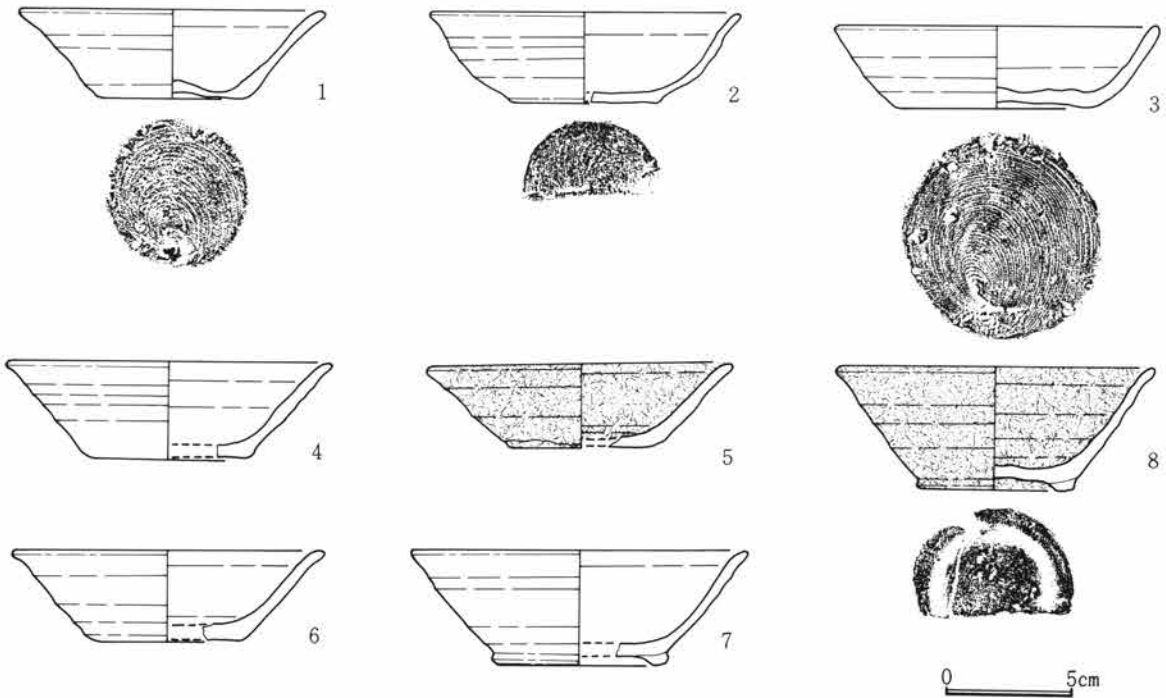
第368図 H区第21号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第22号住居跡	位置	2～5-H-50～52グリッド内	分類	C-11	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	3.80m×4.70m	主軸方位	東-4度-北	残存深度	約20cm程
備考	壁は全周検出し、壁溝・柱穴は未検出。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、径約40cm、深度約12cmである。遺物は南壁寄りに集中する傾向があり、北西コーナー近くで炭化物を検出した。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-2度-南	
規模	全長 60cm	屋外長 27cm	屋内長 33cm	袖間幅 110cm	燃烧部幅 67cm	煙道幅 — cm	
備考	焚口から燃烧部にかけて灰面が広がりやや奥に焼土面を検出。燃烧部側壁も一部焼土化しており袖は両袖共礎を据えて構築している。燃烧部中央北寄りに支脚と思われる礎を検出。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

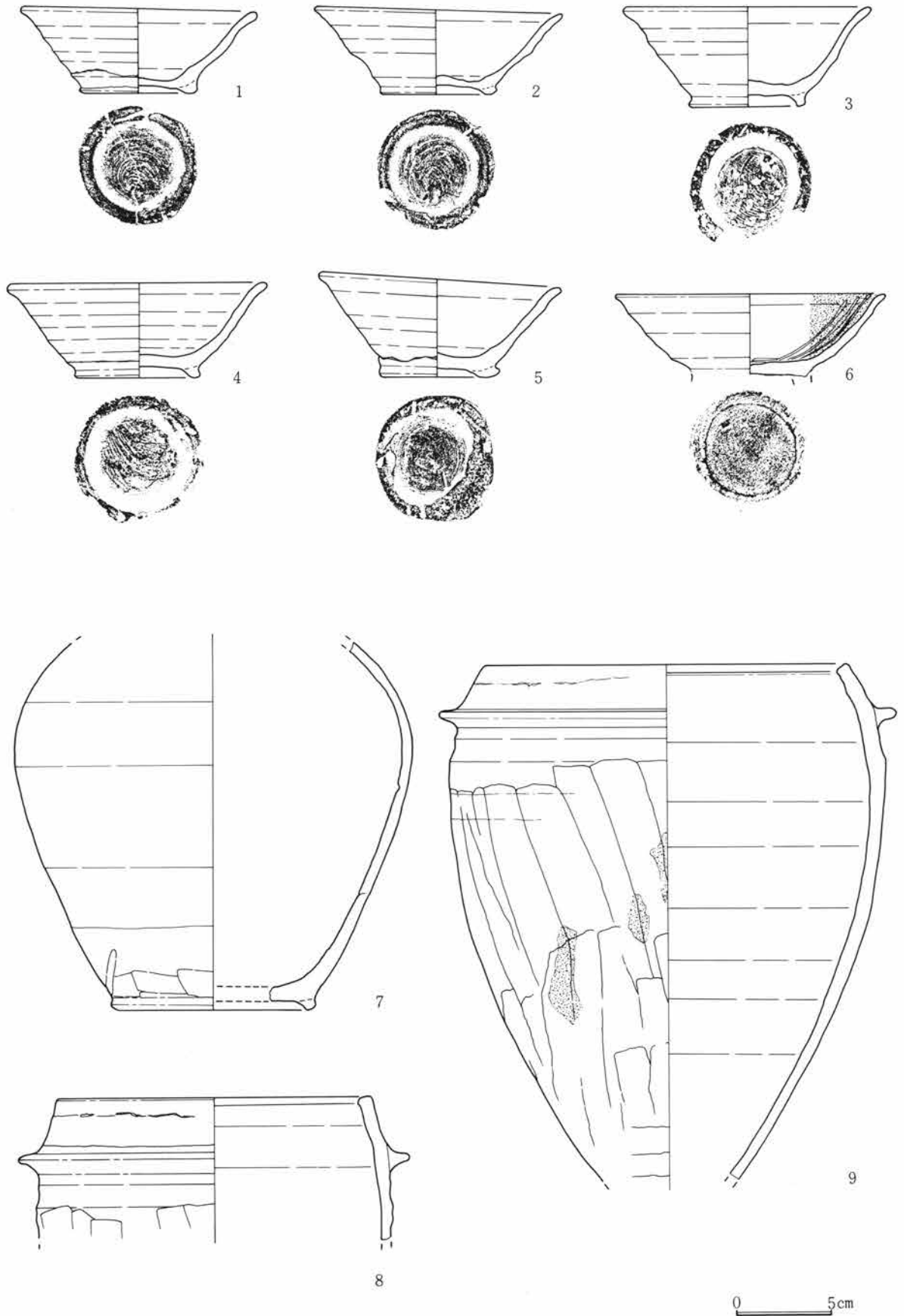


- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 c Pが多く、固くしまりがある。 | 8 暗褐色土 c Pを含まず、粘性の強い袖。 |
| 2 // c Pはやや少なく、IV層土ブロックを含む。 | 9 // 焼土はごく微量で、粘性が弱い。 |
| 3 // c Pをほとんど含まず、粘性が強い。 | 10 // 焼土はごく微量で、粘性が比較的強い。 |
| 4 // c Pを多量に含み、粘性も比較的強い。 | 11 // c P細粒をごくわずかに含み、粘性が強い。 |
| 5 // 焼土細粒をわずかに含む。 | 12 黒色灰層 |
| 6 // 焼土粒と炭化物を多量に含む。 | 13 暗褐色土 焼土粒はごく細粒で微量である。 |
| 7 赤褐色焼土層 | |



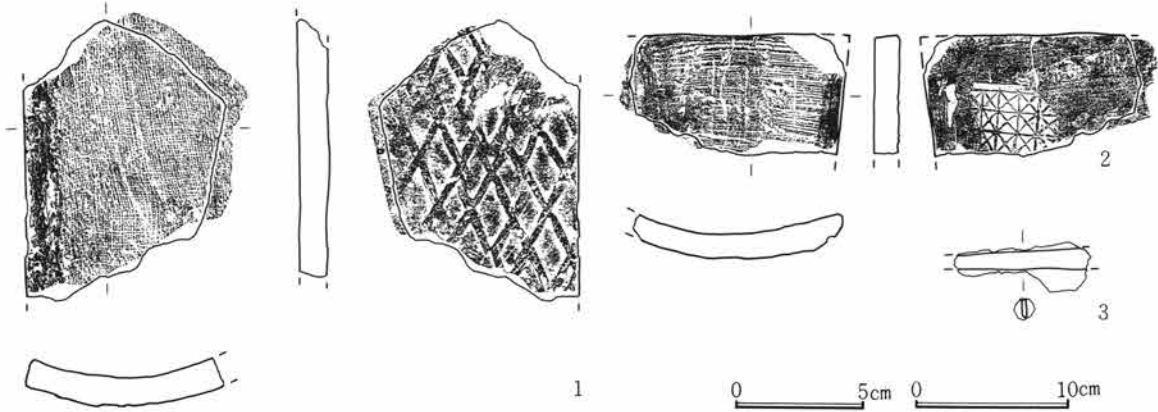
第369図 H区第22号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



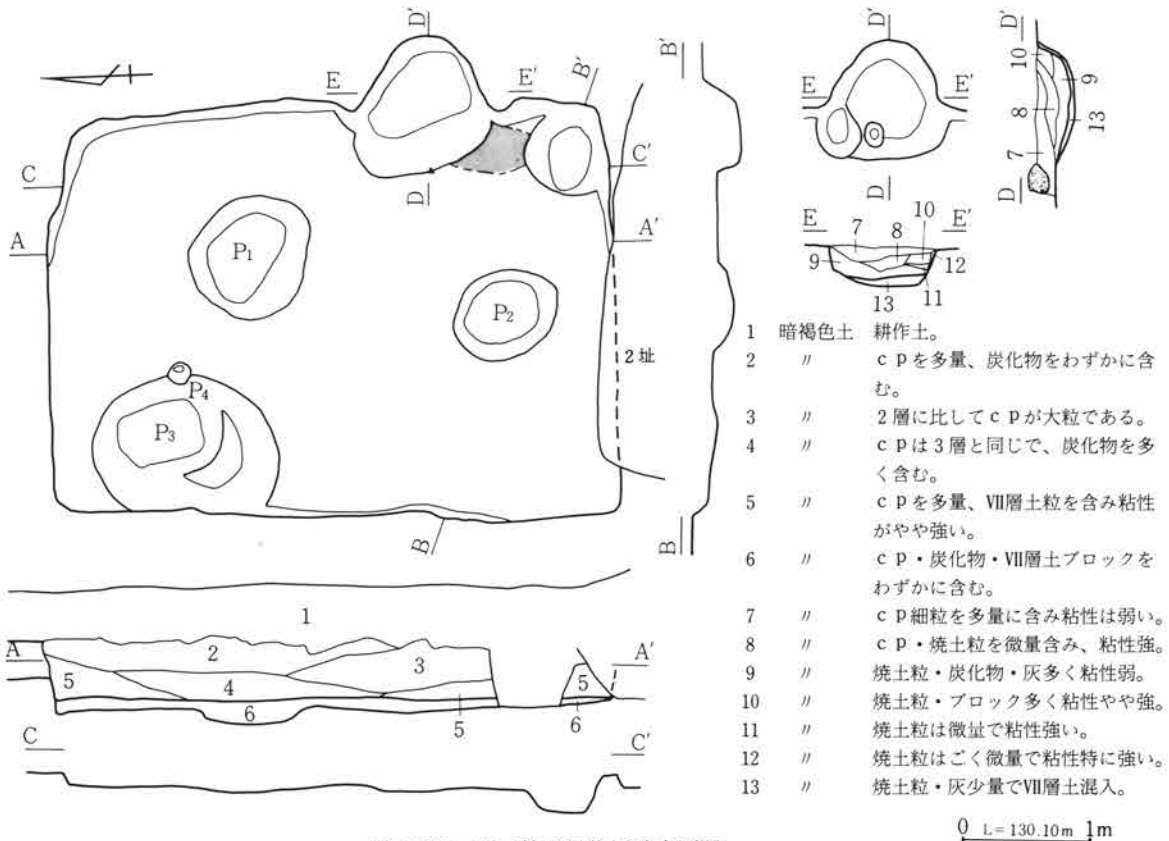
第370図 H区第22号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



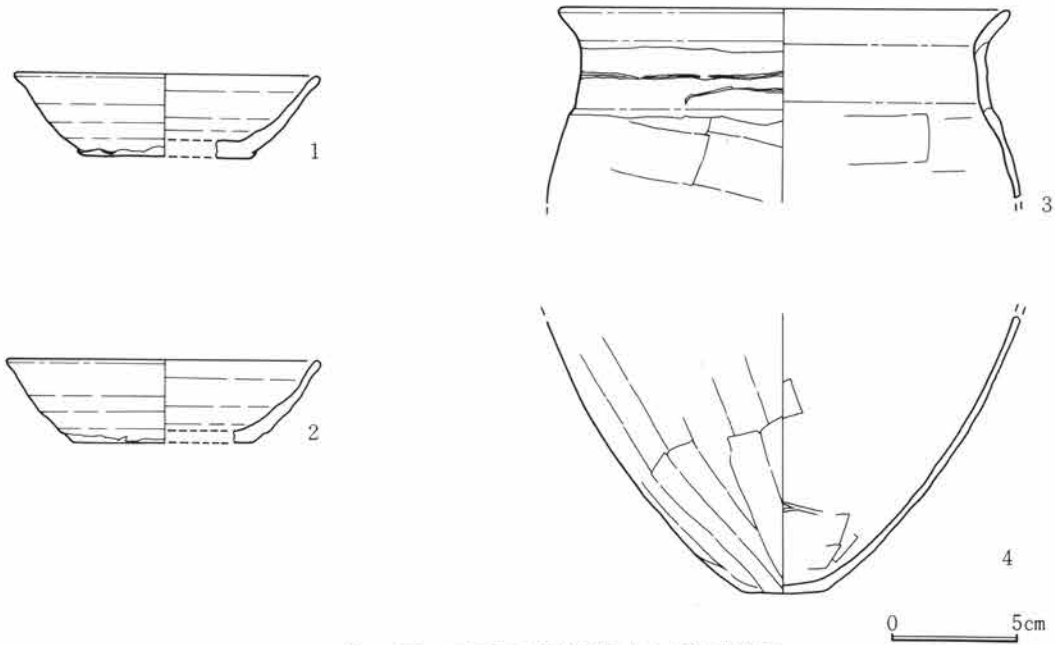
第371図 H区第22号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第23号住居跡	位置	0～2-H-59～61グリッド内	分類	C-11	時期	VII
平面形態	隅丸長方形?	規模	—m×4.30m	主軸方位	東—1度—南	残存深度	約10cm程
備考	西側約 $\frac{2}{3}$ は南北農道下にかかり、2次の調査で全体を明らかにしたが、農道にかかった部分は遺構検出面が低く、明確に範囲をとらえることができなかった。貯蔵穴は南東コーナー部。						
カマド	位置・形状	東壁中央南寄り・三角形状			主軸方位	東—2度—南	
規模	全長108cm 屋外長50cm 屋内長58cm 袖間幅145cm 燃烧部幅90cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は若干掘り込まれ、南側から貯蔵穴にかけて灰面を検出した。袖は両袖共ごくわずかに暗褐色土が残存しているが、構築材は未検出である。燃烧部には灰等の他、支脚の痕跡も残存していない。						



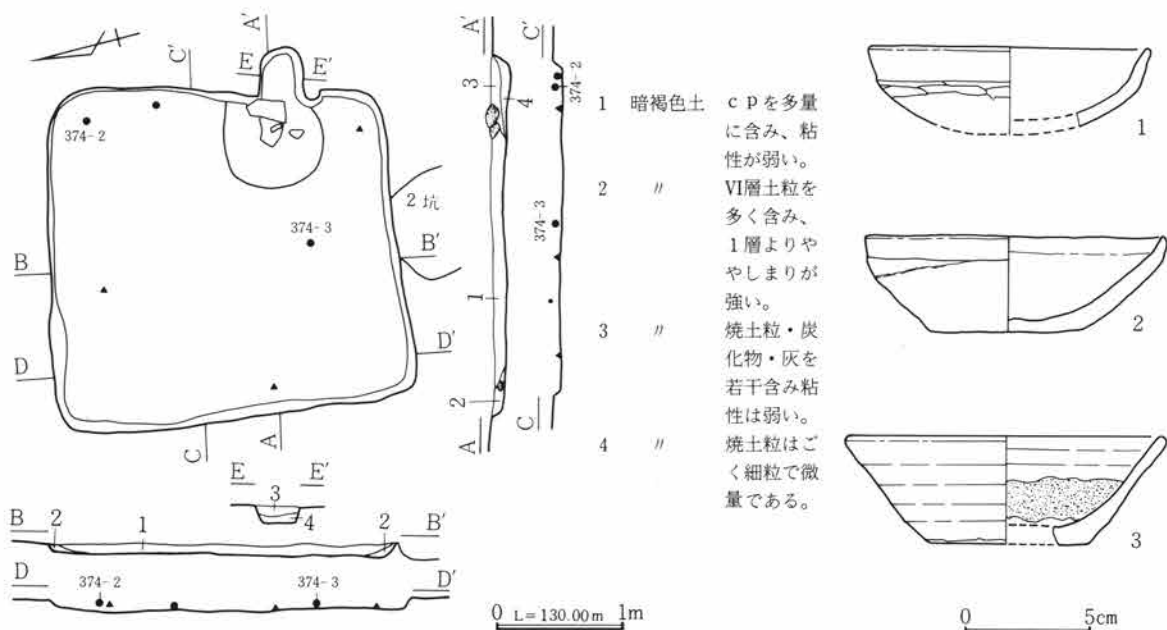
第372図 H区第23号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第373図 H区第23号住居跡出土遺物実測図

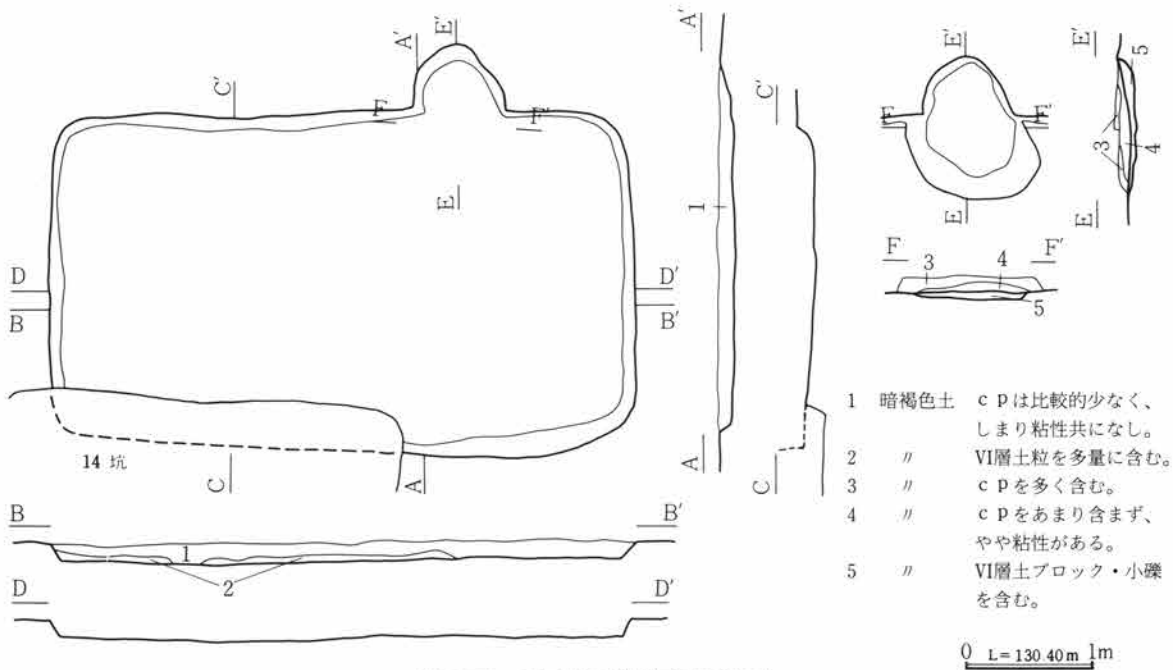
遺構名称	H区第24号住居跡	位置	9~11-H-52・53グリッド内	分類	A-9	時期	-
平面形態	隅丸方形	規模	2.60m×2.70m	主軸方位	東-13度-南	残存深度	約6cm程
備考	壁はVI層中に構築され、全周検出した。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されず、掘り方も認められない。遺物は覆土中出土のものを含めても少量で、床面直上出土のものは皆無である。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・舌状			主軸方位	東-15度-南	
規模	全長 105cm 屋外長 32cm 屋内長 73cm 袖間幅 60cm 燃烧部幅 38cm 煙道幅 - cm						
備考	焚口はごく浅い掘り込みで、底面から若干遊離して礫が検出された。袖は両袖共ほとんど残存せず、わずかに暗褐色の部分を検出した。燃烧部は平坦で、焼土等は検出されなかった。						



第374図 H区第24号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

遺構名称	H区第25号住居跡	位置	9～12-H-69～71グリッド内	分類	C-11	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	2.70m×4.60m	主軸方位	東—1度—北	残存深度	約10cm程
備考	西壁北寄りで第14号土坑と重複している。床面はVI層中に構築され、掘り方も認められない。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出である。掘り込みが浅く、残存不良なこともあり、遺物は皆無である。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・馬蹄形			主軸方位	東—3度—北	
規模	全長 54cm 屋外長 46cm 屋内長 8cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 70cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口・燃烧部共に床面と同レベルで、灰等は未検出である。袖は両袖共残存せず不明である。掘り方は、燃烧部がわずかに掘り窪められた程度であり、VII層中に達している。						



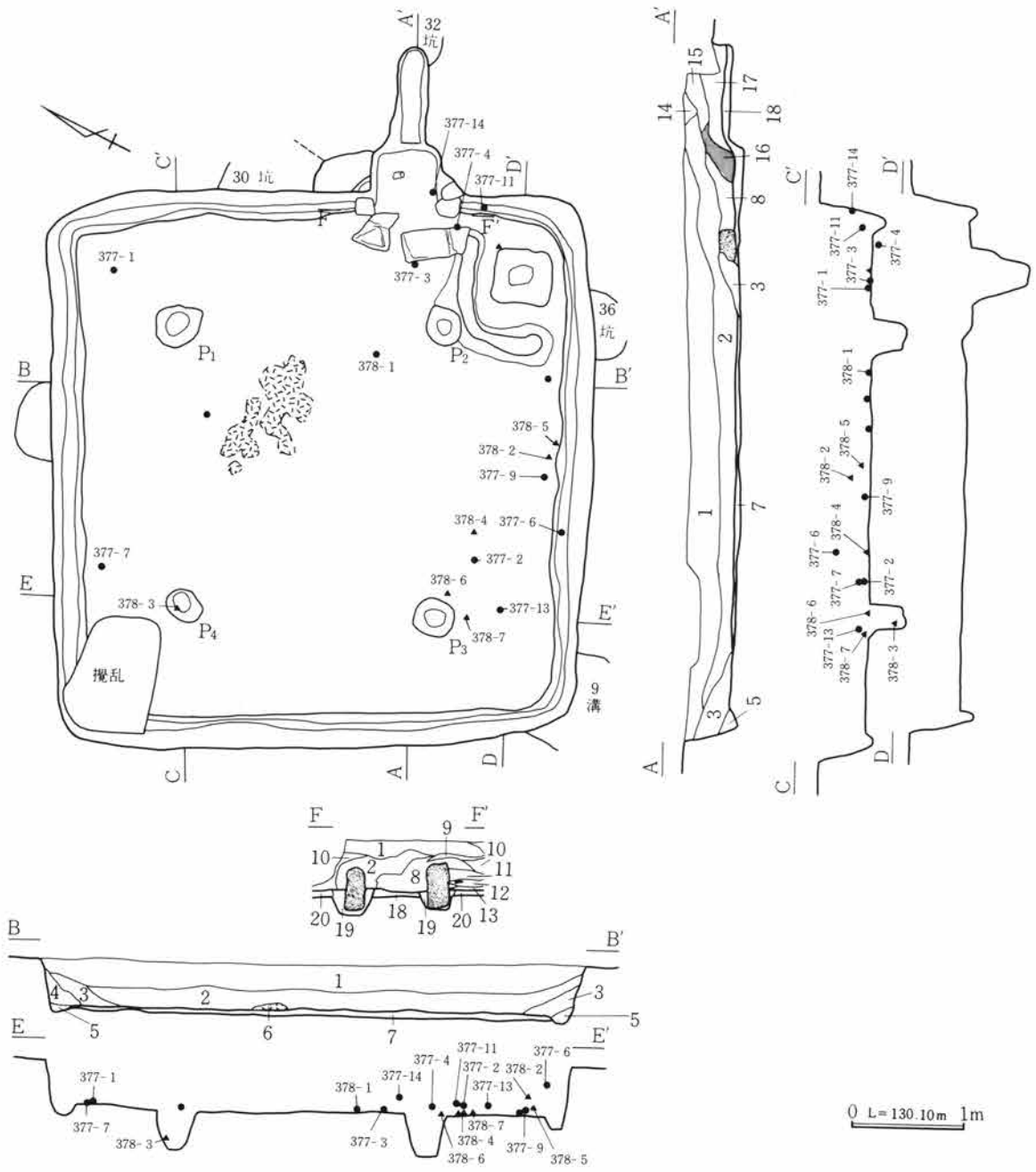
第375図 H区第25号住居跡実測図

遺構名称	H区第26号住居跡	位置	6～9-H-53～57グリッド内	分類	A-6	時期	III
平面形態	隅丸方形	規模	4.90m×4.80m	主軸方位	東—25度—北	残存深度	約45cm程
備考	壁溝はカマド部を除き全周し、幅約20～30cm、深度約10cmである。柱穴は4本検出し、円形で径約35～45cm、深度約30cmで同程度である。貯蔵穴は南東コーナー部方形で、一辺約53cm、深度約48cm。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・凸字形			主軸方位	東—23度—北	
規模	全長 154cm 屋外長 130cm 屋内長 24cm 袖間幅 90cm 燃烧部幅 64cm 煙道幅 28cm						
備考	東壁から凸字形に掘り込まれ、煙道部は燃烧部から段を有している。袖はカマド壁取り付け部で角柱状截石を立てており、屋内に突出しない。燃烧部中央北寄りに石製支脚及び焚口に天井石を検出した。						

当住居跡の貯蔵穴は、方形プランでVII層中に掘り込まれているため、残存状態は非常に良好である。この貯蔵穴の屋内側を囲うような状態で、「L」字形の周堤状の施設を検出した。この施設は、住居床面を構成する土や、覆土とは明確に区別されるもので、灰褐色の砂質土主体の土で構築されている。

遺物は、土師器の甕は破片ばかりであるが、坏は完形品が多く、床面に密着した状態のものや、カマドの天井石と考えられるもの下敷きになった状態のもの等がある。

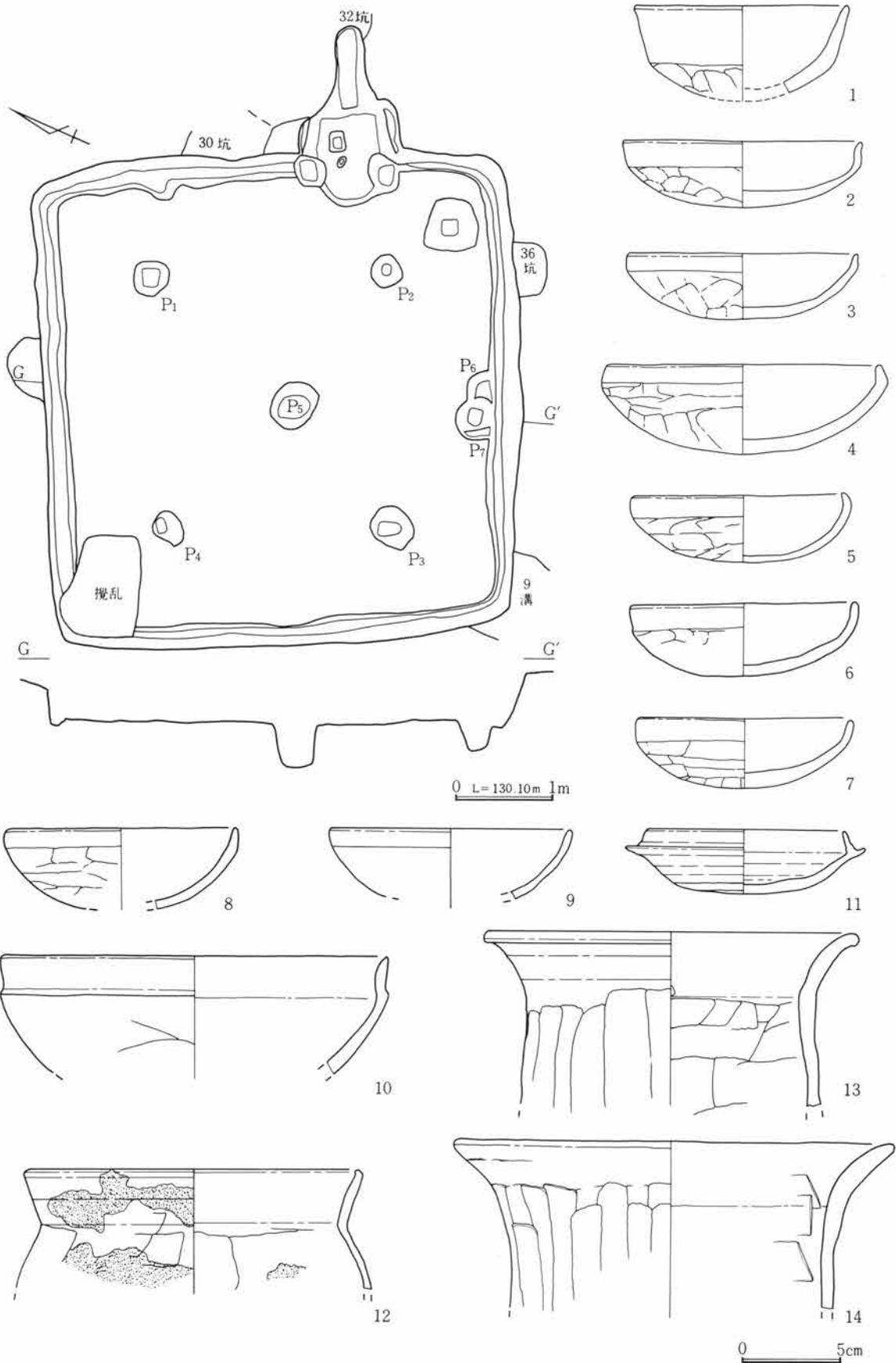
第3章 検出された遺構・遺物



- | | | | |
|---------|--------------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 | c pとVI層土ブロックを若干含む。 | 11 // | 灰白色粘土ブロックと黒褐色粘質土ブロックの混土。 |
| 2 // | c pはごく微量でVI層土ブロックを多く含む。 | 12 // | 灰白色粘土粒を含み、しまりが無い。 |
| 3 // | c pは2層に比してさらに少なく、VII層土ブロックを含む。 | 13 // | VI層土ブロックを多量に含む。 |
| 4 // | c pを多く含み、粘性は弱い。 | 14 // | 灰白色粘土粒と暗褐色土粒の混土でわずかに焼土粒を含む。 |
| 5 // | VI層土を多量に含む。 | 15 // | 14層に比して灰白色粘土粒と焼土粒を多く含む。 |
| 6 灰白色粘土 | | 16 灰白色土 | 粘質土で焼土ブロックを多く含む。 |
| 7 暗褐色土 | c p細粒を微量、VI層土ブロックを多量に含む。 | 17 暗褐色土 | 灰白色粘土粒は15層と同量で炭化物を含む。 |
| 8 // | 灰白色粘土粒と粘質化した焼土ブロックをわずかに含む。 | 18 // | 灰白色粘土ブロック及び灰を若干含む。 |
| 9 // | 1層と類似しているが、やや黒味が強い。 | 19 // | 灰白色粘土粒・焼土粒を含まず、粘性が弱い。 |
| 10 // | c pと灰白色粘土粒をわずかに含み、粘性は弱い。 | 20 // | VI層土粒を多量に含む。 |

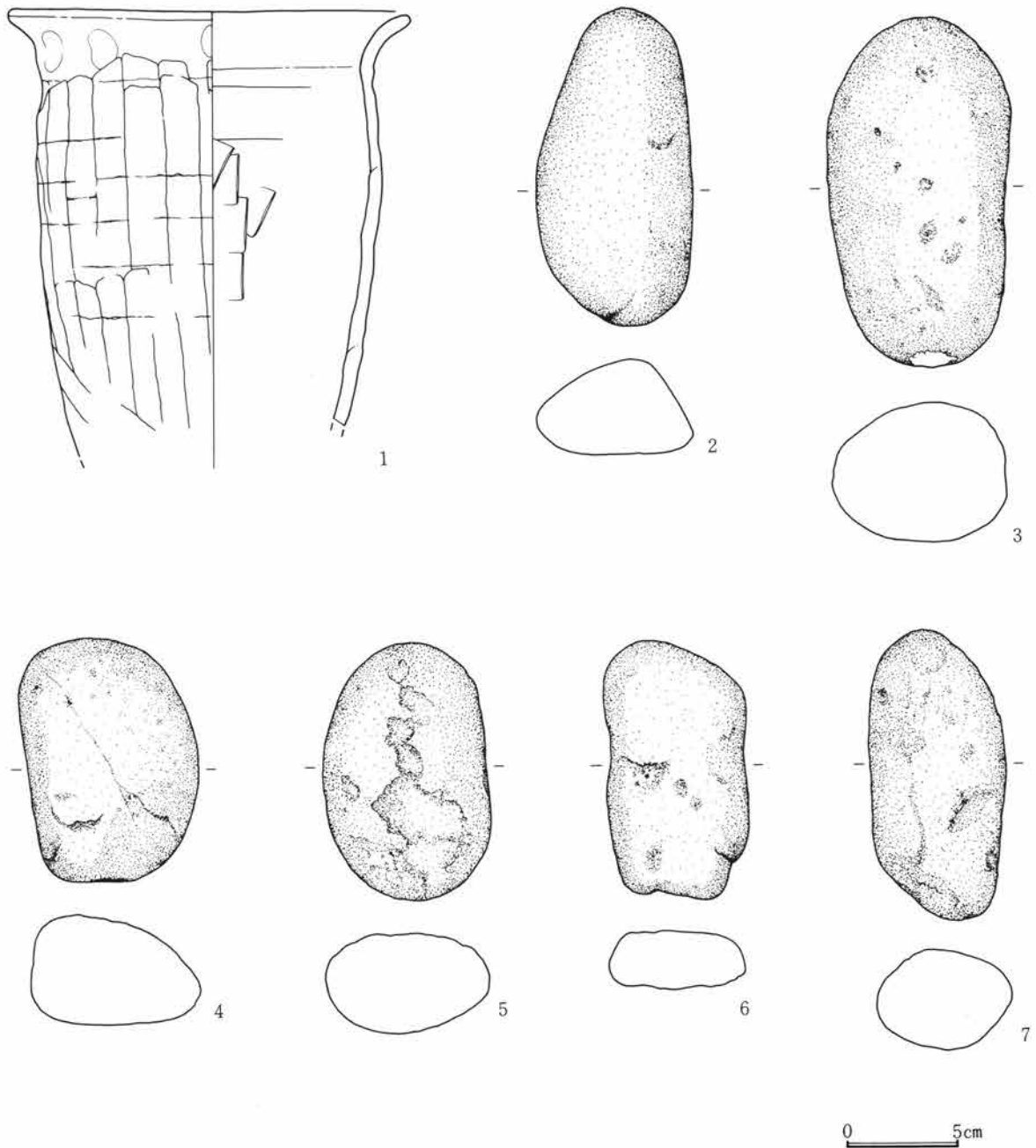
第376図 H区第26号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第377図 H区第26号住居跡・出土遺物実測図

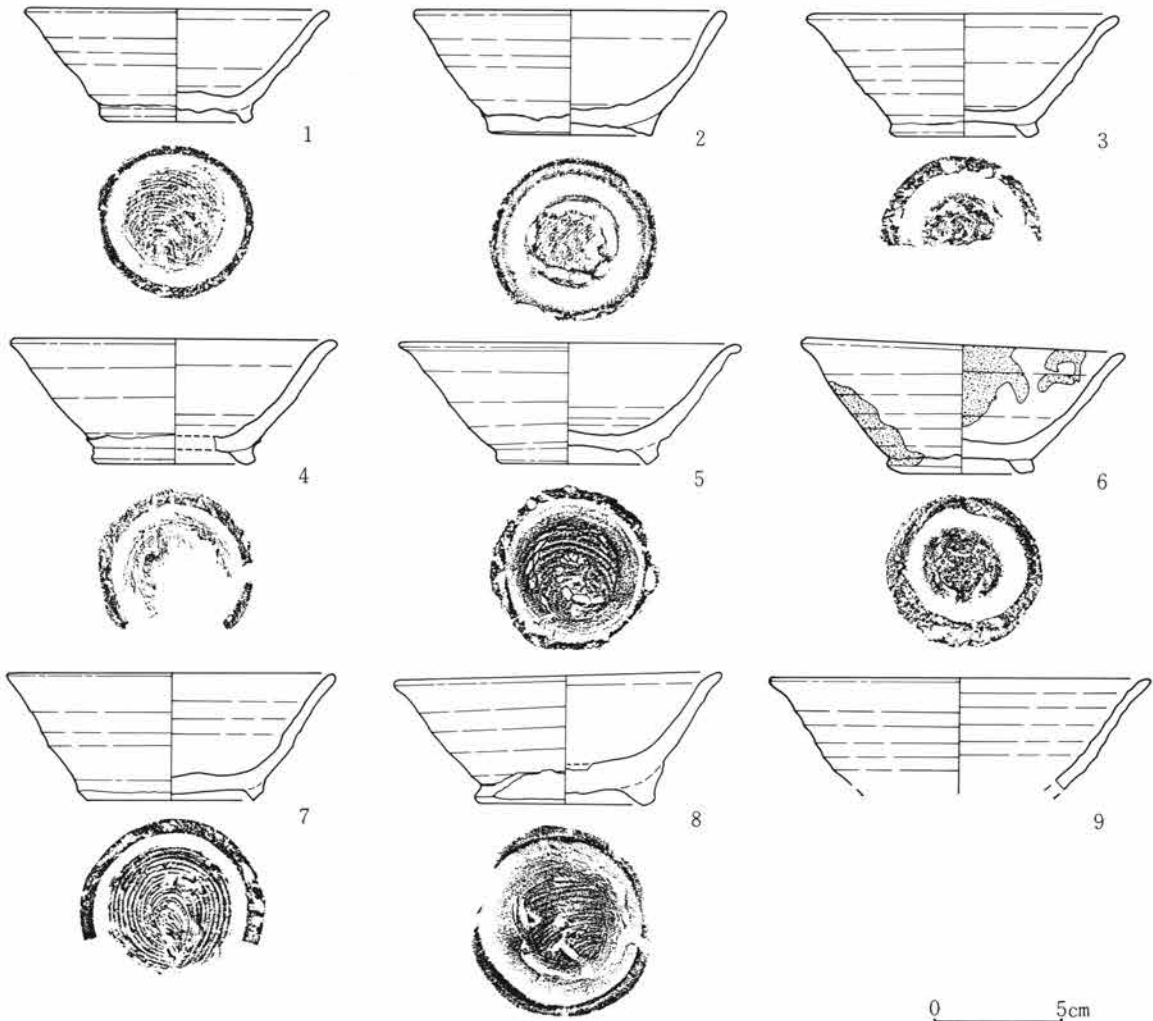
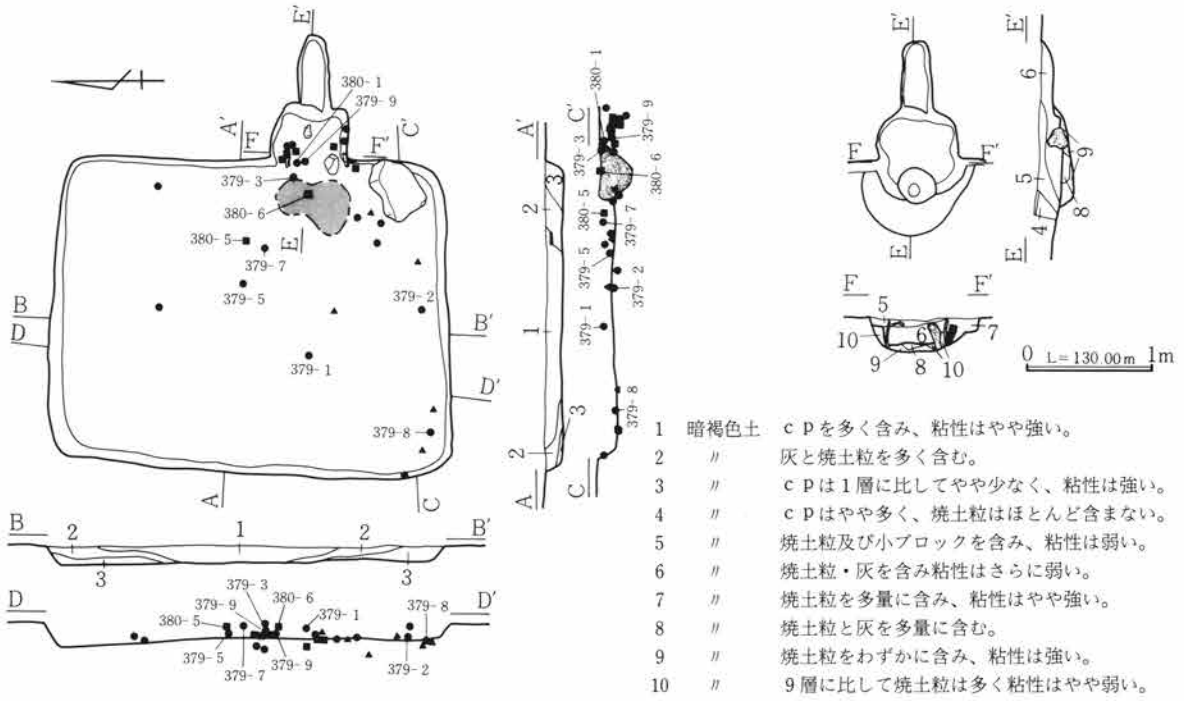
第3章 検出された遺構・遺物



第378図 H区第26号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第27号住居跡	位置	8～10-H-50～52グリッド内		分類	C-10	時期	VII
平面形態	隅丸長方形	規模	2.50m×3.10m	主軸方位	東-1度-南	残存深度	約 12cm程	
備考	壁はVI層中で、全周検出した。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出である。南東コーナー部に大礫を検出したが、据えられた痕跡はなく、地山中のものを掘り残したものと考えられる。							
カマド	位置・形状	東壁南寄り・凸字形			主軸方位	東-2度-南		
規模	全長 103cm 屋外長 93cm 屋内長 10cm 袖間幅 70cm 燃烧部幅 58cm 煙道幅 23cm							
備考	東壁から凸字形に掘り込み、燃烧部と煙道の間には段を有している。焚口前面に灰面を検出し、燃烧部中央北寄りに石製支脚を検出。袖は内側に検出し、瓦と礫を使用。煙道は長さ55cmである。							

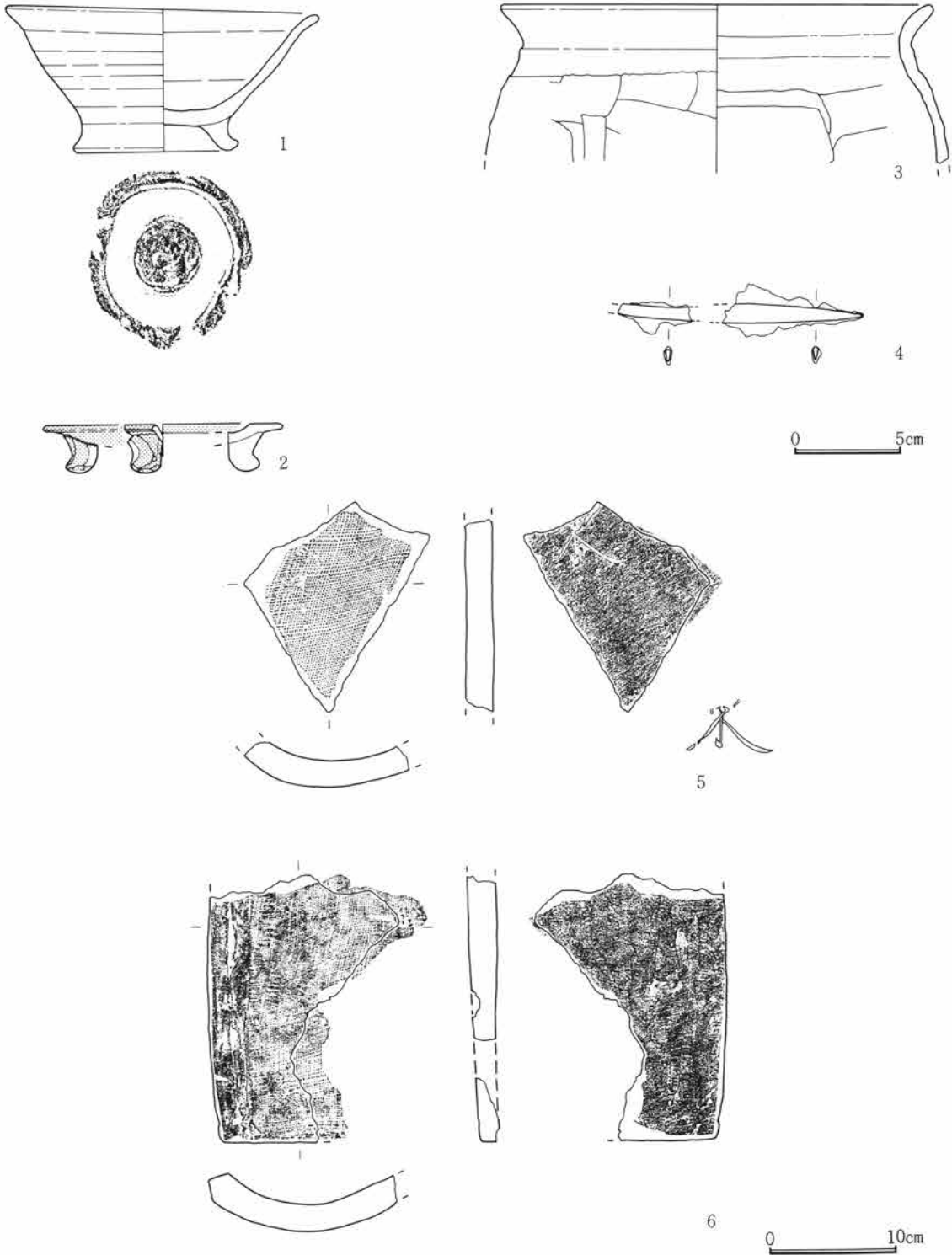
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



0 5cm

第379図 H区第27号住居跡・出土遺物実測図

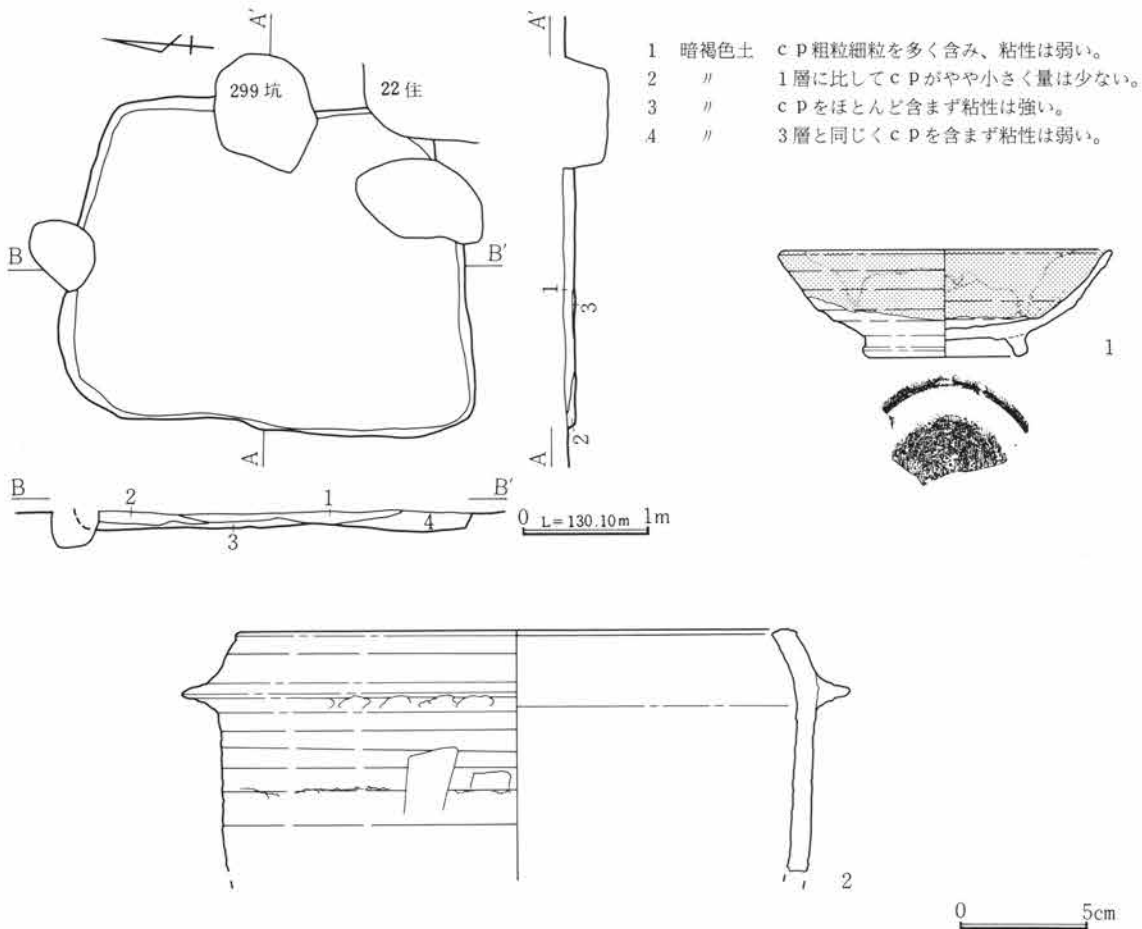
第3章 検出された遺構・遺物



第380図 H区第27号住居跡出土遺物実測図

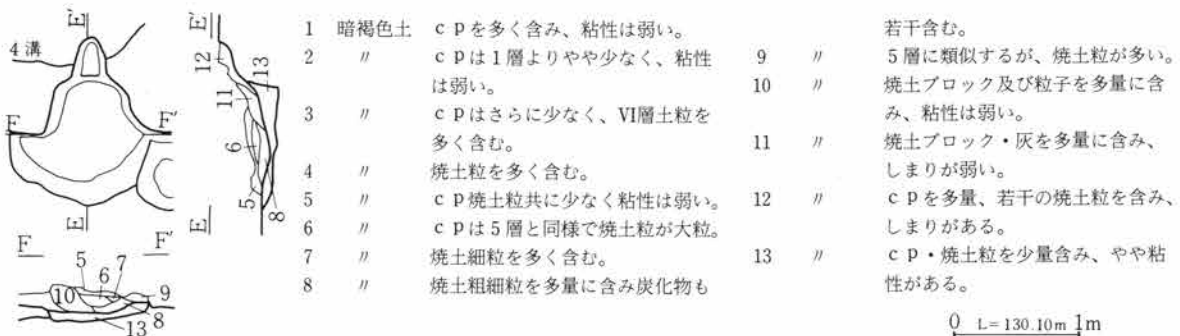
遺構名称	H区第28号住居跡	位置	4～6-H-52・53グリッド内	分類	—	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	2.50m×3.20m	主軸方位	東-2度-北	残存深度	約10cm程
備考	東壁で第299号土坑及び第22号住居跡と重複し、カマドが失われている。検出部分には壁溝・柱穴・貯蔵穴いずれも検出されなかった。床面は平坦で、掘り方は全く認められない。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



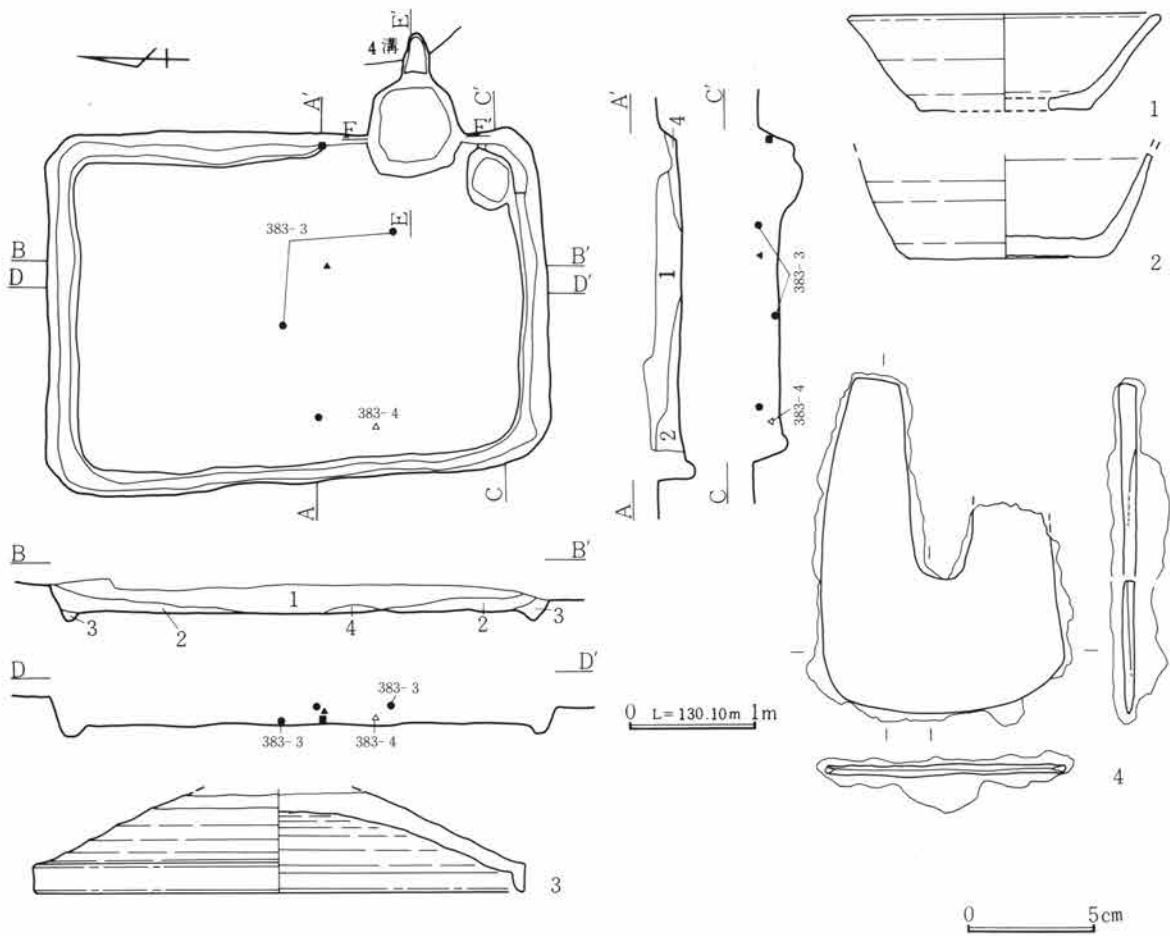
第381図 H区第28号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第29号住居跡	位置	3～5-H-53～55グリッド内	分類	C-8	時期	-
平面形態	隅丸長方形	規模	2.70m×4.00m	主軸方位	東-2度-北	残存深度	約20cm程
備考	壁溝はカマド部を除き全周し、幅約20～28cm、深度約5cm。柱穴は未検出で、貯蔵穴は南東コーナー部で、円形を呈し、径約35cm、深度約20cm。カマド正面の西壁近くで鋤先状の鉄器出土。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・凸字形			主軸方位	東-2度-北	
規模	全長110cm	屋外長	77cm	屋内長	33cm	袖間幅	1cm
		燃烧部幅	62cm	煙道幅	1cm		
備考	東壁から凸字形に掘り込み構築し、煙道部との境に段を有する。焚口は浅く掘り込まれ、袖は痕跡も認められない。燃烧部に焼土等は検出されず、遺物出土もなかった。煙道長約30cm。						



第382図 H区第29号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第383図 H区第29号住居跡・出土遺物実測図

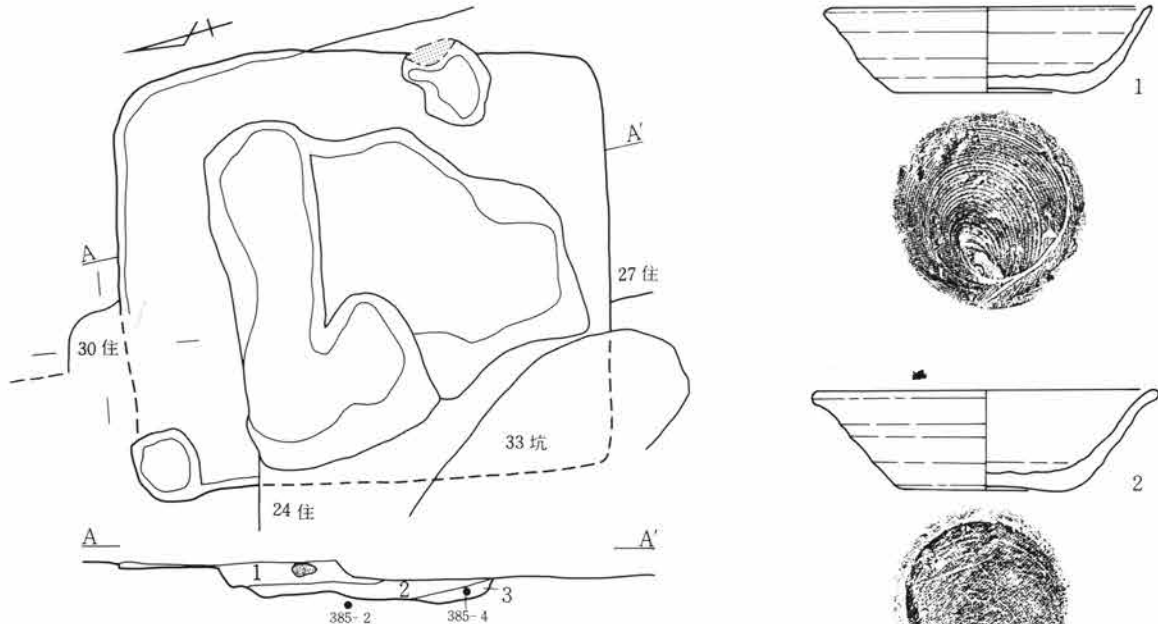
遺構名称	H区第30号住居跡	位置	11-H-51・52グリッド内	分類	—	時期	—
カマド	位置・形状	東壁と思われる・馬蹄形		主軸方位	東—9度—南		
規模	全長 47cm 屋外長 — cm 屋内長 — cm 袖間幅 66cm 燃烧部幅 58cm 煙道幅 — cm						
備考	残存状態は極めて不良で、住居平面形を把えることはできなかった。掘り方は楕円形で、両側に角柱状の截石を据え袖としている。また、袖石よりも屋内側中央に支脚と考えられる礫を検出した。						



第384図 H区第30号住居跡実測図

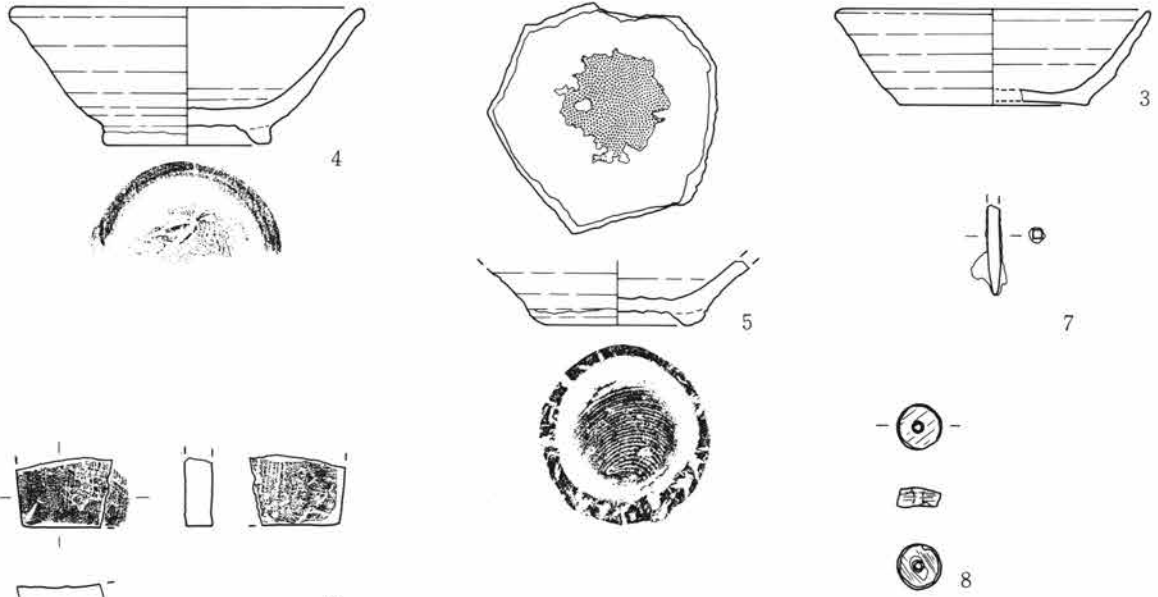
遺構名称	H区第32号住居跡	位置	9~11-H-51・52グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	—m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 5cm程
備考	第30号住居跡・第33号土坑と重複し、平面プランは不明確。中央に不整形の掘り方を有している。カマドは東壁南寄りと考えられ、焼土と燃烧部から焚口にかけてと思われる掘り方を検出した。						

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



- 1 暗褐色土 c Pを多量に含み、粘性は弱い。
- 2 // 1層に比してc Pが少なく、しまりがある。
- 3 // c Pを多く含み、VI層土ブロックを微量含む。
- 4 // VI層土ブロックを多く含み、粘性は弱い。

0 L=130.00m 1m



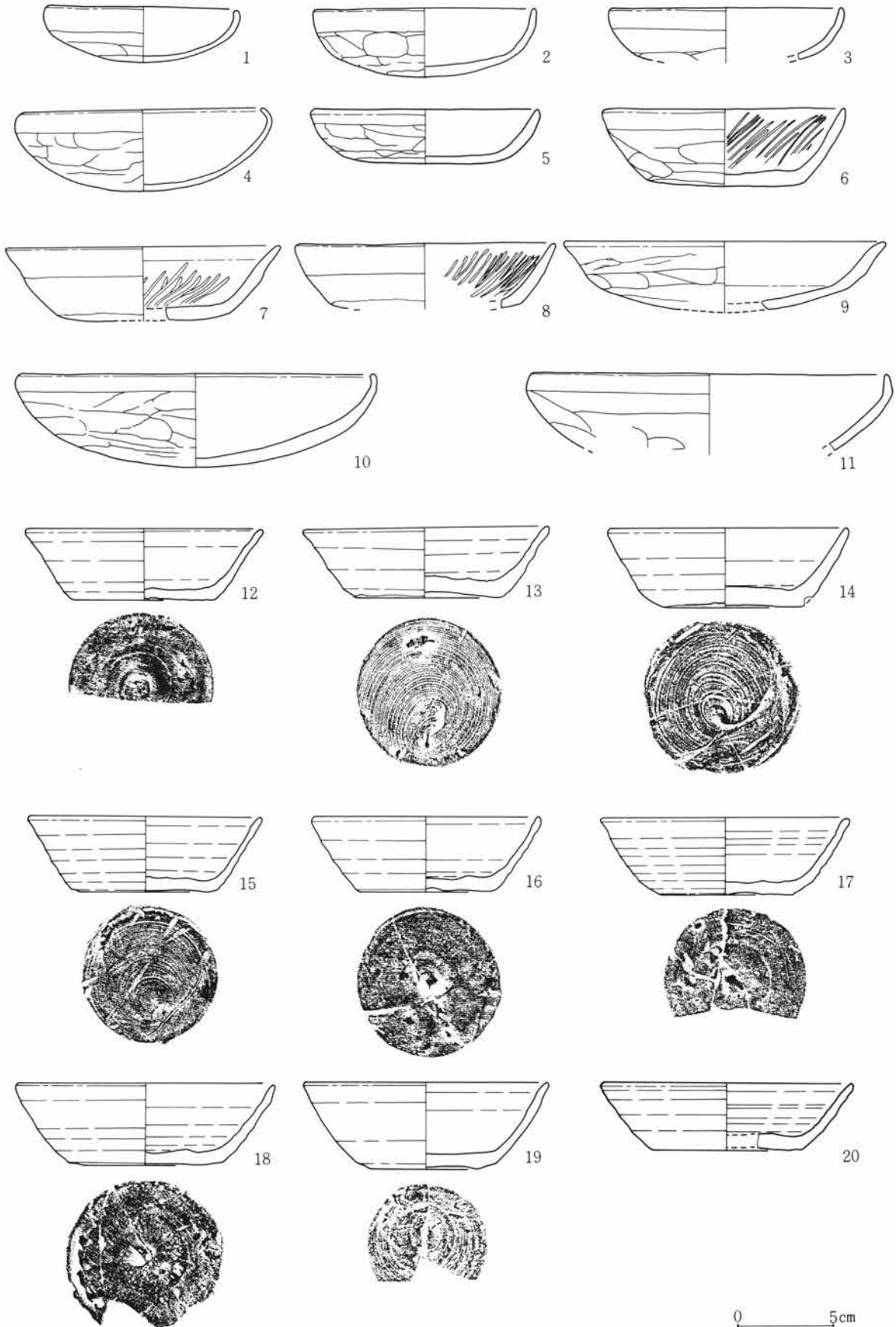
(1 : 2)

0 5cm 0 10cm

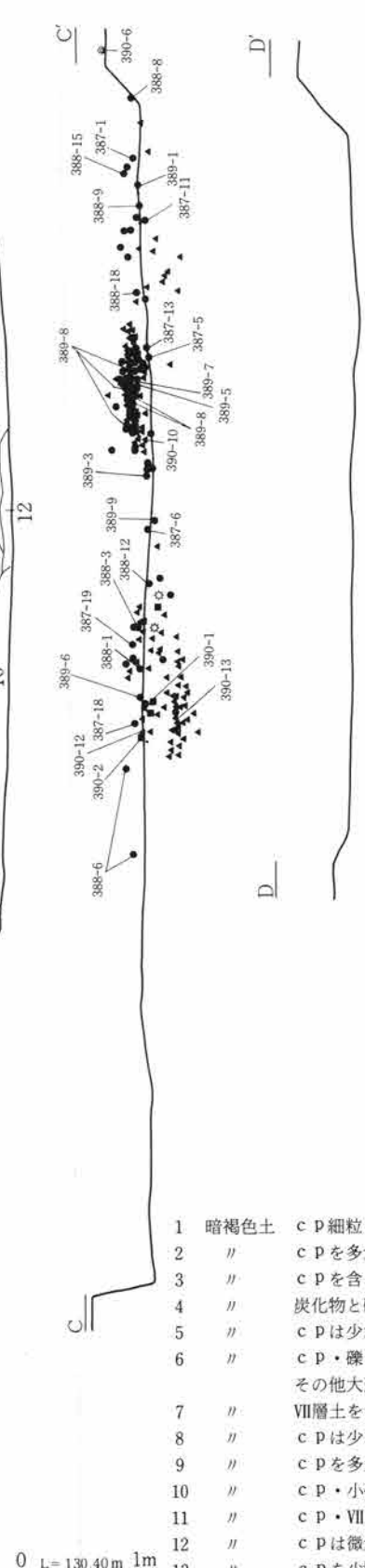
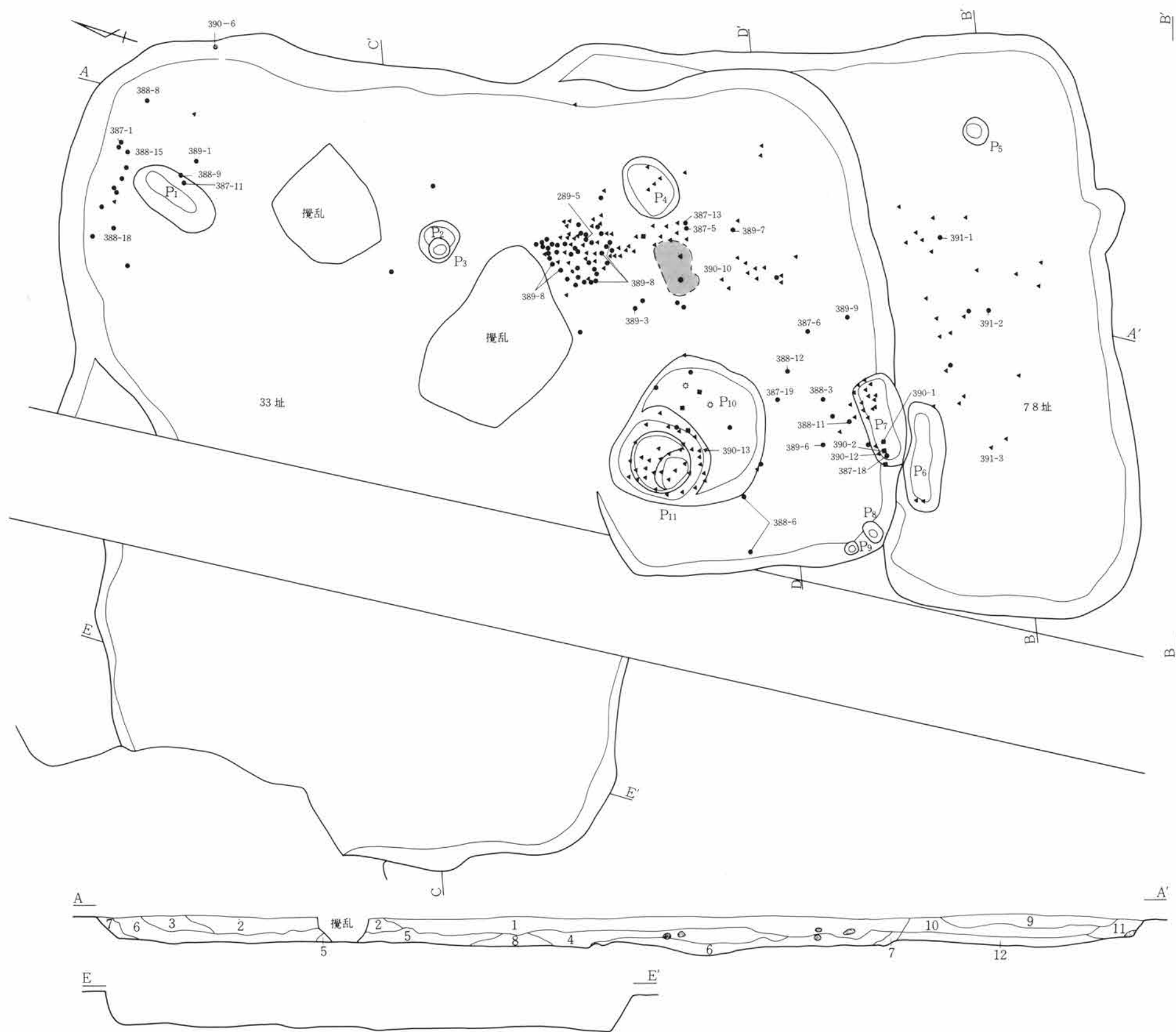
第385図 H区第32号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第33号址	位置	13～19-H-63～68グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸鍵形	規模	10.1m×10.3m	主軸方位	東-11度-北	残存深度	約 30cm程
遺構名称	H区第78号住居跡	位置	11～15-H-62～66グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	7.50m×3.30m	主軸方位	東-26度-北	残存深度	約 25cm程

第3章 検出された遺構・遺物



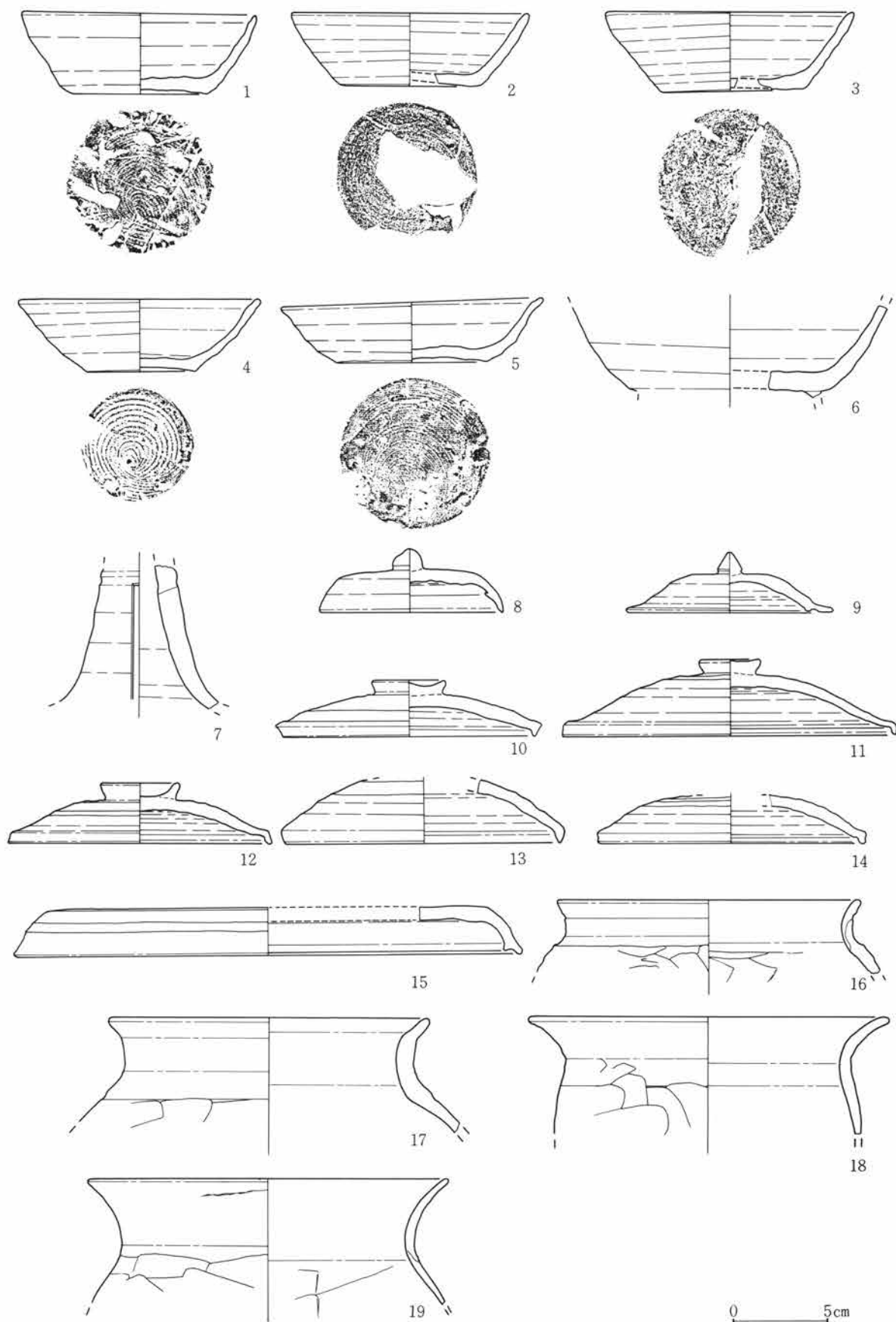
第386図 H区第33号址出土遺物実測図



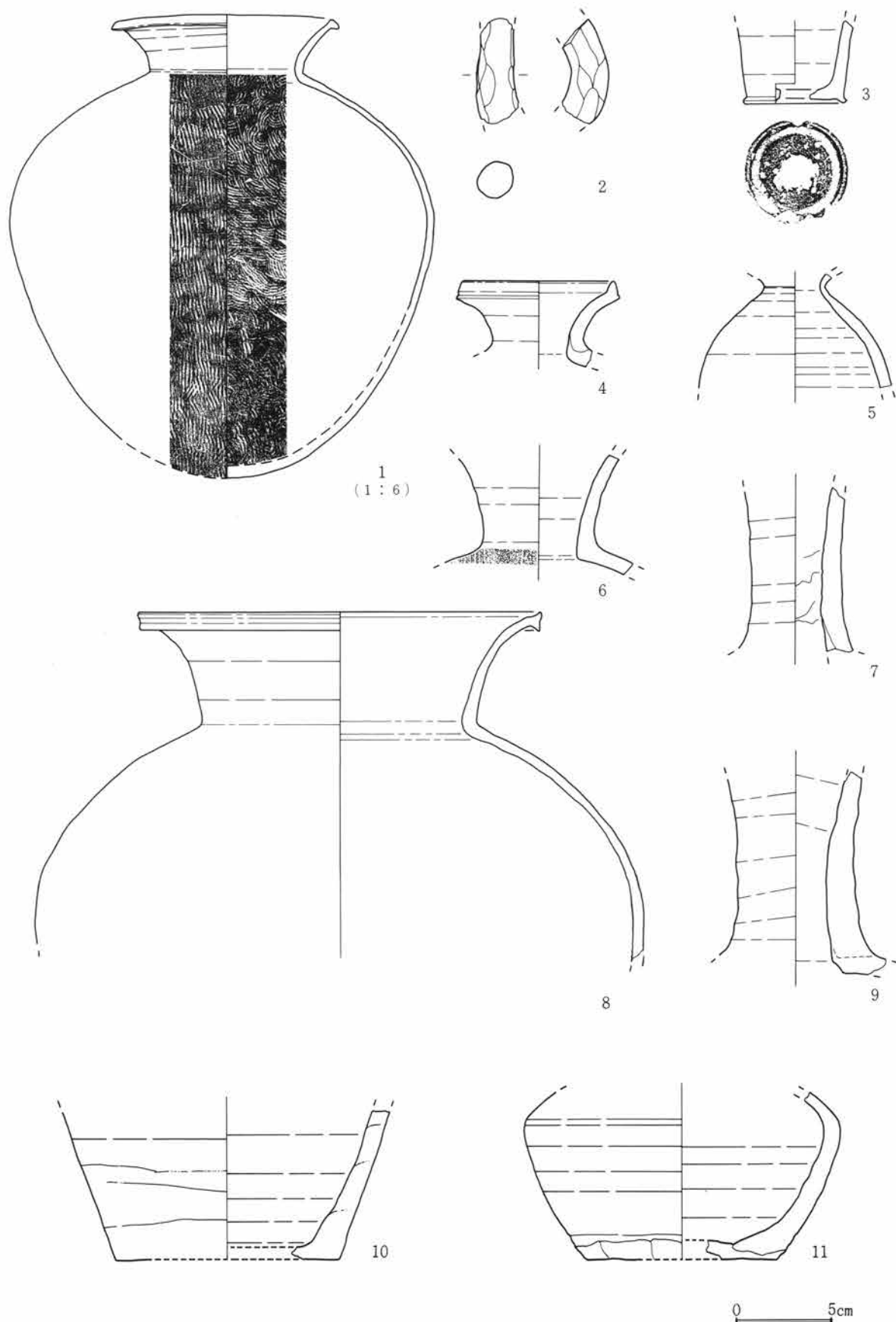
- | | | |
|----|------|--|
| 1 | 暗褐色土 | c P 細粒を含む。 |
| 2 | // | c P を多量、他に炭化物を含む。 |
| 3 | // | c P を含まず、小礫を含む。 |
| 4 | // | 炭化物と礫を多量に含む。 |
| 5 | // | c P は少量でVII層土ブロックを多く含む。 |
| 6 | // | c P ・礫を若干、VII層土ブロックを多量、
その他大形の炭化物を含む。 |
| 7 | // | VII層土を多量に含む。 |
| 8 | // | c P は少なく、粘性が強い。 |
| 9 | // | c P を多量、その他焼土・炭化物を含む。 |
| 10 | // | c P ・小礫を含む。 |
| 11 | // | c P ・VII層土ブロック・礫を多く含む。 |
| 12 | // | c P は微量でVII層土ブロックを多量に含む。 |
| 13 | // | c P を少量含み、ざらついている。 |

第387図 H区第33号址・78号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

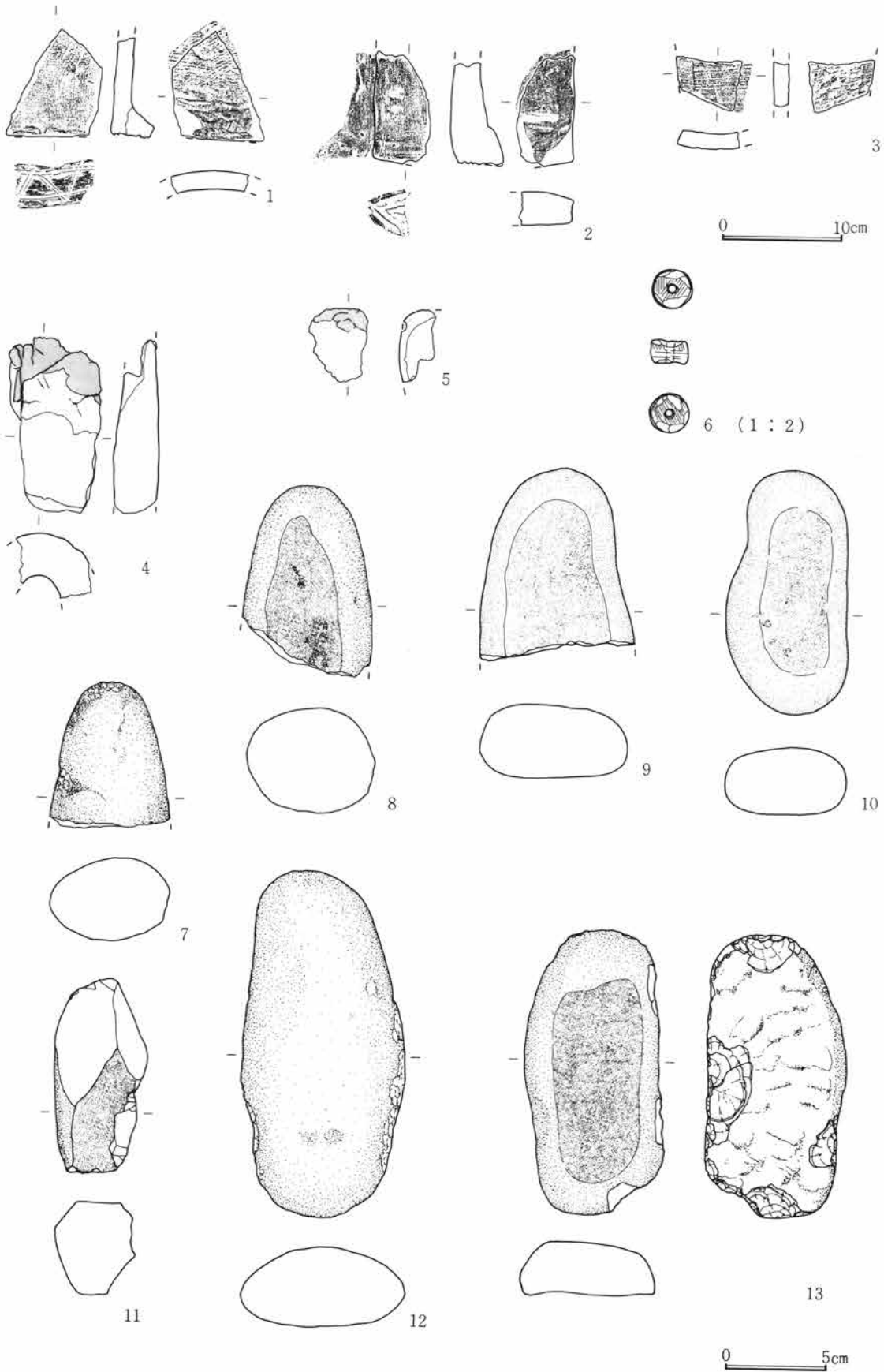


第388図 H区第33号址出土遺物実測図



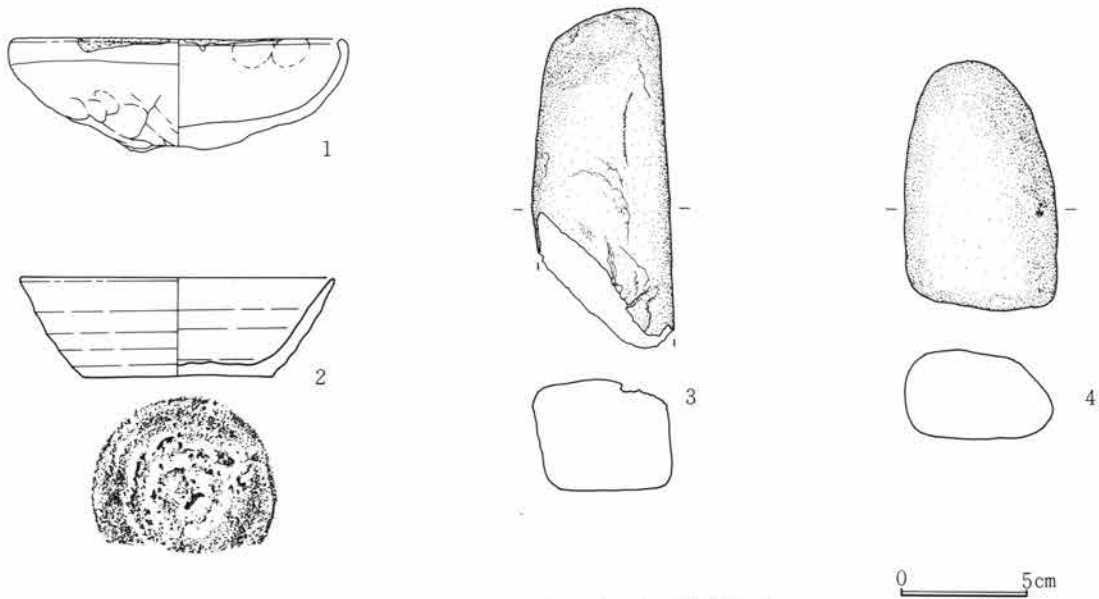
第389図 H区第33号址出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第390図 H区第33号址出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第391図 H区第78号住居跡出土遺物実測図

第33号址及び第78号住居跡は、南北農道の西側のVI層面で検出したもので、南側で両遺構は重複している。この両遺構の新旧関係は、セクション面の観察から第78号住居跡が先行すると判断したが、遺物出土状態は極めて類似しており、時間差はあまりないものと思われる。

第33号址の平面形態は、南北に長軸を有する隅丸長方形の北側約1/2部分が、西に張り出したような形態を呈している。この張り出し取り付け部で、西壁が一部東に向う部分がある。したがって東西に長軸を有する2基の遺構が重複した状態ともみられる。しかし、南北セクション面の観察からは、重複は認められないため、この特異な形態を1つの遺構平面形態としてとらえた。

壁に沿って壁溝等の施設は認められず、円形及び楕円形プランのピットを3個検出したが、配置・規模に規則性は認められず、柱穴と判断されるものはなかった。

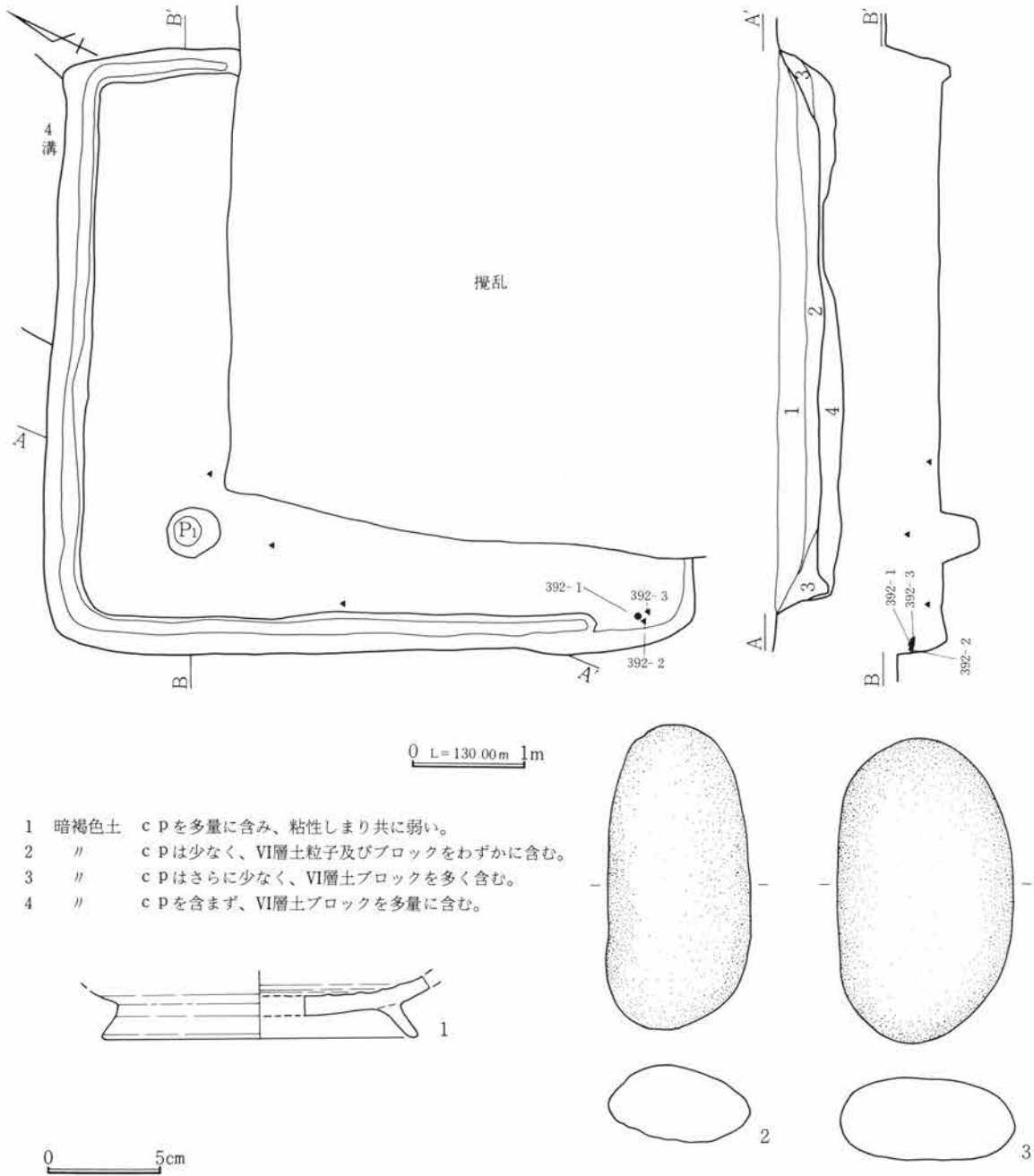
底面は、VI層中の部分とVII層面に達した部分があるが、あまり顕著なレベル差はなく、ほぼ平坦である。また、南西コーナー部近くには、長軸約230cm程の不整楕円形プランの土坑を検出した。この土坑は、北側で2段の掘り込みがなされており、土器片に混って礫が多数充填していた。

遺物は、底面からわずかに遊離した状態のものが多く、当址南寄りに弧状の分布を示して検出された。この部分でも礫の比率は多く、大半の遺物は当址埋没途中に入れられたものと判断される。しかし、遺物量が多い上、完形に近い土器の占める割合が多く、第389図1のような須恵器の大甕がかなりの残存率で1カ所に集中するあり方は、単に周囲からの投棄とは考えにくい。

以上のように、平面形態・施設等、同時期の住居跡と共通する要素は少なく、単なる住居跡とは考えられない。この傾向は第78号住居跡にもみられるもので、両遺構共に特殊な意味を有するものであろうか、それが何であるのかは言及することができない。

遺構名称	H区第34号住居跡	位置	49-G~2-H-52~55グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	5.30m×5.70m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 40cm程
備考	西側の大半は攪乱を受け、カマドも失われている。壁溝は、南西コーナー部には検出されなかった。柱穴は北西コーナー部近くに1本検出ただけで、他は失われたものと思われる。						

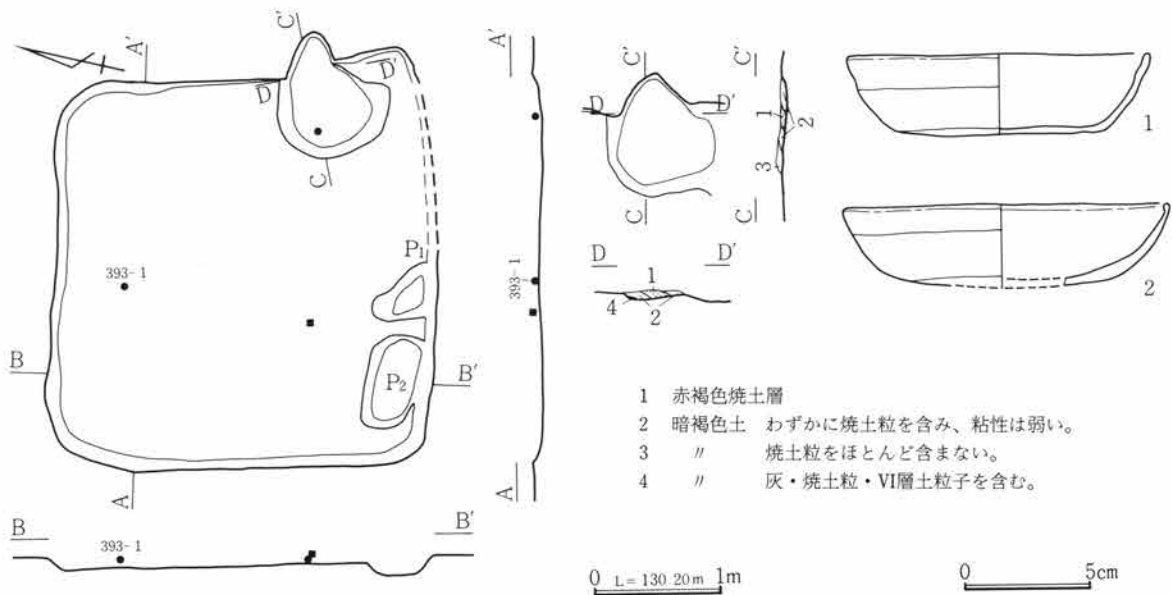
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第392図 H区第34号住居跡・出土遺物実測図

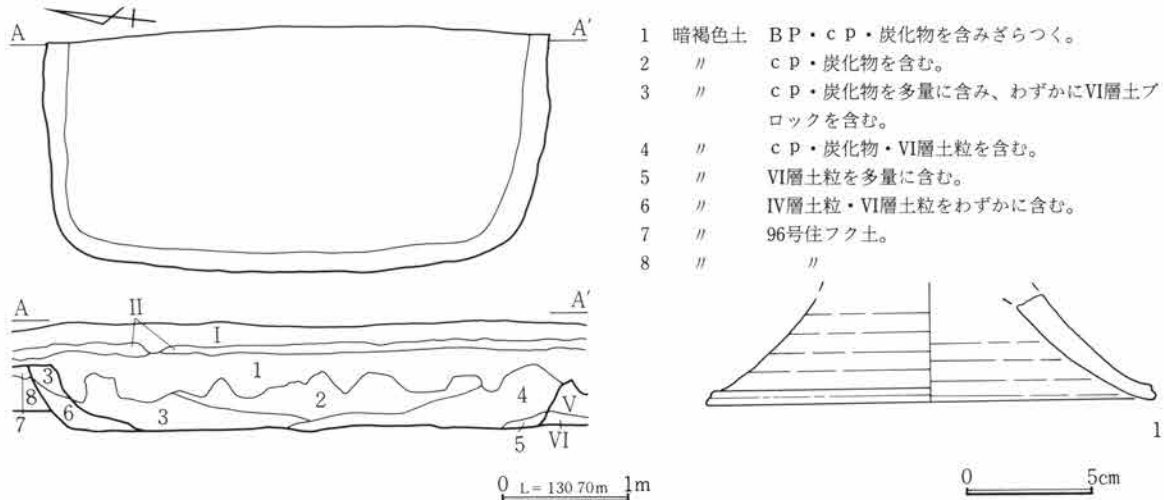
遺構名称	H区第37号住居跡	位置	18～20-H-46～48グリッド内	分類	A-9	時期	-
平面形態	隅丸方形	規模	3.10m×3.10m	主軸方位	東-7度-北	残存深度	約5cm程
備考	壁は南壁の一部未検出の他全周検出した。壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴も認められない。南壁西寄りに検出した土坑も貯蔵穴・柱穴とは考えられない。						
カマド	位置・形状	東壁南寄り・三角形状			主軸方位	東-12度-北	
規模	全長 97cm 屋外長 26cm 屋内長 71cm 袖間幅 - cm 燃烧部幅 51cm 煙道幅 - cm						
備考	残存はきわめて悪く、掘り方のみ検出した。焚口・燃烧部を含め半円状の浅い掘り込みがみられるが、袖石等の構築材の据え方は検出されていない。燃烧部には、灰・焼土等も未検出である。						

第3章 検出された遺構・遺物



第393図 H区第37号住居跡・出土遺物実測図

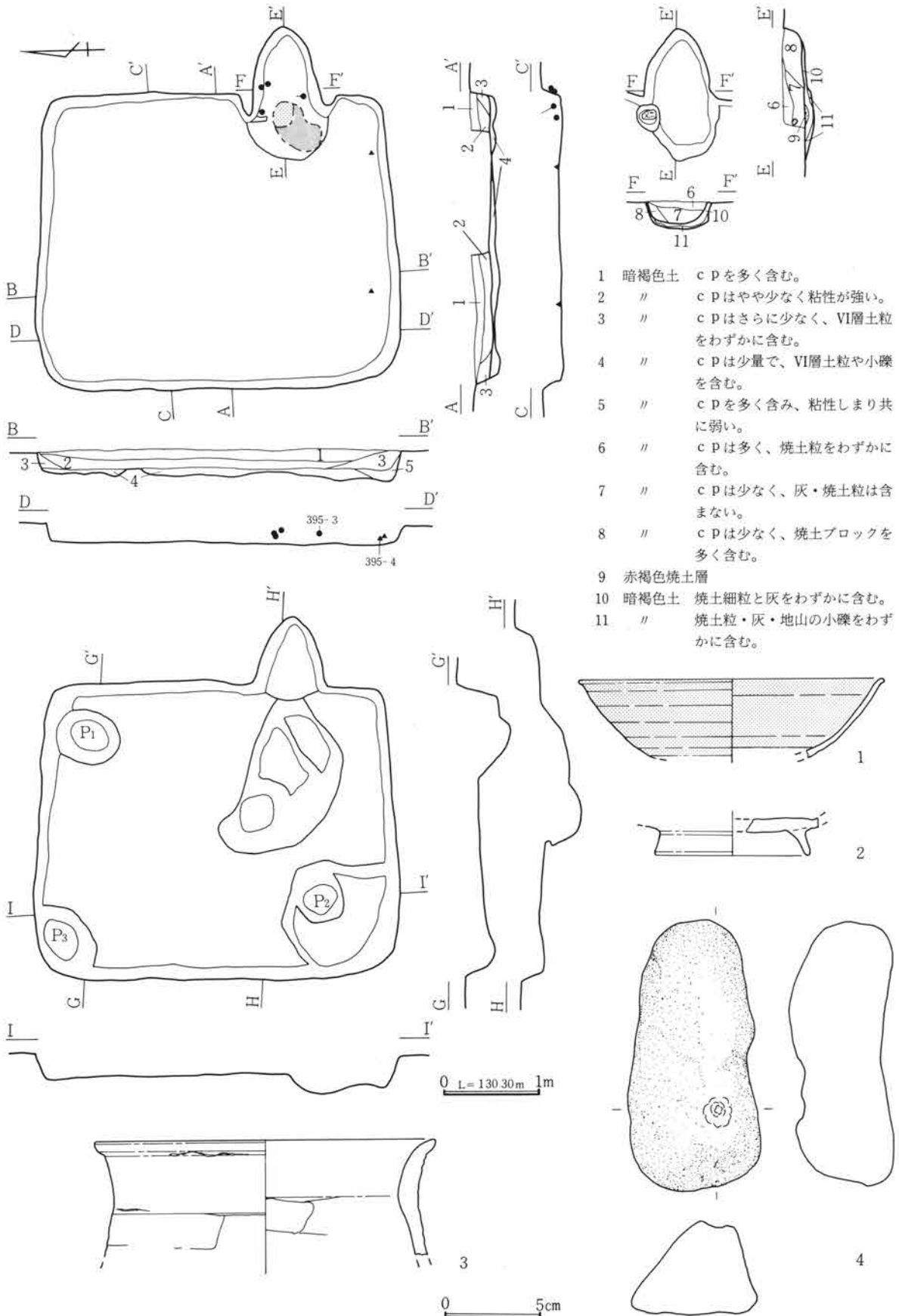
遺構名称	H区第40号住居跡	位置	9～11-H-45・46グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×4.00m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 10cm程



第394図 H区第40号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第48号住居跡	位置	4～6-H-64～66グリッド内	分類	C-10	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×3.70m	主軸方位	東—1度—南	残存深度	約 18cm程
備考	壁は全周検出し、床面はVII層中に達する掘り方に、VI層土主体に小礫を含む土で貼床を施している。壁溝・貯蔵穴は未検出で、柱穴は掘り方段階で検出したP ₁ ～P ₃ が該当すると考えられる。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・舌状			主軸方位	東—1度—北	
規模	全長 137cm 屋外長 65cm 屋内長 72cm 袖間幅 115cm 燃烧部幅 64cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口から燃烧部は浅い掘り込みで、中央部に灰面と焼土面を検出した。袖は両袖共暗褐色土主体で構築され、左袖先端に礫を据えていた。カマドは貼床後に掘り込まれた可能性が高い。						

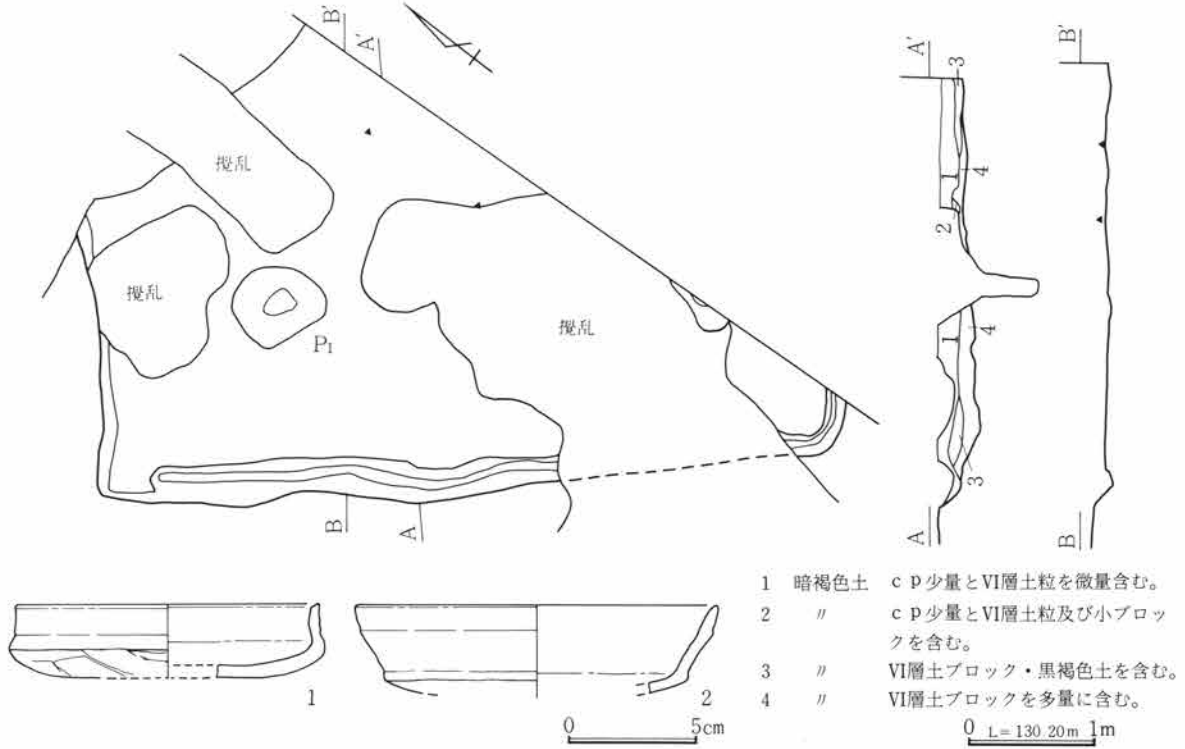
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第395図 H区第48号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	H区第52号住居跡	位置	22~25-H-46~48グリッド内	分類	—	時期	II
平面形態	方形 ?	規模	—m×5.90m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 10cm程
備考	壁は北壁の一部から南西コーナー部までを検出し、VI層土上面での検出であるが、残存状態は不良。壁溝は西壁から南壁に続くものと思われ、幅約13~32cm、深度約5cmである。柱穴は1本のみ検出。						



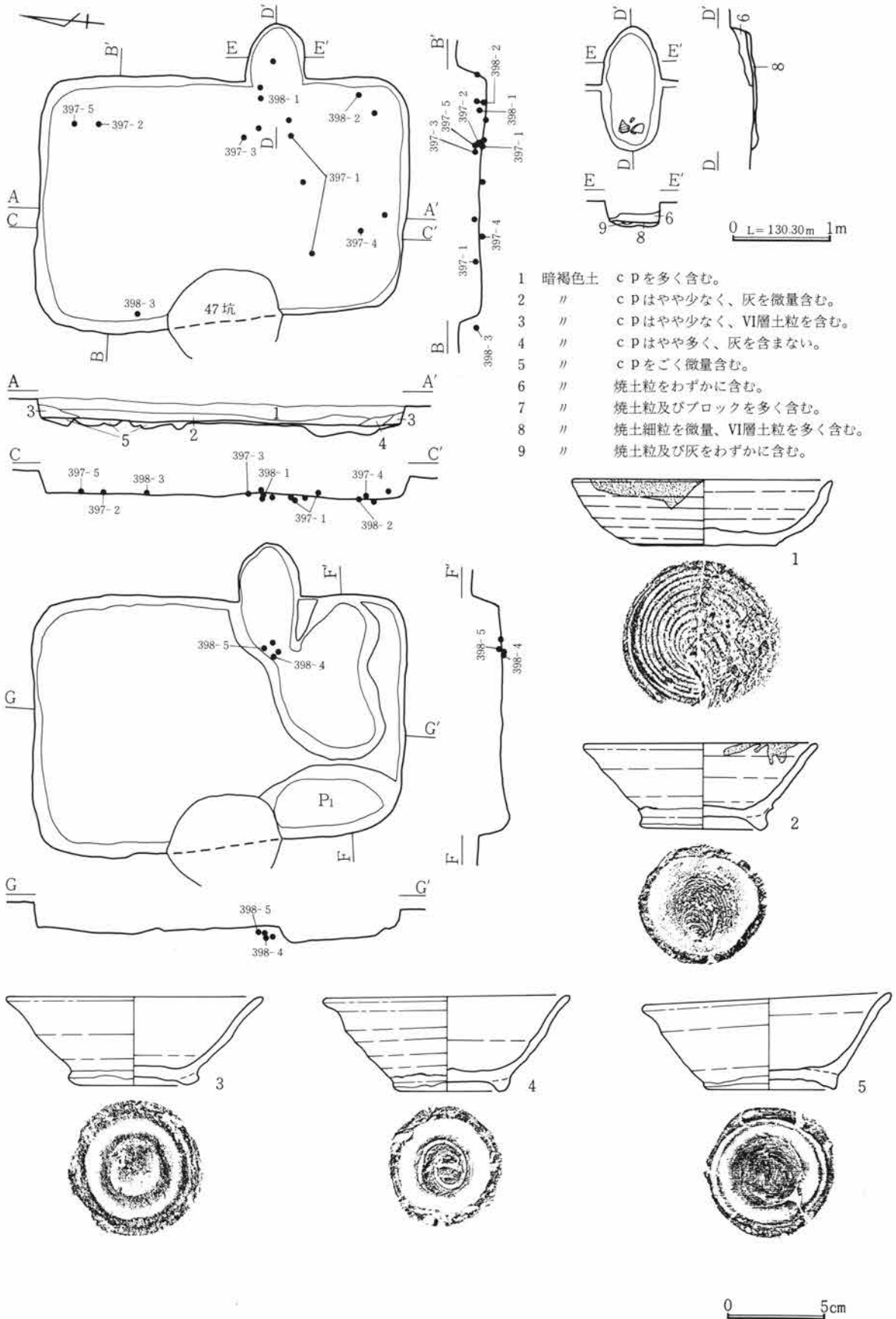
第396図 H区第52号住居跡・出土遺物実測図

当住居跡は、東側約 $\frac{1}{2}$ が調査区外にかかり、北壁の一部は第11号溝によって失われている。また、屋内部には、現代の攪乱があって残存状態はきわめて不良である。床面はVI層土中に構築され、覆土との違いは明瞭である。覆土は、下層ほどVI層土ブロックを多量に含んでおり、自然埋没とは考えられない。

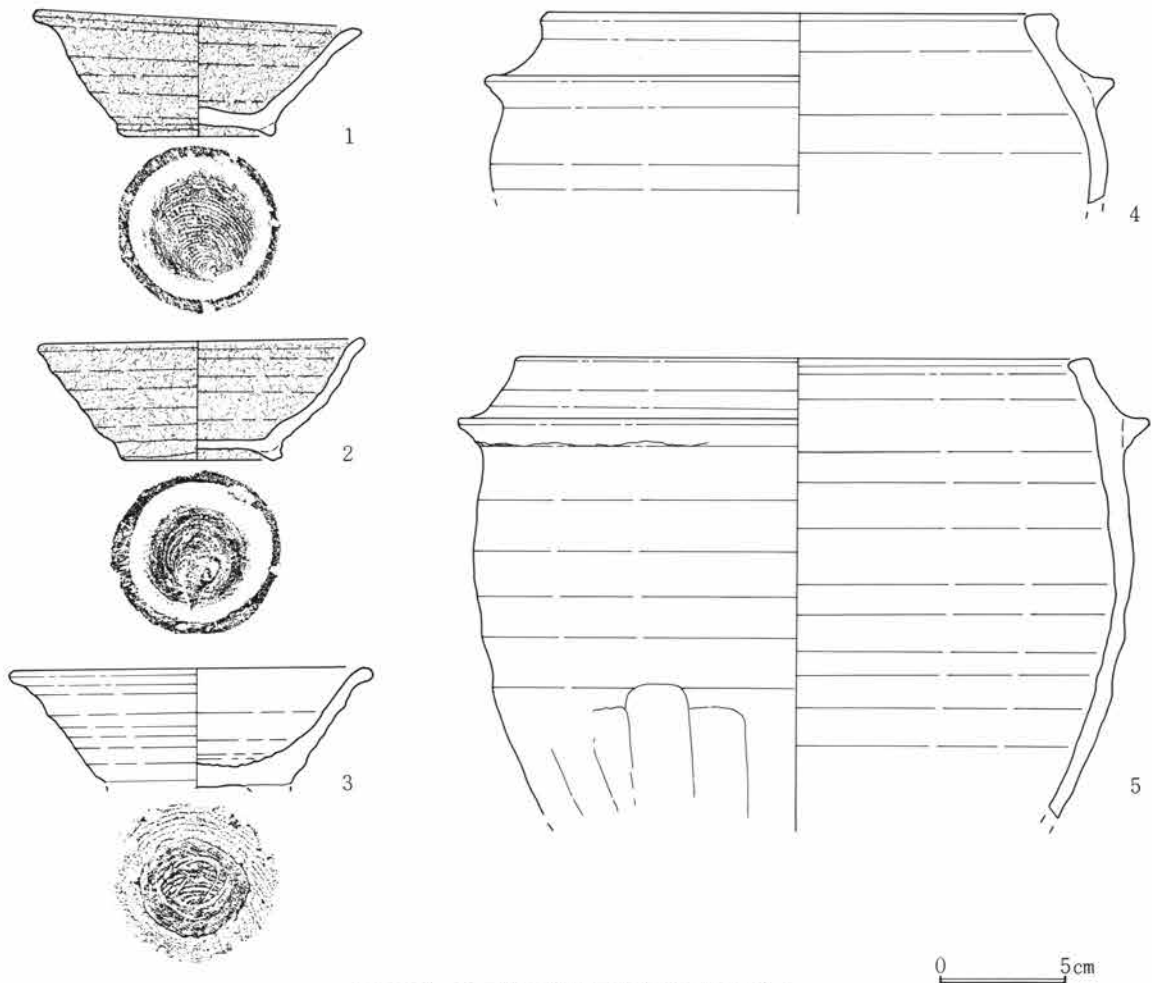
遺構名称	H区第55号住居跡	位置	7~9-H-65~67グリッド内	分類	C-10	時期	IX
平面形態	限丸長方形	規模	2.40m×3.80m	主軸方位	東-4度-北	残存深度	約 23cm程
備考	壁は西壁で第47号住居跡と重複する部分以外全周検出した。床面はVI層中で平坦であり、カマド及び北東コーナー付近床直から完形に近い土器が出土した。						
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り・馬蹄形			主軸方位	東-3度-北	
規模	全長 65cm 屋外長 57cm 屋内長 8cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 60cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、燃烧部共焼土面等の検出はなかった。袖も痕跡はなく、掘り方段階でも、袖石等の据え方は検出されていない。						

当住居跡の掘り方は、南側に顕著に認められ、不整楕円形の土坑状を呈している。南東コーナー付近に掘り込まれた方は、カマド掘り方と連続している。この掘り方セクションから、カマド焚口の掘り方が貼床後に掘られたことは明らかである。掘り方覆土は、C Pをあまり含まないVI層土主体の土で、住居掘り上げ土を埋め戻したと思われる。

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第397図 H区第55号住居跡・出土遺物実測図



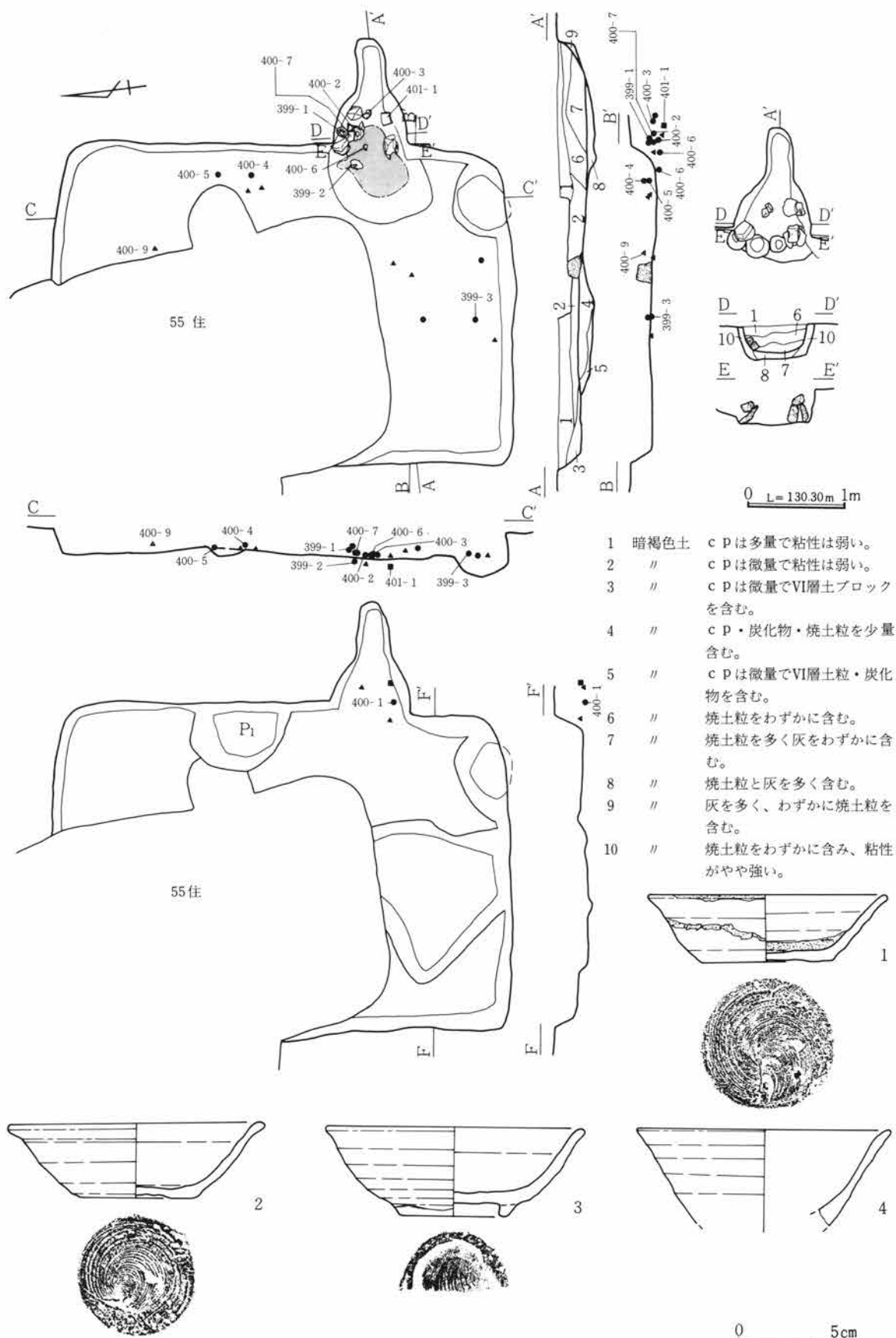
第398図 H区第55号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第56号住居跡		位置	6～9-H-64～66グリッド内		分類	C-11	時期	VII
平面形態	隅丸長方形	規模	3.20m×4.70m	主軸方位	東-8度-南	残存深度	約20cm程		
備考	壁は北東コーナー部を除き検出した。壁溝・柱穴は残存部には未検出である。貯蔵穴は、南東コーナー部で円形を呈する。径は約80cm、深度約20cmで、貯蔵穴南壁がオーバーハングしている。								
カマド	位置・形状	東壁南寄り・凸字形				主軸方位	東-8度-南		
規模	全長 123cm 屋外長 104cm 屋内長 19cm 袖間幅 80cm 燃烧部幅 74cm 煙道幅 28cm								
備考	焚口は床面とほぼ同レベルで、灰面は未検出である。袖は左袖が2個、右袖が4個の石を組合わせて構築している。燃烧部中央のやや北寄りに石を立てて支脚としている。煙道長約55cm。								

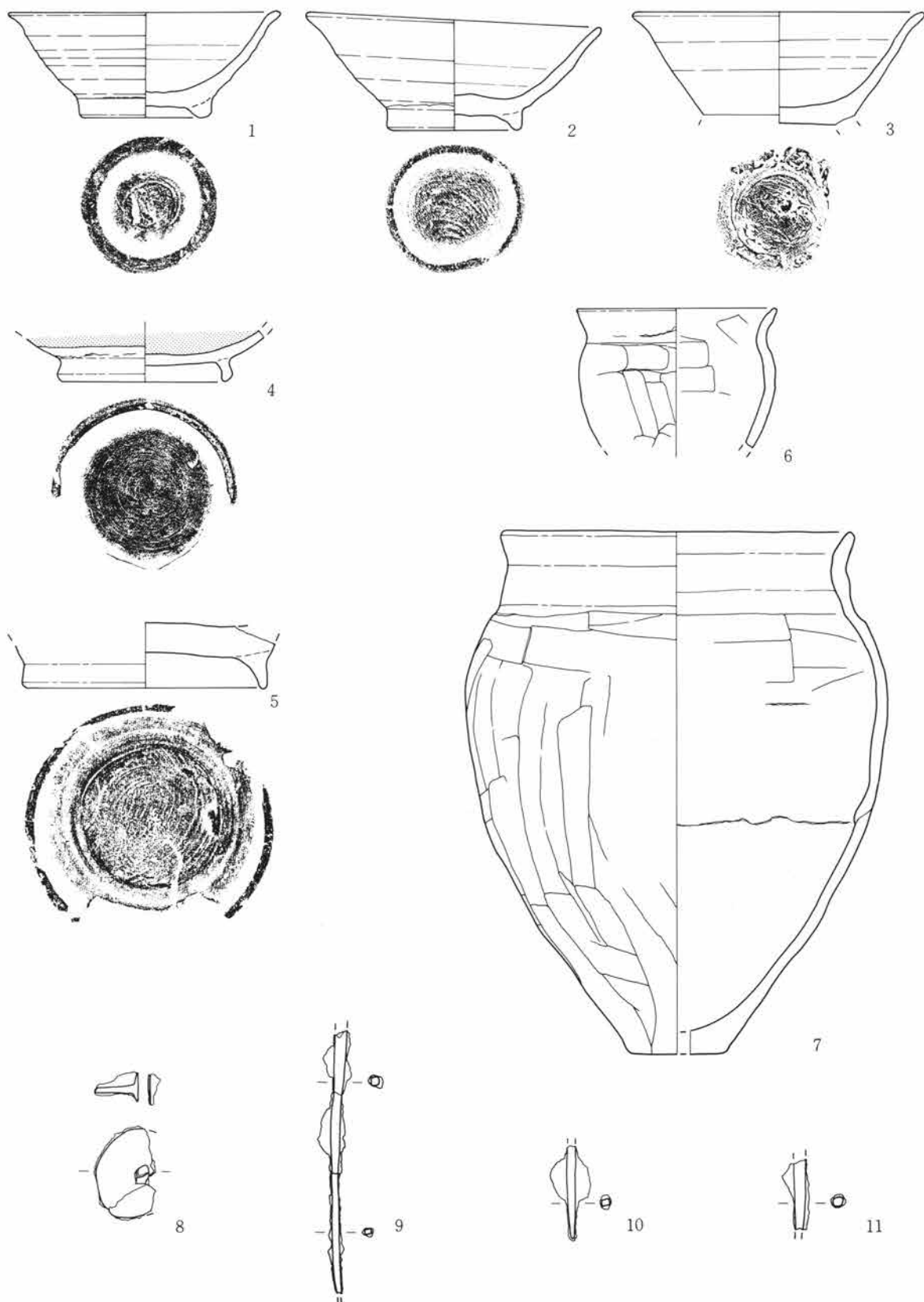
当住居跡のカマドは、石と瓦を組み合わせて構築されている。つまり、左袖は、扁平な河原石と、截石を立て、右袖は、河原石3個を立て、その上に礫をのせて構築されている。これらの袖構築材は、カマドの東壁掘り込み部より、かなりカマド内側に突出して検出されている。このことは、カマドの焚口がかなり狭かったことを予想させる。また、右袖奥のカマド南壁部には瓦が立てられ、これが壁体となったものと考えられる。燃烧部と煙道とは、他例にみられるように明確な段を有しておらず、緩傾斜しているに過ぎない。

掘り方は、東壁及び西壁に接して不整形に掘り込まれている。どちらもきわめて浅く、約10cm程VII層中に掘り込まれている。掘り方内からの遺物出土は、全くみられなかった。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

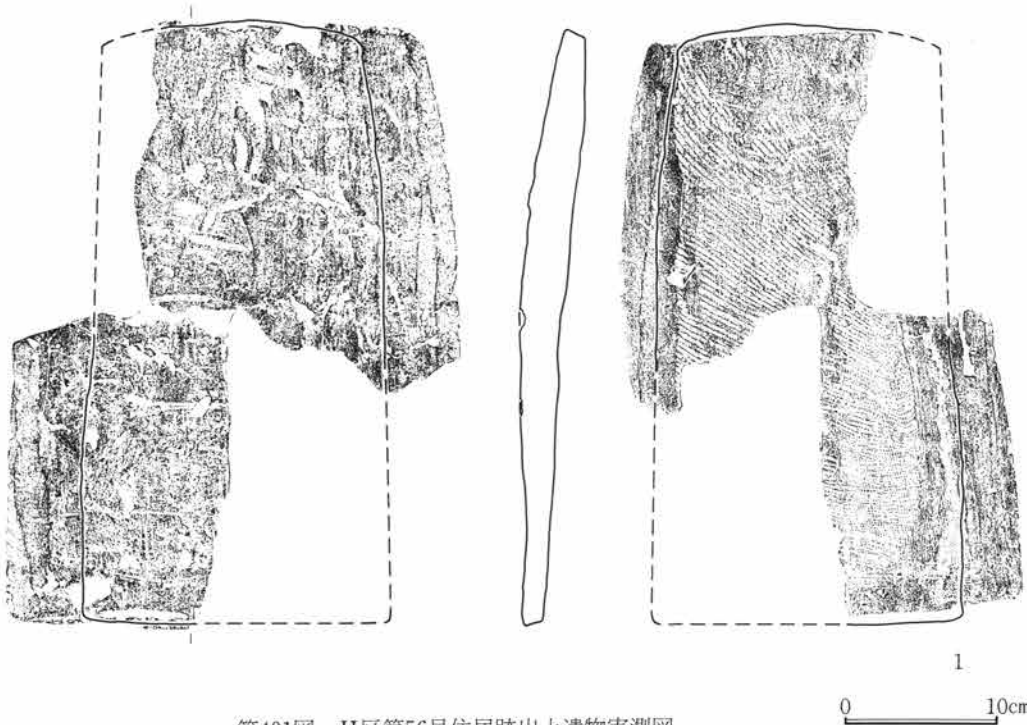


第399図 H区第56号住居跡・出土遺物実測図



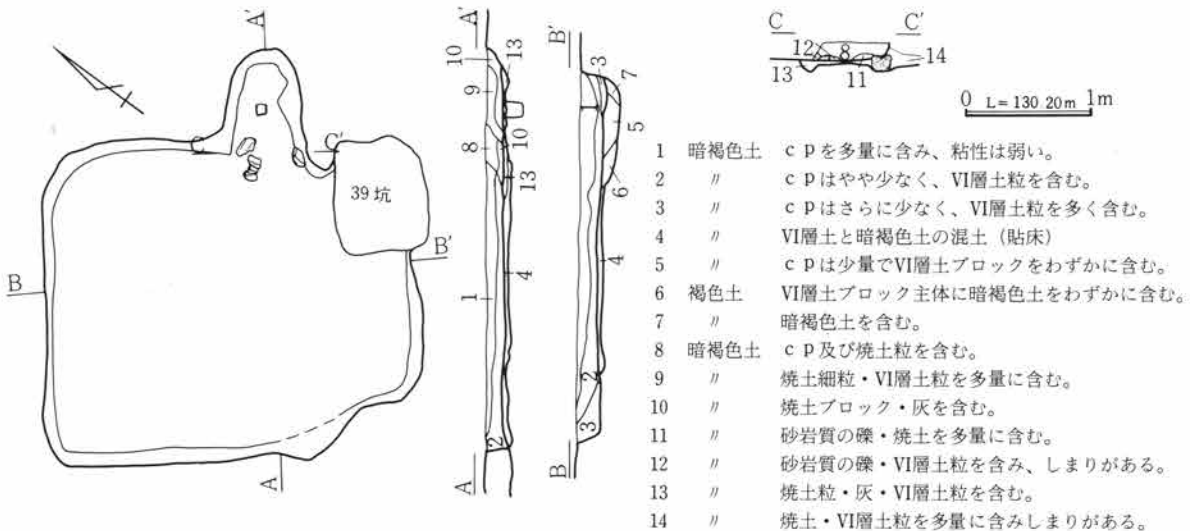
第400図 H区第56号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

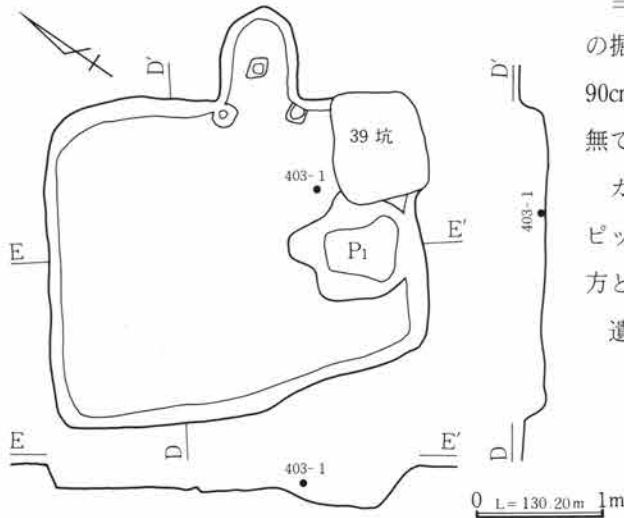


第401図 H区第56号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第58号住居跡	位置	22～24-H-54～56グリッド内	分類	C-10	時期	IV?
平面形態	隅丸長方形	規模	2.50m×3.00m	主軸方位	東-39度-北	残存深度	約15cm程
備考	壁はVI層中で比較的残存状態は良好である。壁溝・柱穴は未検出である。貯蔵穴は南東コーナー部にあったものと思われるが、第39号土坑と重複しているため、検出できなかった。						
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り・舌状			主軸方位	東-38度-北	
規模	全長101cm 屋外長71cm 屋内長30cm 袖間幅90cm 燃烧部幅56cm 煙道幅—cm						
備考	焚口は床面と同レベルで灰面等は未検出である。袖は右袖のみ残存し、先端に礫を据えて構築している。燃烧部に焼土等は未検出であるが、掘り方段階で中央部に方形ピットを検出した。						



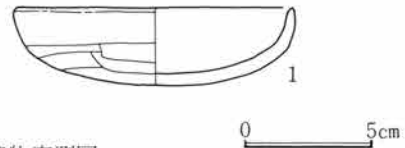
第402図 H区第58号住居跡実測図



当住居跡の掘り方は、南壁に接して不整円形プランの掘り込みがされているだけである。この土坑は径約90cm、深度約20cmであり、覆土中からの遺物出土は皆無である。

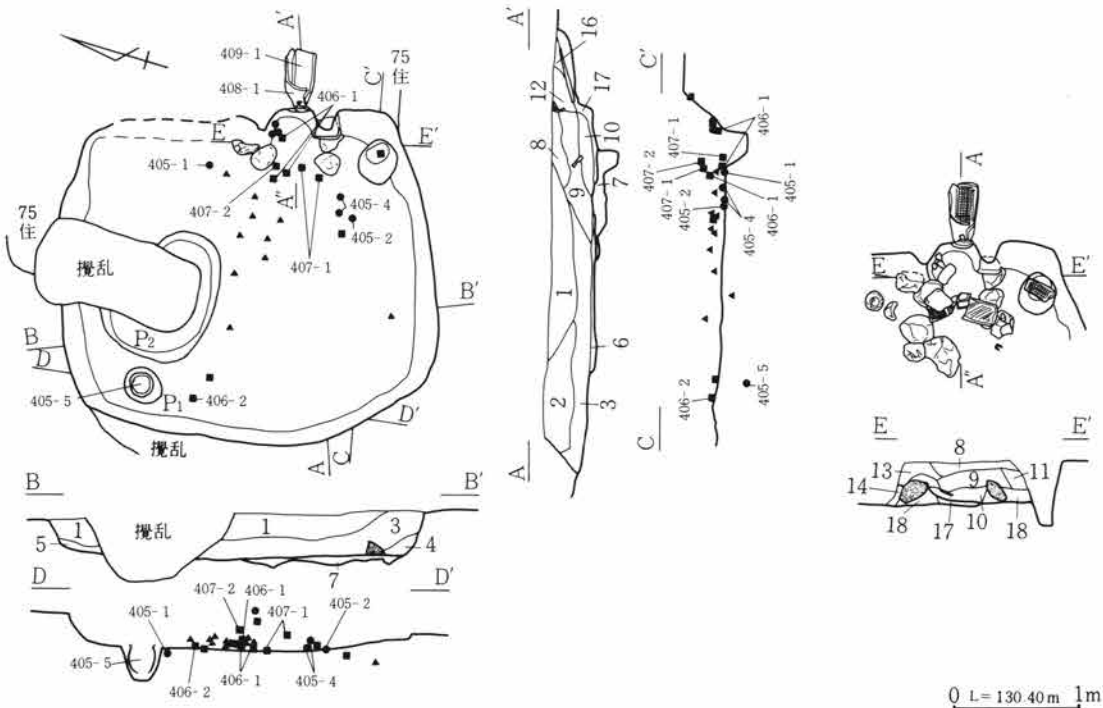
カマド掘り方は、先述のごとく燃烧部中央に方形ピットを検出した他、両袖の位置に、袖構築材の据え方と思われるピットを検出した。

遺物はカマド周辺からわずかに出土した。



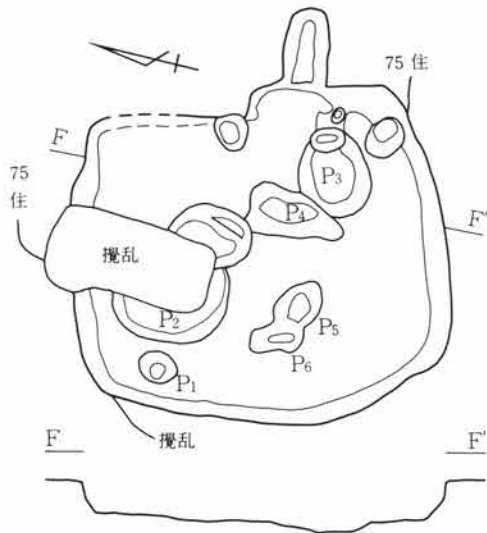
第403図 H区第58号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第59号住居跡		位置	22・23-H-49~51グリッド内		分類	C-10	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	2.40m×3.00m	主軸方位	東-15度-北	残存深度	約30cm程		
備考	壁は北壁の一部を除き検出した。床面は、VII層中に掘り込まれていた。壁溝・柱穴は掘り方段階でも該当するものは未検出。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、径約35cm、深度約15cmである。								
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り・凸字形			主軸方位	東-12度-北			
規模	全長 98cm 屋外長 47cm 屋内長 51cm 袖間幅 89cm 燃烧部幅 42cm 煙道幅 23cm								
備考	焚口に灰等は未検出で、前面にカマド構築材と思われる礫や瓦が多数検出した。袖は両袖共先端に礫を据えて構築。燃烧部に支脚は未検出。煙道は2枚の瓦で筒状に構築。								



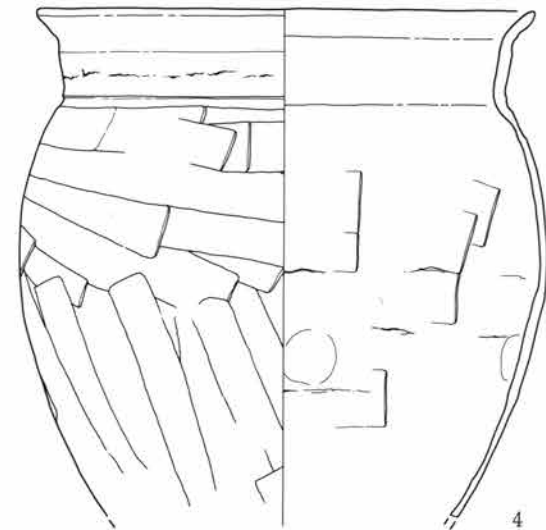
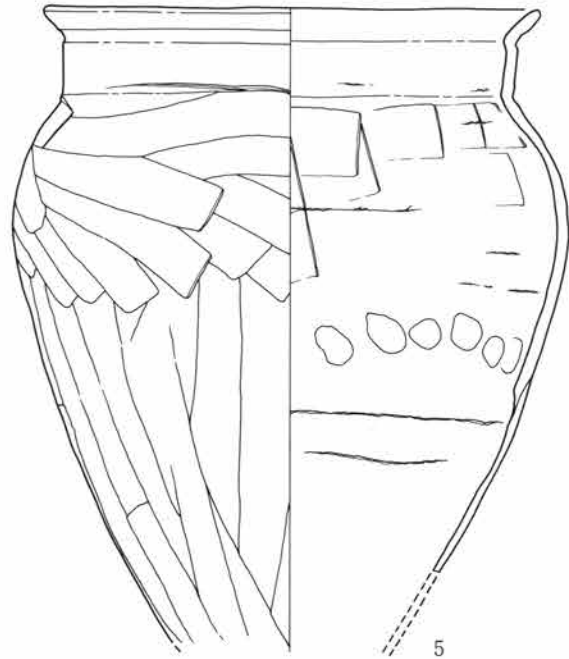
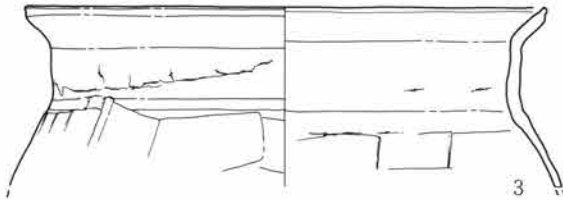
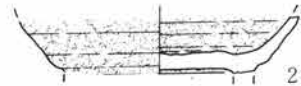
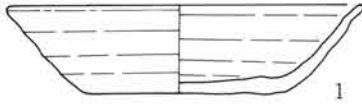
第404図 H区第59号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



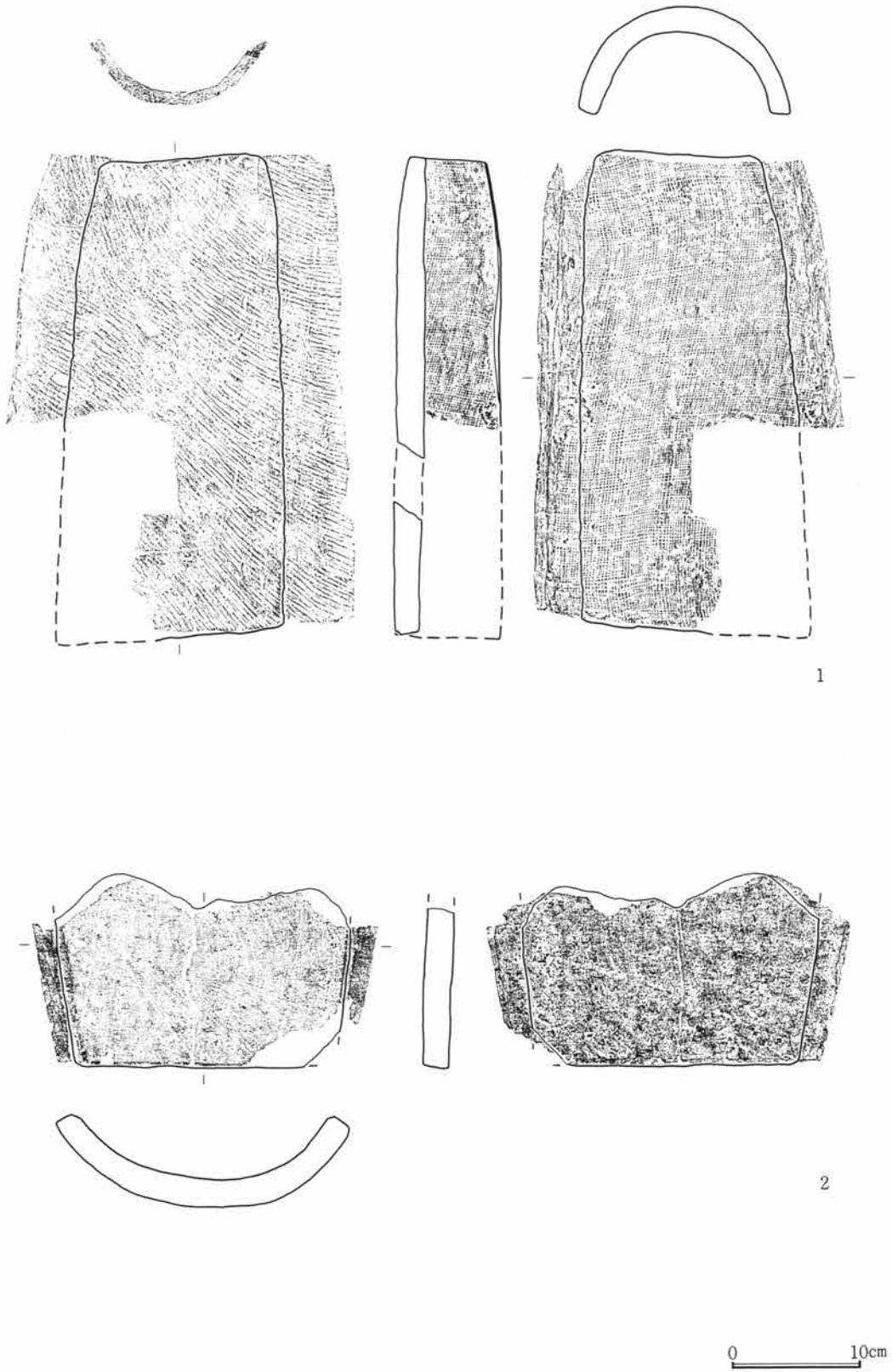
- 1 暗褐色土 c PとVI層土粒をわずかに含む。
- 2 // c PとVI層土粒を含む。
- 3 // c PはわずかでVI層土粒を多量に含む。
- 4 // VI層土粒を多量に含む、しまりが無い。
- 5 // VI層土ブロック・炭化物を多量に含む。
- 6 // 焼土粒・VI層土粒をわずかに含む。
- 7 褐色土 VI層土ブロックを主体に褐色土を混入。
- 8 暗褐色土 c Pをわずかに含む、VI層土粒・焼土粒は含まない。
- 9 // 焼土・VI層土粒をわずかに含む。
- 10 // c Pは少なく、VI層土粒・自然礫を含む。
- 11 // c Pは少なく、VI層土粒を含む。
- 12 // VI層土粒は少なく、焼土粒を含む。
- 13 // c P・焼土・VI層土粒を含む。
- 14 // c P・VI層土粒を含む。
- 15 // 灰・焼土粒・VI層土ブロックを含む袖。
- 16 // 焼土・炭化物・c P共にほとんど含まない。
- 17 // 焼土・灰を含む。
- 18 // VI層土ブロックを多量に含む。

0 L=130.40m 1m



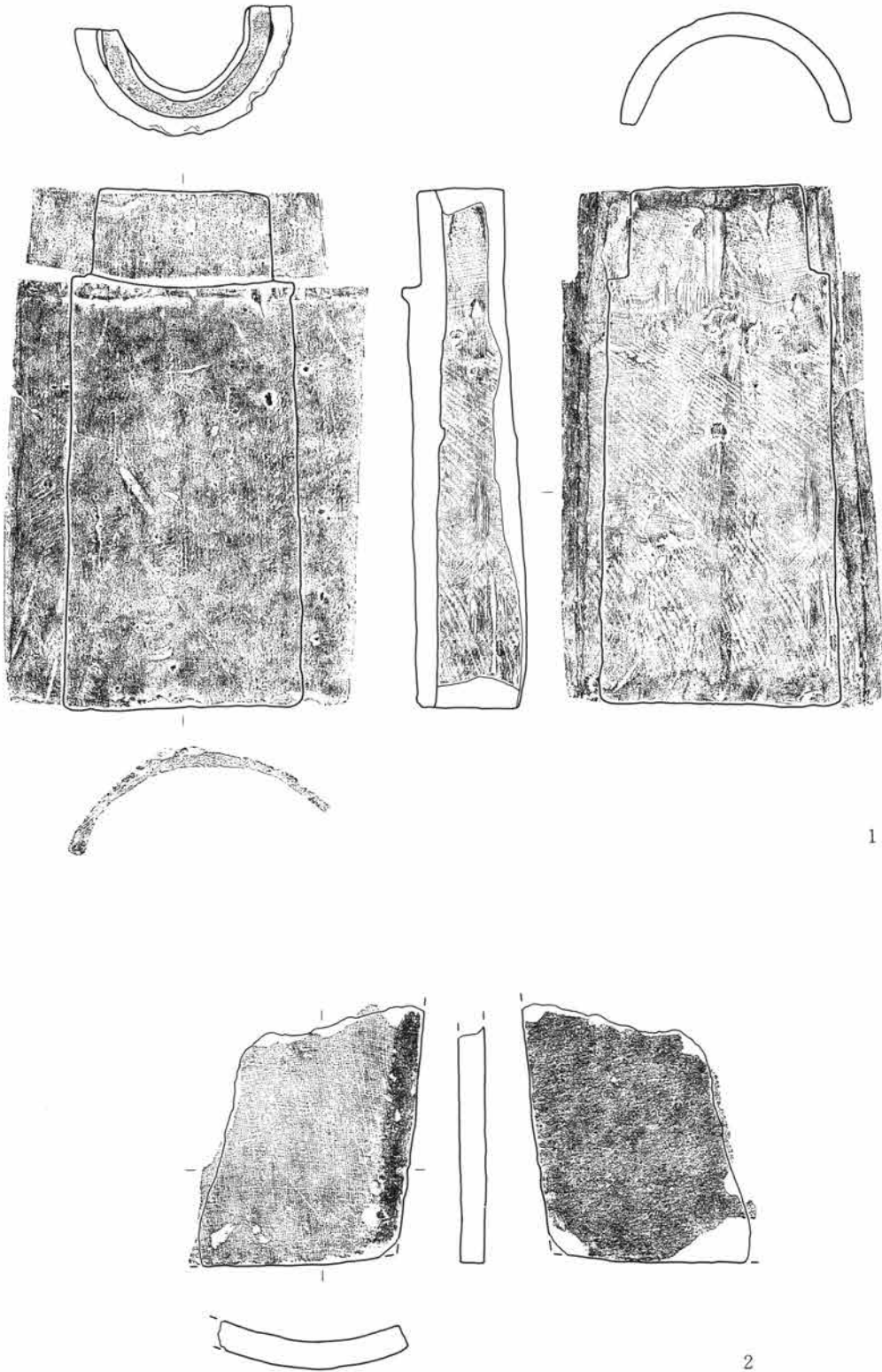
0 5cm

第405図 H区第59号住居跡・出土遺物実測図

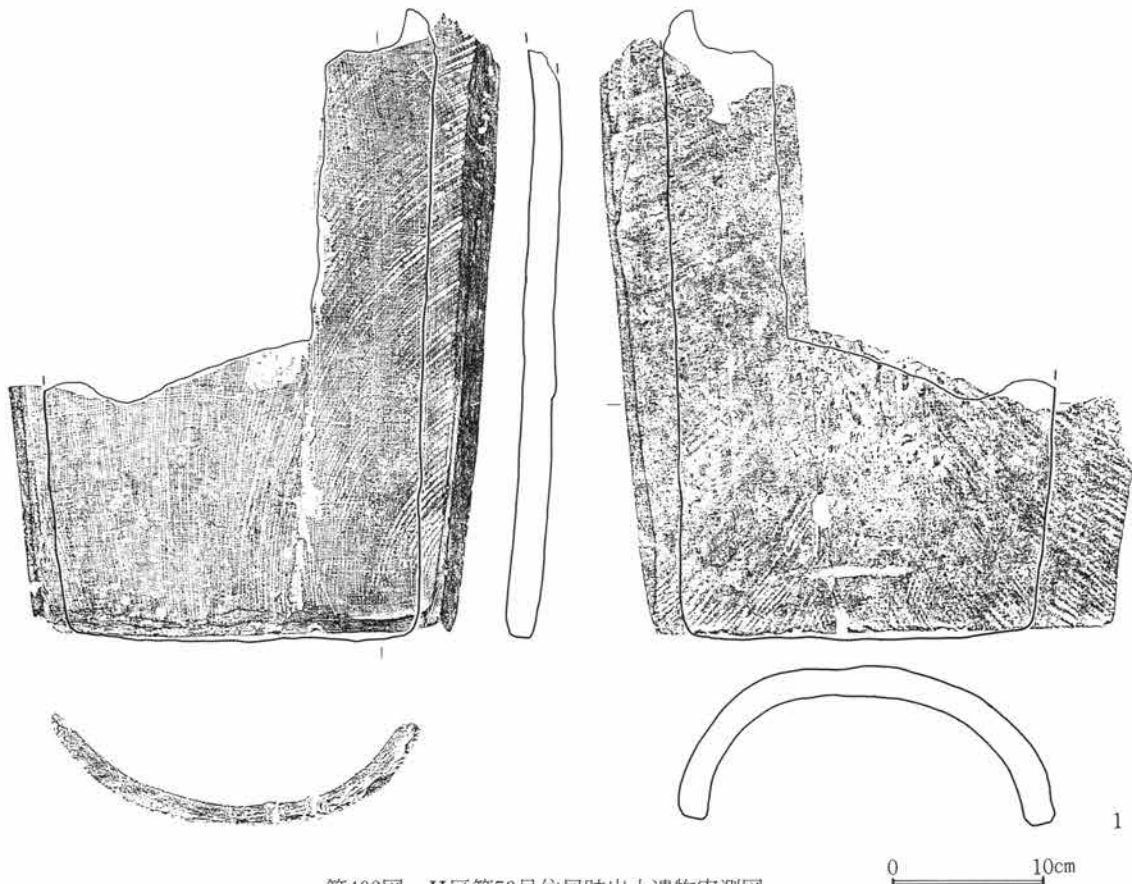


第406図 H区第59号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第407図 H区第59号住居跡出土遺物実測図



第408図 H区第59号住居跡出土遺物実測図

当住居跡のカマドは、残存状態がきわめて良好で、全体構造がかなり良く把握できる例である。袖は礫と瓦を組合わせ、暗褐色土とVI層土粒の混土で構築しており、直線的に約50cm程屋内に張り出していたと考えられる。また、カマド前面から出土した多数の礫や瓦も、天井部等の構築材であった可能性が高い。

煙道は、当住居跡を最も特徴づけている部分で、2枚の瓦を相向いに組合わせ、約14°の角度を有して据えられている。この先に同様の施設があったかどうかは不明である。

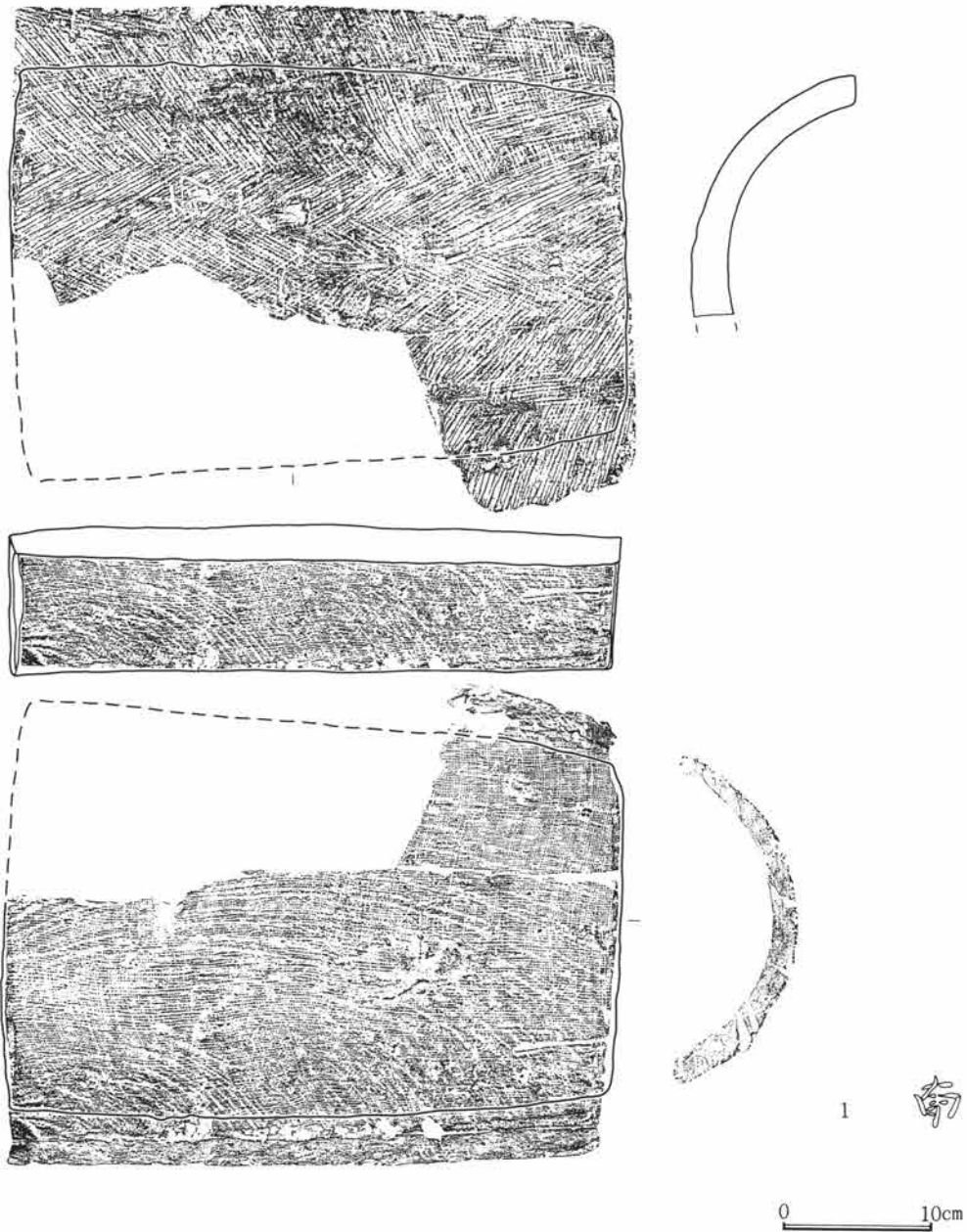
カマド掘り方は、東壁から「コ」字状に燃烧部を掘り込み、さらに段を有して煙道部の瓦据え方が掘り込まれ、全体として凸字形の掘り方となっている。袖位置には、礫の据え方を左右1個ずつ検出した。焚口・燃烧部底面に掘り方はみられず、住居床面と同レベルである。

住居掘り方は、中央部分に4個のピットを検出した他、全体にはほとんど及んでいない。しかし、VII層土中の掘り込みには、大小の凹凸があり、この窪みには黒褐色土が充填していた。

その他、当住居跡の北西コーナー部やや屋内寄りに、第405図5に示した土師器の甕が、口縁部を水平にし、床面レベルに合わせ正位埋設されていた。この他には、当区第18号住居跡の貯蔵穴と考えられる位置に須恵器の甕の口縁部を逆位に据えていた例があるだけである。しかし、当住居跡のあり方は、貯蔵穴と対角線の位置に埋設されていたもので、底部は意識的に欠かれたものと考えられる。こうした埋設土器のあり方は、ちょうど縄文時代にみられる屋内埋甕のあり方に酷似している。検出は床面精査時であり、口縁部は、床面から若干出た状態であったと思われる。埋設土器充填土は、VII層土粒混じりの黒褐色土である。この埋設土器に蓋等の施設があったものかどうか、内部の土層観察ができなかったため不明である。

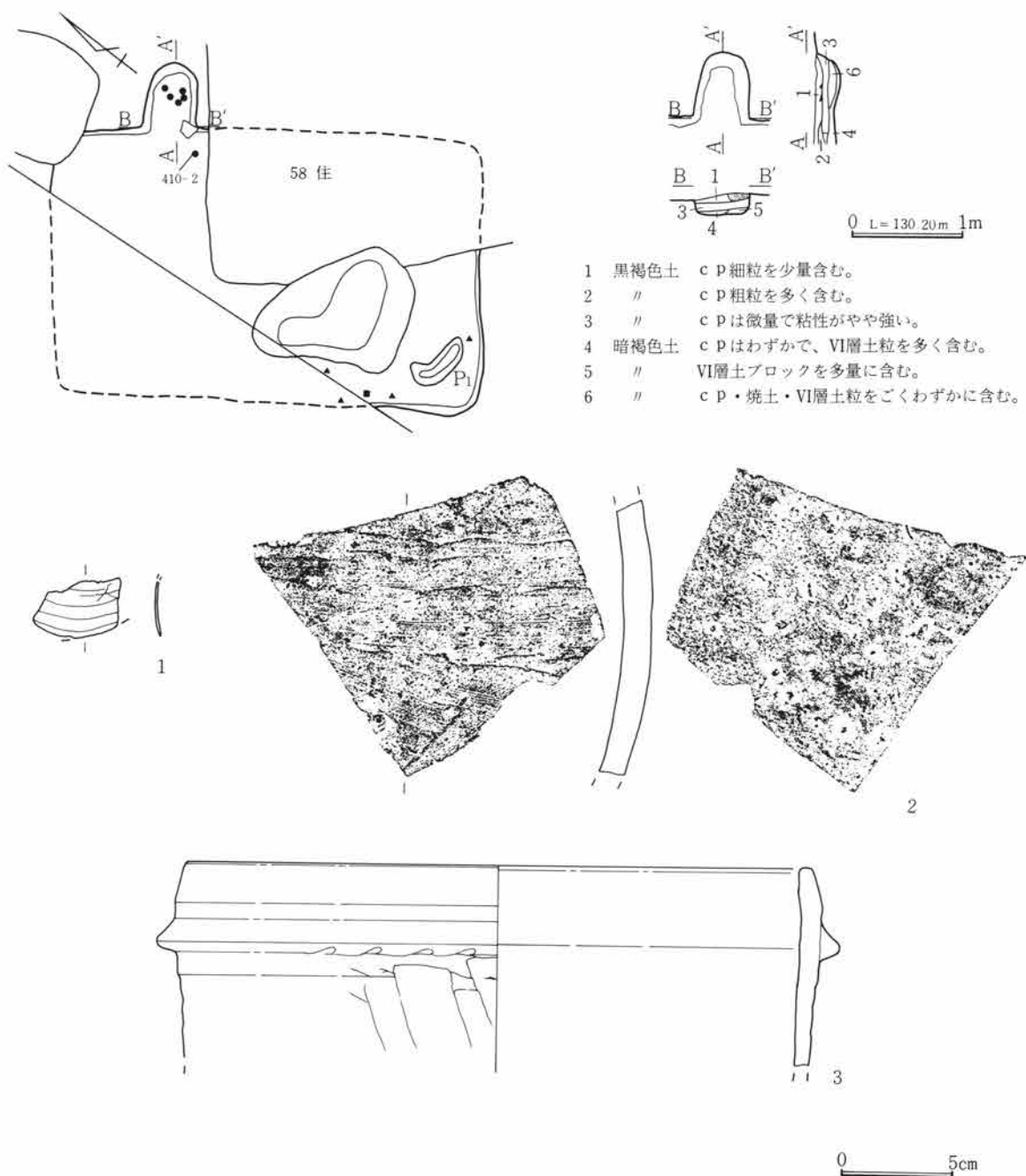
埋設土器据え方は円形で、径約30cm、深度約30cmであり、床面構築時に掘り込まれたと判断した。

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第409図 H区第59号住居跡出土遺物実測図

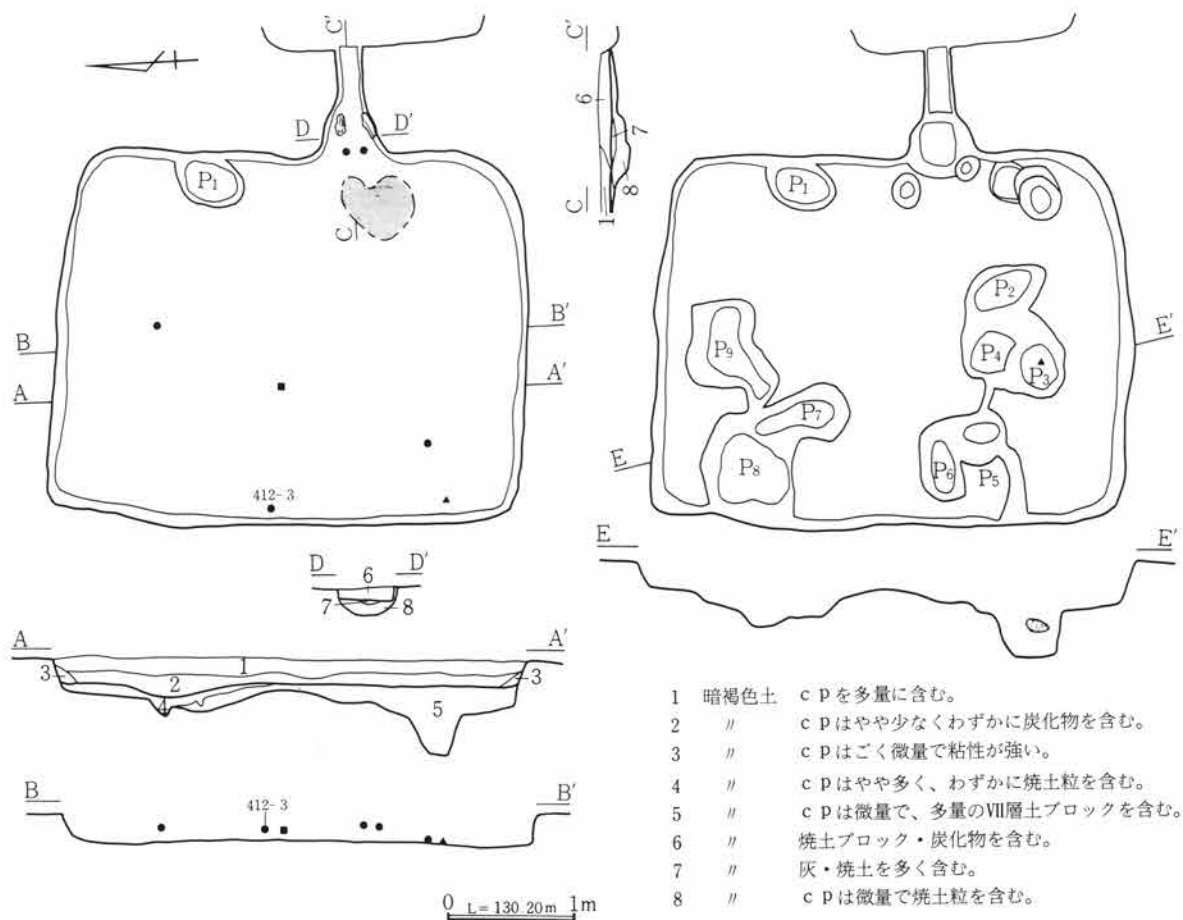
遺構名称	H区第60号住居跡	位置	22～24-H-55・56グリッド内	分類	C-13	時期	X?
平面形態	隅丸長方形	規模	2.40m×3.80m	主軸方位	東-38度-北	残存深度	約6cm程
備考	南東部で第58号住居跡と重複し、西側は試掘時のトレンチで削平されているため、残存はきわめて不良。残存部分に壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出である。掘り方は南西コーナー部に検出した。						
カマド	位置・形状	東壁地寄りか?・舌状			主軸方位	東-35度-北	
規模	全長 63cm 屋外長 55cm 屋内長 8cm 袖間幅 - cm 燃烧部幅 47cm 煙道幅 - cm						
備考	焚口は床面と同レベルで、燃烧部は若干窪んでいる。右袖部からは礫が検出されたが、左袖部には痕跡もみられない。						



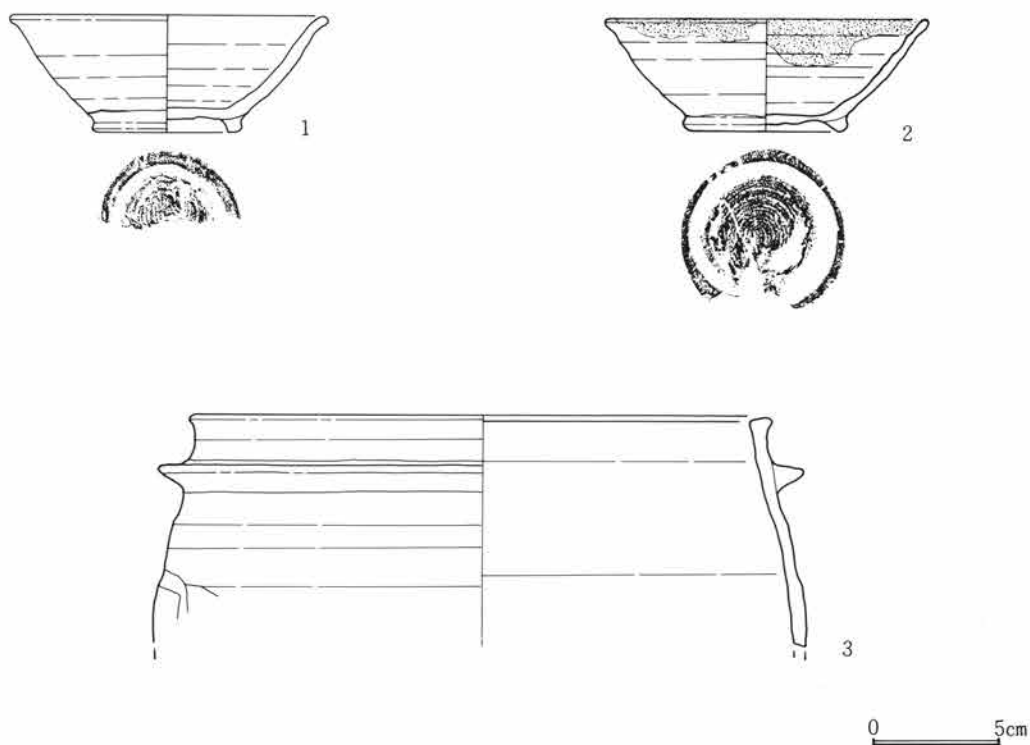
第410図 H区第60号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第70号住居跡	位置	1～3-H-62～64グリッド内	分類	C-10	時期	IX
平面形態	隅丸長方形	規模	2.90m×3.70m	主軸方位	東-4度-南	残存深度	約20cm程
備考	当住居跡は南北農道下にかかり2次の調査で検出した。壁は全周検出され、壁溝・柱穴は未検出である。貯蔵穴は南東コーナー部には未検出で、床面で検出したP ₁ が該当するか否かは不明である。						
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り・凸字形			主軸方位	東-2度-南	
規模	全長 93cm 屋外長 80cm 屋内長 13cm 袖間幅 1cm 燃烧部幅 42cm 煙道幅 22cm						
備考	煙道先端部は土坑との重複で未検出である。焚口南寄りに灰面を検出した。袖は検出されなかったが、燃烧部南壁には礫が据えられていた。燃烧部と煙道部との間には、わずかな段を有している。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



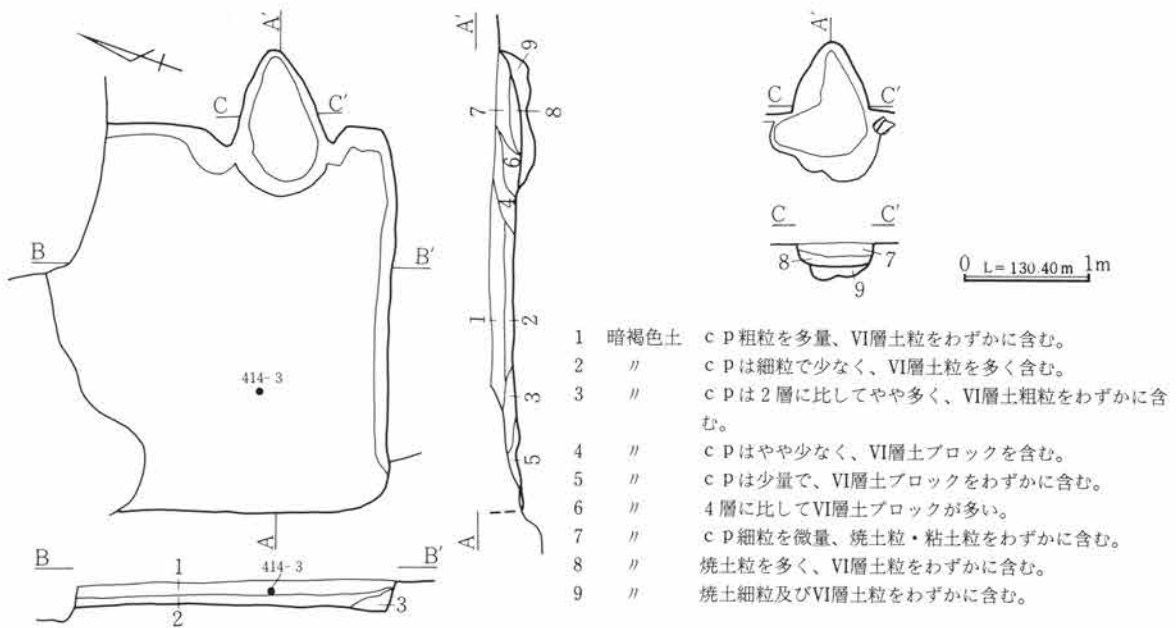
第411図 H区第70号住居跡実測図



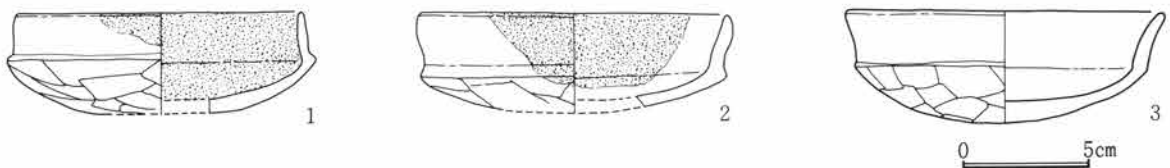
第412図 H区第70号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	H区第74号住居跡	位置	20~22-H-49~51グリッド内	分類	—	時期	II
平面形態	隅丸方形?	規模	—m×—m	主軸方位	東—20度—北	残存深度	約20cm程
備考	西壁と北壁は未検出で、残存部に壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。床面は大半がVI層中であるが、北側の一部がVII層面に達している。掘り方は全面みられない。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在?・三角形状			主軸方位	東—24度—北	
規模	全長 113cm 屋外長 58cm 屋内長 55cm 袖間幅 125cm 燃烧部幅 60cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は半円状の浅い掘り込みで、燃烧部共灰面等は未検出である。袖は暗褐色土で構築されていたものと思われ、掘り方段階で、右袖部に瓦を2枚検出した。構築材であったものと思われる。						



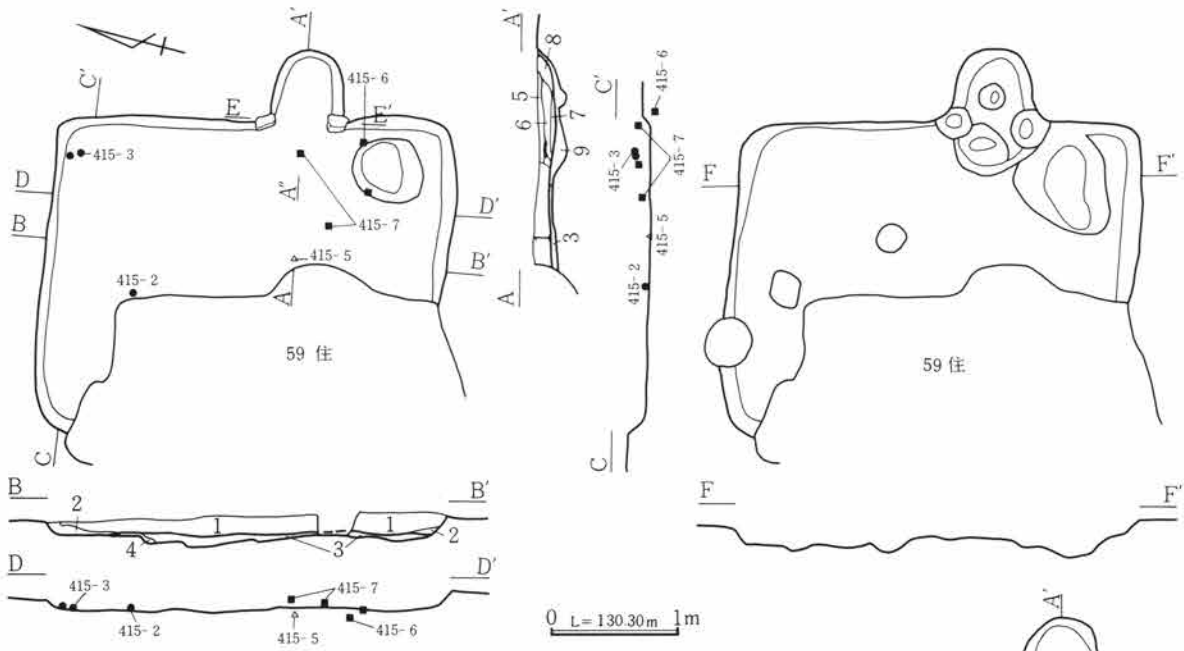
第413図 H区第74号住居跡実測図



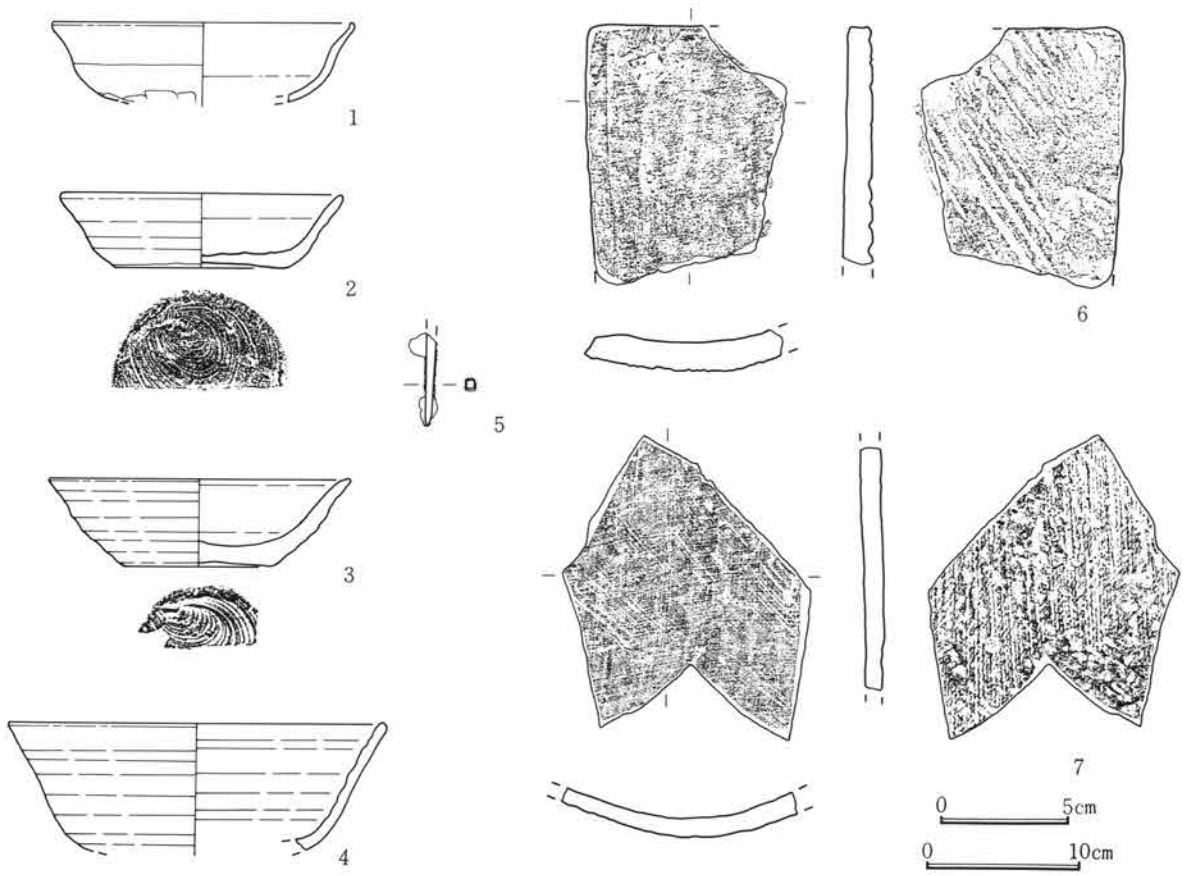
第414図 H区第74号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第75号住居跡	位置	22~24-H-48~50グリッド内	分類	C-10	時期	—
平面形態	隅丸長方形	規模	2.50m×3.20m	主軸方位	東—14度—北	残存深度	約10cm程
備考	西壁は第59号住居跡との重複のため未検出である。残存部に壁溝・柱穴は検出されず、貯蔵穴は南東コーナー部に検出した。平面形は円形で、径約50cm、深度約13cmで、上面から瓦が出土した。						
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り・舌状			主軸方位	東—9度—北	
規模	全長 63cm 屋外長 55cm 屋内長 8cm 袖間幅 73cm 燃烧部幅 56cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は床面と同レベルで灰面は未検出。袖は両袖共角柱状の截石が据えられた状態で出土した。燃烧部にも灰面等は検出されず、掘り方段階で、中央北寄りに支脚据え方ピットを検出した。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



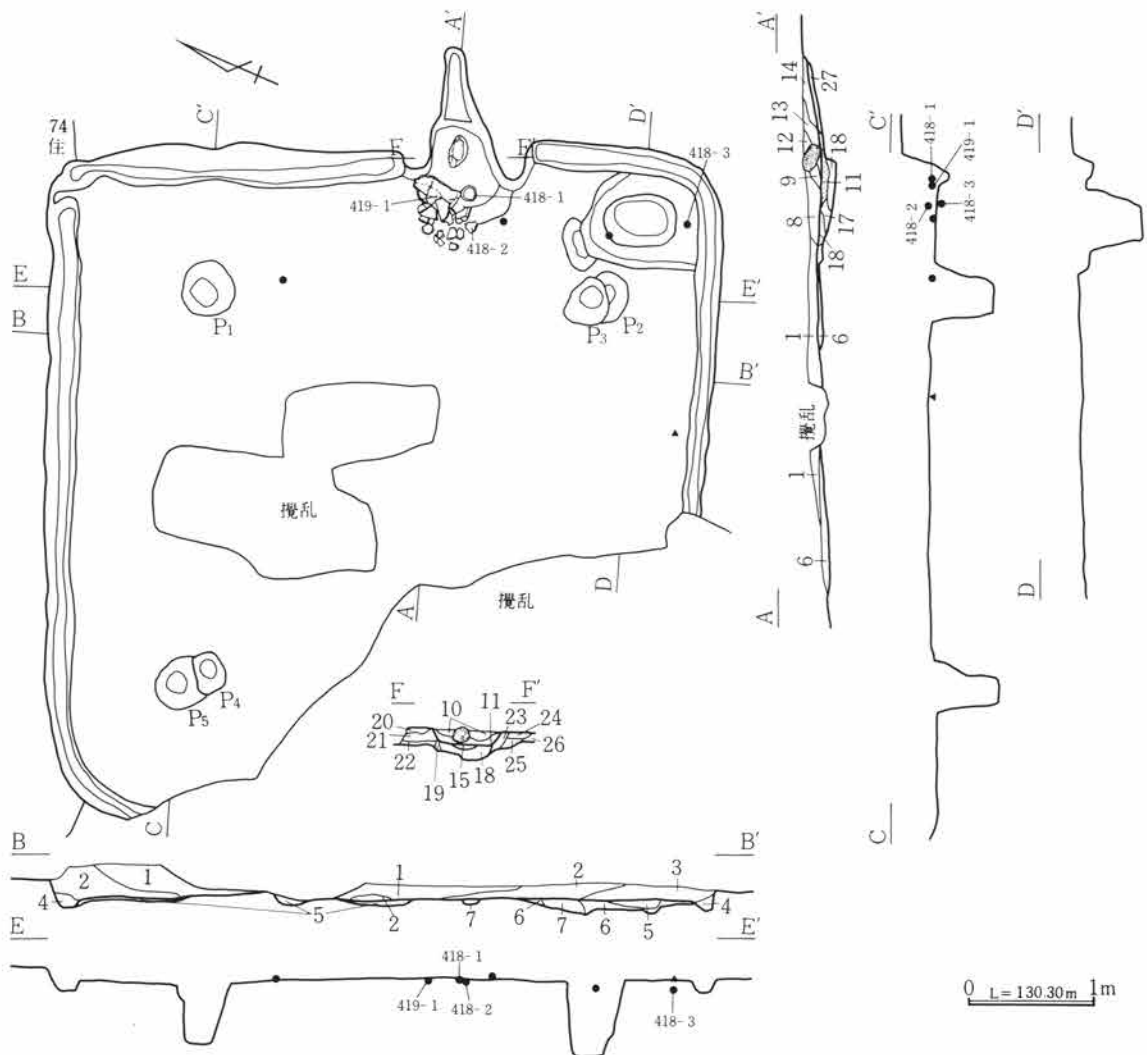
- | | | | |
|---|-----------------------------|----|---------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 c P 細粒少量、VI層土粒を多く含む。 | 7 | // 灰を多く含み焼土粒をわずかに含む。 |
| 2 | // VI層土粗粒を多く含む。 | 8 | // c P を含まず、焼土・VI層土ブロックをわずかに含む。 |
| 3 | // 焼土粒・炭化物をわずかに含む。 | 9 | // VI層土粒・ブロックを多量、焼土粒と灰をわずかに含む。 |
| 4 | // VI層土粒・ブロックを多く含む。 | 10 | // VI層土ブロックと黒褐色土の混土。 |
| 5 | // c P はほとんど含まず、焼土粒をわずかに含む。 | | |
| 6 | // 焼土多量、VI層土粒を含む。 | | |



第415図 H区第75号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

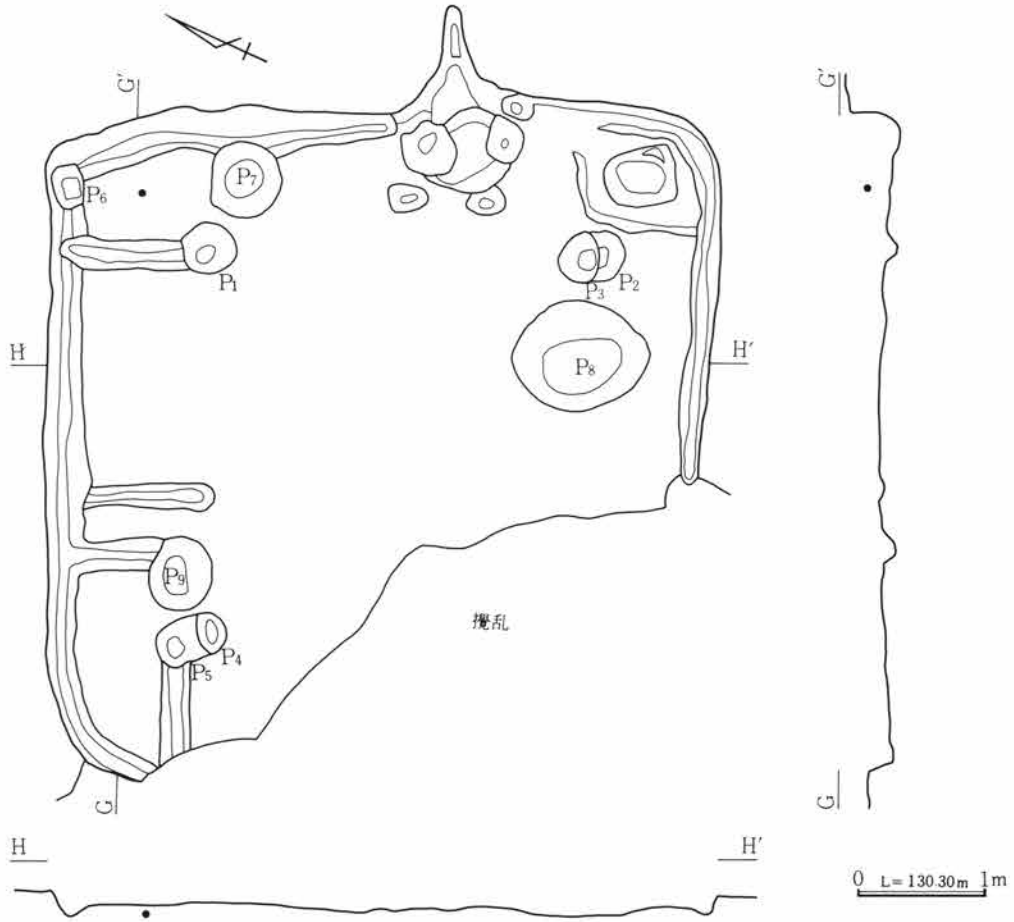
遺構名称	H区第79号住居跡	位置	18~21-H-49~52グリッド内	分類	A-6	時期	II
平面形態	隅丸方形	規模	5.20m×5.30m	主軸方位	東-21度-北	残存深度	約5cm程
備考	壁は西壁を除き検出、床面は貼床が施され、柱穴は3本を検出した。壁溝は残存部は全周検出し幅約15~26cm、深度約5cm。貯蔵穴は南東コーナー部に検出し、楕円形で長軸約57cm、深度約40cm。						
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り・凸字形			主軸方位	東-24度-北	
規模	全長 135cm 屋外長 72cm 屋内長 63cm 袖間幅 110cm 燃烧部幅 53cm 煙道幅 24cm						
備考	焚口は半円形の浅い掘り込みで、土師器の甕が潰れて出土。袖は両袖共構築材は残存せず、掘り方段階で据え方ピットを検出。燃烧部中央わずかに北寄りに支脚と思われる礫を検出。						



- | | | | | | |
|---|------|-------------------------|----|------|------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c D 細粒とVI層土細粒をわずかに含む。 | 10 | // | 焼土粒・ブロックを多量に含む。 |
| 2 | // | c P は少量でVI層土粗粒を多く含む。 | 11 | // | 粘質土で焼土粒を含む。 |
| 3 | // | c P 粗粒を多量、VI層土粒をわずかに含む。 | 12 | // | c P を多量に含む。 |
| 4 | // | c P は微量で、VI層土細粒を多量に含む。 | 13 | // | 焼土粒を含む。 |
| 5 | // | VI層土ブロックを含む。 | 14 | // | 焼土・VI層土粒をわずかに含む。 |
| 6 | 黄褐色土 | VI層土に黒褐色土・暗褐色土をわずかに含む。 | 15 | | 赤褐色焼土層 |
| 7 | 暗褐色土 | VI層土粒を含む。 | 16 | 暗褐色土 | 焼土・灰・VI層土粒を含む。 |
| 8 | // | 焼土粒・炭化物・VI層土粒をわずかに含む。 | 17 | // | わずかに焼土・VI層土粒を含む。 |
| 9 | // | 焼土・VI層土粒をわずかに含む。 | 18 | // | VI層土粒を多量に含む。 |

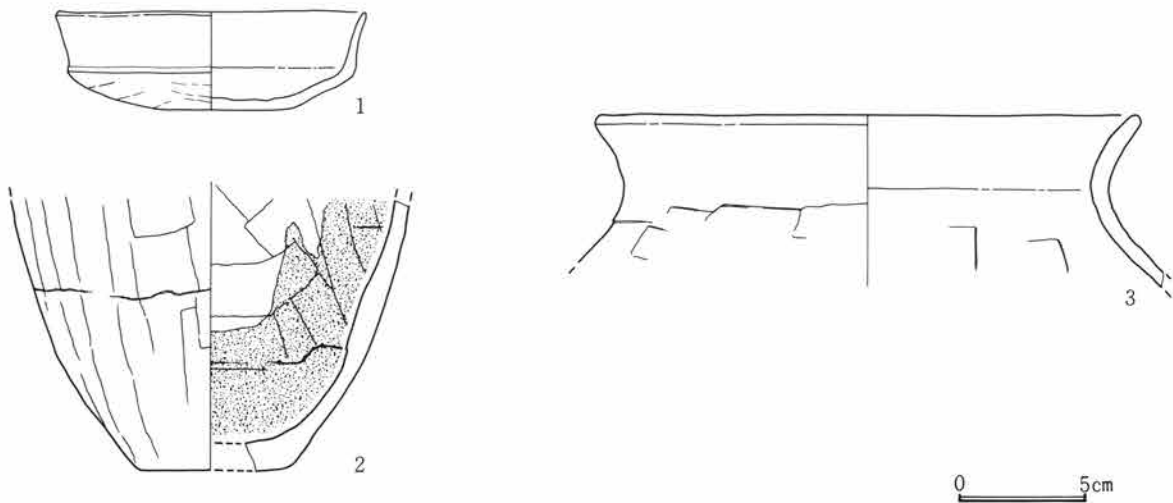
第416図 H区第79号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

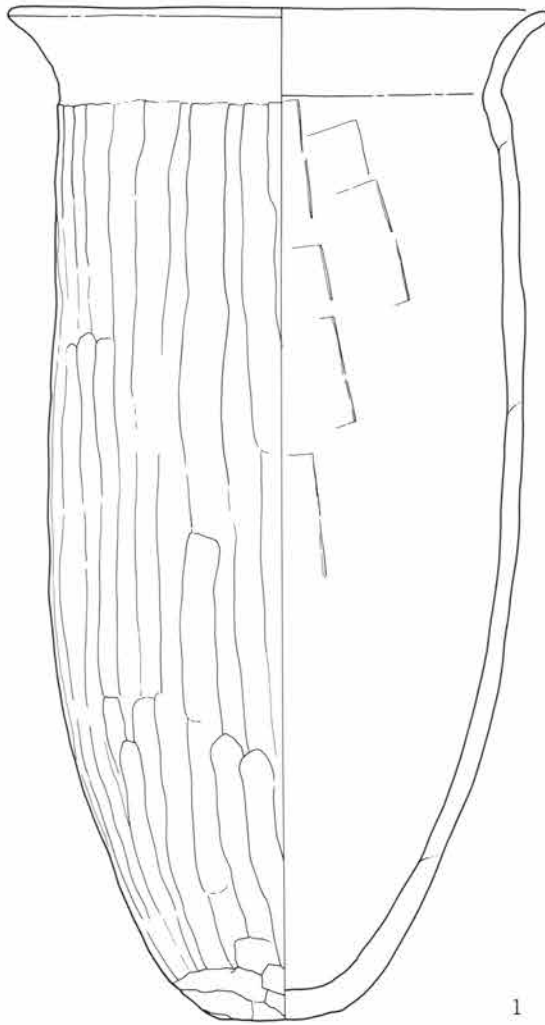


- | | | | |
|---------|------------------------|---------|---------------------|
| 19 暗褐色土 | 焼土・VI層土粒をほとんど含まない。 | 24 暗褐色土 | c Pをわずかに含み、粘性がある。 |
| 20 // | 焼土を含まず、粘性が強い。 | 25 // | c Pを多量に含む。 |
| 21 // | 焼土・灰を含む粘質土。 | 26 // | VI層土粒を含む。 |
| 22 // | VI層土粒をごくわずかに含む。 | 27 // | VI層土ブロック・焼土ブロックを含む。 |
| 23 // | 焼土・VI層土粒をわずかに含み、粘性が強い。 | | |

第417図 H区第79号住居跡実測図



第418図 H区第79号住居跡出土遺物実測図



0 5cm

第419図 H区第79号住居跡出土遺物実測図

ことができる。また、黒褐色土を取り去ることによって、新たに数個のピットと間仕切り状の溝を検出した。この溝は、北壁からP₁へ、西壁からP₄へ連結しているが、P₂にはみられない。その他、掘り方段階で検出したP₆にも北壁から溝が連結しており、柱穴として考えなければならないのかもしれない。

遺物は、カマド周囲及び貯蔵穴周囲からの出土が顕著であるが、量的には少ない。

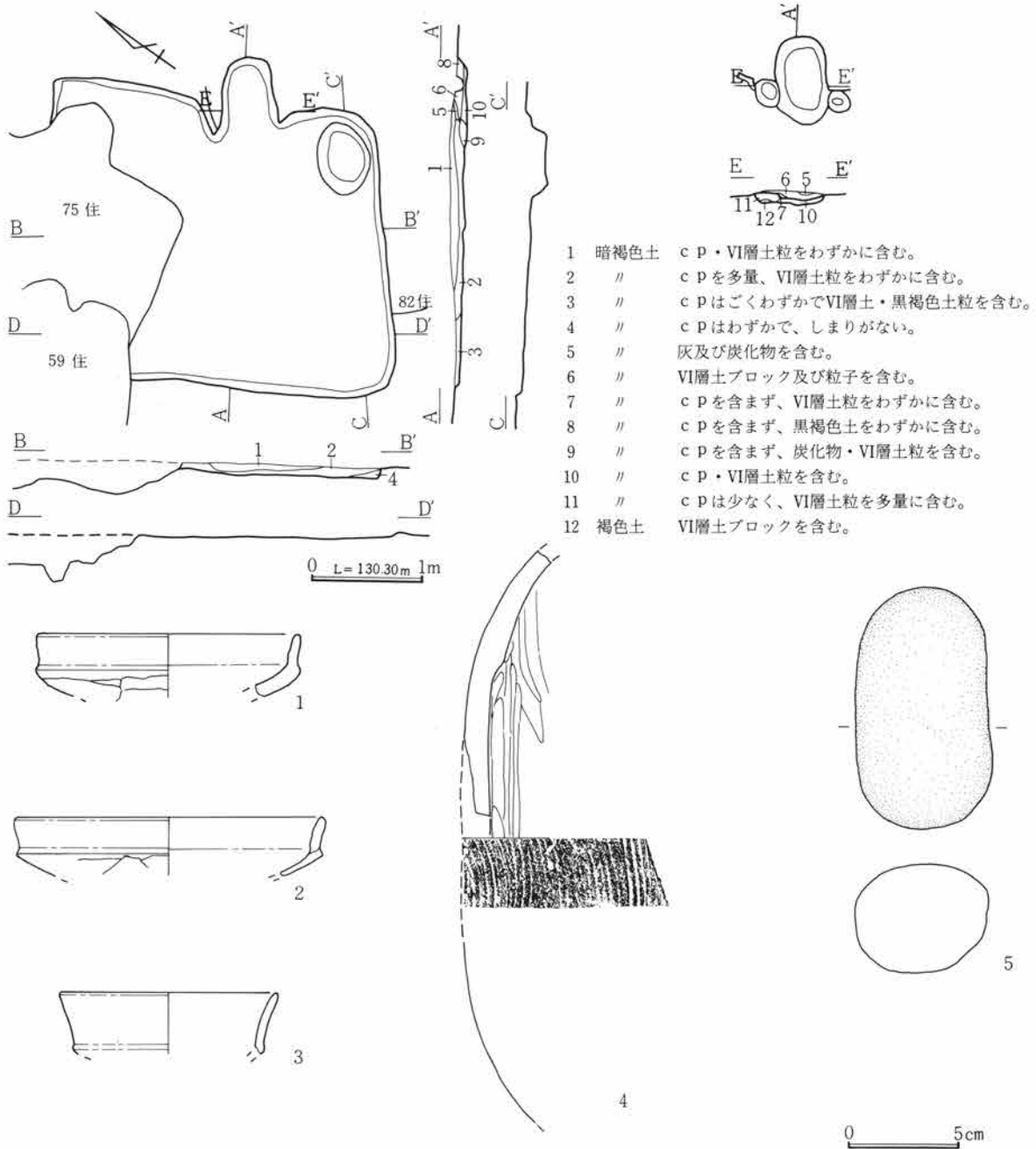
柱穴は、攪乱により未検出の1カ所を除き3カ所で検出した。このうちP₂・P₄は2本の柱穴が重複したような状態を呈している。しかしこれを即建て替え例とするか、柱の抜き取り痕とするか、判断ができない。いづれにしてもP₁との関係から最終的に柱穴として使用されたと考えられるのはP₁・P₂・P₄である。P₁は円形で径約45cm、深度約50cm、P₂は不整形円で径約40cm、深度約60cm、P₄は円形で径約40cm、深度約50cmと3本共平面形・規模いづれもそろっている。

貯蔵穴は、南東コーナー部に検出されたわけであるが、形態的には長方形を意識しているものと思われ、長軸方向は東壁に平行である。また、貯蔵穴周囲幅約10cm程の範囲が、深度約10cm程床面から掘り下げられている。この掘り下げられた範囲も貯蔵穴と同方向に長軸を有する長方形を呈している。これは、同区第26号住居跡で検出した、貯蔵穴周囲の周堤状の施設と同意識のものに施されたものであるのは明らかで、貯蔵穴の機能を考える上で、重要な指標となるものと思われる。

住居掘り方は、全面にみられる。つまり、いったんVII層中まで掘り込み、この段階でできた小さな凹凸を埋めるように、黒褐色土主体の土で貼床を施したものと考えられる。壁溝はVII層中に掘り込まれており、掘り方段階でも明瞭に識別すること

遺構名称	H区第80号住居跡	位置	21~23-H-48・49グリッド内	分類	A-3	時期	II
平面形態	隅丸方形	規模	2.60m×2.90m	主軸方位	東-28度-北	残存深度	約5cm程
備考	北壁で第75号住居跡と重複する。残存部で壁溝・柱穴は未検出である。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出され、楕円形で長軸約63cm、深度約12cmである。遺物は全て覆土中の出土である。						
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り・舌状			主軸方位	東-38度-北	
規模	全長 74cm 屋外長 35cm 屋内長 39cm 袖間幅 95cm 燃烧部幅 47cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口、燃烧部共に灰面、焼土等は未検出である。袖は両袖共痕跡だけで、掘り方段階では、構築材の据え方と思われるピットが1対検出されている。カマド内からの遺物出土も皆無である。						

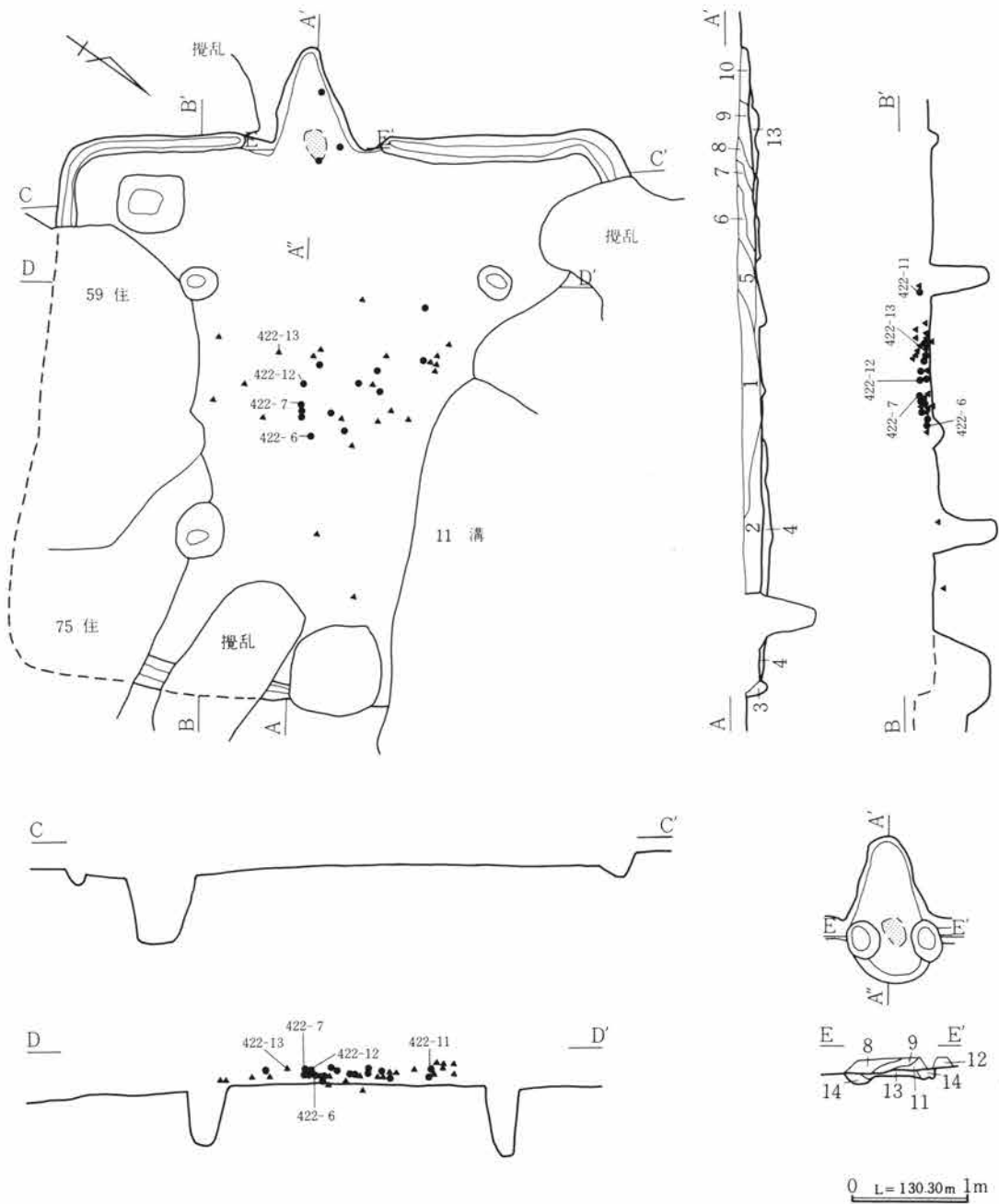
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第420図 H区第80号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第81号住居跡	位置	22～25-H-49～52グリッド内	分類	A-1	時期	II
平面形態	隅丸方形	規模	4.70m×4.90m	主軸方位	西-34度-南	残存深度	約10cm程
備考	北壁と南壁は重複により消失。壁溝は残存部で全周し、幅約15～25cm、深度約5cmである。柱穴は3本検出し、円形で径約35～50cm、深度約45～50cmである。貯蔵穴は南西コーナー部で長方形である。						
カマド	位置・形状	西壁中央やや南寄り・三角形状		主軸方位	西-37度-南		
規模	全長 90cm 屋外長 69cm 屋内長 21cm 袖間幅 115cm 燃烧部幅 63cm 煙道幅 1cm						
備考	焚口・燃煙部共に床面と同じレベルで、燃焼部中央にわずかに灰面を検出し、掘り方段階で同位置から焼土面を検出した。袖位置には掘り方段階で、構築材据え方と考えられるピットを1対検出した。						

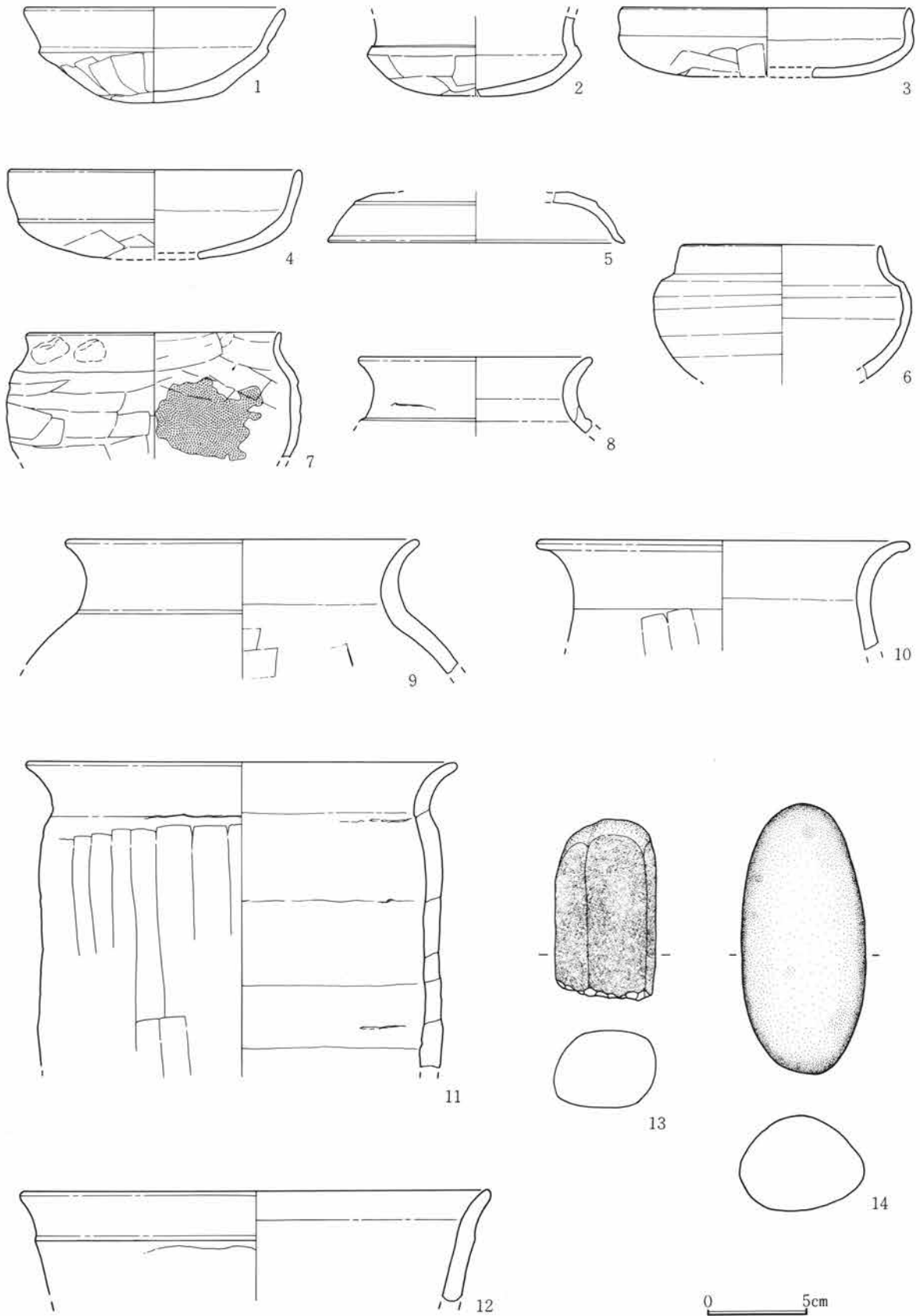
第3章 検出された遺構・遺物



- | | | | | | |
|---|------|-----------------------------------|----|------|----------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c P・焼土・炭化物・VI層土粒をわずかに含む。 | 8 | // | 灰白色粘質土を多量に含み、わずかに焼土粒を含む。 |
| 2 | // | c Pをわずかに含み、VI層土粒・焼土粒・黒褐色土ブロックを含む。 | 9 | 褐色土 | 粘性が強く、焼土ブロック・灰を含む。 |
| 3 | // | VI層土粒・黒褐色土を含む。 | 10 | 暗褐色土 | 灰白色粘質土粒・焼土粒を含み、粘性が強い。 |
| 4 | // | VI層土粒・焼土粒・灰をわずかに含む。 | 11 | // | 焼土・灰・灰白色粘質土を含む。 |
| 5 | // | c Pは少なく、焼土粒を含む。 | 12 | // | 灰白色粘質土を多量に含む。 |
| 6 | // | 焼土・灰を含む。 | 13 | 褐色土 | 焼土粒を少量、VI層土粒を多く含み、やや粘性がある。 |
| 7 | // | 焼土・VI層土粒を含む。 | 14 | // | 焼土粒を含まず、VI層土粒を多く含む。 |

第421図 H区第81号住居跡実測図

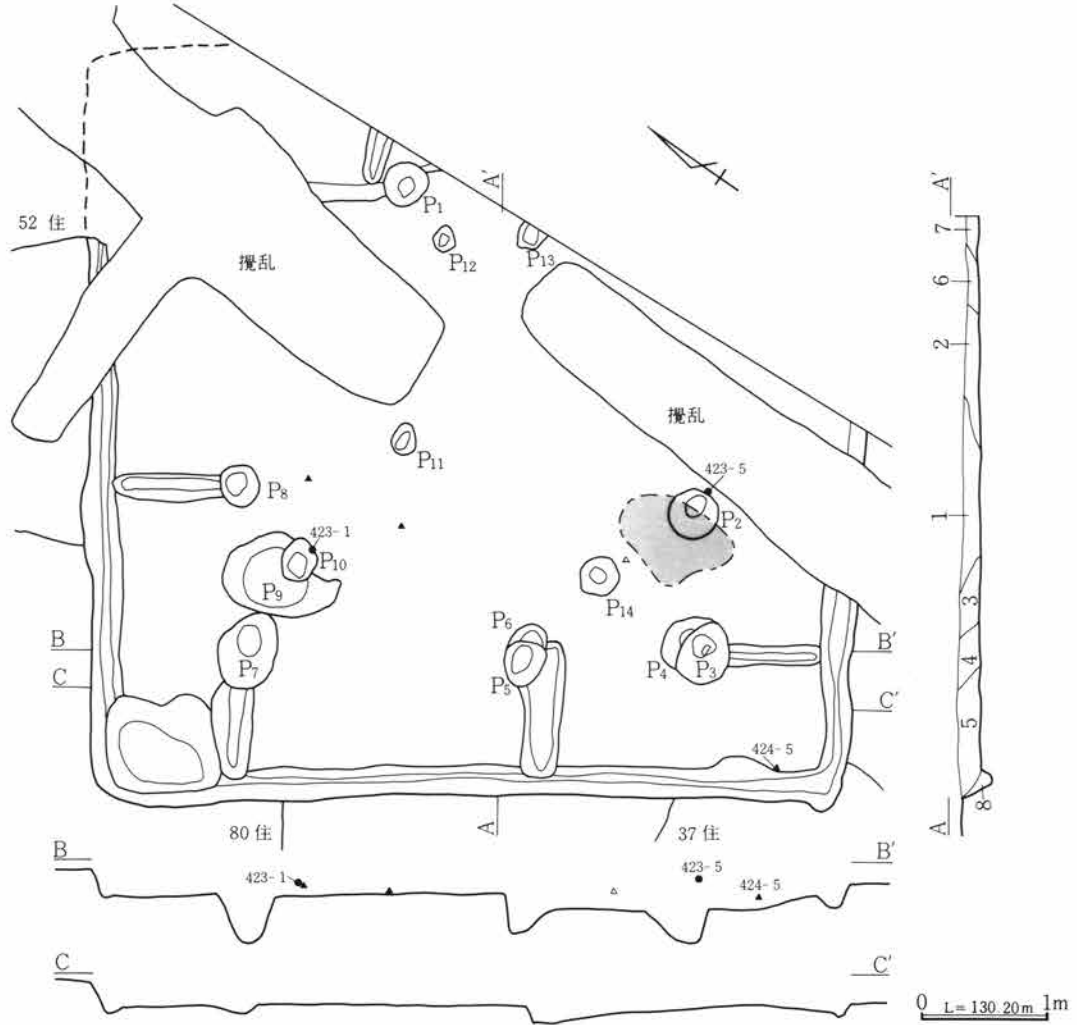
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



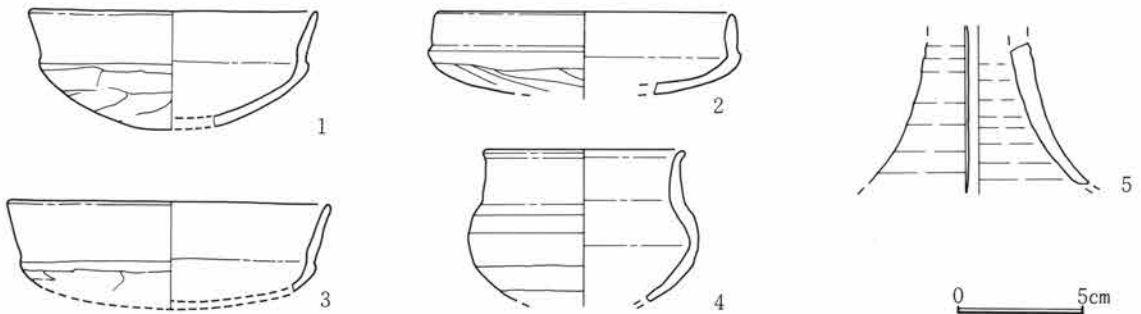
第422図 H区第81号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	H区第82号住居跡	位置	20~23-H-46~49グリッド内	分類	—	時期	II
平面形態	正方形？	規模	— m×6.00m	主軸方位	東—33度—北	残存深度	約 15cm程
備考	カマドを含む東壁は調査区外で未検出。壁・床面はVI層中でP ₂ 周辺に径2m程の範囲に硬化面を検出。壁溝は残存部で全周検出し、柱穴は8本検出した。						

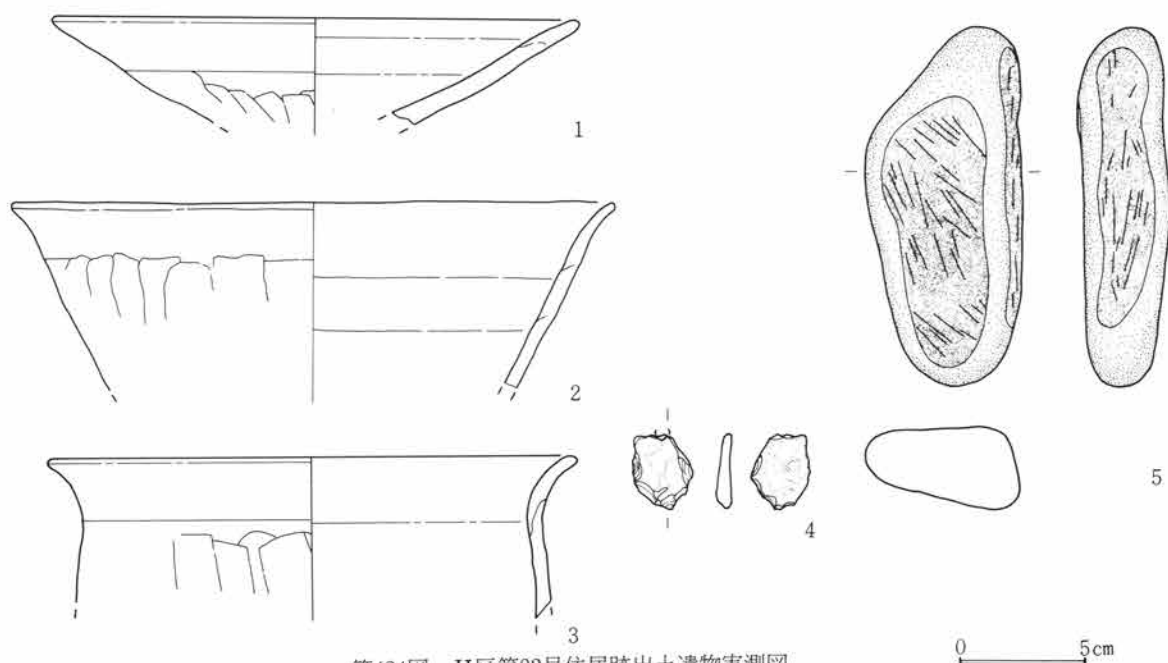


- | | | | | | |
|---|------|-------------------------|---|----|----------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c Pを含み、焼土・VI層土粒をわずかに含む。 | 5 | // | c Pは少量で、VI層土ブロックを含む。 |
| 2 | // | c Pを含み、焼土・炭化物・VI層土粒を含む。 | 6 | // | 焼土・灰を含む。 |
| 3 | // | c Pを含み、黒褐色土をわずかに含む。 | 7 | // | 焼土・灰・灰白色粘質土を含む。 |
| 4 | // | 黒褐色土（FA）を含む。 | 8 | // | VI層土粒を多量に含む。 |



第423図 H区第82号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第424図 H区第82号住居跡出土遺物実測図

当住居跡はVI層上面で平面プランを検出したもので、覆土は暗褐色土主体であつたため、明確に区別することができた。

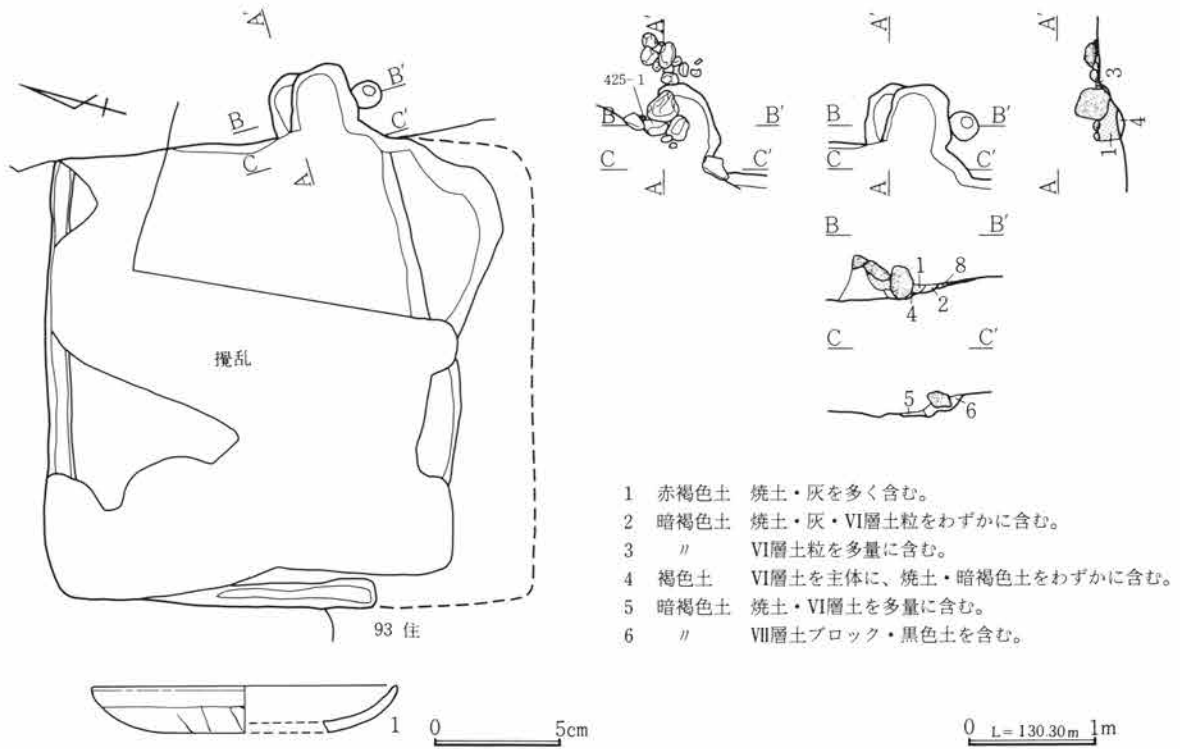
床面は、覆土に近い暗褐色土であり、先述のごとく一部に硬化面を検出した他、P₂上面にかかって灰面を検出した。この床面を構成する暗褐色土は、VI層中に掘り込まれた掘り方の、細かな凹凸を埋め、平坦にするように貼られたもので、所々にVI層土が露呈している。

壁溝は、カマド以外の部分で全周していたものと推定される。幅は約15～30cm、深度は約5～10cmである。また、当住居跡においても、同区第79号住居跡の例のごとく、壁溝から柱穴を結ぶように、壁溝と同規模の溝が検出された。つまり、東壁からP₁南壁からP₃西壁からP₅・P₇、北壁からP₈へそれぞれ溝が検出された。これは未検出部分の柱穴についても同様の施設があつたものと考えられる。

柱穴と推定したものは8本であり、P₂を除きすべて壁溝と溝で連結されている。また、P₃・P₅はそれぞれP₄・P₆と重複しており、この2例が柱穴の重複であるのか、柱材の抜き取り痕であるのか不明である。柱穴の平面形は、円形または楕円形で、径約30～60cm、深度約30～45cmである。柱穴配置は、4本の主柱穴と間に補助的な柱穴を1本づつ有する9本柱であつたものと考えられる。この点についても同区第79号住居跡との共通性を見出すことができる。

遺構名称	H区第85号住居跡	位置	15～17-H-46～48グリッド内	分類	—	時期	—					
平面形態	隅丸方形？	規模	3.62m×—m	主軸方位	東—15度—北	残存深度	約7cm程					
備考	南側で第93号住居跡と重複し、中央部は攪乱を受けている。残存部に幅約18cm程の壁溝を検出した。この壁溝は全周しているものと考えられる。柱穴・貯蔵穴は未検出である。											
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り？・馬蹄形			主軸方位	東—21度—北						
規模	全長	65cm	屋外長	65cm	屋内長	0cm	袖間幅	95cm	燃烧部幅	35cm	煙道幅	—cm
備考	焚口は床面と同レベルで、両袖部及び燃烧部北壁部には礫が多数検出された。この中には支脚として使用されたものも含まれると考えられる。燃烧部に焼土等は未検出である。											

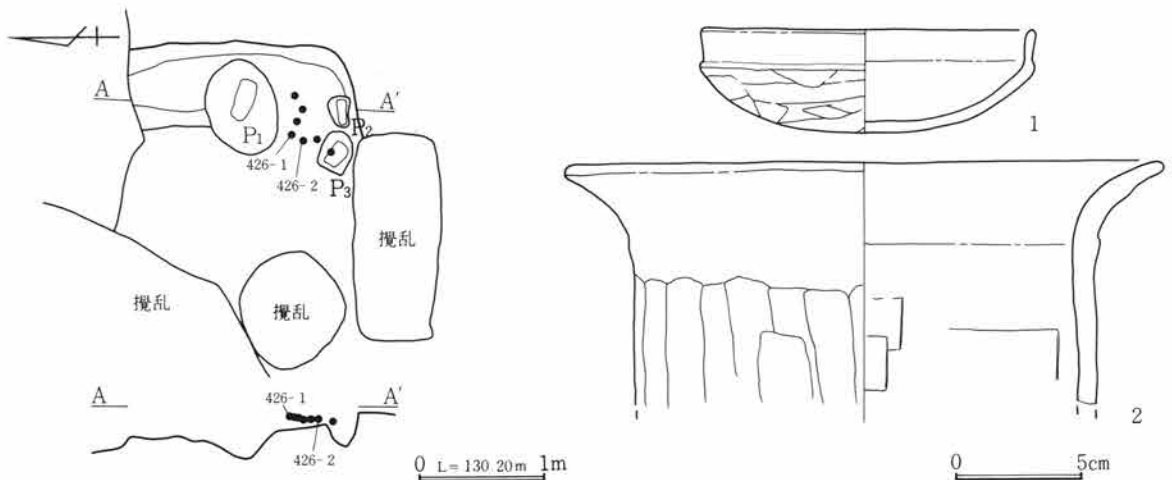
第3章 検出された遺構・遺物



- 1 赤褐色土 焼土・灰を多く含む。
- 2 暗褐色土 焼土・灰・VI層土粒をわずかに含む。
- 3 " VI層土粒を多量に含む。
- 4 褐色土 VI層土を主体に、焼土・暗褐色土をわずかに含む。
- 5 暗褐色土 焼土・VI層土を多量に含む。
- 6 " VII層土ブロック・黒色土を含む。

第425図 H区第85号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第86号住居跡	位置	22・23-H-51・52グリッド内	分類	—	時期	II
平面形態	隅丸方形？	規模	—m×—m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約 7cm程
備考	第11溝・第81号住居跡との重複及び攪乱によって大半は失われ、南東コーナー部だけの検出に止った。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出であるが、貯蔵穴位置に遺物が集中して出土した。						



第426図 H区第86号住居跡・出土遺物実測図

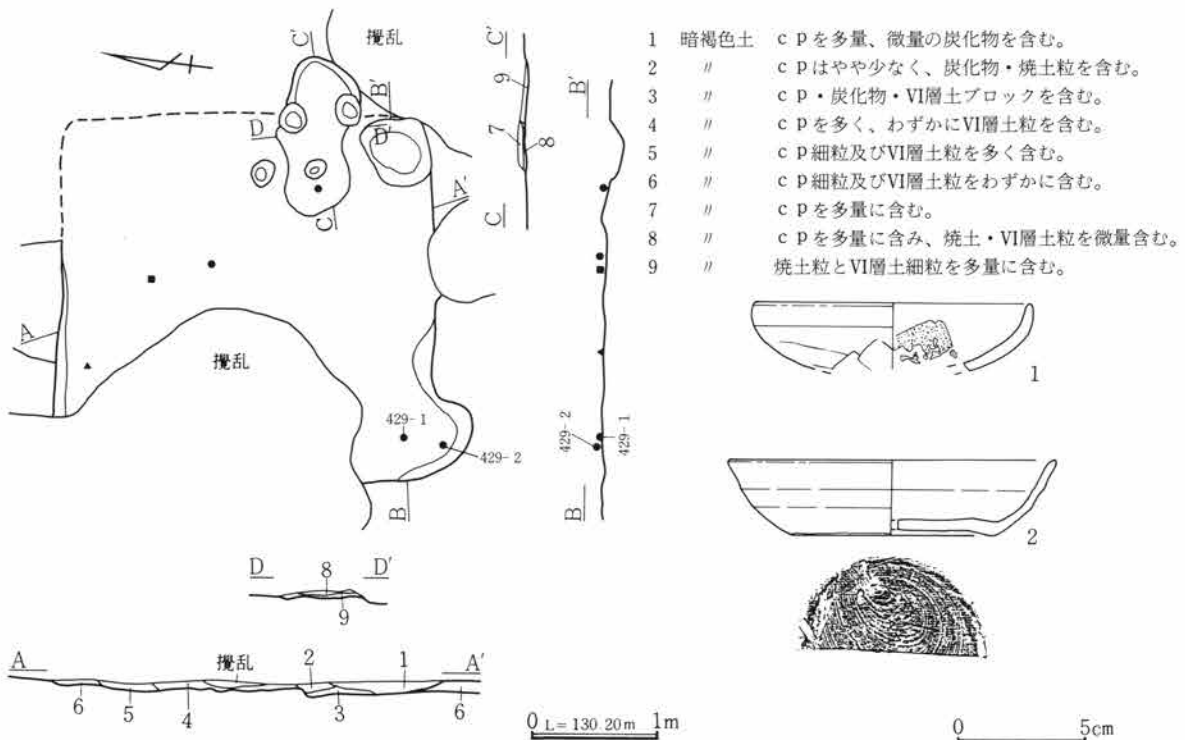
遺構名称	H区第88号住居跡	位置	19・20-H-48・49グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸方形？	規模	—m×—m	主軸方位	東—35度—北	残存深度	約 5cm程
備考	第79・82号住居跡等の重複により、大半が失われ北東コーナー部の検出に止った。残存部に壁溝・柱穴等は未検出である。カマドは東壁に付設されたものと考えられるが、痕跡も未検出である。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



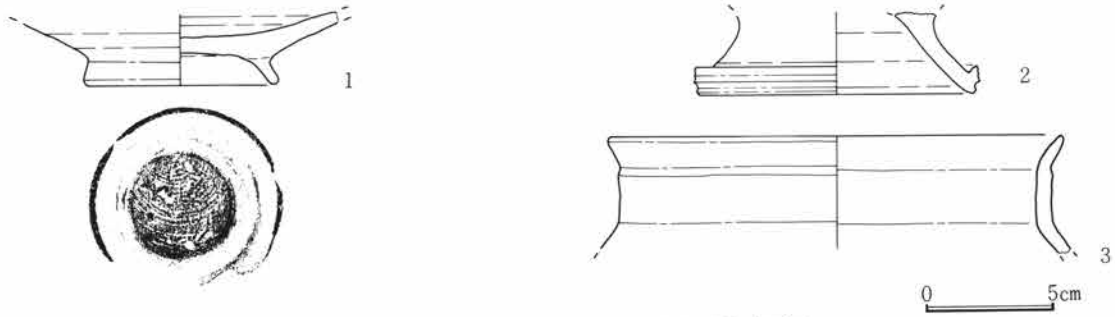
第427図 H区第88号住居跡実測図

遺構名称	H区第91号住居跡		位置	21・22-H-52～54グリッド内		分類	—	時期	VII
平面形態	隅丸方形？	規模	2.85m×3.00m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 2cm程		
備考	第74号住居跡と重複し、遺構検出面が下位であったため、ほとんど残存していない。検出したのは南北壁の一部と、カマド・貯蔵穴である。貯蔵穴は南東コーナー部円形で、径約53cm、深度約13cm。								
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・三角形状				主軸方位	東—9度—北		
規模	全長 125cm 屋外長 50cm 屋内長 75cm 袖間幅 60cm 燃烧部幅 45cm 煙道幅 — cm								
備考	カマドはほとんど掘り方のみを検出である。焚口は屋内側に舌状の浅い掘り込みがみられ、袖部は両袖部に袖構築材の据え方ピットを検出した。燃烧部に焼土等の検出は皆無である。								



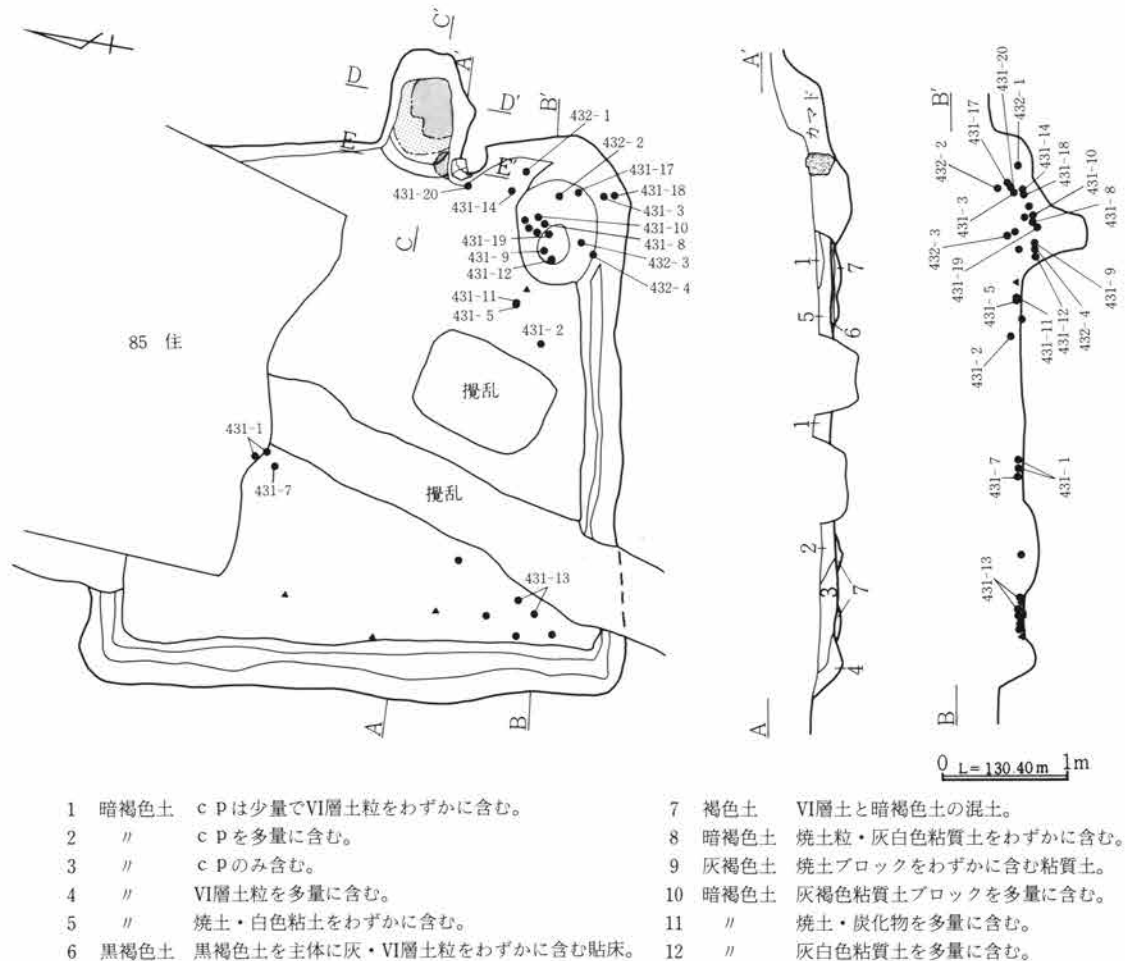
第428図 H区第91号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第429図 H区第91号住居跡出土遺物実測図

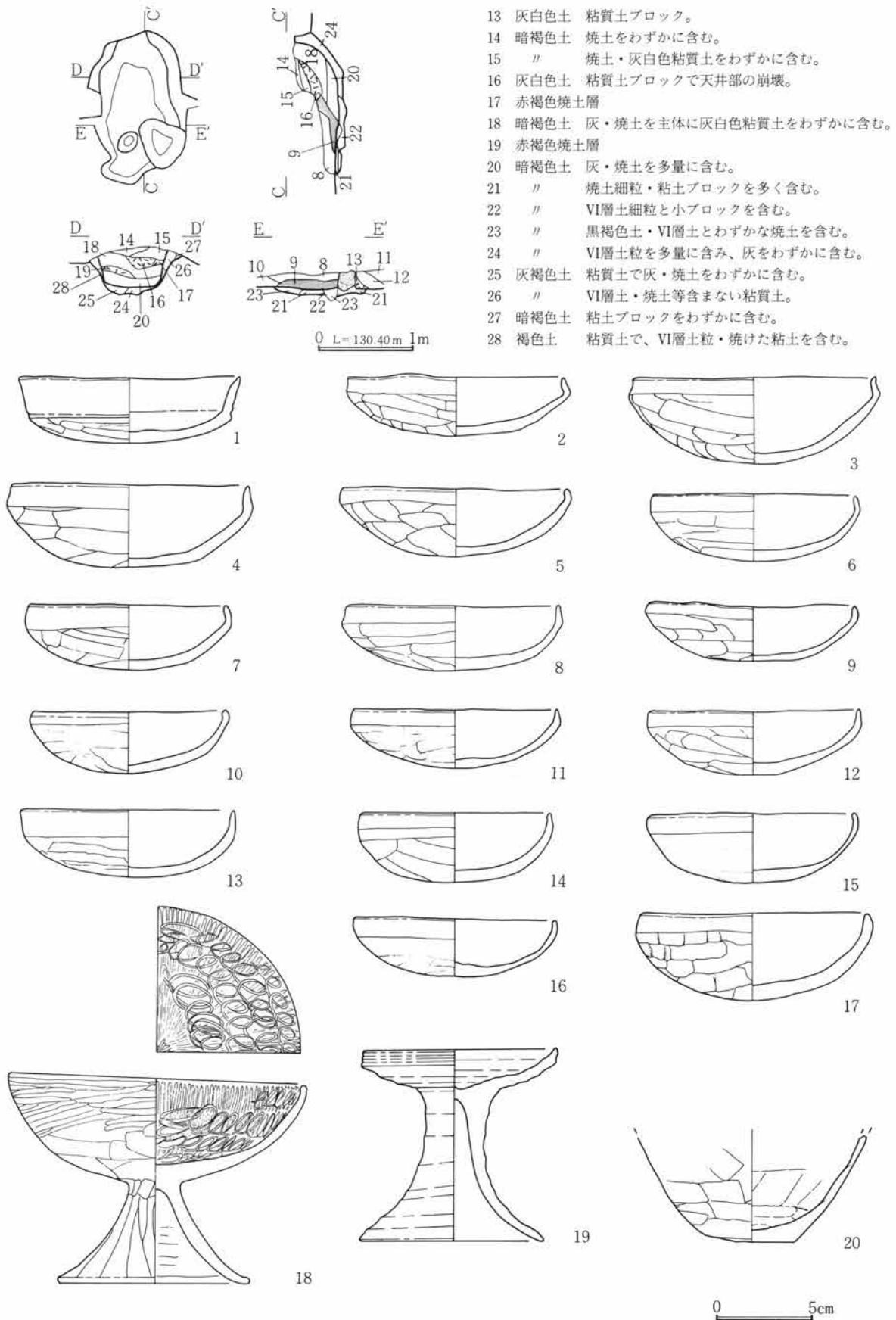
遺構名称	H区第93号住居跡		位置	14～16-H-46～48グリッド内		分類	A-8	時期	III
平面形態	隅丸方形	規模	4.25m×4.20m	主軸方位	東-25度-北	残存深度	約40cm程		
備考	壁は北壁を攪乱により失っている。壁溝は西、南壁に沿って検出した。幅は約25～50cm、深度約10cmである。柱穴は未検出で、貯蔵穴は南東コーナー部で楕円形を呈し、長軸約75cm、深度約50cmである。								
カマド	位置・形状	東壁中央わずかに南寄り・舌状				主軸方位	東-26度-北		
規模	全長 105cm	屋外長 70cm	屋内長 35cm	袖間幅	— cm	燃烧部幅	50cm	煙道幅	— cm
備考	焚口は床面と同レベルで、燃烧部中央部には、約20cm厚の焼土層及び周囲に灰面を検出した。袖は、右袖のみ残存し、先端部に礫を据えて構築している。								



- | | | | |
|--------|---------------------------|---------|--------------------|
| 1 暗褐色土 | c Pは少量でVI層土粒をわずかに含む。 | 7 褐色土 | VI層土と暗褐色土の混土。 |
| 2 // | c Pを多量に含む。 | 8 暗褐色土 | 焼土粒・灰白色粘質土をわずかに含む。 |
| 3 // | c Pのみ含む。 | 9 灰褐色土 | 焼土ブロックをわずかに含む粘質土。 |
| 4 // | VI層土粒を多量に含む。 | 10 暗褐色土 | 灰褐色粘質土ブロックを多量に含む。 |
| 5 // | 焼土・白色粘土をわずかに含む。 | 11 // | 焼土・炭化物を多量に含む。 |
| 6 黒褐色土 | 黒褐色土を主体に灰・VI層土粒をわずかに含む貼床。 | 12 // | 灰白色粘質土を多量に含む。 |

第430図 H区第93号住居跡実測図

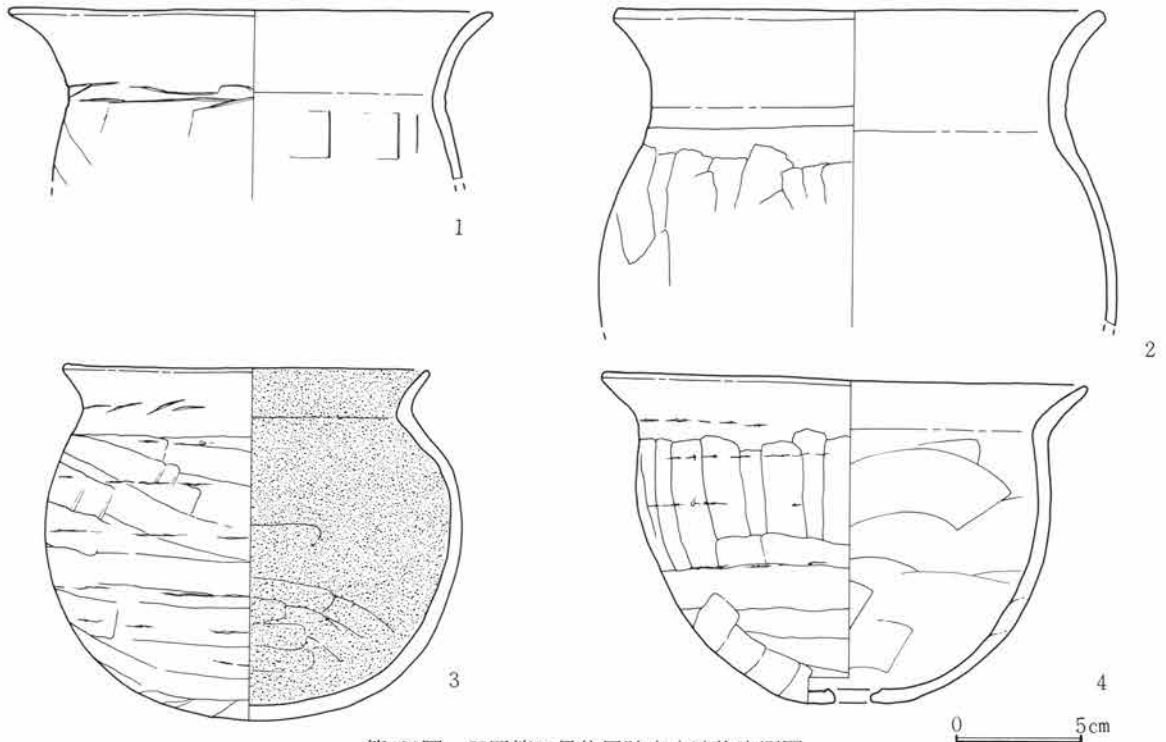
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



- 13 灰白色土 粘質土ブロック。
- 14 暗褐色土 焼土をわずかに含む。
- 15 // 焼土・灰白色粘質土をわずかに含む。
- 16 灰白色土 粘質土ブロックで天井部の崩壊。
- 17 赤褐色焼土層
- 18 暗褐色土 灰・焼土を主体に灰白色粘質土をわずかに含む。
- 19 赤褐色焼土層
- 20 暗褐色土 灰・焼土を多量に含む。
- 21 // 焼土細粒・粘土ブロックを多く含む。
- 22 // VI層土細粒と小ブロックを含む。
- 23 // 黒褐色土・VI層土とわずかな焼土を含む。
- 24 // VI層土粒を多量に含み、灰をわずかに含む。
- 25 灰褐色土 粘質土で灰・焼土をわずかに含む。
- 26 // VI層土・焼土等含まない粘質土。
- 27 暗褐色土 粘土ブロックをわずかに含む。
- 28 褐色土 粘質土で、VI層土粒・焼けた粘土を含む。

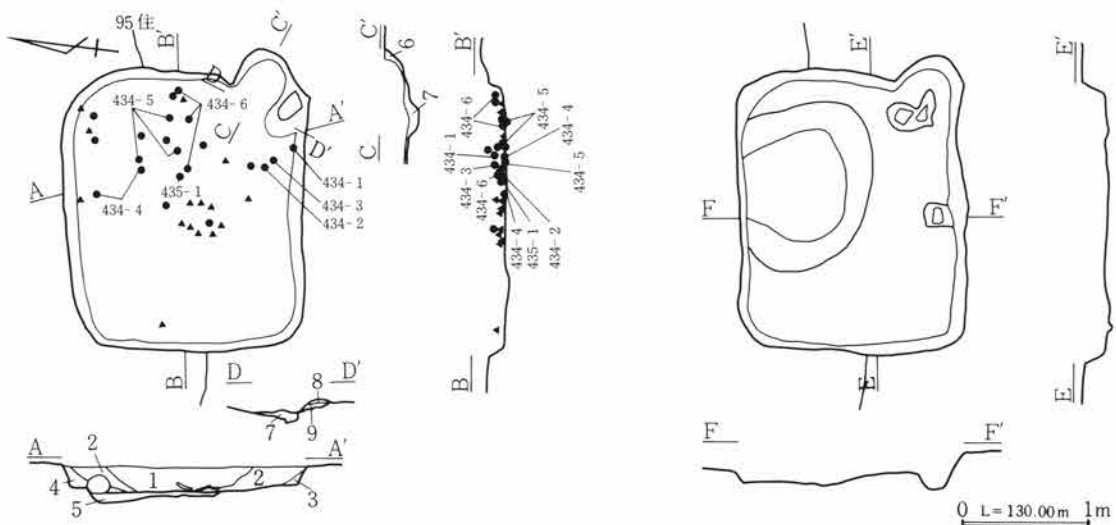
第431図 H区第93号住居跡・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



第432図 H区第93号住居跡出土遺物実測図

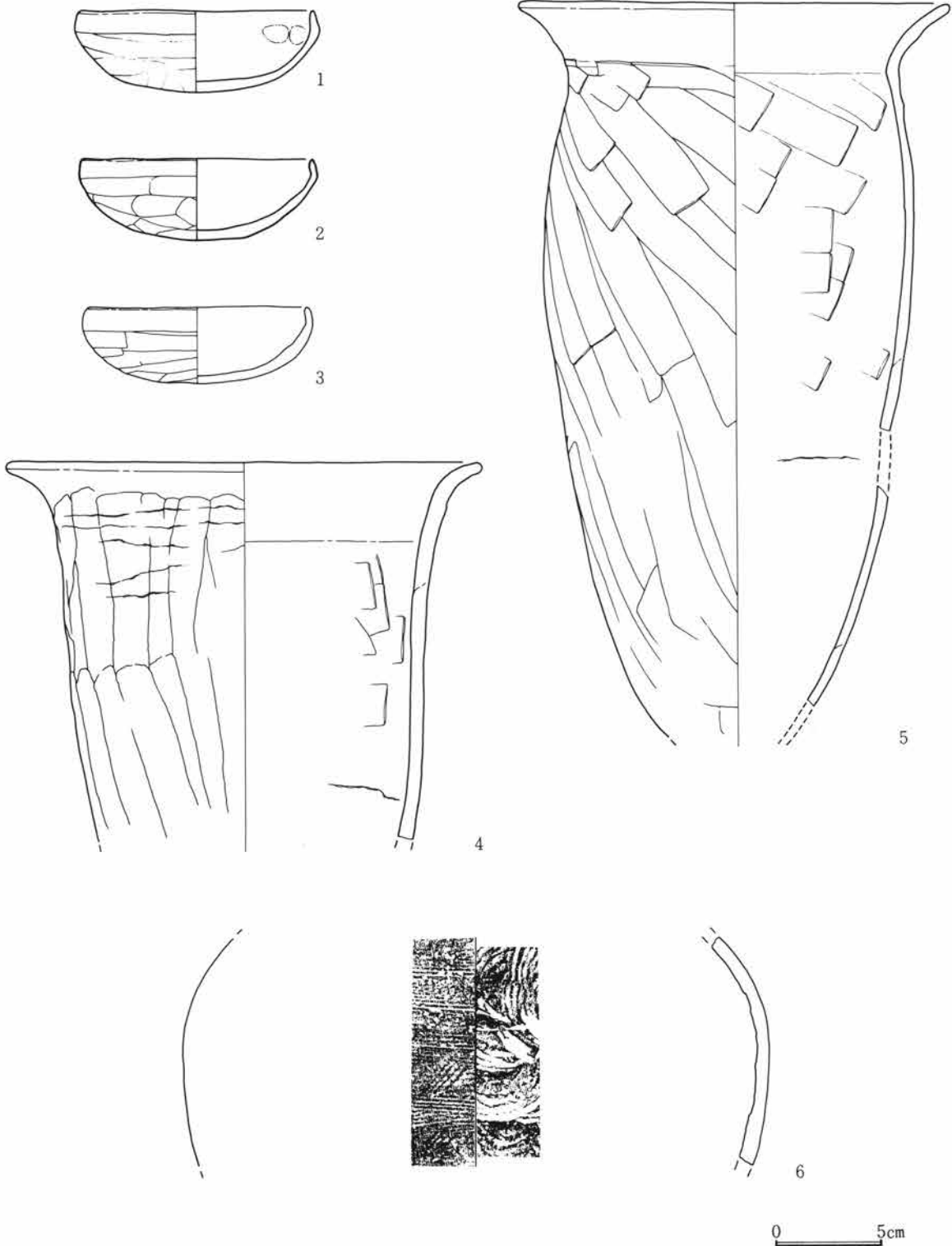
遺構名称	H区第94号住居跡		位置	12・13-H-49・50グリッド内		分類	B-10	時期	VI
平面形態	隅丸長方形	規模	2.15m×1.80m	主軸方位	東-9度-北	残存深度	約14cm程		
備考	北側が第95号住居跡と重複している。床面は一部VII層面にかかって構築され、平坦である。壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出である。								
カマド	位置・形状	南東コーナー部・馬蹄形				主軸方位	東-15度-南		
規模	全長 50cm	屋外長 50cm	屋内長 — cm	袖間幅 75cm	燃烧部幅 34cm	煙道幅 — cm			
備考	コーナーカマドで、構築は貧弱である。焚口・燃烧部に灰面等は未検出である。袖は両袖共に暗褐色土で構築され、袖構築材は検出されていない。								



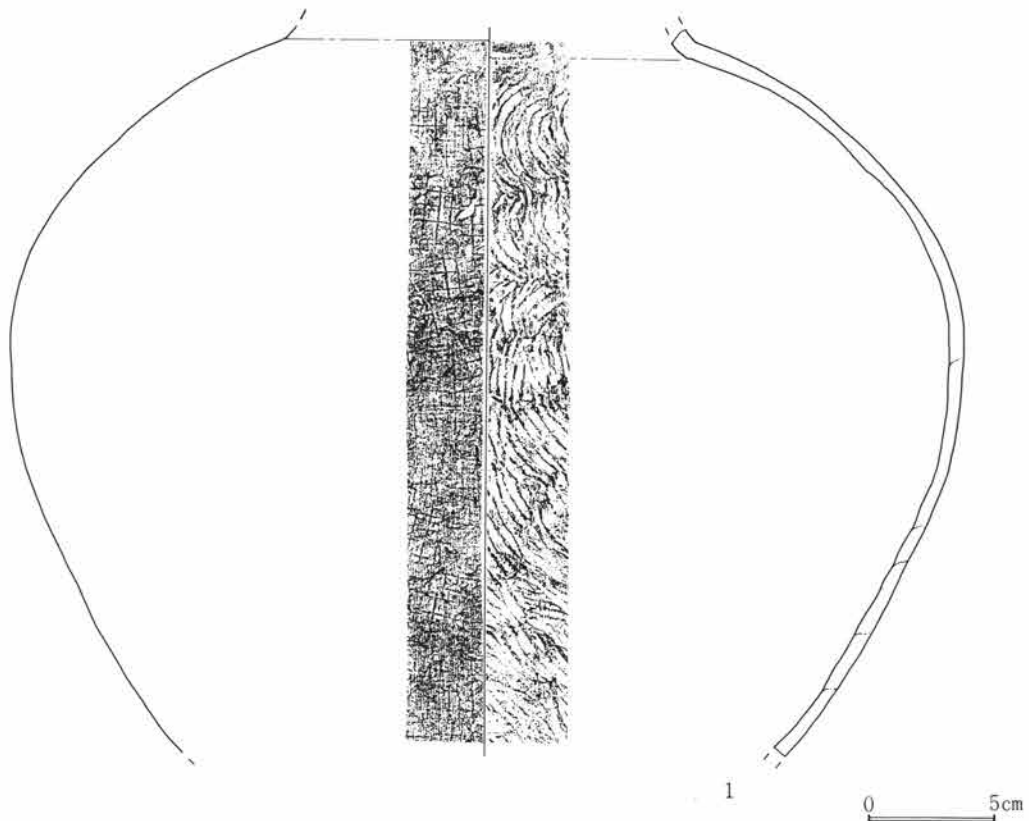
第433図 H区第94号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

- | | | | | | |
|---|------|---------------------------|---|------|----------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c p・FA・VI層土粒・焼土粒をわずかに含む。 | 6 | // | VI層土粒を多量に含む。 |
| 2 | // | 1層よりやや多くc p・VI層土粒を含む。 | 7 | // | 焼土・VII層土ブロックを含む。 |
| 3 | // | c pは少なくVI層土粒を多量に含む。 | 8 | 灰白色土 | 焼土粒・VI層土粒をわずかに含む粘質土。 |
| 4 | // | c pは少なくVI層土粒をわずかに含む。 | 9 | 暗褐色土 | 焼土をわずかに含む粘質土。 |
| 5 | // | c pを含まず、VI層土粒及びブロックを多く含む。 | | | |



第434図 H区第94号住居跡出土遺物実測図



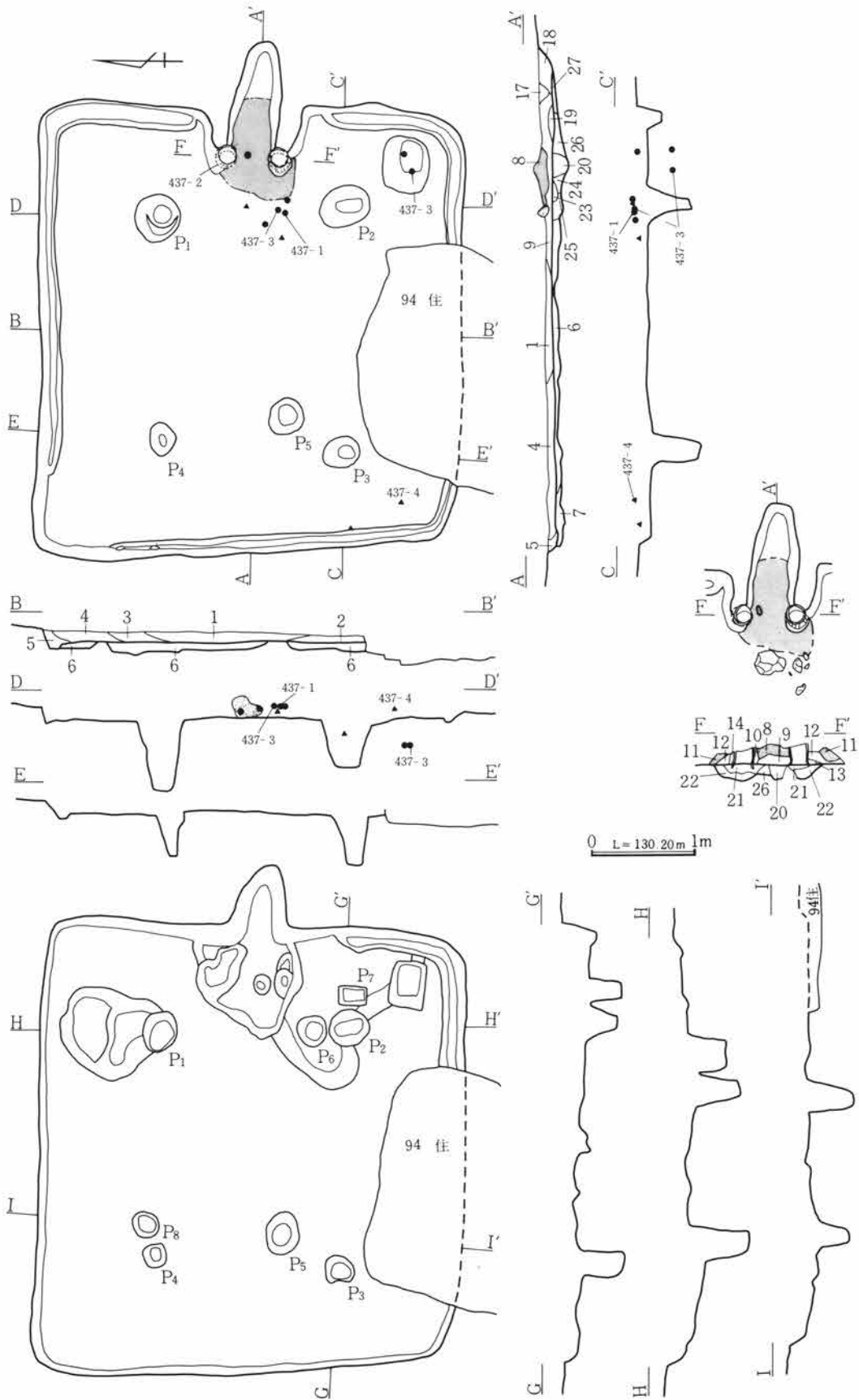
第435図 H区第94号住居跡出土遺物実測図

当住居跡の掘り方は、全面がVII層土中まで下げられており、大小の凹凸がみられる。また、北寄りの一角はさらに楕円形状に掘り窪められている。この凹凸を平坦になるようにVI層土主体の土を貼床している。

第95号住居跡との重複関係は、遺構検出段階で区別することはできなかったのであるが、両住居跡の通しのセクション面の観察によれば、当住居跡が第95号住居跡を切っていると判断された。また、カマド付近で土坑状の浅い掘り込みと重複しているが、遺物の残存状態から、当住居跡の方が新しいと考えられる。

遺物出土状態は、床直出土遺物が多く、それらが住居東側に集中することが特徴である。その中で、特にカマド南西部から出土した第434図1～3の土師器の坏は、本来3枚重ねで置かれていたものが、横にずれ落ちたような状態を呈していた。また、床面中央東寄りの位置から出土した第434図4・5は、床面にほとんど間層を挟まずに出土しており、当住居跡の廃棄時期を示す遺物である。その他第434図6、第435図1は、先の土師器の甕の破片のすぐ上位から出土している。

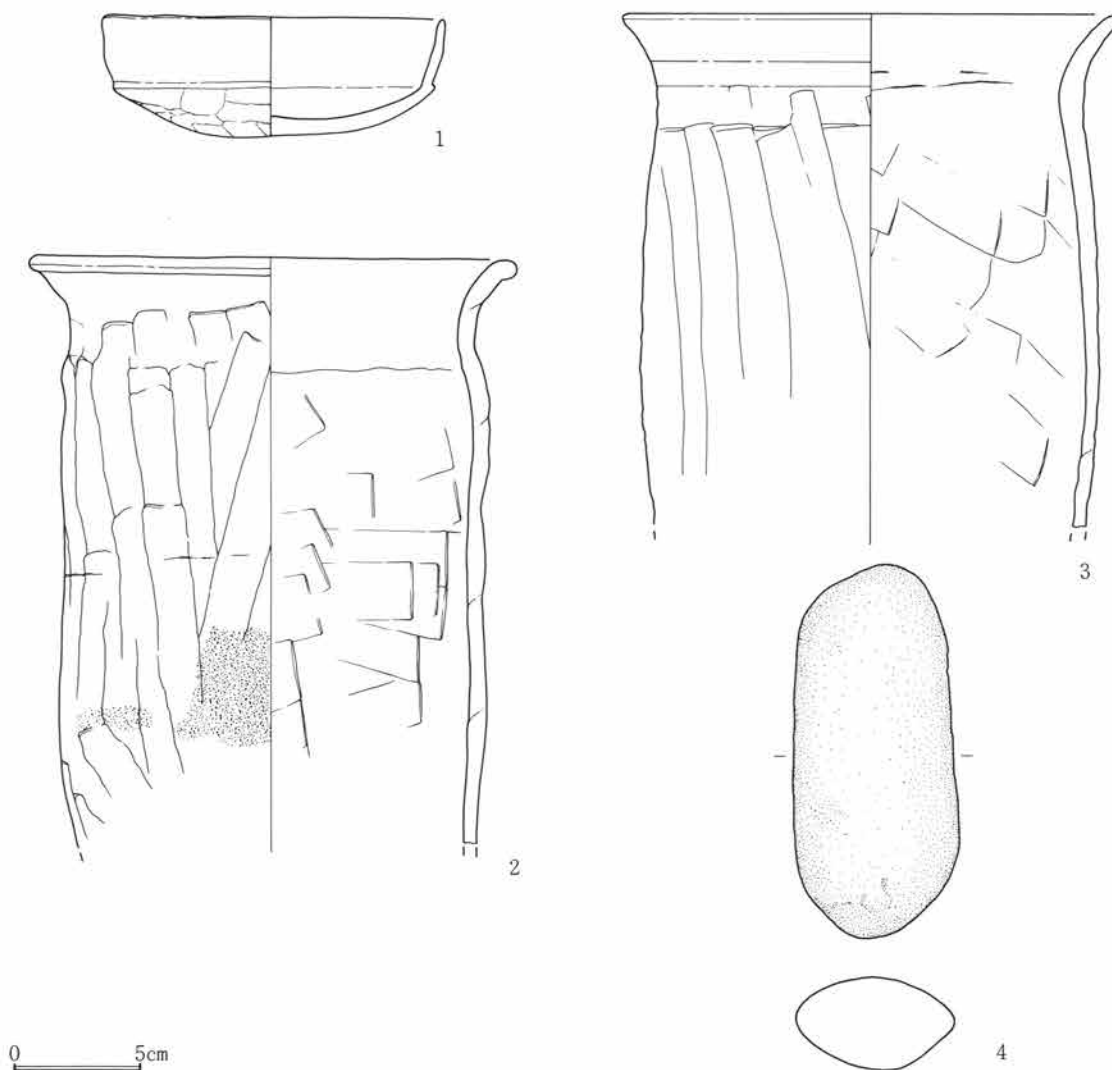
遺構名称	H区第95号住居跡	位置	12～15-H-49～51グリッド内	分類	A-1	時期	II
平面形態	隅丸方形	規模	4.35m×4.15m	主軸方位	東-27度-北	残存深度	約14cm程
備考	床はVII層中に掘り込んだ後貼床を施している。壁構は北西コーナー部を除き全周し、柱穴は床面で4本であるが、掘り方段階で3ヵ所が複数本検出したことから、建て替えが想定される。						
カマド	位置・形状	東壁中央わずか北寄り・舌状			主軸方位	東-16度-北	
規模	全長 130cm 屋外長 60cm 屋内長 70cm 袖間幅 100cm 燃烧部幅 35cm 煙道幅 20cm						
備考	燃烧部から焚口にかけて灰面を検出。袖は両袖共先端部に土師器の甕を逆位に据えて、屋内に突出するように構築している。燃烧部と煙道部を区画するものは何もなく、分離はできない。						



第436図 H区第95号住居跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物

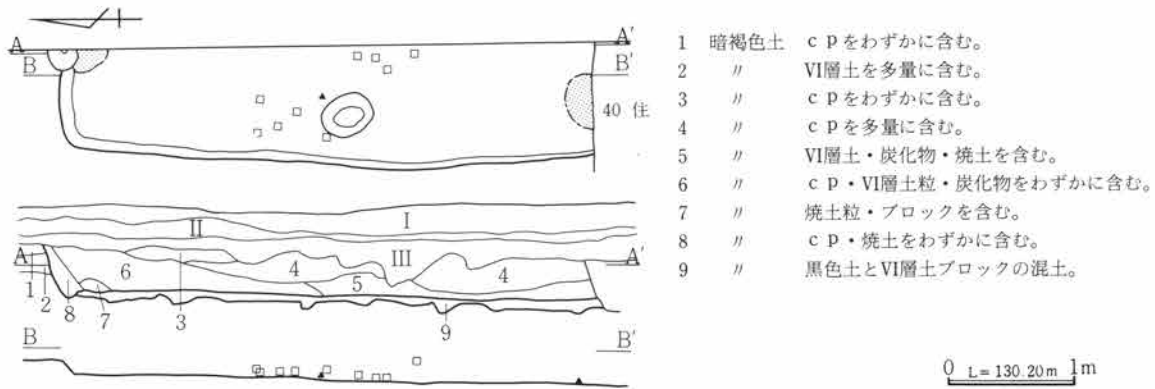
- | | | | | | |
|----|------|----------------------------|----|------|-------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c Pは少なく、黒褐色土粒をわずかに含む。 | 15 | 暗褐色土 | 灰白色粘質土粒をごくわずかに含む。 |
| 2 | // | c Pは少なく、VII層土ブロックをわずかに含む。 | 16 | // | 焼土をわずかに含む。 |
| 3 | // | VI層土粒・黒褐色土粒を多量に含む。 | 17 | // | 焼土・灰をわずかに含む。 |
| 4 | // | c Pは少なく、VI層土粒をわずかに含む。 | 18 | // | 粘質土で焼土を含まず、わずかにc P・灰白色粘質土を含む。 |
| 5 | // | c Pは極めて少なく、VI層土粒を多量に含む。 | 19 | // | 灰を多量に含む。 |
| 6 | // | c Pは含まず、VI層土粒及び小ブロックを多く含む。 | 20 | // | 焼土をわずかに含む。 |
| 7 | // | c Pは含まず、VI層土細粒を多く含む。 | 21 | // | 白色粘質土をわずかに含む。 |
| 8 | 灰白色土 | 粘質土で焼土・炭化物をわずかに含む。 | 22 | // | VI層土粒を多量に含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | 焼土・炭化物・灰白色粘質土をわずかに含む。 | 23 | // | c Pを含まず炭化物をわずかに含む。 |
| 10 | // | 炭化物・灰白色粘質土をわずかに含む。 | 24 | // | c Pを含まずVI層土粒をわずかに含む。 |
| 11 | 灰白色土 | 粘質土ブロックを主体にわずかに暗褐色土を含む。 | 25 | // | 黒褐色土を含む。 |
| 12 | 暗褐色土 | 灰白色粘質土粒を多量に含む。 | 26 | // | c P・焼土・灰を含む。 |
| 13 | // | 焼土・灰白色粘質土を含む。 | 27 | // | 焼土・VI層土粒をわずかに含む。 |
| 14 | 灰白色土 | 粘質土でわずかに暗褐色土を含む。 | | | |



第437図 H区第95号住居跡出土遺物実測図

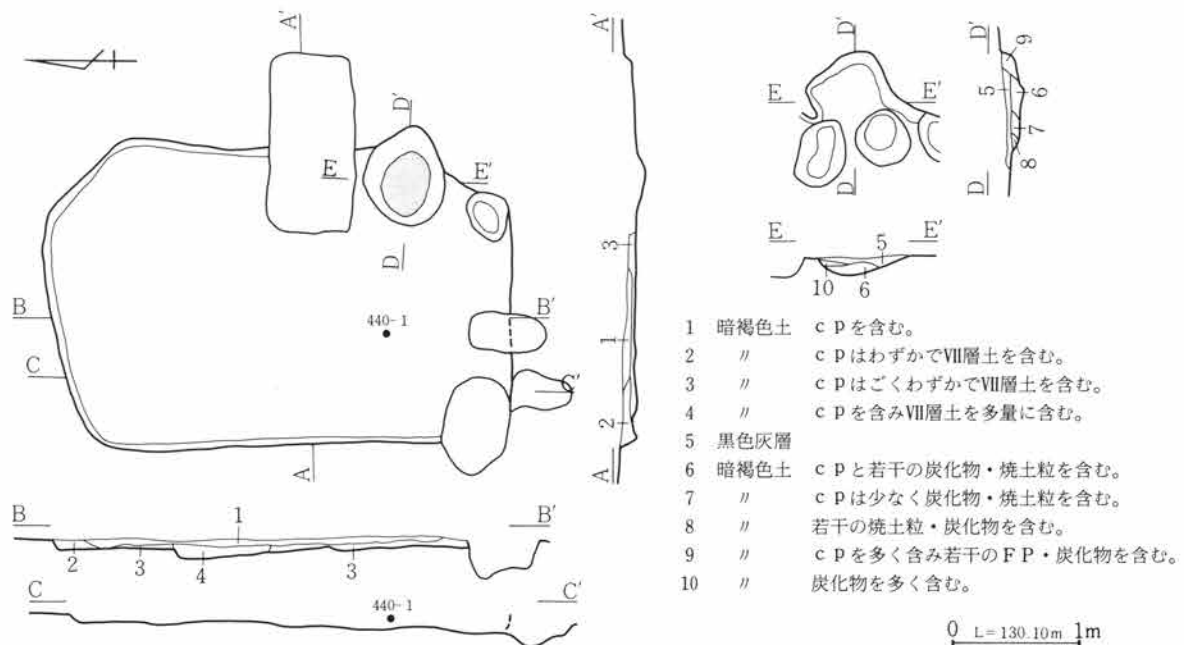
遺構名称	H区第96号住居跡		位置	11~13-H-55・56グリッド内		分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形?	規模	— m × — m	主軸方位	— — 度 — —	残存深度	約	5 cm程	
備考	壁溝は未検出で、床面でピットを1個検出したが柱穴であるか不明。床面中央には炭化材が出土し、南北両壁の一部に焼土面が検出されており、焼失しているのかもしれない。								

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第438図 H区第96号住居跡実測図

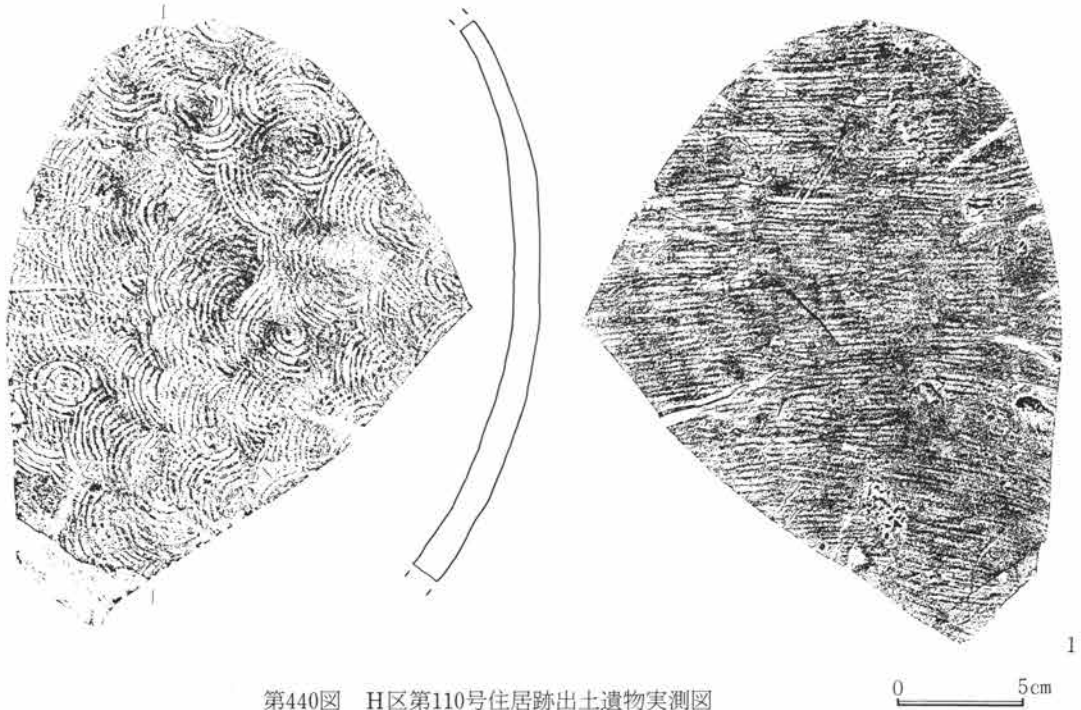
遺構名称	H区第110号住居跡	位置	14～16-H-55・56グリッド内	分類	C-10	時期	—
平面形態	隅丸長方形?	規模	2.30m×3.60m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約7cm程
備考	南壁は検出面が低いため範囲のみ確定した。北壁は「く」字状に北に突出する独特の形態である。壁溝・柱穴は未検出。貯蔵穴は南東コーナー部で円形を呈し、径約40cmである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・三角形状		主軸方位	東-5度-南		
規模	全長 80cm 屋外長 22cm 屋内長 58cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 60cm 煙道幅 — cm						
備考	燃烧部は掘り窪められ、円形を呈する。焚口・燃烧部共に灰面等は未検出である。袖は両袖共残存せず、構造は不明である。						



第439図 H区第110号住居跡実測図

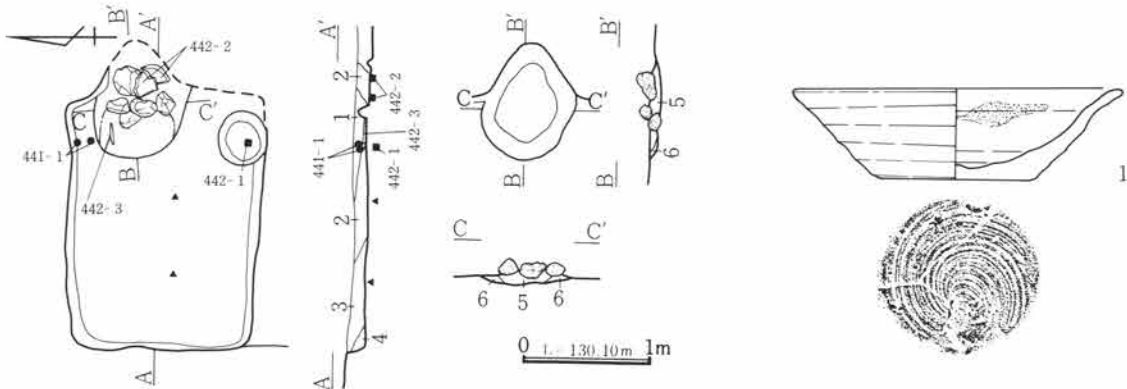
カマド掘り方は、袖と思われる位置に円形及び楕円形のピットを検出した。これは袖構築材の据え方と考えられるが、遺構検出面においてその痕跡を検出することはできなかった。

遺物は、第440図1の須恵器の大甕の破片が1片、床面から若干遊離した状態で出土した。覆土中出土の遺物を含め、実測に耐えうるものは当遺物のみである。



第440図 H区第110号住居跡出土遺物実測図

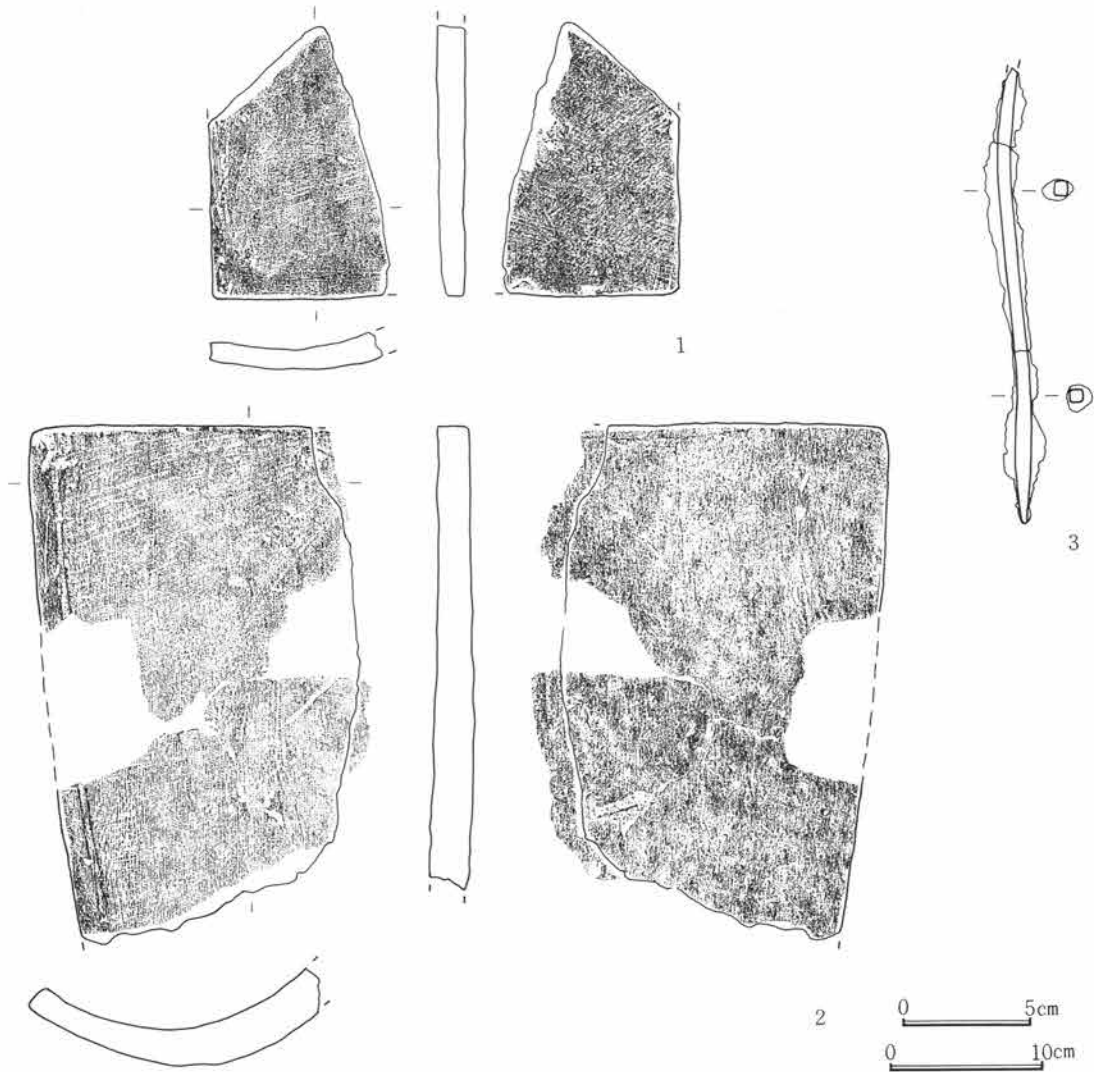
遺構名称	H区第111号住居跡	位置	13-H-56・57グリッド内	分類	B-8	時期	VII?					
平面形態	隅丸長方形	規模	2.00m×1.50m	主軸方位	東-0度-北	残存深度	約10cm程					
備考	東壁と南壁の一部は未検出。壁溝・柱穴は検出されなかった。床面はVI層中であり、硬化は認められなかった。貯蔵穴は南東コーナー部で、円形を呈する。規模は、径約43cm、深度約13cmである。											
カマド	位置・形状	東壁中央北寄り・不明			主軸方位	— 度 —						
規模	全長	— cm	屋外長	— cm	屋内長	— cm	袖間幅	— cm	燃烧部幅	— cm	煙道幅	— cm
備考	袖は礫で構築され、天井部も同様の礫を使用したものと推定される。カマドと判断した部分に灰面等の検出はなかった。											



- 1 暗褐色土 c pをわずかに含む。
- 2 // c p・自然礫をわずかに含む。
- 3 // c pを多量に含む。
- 4 // VII層土を多量に含む。
- 5 // 焼土粒・炭化物を多く含む、粘性・しまりがある。
- 6 // 焼土粒・炭化物・灰をわずかに含む、粘性・しまりがある。

第441図 H区第111号住居跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



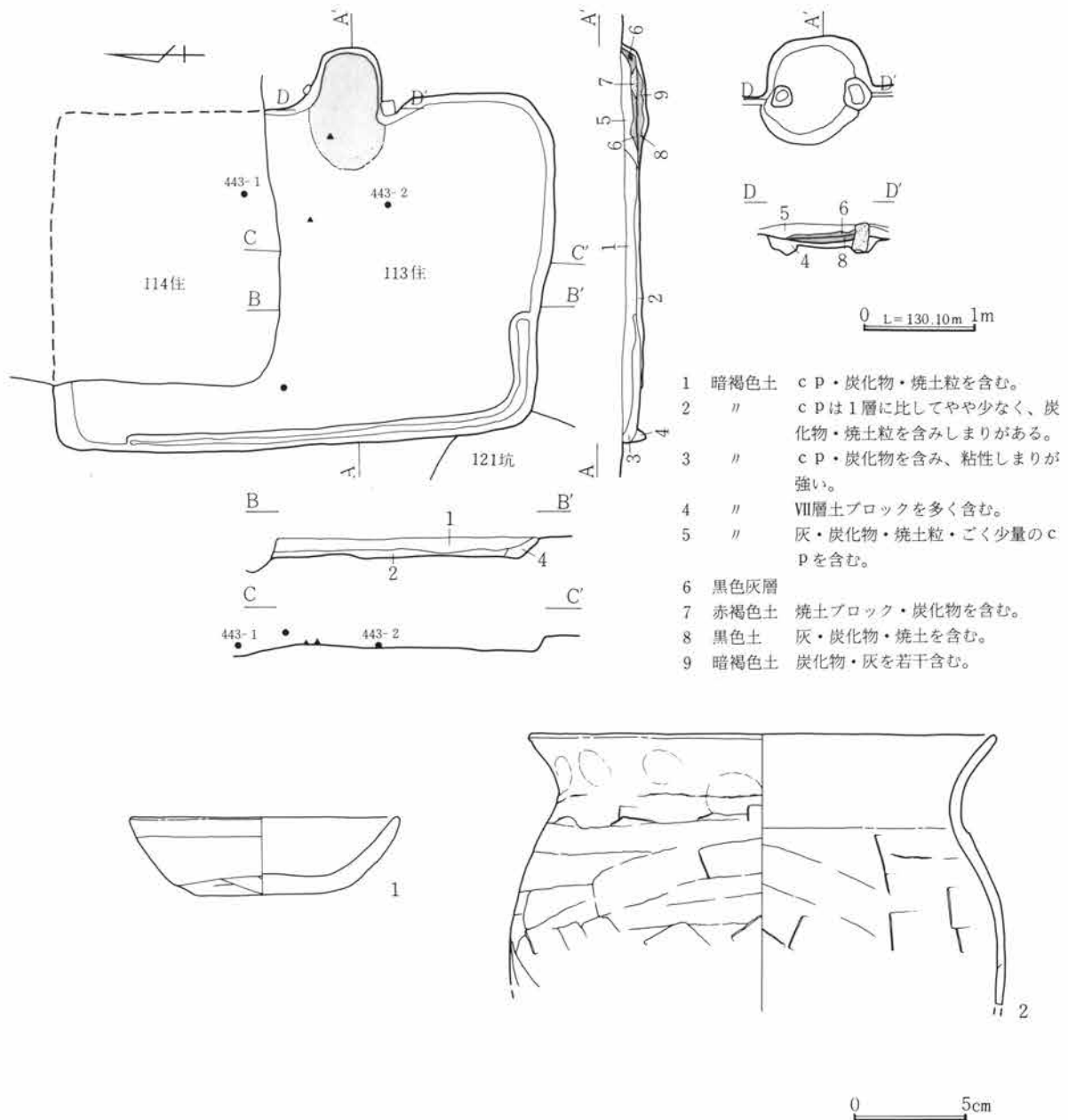
第442図 H区第111号住居跡出土遺物実測図

当住居跡は、第113・114号住居跡と重複し、カマド平面形及び南東コーナー部が不明であるが、カマド構築材とみられる礫と瓦が集中して検出されていることから、先の2住居より新しいものと考えられる。

遺物は、カマド前面から鉄釘と思われるものが1点、床面からわずかに遊離した状態で出土している。その他、北壁及び南壁に接するように須恵器坏・瓦が出土した。

遺構名称	H区第113号住居跡	位置	11～13-H-56・57グリッド内		分類	C-1	時期	VIII
平面形態	隅丸長方形	規模	3.00m×4.30m	主軸方位	東-5度-北	残存深度	約13cm程	
備考	北側で第114号住居跡と重複し、北半を失っている。壁溝は西壁から南西コーナー部にかけて検出され、幅は約15～20cm程度である。柱穴・貯蔵穴は未検出である。							
カマド	位置・形状	東壁中央やや南寄り・舌状			主軸方位	東-3度-南		
規模	全長 59cm 屋外長 45cm 屋内長 14cm 袖間幅 - cm 燃烧部幅 59cm 煙道幅 - cm							
備考	焚口は床面と同レベルで、燃烧部にかけて灰面が検出された。袖は右袖のみ角柱状截石が残存し左袖は、掘り方段階で袖石据え方と考えられるピットの検出に止った。							

第3章 検出された遺構・遺物

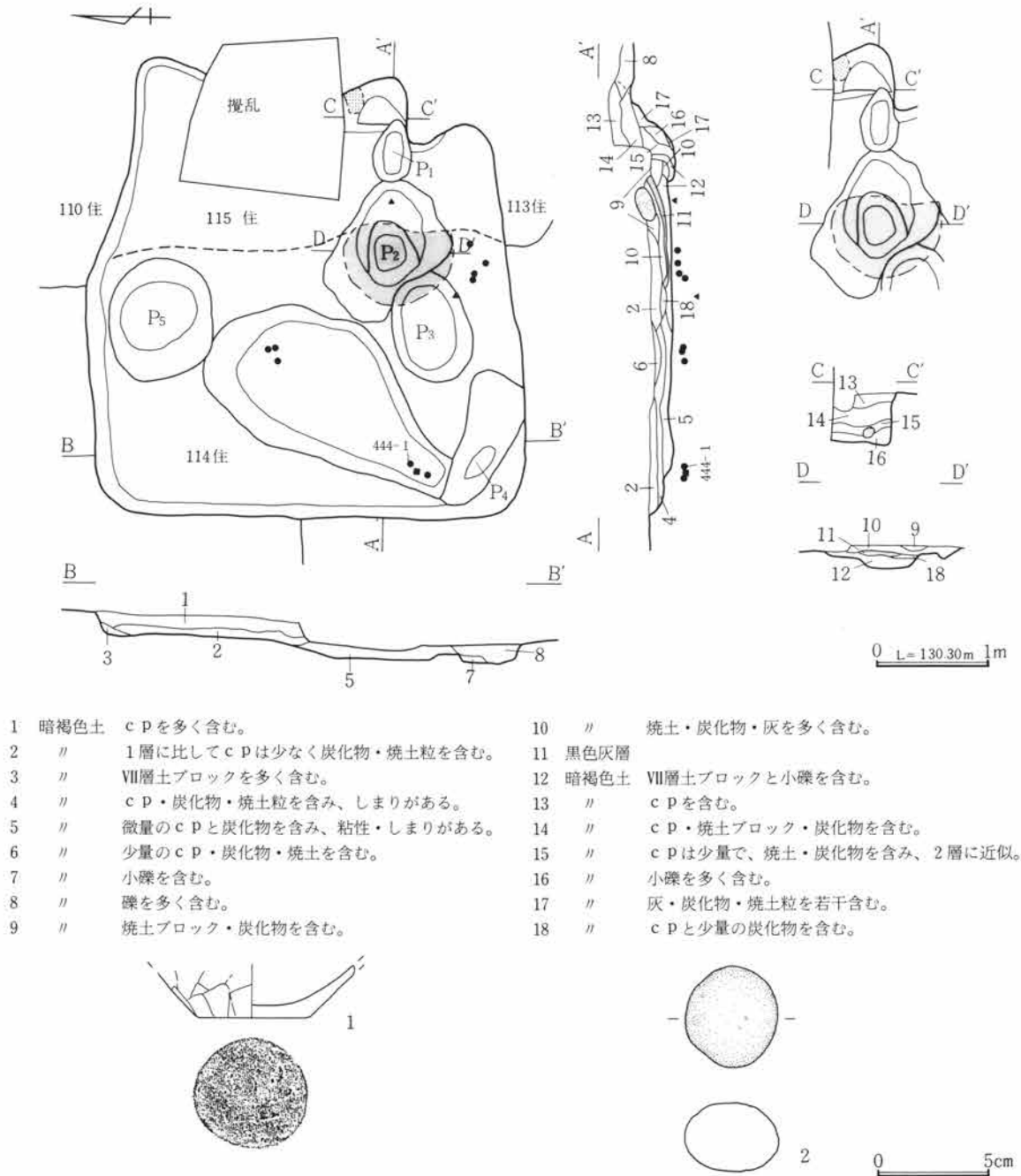


第443図 H区第113号住居跡・出土遺物実測図

遺構名称	H区第114号住居跡	位置	12～13-H-56・57グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	隅丸長方形?	規模	— m×3.80m	主軸方位	東—2度—北	残存深度	約 24cm程
備考	北壁の一部及び西壁のみ残存している。残存部に壁溝は未検出である。東壁推定部にカマドの痕跡と考えられる灰面を検出した。柱穴は掘り方段階でも不明である。						

遺構名称	H区第115号住居跡	位置	13・14-H-55・56グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	不整形?	規模	— m×3.30m	主軸方位	東—9度—南	残存深度	約 10cm程
備考	第110・113・114号住居跡と重複し、北壁の一部とカマドの痕跡を検出した。残存部に柱穴・壁溝は未検出である。						

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第444図 H区第114・115号住居跡・出土遺物実測図

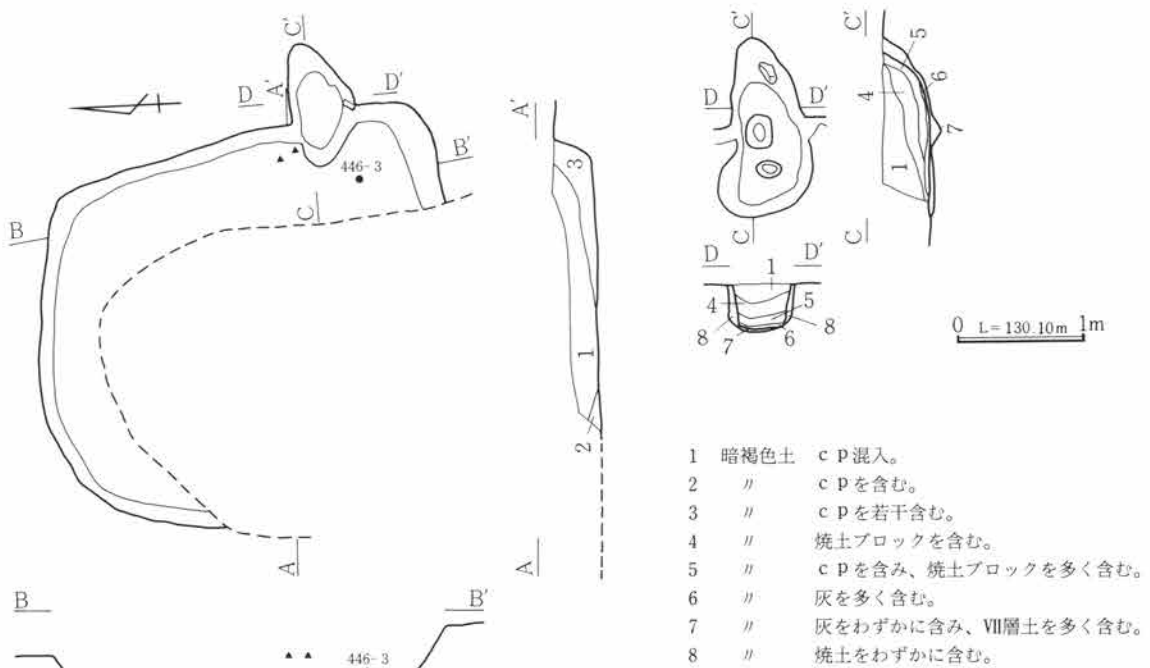
第114・115号住居跡は、東西に並び、しかも北壁を共通するように重複している。カマドはどちらも痕跡で、同一線上に位置している。このことは、2軒の住居が本来は1軒であった可能性を示唆するものとも考えられる。しかし、仮に1軒であったとすると、カマドがあまりにも住居屋内に突出してしまうことなど微妙な違いが認められることから、ここでは2軒として扱い、カマドの残存状態から、第114号住居跡が新しいものと判断した。

第114号住居跡の掘り方は、4カ所に土坑状の掘り込みが検出された。第115号住居跡の掘り方は、電柱の掘り残しなどが存在するため、床面下の調査はほとんど不可能で不明である。

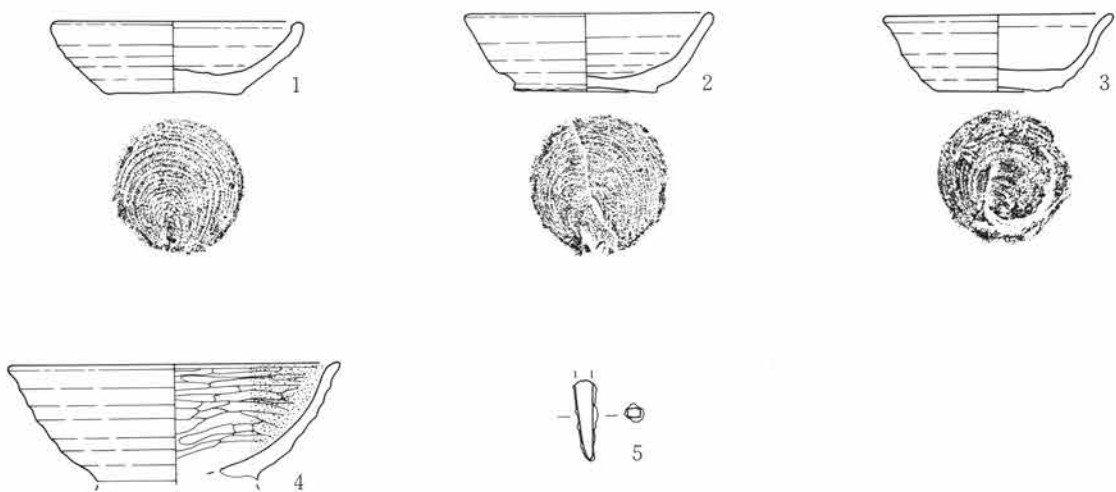
遺物は、両住居跡共に覆土中出土のものを含めてもごく微量である。

第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	H区第150号住居跡	位置	21~23-H-60~62グリッド内	分類	—	時期	X
平面形態	隅丸長方形?	規模	2.70m×3.10m	主軸方位	東—8度—北	残存深度	約30cm程
備考	西壁と南壁及び屋内の大半は攪乱を受け、検出したのは北壁・東壁及びカマドだけである。残存部に壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出である。遺物は大半がカマド周辺から出土したものである。						
カマド	位置・形状	東壁南寄りに扁在・舌状			主軸方位	東—12度—北	
規模	全長 97cm 屋外長 54cm 屋内長 43cm 袖間幅 — cm 燃烧部幅 48cm 煙道幅 — cm						
備考	焚口は不整形の浅い掘り込みである。袖は両袖共残存せず、掘り方段階でも据え方等は検出されなかった。燃烧部にも明瞭に焼土等は検出されず、掘り方段階で支脚据え方のピットを検出した。						



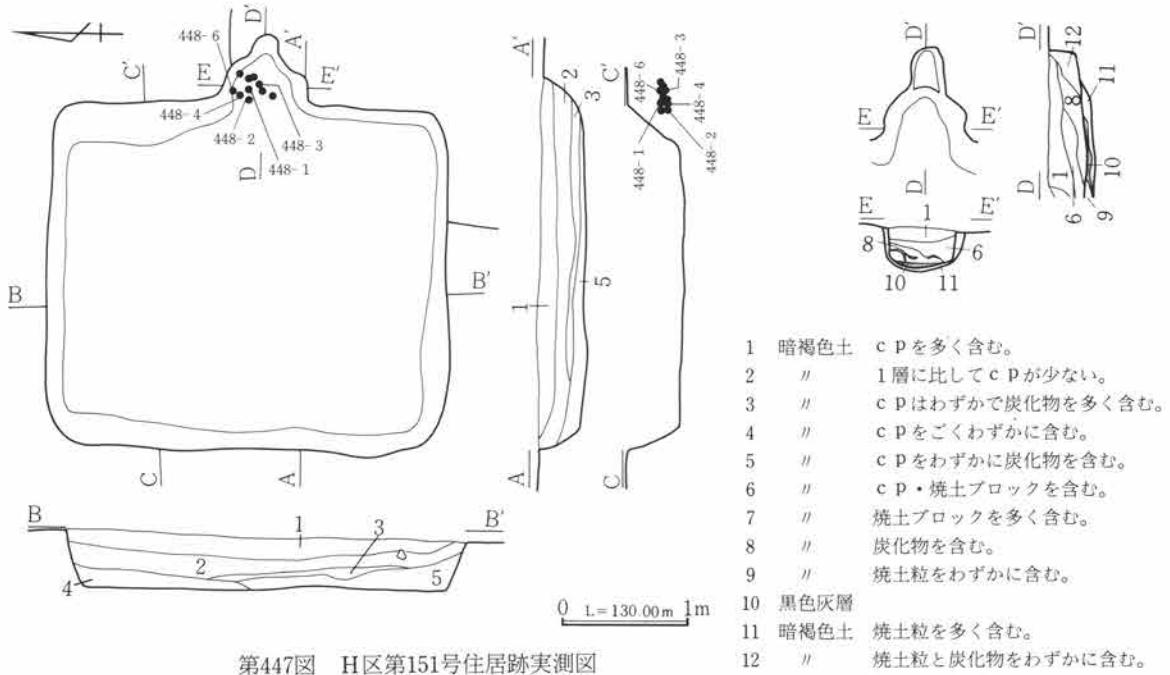
第445図 H区第150号住居跡実測図



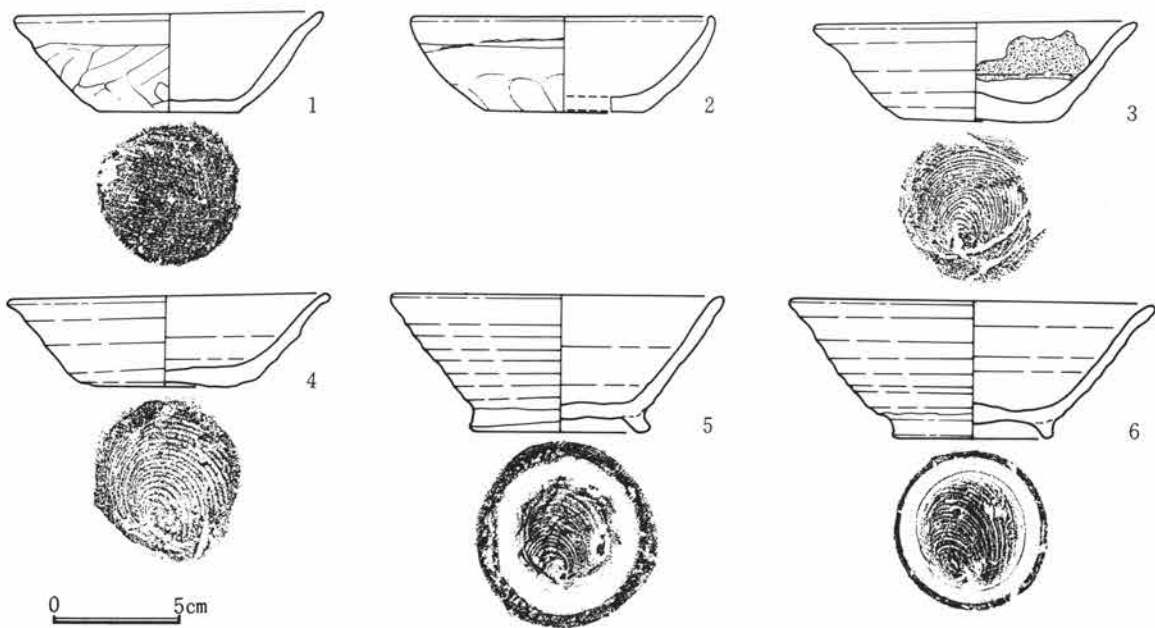
第446図 H区第150号住居跡出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

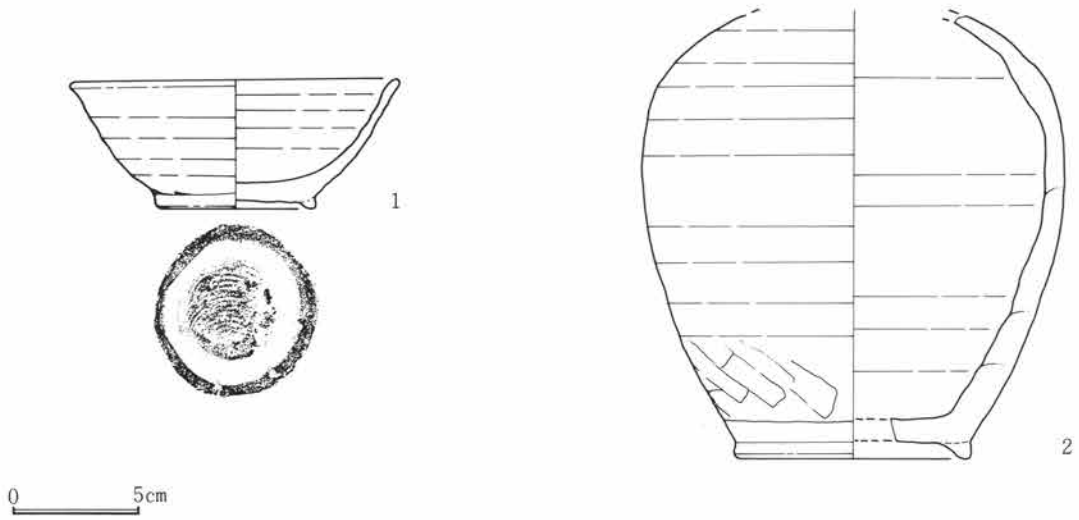
遺構名称	H区第151号住居跡	位置	18～20-H-61～63グリッド内	分類	C-2	時期	VIII	
平面形態	隅丸長方形	規模	2.70m×3.10m	主軸方位	東-2度-南	残存深度	約40cm程	
備考	壁は全周検出したが、壁溝・柱穴・貯蔵穴は未検出である。掘り方は全く観察されず、掘削面を床面として使用していたと考えられる。遺物はカマド内に集中し、覆土中出土のものは少量である。							
カマド	位置・形状	東壁ほぼ中央・凸字形			主軸方位	東-5度-南		
規模	全長	86cm	屋外長	71cm	屋内長	15cm	袖間幅	1cm
	燃烧部幅	65cm		煙道幅	27cm			
備考	焚口は床面と同レベルで、燃烧部も平坦である。煙道は燃烧部からわずかに段を有している。袖は両袖共残存せず、支脚も検出されていない。掘り方段階でもこれらの掘え方は未検出である。							



第447図 H区第151号住居跡実測図

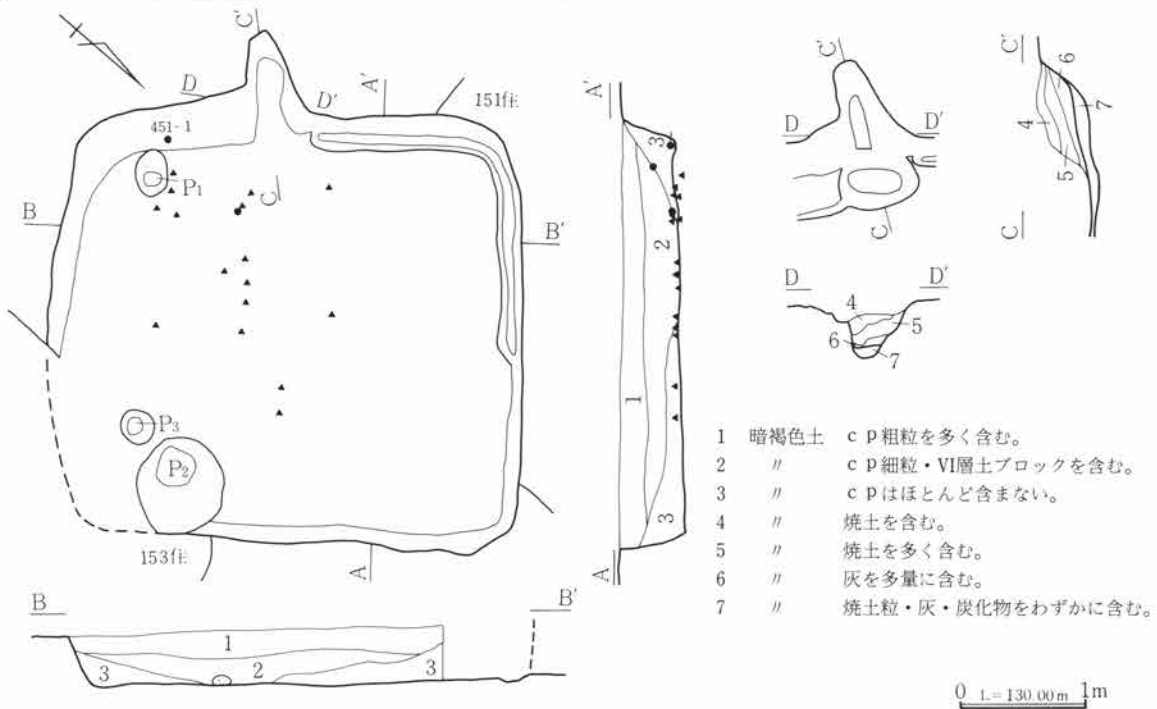


第448図 H区第151号住居跡出土遺物実測図



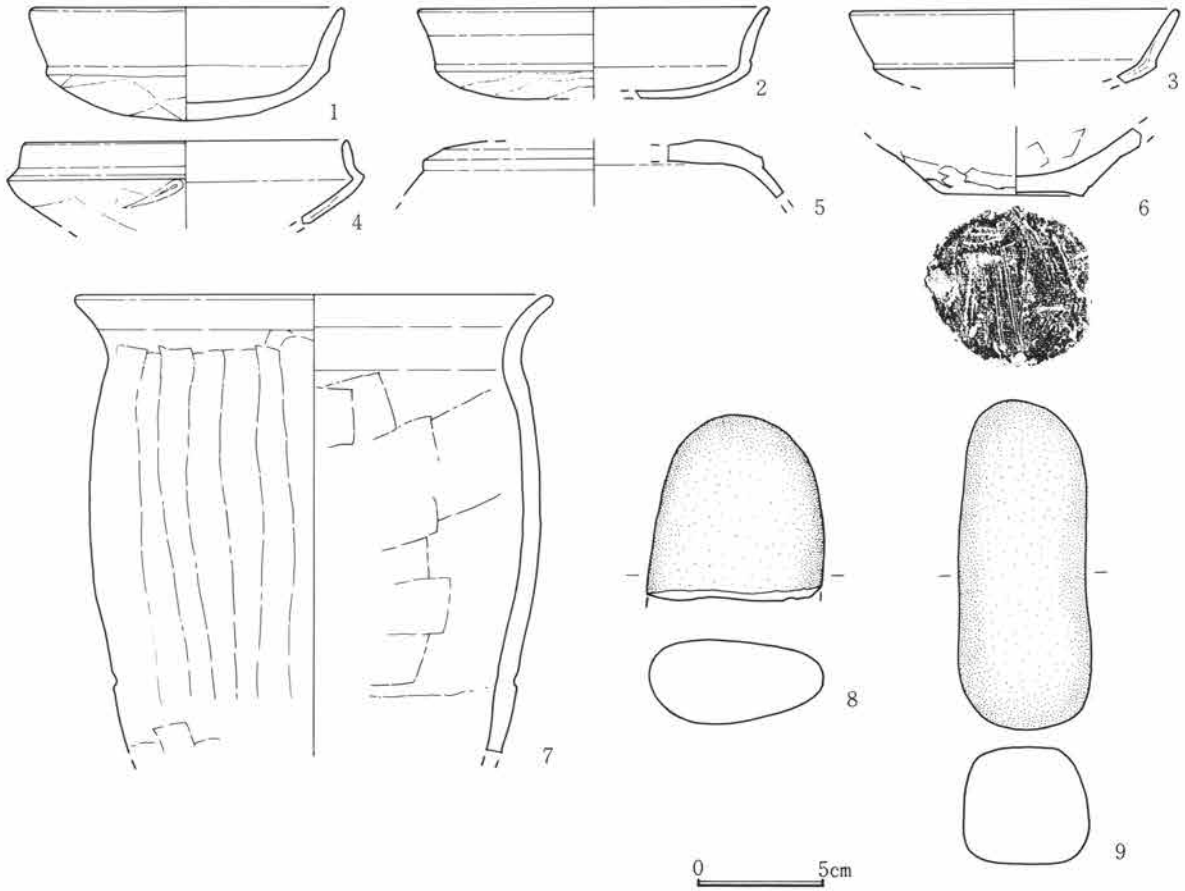
第449図 H区第151号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第152号住居跡	位置	17~19-H-60~62グリッド内	分類	A-2	時期	II
平面形態	隅丸方形?	規模	3.30m×3.70m	主軸方位	西-40度-南	残存深度	約40cm程
備考	南東コーナー部で第153号住居跡と重複する。壁溝は北西コーナー部を含む一部しか検出されなかった。ピットは3個検出したが、柱穴とは考えられない。遺物は中央部に散漫に検出された。						
カマド	位置・形状	西壁中央わずかに南寄り・舌状		主軸方位	西-42度-南		
規模	全長 82cm 屋外長 63cm 屋内長 19cm 袖間幅 1cm 燃烧部幅 20cm 煙道幅 1cm						
備考	袖は屋内に長く伸びていたと考えられるが、全く残存していない。灰・焼土共に未検出で残存状態は不良である。唯一掘り方段階で燃烧主体と思われる位置に、楕円形の掘り込みを検出した。						



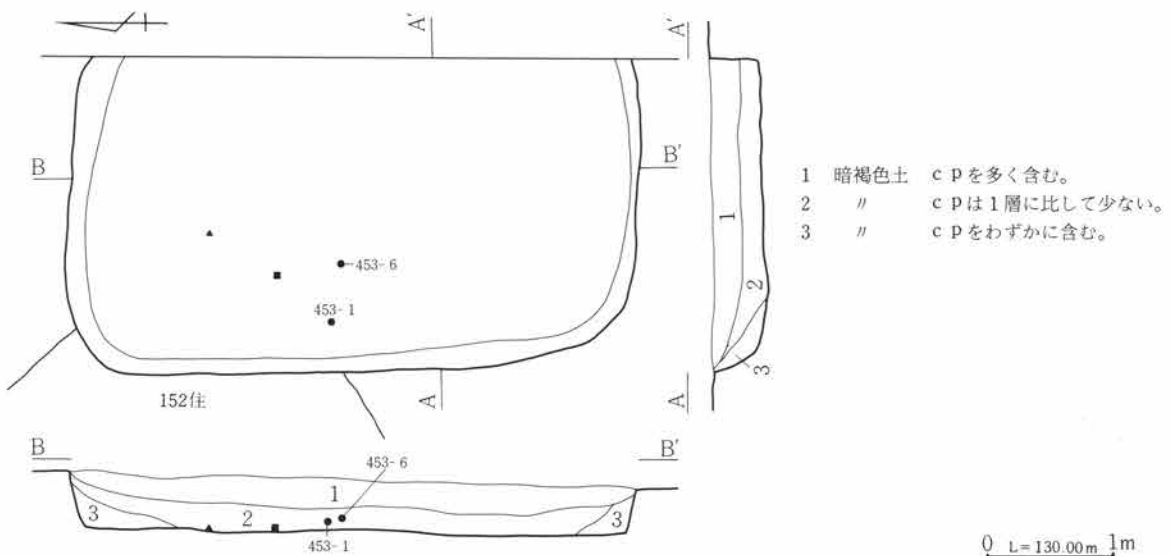
第450図 H区第152号住居跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



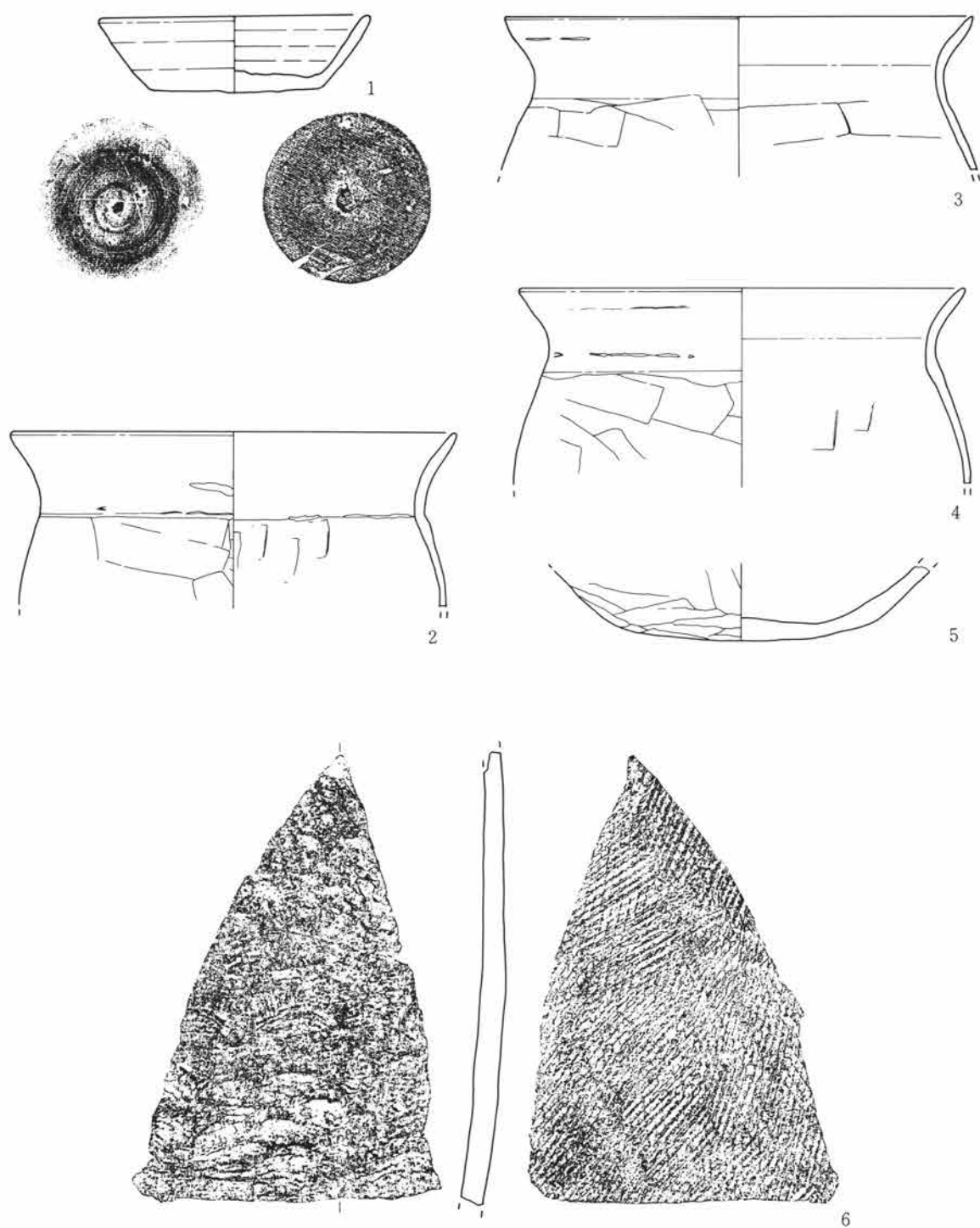
第451図 H区第152号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	H区第153号住居跡	位置	16～19-H-59～61グリッド内	分類	—	時期	VI
平面形態	隅丸方形？規模	— m×4.50m	主軸方位	— 一度 —	残存深度	約 30cm程	
備考	南北農道下の調査で西壁及び南北両壁の一部を検出したが、先行調査においてカマド等は検出されなかった。壁溝・柱穴は未検出で、遺物は覆土中出土のものを含まない。						



第452図 H区第153号住居跡実測図

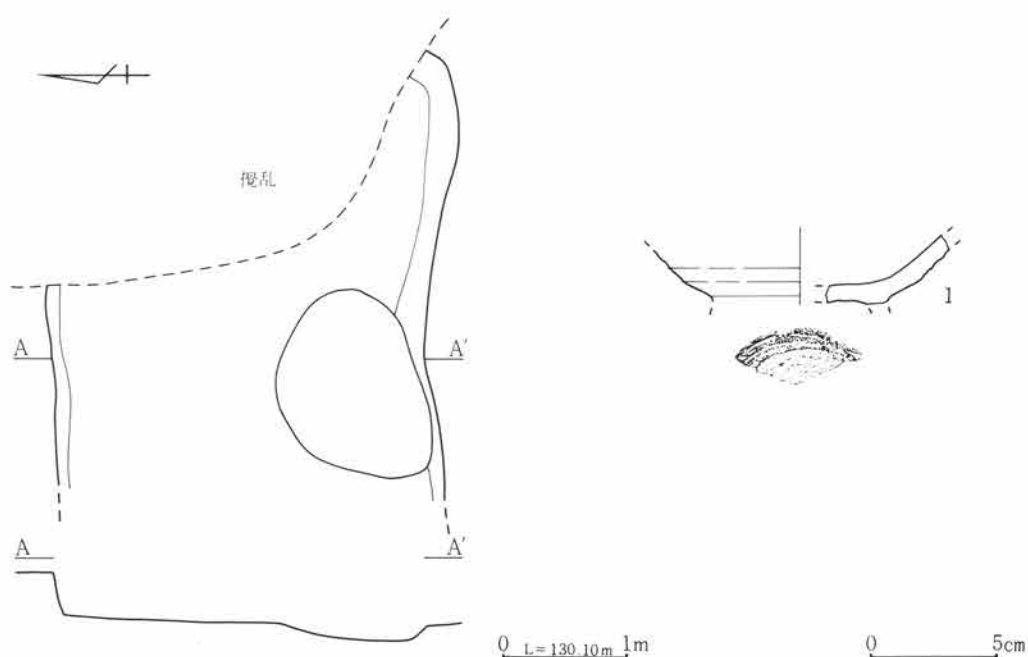
第3章 検出された遺構・遺物



第453図 H区第153号住居跡出土遺物実測図

0 5cm

遺構名称	H区第155号住居跡	位置	20・21-H-61~63グリッド内	分類	—	時期	—
平面形態	不明	規模	— m×3.00m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約 30cm程
備考	南北農道下の調査時に検出したもので、西半は未検出で、東側は攪乱を受けているため、全体像は明確でない。しかし、南東コーナーらしき部分もあり、隅丸長方形プランとみられる。						



第454図 H区第155号住居跡・出土遺物実測図

掘立柱建物跡

F・G・H区(南半)で掘立柱建物跡は、3棟検出された。しかし3棟共最も北寄りのH区に位置し、F・G区には1棟も検出されていない。この掘立柱建物跡は、I・J区、つまり当区の北側に分布の中心があり群をなして存在している。これらの掘立柱建物跡群と、当区検出の3棟を一連のものともみた場合、この3棟が、掘立柱建物群の南端に位置することになる。しかし、北側で検出された一群とは主軸方位を異にすることから、時期が違う可能性が高い。

当区検出の3棟のうち第1・2号掘立柱建物跡は、同形式のもので東西に並び、主軸方位が同一で同一線上に位置している。第3号掘立柱建物跡は、第1・2号と比較して、柱穴規模等が若干小規模であり、全体像が完全にとらえられていない。

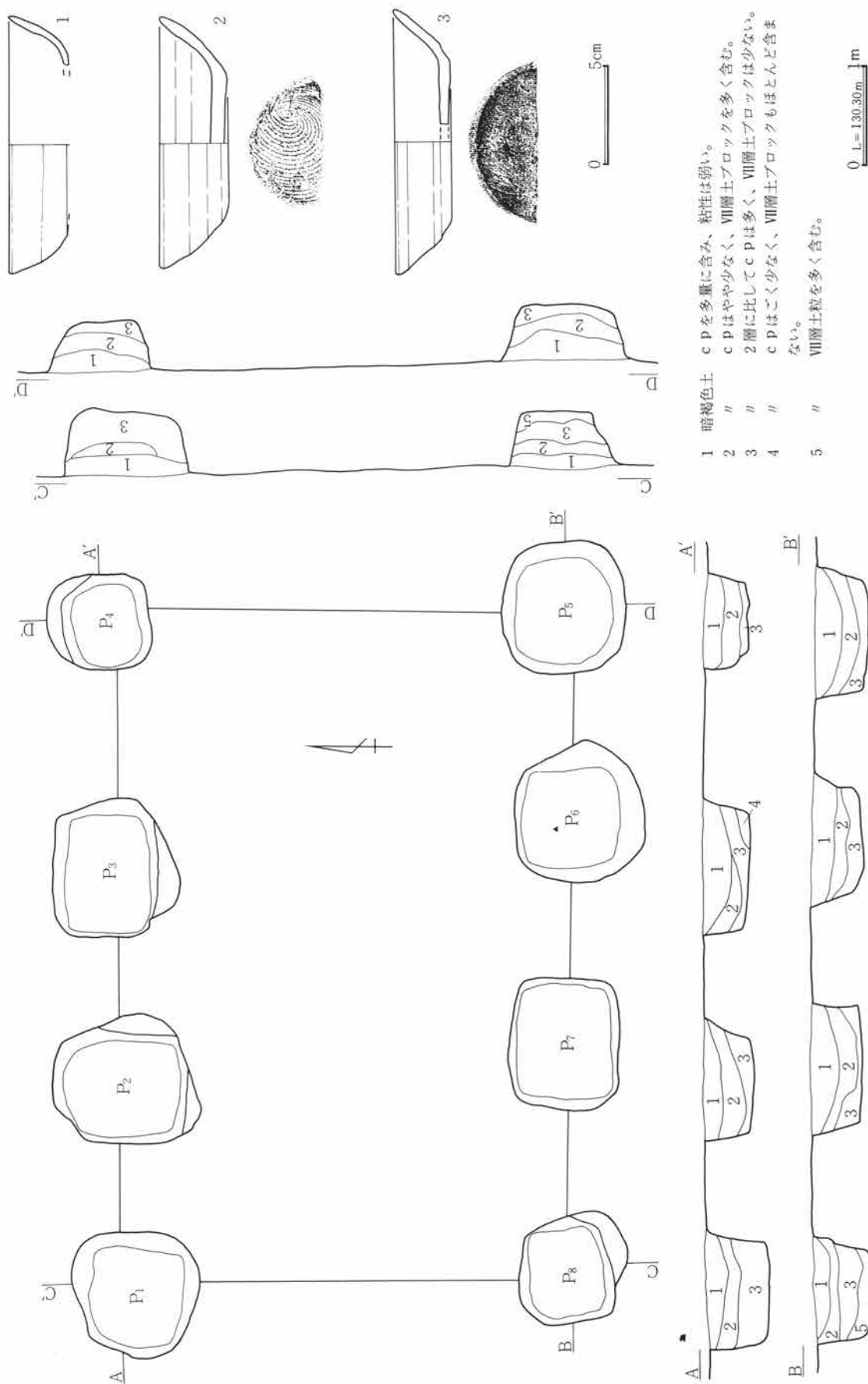
H区第1号掘立柱建物跡

当跡は、3～6-H-68～72グリッド内に位置し、VI層上面で検出した。柱穴は8本検出し、周囲に他に柱穴状の掘り込みがみられないことから、この8本の柱穴で構成された1棟の建物と考えられる。

柱穴配置は、1間×3間で、規模は、北側東西長約7.95m、南側東西長約8.00m、東側南北長約5.95m、西側南北長約5.60mである。柱穴は方形プランで、規模は、最小のもので約95×90cm、最大のもので約135×110cm、深度は約55cmでほぼそろっている。

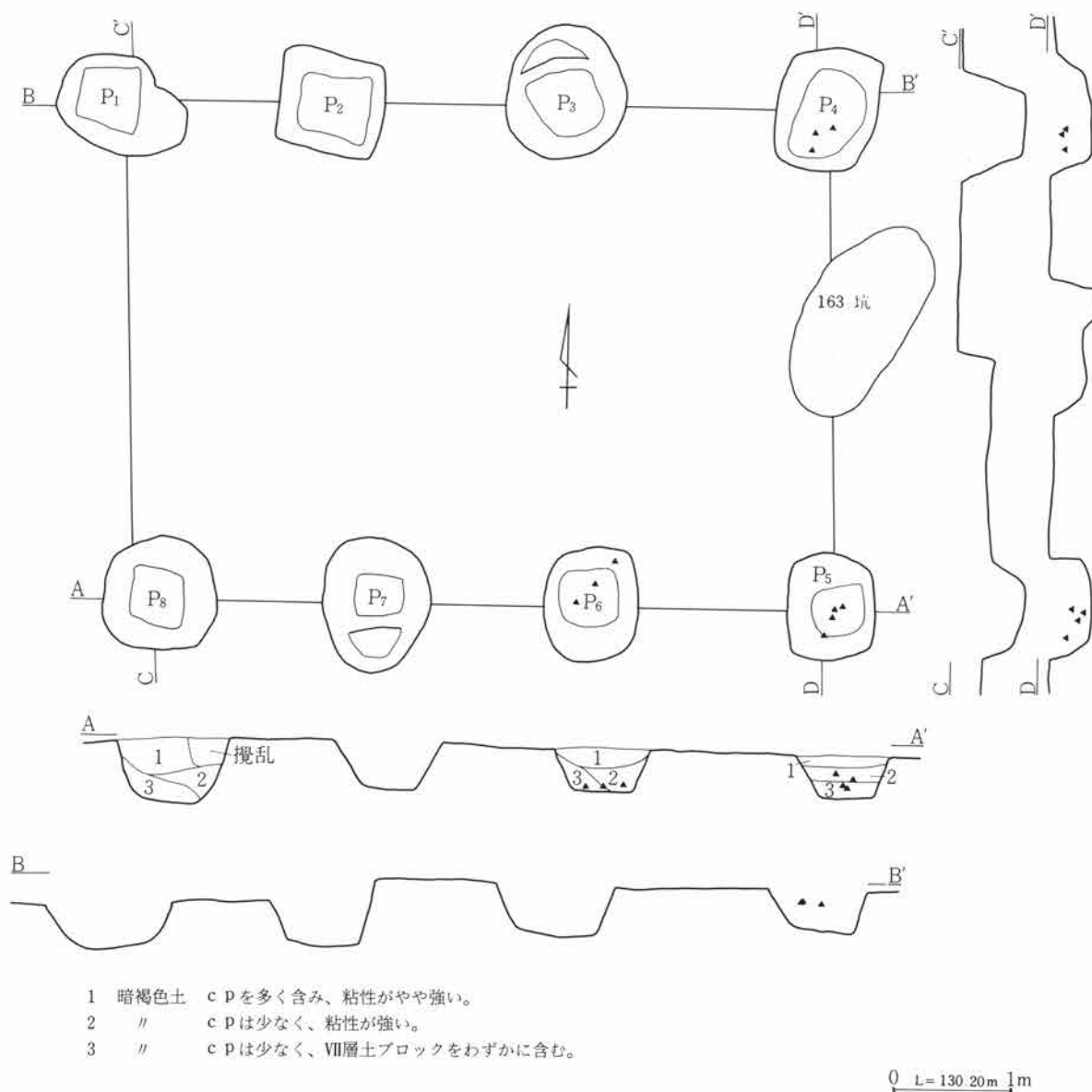
柱間長は、約2.1～2.4mであり、平均すると約2.25mの間隔となっている。これらの数値から導き出された公約数である約30cmを1尺として換算すると、南北柱列の東西の柱間長は、7～8尺という数値が得られ、南北の柱間長は、この2倍の値であることがわかった。

主軸方位は、建物の正面を南側に想定し計測すると、東-0°-南であり、隣接する第2号掘立柱建物跡とは、位置・規模・方位共に密接な関係を有していると考えられる。



第455図 H区第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



- 1 暗褐色土 c Pを多く含み、粘性がやや強い。
- 2 // c Pは少なく、粘性が強い。
- 3 // c Pは少なく、VII層土ブロックをわずかに含む。

0 130 20m 1m

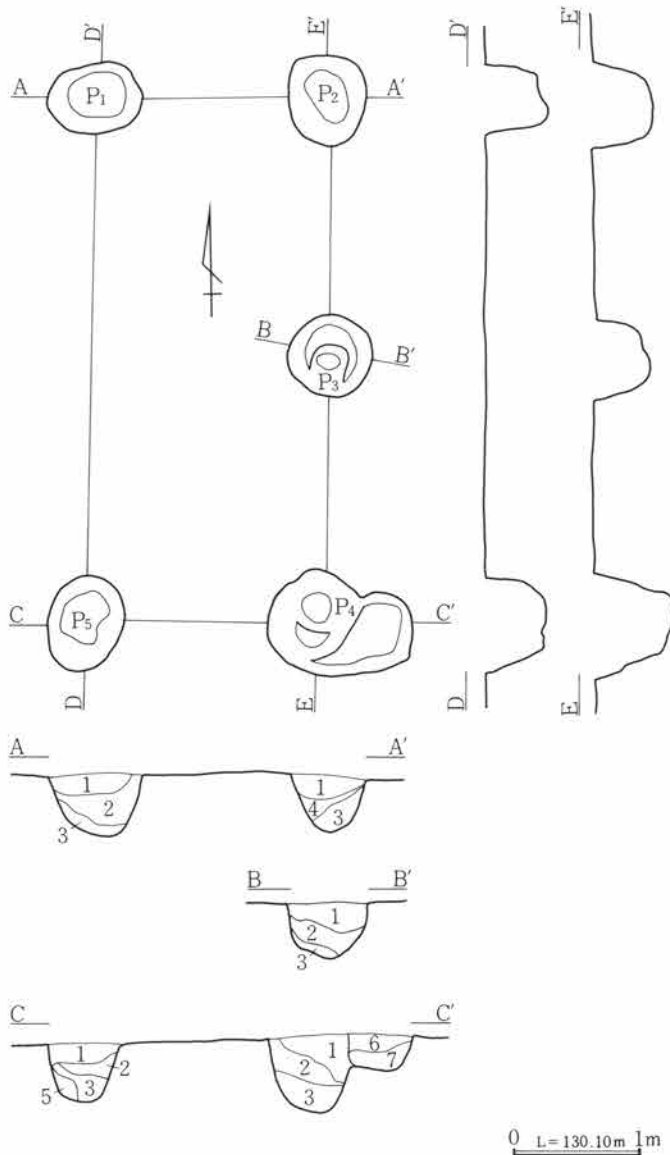
第456図 H区第2号掘立柱建物跡実測図

当跡は、3～6-H-62～66グリッド内に位置し、第1号掘立柱建物跡同様VI層上面で検出した。柱穴は8本で、周囲に関連すると思われる掘り込みが検出されていないことから、この8本で構成された1棟の建物と考えられる。

柱穴配置は、1間×3間で、規模は、北側東西長約7.07m、南側東西長約6.70m、東側南北長約5.18m、西側南北長約5.06mである。柱穴は、基本的には方形プランと考えられ、規模は最小で約58×90cm、最大で約100×95cm、深度は約40～55cmである。

柱間長は、約1.8～2.3mで、第1号掘立柱建物跡の計測値から得られた、約30cm=1尺を導入して換算すると、南北柱列の東西柱間長は6～8尺となり、南北の柱間長は、14尺となりほぼ東西柱間長さの2倍の数値が得られる。

主軸方位は、第1号掘立柱建物跡同様、南面する建物として計測すると、東 2° 北であり、規模的に第1号掘立柱建物跡よりも若干小さいものの、主軸方位にはほとんど違いがみられない。



- | | | |
|---|------|--------------------|
| 1 | 暗褐色土 | c Pを多量に含む。 |
| 2 | " | c Pは少なく茶褐色土粒を微量含む。 |
| 3 | " | c Pは少なく茶褐色土粒を含む。 |
| 4 | " | c Pは少なく炭化物をわずかに含む。 |
| 5 | 褐色土 | 粘質土で暗褐色土をわずかに含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | 1層に近似。 |
| 7 | " | 粘質土でc Pは少ない。 |



第457図 H区第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

当跡は、49-G～1-H-49～51グリッド内に位置している。

確認は、VI層土上面で行ない、5本の柱穴を検出した。しかし、柱穴の配置からみて、この5本で完結するものとは考えられない。つまり、 $P_2 \cdot P_4$ 間には P_3 が存在するが、 $P_1 \cdot P_5$ 間には何ら柱穴の痕跡は認められず、西側にさらに延びることが想定される。この未検出の柱穴は西側にG区第91号住居跡・H区第17号住居跡・第17号溝等が存在するため、失われていることが容易に想像することができる。したがって当跡は、桁行は不明であるが、梁行2間の東西に主軸を有する掘立柱建物跡であった可能性が高い。

規模は、東西長は不明であり、東側南北長のみ計測可能である。つまり約4.85mという数値が得られた。

柱穴は、円形または楕円形プランで、第1・2号掘立柱建物跡にみられたような、方形を意識したような掘り方は、下端部分においても認められない。

柱穴の規模は、径約65～80cm、深度約45～65cmで、ほぼ同規模でそろっている。

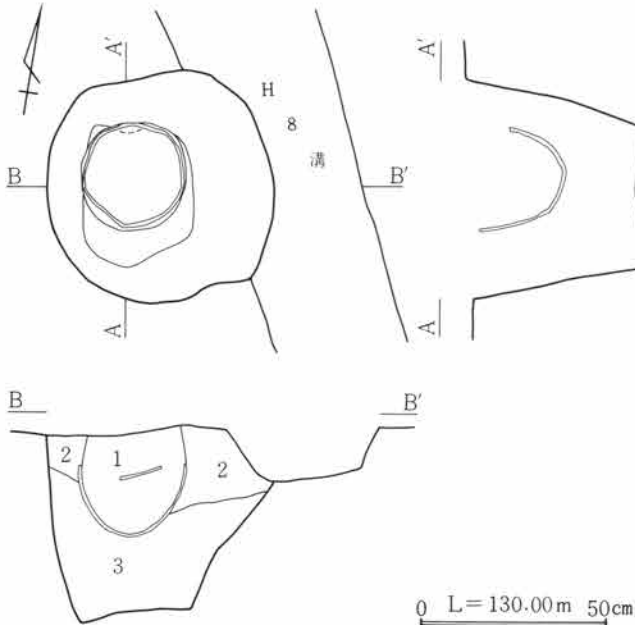
柱穴充填土は、ほぼ3層に分離可能で柱痕は全く観察されず、しかも P_4 には抜き取り穴的ピットが東側に認められることなどから、柱は残存しなかったものと考えられる。

柱間長は、 $P_1 \cdot P_2$ 間は約1.8m、 $P_2 \cdot P_3$ 間約2.0m、 $P_3 \cdot P_4$ 間約2.0m、 $P_4 \cdot P_5$ 間約1.85mで、約30cmを1尺として換算すると、6～7尺という数値が得られる。

主軸方位は、東西方向の残存が不良であるため、計測不可能であるが、ほぼ第1・2号掘立柱建物跡と同じであったと考えられる。

埋設土器

G区第1号埋設土器



- 1 暗褐色土 c Pを多く含み、砂質。
- 2 // VII層土を多量に含み、わずかにc Pを含む。
- 3 // VII層土及びブロックを多く含む。

第458図 G区第1号埋設土器実測図

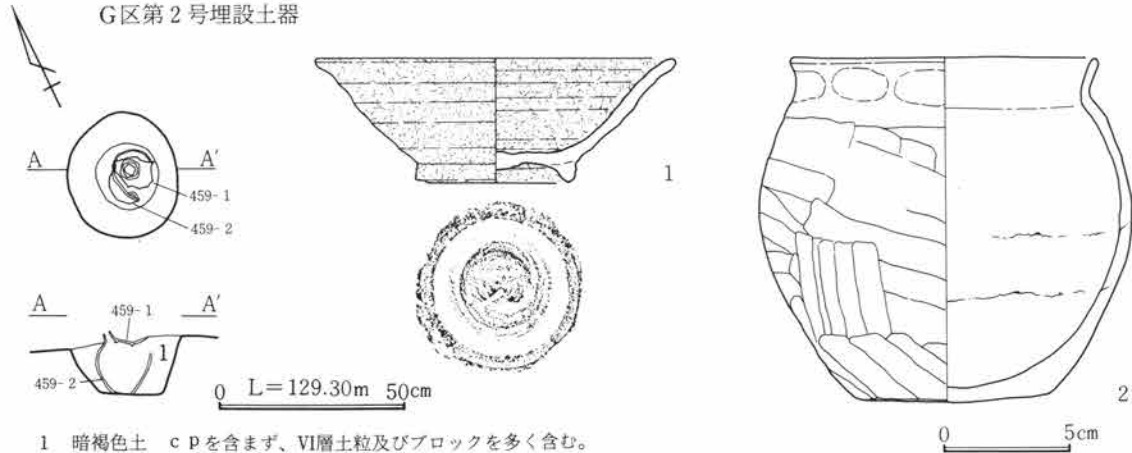
当埋設土器は、49-G-47グリッド内に位置し、VI層上面で検出した。東側の一部は第8号溝との重複によって失っている。

掘り方は、円形プランで、径約60cm、残存深度約45cmである。充填土は、上下2層に大別されたが、明確な違いとして認識されたわけではなく、連続して充填されたものと思われる。しかし、土器内部に充填していた土は、砂質で、掘り方充填土とは異質である。

埋設されていた土器は、胴部上半を欠いているが、球形に近い胴部を有する土師器の甕で、底部に小さな穿孔が行われている。埋設状態は、掘り方中位に正位埋設されていたもので、他の遺構に伴うものとは考えられない。

土器は現在のところ収蔵場所が不明で、今回の報告では図示できない。

G区第2号埋設土器



- 1 暗褐色土 c Pを含まず、VI層土粒及びブロックを多く含む。

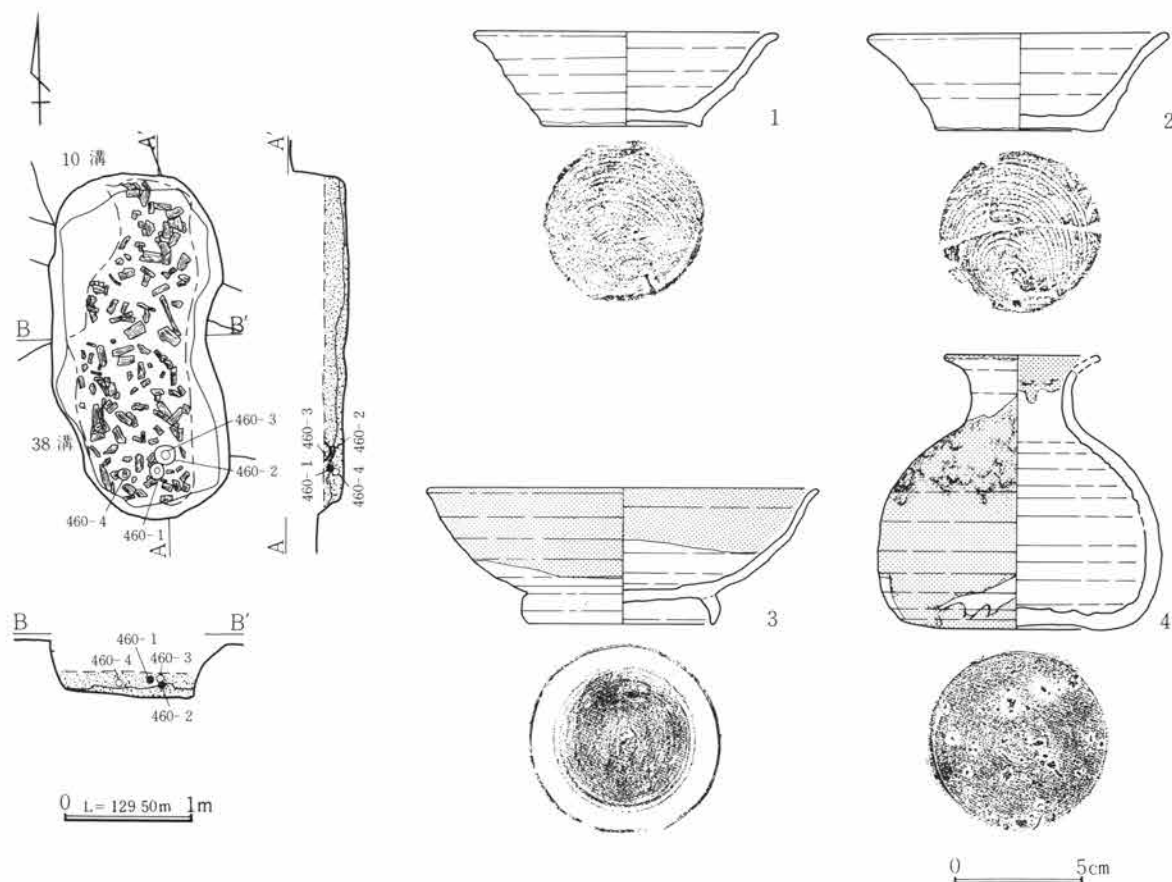
第459図 G区第2号埋設土器・出土遺物実測図

当埋設土器は、9-G-44グリッド内に位置し、VI層上面の確認段階で、上面が露呈した状態となった。掘り方は、円形プランで、径約30cm、残存深度約16cmである。充填土は、分層することはできず、c Pを全く含まない、VI層土粒及びブロックで構成されていた。

埋設土器は、土師器の甕と須恵器の坏で構成され、埋設状態は、甕の口縁部に坏が口縁部を上向きで重ねられ、掘り方中央の底面に接するように、正位埋設されていた。この坏のあり方は、明らかに甕の蓋として利用されたものであり、内部に何かを納めて埋設したものと考えられる。

土墳墓

G区第7号土墳墓



第460図 G区第7号土墳墓・出土遺物実測図

当遺構は、19・20-G-60・61グリッド内に位置し、南北農道下の調査によって、第10号溝と重複し検出された。遺構検出面はVI層土上面で、平面プランの確認は、比較的容易であった。

平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸約270cm、短軸約137cm、残存深度約40cmである。長軸方向を主軸として計測すると、北 5° 西であり、第10号溝の方位とほぼ一致している。

壁は、VI・VII層に掘り込まれており、特に北側の残存が良好で、垂直に近い状態である。底面は、VII層中で、ほぼ平坦に構築されている。

覆土は、CPを比較的少量に含む暗褐色土が主体で、均一であり、VI層土との違いは明瞭である。

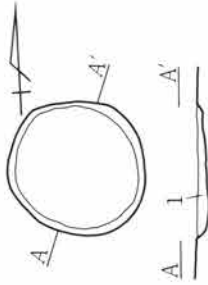
当遺構を最も特徴づけているのは、底面から最大で約20cmの厚さで検出された木炭層である。これらの木炭が、遺構内で焼成されたものでないことは、周囲に焼成を受けた痕跡がなく、焼土・灰等がみられないことから容易に判断することができる。また、木炭は、長さ約30cm程のものまであり、配置されたような規則性は認められないが、底面全域を覆って検出されており、意識的に敷きつめられたものであることがわかる。

遺物は、須恵器の坏2個体、灰釉陶器の碗及び瓶各1個体が、南壁寄りの木炭層上から、口縁上向の状態出土した。これらはほぼ完形であり、第460図2・3は2枚重ねの状態出土していることなどから、埋納された可能性が高い。この遺物出土及び木炭層のあり方は、当遺構が土墳墓であったであろうことを示唆している。しかし骨片は全く検出されておらず、断定はできない。

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

土坑

F区第1号土坑

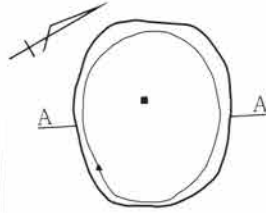


平面形態 円形
位置 39・40-F-56・57
規模 1.10×1.05m

1 暗褐色土 c Pを含む。

L=129.20m

F区第2号土坑

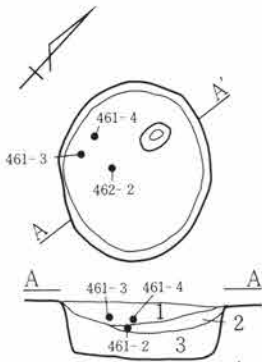


平面形態 円形
位置 39-F-57・58
規模 1.46×1.26m
主軸方位 西-30°-北

1 暗褐色土 c Pと炭化物を若干含む。
2 // c Pをわずかに含み小礫が混入。
3 // c Pを若干含み粘性が強い。

L=129.20m

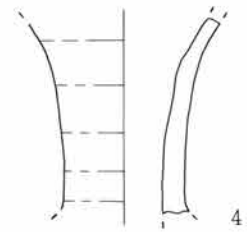
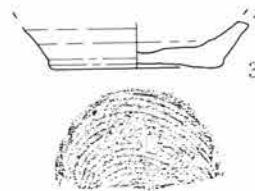
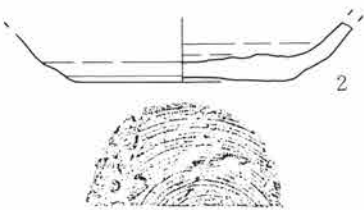
F区第3号土坑



平面形態 円形
位置 39・40-F-57・58
規模 1.42×1.22m
主軸方位 北-45°-西

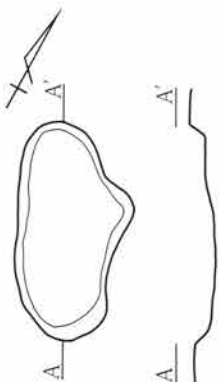
1 暗褐色土 c Pと炭化物を含む。
2 // 1層に比してc P・炭化物共に少ない。
3 // 2層より更に少ない。

L=129.20m



0 5cm

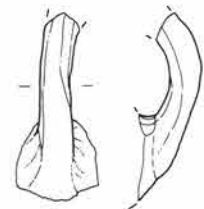
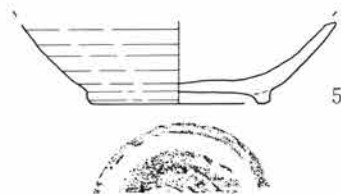
F区第4号土坑



平面形態 楕円形
位置 47・48-F-56・57
規模 1.74×0.70m
主軸方位 北-29°-西

L=129.40m

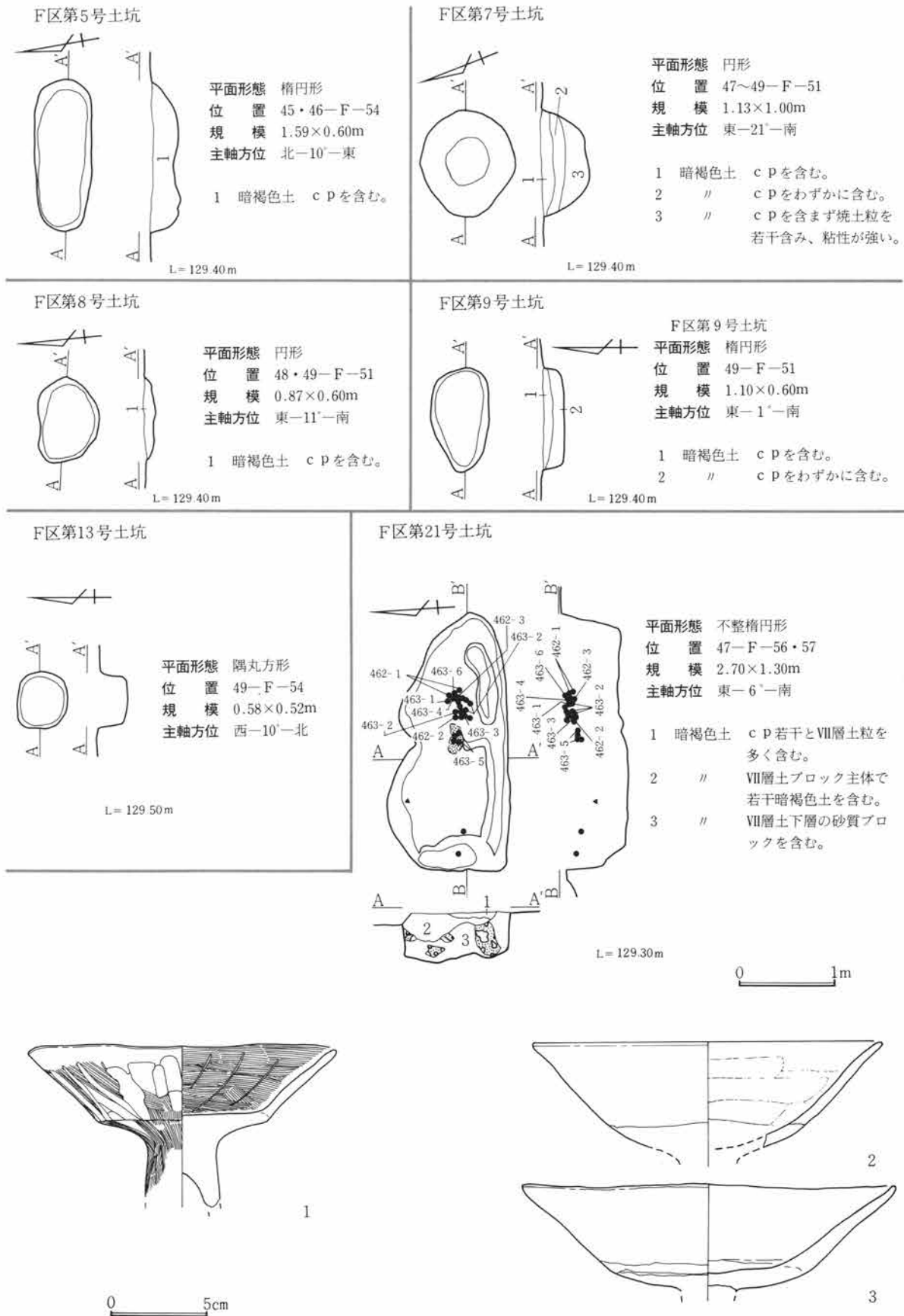
0 1m



0 5cm

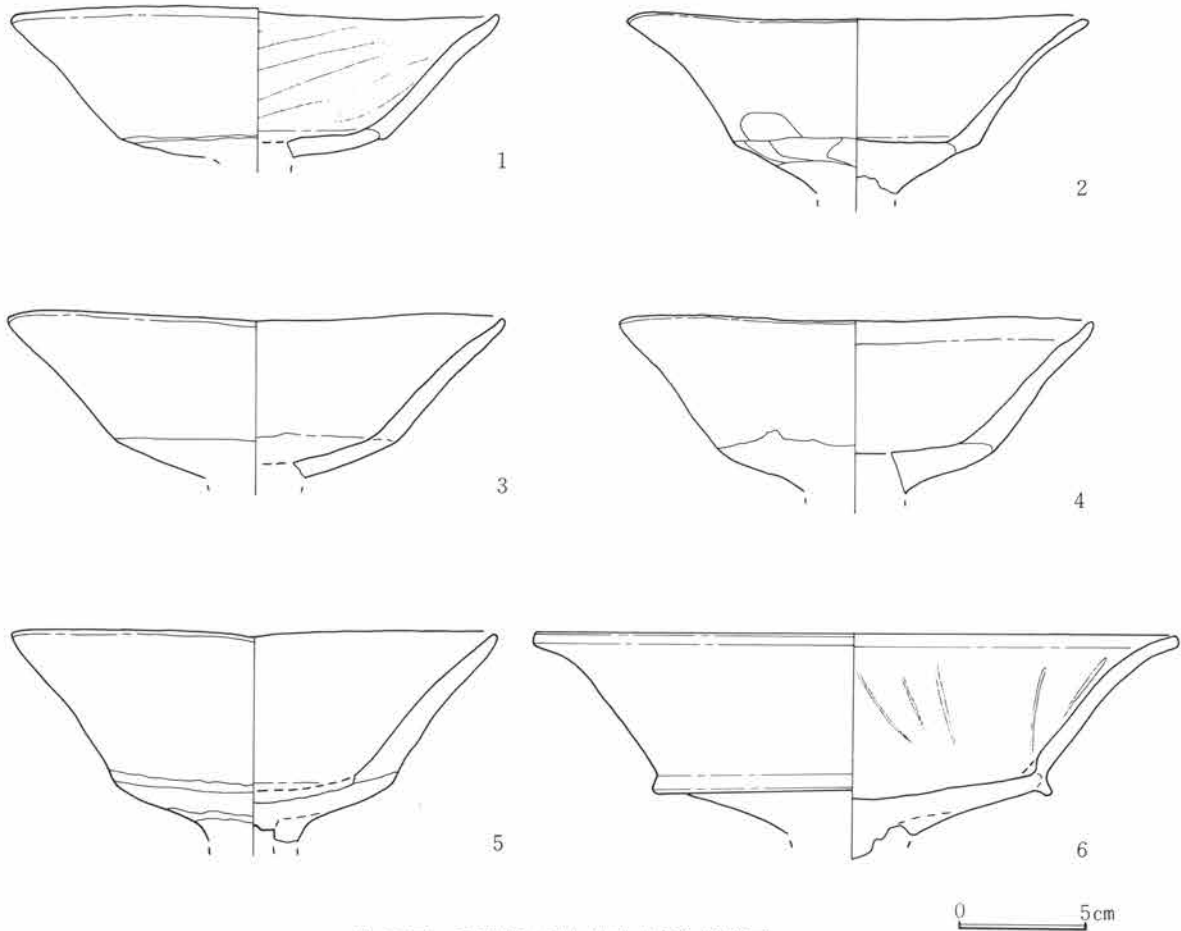
第461図 土坑・出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構・遺物



第462図 土坑・出土遺物実測図(2)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第463図 F区第21号土坑出土遺物実測図

当土坑は、47-F-56・57グリッド内に位置し、VI層上面で検出した。

平面形態は、不整の三角形状を呈するが、北壁に凹凸が多い。規模は、長軸約270cm、短軸約130cm、残存深度約60cmである。長軸方向を主軸として計測すると、主軸方位は、東 -6° 南である。

遺構の確認はVI層上面であるため、C P及びVII層土ブロックの有無によって、土坑の範囲をとらえることができた。

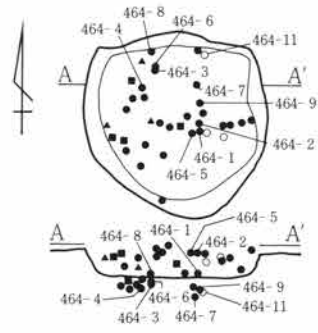
覆土は3層に分層可能である。1層は、C Pを含む暗褐色土主体の土であり、他の遺構覆土に近いもので土坑中央部にわずかにみられた。2・3層は、VII層土及びそれ以下に位置する砂質土ブロックが主体で、特に土坑中央部に多量に混入している。これらのブロックは、径約20cm前後のものが多く、自然に土坑内に流入したとは考えられない。したがって2・3層は、土坑掘り上げ後に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物は、土師器の高坏が9個体で、他の器種はみられない。この高坏が2～3個重なった状態で、2層上面の土坑中央部付近に集中して出土しており、周辺への広がりは全く認められない。この遺物出土と覆土のあり方から、これらの遺物は、土坑上面に置かれたものであろうと思われる。高坏は、全て脚部を失っているが、土坑内から脚部は出土していないことから、土坑に持ち込まれた時点で、すでに脚部を欠いていたものと考えられる。また、坏内面は大半が「ハゼ」状の剝落が観察され、露呈した状態であったことを裏づけている。その他、坏内部より赤色顔料が多量に出土したことが特徴である。

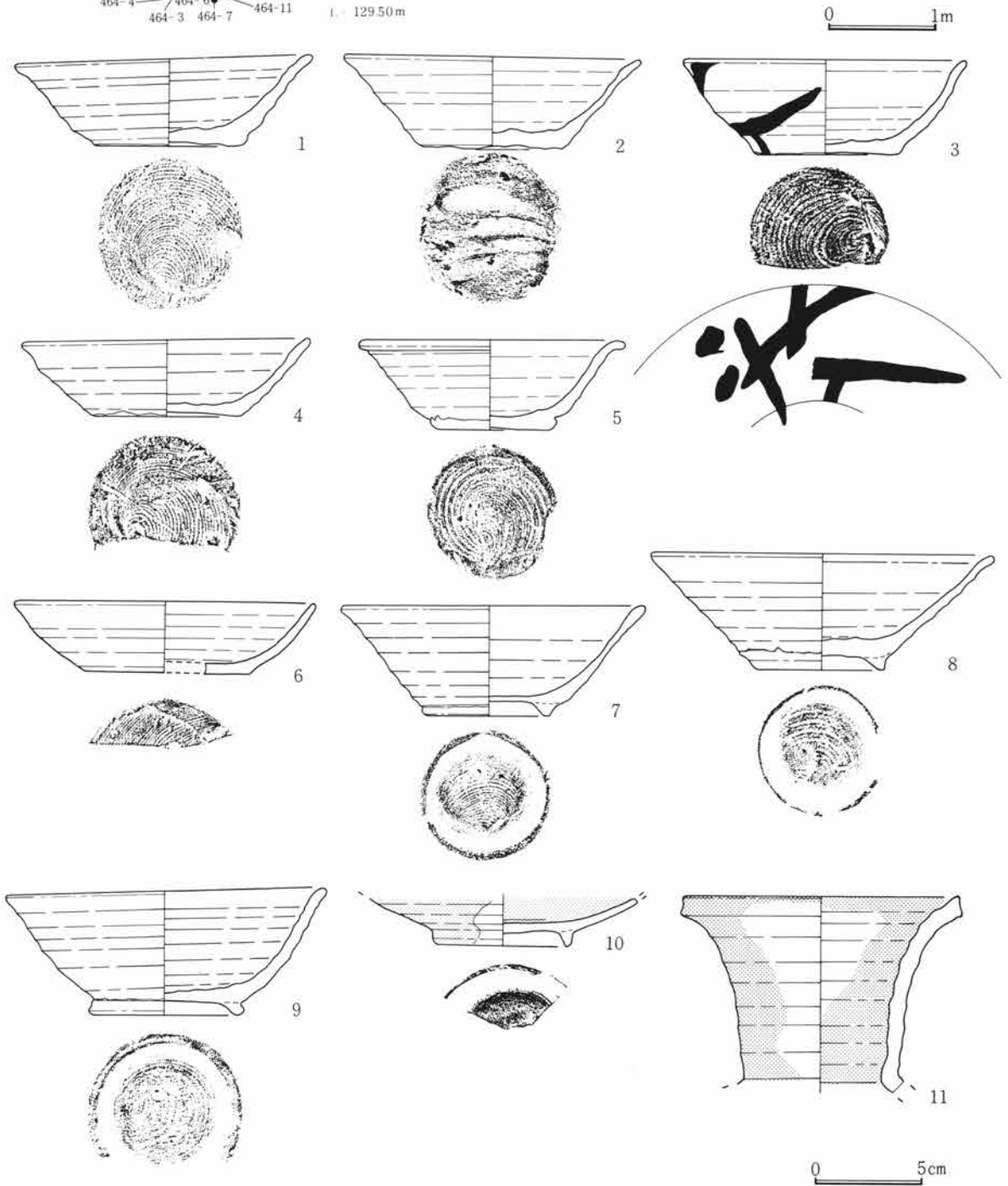
以上のことから、当土坑が墓壇または祭祀的な遺構である可能性が高い。また、今回の調査では、同時期の住居跡等は全く検出されておらず、特異な存在である。

第3章 検出された遺構・遺物

F区第22号土坑



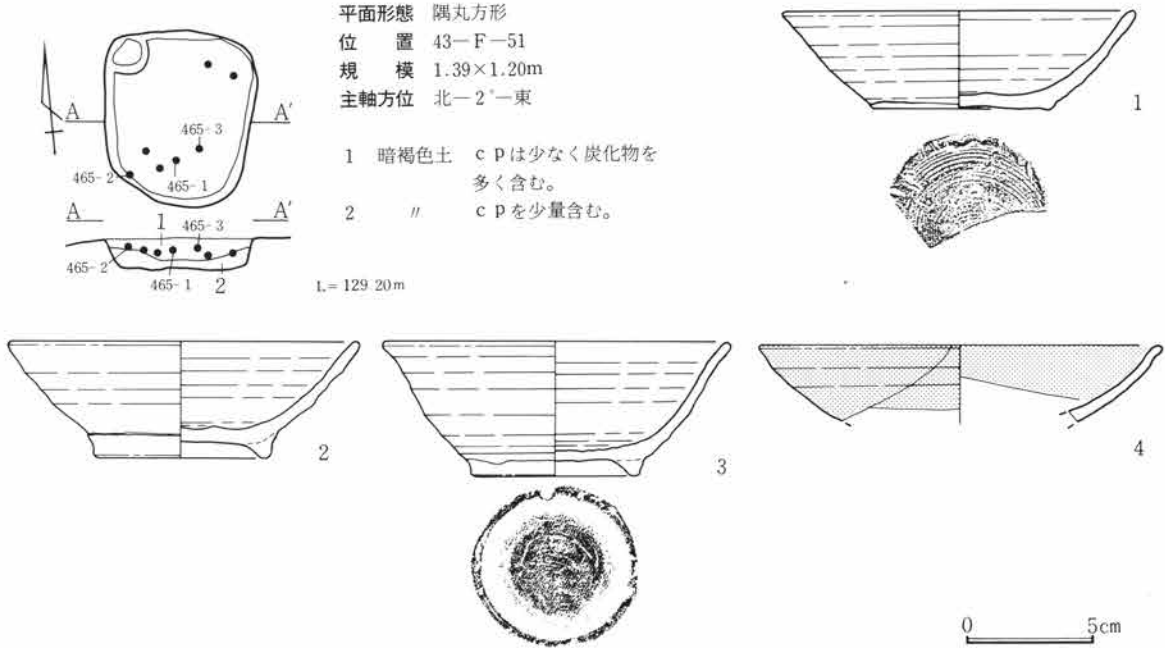
平面形態 円形
 位置 47・48-F-64
 規模 1.56×1.45m
 主軸方位 東-35°-南



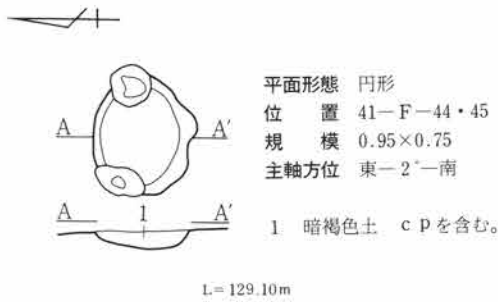
第464図 F区第22号土坑・出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

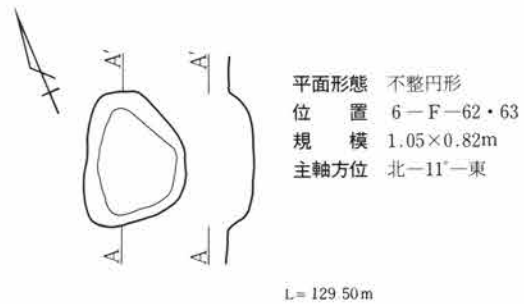
F区第25号土坑



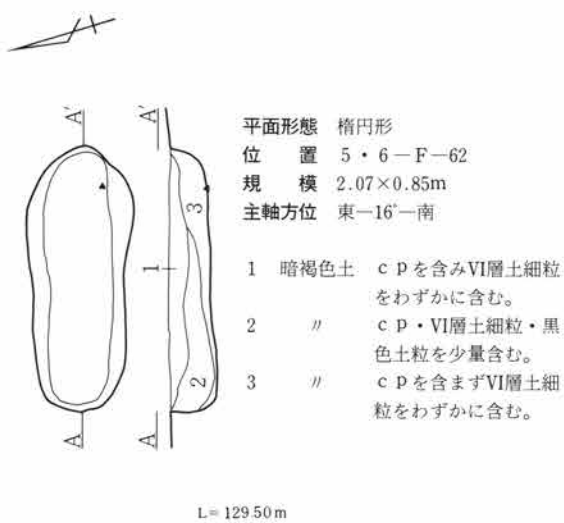
F区第29号土坑



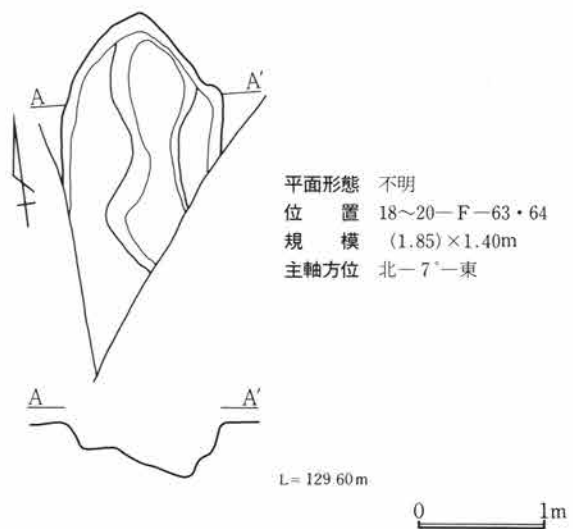
F区第94号土坑



F区第95号土坑



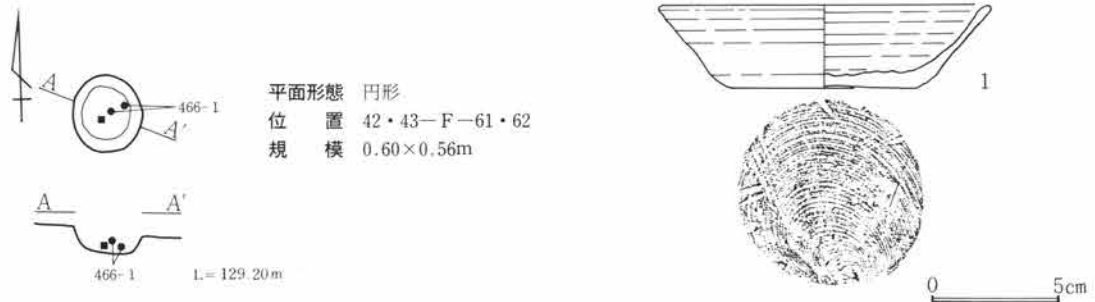
F区第96号土坑



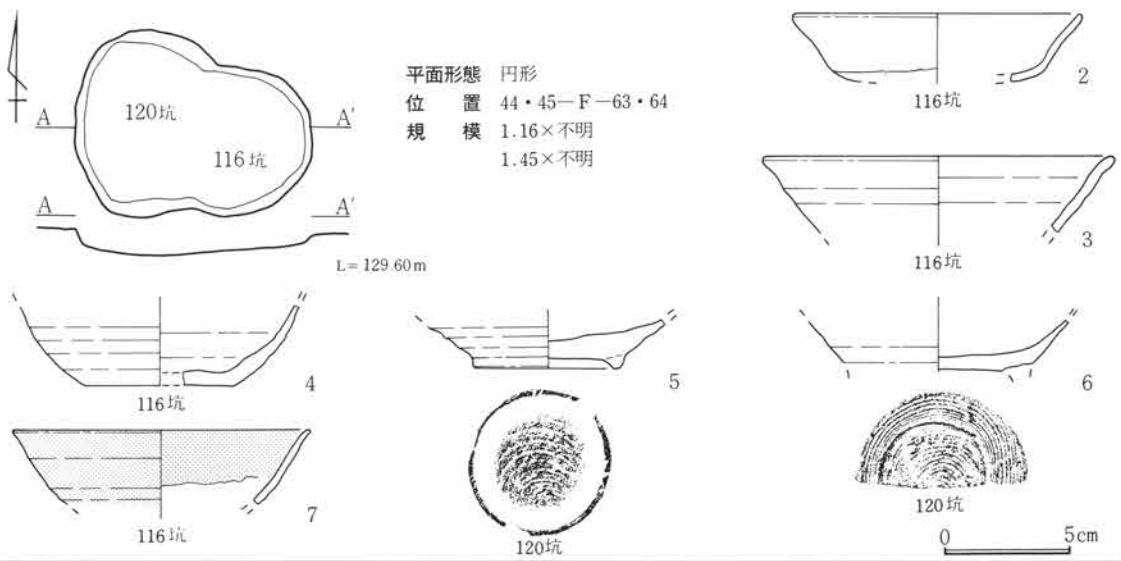
第465図 土坑・出土遺物実測図(3)

第3章 検出された遺構・遺物

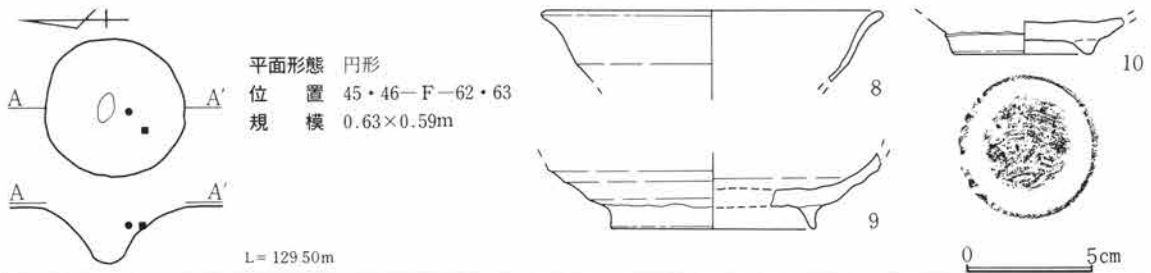
F区第113号土坑



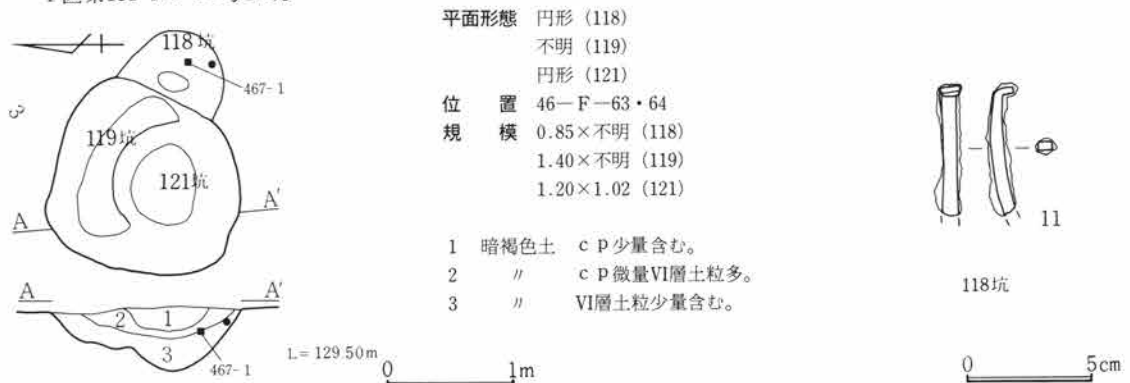
F区第116・120号土坑



F区第117号土坑

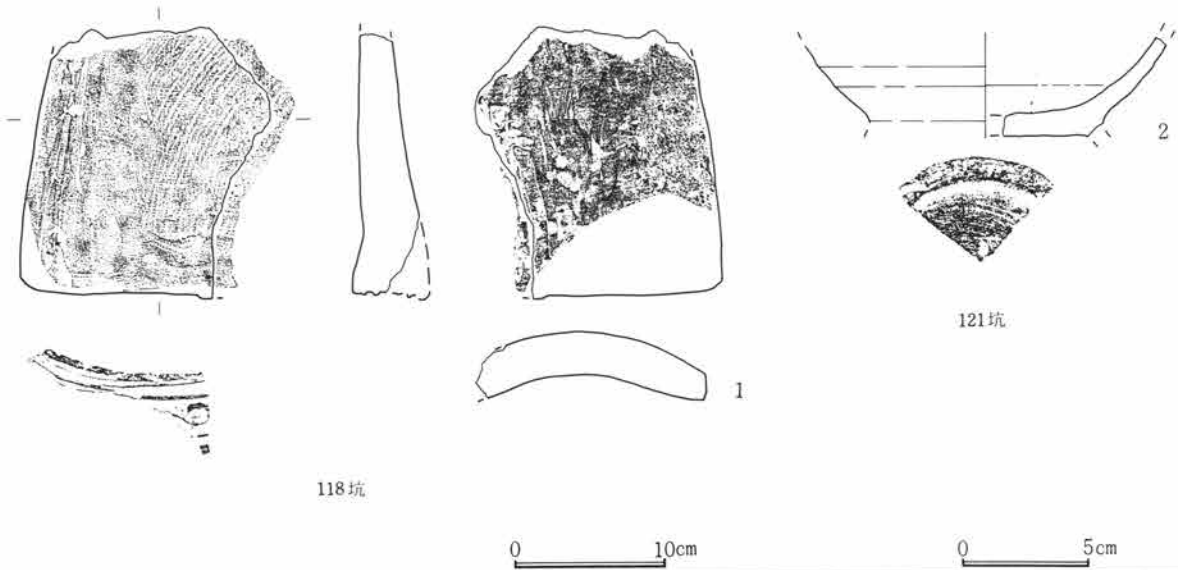


F区第118・119・121号土坑

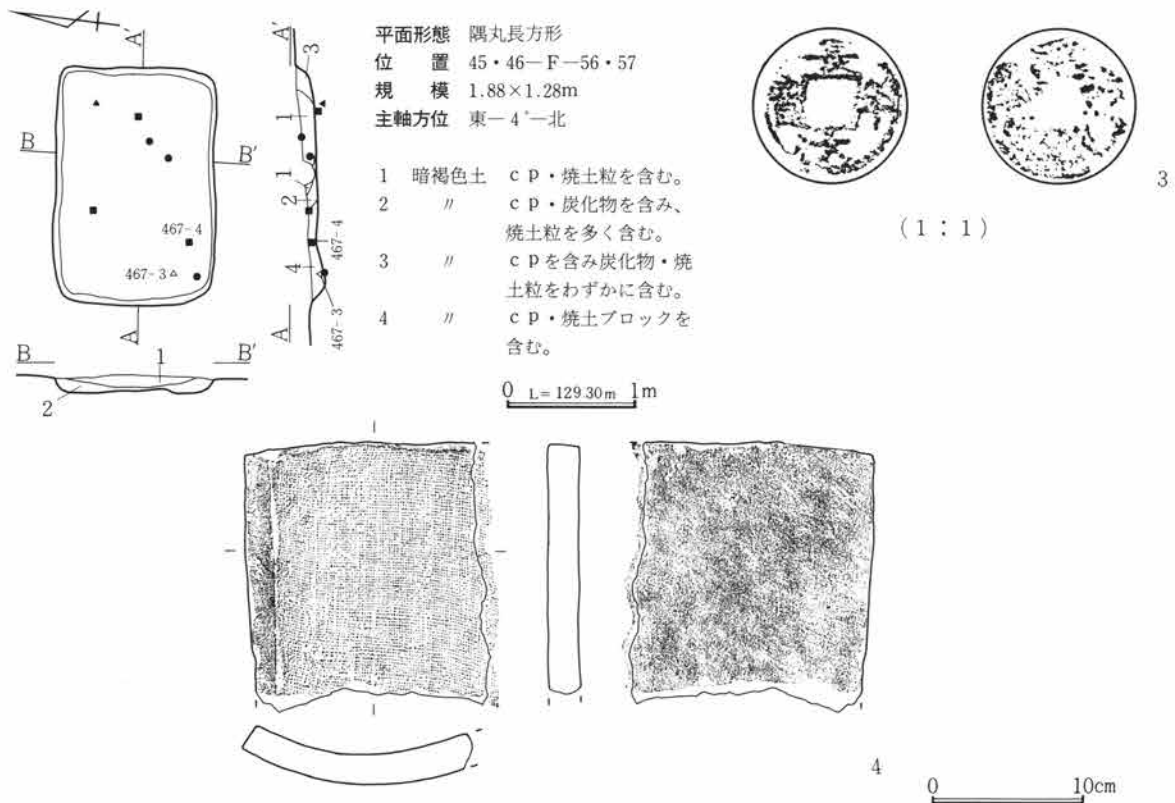


第466図 土坑・出土遺物実測図(4)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



F区第122号土坑



第467図 土坑・出土遺物実測図(5)

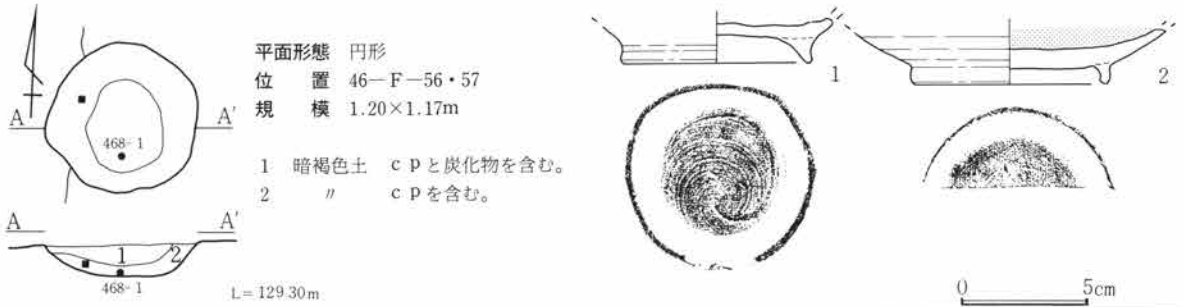
当土坑は、45・46-F-56・57グリッド内に位置し、VI層土上面で確認した。平面プランは、長方形を呈し、規模は、約188×128cm、深度約13cmである。主軸方位は、長辺方向として計測すると、東-4°-北である。覆土は炭化物・焼土粒・ブロック等の量比で4層に分層した。この焼土粒や炭化物が覆土中の下層から上層にわたって入っていることは、これらの覆土が自然に流入したものでないことを物語っている。

遺物は、南西コーナー部に若干のまとまりを有しており、ここから「長年大宝」が1点出土した。

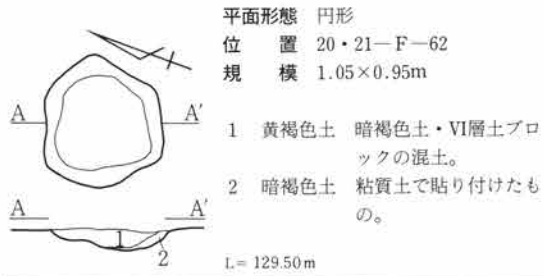
当土坑は、形態・覆土・出土遺物から、墓塚的な性格であった可能性が高い。

第3章 検出された遺構・遺物

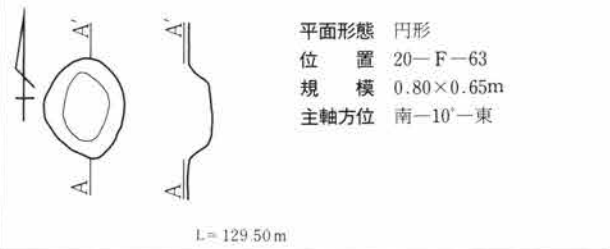
F区第123号土坑



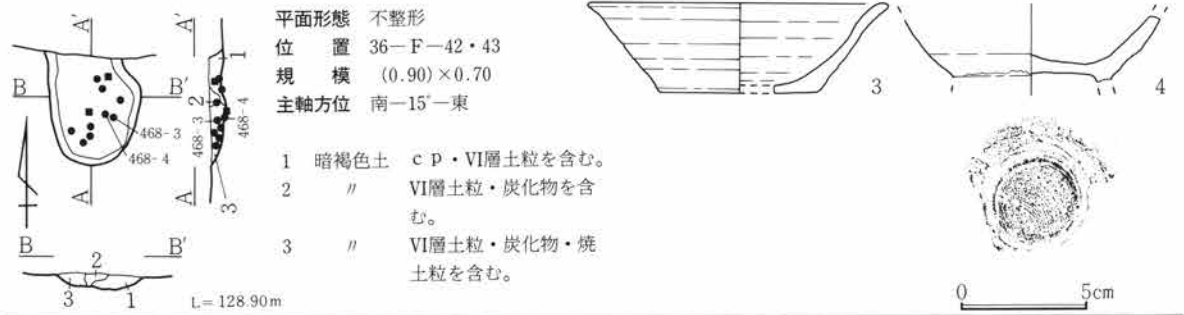
F区第208号土坑



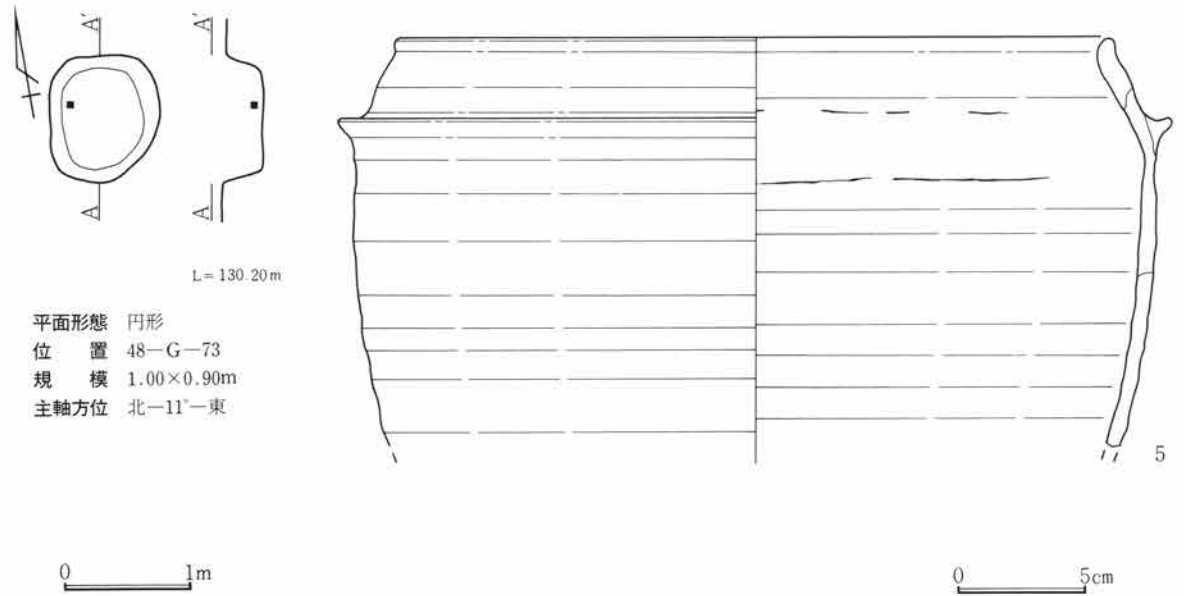
F区第212号土坑



F区第523号土坑

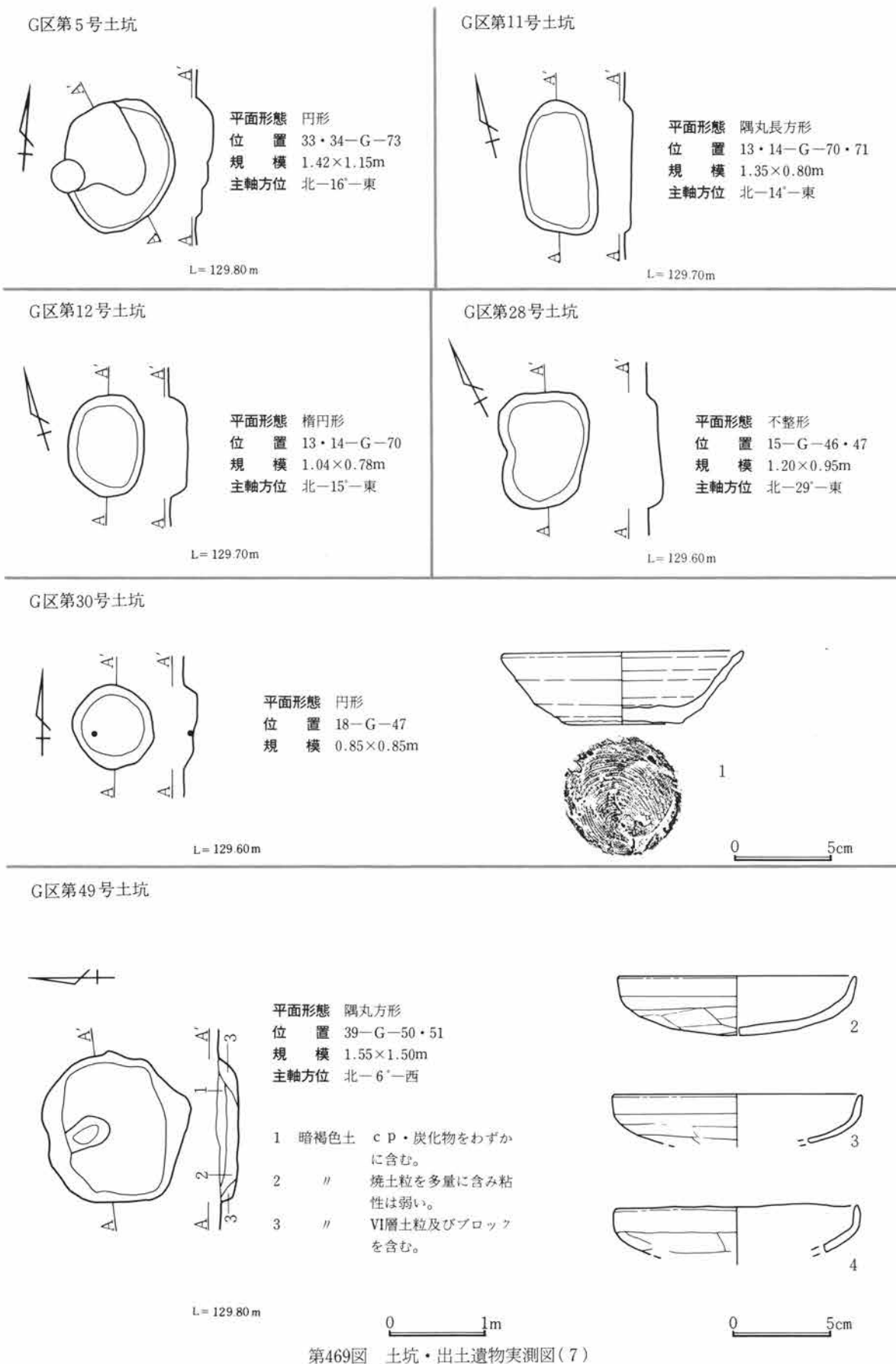


G区第1号土坑



第468図 土坑・出土遺物実測図(6)

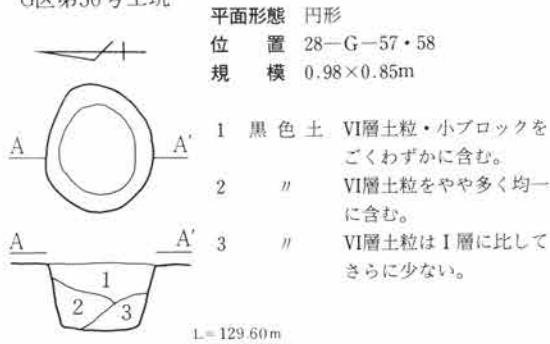
第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第469図 土坑・出土遺物実測図(7)

第3章 検出された遺構・遺物

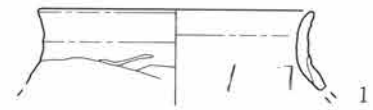
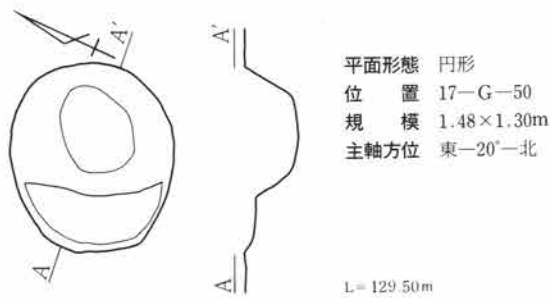
G区第50号土坑



当土坑は、28-G-57・58グリッド内に位置し、IV層土上面で検出した。平面形は円形で、規模は、径約98cm、深度約50cmである。

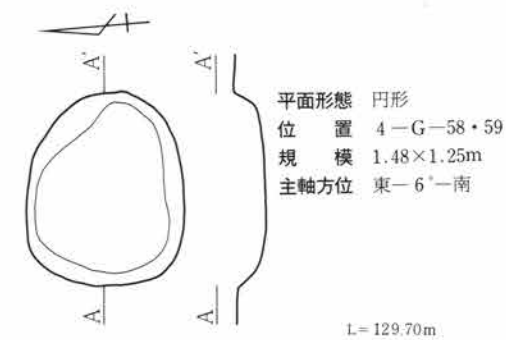
覆土は、VI層土粒を若干混入したV層土が主体で、他の土坑覆土とは、構成する上層に差があるのは明らかである。縄文時代か弥生時代に属するものか？。

G区第52号土坑

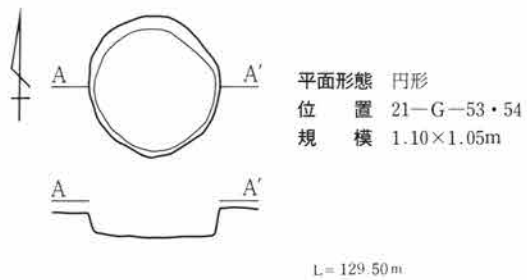


0 5cm

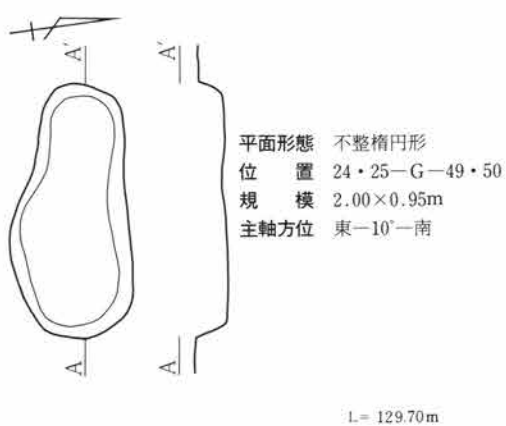
G区第55号土坑



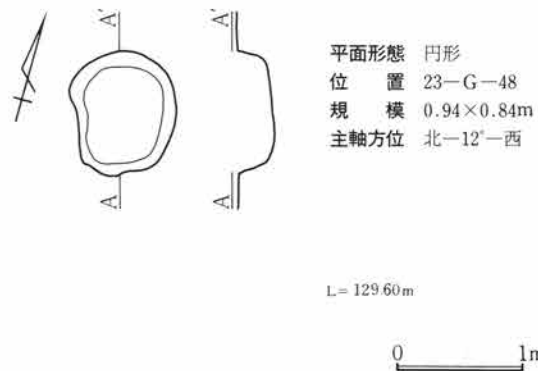
G区第70号土坑



G区第74号土坑



G区第75号土坑

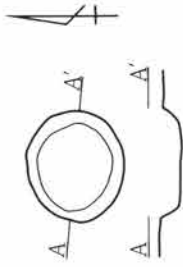


0 1m

第470図 土坑・出土遺物実測図(8)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

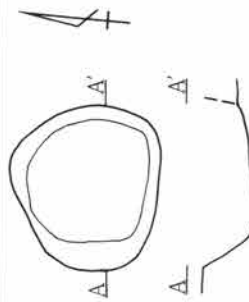
G区第79号土坑



G区第79号土坑
 平面形態 円形
 位置 49-F・0-G-69
 規模 0.90×0.85m

L=129.70m

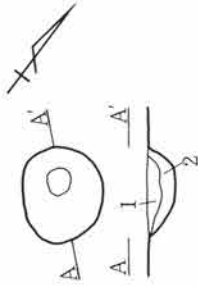
G区第80号土坑



G区第80号土坑
 平面形態 円形
 位置 9・10-G-49・50
 規模 1.25×1.18m
 主軸方位 東-6°-北

L=129.50m

G区第92号土坑

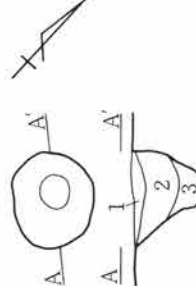


G区第92号土坑
 平面形態 円形
 位置 4・5-G-66
 規模 0.65×0.60m
 主軸方位 北-19°-西

- 1 暗褐色土 c Pを少量含む。
 2 // c Pを微量含む。

L=129.70m

G区第93号土坑

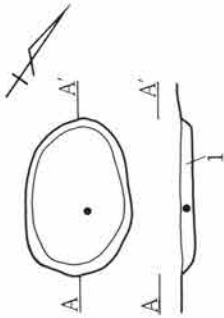


G区第93号土坑
 平面形態 円形
 位置 6・7-G-66
 規模 0.72×0.64m
 主軸方位 東-41°-南

- 1 暗褐色土 c Pを少量含む。
 2 // c Pを微量含む。
 3 // VI層土粒を含む。

L=129.70m

G区第94号土坑

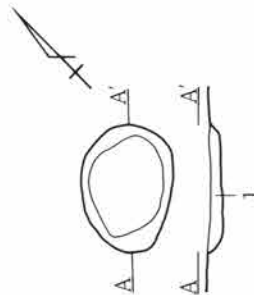


G区第94号土坑
 平面形態 楕円形
 位置 11・12-G-66・67
 規模 1.24×0.83m
 主軸方位 北-35°-西

- 1 暗褐色土 c Pを少量含む。

L=129.70m

G区第96号土坑

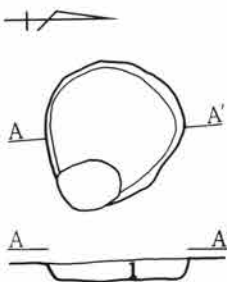


G区第96号土坑
 平面形態 楕円形
 位置 11-G-70・71
 規模 1.02×0.74m
 主軸方位 東-37°-北

- 1 暗褐色土 c Pを少量含む。

L=129.70m

G区第97号土坑



G区第97号土坑
 平面形態 円形
 位置 6-G-70
 規模 1.10×1.03m

- 1 暗褐色土 c Pを少量含む。

L=129.70m

G区第107号土坑



G区第107号土坑
 平面形態 円形
 位置 2・3-G-53
 規模 1.20×(0.50)m

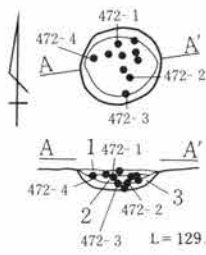
L=129.50m



第471図 土坑実測図

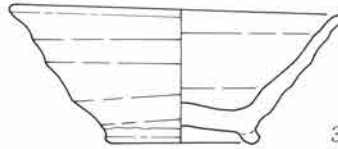
第3章 検出された遺構・遺物

G区第108号土坑



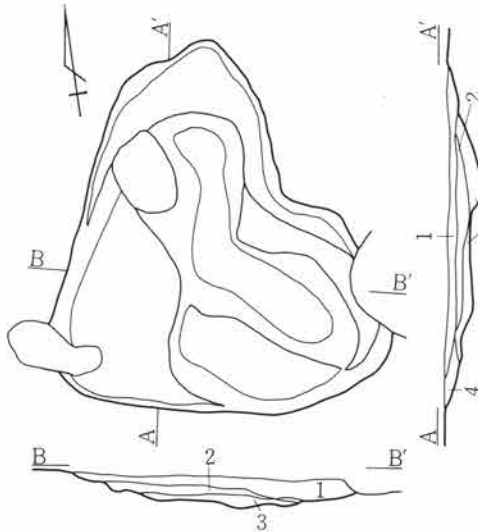
平面形態 円形
位置 39・40-G-51
規模 0.68×0.65m

- 1 暗褐色土 c Pをわずかに含み粘性は弱い。
- 2 // 灰を多量に含む。
- 3 // c P及び焼土粒をわずかに含む。



0 5cm

G区第109号土坑



平面形態 不整形
位置 38・39-G-55・56
規模 2.95×2.40m
主軸方位 北-5°-東

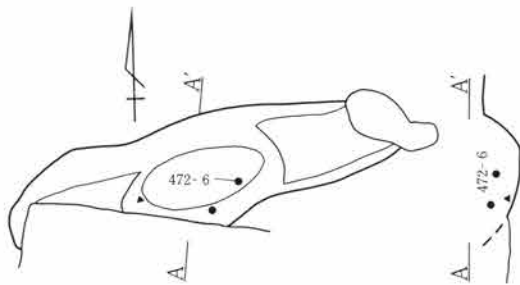
- 1 暗褐色土 c P多量、VII層土ブロックを含む。
- 2 // c Pはやや少なく、VII層土は含まない。
- 3 // c Pはほとんど含まず、VII層土ブロックを多く含む。
- 4 // c Pを多く含み、VII層土を含まない。

L=129.60m



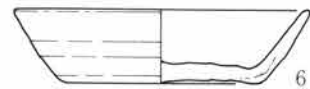
0 5cm

G区第111号土坑



平面形態 楕円形
位置 38-G-56・57
規模 (2.85)×0.90m
主軸方位 東-16°-北

L=129.70m

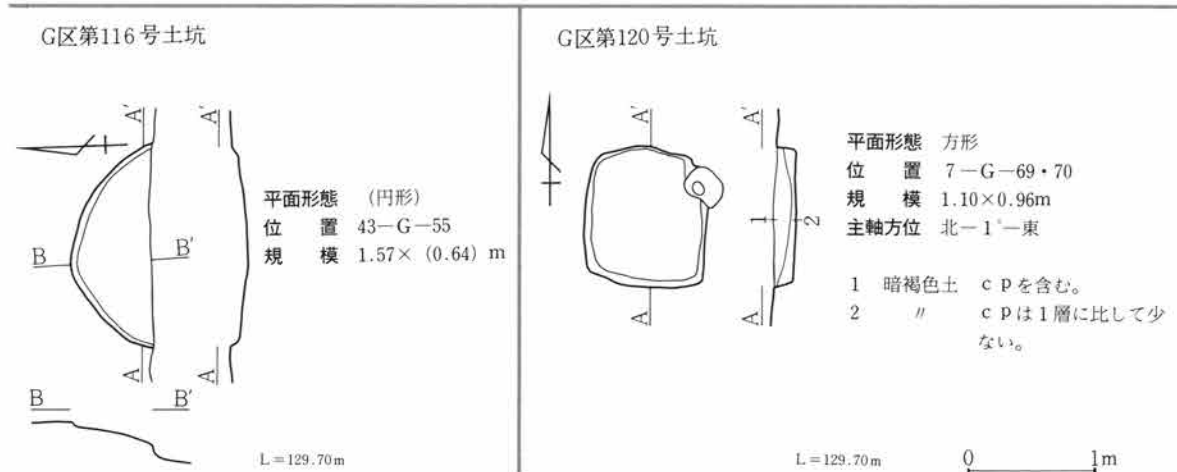
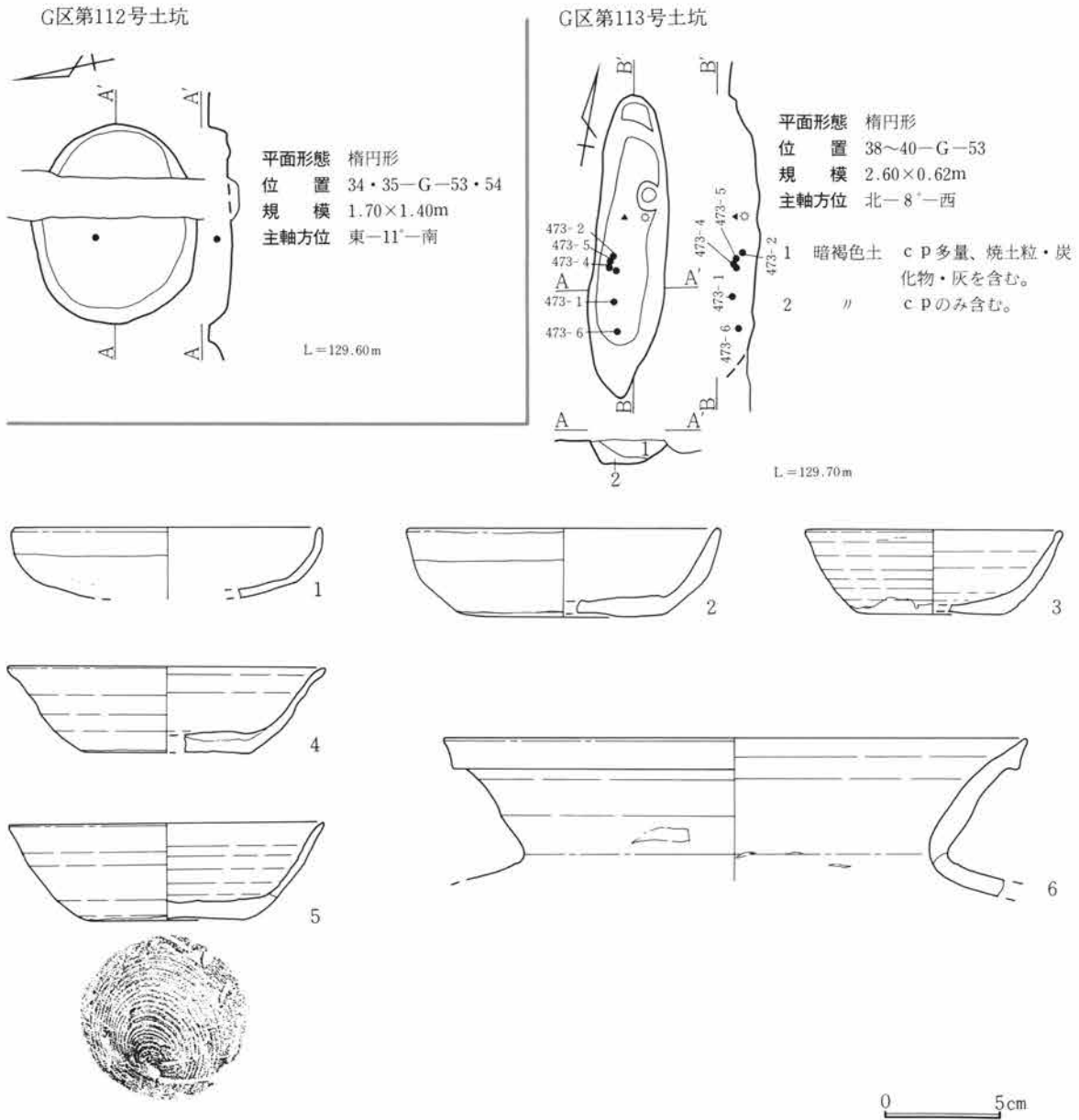


0 1m

0 5cm

第472図 土坑・出土遺物実測図(9)

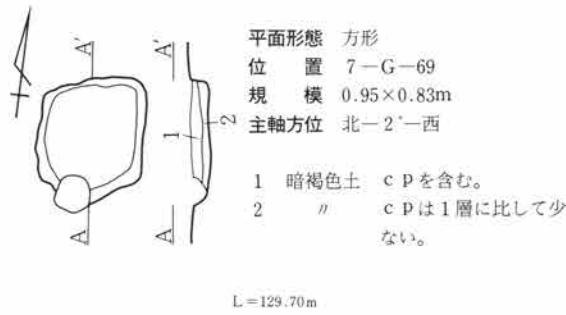
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



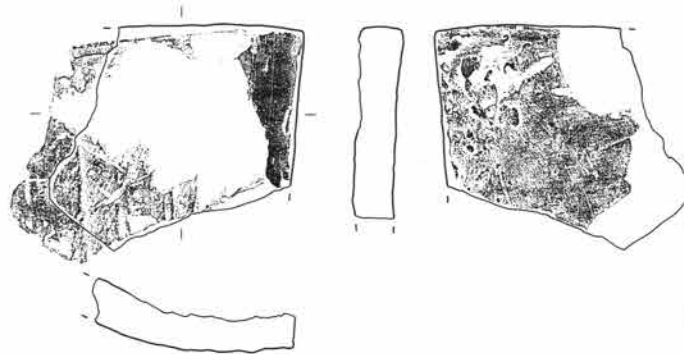
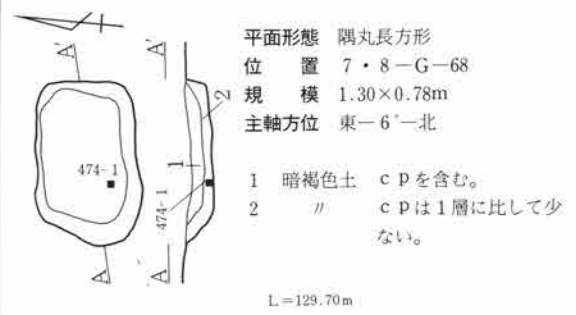
第473図 土坑・出土遺物実測図(10)

第3章 検出された遺構・遺物

G区第121号土坑

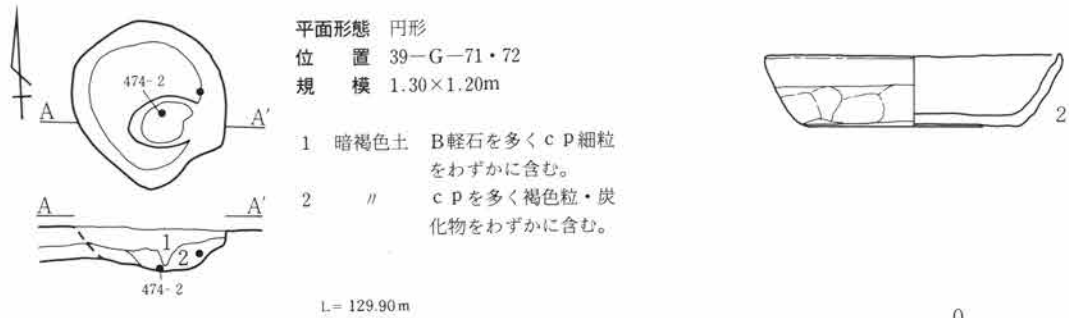


G区第122号土坑



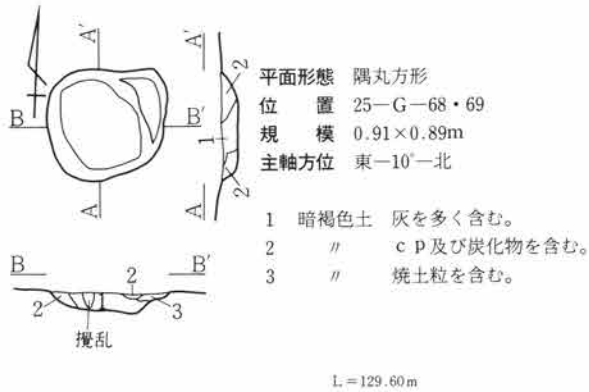
1
0 10cm

G区第136号土坑

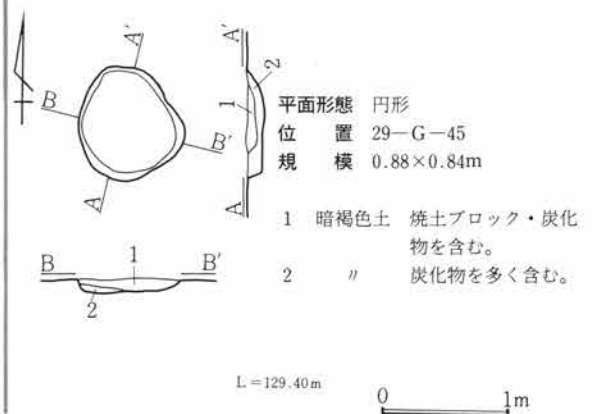


0 5cm

G区第147号土坑



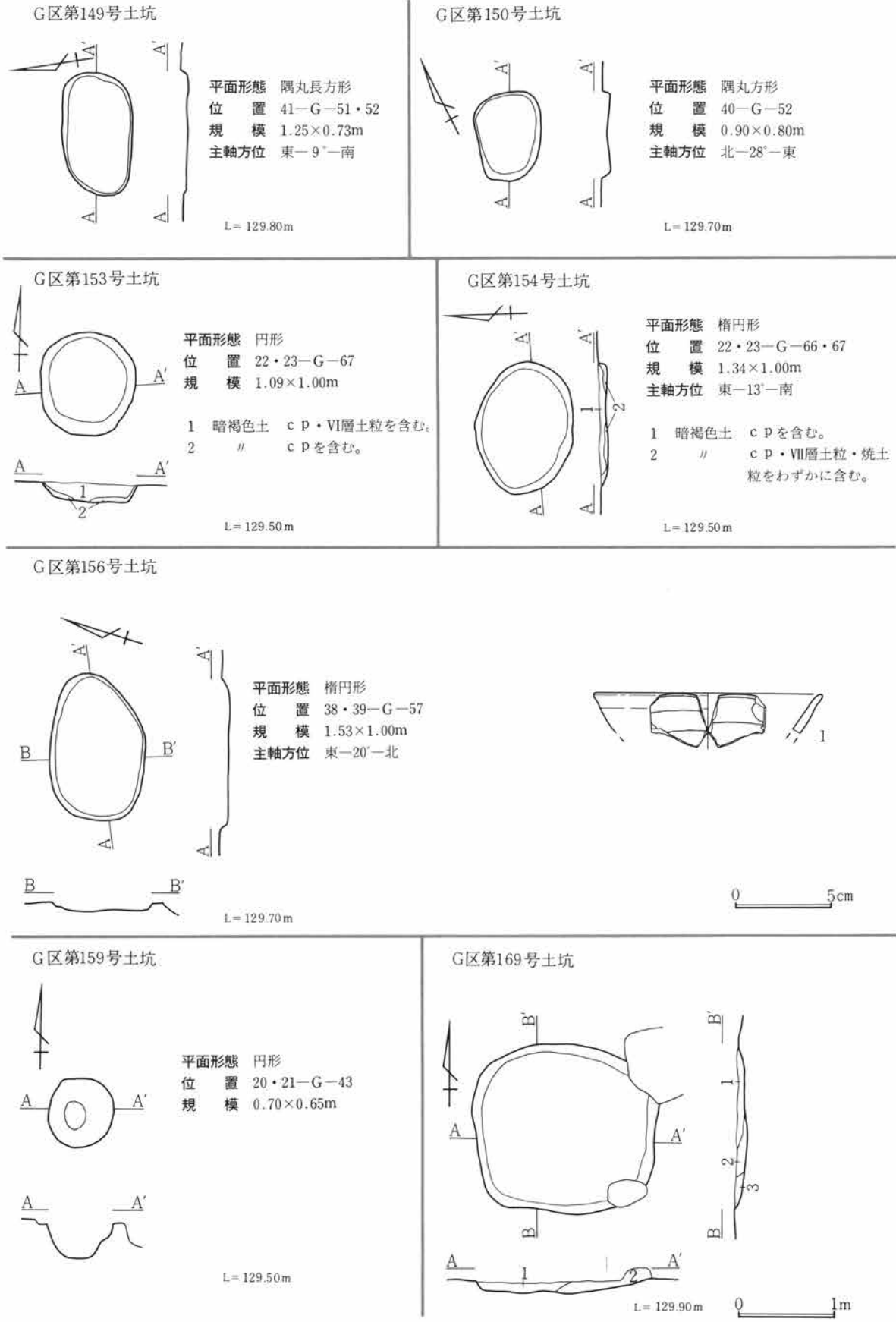
G区第148号土坑



0 1m

第474図 土坑・出土遺物実測図(11)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



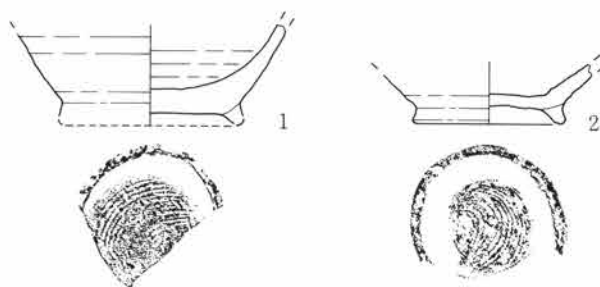
第475図 土坑・出土遺物実測図(12)

第3章 検出された遺構・遺物

G区第169号土坑

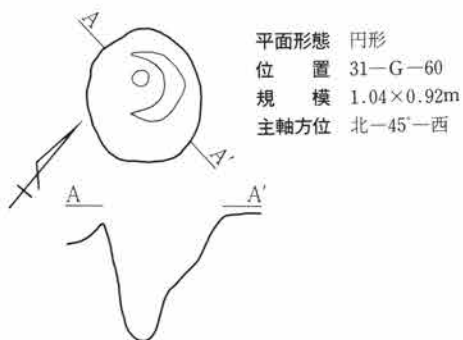
平面形態 隅丸方形
 位置 46-G-56
 規模 1.84×1.70m

- 1 暗褐色土 c P細粒を若干、炭化物を多く含む。
- 2 // c Pを含む。
- 3 // c Pをわずかに含む。



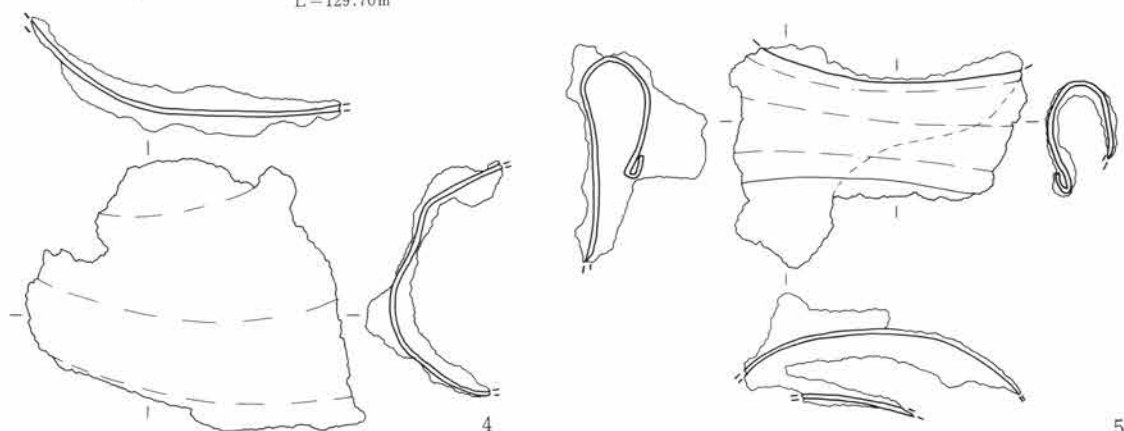
0 5cm

G区第178号土坑



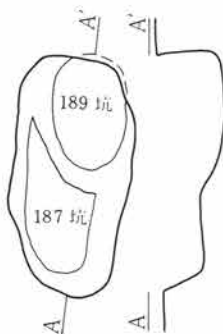
平面形態 円形
 位置 31-G-60
 規模 1.04×0.92m
 主軸方位 北-45°-西

L=129.70m



0 5cm

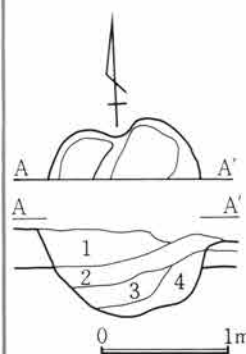
G区第187・189号土坑



平面形態 楕円形 (187・189)
 位置 29・30-G-62 (187)
 30-G-62 (189)
 規模 1.40×0.94m (187)
 1.10×0.80m (189)
 主軸方位 北-17°-西

L=129.70m

G区第866号土坑



平面形態 不整形
 位置 47-G-56・57
 規模 1.20×(0.50)m

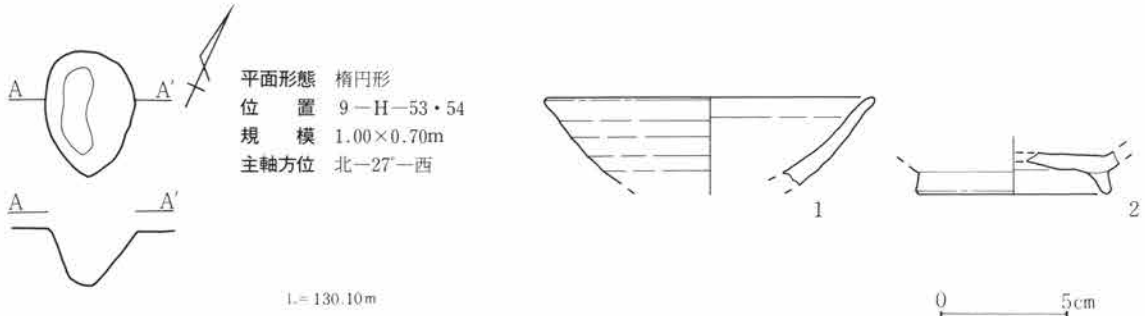
- 1 暗褐色土 c Pは少なく、焼土粒・炭化物を含む。
- 2 // c Pは多く、焼土・炭化物を含む。
- 3 // c Pはきわめて少なく、VII層土ブロックを含む。
- 4 // c Pはやや多く、VII層土ブロックを含む。

L=130.20m

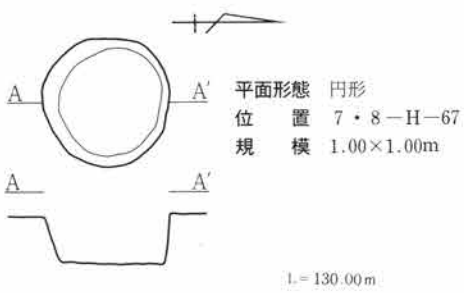
第476図 土坑・出土遺物実測図(13)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

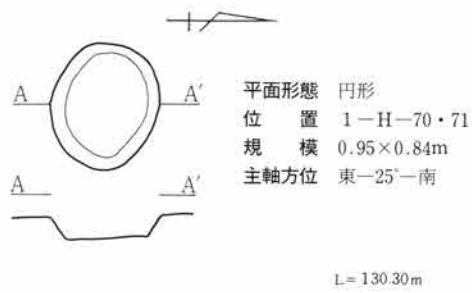
H区第3号土坑



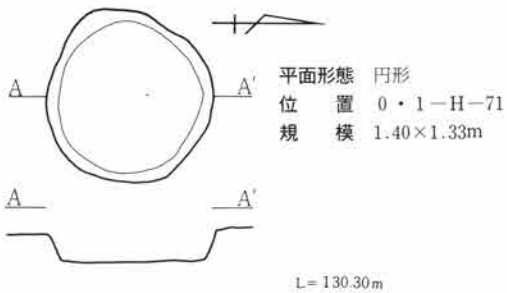
H区第24号土坑



H区第26号土坑



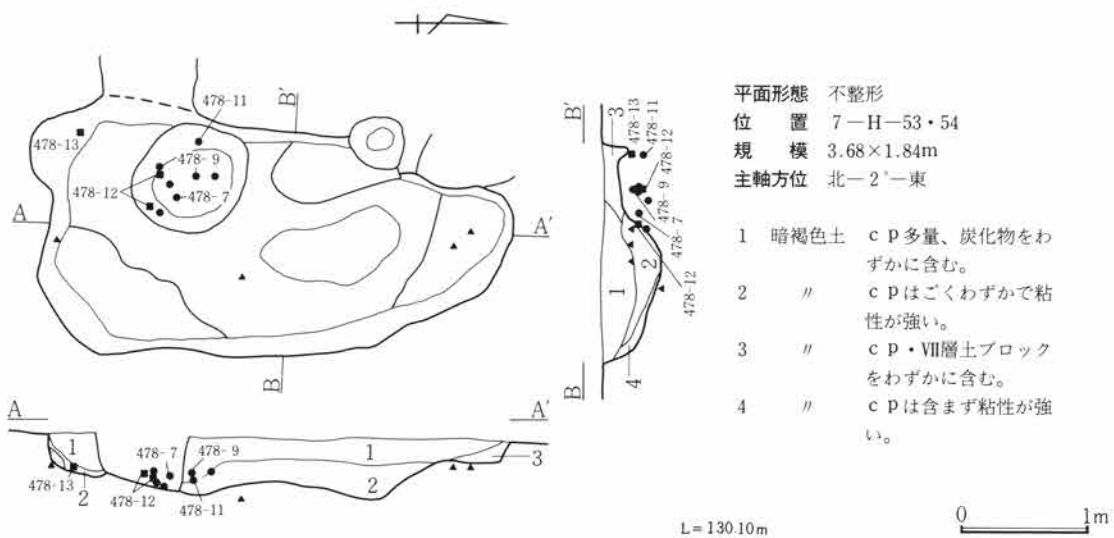
H区第27号土坑



H区第31号土坑

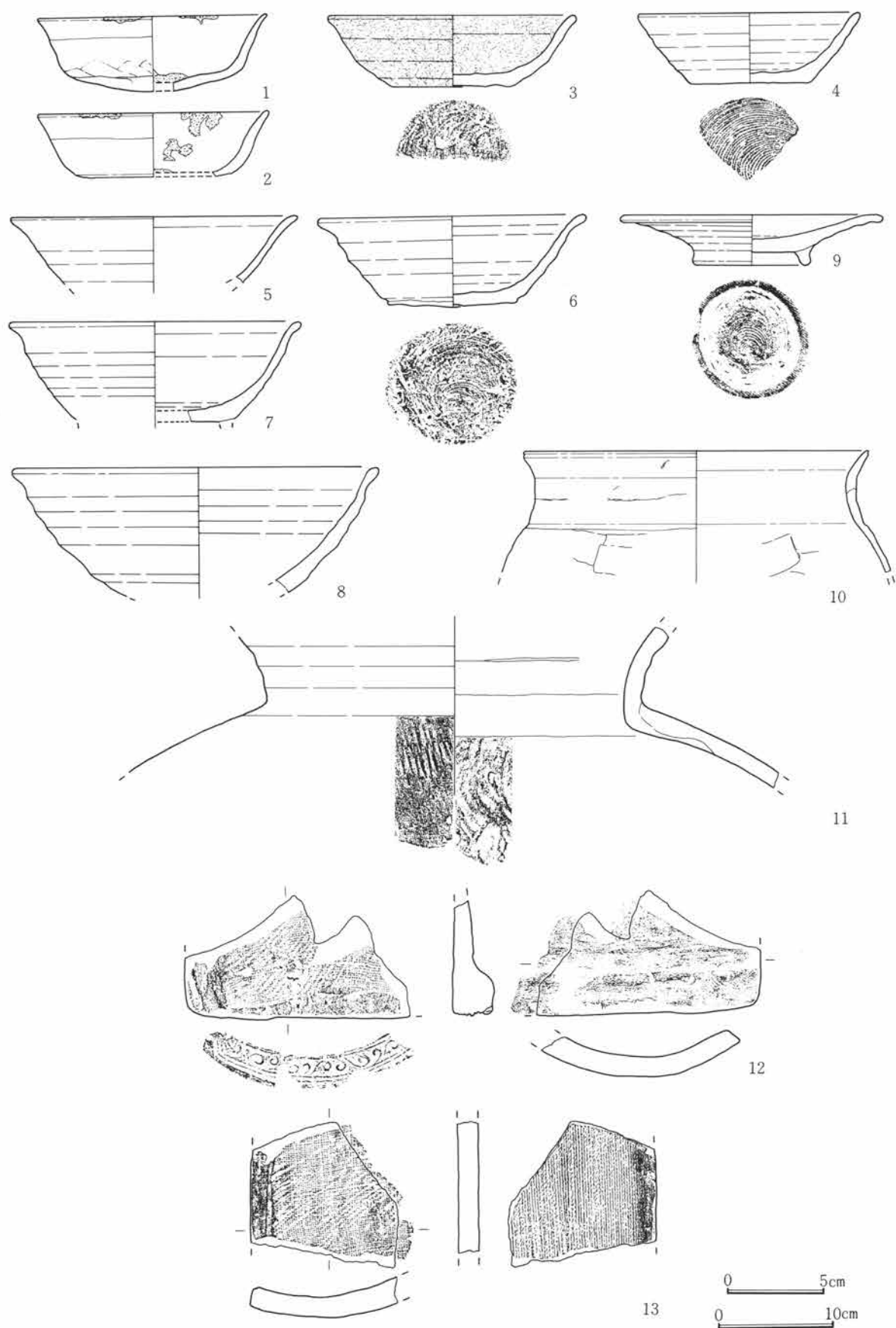


H区第32号土坑



第477図 土坑・出土遺物実測図(14)

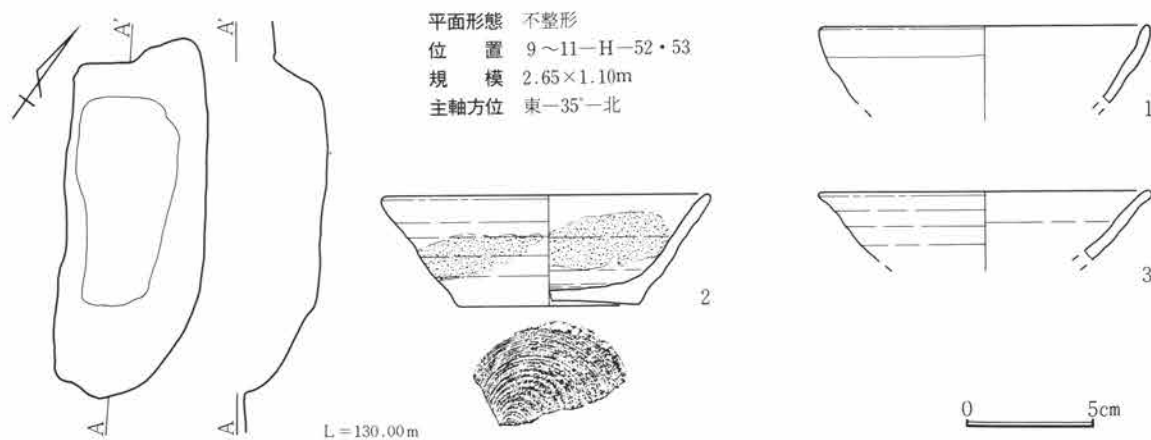
第3章 検出された遺構・遺物



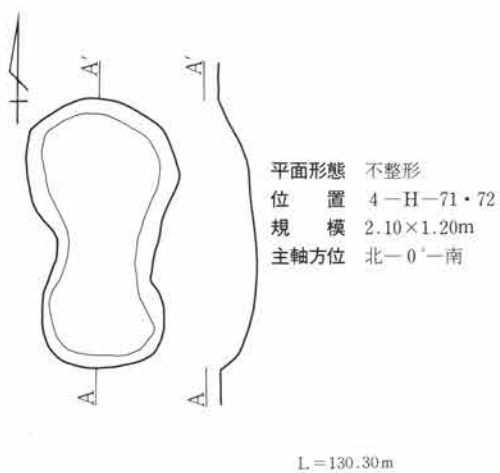
第478図 H区第32号土坑出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

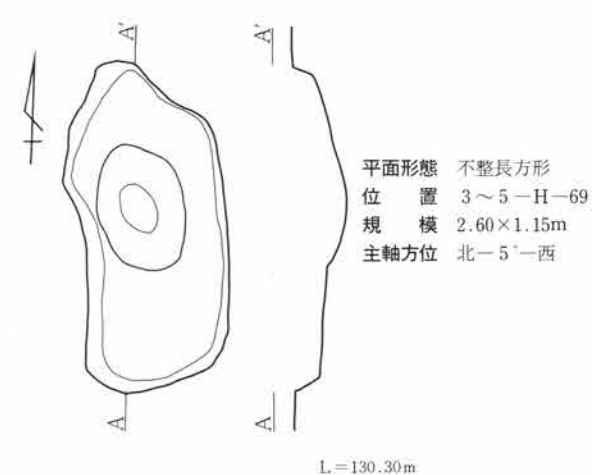
H区第33号土坑



H区第34号土坑



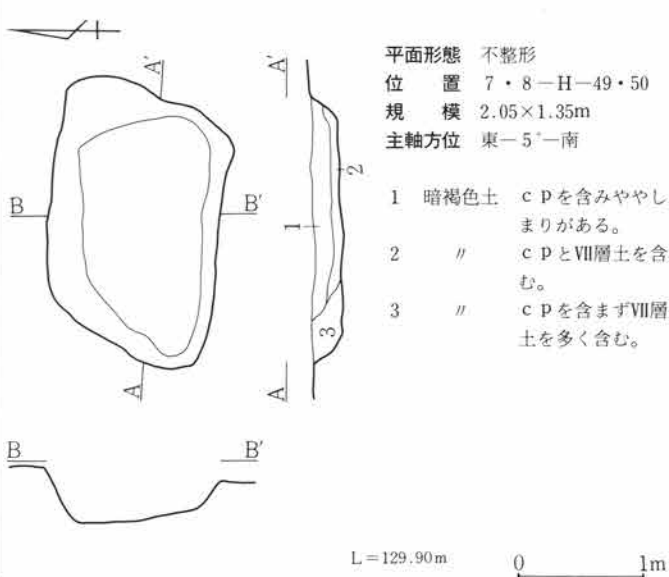
H区第35号土坑



H区第36号土坑



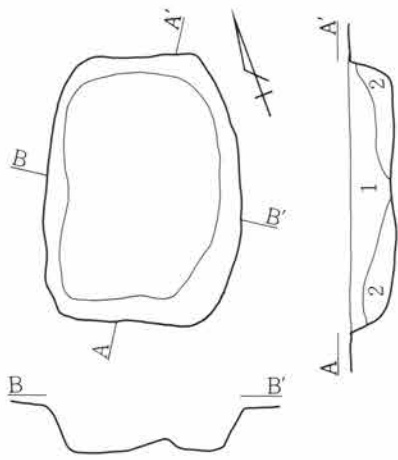
H区第106号土坑



第479図 土坑・出土遺物実測図(15)

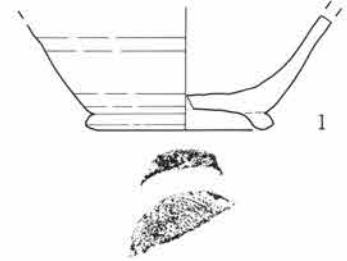
第3章 検出された遺構・遺物

H区第121号土坑



平面形態 隅丸長方形
 位置 11・12-H-57・58
 規模 2.10×1.56m
 主軸方位 北-26°-東

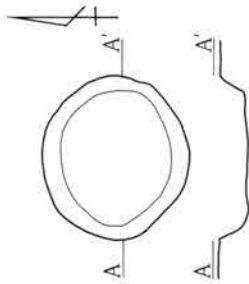
- 1 暗褐色土 c Pを多量に含む。
 2 " 少量のc Pと炭化物を含む。



L = 130.00m

0 5cm

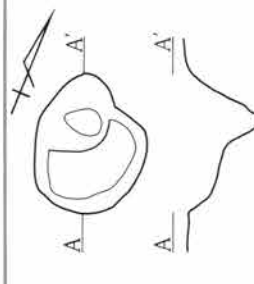
H区第161号土坑



平面形態 円形
 位置 14・15-H-60・61
 規模 1.30×1.26m
 主軸方位 東-1°-北

L = 130.30m

H区第162号土坑



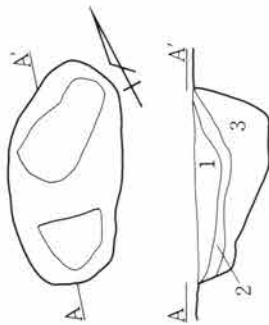
平面形態 不整形円形
 位置 15・16-H-61
 規模 1.10×0.90m
 主軸方位 北-21°-西



L = 130.30m

0 5cm

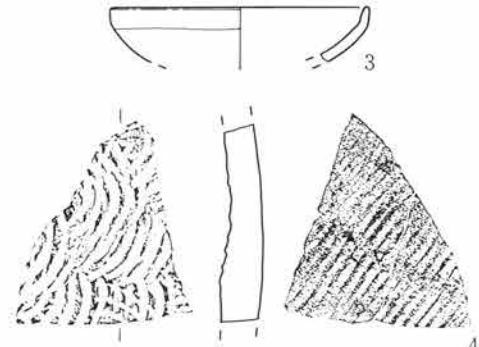
H区第163号土坑



平面形態 楕円形
 位置 4・5-H-62・63
 規模 1.75×0.90m
 主軸方位 北-25°-東

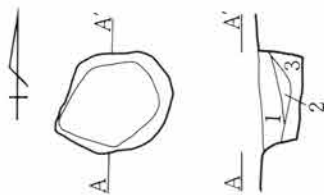
- 1 暗褐色土 c P多量、炭化物を少量含む。
 2 " c P・炭化物を少量含む。
 3 " VII層土ブロックを多く含む。

L = 130.20m



0 5cm

H区第299号土坑



平面形態 円形
 位置 5-H-52
 規模 0.95×0.76m
 主軸方位 東-24°-北

- 1 暗褐色土 c Pを多量に含み粘性がやや強い。
 2 " c Pは1層に比してやや少ない。
 3 " c Pはさらに少なく粘性は強い。

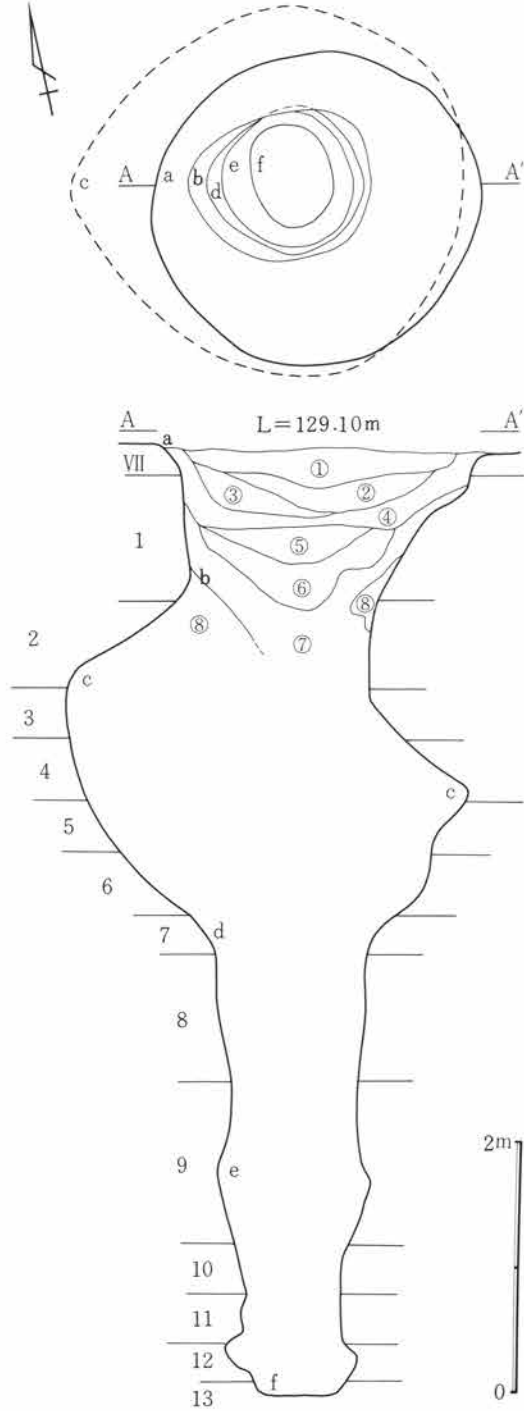
L = 130.10m

0 1m

第480図 土坑・出土遺物実測図(16)

井戸

遺構名称	F区第1号井戸跡			位置	40～42-F-42～44			平面形状	円形
規模 (m)	地上径2.66	底径0.55	最細径0.74	最大径3.21	深度7.47	湧水位	夏期3.70・冬期7.35		
アグリ部最大径	夏季 3.21 ・冬季 1.03			湧水層	6・12層		耐水層	7・13層	



当井戸は、東西農道の南に位置し、他の遺構との重複は全くみられない。

調査時に、井戸枠等の施設を示す資料は何ら検出されておらず、したがって地山井筒円筒形の井戸と考えられる。

断面形は、開口部がロート状で、2～6層部に最大のアグリが存在する他、9層、11・12層部に小規模のアグリがみられる。上部は夏季湧水層に、下部は通年湧水層にあたるものと思われる。

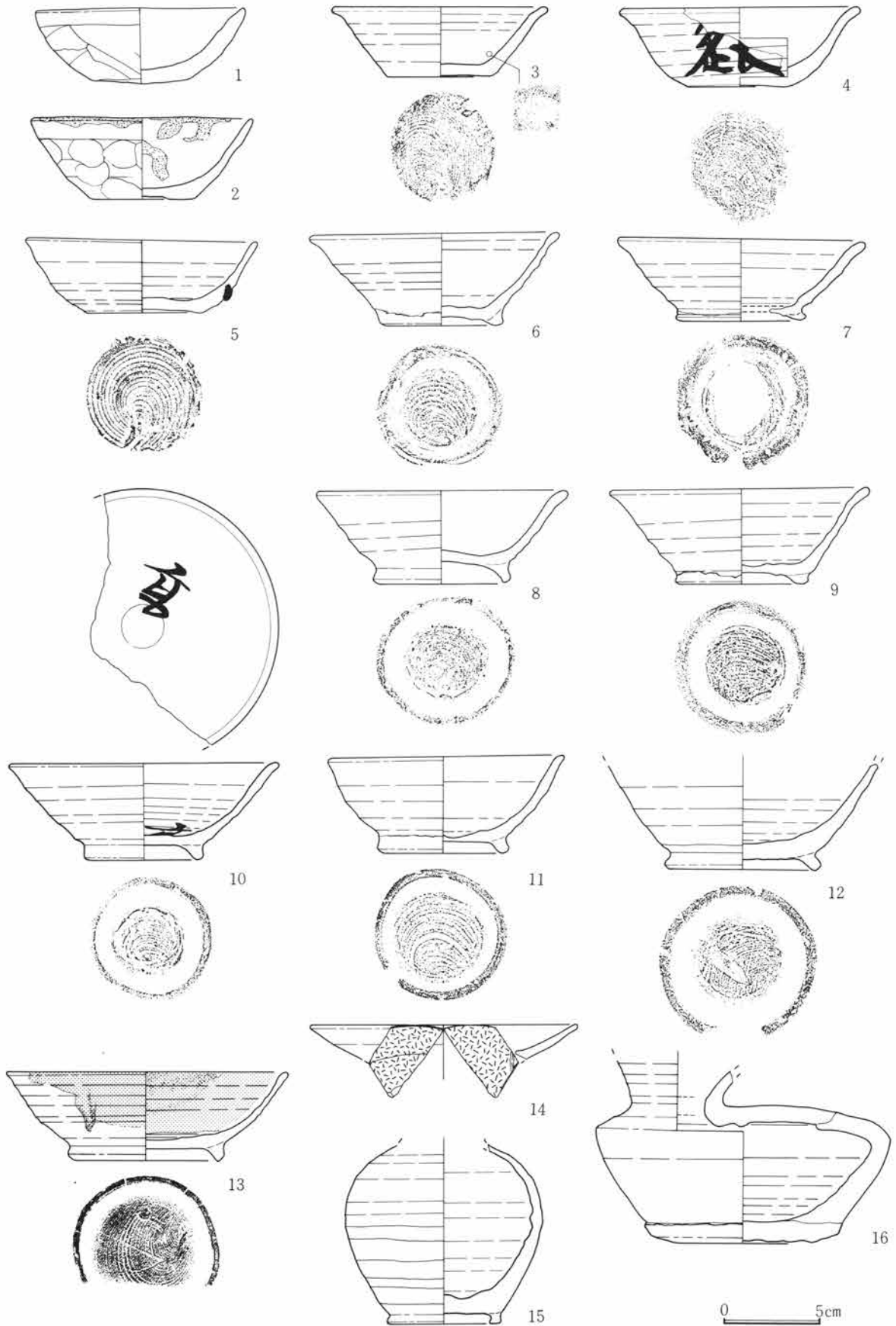
充填土は、約7m下までがCPを含む暗褐色土主体で、人為的な堆積土と考えられる。これ以下は、灰褐色の細砂で埋没しており、アグリ崩落が堆積したものと思われる。

遺物は、約3～5m下付近の間に瓦を主体として多量に出土しており、遺物間にわずかな間層があるが、一括投棄されたものと考えられる。

- ① 暗褐色土 c P細粒を多く含む。
- ② // c Pやや粗粒を微量含む。
- ③ // c Pやや粗粒を若干含む。
- ④ // c P及び焼土粒を含む。
- ⑤ // c P粗粒若干含みしまりがない。
- ⑥ // c P粗粒若干含みVI層土ブロック若干混入。
- ⑦ // c P粗粒若干含みVI層土ブロック多量混入。
- ⑧ // c P粗粒若干含みVI層土ブロック若干・炭化物若干混入。

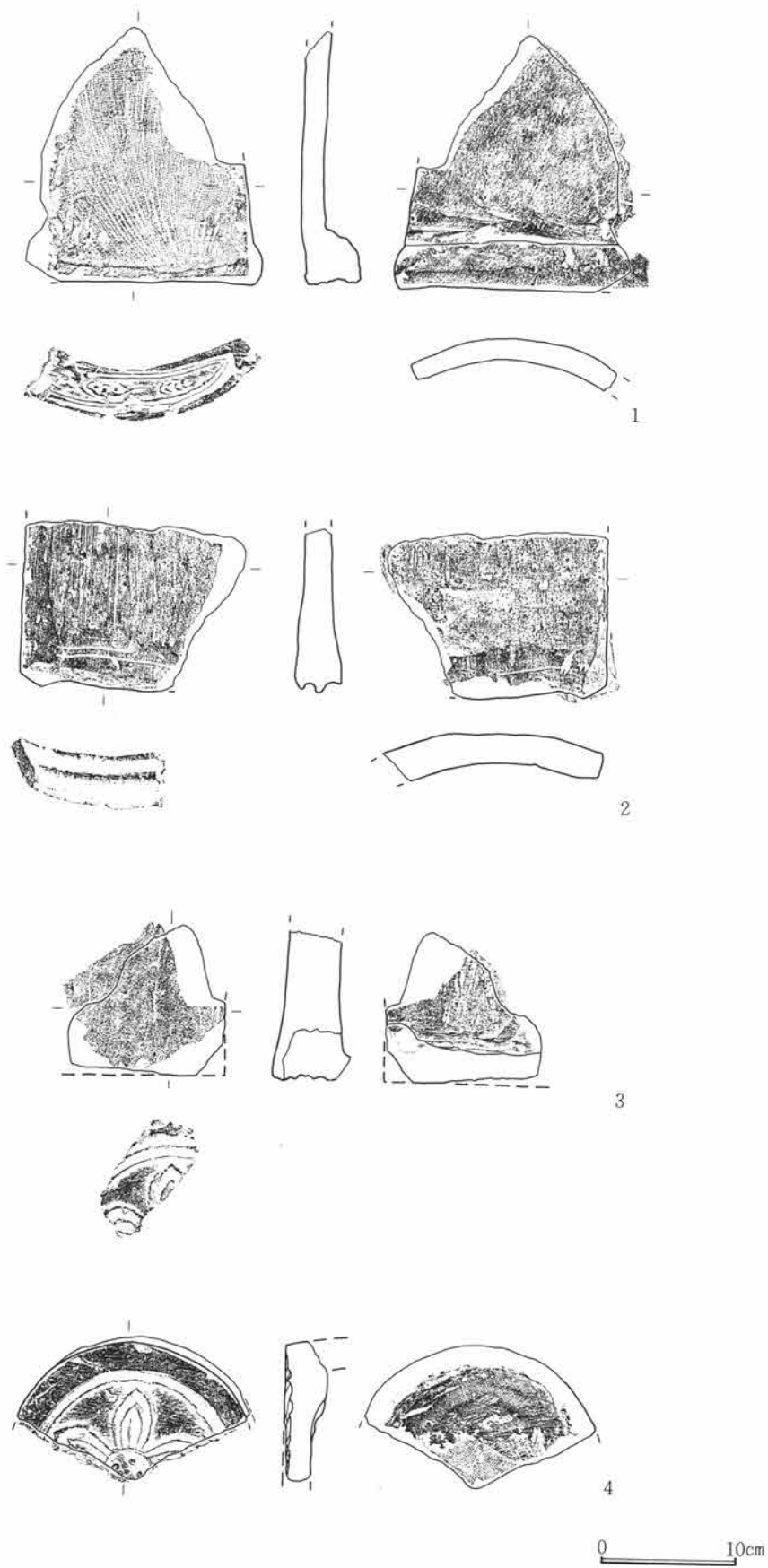
- 1 褐色火山灰・砂（固結）
- 2 灰・青灰色粗細砂互層（固結・平板）
- 3 褐灰色細砂
- 4 灰褐色シルト
- 5 ブラックバント
- 6 黄灰色シルト
- 7 褐灰色シルト
- 8 褐色シルト
- 9 黄褐灰色シルト
- 10 褐色粗砂（固結）
- 11 砂質シルト
- 12 褐色中砂
- 13 灰色シルト

第481図 F区第1号井戸跡実測図

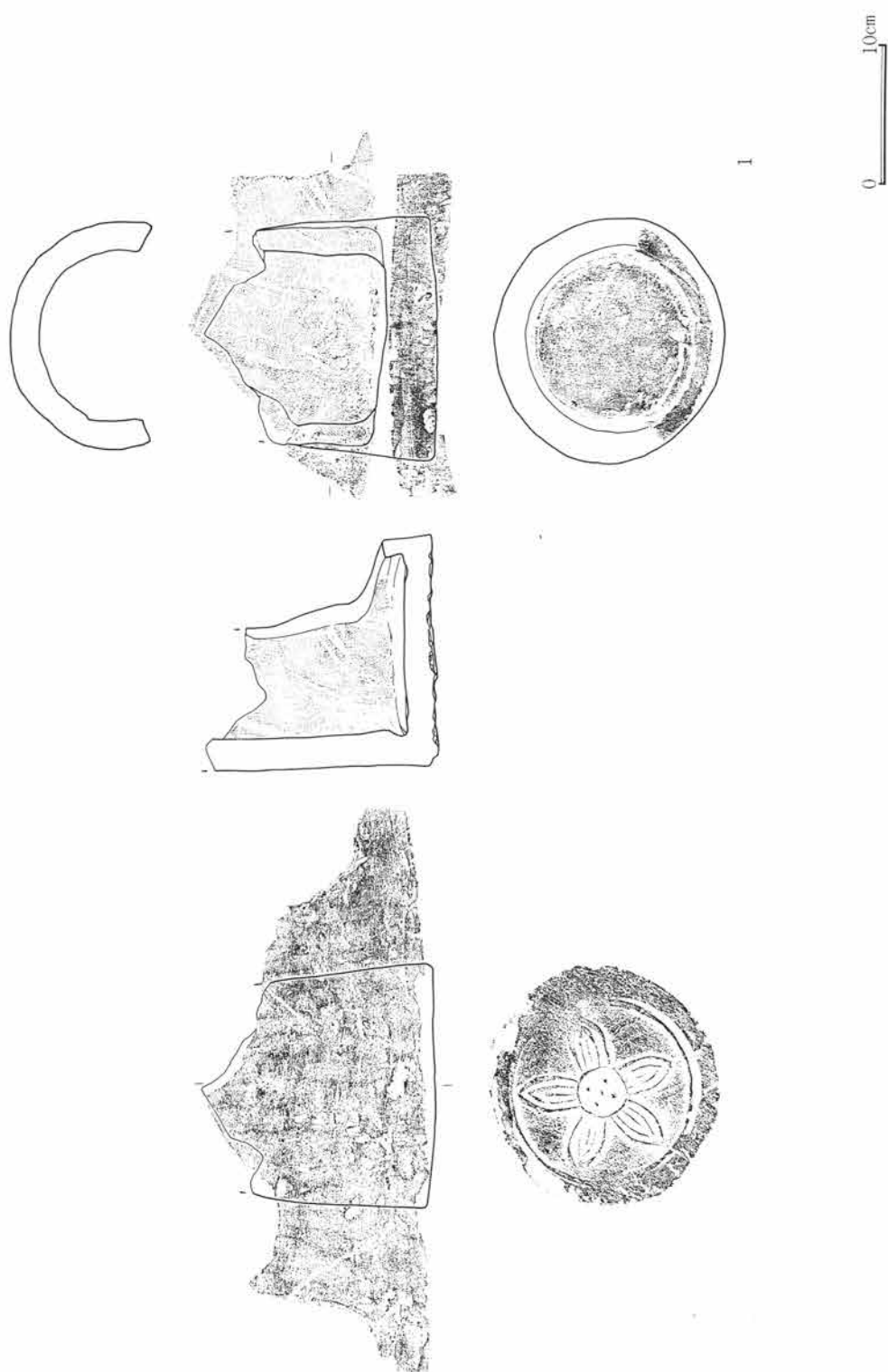


第482図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(1)

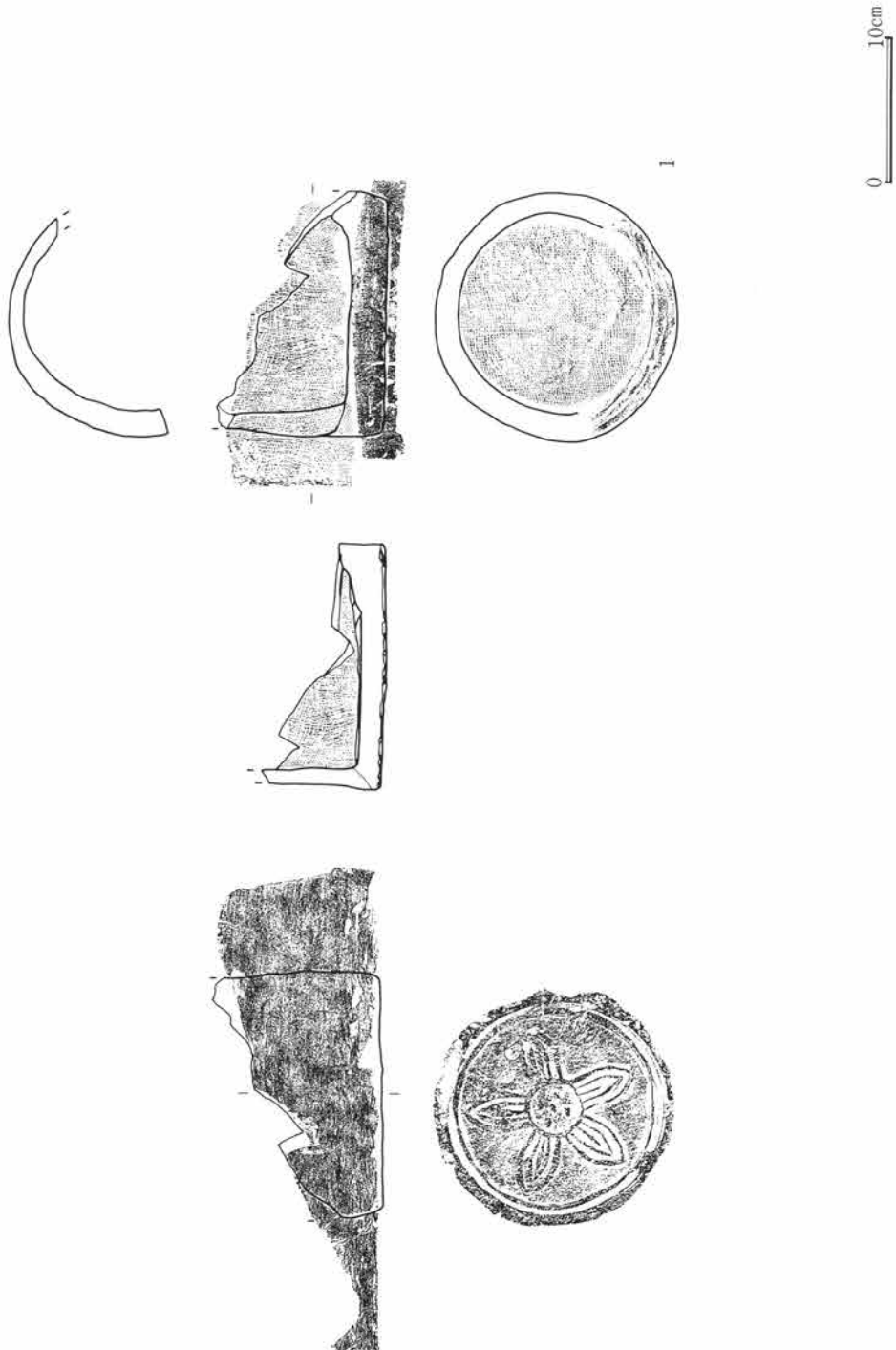
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



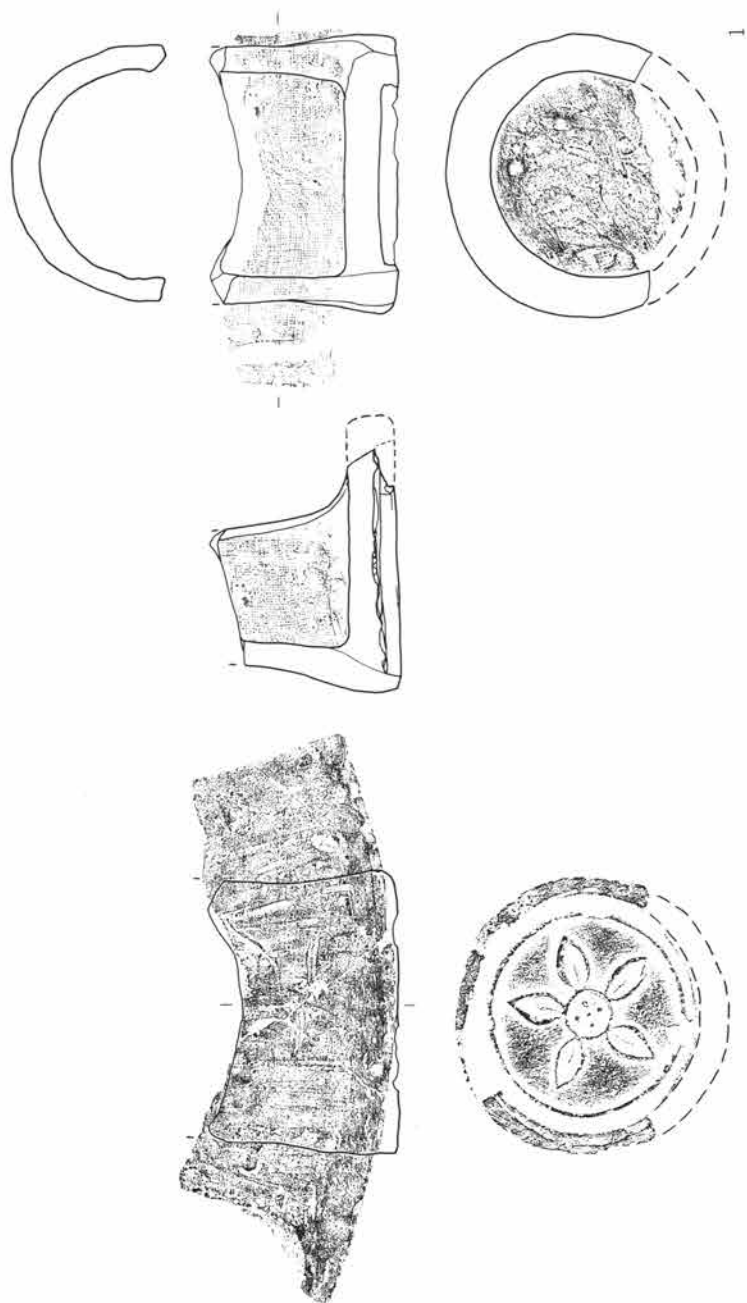
第483図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(2)



第484図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(3)

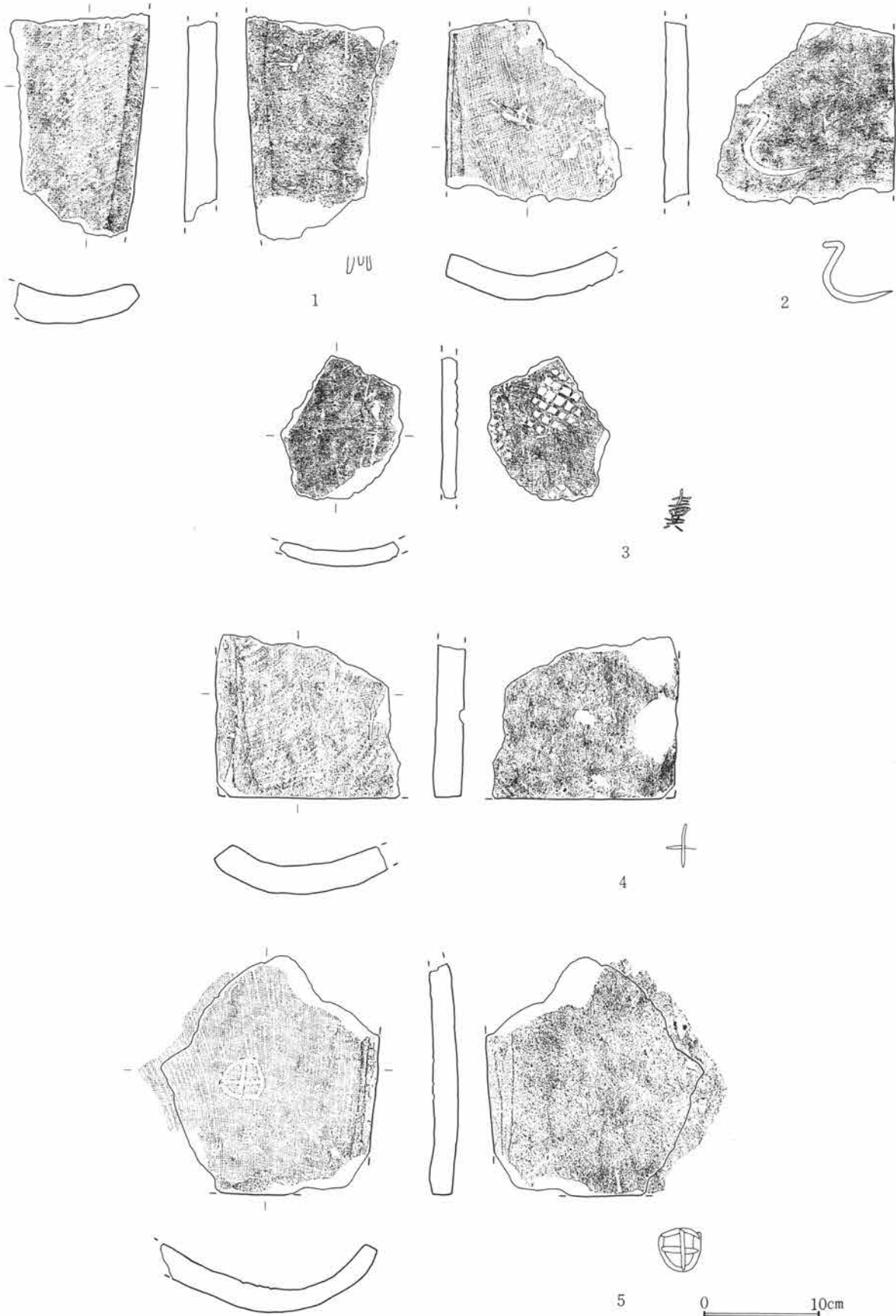


第485図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(4)



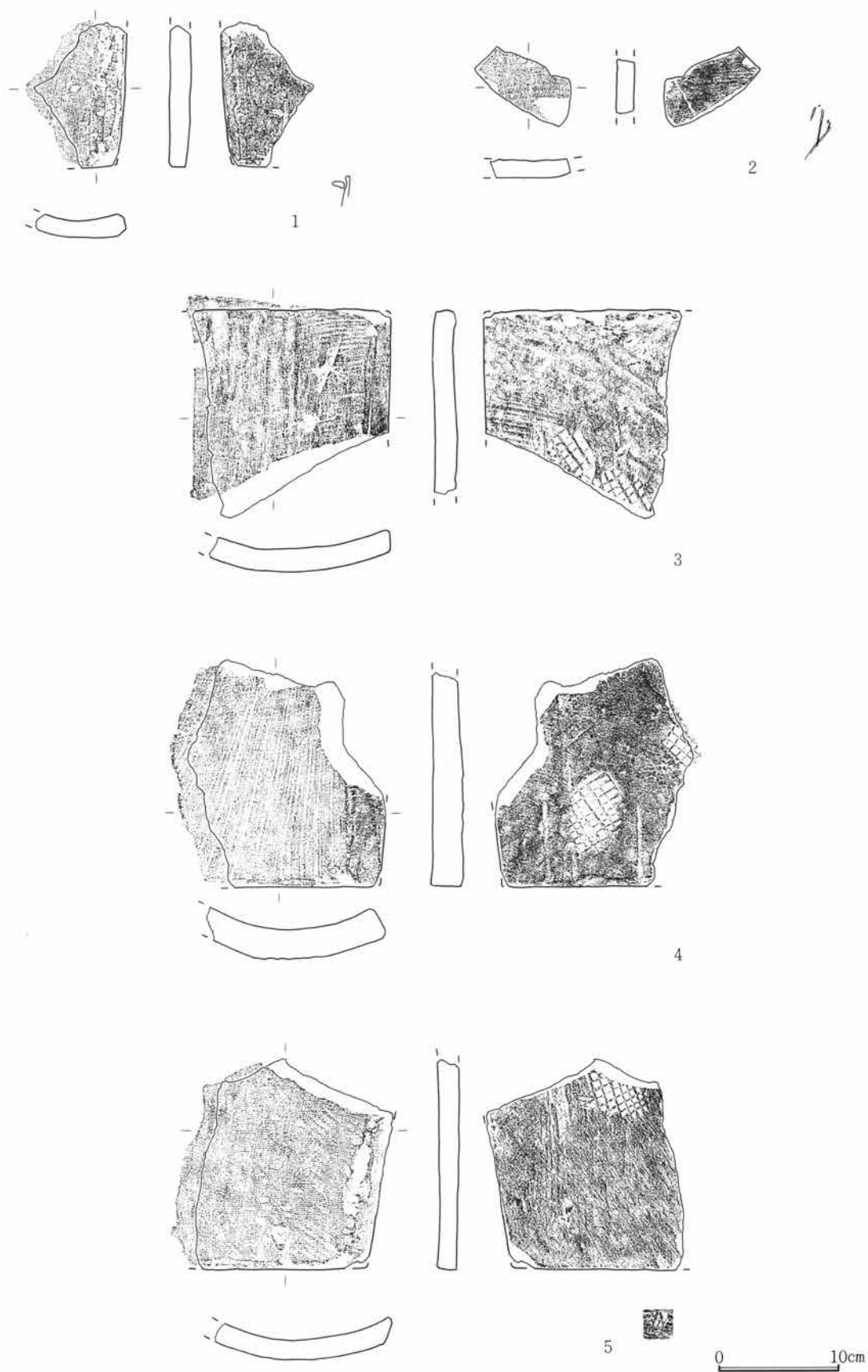
第486図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(5)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



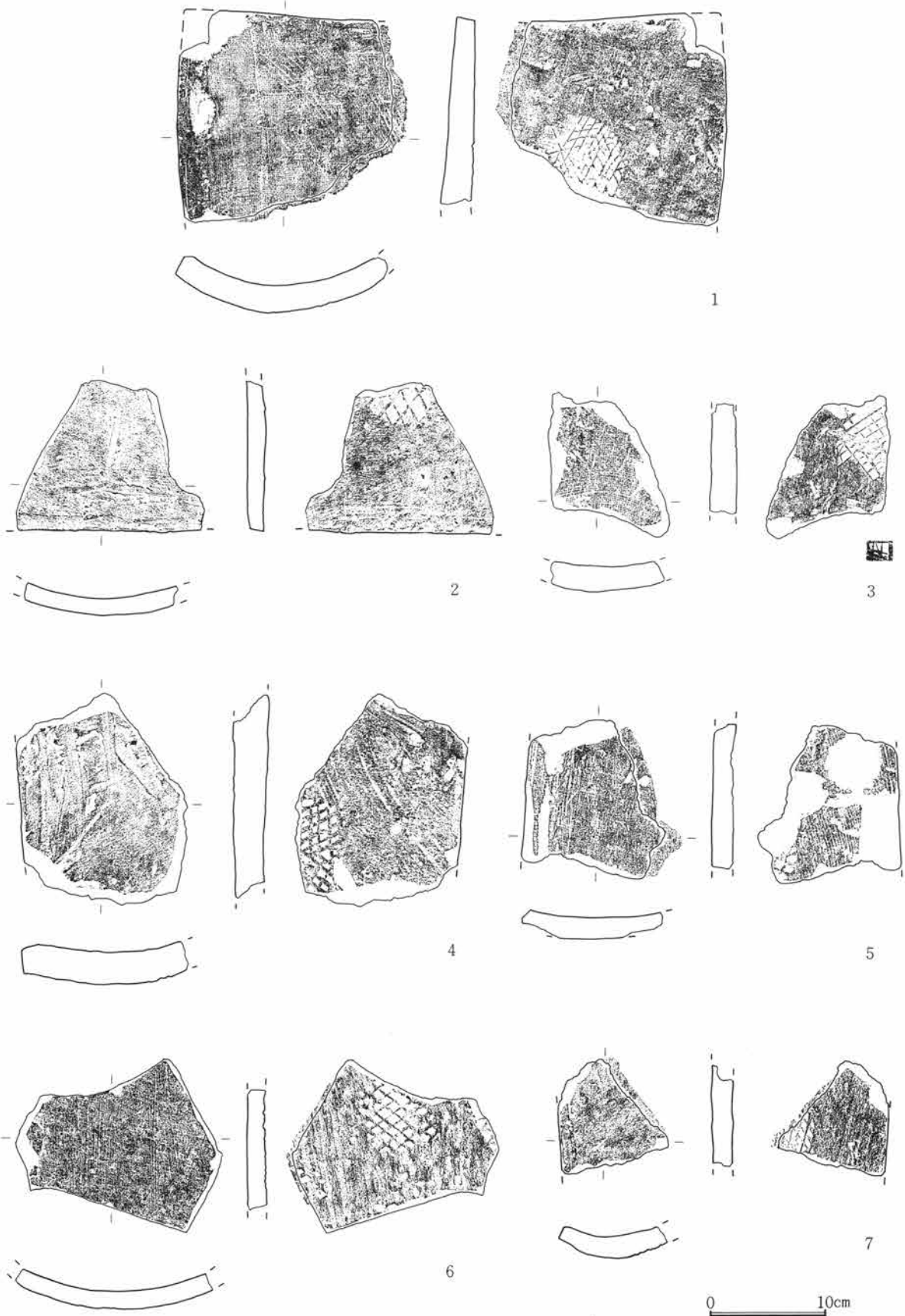
第487図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(6)

第3章 検出された遺構・遺物

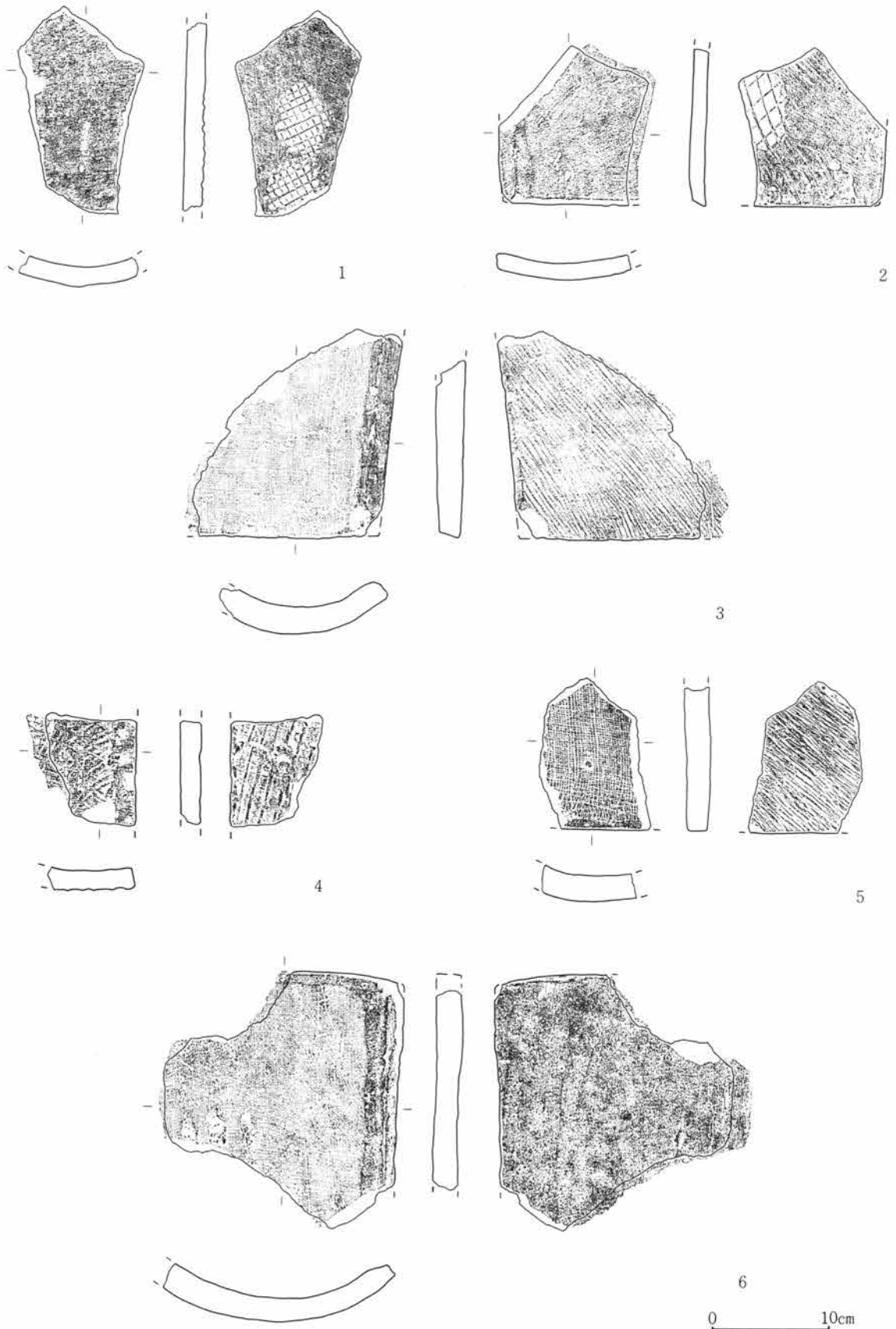


第488図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(7)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

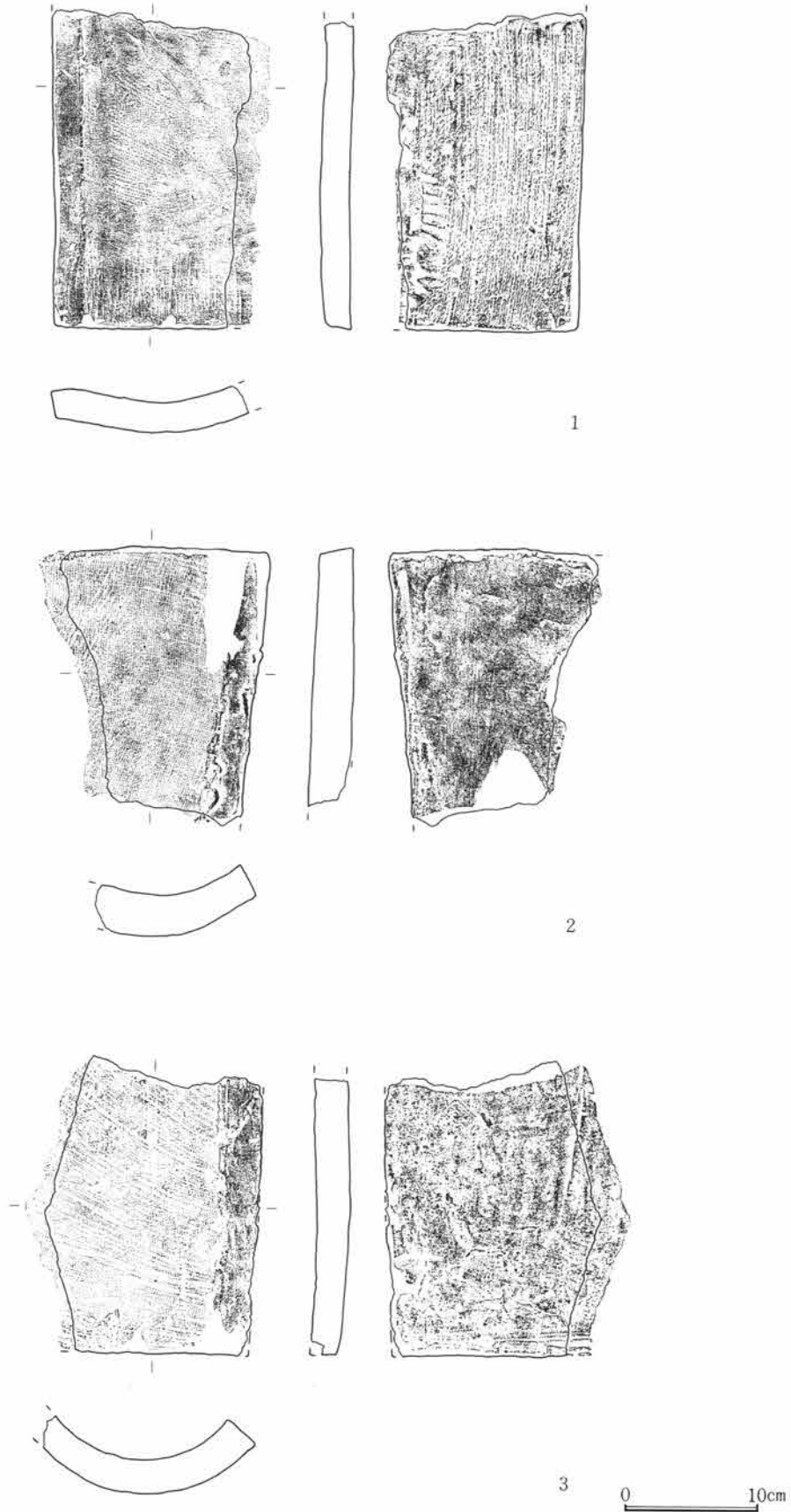


第489図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(8)



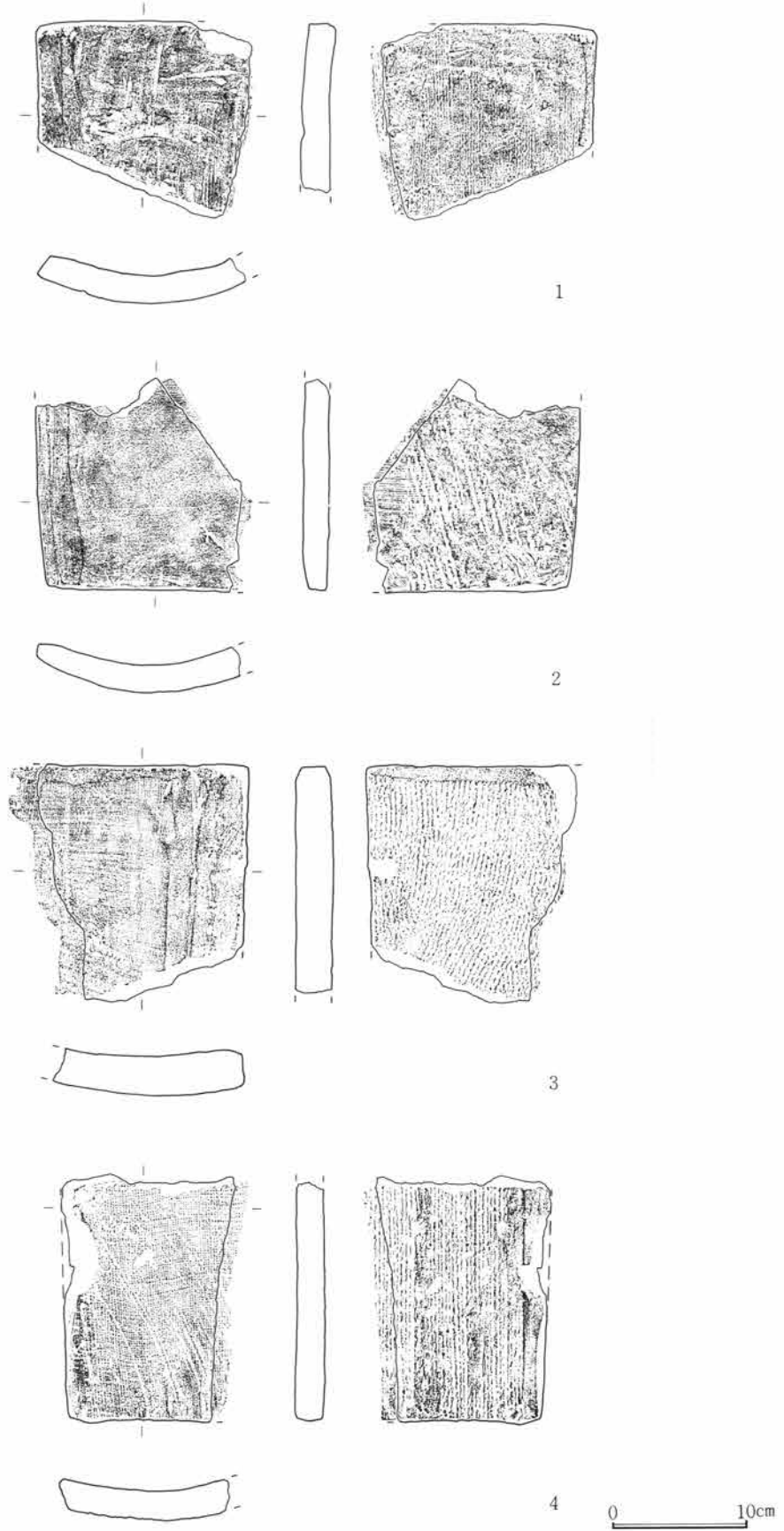
第490図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(9)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



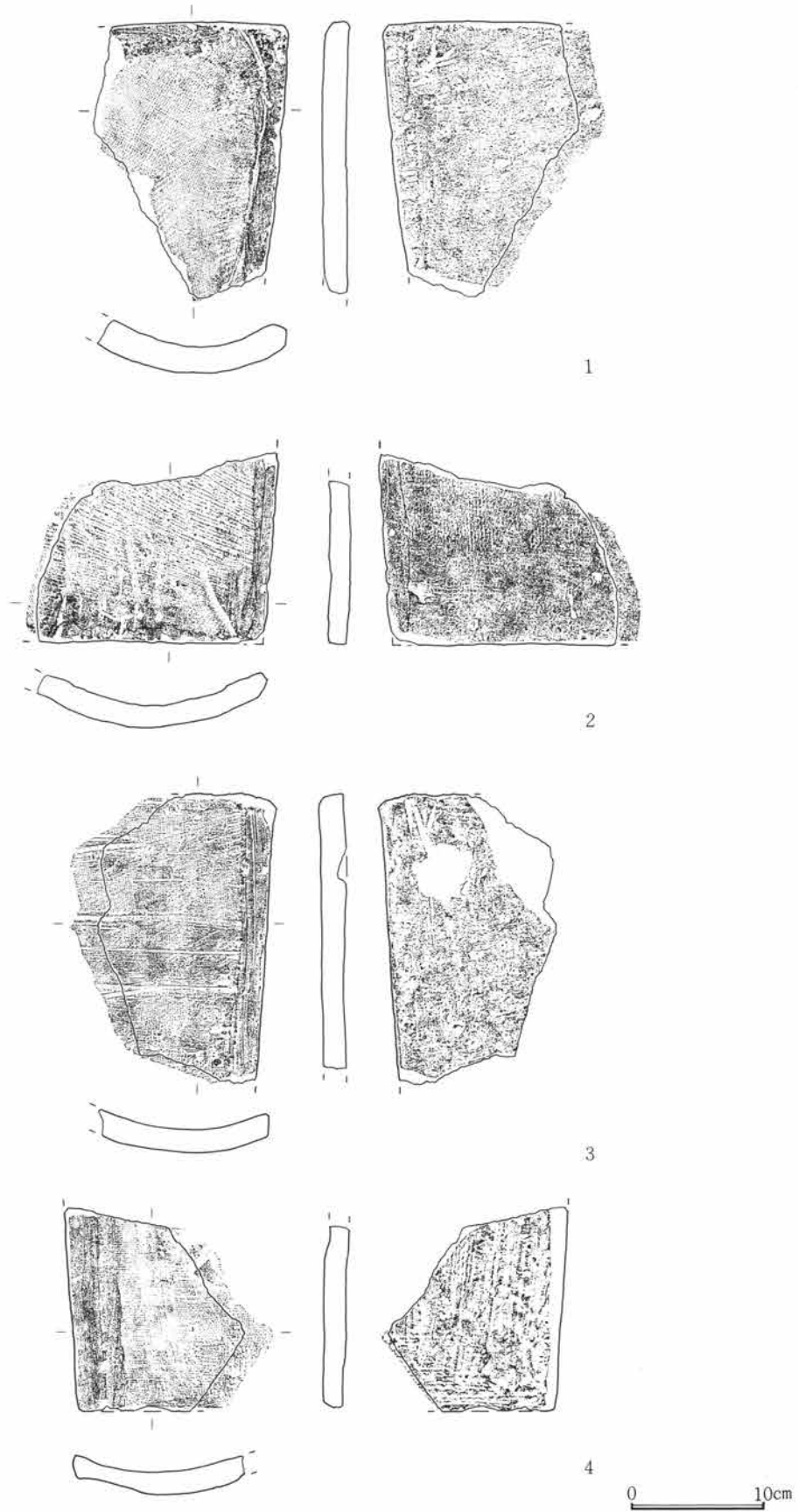
第491図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(10)

第3章 検出された遺構・遺物

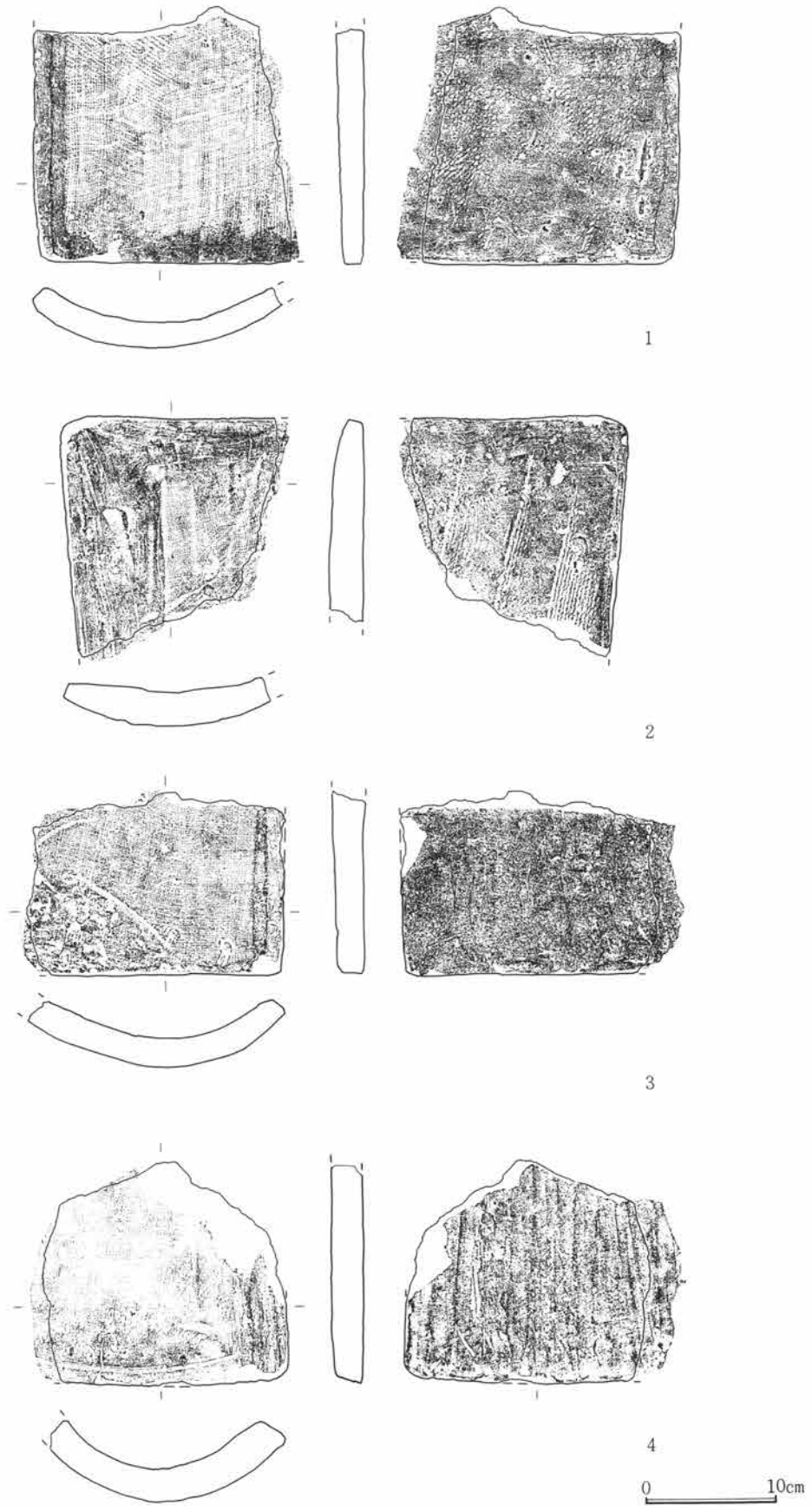


第492図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(11)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

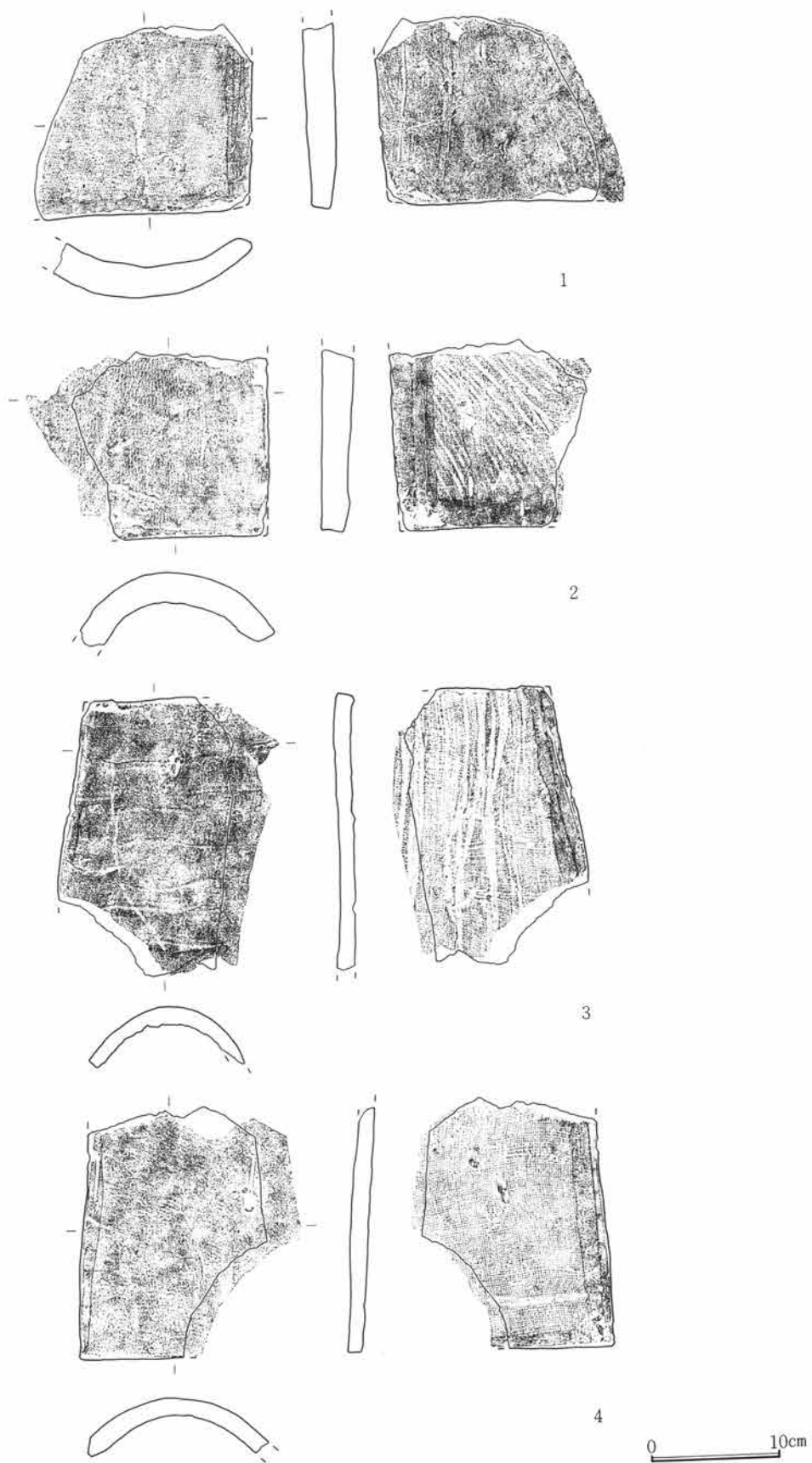


第493図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(12)



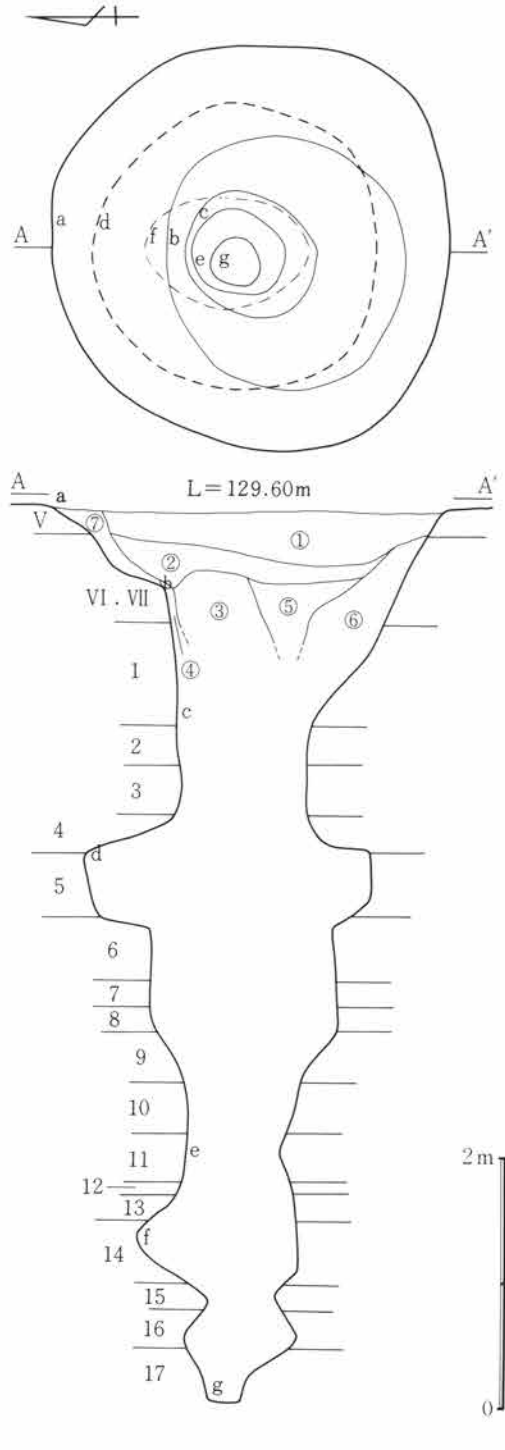
第494図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(13)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第495図 F区第1号井戸跡出土遺物実測図(14)

遺構名称	G区第4号井戸跡		位置	35~37-G-52~54			平面形状	円形
規模 (m)	地上径3.30	底径0.26	最細径0.54	最大径2.28	深度7.07	湧水位	夏期3.20・冬期6.10	
アグリ部最大径	夏季 2.28 ・冬季 1.27		湧水層	5・14・16層		耐水層	6・15・17層	



当井戸跡は、南北農道の東側に位置し、V層土中で検出した。

調査時に井戸枠等の存在を示す資料は、何ら検出されていない。また、井戸跡検出面にあっても当井戸跡に伴う他の施設の痕跡もないことなどから、地山井筒円筒形の井戸と思われる。

断面形は、開口部がロート状で、5層部に最大のアグリが存在し、13・15層部に小規模のアグリがみられる。

上部の最大のアグリが夏季湧水層によるものと考えられる。

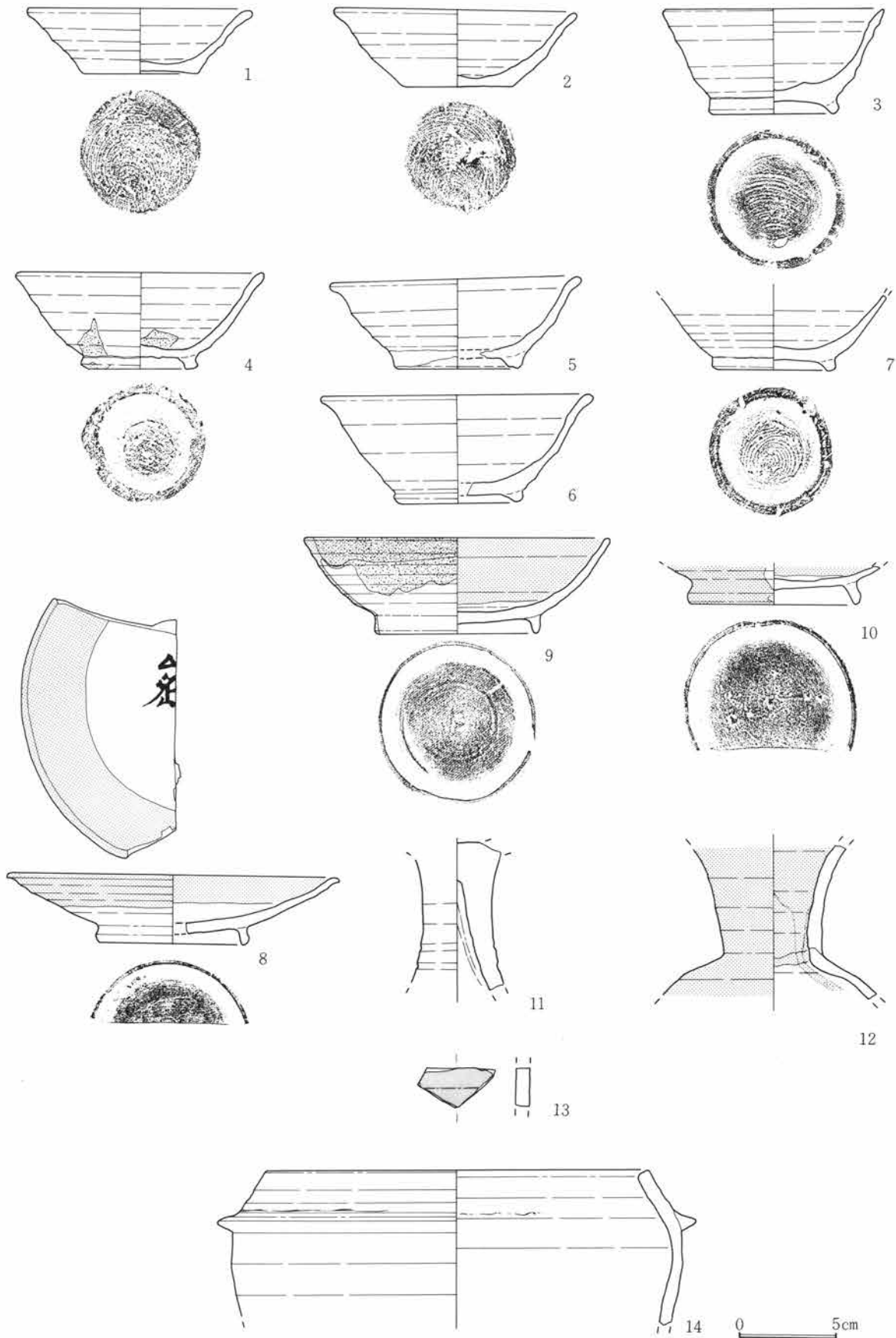
井戸充填土は、約5.9m下まで暗褐色土主体で間に崩壊土層を挟んでいる。これらの特に約2.9~5.9mの間に瓦を主体として、多量な出土がみられた。充填土中の約1.5~5.9m付近までは人為的な堆積、それ以上の部分は、填圧によって下った部分への自然流入による堆積土と考えられる。

- ① 暗褐色土 c Pを多く均一に含み粘性やや強い。
- ② // c Pは①層に比してやや少なく、小礫を若干含む。
- ③ // c Pはごく少なく小礫を含みしまりがある。
- ④ // c Pは少なくVI層土をわずかに含み、粘性が強い。
- ⑤ // ④層に比して粘性が強くVI層土粒をわずかに含む。
- ⑥ // VI層土粒を多く含み粘性は弱い。
- ⑦ // c P若干とVI層土ブロックを含む。

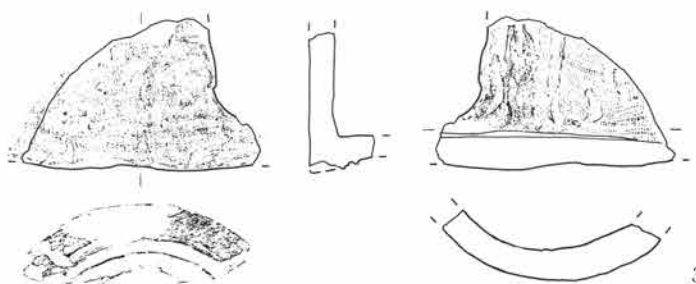
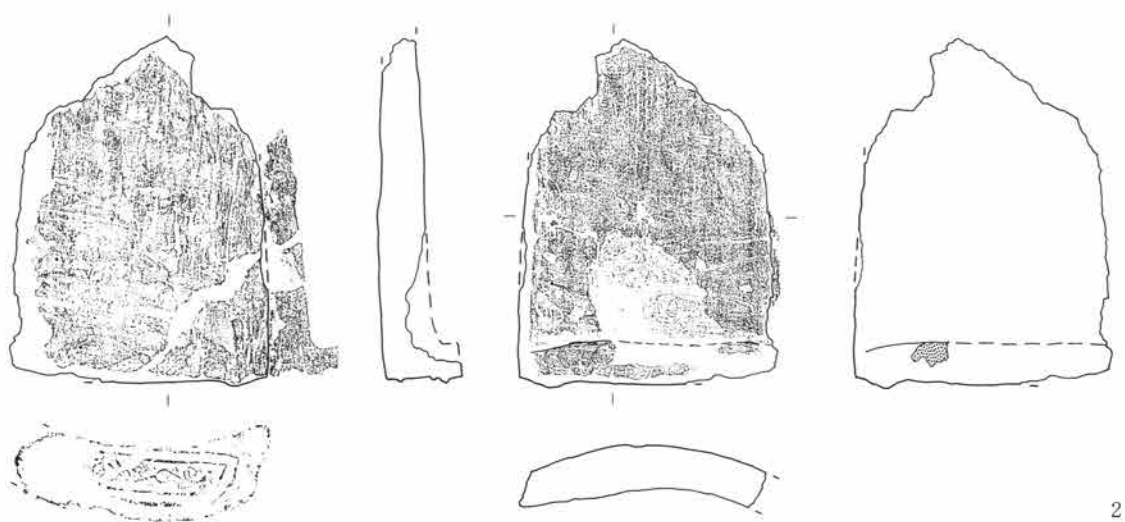
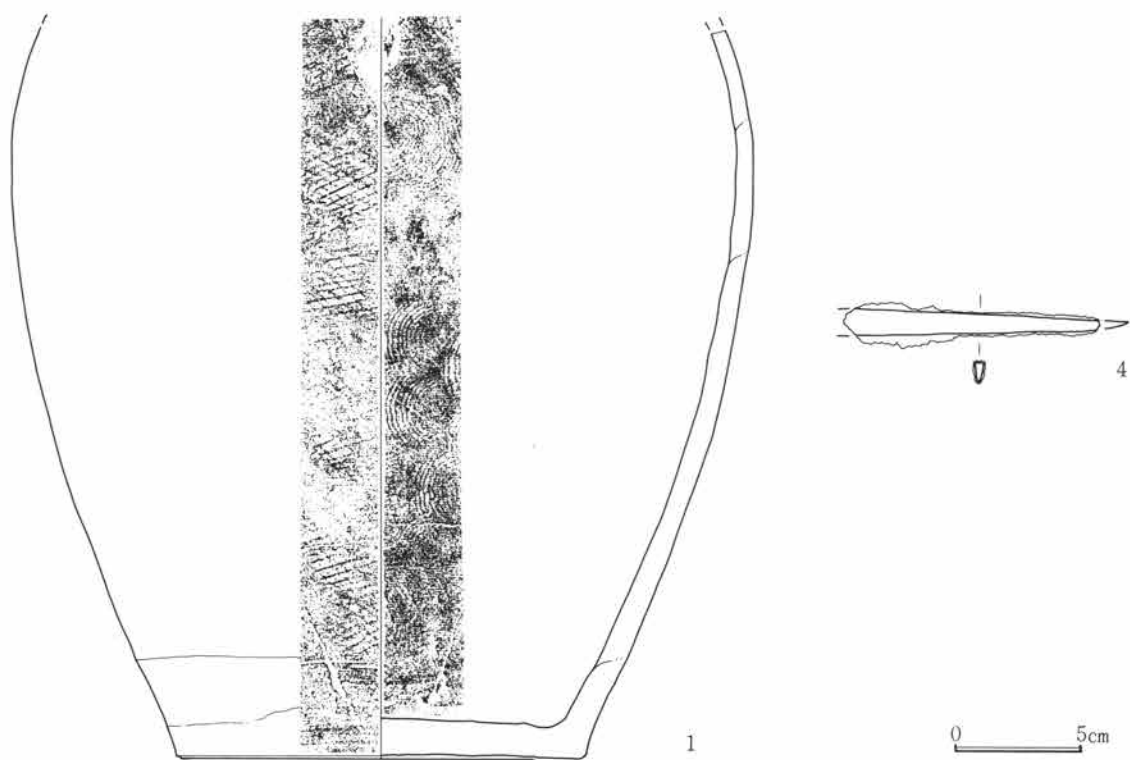
- 1 褐灰色火山灰・砂・小礫混 (固結)
- 2 褐灰色細砂 (固結)
- 3 褐灰色火山灰・砂 (固結)
- 4 灰褐色細砂 (固結)
- 5 黄灰色シルト
- 6 ブラックバンド
- 7 黄灰色シルト
- 8 黄褐色軽石粒
- 9 褐灰色火山灰・砂 (固結)
- 10 灰色細砂 (固結)
- 11 灰褐色細砂 (固結)
- 12 褐灰色シルト
- 13 暗灰色細砂 (固結)
- 14 暗灰色中砂
- 15 灰褐色細砂 (固結)
- 16 灰褐色シルト
- 17 青灰色細砂

第496図 G区第4号井戸跡実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



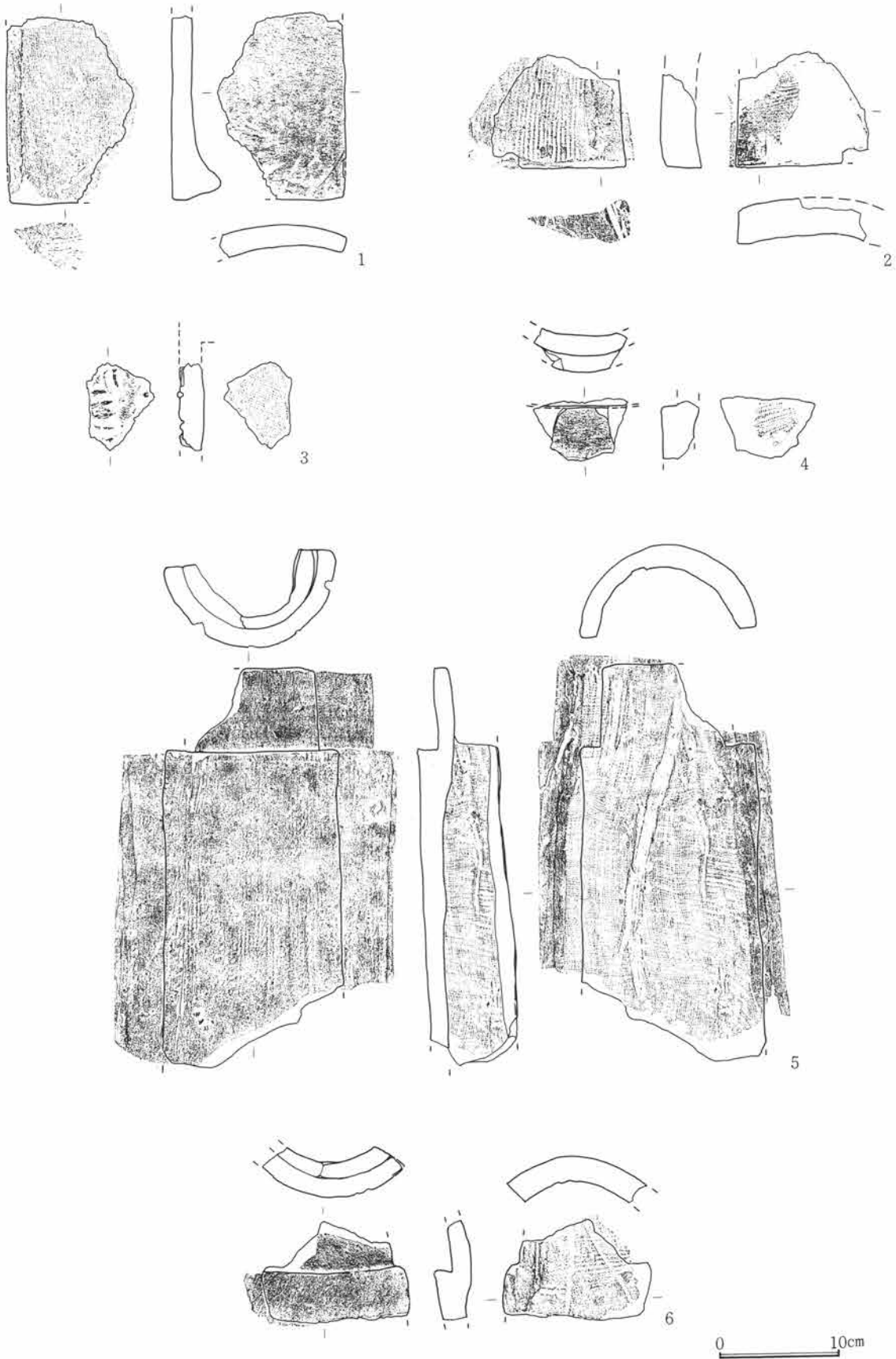
第497図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(1)



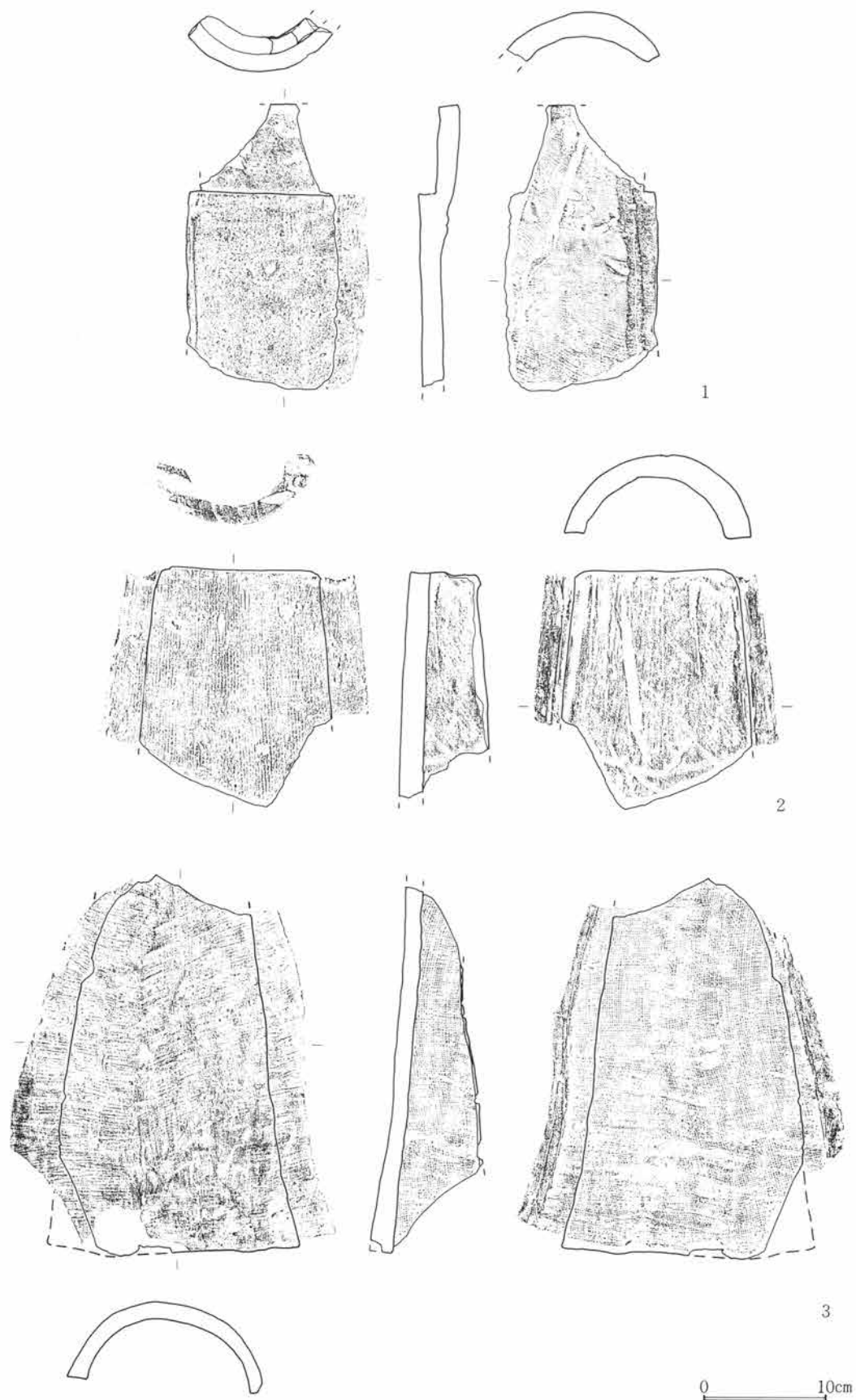
第498図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(2)

0 10cm

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

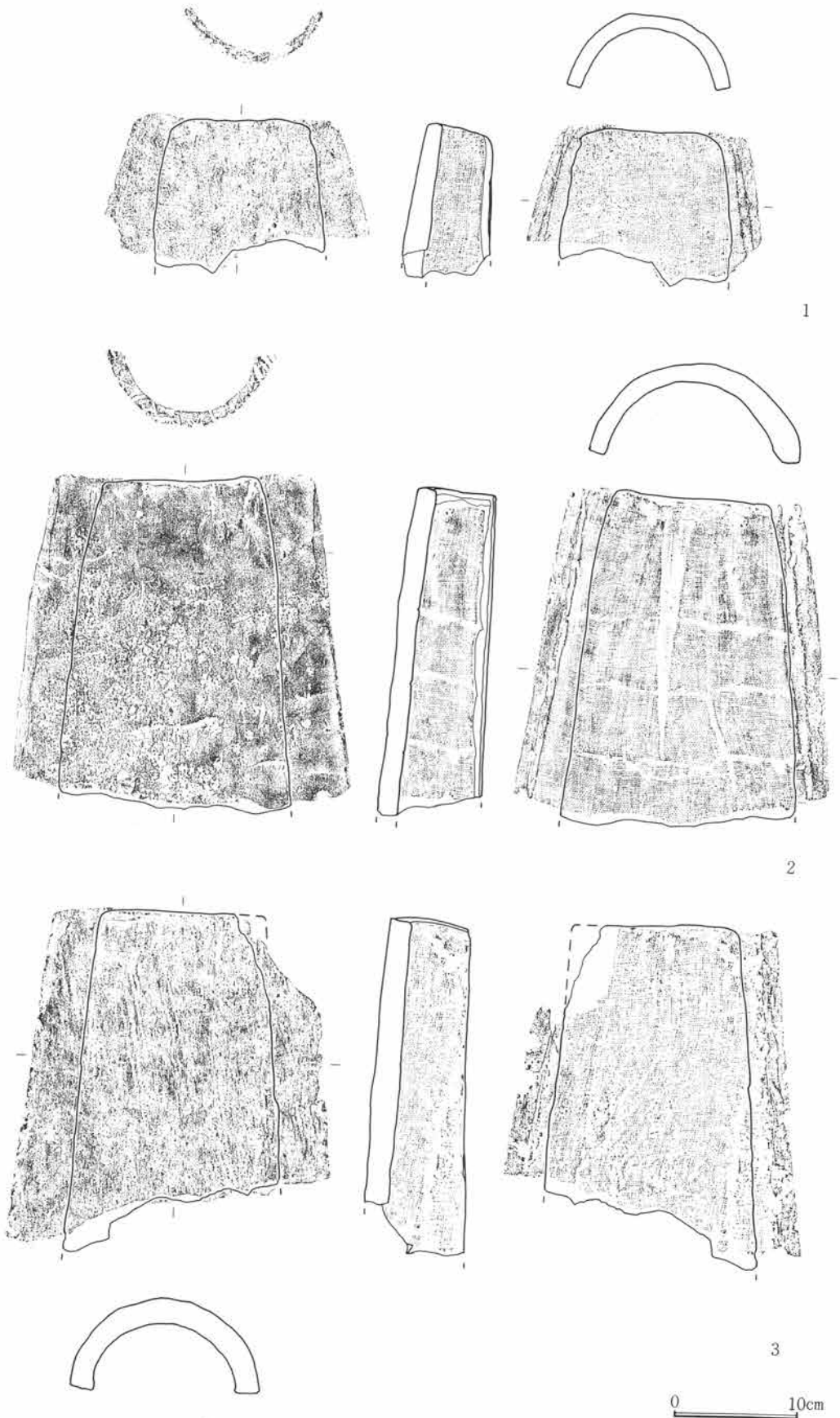


第499図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(3)

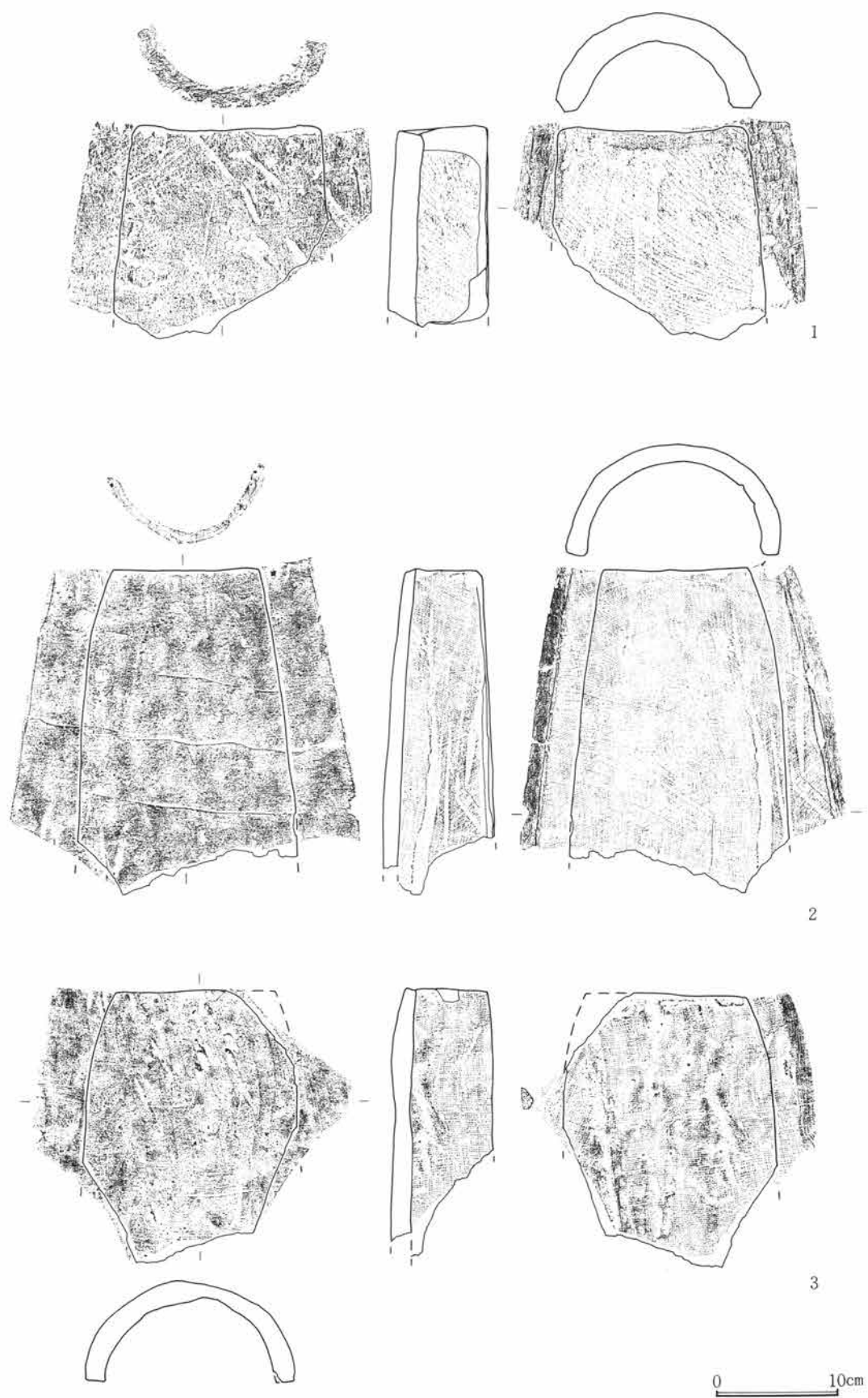


第500図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(4)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

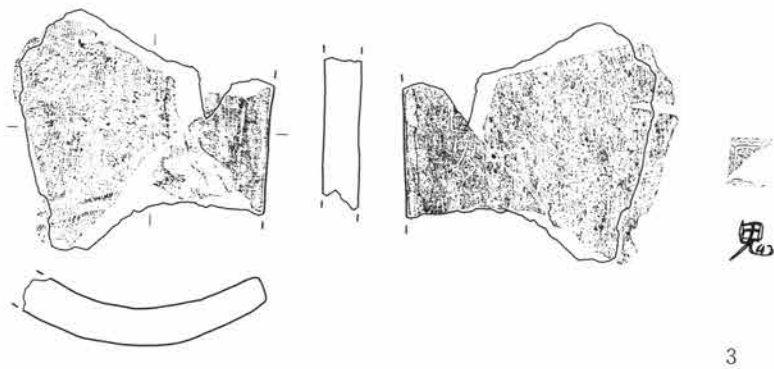
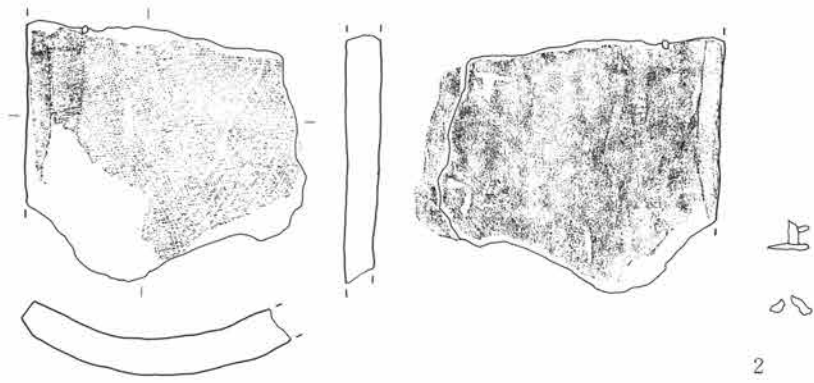
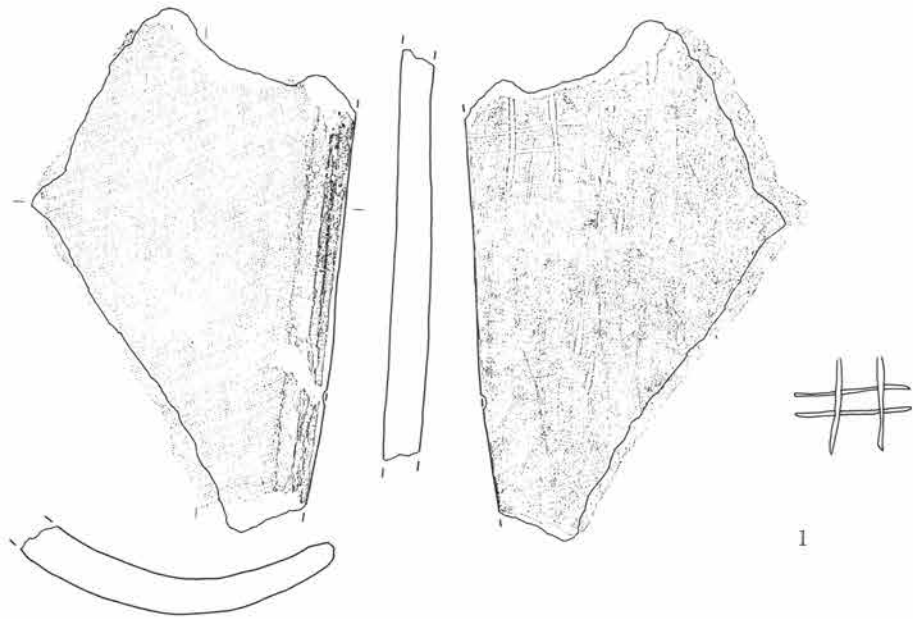


第501図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(5)



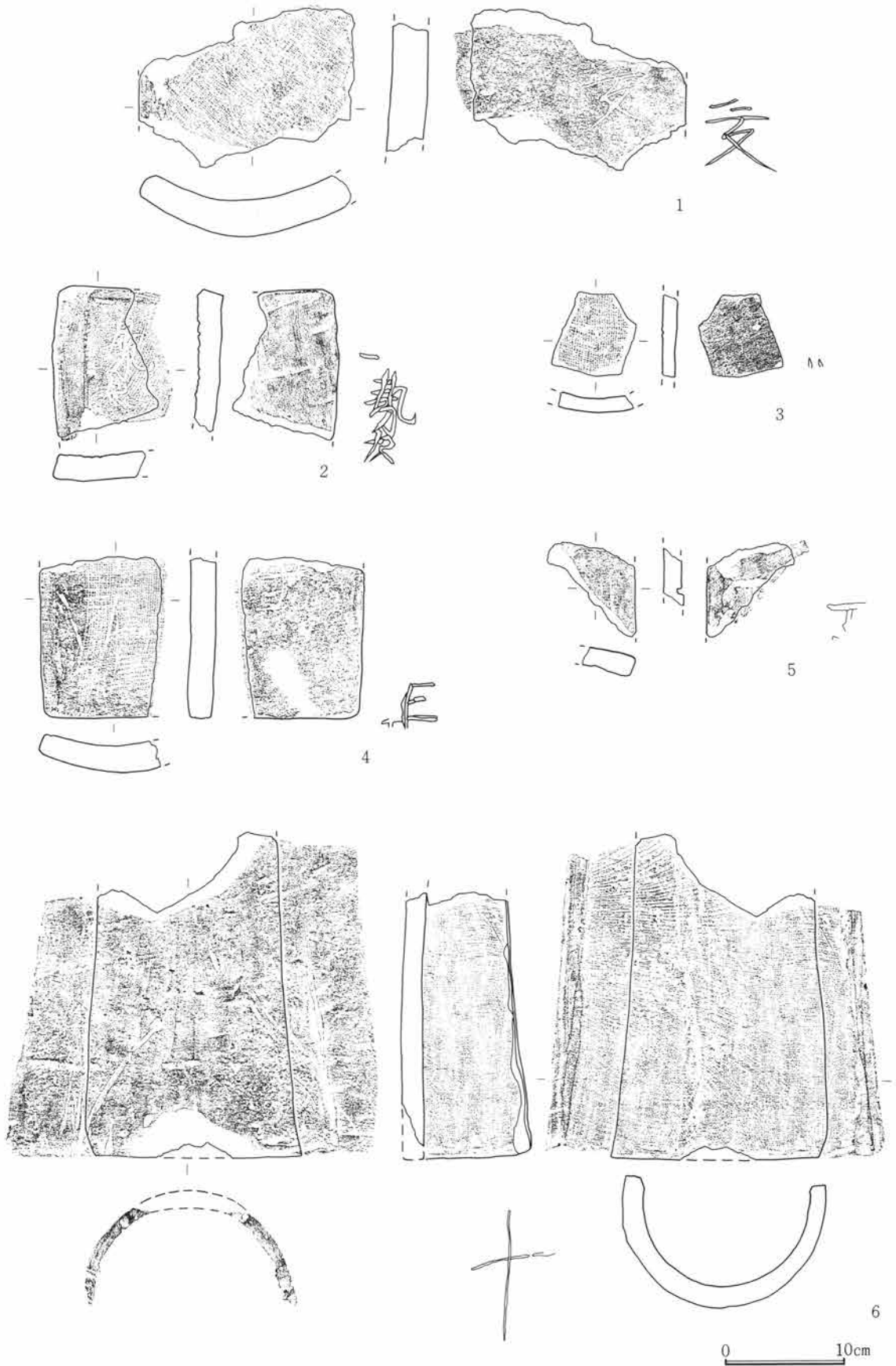
第502図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(6)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



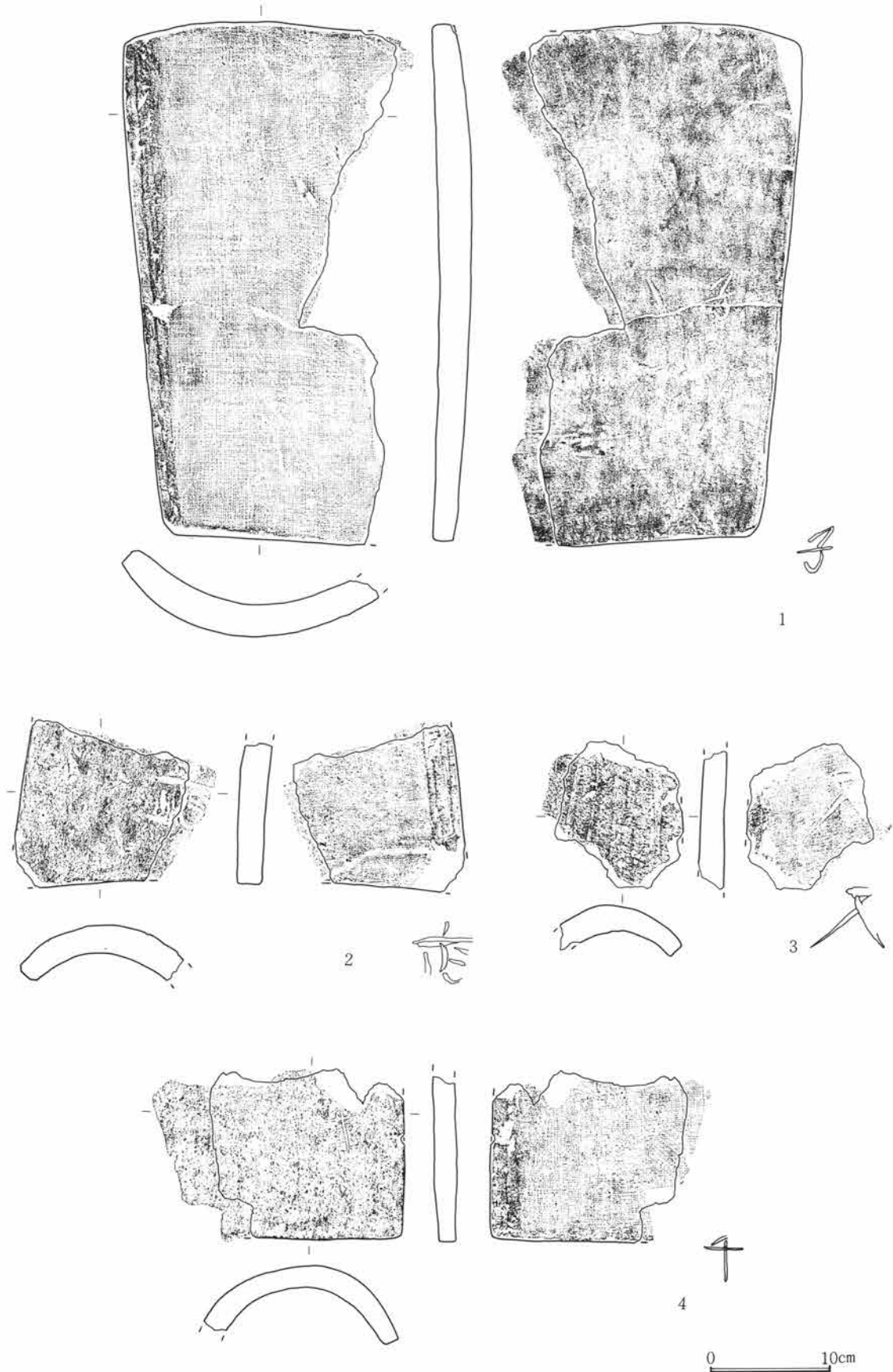
0 10cm

第503図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(7)



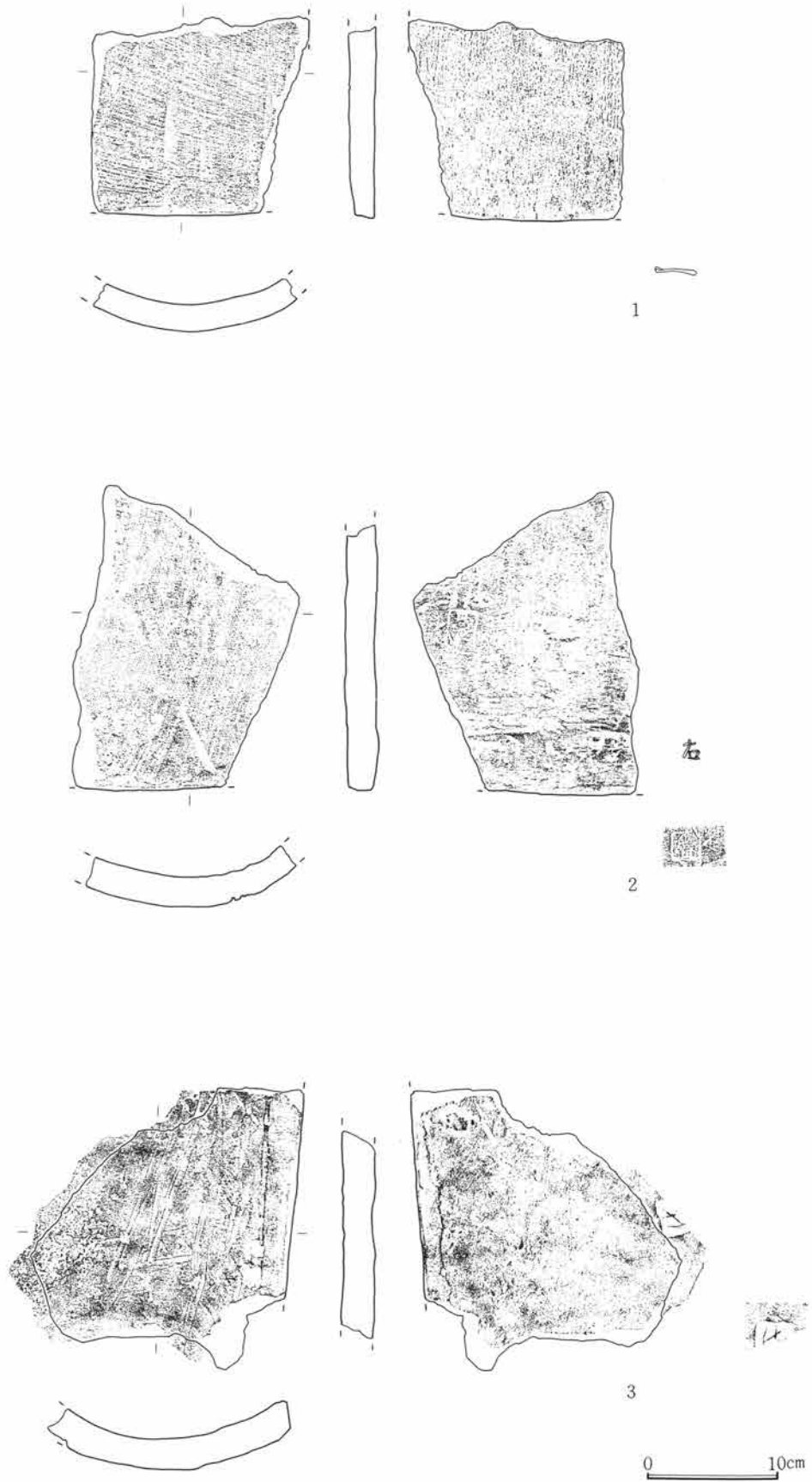
第504図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(8)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



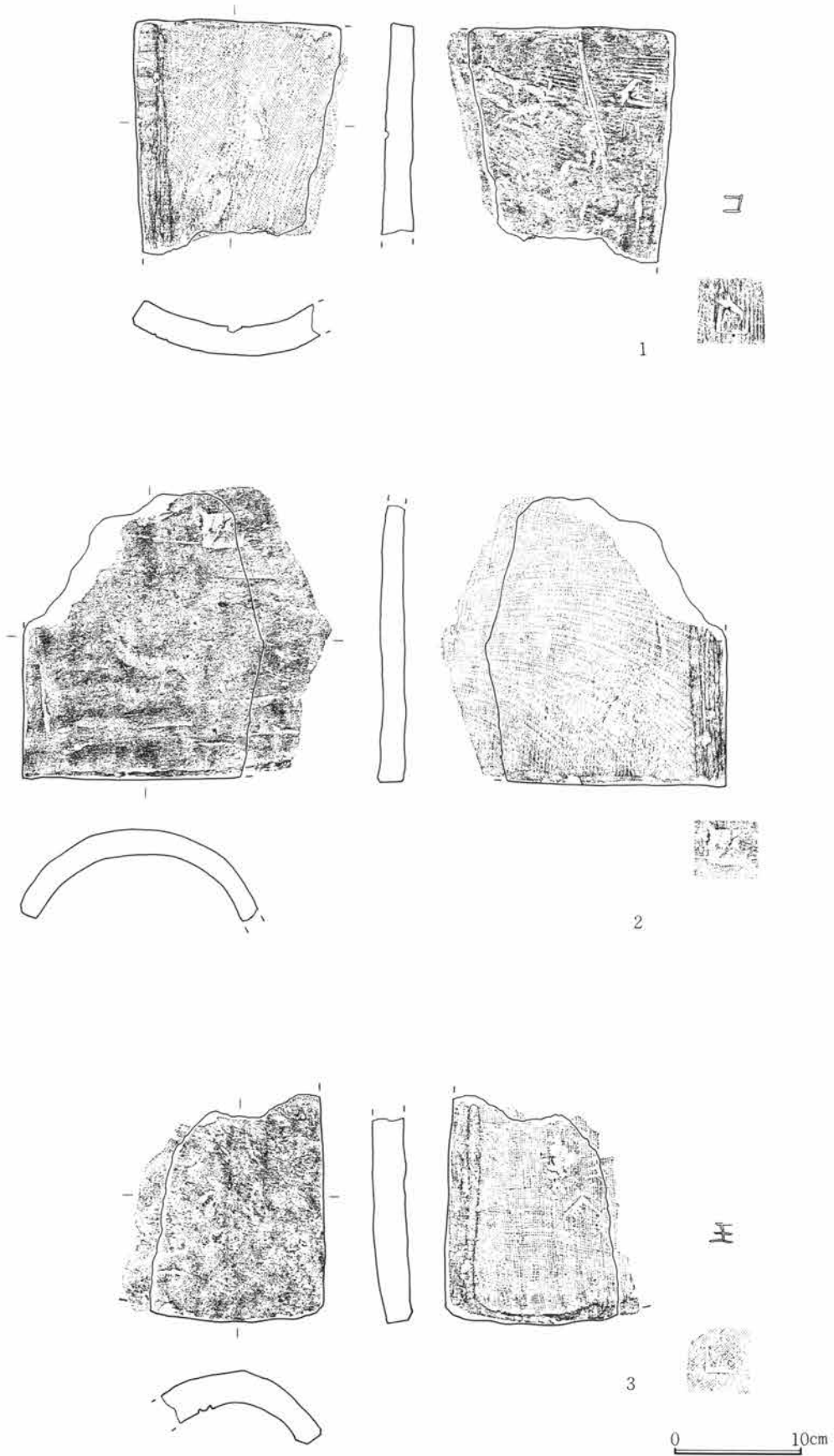
第505図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(9)

第3章 検出された遺構・遺物

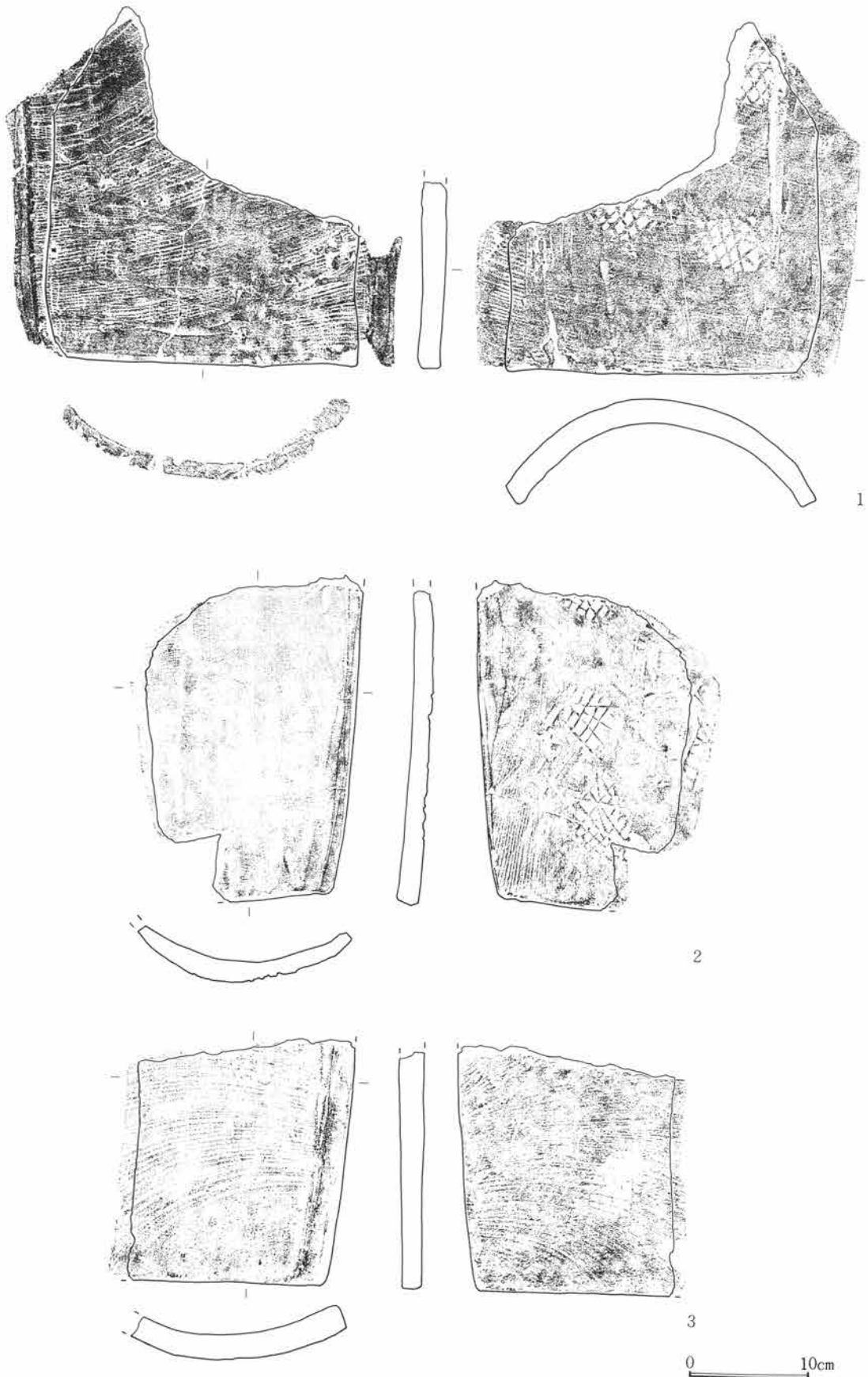


第506図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(10)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

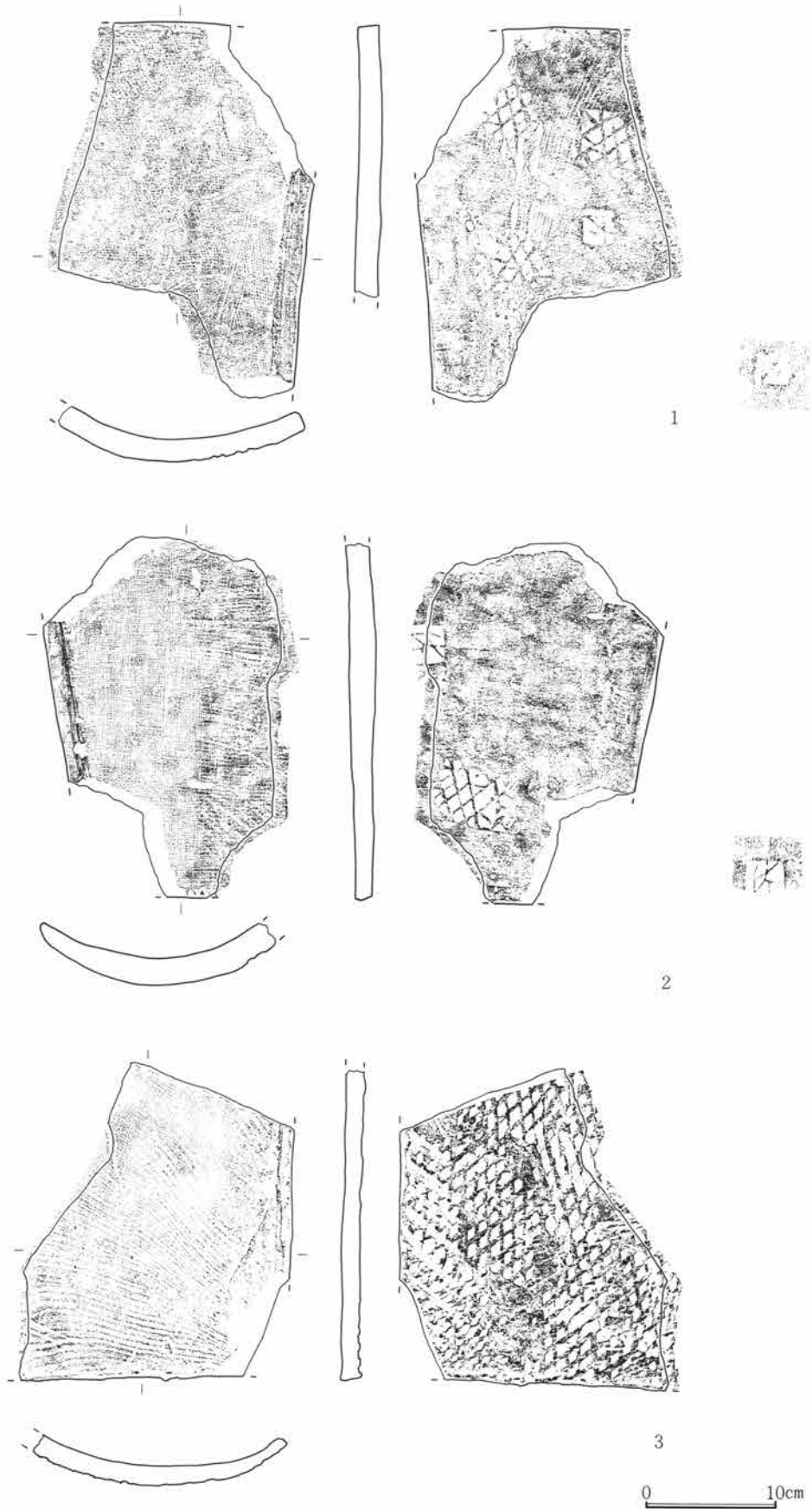


第507図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(11)



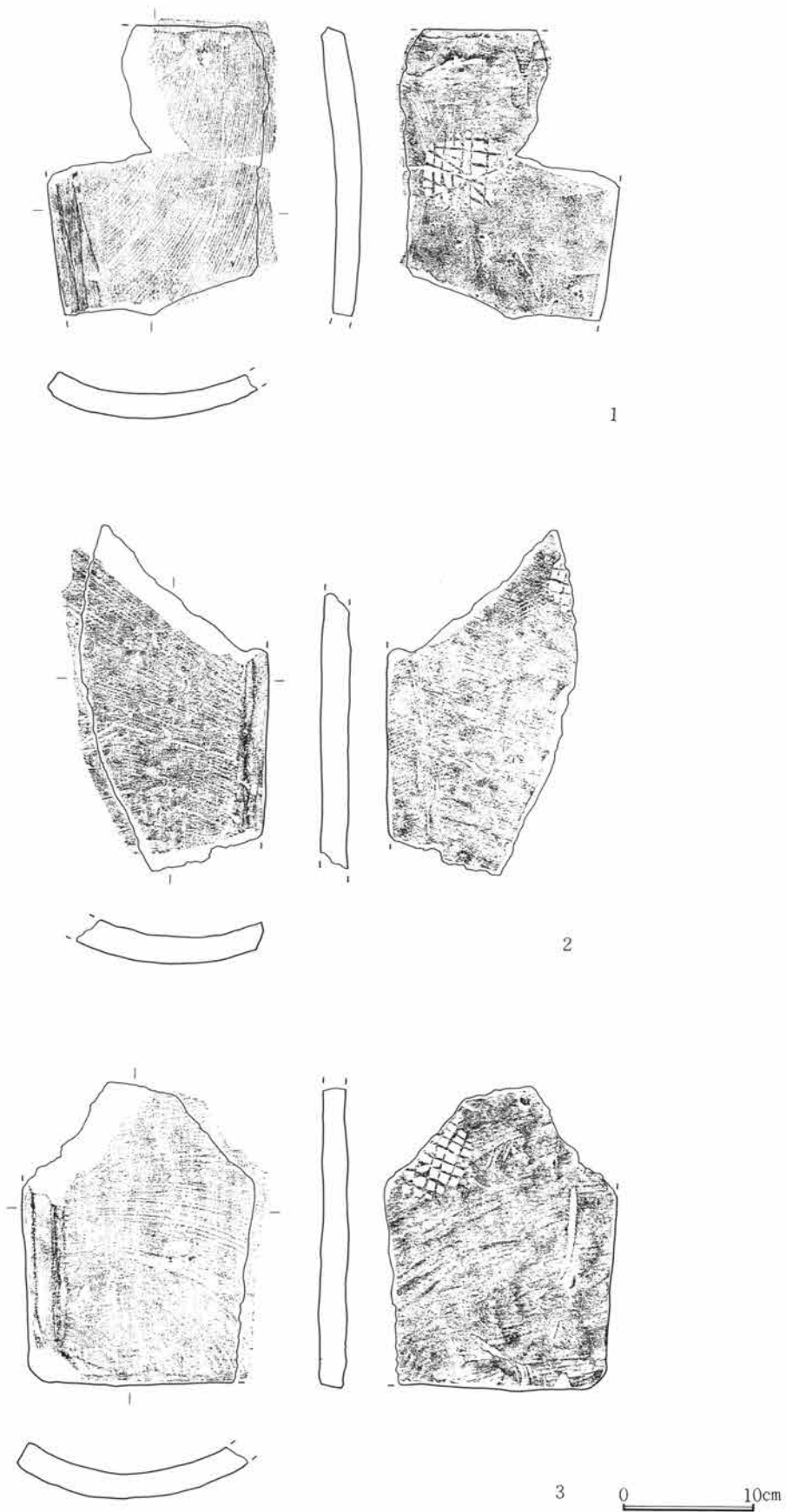
第508図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(12)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



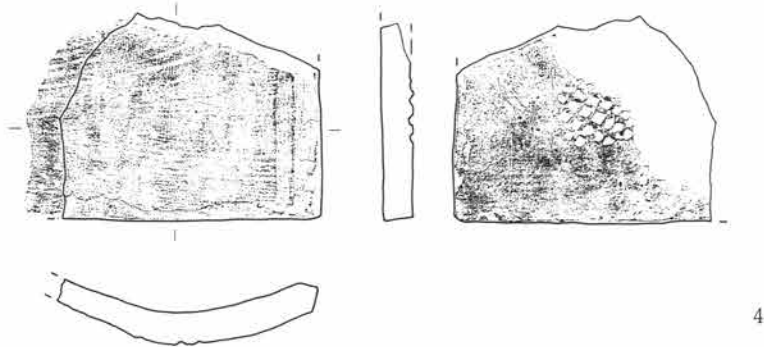
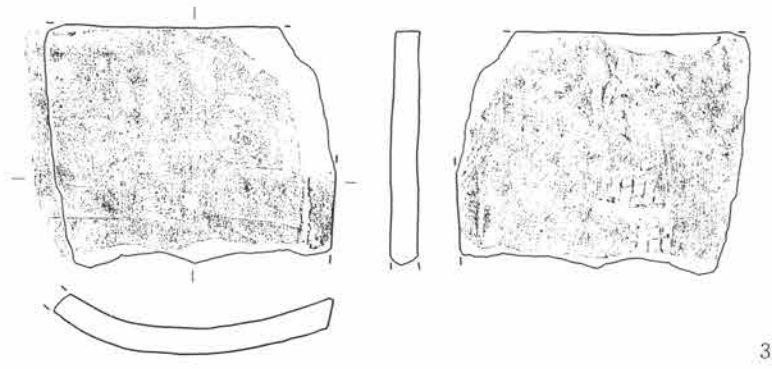
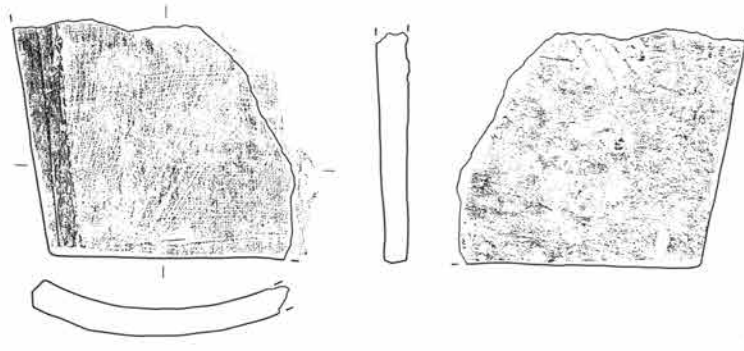
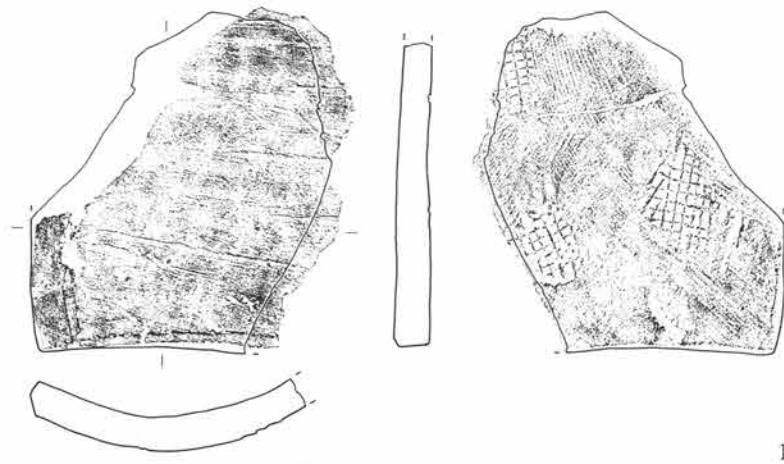
第509図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(13)

第3章 検出された遺構・遺物



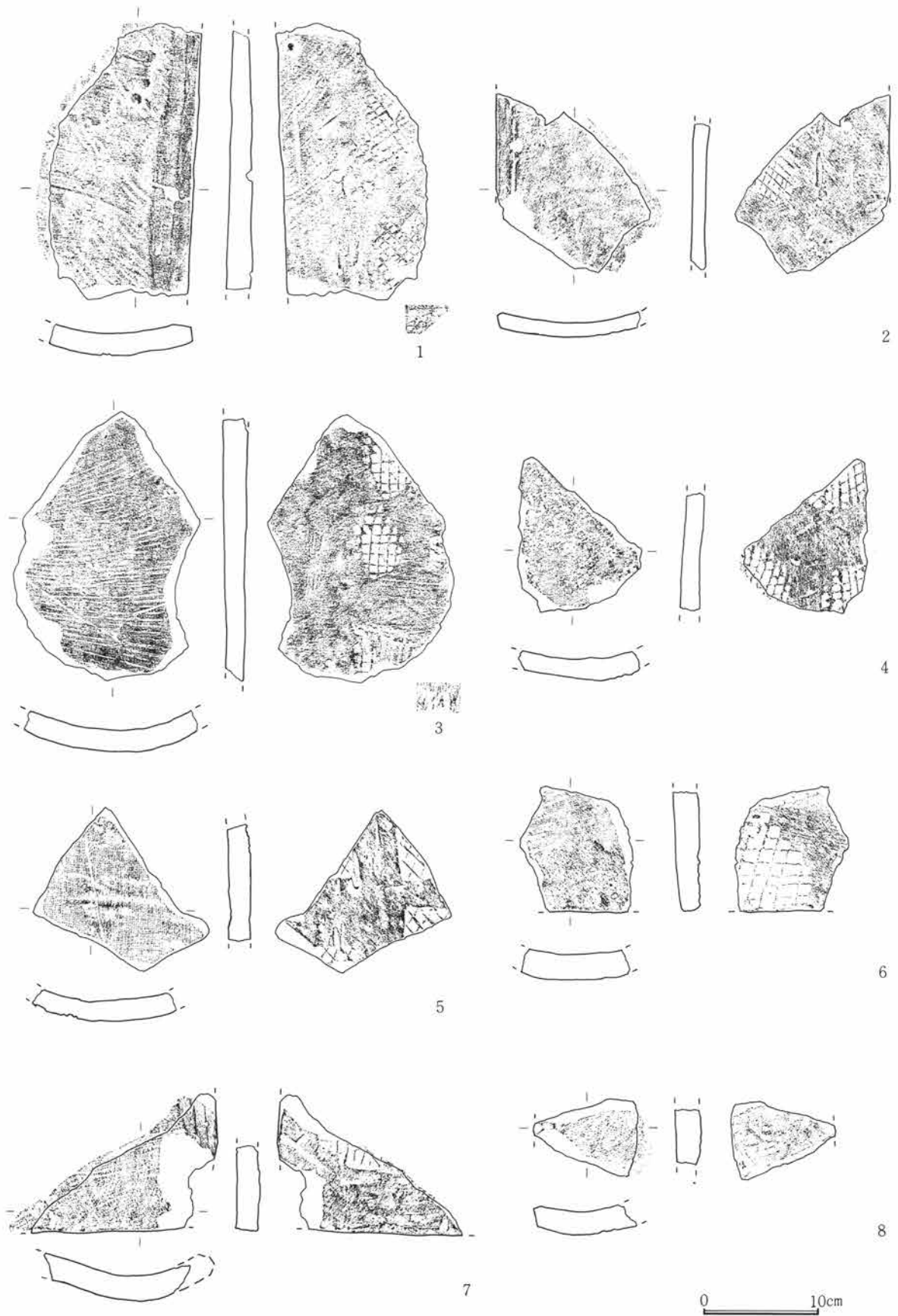
第510図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(14)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



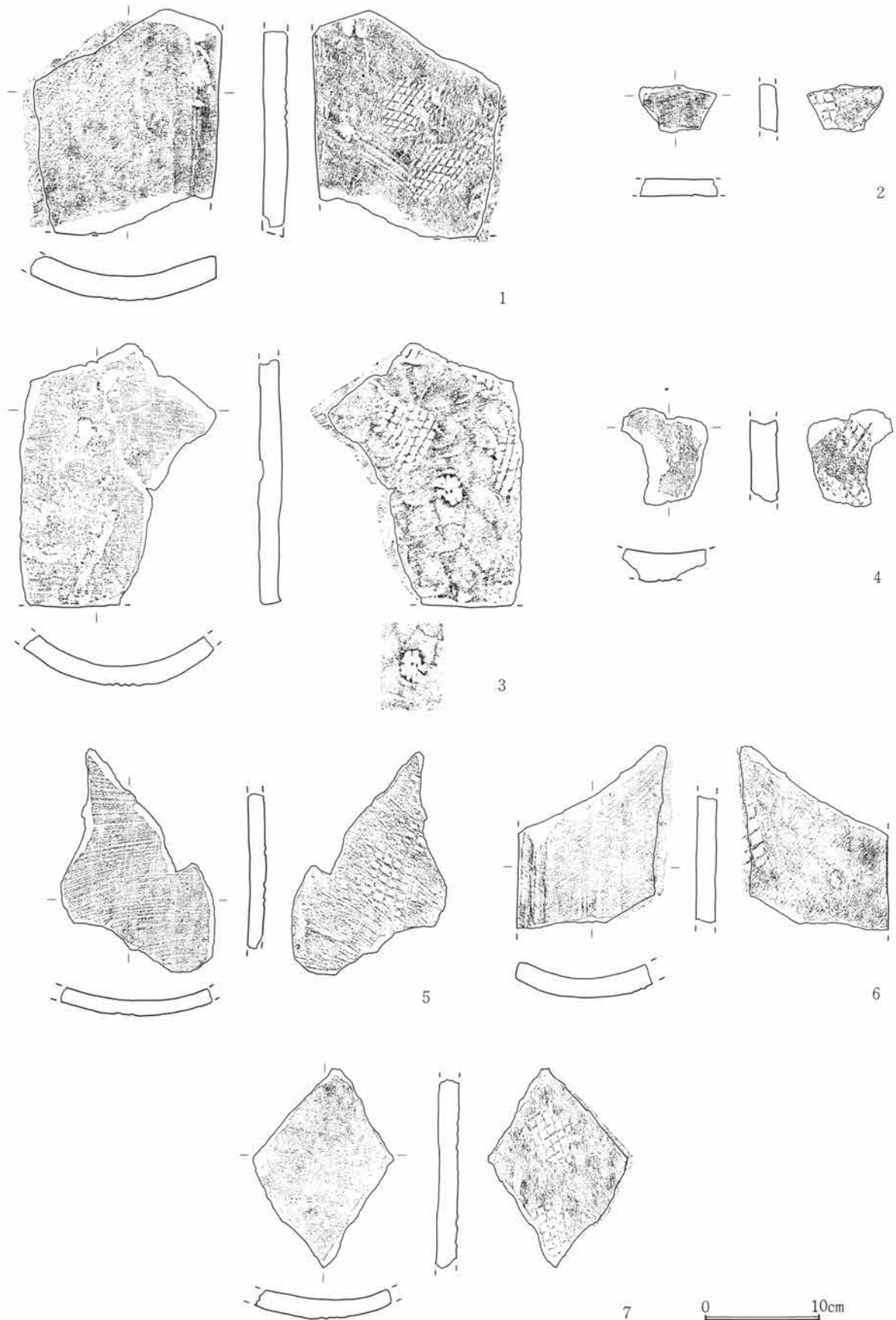
0 10cm

第511図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(15)



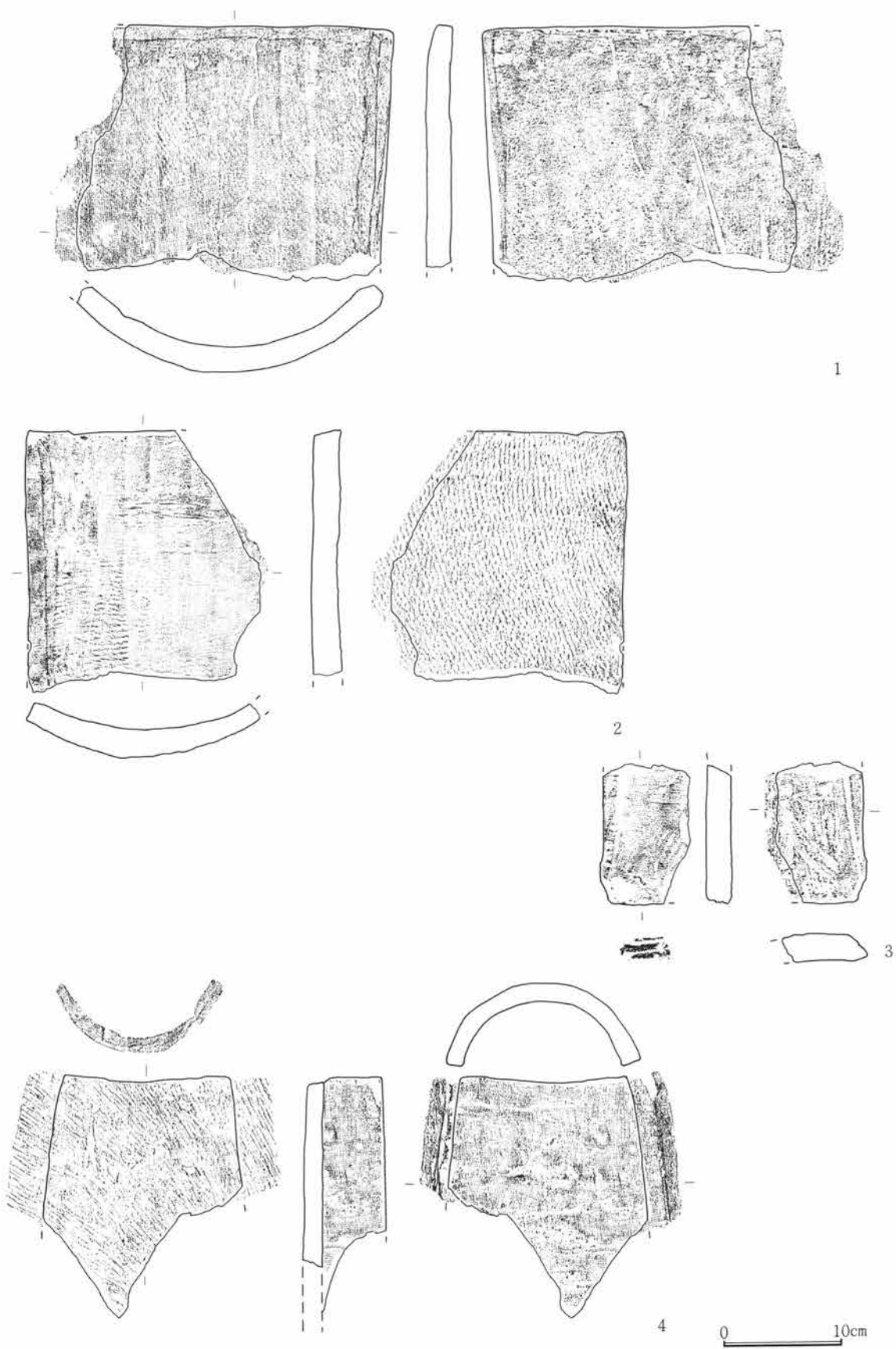
第512図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(16)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



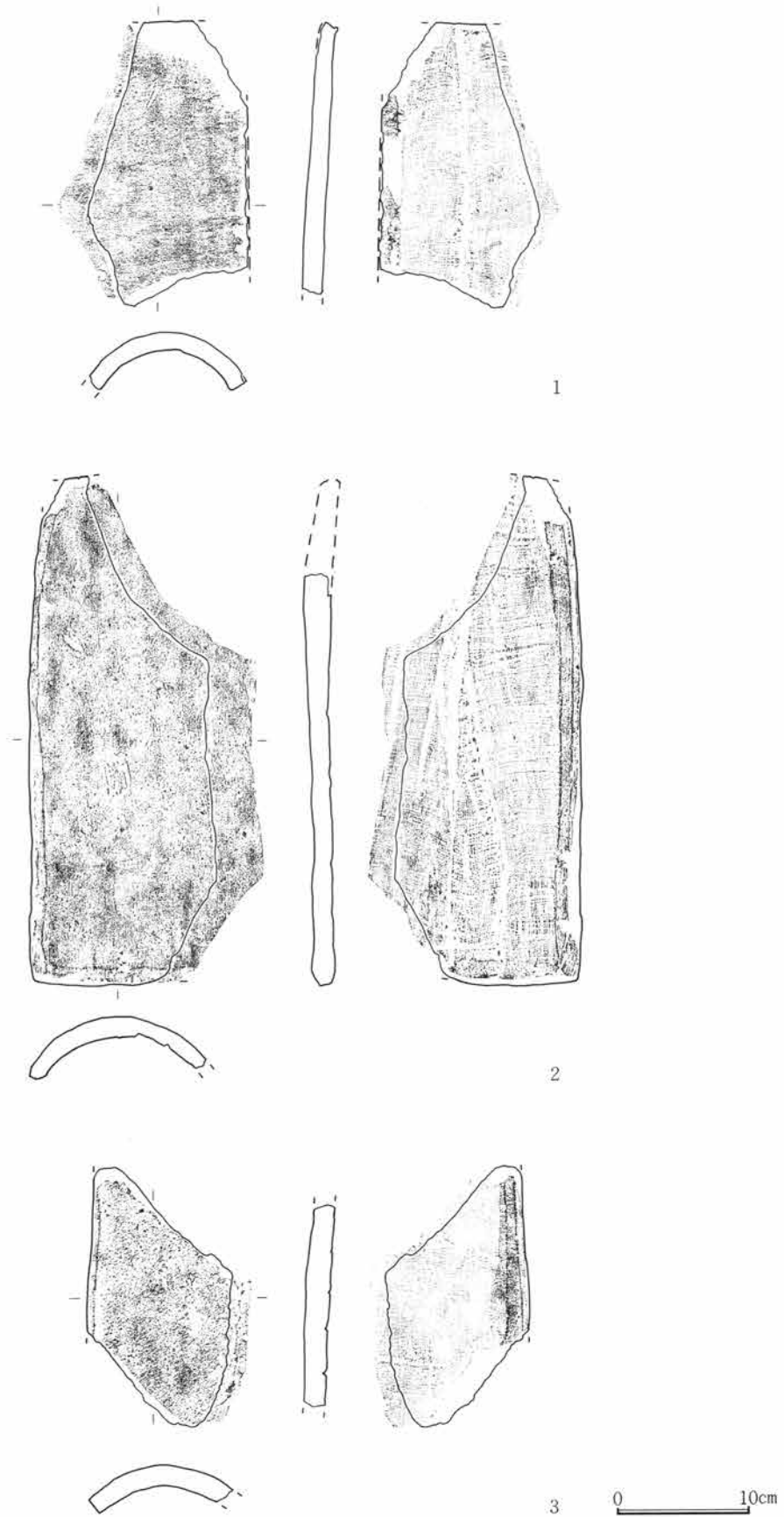
第513図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(17)

第3章 検出された遺構・遺物



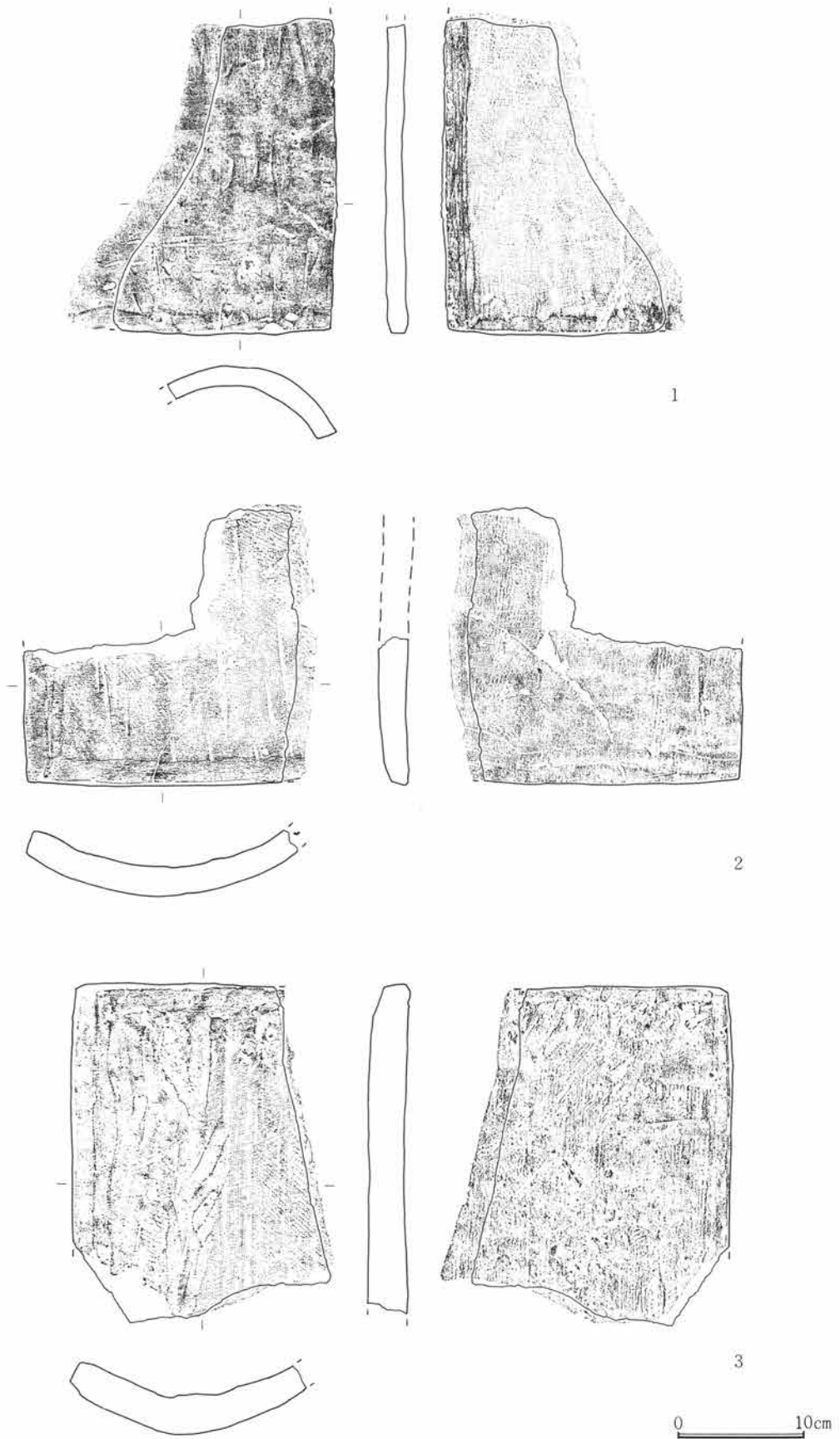
第514図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(18)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



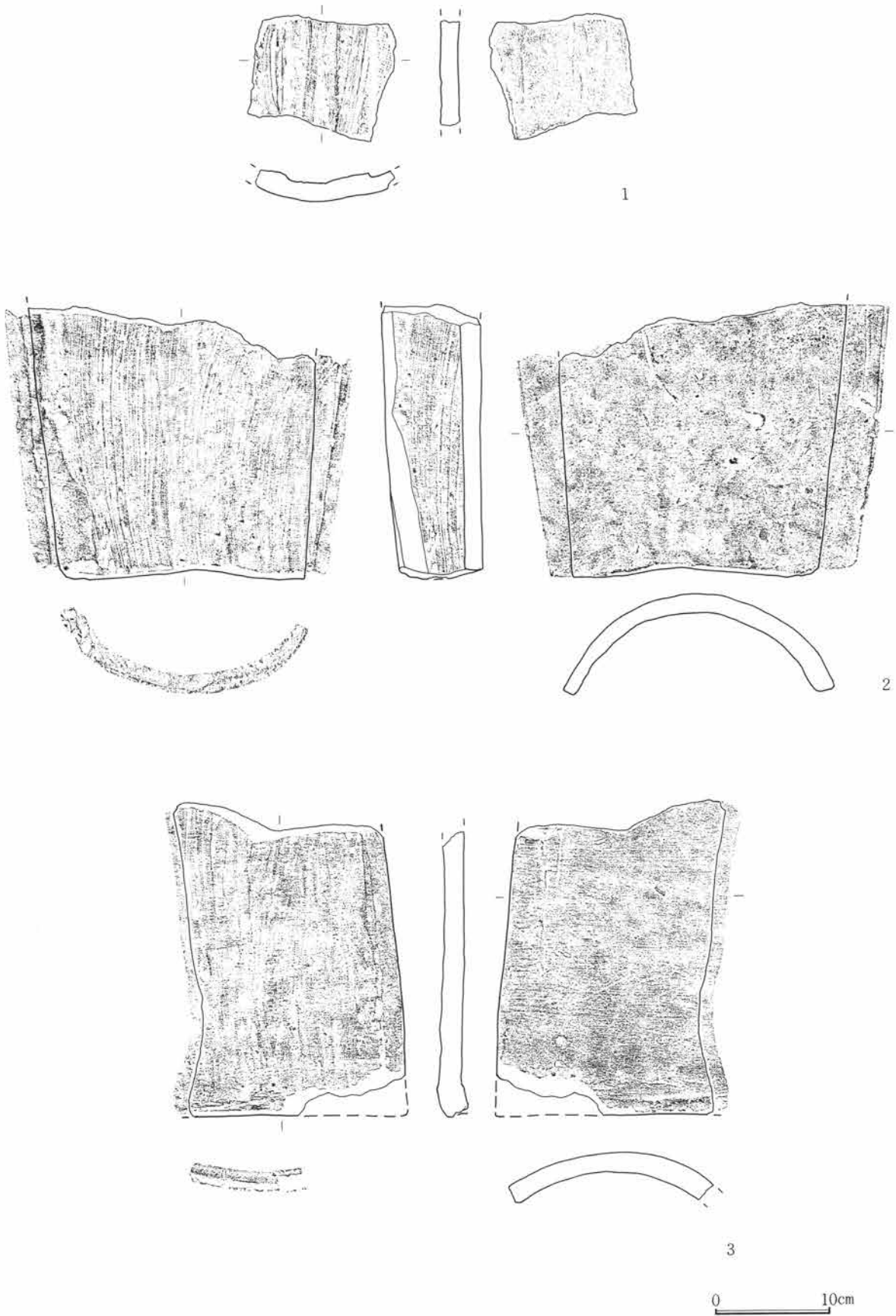
第515図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(19)

第3章 検出された遺構・遺物

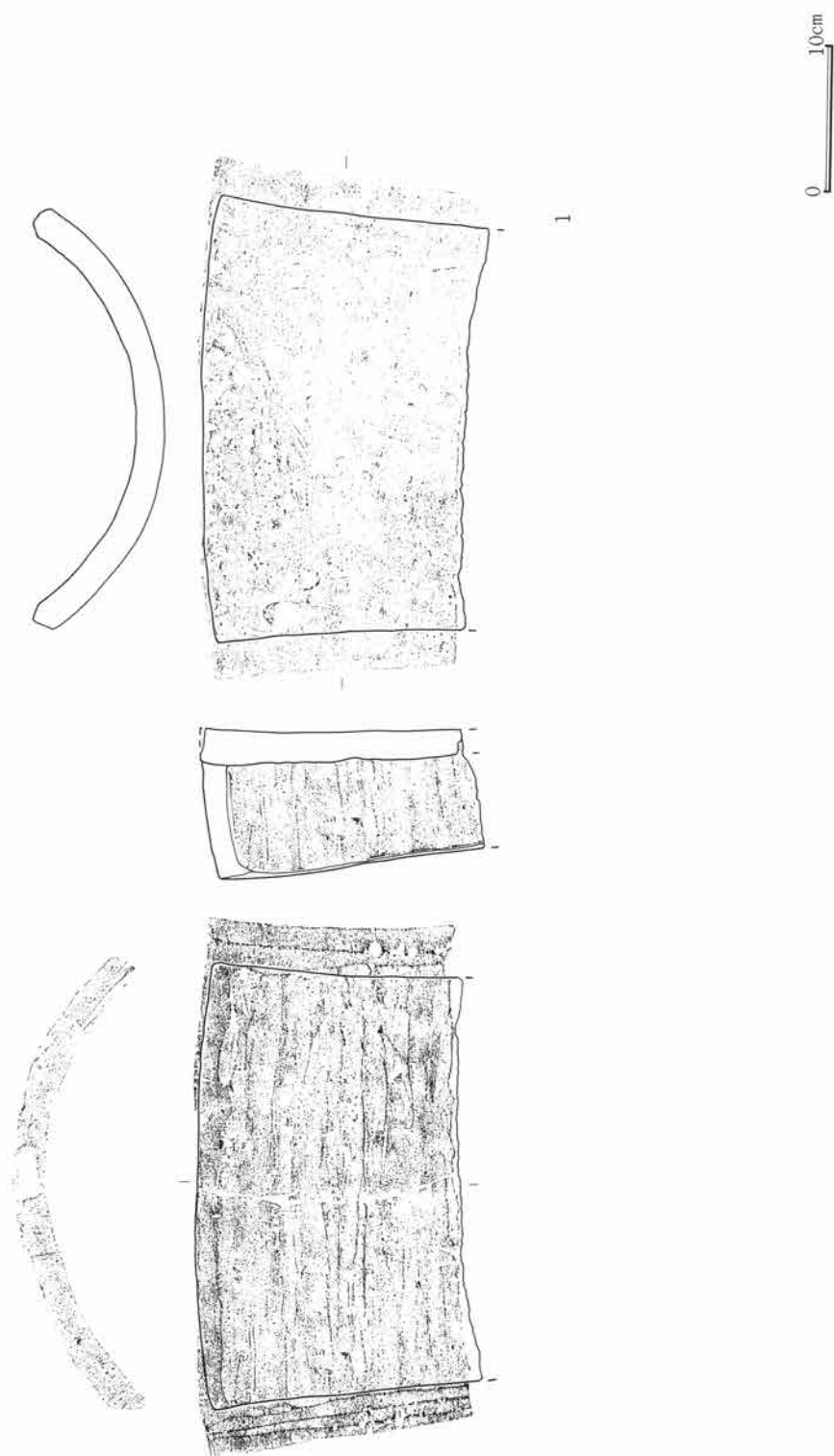


第516図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(20)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

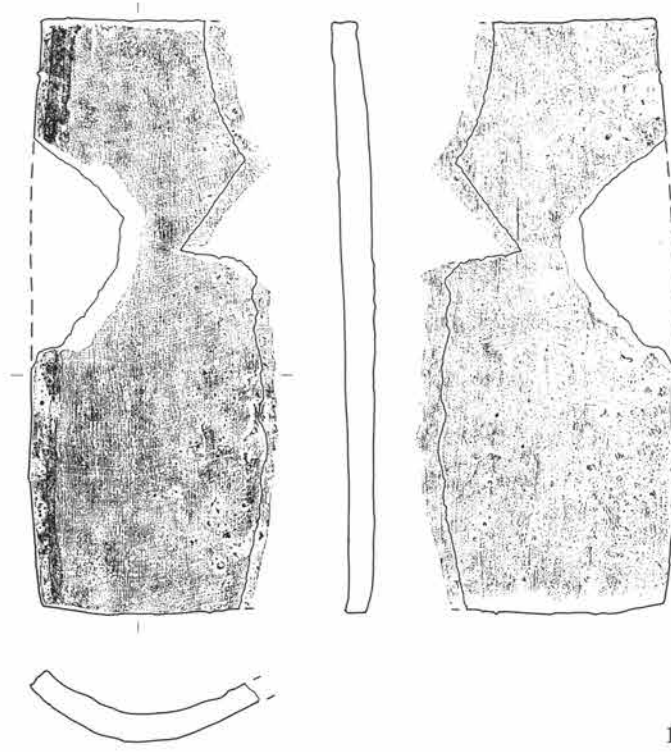


第517図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(21)



第518図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(22)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



1



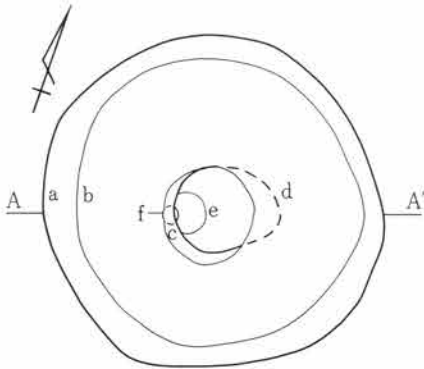
2

0 10cm

第519図 G区第4号井戸跡出土遺物実測図(23)

第3章 検出された遺構・遺物

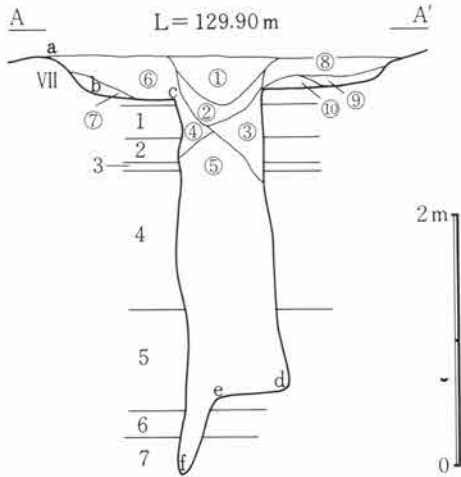
遺構名称	G区第5号井戸跡		位置	37・38-G-46・47			平面形状	円形
規模 (m)	地上径2.78	底径0.83	最細径0.18	最大径0.78	深度3.27	湧水位	夏期3.20?	
アグリ部最大径	夏季 — ・冬季 —		湧水層	7層?		耐水層	7層以下	



当井戸跡は、調査区東寄りに位置し、他の遺構との重複はみられない。開口部周囲は、径約2.7m、深度約20cmの円形の範囲が掘り込まれている。しかし井戸枠等の施設に関するものとは考えられず、地山井筒円筒形の井戸と思われる。

断面形は、開口部からほぼ垂直に掘り込まれ、アグリはみられない。このことから、夏季に削井され使用期間の短い井戸であった可能性が高い。

井戸充填土は人為的堆積土と考えられる。



- ① 暗褐色土 c P粗粒とVI層土ブロックを微量含み粘性は弱い。
 - ② // c Pの細粒をわずかに含む。
 - ③ // ②層よりc Pがわずかに多い。
 - ④ // c Pはやや細粒で③層より少ない。
 - ⑤ // c PはごくわずかでVI層土ブロックを多く含む。
 - ⑥ // c PはわずかでVI層土粒及び灰色砂粒を微量含む。
 - ⑦ // c Pは含まずVI層土粒と灰色砂粒を多く含む。
 - ⑧ 灰色砂質土
 - ⑨ 暗褐色土 c Pはほとんど含まずVI層土小ブロックを含む。
 - ⑩ // VI層土粒及び小ブロックを多量に含む。
- 1 褐色火山灰・砂・小礫混 (固結)
 - 2 褐色粗砂 (固結)
 - 3 ブラックバンド
 - 4 褐色粗砂 (固結)
 - 5 灰・青灰色細砂
 - 6 灰色シルト
 - 7 灰褐色シルト

第520図 G区第5号井戸跡実測図

遺構名称	G区第6号井戸跡		位置	1~4-G-64~67			平面形状	円形
規模 (m)	地上径6.70	底径0.59	最細径0.80	最大径4.20	深度7.36	湧水位	夏期4.20・冬期7.10	
アグリ部最大径	夏季 4.20 ・冬季 —		湧水層	9・14層		耐水層	10層、14層以下	

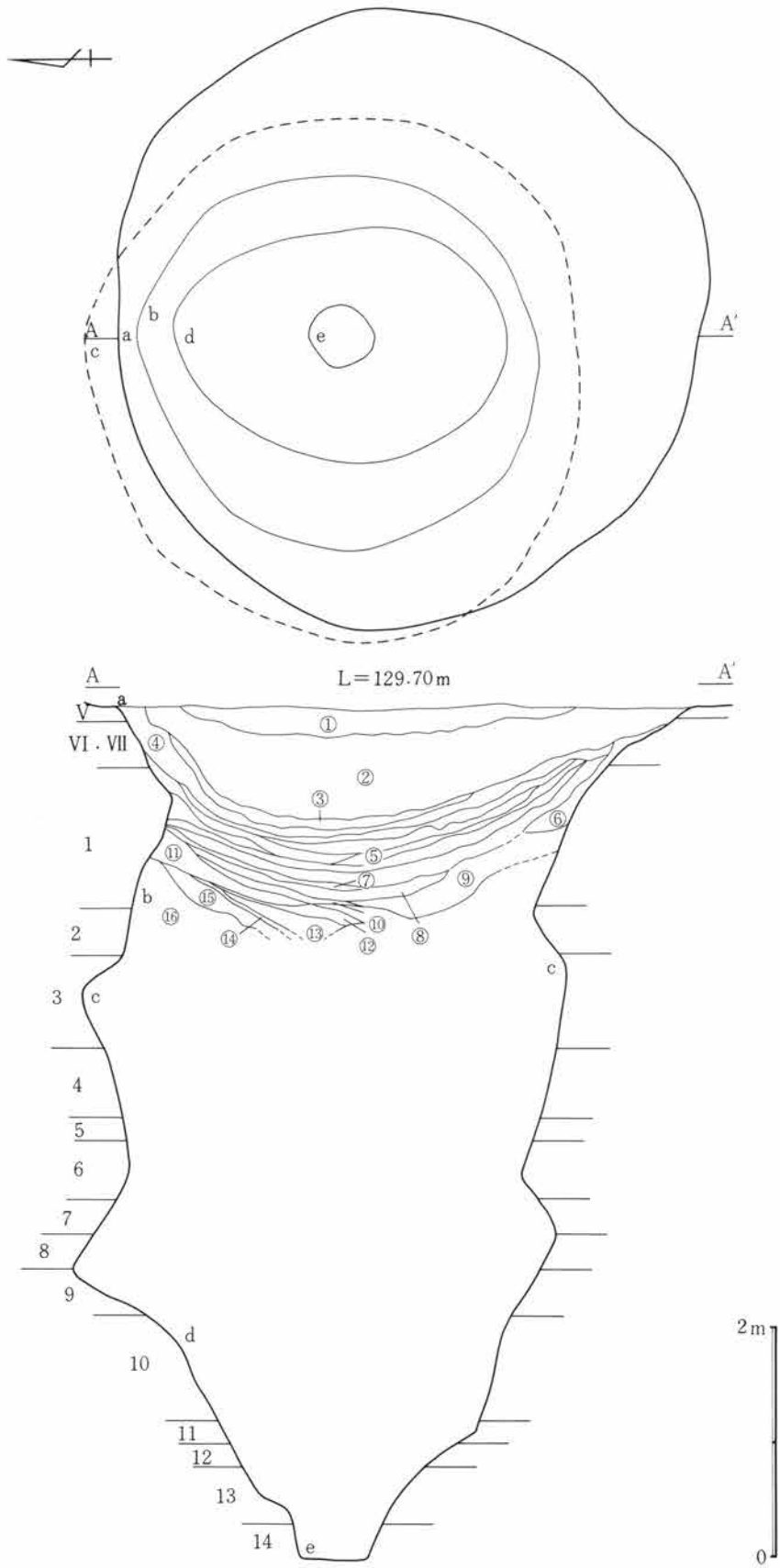
当井戸跡は、調査区西寄りに位置し、西側で第43号住居跡と重複している。この住居跡との新旧関係は、井戸確認時、住居平面形を検出することができなかったことから、当井戸跡の方が新しいものと判断した。

調査時に井戸に関する施設等の痕跡は全く検出されず、このことから当井戸跡は、地山井筒円筒形の井戸であったものと判断される。

断面形は、開口部がロート状で、3層、8・9層部にアグリが存在しているが、棚落ちにより両方共小規模となっている。しかしこのため井戸径は、開口部に近い径のまま下部に至っている。

井戸充填土は、下部は棚落ち等の自然堆積で、約6m下より上層は、下位に礫を、上位に瓦を主体として多量に遺物出土がみられ、人為的な堆積土であろう。また、上部の約2m下付近に、B軽石の純堆積層の1ユニットが約1m厚で検出された。遺物は一括投棄されたものと考えられる。

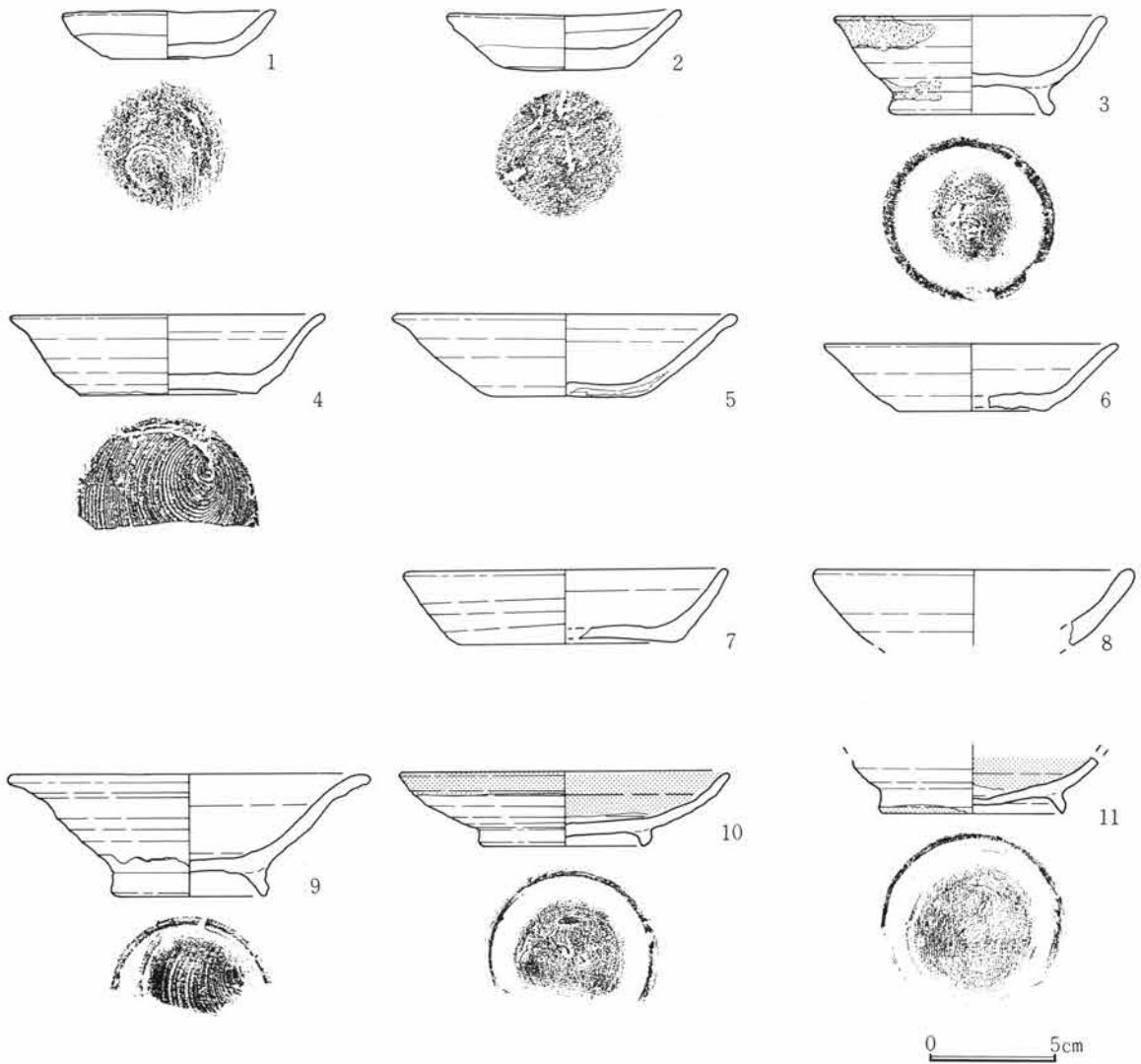
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第521図 G区第6号井戸跡実測図

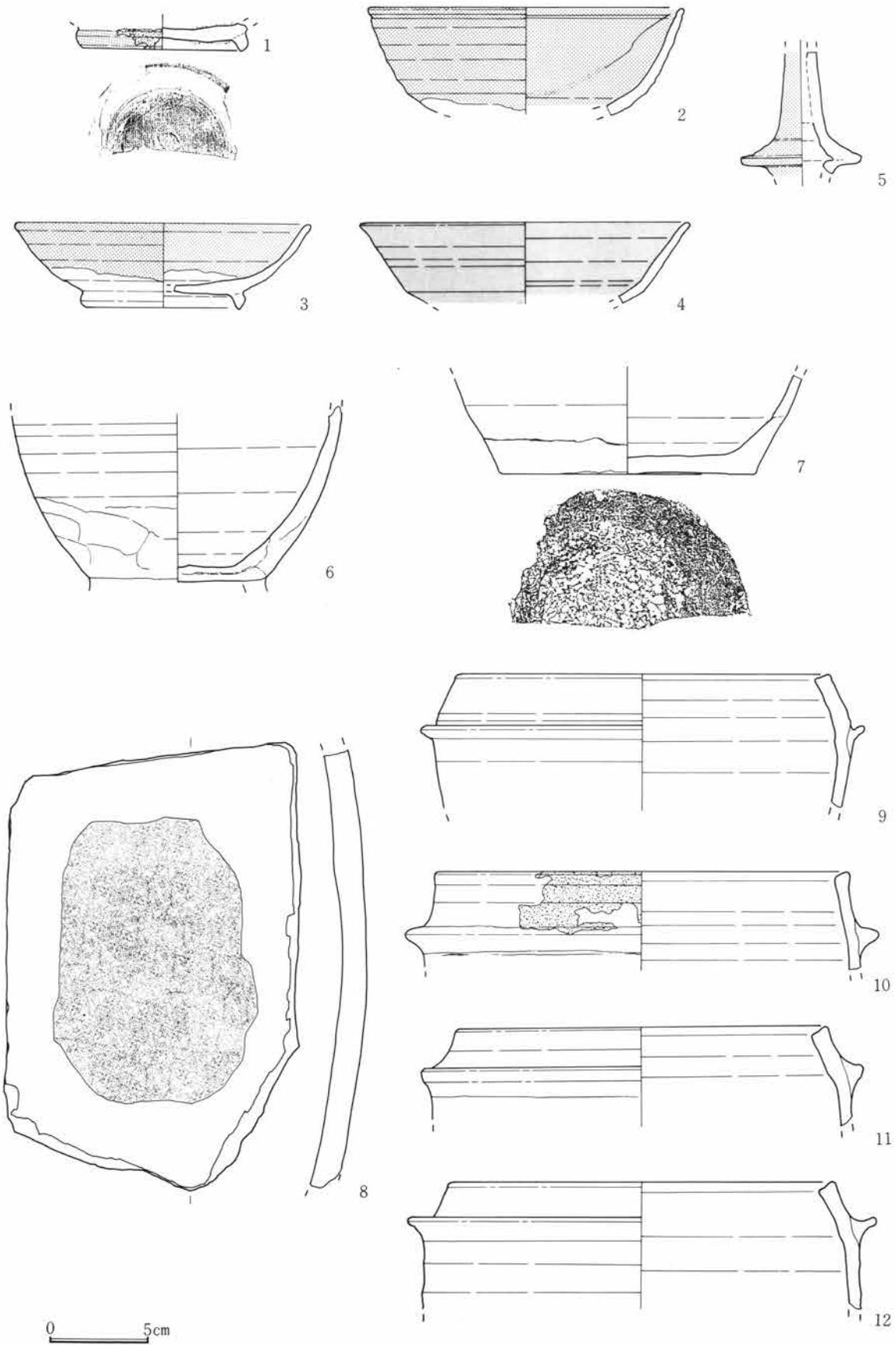
第3章 検出された遺構・遺物

- | | |
|--------------------------|----------------|
| ① 黒色砂質土 B軽石主体。 | 1 火山灰・砂・小礫混 |
| ② 灰褐色土 Bユニットの二次的堆積。 | 2 褐灰色火山灰・砂（固結） |
| ③ 黒褐色土 粉状の炭化物。 | 3 灰色細砂（固結） |
| ④ 灰褐色土 濁ったBと炭化物を含む。 | 4 灰褐色砂質シルト |
| ⑤ Bユニット | 5 褐灰色シルト |
| ⑥ 暗褐色土 粘性が強い。 | 6 ブラックバンド |
| ⑦ 茶褐色土 炭化物を多く含む。 | 7 灰褐色シルト |
| ⑧ // 焼土ブロック・炭化物を含む。 | 8 灰褐色軽石粒 |
| ⑨ // VI層土ブロックを含む。 | 9 黄褐色シルト |
| ⑩ // ⑦層に近似。 | 10 褐灰色火山灰・砂 |
| ⑪ // 粘性があり地山砂層ブロックを若干含む。 | 11 灰色砂質シルト |
| ⑫ // ⑦層に近似。 | 12 灰褐色シルト |
| ⑬ // VI層土ブロックを若干含む。 | 13 灰褐色細砂（固結） |
| ⑭ // ⑦層に近似。 | 14 褐灰色シルト |
| ⑮ // VI層土ブロックを多量に含む。 | |
| ⑯ // 地山砂層ブロックを混入。 | |
| ⑰ // 地山砂層ブロックを多量に混入。 | |



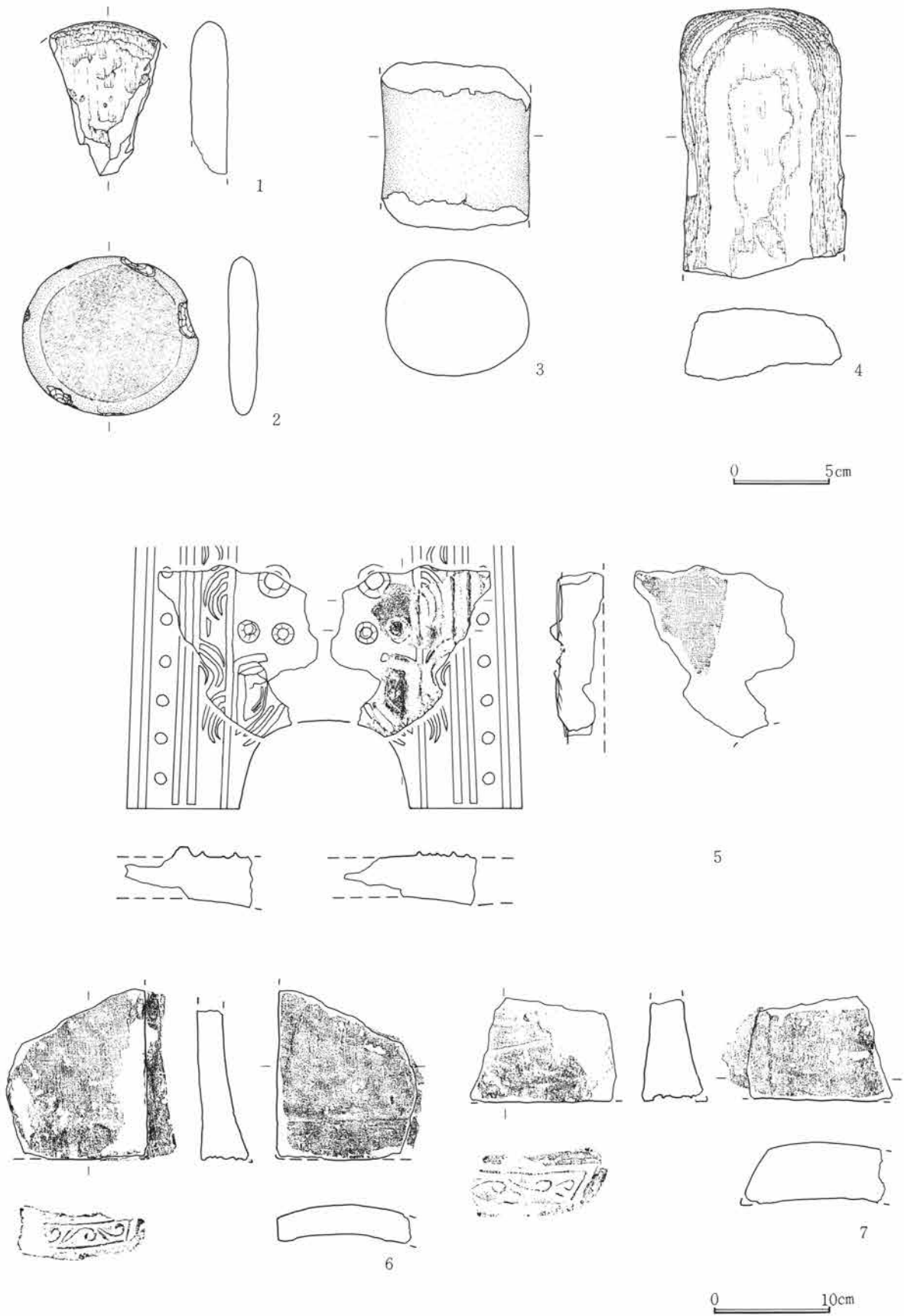
第522図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(1)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

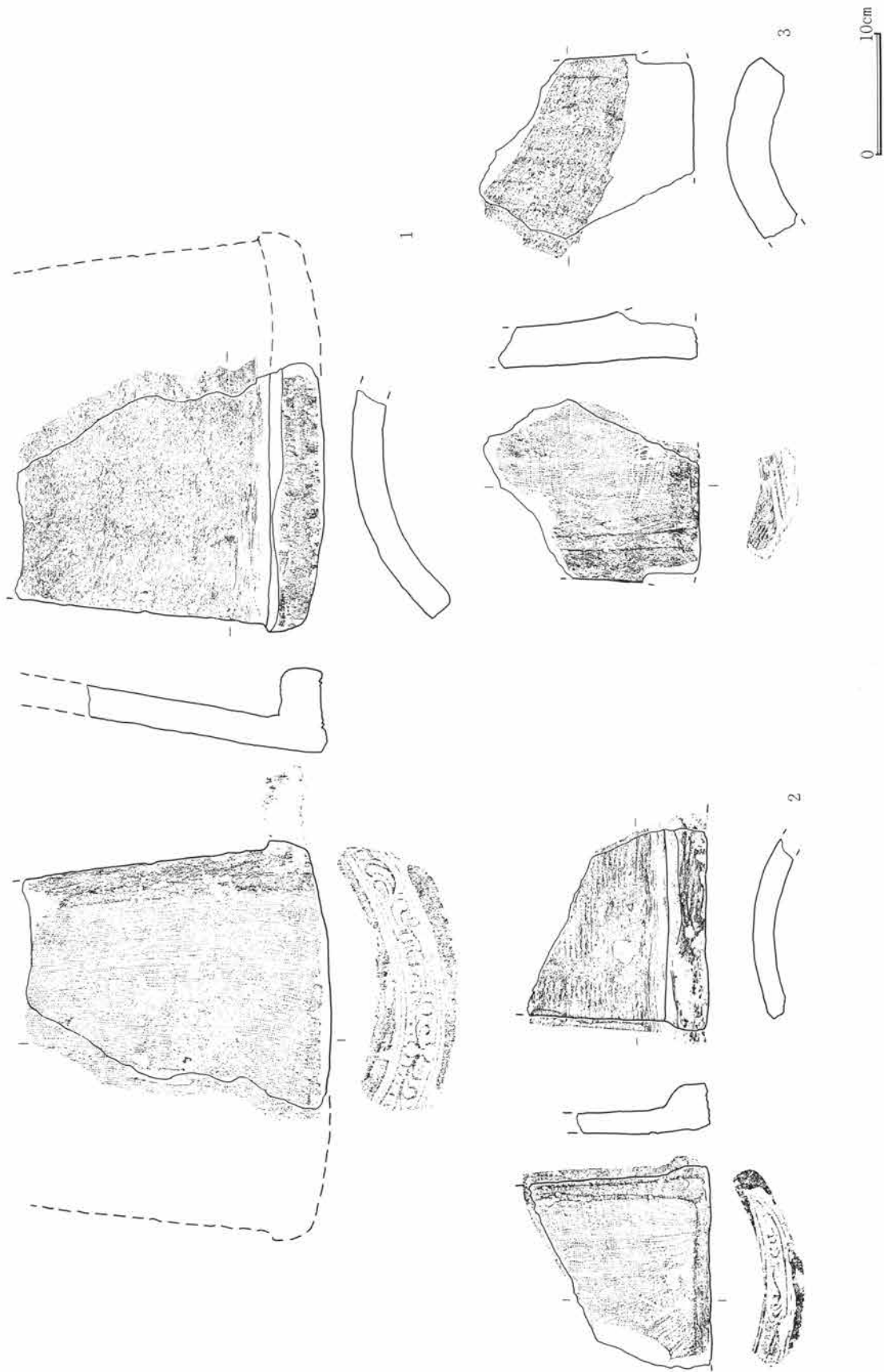


第523図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(2)

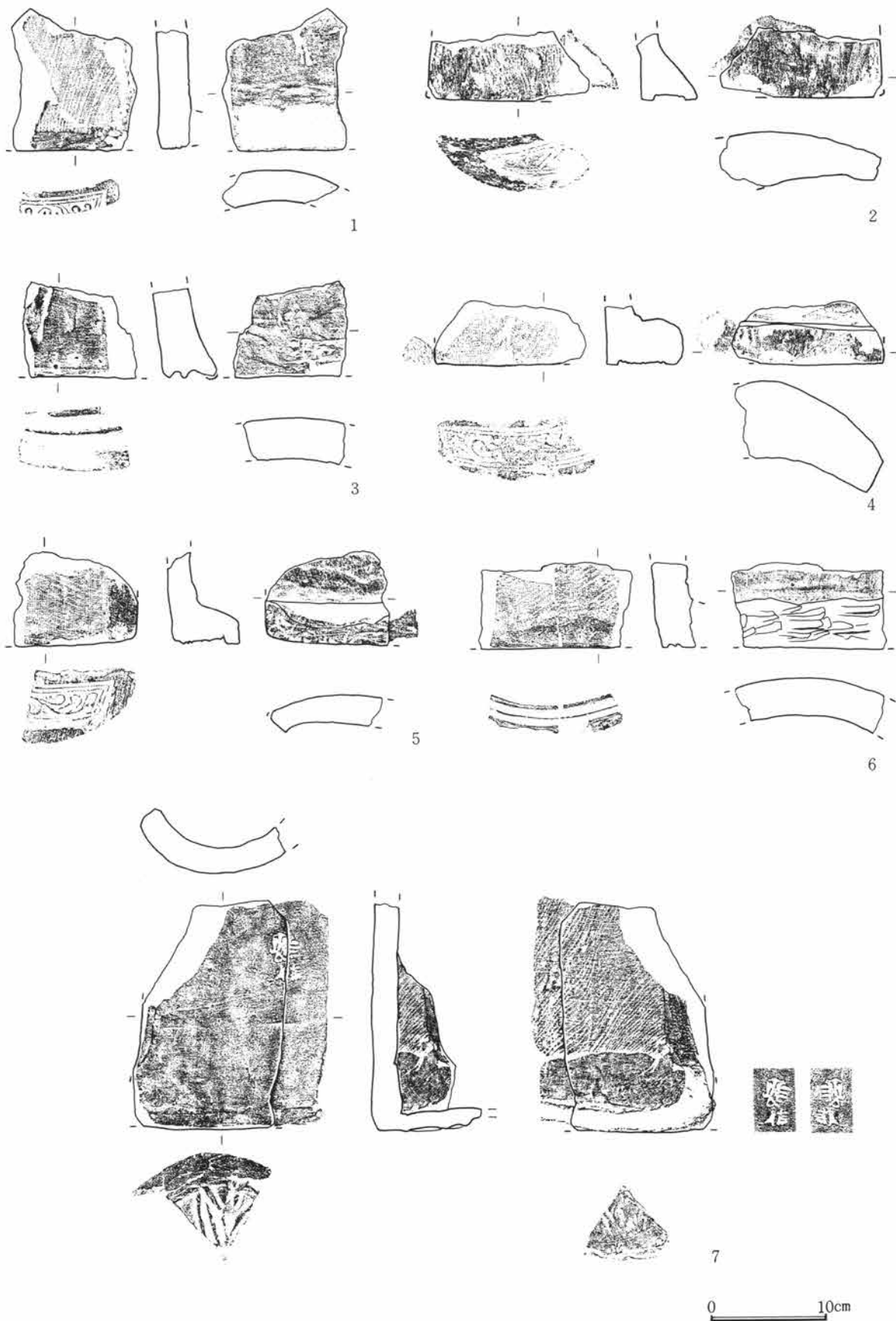
第3章 検出された遺構・遺物



第524図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(3)

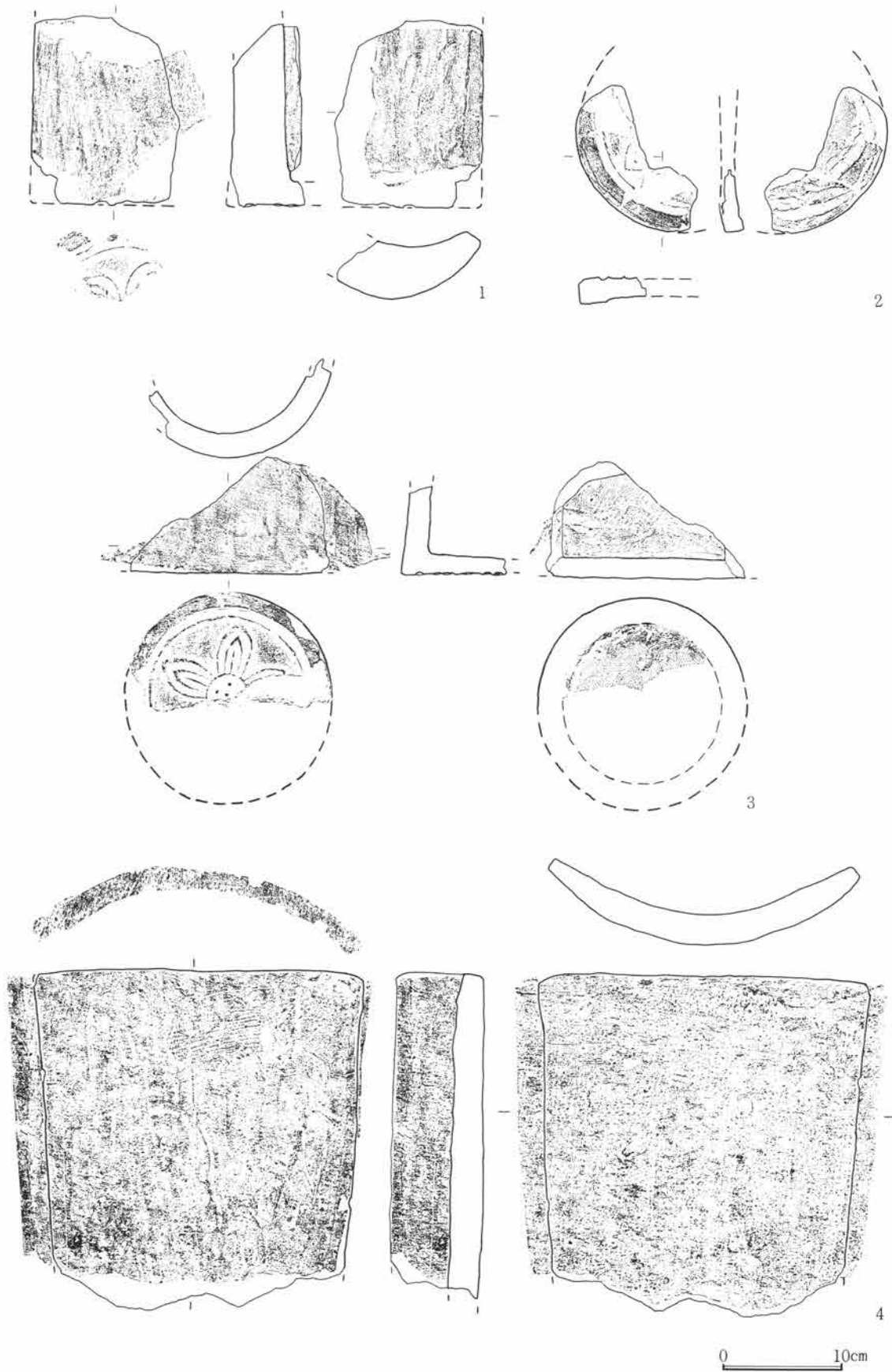


第525図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(4)

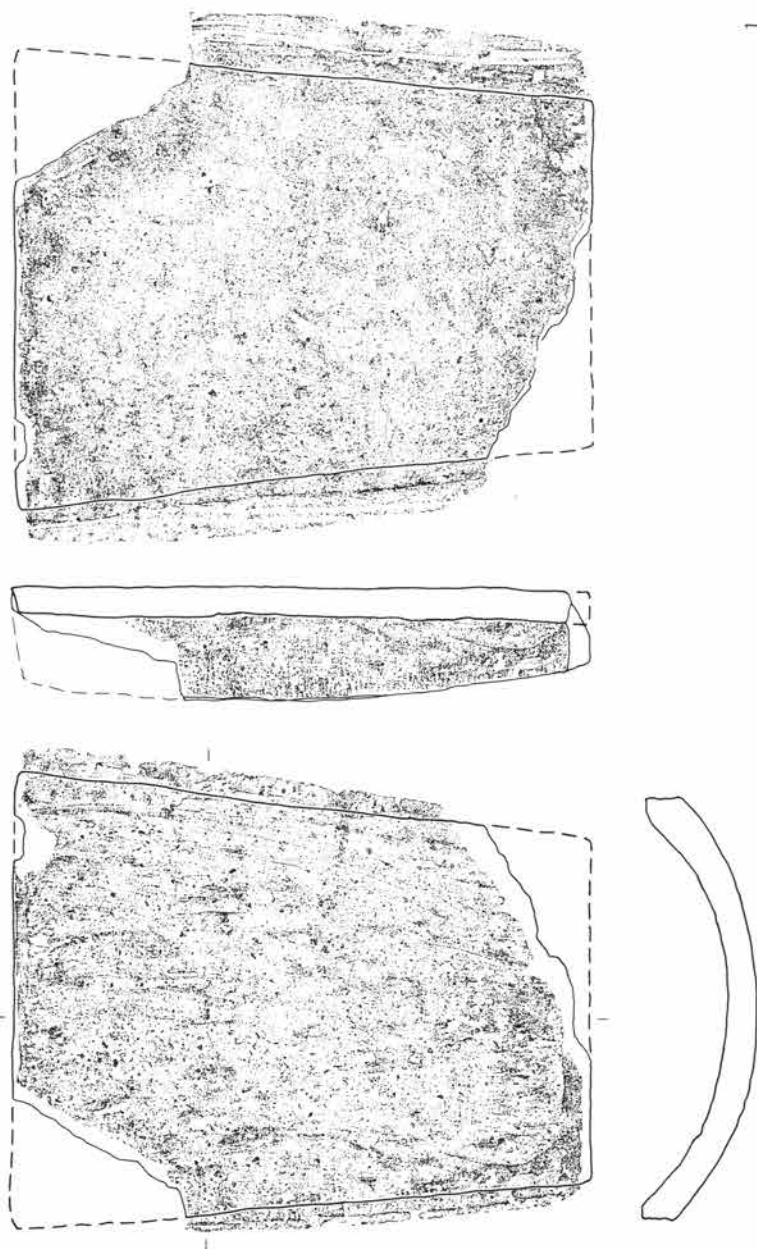


第526図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(5)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



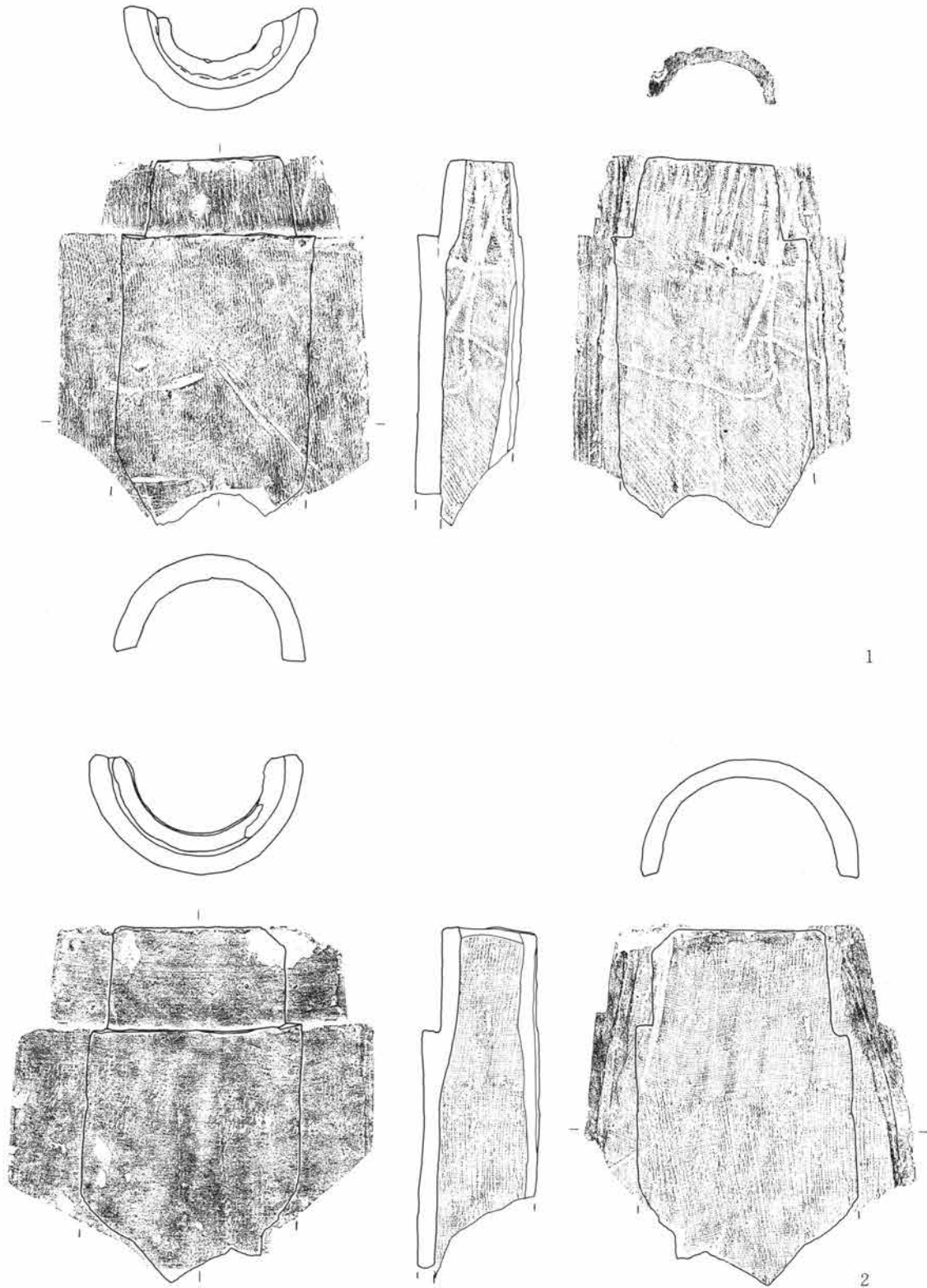
第527図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(6)



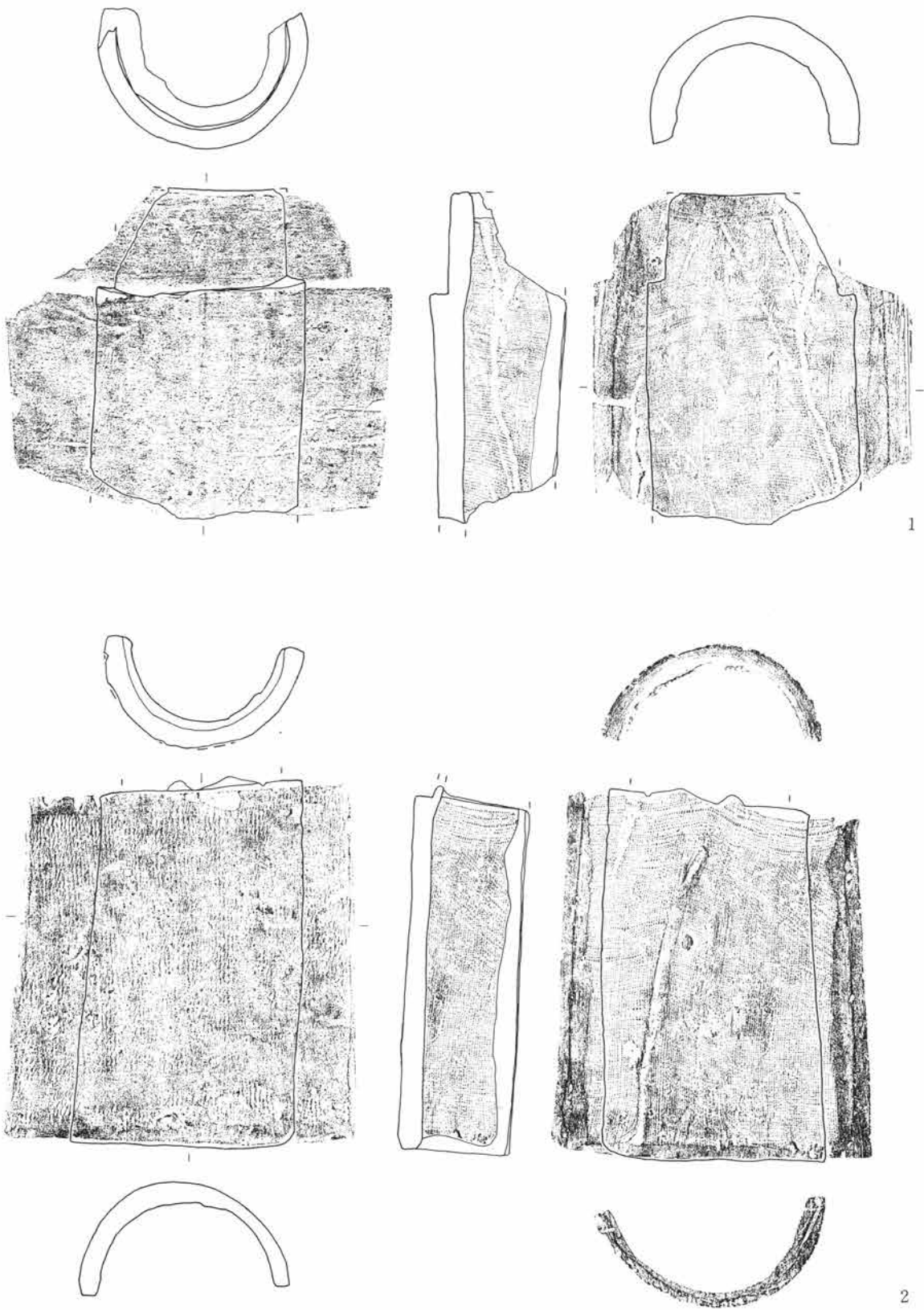
0 10cm

第528図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(7)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

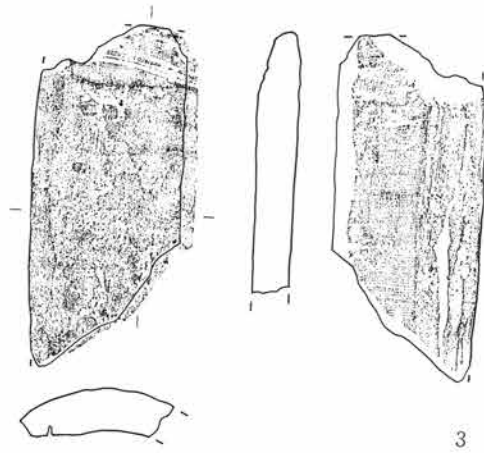
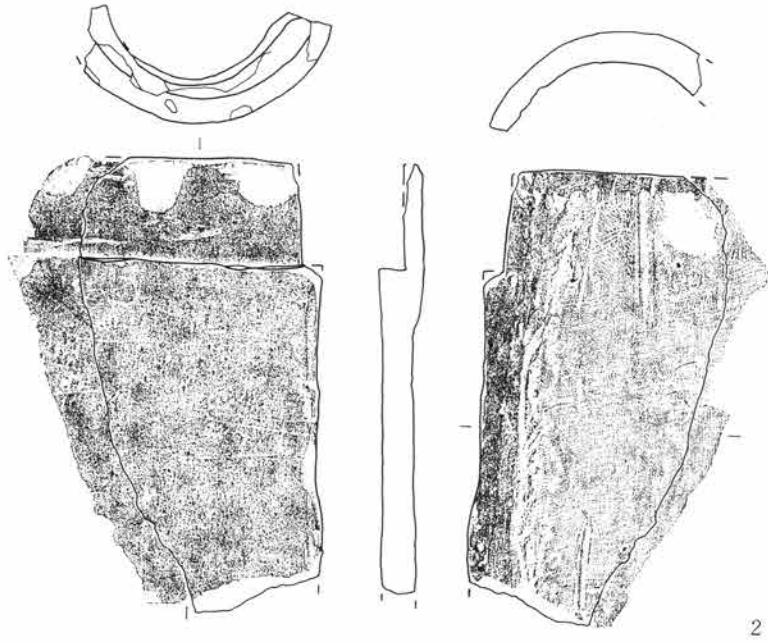
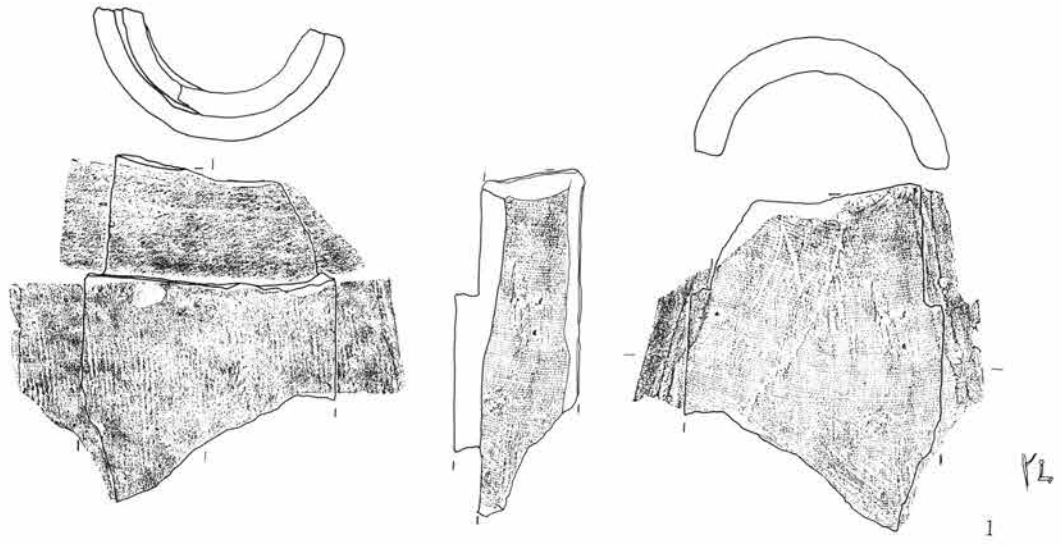


第529図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(8)



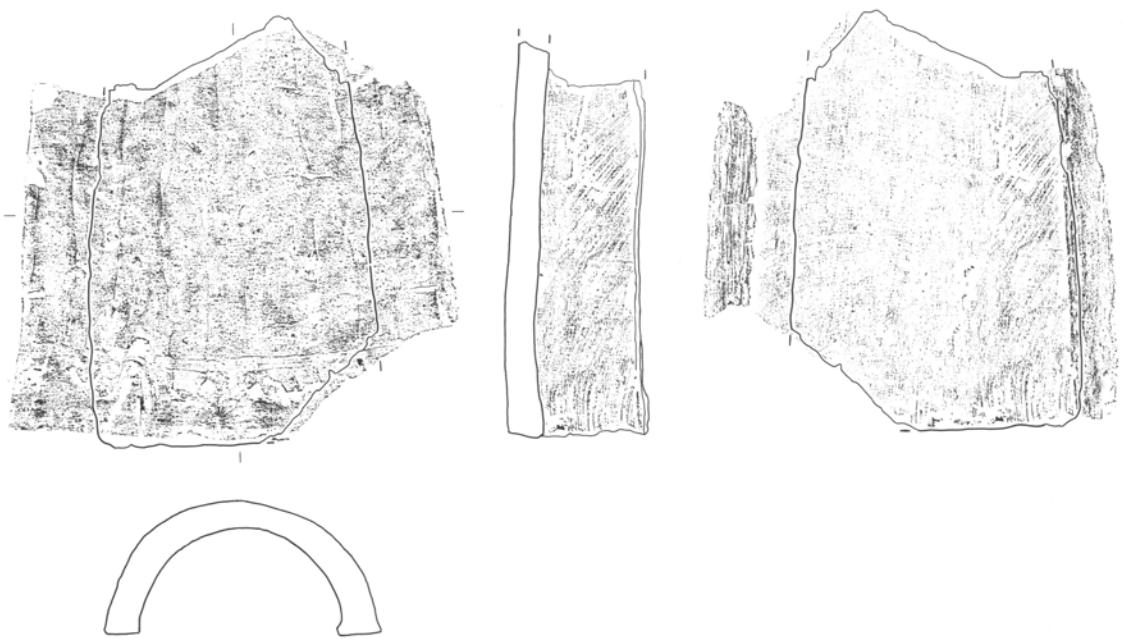
第530図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(9)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



0 10cm

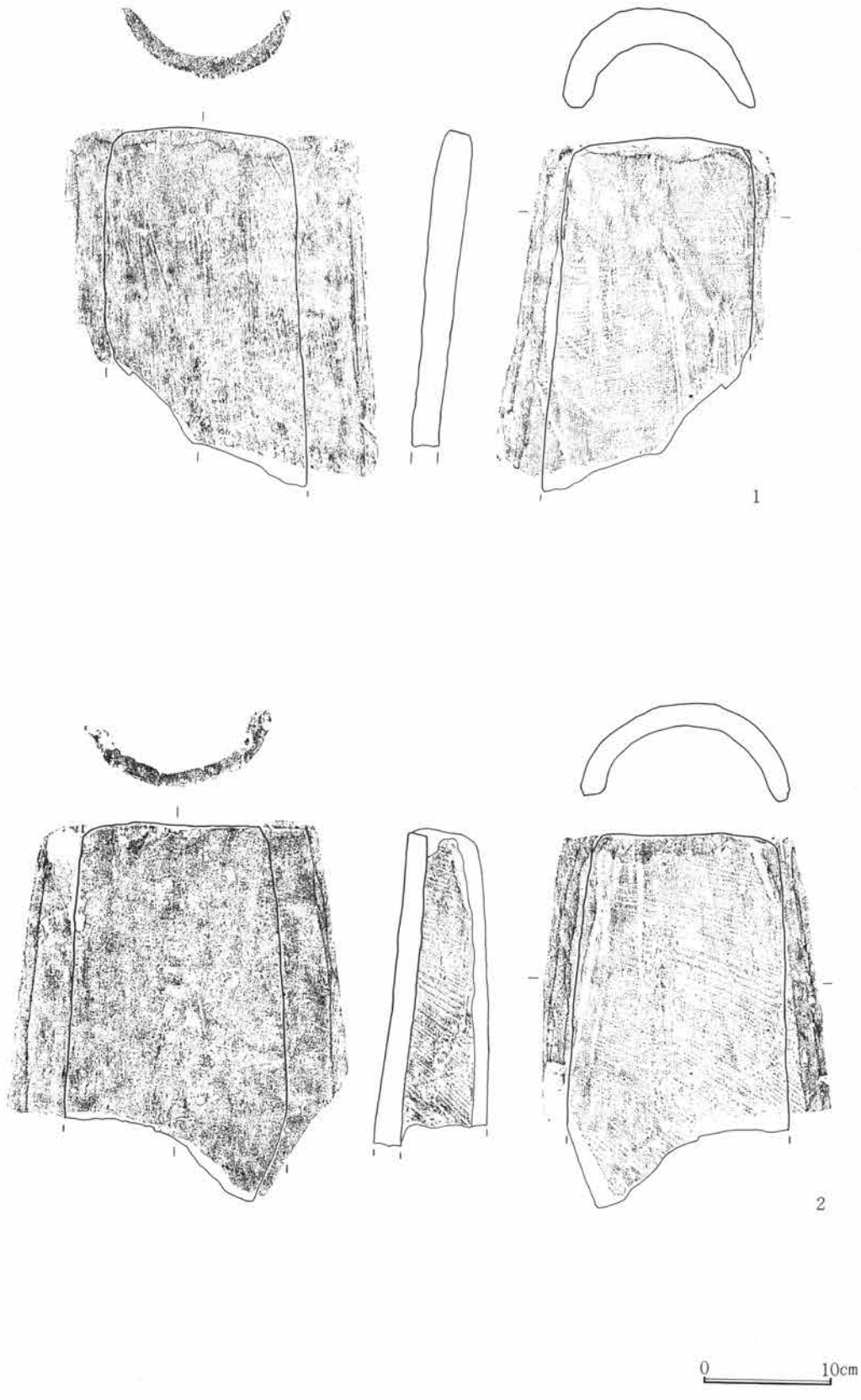
第531図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(10)



0 10cm

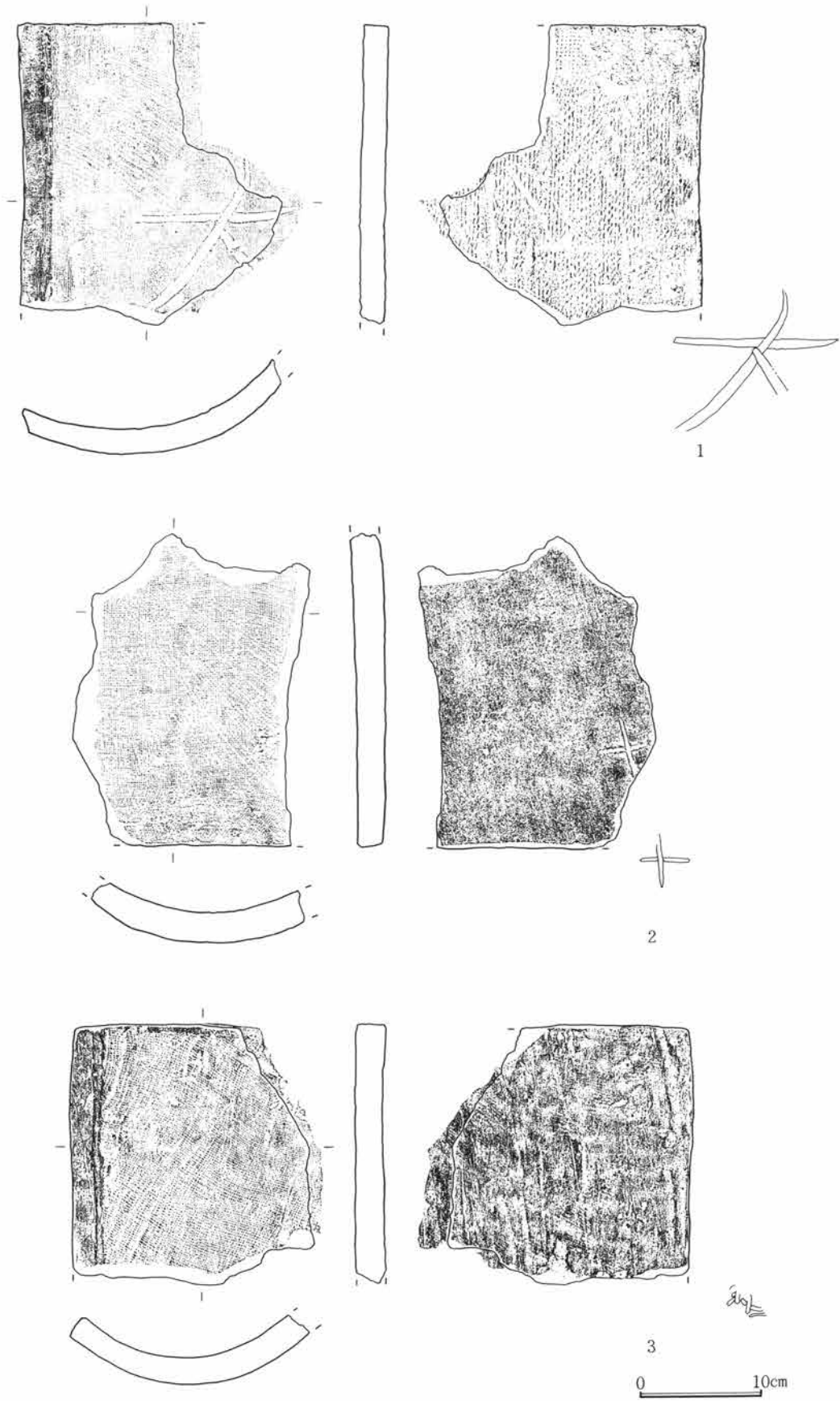
第532図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(11)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



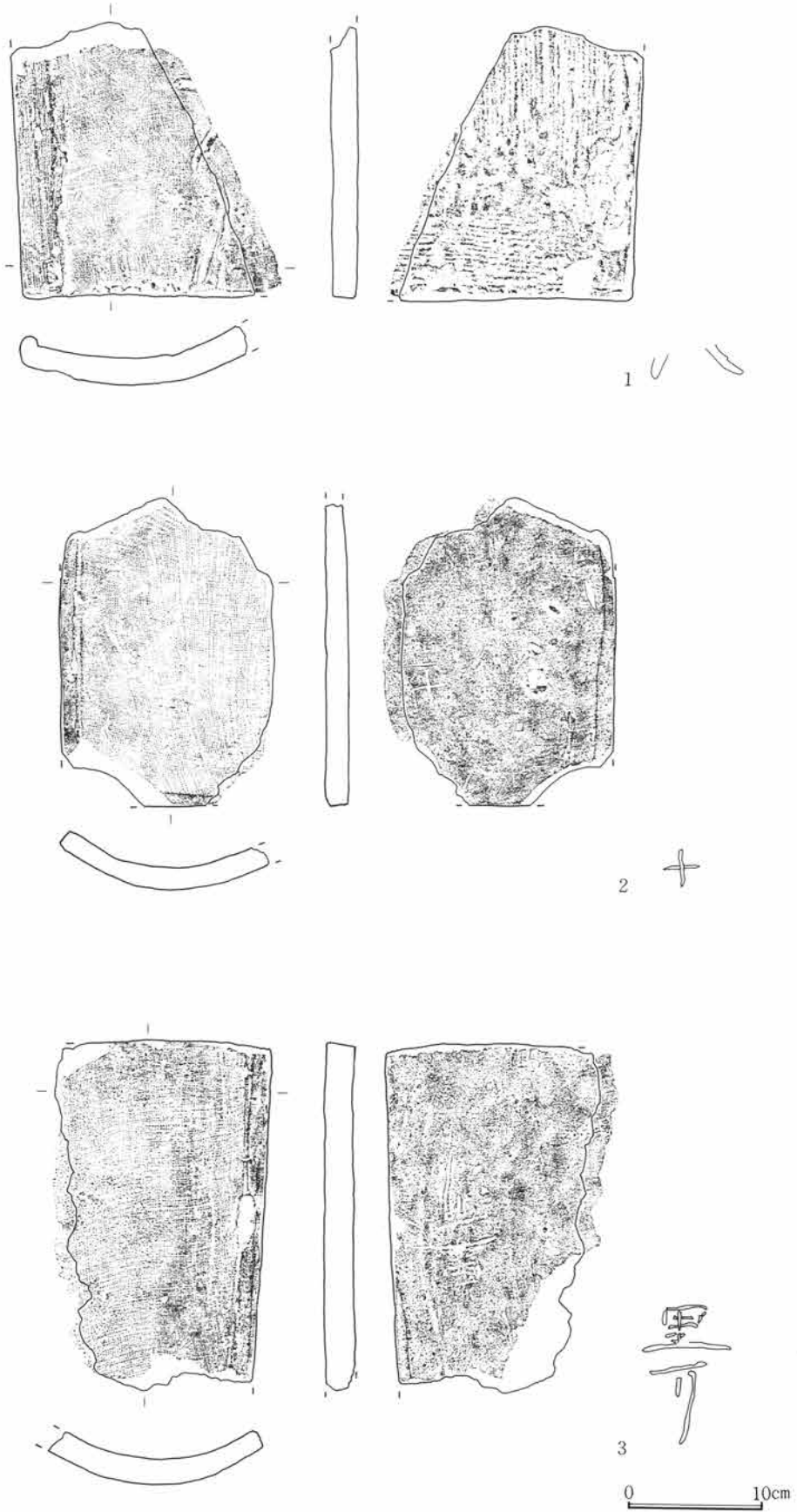
第533図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(12)

第3章 検出された遺構・遺物

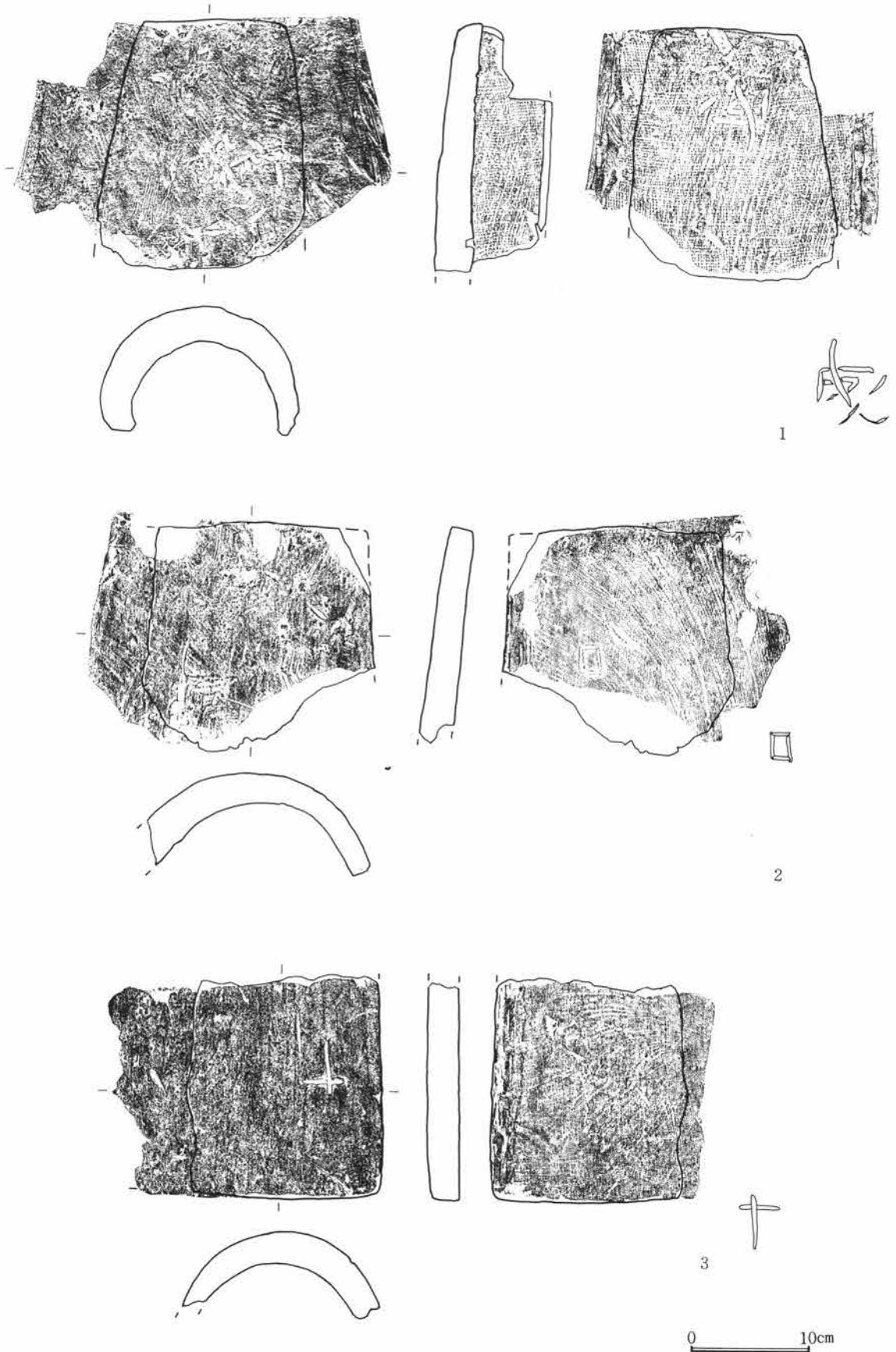


第534図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(13)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

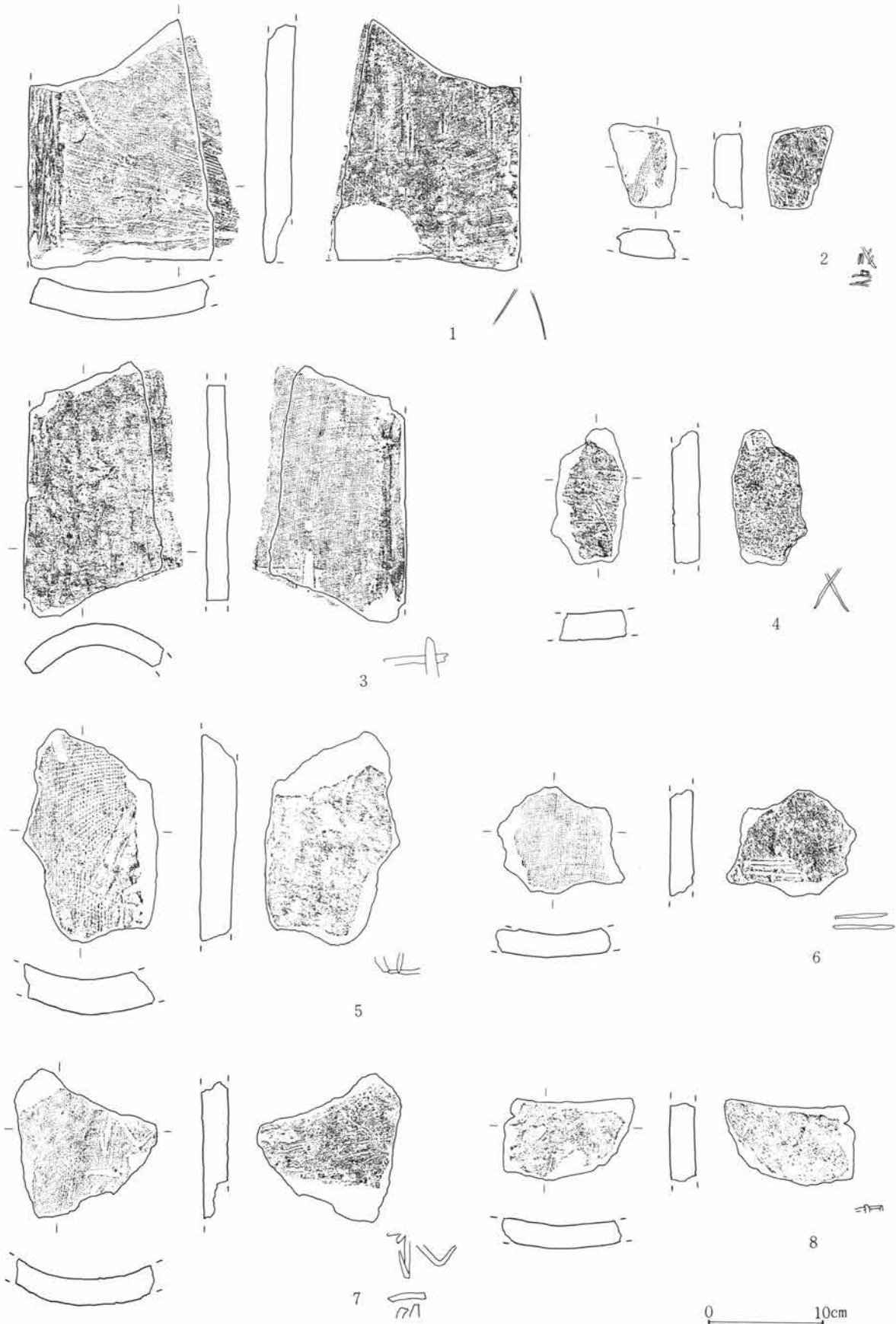


第535図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(14)



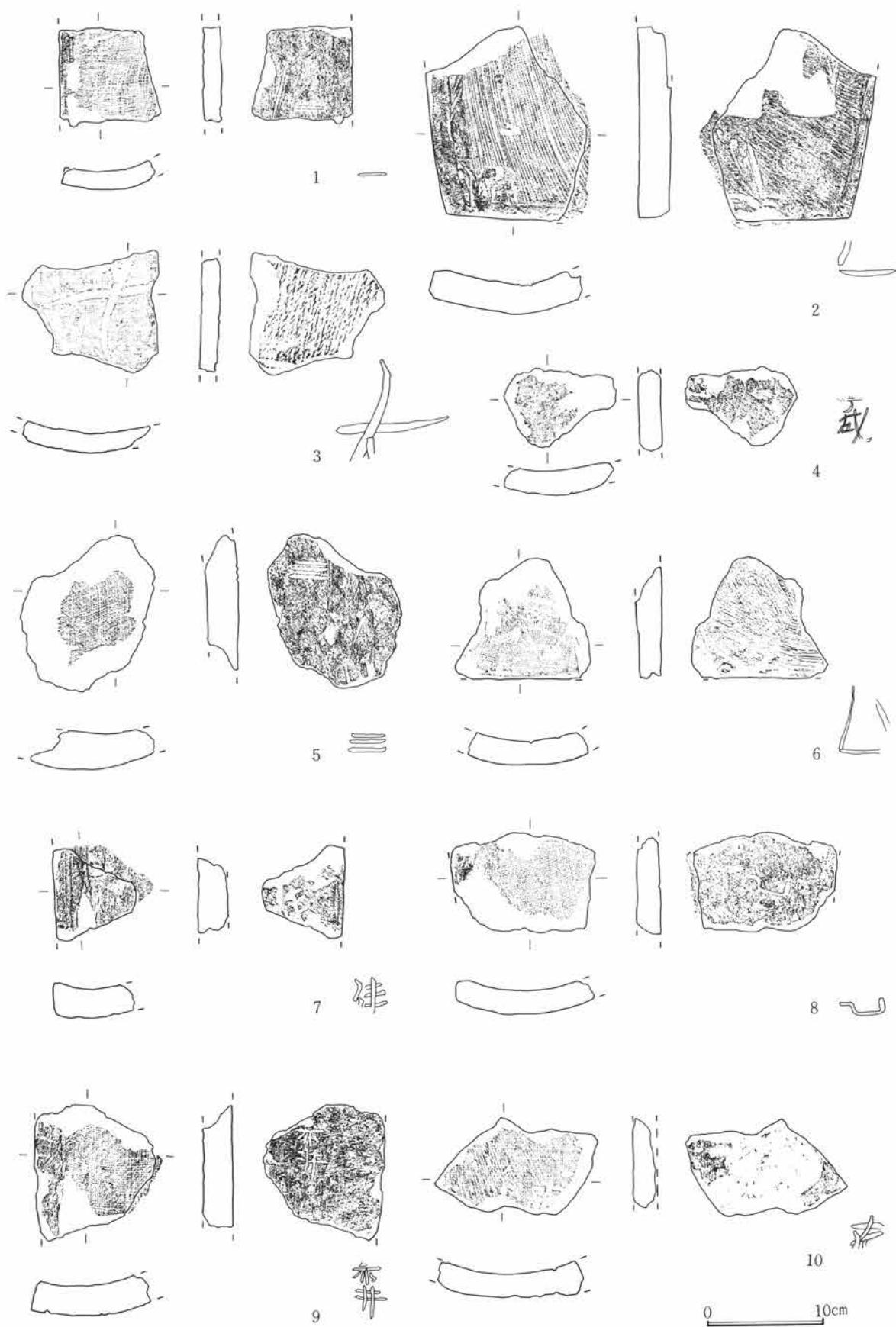
第536図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(15)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



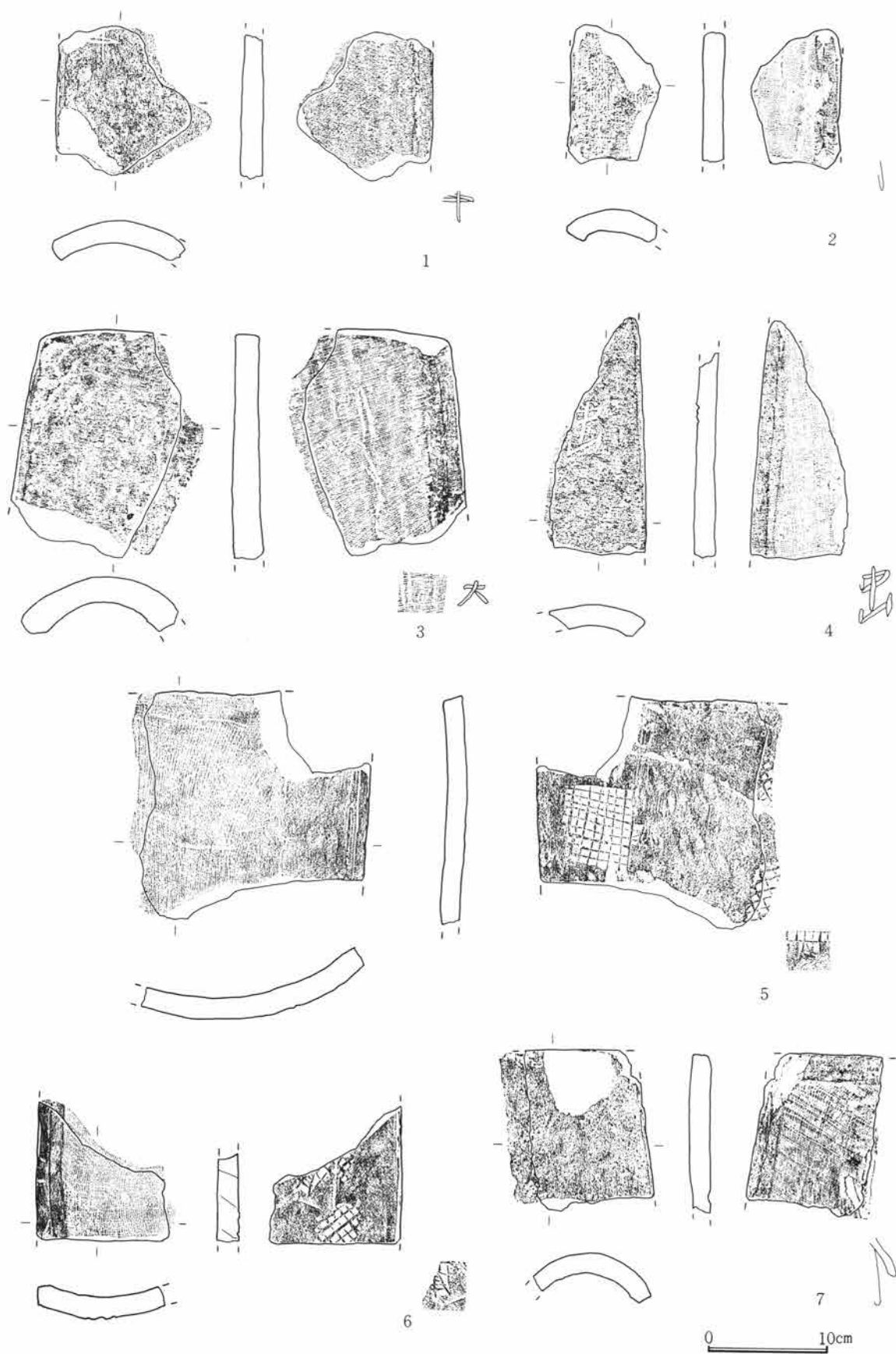
第537図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(16)

第3章 検出された遺構・遺物

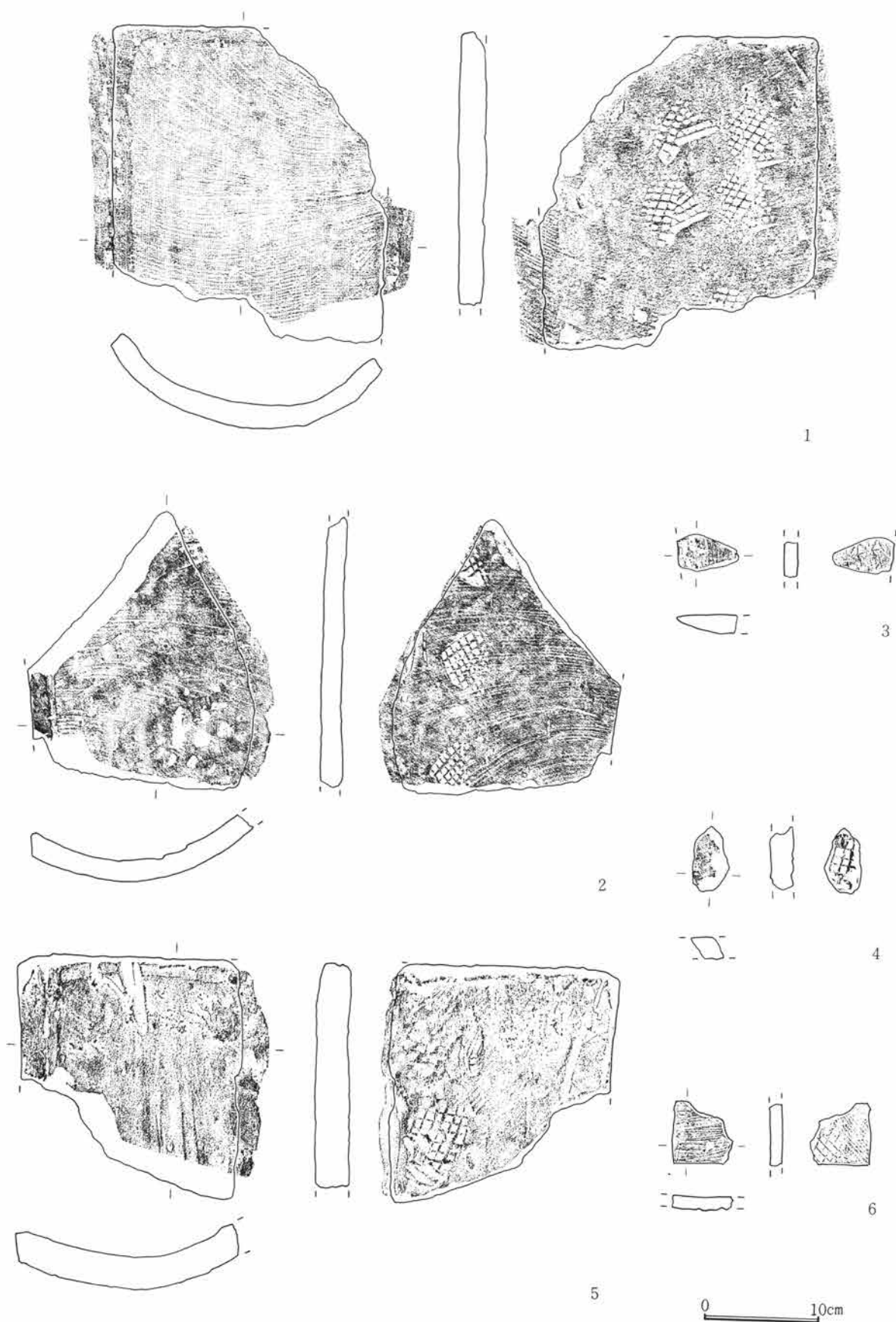


第538図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(17)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

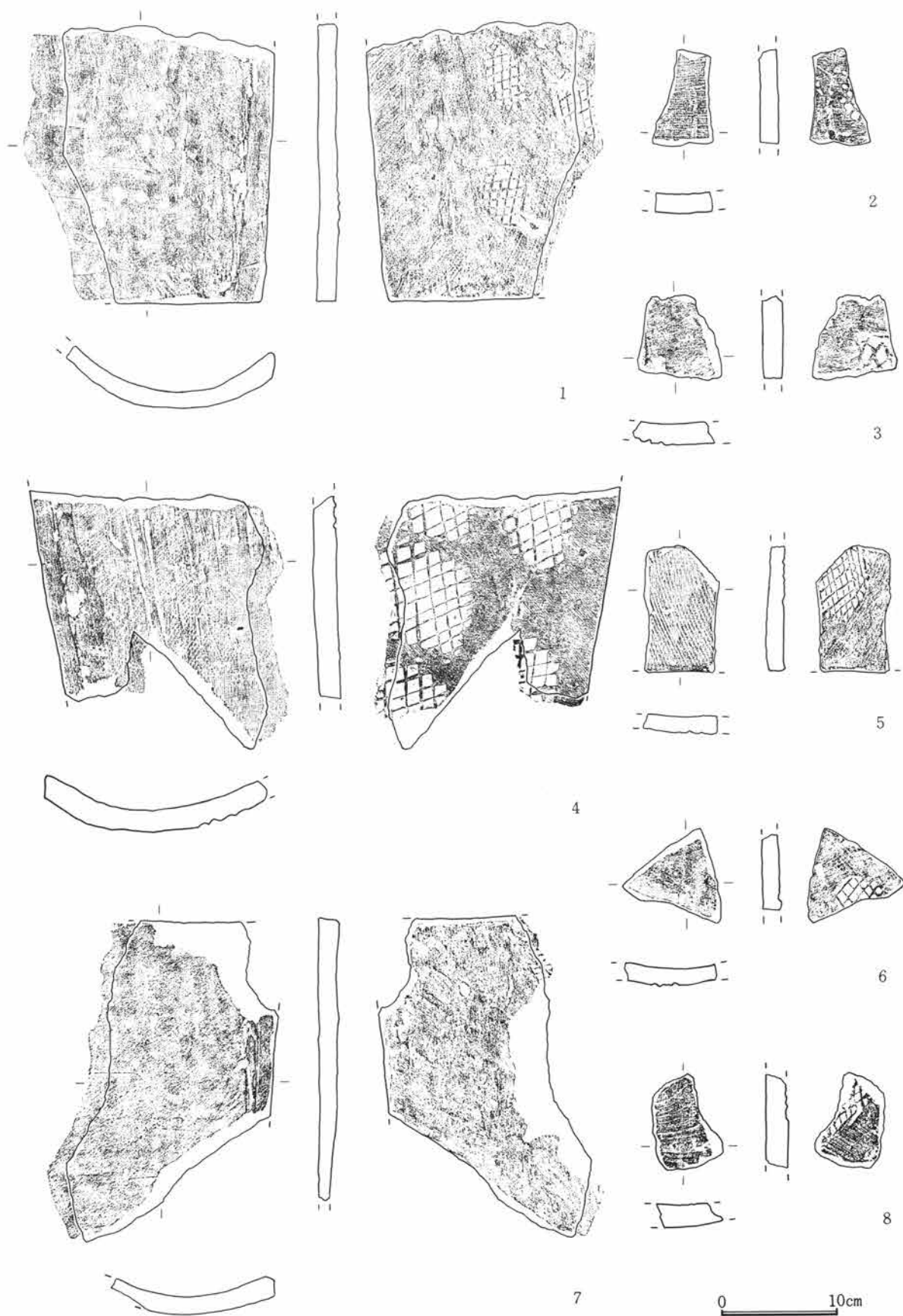


第539図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(18)

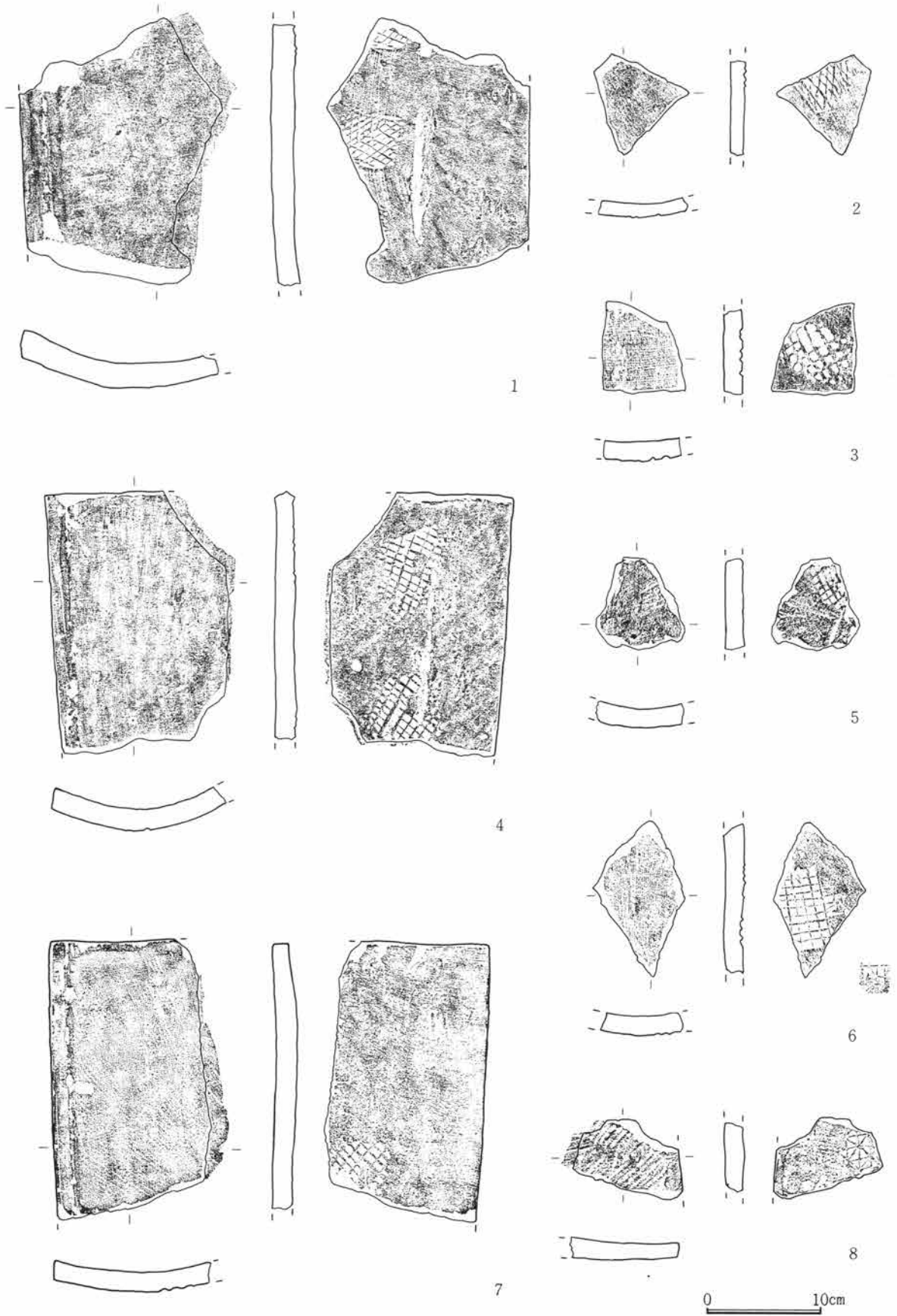


第540図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(19)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

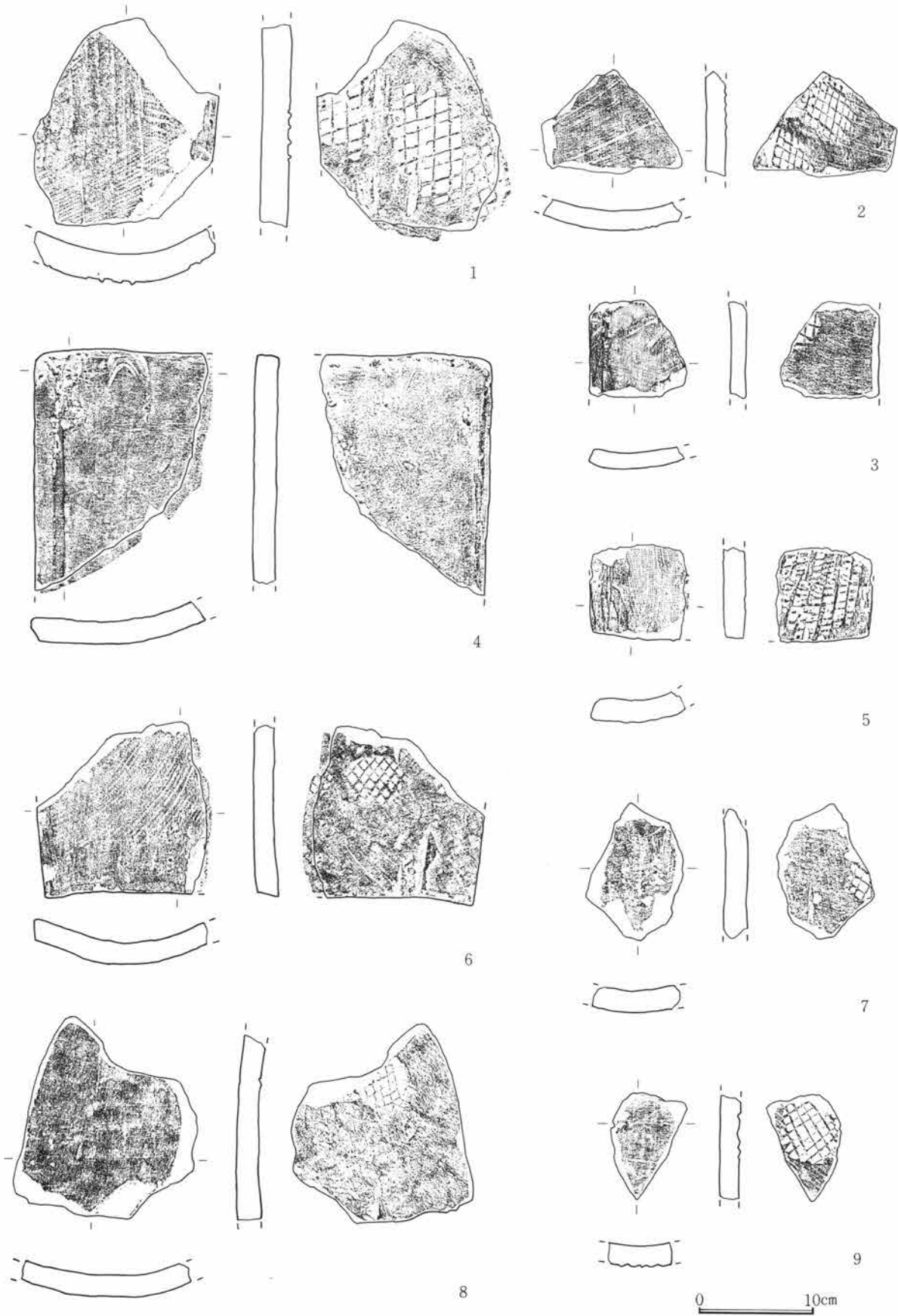


第541図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(20)



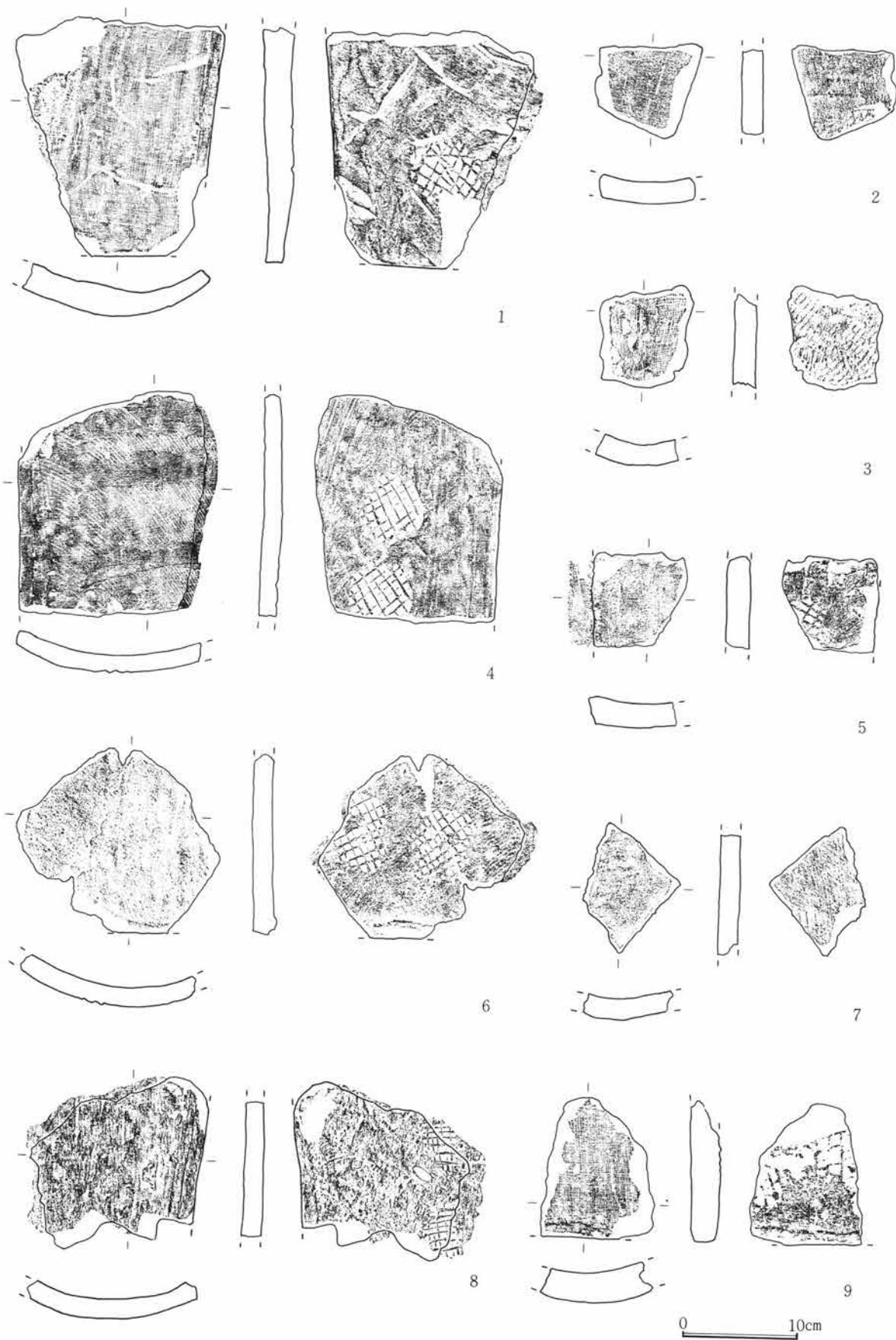
第542図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(21)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



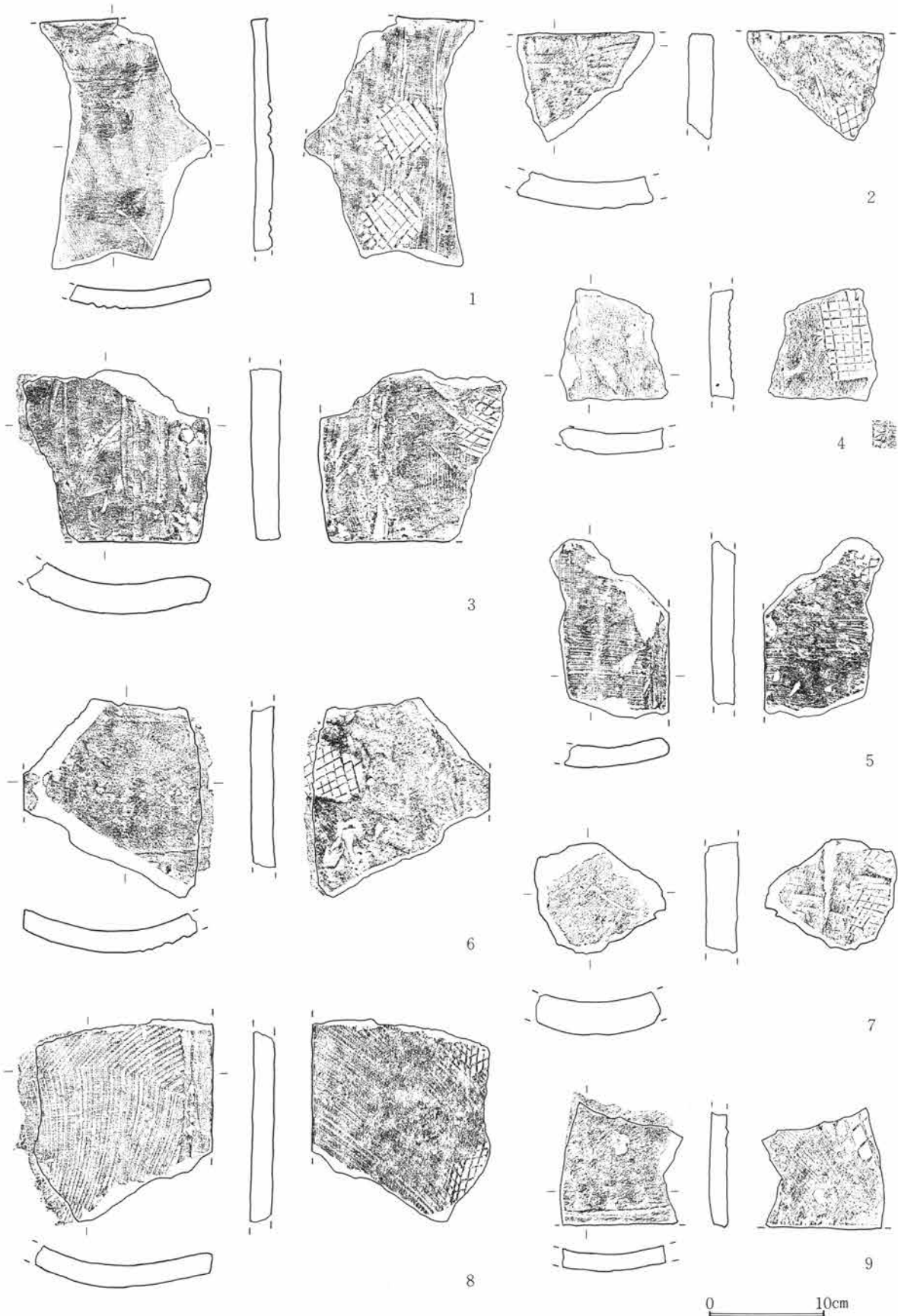
第543図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(22)

第3章 検出された遺構・遺物

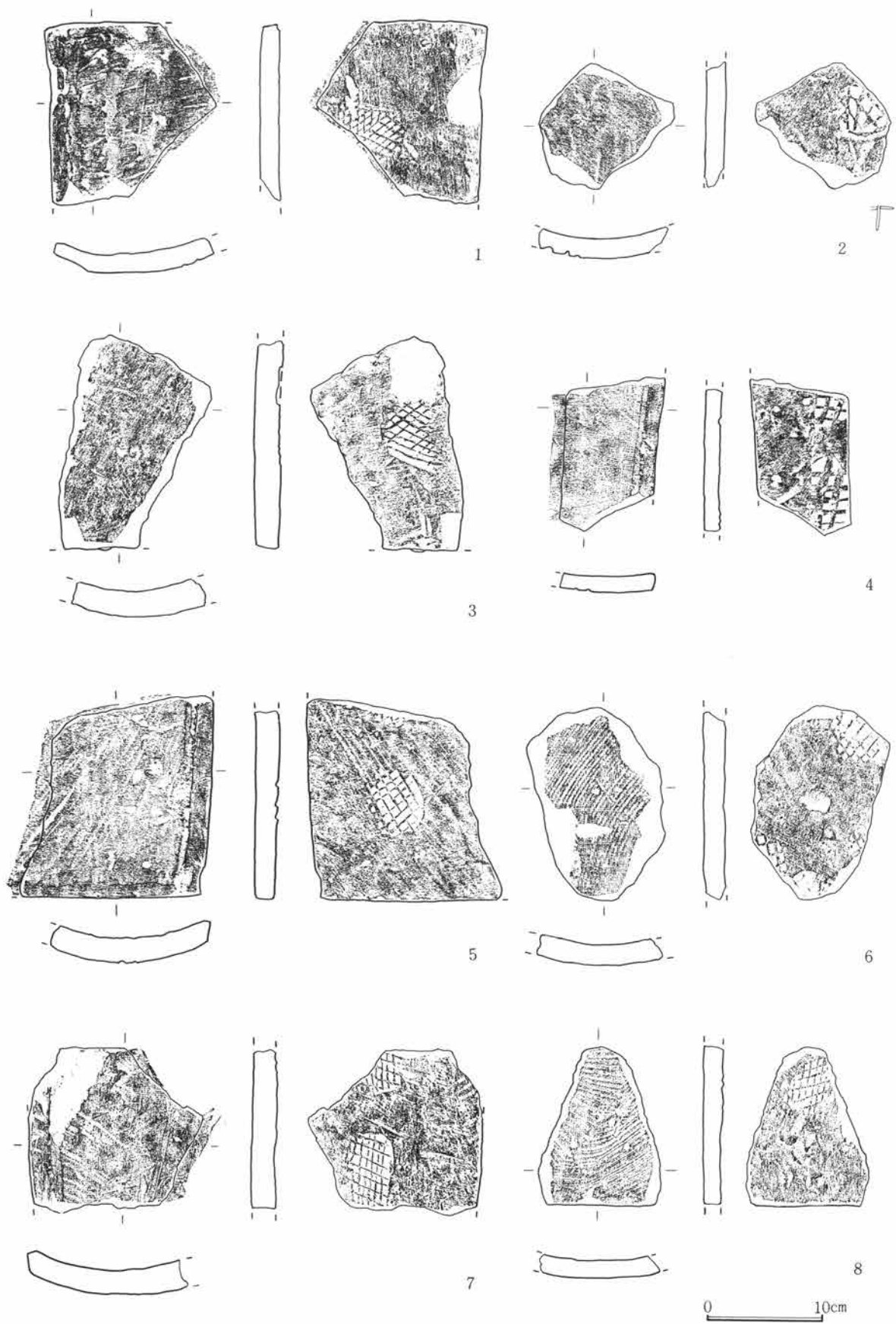


第544図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(23)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

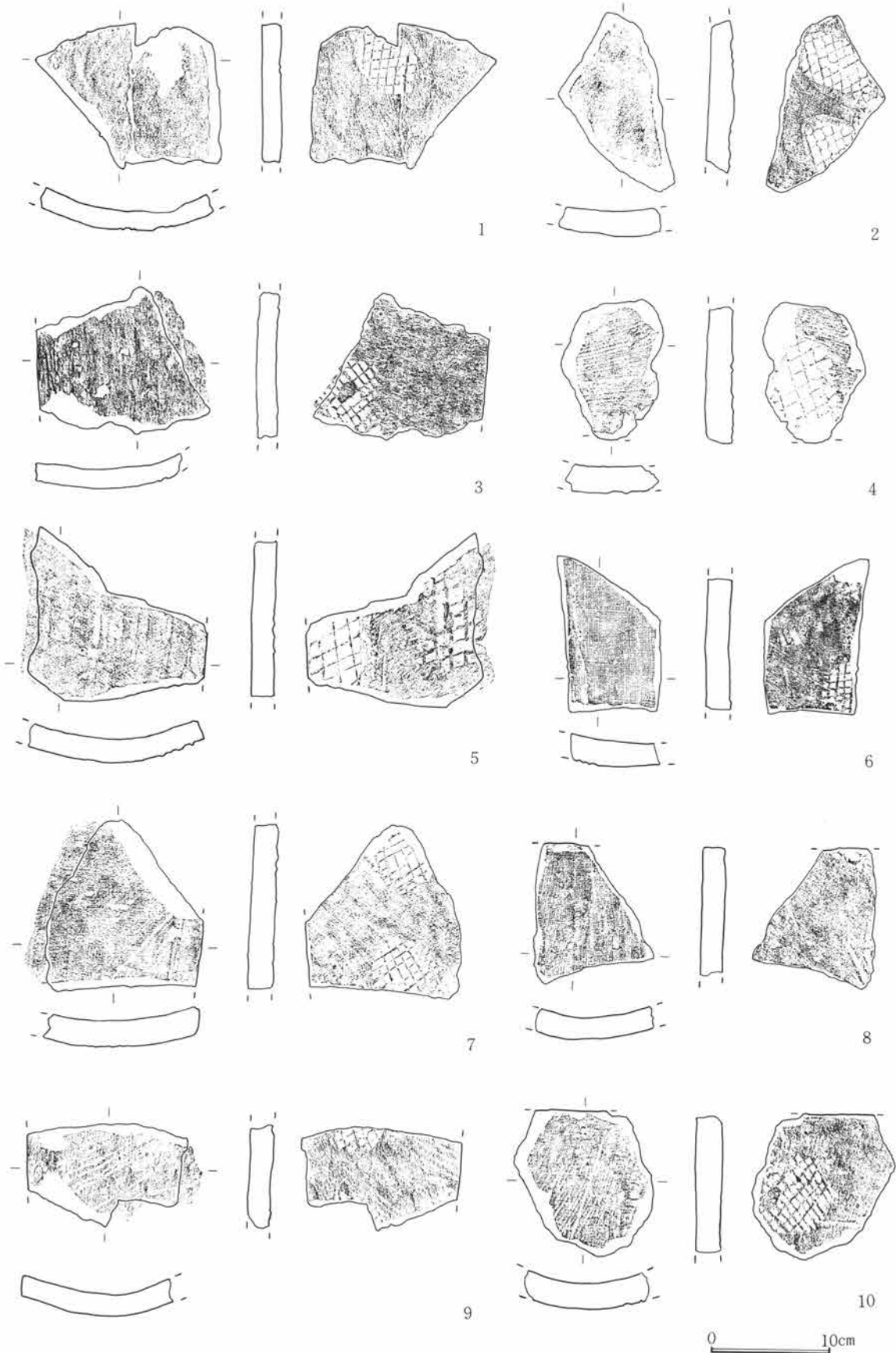


第545図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(24)



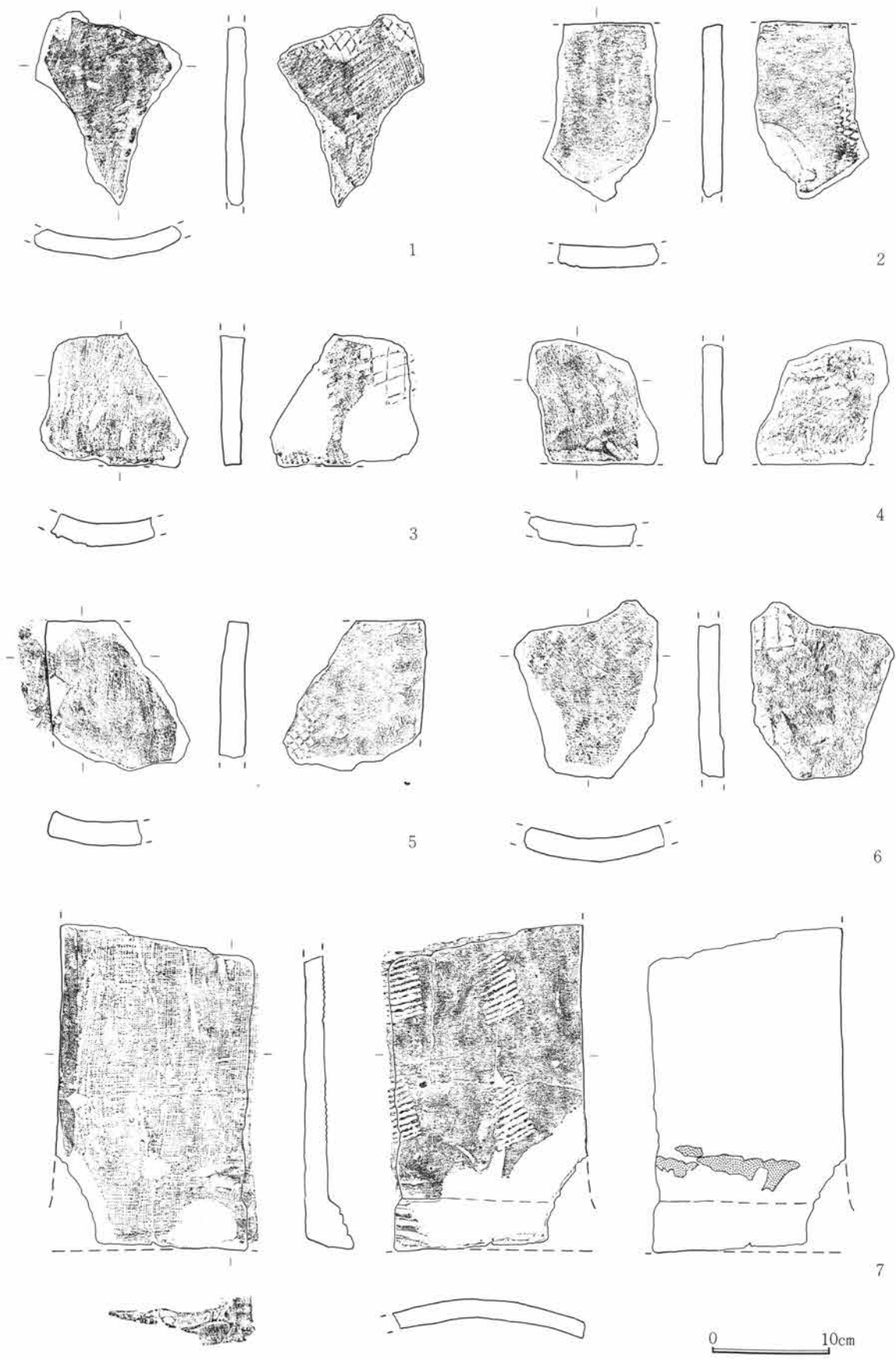
第546図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(25)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



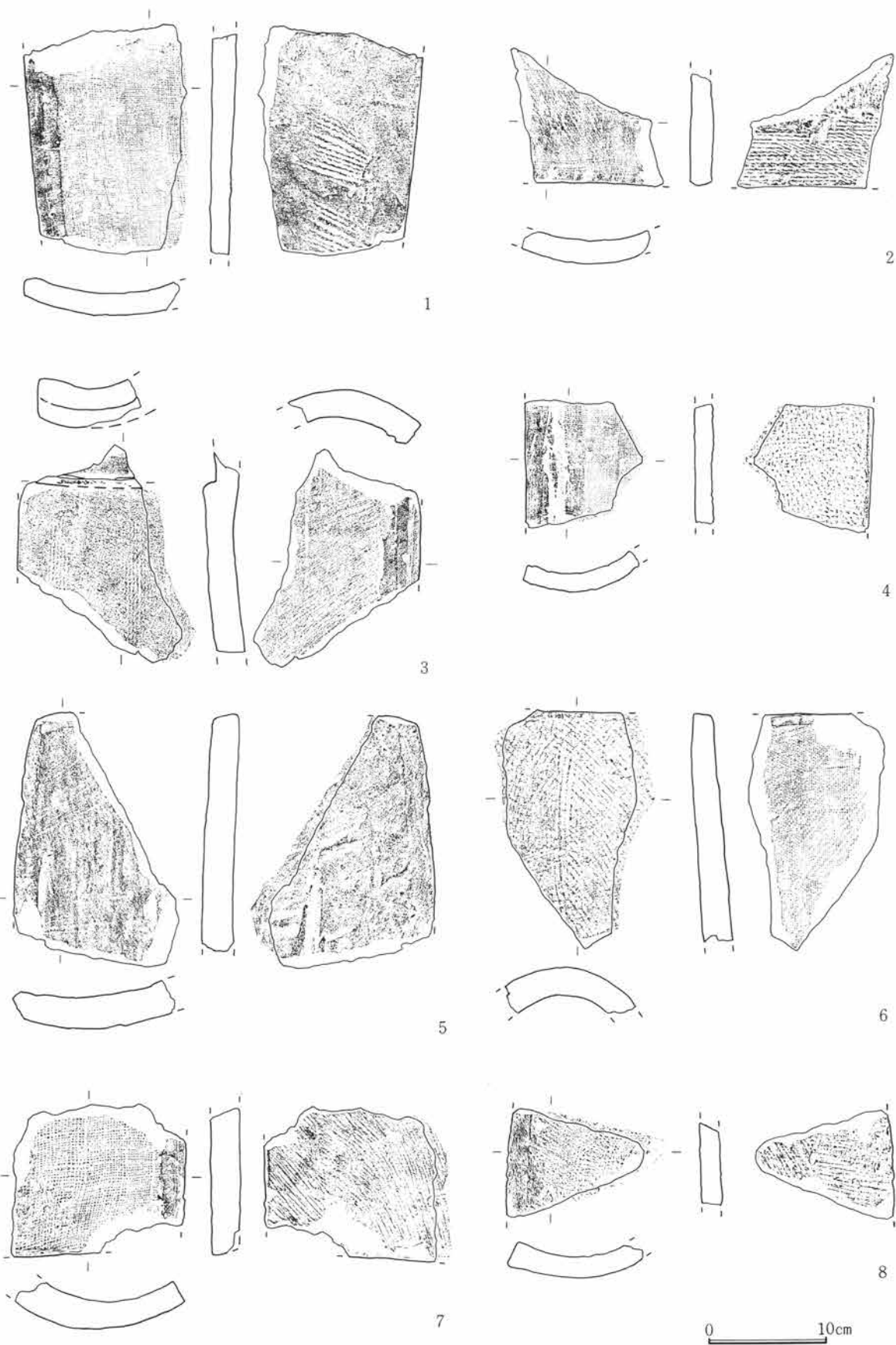
第547図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(26)

第3章 検出された遺構・遺物



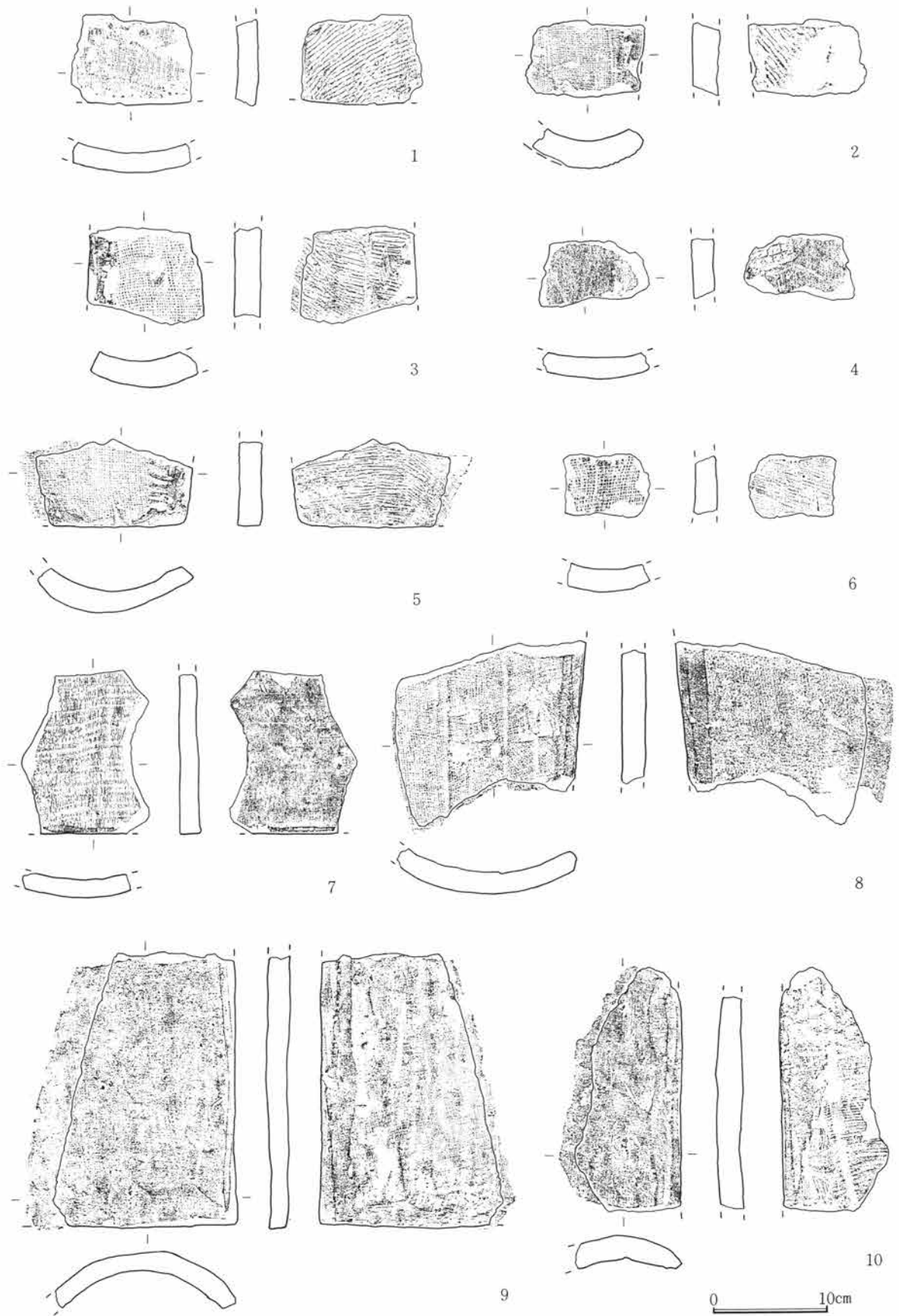
第548図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(27)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第549図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(28)

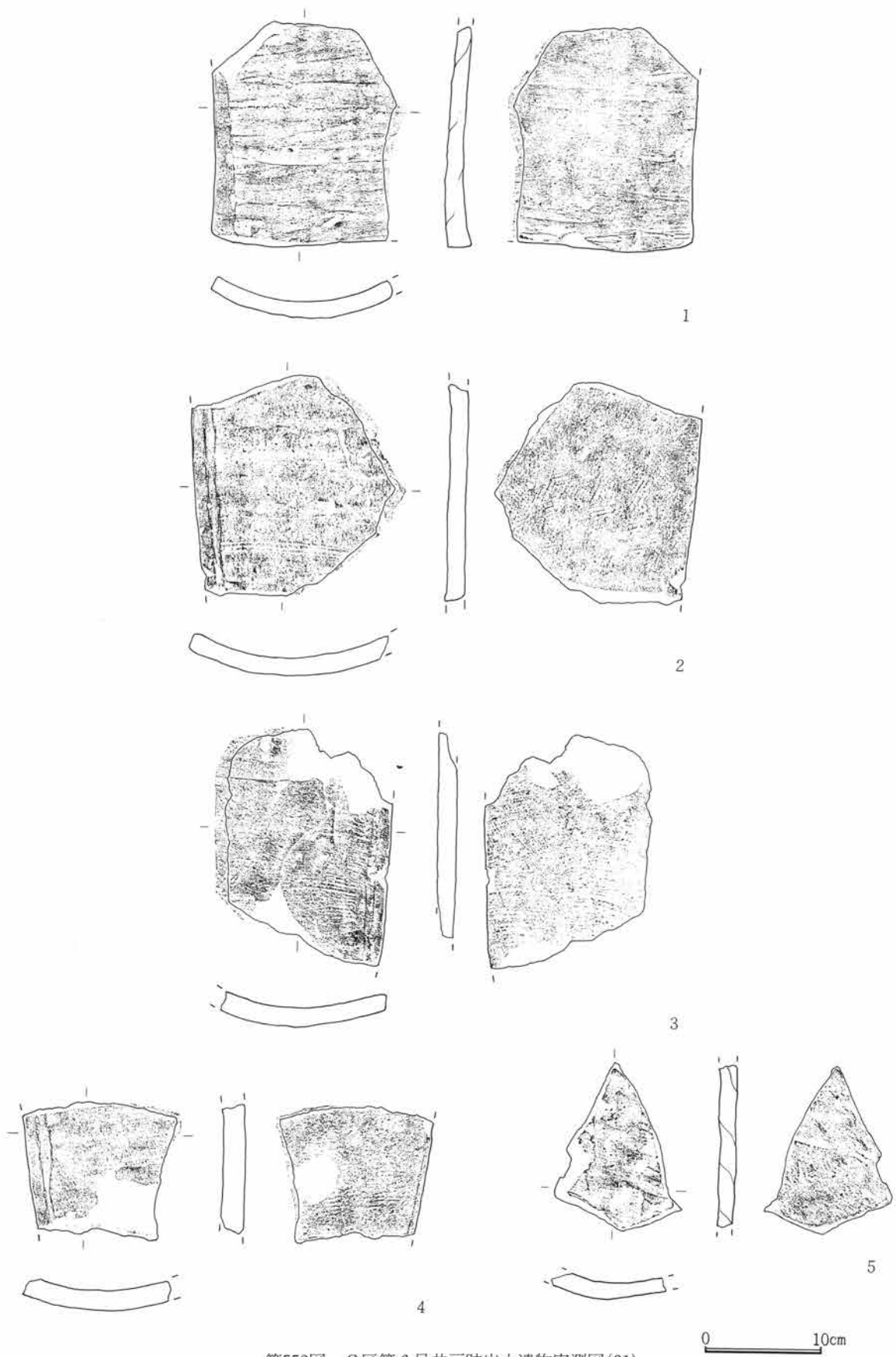
第3章 検出された遺構・遺物



第550図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(29)

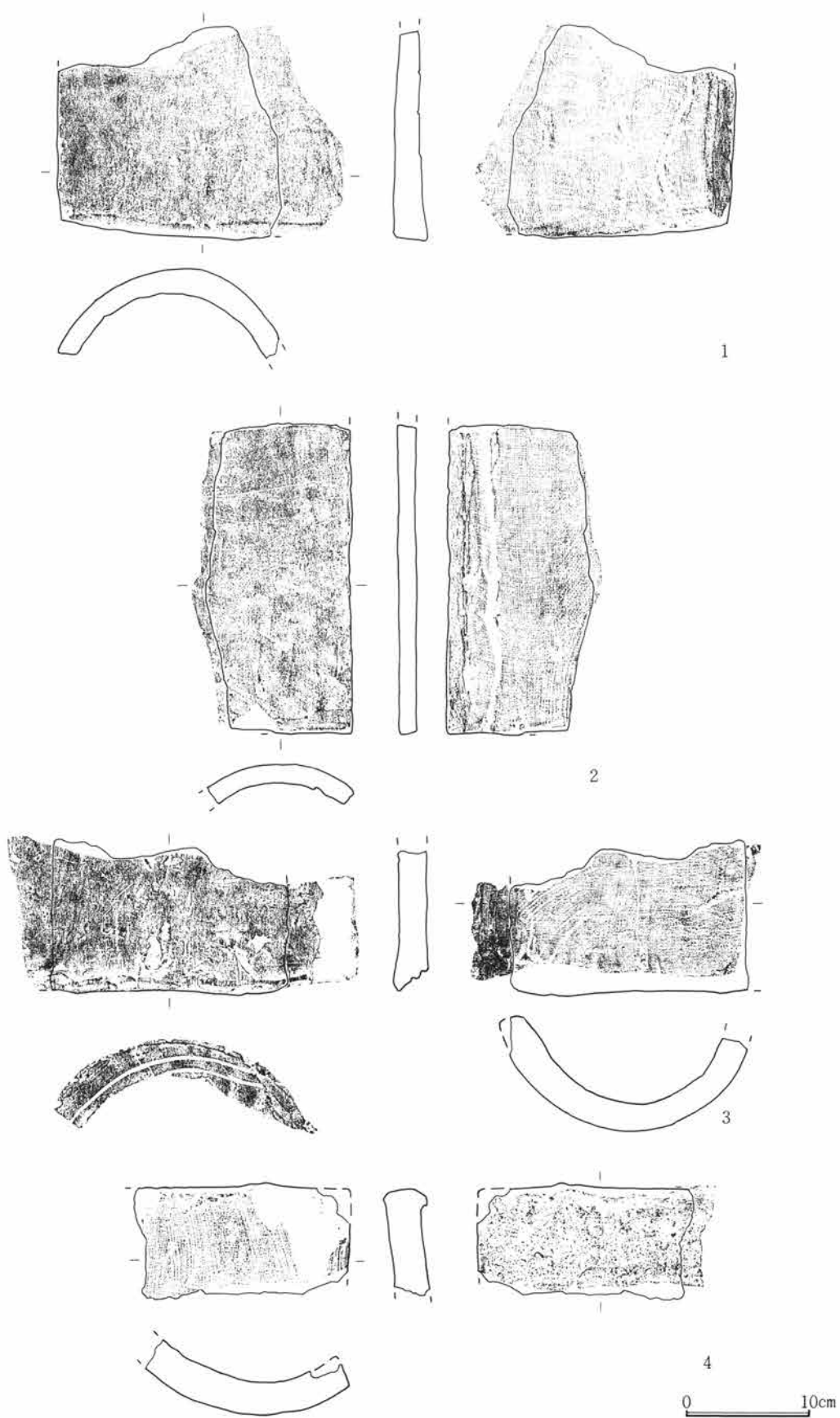


第551図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(30)



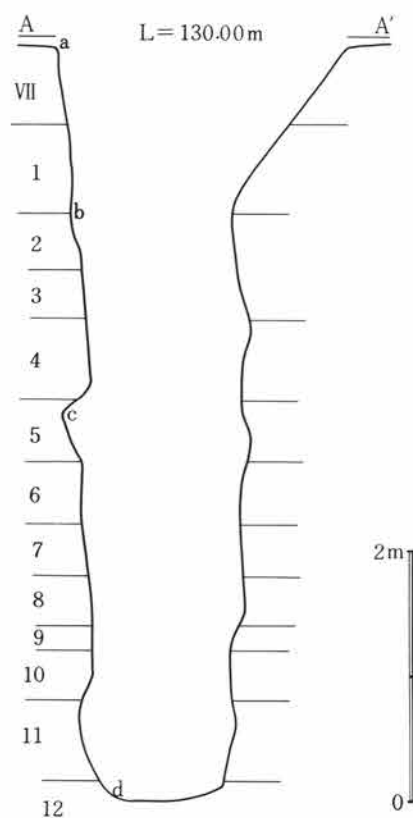
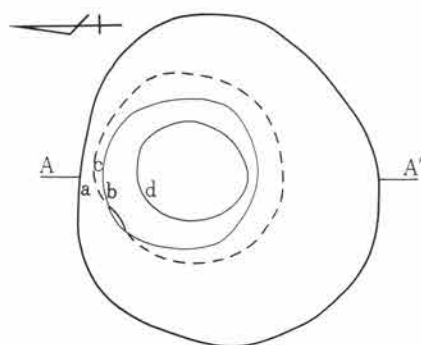
第552図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(31)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第553図 G区第6号井戸跡出土遺物実測図(32)

遺構名称	H区第3号井戸跡		位置	4・5-H-58・59			平面形状	円形
規模 (m)	地上径2.62	底径0.88	最細径1.10	最大径2.62	深度5.93	湧水位	夏期3.20・冬期5.75	
アグリ部最大径	夏季 1.52 ・ 冬季 1.25		湧水層	5・11層		耐水層	6・12層	



- 1 褐灰色火山灰・砂・小礫混 (固結)
- 2 褐灰色火山灰・砂 (固結)
- 3 褐灰色細砂 (固結)
- 4 灰色火山灰・砂 (固結)
- 5 褐灰色シルト
- 6 ブラックバンド
- 7 黄褐色軽石粒
- 8 灰褐色シルト
- 9 暗灰色細砂 (固結)
- 10 灰色火山灰・砂
- 11 灰褐色シルト
- 12 褐色中砂 (固結)

第554図 H区第3号井戸跡実測図

当井戸跡は、調査区ほぼ中央部に位置し検出された。検出時、当井戸跡を囲うように円形で径約1mの土坑が4基検出され、当井戸跡に伴う施設を想定した。しかし、これらの土坑覆土は、B軽石を多量に含むもので、当井戸跡の時期とはズレがある。したがって位置関係は偶然の所産と考えられ、相方は別の遺構とすることができる。

調査時、上記の他遺構以外に当井戸跡との関係を云々する資料は全く検出されておらず、当井戸跡は、地山井筒円筒形の井戸であったものと考えられる。

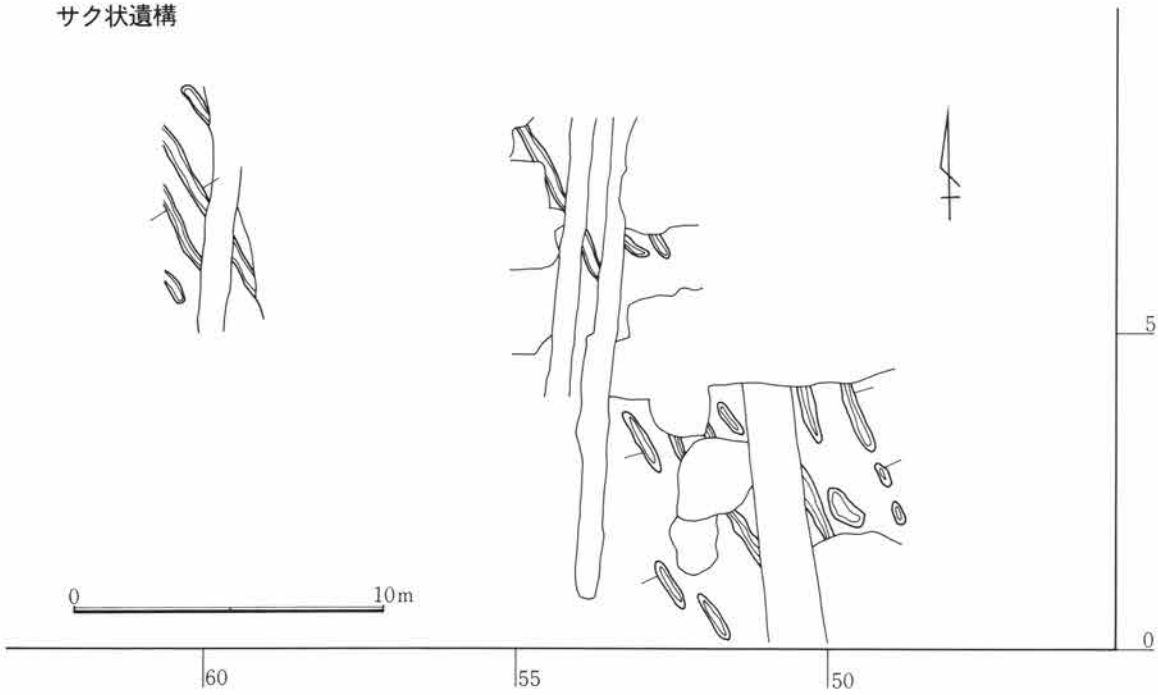
断面形は、開口部については北側は垂直の状態であるのに対して、南側は他の井戸跡同様ロート状の傾斜を有している。アグリは、5層と11層の2カ所にみられるが、両方共小規模である。上部は夏季湧水層によるものと考えられる。下部は通年の湧水層とも考えられるが、明確にすることはできない。

当井戸跡断面形については、約1.8m以下底面まではほぼ同径であり、アグリ規模も小さく棚落ち等もみられない。このあり方は、他の同時期の井戸跡よりは、中世以降の井戸に近い状態を呈している。このことは、当井戸跡が中世に近い時期の所産であるか、または使用期間が他の同時期の井戸に比較して短期間であったかのいずれかが考えられる。

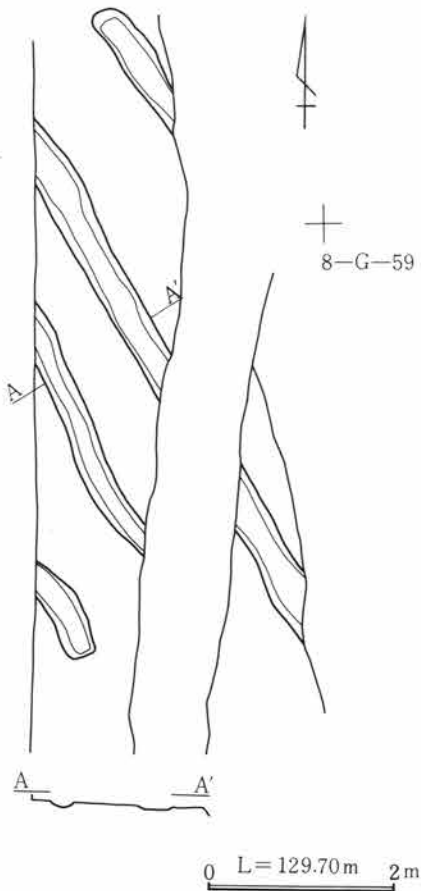
井戸充填土は、約5m以下が中砂・シルト・粘質土等が多量に堆積しており、アグリ等の崩落に伴う自然堆積であると思われる。この崩落土上から約2m下までの範囲には、暗褐色土主体の土が堆積している。この堆積土中には、VI・VII層土ブロックを混入している。また、この中には、礫を多量に含んでいる。これらの礫には、60cmをこえるような大形のものも含まれており、これらの堆積土が人為的堆積土であることがわかる。さらに上層は、填圧によって沈んだ部分後から流入した土層と考えられ、レンズ状の堆積状態を示している。

この層中には、各層共多量のB軽石が含まれている。しかし土層中にB軽石の純層は検出されていないことから、充填土の沈下はB軽石降下以降と思われる、このことは先述の当井戸跡の断面形から推定したことと一致している。

サク状遺構



第555図 G区第1・2号サク状遺構配置図



第556図 G区第1号サク状遺構実測図

G区第1号サク状遺構

当遺構は、5～9-G-59・60グリッド内に位置し、VI層上面で検出した。西側は南北農道下にかかり未検出であるが、さらに広がっているのは明らかである。幅は約30～35cm、残存深度約3～5cmである。サク状遺構間の間隔は約60～70cmである。走行方位は、北-30°-西である。

覆土は、C P混じりの黒褐色土が主体で、FAブロックを多量に含み、VI層土とは明確に区別することができる。FAは純堆積とは考えられないが、FA降下後の廃棄であることはとらえられた。

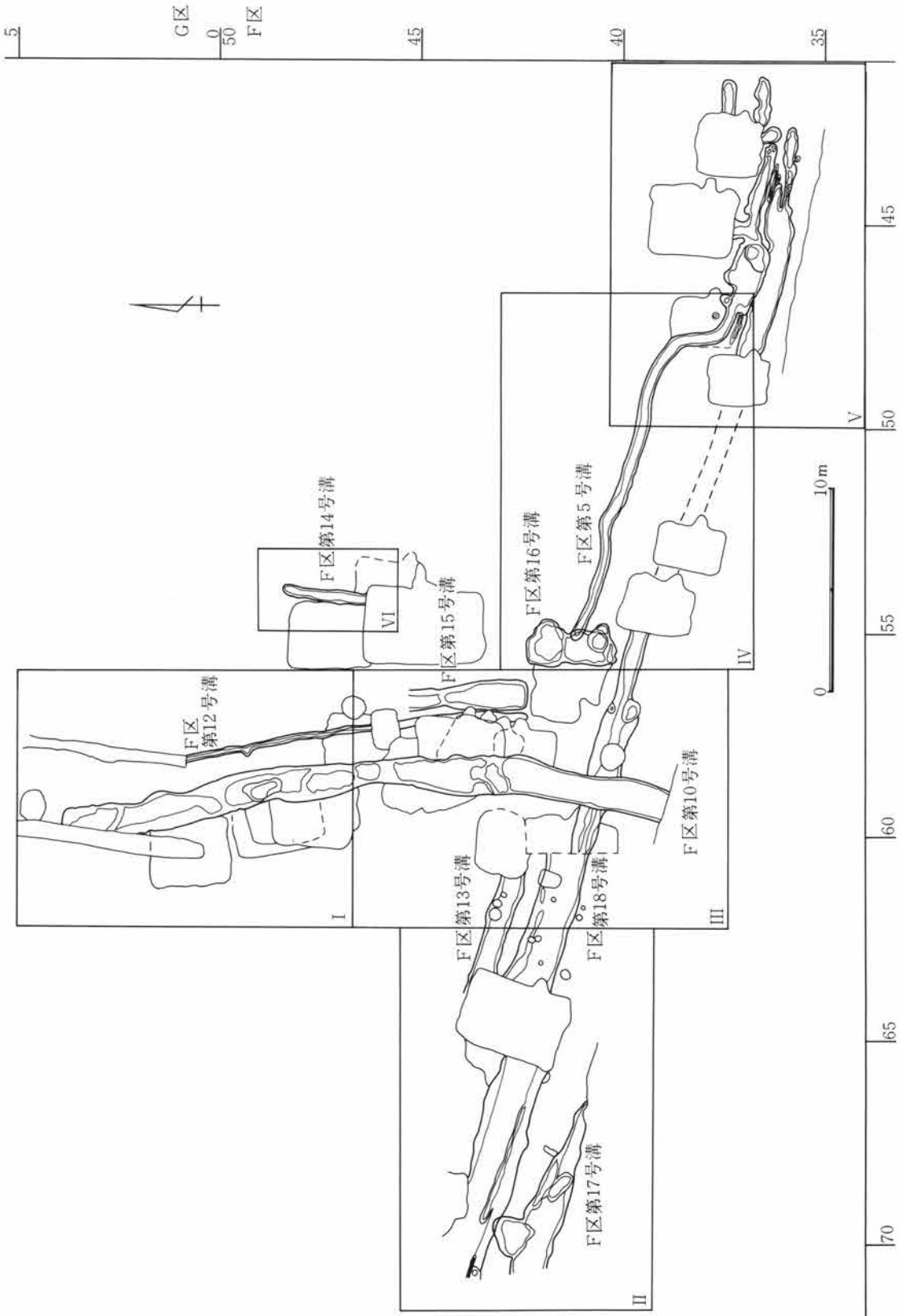
G区第2号サク状遺構

当遺構は、0～8-G-49～54グリッド内に位置し、VI層上面で検出した。幅は約30～45cm、残存深度は約3～7cmである。走行方位は、北-28°-西である。

覆土の状態は、第1号サク状遺構同様であり、同時期のものである可能性が高い。また、サク状遺構の走行方位には1本1本わずかな違いが認められるが、総体としてみれば、同方向とみることができる。したがって、第1・2号を含めて畠状遺構の1ユニットを構成しているものと思われる。

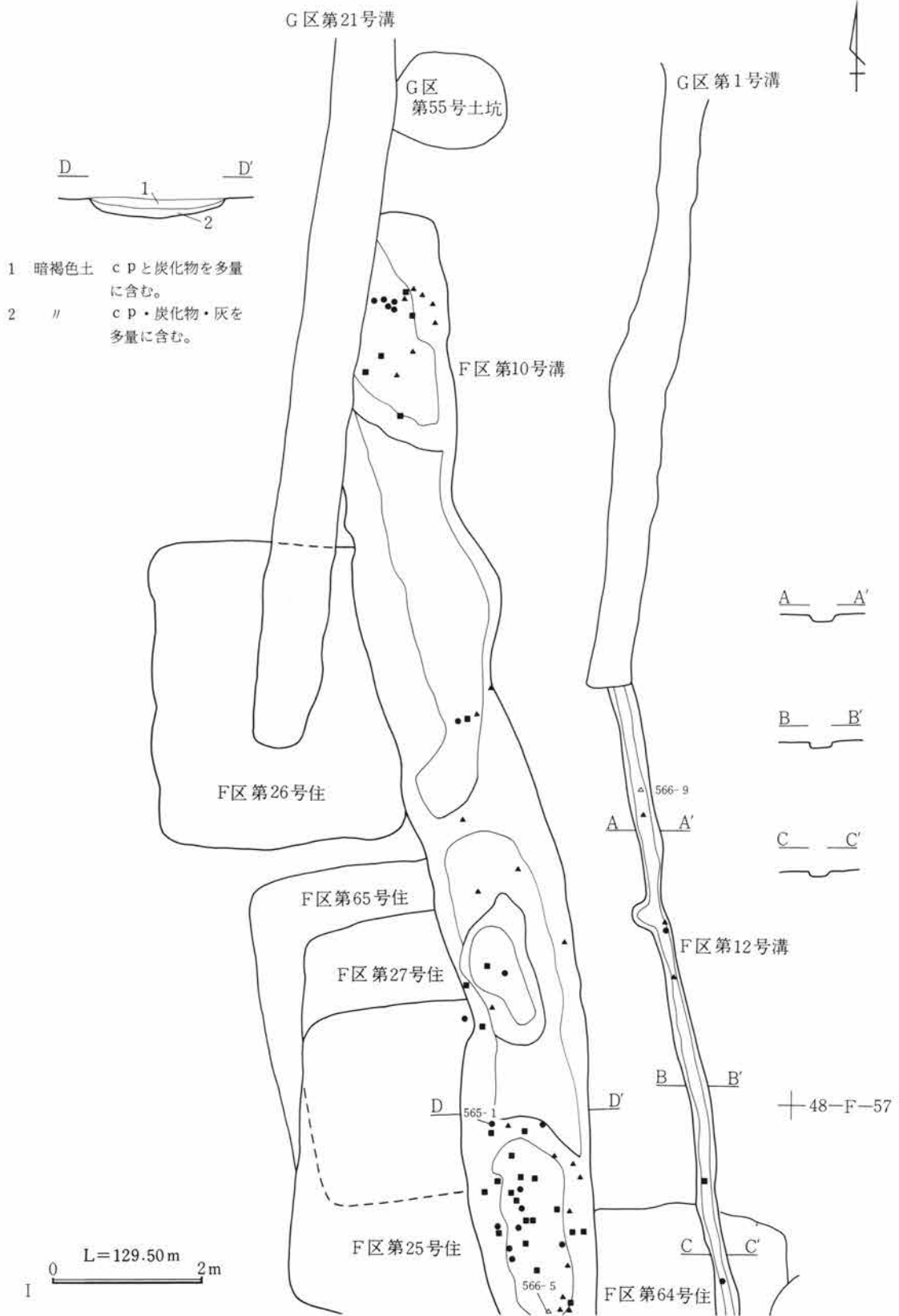


溝状遺構

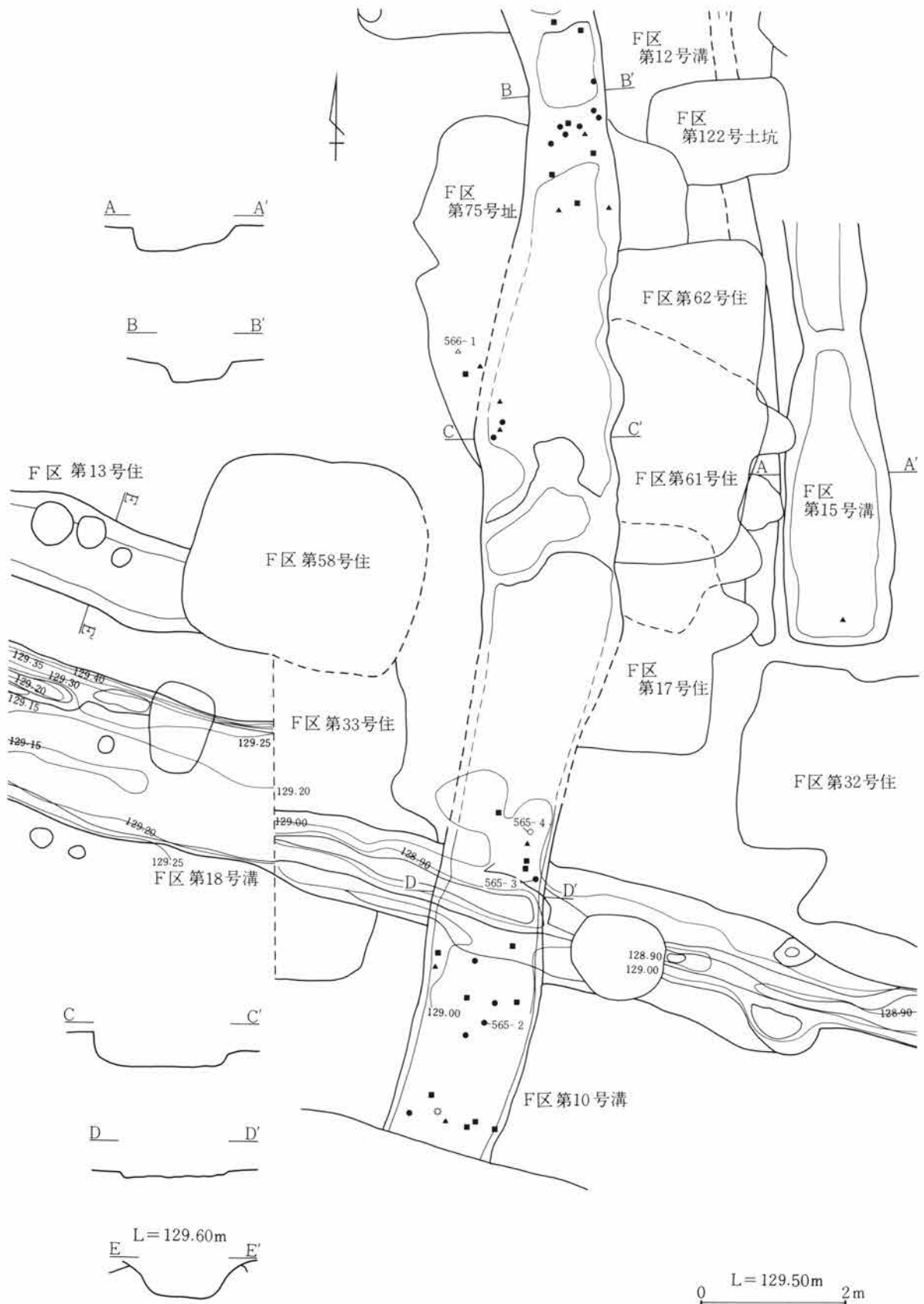


第558図 F区溝配置図

第3章 検出された遺構・遺物

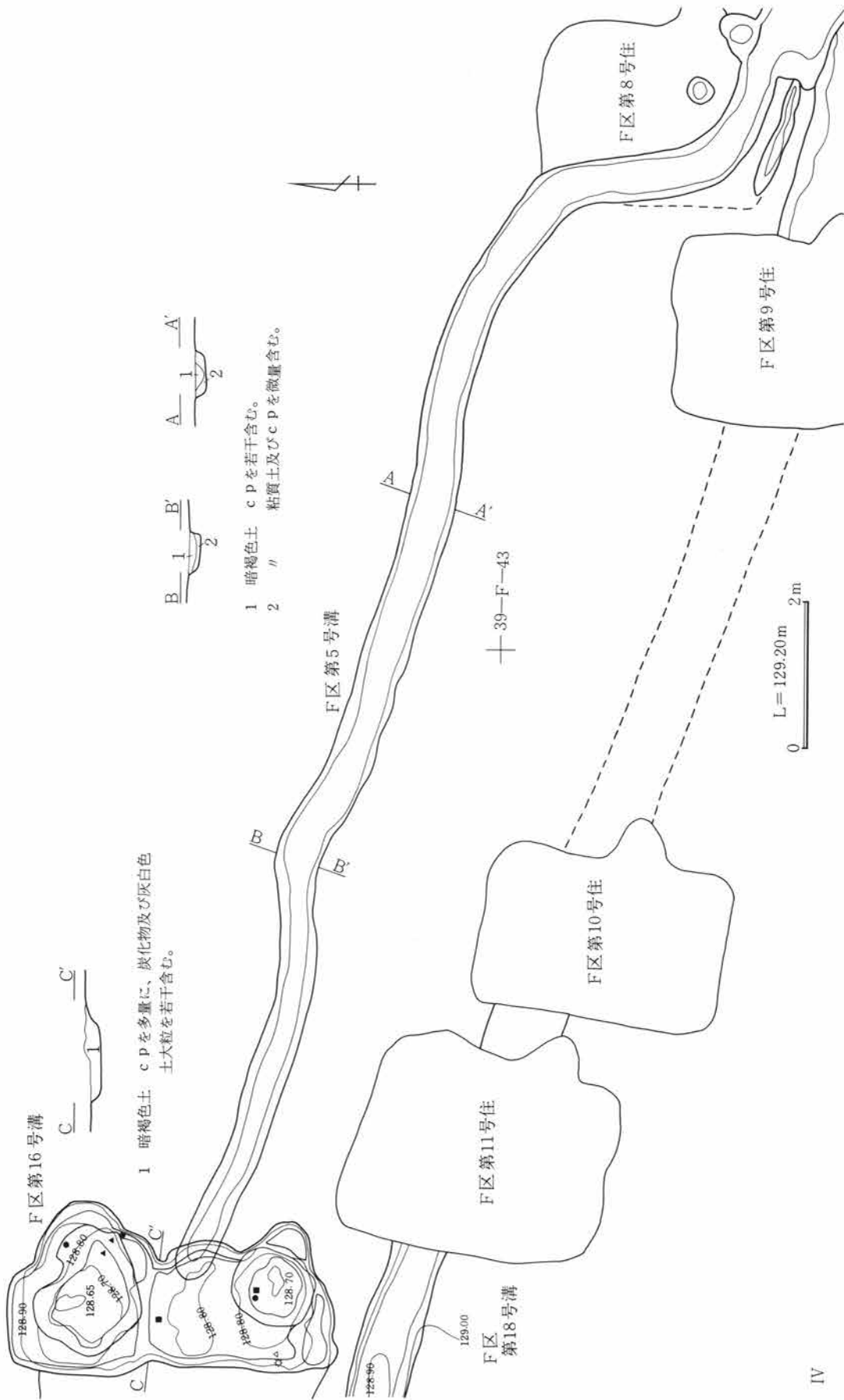


第559図 F区溝実測図(1)

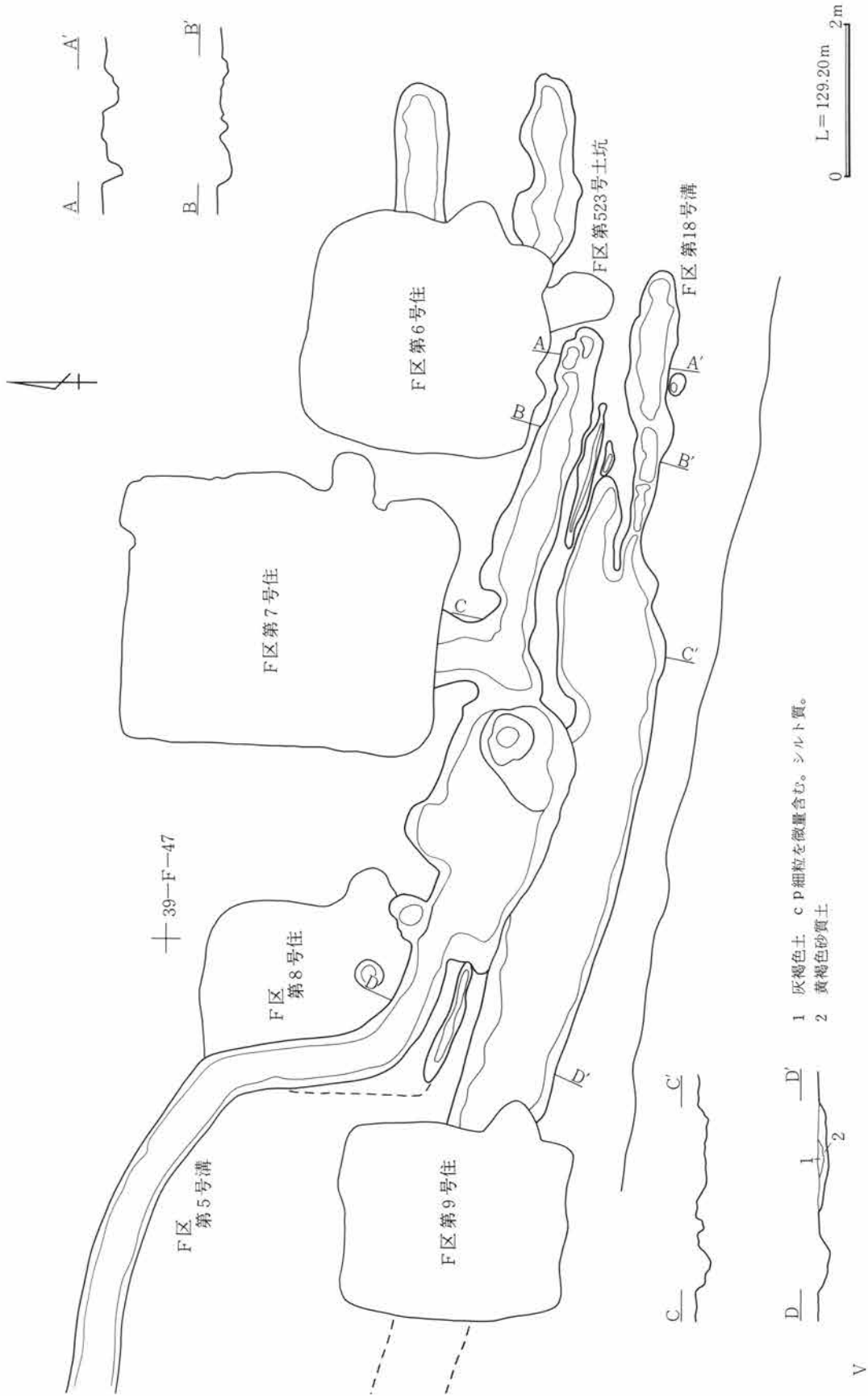


第561図 F区溝実測図(3)

III

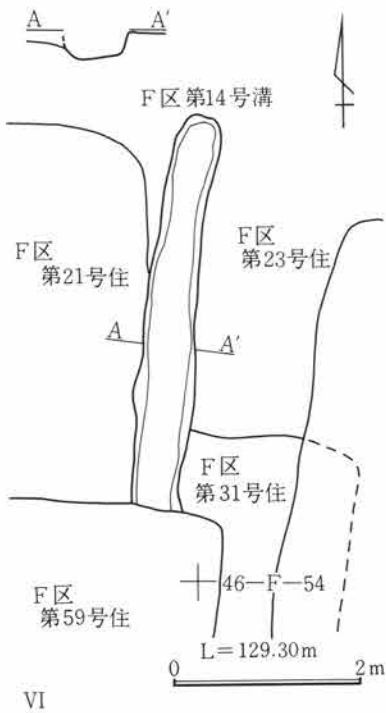


第562図 F区溝実測図(4)



第563図 F区溝美測図(5)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



第564図 F区溝実測図(6)

F区第5号溝

当溝は、西側で第16号溝と重複し、VI層上面で確認した。規模は、全長約26mで、幅は平均で上幅約60cm、下幅約40cm、残存深度約14cm、走行方位は東 -19° 南である。形状は、中央付近で方向を南に変え、さらに東に向うため、クランク状を呈している。

F区第10号溝

当溝は、南北に延びるため東西農道にかかり、2次の調査で明らかにした。確認はVI層上面で、規模は、最大上幅約275cm、下幅約225cm、最小上幅約100cm、下幅約75cmで、残存深度は約21~44cmで、外形・深度共に一定しない。底面は、南側が比較的平坦であるのに対し、北寄りには楕円形土坑が重複したような状態を呈している。遺物はこうした一段下った部分から特に多く出土している。

F区第12号溝

当溝は、第10号溝の東側に平行して検出され、VI層上面で確認した。規模は、上幅約30cm、下幅約15~20cmでほぼ一定し、残存深度は約5~13cmである。走行方位は、北 -12° 西であり、南に向って29%程度の傾斜をしている。

F区第13号溝

当溝は、第18号溝と平行し、第44号住居跡と第58号住居跡の間に検出した。規模は、上幅約120cm、下幅約73cm、残存深度約50cmである。走行方位は、東 -20° 南と第5号溝とほぼ一致している。

F区第14号溝

当溝は、第21・59号住居跡と重複しわずかに検出した。規模は、上幅約65cm、下幅約40cm、残存深度約28cmである。走行方位は、北 -8° 東である。

F区第15号溝

当溝は、第10号溝と平行するように位置し、北側は不明である。規模は、最大上幅約150cm、下幅約120cm、最小上幅約80cm、下幅約40cmで、残存深度は、約21~37cmで、北寄りに段を有している。

F区第16号溝

当溝は、検出状態では土坑の重複したような形状を呈しているが、さらに北側に延びていたものと判断したため溝として扱った。規模は、上幅約235cm、下幅約180cm、残存深度約20cmである。検出した部分は溝中の最も深く掘り込まれた部分が残存したものと考えられる。

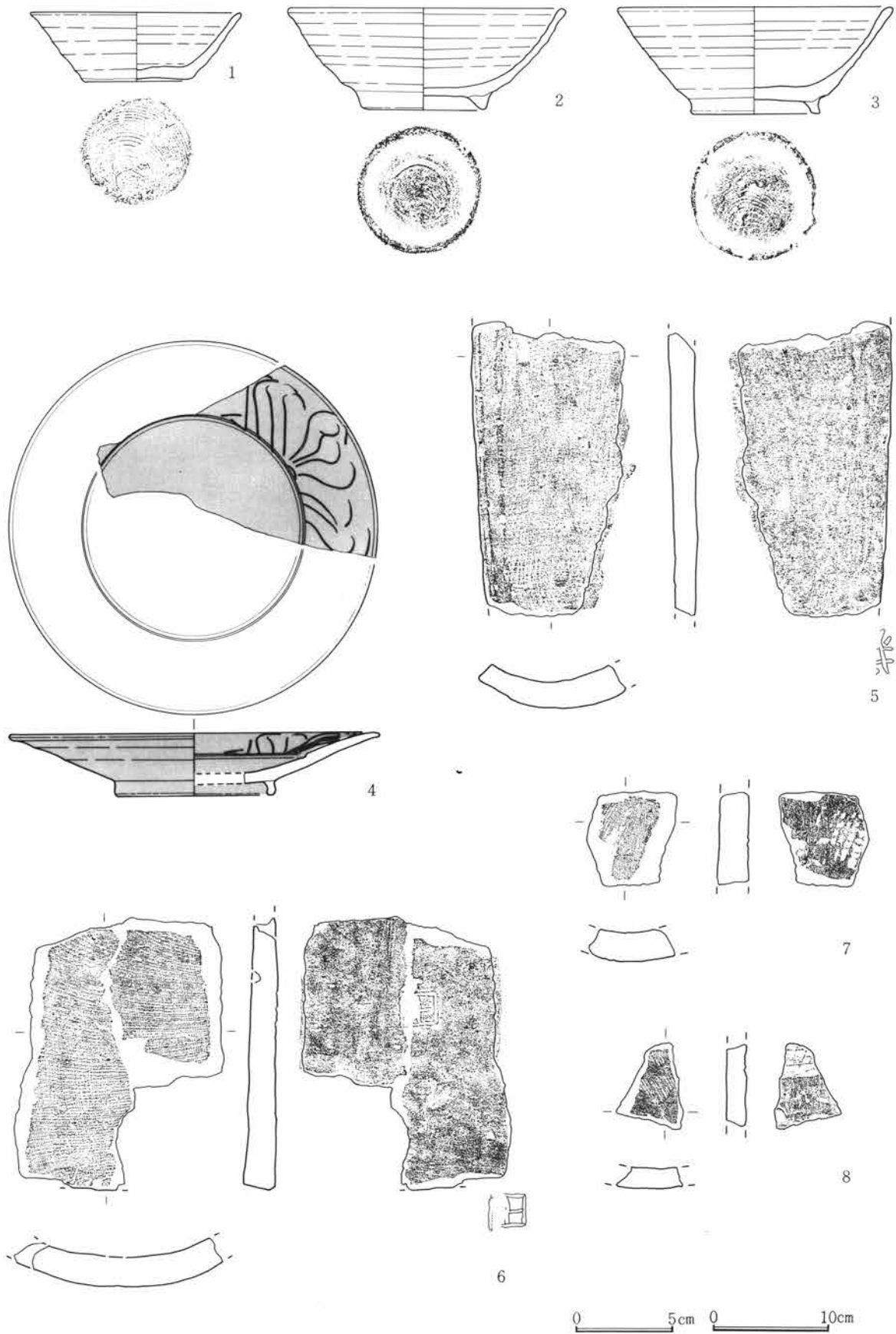
F区第17号溝

当溝は、第18号溝に平行して南側に検出した。確認はVI層土上面であるが、掘り込みはVII層土中に達している。規模は、上幅約200cm、下幅約142cm、残存深度約50cmである。走行方位は、東 -28° 南である。遺物は、底面直上より塗金された飾金具と思われるものが1点出土したのみである。

F区第18号溝

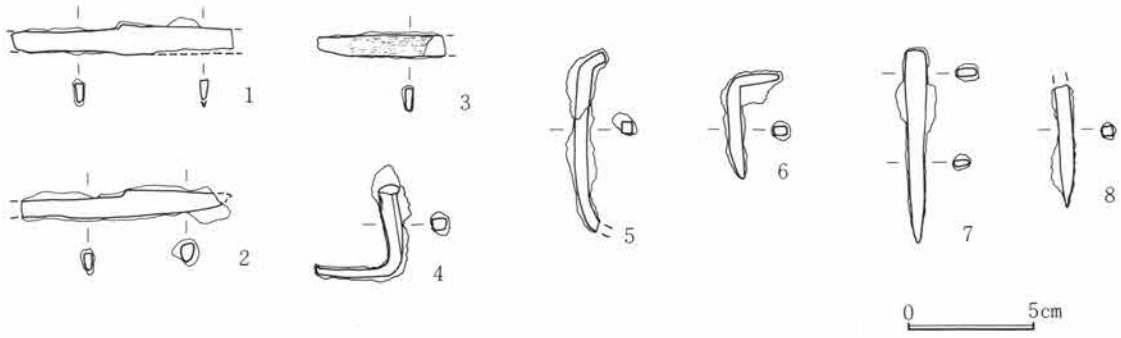
当溝は、第17溝と平行し、東側は第11号住居跡と重複し、さらに東側には未検出である。規模は、上幅約215cm、下幅約165cm、残存深度約25cmである。走行方位は、東 -18° 南である。当溝は、中央付近で第10号溝と直交するが、検出状態から第10号溝が新しいと考えられる。

第3章 検出された遺構・遺物

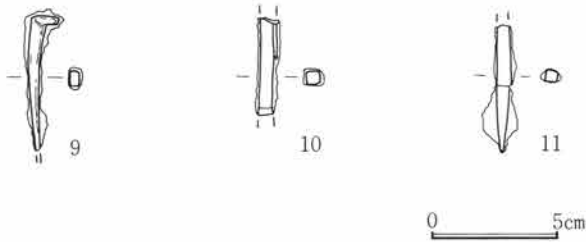


第565図 F区第10号溝出土遺物実測図

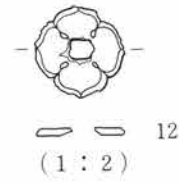
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



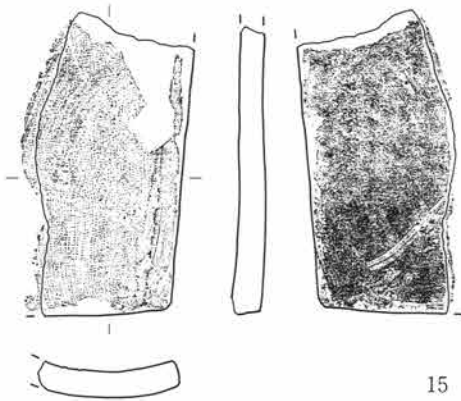
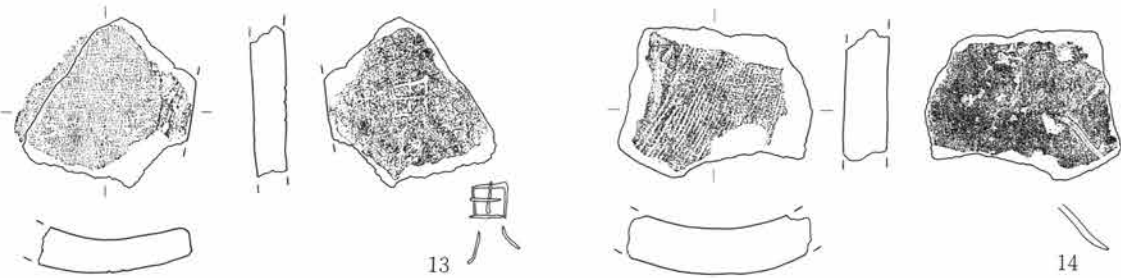
F区第10号溝



F区第12号溝

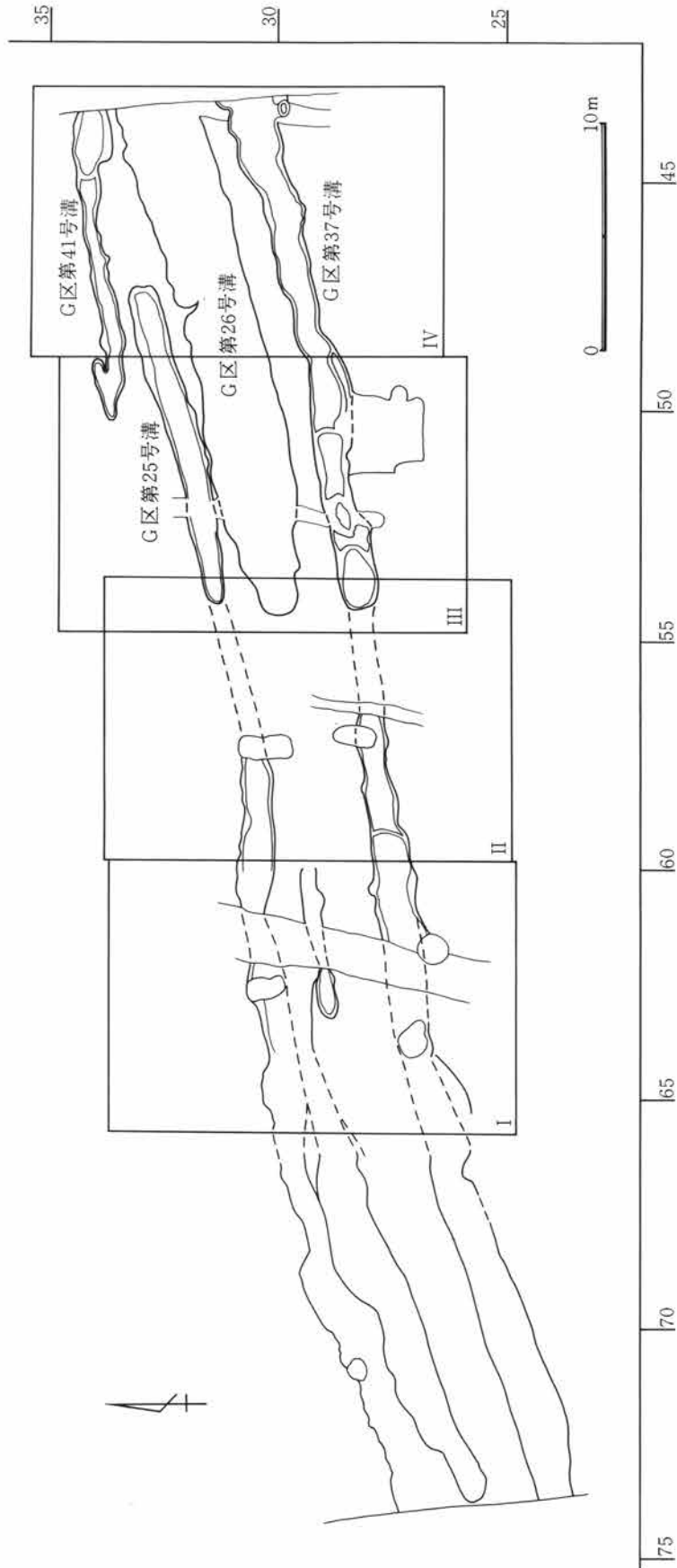


F区第17号溝

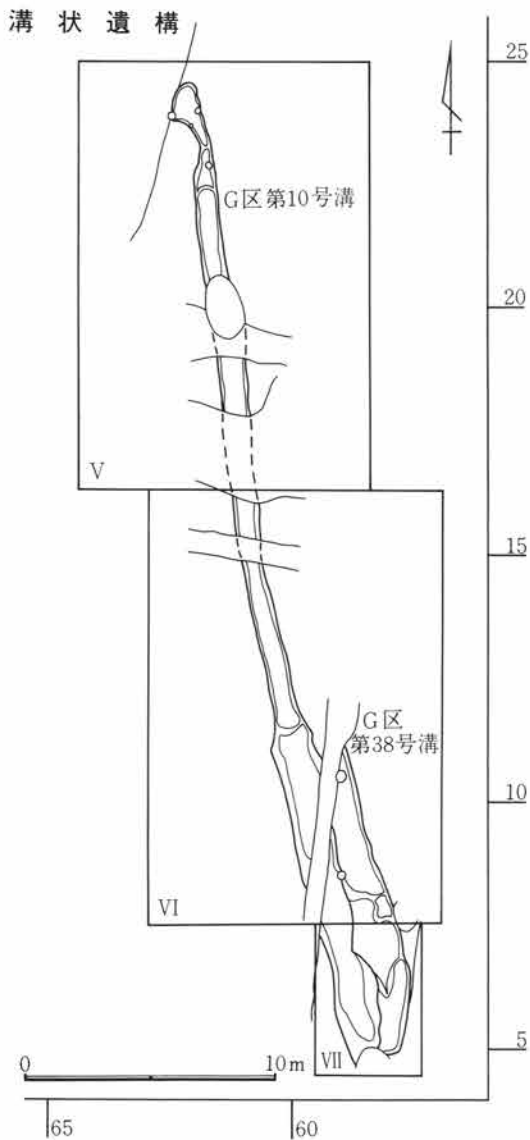


F区第18号溝

第566図 F区第10・12・17・18号溝出土遺物実測図



第567図 G区溝配置図(1)



第568図 G区溝配置図(2)

G区第37号溝

当溝は、規模等第25号溝とほぼ同じである。また、第26号溝とも共通する要素が多く、この3本の溝は、1セットで何らかの機能を有していたものと考えられる。

G区第38号溝

当溝は、第10号溝の東側に平行して位置し、南北共限界は曖昧である。規模は、幅が第10号溝との重複のため計測できない。残存深度は約10cmである、走行方位は、北-20°-西である。

G区第41号溝

第25号溝の北側に位置し、規模は、上幅約63~115cm、下幅約45~65cm、残存深度約13cmである。走行方位は、東-15°-北で第25・26・37溝とは、わずかな違いが認められる。

H区第8号溝

当溝はH区南からG区にかけて位置し、規模は、上幅約22~48cm、下幅約6~18cm、残存深度約4~8cmである。走行方位は、ほぼ北-40°-西であるが、湾曲しているため明確ではない。

G区第10号溝

当溝は、北側で第34号溝と重複し、南側で第38号溝と平行し接する。規模は、上幅約90cm、下幅約80cm、残存深度約13~18cmである。傾斜は、北側に向かってわずかに下っている。走行方位は、北-12°-西である。北寄り第7号土壌墓と重複している。

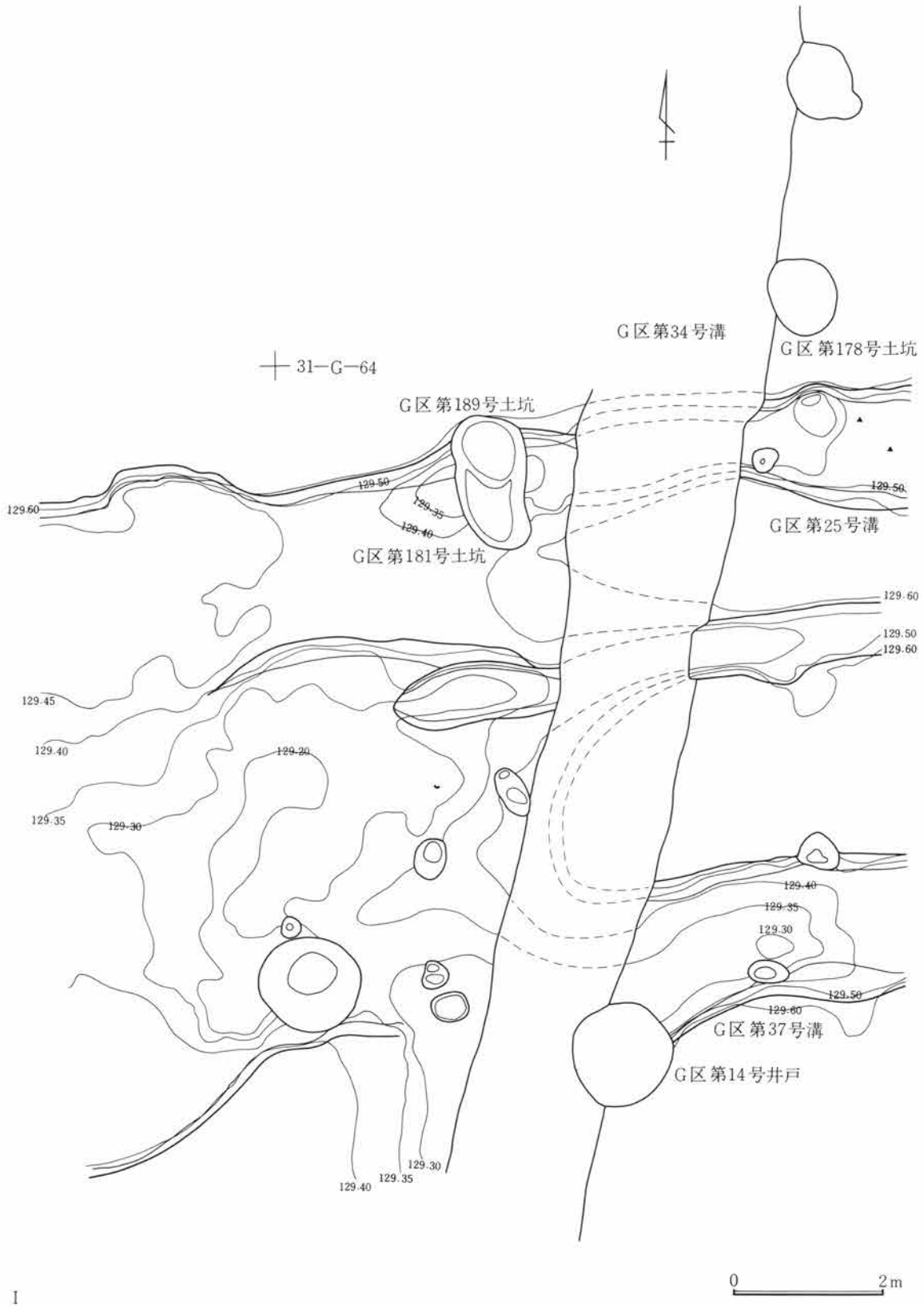
G区第25号溝

当溝は、調査区を東西に横断するようにみられ、第37号溝と平行し位置している。規模は、最も残存状態の良い場所で見ると、上幅約155cm、下幅約130cm、残存深度約44cmである。走行方位は、東-18°-北である。当溝と第37号溝は微妙な変化も共通しており、一連の遺構の可能性が高い。

G区第26号溝

当溝は、第25号溝と第37号溝の間に位置し、両溝に平行している。西側は、確認面が低かったためか、検出されなかった。しかし同傾向は、前出の2本の溝にもみられることから、当溝もさらに両側に連続するものと思われる。規模は、上幅約400cmで、下幅は曖昧で計測ができない。残存深度は最深部で約120cmであり、II層の攪乱によって掘り込み面を特定することはできない。走行方位は、東-17°-北で25号溝とほぼ同じである。底面は非常に凹凸が激しく、多数の土坑が重複したような様相を呈している。

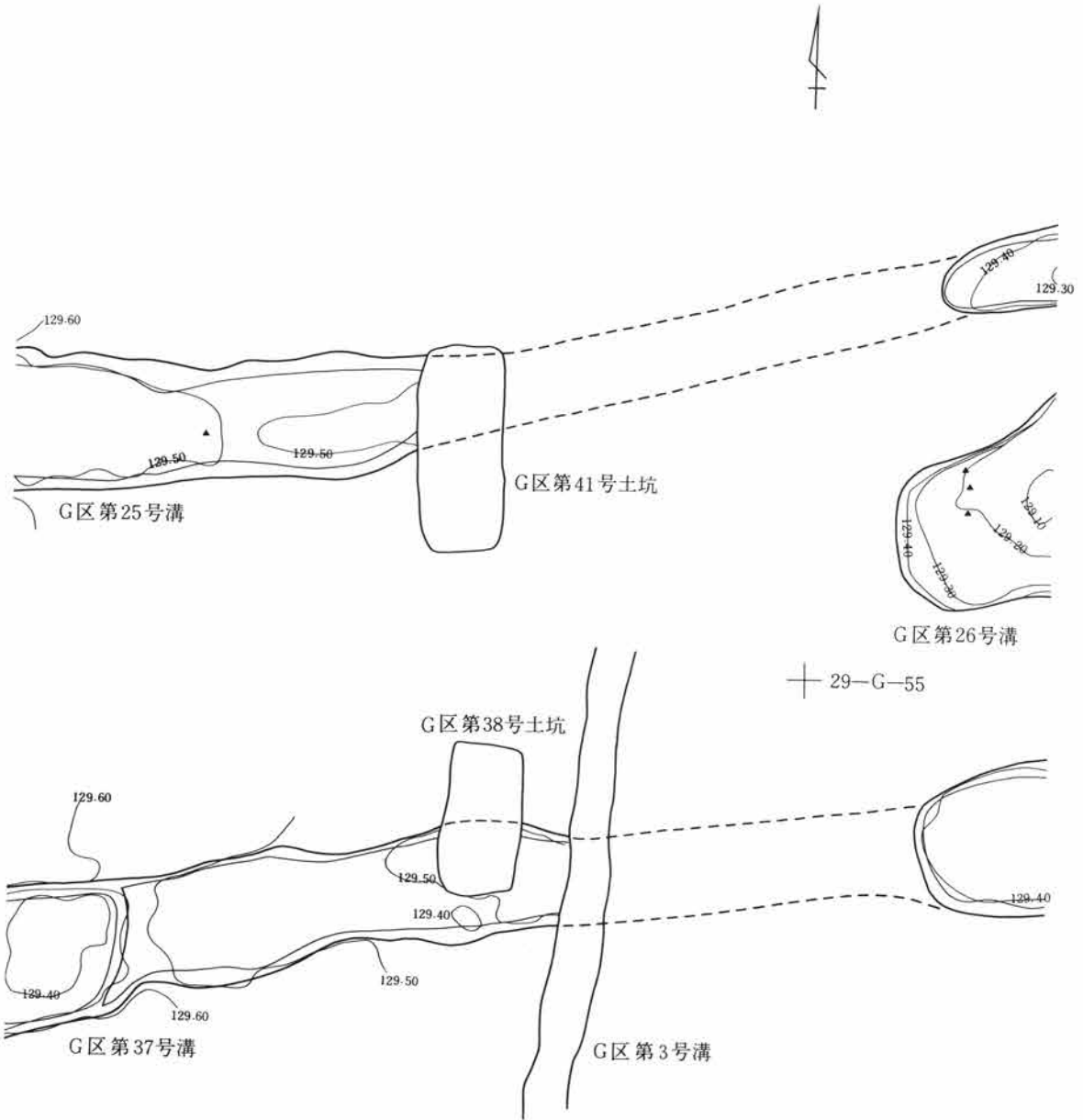
遺物は破片が多数覆土中より出土した。



I

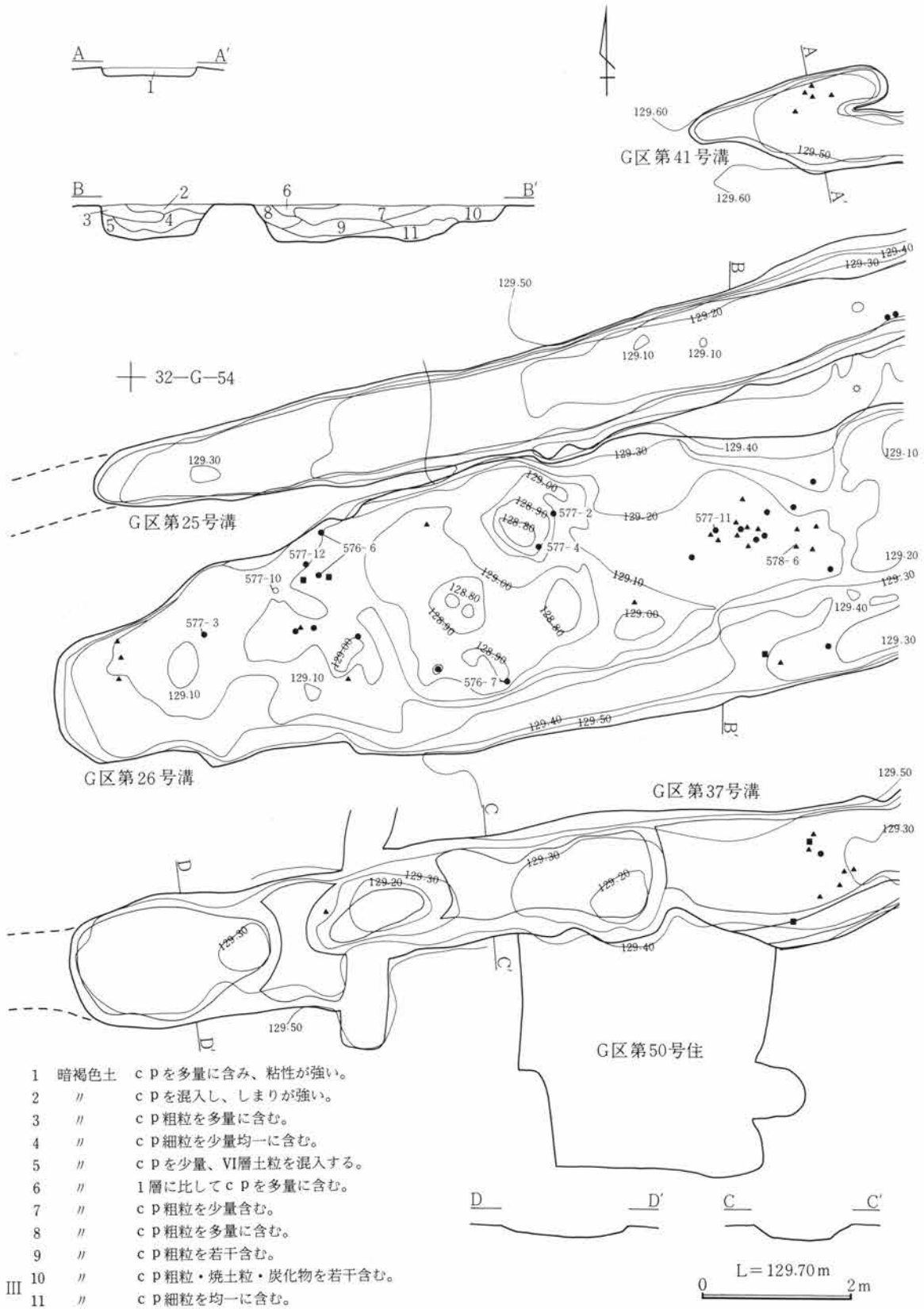
第569図 G区溝実測図(1)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



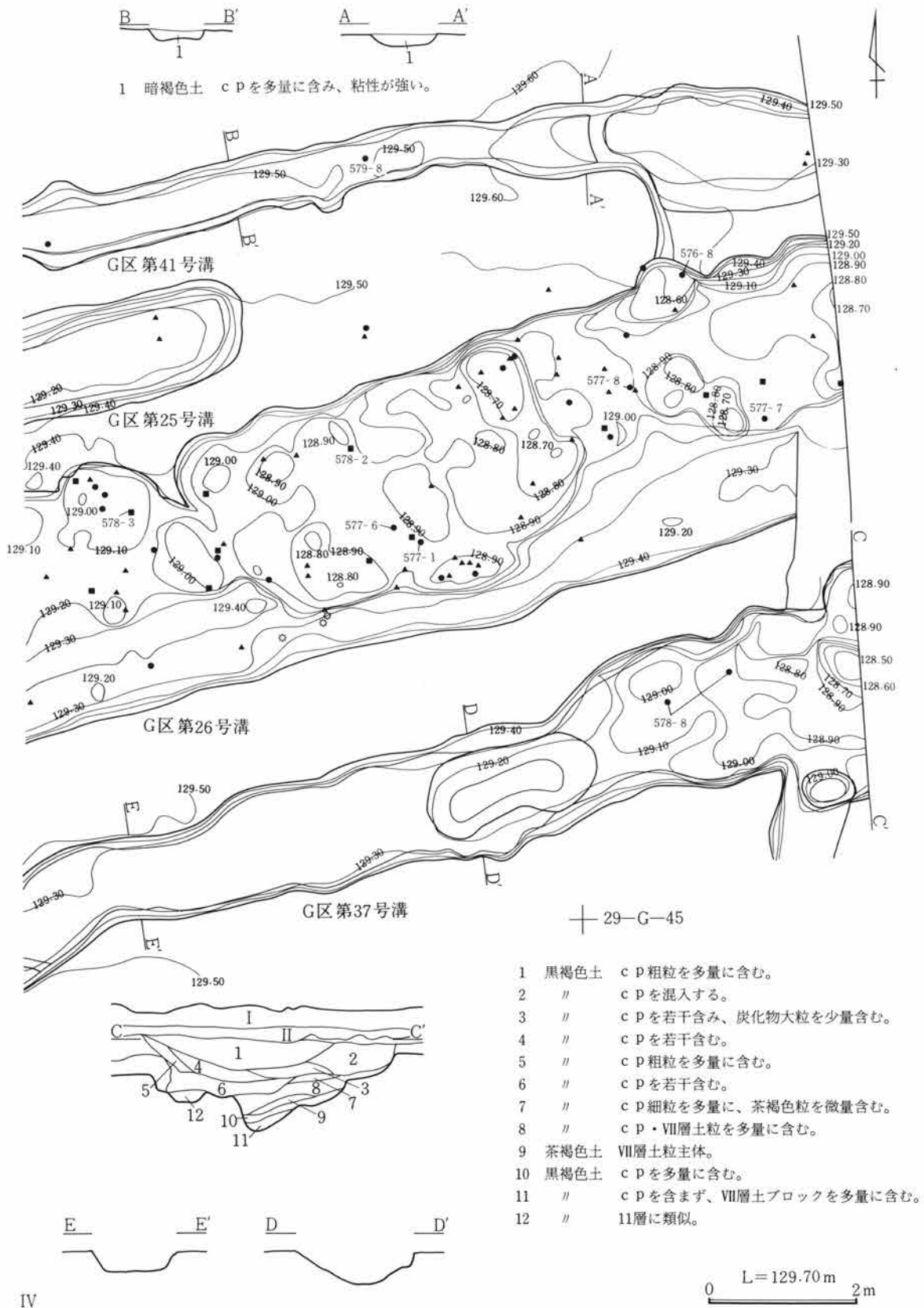
II

第570図 G区溝実測図(2)

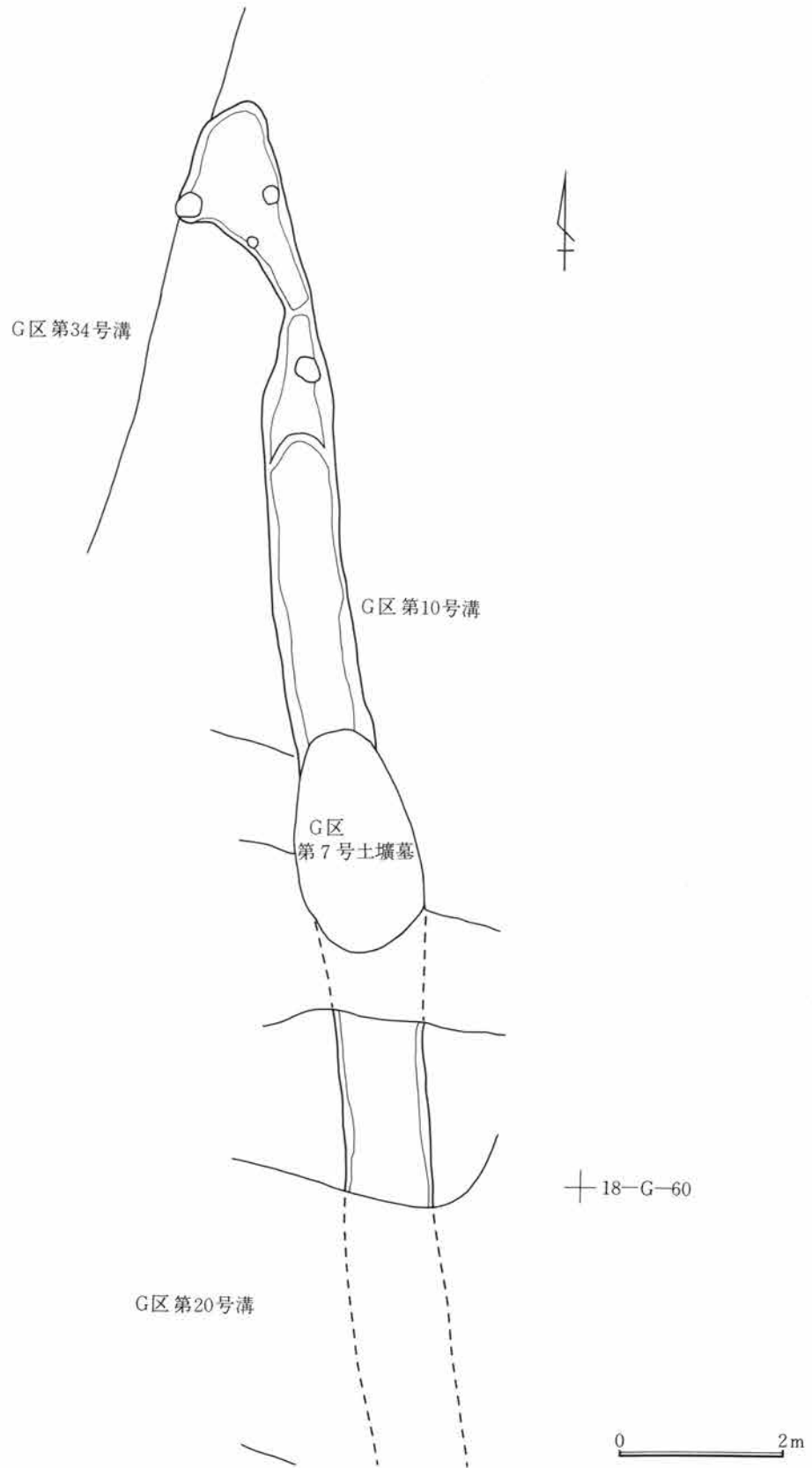


第571図 G区溝実測図(3)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



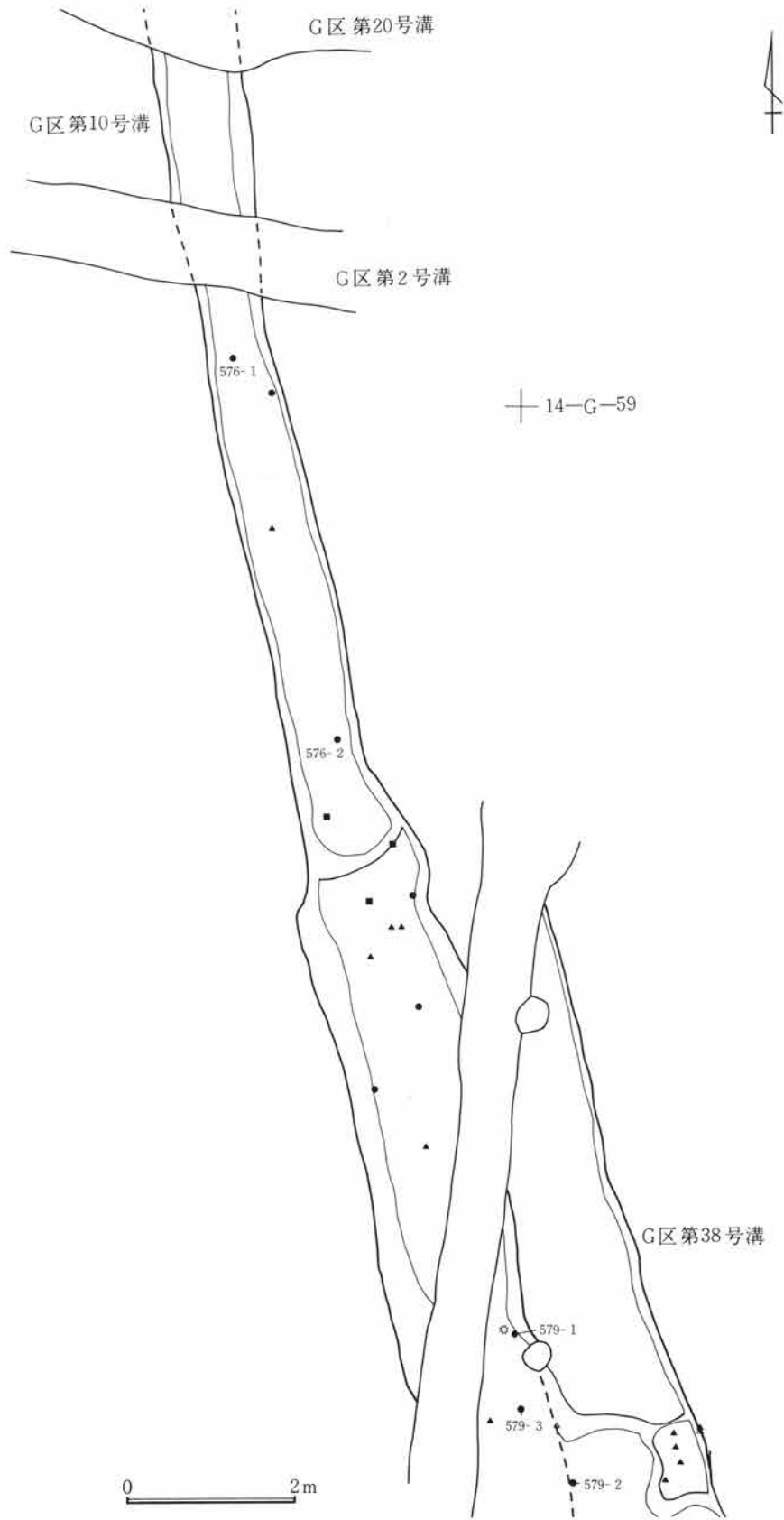
第572図 G区溝実測図(4)



V

第573図 G区溝実測図(5)

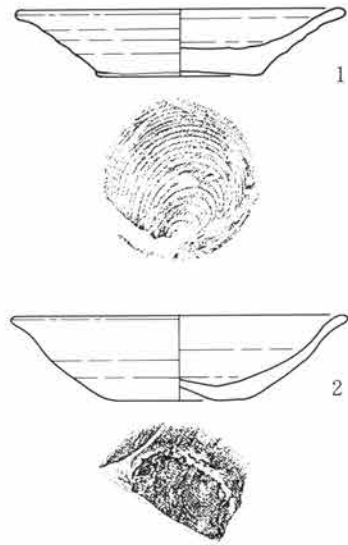
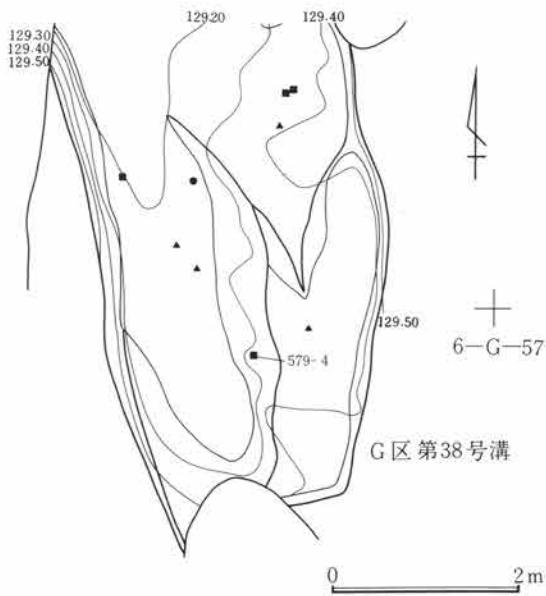
第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



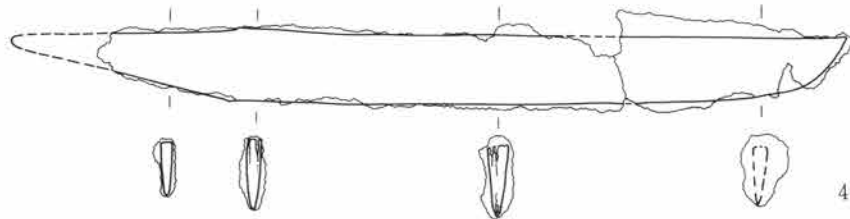
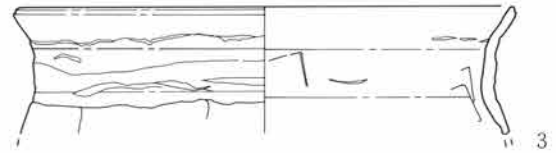
VI

第574図 G区溝実測図(6)

第3章 検出された遺構・遺物

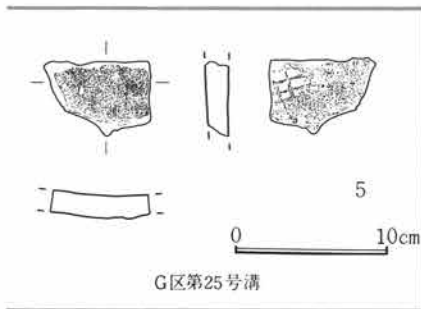


VII 第575図 G区溝実測図(7)

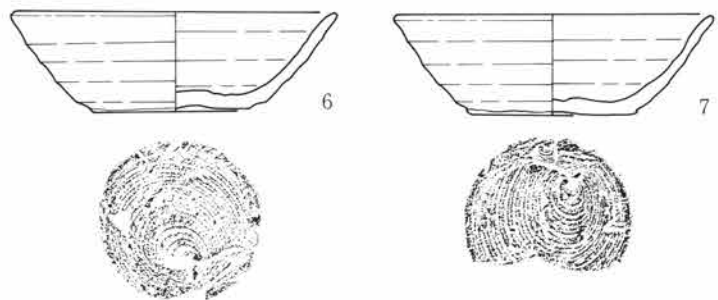


0 5cm

G区第10号溝



G区第25号溝

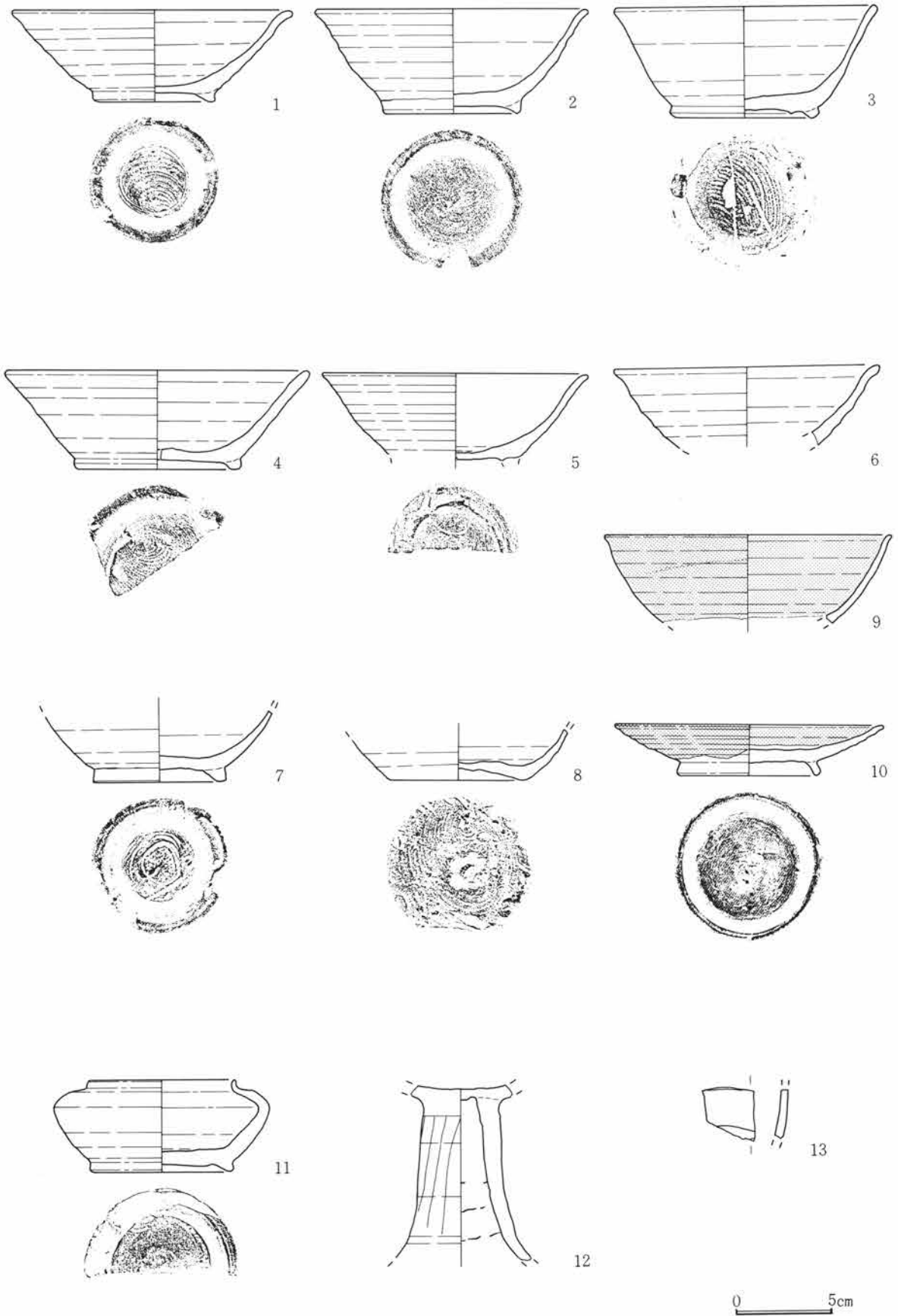


0 5cm

G区第26号溝

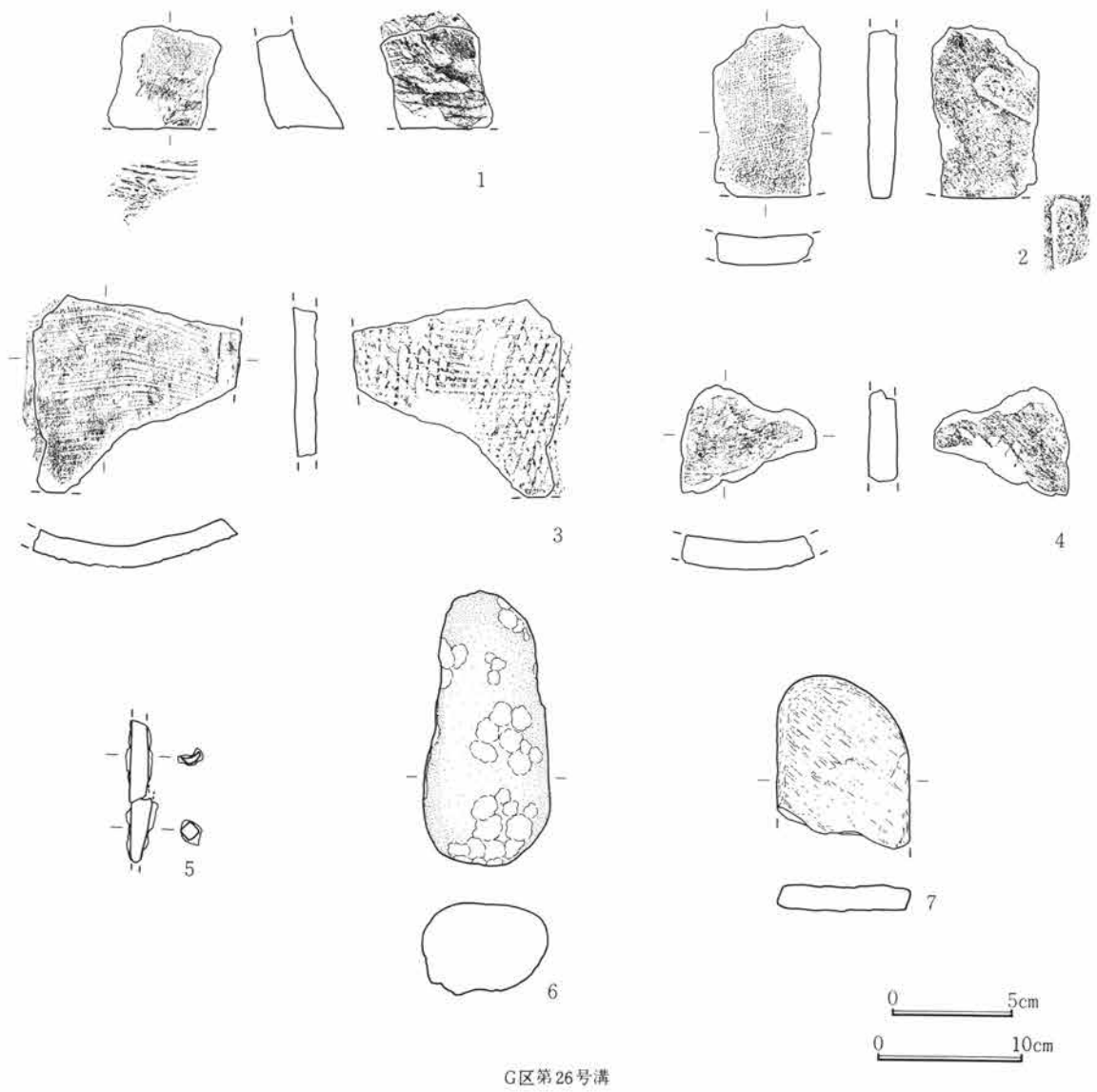
第576図 G区第10・25・26号溝出土遺物実測図

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

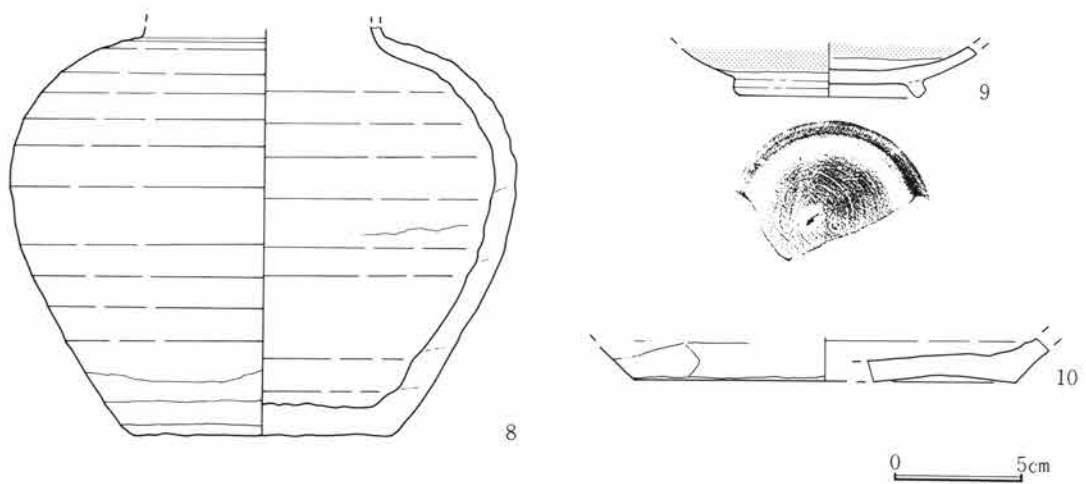


第577図 G区第26号溝出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物



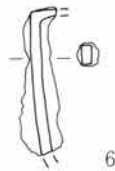
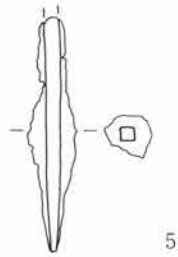
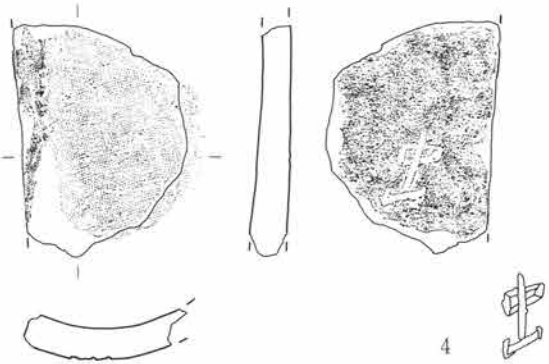
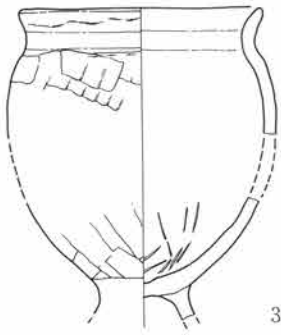
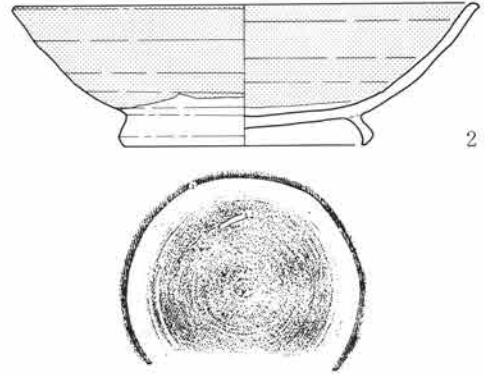
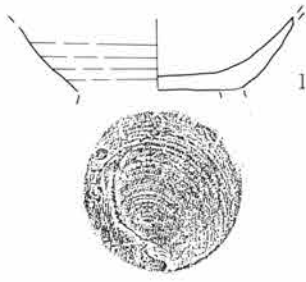
G区第26号溝



G区第37号溝

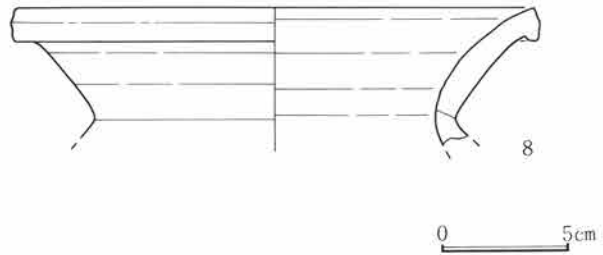
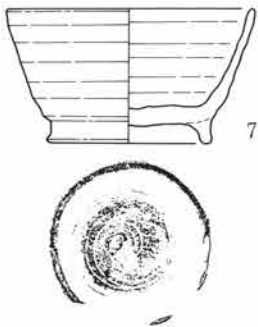
第578図 G区第26・37号溝出土遺物実測図

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要



0 5cm 0 10cm

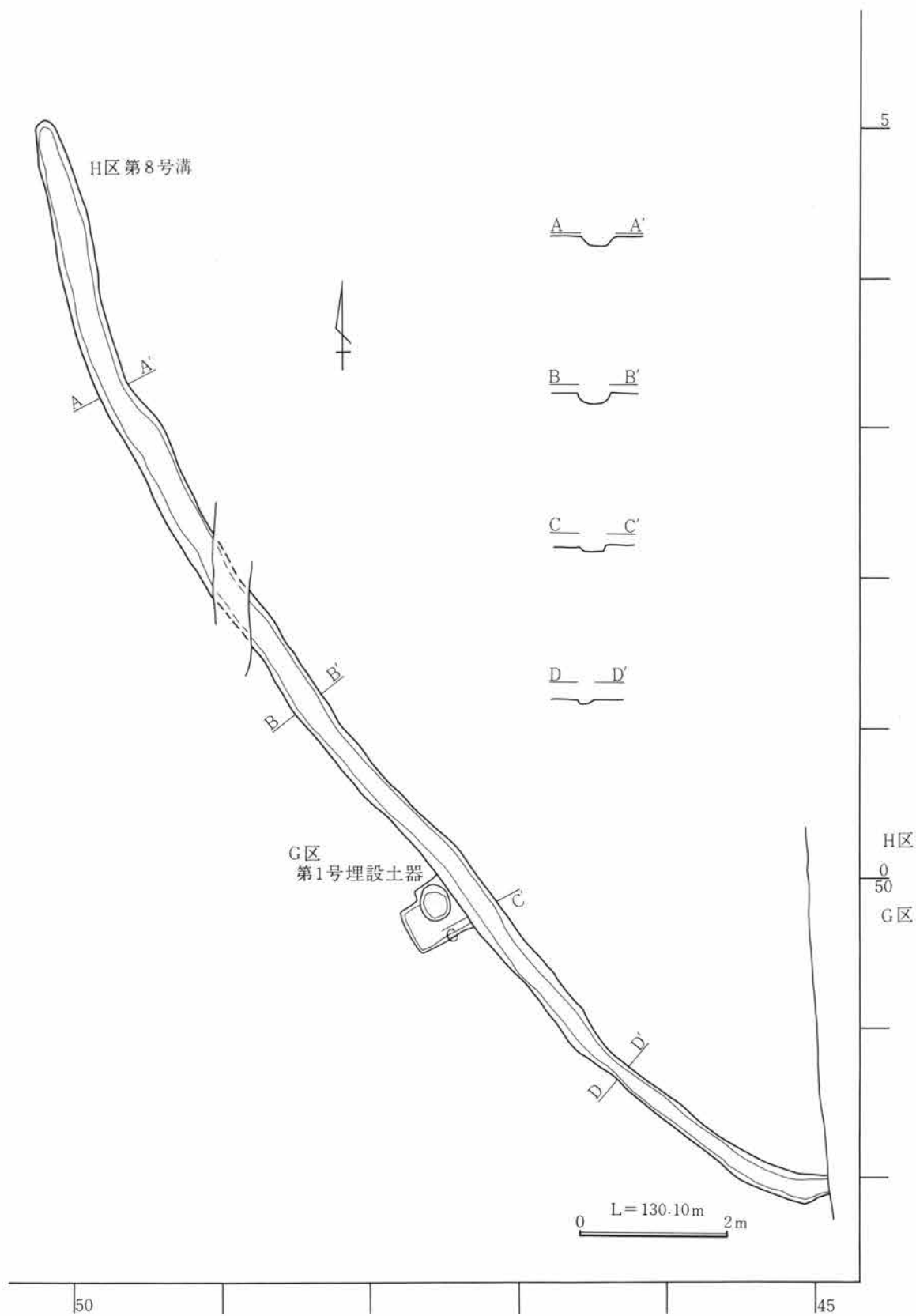
G区第38号溝



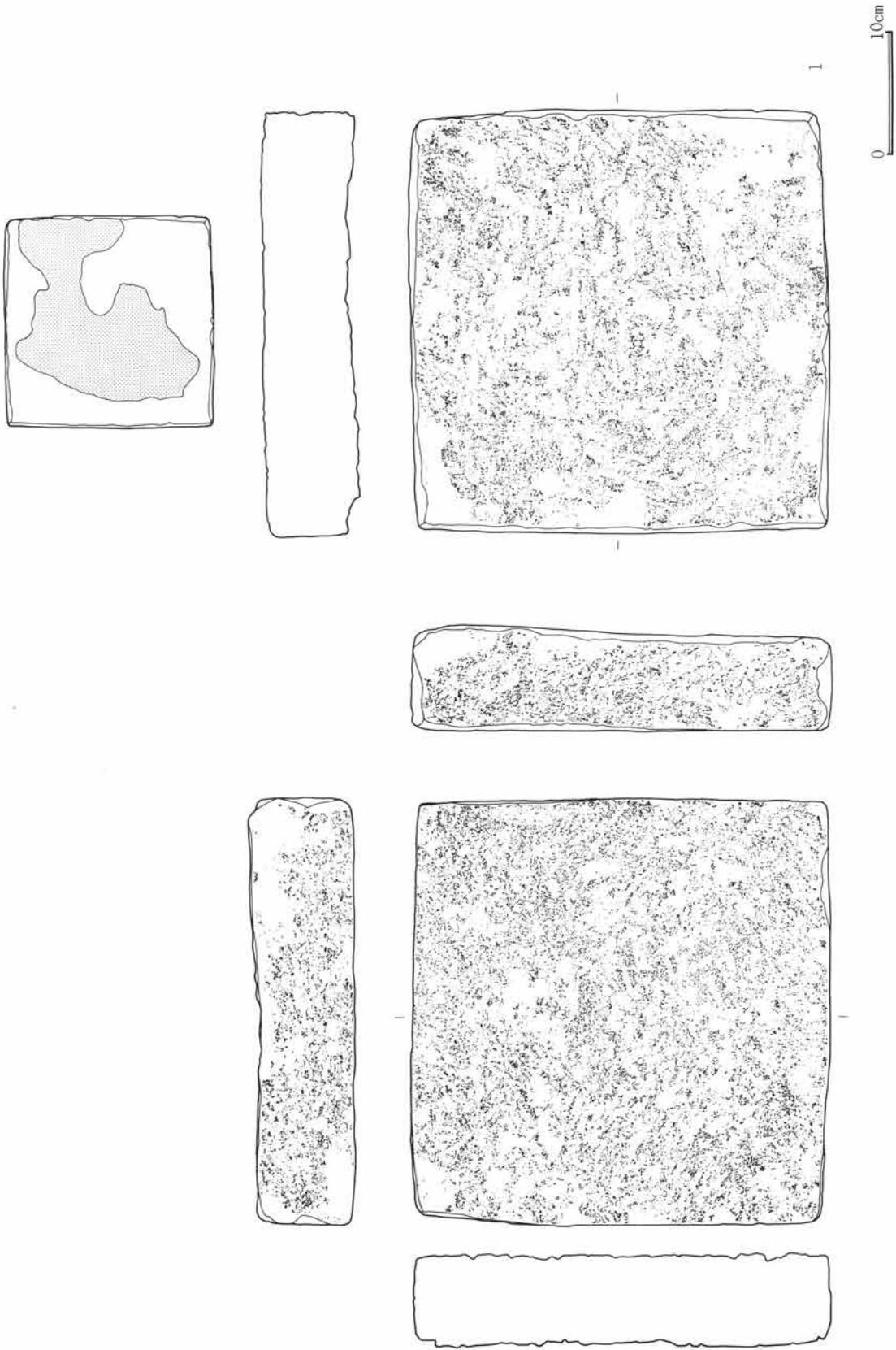
0 5cm

G区第41号溝

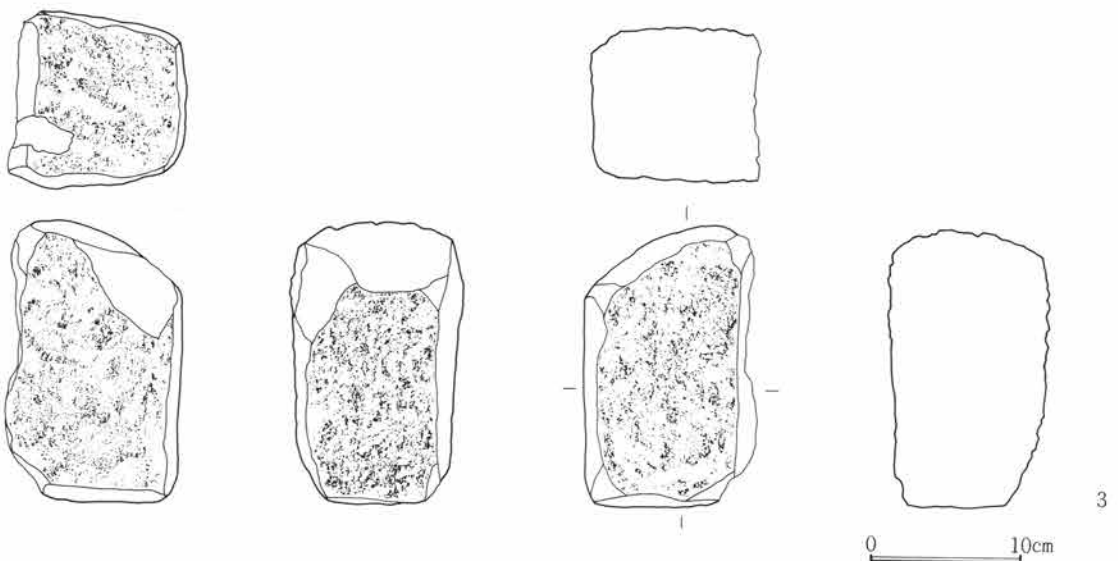
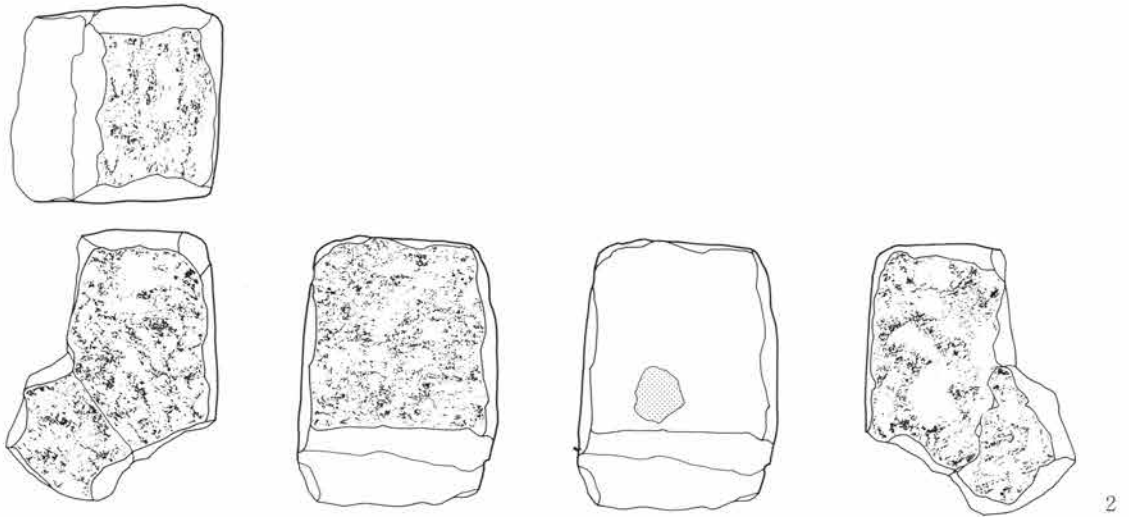
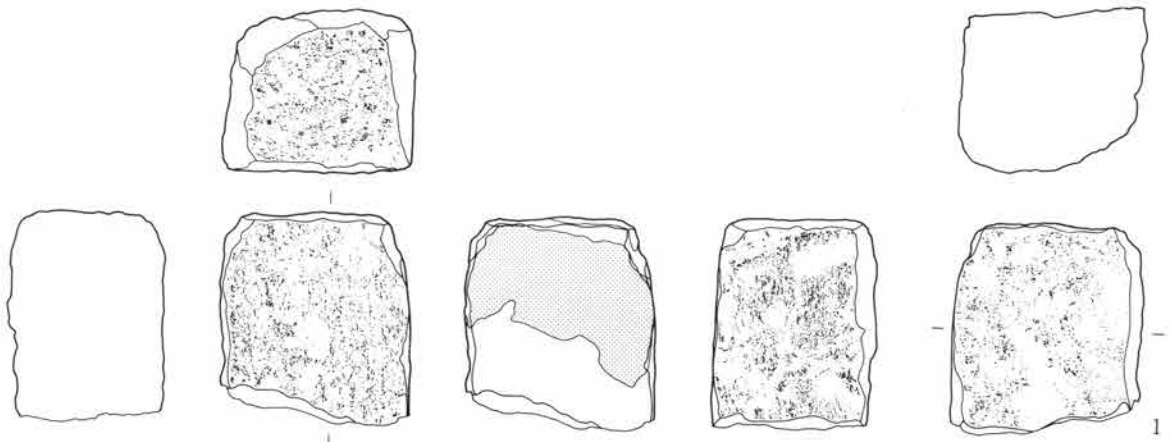
第579図 G区第38・41号溝出土遺物実測図



第580図 H区第8号溝実測図



第581図 遺構外出土遺物実測図(1)



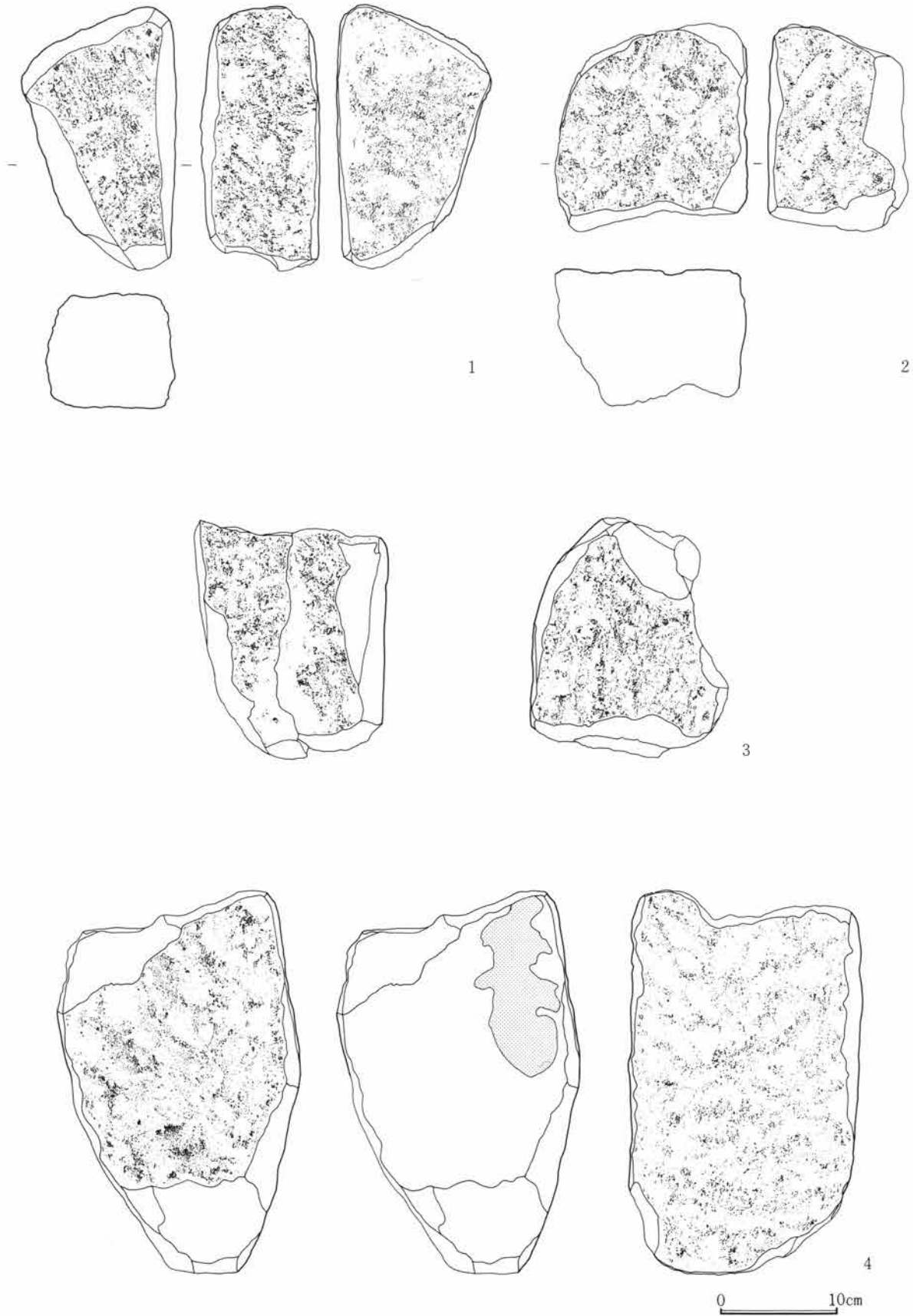
0 10cm

第582図 遺構外出土遺物実測図(2)

第1節 古墳時代(中期)～平安時代の調査の概要

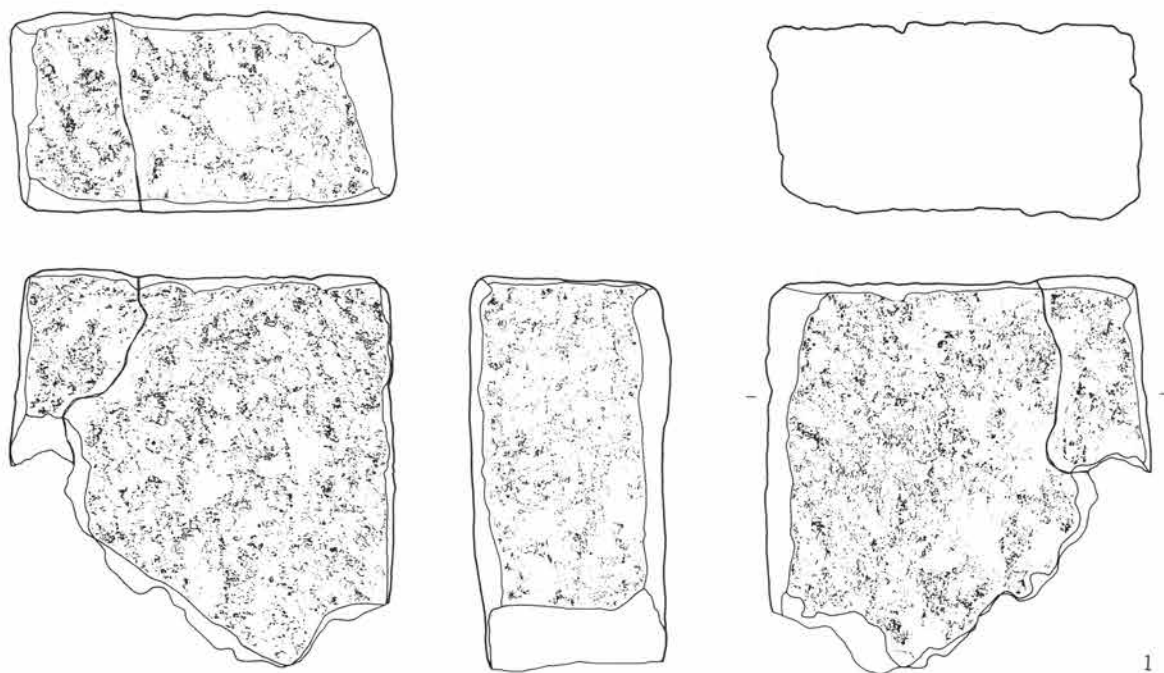


第583図 遺構外出土遺物実測図(3)

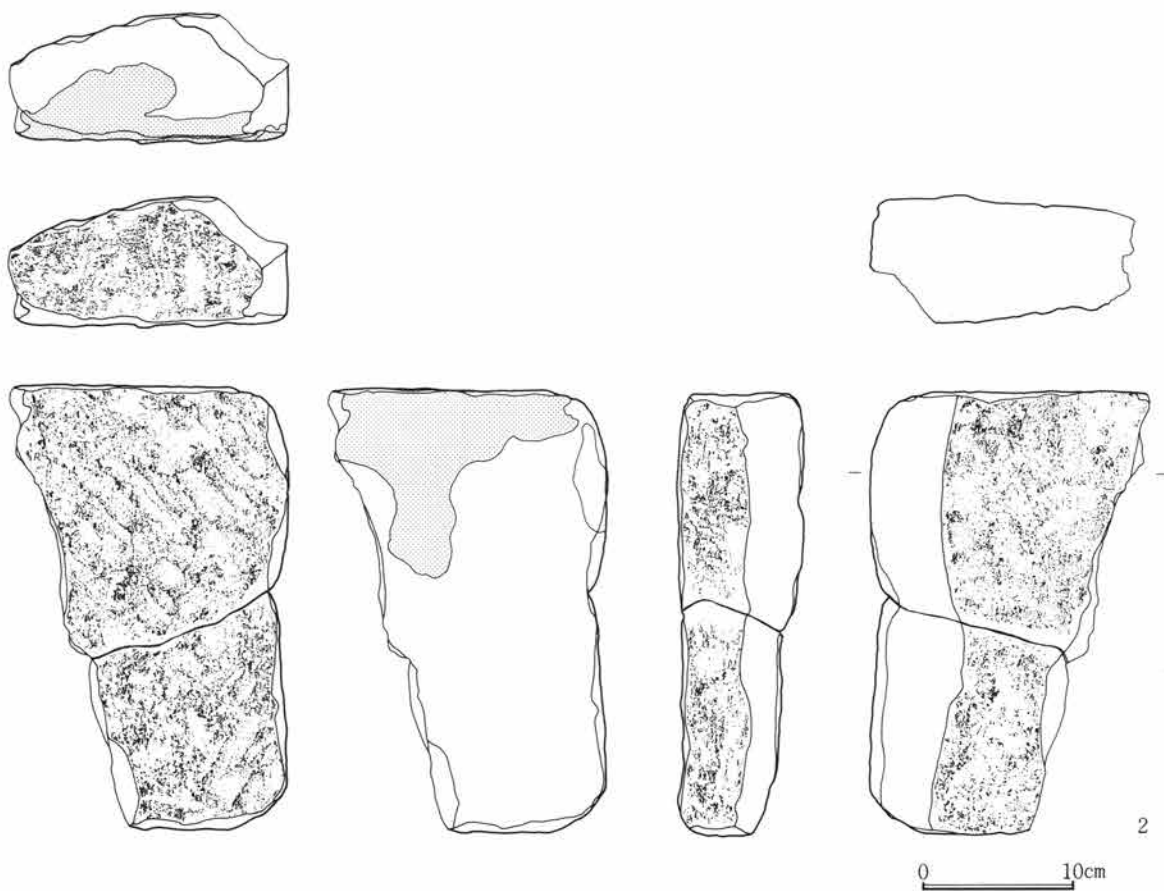


第584図 遺構外出土遺物実測図(4)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



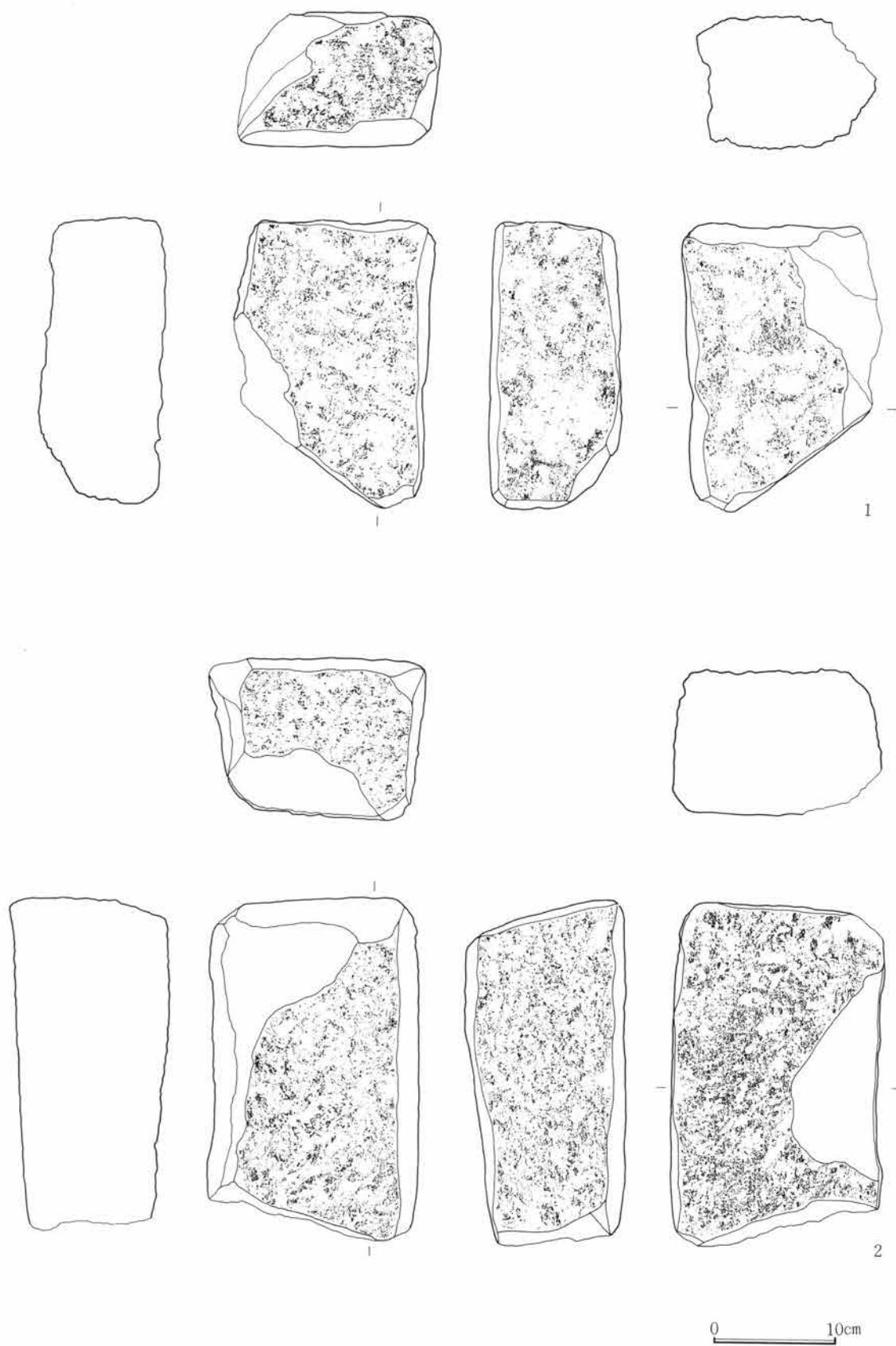
1



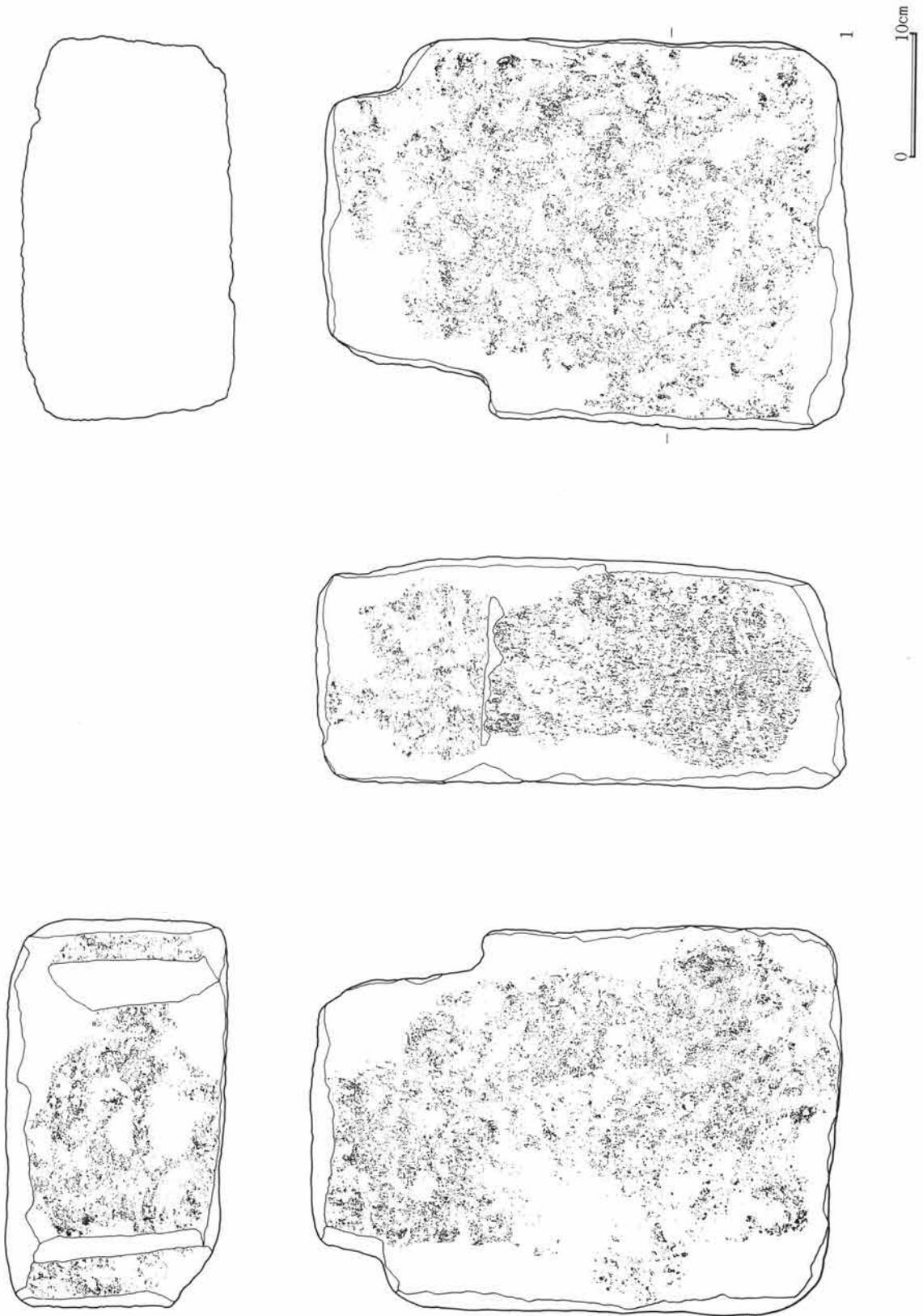
2

0 10cm

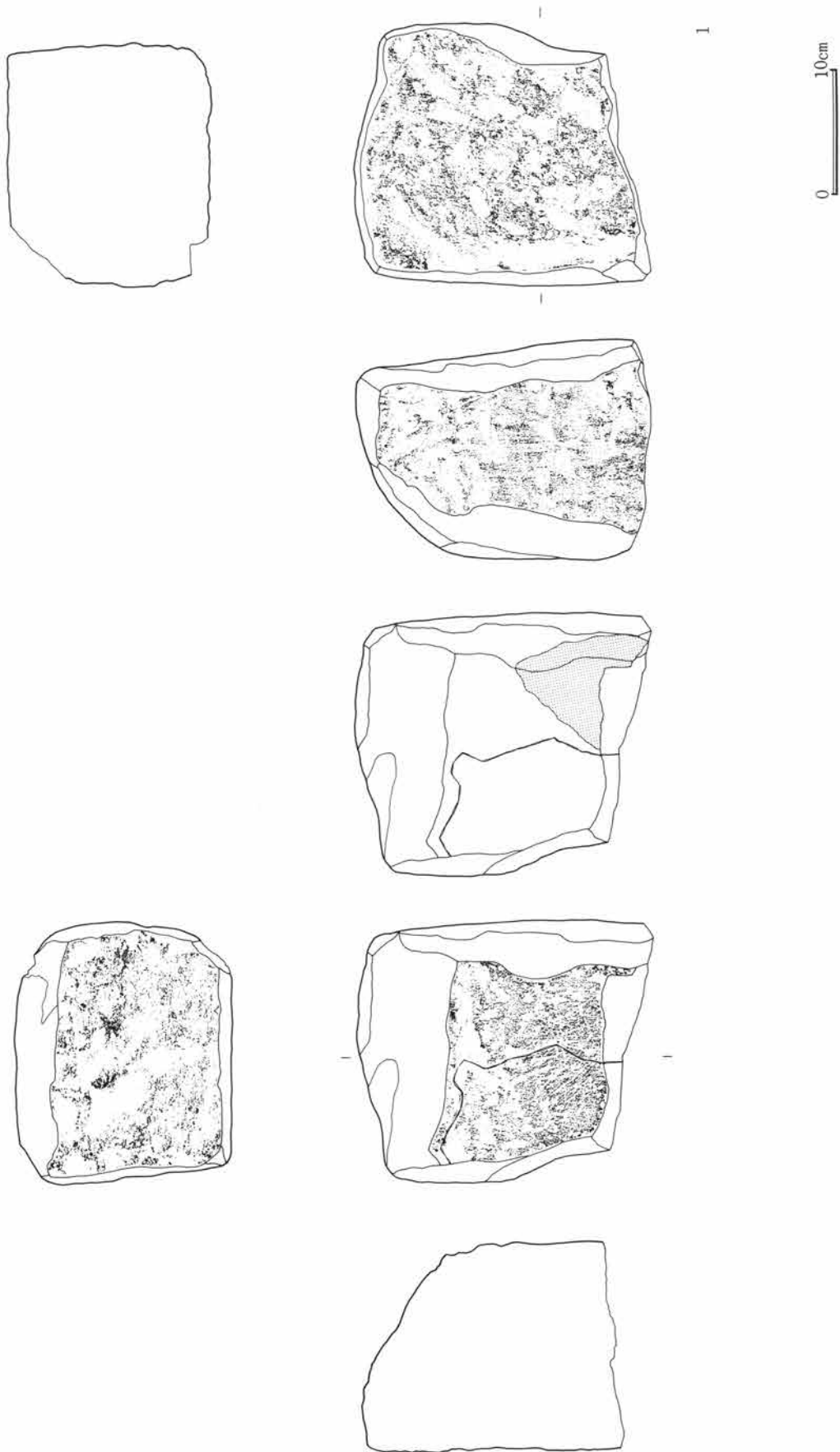
第585図 遺構外出土遺物実測図(5)



第586図 遺構外出土遺物実測図(6)

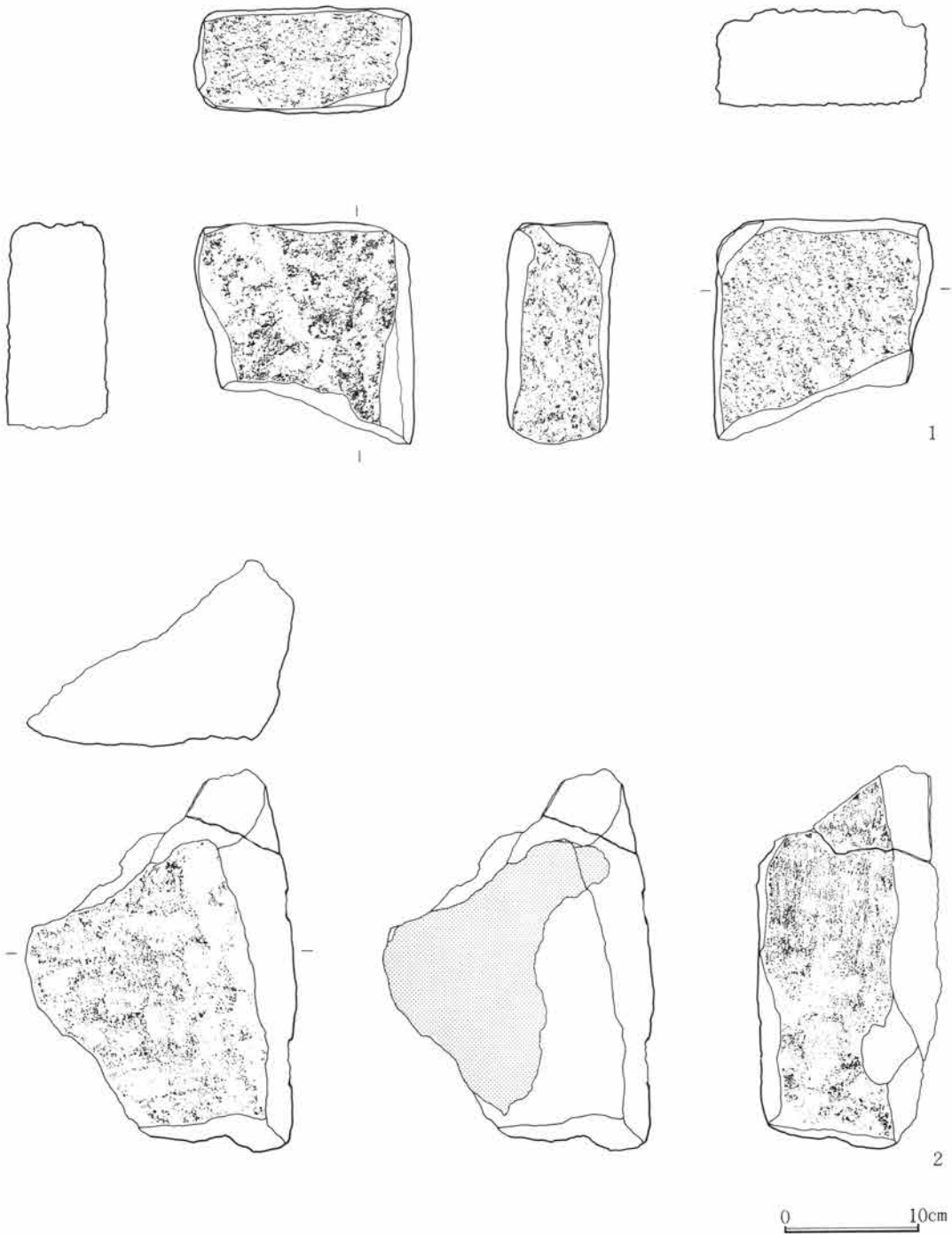


第587図 遺構外出土遺物美測図(7)



第588図 遺構外出土遺物実測図(8)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

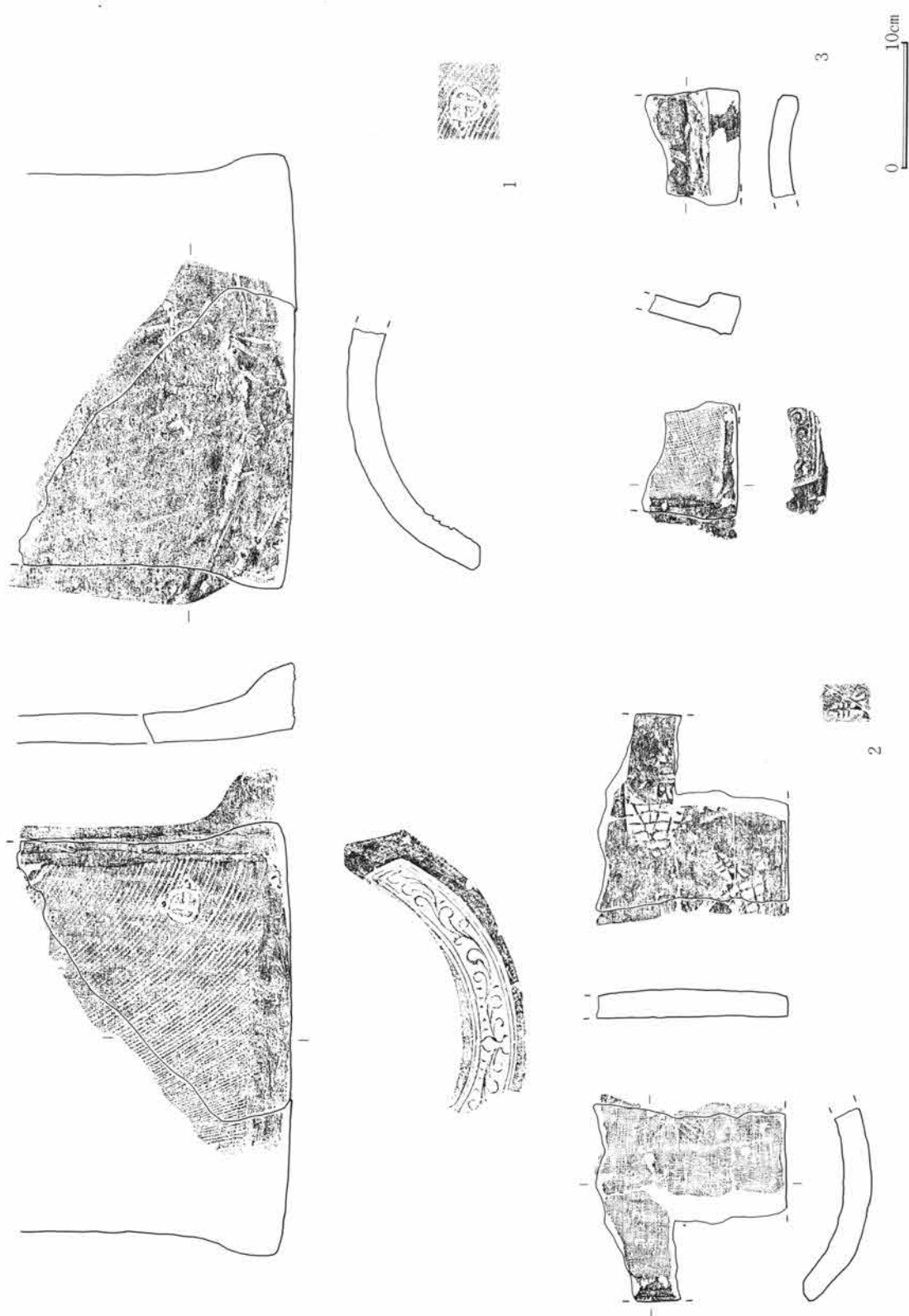


第589図 遺構外出土遺物実測図(9)

遺構外出土遺物について

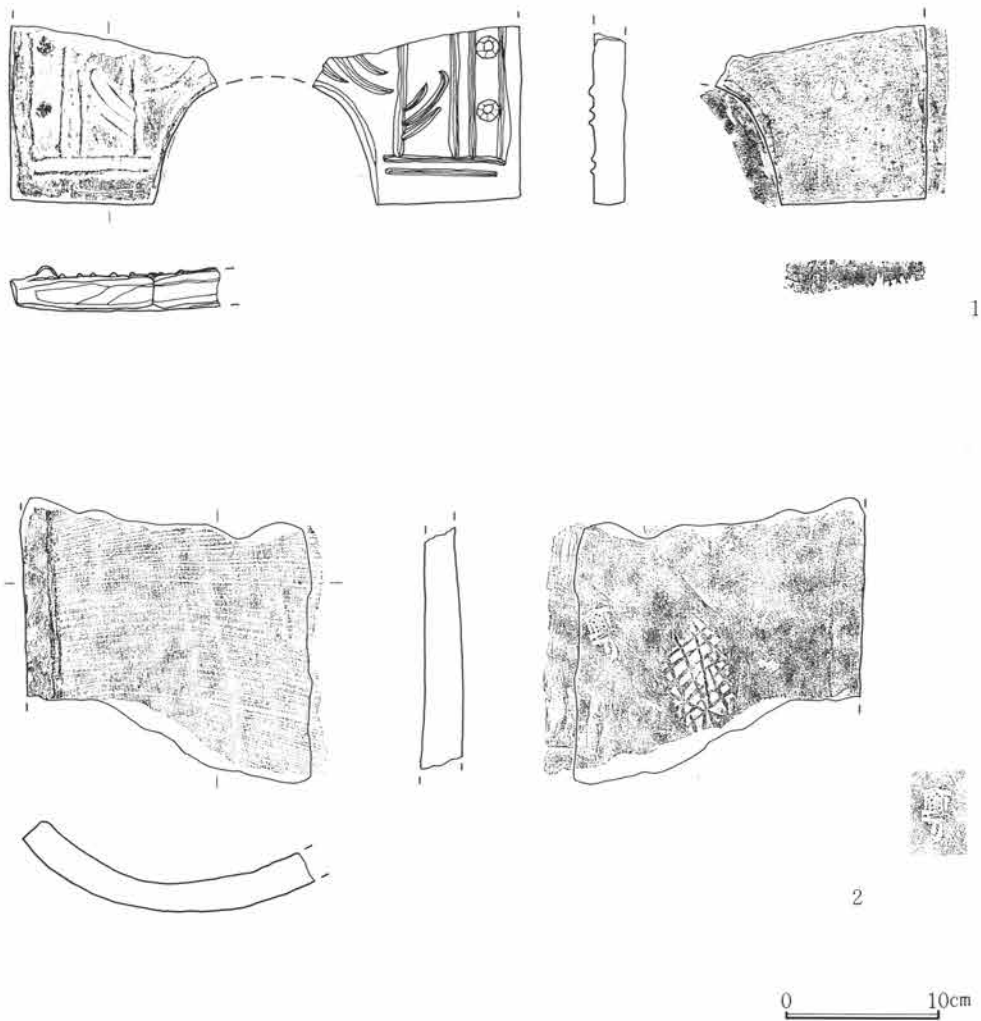
第581～589図に図示したものは、全て鎌倉時代以降の遺構内、特に井戸跡から出土したものであるが、他区においては、平安時代の遺構内からの出土例もみられることから、該期に属するものとして扱った。

石材は角閃石安山岩と考えられるものであり、全て同一石材である。完形と思われるものは、第581図1及び第587図1の2例だけであり、他は破損している。第581図1は、横約35cm、縦約34cm、厚さ約9cmの正方形の板状を呈するもので、他に同類のものとしては第585図2が考えられる。次に第587図1は、横約31cm、



第590図 遺構内・外遺物実測補図(1)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



第591図 遺構内・外遺物実測補図(2)

縦約43cm、厚さ約24cmで、両側に段を有することから縦長の凸字形を呈するものである。同類に属すと考えられるものには、第584図4、第585図1、第588図1、第589図2などがある。それ以外のものは全体形を完全に把握することはできないが、その残存状態から横約12cm、厚さ約10cmの角柱状を呈するものである可能性が高い。これらの石材は表面を削りによって成形後、粗い磨きによって表面仕上げを施したものと思われ、全て同一加工である。したがって同石材・同成整形で、ここにみられるだけで少なくとも3形態のものがあることになる。これらが組み合わせて使用されたものであるとすれば、最も可能性が高いのが国分僧寺・尼寺の基壇化粧の石材である。そしてその形態的特徴から第581図1は、葛石、第586図2等は地覆石であると思われる。しかし出土したものは大半が二次調整及び焼成を受けた痕跡があることから、搬入され住居内カマドの構築材等の二次使用され、廃棄されたものと思われる。

遺構内・外出土補促遺物について

第590・591図として図示したものは、整理途中不明であり、各遺構内に組み込めなかったもの、及び、遺構毎に組んでおいた資料が接合した例である。



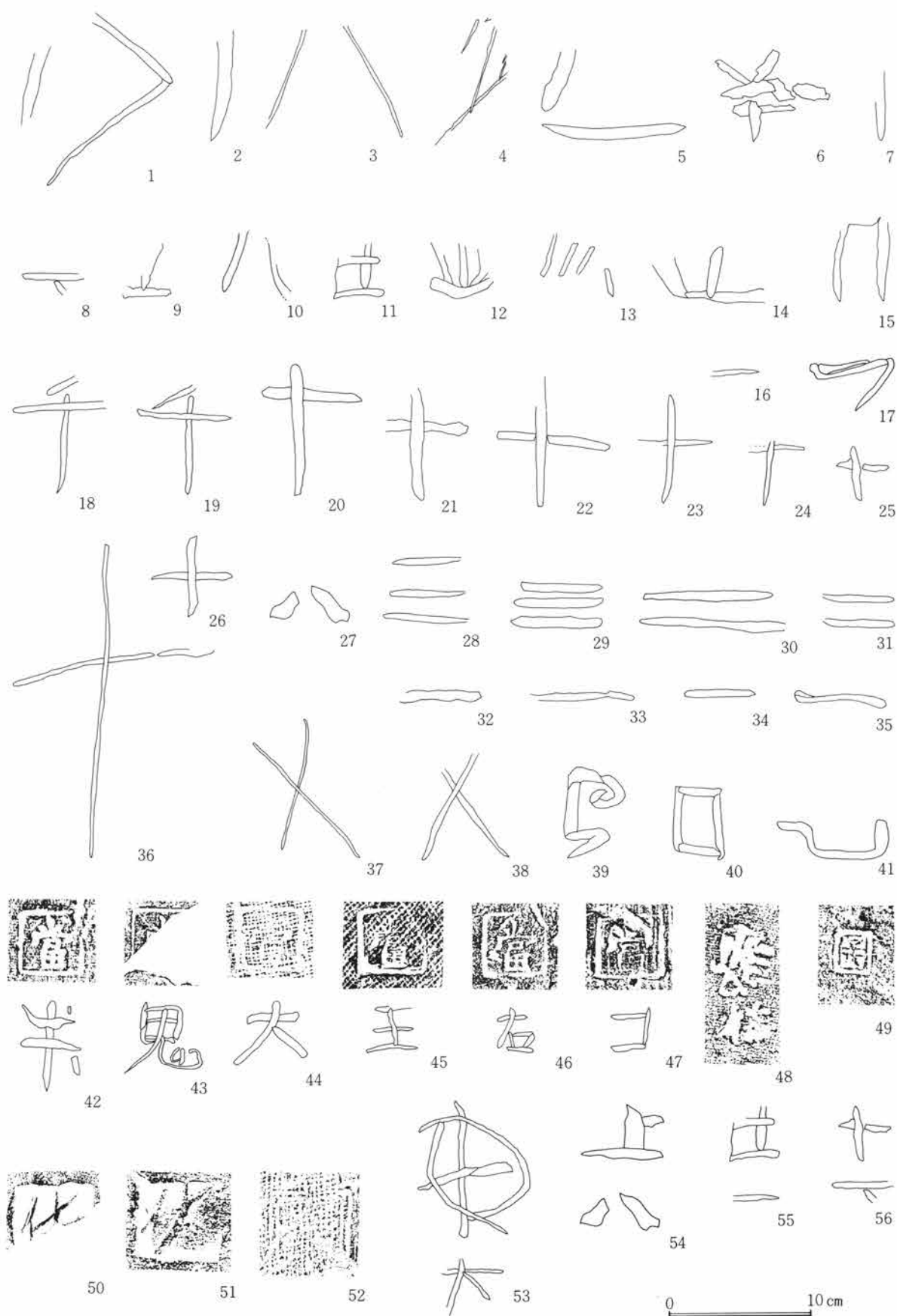
第592図 文字瓦集成(1)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要



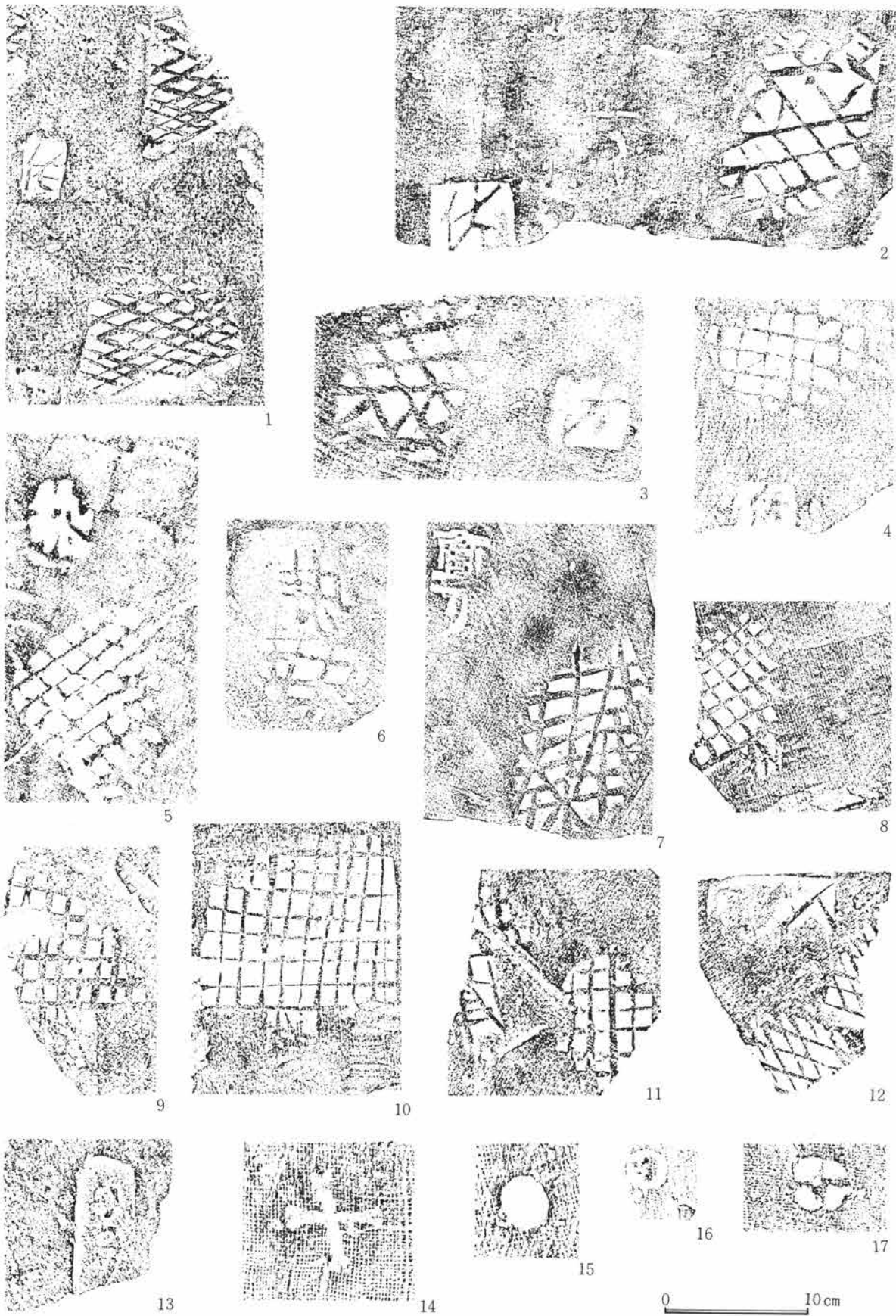
第593図 文字瓦集成(2)

第3章 検出された遺構・遺物

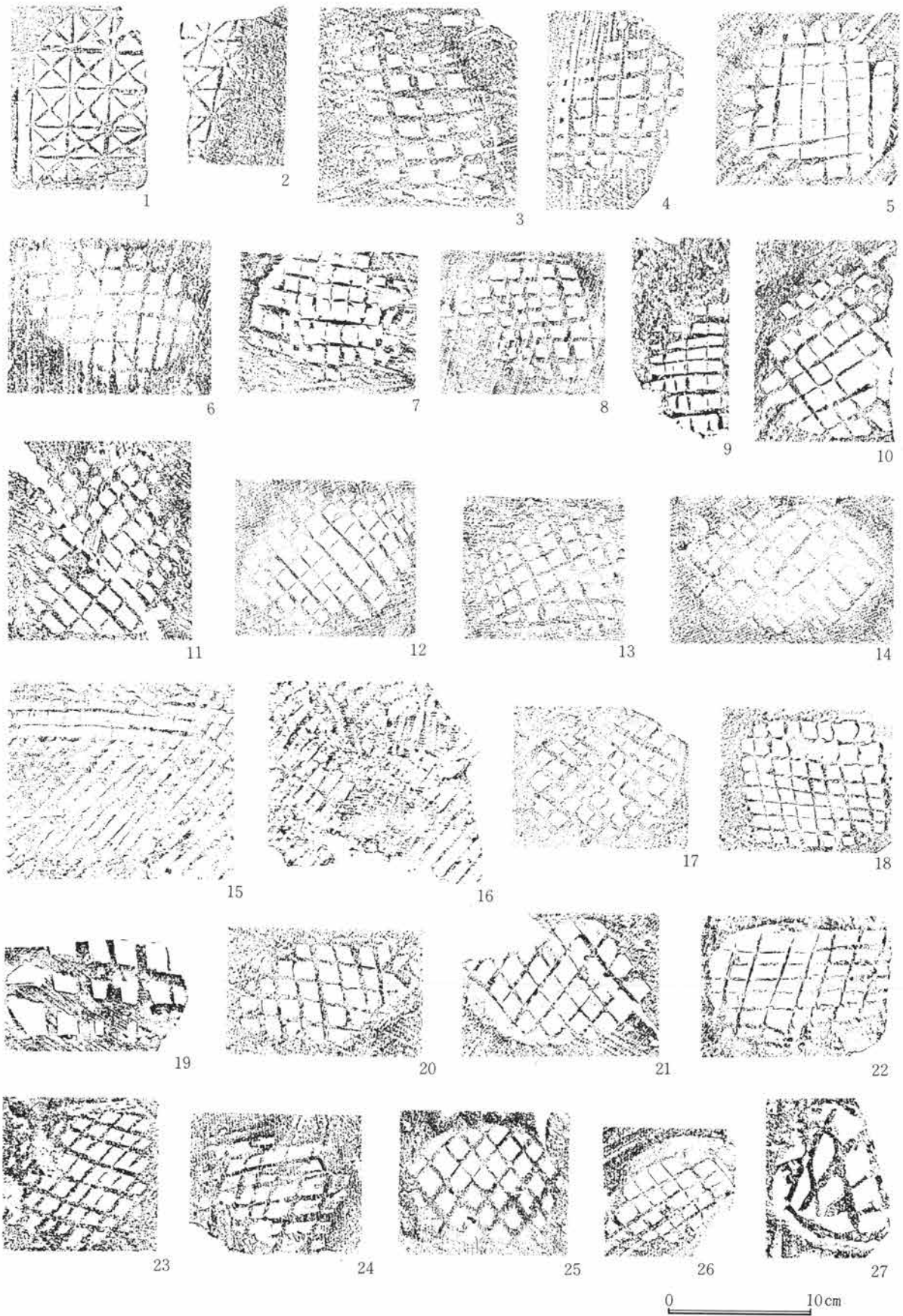


第594図 文字瓦集成(3)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

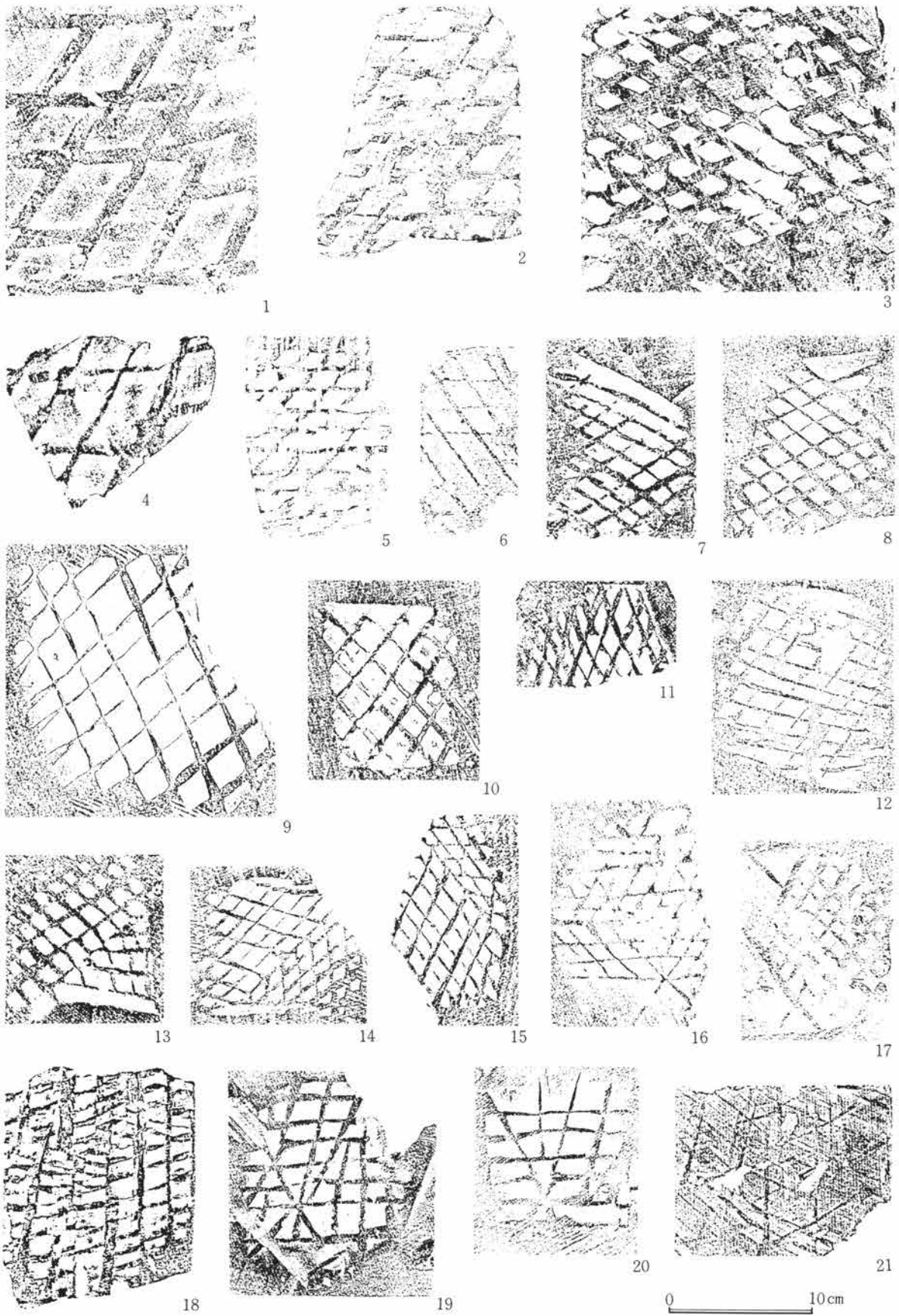


第595図 スタンプ等集成



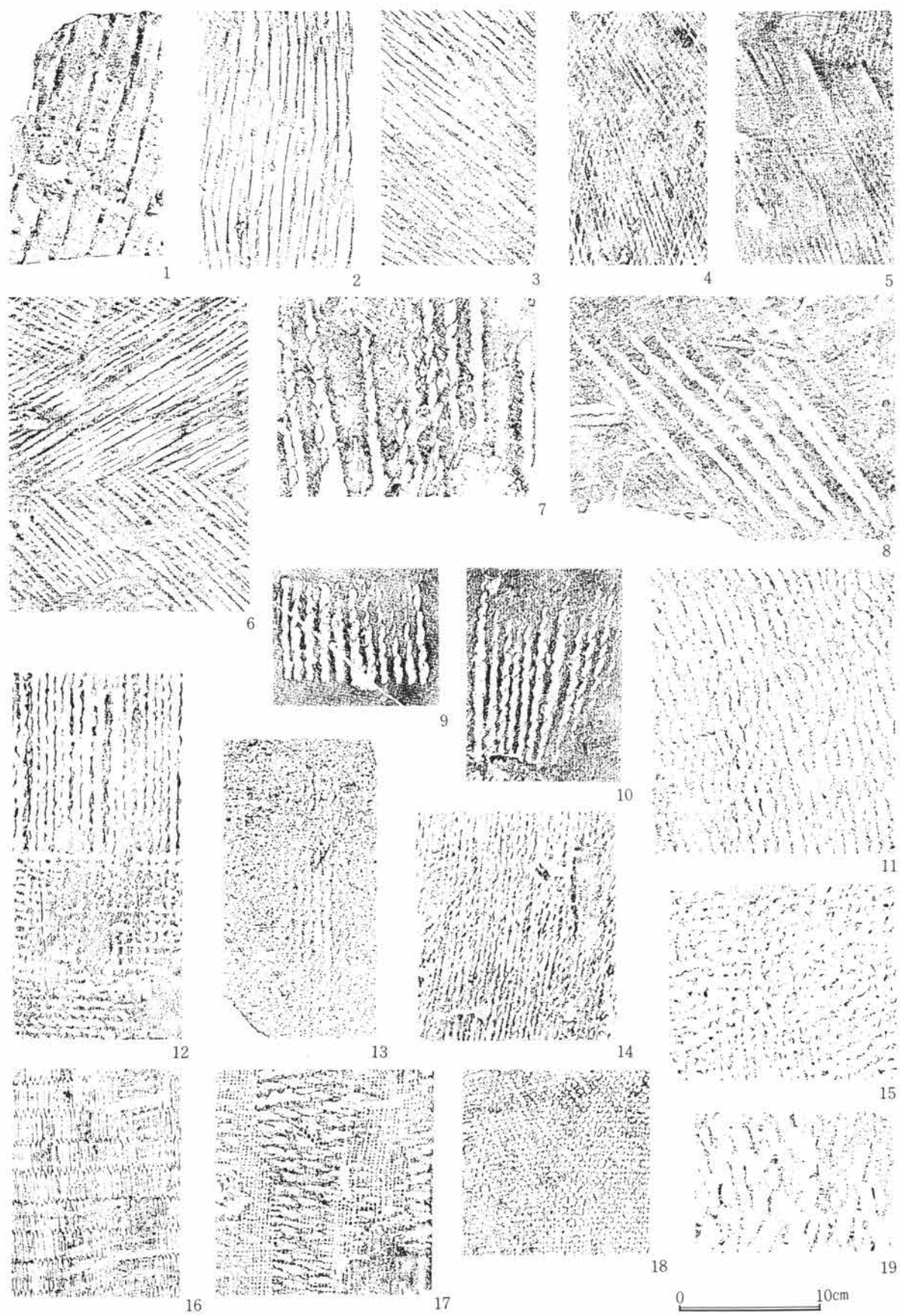
第596図 格子叩き集成(1)

第1節 古墳時代（中期）～平安時代の調査の概要

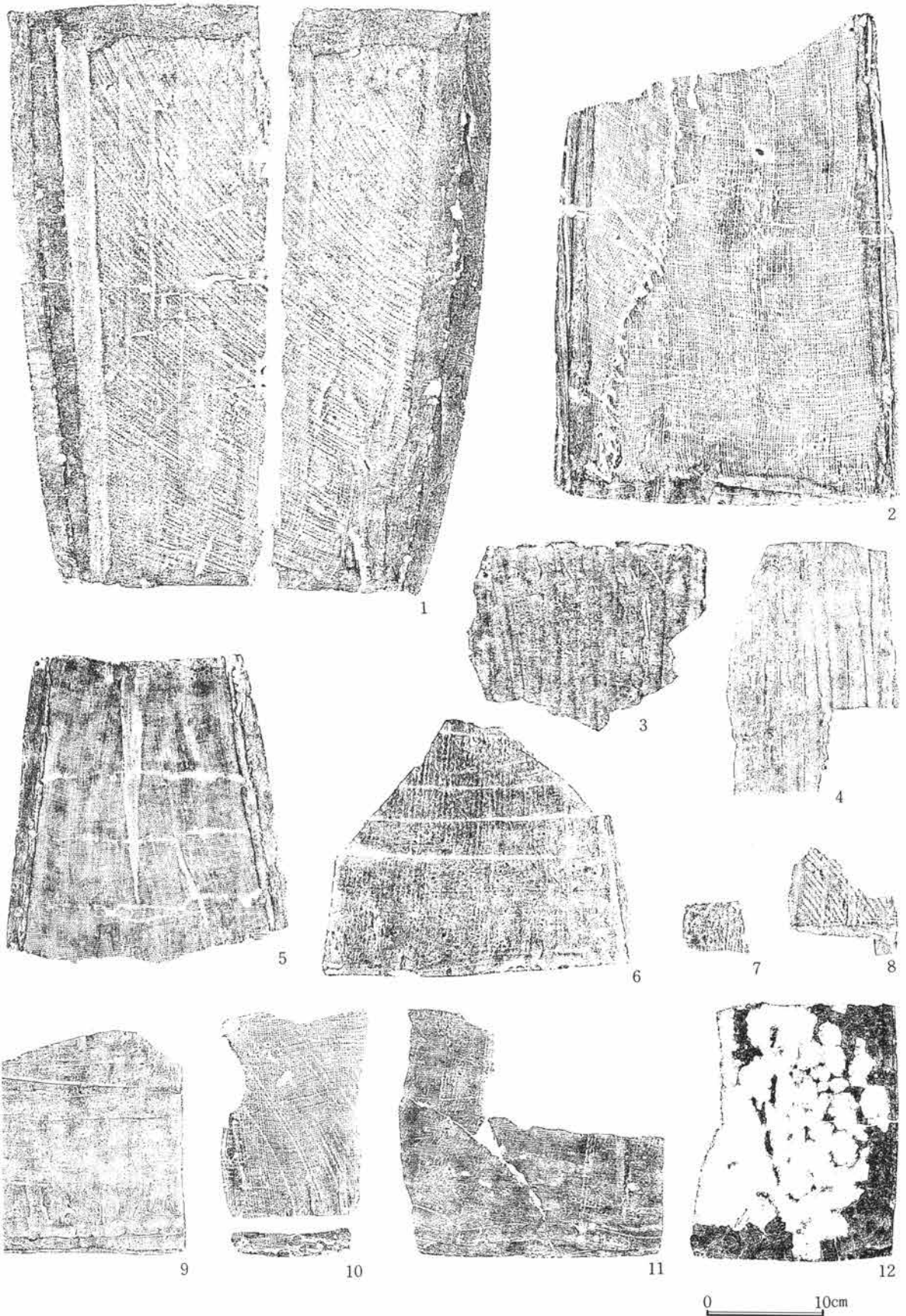


第597図 格子叩き集成(2)

第3章 検出された遺構・遺物



第598図 叩き集成



第599図 技法集成

第2節 鎌倉時代以降

当該年度の報告は、北側調査区内から検出された遺構・遺物等についての報告である。

既刊の第1分冊の報告は、調査区内を南北に分断する舗装道路以南のY区～D区までの間の遺構・遺物等について報告した。ただし、D区については、東西方向に走行する舗装道路によりその2割程が舗装道路の北側に存在している。同部で検出された遺構については、F区内で検出された遺構と直接的に係わるために第1分冊の報告から除外した。これにより、今次の報告のD区は、すなわち、舗装道路の北側に存在する部分を指し、この部分を含め北側調査区と呼称する。

北側調査区は、D区の一部とF・G・H・I・J区が該当する。これらの調査区内からは、溝状遺構・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・井戸跡・柵列・土坑・土壇墓等の遺構が検出されている。これらの種々の遺構は、便宜上設定した調査区毎に分布状態に特徴が認められる。(後述する調査区毎の概況を参照されたい。)そして、先年度発刊した報告の南側調査区の状態とは対称的といえる状態が看取された。なお、土壇墓については、先年度の報告に一括して掲載したので第1分冊を参照されたい。

検出した遺構の覆土は、基本土層のII層土を基に含有される他の混入物等により埋没している。この場合、各時代毎に種々の状態に質差が認められ、特に江戸時代以降の所産と判断されるものは、室町時代以前のものとは明確に分別できる。さらに、江戸時代以降でも、昭和35年に実施された耕地基盤整備以降の所産と判断されるものも同様に明確に分別できる。

基本土層のII層土は、発色が黒色を呈し、浅間山給源のB軽石を多量に混入する土壌である。この黒色を呈するII層土の下位層のIII層土は、II層土に比較して明るく、黒褐色か暗褐色を呈する色調である。この発色の差違は、平安時代末期から鎌倉時代以降の生成と考えられるII層土が、同時代頃から再び始まる寒冷化現象が係わって生成された土壌と考えられる。すなわち、黒色腐植土は、寒冷化した気候下での生成であり、II層土の生成は、黒色腐植土が、B軽石を何らかの要因により鋤き込んだか、黒色腐植土の生成と並行して鋤き込んだものと思われ、主たる要因として農耕が想起され、検出時の混入状態で認められた。

II層土は上述した生成要因が考えられ、鎌倉時代・室町時代の所産と考えられる覆土には、上述したII層土を主体とするため、発色は黒色を呈し、江戸時代以降の所産と考えられる遺構の覆土は、発色が濁っており、濁黒灰色～濁黒褐色を呈する。しかし、江戸時代以降の覆土は、地山のVII層土の状態により質差が生じている。これは、通有のローム土が分布する部分と、水成堆積により堆積した粘性を認めるローム土の分布する部分に構築する遺構でのものである。前者の場合は、全体的に粉っぽく軽い感があり、後者は、前者に比較し、全体的に粘性が認められるが、粘性土・粘質土としてのものではない。

上述した覆土の質差により、遺物の出土が無い遺構についてもおおむねの所産年代を推定することが出来るのである。

検出された遺構は、上述の覆土のいずれかが認められたが、大規模な遺構(溝状遺構)では、存続年代により、上述した全ての状態が看取されたものがある。これは、D区第8号溝状遺構、F区第1号溝状遺構、H区第11号溝状遺構等であり、鎌倉時代以降(室町時代以降)から、昭和35年迄の間その機能を有している。この特殊な場合以外のものについては、存続年代が長期に亙るものは認められなかった。

また、昨年度の報告において、土壇墓を一括で掲載した。しかし、この土壇墓以外でも人骨の出土があった。この人骨の所見については、昨年度の報文中に掲載したが、出土状態等についてはその一部が未報告で

あった。これは、当該年度の報告する遺構内からであったため、あえて未掲載にしたものである。これに該当するものは、G区第11号井戸跡・H区第2号井戸跡出土の人骨である。また、他にF区第3号溝の底面から、頭蓋骨が出土したが、状態が非常に悪かったため、所見等に得られていないものがある。これらの人骨の出土状況については、個別の遺構所見を参照されたい。

D区（舗装道路以北）の概要と検出した遺構について

今次の報告のD区については、前述したとおりである。このD区の舗装道路以北（以下D区と略す）の部分から検出された遺構は、溝状遺構3条（内2条は、F区の区名を冠した）、土坑19基である。溝状遺構のうち、D区を冠した第8号溝状遺構（以下D8溝と略す）以外は、F区にその主体が認められ、F区第1号溝状遺構（以下F1溝と略す）は、北はH区第11号溝状遺構（以下H11溝と略す）を接続（推定）し、H・F区を南下しD8溝と分岐する状態で接続している。

D区第8号溝状遺構

当溝は、前述したとおり、上位には現有の舗装道路が存在しており調査自体に制約があり、完全露呈には至らなかった。これにより、調査より得られた所見は多くはなかった。また、工事に伴う小規模の掘削が行なわれた部分については、立ち合い調査を実施し可能な範囲において所見を得ている。

調査区内で検出された部分は、溝の北側の立ち上がりと溝底の一部であり、この中には、F1溝と接続する部分（以下接続部と略す）が含まれている（第600図）。そして、調査区内で検出された部分は、約67m程である。

底面は西端部の部分と、F1溝との接続する部分で検出されているが、全体的に検出されたものでないため、全容の一部のものとしてしか把握されないが、西端部では皿状に幾らか窪んだ状態であり、接続部では、平坦な面は認められず、道路下に向い傾斜する状態であった。そして、両者の底面は非常に硬いものであった。この、底面に相当する部分の地山は、VII層土の下位にあたる土層であり、硬質な地山部分にも当たっているが、底面に認められた硬質部分は、人・車馬等の往来を想起するに足りるものであり、底面部は「道」としての機能を有していたことが推定され、A区第1号溝状遺構（以下A1溝と略す）、後述するF1溝等と同様のものであった。この底面は、現有の道路面との比高差は約2.6m程有り、A1溝同様に旧地表面より下がった部位に路面を構築している。

壁は、接続部を境として東西には差が認められる。接続部より以西では、壁の立ち上がりも直角に近い状態で立ち上がっており、この状態は接続部まで認められる。接続部より以东では、ほぼ45度程の角度を有して立ち上がっており、この立ち上がりは、調査区の東端まで続いている。また、この両者のうちの西側では、壁下に小規模の溝状の施設が設けられており、接続部ではF1溝に向い壁下を廻っている。なお、この小規模な溝状の施設は、深度は約10～20cm程を計り、底面の使用時には共存する状態で存在したことが断面所見から得られている。

接続部については第600図に図示した状態であるが、59-D-37グリッド付近の底面には、溝底面よりさらに約0.8m程掘り下げられている部分が認められた。ただ、この部分の覆土上面（溝底）は非常に硬く、標高位からもD8溝の溝底面として存在したものと推定される。この掘り込みについては、一部分のみが検出されているに過ぎず、分明的なことが示せないが、層位的には、D8溝の底面より古い存在である。この点からD8溝の構築以前の遺構としても考えられるが、D8溝の部分的な掘り込みとしての存在も否定出来るもので

第3章 検出された遺構・遺物

はない。この点では如何とも言い難いが、前者としての存在が考えられ、遺構種としては溝状の遺構が考えられる。

出土遺物は、古代から現代に至る種々の遺物が出土している。しかし、分層発掘を行なわなかったため、一括としての遺物でしか把握されなかった。ただ、奈良・平安時代の遺物については、周辺に当該期の遺構が多く存在するため、周辺部からの混入として考えられるが、鎌倉時代以降の遺物については、当遺跡の存在期間を示す遺物として考えられる。これは、後述するF1溝の出土遺物等からの所見によるもので、詳細はF1溝の所見を参照されたい。

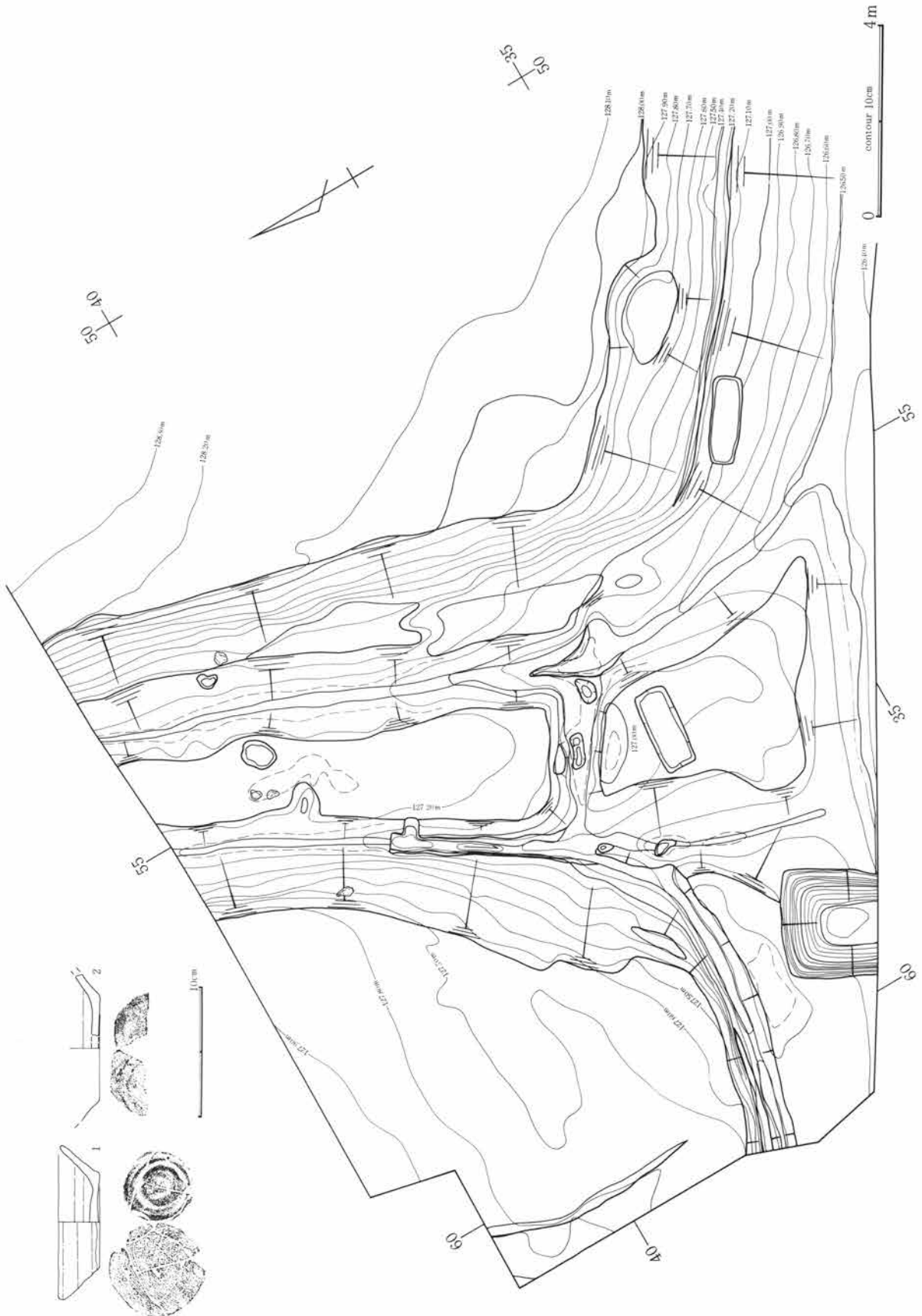
D8溝は上述のとおり状況であるが、この溝の幅員を想定すると約11mほどあり、H11溝の規模に相当するものであり、非常に大規模な遺構であることが明らかである。そして、この様な、大規模な遺構は、構築時及び、それ以降においても当該地域に於ける土地区画に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

このD8溝は、大規模な道としての存在であることが判断された。しかし、前年度に報告したA1溝は、道としての機能と溝としての機能を両有しての存在であることを推定した。当溝も構築上の特徴からA1溝と同様な性格が考えられ、道の他の機能に雨水の通水を考慮した溝としての存在が考えられる。この場合、底面の標高値が問題となるが、これを示す証左は未検出に終わった。しかし、台地の傾斜が推定上野国府方向に向い緩やかな傾斜が認められ、後述する推定走行方向が、この傾斜する地形に添って走行している点で通水は可能であったと判断される。また、現在も水路が道添いに付設されており、流水方向は元総社方向である。

当溝の東西延長部は、舗装道路下に存在する点で、この舗装道路の走行方向と密接な関係が示唆される。舗装道路については、既刊の第1分冊付図15・16に当溝の推定走行方向と共に図示した。この溝の推定走行部分には、現況から溝状の痕跡を示す部分が認められる。これは、路面と宅地面・耕作地面と1.2~0.6m程の比高差が認められ、東国分地区の集落の東端から尼寺の南西隅部周辺の間で顕著にその旧状を呈している。

当溝が通水を考慮しての存在であった場合、地形から、水流方向は蒼海城（推定国府城）の東端部が最終地と考えられる。これは、蒼海城北西部にあたり、同部には溝の痕跡を残しており、沼地状の部分に接した所で消滅している。この沼地状の部分は、蒼海城の多くの堀と接続しているが、現状の蒼海城は、諏訪氏・秋元氏の入部の折に改築されたと考えられる部分が多く遺存しているものと考えられ、当溝の構築頭初頃の蒼海城の実態が不分明な現在、如何とも言い難いが、当溝から流入する雨水は、蒼海城の堀に回されたものと考えられる。

また当溝は、道・通水の機能を有して構築されたと考えられるが、この構築頭初の面が埋没乃至埋填され、現在に至る間にも道として機能している。これは、地図等からも確認出来る。また、工事に伴う小規模の掘削時の所からは、路面下1m程までは、現代の遺物が認められ、水流を示すラミナー層の存在も認められた。そして、昭和35年に耕地基盤整備が実施された折、道の部分を埋めたとの話しも聞いている。さらに、興味のある話として、“三彩”と思われる壺の半分程の個体を、同道部に埋めたとの話しも聞いている。位置は尼寺の西側の部分であったそうである。



第600図 D区第8号・F区第1号溝状遺構〇〇部分（D区内分）・D8溝出土遺物実測図

F区の概要

F区は、本来であるならばE区の北側に存在する筈であるが、調査段階の不手際からE区を抜かしてしまい、F区が南接する調査区はD区である。F区内で検出された遺構のうち幾つかのものは、このD区・F区の両区にまたがり位置する遺構がある。

当F区は、昭和57年度に本線敷分・側道分の両者を併せて調査実施し、調査時に存在していた道・水路部分は、翌昭和58年度に調査実施した。また、この道・水路以外の部分の地目は、一部に宅地が存在していたが大半が耕作地であった。この地目の差が遺構に及ぼした影響は大きく、概して、耕作地の部分は道・水路部分の遺構に比較し残存が不良である。これは耕作による攪乱が深くまで達したことが原因と考えられ、道・水路部分は、昭和35年に実施された耕地基盤整備以降の攪乱が無かったことが要因と考えられる。これにより、道・水路下ではピット等の小遺構が比較的多く検出されており、耕作地の部分では少数しか検出されなかった。

当区内から検出された遺構は、溝状遺構6条・竪穴状遺構2基・掘立柱建物跡10棟・井戸跡2基・土坑23基・土壇墓10基・ピット等である。これらの遺構のうち溝状遺構については、G区内で検出された耕作に伴う溝状遺構とは確実に異なる一群であり、また、大規模なものが主体である。これらの溝状遺構は単に溝としての機能を有したものと、溝以外に道としてその機能を有し存在したのものがある。そして、これらの溝状遺構は、新旧関係を切り合いにより確認されるものと、構築にあたっては相互間の規整により構築されたと判断されるものがある。

上述した両区にまたがる遺構で、特に顕著なものにF区第1号溝状遺構がある。この溝状遺構は、D区からG区にまたがり、D区内では舗装道路下に東西に接続し、「T」の字状に接続する部分が北側に延びている。この舗装道路下に存在する部分はD区第8号溝状遺構（以下D8溝と略す）として別名を冠した。F区第1号溝状遺構（以下F1溝と略す）としたものは、このD8溝と接する部分からG区内で調査区外の東側へ延びる部分までとした。そして、このF1溝の北端は、H区第11号溝状遺構としたものと調査区より東側の部分で接続すると考えられる。

溝状遺構については、上述した状況が看取されたが、他の遺構で特に竪穴状遺構・掘立柱建物跡については、溝状遺構の制約等により構築されているものが存在している。この溝状遺構・竪穴状遺構・掘立柱建物跡、さらに柵列を加えた部分は、全体に方形の区画を成す状態に認められる。この部分に該当するものが第3号・第8号溝状遺構であり、第2号掘立柱建物跡・第1号柵列等により看取される。そして、この区画を成す部分は館跡としての存在が想起される。

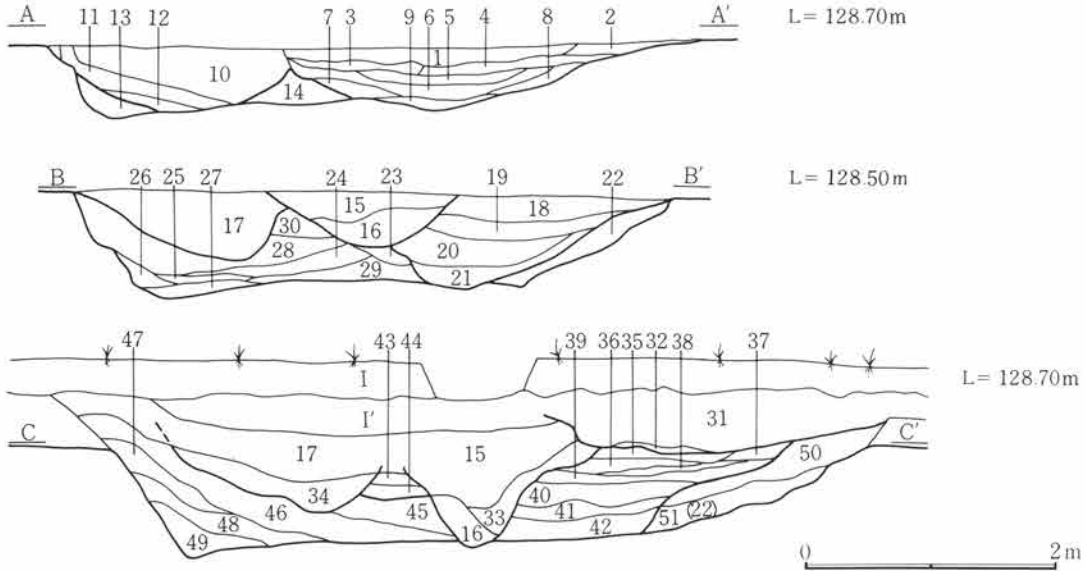
この第3号・第8号溝状遺構は、最大規模のF1溝の走行方向に対し、平行か直角する走行を示しており、また、第9号溝状遺構も平行する状態である。これらの状況から上述した遺構は、同時存続した可能性が大きく、後述する他の遺構のうちにもこの方形区画を成す一群と共存した可能性が考えられるものが存在している。この共存したと考えられる遺構に、第51号址・第54号址、第2号・第3号井戸跡、第15号・第16号・第105号・第106号土坑等が考えられる。また、調査後本整理事業を進める間にピット群の中で、配列等から数棟に及ぶ掘立柱建物跡の存在が考えられた。これらの建物跡は、数棟を除き、主軸方向が方形区画と平行乃至直交しているが、方形区画そのものと重複関係が認められ、相互間の何らかの関係が示唆される。

上述したこれらの個別遺構の所見については、後述するので、総括的なまとめは、この所見を記述した後に記したい。

F区第1号溝状遺構

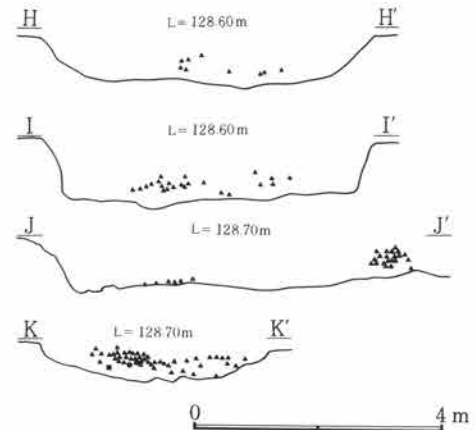
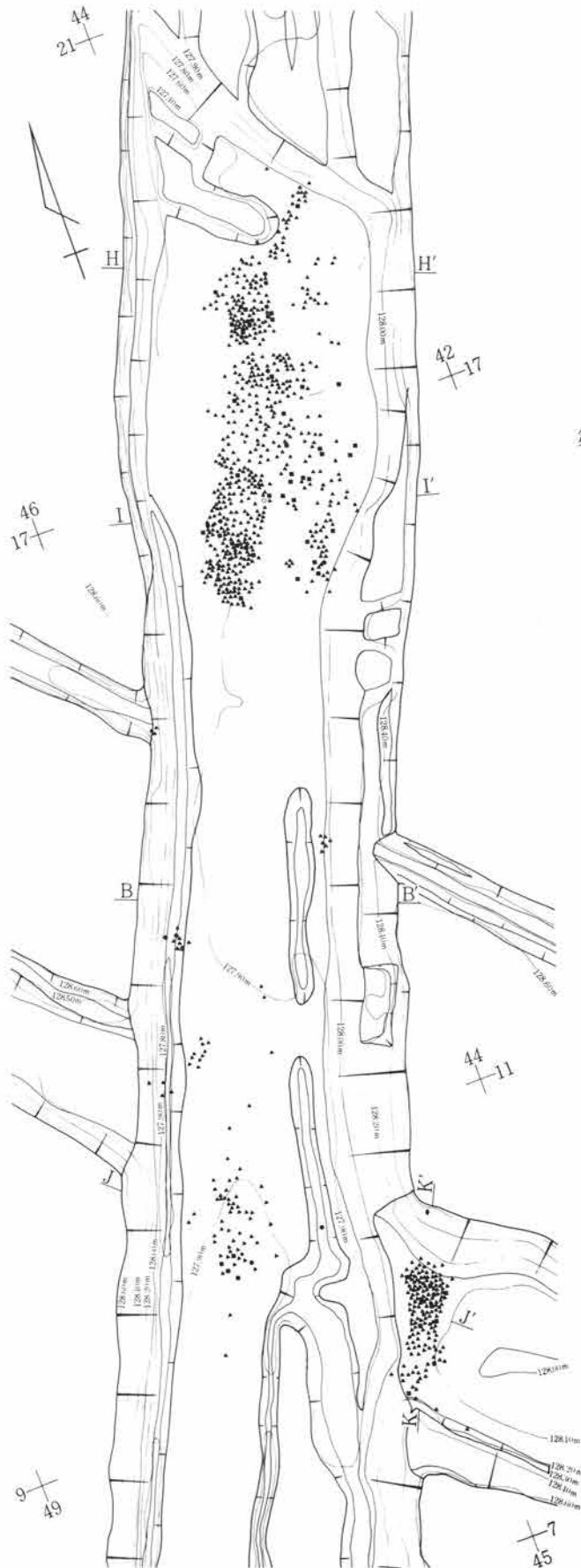
当F区第1号溝状遺構（以下F1溝と略す）は、前述してきたとおり、周辺遺跡との共存が判断される。

当溝は、D・F・G区内で検出され、検出長は約150mであり、幅は4.6~6.7m程である。断面形状は部分的に異なるが、基本形状は箱堀と考えられる。しかし、検出した当溝の全貌は数時期にわたり使用された痕



層 序	
III期	1. 黒色土-B軽石通有・微粒状C軽石含有硬質土。
II期	2. // - // ・粒状VII層土含有硬質土。
II期	3. // - // ・塊状VII層土混入硬質土。
II期	4. // - // ・塊状・粒状VII層土多量混入硬質土。
II期	5. // - // ・細粒礫含有硬質土。
II期	6. // - // ・粗粒状C軽石・細粒礫混入。
II期	7. 濁黒灰色土-B軽石通有混入。
II期	8. 7同質。
II期	9. 黒褐色土-B軽石若干混入粘質土。溝底直上に砂層・砂礫が層厚2~3cmで堆積する（水成堆積）。
IV期	10. 黒色土-B軽石通有・粒状C軽石含有・砂礫混入・塊状VII層土斑状混入。
II期	11. // -B軽石通有・細粒状C軽石含有。
II期	12. // - // ・ // 微量含有。
I期	13. // - // ・塊状VII層土（壁体崩壊土）混入・下層に層厚2~3cmで砂層が認められる（水成堆積）。
II期	14. // -11層近質・下層部に粘性が認められる。
V期	15. // -B軽石通有・粒状C軽石・粒状VII層土混入。
II期	16. // - // ・ // 多量。
IV期	17. // - // ・ // ・塊状VII層土斑状混入。
III期	18. // - // ・ // 若干混入。
II期	19. // - // ・ // 微量混入。
II期	20. // - // ・ // ・粒状VII層土多量混入。
II期	21. 9同質。
I期	22. 黒色土-B軽石通有・粒状C軽石若干・塊状VII層土含有（壁体崩壊土）。
II期	23. 濁黒褐色土-B軽石通有・細粒状C軽石若干混入硬質土。
I期	24. 黒色土-B軽石通有・粗大塊状VII層土含有砂質土。
II期	25. // - // ・砂質味強・発色が濁る。
I期	26. 13同質。
II期	27. 暗濁灰色土-I砂層（水成堆積・13層土中の最下層部に認められた砂層と同質である。13層中には薄い層厚であったが27層は層として分離される。）
II期	28. 黒色土-B軽石通有・粒状C軽石・塊状VII層土・粒状VII層土・粒状炭化物混入。
II期	29. 黒色土-11・14近質・全体に粘性が認められ、最下部の溝底直上部に砂層が層厚2cm程で認められる。
II期	30. // -B軽石通有・粗大塊状VII層土混入硬質土。
VI期	31. 濁黒褐色土-I'層近質（昭和35年時道路部）。
II期	32. // -31層土の硬化部分。砂質層。
V期	33. 黒色土-16層近質・塊状VII層土含有。
IV期	34. // -17層近質・塊状VII層土が含有程度。
III期	35. // -1近質。
II期	36. // -3近質。
II期	37. // -5近質。
II期	38. // -3近質。
II期	39. // -4近質。
II期	40. // -4近質・硬化が少ない。
II期	41. // -6近質。
II期	42. // -9近質。
II期	43. 濁黒褐色土-B軽石通有・細粒状C軽石混入硬質土。
II期	44. // -23同質。
I期	45. 黒色土-30近質。
II期	46. // -28同質。
I期	47. 黒色土-25近質。
II期	48. // -26同質。
II期	49. // -13同質。
II期	50. // -22近質・塊状VII層土若干含有。

第601図 F区第1号溝状遺構土層断面図



第602図 F区第1号溝状遺構遺物出土状況図(1)

跡が土層断面の所見から得られている点で、全体を図示したものは、単時期での状態ではない。この点から、推定される各時期での状態を考慮せねばならないが、平面的に検出することはでき得なかった。

溝底面は従前において記したA1溝と同様であり、東西両壁下には溝状の施設が認められる。これは、西側壁直下では、D8溝と接続する部分からF区内中央部までは幅20cm程の細い溝で、深度は10~20cm程である。これより以北では、8m程の間を置き、幅1.2~1.5m程で深さ10cm程の状態で開催区外に延びている。東壁側では、壁直下に存在する部分と壁下より内側に入った部分に認められるものがある。しかし、東壁側では、全体に認められるものではなく、細い溝で壁直下に存在する部分は、D8溝との接続部周辺で認められ、壁下より内側のものは、検出された当溝の中央部周辺でのみ認められる。そして、浅い状態の部分は西側で検出された部分と同じく検出された。この2者の溝のうち、浅く幅が広い方の底面は非常に硬く締まっていたが、細い方の底面には特に硬化した部分は認められなかった。しかし、細い溝が検出されている部分の底面は全体的に硬化しており、両者の溝には性格の差違が考えられる。これ



第603図 F区第1号溝状遺構遺物出土状況図(2)

は、細い溝が排水等を目的としたことと考えられ、浅い幅広の溝は、車馬等の往来により沈下した「轍」と考えられる。

土層断面からは、数時期に互る存在を示す状態が看取された。前述したように、当溝は、道を主とした機能が考えられる点から、覆土中では、硬化した面が道としての機能を有した面であることが考えられる。そして、土層断面からは6時期に分別される覆土で認められた。この6時期にわたる段階での覆土に対して、層序の説明に、I～VI期を冠した。この時期の区分は底面側より付し、I期が最古のもので、VI期が最新のものであり、覆土の特徴から昭和35年迄に存在した道の部分と判断される。

このI～VI期に互る道は、土層断面が示すように、埋没したものを掘り直して再構築していることが認められる。

出土遺物は、古代から現代に至る遺物が出土している。これらのうち、I期の覆土に伴って出土したものは、土師質土器皿・軟質陶器・陶磁器・墓石・板碑

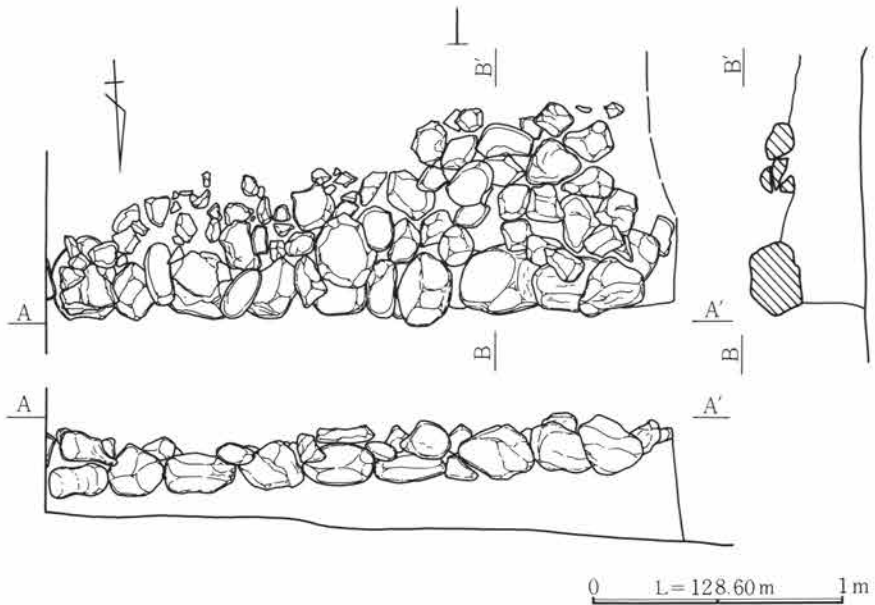
等がある。また、II期以降の覆土内からは、I期の遺物を若干含み、上層に近世遺物を含んでいた。III期以降の覆土には近世以降の遺物を主体としている。

出土した遺物は、その出土状態から3者が認められる。これは、覆土内にまばらな状態で混入するもの、溝底面に集中し作為性をもって置いたと思われるものと、覆土内に集中して存在する部分がある。前者は覆土の全体で認められ、中者は検出された溝の中央やや北寄りの部分で検出され、後者は北側で認められる。この覆土内で集中する部分は状態から2者の存在があり、土坑状の上位面からの掘り込みにより、中位に存在すると思われるものと、石垣状に石組みとして存在するものとに分けられる。これらの状態を図示したも

第3章 検出された遺構・遺物

のが、第602・603図である。さらに石組み状のものは第604図に示した。

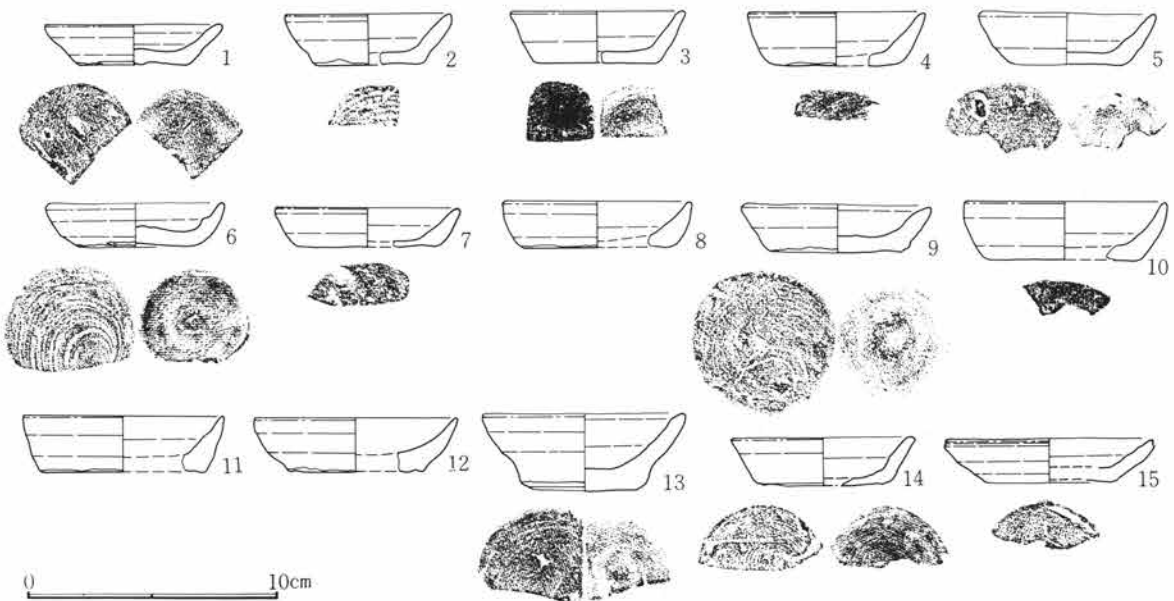
I・II期の覆土内から出土した土師質土器は、前年度の報文中で記した当該土器の分類では、第1期の2・7類を主体とし、5類が若干含まれている。この土師質土器の示す年代は、2・7類が14世紀後半代であり、5類が15世紀前半代の所産年代が考えられる。



第604図 F区第1号溝状遺構内積石遺構実測図

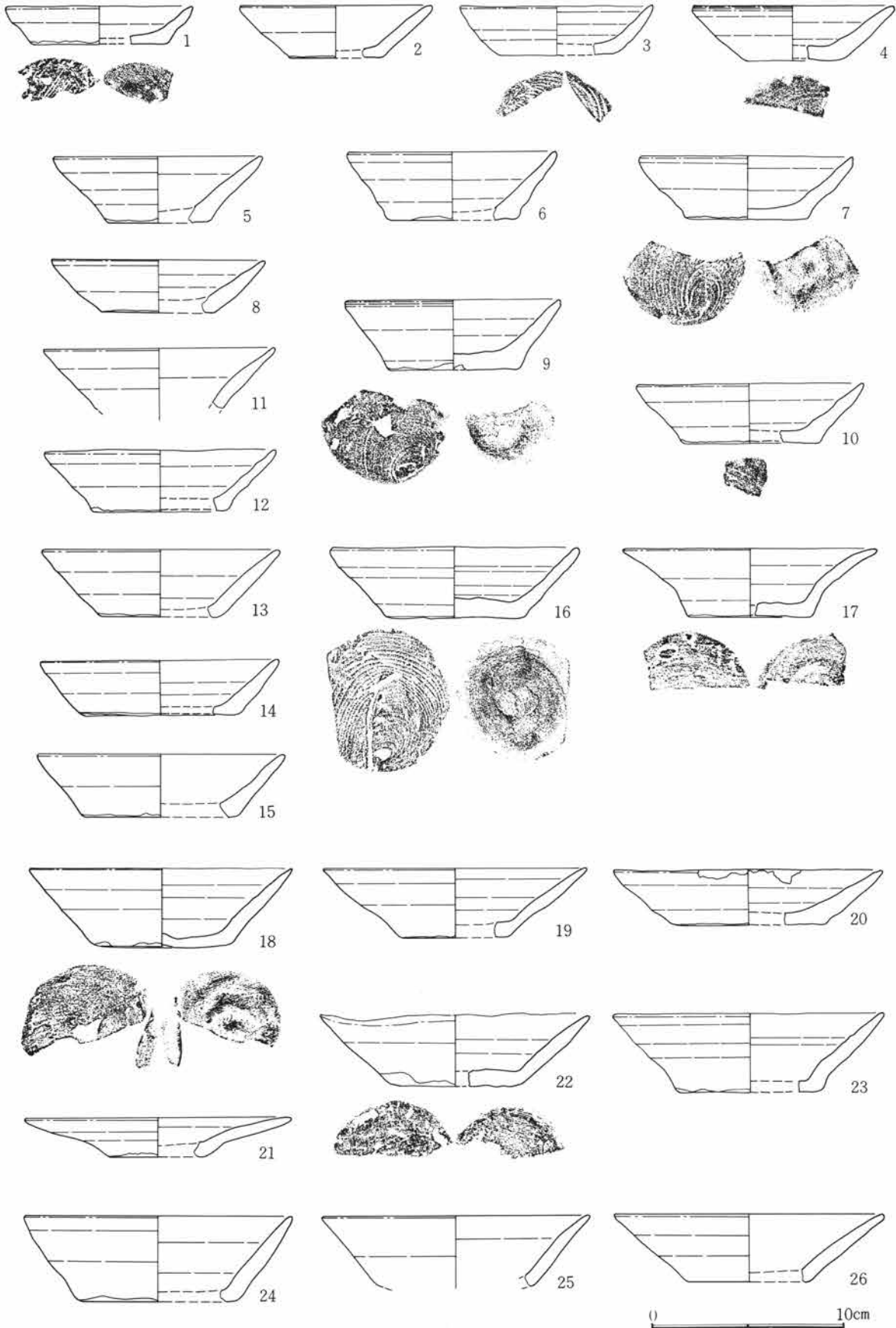
た。これにより、当溝の第I期の埋没は、少なくとも14世紀末から15世紀初頭にあったものと考えられる。そして、当溝の開削が、14世紀後半代の時期にあったことが推定される。これにより、当D8溝と共存する点で、D8溝の開削の上限が14世紀後半代の段階にあったことが確認できる。しかし、D8溝が、国分僧寺の北縁から尼寺に向い蒼海城（国府）に向う点で、前代より3者を通る道としての存在があったことが考えられる。しかし、これを示す証左は何ら検出されていない点では推定の域を脱せないが、D8溝の規模の点で、主要な道として存在していたことが考えられ、当該期においても、蒼海城と国府（現在の東国分地区）を結ぶ点で、東国府地区自体も主要な存在であった点が指摘出来る。すなわち、前年度の報文中、当遺跡は蒼海城の長尾氏との関連が強い点を指摘しており、これにより、東国分にも長尾氏の同族乃至長尾氏内部の有力氏族が居住したことが考えられる。

また、覆土内に集中して遺物が存在する部分は、少なくともIII期以降の存在として考えられる。

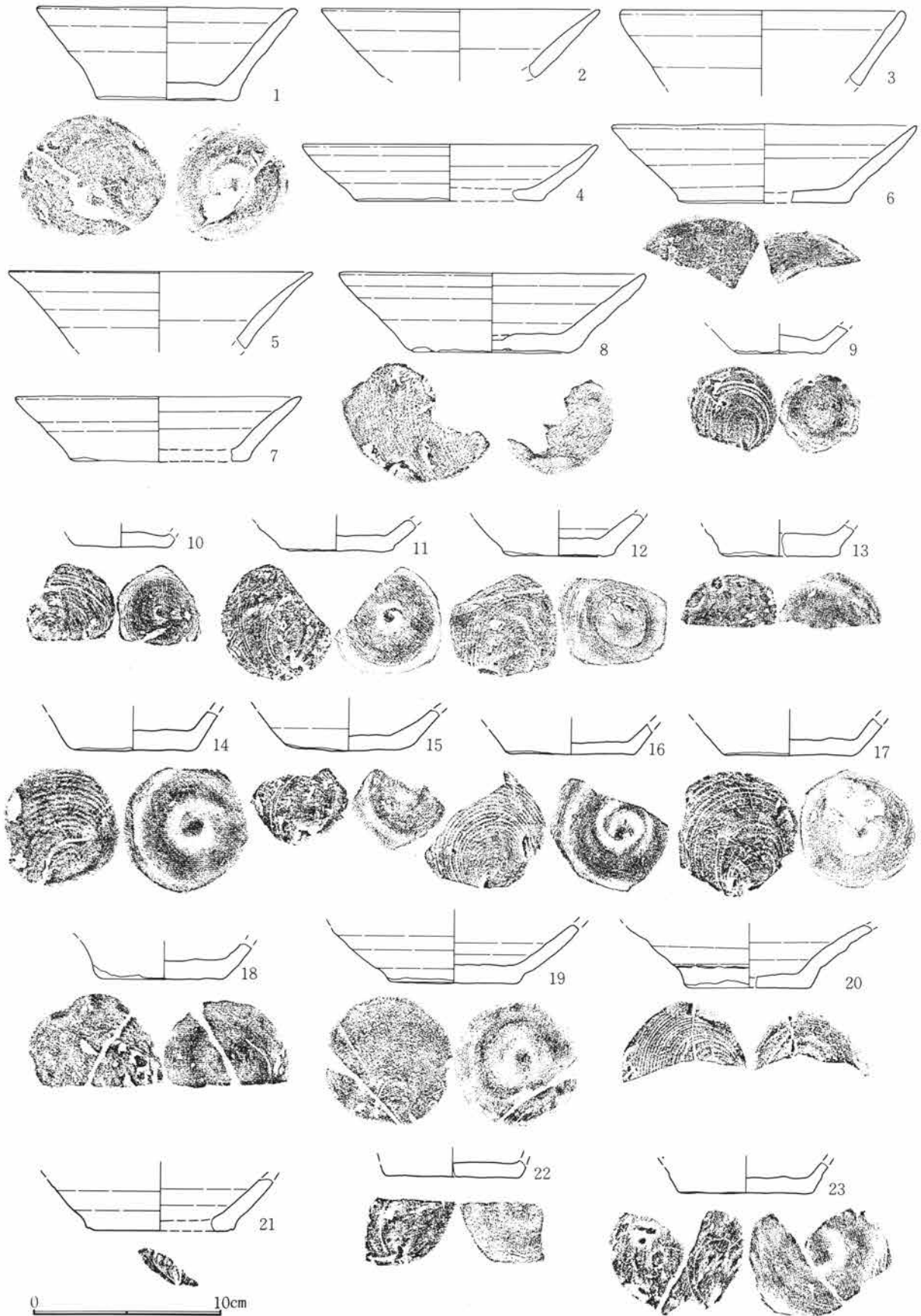


第605図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(1)

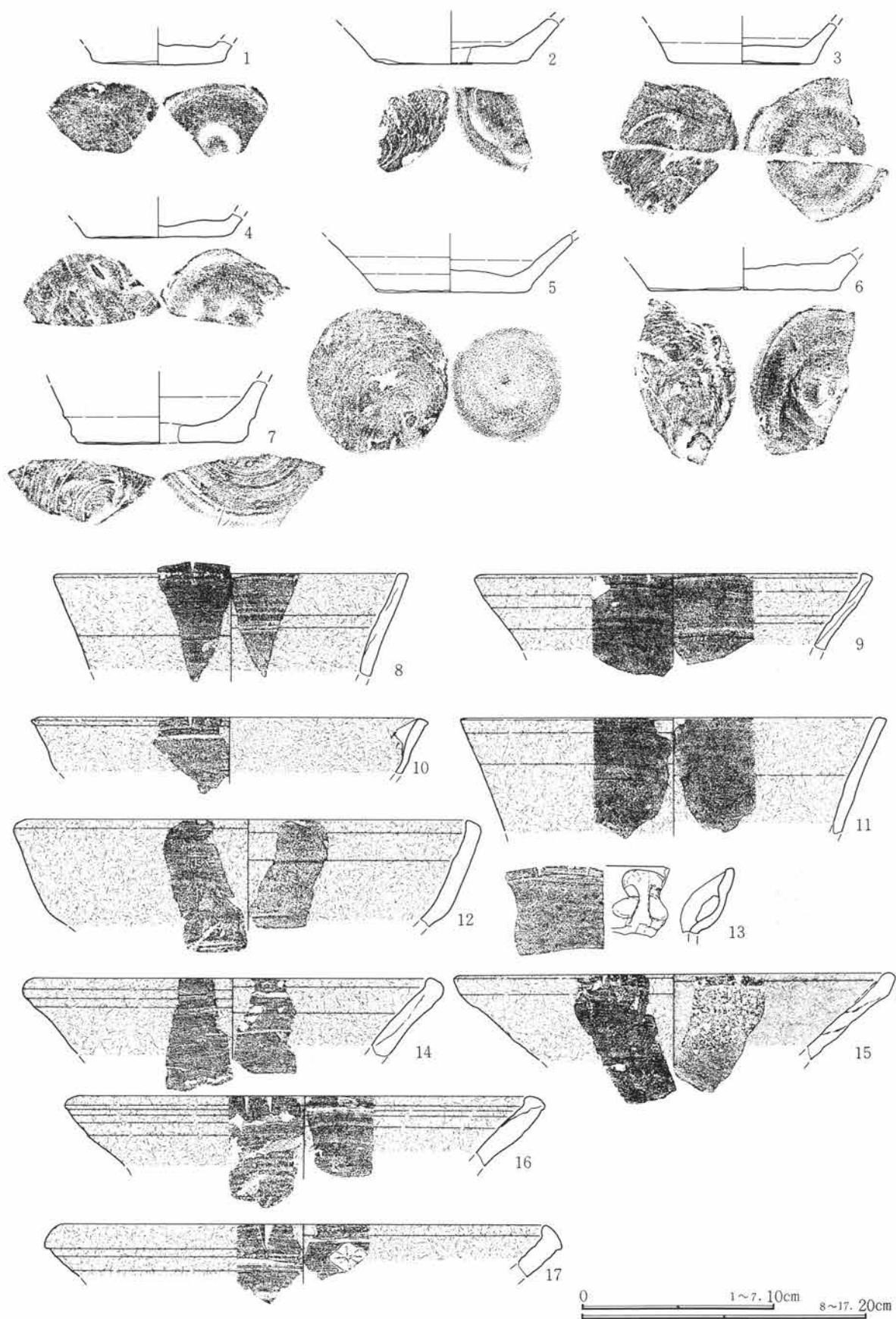
第2節 鎌倉時代以降



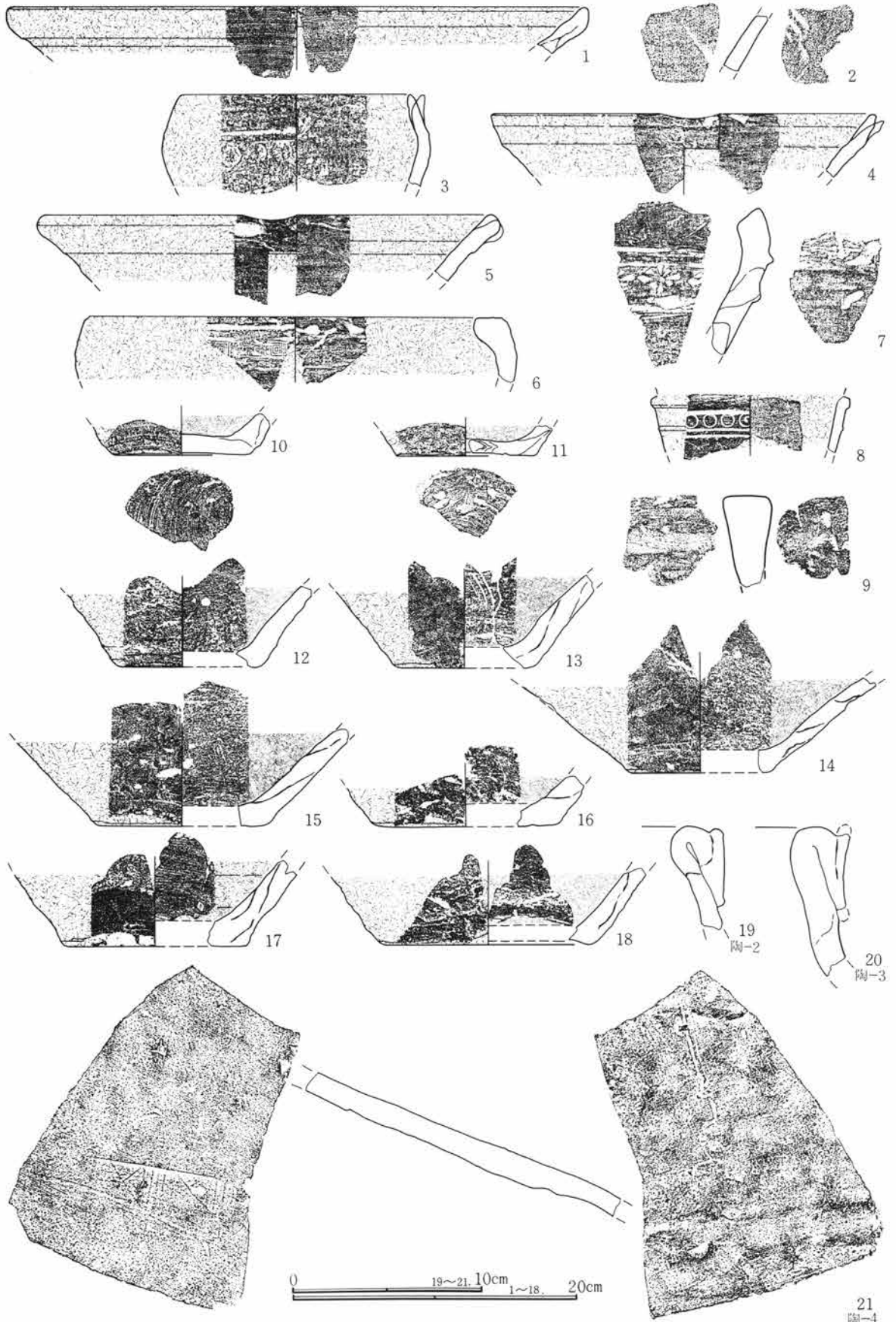
第606図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(2)



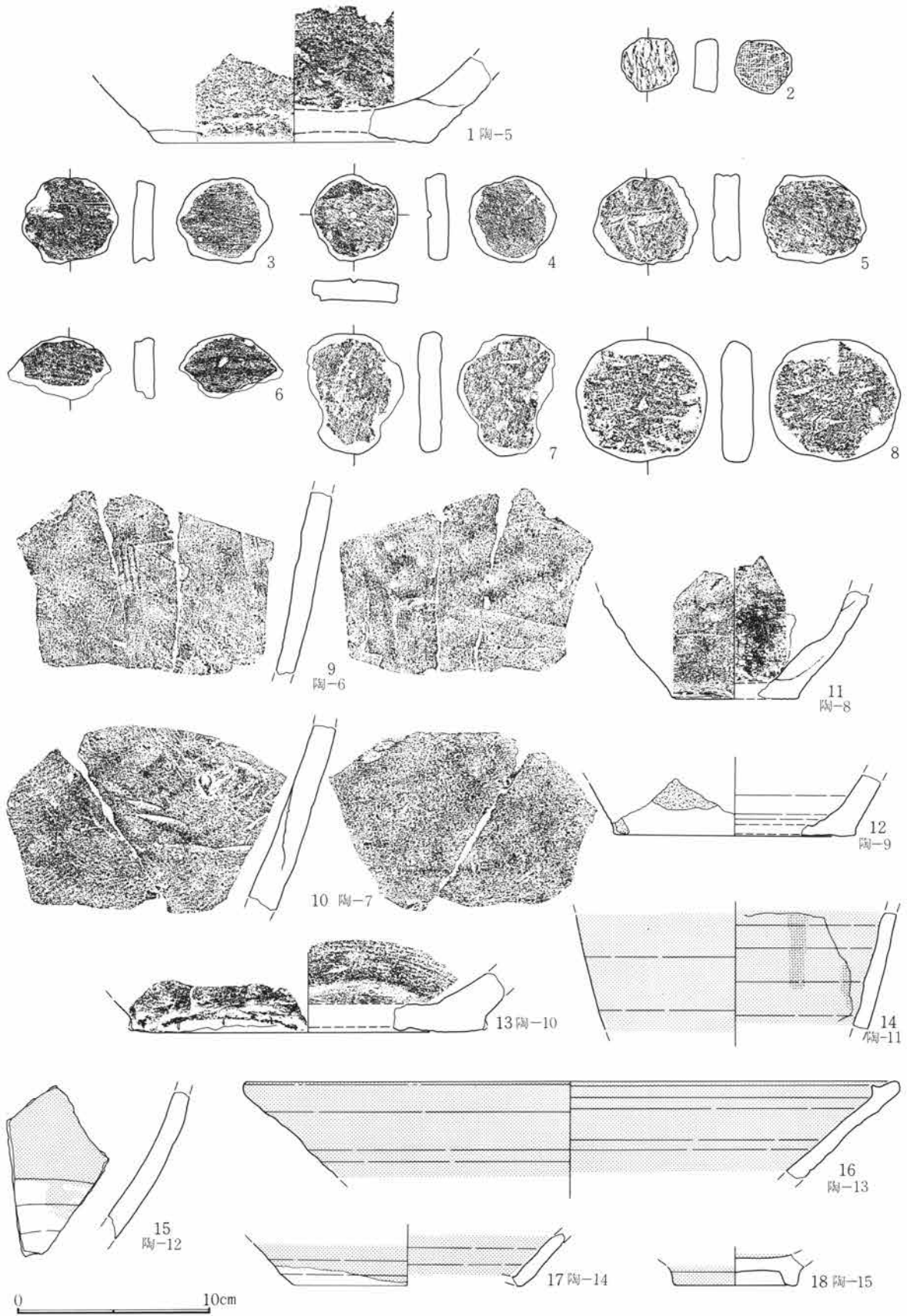
第607図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(3)



第608図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(4)

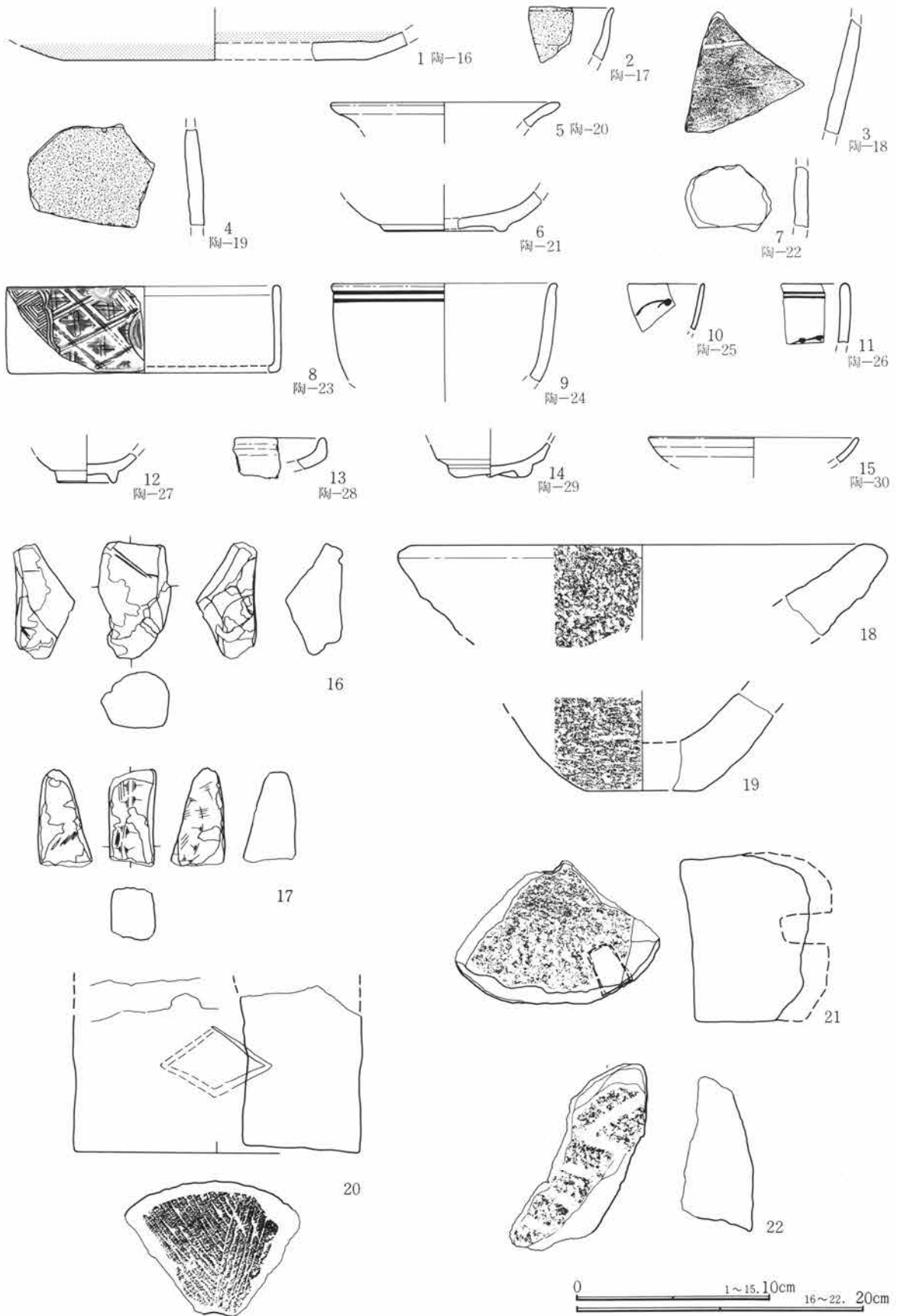


第609図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(5)

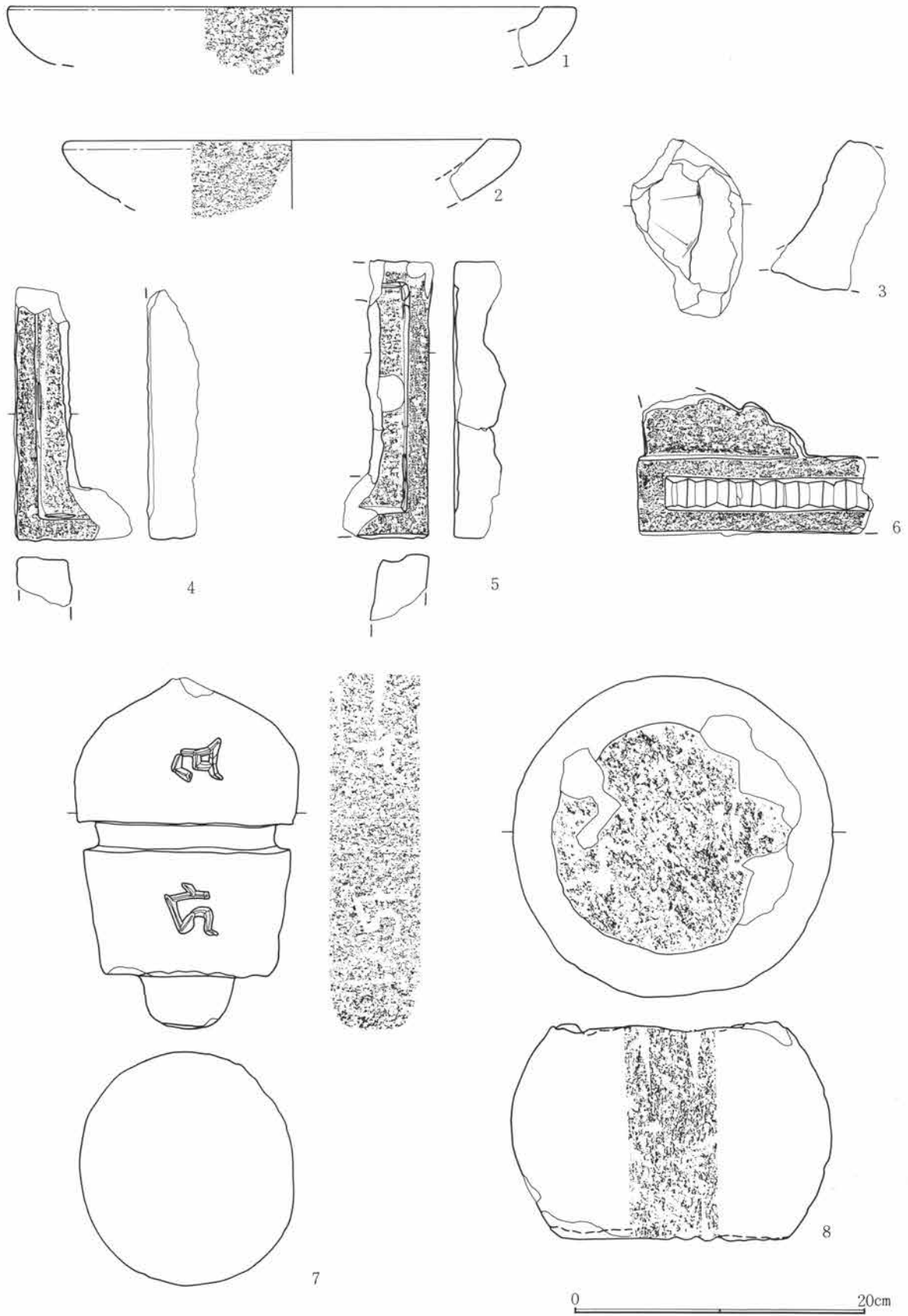


第610図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(6)

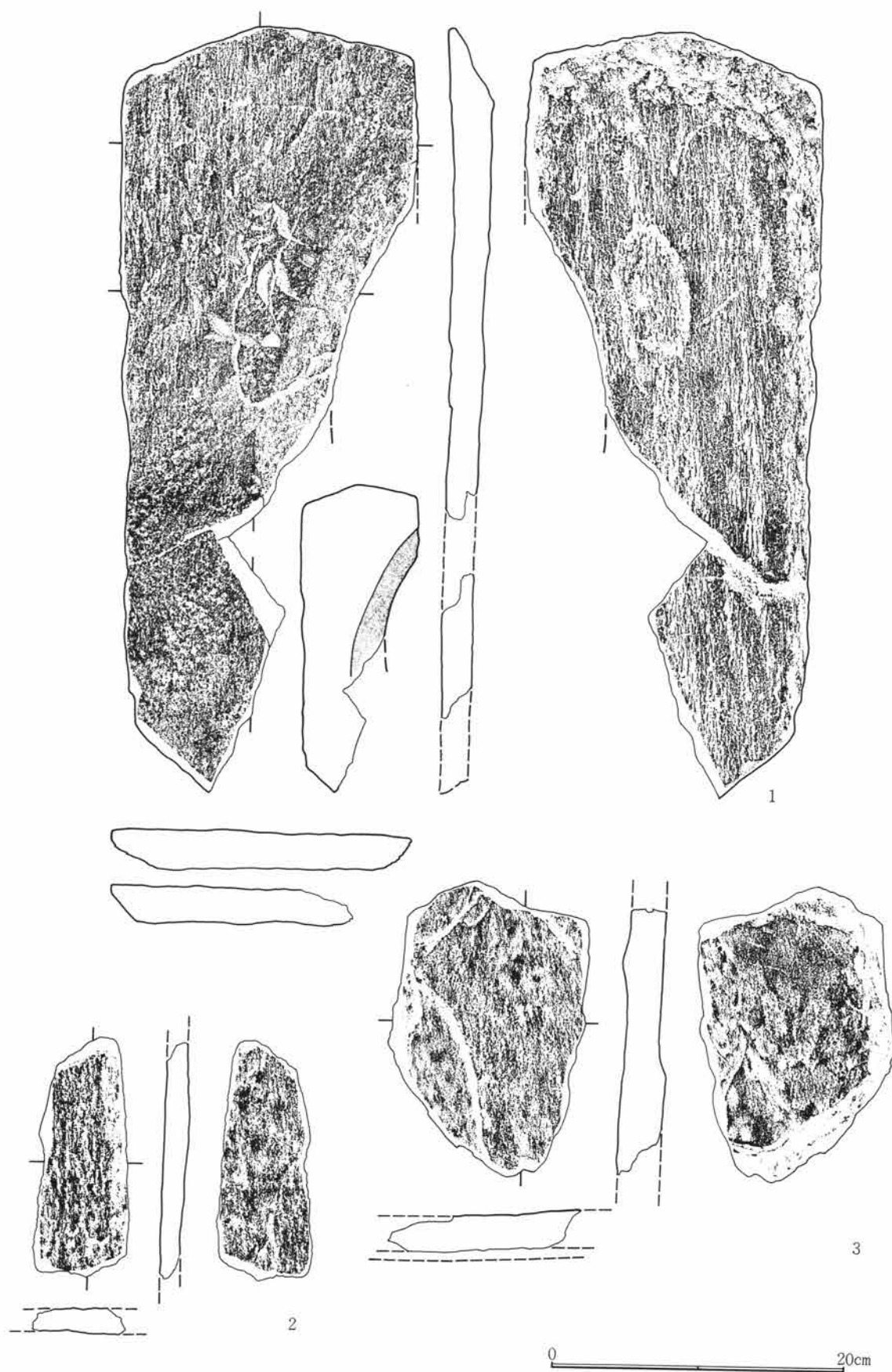
第3章 検出された遺構・遺物



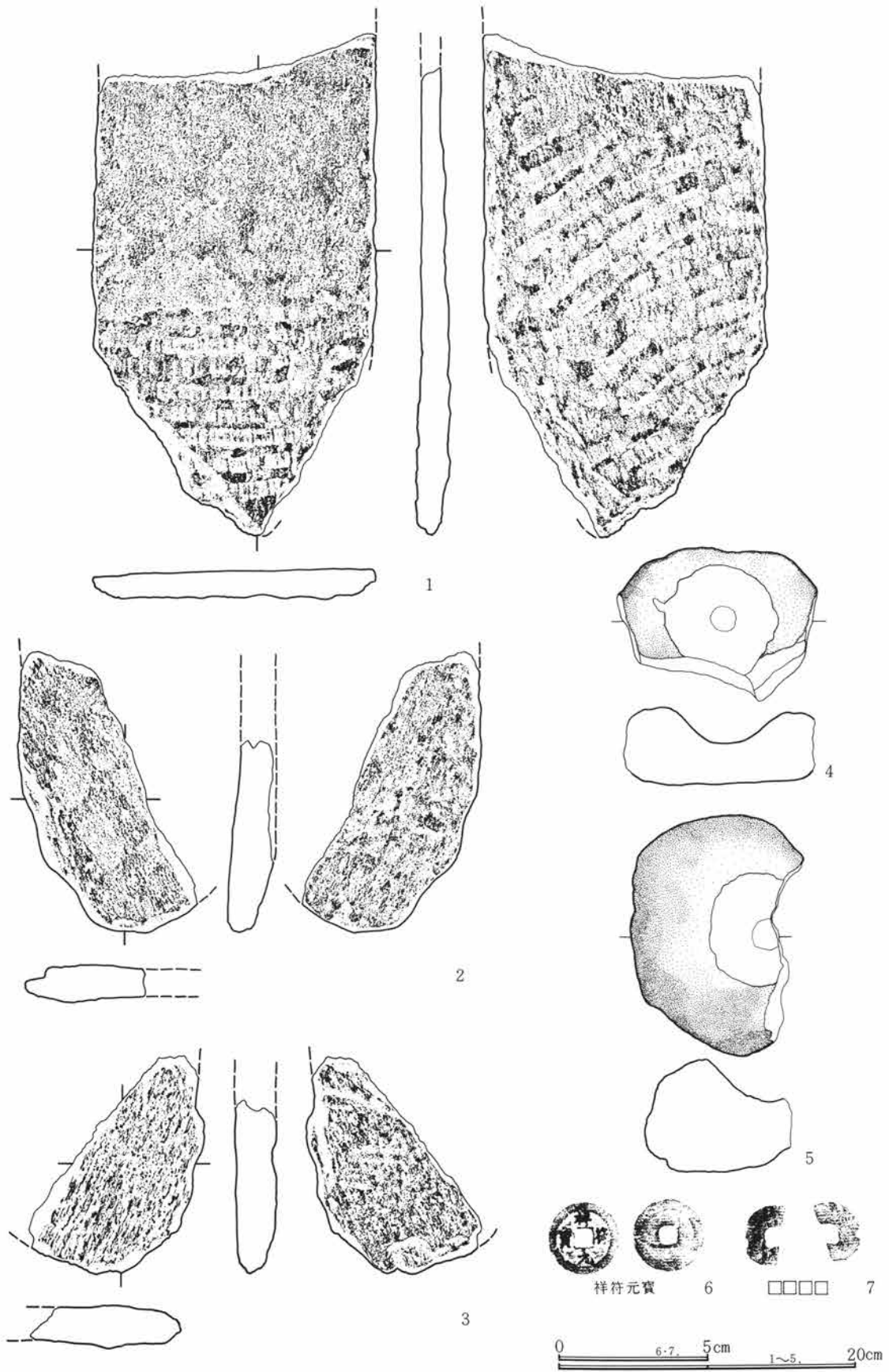
第611図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(7)



第612図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(8)



第613図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(9)

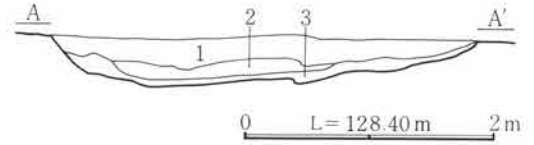


第614図 F区第1号溝状遺構出土遺物実測図(10)

F区第2号溝状遺構

当溝は、調査区内を北西方向から南東方向に向かい走行している。検出長は約66mである。幅は3～3.5m程であり、深度は約26cm程を測る。断面形状は、南側が浅い「U」字状を呈し、北側では「V」字状を呈する。溝底面には硬化した部分は認められなかった。

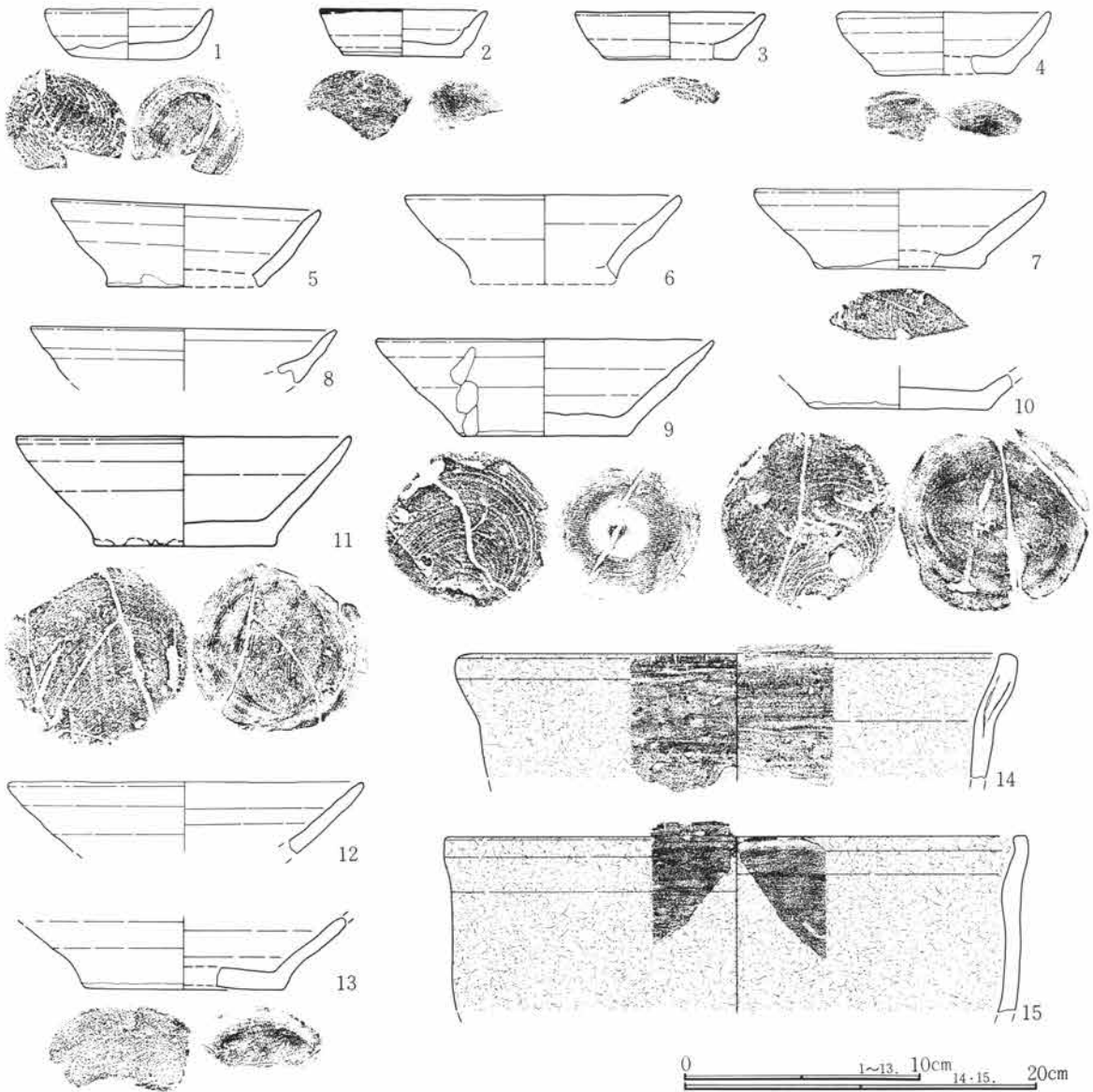
また、当溝は、F区第6号溝状遺構（以下F6溝と略す）と共存することが調査所見から得られている。これは、当溝がF6溝と接続する南側の部分で、F6溝の南壁直下に存在する溝が、当溝に回り込んでいる。これにより共存すると判断した。F6溝の北側の部分はF6溝と約20cmの段差があるが、走行方向が南側部分からの延長方向である点で、同一の溝と判断した。しかし、土層



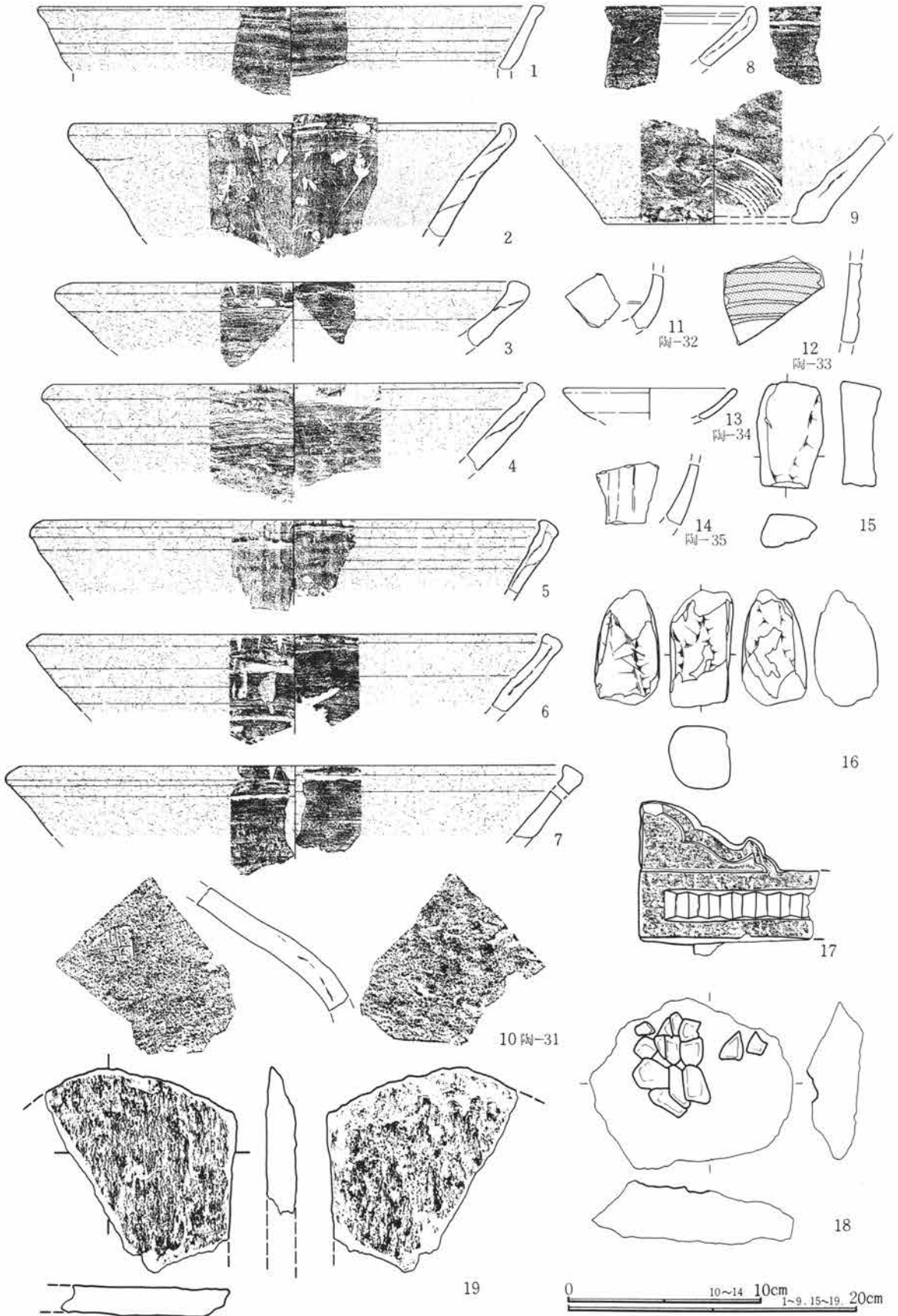
層序

1. 黒色土—B軽石通有・濁発色する。
2. " — " — 粒状C軽石含有硬質砂質土。
3. " — B軽石通有・細粒状C軽石微量含有硬質砂質土。

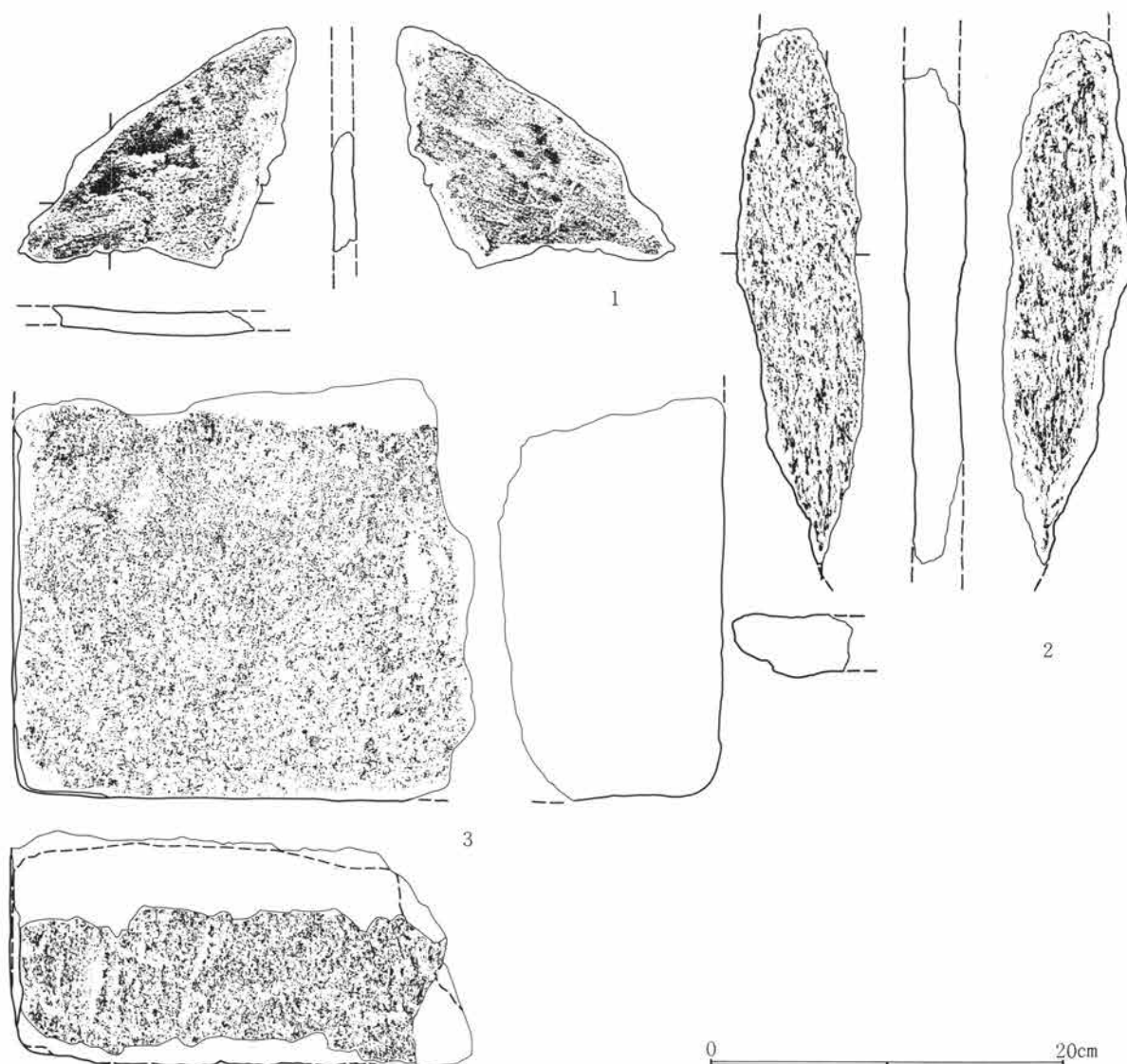
第615図 F区第2号溝状遺構土層断面図



第616図 F区第2号溝状遺構出土遺物実測図(1)



第617図 F区第2号溝状遺構出土遺物実測図(2)



第618図 F区第2号溝状遺構出土遺物実測図(3)

断面観察からは分명한ことは得られなかった。また、同一溝と判断した根拠にF区第7号溝状遺構（以下F7溝と略す）の存在がある。このF7溝（詳細については本書の第3章第1節を参照されたい。）とほぼ同一の走行方向である点からの判断でもある。

周辺遺構との新旧関係では、F1・8・9溝、第54号址、F5B墓等に切られている。

覆土は、基本として1～3層に分層される。これは、溝全体を通して同様な状態であったが、F6溝と連接する部分では不分明であった。また、1層の発色が濁る点は、F1溝以東で認められた。

出土遺物は、覆土内に散在しているものと、集中する部分に認められる。後者はF1溝の東壁部と接する所である。この部分の出土状態では、当溝の覆土の崩壊を考慮してのF1溝での存在か、当溝中での集中廃棄か判別し難いが、断面では、当溝内に存在する点で当溝内での扱いにした。そして、同部からは、礫が多数出土している。図示した以外に、平安時代を主体とする土師器・須恵器・瓦類と獣骨が、F6溝に接する部分の周辺から多く出土している。（後章を参照）また、土師質土器皿では、第1期のもののみであった。そして、F5B墓が土師質土器皿のI期の存在である点から、当溝の廃棄年代は15世紀を前後する頃と判断され、内耳鍋のIV期のものは混入と考えられる。

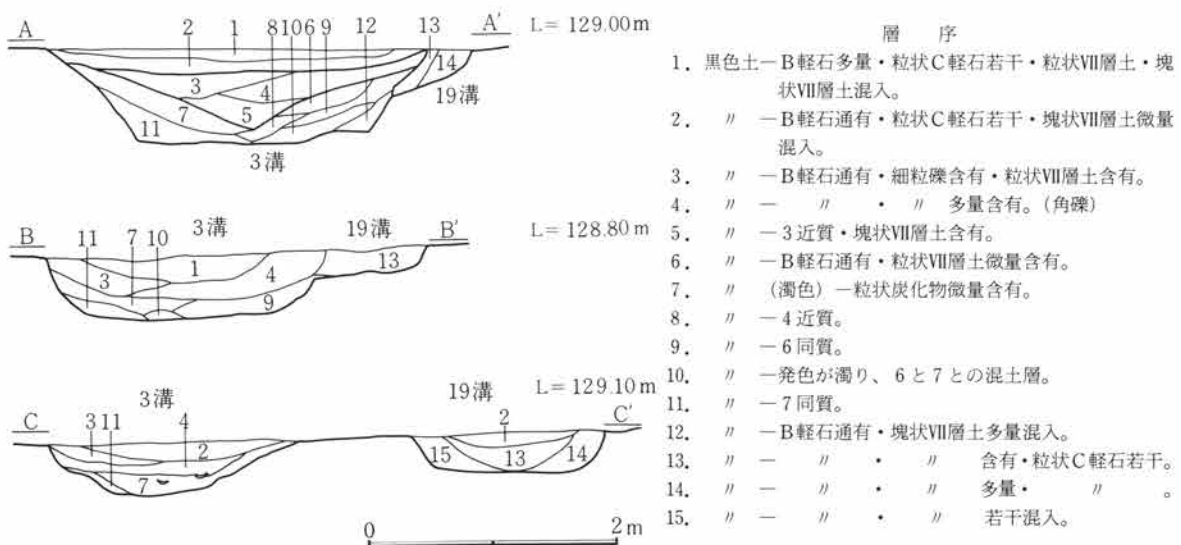
当溝の走行方向は、F7溝と走行方向を同じくすることは前述した。この点では、F7溝が平安時代の所産であるのに対し、当溝は、廃絶年代から室町時代の存在であることが明らかである。この走行方向がほぼ同一なのは、平安時代から室町時代（当溝の廃絶されるまで）は、同様の地割であったことが推定され、当溝が廃絶されて以後、新たな地割が形成されるものと判断される。

F区第3・19号溝状遺構

両溝は、ほぼ同様な走行方向を示すが、19号溝は3号溝に切られている。この両溝は、調査区内の東側で立ち上がっており、F1溝の西側3mの位置である。また、3号溝の中程では、他の溝と重複する様に認められる部分がある。この部分については、明らかなことは判然としていないが、土層断面から、3号溝と同時存続するか、3号溝より以前の存在であるかの両者のうちのどちらかであることしか明らかにならなかった。

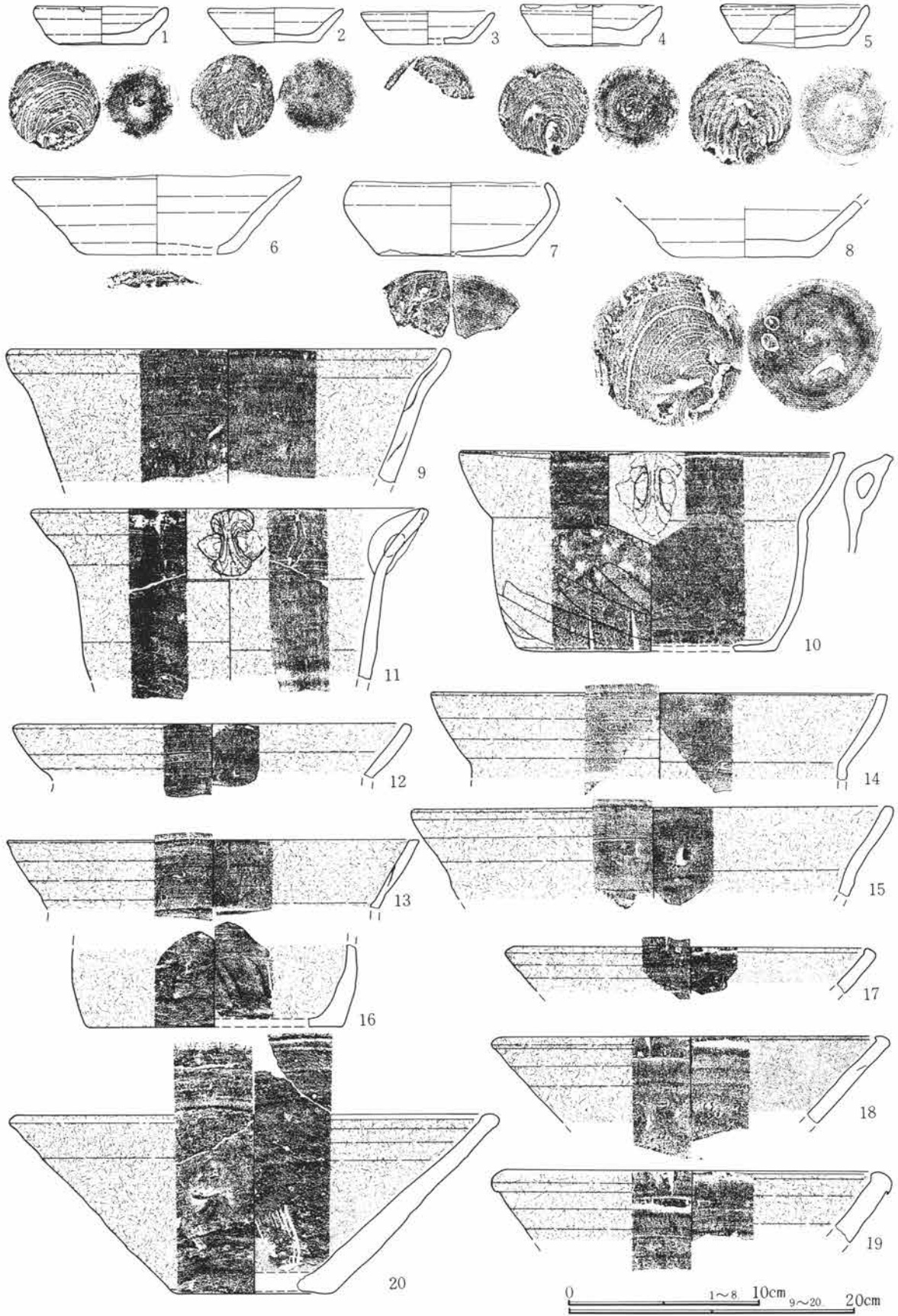
覆土は、3号溝では人為層と明確に判断される部分はなかったが、19号溝では、14層土中に塊状のVII層土を多量に含有している点で、人為層として判断され、13・15層にも認められる点ではこれに類すると考えられる。

出土遺物は、3号溝では他の溝状遺構と同様であるが19号溝からは少量の遺物しか検出されなかった。3号溝内からは、第620図-10が溝底面から出土しており、特筆されることとして、土層面のC-C'面の西方約2mの溝底の北壁直下から、人間の頭蓋骨が完全の状態出土した。しかし、調査時には降雨が多かったため状態は非常に悪かった。出土した内耳鍋（第620図-10）は、第1分冊の報文中で分類した4期にあたり、その所産年代は15世紀後半頃と考えられる。このことから、15世紀後半代には当溝が存在したと考えられる。また、当溝がF1溝の西方で立ちあがる点では、F1溝による制約による所産と考えられるが、逆の場合も想定できる。しかし、当遺跡内での当該期の遺構は、その開削の上限が14世紀後半と考えられる点と、F1溝が14世紀後半には埋没している状況から、少なくとも、3号溝の開削が後出すると類推され、F1溝のII期以降の段階で、F1溝の存在による制約で構築があったものと考えられる。そして、19号溝は、3号溝の状況により、F1溝に後出し、3号溝と同様の状況下での開削と考えられる。

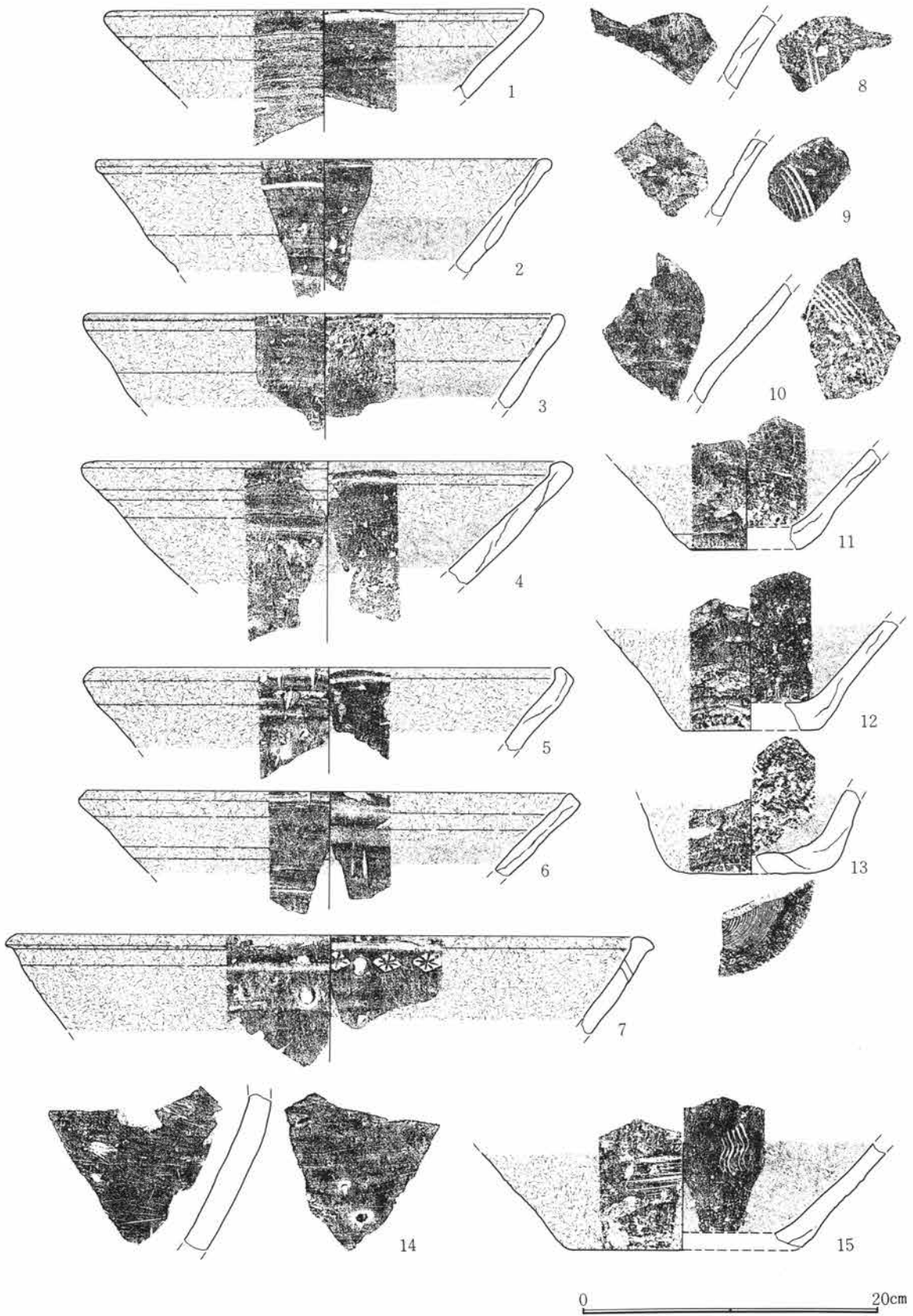


第619図 F区第3・19号溝状遺構土層断面図

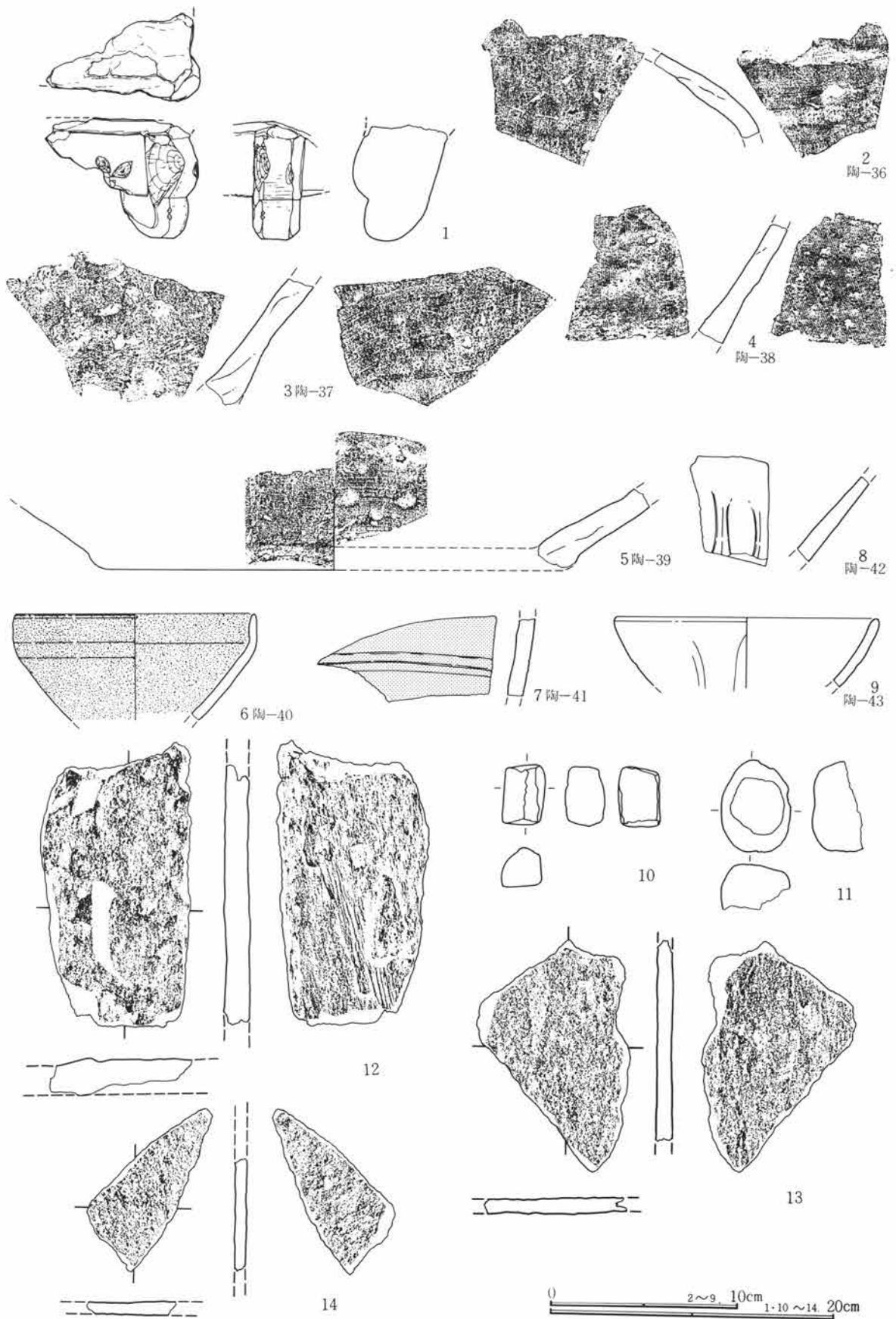
第3章 検出された遺構・遺物



第620図 F区第3号溝状遺構出土遺物実測図(1)



第621図 F区第3号溝状遺構出土遺物実測図(2)



第622図 F区第3号溝状遺構出土遺物実測図(3)

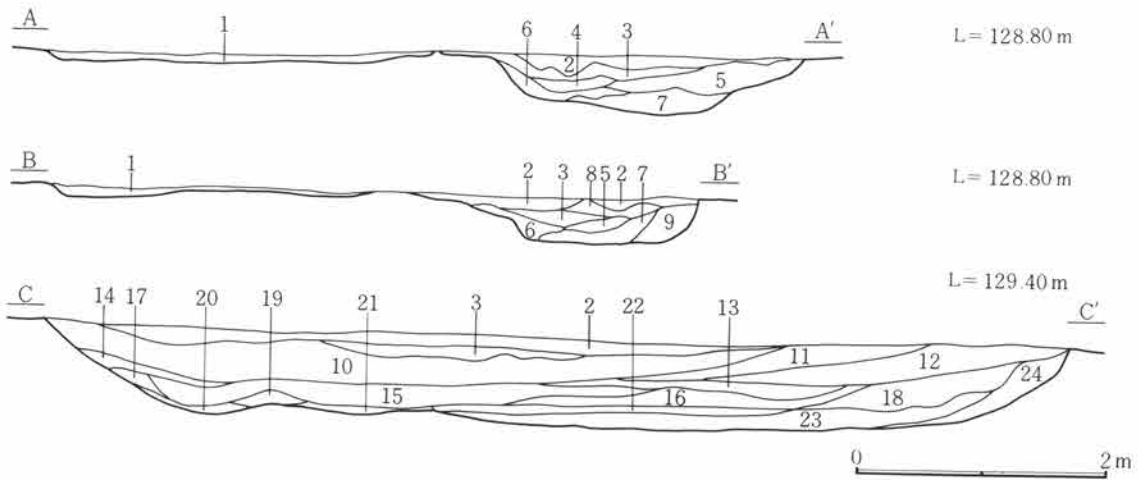
F区第6号溝状遺構

当溝は、F区南半部で弧状を呈し検出されている。これにより走行方向は、東側へ延びる部分と南西方向に延びる部分が存在する。また、前述したF2溝と共存する。そして、F1・8溝・第6号掘立柱建物跡（以下掘立と略す）・第1号柵列等により切られている。また、東側の北半分は非常に遺存が悪い。

底面は、西側半分の部分で轍状の溝が顕著に認められるが、東側では認められず、底面の南側半分が一段低い状態になっている。また、底面全体は硬化している。そして、全体では南西方向側が深く、東側が浅い。壁は、ほぼ70度程の角度を有して立ち上がっているが、上述した東側北半分の部分には遺存が悪く、全体としては不明瞭な部分が存在する。

覆土は、全体としてブロック土の存在は少ない。土層断面のC-C'間では溝底面には、風化及至水成と思われる砂質土が堆積しており、埋没段階での何らかの状況を示唆していると思われる。また、全体的には小単位の埋没は認められず、埋没面を蓋う状態で認められ、F1溝で認められた覆土中での硬化面は認められなかった。

出土遺物は図示した遺物以外には、同種細片が多かった。これらの中で、土師質土器は先年度の報文中での分類では1・2期に該当し、内耳鍋も1期に分類したものが含まれている。また、当溝と共存するF2溝の出土遺物も同様であることから、遺物からも共存の妥当性がある。ただ、1期としても、F1溝より走行する点で1期の示す14世紀後半の早い段階であったと考えられる。

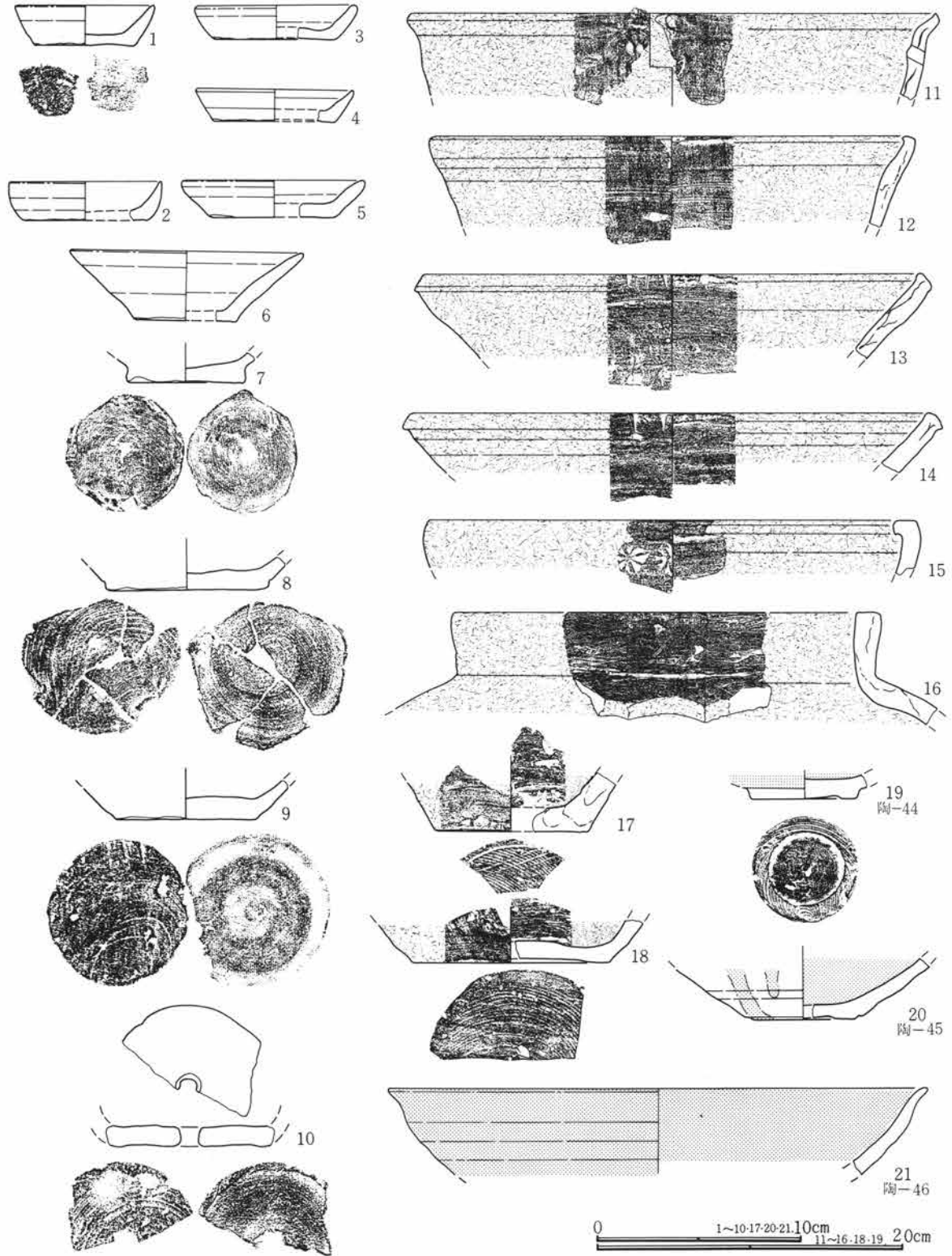


- | 層 序 | |
|--|--------------------------------------|
| 1. 濁黒褐色土—発色が灰色味がる砂質土（B軽石混入）。 | 13. 黒色土—B軽石通有・微粒状C軽石若干・粒状炭化物若干混入。 |
| 2. 黒色土—B軽石通有・細粒状C軽石含有。 | 14. // — // ・塊状VII層土混入。 |
| 3. // — // ・塊状VII層土含有。 | 15. // — // ・粗粒状C軽石含有。 |
| 4. // — // ・細粒状C軽石若干混入。 | 16. // — // ・粗粒状C軽石若干・粒状VII層土含有。 |
| 5. // — // ・粒状VII層土含有硬質土。 | 17. // — // ・塊状VI層土多量混入。 |
| 6. // — 4近質。 | 18. // — // ・塊状VII層土含有・粒状VII層土混入。 |
| 7. // — B軽石通有・粒状C軽石含有・塊状鉄分含有。 | 19. 黒褐色砂質土—風化乃至水成による堆積。 |
| 8. // — // ・ // ・塊状VII層土含有。下部に硬化が認められる。 | 20. // — // ・鉄分粒含有。 |
| 9. // — B軽石通有・粒状C軽石多量混入。 | 21. // — 20同質。 |
| 10. // — B軽石通有・ // 含有・粒状VII層土含有。塊状VII層土若干。 | 22. // — B軽石通有・粒状VII層土若干。 |
| 11. // — B軽石通有・粒状C軽石含有・粒状VII層土微量混入。 | 23. // — // ・粗粒状の砂を多量に混入する。 |
| 12. // — // ・ // （本層中に多量の獣骨を包有する）。 | 24. 黒色土—B軽石通有・塊状VII層土多量・粒状VII層土多量混入。 |

第623図 F区第6号溝状遺構土層断面図

第3章 検出された遺構・遺物

当溝の推定走行方向は、西側が南西方向に向い、舗装道路下のD8溝の延長部と重複する状態になると考えられる。東側は、昭和35年に実施された耕地基盤整備以前には、「薬師道」と呼称された道が存在していた。この薬師道は、現在国分尼寺以东に遺存している。この薬師道は、蒼海城の北西隅部で、北へ直線的に延び



第624図 F区第6号溝状遺構出土遺物実測図

る道の東側に“化粧薬師、(通称は縁切り薬師)が座している。薬師道は、この化粧薬師と東国分を結ぶ道であったと伝えている。そして、この薬師道は、化粧薬師から牛池川の右岸を尼寺の北東隅部へ向い、同部で方向を変え東西走行の状態となり東国分に達している。(第1分冊付図16参照)また、この道の南側は字名で“薬師道南、と呼称している。当溝の東側延長部はこの薬師道と重複する位置と考えられる。

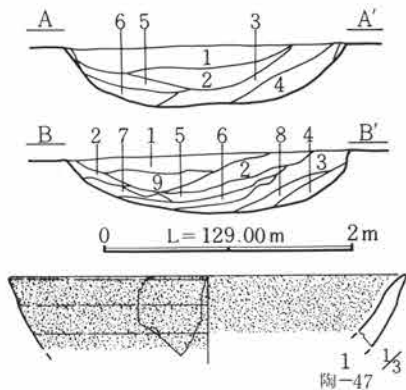
この薬師道の東西走行する部分は、当溝の開削により生じた地割を使用している。当溝は道としての機能が認められる点では、当溝がF1溝に切られる部分より東側は、少なくとも室町時代から昭和時代にかけて、当溝による地割が使用されていたことが認められる。そして、薬師道が尼寺の北縁周辺を通るという点で、当溝の開削も何らかの旧代からの地割の制約があったものと推察される。また、尼寺の北側から北西隅部にかけて大きな落ち込みが存在することを耕作者より聞いており、同部は現状でも50cm程低く窪んでいる。(耕作者によると約2m程は下がる様である。)すなわち、この落ち込みの北縁部が薬師道と接しており、落ち込みを含む南側は、尼寺の寺域と何等かの関係があるものと思われる。

当溝の開削時は不明の域を脱せないが、当溝の開削時は旧代(奈良・平安時代を含む)の地割を使用していたことはF2溝の存在からも類推できる。このF2溝は、前述したようにF7溝とほぼ同一の走行方向を示している。このF7溝は、全体を突き固め、覆土は全体が水成堆積によるものであった。このことは、F7溝自体が通水を目的として構築されたことは明らかであり、当遺跡から検出された溝の中ではこのF6溝とC6溝のみが通水用の溝として存在している。また、このC6溝は、国分僧寺の東大門の推定位置の東側延長部にあっている。これらの点からも当該期の最古の一群は、古代からの地割を利用し開削があったことが類推される。これにより、当溝の東側延長部(薬師道)は尼寺の寺域の北縁沿いに構築された可能性が大きい。そして、尼寺の北東隅部で方向を変えるのも尼寺の寺域による地割に起因すると考えられる。

F区第8号溝状遺構

当溝は、F1溝の西側22m程で、F1溝と平行して位置している。そして、後述するF2号掘立の主軸方位と当溝の走行方向はほぼ同一であり、これに直交するような状態でF区第1号柵列が存在する。また、当溝の北側では、F3・19号溝と重複する状態で検出されている。しかし、土層断面からは新旧関係を明確に示す状態は看取されなかった。これは、当溝が3号溝の部分で立ち上がっている点で、共存状態があったものと考えられ、両者がF1溝を媒介にして何等かの規整により存在する点で、F1溝の構築により生じた新たな地割を使用しての構築は明らかである。

当溝は上述した掘立・柵列等との状況から、これらが一連の存在であることが想起され、全体で“館、状



- | 層 序 | |
|-----|------------------------------------|
| 1. | 黒色土-B軽石通有・塊状VII層土若干混入。 |
| 2. | 〃 - 〃 ・細粒状C軽石含有。 |
| 3. | 〃 - 〃 ・塊状VII層土多量混入。 |
| 4. | 〃 - 〃 ・粒状VII層土若干・粗粒状VII層土混入。 |
| 5. | 〃 - 2近質・粒状VII層土若干。 |
| 6. | 〃 - B軽石通有・塊状VII層土多量斑状混入・粒状VII層土混入。 |
| 7. | 〃 - B軽石通有・粗大VII層土混入。 |
| 8. | 〃 - 〃 ・小礫若干・粒状VII層土混入。 |
| 9. | 〃 - B軽石通有・塊状VII層土混入。 |

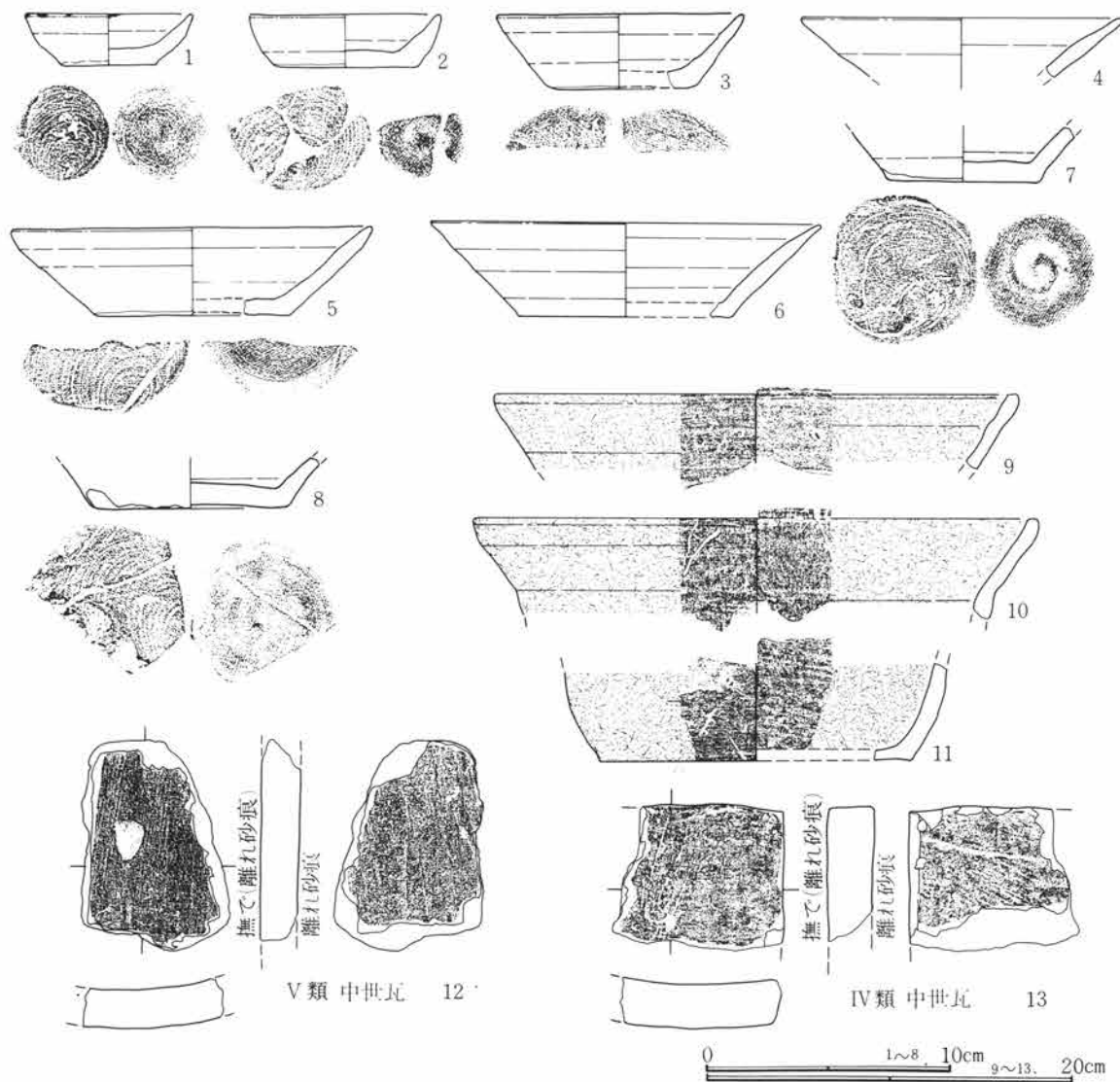
の大きな遺構として考えられる。この“館、状の遺構を想定した場合、F区第53号址・第9号溝を含め、さらに両者の遺構の内側に存在するF区第48号址・第2・3号井戸跡等のその一部の施設として包括される。出土遺物は、土師質土器皿・軟質陶器等の破片が少量あったのみである。

第625図 F区第8号溝状遺構土層断面・出土遺物実測図

F区第9号溝状遺構

当溝は、細く長い部分と、幅の広い部分が認められる。そして、F2溝を切り構築している。また、F1溝と東側約3.5m程隔て平行して位置しており、前述したF8溝の所見に記したように、¹館の一部の施設として考えられる。

出土遺物は、土師質土器皿・内耳鍋・瓦・礫等が出土している。礫は、細い状態の方で、底面より10cm前後遊離し、50~70cm程の間を置いて出土している。この状態は、単なる混入とは考え難く、人為的な状態を推定させる状態であった。土師質土器皿は、2類・7類・5類が出土し、当該の遺物からは1・2期の存在である点で、14世紀後半から15世紀前半の年代が与えられる。また、内耳鍋は細片であるが3期以降の所産と考えられ、15世紀中頃以降、15世紀後半代までの年代が得られる。上述のことより、当溝の埋没は、少なくとも15世紀後半以降と考えられ、F3溝の年代観と符合する。



第626図 F区第9号溝状遺構出土遺物実測図

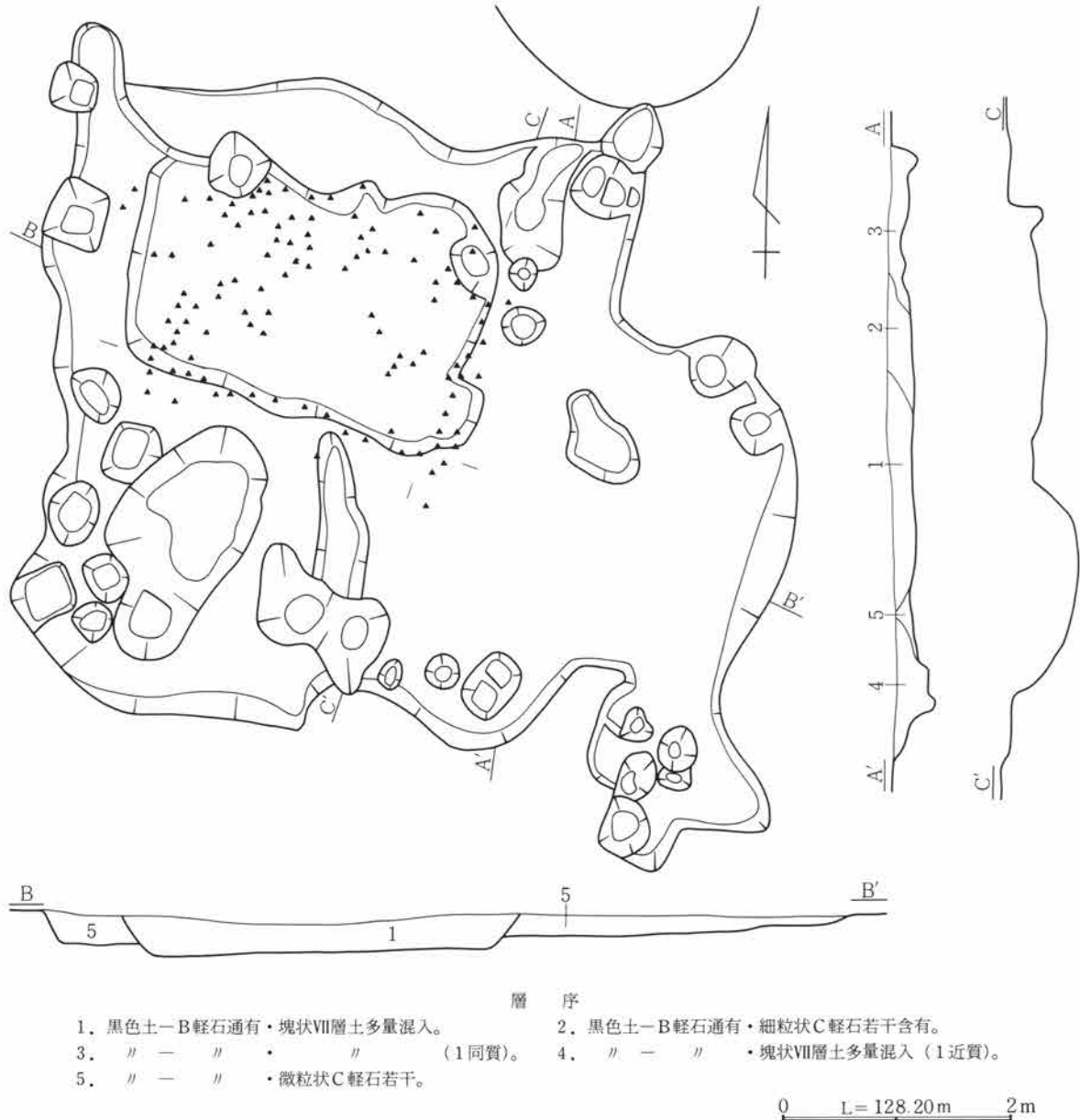
F区第48号址

本址は、F区内南西部で検出され、7～12-F-59～63グリッド内に位置している。周辺には、2・3号井戸、9号溝、掘立群、53号址等が検出されている。

平面形状の基調は方形状のものと考えられ、検出面では不整形状を呈している。規模は、長軸上で約7.9m・同直交軸上で約5.5mを測る。主軸（長軸）方位は東-7度-南を指す。

底面は比較的平坦であるが、部分的におうとつが認められる。そして、ピット・土坑状の掘り込みが認められる。このピットは30余の数量が検出され、土坑状の掘り込みを含め、本址に直接的に係わる施設かの可否については不明確である。ただ、本址の北西方向にピット・土坑が多く検出されている点では、本址に係わらないとも思われるが、ピットは、壁周辺の底面で検出されている点で留意され、検出されている幾つかは、本址に伴う可能性が大きいと考えられるが、分明に示し得る所見はない。

土層断面では、礫の集中する部分と、外側の大きい掘り込み域には、新旧関係を示す状態が認められた。



第627図 F区第48号址実測図

第3章 検出された遺構・遺物

ただ、確認面は表土層直下で攪乱が著しく達しており、平面的な状態を把握出来得なかった点と、長軸の指向方位・ピット等の状態から、個別の遺構としての存在か、同一遺構での特殊的な部分なのか判断出来ない点で別称を冠さなかった。

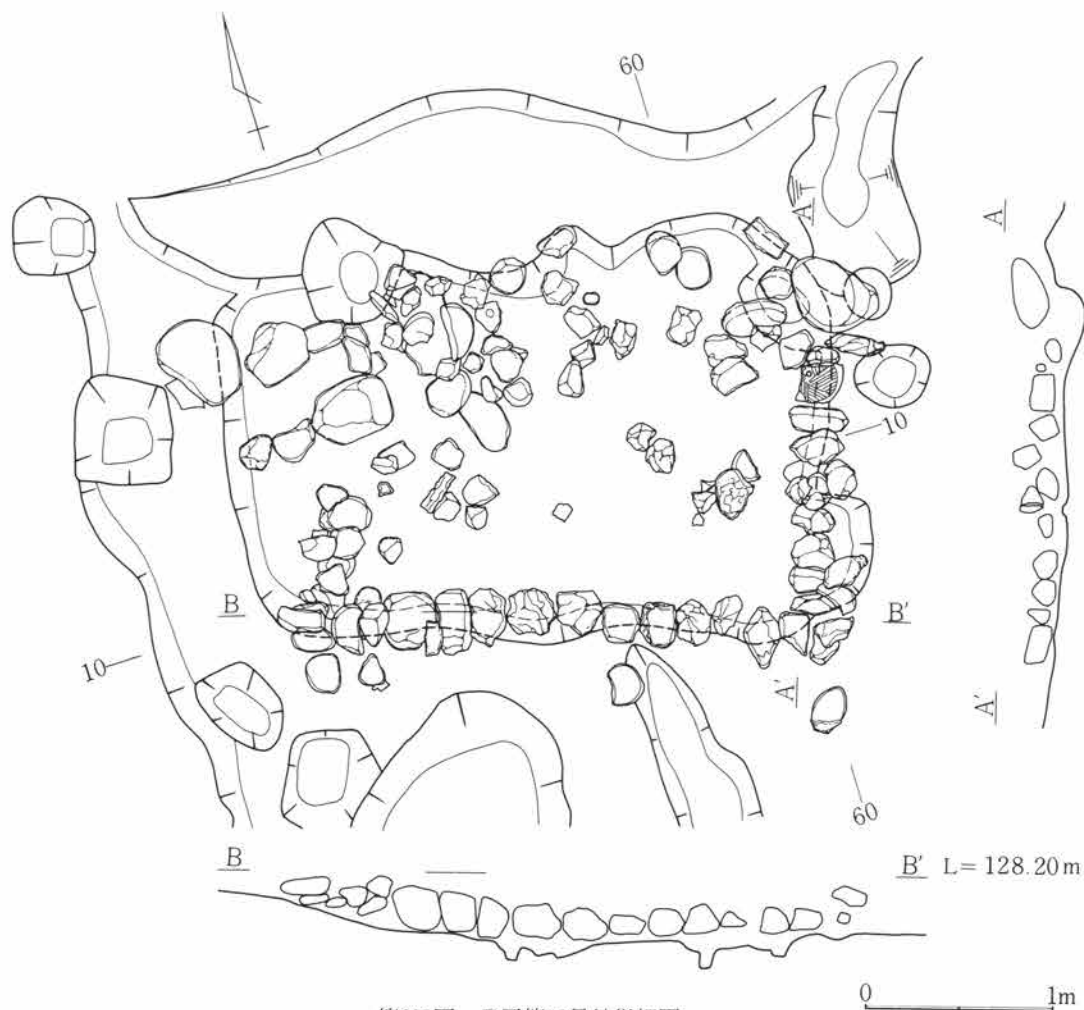
この礫の集中する部分は、長方形の掘り方の壁際に、礫を1段1列で（遺存状態では）小口積にしている。この小口に積む部分は、南・東側で遺存しているが、北・西側では、礫が散乱する状態で検出されており、恐らくは、全周する状態で石積みが存在したものと思われる。

この部分の掘り方は、長軸方向で4.1m、同直交軸で2.1mを測る。深度は約30cm程で、底面はほぼ平坦である。

小口積にされた礫は、大小様々であるが、長さ20～30cm程度の礫を多用し、これより大きい物は、積み重ねた状態で検出されていないため不明確であるが、小さい礫は目地・積み重ねた礫の押えに使用されている。礫は、河原円礫・地山礫を使用しているが、1点のみ石臼の上白片を利用しているものが認められた。

出土遺物は、土師質土器皿が5点、いずれも破片である。軟質陶器では内耳鍋（第629図-6）・香炉と掲載しなかったものに鉢の破片が数点ある。他に鉄器（釘）3点・石臼・板碑片等がある。

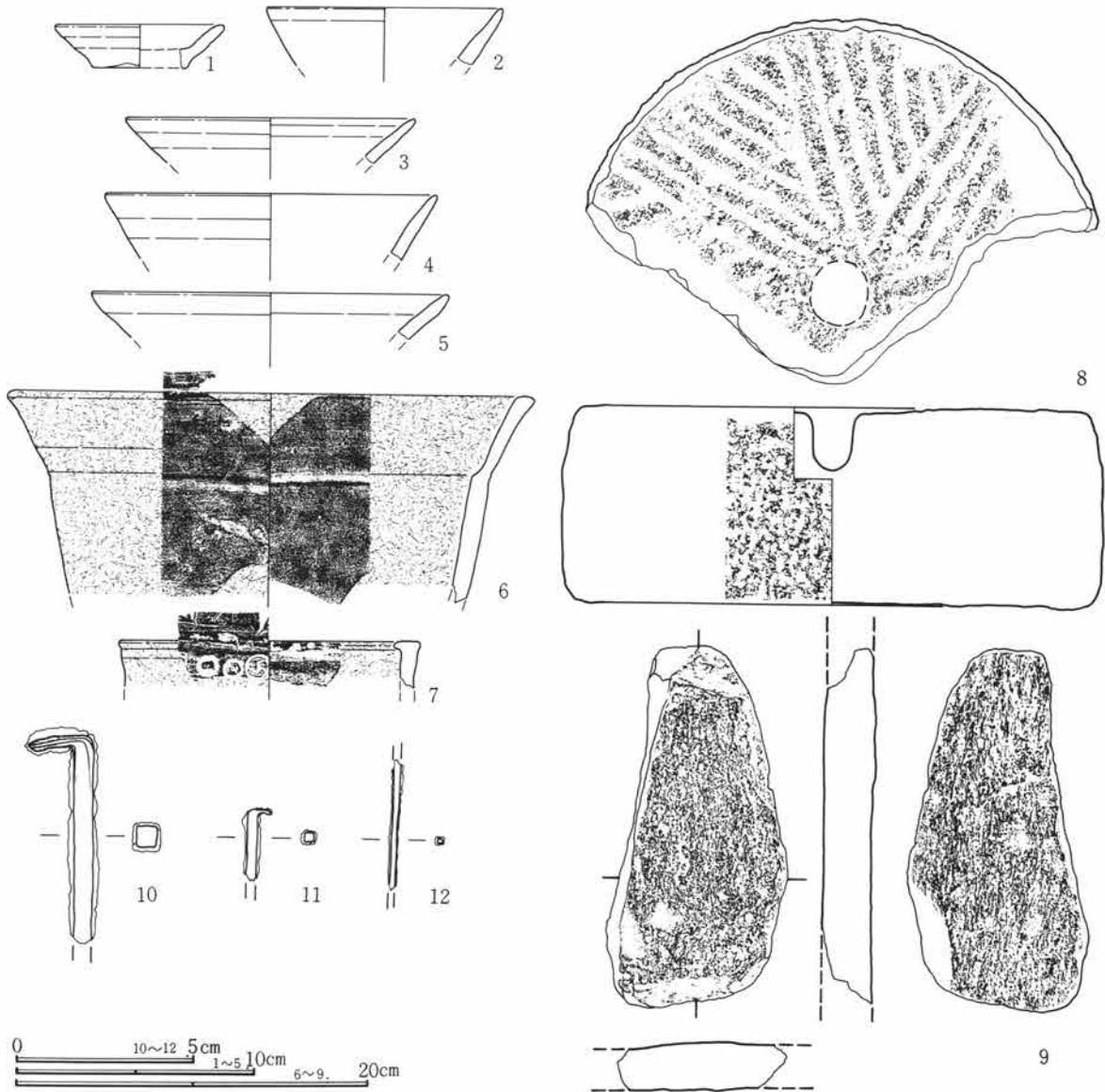
この遺物からは、土師質土器皿が14世紀後半から15世紀後半までのものが認められ、内耳鍋が15世紀後半と考えられる。また、板碑は14世紀以前に盛期が認められる遺物であり、破片化したものの出土であることから、本址の廃棄は15世紀後半代を上限にするものと考えられる。



第628図 F区第48号址微細図

本址の性格について若干考えたい。状況については前述したとおりである。本址の最大の特徴として挙げられることは、小口積にした礫を配備することであり、外側の掘り込みと共存することも考慮される点である。また、周辺の遺跡と比較した場合、長軸の指向方位がほぼ同様であるか、これに直交する状態での方向であり、周辺遺跡と共存乃至前後しての存在であったと考えられる。さらに近接する遺構としては、2号井戸の存在がある。

当遺跡内で検出された竪穴状の遺構の内、当址に類似するものがない。上述の周辺遺構にしても、それらが単なる存在でなく、個別の遺構の集合体として存在したことが考えられる。これは、「館」としての存在であり、本址もこの「館」に付随する一施設としての存在が考えられる。この場合、礫を小口積にして圍繞させた状態から、特殊遺構としての存在であり、「館」と考えられる内部には、井戸跡の検出がされていないことから、外郭部に相当する部分に存在する2・3号井戸跡のうち、近接する2号井戸跡との関係が示唆される。すなわち、本址は2号井戸と一体としての機能が想像され、2号井戸に付随する何らかの施設として存在したことが推定される。

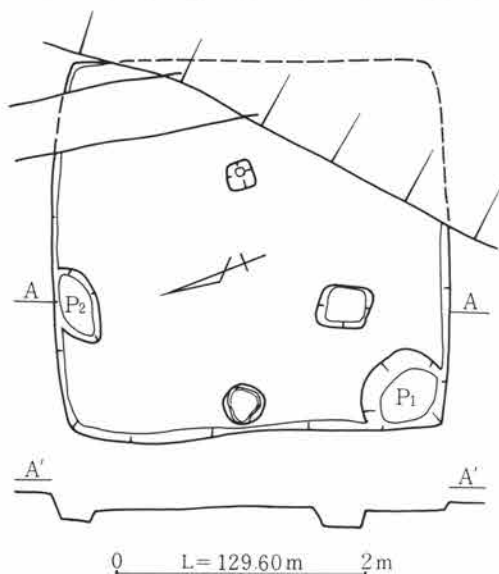


第629図 F区第48号址出土遺物実測図

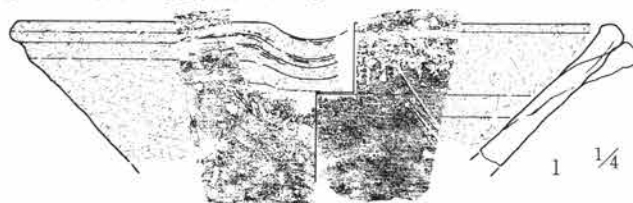
第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	F区第51号址		位置	21・22-F-63・64グリッド内			
平面形態	正方形	規模	2.57m×2.29m	主軸方位	北-19度-東	残存深度	約8cm程
壁	斜位に立ち上がる。		床面	ほぼ平坦。			
その他	南西隅部P ₁ -60cm×54cm・北壁直下P ₂ -60cm×36cm。						

所見 本址は、F6溝を切り構築しているが、調査時の不手際により南西部を逸している。本址も、周辺遺構同様に、“館”の内郭部に存在する遺構で、周辺遺構との係わりが大きい。



底面で検出されているピットは、本址と直接係わらないと考えられ、周辺部で多く検出されている一群のものと同類と考えられる。P₁は屋内隅部に設けられている点で、本址の使用期間中に機能したものと考えられる。P₂の機能については不明であるが本址には伴うと考えられる。出土遺物は、軟質陶器の鉢1点と、奈良・平安時代の遺物である。この遺物のうちP₁内部から出土したものに、国分寺の基壇等の化粧に使用された切石の完存品がある。



第630図 F区第51号址・出土遺物実測図

遺構名称	F区第53号址		位置	4～7-F-58～63グリッド内			
平面形態	不整長方形	規模	9.09m×2.98m	主軸方位	東-19度-南	残存深度	約60cm程
壁	斜位に立ち上がる。		床面	二段に構築され、西側が深い。			
その他	ピットが3ヶ所で検出されているが、本址に伴うか不明。						

遺構名称	F区第54号址		位置	26・27-F-62・64グリッド内			
平面形態	矩形状	規模	3.45m×3.03m	主軸方位	北-73度-西	残存深度	約88cm程
壁	ほぼ直立する。		床面	ほぼ平坦。			
その他	不明のピット状のものが南壁直下に認められる。						

所見 (F53址)

本址は、他の竪穴状の遺構と異なる遺構である。これは、本址が位置的に“館”の南縁に相当しており、F9溝と当址の軸線が直交する状態である点と、農道を挟んで西側に検出された101号溝の存在がある点からである。また、底面は二段の面を有しており、西側が東側に比較し、42cmほど低い。この両者は、土層断面からは新旧での存在でない点を確認されている。ただ、B-B'間の土層断面では、北側からの埋没が著しかったことが認められるが、東側の部分では、西側埋没後に埋没が始まっていることが考えられる。この状態から、埋没が開始してから時間の経過と共に埋没が進行したとは考え難く、むしろ、西側の部分が、東側

に先行して短期間で埋没したことが想起される。これは、前者の状態であれば自然埋没が考えられるが、後者は人為による埋没と考えられる。このことより、本址の埋没は、後者の人為埋没であったことが判断され、本址が、[〃]館[〃]の南縁を示す遺構である場合[〃]館[〃]が何らかの状態で改修されたか、廃棄されたかの状態であったと判断される。

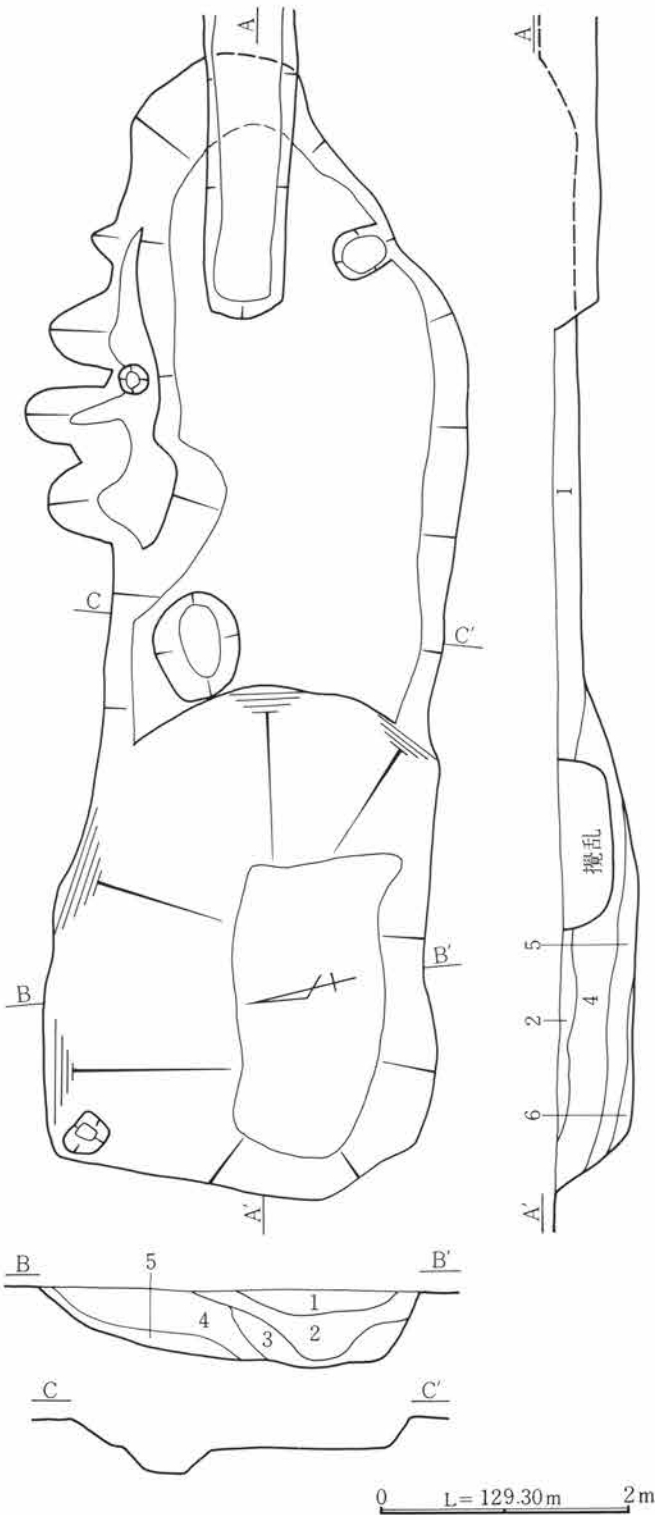
出土遺物は皆無であるが、周辺遺構の状態から[〃]館[〃]との関係考えた。時間的には、遺物から判断されないため、[〃]館[〃]を考察する段階で考えたい。

所見 (F54址)

本址は、[〃]館[〃]と考えられる内郭の部分から検出されている竪穴状の遺構である。周辺遺構では、南側にF3号掘立が位置している。そして、本址は、F2溝を切り構築している。

土層断面からは、本址の埋没過程に前述したF53址と同様な状態が看取される。これは、4層土が、北側からの堆積が著しく全体の3分之2程に達している点である。この状態と、4層土の混入物を考えると、人為層として判断出来る。そして、この上位層の3層土の状態も近似しており、3層土も人為層として判断出来る。出土した遺物も、上述の土層中に含有されているものが多い。すなわち、この状態は、[〃]館[〃]の改修乃至廃棄時の状況を示唆するものと考えられる。

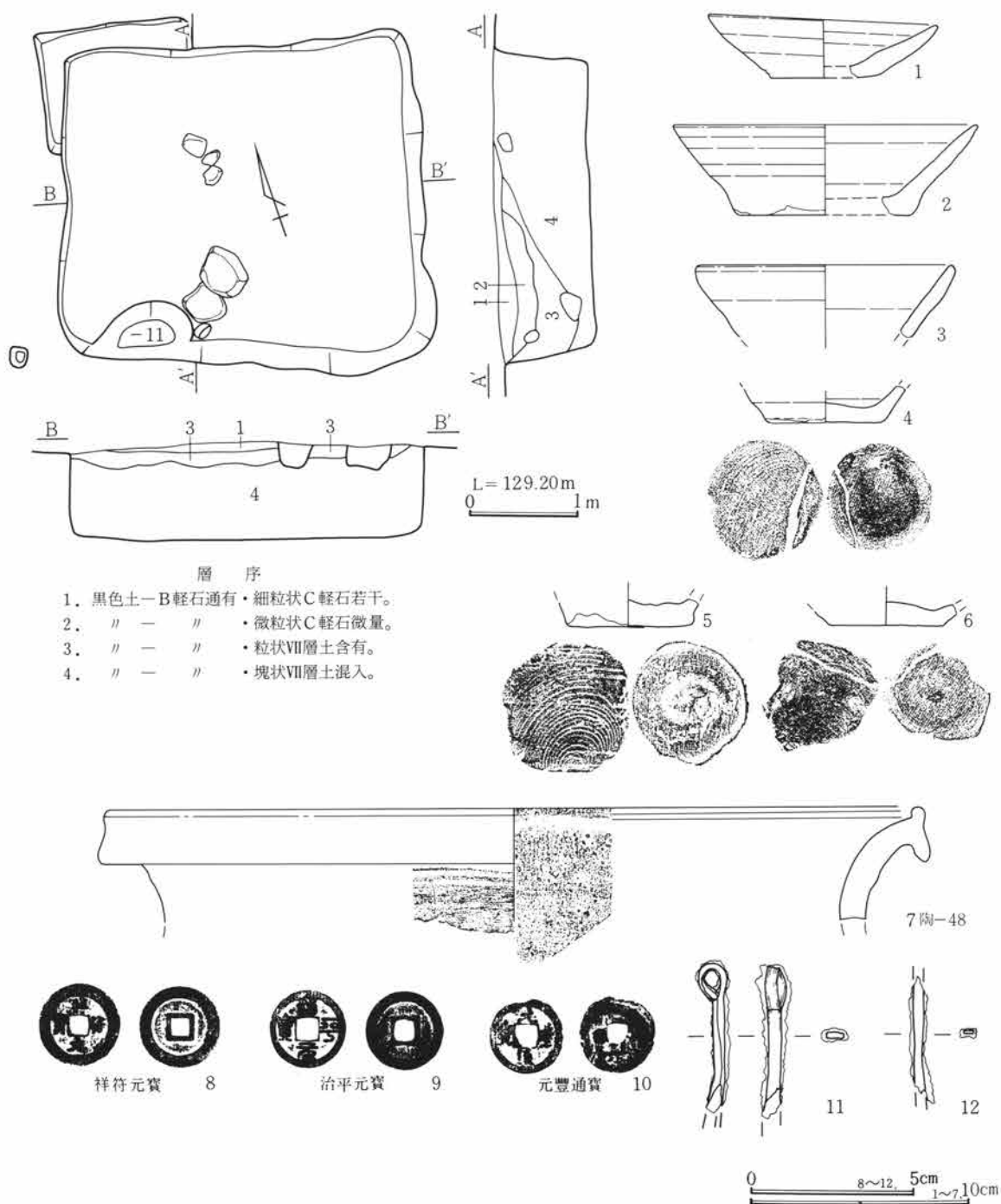
出土遺物は、土師質土器皿・焼締陶器（常滑焼）・銅銭・鉄製品が出土している。これらの内、土師質土器皿は、5・7類が主体を占め、常滑焼からは14世紀前半代の年代が得られる。銅銭からは、初鑄年の最も新しい元豊通寶が1068年であり、少なくとも本址の埋没段階の上限が15世紀前半代に比定される。



層序

1. 黒色土—B軽石多量・細粒状C軽石含有。
2. // — // 通有・小塊状IV層土少量含有。
3. // — // 塊状VII層土多量混入。
4. // — // 粒状炭化物少量含有。
5. // — // 小塊状VII層土多量混入。
6. // — // 塊状VII層土含有。

第631図 F区第53号址実測図



第632図 F区第54号址・出土遺物実測図

掘立柱建物跡とピットについて

F区内から検出された掘立柱建物跡は10棟在る。この内、第1・2号掘立柱建物跡は発掘調査段階で確認検出したものであるが、他の第3～10号掘立柱建物跡については、調査終了後、整理段階において机上復原したものである。これは、調査区内を南北に縦走していた農道部の調査が後行したため、同部から検出されたピット群は狭い中であったことにより検証出来なかったためである。この机上復原した掘立柱建物跡は8棟に達するが、この他に、柵列が確認されている。この柵列と考えたものは、第1号掘立柱建物跡と共存することが想定される。これらの掘立柱建物跡についての詳細は後述する。

F区第1号掘立柱建物跡

当F区第1号掘立柱建物跡（以下F区1号掘立と略す）は、F1溝とF6溝が接する部分に位置し、北東隅から南西隅部はF1溝に切れ消滅している。

本跡の北側柱列は、F6溝から約1.5m程隔てF6溝と平行する状態で検出されている。

F1溝に切られている部分で、P₁の延長部は、F1溝の西側壁部に想定されるが、位置的に存在した場合壁にその痕跡が認められると考えられるが、壁面には何らの痕跡も認められなかった。この点では、南側の延長は存在しなかったことが考えられ、本跡は、2間×2間の構造であったことが想定される。

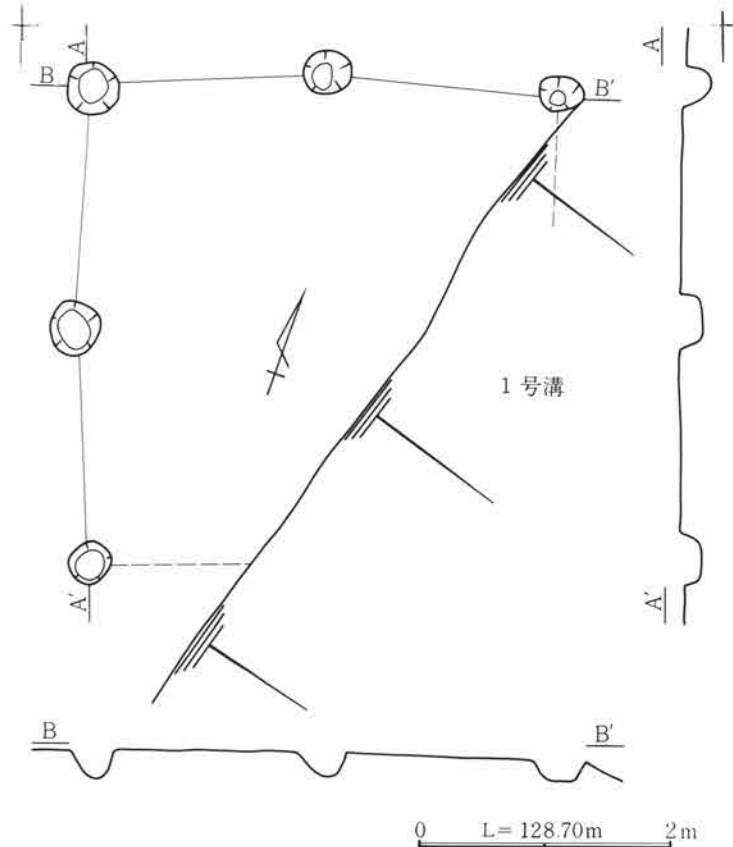
柱間の実長は図上に示した。この数値は、柱穴の中心と中心を計測したもので、単位はcmである。これらの数値からは、

公約数として31~32cmの数値が得られる。前述した公約数の数値は、建物構築時に使用されたと思われる“尺度”と考えられるが、建物を想定しても堅固なものと考えられない。このことから、建物を構築する際に“ものさし”の使用がなくとも構築可能であったと考えられ、身体尺の存在を考慮すれば、公約数が尺度に直結しないと思われる。ただ身体尺については、その存在は考えられるものの実態が不明であることから、何如とも言い難い。C区第1号掘立柱建物跡は、瓦葺き建物が廃棄されてからの存在であることが考えられ、瓦葺き建物が廃棄されてからの寺院の主要建物であったことが推定される。この建物の柱間から、使用尺の単位が30cmであったことが判明しており、30cm 1尺の尺度が存在したことが推定される。この所見をしても建物の種類によりものさしの使用があったと考えられる。すなわち、1尺=30cmのものさしが建物構築にあたっての使用であったとすれば、この数値に該当しない場合は、身体尺を使用して柱の位置が決定された可能性も想起される。

当跡は、F6溝と平行しF1溝に切られる点で、F6溝が存在する段階で存在したことが判断される。そして、F6溝とF1溝の関係からも、上述の状態であったことが裏付けられる。すなわち、当跡の所産年代として14世紀後半の早い段階であったと考えられる。

F区第2号掘立柱建物跡

当跡は、“館”状の区画が想定される中の建物であったと考えられる。建物は、2間×5間であるが、建物としては、通有な建物以外と考えられる。そして、当跡の全ての柱穴から柱材の据え方が平・断面で認められている。この据え方で認められる柱材は300・307は角材であり、他は全て丸材を使用している。そして、各柱間の距離は図中に示した。これらの柱間から公約数として15・30cmの単位が認められる。ただ、公約数

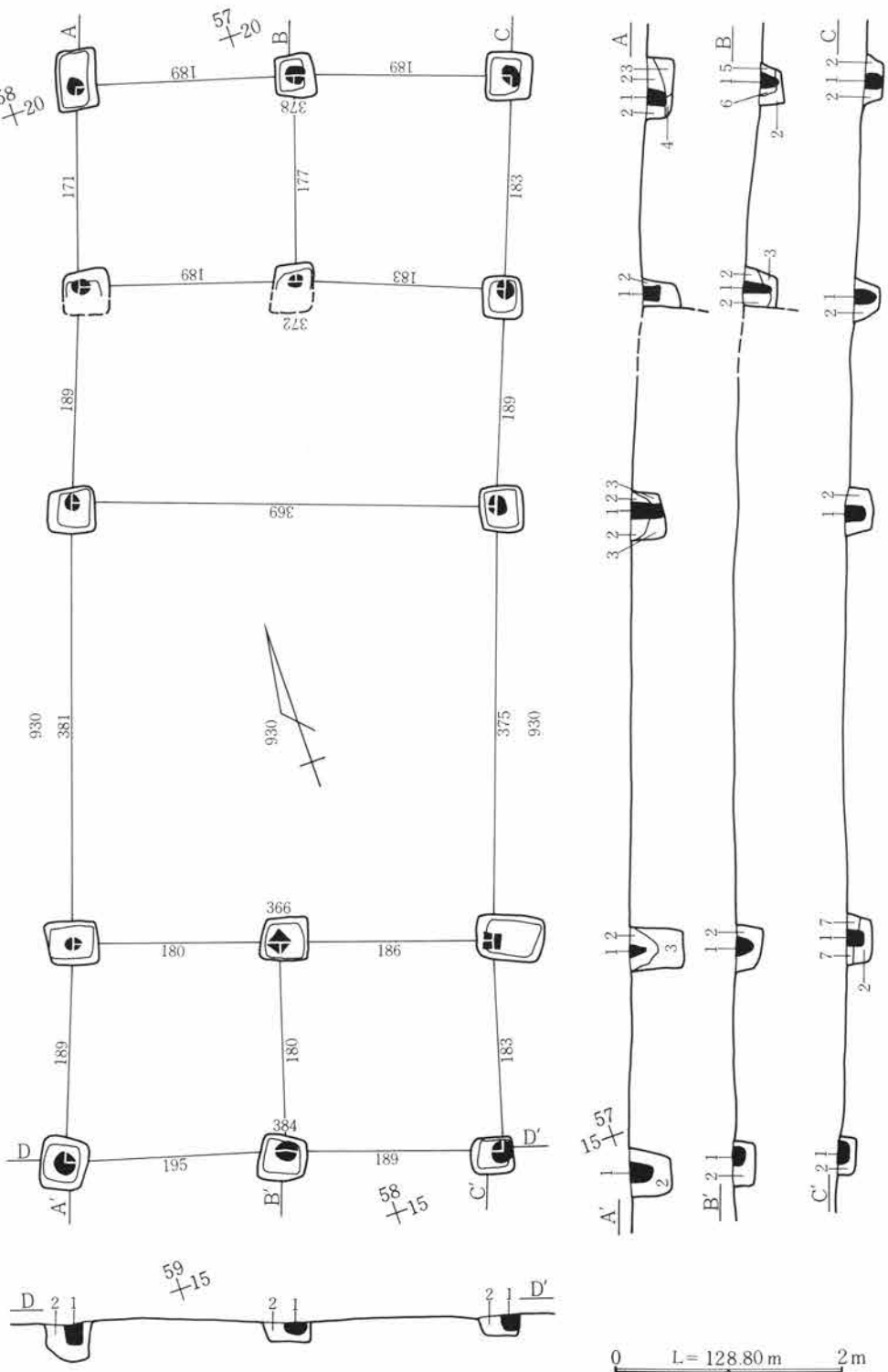


第633図 F区第1号掘立柱建物跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物

を30とした場合、全長が30×31の単位が得られ、30cmを1尺とした場合、完尺より1尺余計に算出される。この要因として、277-298・278-307間の数値が公約数の単位より余りが生じており、この点でこの柱間から何らの状況が示唆される。すなわち、公約数の30が1単位の尺と想定され、277-298・278-307間は意図的なものと考えられ、これ以外は各柱間での単なる誤差と考えられ、30cm 1尺の単位が得られる。

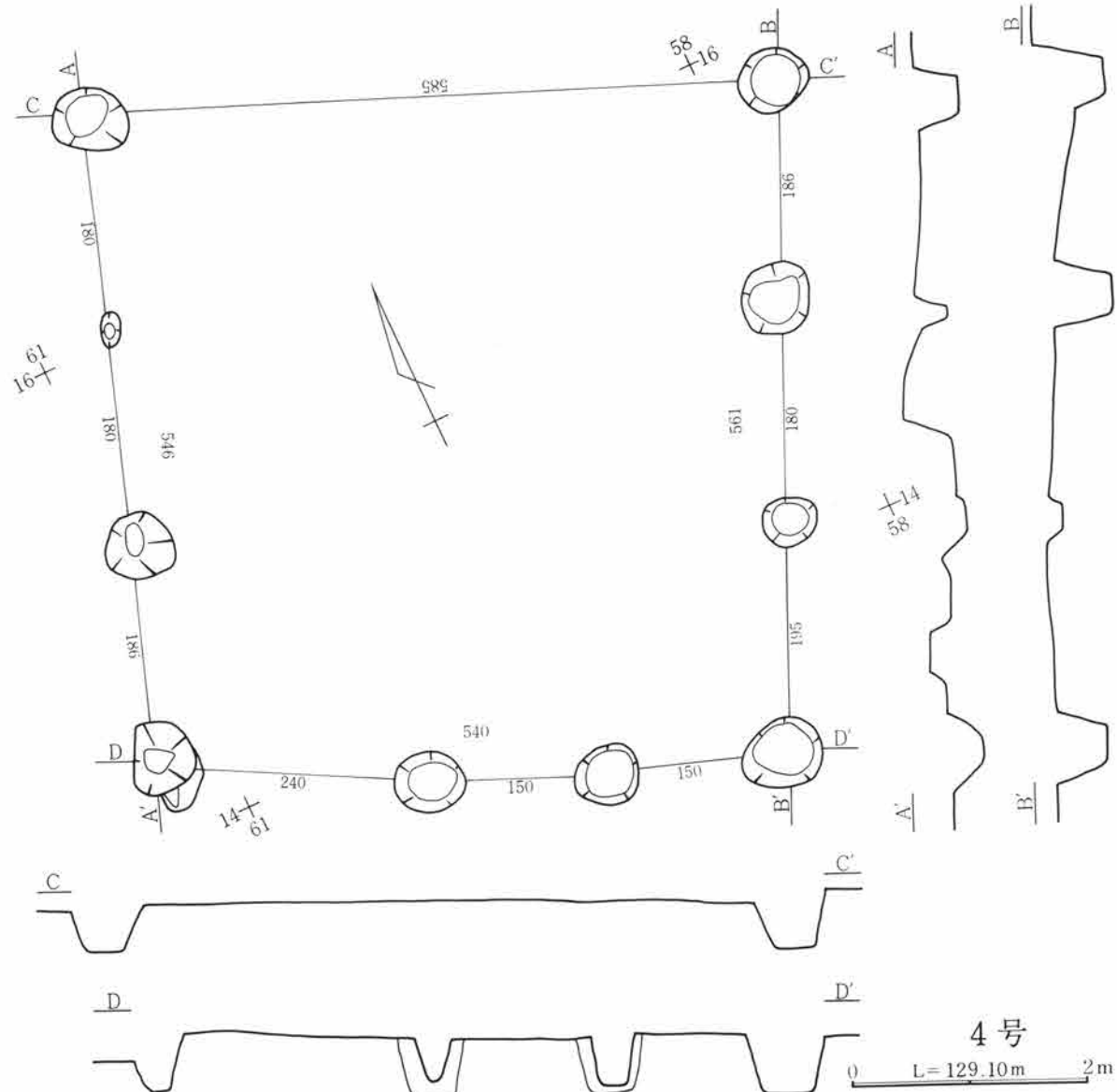
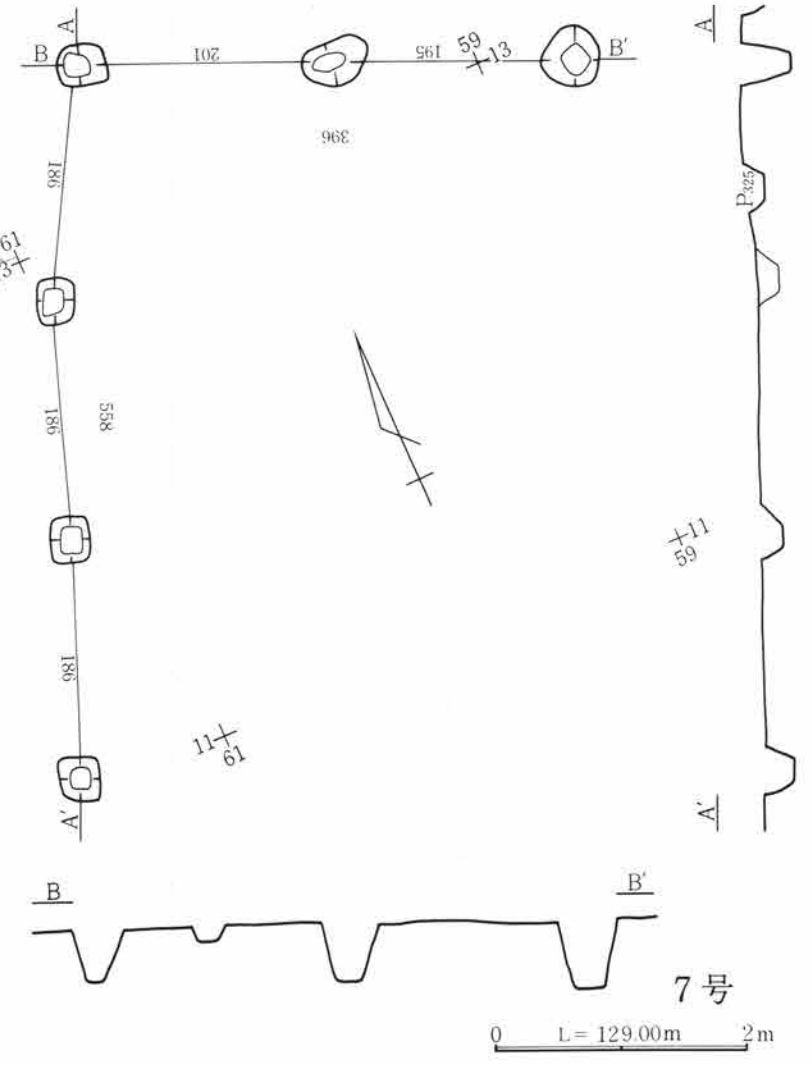
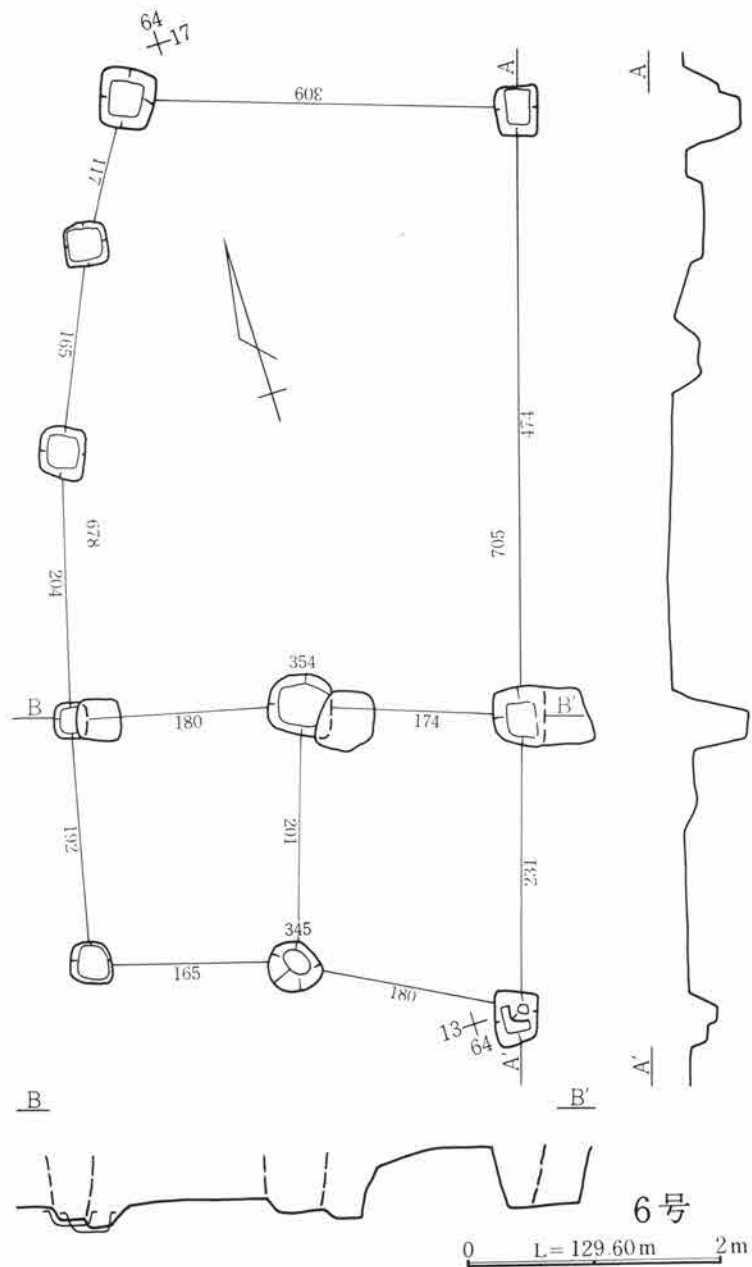
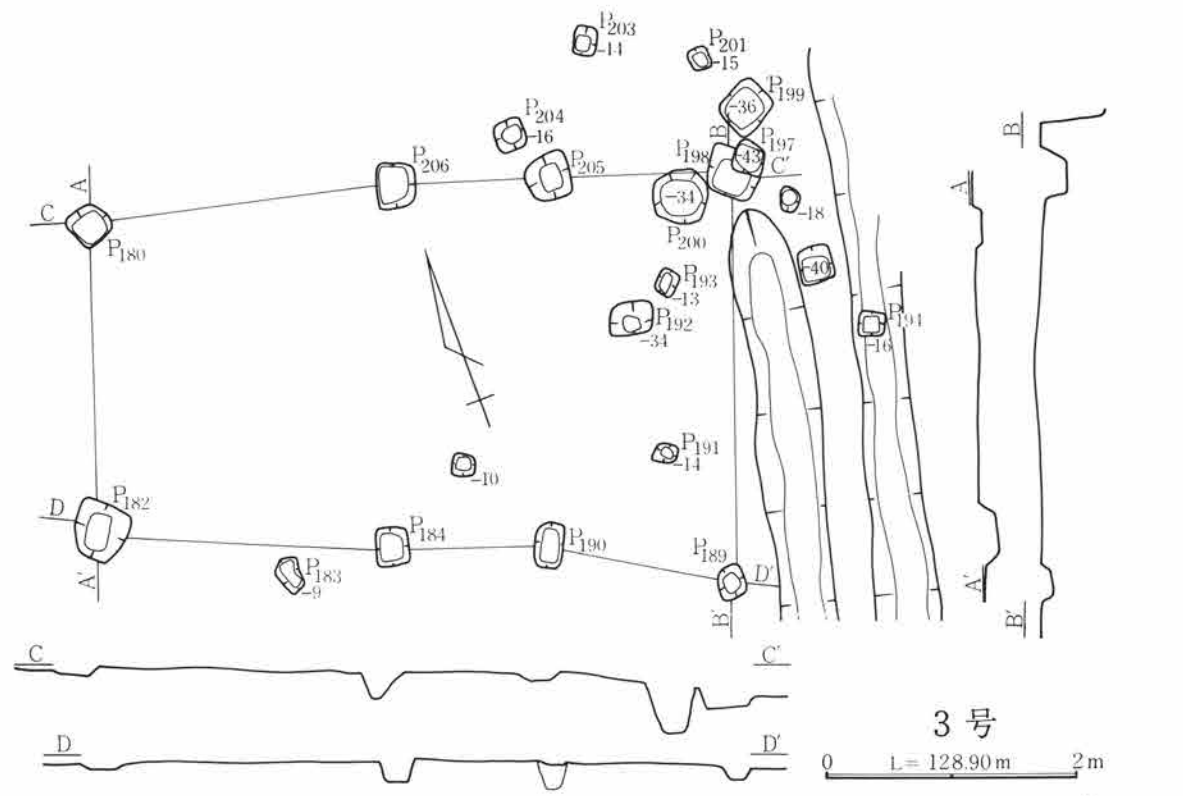
確認した柱材は、検出面がVII層土中であつたため構築時の面より約70cm程下がっていることから、検出された部分は埋設された柱材の先端部のみである。この点で、確認された部分は柱材の根元部分で、これが地上部での状態を



層 序

1. 黒色土-B軽石通有・塊状VII層土多量混入。
2. " " " " 多量・粒状VII層土多量混入。
3. " " " " 粒状VII層土少量混入。
4. " " " " 含有・粒状VII層土多量混入。
5. " " " " 粒状VII層土若干混入。
6. " " " " 塊状VII層土若干混入。
7. " " " " 微粒状VII層土微量含有。

第634図 F区第2号掘立柱建物跡実測図



第635图 F区第3·4·6·7号掘立柱建物迹实测图

現わしているか不明瞭であるが、確認されたものの中で最大径を計るものは303の18cm程で、角材では一辺同様に18cm程である。

検出された柱穴の配列・周辺での遺構の配置関係から、当跡は“長屋門、としての存在と考えられる。長屋門とした場合、門扉は278・307に取り付くと考えられる。また、両脇の1間×2間の部分は衛士の詰所と考えられ、特に、北側の部分は南側に1間×2間の土間が設けられていたと考えられる。

また、柱穴の深度は復原すると約1m程になり、建物は堅固なものであったことが窺える。そして、当跡は、F8溝の西側延長線が当跡の西辺にあたり、両者の延長線は柵列とほぼ直交する状態からも考えられる。しかし、他に検出されている掘立柱建物跡と、当跡及び柵列は、重複関係があり、その建物群には、F8溝の西壁延長線と平行及至直交する状態である。このことは、両者に新旧関係が存在することは明らかであり、当跡と他の建物群（F4・5・6・7号掘立）は、F8溝（F8溝自体はF1溝の制約下に構築されている。）との共存も考慮される点で、“館、の施設には数時期に亙る建て替え、新・造築があったものと考えられる。

これらの建物群を備えると考えられる“館、状の施設は、当跡が門としての存在から“館、状施設の中どの位置に配置されるかが問題である。前述した如く、当跡の正面側は東側にある。しかし、最大規模を有するであろうD8溝は、蒼海城と東国分を結ぶ主要な道としての性格が考えられ、F区内の遺構は、このD8溝による地割による規整が大きく働いていると考えられる。“館、状の施設もこのD8溝に近接している点で正面側は、D8溝側の南面と推定される。これにより、当跡は“東門、としての存在であることが推定され、“館、状の施設も、“館、として認識されるものであろうが、他の遺構の所見記述後まとめたい。

F区第3号掘立柱建物跡

当跡は整理事業を進める間に判明したもので、発掘作業中に認識した存在ではない。この点で、覆土の対比による検討は行っていない。また後述する4・5・6・7号掘立についても同様である。これは、農道以外の部分は耕作の深耕により消滅した遺構が多いと考えられる中で、農道下は耕作の深耕を免れていた点と、農道部調査自体が後行したことにより、現地での確認の不備があったことに外ならない。

当跡は8本の柱穴により想定した。平面形状は柱穴の配列では梯形状を呈し1間×3間である。柱間長は図上に示した。柱間長から30cm前後の公約数が認められるものの、1号掘立同様に確立し得る状態ではない。

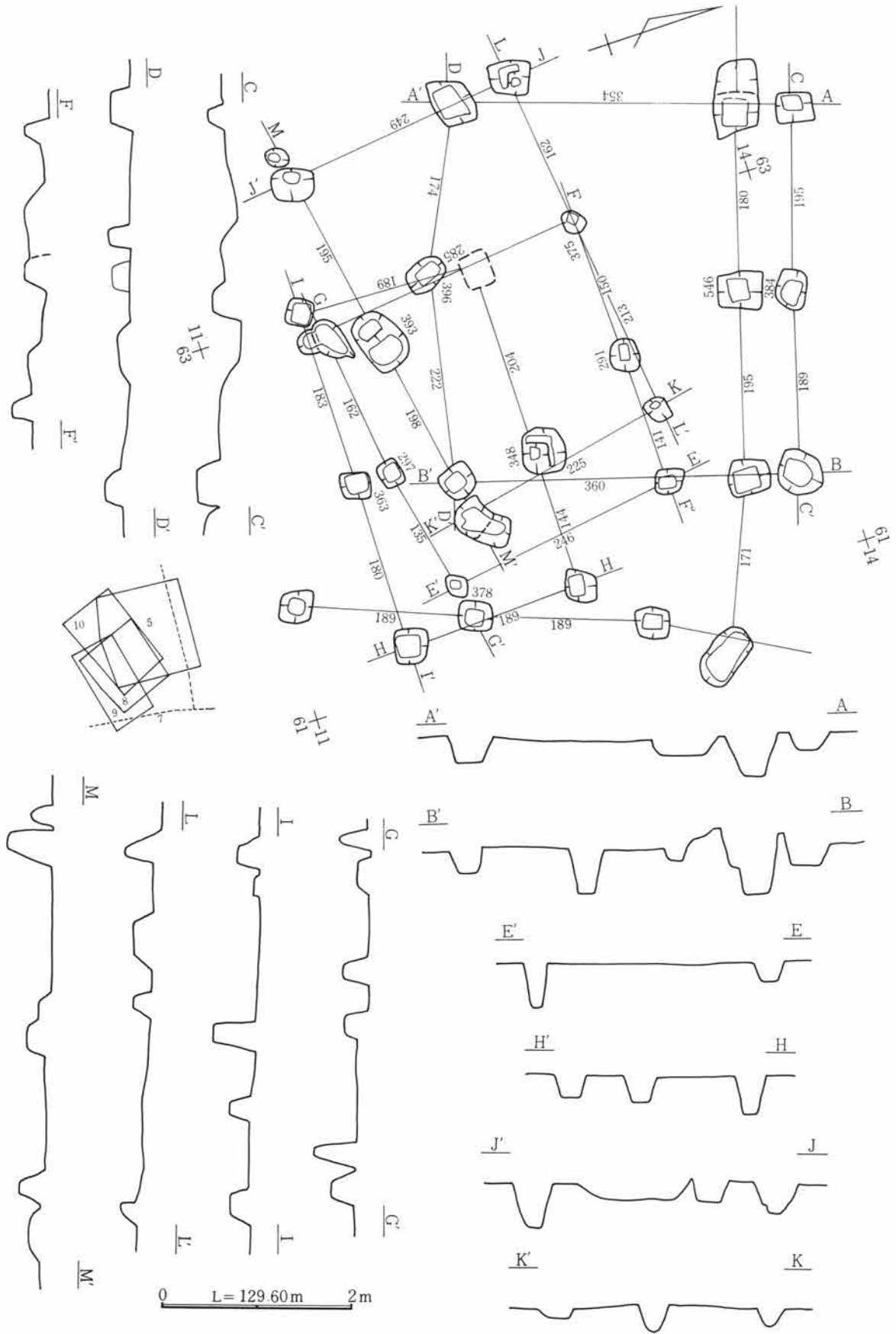
また、上述したとおり、柱穴の配列を鑑みて想定したため形状が梯形状を呈するものも、配列状態からは妥当性があるかにも認められるが、本跡が確実に存在することを立証する十分な論拠はない。

F区第4号掘立柱建物跡

当跡も3号掘立と同様な状態である。建物は10本の柱穴からなる3間×3間である。しかし、北側は南側に対応すると思われる柱穴が該当しなかったため欠いている。柱間は、図上に示したが、公約数としてはおおむね31cmを前後する数値が得られている。また、1号掘立と重複するが、他の5・6・7号掘立とは重複しない。

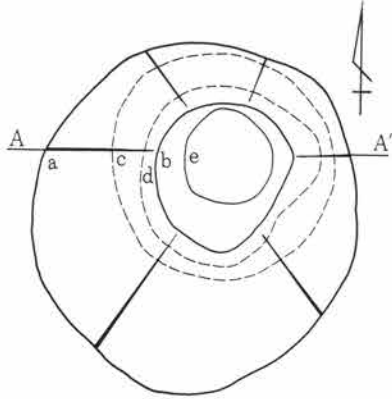
F区第5号掘立柱建物跡

建物は、6本の柱穴からなる1間×2間である。柱間は図上に示した。当跡の柱間からは、31cmを前後する公約数が考えられる。また、8・9・10号掘立と重複する。



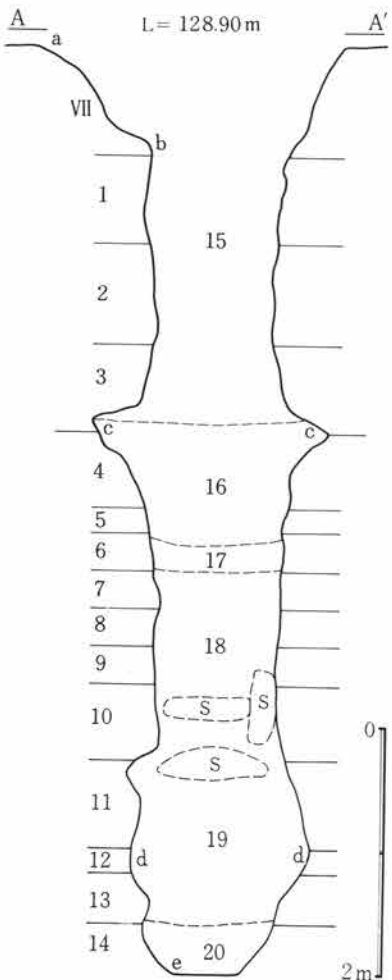
第636図 F区第5・8・9・10号掘立柱建物跡実測図

遺構名称	F区第2号井戸跡		位置	12・13-F-59・60グリッド内			平面形態	円形状
規模(m)	地上径2.72	底径0.69	最細径0.93	最大径2.60	深度7.39	湧水位深度	夏期3.03・冬期6.36	
アグリ部最大径	夏期 1.87・冬期 1.45		湧水層	3・11・12層			耐水層	4・13層



層 序

1. 灰褐色中砂 (固結)。
2. // 礫混入火山灰砂 (固結)。
3. // 粗砂 (固結)。
4. // シルト。
5. 褐灰色シルト。
6. 黒色帯。
7. 褐灰色火山灰。
8. 灰褐色軽石粒。
9. // シルト。
10. // 細砂 (固結)。
11. // 中砂 (固結)。
12. // シルト。
13. 褐灰色中砂 (固結)。
14. 灰褐色細砂 (固結)。
15. 黒色土-B軽石多量混入。
16. 黒色土 (B軽石混入)・塊状VII層土の混土層 (人為層)。
17. 粗砂層崩壊土 (地山)と小円礫の混土層 (人為層)。
18. 角礫・円礫・黒色土 (B軽石含有)の混土層 (人為層)。
19. // 塊状VII層土の混土層 (人為層)。
20. 黒灰色一地山壁崩壊土 (シルト)・腐植土の混土層。

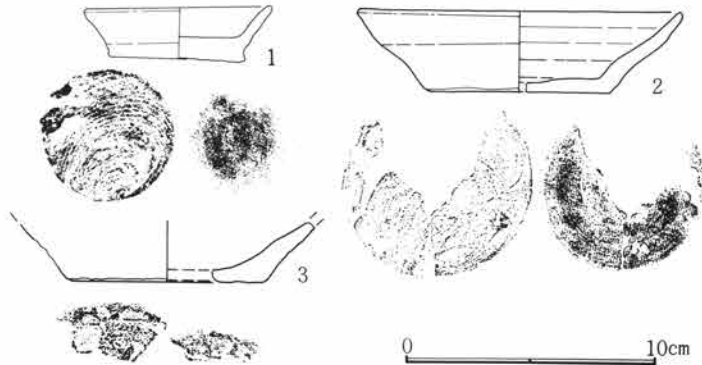


所 見

当井戸跡は、前述したF48址と有機的関係が示唆された井戸である。調査段階に於いては、井戸枠等の痕跡が認められなかった。このことから、当井戸跡も南側調査区で検出されたものと同様に地山井筒円筒型である。

覆土では、16~19層が人為層と判断されるもので、この土層中からの遺物の出土が多く、特に多量の礫が出土している。これらの礫のなかでは、最も大きなもので長軸80cm前後の河原石が3点出土している。他の礫では、F48址で検出されたものと同様の状態のものが主体である。このF2井戸とF48址の関係についての前述は、この礫の出土量からの判断もある。

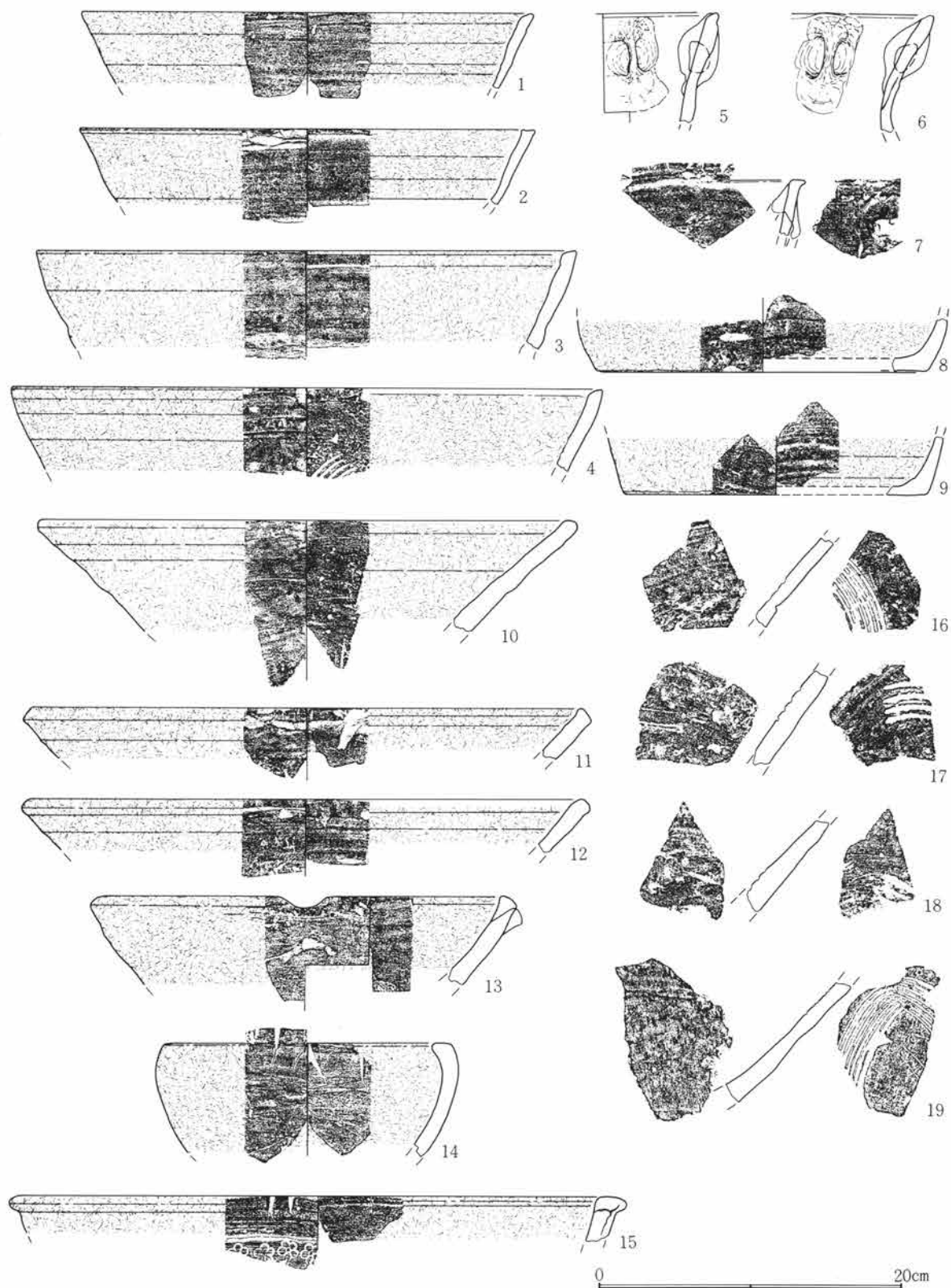
他の出土遺物では挿図に示したのがあり、特に板碑の出土量が多いのが注意される。これらの板碑には、紀年銘が入っていないが、様式上南北朝期の所産と考えられる。土師質土器皿では、5・6・8類



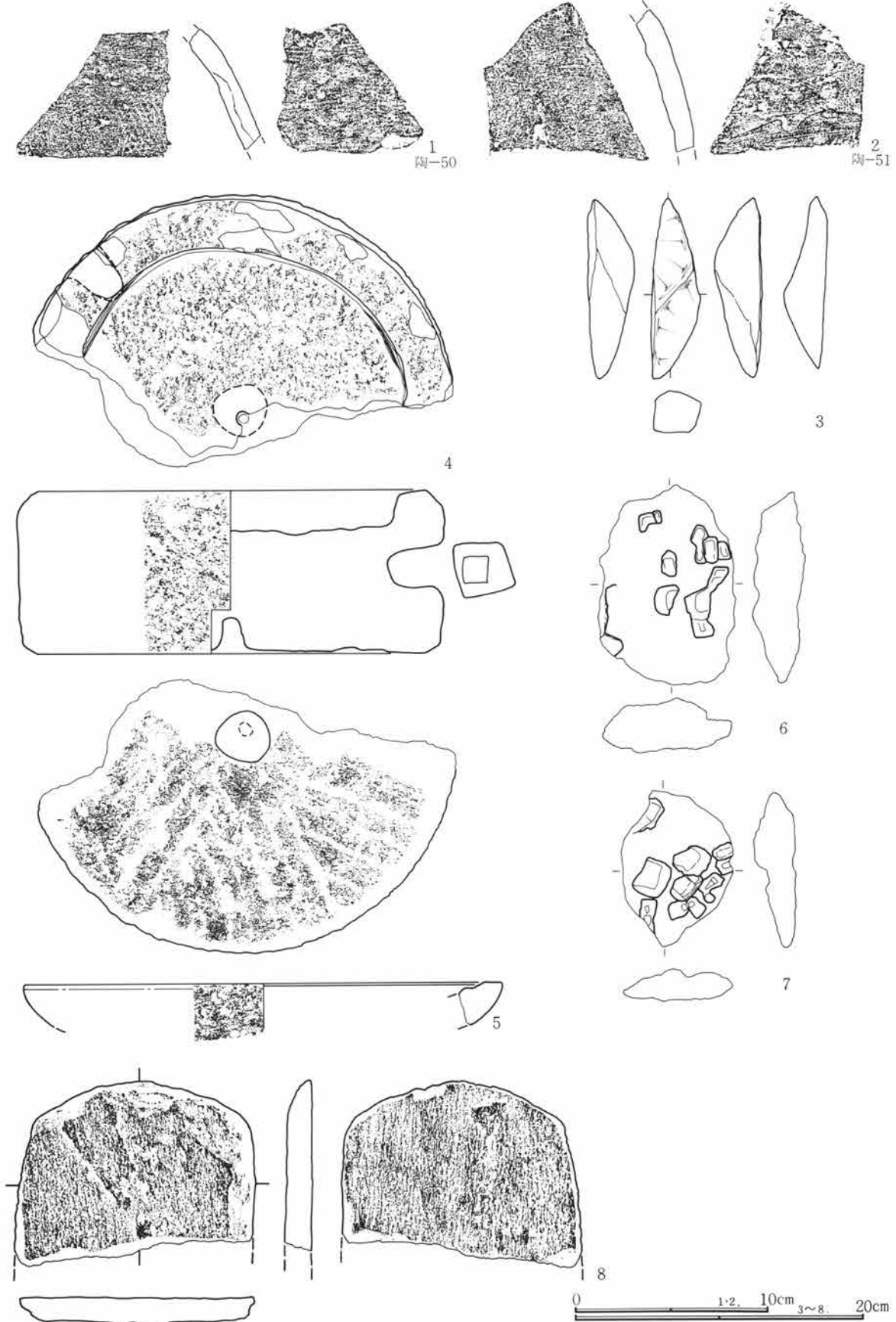
第637図 F区第2号井戸跡・出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構・遺物

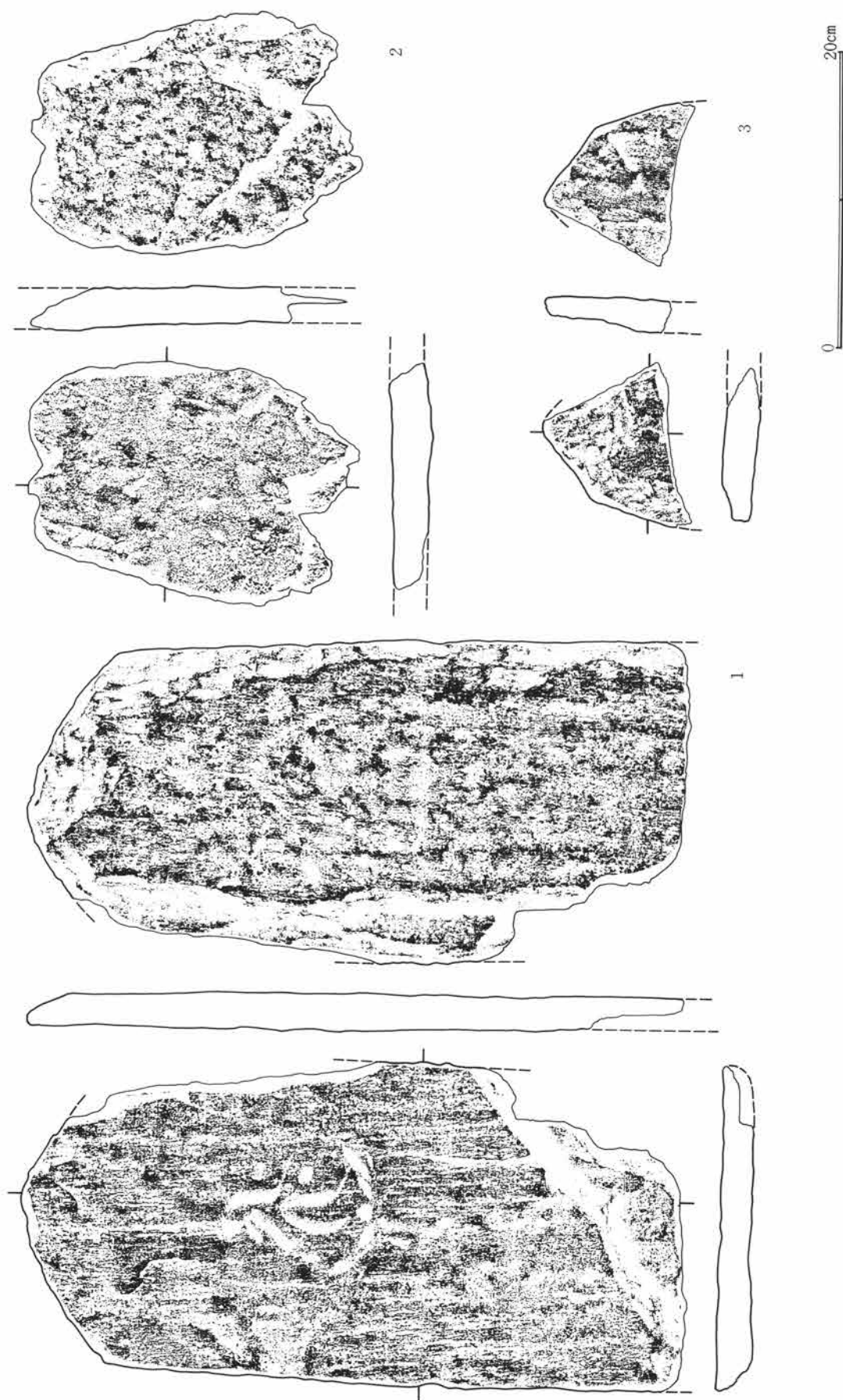
が出土しており、下限として8類の16世紀前半の埋没年代が得られる。内耳鍋でも平底化した底部から体部が直線的に立ち上がる形状から、16世紀前半の年代が得られる。これにより、当井戸跡が16世紀前半頃に埋没したものと考えられ、当遺跡の最終盛期での存在であったことが判断される。



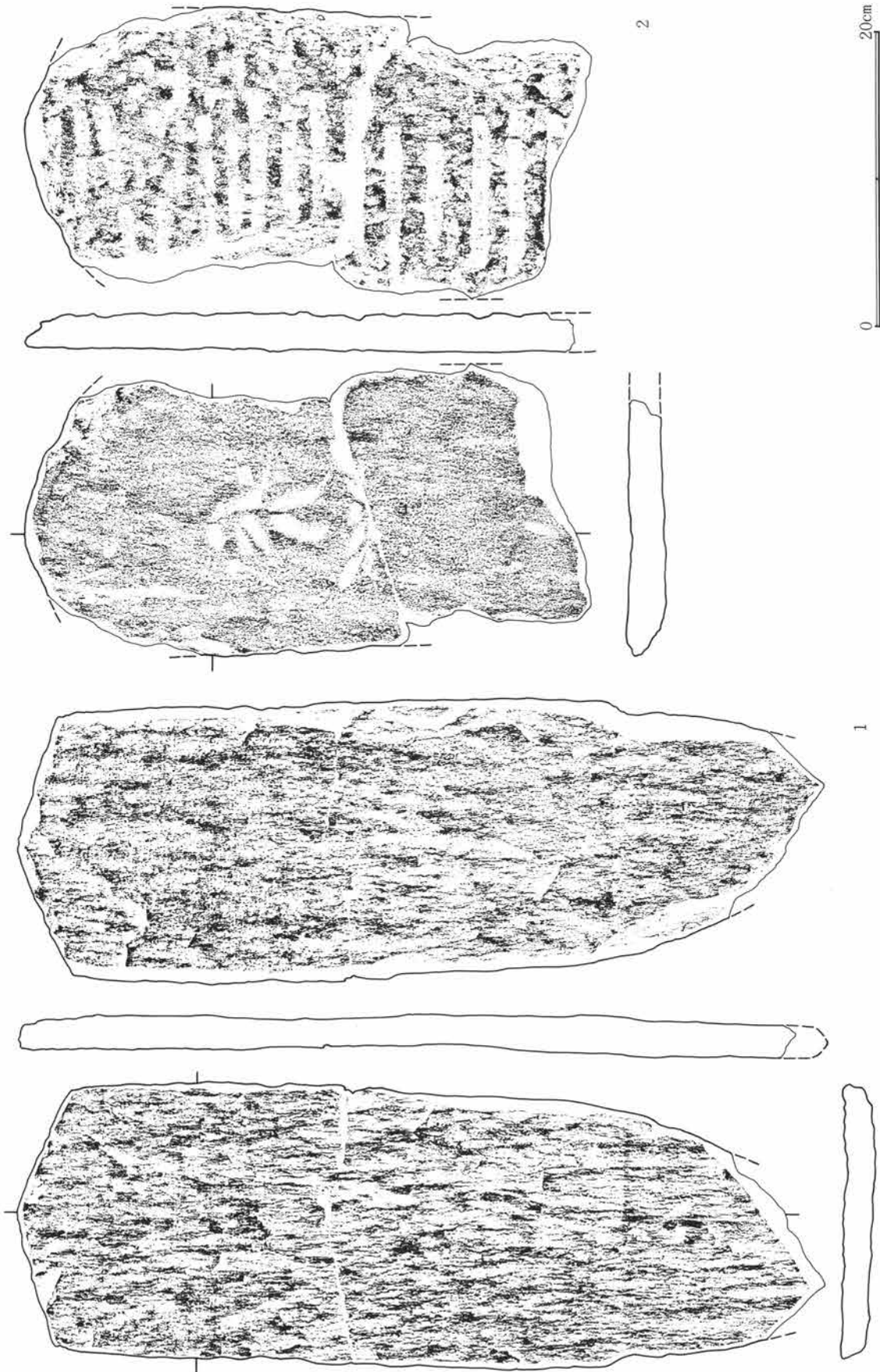
第638図 F区第2号井戸跡出土遺物実測図(2)



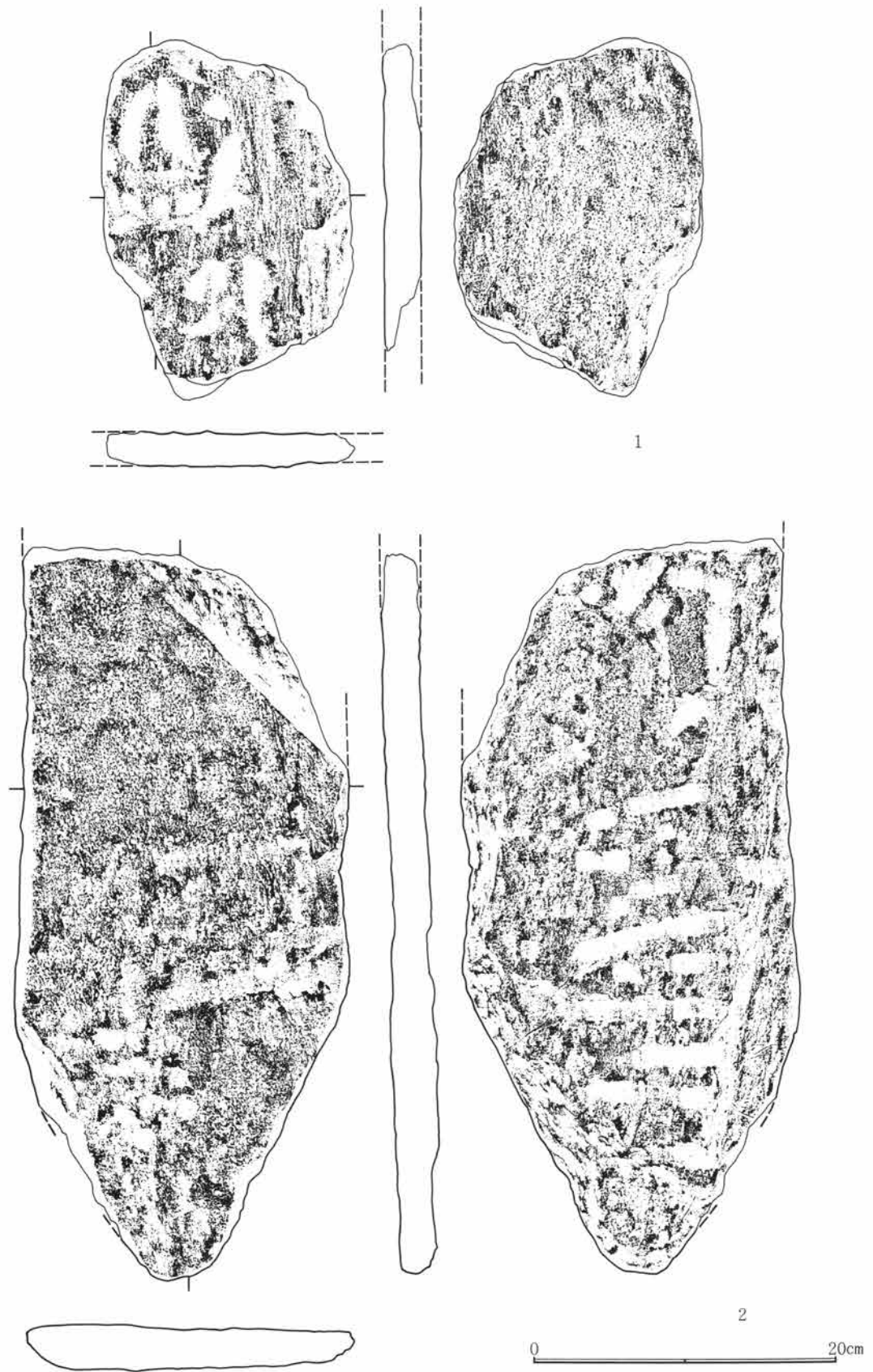
第639図 F区第2号井戸跡出土遺物実測図(3)



第640図 F区第2号井戸跡出土遺物実測図(4)

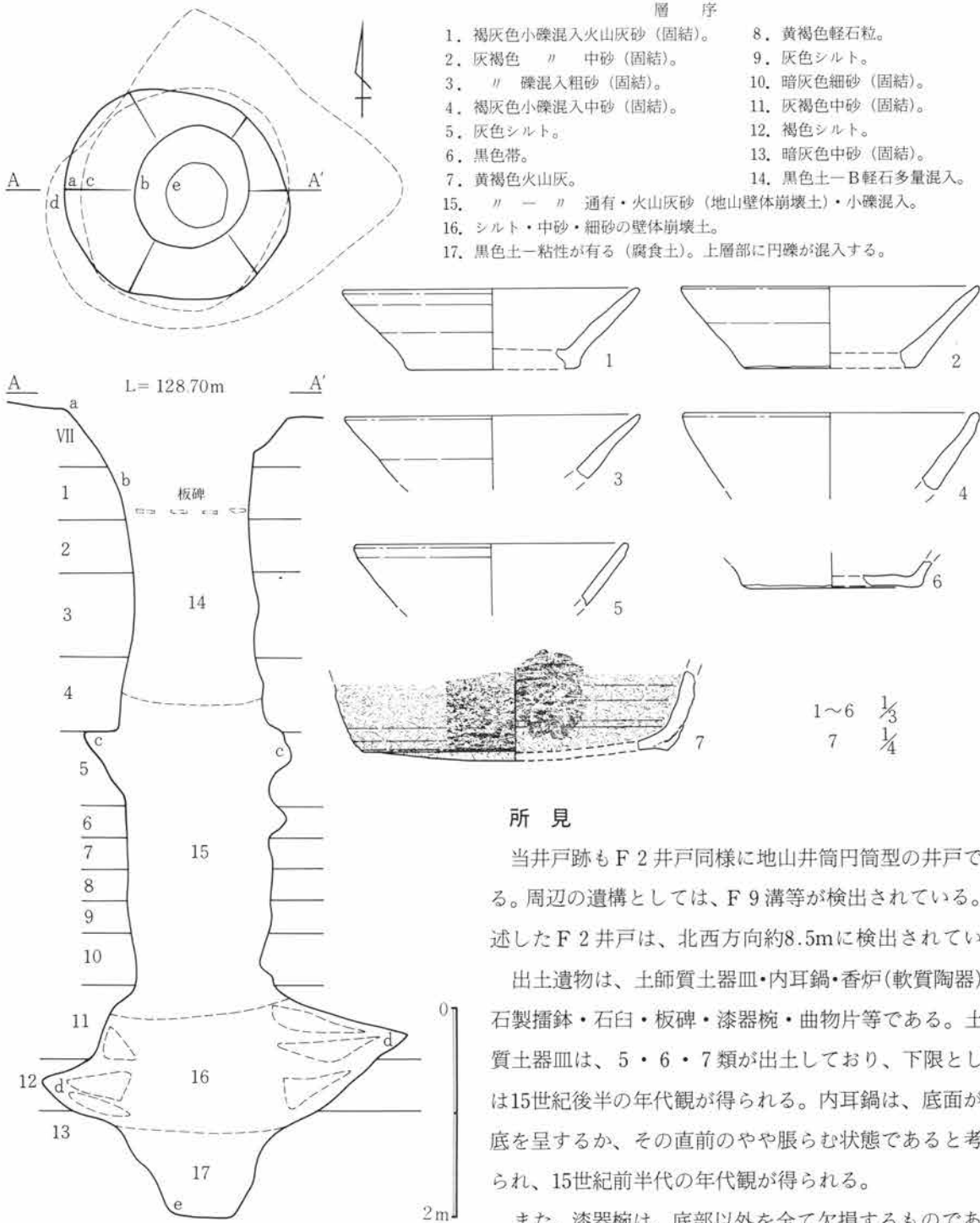


第641図 F区第2号井戸跡出土遺物実測図(5)



第642図 F区第2号井戸跡出土遺物実測図(6)

遺構名称	F区第3号井戸跡		位置	8・9-F-55・56グリッド内			平面形態	円形状
規模(m)	地上径2.18	底径0.57	最細径1.12	最大径3.39	深度7.57	湧水位深度	夏期3.27・冬期6.42	
アグリ部最大径	夏期 1.97・冬期 3.39		湧水層	5・12層			耐水層	6・13層



所見

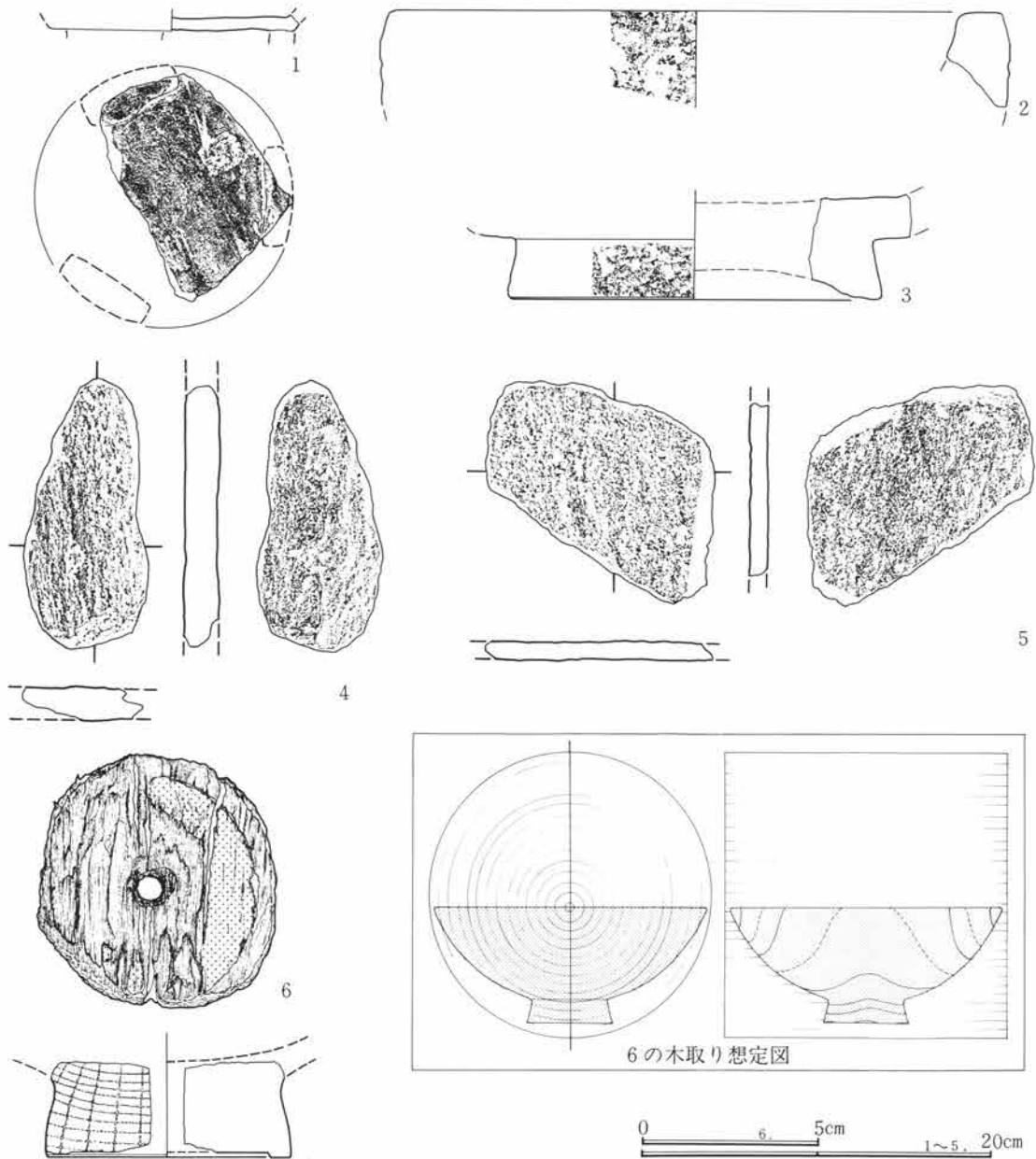
当井戸跡もF2井戸同様に地山井筒円筒型の井戸である。周辺の遺構としては、F9溝等が検出されている。前述したF2井戸は、北西方向約8.5mに検出されている。

出土遺物は、土師質土器皿・内耳鍋・香炉(軟質陶器)・石製播鉢・石臼・板碑・漆器椀・曲物片等である。土師質土器皿は、5・6・7類が出土しており、下限としては15世紀後半の年代観が得られる。内耳鍋は、底面が平底を呈するか、その直前のやや脹らむ状態であると考えられ、15世紀前半代の年代観が得られる。

また、漆器椀は、底部以外を全て欠損するものである。

第643図 F区第3号井戸跡・出土遺物実測図(1)

この漆器椀の底部には、破損後の穿孔が認められ、釣瓶の滑車として再利用されたものと考えられる。挿図中には木取りの模式図を示した。尚、樹種については分析をしていないため不明であるが、散孔材と判断される。



第644図 F区第3号井戸跡出土遺物実測図(2)

土坑

土坑は、調査区内の西側で多く検出される。特に、“館”と考えられる施設群の周辺に認められる。これらの土坑の規模等については図表編を参照されたい。

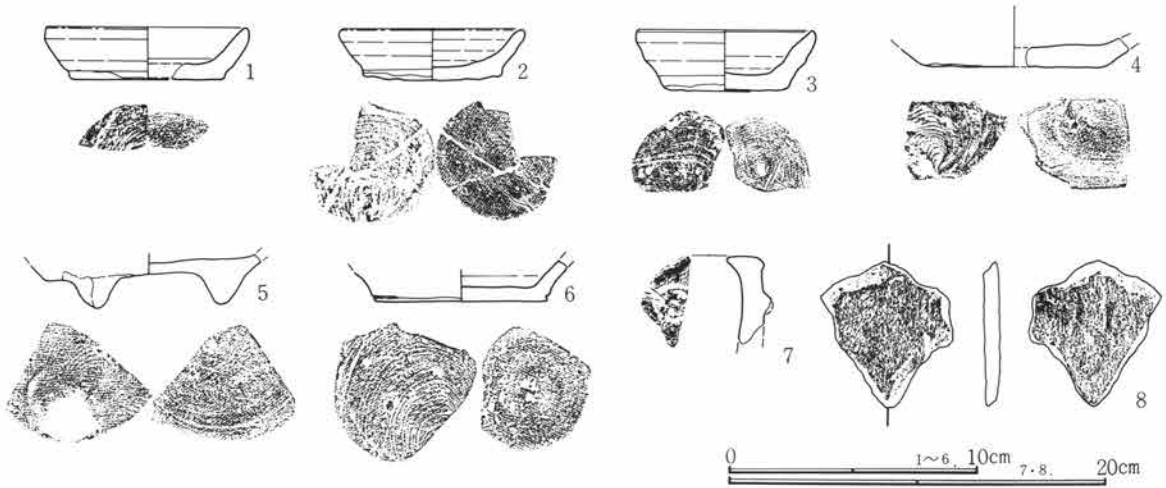
検出された土坑は、その主軸方位により3分される（不整形・円形基調のものを除く）。この主軸方位により分類される土坑は、図表中に示した。そして、土坑は構築時に存在した地割を使用したことが考えられる。これは、分類した土坑の一群は、F1溝の走行方向とほぼ同様な方位を指している。これは、F3・8・9・19溝が、F1溝の制約により構築されており、F1溝構築以後に生じた新たな地割の存在を示している。2群は、F1溝のII期以降で、F1溝の埋没過程が示すように、昭和35年以前にはF1溝の位置を利用し“道”は存続しており、この道を利用しての地割と思われる。この道は、F1溝の覆土を切っている点では、ある時期迄は埋没過程のF1溝の地割で、F1溝埋没後改めて掘削したことにより生じた地割と思われる。3群

は、昭和35年に実施された耕地基盤整備以降に構築された一群と考えられる。この一群は、調査着手直前まで存在していた地割と同様な軸方位を指している。

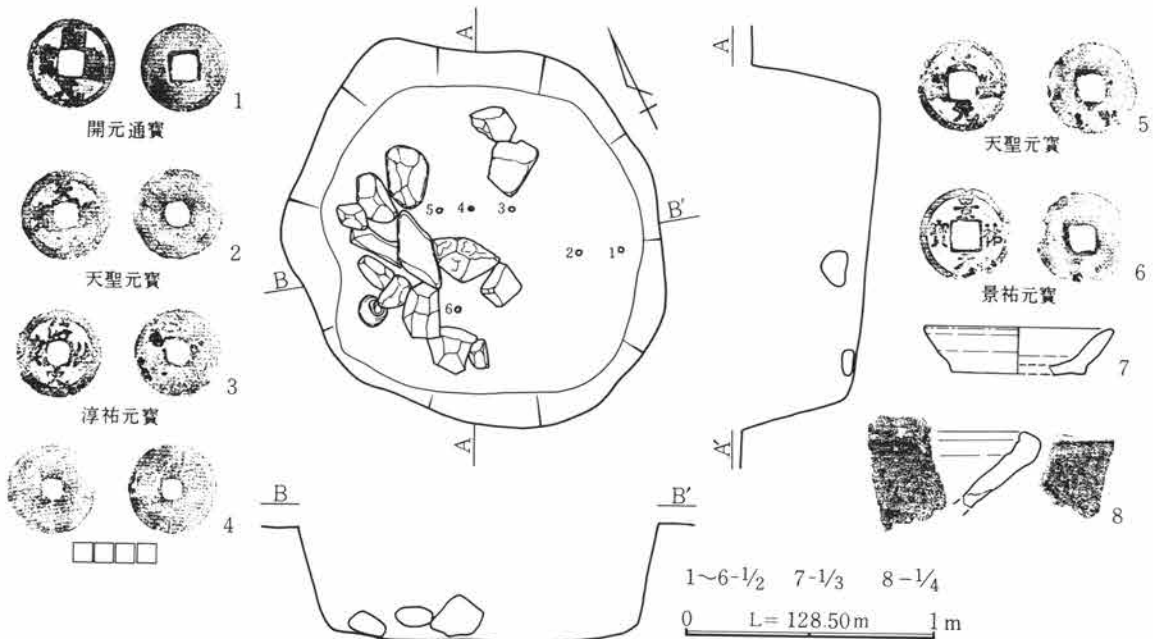
上述した1群・2群は、1群が室町時代～安土桃山時代で、2群は江戸時代以降の所産と考えられる。この1群と2群の境は、当遺跡内から検出されている大規模な溝状遺構は、大半が16世紀には埋没が終了しており、当該地区の領地支配も17世紀に入り変革している点に理由付けられる。

F区第23号土坑所見

当土坑は、底面直上から礫が出土し、底面より若干遊離して銅銭6枚が出土している。他に土師質土器皿片・軟質陶器(鉢)の破片が出土している。銅銭6枚は、土壇墓以外で単体の遺構としては最も多く出土している。出土した銅銭は、開元通寶(621年)1枚、天聖元寶(1023年)2枚、景祐元寶(1034年)1枚、淳祐元寶(1241年)1枚、不明1枚である。



第645図 F区第20号土坑出土遺物実測図



第646図 F区第23号土坑・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

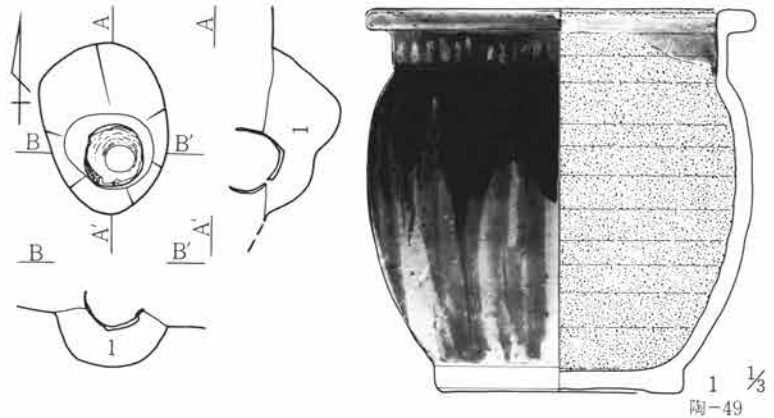
上述した銅銭6枚の存在は、土坑としては特異のものである。当遺跡内で検出された小規模遺構で、銅銭を伴う類例は土塚墓が主体をなしている。しかし、土塚墓の場合は、覆土に特徴が認められるが、当土坑の覆土にはその状態は看取されなかった。当土坑の性格は、出土遺物からは土塚墓としての存在も考慮されるものの、他に積極的に土塚墓としての状況を示す証左はなく、これらの点で土坑として扱わざるを得ない。

所産年代については、上限として淳祐元寶の初鑄年を当てることができるが、土師質土器皿では、4類に該当する点で15世紀代の年代が与えられる。ただ、当該土器が破片である点では、上限としての存在である。

F区第1号埋設陶器

当該の遺構は能動の調査時に出土したもので、位置は29-F-63グリッド内である。

埋設主体は施釉陶器の甕であり、陶器は、底面より16cm程遊離しており、継続的な使用に伴うものとしての存在よりも、寧ろ、何らかの意志により埋設された可能



第647図 F区第1号埋設土器・出土遺物実測図

性が想起される。壺の内部からは、有機質等のものは何ら検出されなかった。

埋没坑は、長軸45cm、同直行軸32cmを測り、楕円形状を呈する。

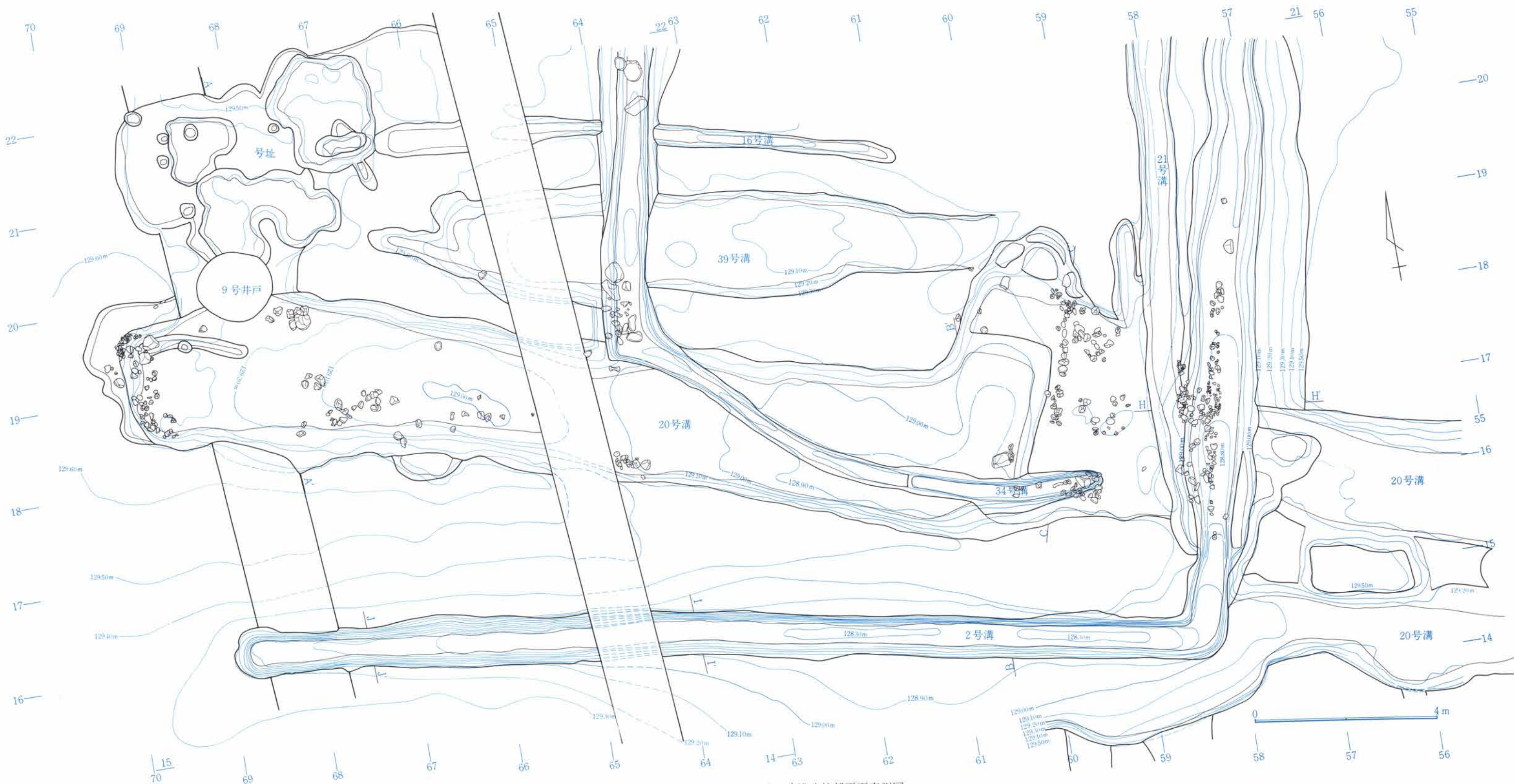
G区の調査

G区はF区以北でH区との間の調査区である。調査対象面積は約6200m²である。調査着手以前の状態は、F区と同様であり、調査自体も、本線・側道部を同時に進行させた。

当区内から検出された遺構は、竪穴状遺構・土坑・井戸跡・溝状遺構・ピット群等が検出されている。また、D区・F区内で検出されたF1溝の北端は、当区内に延びている。

竪穴状遺構は4基が検出されている。この4基のうち、北端に位置するG区第160号址は、H区内で検出された同種遺構2基と近接して位置している。このH区の2基も、近接する状態からすれば、当該区の以構群と直接的に係わるものと考えられる。

溝状遺構では、F区内で検出された状況とは異なる点が多い。検出されたものは、恐らくは、F1溝の開削以降に生じた地割により規整されており、大半のものが、北から5～15度程東側に向かっている。しかし、これらの溝状遺構のうち、後述する各遺構以外のものは、覆土の状態から近世以降の所産と考えられ、耕作に伴う“カマボリ”と考えられる。当該地域は、近世より養蚕が盛んであったことからすると、“桑”を植える時の“カマボリ”としての存在であることが考えられる。そして、長方形土坑でこの“カマボリ”の一群の主軸方位と同位乃至同様及びこれに直交する方向を指すものは、上述の耕作に伴うものと考えられる。これらの耕作に伴うと考えられる以外のものでは、F区で検出された“館”状の区画域を配する状態で検出されているものがある。この“館”状の区画域を示すものが2・4・16・34号溝状遺構である。これらは、調査の都合上、農道部分を最後にして調査実施した為、農道部の調査に至り一つの方形区画域を有すると判断された。これにより、実際の調査時には各溝に対し個別の称号を冠して実施した。この4条の溝により区画される区域は、調査区内で完全に露呈されず、その西側については、調査区域外西側にさらに延びる状態で



第648图 G区第2·20·34号沟状遗构连接部平面实测图

ある。また、想定し得る区画域を考慮し拡張調査を実施するのも望ましいことであったが、方四区画域の存在を認識した時点では、本線部の農道以外の部分は既に埋填された後であり、術を失っていた。この方形区画域の中央部と思われる部分では、この区画域より古い段階の東西方向に走行する溝状遺構が全て立ち上がるという状態で検出されている。この部分は、現地地形上から見ると、現在の東国分地区の宅地部の東端部に当たっており、古代の大規模な溝状遺構（G26溝）も重複するような状態で延びており、この部分における、古代～中世頃の何らかの状況を物語っているのであろう。また、G20溝の上位には、昭和35年までは、中道（天皇道）が存在していたが、今は字名だけがその名残りとして存在している。

溝状遺構

前述してきた溝状遺構の他に、室町時代のものと考えられるものに20溝・27～32溝・38溝・39溝がある。以下これらの溝状遺構の所見について記す。

G区第2号溝状遺構

当溝は、方形区画域の外郭を形成するもので、“コ”の字状に検出されている。この溝は、平面から二様の部分が認められる。これは、東側の中央部分を境とし、これより北側は規模が小さくまた深度も浅い。これより以南では、規模が大きくなっている。前者の部分は、幅員34cm前後で、深度45cm前後である。後者の部分は、幅員の最大値が2.6m程で、深度90cm前後である。

覆土では、前者の部分は判然としなかったが、後者の部分では顕著な状態が看取されている。これは、覆土の中位層より下位の土層には、地山土ブロックが多く存在し、土塁乃至人為埋没による状態を示している。さらに、同部の東西走行する部分には、確認面の段階（上位の覆土）には前述の状況が確認されており、埋没段階での状況を示唆している。また、南西隅部周辺では、礫の出土が多い。この礫は、土塁の崩壊土乃至人為層を示す土層で検出されており、特に、下位に存在するG20溝の覆土を切り構築されているテラス状の部分から認められ、この周辺部の特殊な状態が認められる。このテラス状の部分は、覆土が非常に硬く締められており、土塁等を想起するに足りる状況であるが、平面的な規模に問題がある。この部分の西端部で検出された礫は一列に配列された状態であり、その断面状態は第651図のC-C'である。

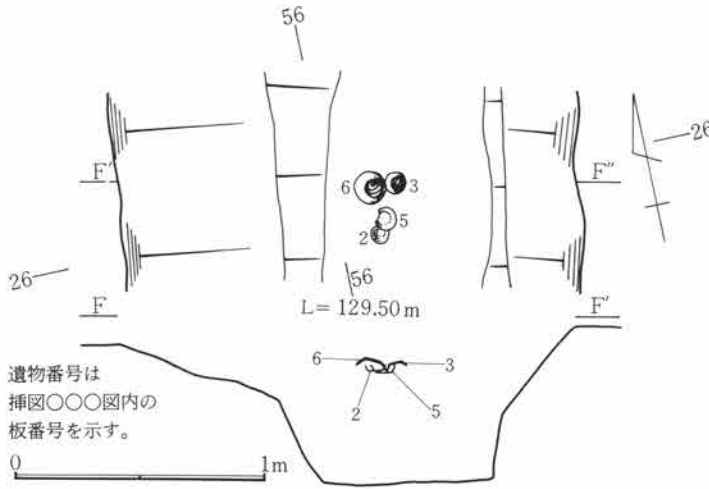
出土遺物は、挿図に示した2・3・5・6（第649図・第650図）の土師質土器皿は、いずれも完形で6・3が逆位で出土し、2・5が正位の状態出土している。この一群は、上述した土塁の崩壊土乃至人為層と考えられる覆土の上位面で検出されており、出土状況から何らかの行為が示唆される。この4点の土師質土器皿の出土状況は、第1分冊中で“土師質土器皿の性格、の部分で示した“溝状遺構中での一括例、として本遺跡例として挙げた事例である。

他の出土遺物では、内耳鍋は3期のものが出土しており、土師質土器皿が3・5類であることから、両者は15世紀前半代の年代観が得られる。そして、土師質土器皿の細分による年代観では、第650図一2・3・5が3類Dであり、同図6は5類Dである点から15世紀でも中頃の年代観が得られる。すなわち、当溝の埋没過程の上限が、15世紀中頃に比定される。

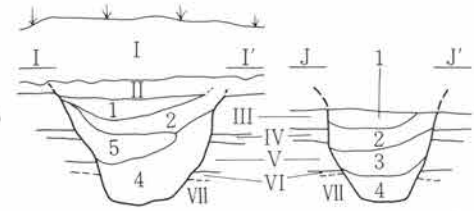
G区第3号溝状遺構

当溝は、上述の2号溝の南北走行する部分で、1.2m程の間を有し、北東隅部から中央やや南寄りの間で平行して存在し、その南端部は21号溝により切れており、同部よりの以南、すなわちこの部分で立ち上がるの

第3章 検出された遺構・遺物

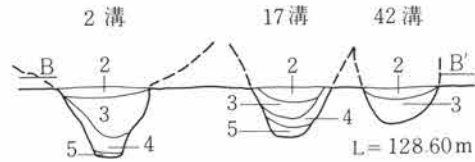
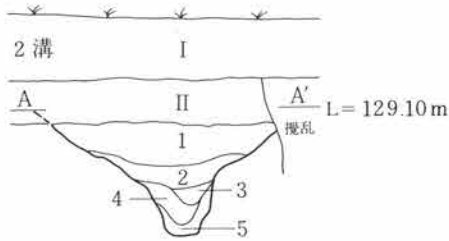


遺物番号は
挿図○○○図内の
板番号を示す。

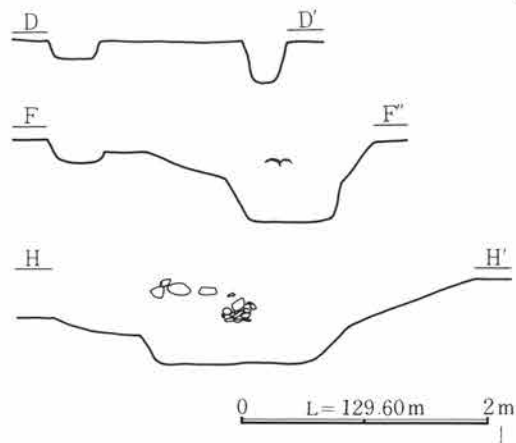
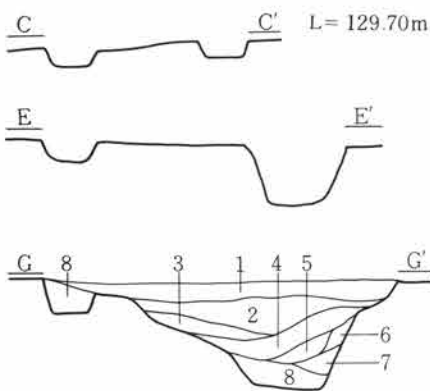


- 層 序
1. 黒色土-B軽石多量・細粒状C軽石多量・粗粒状C軽石若干。
 2. // - B軽石通有・細粒~微粒状C軽石多量・粒状炭化物含有。
 3. // - B軽石通有・細粒~微粒状C軽石若干・塊状濁暗灰褐色土若干混入。
 4. // - B軽石通有・塊状暗灰色土若干混入。
 5. // - // ・塊状VII層土多量(主体)混入。

第649図 G区第2号溝状遺構土師質土器皿出土状況図



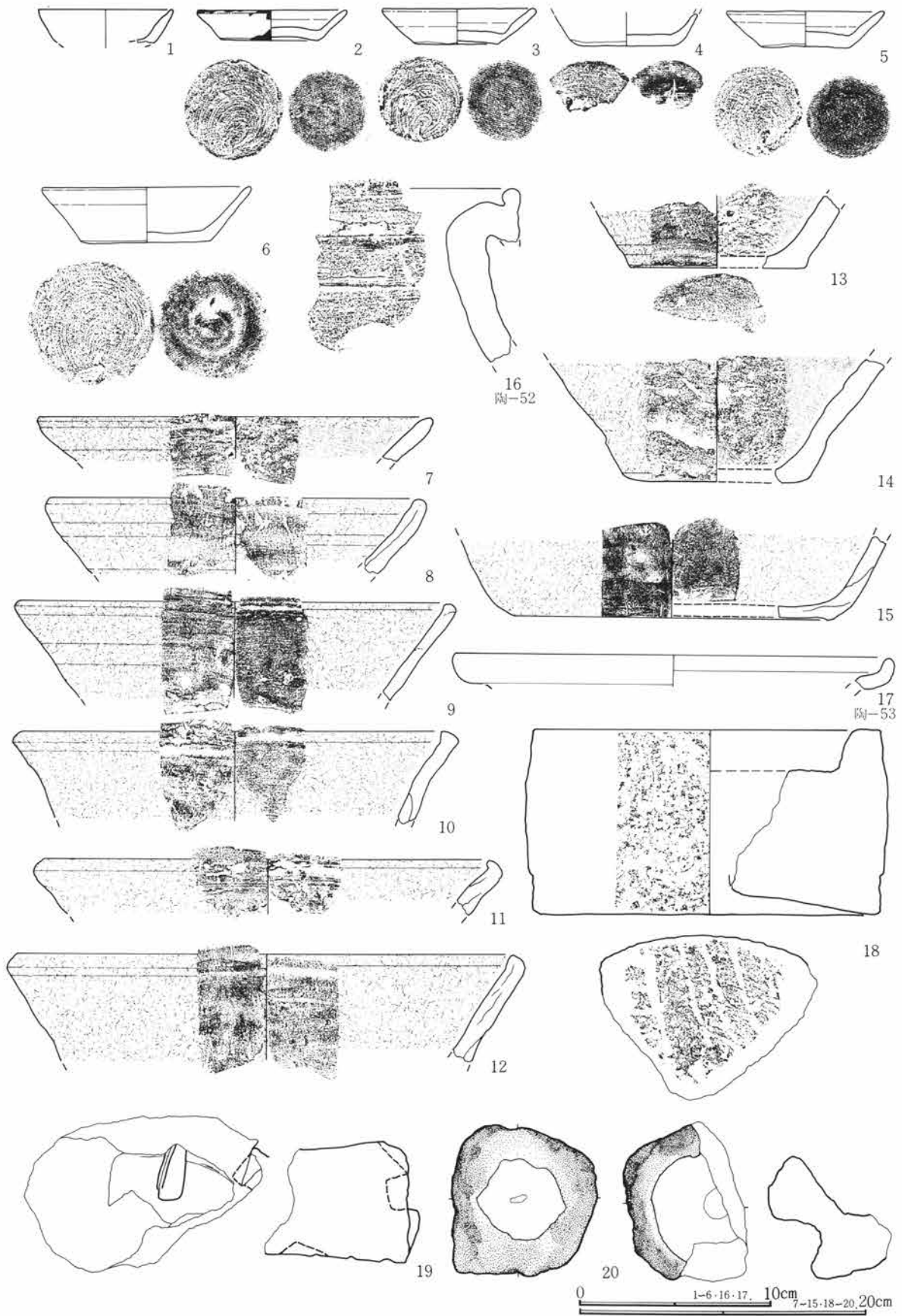
- 層 序
1. 黒色土-B軽石多量・粒状VII層土・粒状炭化物混入。
 2. // - // 通有・細粒状C軽石少量混入。
 3. // - // ・ // 微量・塊状VII層土含有。
 4. // - // ・粒状VII層土多量混入。
 5. // - // ・塊状砂質土(地山土)多量混入。



- 層 序
1. 黒色土-B軽石多量・細粒状C軽石含有。
 2. // - // 通有・塊状VII層土若干混入。
 3. // - // ・ // 塊状V層土含有。
 4. // - B軽石通有・塊状VII層土多量混入。
 5. 黒色土-B軽石通有・塊状VII層土多量・塊状V層土若干混入。
 6. // - // ・ // 粒状VII層土多量混入。
 7. // - 4近質。
 8. 濁暗灰色砂質土一硬質。

第649図 G区第2号溝状遺構土師質土器皿出土状況・第2・3・17・42号溝状遺構断面実測図

第2節 鎌倉時代以降



第650図 G区第2号溝状遺構出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

か、さらに延びるのか不明である。規模は、同溝の北側と同様である。覆土の状態も2号溝の北側の部分と同様で判然としない。

出土遺物は、完存個体のもがない点で、遺物による明確な年代観が得られないが、第663図-1の土師質土器皿から15世紀前半代の年代が上限と思われる。ただし、当溝が2号溝に平行して存在している点で共存性が考えられ、当溝の年代観も2号溝と同様と考えられる。

G区第17・42号溝状遺構

当17号溝は、2号溝の北方部で東西走行している部分の南側で約1.2m程の間を隔てて検出されている。そして、42号溝もこの17号溝と接する状態で17号溝の南側で検出されている。両者は、2号溝と平行する状態であり、前述した3号溝と同様な状態である。

出土遺物は、17号溝から、土師質土器皿の比較的まとまった個体(第663図-4)が出土している。この土師質土器皿は、17類Cに対比されるもので、年代観は15世紀前半が与えられ、上述の2条と同様な年代観である。

G区第20号溝状遺構

当溝は、調査区中央部を東西方向に走行しており、西側は、調査区内で立ち上がっている。遺構の新旧関係では前述した方形区画域を形成する溝により切られている。これにより、当溝が方形区画より先行しての存在であることが判断される。また、当溝は一条のものと思われるが、調査区中央部では、分岐する状態で同位置での重複関係と思われる部分がある。この状態は、F区3号溝・19号溝に近いが、当溝の場合、南北に走行していた農道と接する部分で消滅しており、状況が不明である点から分別しての名称は与えなかったが、恐らくは、新旧関係を有するものと考えられる。ただ、この状況は調査時には確認していない。

覆土は、地山土のブロックを含む層が下部に認められ、土層が単なる自然埋没と考え難く、人為層乃至土塁等の崩壊土と思われる。

当溝の走行方向は、西-15度-北を示しており、恐らくこの方位は、調査区外東側に存在するF1溝と直交状態に近いものと考えられる。このことは、当溝の所産が、F1溝により生ずる地割の規整によるものと考えられ、所産時期もF1溝の示す年代より後出するものと類推される。

出土遺物は第652図に示した他に、土師質土器皿・軟質陶器の細片が多かった。これらの出土遺物のうち、土師質土器皿は、4類のものが出土し15世紀後半の所産年代が得られる。内耳鍋は14世紀後半のものが出土している。陶磁器では、図示した以外にも近世・近代に及ぶものが含まれている。図示したものでは、邦製陶器が15~18・19世紀のものがある。これらの内、15世紀のものが、第652図-13・14であり、磁器では舶載製品に同図-17・19があり、17が13~14世紀、19は15・16世紀の年代が与えられる。これらの遺物から得られる年代観は、中世~近世にかけてである。ただ当溝は、方形区画域を形成する溝に切られていることから、少なくとも、15世紀後半以前での存在である。ただ、当溝の覆土中から出土する土師質土器皿が、2号溝から一括して出土した4点と形態上同一のものである点から、当溝の廃棄と2号溝の廃棄は、時幅を持たずに行われたと考えられるが、前年度報告書で述べた様に、当該の遺物が、精神文化に係わる種としての存在であることを考慮せねばならず、この点では、目安的な年代観としての把握であることを付記しておく。このことから、当溝中に含まれる16世紀以降の遺物は、当溝が、二条状に認められる状態であることから、片側のものが16世紀以降の所産による重複での存在とも思われる。しかし、当溝の位置する直上部周辺には、字

名に残る“中道南、の中道（天皇道）が昭和35年迄は存在していた。この道は前述した“薬師道、と平行して、現在の東国分地区の集落の東側から延びる道で、天皇道の名称は、薬師様（化粧薬師）より上にある道で薬師様より偉いということにより通称されている。これは、昭和20年以前の天皇制政治により具現化したものである。すなわち、この中道は14世紀後半にF1溝の開削により当溝も構築され、地割に大きな影響を及ぼし、現代までその地割が存在していたことを示すものであり、当溝中に含まれる16世紀に大きな影響を及ぼしていたことが窺える。

方形区画の溝状遺構について

G区内で検出された2・3・16・17・34・42号溝状遺構は、調査区内を南北に走行していた農道により、調査途中の段階では不明確なものであった。この農道下に存在していたのが34溝の北西隅部周辺から南走する部分であった。この農道部は、本線敷の同部を除いた部分が終了し、側道の取り付工事の終了を待ち調査を実施した。この農道部の調査により34溝の実態が明らかになり、上述の4条の溝状遺構により方形の区画域を成すことが明らかとなった。

この区画域は、南北長55.4m程で、東西は、西側が未調査の為明らかでないが、この方形区画域の検出されている部分の調査着手以前の地形では、この区画域が存在すると考えられる範囲が、緩やかな斜面を有するものの平坦になっており、この平面部分をもって類推すると、東西長は約90m程になると考えられ、平面形状は東西軸を長軸にとる長方形乃至梯形状を呈すると考えられる。（付図3参照）

以下この方形区画を形成する溝状遺構についての所見等を記す。

G区第16・39号溝状遺構

両溝は、20号溝の西端周辺の北側で平行して近接する状態で検出している。そして、20号溝と同様に、方形区画を形成する溝（34号溝）により切られている。また、両溝が立ち上がる部分は、20号溝と同様であるが、両者の立ち上がった位置には116号址が位置しており、両溝は、この116号址に規整されて存在したことが想起される。出土遺物は礫以外のものは皆無であった时期的には遺物では判断出来ないが、上述した20号溝との状況から、20号溝とほぼ同様の時期と判断される。

G区第27～29・32号溝状遺構

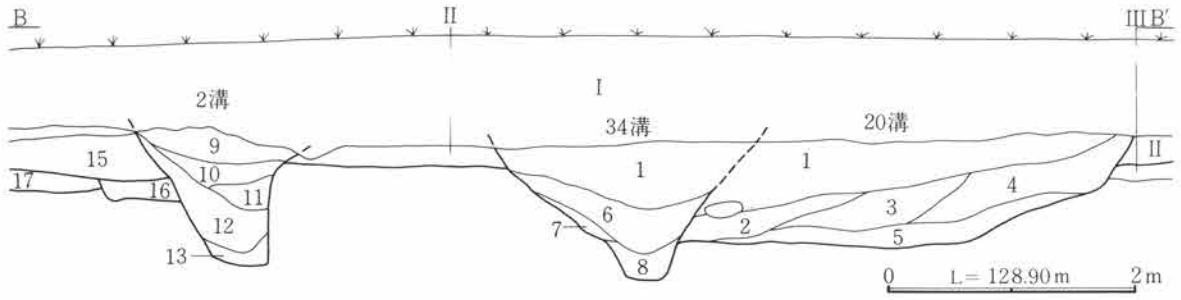
これらの溝は、調査区の西端で群在して検出された。走行方向が34号溝と同様のもの（27・29号溝）と、これに直交状態のもの（28号溝）と、類似性の認められないもの（32号溝等）に分類される。いずれも浅いもので、明確に溝状と判断し難いものが多い。时期的には、34号溝と平行乃至直交という状況から、34号溝とほぼ同時期と思われるが斜交状態のものは、何如とも言い難いが、群在する存在からこれも同様と思われる。

出土遺物は、平安時代の須恵器片のみが若干出土している。

G区第31号溝状遺構

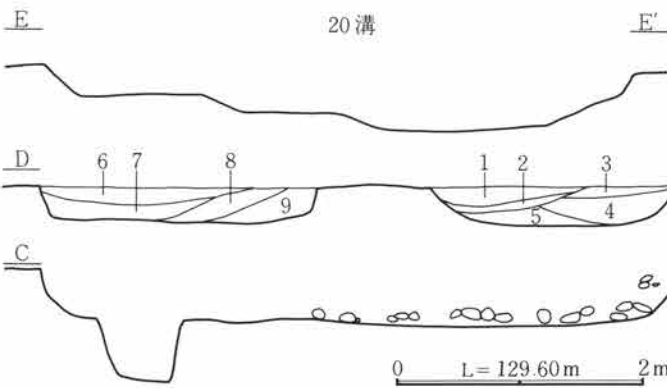
当溝は、上述の一群の中で検出しているが、平面形状が“鍵、状を呈し、他の遺構との関連が考えられたため別扱いとした。走行方向はほぼ南北・東西であり、東西走行の東側延長上には、98・99・111号土坑が存在しており、この3基の土坑が当溝の1部であることも想起される。出土遺物は皆無で、遺物による時期判

第3章 検出された遺構・遺物



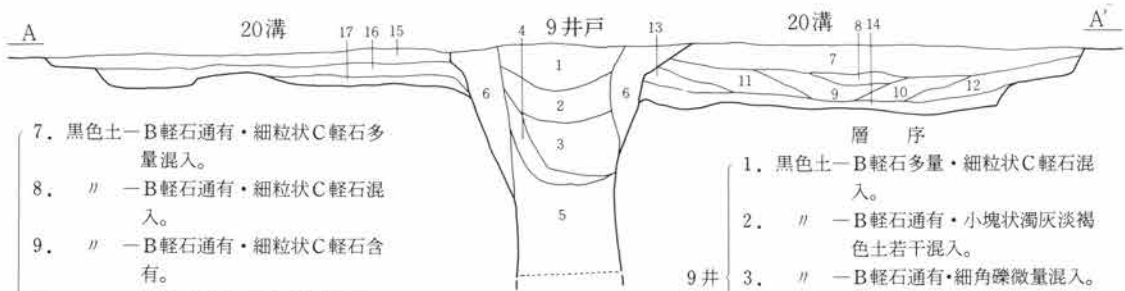
層 序

- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1. 黒色土-B軽石多量・細粒状C軽石若干混入。 | 4溝 11. 黒色土-B軽石通有・細粒~微粒状C軽石含有・塊状VII層土混入。 |
| 20溝 2. // - // 通有・粒状炭化物若干混入。 | 12. // - B軽石通有・塊状濁灰褐色土若干混入。 |
| 3. // - // . // 多量混入。 | 13. // - // . // 多量混入。 |
| 4. // - // 。 | 14. // - // . 細粒状C軽石含有。 |
| 5. // - // . 塊状VII層土多量混入。 | 20溝 15. // - // . // 混入・粘性塊状黒褐色土混入。 |
| 34溝 6. // - // . C軽石若干混入。 | 16. // - B軽石通有・塊状VII層土含有・粒状炭化物・粒状焼土含有・細粒状C軽石若干。 |
| 7. // - // . VII層土含有・粘性強。 | 10溝 17. 黒褐色土-第10号溝状遺構覆土(平安時代)。 |
| 8. // - // . 粗粒VII層土多量混入。 | |
| 4溝 9. // - // . 細粒~微粒状C軽石多量・粒状炭化物含有。 | |
| 10. // - B軽石通有・細粒~微粒状C軽石多量・塊状濁 | |



層 序

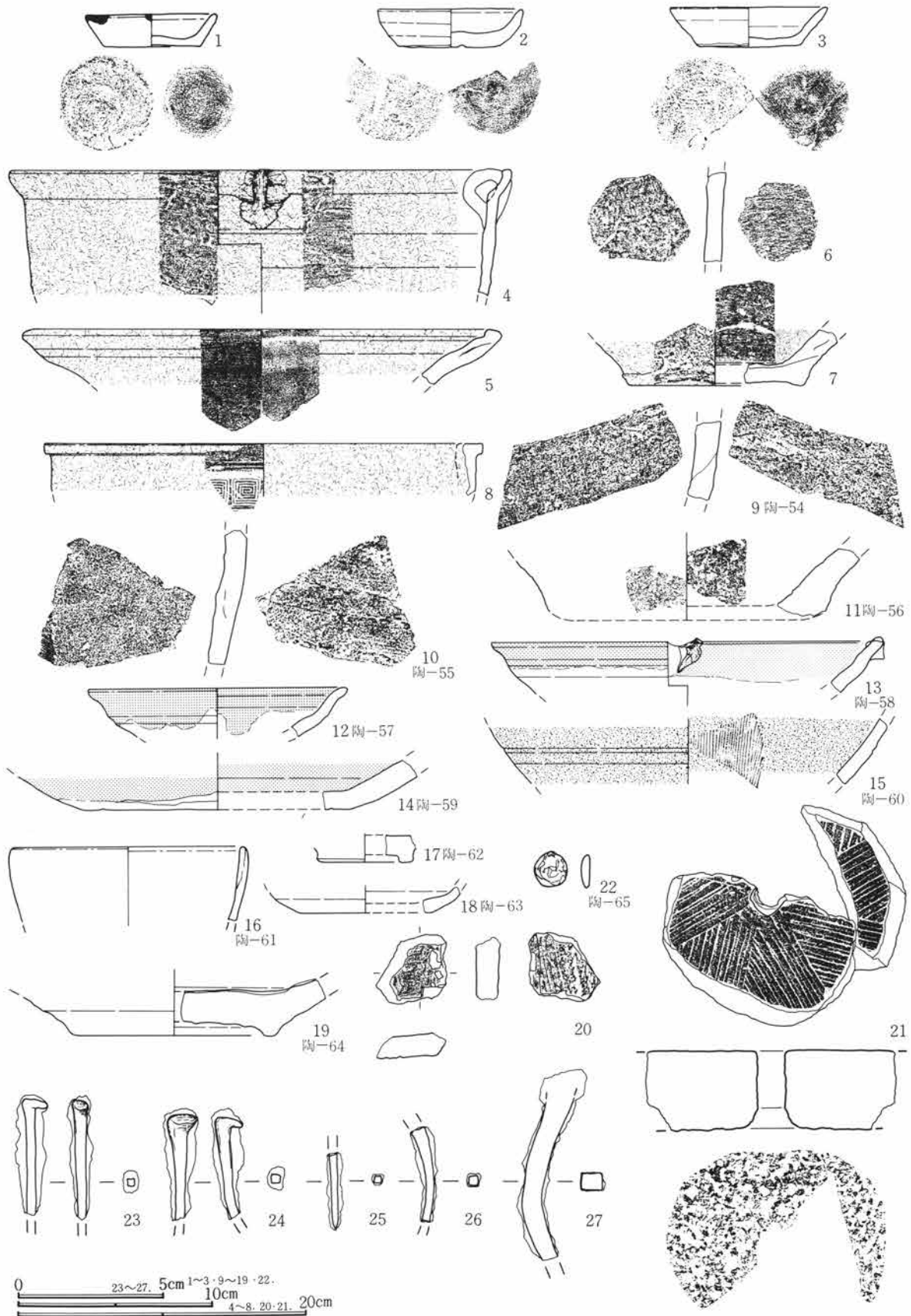
- | |
|---------------------------|
| 1. 黒色土-B軽石通有・細粒状C軽石若干。 |
| 2. // - // . 塊状V・VII層土若干。 |
| 3. // - // . 細粒状C軽石混入。 |
| 4. // - // . 粒状炭化物含有。 |
| 5. // - 1近質。 |
| 6. // - 2近質。 |
| 7. 黒色土-1近質。 |
| 8. // - B軽石通有・塊状VII層土含有。 |
| 9. // - B軽石通有・塊状VII層土若干。 |



層 序

- | | |
|--|------------------------------|
| 7. 黒色土-B軽石通有・細粒状C軽石多量混入。 | 9井 1. 黒色土-B軽石多量・細粒状C軽石混入。 |
| 8. // - B軽石通有・細粒状C軽石混入。 | 2. // - B軽石通有・小塊状濁灰淡褐色土若干混入。 |
| 9. // - B軽石通有・細粒状C軽石含有。 | 3. // - B軽石通有・細角礫微量混入。 |
| 10. // - B軽石通有・粗粒状C軽石・塊状VII層土混入。 | 4. // - 2同質。 |
| 20溝 11. // - B軽石通有・細粒状C軽石・小塊状VII層土含有。 | 5. // - 3近質。粗大塊状濁灰淡褐色土含有。 |
| 12. // - B軽石通有・細粒状C軽石若干・塊状III層土混入。 | 6. // - 塊状濁灰淡褐色土多量混入。 |
| 13. // - B軽石通有・細粒状C軽石若干混入。 | ※濁灰淡褐色土-地山内微粒砂状土=火山灰。 |
| 14. // - B軽石通有・細粒状C軽石微量・粒状炭化物・塊状VII層土若干混入。 | 15. 黒色土-B軽石通有・細粒状C軽石混入。 |
| | 16. // - // . // 若干混入。 |
| | 17. // - 14同質。 |

第651図 G区第2・20・34号溝状遺構・第9号井戸跡断面実測図



第652図 G区第20号溝状遺構出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

断は出来得ないが、34号溝に切られていることから、少なくとも34号溝より古く、方形区画より先行して存在したことが考えられる。

G区第34号溝状遺構

当溝は、16・20・31・39号溝を切り構築しており、上述の4条の溝状遺構に囲まれた状態であり、4条の溝状遺構を外郭とすると当溝は内郭乃至主郭の部分の溝である。そして、平面では、「鍵状」を呈し、東側末端部は、外郭の溝の南東隅部周辺に達し、上述の溝と平行する状態で検出されている。

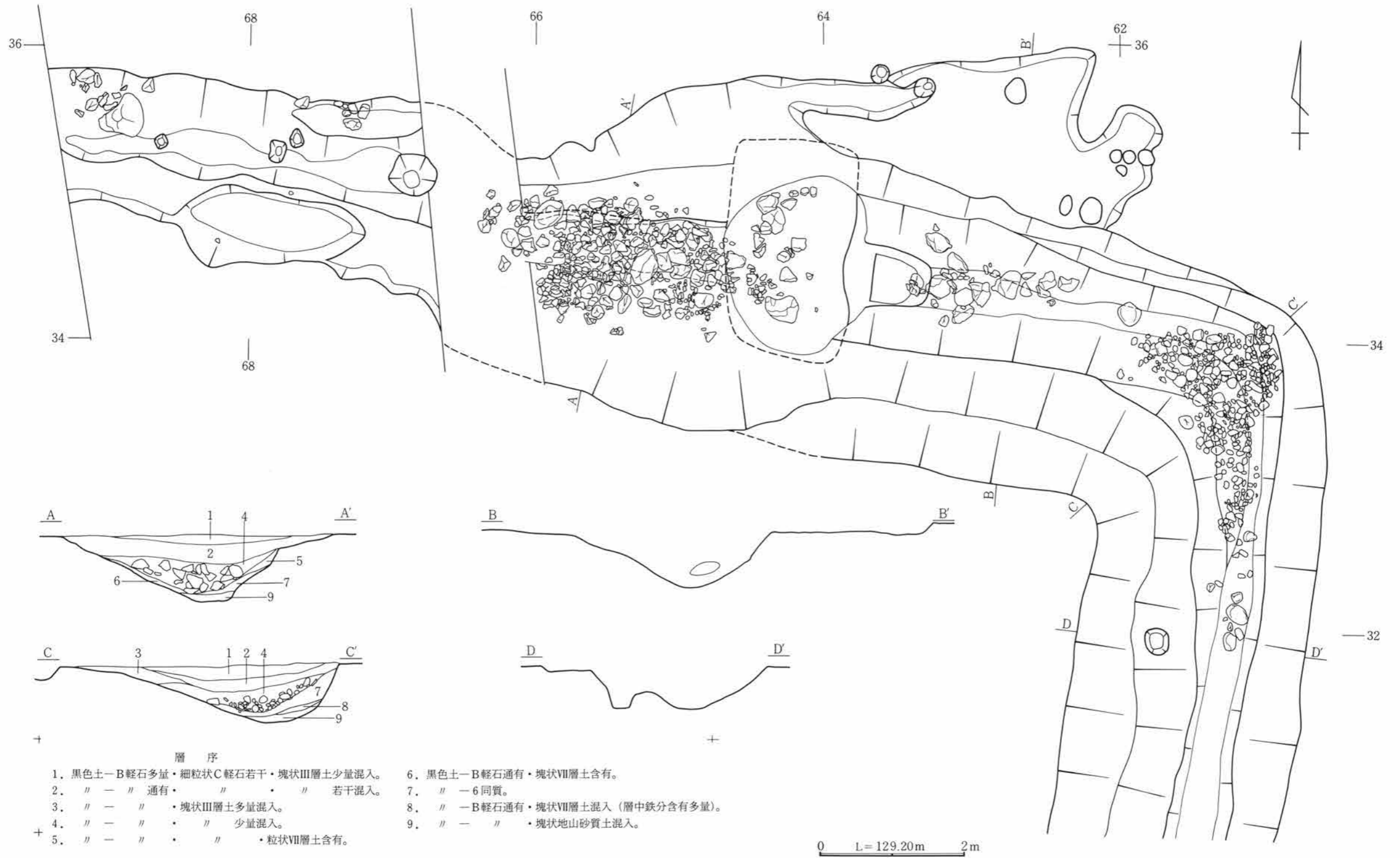
規模は、北側で東西走行する部分は約25m、南北走行する部分は約32m、南側の東西走行する部分は約11m程である。幅員は、0.4～4.6m程を測り、広狭の差が著しい。底面は平坦でほぼ水平である。

覆土の状態は、2号溝と同様な状態で、上位層の1・2層はブロック土の存在が多くはないが、中位より下位の層では、顕著である。

出土遺物は、G区内の遺構で最も多い。出土した器種は多岐に亘り、土器・陶器・磁器・石製品・石造品等がある。土器類では、土師質土器皿が比較的多く出土しているが、破片化しているものが大半である。図示したものは比較的良好な状態のものが復原実測の可能な個体である。ほぼ完形に近い状態のものは第654図-3がある。この個体は、口唇部～口縁部が小単位に欠損するものである。これらの土師質土器皿には、1類・2類A・7類・6類B・5類Bなどが含まれている。これらの中で最も古い1類が14世紀中頃の段階であり、最も新しい6類Bで15世紀後半代の年代観が得られる。軟質陶器は、内耳鍋・鉢等が出土しているがいずれも破片である。この内耳鍋は、2期・4期のものが出土しており、前者が15世紀前半、後者が15世紀後半の年代観が得られる。他に、第656図-4の花瓶がある。この花瓶は、中国元代の製品に祖形があるものと考えられる。陶・磁器では13世紀から15世紀の舶載・邦製品である。石製品は、砥石・播鉢・白などが出土している。これらの遺物は、日常生活に直接的に係わる器種であるが、後述する石造品は、日常生活に直接的には係わらない種のものである。

石造品の出土は非常に多い。量的にはコンテナケースに6箱程出土している。だが、出土したものは、全て破片化したもので、その状態から人為的に破壊されたものであることが判断される。この状態のもので比較的能く接合出来たものに第658図-1がある。

この石造品の種類に以下のものがあるが、細片化したものの中には形状判断が全く出来ないものが多い。最も量的に多いのが宝篋印塔の破片である。この宝篋印塔の中でも、基礎・塔身・請花・九輪の部分が目立つが、他に蓮台・隅飾り突起が少量含まれる。また、笠では隅飾り突起の他は、第659図-8が1点のみ認められた。これらの中で、基礎の出土が最も多い。ただ、個体数としての量でないが、破片化したものの中でも、個体数が最も多い。この基礎及び蓮台から2型式の宝篋印塔が存在したことが判断される。次いで多いのが、宝塔の破片である。個体数としては、2乃至3もしくはこの倍の数量である。この宝塔と判別出来るものに第658図-1・第659図-5～7・第660図-1がある。これらの内第958図-1は笠の部分である。この笠も著しく破壊されている。破壊の状態を見ると、各隅の部分から始められている。これは、破損で、隅部を有するものについては全て同様である。本品については、その状態を同図中の右上に示した。第659図-5～7・第660図-1は、塔身の部分である。この4点は、破片化したもので接合出来た個体毎に示した。すなわち、形状からは2個体が考えられる。これは、基礎部との接する部分が段状を有するもの（第659図-6・7）と、段状のないもの（第660図-1・第659図-5）であり、段を有するものは、基礎に刳込があったと考えられる。成形はいずれも細い丸鑿状の工具で上・下方向から研っている。この痕跡を認める部分は、



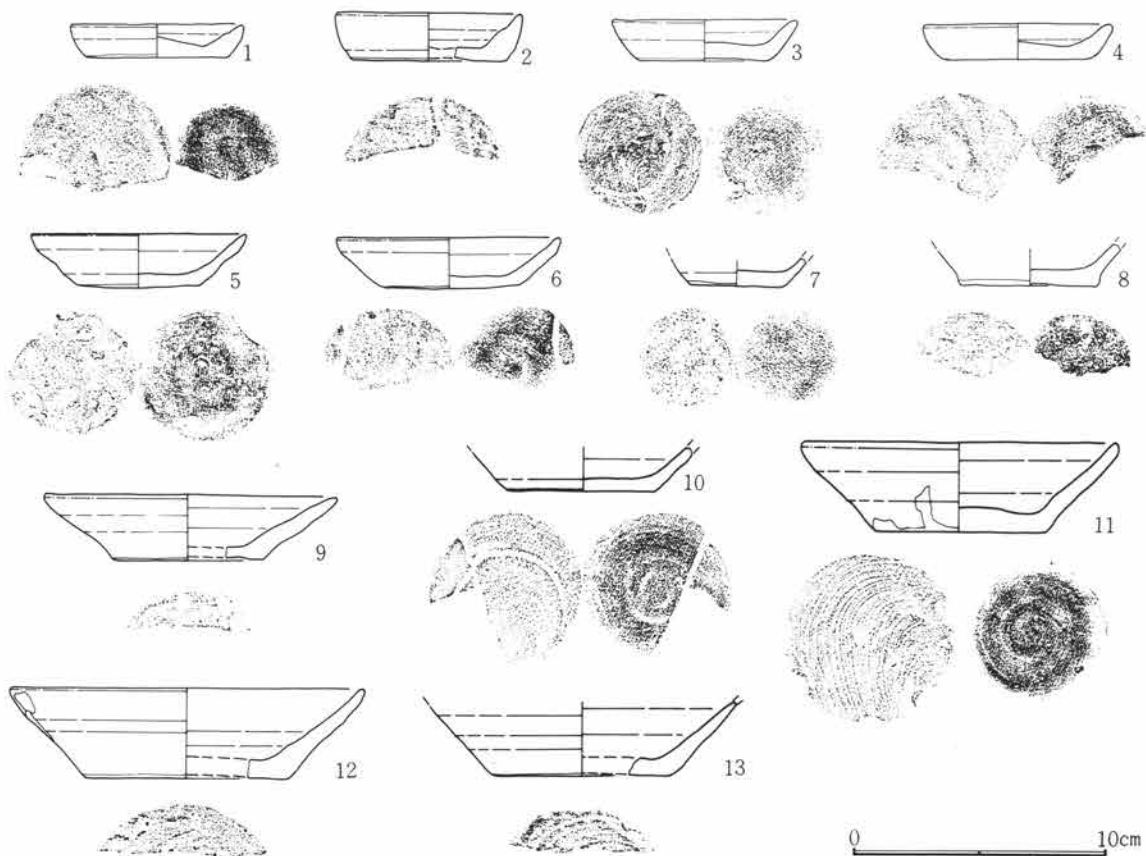
第653図 G区第34号溝状遺構北東部実測図

内面のみで、中央部で顕著である。内側でこの痕跡が認められない部分は、粗い整形痕を留めている。外面は、水磨き整形で仕上げた後に後述する梵字等を刻んでいる。上述の両者は、外面に縦位の方向で肩の部分から基礎と接する部分まで沈線により刻字の区画線を有し、この沈線間に梵字・漢字・漢数字を陰刻している。第659図-5には、漢字・漢数字で「曇・十二年丁亥・月十日・□□□」が認められ、同図-6には、「基・門」が認められ、さらに、門の上位には、卍があり、禪の下半部とも思われる。

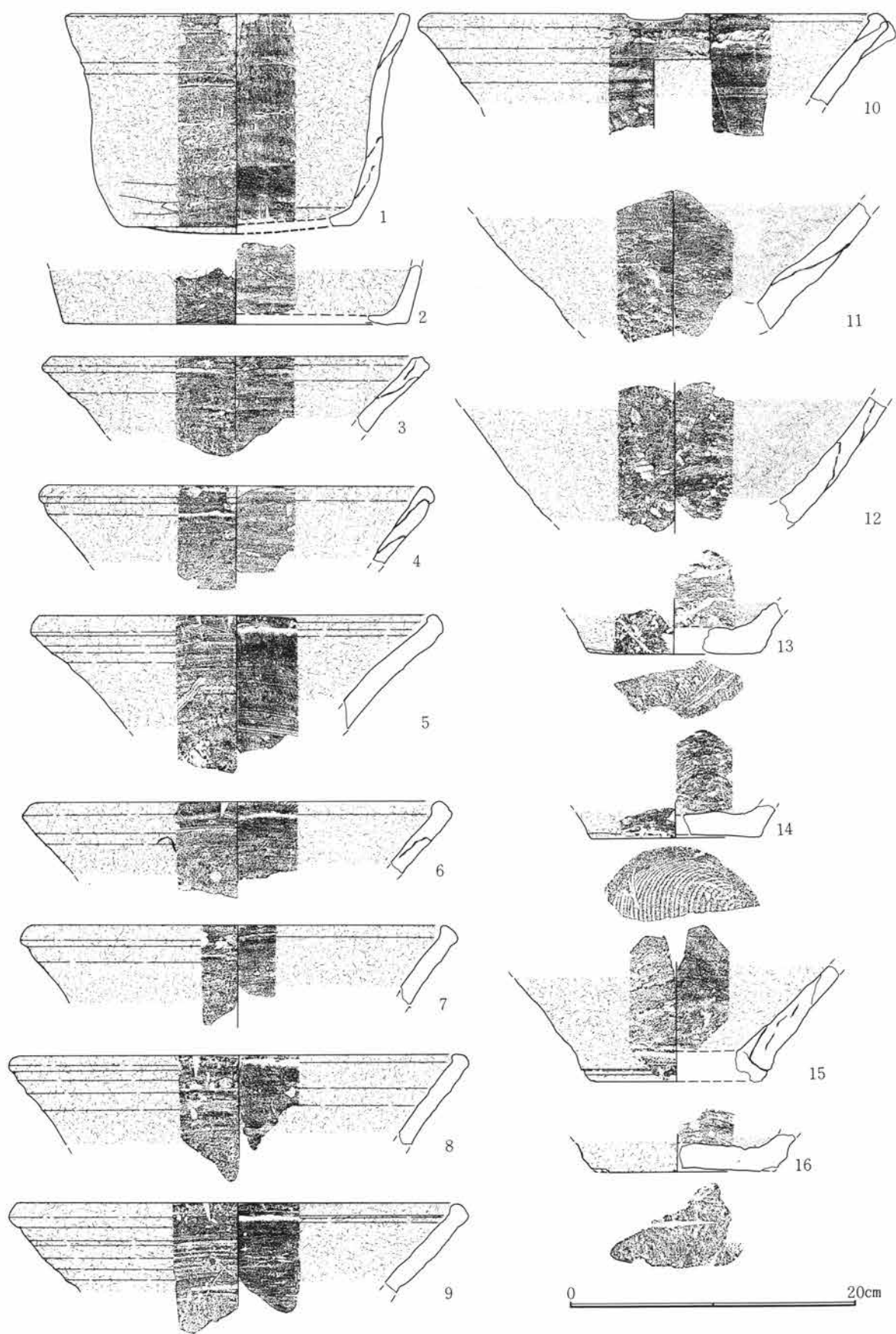
この塔身に認められる「十二年丁亥」は、「十四年丁亥」と考えられる。この上位の元号が欠失しているため、十四年と子干の丁亥から類推すると、応永14年丁亥が判断される。これは西暦に直すと1407年である。上述の両者のうち、この元号を刻む方は段のない方であり、段の存在するものには製作に若干の時間幅が想起される。

この他に、板碑片と考えられるものが多い。ただ、この板碑については、調査区内で出土している内で、完形に近いものは、F2井・G7井の2例のみで、他の遺構内では、全て破片の状態である点に共通する。板碑の他には窪み石がある。これは、石製品なのか、石造品なのか不明でないが、調査区内での出土状況から何らかの機能の想定が可能と思われる。

上述の石造品以外で特筆される遺物が1例のみある。これは、第661図-3に示したもので、五輪塔を陰刻する塔婆が1点出土している。この五輪塔の部分で、空風輪は宝珠状に表出されており、空・風輪を分ける刻線が認められない。また、大輪部は、三角形状に表出しており、軒部に相当する部分の表出が認められない。この五輪塔全体の表出形状は、比較的古式な形状を示していると思われるが、工人の技術上の問題とも思われる。



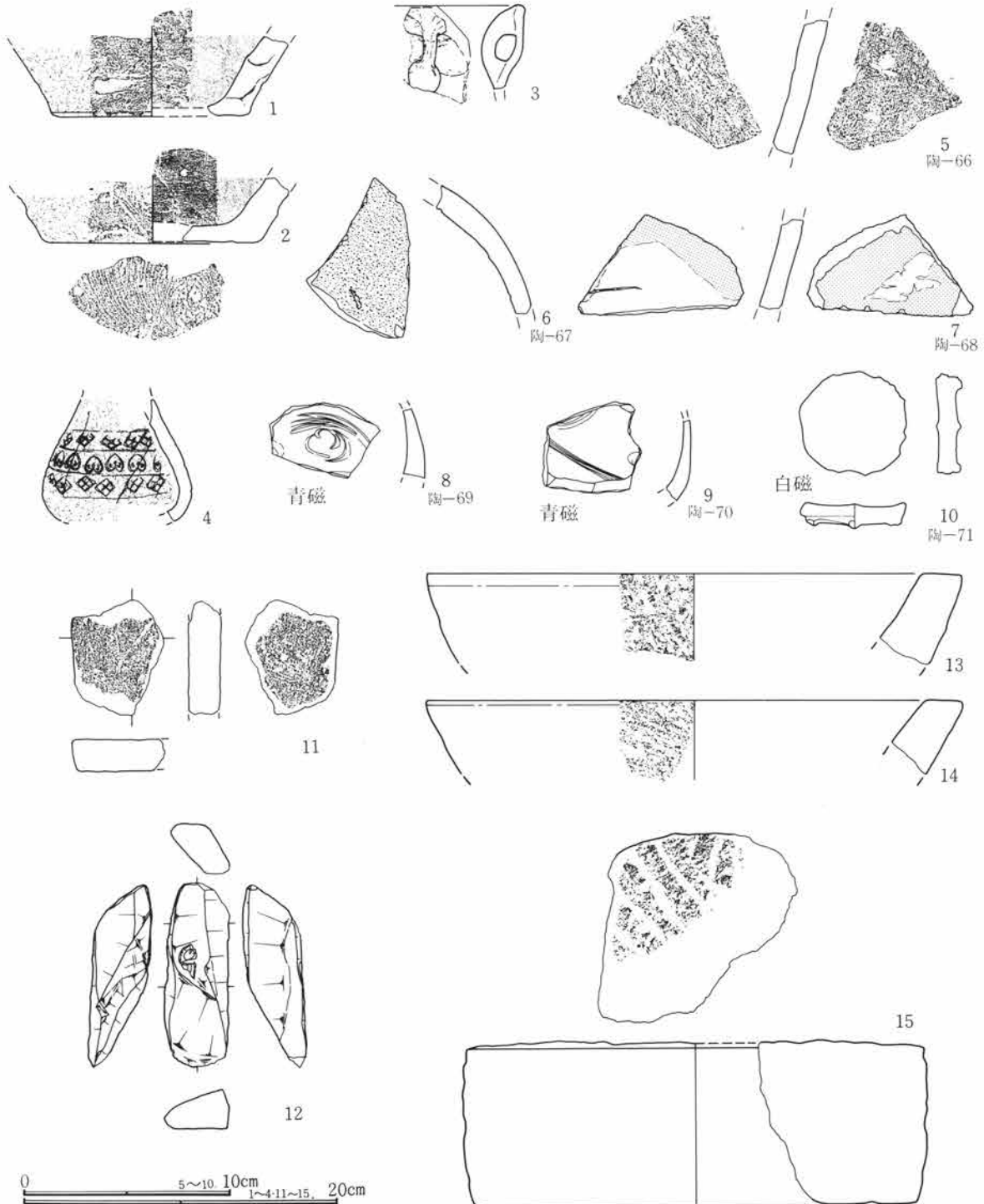
第654図 G区第34号溝状遺構出土遺物実測図(1)



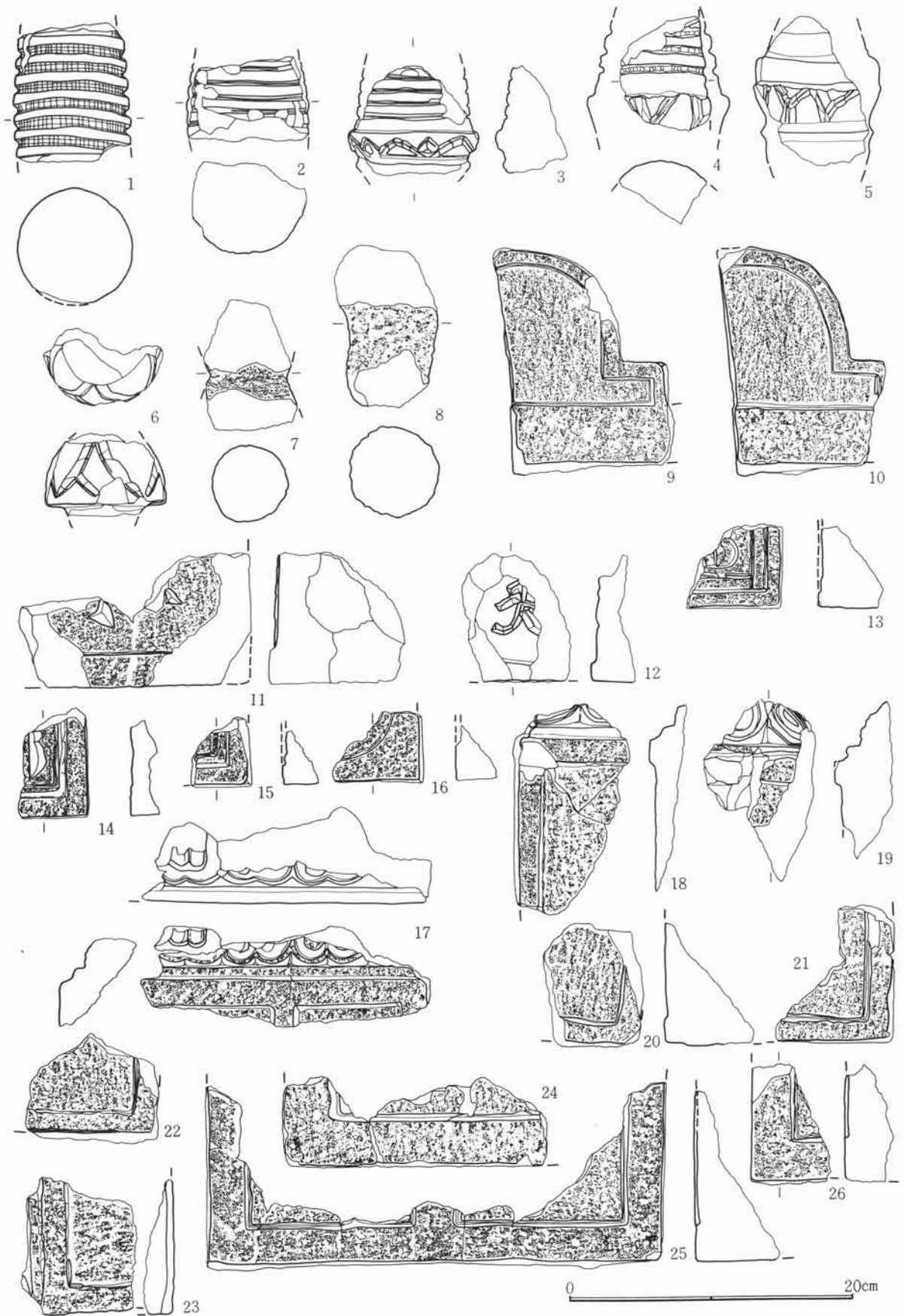
第655図 G区第34号溝状遺構出土遺物実測図(2)

第2節 鎌倉時代以降

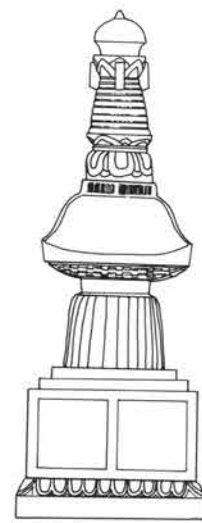
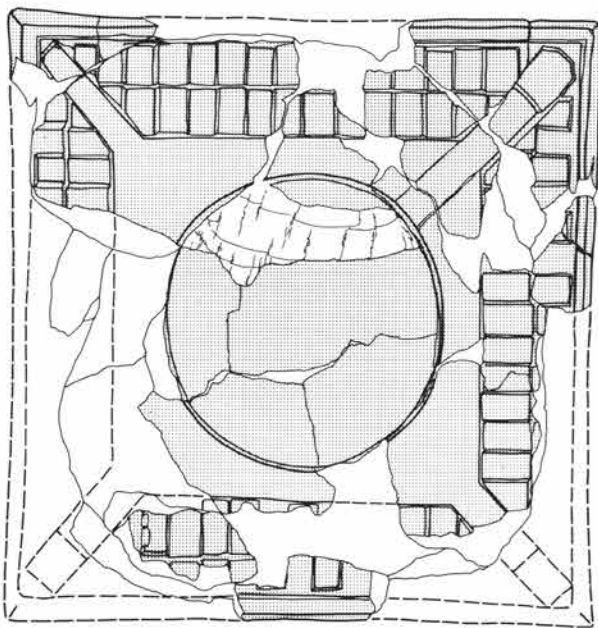
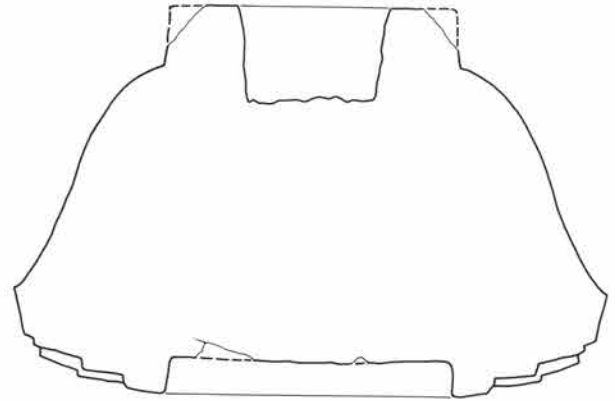
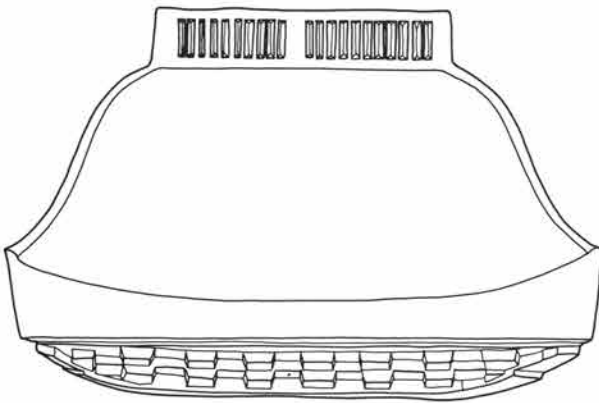
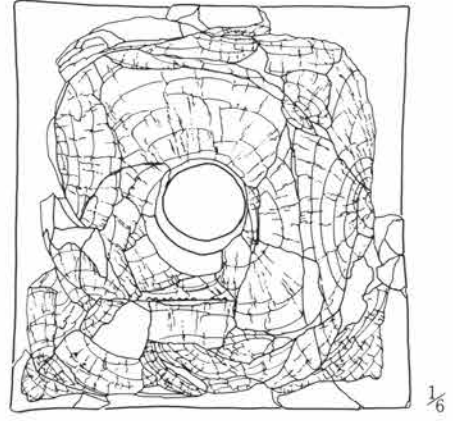
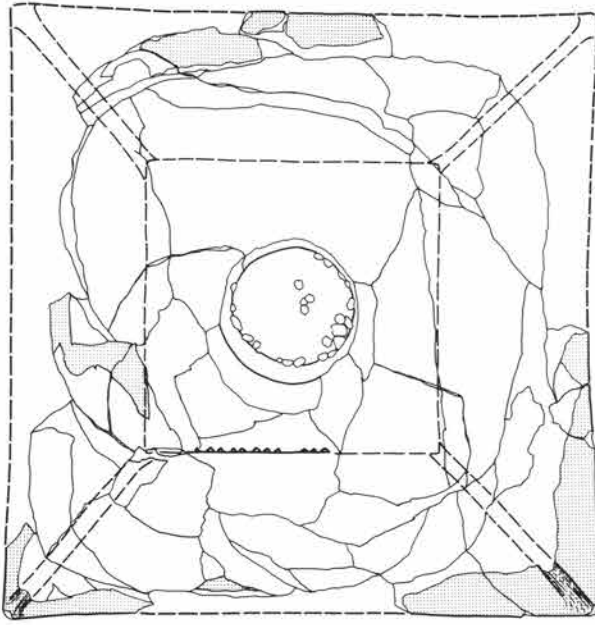
前述してきたこれらの遺物は、当溝の北側部分で集中して出土している（第653図）。そして、前述した覆土の人為層と判断される土層中より多くの礫と共に出土し、底面からは、遊離する状態である。また、これらの他に、巨大円礫が南北走行する部分より数点出土している。この巨礫も上述した遺物と同じ層位より出土している。



第656図 G区第34号溝状遺構出土遺物実測図(3)



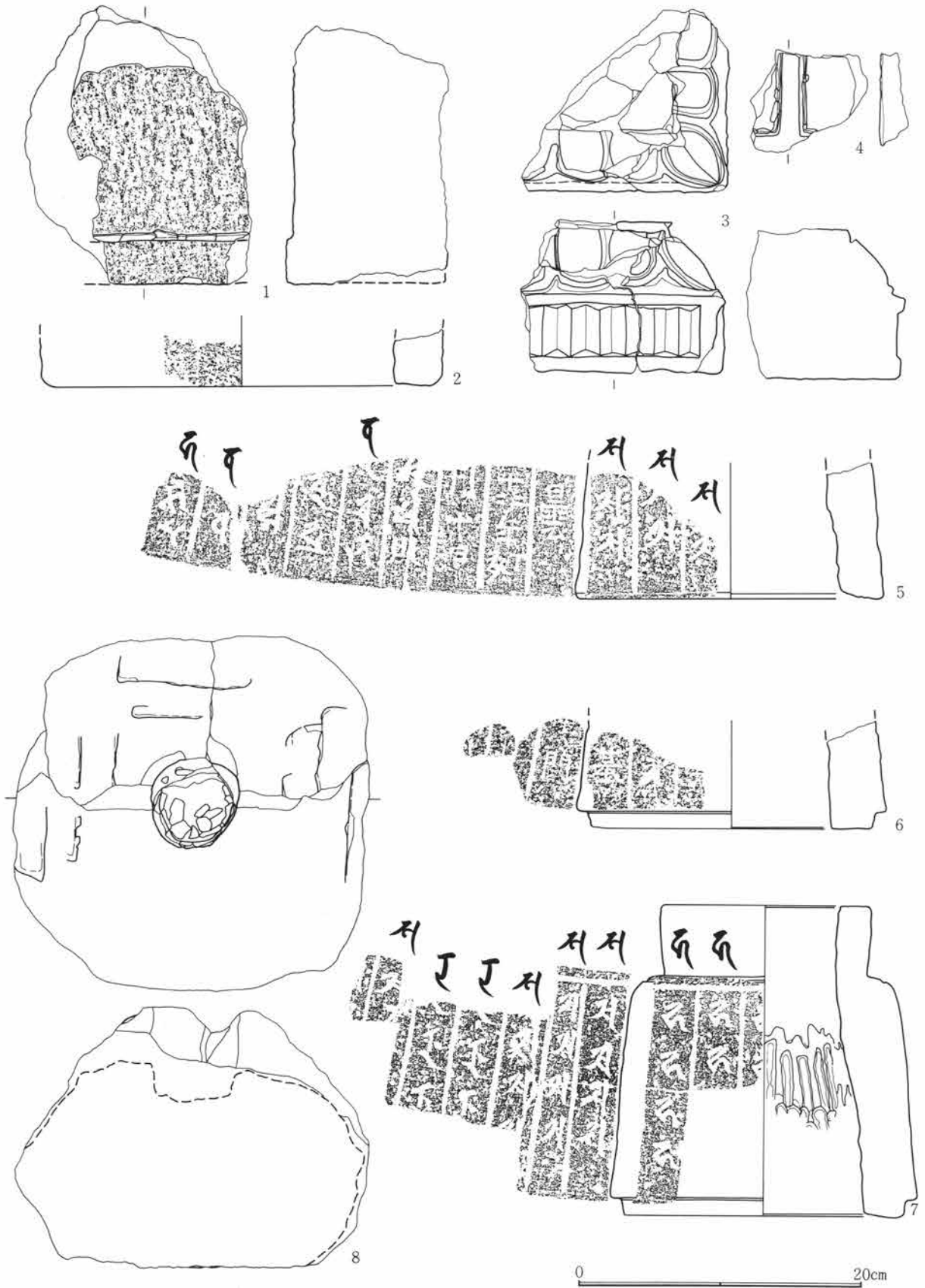
第657図 G区第34号溝状遺構出土遺物実測図(4)



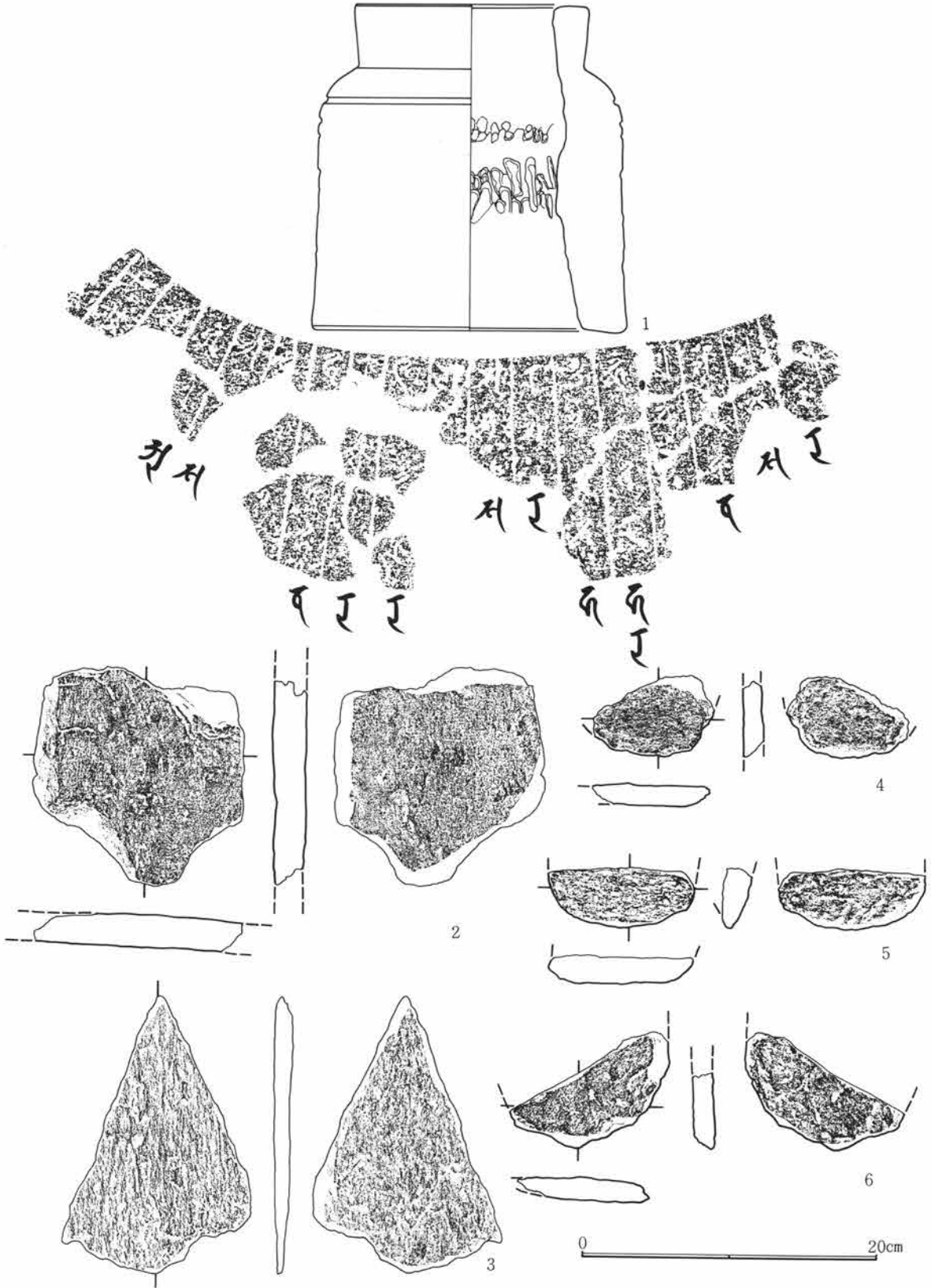
復原想像図



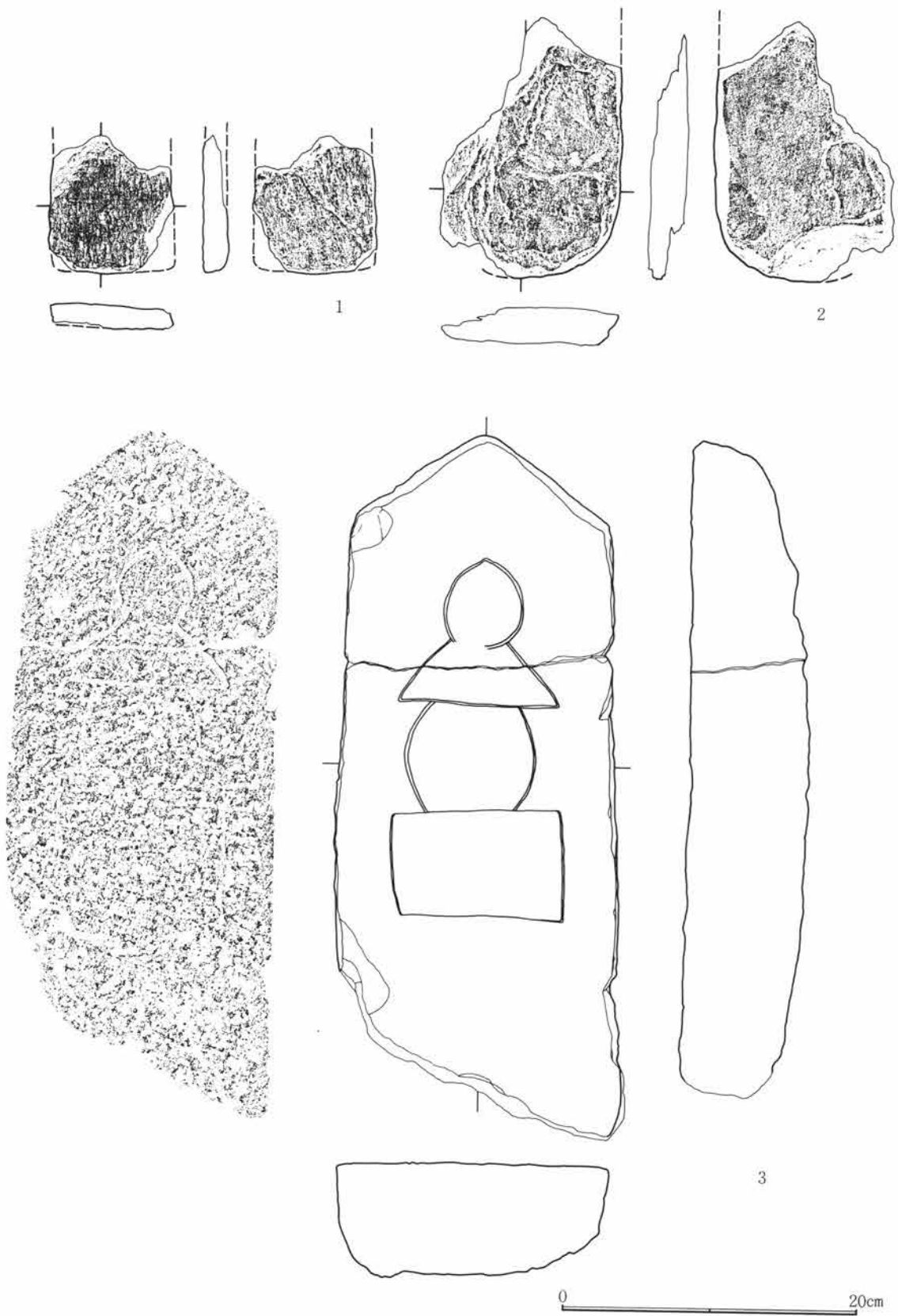
第658図 G区第34号溝状遺構出土遺物実測図(5)



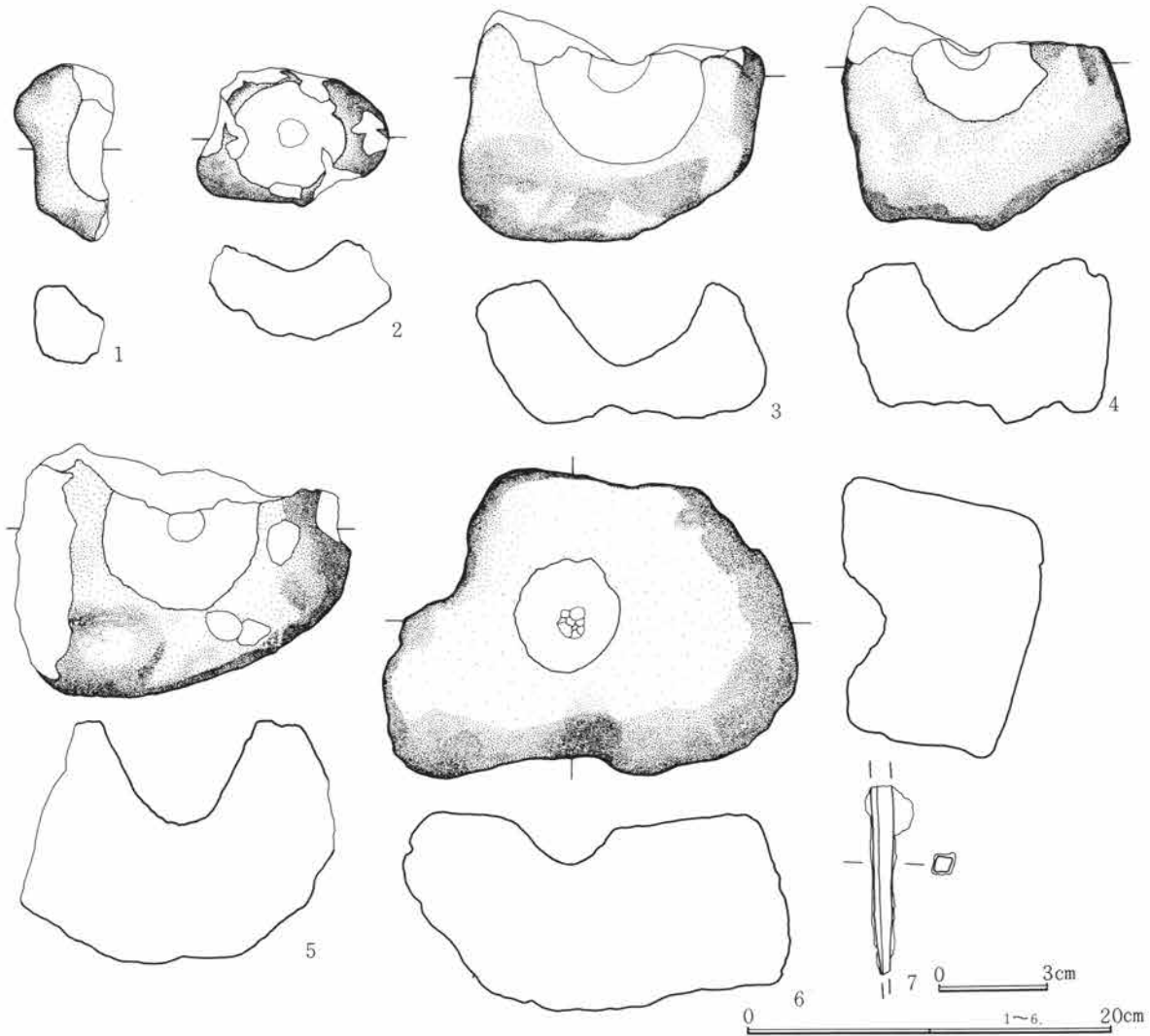
第659図 G区第34号溝状遺構出土遺物実測図(6)



第660図 G区第34号溝状遺構出土遺物実測図(7)



第661図 G区第34号溝状遺構出土遺物実測図(8)



第662図 G区第34号溝状遺構出土遺物実測図(9)

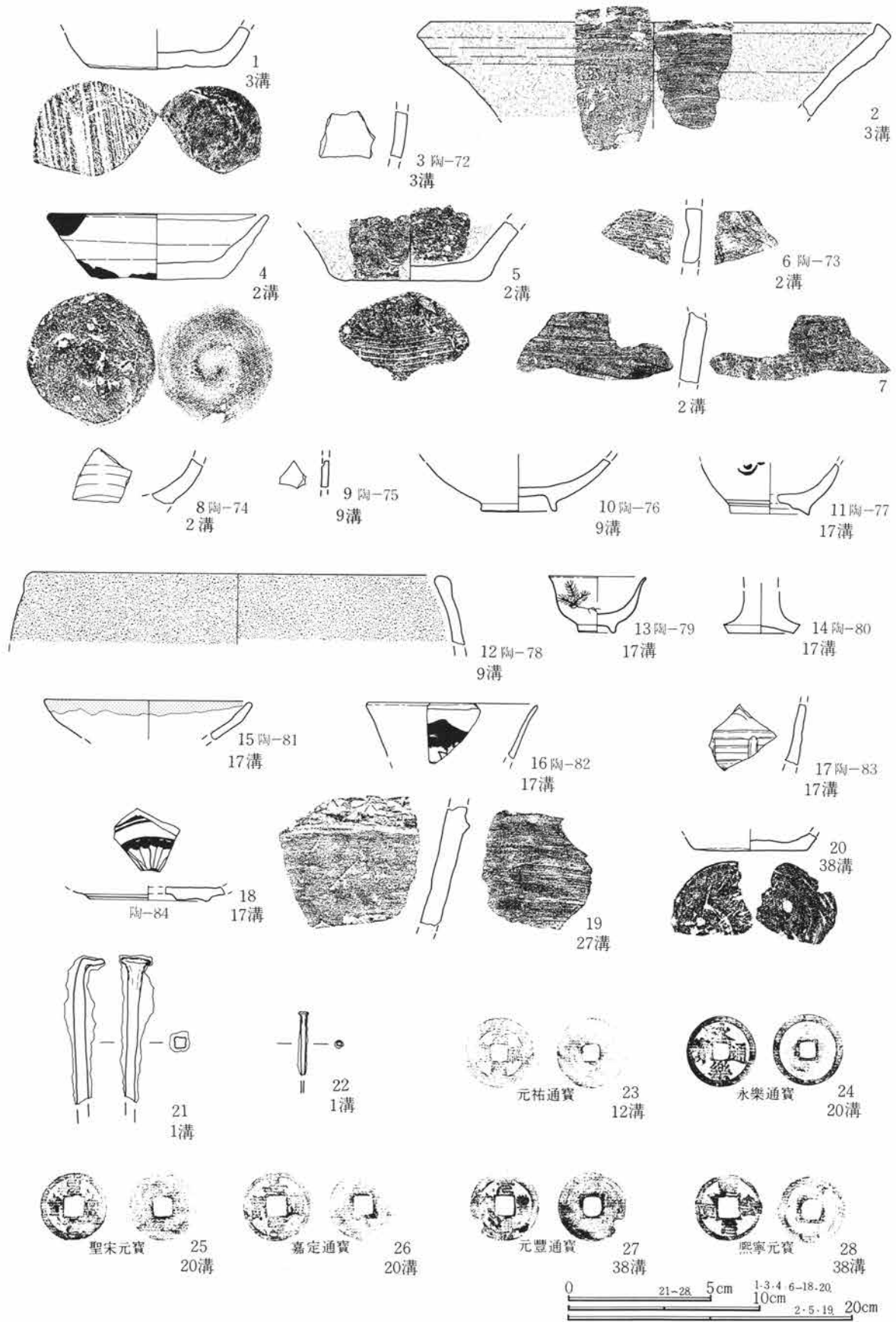
当溝は、前述したとおりの館跡の内郭を構成する施設である。この館跡と考えられる。内郭の溝に前述した石造品が粉碎された状態で多量に出土している。これらの石造品の中には、墓標として五輪塔・宝篋印塔が含まれ、且つ、宝塔の如く墓標以外のものがある。そして、これらの石造品が接合率が高い点から、出土地の近辺で破壊され廃棄されたか、出土地の周辺で廃棄され、その一部乃至ある程度のもを出土地点まで運び廃棄されたものとも思われる。

しかし、これらの石造品が、造立されたものを破壊して廃棄する点から異常な状況があったことが推定される。また、これら石造品と共伴して出土した在地系土器の年代観と、同様に館跡の外郭を形成するG2溝の廃棄年代とは、ほぼ合致しており、15世紀後半にこれらの行為があったと推定される。

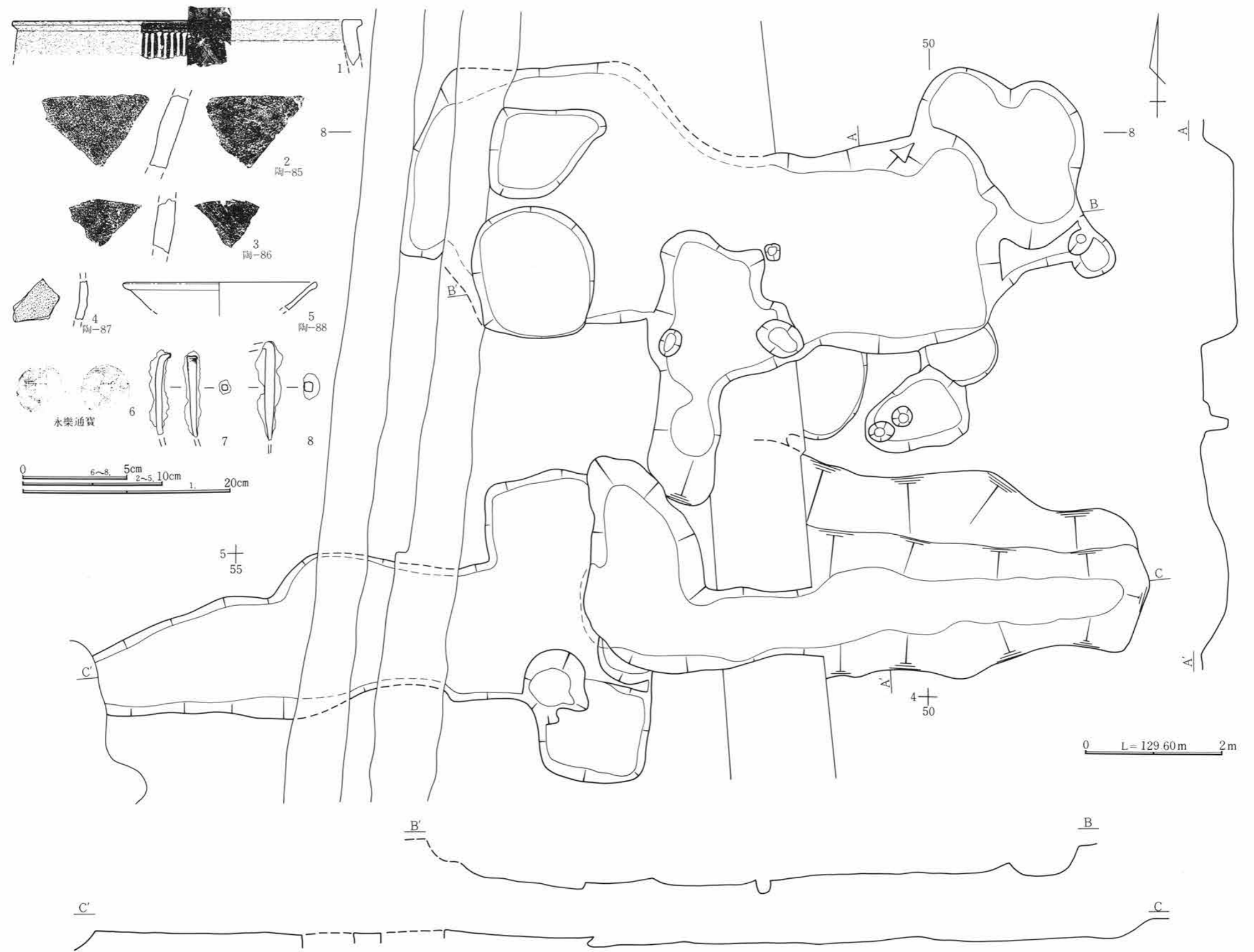
すなわち、15世紀後半には、館を廃棄し、恐らく周辺部に在った石造品が破壊されて覆土内に廃棄される点では、館自体とこの周辺で重大な画期があったものと類推される。

この重大な画期は、前刊書で記述した国府での長野氏と長尾氏の対峙の状態が15世紀第4四半期にあったことからすれば、当該の館と考えられ、諸遺構の廃絶は、この両氏の対峙状態が要因と判断され、廃棄された石造品は、反造立者の行為であることが想定される点からすれば、破壊・廃棄は長野氏により行われた可能性が非常に重要な原因と考えられる。

第3章 検出された遺構・遺物



第663図 G区溝状遺構出土遺物実測図



第664图 G区第9号址·出土遗物实测图

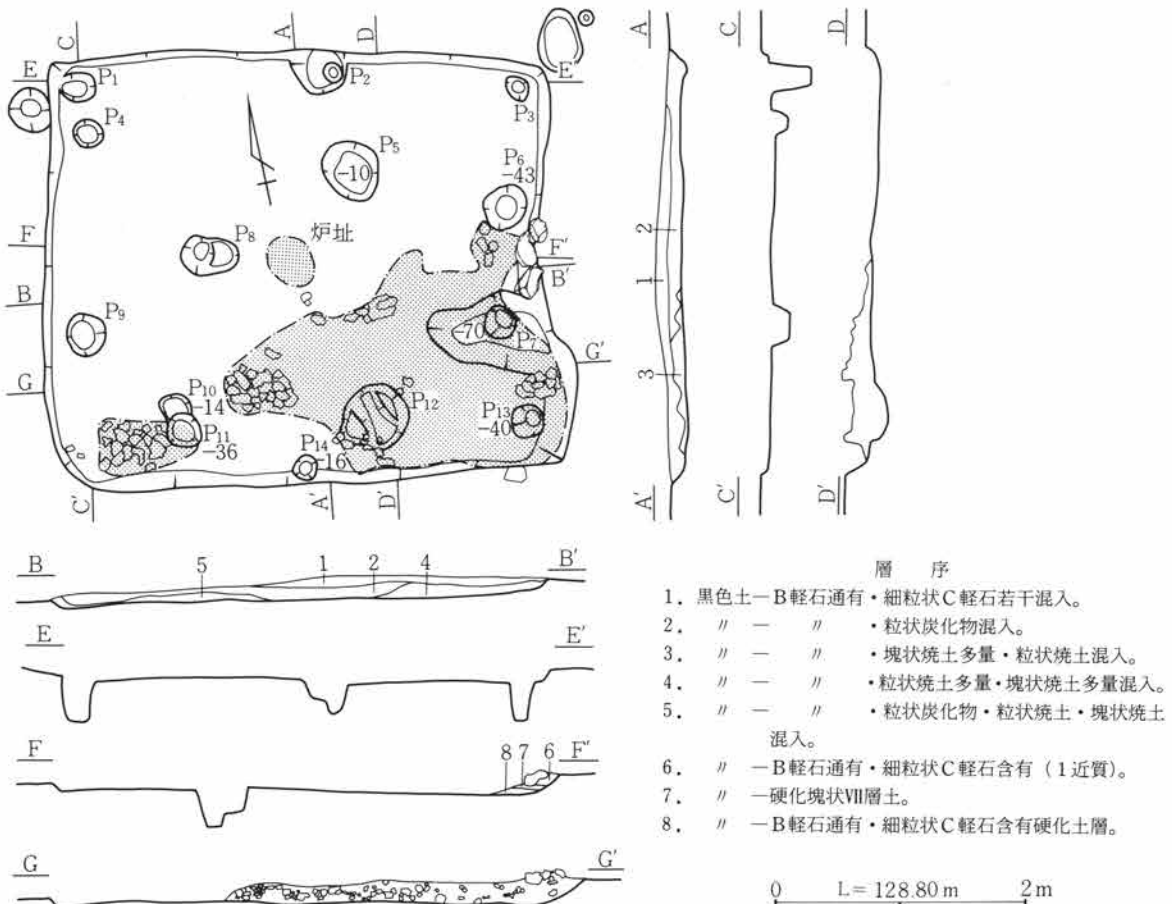
G区第9号址

本址は、G区内西側で検出されており、4～9-G-49～56グリッド内に位置している。平面形状は、何如とも言い難く、強いて称すれば不整形である。規模は、南北最大長約10.42m、東西最大長約15.45mを測る。

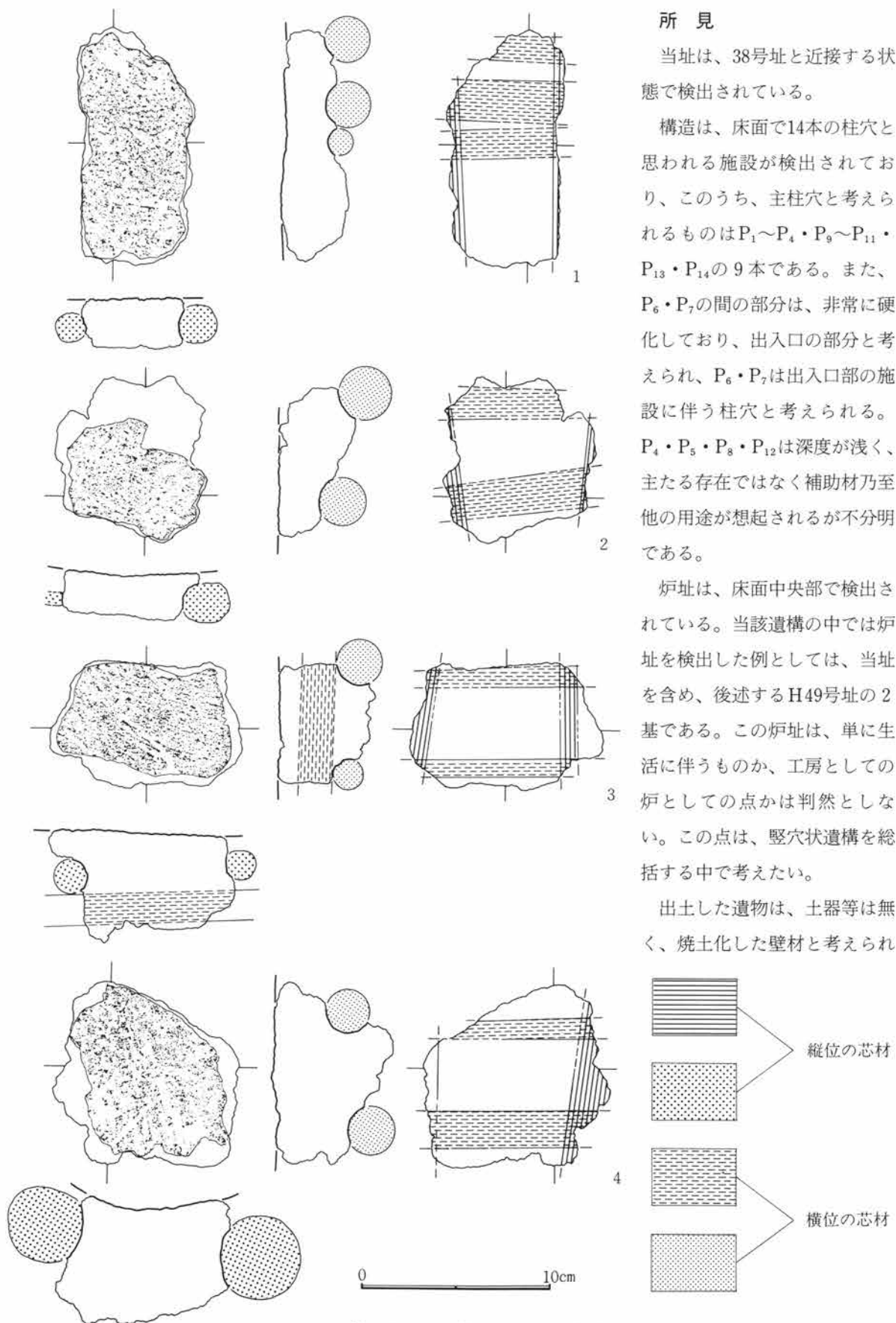
本址は、上述のように、形状が何如とも言い難い点がある。これは、土坑状のものが重複するのか、溝状の状態のものが重複しているようにも認められる。出土遺物は軟質陶器の火鉢、常滑焼、瀬戸・美濃製の茶壺片、白磁（晩唐）片がある。これらの中からは、13～16世紀間の年代が得られる。また、銅銭では、永楽通寶が1点出土しており、その初鑄年を上限とすれば15世紀代である。

上述のごとく、本址の性格等については全く不明である。

遺構名称	G区第36号址		位置	38～40-G-65・66グリッド内			
平面形態	長方形	規模	4.2m×3.48m	主軸方位	西一十度一北	残存深度	約18cm程
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	ほぼ平坦。			
柱穴	11本 (P ₁ ～P ₄ ・P ₆ ・P ₇ ・P ₉ ～P ₁₁ ・P ₁₃ ・P ₁₄)。不明3本 (P ₅ ・P ₈ ・P ₁₂)。						
炉	位置	中央部	形状・規模	楕円形状。42cm×33cm。			



第665図 G区第36号址実測図



所見

当址は、38号址と近接する状態で検出されている。

構造は、床面で14本の柱穴と思われる施設が検出されており、このうち、支柱穴と考えられるものはP₁~P₄・P₉~P₁₁・P₁₃・P₁₄の9本である。また、P₆・P₇の間の部分は、非常に硬化しており、出入口の部分と考えられ、P₆・P₇は出入口部の施設に伴う柱穴と考えられる。P₄・P₅・P₈・P₁₂は深度が浅く、主たる存在ではなく補助材乃至他の用途が想起されるが不明である。

炉址は、床面中央部で検出されている。当該遺構の中では炉址を検出した例としては、当址を含め、後述するH49号址の2基である。この炉址は、単に生活に伴うものか、工房としての炉としての点かは判然としない。この点は、竪穴状遺構を総括する中で考えたい。

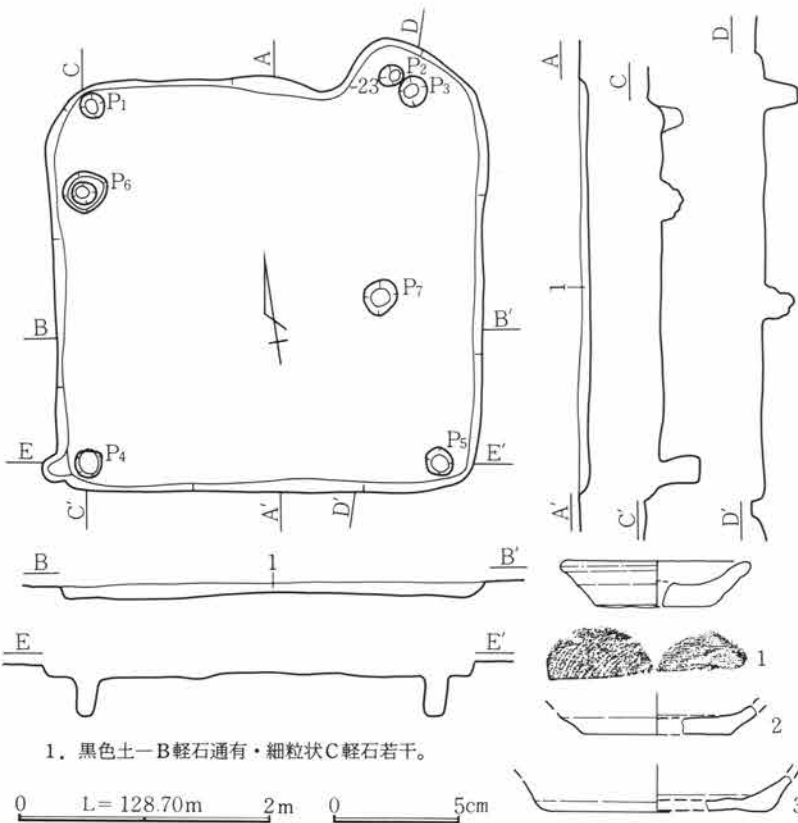
出土した遺物は、土器等は無く、焼土化した壁材と考えられ

第666図 G区第36号址出土遺物実測図

るものがあつた。この壁材と考えられるものは、ローム土が焼土化したものと思われ、断面では、円形状の細い柱穴状のものを縦横に組み、これを骨組み状態にしている。この縦横の骨組みに壁土を塗り壁体としたものが考えられ、この塗り土の中には「ワラ」状の植物繊維の痕跡が長さ3～5cm程で認められる。量的には、コンテナケースに5箱程出土している。この壁材と考えられる焼土塊は、その状態から、当址に伴う壁材であつたとした場合若干の疑問が生ずる。当址を含め当該の竪穴状遺構にしたものは、全てVII層土(ローム土)の上面で確認しており、覆土に黒色土が主体である点から、当時の生活面は、II層中乃至これより上位に求められる。このことから、当該種の遺構が、残存壁より上位に80～120cmを加えた数値が本来の壁高と考えられる。この場合、当址は、推定壁高120cm程になる。さらに、これに屋根を葺くことを考慮すれば、この壁材を使用した高さは、非常に限定されるものと考えられる。ただし、この建物の高さが、地上部でどの位存在したかにもよるが、人が立って出入り出来る高さぐらいを考えての場合であるが、使用された部分は、地山壁体以外の部分であるとする前提である。

竪穴状遺構の場合、旧地表面下に壁体がどれ程存在したかを前提にして考えなければ、その性格自体を究明するには不可欠と考えられる。この点を含め、第4章で記述する。

遺構名称	G区第38号址		位置	9～11-G-68・69グリッド内			
平面形態	正方形基調	規模	3.42m×3.30m	主軸方位	北-82度-西	残存深度	約12cm程
壁	垂直に立ち上がる?		床面	平坦。			
その他	柱穴7本。南側でG36号址が接するように位置する。						



所見 本址は、床面で7本の柱穴が検出された。この柱穴はP₇を除き、全てが壁に近接して設けられている。これは、A区159・46・47号址・G区36号址で認められた状態と同様のものである。また、前述したG36号址は入口部が確認されており、本址もこの例にならい主軸方位を選定した。

また本址は、北東隅部が突出した状態を示しているが、不明な部分である。

出土遺物は3類の土師質土器皿と5類から4類にかけての同種の遺物がある。この遺物から下限を示せば、15世紀中頃のものである。本址の明確な埋没時期は不明であるが、この15世紀中頃が上限に相当させられる。

第667図 G区第38号址・出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

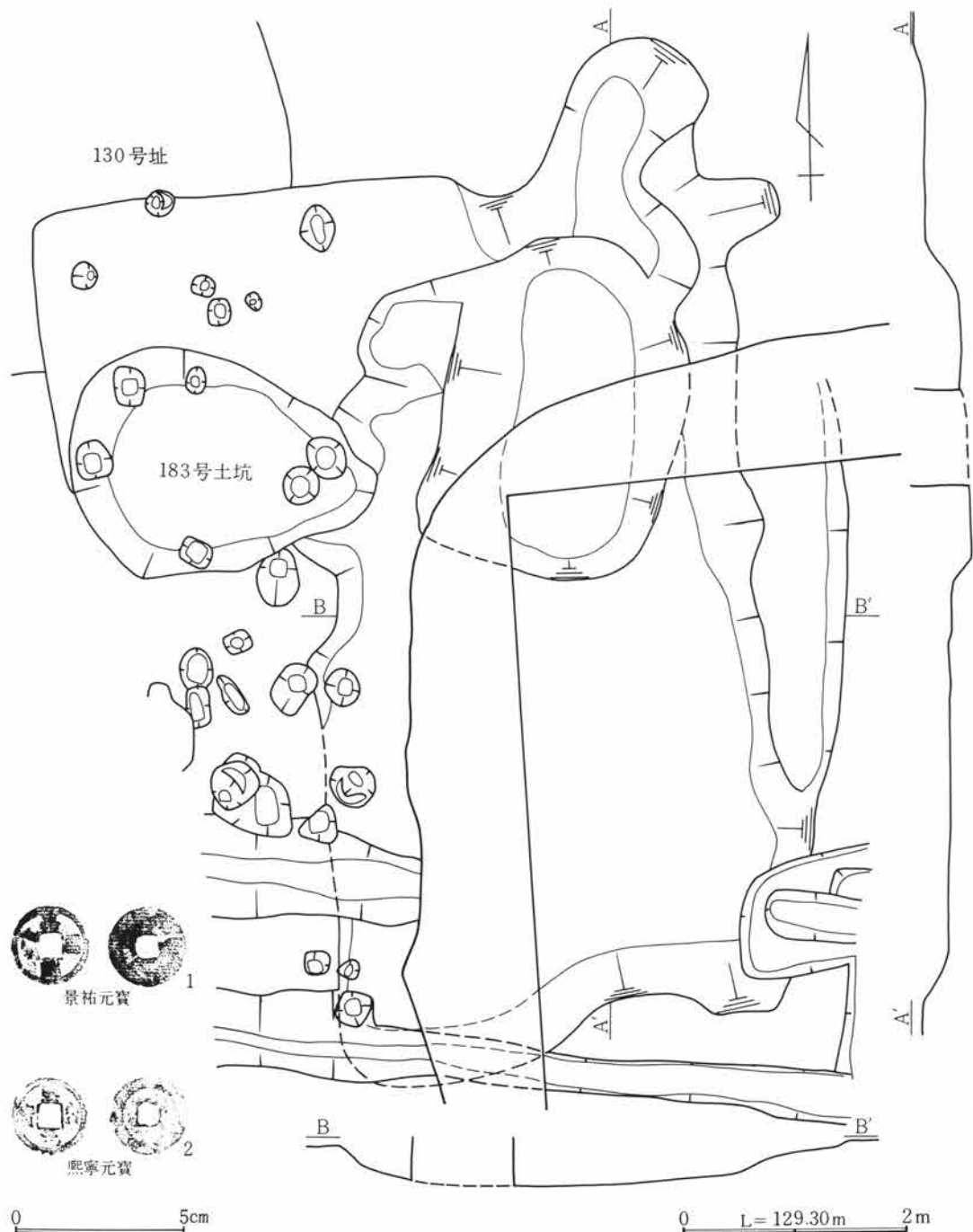
G区第63号址

本址は、G区内北寄り41～46-G-59～62グリッド内に位置しており、130・2・4・42号址を切り構築し、183土坑に切られている。

規模は、長軸上で約9.6m、同直交軸上で約6.18mを測り、深度は42cmである。

平面形状等は、G9址と同様であり性格等については全く不明な遺構である。全体的には大きな土坑状のものにも思える。

出土遺物は、銅銭2枚が出土している。本址の所産時期は、周辺遺構の状態より15世紀後半以降である。

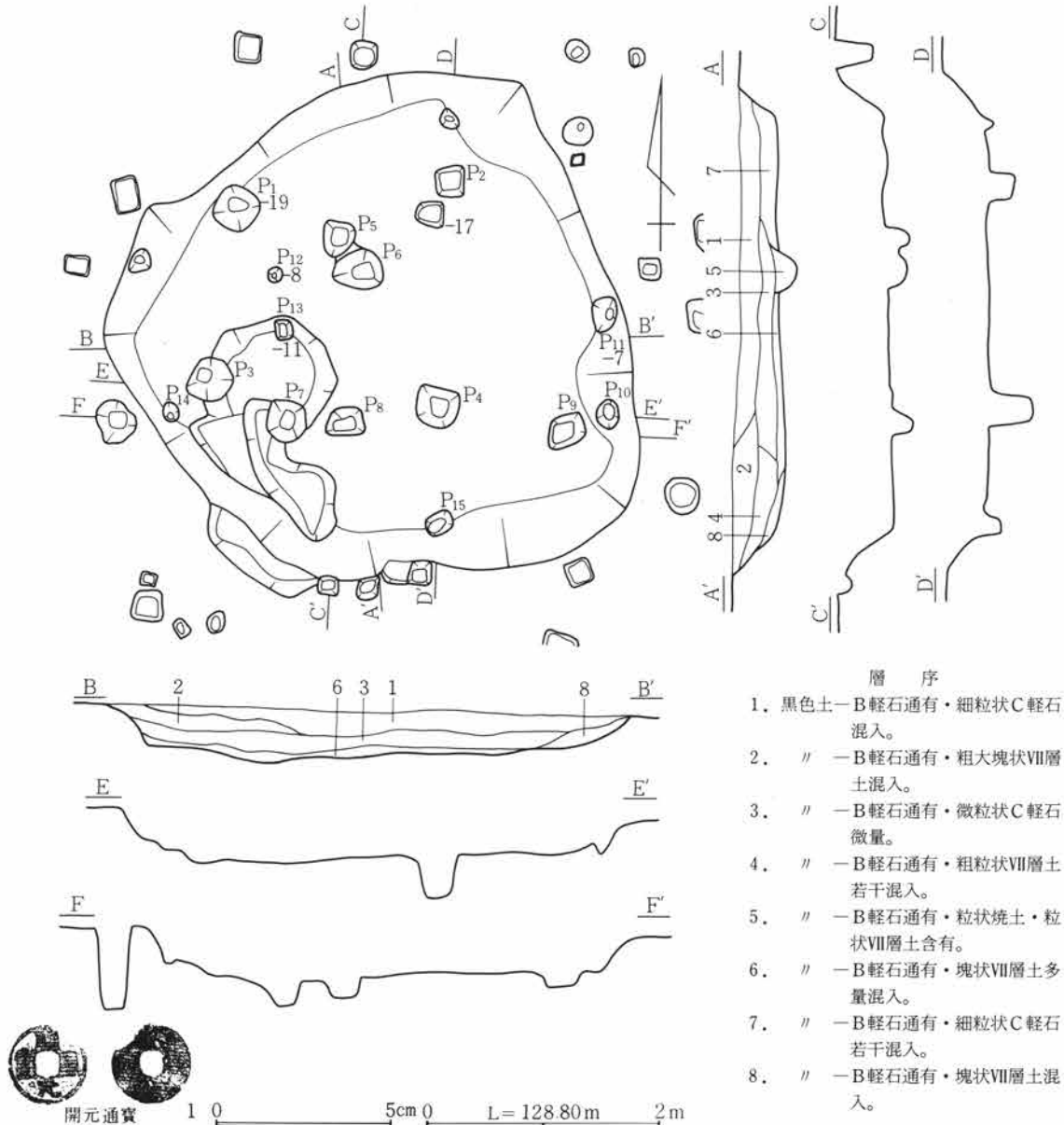


第668図 G区第63号址・出土遺物実測図

遺構名称	G区第82号址		位置	20～23-G-71～73グリッド内			
平面形態	不整形	規模	4.44m×3.94m	主軸方位	— 度 —	残存深度	約40cm程
壁	斜位に立ち上がる。		床面	一様に平坦ではない。			
その他	南西部に掘り込みが認められる。						

所見 本址は、G区西側ピット群の分布範囲内で検出されている。底面で検出されているピットについては、本址には伴わないものと考えられる。これは、ピット底面の標高値が、周辺に散在するピット底面の標高値とほぼ同位である為であり、また、底面での確認段階でも全て明確に認められ、本址を切る状態であろうと思われた。南西部に認められる。掘り込み状のものは、底面から8cm程のもので浅いものである。この掘り込み状のものは本址に伴うと考えられるが、その性格等について、本址自体も不明である。

出土遺物は、銅銭1枚（開元通寶）が出土したのみである。



第669図 G区第82号址・出土遺物実測図

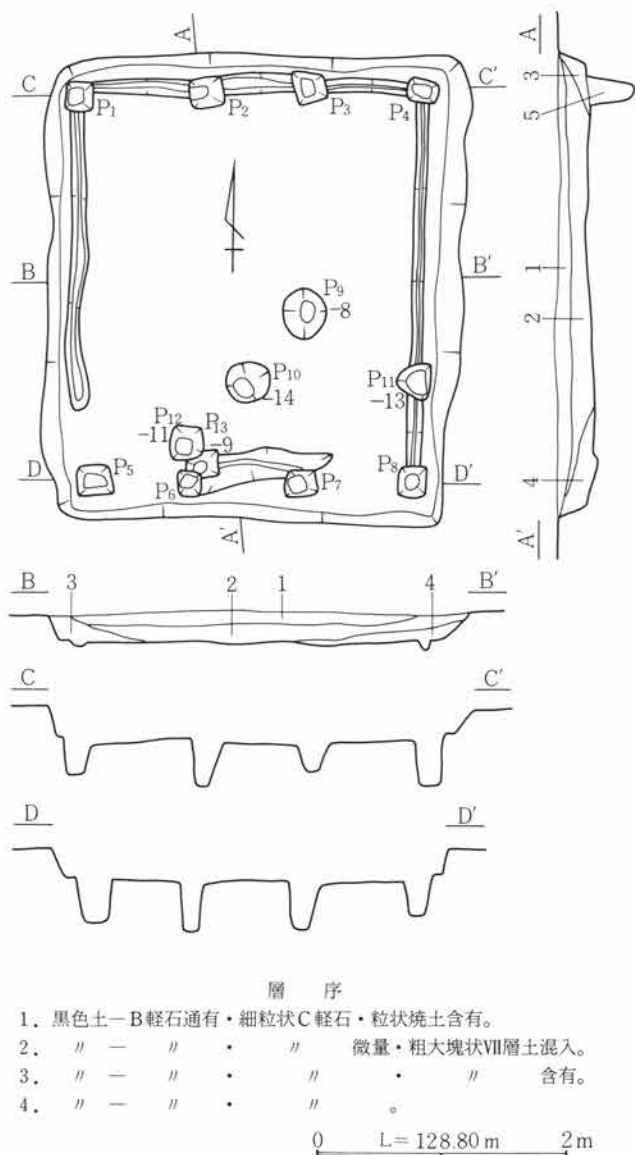
第3章 検出された遺構・遺物

遺構名称	G区第106号址		位置	37~39-G-65・66グリッド内			
平面形態	矩形状	規模	3.66m×3.30m	主軸方位	北-1度-西	残存深度	約30cm程
壁	斜位に立ち上がる。		床面	ほぼ平坦。			
その他	柱穴11本、不明2本 (P ₉ ・P ₁₀)。南壁下以外壁溝が廻る。						

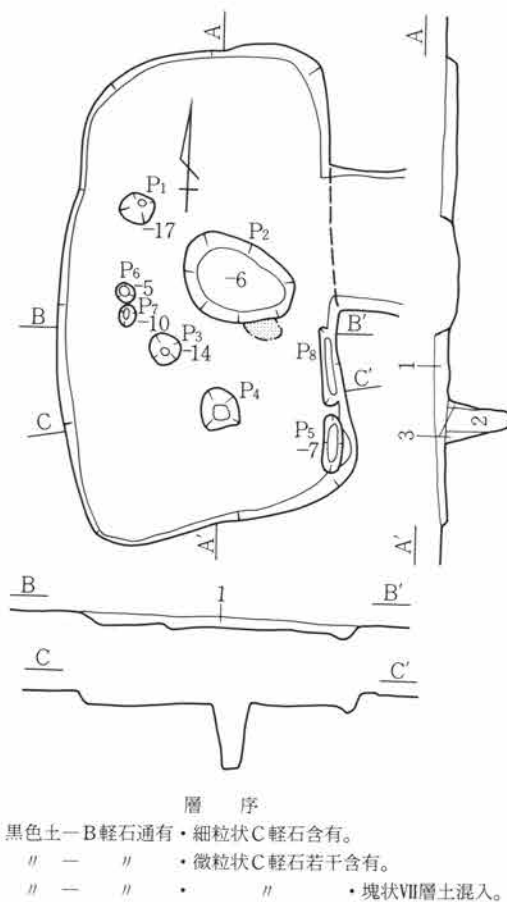
遺構名称	G区第110号址		位置	39~41-G-65・66グリッド内			
平面形態	不整長方形	規模	3.72m×2.22m	主軸方位	北-6度-西	残存深度	約12cm程
壁	斜位に立ち上がる。		床面	ほぼ平坦。			
その他	柱穴状のもの5本検出。東壁南側で壁溝状のものを検出。						

所見 (G106址) 本址は、検出された竪穴状遺構の中で唯一壁溝の検出された存在である。また、南壁より内側の部分には溝状の施設が検出されている。この部分は、他の壁下で検出された壁溝と異なるものと考えられる。恐らくは、出入口施設に伴うものと考えられ、P₆・P₇の間に出入口部が考えられる。

出土遺物は皆無であった。



第670図 G区第106号址実測図



第671図 G区第110号址実測図

所見 (G110址) 本址は、106号址に近接して検出されている。床面で検出されている柱穴のうち、P₄が土層断面観察部直下で検出された。この土層断面からは、本址の埋没開始より古い存在であることが確認され、恐らくは本址に伴うものと考えられる。他の柱穴状のものも伴うと考えられるが、深度の点に問題がある。またP₂は、本址を切る36号溝の一部である。この36号溝の重複により炉の一部が消滅している。

本址は、炉を備える点で竪穴状遺構と考えられる。ただ、規模・形状に問題を残すが、1例として把握されるものである。出土遺物は皆無であったが、周辺の遺構により、14～16世紀の所産であると考えられる。

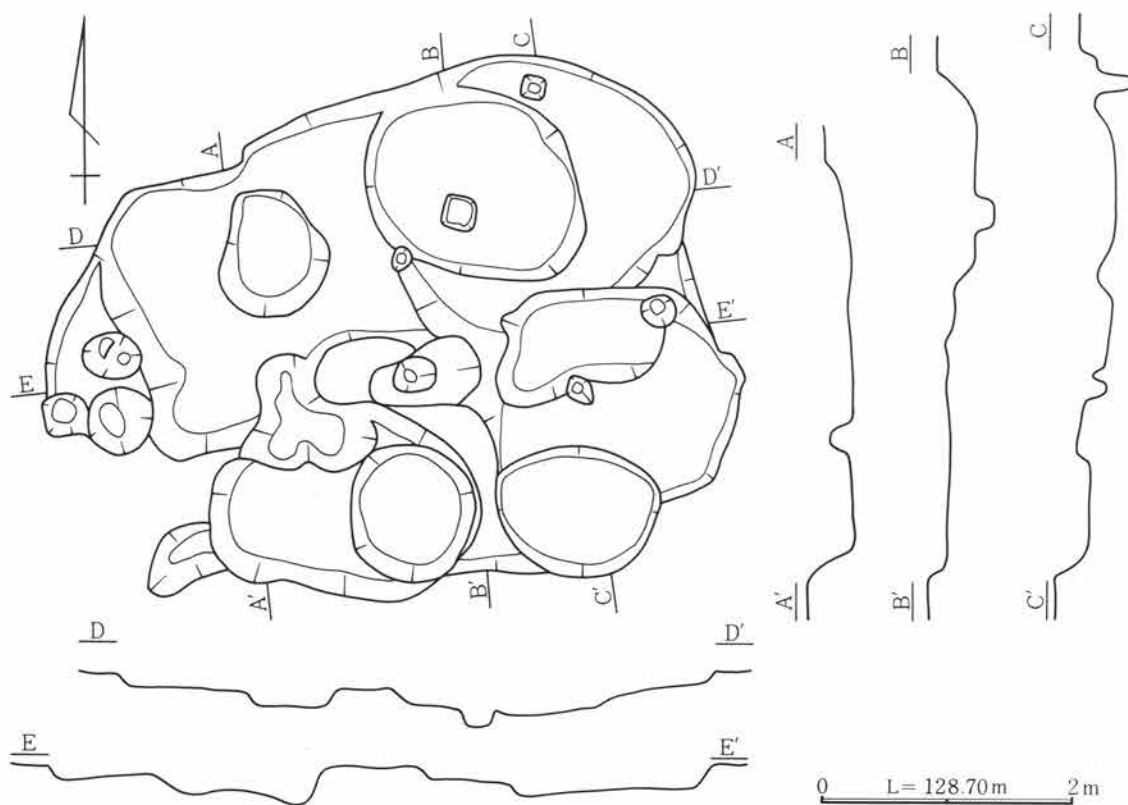
G区第116号址

本址は、G区内中央西寄り、23～25-G-67～70グリッド内に位置する。周辺遺構としては、9号井戸跡・82号址等が位置し、西側ピット群の分布域内に位置している。

平面形状は、9号址・63号址同様に不整形状を呈し、全体に土坑の集合状のものである。

規模は、長軸上約5.34m、同直交軸上約4.2mであり、深度は最も深い部分で-36cm程である。底面は、上述の土坑の集合状であるため、平坦ではなく、大きなおうつ状態が認められる。壁は上述の状況により何如とも言い難く、遺構の深度が浅い点もあるが斜位に立ち上がると考えられる。また、底面で検出されているピットは、本址に直接係わるものでなく、西側ピット群のものである。

本址は、上述のとおり、土坑の集合状態とも思われるものであるが、土層断面では、残存深度が浅いため、実際土坑の集合であるのか否かを確認出来なかった。ただ、近接する土坑群も同様な状態である点と、前述の20号溝等の立ち上がる位置周辺に検出されていることから、単なる土坑の切り合いとも考え難く不分明なものである。



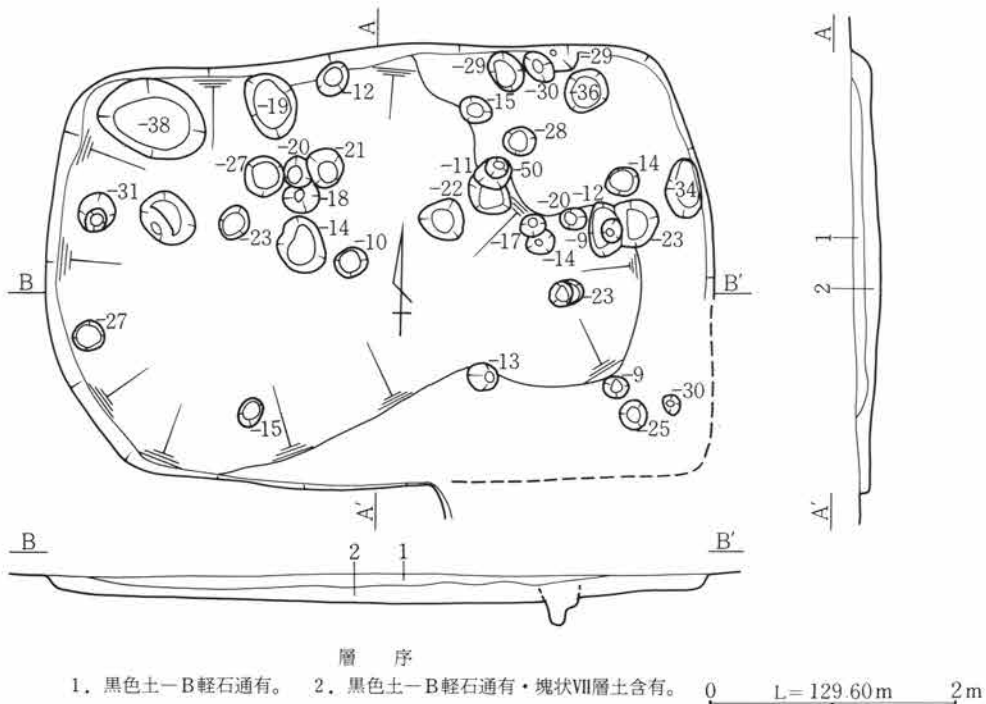
第672図 G区第116号址実測図

遺構名称	G区第130号址		位置	45・46-G-62~64グリッド内			
平面形態	長方形状	規模	5.34m×3.53m	主軸方位	西-2度-南	残存深度	約24cm程
壁	斜位に立ち上がる。		床面	緩やかな擂鉢状。			
その他	底面で34本のピットが検出されているが、本址とは直接に係わらないと思われる。						

所見 本址は、方形区画域の外側で検出され、63号址に切られ、北側約6m程にH区第1・2号址が位置している。

本址の底面で検出されたピットは、周辺に多くのピットが検出されている一群のものと考えられ、直接的に本址に伴うものではない。また底面が緩やかな擂鉢状を呈するのは、直下に平安時代の140号住居跡が存在するため、本址廃棄後、下位の140号住居跡の覆土の沈下と共に検出時の状態となったものと考えられる。すなわち、構築・使用時段階では平坦であったと思われる。

上述の状況より、本址内には、柱穴等の施設は存在しなかったものと考えられる。これにより、本址が竪穴状遺構であった場合、屋外での柱穴の存在を考慮せねばならない。しかし、本址の屋外柱穴と考えられるものが認められないため、本址の性格については不明といわざるを得ない。



第673図 G区第130号址実測図

G区第92・93号址

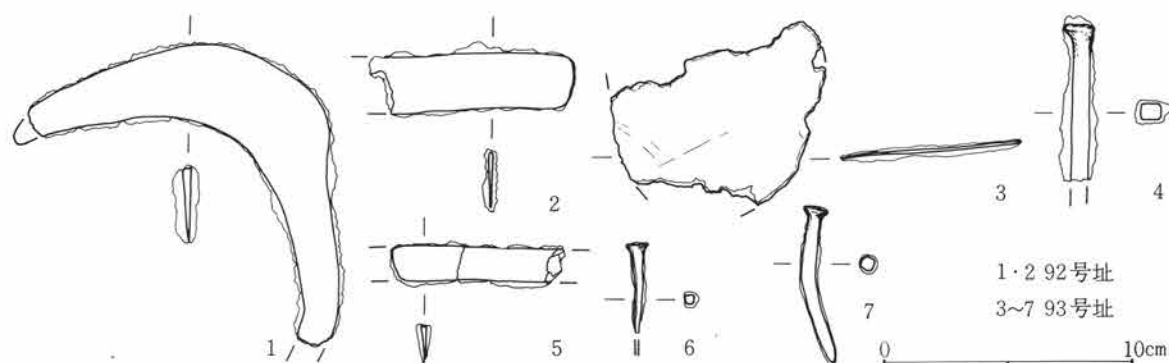
両址は、方形区画域内で重複する状態で検出されており、92号址は39~42-G-73・74、93号址は41・42-G-74・75グリッド内に位置している。両者の新旧関係は、92号址が93号址を切っている。

確認時は、G区西側北半分の表土層撤去段階では、II層土が全面に互り露呈出来た。この段階で確認出来た遺構は、近世以降に所産が求められるものであり、確認面上に於ける各遺構の覆土の発色は濁黒褐色乃至濁黒灰褐色を呈するものであった。遺構種としては、両址と土坑であり、土坑が主体であった。また、この確認面は、方形区画域で顕著であり、南側では過多の下げ過ぎ部分が有りIII~IV層土を露呈させた部分があり、この部分で確認されたのが、土坑と123号址である。

当該の両址は、II層土面に確認され、覆土の発色から近代のものであることが把握され、調査は、土坑調査終了後、確認面を南側と相對させる面まで掘り下げ、この段階では両址の調査は実施しなかった。これは、両址が近代以降の所産であることから“攪乱”として扱い、南側の確認面と相對させた確認面に至らしめた段階で調査実施した。

両址の認識は、上述のとおり、調査段階では“攪乱”として扱ったため、土層断面による覆土状態等の観察は実施せず、直接底面の露呈を行なった。これは、両址の部分の下位に存在する遺構の確認実施を主たる目的としたことによる。しかし、実際両址を調査実施した段階では、明治時代が上限と考えられる遺構であると判断、遺構名称を冠した。また、これは、出土した遺物量が予想以上であったため、その帰属する遺構名称を与えないと後日混乱の要因になると考えたことにもよる。

両址は通有の場合、攪乱として処理される遺構であると考えられるが、鉄器・鉄製品の出土量が比較的多かったため、今後の一資料として掲載した。他の遺物では染付磁器があった。これは印版染付の細片で、明治～大正時代の所産時期が考えられた。尚、覆土状態からは昭和35年以降の所産ではないことは判断出来た。



第674図 G区第92・93号址出土遺物実測図

G区内検出の竪穴状遺構について

G区内からは、36・38・106・110・130号址の5基の竪穴状遺構が検出されている。これらの内、方形区画域（館址）内で検出されているものは106・110号址である。ただ、この両者も、同区画域の内郭にあたる部分であり、主郭と考えられる部分では検出されていない。また、埋没の上限が判断されているものには、38号址の15世紀中頃であり、所産時期が分明なものは皆無の状態である。これにより、方形区画域との関係については明確な状況については把握されない。ただ、当該期を示す埋没土の状況により、何らかの関係が示唆される。これらの竪穴状遺構が全て同時存在したとは考え難い点があるものの、数基は、方形区画域と共存したものと考えられる。

この共存状態を考える場合、所産時期が不分明な点から他の方法を用いなければならない。

G36・38号址の場合、両者の主軸方向乃至これに直交する軸は、G2・34号溝等により区画される方形区画の主軸方位とほぼ同位であることが認められる。そして、方形区画の埋没の上限として、15世紀後半が考えられ、G38号址も埋没の上限として15世紀中頃が考えられる点から、両者には共存関係があったことが示唆される。そして、このことから、G36号址は、38号址と近接する点と主軸方位との関係から、38号址同様に共存関係が示唆され、所産年代の推定も可能である。

他の3基では、G106号址はG36・38号址と同種のものと考えられるものの、G110号址・130号址については、同種の遺構として再考を要するものと考えられるが、比較対象とする資料自体が少ないことから今後に託するところも大きい。

G区西側ピット群

このピット群は、調査区内西側で集中して検出された。該当するグリッドでは、20・33-G-67・75グリッド内に位置する。このピット群が検出された部分は、方形区画域(館跡)の主郭にあたる部分である。

確認時の状況は、分布域全体にII層土を主体とする大きな落ち込み状に認められた。調査4m四方のグリッド調査として掘り下げた。この結果、全体におうとつの著しい中にピットが存在することが判明したが、下位には、古代の溝状遺構の底面部分が遺存していたため、調査時には掘り過ぎの部分を生じさせ、全体の掘り込み状態を平面では露呈出来なかった。これにより付図に示したものは、地山面の露呈部において作図したもので、古代の溝状遺構の部分と、当該の掘り込みとが乱入した状態での状況図となった。そして、両者を分離することは非常に困難であるが、図中で直線的に伸びるのが古代(26号溝)の溝状遺構である。

検出されたピットの総数は254本である。ピットの大半は、平面形状が正方形乃至隅丸正方形を呈するが、深度には一定したものがない。そして、これらのピットは形状に類似性があることから、柱穴としての存在であることが考えられ、ある数を一単位とする建物が存在したことが示唆される。

建物としては明確な状態で示せるものは皆無である。調査進行中・終了後に於いても分析は実施したが、方形に組まれると思われる部分が存在しても、他の可能性も有るものと重複したり欠除するもので、別図としては図示しなかった。この状況を示すピットを示すと以下のものが有る。尚、重複するものは()で括弧である。

A-635・640・646・647・652・(681)。

B-639・642・644・649・663・(681)。

C-656・658・659・(717)・(721)・(722)。

C-660・689・725・726・728・729・730。

D-687・688・690・693・(707)・(715)・(717)・(712)・(722)。

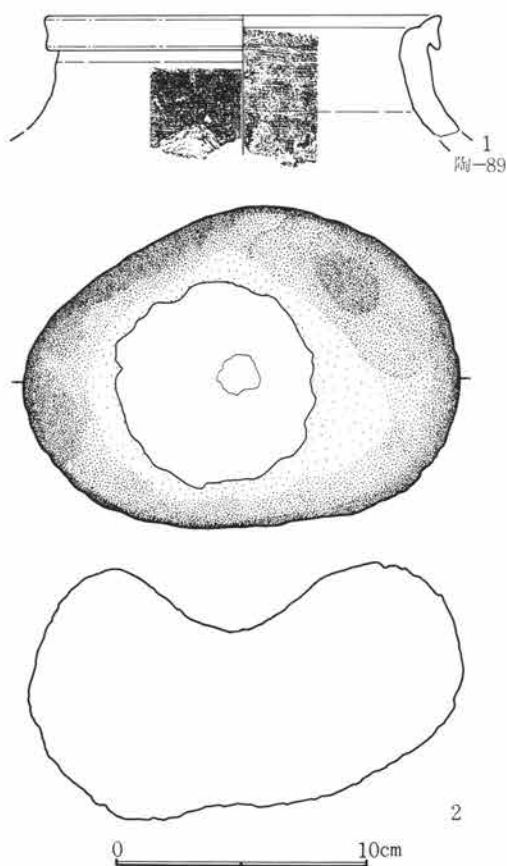
E-706・(707)・731・794。

この6通りの配列には、建物として考えられるものと柵列として考えられるものが含まれている。

これらのピットの他に、116号址が認められた。土坑状の集合状態と思われる部分が認められる。これに該当する部分が、上述のピット番号周辺と、26号溝を隔てた部分である。

出土遺物は、図中に示した他には奈良・平安時代の土器類・瓦類であった。

図示した遺物は、焼締陶器で常滑焼の壺の頸部から口縁部にかけての破片と窪み石1点が出土している。この両者の内前者は、14世紀前半代の年代観が得られ、これを上限とすることが考えられる。この2点の他に遺物が認められないのが最大の特徴とも考えられる。これは、主郭部分に相当する場所から、生活に伴う遺物が2点以外に出土していないことからすれば、かなり限定された生活空間であったと考えられるからである。外郭周辺での遺物の出土状況を含めて考えると、破片化した遺物を含む遺構等は、埋没段階には既に遺物が存在していたことであり、当該部が構築される段階では破片化した遺物が存在しなかったことが考えられる。これは、遺物種が完器であったか、未だ存在していなかったのか、それともいずれとも考えられる。



第675図 G区西側ピット群出土遺物実測図

G区1号地下式土坑

当地下式土坑は、前述のG区西側ピット群の北西方向約7mに位置し、34～36-G-64・65グリッド内に位置している。そして、方形区画の内・外を截する34号溝により切られている。

規模は底面で、奥行約1.8m、幅約3mで、長さ約0.78m、幅7.78mの方形の突出部を備えている。この突出部と底面との比高差は約56cm程であり、突出部から地上（旧地表面）まではおよそ2.1m程あったものと考えられる。主軸方位は決し難く、ほぼ東に向い開口するものと考えられる。底面の形状では隅丸長方形を基調にする。

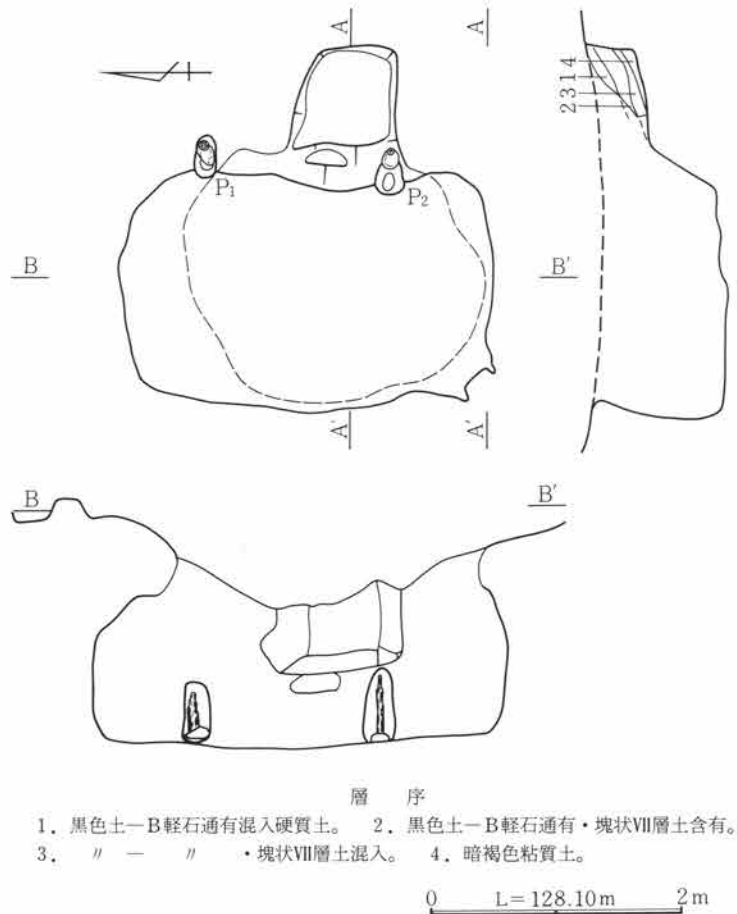
また、東壁には、柱材（自然木）と考えられる樹木が2本出土している。この柱は、壁部を楕円形に割り込み、底面は底面（床面）と同位の高さで根石を据えてほぼ直立させている。

覆土は、地山土のブロックが多く混入する土により没していた。この地山土は、天井の崩壊土と考えられ、旧状では遺構の主体が完全な地下式であったと考えられる。この場合、断面形状は残存する部分から推定するとアーチ状を基調としたと考えられる。

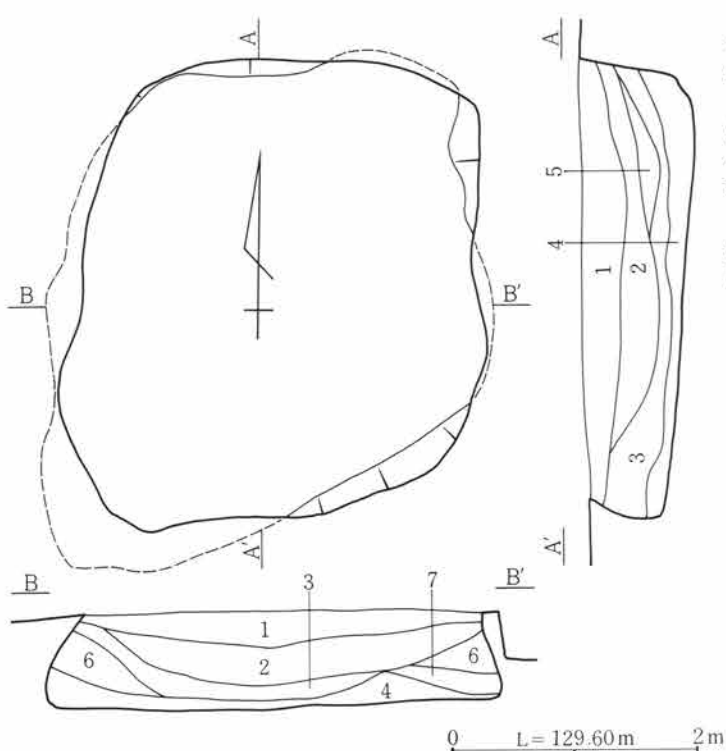
同部の覆土の状況から、使用時は空間として存在していたものと考えられ、この部分の覆土は、底面直上層が非常に硬化していた。そして、これより上位の土層は地山土の小ブロックを含有しており、最上層では、34号溝の底面として存在していた部分であり、この土層も硬化している。また、分層された土層は、比較的小さい単位で認められ、各土層の堆積には、比較的時間幅をもって埋没したものと考えられる。これにより、突出部は出入口用に使用された竪坑と考えられる。上述の状況から、本址の天井の崩壊は34号溝の構築時に生じたか破壊されたかであって、出入口部の埋没は自然埋没であったことが判断される。すなわち、本跡は、使用期中は常に開口した状態での存在（地上では、有機質状の蓋等の存在）が考えられる。

本址の性格を上述の状況より類推すると、地下2.7m程に空間を有することが最大の意義であることから、地中での有る程度の恒温効果を利用したとすれば、地下式の貯蔵庫的な存在であったと考えられ、「土倉」としての存在と考えられる。また、本址と同様の遺構としてG区2号址と呼称したものが同一種のものである。

出土遺物は柱材の自然木しかなかった。時期的には、34号溝の構築以前であるが、この段階をいつ頃にすかに係わるが、恐らくは14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる。



第676図 G区第1号地下式土坑実測図



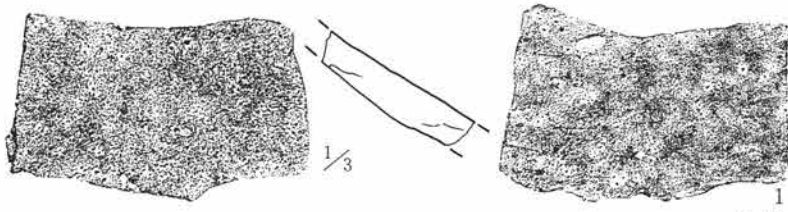
- 層序
1. 黒色土-B軽石多量・細粒状C軽石混入。
 2. " - " 通有・ " 若干・粒状炭化物若干混入。
 3. " -B軽石通有・細粒状C軽石微量。
 4. " " ・粒状炭化物含有。
 5. " - " ・細粒状C軽石若干・粒状焼土含有。
 6. " -B軽石通有・粒状VII層土含有。
 7. " - " ・粒状炭化物含有・塊状IV層土含有。

G区内の土坑について

G区内から検出された当該期の土坑は130基である。この130基は、前述した、江戸時代以降の所産と考えられる溝状遺構（耕作に伴う溝状のもの）と関連性を有するものと、室町時代に所産時期があると推定される2つに分類される。

（土坑一覧表を参照されたい。）ただし、明らかに調査着手直前のものと考えられるものは割愛してある。

上述の前者については、溝状遺構の部分で触れているので一覧表



第677図 G区第84号土坑・出土遺物実測図

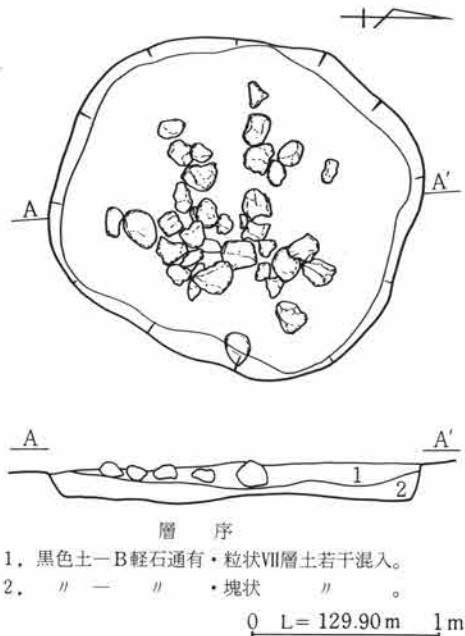
陶-90

を合わせて参照されたい。後者の土坑は、円形乃至楕円形状を基調にするものが多い。一部には方形乃至長方形を基調とするものが認められ、長形状のものは土塚墓の墓塚形状に通ずるものがある可能性もある。これは、人骨が土壌化した可能性もある点からである。他の土坑については、規模等による質差もあると考えられるが、具体的に性格付けし得る状況は、どの土坑においても認められなかった。

これらのうち、2基の土坑を図示した。これは、特徴的に状態を示す好例として掲載した。

84号土坑 基調は方形で、底面の大半が袋状にオーバーハングしている。覆土の状態から人為的な埋没の痕跡を見出すことは出来ない。図中の7層土は壁の崩落土である。遺物は常滑焼大甕片が1点のみ出土している。

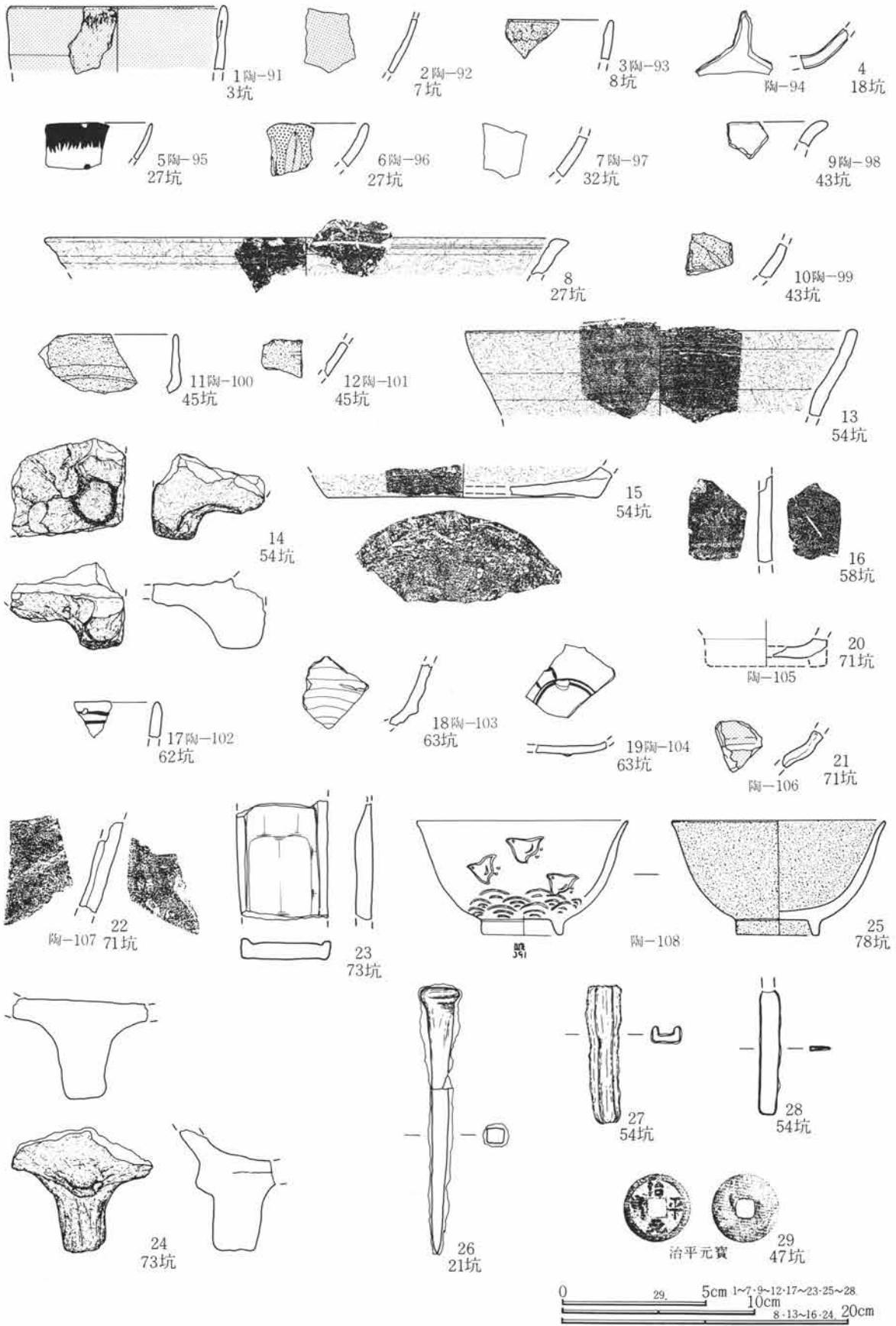
118号土坑 基調は、円形乃至楕円形と思われるもので、底面直上層には無遺物で地山土のブロックを含み、上位には礫を多く含む。これは人為的な埋没と考えられる。



- 層序
1. 黒色土-B軽石通有・粒状VII層土若干混入。
 2. " - " ・塊状 " 。

第678図 G区第118号土坑実測図

第2節 鎌倉時代以降

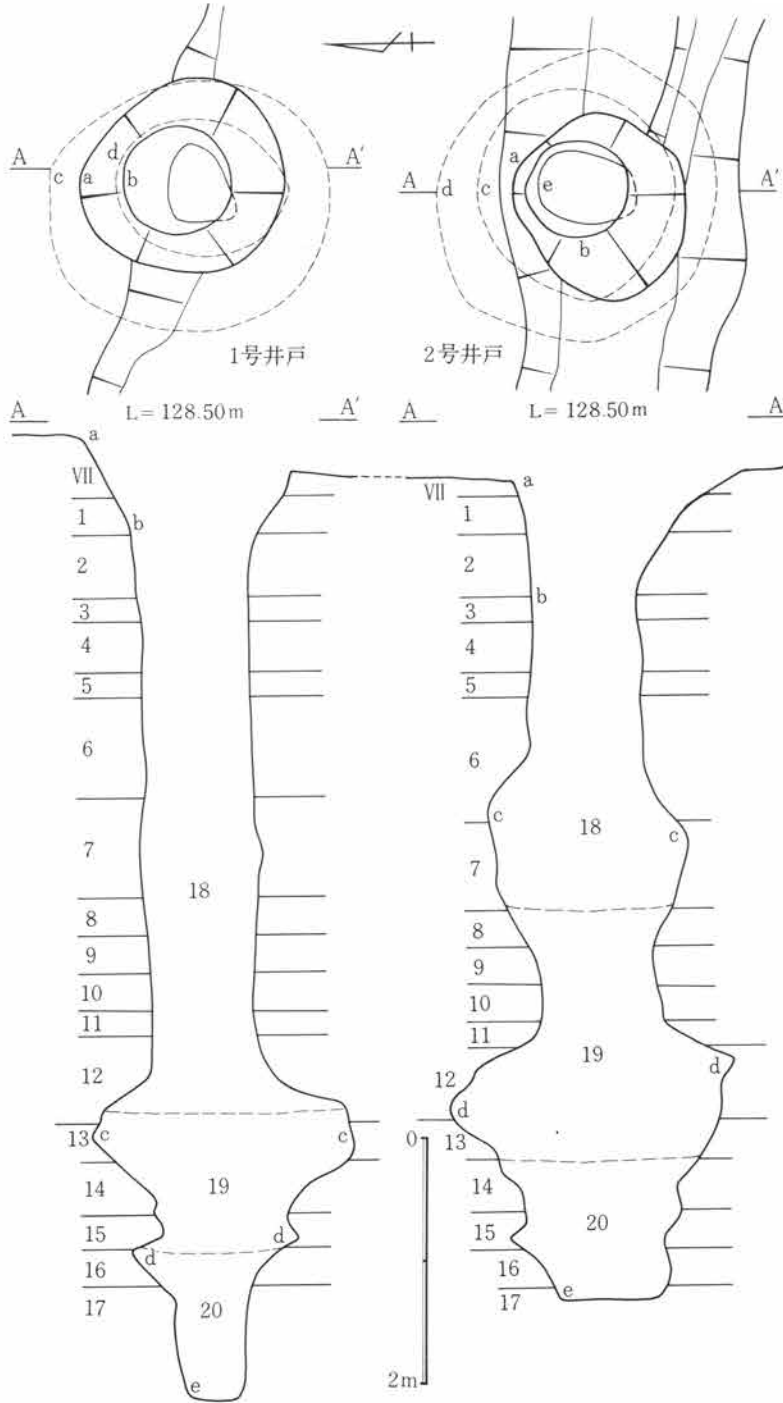


0 29 5cm 1~7·9~12~17~23~25~28
10cm 8·13~16~24 20cm

第679図 G区土坑出土遺物実測図

遺構名称	G区第1号井戸跡				位置	15・16-G-50・51グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径1.65	底径0.39	最細径0.78	最大径2.25	深度7.68	湧水位深度	夏期3.36・冬期5.60		
アグリ部最大径	夏期 0.96・冬期 2.04		湧水層		7・13・15層		耐水層	8・14・17層	

遺構名称	G区第2号井戸跡				位置	13・14-G-50・51グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径1.38	底径0.78	最細径0.81	最大径2.16	深度6.42	湧水位深度	夏期3.00・冬期5.04		
アグリ部最大径	夏期 1.56・冬期 2.16		湧水層		6・7・12・13層		耐水層	8・15層	



所見 (G1・2井戸跡)

当1号井戸跡は、20号溝を切り構築しており、2号井戸跡と近接している。

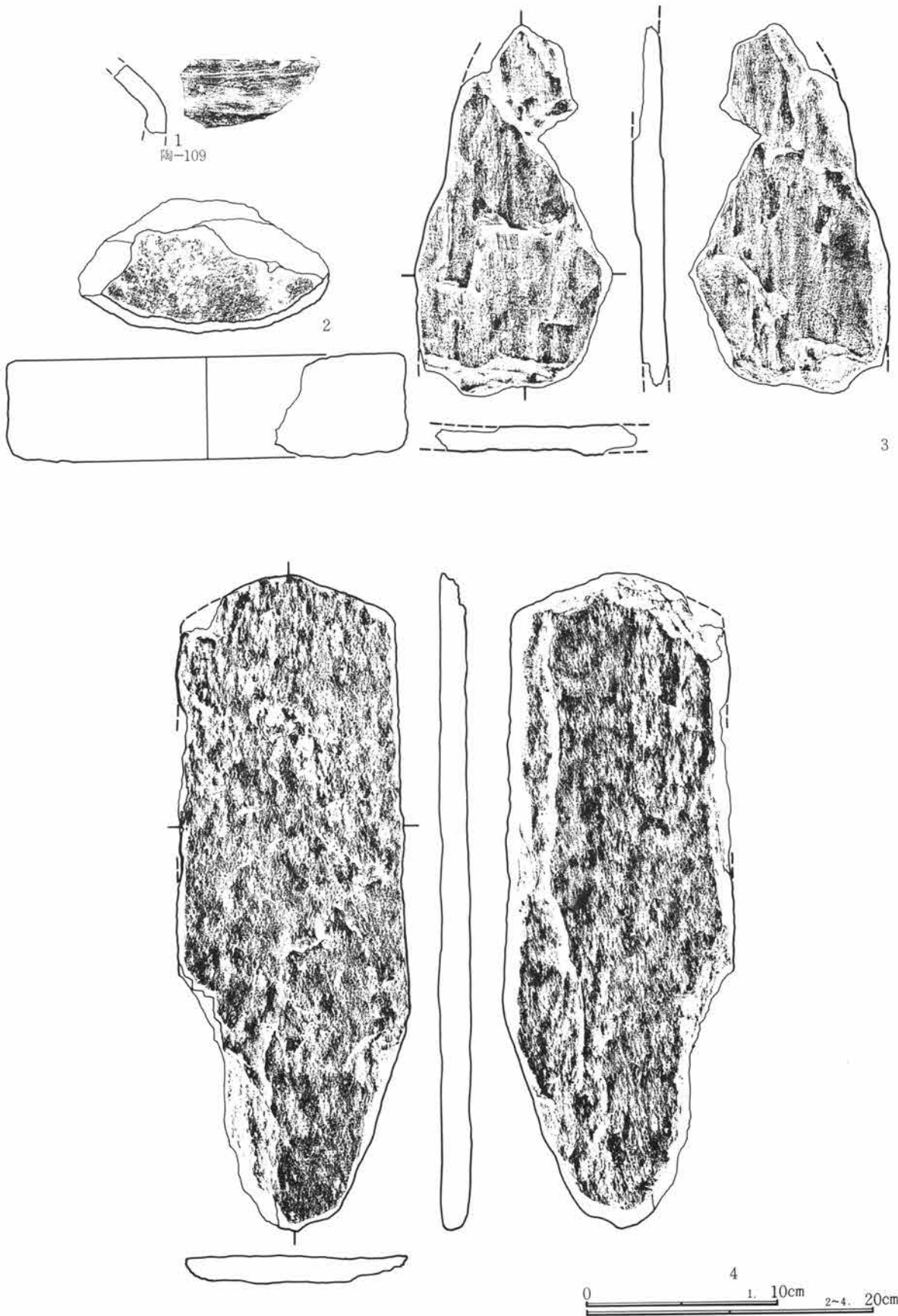
形態は、両者共に井戸枠等の施設が認められなかった点で地山井筒円筒型であると考えられる。

この両者は、ほぼ同様な占地条件から、同時乃至前後しての存在と考えられる。しかし、両者の断面を比較すると、1号井戸には6・7層部での著しいアグリは認められない。また深度

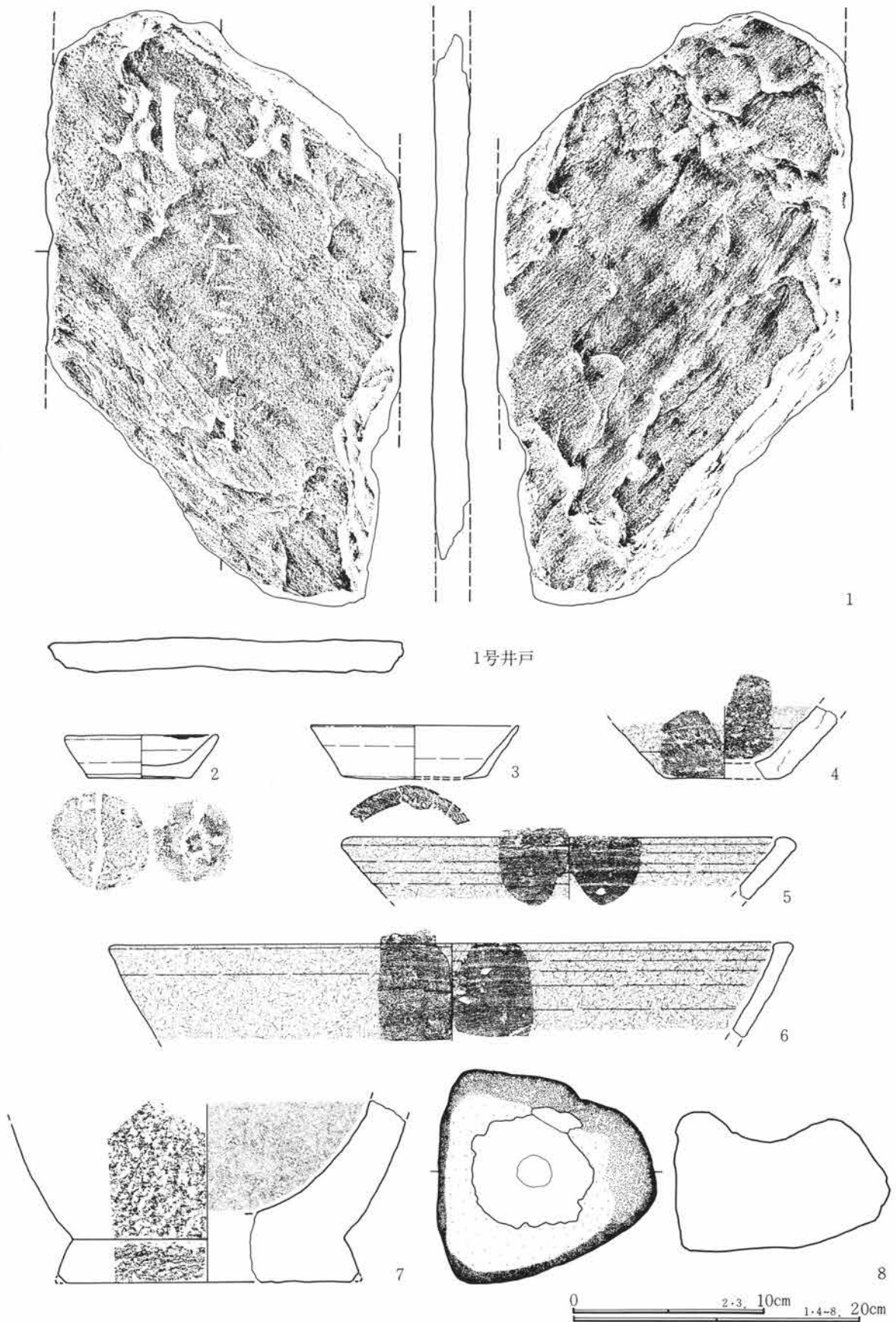
層序

1. 褐色中砂 (固結)。
2. 褐色小礫混入火山灰砂 (固結)。
3. // 細砂 (固結)。
4. 灰色小礫混入火山灰砂 (固結)。
5. 褐色粗砂 (固結)。
6. // 細砂 (固結)。
7. 灰褐色シルト。
8. 黒色帯。
9. 褐色火山灰。
10. 灰褐色軽石粒。
11. 褐色火山灰。
12. 灰褐色細砂 (固結)。
13. 褐色砂質シルト。
14. // 細砂 (固結)。
15. 灰色細砂。
16. 灰褐色シルト。
17. 暗灰色細砂 (固結)。
18. 黒色土-B軽石通有・塊状VII層土多量混入 (人為層)。
19. 円礫・角礫非常に多量・塊状VII層土多量・黒色土 (B軽石含有) の混土層 (人為層)。
20. シルト・砂質土 (地山壁体崩壊土)。

第680図 G区第1・2号井戸跡実測図



第681図 G区第1号井戸跡出土遺物実測図

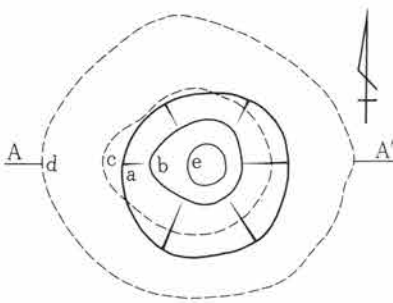


第682図 G区第1・2号井戸跡出土遺物実測図

では、1号井戸が深い。覆土は同様な状態である。ただ、2号井戸の19層中からコンテナケースに50箱近くの礫が出土している。この断面からの状態では、前述の后者での存在と考えられる。

出土遺物は図示したもの以外は、奈良・平安時代の土器類・瓦類であった。1号井戸の板碑に“厂广★★月、の紀年銘と阿弥陀種子三尊を刻んでおり、暦応4年（北朝年号）（1341年）と判読され、この年号を上限として考えられる。また2号井戸から出土した土師質土器皿は、3類と6類が出土し、6類を上限とすれば15世紀後半代と考えられ、内耳鍋も4期のものと考えられ、15世紀後半代が考えられる。

遺構名称		G区第3号井戸跡		位置		20-G-71・72グリッド内		平面形態		円形	
規模(m)	地上径1.30	底径0.23	最細径0.66	最大径2.46	深度6.90	湧水位深度	夏期3.42・冬期5.70				
アグリ部最大径	夏期 1.40・冬期 2.46		湧水層		6・12層		耐水層		7・13層		



層 序

1. 褐灰色小礫混入火山灰砂（固結）。
2. // 粗・細砂（固結）。
3. 灰色細砂（固結）。
4. 灰褐色火山灰砂（固結）。
5. 灰色細砂（固結）。
6. 褐灰色シルト。
7. 黒色帯。
8. 黄灰色シルト。
9. 黄褐色軽石粒。
10. 褐灰色火山灰砂（固結）。
11. 暗灰色細砂（固結）。
12. // シルト。
13. 灰褐色中・細砂（固結）。

所 見 (G3・7井戸跡)

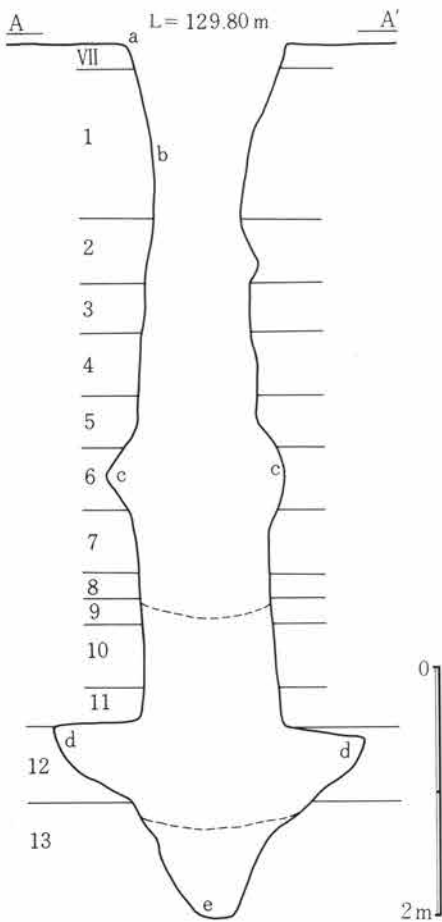
3号井戸跡は、方形区画内の主郭内に位置している。

形態は井戸枠等の痕跡が認められなかったことから地山井筒円筒型と判断される。出土遺物が無かったため具体的な本跡の時期を明定できない。

7号井戸跡は、36号址に比較的近接して位置している。形態は3号井戸跡と同様で地山井筒円筒型である。

覆土は、底面に地山壁の崩壊土が堆積しており、恐らくは12層土の湧水に伴うものと判断される(17層)。この上位には人為層と考えられる16層土の堆積があり、これより上位は、ほぼ同様な土で確認面まで達している。これは、自然埋没と即断出来るとも思われるが、周辺部での黒色土の状況を想定して考えると無理もあると思われる。この層は、自然と人為が混在してのものと考えられる。(調査主体側も断面を精査しての観察はしていない。)

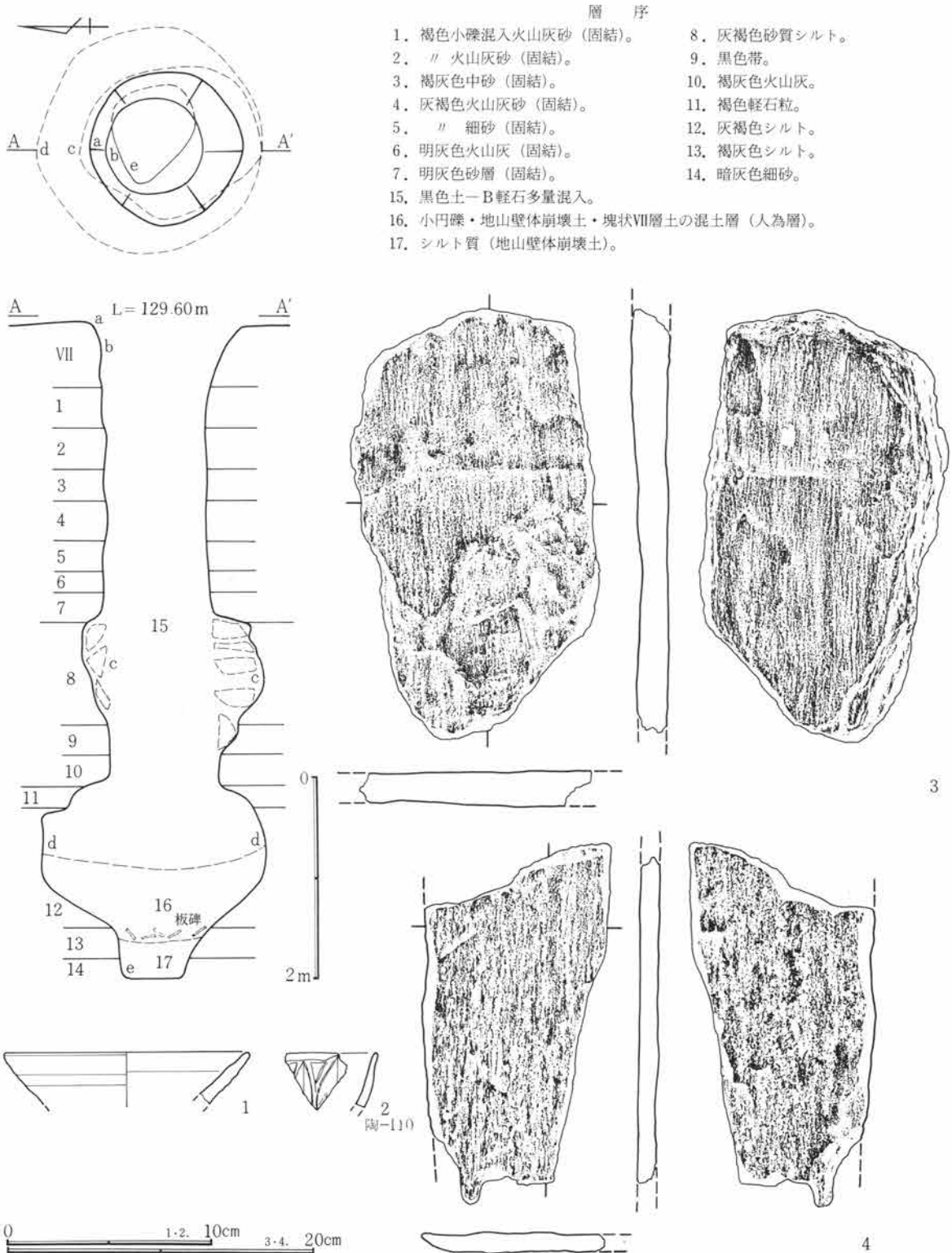
出土遺物は、板碑7点・石臼（下臼）片1点・土師質土器皿・などである。この内土師質土器皿は5類と思われる。板碑は17層土上位で出土している。出土の層から廃棄直後か直前乃至同時である。出土した板碑の状態は、第686図-1が唯一完形に近い状態で、他は1/2以下のものである。また、破片化したものが4点ある。この4点には極度に磨滅したものがない。そして、第686図-2は側部に加工痕が認められる。上述の出土状況から、本井戸跡の板碑は、地上部で転用されていた可能性が大きい。時期は15世紀後半が上限と考えられる。



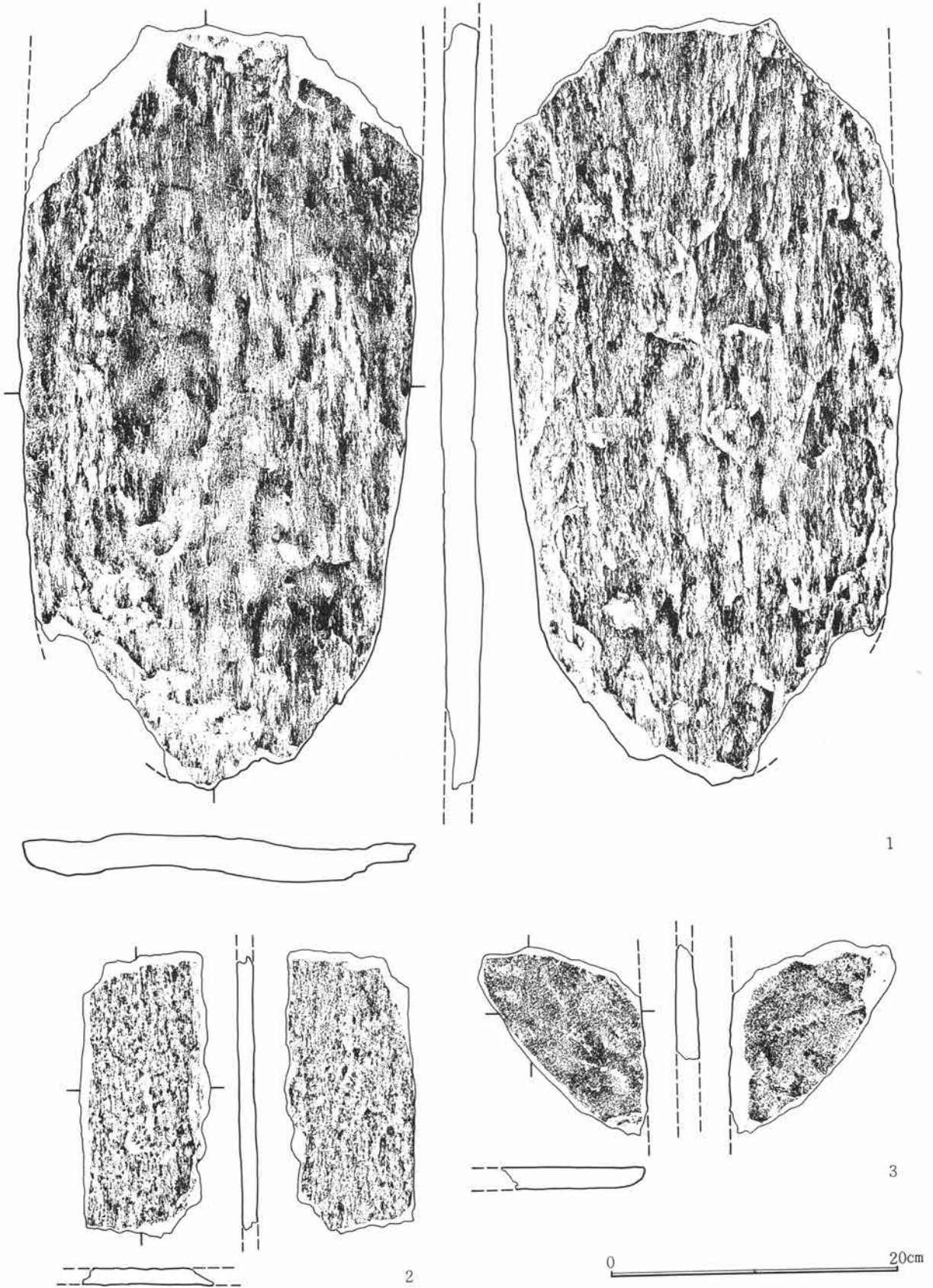
第683図 G区第3号井戸跡実測図

第3章 検出された遺構・遺物

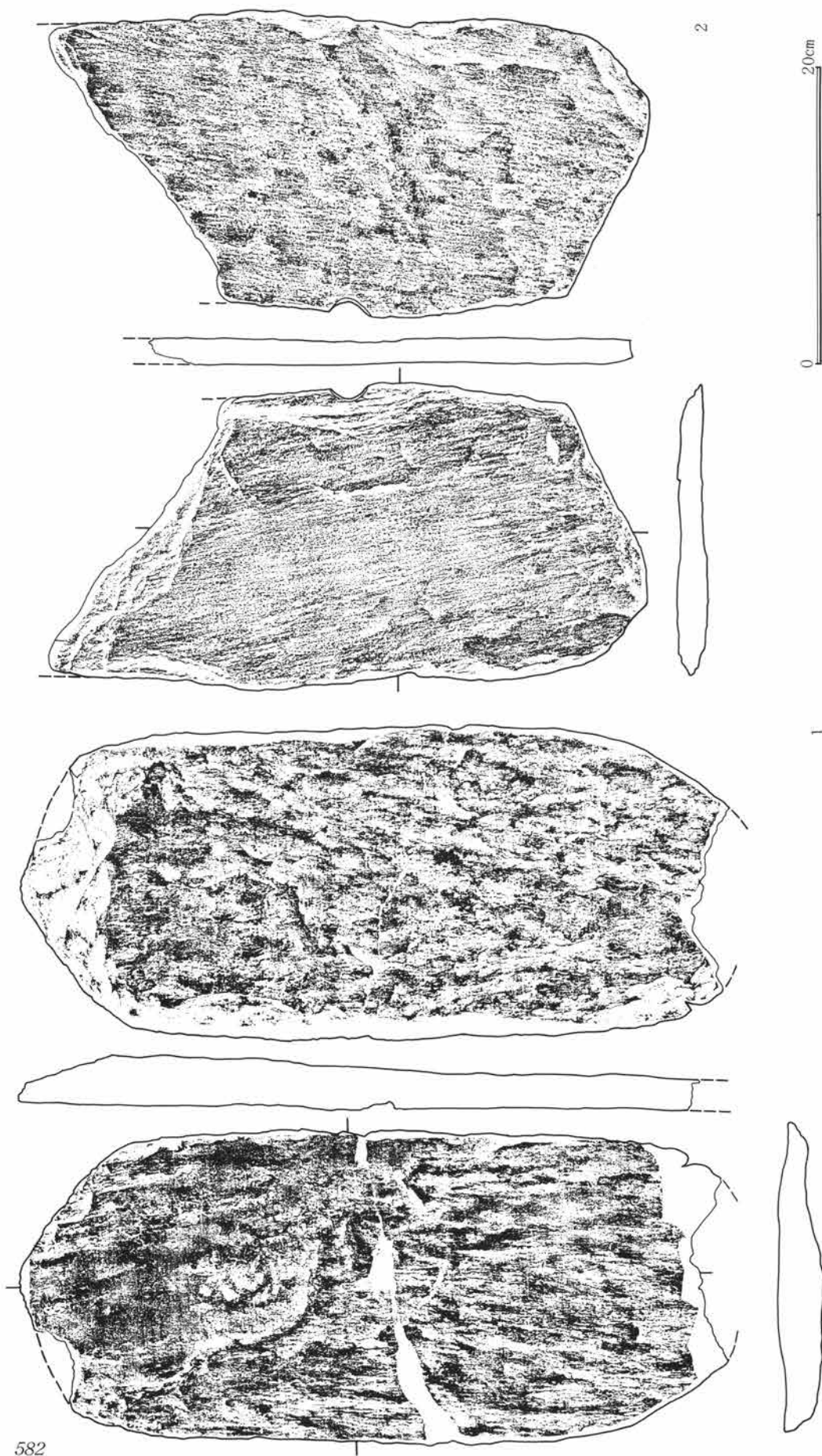
遺構名称	G区第7号井戸跡		位置	6・7-G-66・67グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径1.50	底径0.60	最細径0.96	最大径2.22	深度6.36	湧水位深度	夏期3.30・冬期5.10
アグリ部最大径	夏期 1.80・冬期 2.22		湧水層	8・12層		耐水層	9・13層



第684図 G区第7号井戸跡・出土遺物実測図(1)



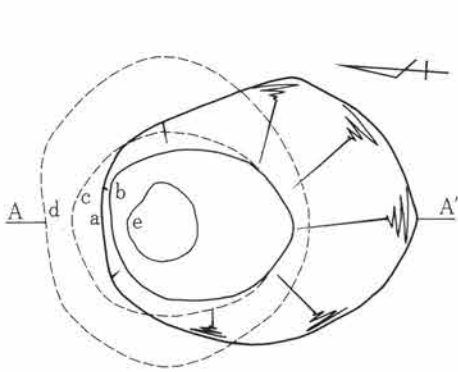
第685図 G区第7号井戸跡出土遺物実測図(2)



第686図 G区第7号井戸跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	G区第8号井戸跡			位置	38・39-G-70・71グリッド内			平面形態	円形基調(楕円)
規模(m)	地上径2.52	底径0.48	最細径1.44	最大径2.10	深度6.72	湧水位深度	夏期2.58・冬期4.80		
アグリ部最大径	夏期 1.68・冬期 2.10			湧水層	4・9層			耐水層	5・10層

遺構名称	G区第9号井戸跡			位置	20・21-G-68・69グリッド内			平面形態	円形
規模(m)	地上径1.92	底径0.60	最細径0.90	最大径1.62	深度6.18	湧水位深度	夏期3.48・冬期5.10		
アグリ部最大径	夏期 1.24・冬期 1.62			湧水層	6・10層			耐水層	7・11層



層 序

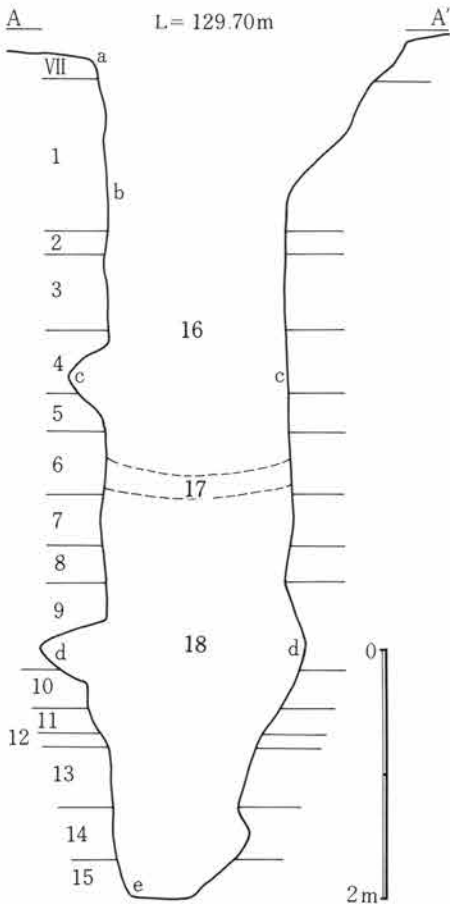
- | | |
|----------------------|------------------|
| 1. 褐灰色小礫混入火山灰砂 (固結)。 | 9. 灰褐色細砂 (固結)。 |
| 2. 灰褐色細砂 (固結)。 | 10. // シルト。 |
| 3. 褐灰色火山灰砂 (固結)。 | 11. // 中砂 (固結)。 |
| 4. 灰褐色細砂 (固結)。 | 12. // シルト (固結)。 |
| 5. 黄褐色火山灰。 | 13. 褐灰色細砂 (固結)。 |
| 6. 黒色帯。 | 14. // シルト。 |
| 7. 黄褐色火山灰。 | 15. 暗灰色シルト。 |
| 8. // 軽石粒。 | |

所 見 (G 8・9井戸跡)

8号井戸跡は、方形区画内に位置している。型態は従前の井戸跡同様に地山井筒円筒型と思われる。

当井戸は出土遺物が無いため、具体的に所産時期を明定出来ない。これと同様であるのが3号井戸跡である。この両者を図上で直線で結ぶと、区画を構成する溝の南北方向の走行方位に近いことが挙げられる。ただ、両者には断面形の違いがあり、上述の状況から言及出来ない。さらに、3号井戸は、主郭と考えられる部分の正面側に位置する点で不可解である。本跡は、主郭の背面側に存在する点で、建物と分離する位置での存在も考慮される。しかし、出土遺物が皆無という状態は、人為的埋没にしても、自然埋没にしても、周辺部に当該の生活痕が認められれば、少量ながらも遺物が含有すると考えられる。すなわち、遺物が含有されない点では、周辺部での生活がまだ発展していない段階で、周辺部の遺物片が散在しない頃とも思われる。状況とすれば、方形区画に先行する存在とも考えられる。

9号井戸跡も、型態は地山井筒円筒型である。本井戸跡も、方形区画内の主郭内で、17・20・38・39溝が立ち上がる部分にあっている。ただ、新旧関係では上述の20号溝と116号址を切って構築があり、新旧関係の面では、方形区画を構成する溝状遺構と同段階に有る。また、当井戸跡の深度は、方形区画内及び同周辺部に位置する井戸の中では最も浅いものである。

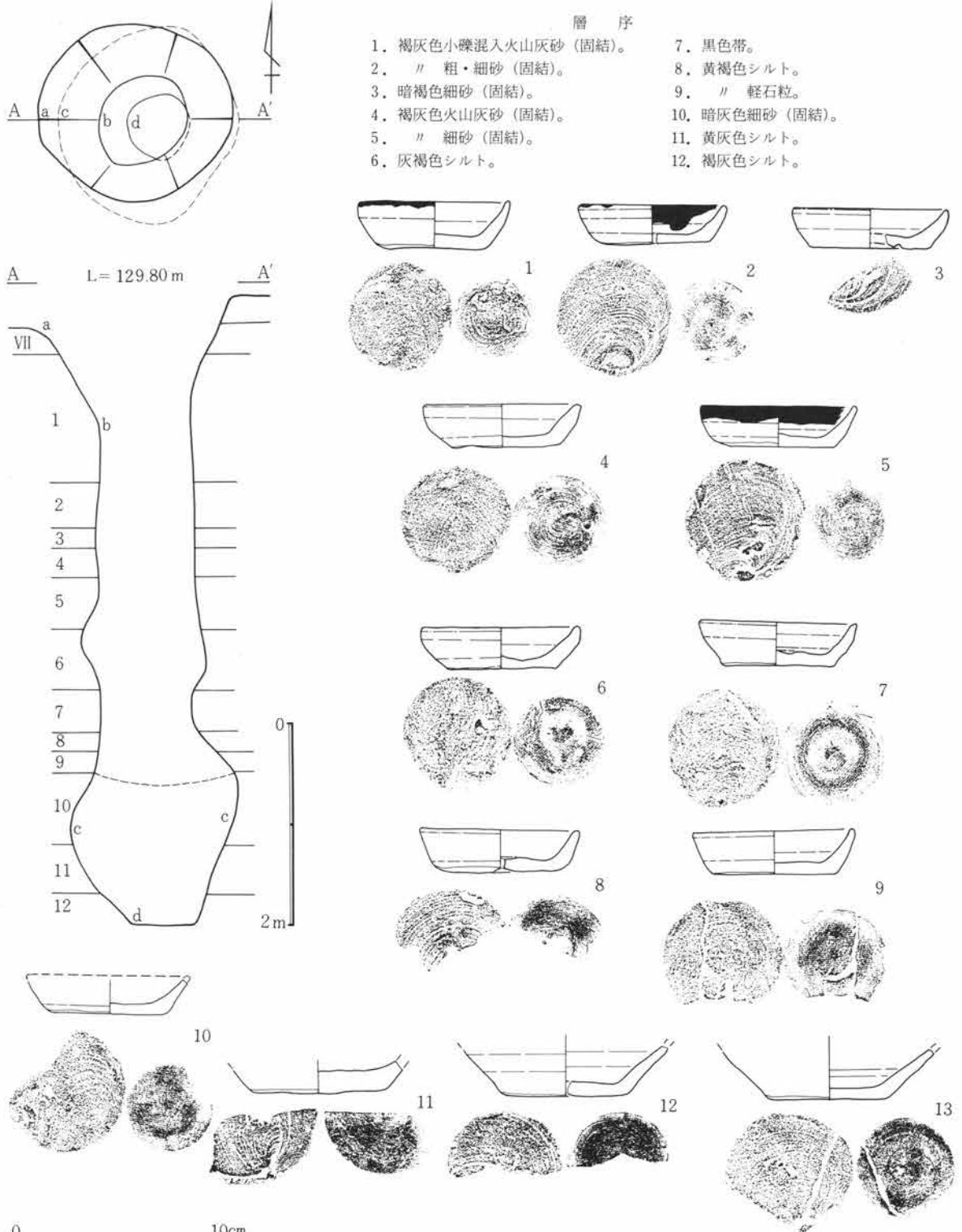


第687図 G区第8号井戸跡実測図

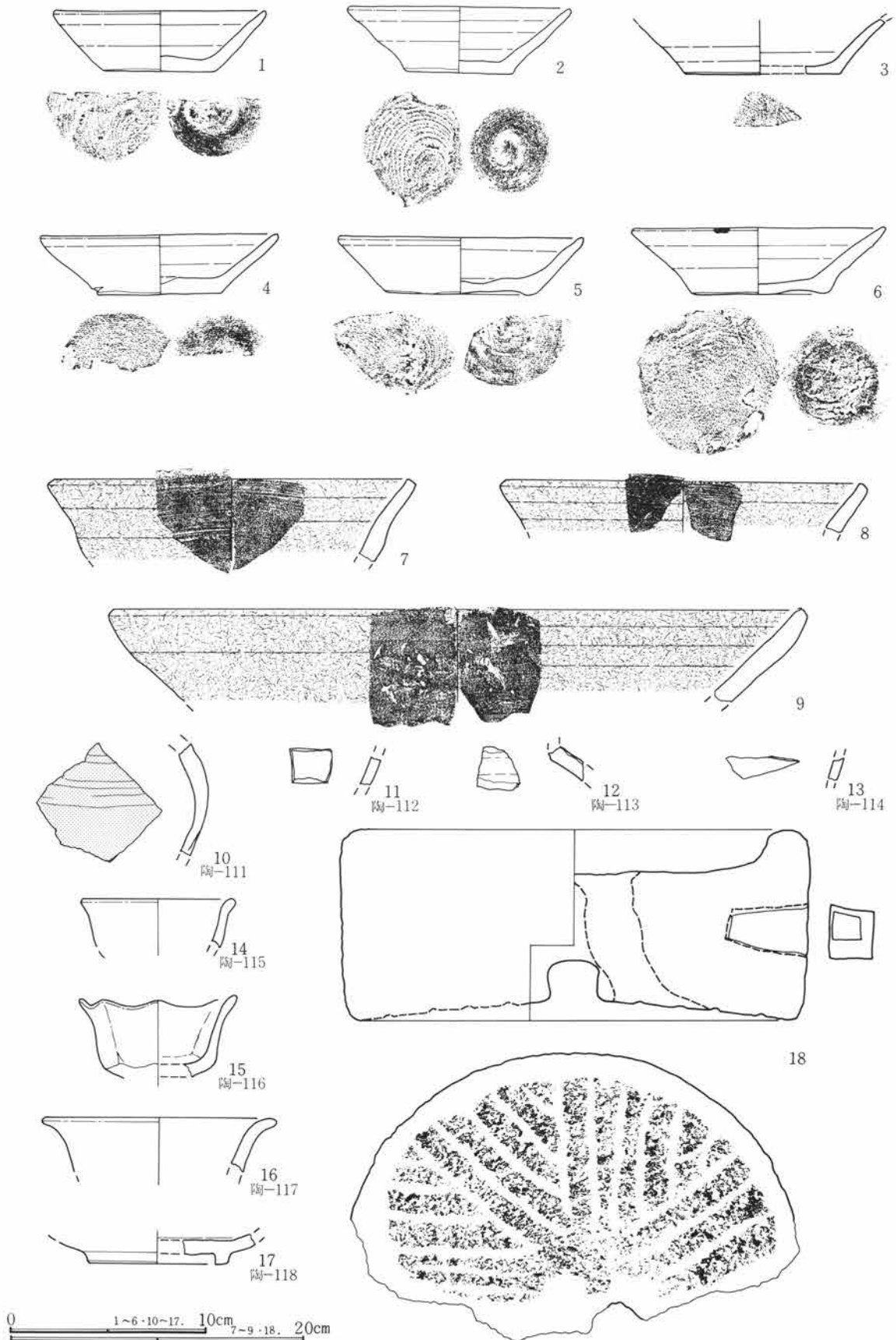
第3章 検出された遺構・遺物

湧水位深度との関係については後述する。

出土遺物は、土師質土器皿・軟質陶器・邦製陶器・舶載青磁・石臼などがある。土師質土器皿では、2・4・5・6類が出土しており、下限を示す6類から15世紀後半の埋没年代が得られる。また、陶磁器では、第689図-10の14世紀末葉、青磁の13~16世紀の年代観があり、16世紀を示すものは、15~16世紀を示すものであり、上限をとらえると15世紀でのものと考えられる。これにより、概ね15世紀後半の埋没であろう。



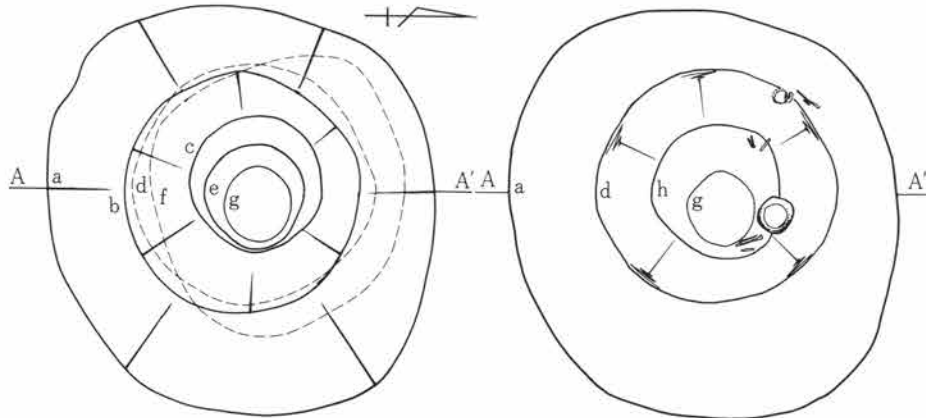
第688図 G区第9号井戸跡・出土遺物実測図(1)



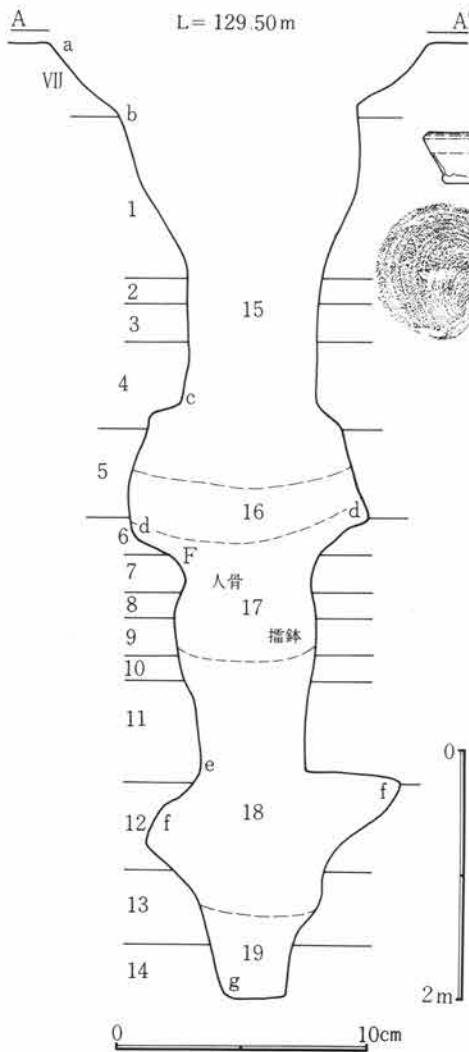
第689図 G区第9号井戸跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構・遺物

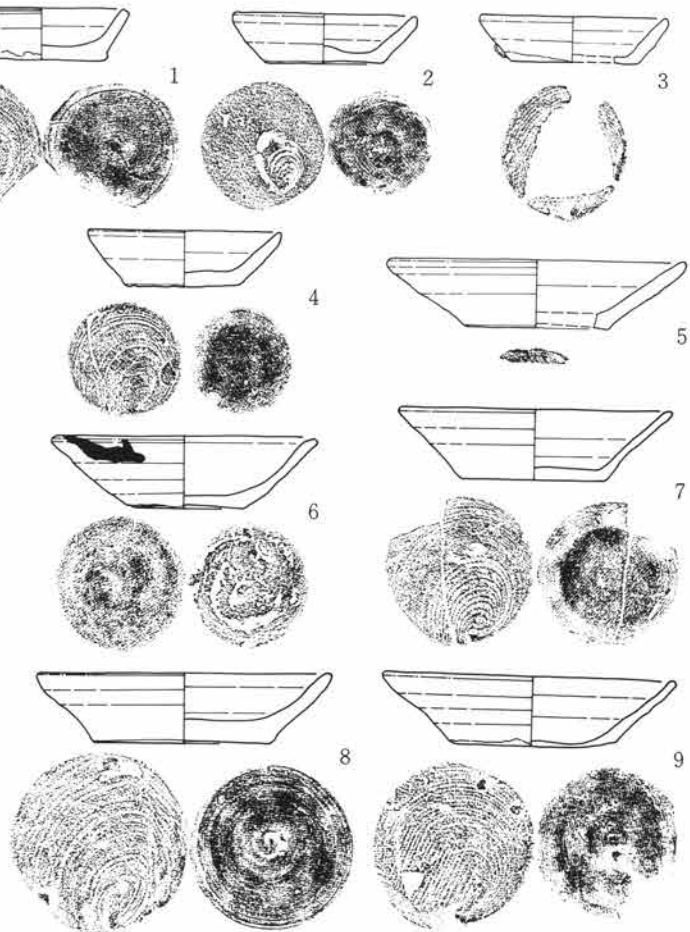
遺構名称	G区第11号井戸跡		位置	1・2-G-49~51グリッド内			平面形態	円形
規模(m)	地上径3.54	底径0.48	最細径0.84	最大径3.54	深度7.50	湧水位深度	夏期3.75・冬期5.85	
アグリ部最大径	夏期 1.90・冬期 2.00		湧水層	5・12層			耐水層	6・13層



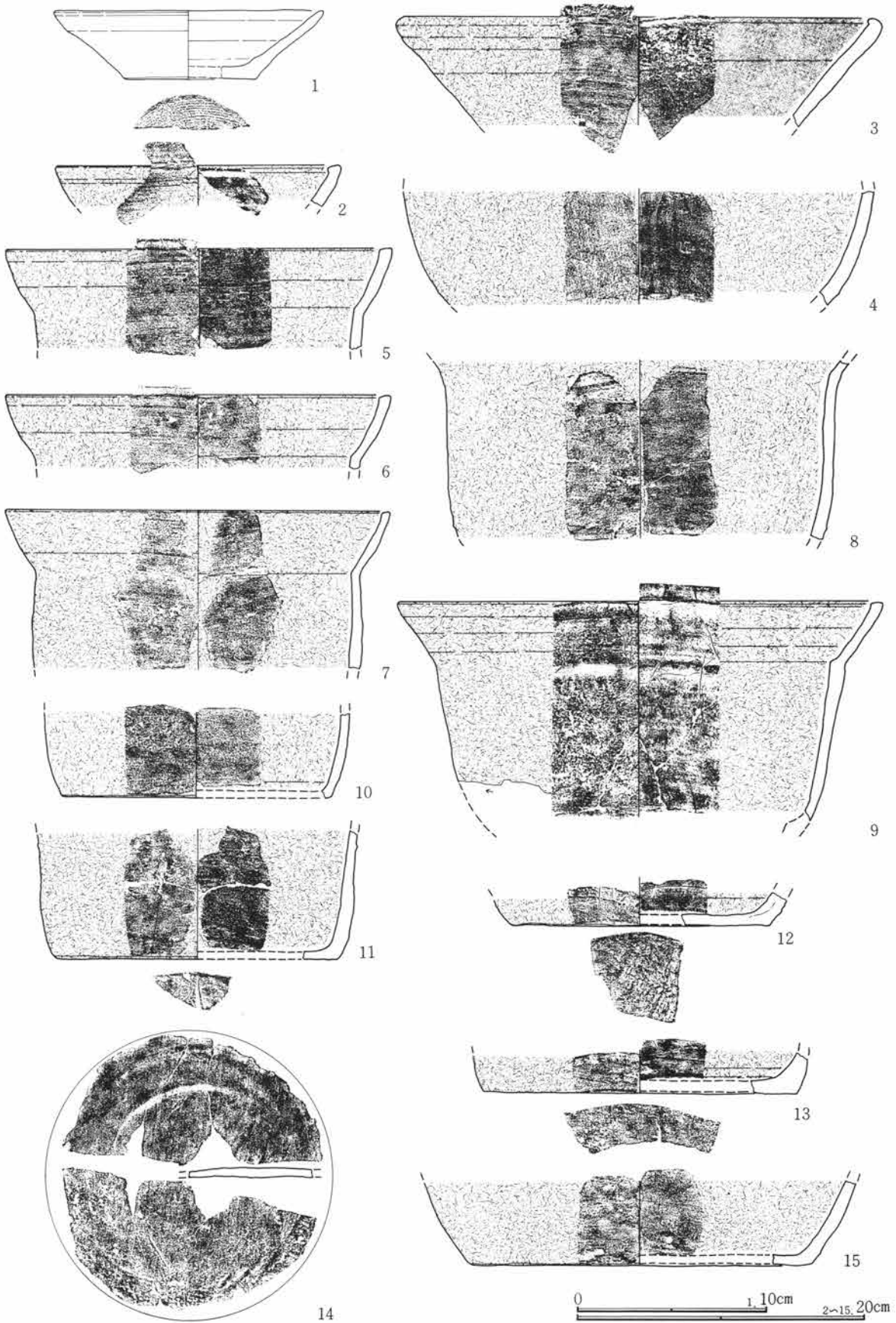
1. 褐色小礫混入火山灰砂(固結)。
2. 褐色細砂(固結)。
3. // 小礫混入火山灰砂(固結)。
4. 灰色火山灰砂(固結)。
5. 灰色砂質シルト。
6. 褐色シルト。
7. 黒色帯。
8. 黄褐色シルト。
9. // 軽石粒。
10. 褐色シルト。
11. 灰色細砂(固結)。
12. 灰褐色シルト。
13. 褐色火山灰砂(固結)。



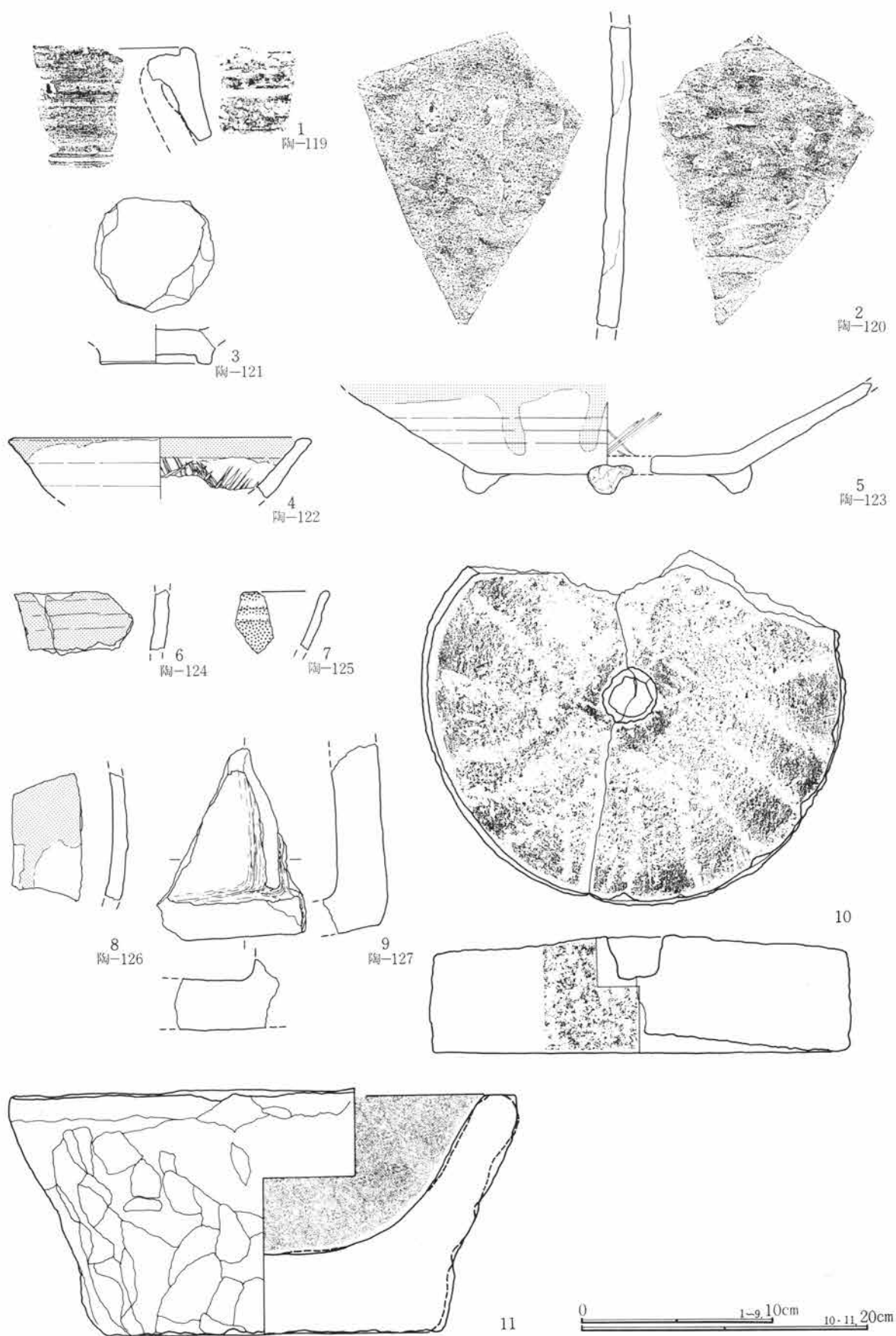
14. 褐色シルト。
15. 黒色土-B軽石多量・塊状VII層土多量混入(人為層)。
16. 小円礫層。
17. 黒色土-II層土・塊状地山土の混土層(人骨・播鉢出土)(人為層)。
18. 15同質。
19. 地山崩壊土(シルト土)。



第690図 G区第11号井戸跡・出土遺物実測図(1)



第691図 G区第11号井戸跡出土遺物実測図(2)



第692図 G区第11号井戸跡出土遺物実測図(3)

所見 (G11井戸跡)

11号井戸跡は、G区内南端部周辺にあり、周辺遺構としては9号址が位置している。形態は、地山井筒円筒型である。形状では、確認面での地上径が比較的大きい。これは、構築時よりの状態なのか、廃棄に伴うものなのか明らかではないが、覆土の18・17・15層中に同部と同質の地山ブロック土が多く混入しており、このブロック土が地上部の崩落乃至崩壊土とも考えられる。また、16層は小円礫が多量に出土している。この円礫は、後述する人骨との関係がある。

出土遺物は、土師質土器皿・鉢・内耳鍋・焼締陶器・陶器・磁器・石臼・石製播鉢・人骨・竹片・木片が出土している。この遺物の中で、土師質土器皿は3・4・5・6類が出土している。この土師質土器皿の示す年代観は15世紀代である。また、第691図一2・4・8・9は、人骨の出土した周辺から出土している。軟質陶器では、内耳鍋は比較的まとまった個体で第691図一9が3期の存在であり、他は4期に指標されるものである。この3期は15世紀前半、4期が15世紀後半の年代観が与えられる。また、邦製陶器では、卸皿が15世紀前半、三足鉢が15世紀後半、平碗が15世紀中頃、焼締の常滑焼が15世紀前半代での年代観が得られる。これらの遺物からは、15世紀代の年代観が得られる。ただ、舶載の青磁は13世紀南宋の製品であり、上述の年代観より遡るものであることから、伝世品としての存在が考えられる。これらのことから、当井戸跡は、15世紀代での存在であり、埋没の下限として15世紀後半代が考えられる。

人骨は、17層土内より出土している。この人骨は1個体分のものであるが各部位は埋葬時の状態を留めているものではなかった。これは、上腕骨と頭蓋骨が上位アグリ^{アグリ}の地山部分から出土しており、他の部分は17層土内で約30cm程下がった井筒内から散在する状態で出土している。この状態は、埋葬時に生じたものではなく、17層土自体の問題である。17・18層土は、人為層としての存在であり、同土層土を埋めた後に、両層が沈下したことにより人骨の出土標高位に差違が生じたものと考えられ、埋葬時は、17層土を埋めきる途中（アグリ部に達した段階）で被葬者の埋葬を行ない、埋葬終了後17層土の残土を埋め、さらに16層土の小円礫を埋設したものと判断される。この埋葬に伴う遺物として、上述した土師質土器皿4点と、第692図一11に示した石製播鉢がある。余説となるが、民間伝承・民俗事例に、お盆に死んだ人を埋葬する時、頭部に播を被せるといふ風習がある。これは、お盆に先祖の霊が帰ってくるのに逆行する形で冥土に行くので、先祖に叱られ頭を敲かれるので頭部に播を被せるといふことである。本例は、これに該当する事例として判断出来ないが、埋葬を井戸内に行っていることが重要な点である。元来、井戸は「井戸神」の存在する清浄な所であり、そこに埋葬する事が不可解である。また、井戸神信仰等の精神文化に係わる状況も本井戸跡を含め他の井戸跡で示唆される。

遺構名称	G区第12号井戸跡			位置	28・29-G-70~72グリッド内			平面形態	円形基調	
規模(m)	地上径1.71	底径0.72	最細径0.84	最大径1.44	深度5.22	湧水位深度	夏期4.38・—			
アグリ部最大径	夏期 1.44・—			湧水層	8層			耐水層	9層	

遺構名称	G区第13号井戸跡			位置	4-G-63・64グリッド内			平面形態	円形	
規模(m)	地上径1.53	底径0.60	最細径0.81	最大径3.06	深度7.08	湧水位深度	夏期4.32・—			
アグリ部最大径	夏期 3.06・—			湧水層	10層			耐水層	11層	

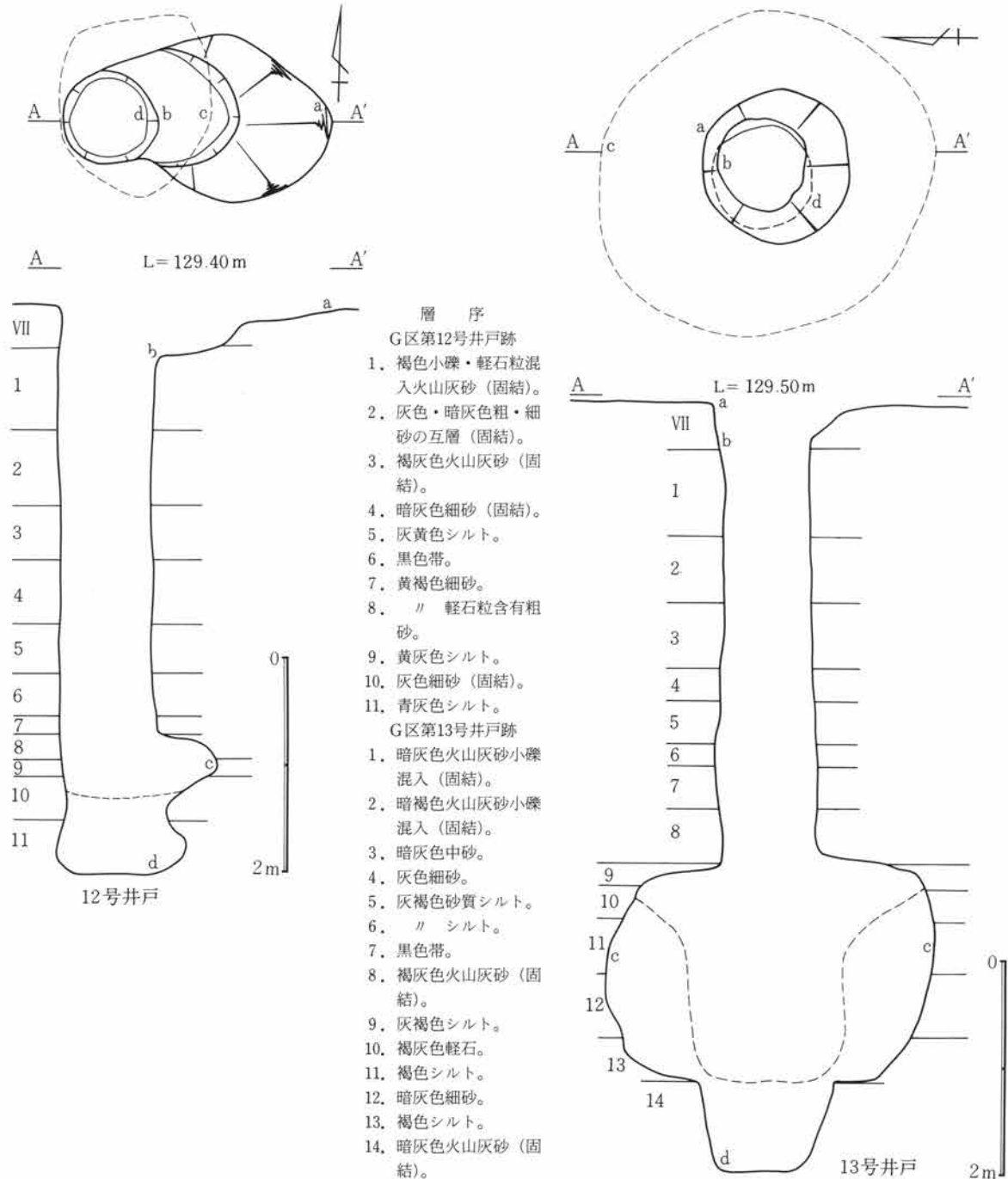
所見 (G12・13井戸跡)

G12号井戸跡は、方形区画域の主郭部内で、G区西側ピット群の分布域内に位置している。形態は、地山井筒円筒型である。

第3章 検出された遺構・遺物

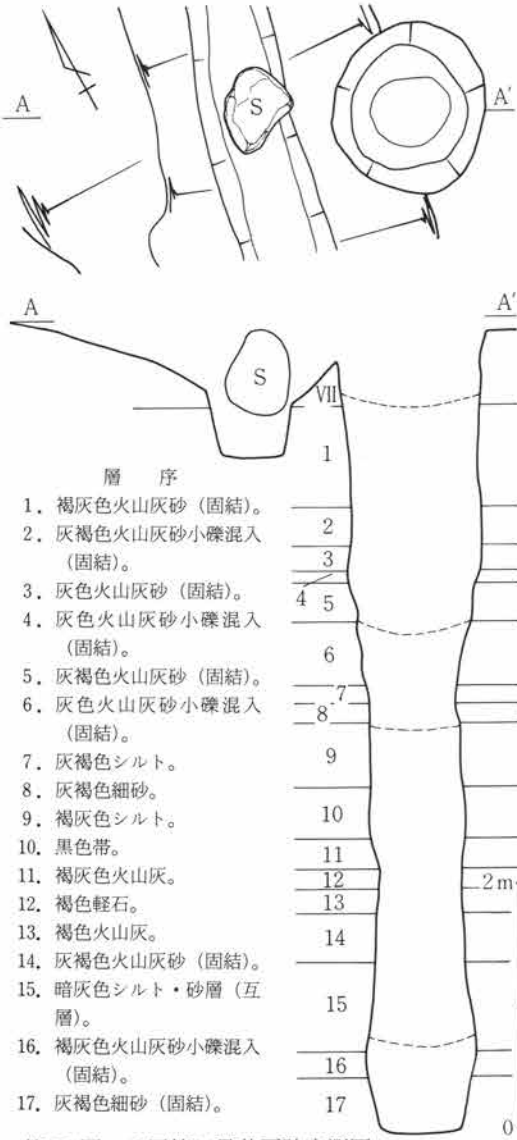
当井戸跡は、G区内で検出されている井戸では最も深度が浅く、アグリが1ヶ所にしか認められない点で、使用期間が長期に亙るものでないことが示唆される。また、平面では検出面に段状の施設を伴っており、地上部での施設が示唆され、段状の部分は水汲みに伴うものと考えられ、この部分を考慮しての施設であったと考えられる。出土遺物は土器・陶磁器類は皆無であった。

13号井戸跡は、G区内南端に位置し、周辺遺構としては7号井戸跡が位置する。形態は地山井筒円筒型である。当井戸跡は、アグリ部分の崩壊により下半部が埋没し、掘り直して使用している。この掘り直した部分が破線で示した部分である。覆土では、埋没部分がシルト等の地山土（9・10・11・12・13層の混土）であり、上位はB軽石を多量に混入する黒色土であった。出土遺物は曲物の底部の細片1点であった。



第693図 G区第12・13号井戸跡実測図

遺構名称	G区第14号井戸跡			位置	27-G-62・63グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径1.38	底径0.66	最細径0.66	最大径1.38	深度6.39	湧水位深度	夏期1.80・冬期5.70	
アグリ部最大径	夏期 1.14・冬期 0.90		湧水層	4・16層			耐水層	5・17層



第694図 G区第14号井戸跡実測図

所見（G14・15号井戸跡）

14号井戸跡は、34号溝状遺構と重複する状態で検出されている。井戸形態は、地山井筒円筒型である。

当井戸跡の特徴として、アグリ部が顕著でないことである。夏期に伴うのは3層土部分、冬期に伴うアグリは16層土部分である。この両者はやや膨れる程度のものであり、湧水量が少ない様にも考えられるが、調査時に各井戸の下位での湧水量を計量したが、周辺部の井戸より多く計量された。ただ、計量した時期・気象により左右され、使用時の気象が判断されない限り想定域は脱せない。このアグリが少ないことは、湧水量もさることながら、耐水層の土層自体が影響することも少なくはないと考えられる。覆土は、底面に15cm程の自然堆積土と考えられる黒褐色土が認められ、この層より上位はロームブロックを多量に混入する黒色土（B軽石含有）であり、人為層と考えられる。そして、本井戸跡は、34号溝と重複しているが確認時には、34号溝を切る状態で認められた。ただ、埋土の沈下現象を考えると、単純に確認面での状況をして判断は出来ない。これは、沈下現象自体が長期に亙り進行するものであり、34号溝が本井戸跡を切って構築し、埋設という過程を経ても、本井戸跡の沈下は進行しており、34号溝の埋設土が崩落する状態で混入する。このことより、確認面で視認された状況をもって結論付けることには無理があり、両者の新旧関係については、不明という結論である。

15号井戸跡は、G36号址の北側約4m、G106号址・H2・

49号址の東・南東方向で検出されている。井戸形態は、地山井筒円筒型を基調とするもので、状態から掘り直しが窺える。この状況は、図の左側断面で顕著に認められる。断面図中破線で示したものが旧形状である。この掘り直しは、3ヶ所に認められるアグリ最下位のものは、非常に著しい状態であり、このアグリに伴う崩壊土により前述した13号井戸跡と同様な状態になったことによると判断される。掘り直しは、南西側の壁面をアグリ部を削る状態で円筒状に掘削したものと判断出来る。また、全面に対し同様の掘削をしていないのは、崩壊土の撤去・掘削部の排土撤去を最小限に留めるためのことと考えられ、さらに、全体をアグリ最大径まで井筒径を広げた場合に、湧水の量と水位の相関関係を考慮しての所産と考えられる。

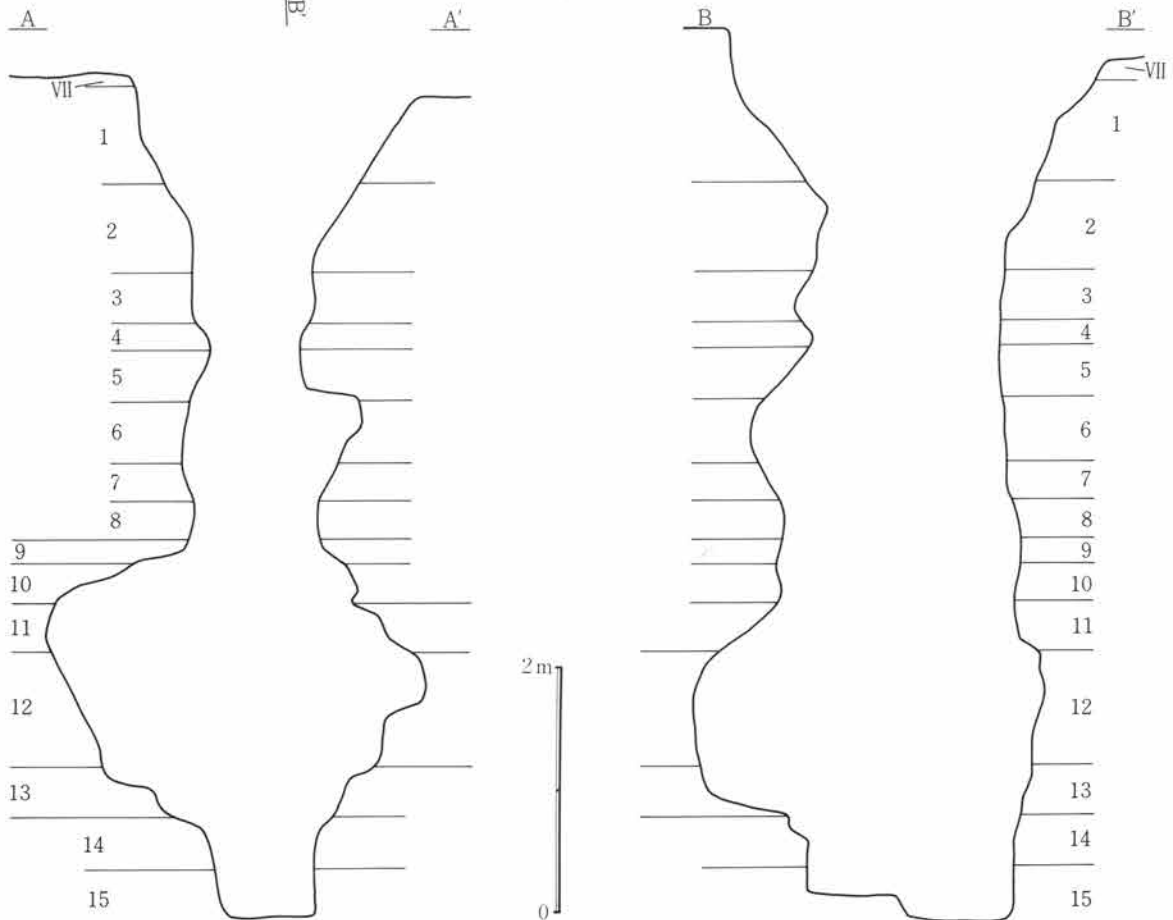
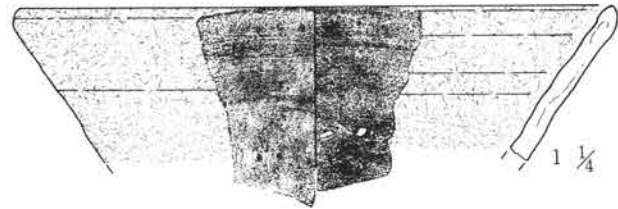
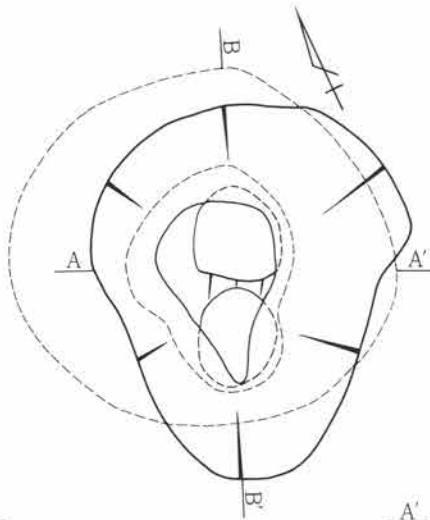
出土遺物は、軟質陶器の破片・内耳鍋であった。内耳鍋は3期のものがあり、この年代観は15世紀後半であり、埋没の上限と考えられる。

第3章 検出された遺構・遺物

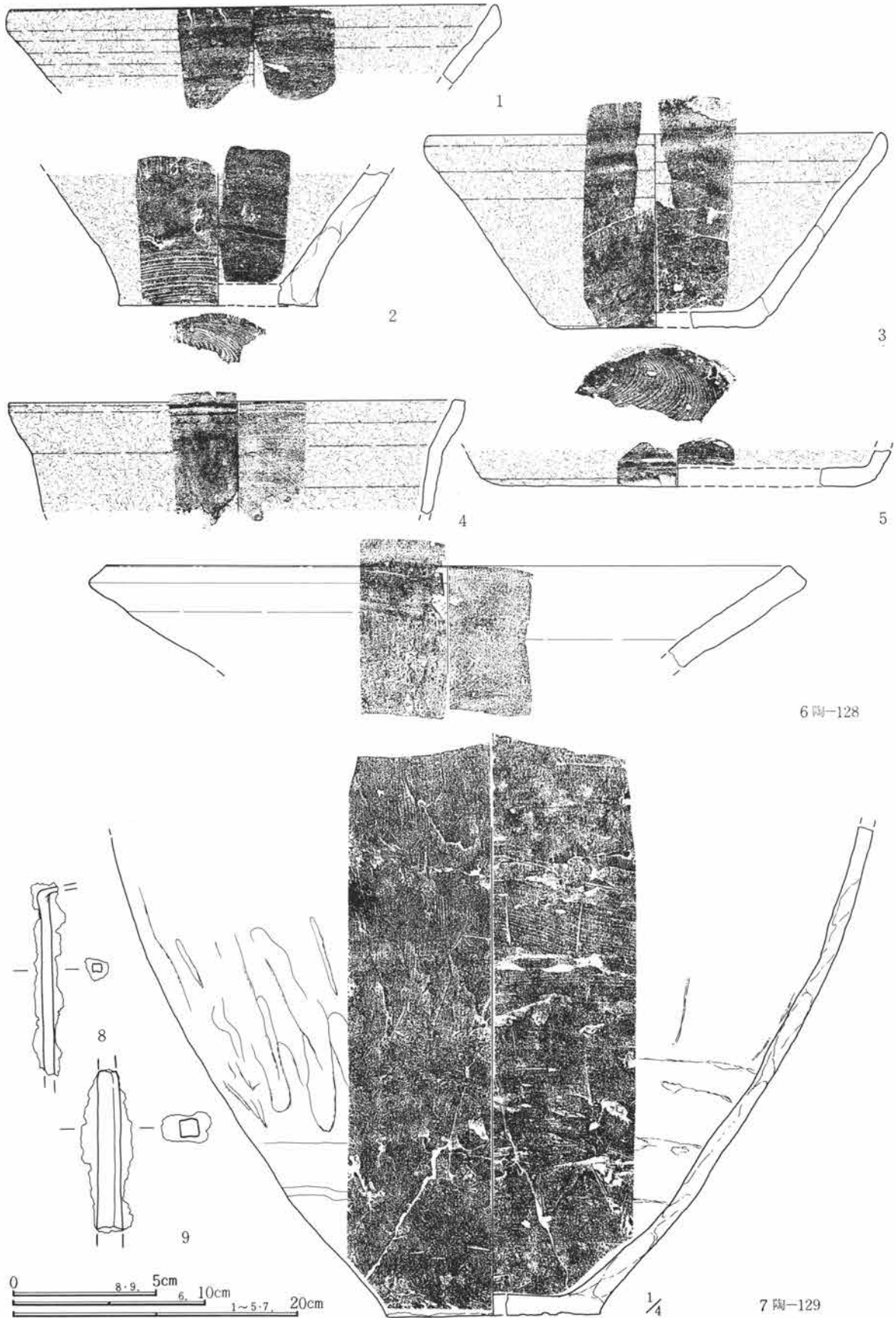
遺構名称	G区第15号井戸跡		位置	46・47-G-58~60グリッド内		平面形態	楕円形
規模(m)	地上径2.94	底径 $\frac{1.65}{0.72}$	最細径0.72	最大径3.09	深度6.72	湧水位深度	夏期2.88・冬期4.35
アグリ部最大径	夏期 1.38・冬期 3.00		湧水層	3・6・11・12層		耐水層	4・7・13層

層 序

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 褐灰色火山灰砂小礫混入 (固結)。 | 9. 褐色軽石。 |
| 2. // 火山灰砂 (固結)。 | 10. // 火山灰。 |
| 3. // 細砂。 | 11. 灰褐色中砂 (固結)。 |
| 4. 灰褐色中砂 (固結)。 | 12. // 細砂 (固結)。 |
| 5. 灰色細砂 (固結)。 | 13. 褐灰色中砂 (固結)。 |
| 6. 褐灰色シルト。 | 14. 灰褐色細砂 (固結)。 |
| 7. 黒色帯。 | 15. // シルト。 |
| 8. 褐色火山灰。 | |



第695図 G区第15号井戸跡・出土遺物実測図(1)



6 陶-128

7 陶-129

第696図 G区第15号井戸跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構・遺物

H区の調査

H区はG区以北I区以南で調査対象面積は約6400㎡であり、面積的にはG区と同様である。また、検出された遺構も、調査着手以前の地目によりその残存量等もG区と同様な状態であった。特に農道下では顕著であるが、この状況もF区と同様であり、地下への耕作による攪乱が少なかった分だけ遺構の検出数量が多かった。

検出した遺構は、溝状遺構・竪穴状遺構・井戸跡・土壇墓・土坑・ピット等である。これらの中で、大規模な遺構としてH区第1・11・12号溝状遺構がある。この溝状遺構は、前述したF1溝・D8溝と共に、北側調査区内で検出された遺構の主軸乃至長軸方向を大きく規整する遺構であり、`地割、を左右させる存在である。この3条の溝状遺構以外の大半は、G区内で検出された耕作に伴うものと同様と考えられ、同様の軸方位乃至これに直交する軸方位を示す土坑も同様のものと判断される。ピットでは、便宜上設定した調査区名称でその存在があるものではなく、G区内方形区画域の北側で一部重複するものが、面的にH区内にも分布が及んでいるものであり、前述のG区第106号址、後述するH区第2・49号址の周辺に多く分布する状態が看取される。また、このピット群の分布域内には土坑も比較的多く認められる。井戸跡は2基検出されている。両者は、調査区内北側に偏在する状態であり、2・49号址から距離を置いており、ピットの分布域からはずれている。また、2号井戸跡内から人骨が出土している。

H区は全体的に遺構検出総数が少ない。当区の遺構確認は、VII層土中で実施したことに起因するとも考えられる。これは、耕作等による攪乱がVII層土に達している部分が多く、これにより確認面をVII層土中に求めた。この耕作等による攪乱により消滅した遺構も多いものと考えられる。

H区第1号溝状遺構

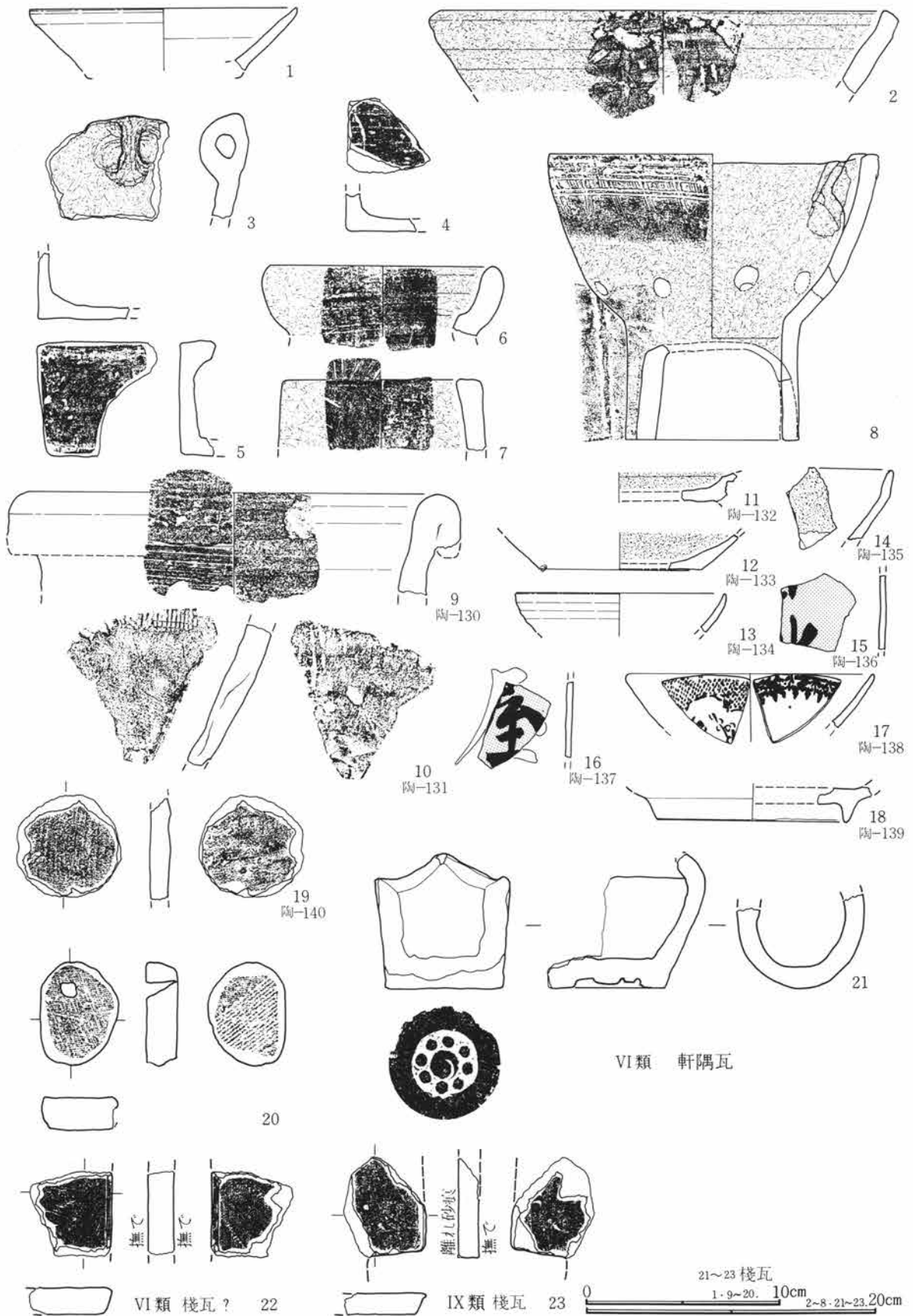
当溝状遺構（以下H1溝と略す）は、後述するH区第11号溝状遺構（以下H11溝と略す）と平行して存在する。確認面での両者の間は4.8m程である。

走行は、東西方向に約4度程振り直線走行する。そして、西側は、H11溝が走行方向を変換する部分周辺で立ち上がっている。東側は調査区外へ延びている。推定される東端部は、F1溝が、後述するH11溝と接続する部分と考えられるが、その位置で立ち上がるのか、さらに走行方向を変換し走行するかは不明である。覆土は、B軽石を多量に混入する黒色土である。

出土遺物は、図示したものがあり、大半が近代の遺物である。これは、当溝と重複して存在するH区第148号土坑の存在があり、近代遺物はこの土坑の周辺から出土したものである。出土状況から、H148土坑と別にして扱ったが、元来は、H148土坑の掘り込みが周辺に及んだ時に混入したものと思われる。このことより、第697図一6以降（10は除く）の遺物は、当溝の年代を示すものではないと考えられる。すなわち、当溝の年代観を得る遺物は、同図の1～5・10の遺物である。1は土師質土器皿の5類乃至7類と考えられ、3の内耳鍋は、2期乃至3期の存在と考えられる。これよりすれば、14世紀後半から15世紀前半の年代観が得られるが破片化した遺物である為、具体性に乏しい。また、当溝のH11溝との関係と、F1溝とH11溝の関係から類推すると、14世紀後半頃に開削があったものと考えられ、埋没段階が不明であるが、おおむねは、遺物の示す年代観と考えられる。

H区第4号溝状遺構

当溝状遺構（以下H4溝と略す）は、ほぼ南北走行する。調査は、当溝の上位に存在した農道により二次



第697図 H区第1号溝状遺構出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

期にわたり実施したが、完掘は成し得なかった。

当溝は溝状を付し名称としたが、実際には大形の土坑とも思われる点がある。これは規模的な面からも明らかである。また底面から2本のピットが検出されている。この2本のピットは検出部位と調査時の土層断面から当溝に係わる施設であったと判断される。また、当溝の南西側では、G63址の性格不明な遺構が検出されており、当溝も溝と冠すには若干疑義が感ぜられる。この点から、当遺構の性格は不明として扱わざるを得ない。

出土遺物は2期の内耳鍋等であることから、埋没は15世紀前半代が上限として考えられる。

H区第12号溝状遺構

当溝状遺構（以下H12溝と略す）は、上述の溝の西側でH11溝の走行方向変換部で、H11溝に平行して位置している。恐らくは、H11溝の西側延長部分としての存在であると考えられる。すなわち、元来は両溝共に一体の遺構として存在した可能性が濃厚であり、両者が空間を有して立ち上がっている点で、この空間が重要な意味を内在していると考えられる。ただ、これを具体的に論述する状況が認められないため、現状では不分明である。

H区第11号溝状遺構

当溝状遺構（以下H11溝と略す）は、H1・12溝の南側に存在する。走行方向は、前述の両溝と同様である。この東西の推定走行は、第1分冊付図16及び今次の付図11に示したとおりで、調査区の西側は、現在の東国分地区の集落北端部で、南北走行する道路と接続したと考えられ、東側は、北東方向へ弧を描きながら牛池川を渡河し、現在の山王地区（山王廃寺の寺域の中を南北に分断する状態）へ延びたものと考えられる。

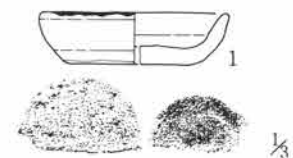
当溝は、F1溝と並び規模の点で大規模な遺構である。検出長は約61mである。幅員は一定でないが、最も良好な遺存部で約6.8mを測る。底面は図示したように、断面皿状の浅い溝の状態であり、F1溝の状況と同様である。ただ、断面と平面では、いささか異なる状態と思われるが、現地での作図に、10.5cmの等高線を記入し、その等高線の走行状態から作図したのが掲載の平面図である。そして、当溝の底面の状態から、F1溝同様に機能として“道”であったことが考えられる。土層断面では、大きく4時期に互り道としての機能があったと考えられ、覆土は非常に硬質のものであった。

4期に互る底面は、次の層序の上面として考えられるものである。

I期は一応の地山土面。II期は16層土の上面と地山土面。III期は11・13・14・15及び10層の上面と地山土面(?)。IV期は2・4・5層土を覆土とし、3・9・12と6・7・8・14層土の上面を底面とするものである。

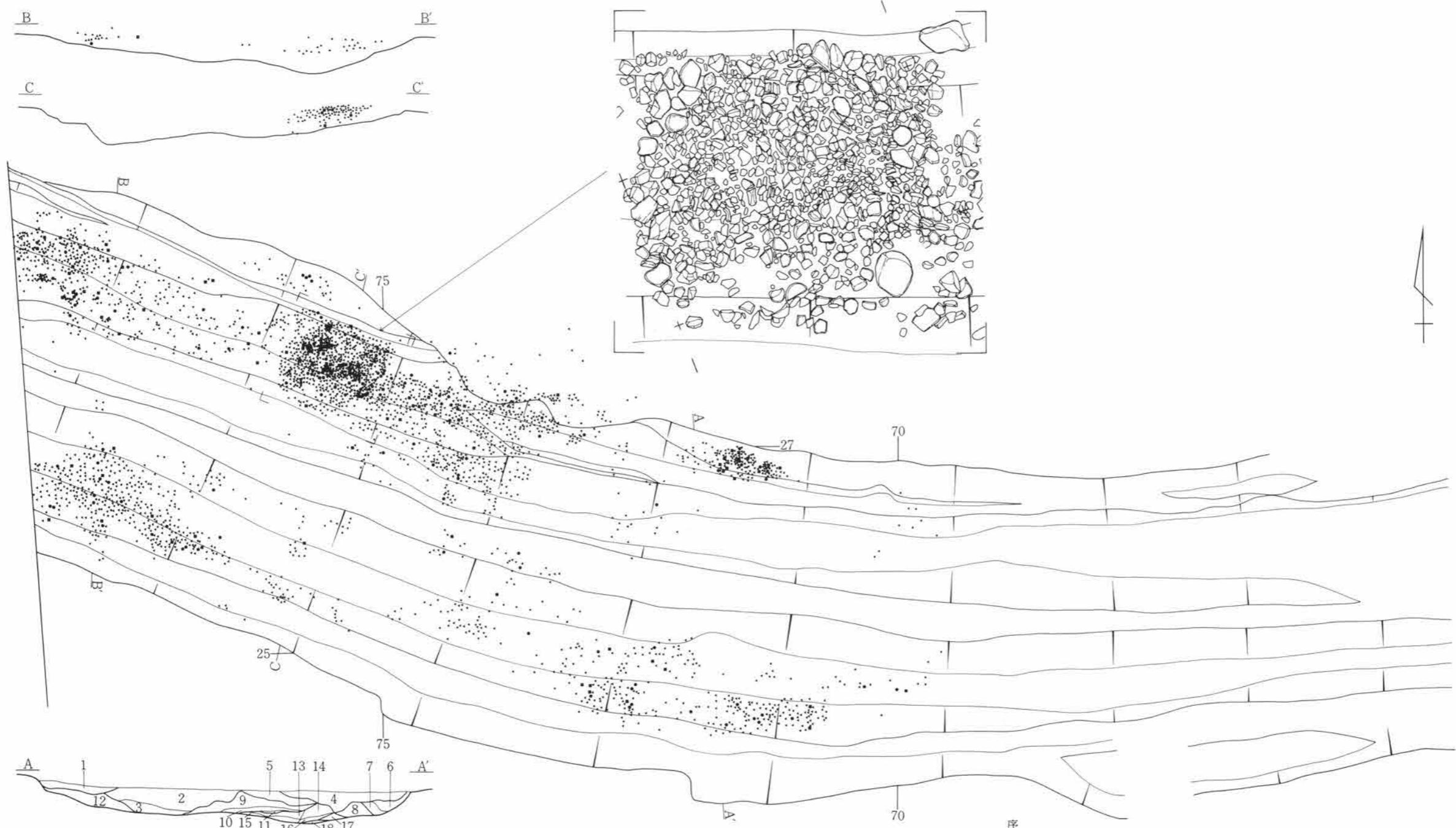
また、当溝の底面検出にあたっては、上述の4期からなるものを分層発掘により確認したものではなく、南北方向に設定した数本のセクションベルトからの所見であり、F1溝同様に、検出した底面は、単一時期での状況とは異なるものと思われる。これは、土層断面には、同一面が数次に互り使用されている状態が看取されるからである。

また、IV期を示す覆土層からは多量の礫に混ざる遺物が出土している。これは、覆土内に散在するものも認められるが、面的に多くのブロックとして認められた。そして、礫等の間隙の覆土を含め、非常に硬く踏み締められたものであり、F1溝・D8



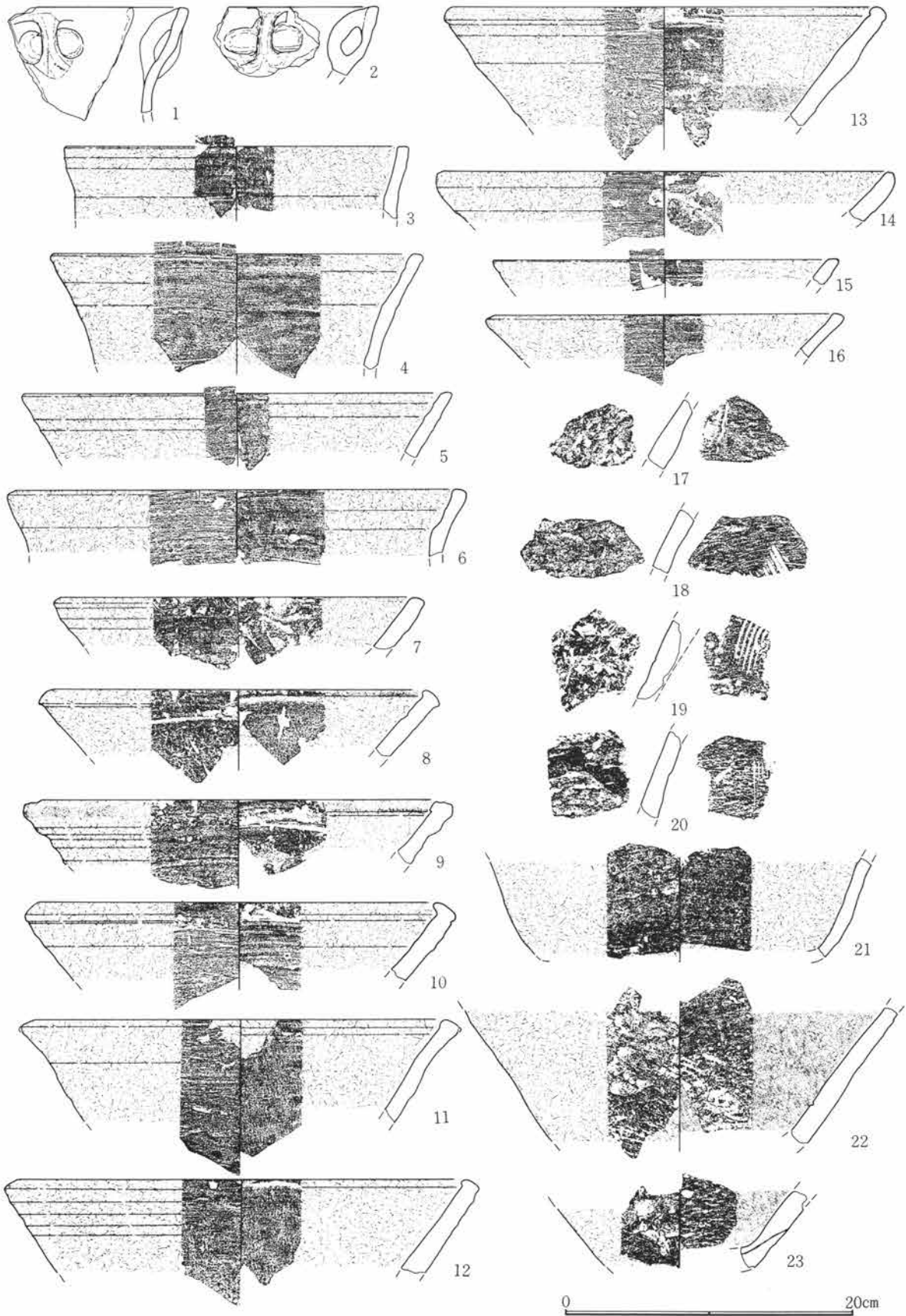
第698図 H区第11号溝状遺構

出土遺物実測図(1)

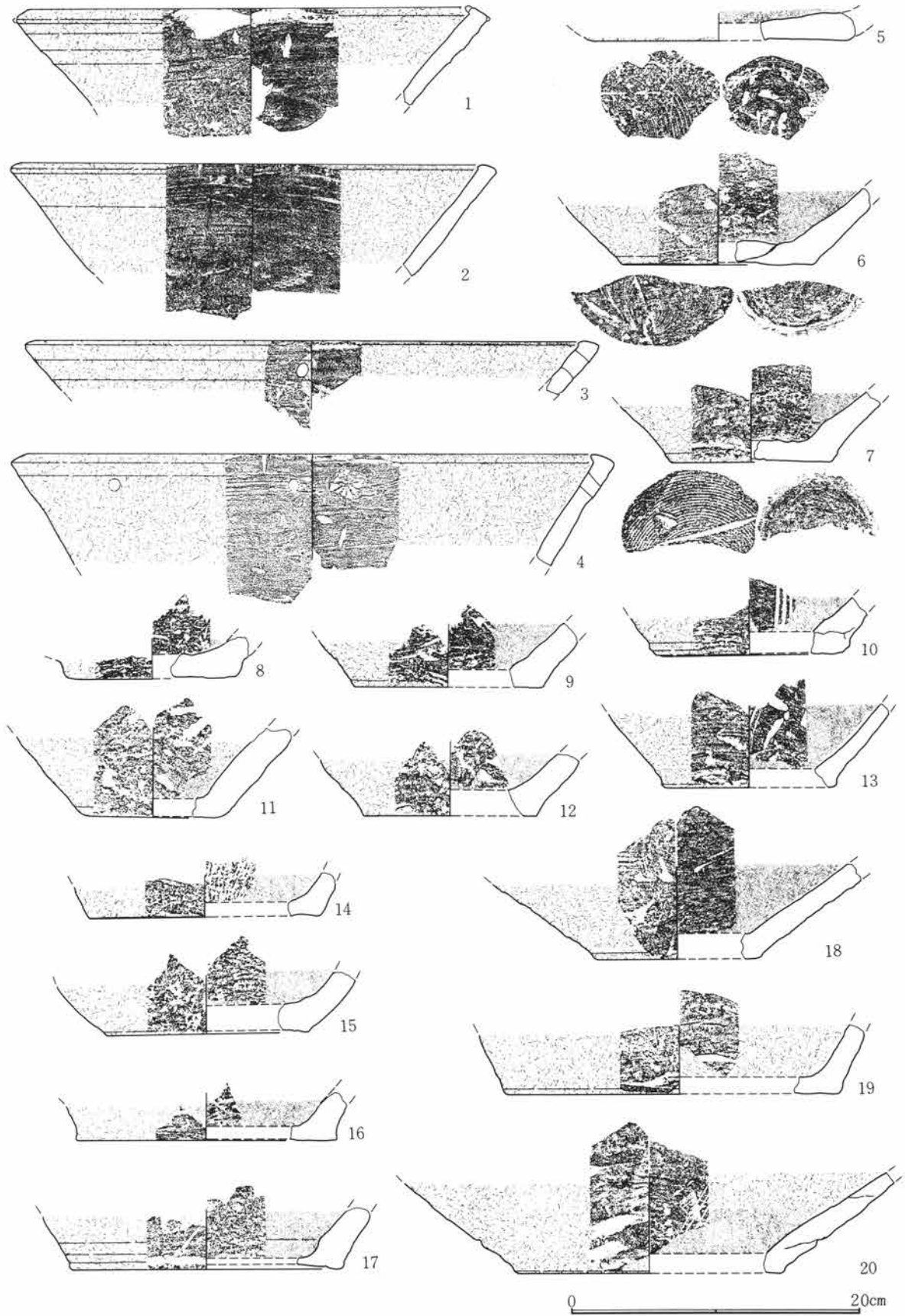


- | | |
|------------------------------------|--|
| 1. 濁黒褐色土-B軽石多量、小礫・土器片等含有・鉄分粒子少量。 | 10. 濁黒褐色土-B軽石多量、細粒状C軽石若干・鉄分粒子含有。 |
| 2. " " " "、粒状炭化物・細粒状C軽石・鉄分粒子含有。 | 11. 濁茶褐色砂質土-(砂層)、細粒状C軽石微量。 |
| 3. " " " "、細粒状VII層土・細粒状C軽石・鉄分粒子少量。 | 12. 濁黒褐色土-B軽石多量、小礫多量混入・細粒状C軽石・小塊状鉄分含有。(硬質土)。 |
| 4. " " " "、細粒状C軽石・小礫少量混入。 | 13. 暗茶褐色土 " "、細粒状C軽石・鉄分粒子混入。 |
| 5. " " " "、細粒状C軽石混入・鉄分粒子若干。 | 14. 黒褐色土-B軽石少量、細粒状C軽石・鉄分粒子少量。 |
| 6. " " " "、塊状VII層土多量混入。 | 15. " " " " 通有、細粒状C軽石若干。 |
| 7. " " " "、" " (硬質土) | 16. " " " "。 |
| 8. " " " "、細粒状C軽石若干。 | 17. " " " "、小礫含有。(硬質土) |
| 9. " " " "、小礫・細粒状C軽石含有・鉄分粒子若干。 | 18. " " " "、砂質が強い。 |

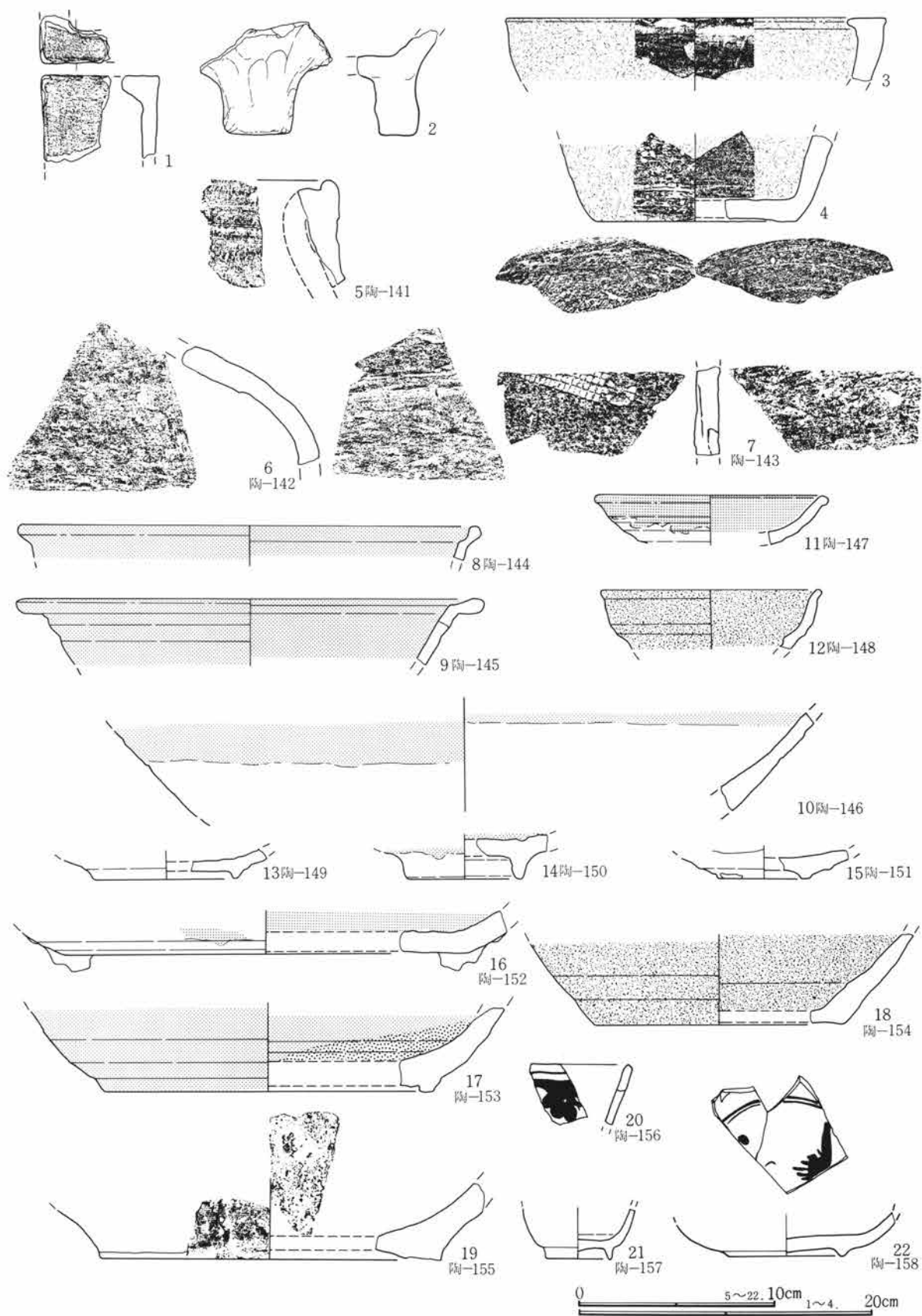
第699図 H区第11号溝状遺構遺物出土状況・土層断面図



第700図 H区第11号溝状遺構出土遺物実測図(2)

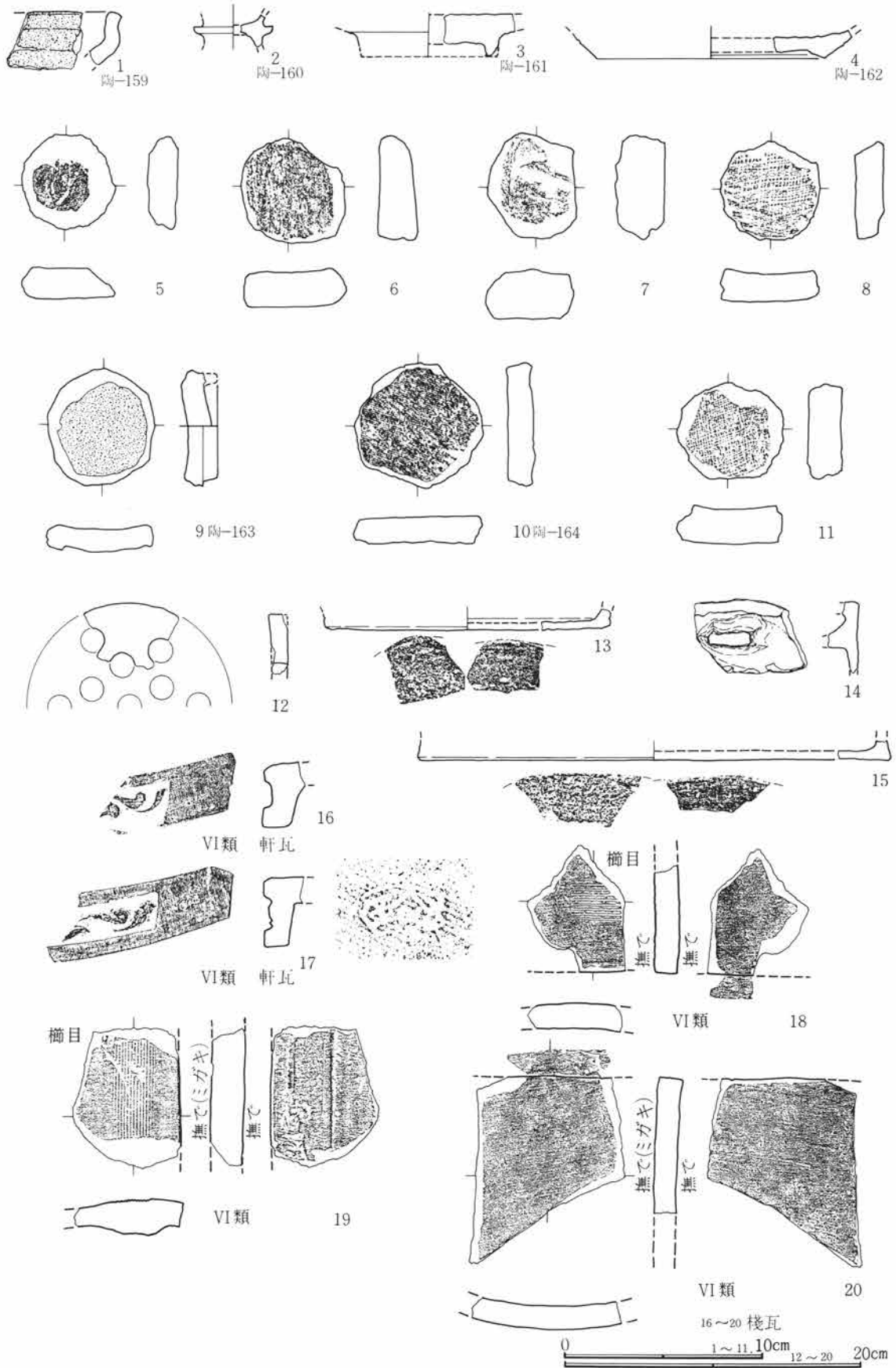


第701図 H区第11号溝状遺構出土遺物実測図(3)

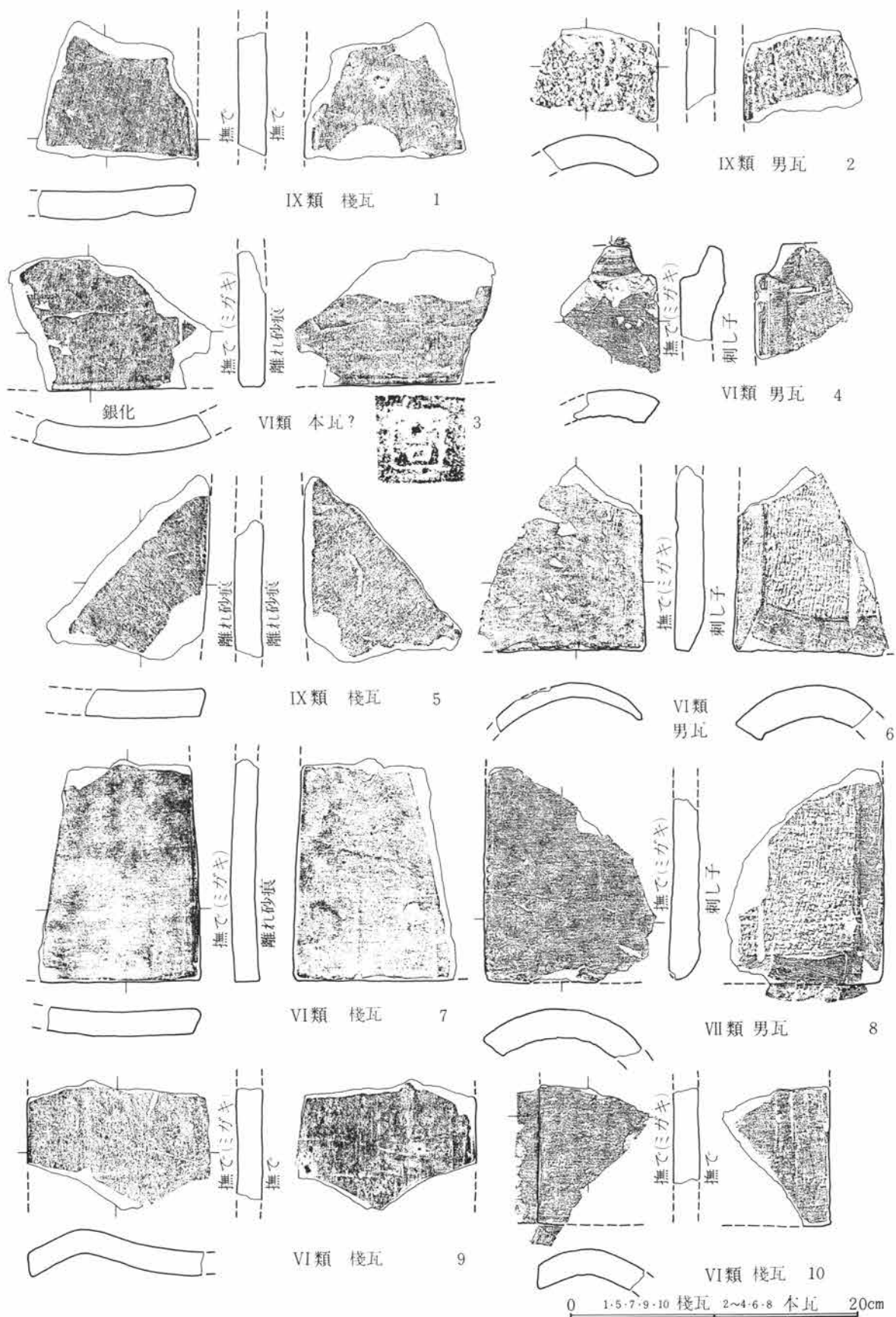


第702図 H区第11号溝状遺構出土遺物実測図(4)

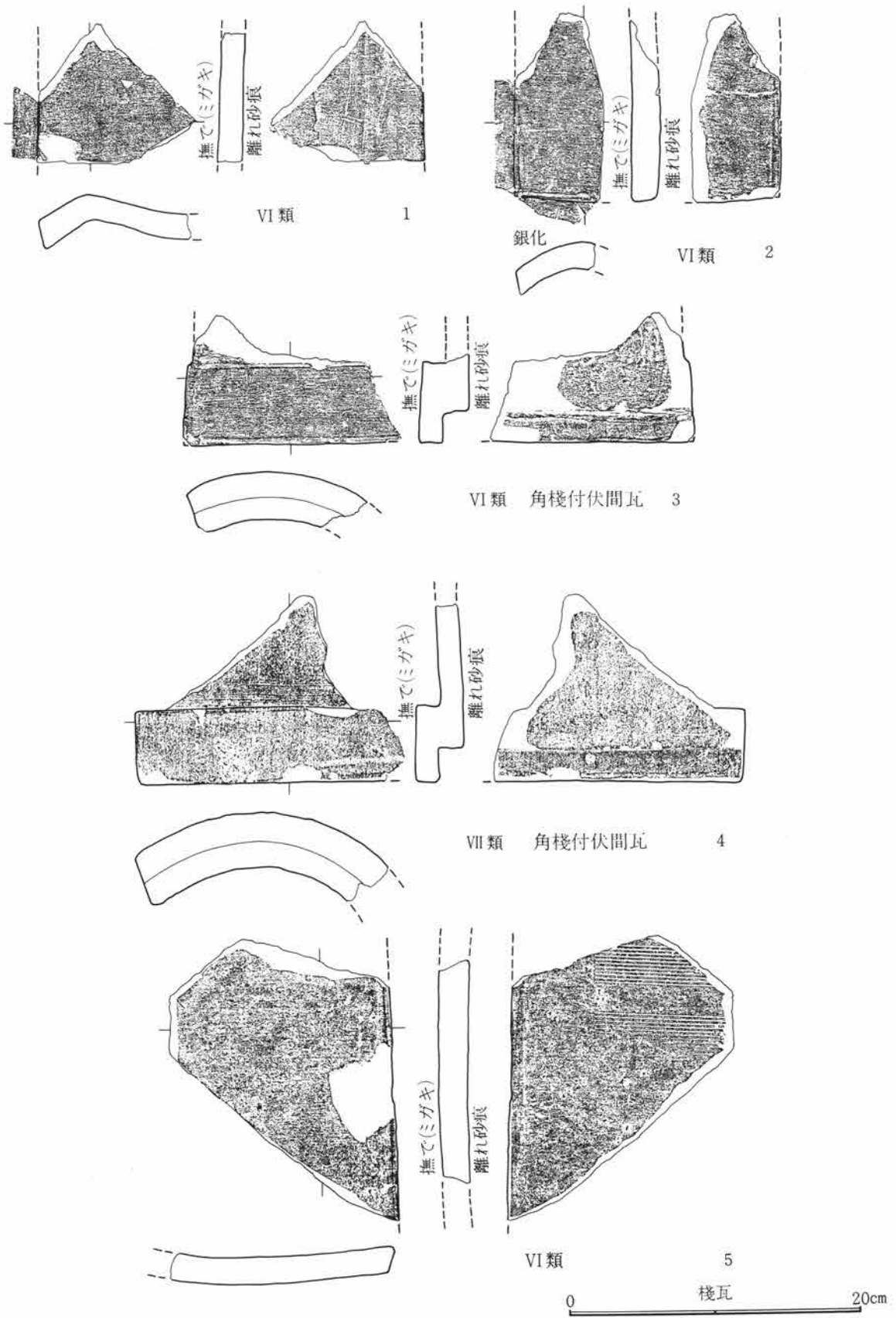
第3章 検出された遺構・遺物



第703図 H区第11号溝状遺構出土遺物実測図(5)

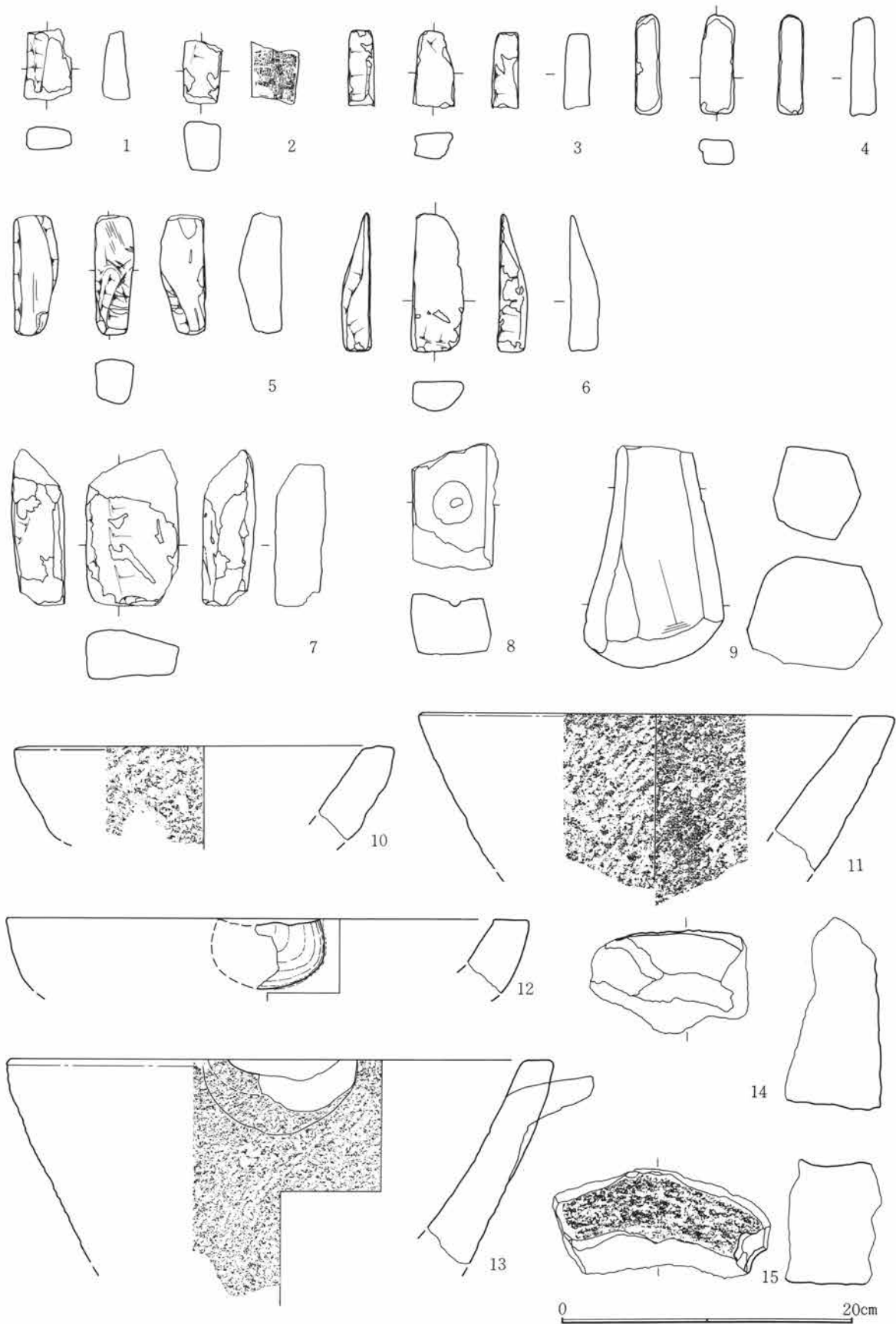


第704図 H区第11号溝状遺構出土遺物実測図(6)



第705図 H区第11号溝状遺構出土遺物実測図(7)

第2節 鎌倉時代以降

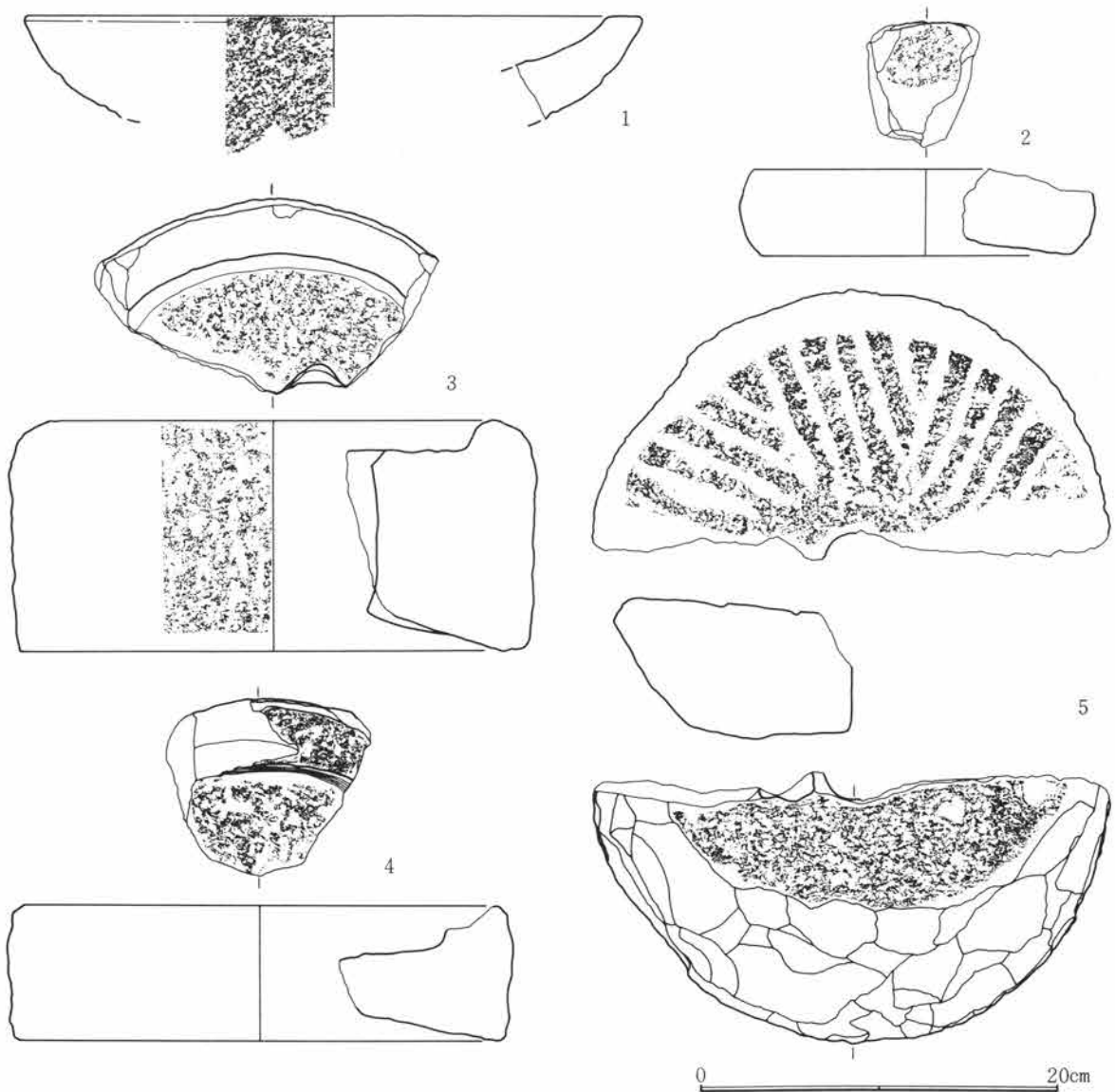


第706図 H区第11号溝状遺構出土遺物実測図(8)

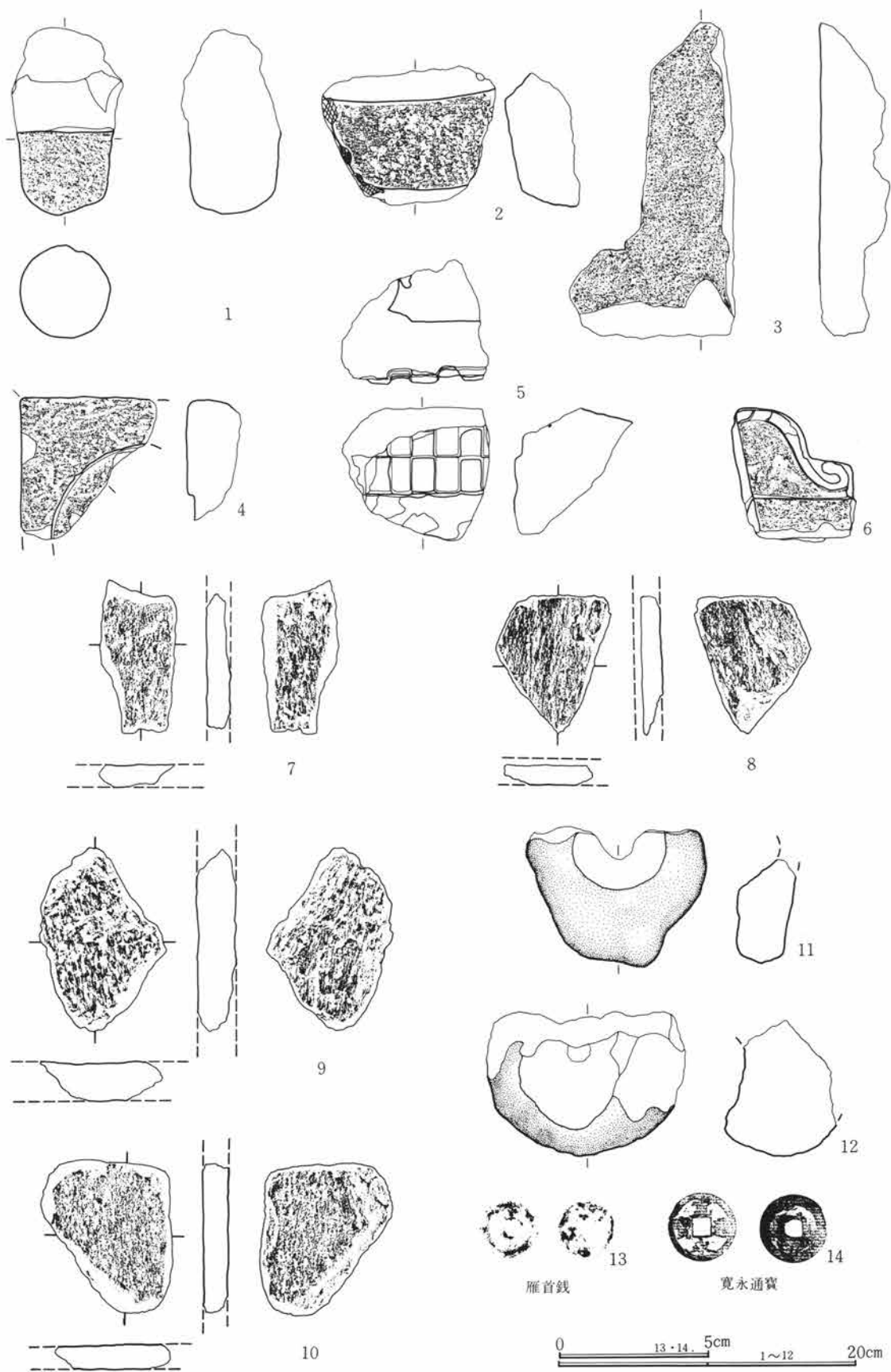
第3章 検出された遺構・遺物

溝で顕著に認められた状態と同様に人・車馬の往来により硬化したものと判断される。この状態を図示したものが第699図の平面図である。これらは、IV期の存続する間に人為的に設置されたものであり、恐らくは、道の凹凸部に敷かれた礫敷と考えられる。そして、この平面分布図中には、礫等が特に集中する所が認められる。この部分を拡大したのが同挿図中の右上の図である。この部分は一見で正方形に認められ、その一辺は約1.8m程である。そして、この部分の断面での礫等の密度が濃い。この部分の礫等の状態は、周辺部で出土した礫よりも少し大き目の礫が目立ち、この大き目の礫が囲むような状態になっている。この状態から何らかの行為を想定し得ると考えられるが、この上面は、道としての路面であることから、恐らくは、部分的に窪む状態であったため、周囲を硬める意図での大き目礫の配置があったと考えられる。すなわち、特に窪む部分の埋填であったと考えられ、このことから、部分的に下位は検出時の硬化状態が旧態ではなかったものと思われる。

出土遺物は図示したものの他に、同種の遺物と奈良・平安時代の土器・瓦類等があり、主に多量の礫が出土している。礫では、地山中に含有されると考えられるものが多かった。これらは、IV期の覆土中・礫敷の



第707図 H区第11号溝状遺構出土遺物実測図(9)



第708図 H区第11号溝状遺構出土遺物実測図(10)

第3章 検出された遺構・遺物

中から出土したもので、一括のものである。このIV期の年代観を示す遺物は、第703図に示した一群と考えられる。この同図中で下限と考えられる遺物は、20～22の染付磁器であり、18世紀代がIV期の上限と考えられる。これにより、他の中世の一群は、少なくとも等溝の周辺に散在があったものを集めて道の凹凸部に敷かれたものと考えられ、当溝周辺にも、14世紀後半～16世紀前半にかけて、生活の痕跡が多かったことが窺える。問題としては当溝の開削時期であるが、前述したF1溝は推定で当溝と接続することが考えられ、このことから、F1溝とほぼ同時期に開削があったと判断される。しかし、I期の中で明確に共伴する資料を見出せなかった為、推定の域のものである。そして、当溝（道）の最終廃棄は、昭和35年に実施された耕地基盤整備時に消滅しており、1960年が廃棄年である。また、当溝は昭和22年頃に米軍により撮影された航空写真には、F1溝上の道とH11溝上の道と判読される道が存在し、両者は前述の付図中に示した状態で認められており、両溝により成された地割が現代まで使用されていたことが明らかになった。

H区第2号溝状遺構

当溝状遺構（以下H2溝と略す）は、H区第1号井戸跡（以下H1井戸と略す）と接続する状態で検出されている。しかし、両者の新旧関係は、H1井戸の落ち込み範囲がH2溝を切る状態で確認されているが、G34溝とG15井戸との関係を記述したように即断出来るものではなく、不明として扱わざるを得ない。走行方向でも、H20溝と類似する状態であるが、全貌を検出していない点で、性格は不明である。

H区第20号溝状遺構

当溝状遺構（以下H20溝と略す）は、H区内の北端周辺で、H1溝の西側立ち上がり部の北側からI区方向に延びるもので、東西走行する舗装道路により分断されるが、恐らくは、I区第2号溝状遺構（以下I2溝と略す）と同一の溝でその南端部と考えられる。そして、溝の主体はI区内に存在するため、I2溝の所見を記述する段階で併せて記述するものとする。

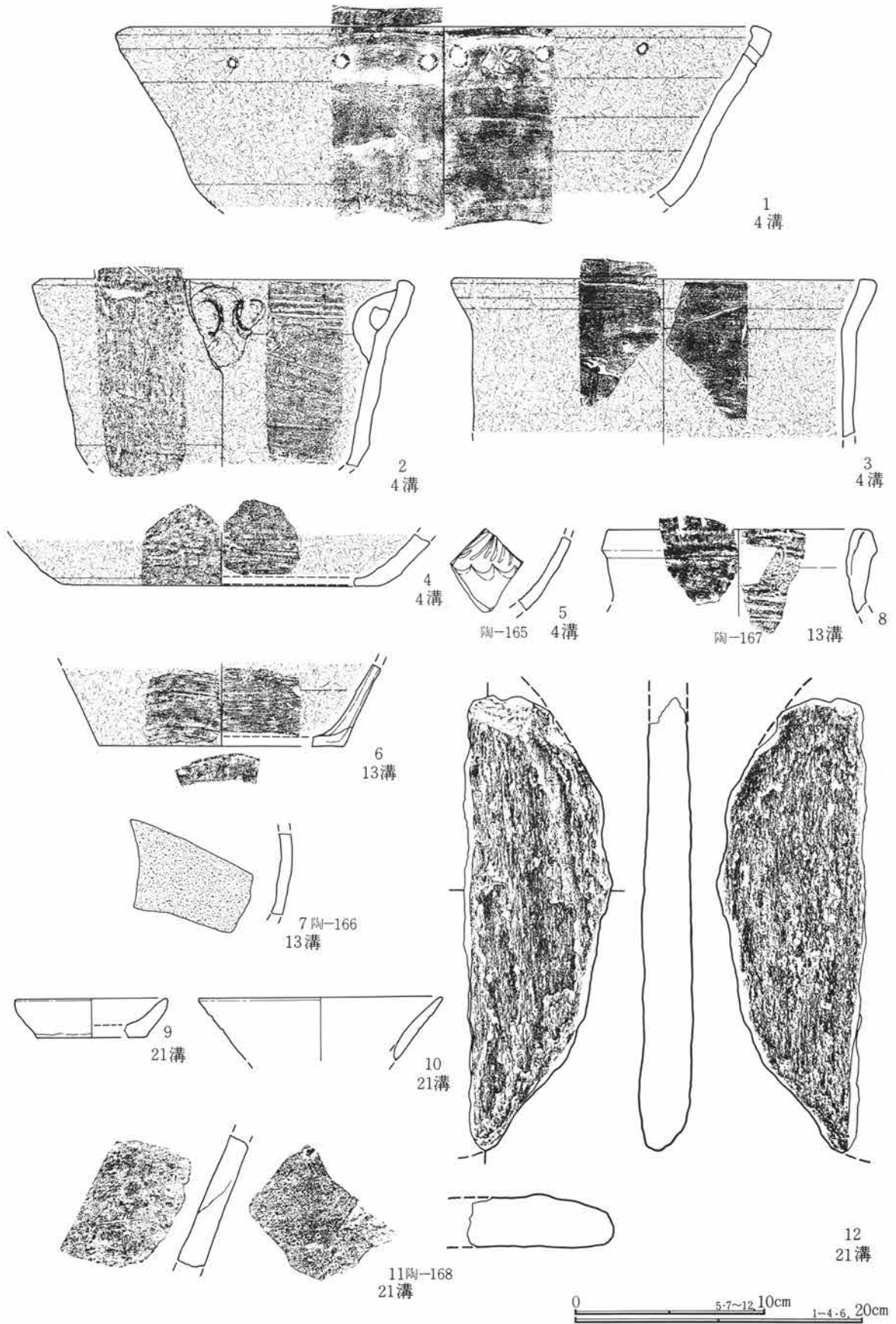
H区第21号溝状遺構

当溝状遺構（以下H21溝と略す）は、上述のH20溝と重複する状態で検出されている。新旧関係では当溝が新しいが、重複する部分では、その末端部分のみと考えられる。この溝の立ち上がりが、H20溝の立ち上がりと近接する状態と、I2溝の走行方向がほぼ同位であることから、両者との関連性が示唆される。

また、I区内で当溝と接続すると考えられる溝状遺構は未検出である。

遺構名称	H区第2号址		位置	49・50-G-60～62、1-H-60～62グリッド内			
平面形態	正方形基調	規模	3.60m×3.41m	主軸方位	北-5度-西	残存深度	約19cm程
壁	斜位に立ち上がる。		床面	浅いおうとつがある。			
柱穴	支柱穴7本検出。						

遺構名称	H区第49号址		位置	49・50-G-62～64、1・2-H-62～64グリッド内			
平面形態	正方形基調	規模	4.20m×4.26m	主軸方位	北-0度-東	残存深度	約32cm程
壁	斜位に立ち上がる。		床面	全体的に中央部が窪む。			
柱穴	支柱穴12本（P ₁ ～P ₁₂ ）、補助柱穴3本（P ₁₃ ～P ₁₅ ）。						
炉	位置	P ₂ ・P ₃ 寄り。		形状・規模	円形基調・60cm×55cm		



第709図 H区溝状遺構出土遺物実測図

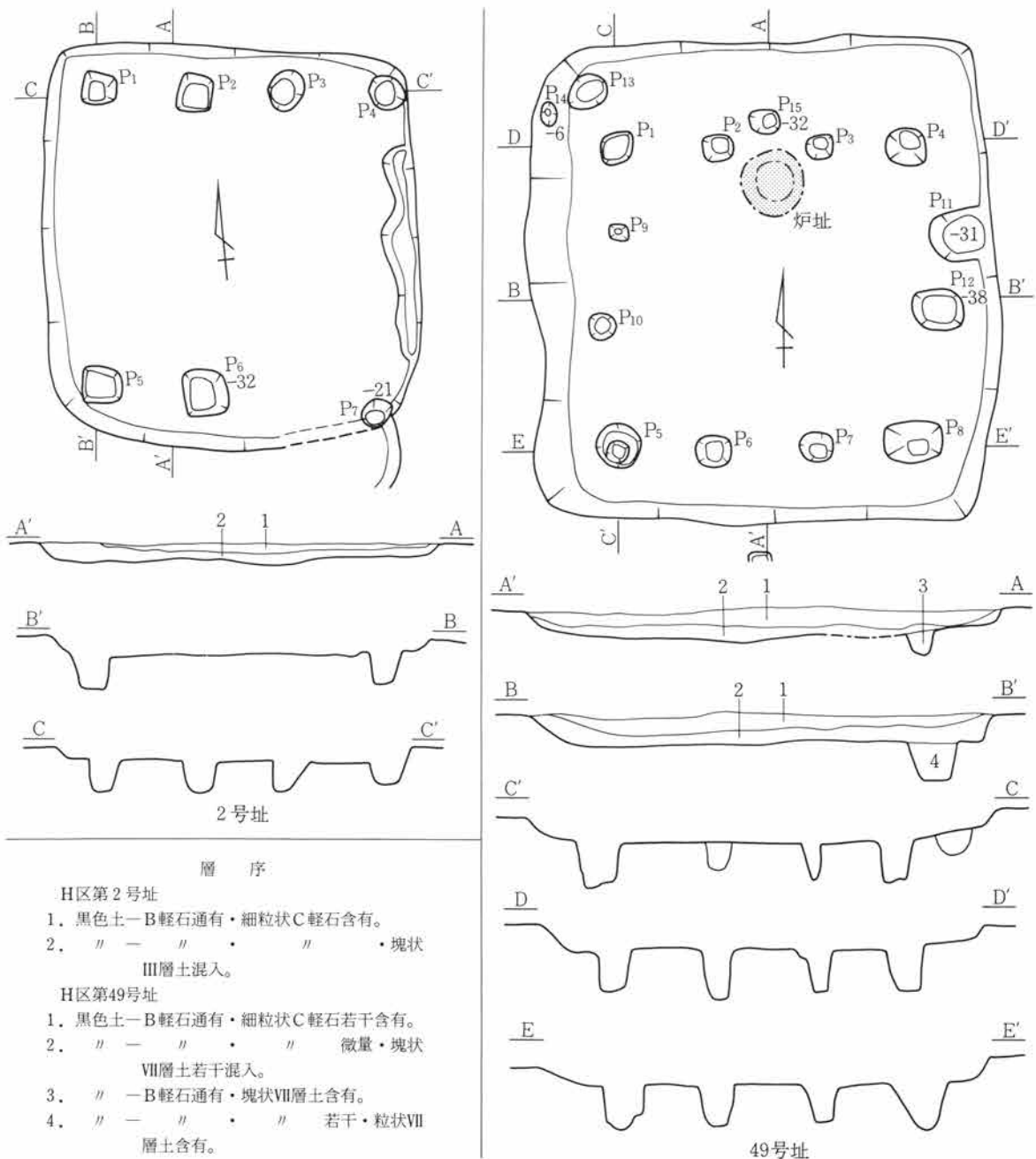
第3章 検出された遺構・遺物

所見 (H2・49号址)

両址は、調査区中央で南北に存在した農道下に大半が存在して、調査は二次に互り実施した。これにより一部不明な部分を生じさせている。そして、両址はG区で検出された方形区画域の北側で検出された竪穴状遺構・井戸・ピット等が近接し、両址自体南壁を一直線上にとり近接した状態で位置している。

H2址は7本の柱穴が検出され、東壁下には、壁溝を備えている。柱穴でP₃に対応する位置のものが前述した不明になった部分であるが、検出された7本のピットの配列状態から恐らくは存在したと推定される。

H49址は、支柱穴と考えられるP₁~P₁₂と、P₁₃~P₁₅の補助材用柱穴と考えられる合計15本が検出されている。床面は、中央に向い全体が窪んでいる。炉址は、P₂・P₃・P₁₅に囲まれた状態で検出されている。この両址は、竪穴状遺構として把握されるものであるが、炉を伴う例と伴わない例の二者としての類例である。



0 L=129.60m 2m 第710図 H区第2・49 址実測図

前者での他の類例として、G36・110址があり、後者例としてB46・47・159、F51・54、G37・106・130址がある。ただ、8本主柱に限定するとB159・G106址がある。これらの竪穴状遺構については総括する。

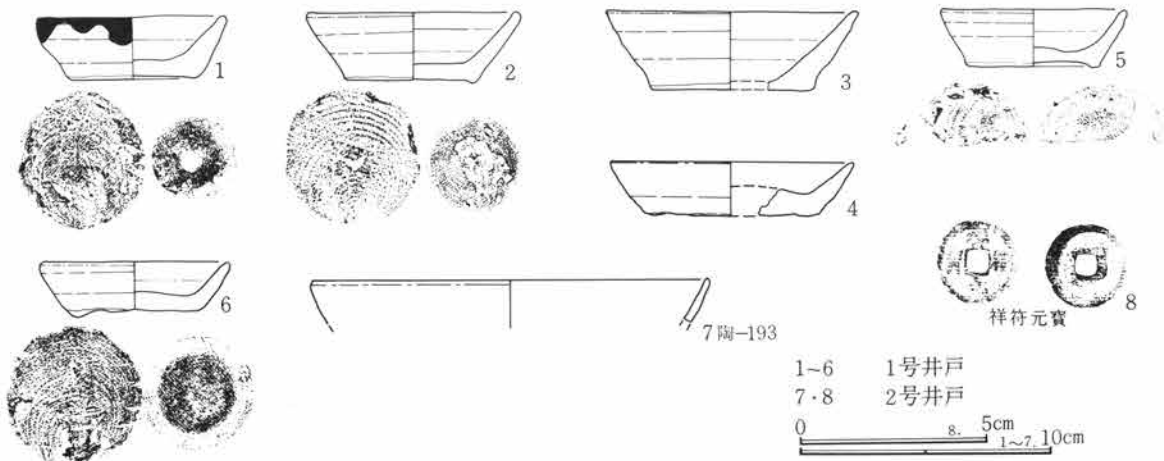
遺構名称	H区第1号井戸跡			位置	39・40—H—56・57グリッド内			平面形態	円形状
規模(m)	地上径1.95	底径0.84	最細径0.87	最大径1.59	深度7.41	湧水位深度	夏期4.80・冬期6.84		
アグリ部最大径	夏期 1.15・冬期 1.59		湧水層	11・14・17層			耐水層	12・15・18層	

遺構名称	H区第2号井戸跡			位置	40・41—H—46・47グリッド内			平面形態	円形状
規模(m)	地上径1.71	底径0.72	最細径0.69	最大径1.98	深度7.08	湧水位深度	夏期2.88・冬期5.70		
アグリ部最大径	夏期 0.99・冬期 1.98		湧水層	4・13層			耐水層	5・14層	

所見 (H1・2井戸跡)

H区第1号井戸跡は、前述のH2溝と重複する状態で検出されているが、新旧関係は不明として扱わざるを得ない。そして、後述するI2溝が方形の区画を形成すれば、当H1井戸は区画内に存在することになる。後述するI2溝の部分で再考したい。出土遺物は、20層中確認面下6.50m程から、加工痕のある木片2点(器種不明)・土師質土器皿2点・内耳鍋細片・小礫が多量に出土している。土師質土器皿は4類のものであり、埋没の上限は、15世紀後半と考えられる。

H2井戸は、H11溝の南側で検出されており、他に周辺部で生活の痕跡を示す遺構は未検出であった。そして、当井戸内からは、人骨の出土があった。人骨は、確認面下約5m程のところでは19層内より出土している。人骨の状態は不良であり、所見としては「熟年」としか得られていない。また、この人骨に伴う遺物として漆器の破片(漆部分)が出土している。他に、20層中より内耳鍋片が出土しており、15世紀の埋没と考えられる。



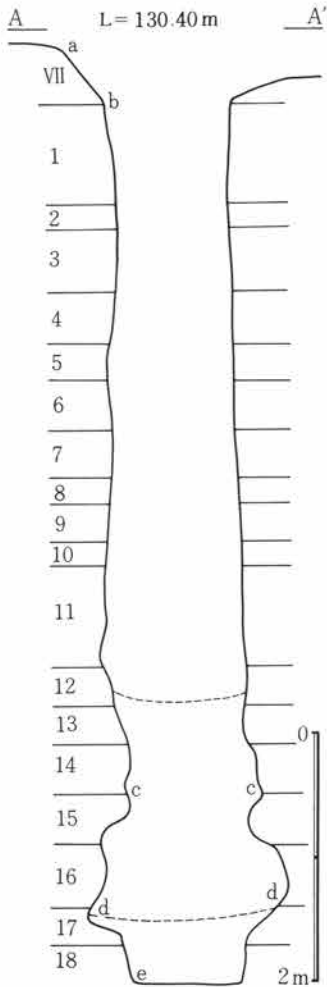
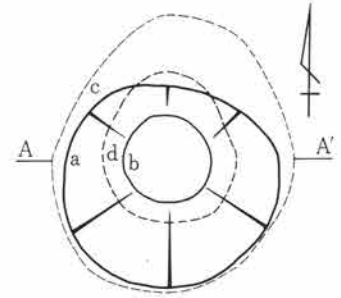
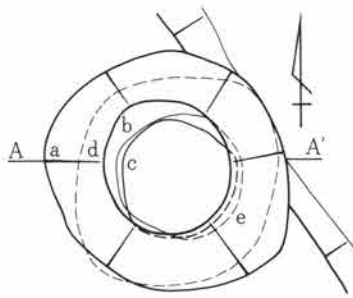
第711図 H区第1・2号井戸跡出土遺物実測図

H区から検出された土坑について

H区はG区以北I区以下の調査区である。このH区から検出された諸遺構は、前述したF1・H11溝の存在により生じた地割を使用して構築されていることが確認出来る。

H区から検出された土坑で、近世以降の所産と考えられるものは、その全てに上述の現象が認められ、特に、H11溝の直線走行の軸に対してほぼ平行乃至直交する状態が看取された。また、耕作に伴うと考えられ

第3章 検出された遺構・遺物

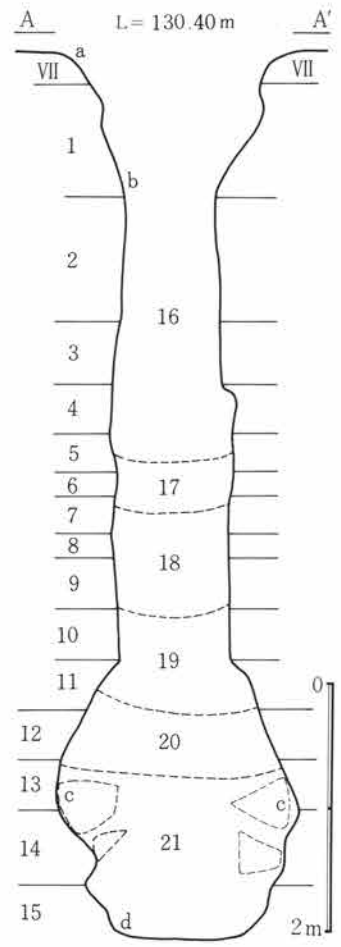


1号井戸

- H区第1号井戸跡
層序
- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1. 褐灰色火山灰小礫混入(固結)。 | 10. 灰褐色シルト。 |
| 2. 褐灰色細砂(固結)。 | 11. 灰色中砂(固結)。 |
| 3. 灰褐色火山灰砂(固結)。 | 12. 灰色火山灰砂(固結)。 |
| 4. 灰褐色シルト。 | 13. 暗灰色細砂(固結)。 |
| 5. 暗灰色細砂(固結)。 | 14. // 中砂(固結)。 |
| 6. 灰褐色シルト。 | 15. // 細砂(固結)。 |
| 7. 黒色帯。 | 16. // シルト。 |
| 8. 灰褐色シルト。 | 17. 灰色シルト。 |
| 9. 黄褐色軽石。 | 18. 灰褐色シルト。 |

- H区第2号井戸跡
層序
- | | |
|---------------------------------|------------------|
| 1. 灰褐色火山灰砂・小礫混入(固結)。 | 8. 褐灰色火山灰。 |
| 2. 褐灰色火山灰(固結)。 | 9. 灰褐色細砂(固結)。 |
| 3. 灰色細砂(固結)。 | 10. 褐灰色火山灰砂(固結)。 |
| 4. 褐灰色シルト。 | 11. 褐色中砂(固結)。 |
| 5. 黒色灰。 | 12. 暗灰色中砂(固結)。 |
| 6. 褐灰色火山灰。 | 13. 褐灰色火山灰。 |
| 7. // 軽石。 | 14. // シルト。 |
| 16. 黒色土-B軽石多量・塊状VII層土多量混入(人為層)。 | 15. 灰褐色細砂(固結)。 |
| 17. // (B軽石含有)・円礫の混土層(人為層)。 | |
| 18. 16同質。 | |
| 19. 17同質。 | |
| 20. 16同質。 | |
| 21. シルト(壁体崩壊土)・中砂(壁体崩壊土)・粘質土等。 | |

第712図 H区第1・2号井戸跡実測図



2号井戸

る細い溝状遺構においても同様な状態が看取されている。この近世以降の諸遺構は、昭和35年に実施された「耕地基盤整備」により前後での存在が考えられる。この基盤整備以前では東国分地区と山王地区を結ぶ道は、H11溝を利用していたが、この整備以降道路は北側の現有の位置に移動している。この道路の移動により耕作地の地割に変更が生じているが、耕作地の主軸の変更はなかったようである。これは、H11溝を切る耕作に伴う細い溝状の遺構と、他の同様種の遺構と対比させた場合での所見である。

土坑は、通有では、「芋穴」と考えられるようなものも含まれるが、実際のところ、耕地に掘る土坑状のものは芋穴の色彩が強い。そして、H区自体は、近世～現代に至る間には、一部居住域が在るものの、耕作地としての存在であったことは確認出来る。この点から、耕作に伴う土坑は、いわゆる「芋穴」として把握さ

れるものとも思われるが、具体的に言及し得ない点もある。


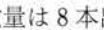
上述の耕作に伴う土坑以外に、ゴミ穴として構築されたものもある。これは、多量の遺物が混在することにより判断出来、後述するH148土坑が好例である。

また、東国分地区は第2次世界大戦中に米軍爆撃を受けて火災に見舞われており、F区内でもその折りの焼夷弾の爆裂痕が検出され、出土遺物の中にも近・現代所産と考えられる磁器には火中しているものが認められる。

H区第148号土坑所見

当土坑(以下H148坑と略す)は、前述したH1溝と重複する状態で検出されており、H1溝で扱った遺物の大半が当土坑のもので推定された。土坑は長方形を呈すものであり、検出状態(占地)から少なくともH11溝により生じせしめられた地割りを使用していることが明らかであり、このことより昭和35年以前における所産と判断される。

覆土は、大半が遺物・礫により埋填しており、人為による埋填が判断される。出土遺物には、多種に亙るものが有り、陶器・磁器・石製品・砥石・本瓦・棧瓦・鉄器が出土している。これらの遺物の内年代観の得られる磁器は、18世紀代のものと、19世紀末～20世紀初頭のものに分別され、投棄の上限として20世紀初頭が考えられる。また、棧瓦の存在があるが、その初源は分明であるが、実態は不明であり、年代観を得るにはやや困難である。そして、棧瓦自体の研究があまり進んでいない現状では、何如とも言い難い。

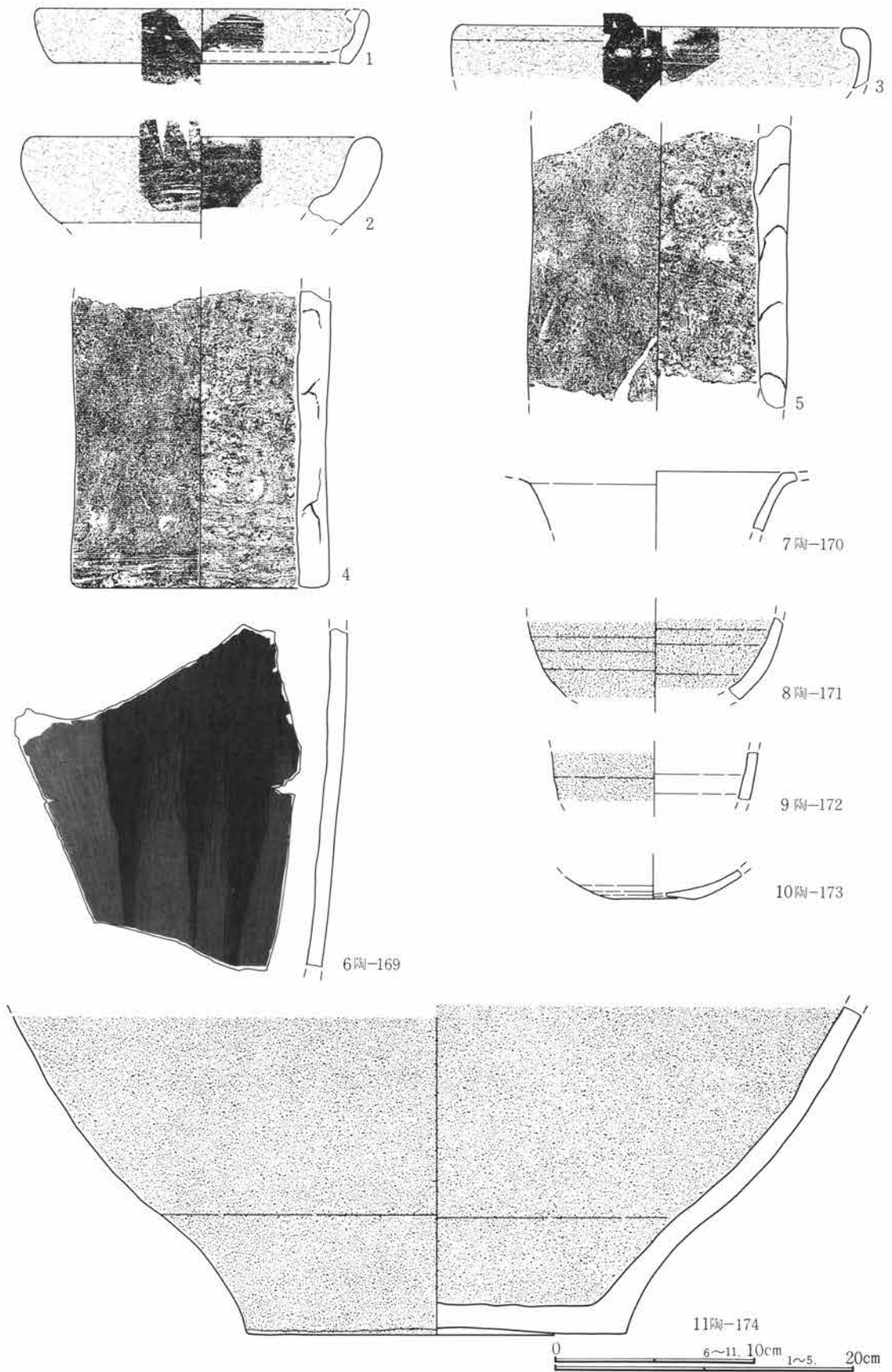
鉄器の出土量は非常に多い。器種は、鎌・鑿・鋸・釘があり、釘が抜きんじて多く、約300点程出土している。鎌は、大小の2点が有る。第725図-1は桑切鎌と考えられ、同図-2は草刈鎌と考えられる。鑿は1点第725図-5がある。この鑿の柄の木質部分は、本体の鉄分を吸収し一部が遺存している。身は幅2.7cm・長さ3.7cmで耳部は丸い。刃部は切刃造で鑿は鈍く、刃先角は約30度程である。側部は直線的に造り、鑿筋が被部に至っている。被部は身元が細く、断面四角く、突部に向かい丸くなっており、突部が広い。突部は径1cmである。茎は、茎先を欠損し、本質が遺存するため判然としないが、柄の欠損部の断面では円形で径5mmの状態と認められる。材質は軟鉄と硬鉄二枚合せて西洋鉄を使用している。鋸は、2種類出土している。第725図-3は状のもので、同図-4は状のもので支補する方向が90度変える状態となっている。数量は8本出土している。釘は、約300点出土しているが、完存する個体は少ない。種類としては角釘・丸釘が出土しており、後者は長さにより3乃至4つに細分される。また、角釘は量的に少ない。丸釘は、長さ3cm程のもの、4.5cm程のもの、5cm程のもの、6cm程のものに分けられる(便宜をはかり順に後へA・B・C・Dとする)。これらの長さは、現在も呼称されている1寸・1寸5分・2寸に相当されると判断出来、Aが1寸釘、Bが1寸5分釘、Dが2寸釘である。Cは、長さ5cmであり、これを上述の寸で示すと約1寸7分の数値が得られるが西洋釘が日本に招来された時は、インチによる単位の釘であり、5cmは2インチに相当する。丸釘は、西洋釘が招来されてよりの出現であり、この5cm程のものは、B・Cの中間様のもので、2インチに相当する1寸7分の長さで作られた可能性があり、本例の場合、一応1寸7分釘として扱っておく。上述の遺物群の中に瓦類があることを記した。この棧瓦について、H11溝出土のものとを併せて記しておく。

瓦類

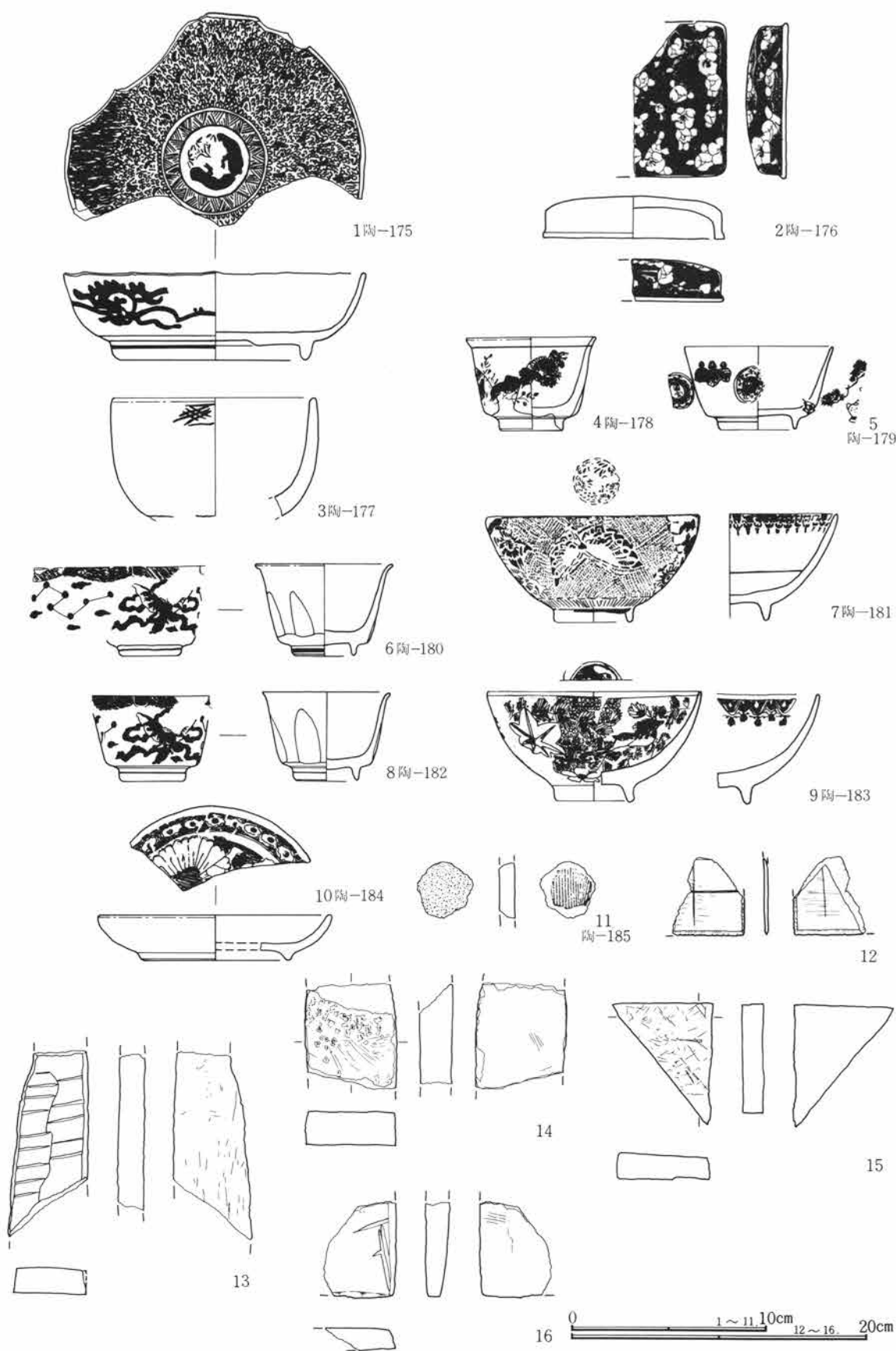
瓦類には、本瓦・棧瓦が出土しているが量的に後者が非常に多く、コンテナケースに7箱出土している。

本瓦では、鎧瓦・女瓦・男瓦が出土している。棧瓦では、軒瓦・面取棧瓦・角棧伏間瓦・鬼瓦等がある。以下、本瓦と棧瓦に分別して記述する。ただし、胎土種については、中世瓦で使用したV類以降の番号を振

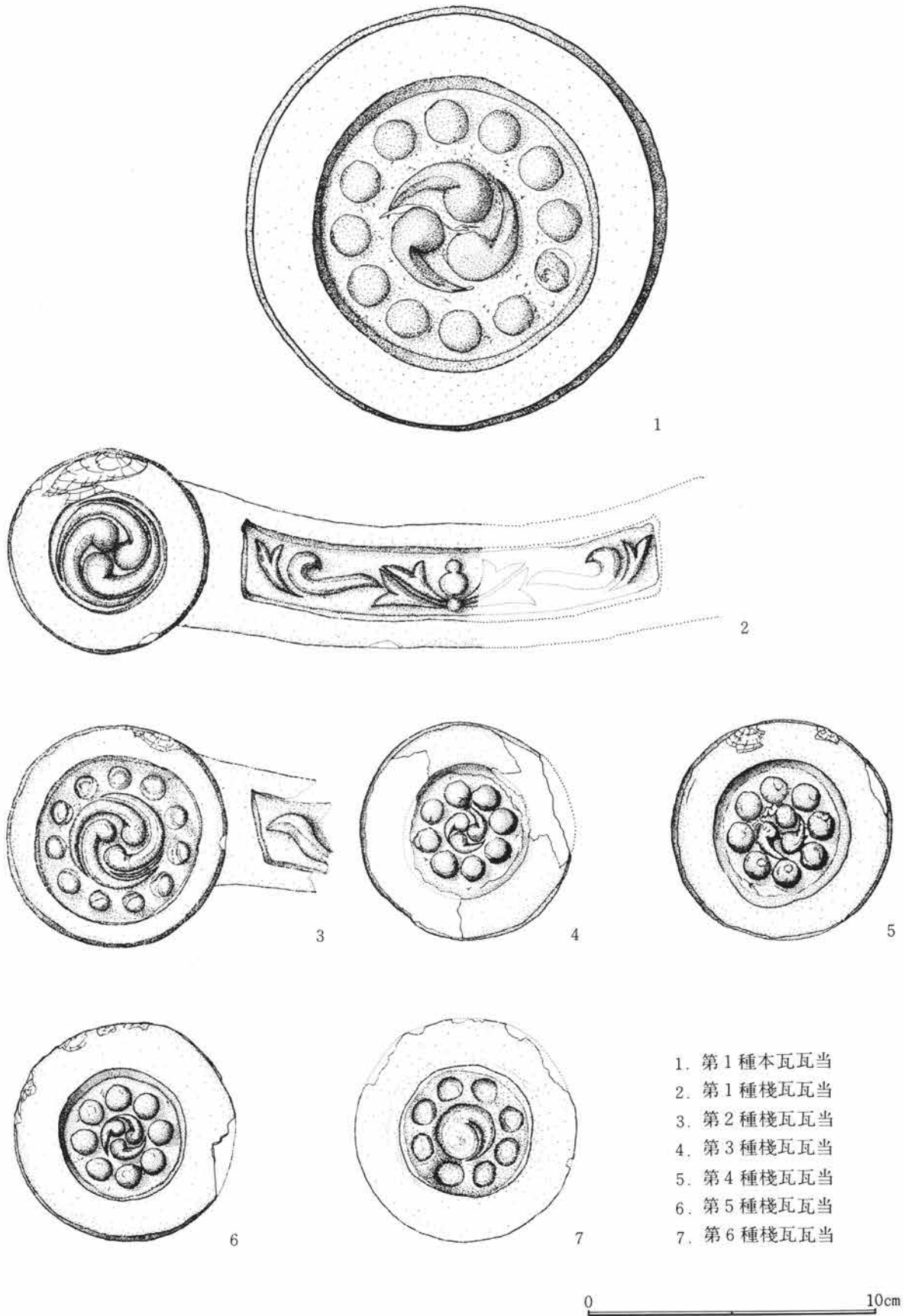
第3章 検出された遺構・遺物



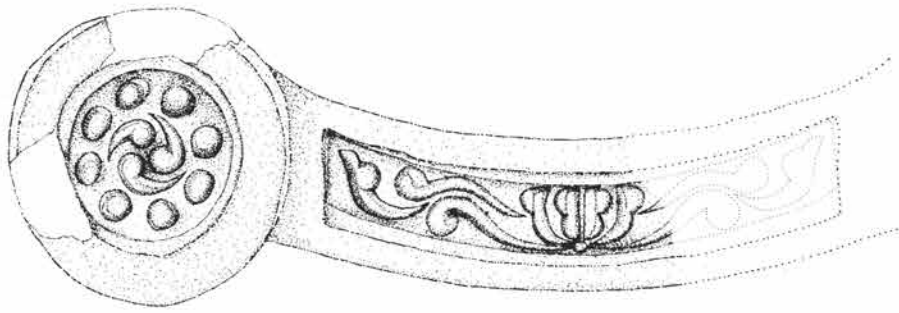
第713図 H区第148号土坑出土遺物実測図(1)



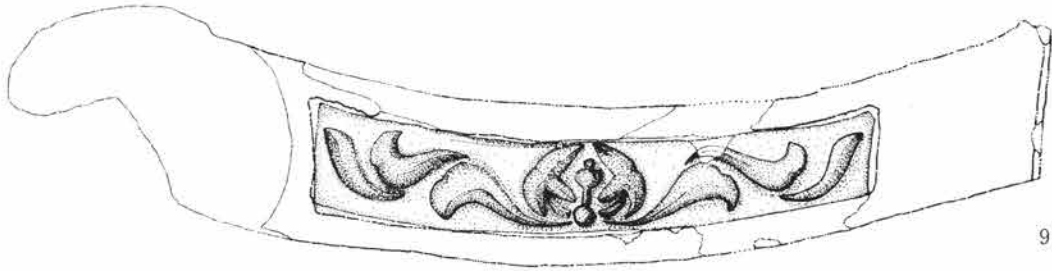
第714図 H区第148号土坑出土遺物実測図(2)



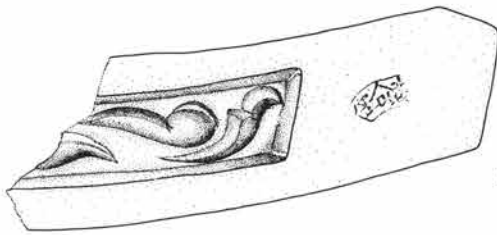
第715図 瓦当面意匠実測図(1)



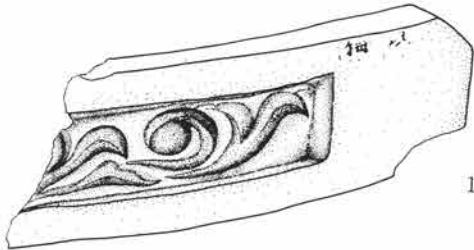
8



9



10



11



小山



吉

改梅

梅改



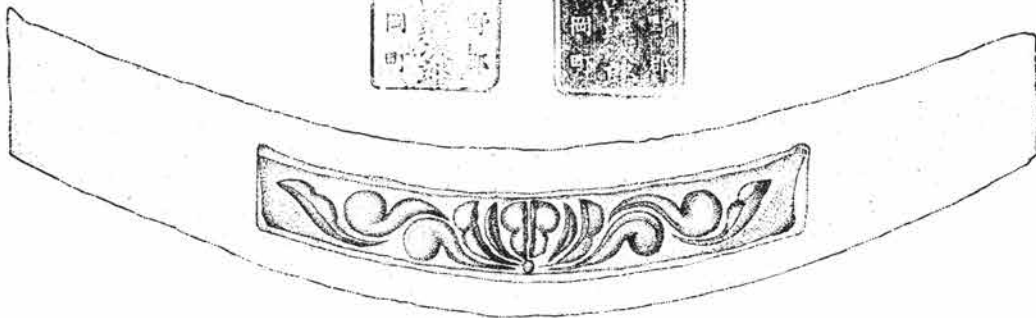
岡藤

8. 第7種棧瓦瓦当

9. 第8種棧瓦瓦当

10. 第9種棧瓦瓦当

11. 第10種棧瓦瓦当



0 10cm

第716图 瓦当面意匠实测图(2)

第3章 検出された遺構・遺物

り、呼称する。

本瓦

本瓦は、「本瓦葺き」としての存在であったとは考え難く、棧瓦葺きの一部として葺かれた存在であったと考えられる。

鏡瓦は2例有る。第717図-1は瓦当部のみ完存しているが、同図-2は中房周辺の細片である。これにより、後者は瓦当範種等については不明であるため、前者のみに第1種本瓦瓦当として分類しておく。

第1種本瓦瓦当は、面径14cmを測る三ツ巴文を意匠としている。内区に小さく尾の短かい左廻りの三ツ巴を置き、外区には巴の頭大の珠文を12ヶ配する。周縁は幅2cm程である。成形は、男瓦と竿付けにするもので、接合部には掻き破りを施すが、瓦当面には離れ砂は認められない。整形は、文様部は未調整であるが、他の部分は指撫でにより仕上げられている。同図-2は、同様な意匠であるが、巴は第1種のそれより大きい。また、尾は長いと考えられる。

男瓦

男瓦は、H11溝第704図-2・4・6・8、H148坑第423図1～6がある。これらの作瓦技法は、円筒管状の半裁による方法である。また、これらの中で玉縁が遺存するものは、第704図-4、第723図-1・3である。この玉縁部の作りには2種類認められる。1つは、第704図-4と第723図-1である。この両者は、側部の面取りは半裁時の切り口以外認められず、男瓦本体上隅部から玉縁部を約60度程で削り落すものである。今1つは、第723図-3で、玉縁部の側部が若干欠損するが、側部の面取り内面内側で行ない、この際に、面取りが玉縁部まで及んでいる。そして、玉縁部の半裁部を前述と同様に削り成形している。この両者には面取りの有無による。

整形は、外面撫で仕上げによるが、方向により2分される。これは、回転台上で粘土板巻き付け後、板状工具により回転撫で整形を行ないこの整形後の再調整痕であり、横位に再調整を行なうものが、第704図-2～5・第723図-2であり、回転台の回転は遅い。この逆の縦位に再調整を行なうものがある。この一群は回転台が静止状態で行なわれている。これに該当するものが第723図-1・3である。また、これら全てものは、円筒管半裁直前に、半裁部周辺を縦位の撫でにより最終整形されている。後者の縦位整形の一群は、この段階の縦位整形と一連の工程内でのものと考えられる。

女瓦

女瓦は、确实視出来るものは2点あり、これに疑せられるものを含めると3点になる。これらの3点は、いずれも1枚作りのものである。凹面は、横撫でにより整形が成され、平滑になっている。凸面には離れ砂の痕跡が僅かに認められ、粗い横撫で仕上げになっている。側部では、凹面側端部が削り落とされており、一枚作りの際に生ずる「めくれ」の処理と考えられる。これにより、凸面側の整形を先行させ、後行して凹面側を整形している。この技法は、3点共に共通し、後述する棧瓦にも同様な技法が認められる。この3点は、第722図-1・第721図-4の确实視し得る2点と、第704図-7がある。この第704図-7は、左棧瓦としての可能性も考慮されるため、疑せられる存在として扱った。

棧瓦類

棧瓦類は通有の棧瓦（切落棧瓦）をはじめ、軒瓦・片二寸切落棧瓦・水返付棧瓦（引掛付）・伏間瓦・角棧付伏間瓦・鬼瓦等が出土している。

切落棧瓦は、男瓦部に相当する部分の断面形状により2種、大きさにより2乃至3種、胎土により4種に分類出来る。ただ、完存品が皆無であり、状態の良好なものも少数しかいないため、大きさの点では不明な点

が多い。

男瓦部に相当する断面の形状では、丸味を帯びる“山形、状のもの”と、丸く“波状、を呈する二者が存在する。前者には第705図—1がある。後者は同部が遺存するものの全てが該当する。大きさでは上述のとおりであり、大・小としての大略的な把握としておきたい。この大・小では全体を見ても、小と判断されるものが1点しか認められず、他のものに就いては一応大の分類中に含めておく。小と判断されるものは第719図—4である。

胎土では4種に分類出来る。この4種の名称に就いては、第1分冊中で示した中世瓦の胎土分類（I～V類）の次番以降のVI～IX類を冠し以下に記す。

- VI類 焼成段階で比較的焼締り、全体的に緻密である。夾雑物は、白色鉍物粒子・黒色鉍物粒子を含む。量的には少量である。全体的にはシルト質の質感がする胎土で、完全に混ぜきっていない黄灰白色のシルト粗粒・パイ状になったシルトを認める。この胎土の最大限の焼締った状態のものが第721図—2であり、これ以上の焼締状態は製品として不良のものになると考えられる。
- VII類 焼成段階の焼締りは殆ど認められない。夾雑物は、白色粒子を多量に含み、黒色鉍物粒子を若干含む。また、雲母状の光沢が有る細粒子を極微量含む。全体的に仕込みが悪く、粗いブロック状の状態が認められる。重量感も群中最も軽い。割口断面はザングリしている。色調は淡灰白色・灰白色を呈する。
- VIII類 VII類に似た感が有る。夾雑物に大きな質差は無いが、VI・VIIの中間様のもので粗いがVII類程ではない。全体に粗っぽい胎土で色調は暗紫灰色を呈する。
- IX類 焼成段階の焼締りがある。夾雑物には、白色・黒色鉍物粒子・灰色シルト粗粒子を含み、浅黄橙粒子を多量に含む。雲母状の光沢粒子を多量に含み、この雲母状の鉍物を多量に含むのが群中最大の特徴である。また、重量感も有り緻密な胎土である。

上述の胎土については観察表中に示した。以下種別に列記する。

軒瓦類

軒瓦類も完存するものは皆無で破片化した状態であり、図示したとおりである。これらの軒瓦は、範種は8種類認められ、第1種棧瓦瓦当～第10種棧瓦瓦当に分類し第715・716図に示したとおりである。ただ、分類したものは、鏡部に相当する部分のみと、字部に相当する部分のみのもので大半で、元来両者は同一個体の可能性も有るが、胎土等ををしても確実に判断出来なかったため分離した状態で示した。

これらの軒瓦は、一ツ巴・三ツ巴と均整唐草文を意匠とする一群である。鏡部に相当する部分は、外区の珠文帯の有無・数量で大きく3分される。

第1種棧瓦瓦当 唯一瓦当全体が復原し得る個体である。ただ、左端側の長さが不明であるが、文様端部から4cmぐらいに求められると考えられる。鏡部に相当する部分は、左回りの三ツ巴文のみを配しており、他の巴文と比較すると巴文は最も大きく尾も長い。字部に相当する部分は、中心飾りは瓢形状を呈する。唐草はあまり力強くなく、個々のものが独立する状態である。肉置きは、群中第6種と同様で比較的低い。また、第8種と同様な文様構成をなし、第8種は非常に力強く各文様を表出し、当種の発展型と考えられ、第1種と第8種の関係が示唆される。

第2種棧瓦瓦当 当種は部分的に字部が遺存する。鏡部は、内区に左回りの三ツ巴を配し、外区には11ヶの連珠文を施す。巴は、第1種に次ぎ大きく、尾も長い。周縁は群中で最も幅が狭く、

第3章 検出された遺構・遺物

0.8～0.9cmを計る。宇部は、末端の一葉が遺存するのみであるが、出土例中には認められない。

- 第3種棧瓦瓦当 鏡部のみのものである。内区の三ツ巴は非常に小さく、尾は群中で最も短い。また、第5種と同様な規模である。外区には8ケの連珠文を施している。
- 第4種棧瓦瓦当 第3種と同様であるが、巴文が第3・5種より大きく、頭も丸味が強い。
- 第5種棧瓦瓦当 第3種と同様であるが、巴文の尾が第3種より長い。
- 第6種棧瓦瓦当 内区には巨大な頭を有する巴を1点配し、外区には8ケの連珠文を配する。肉盛りは全体のっぺりした感が有り面としては平らである。この第6種は隅巴瓦1点のみである。
- 第7種棧瓦瓦当 第1種と共に全体が復原出来る数少ない例である。鏡部に相当する部分は三ツ巴を内区に置き、8ケの連珠文を外区に配するものである。この8ケの連珠文を有する瓦当の中では、珠点の大きさが比較的小さい。宇部は、各々が独立した状態の唐草であり力強い感じは受けない。
- 第8種棧瓦瓦当 鏡部を欠損する。二点の破片からの図上復原である。中心飾りは、珠点上に退化した阿弥陀仏を表出し、脇立の位置には蓮の葉状のものを一對施している。各唐草は太く、独立した状態で施しており、端部は鎗筋状の稜を有している。
- 第9種棧瓦瓦当 宇部左端部の破片である。各唐草は独立した状態で力強い。また、左端の一葉は比較的強い鎗筋を有している。そして、文様部より左端側には扇状の刻印が押捺されているが、文字の判読等については後述する。
- 第10種棧瓦瓦当 中心飾りから左側が残存するものである。各唐草は独立するが、太く力強く表出されており、全体に連続する様にも見られる。また、第7種同様に刻印が認められ、長方形の区画の中に“梅改、を刻んでいる。

以上が瓦当意匠である。胎土については観察表を参照されたい。

片二寸切落棧瓦

片二寸切落棧瓦は3点有る。この瓦は右上隅部の角に、軸方向に“二寸、の切り込みがある。ただ、現在称する所の“片二寸、と同一種のものなのか確認していないが、他の瓦の切り込みと比較した場合、この差違があるため分類した。この種の中には、男瓦に相当する部分の断面が“山形、を呈するもの2点(第719図-1・2)と、“波形、を呈するもの1点(第720図-1)が有る。胎土はいずれもVI類である。

水返付棧瓦

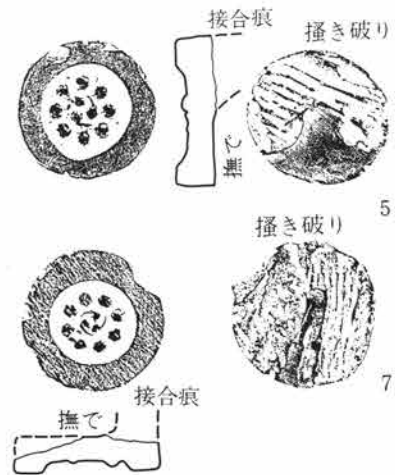
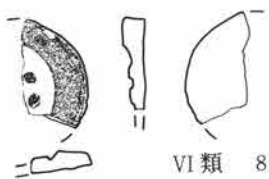
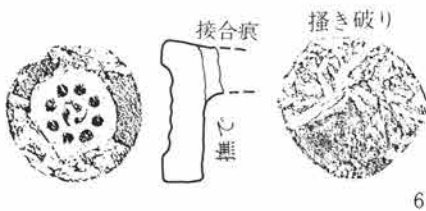
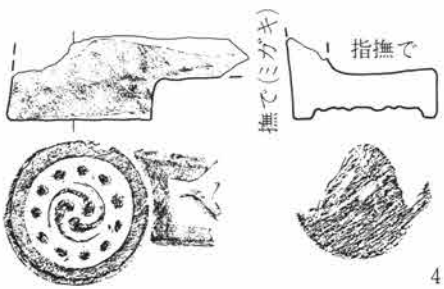
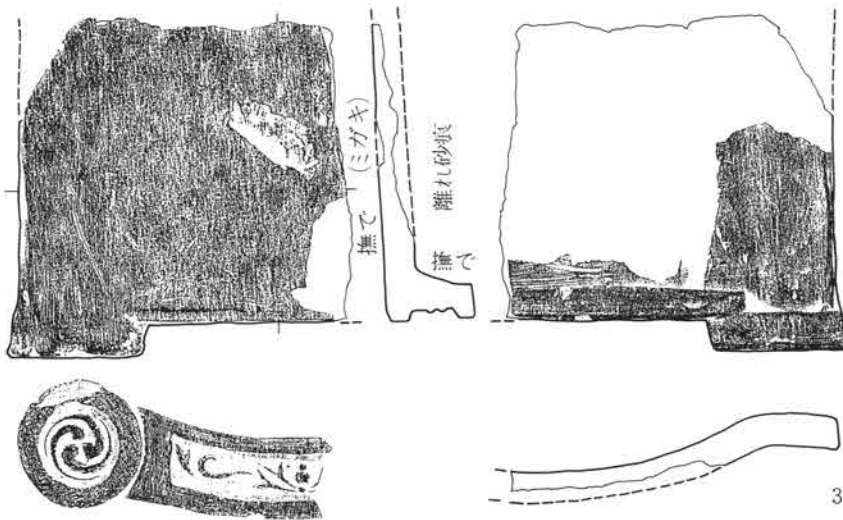
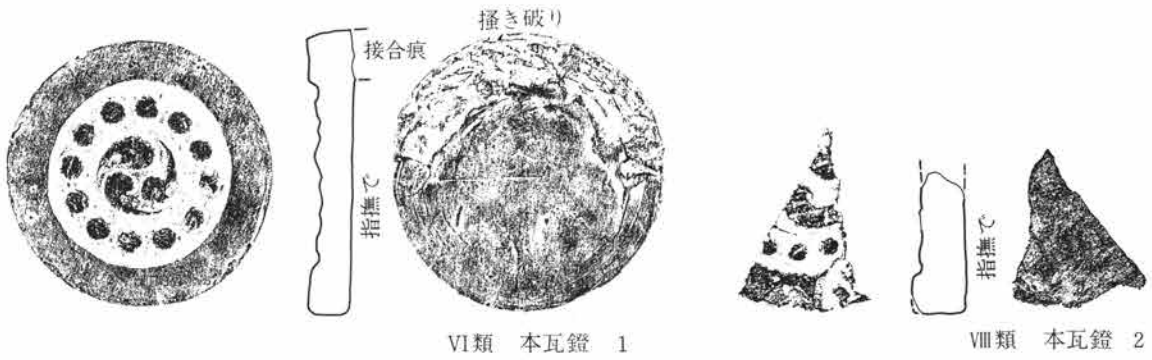
1点のみ出土している。第720図-4である。胎土はVI類に近い。裏面には引掛の山形突起が1点認められる。また、全面が銀化している。

伏間瓦(角棧付)

5点図示した。他に角棧の付かない破片が数点ある。角棧部分を欠損する(第722図-2)ものは、その横断面の弧が角棧付伏間瓦と同様である点と、胎土から、角棧付伏間瓦と判断出来る。他は、いずれも角棧を有する部分の破片であり、第705図-3・4、第724図-1・2である。胎土は観察表を参照されたい。棧部の接合は、弧成りに掻き破りを施し接合している。

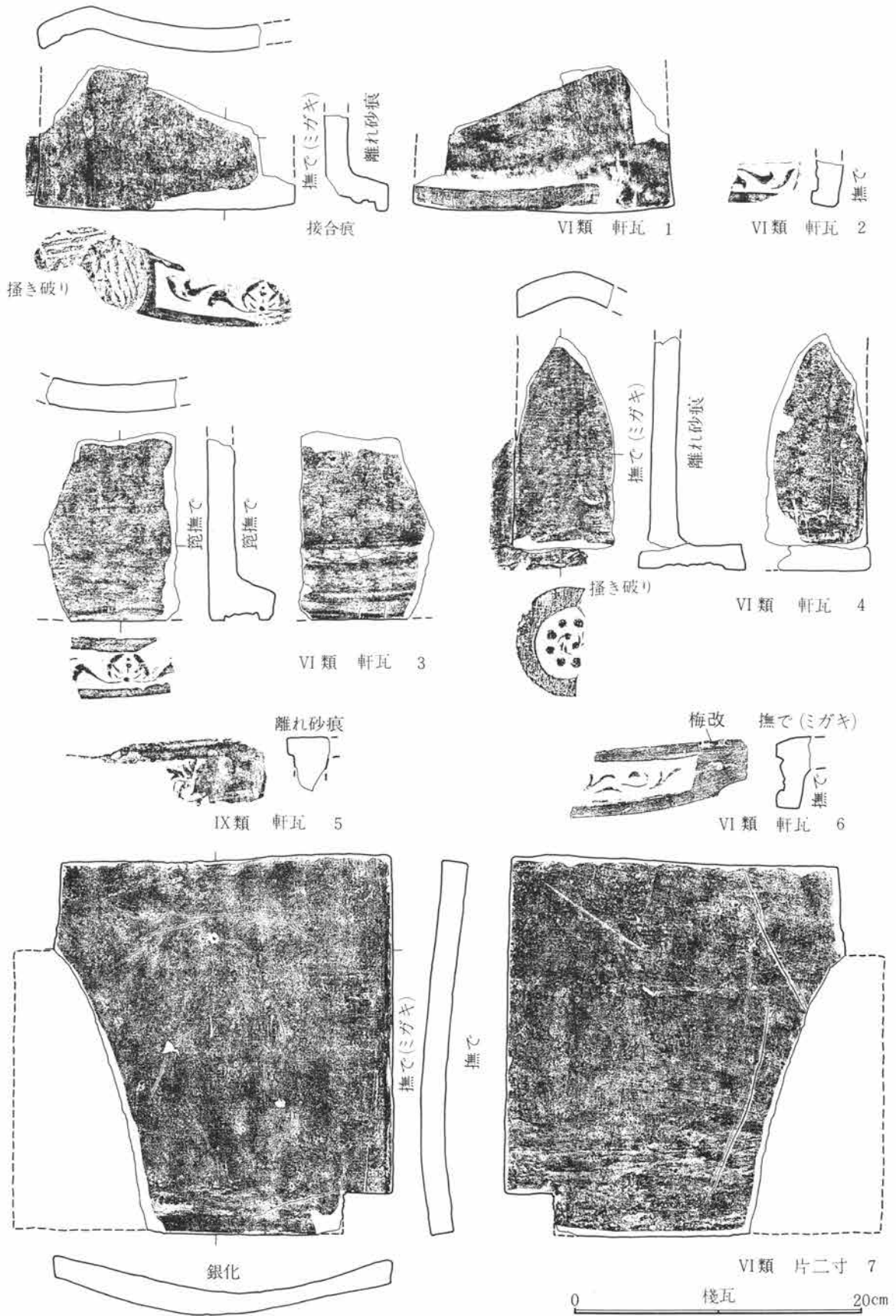
鬼瓦類

鬼瓦類は全て破片のものである。第724図-4～7があり、同図中の3も疑せられる存在である。図中4は、影盛型の雲水部と思われる。5は周縁状の部分と突帯下には鋭い工具により刺突を無作為に施している。6・

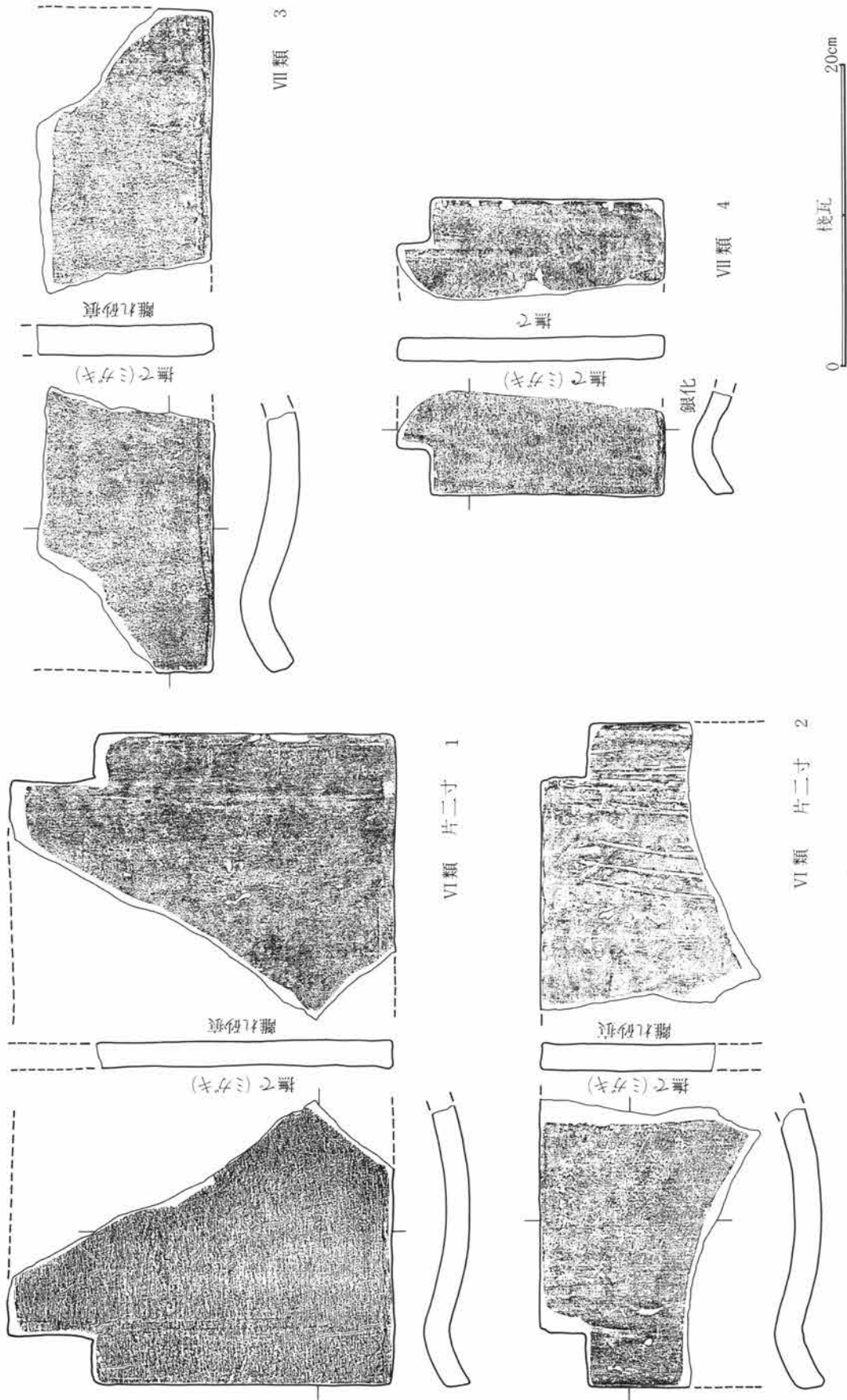


VI類 3~8.
 棧瓦軒 3~8. 20cm

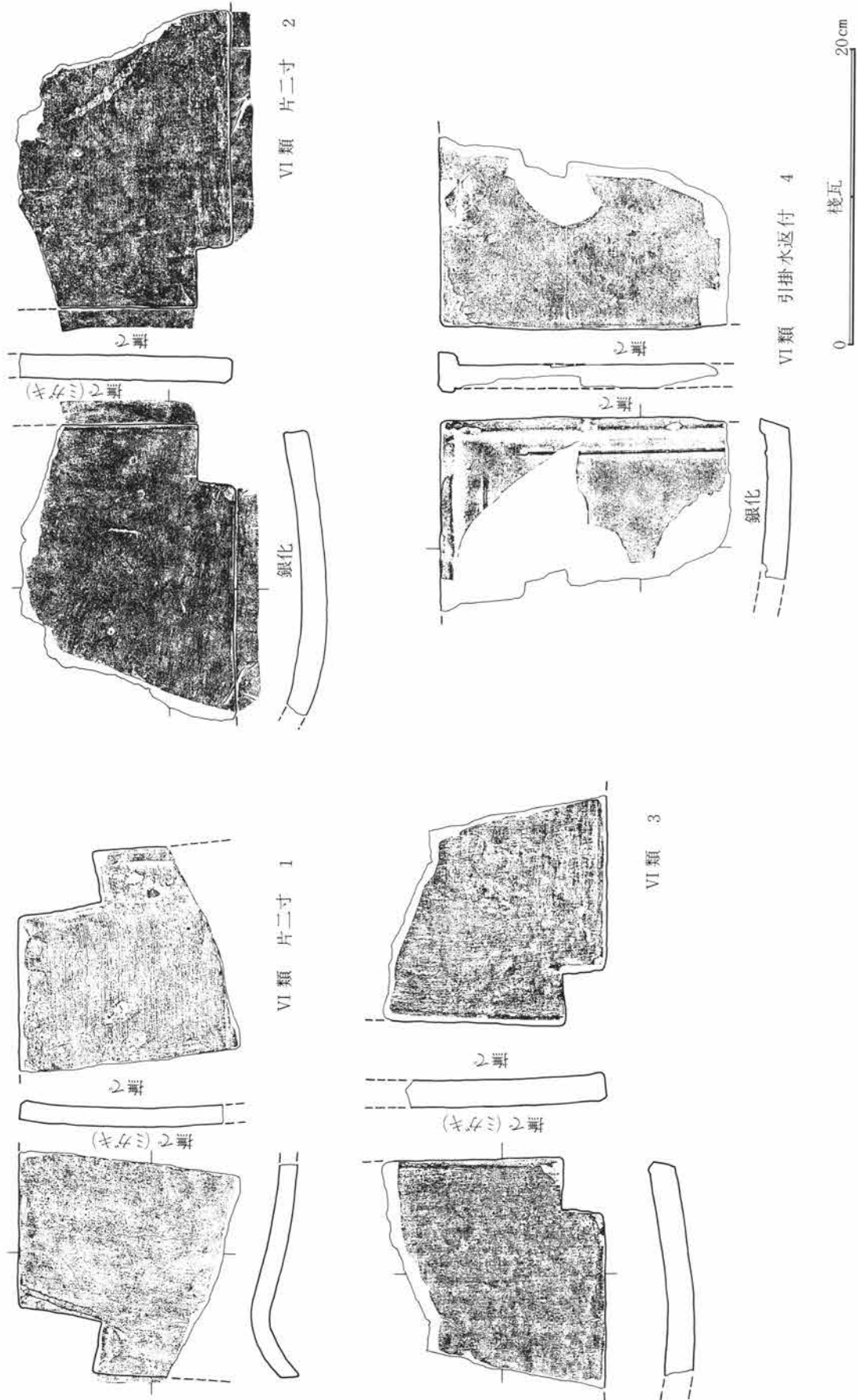
第717図 H区第148号土坑出土遺物実測図(3)



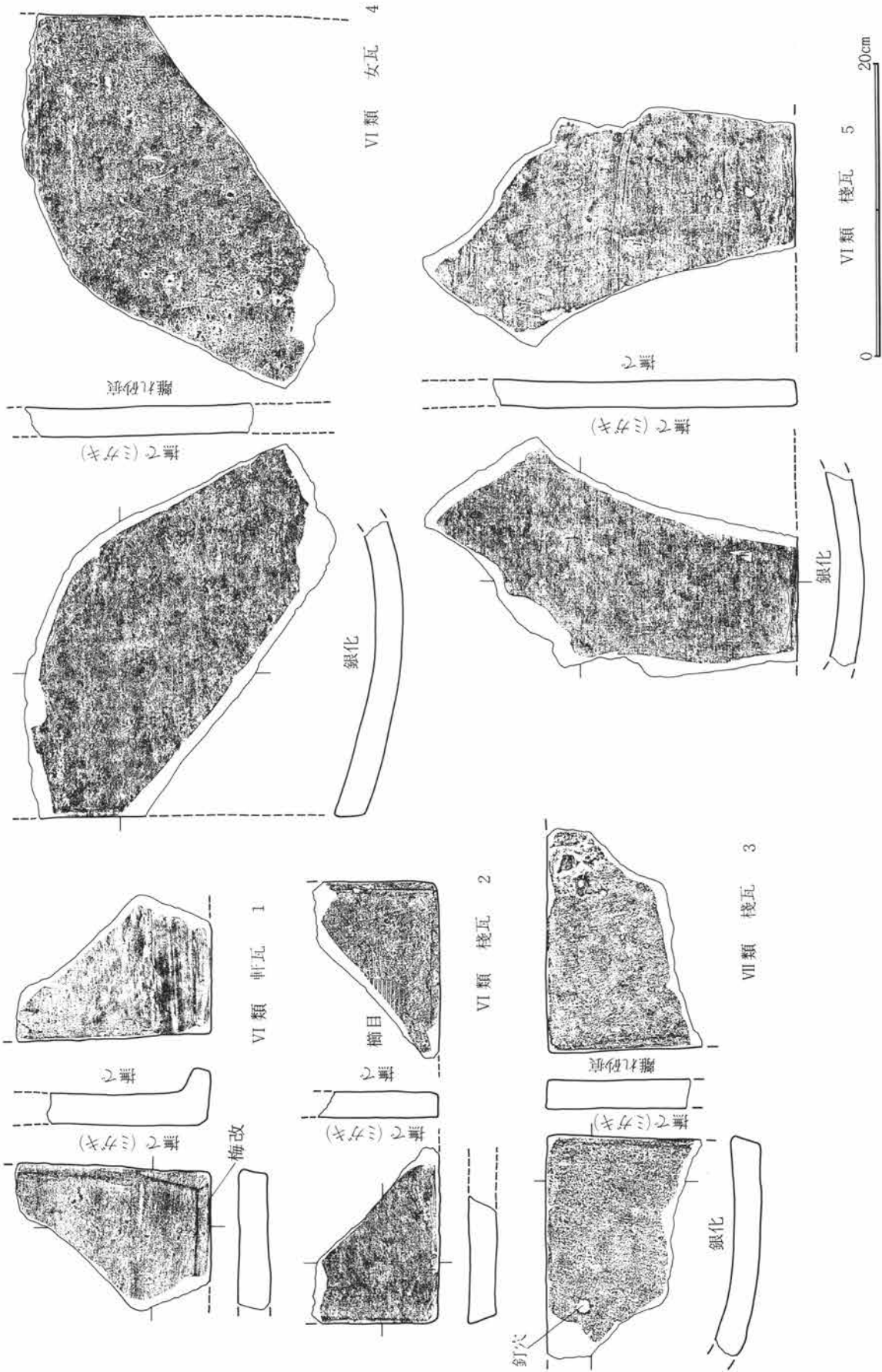
第718図 H区第148号土坑出土遺物実測図(4)



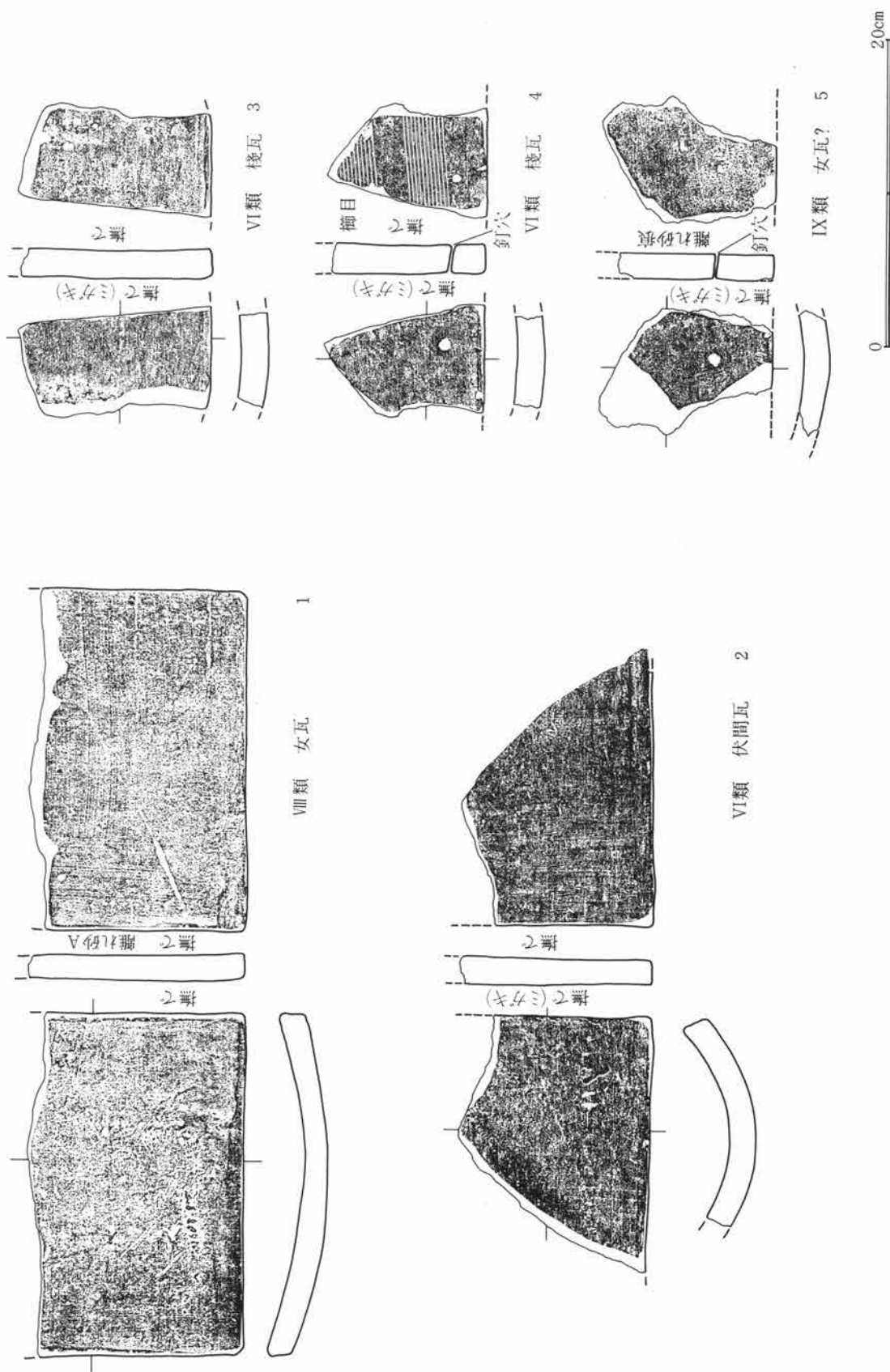
第719図 H区第148号土坑出土遺物実測図(5)



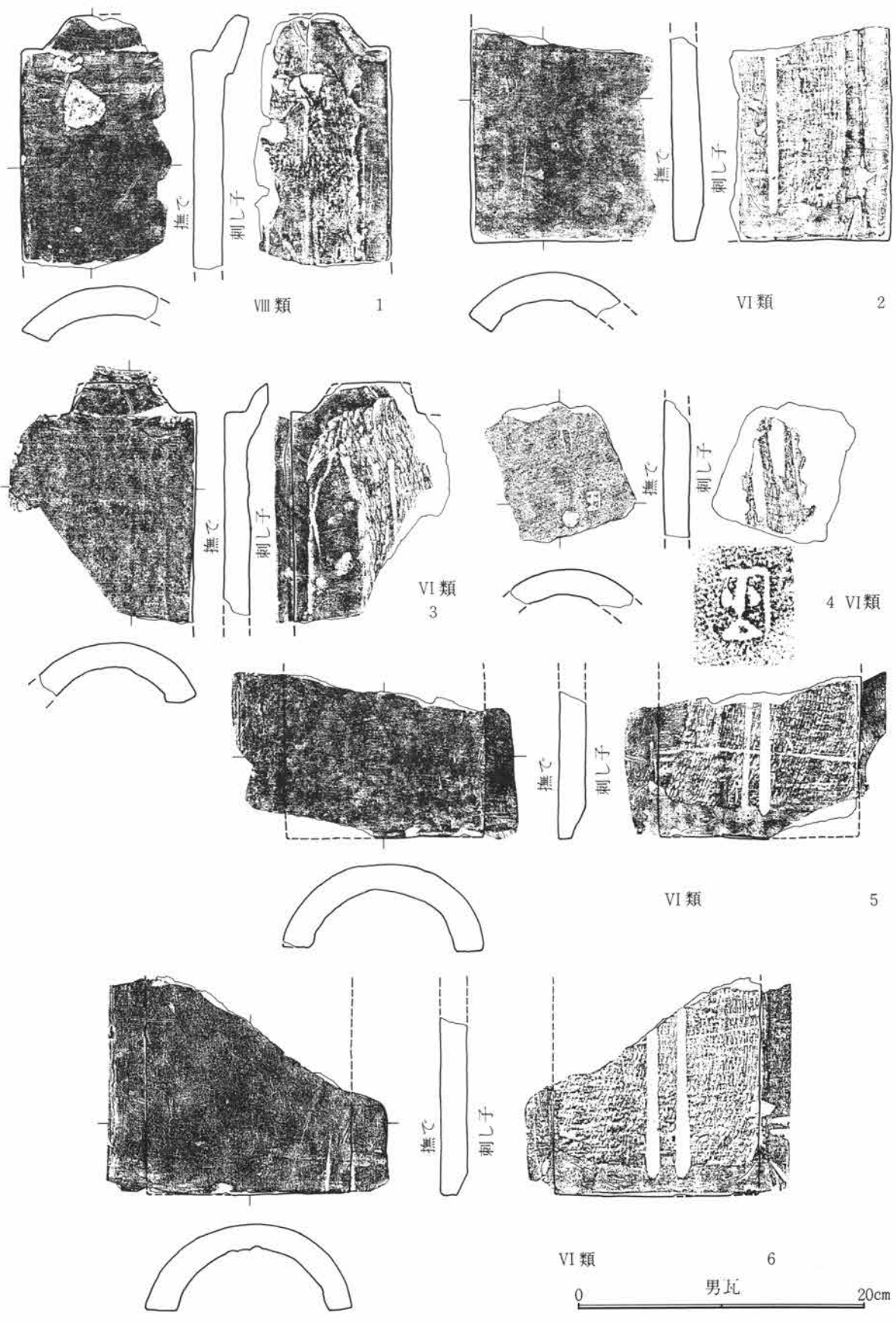
第720図 H区第148号土坑出土遺物実測図(6)



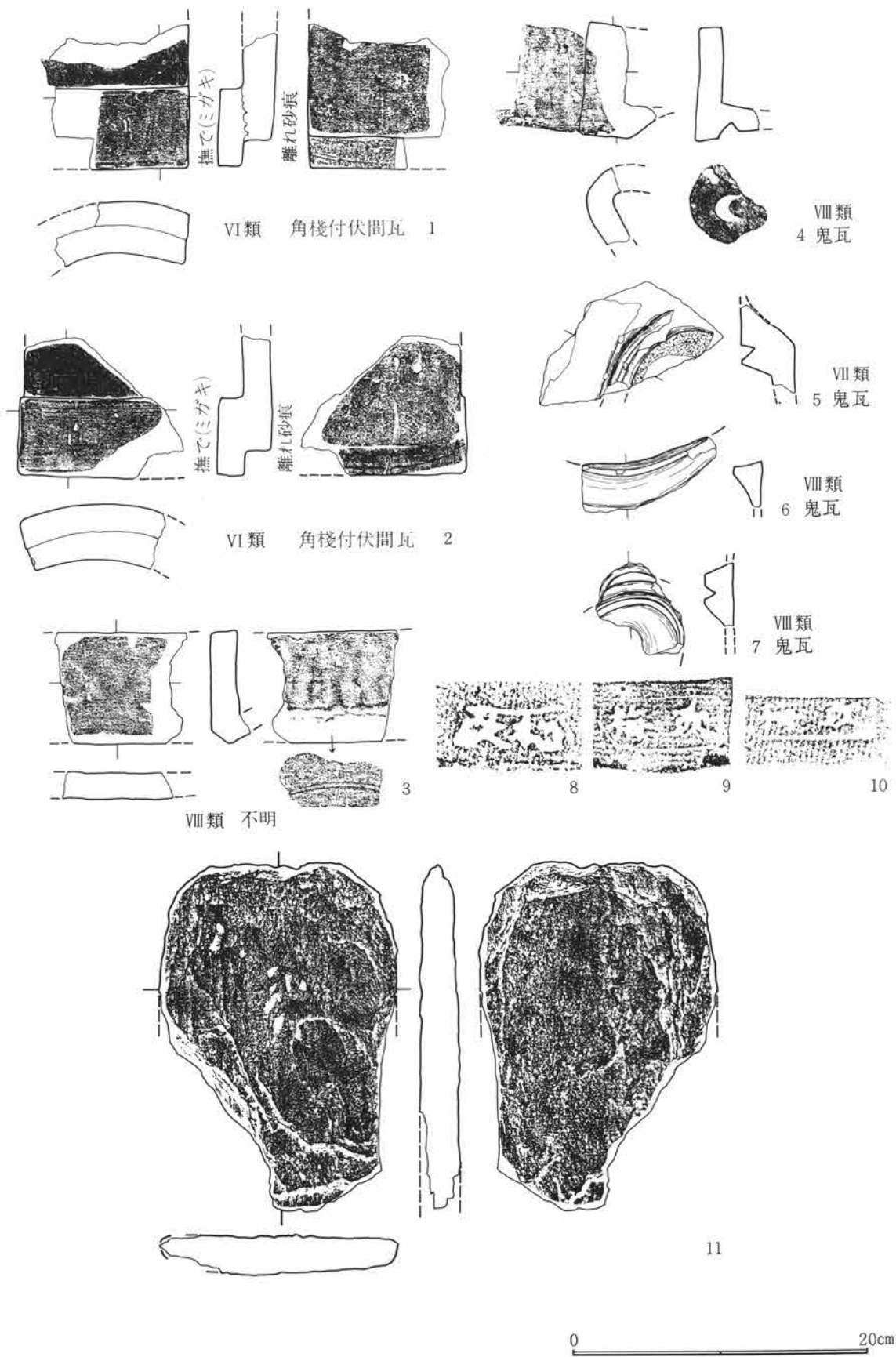
第721図 H区第148号土坑出土遺物実測図(7)



第722図 H区第148号土坑出土遺物実測図(8)



第723図 H区第148号土坑出土遺物実測図(9)



0 20cm

第724図 H区第148号土坑出土遺物実測図(10)

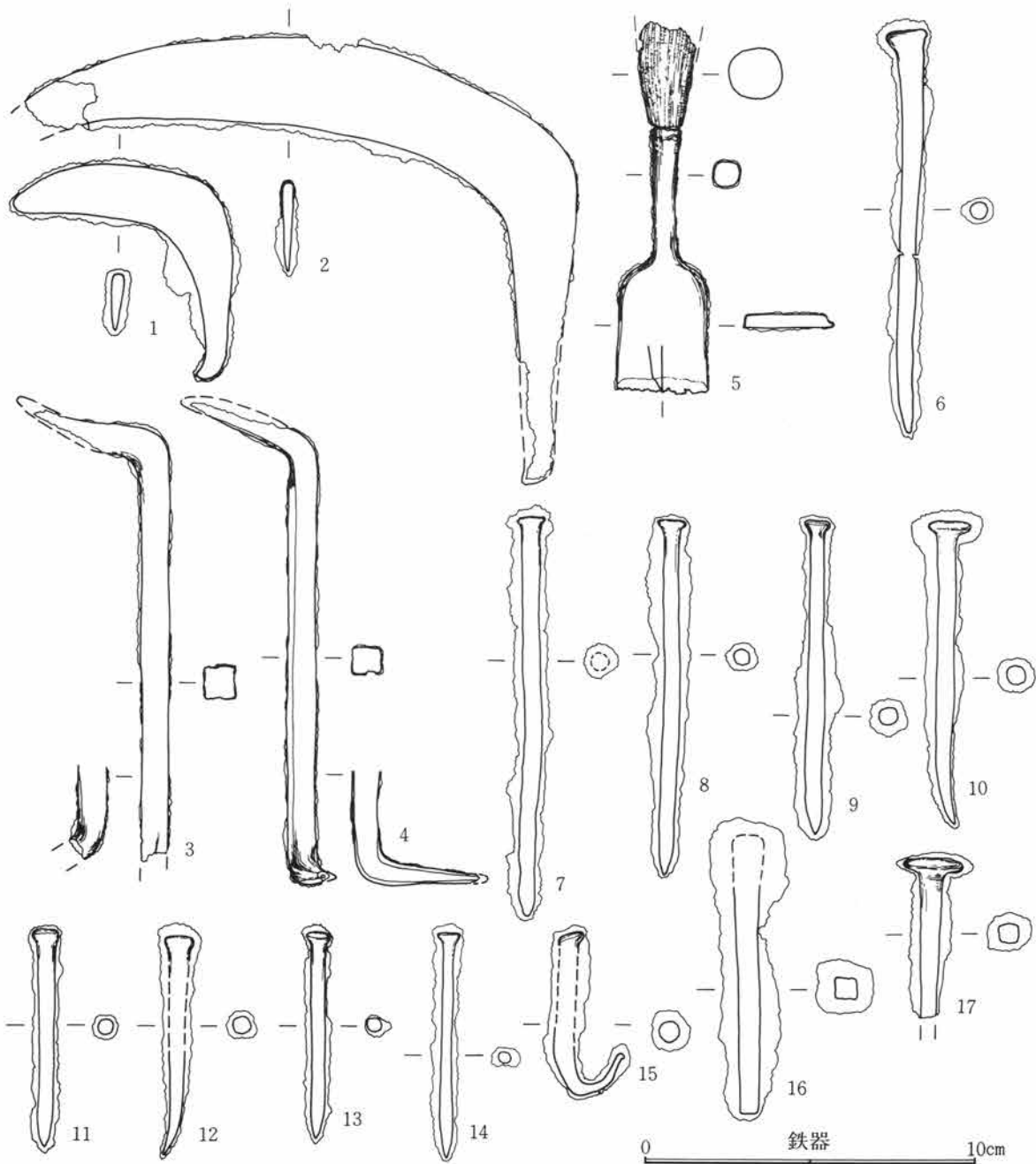
7は5と同様な部分の破片と考えられ、恐らくは雲水文の一部の破片と考えられる。

隅巴瓦 (第697図-21)

H区1溝内から出土したが、H区1溝で前述したとおり当該期の遺物はH148坑に属するものと考えられる。遺存する部分は瓦当部のみであり、瓦当意匠は前述した第9種棧瓦瓦当である。下側の筒部は“ヒレ”状に尖っている。この筒部と瓦当の接合は掻き破り等は認められず竿付にしている。整形は、指撫による撫付状態である。焼成は良好で、外面側は銀化が認められる。

刻印

出土した本瓦・棧瓦の中で、刻印を認めるものがある。この刻印は5種類有り第716図に示した。第716図に示したものは印自体を拓本採りした状態で示した。実際の瓦にはこの状態で刻印されているものではない。



第725図 H区第148号土坑出土遺物実測図(11)

第3章 検出された遺構・遺物

第723図-1は男瓦（第723図-4）に押捺されているもので、鍵に小山と判読される。鍵は7により示され、小は漢字で、山は△で示されている。

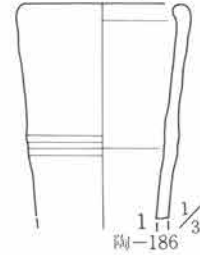
第716図-2は女瓦の小口に押捺されている（第723図-3）。四角の中に吉の字と判読される。

第716図-3は女瓦か棧の小口に押捺されている。瓦としての図示はしなかったが、逆扇状の区画の内側に改梅を刻んでいる。

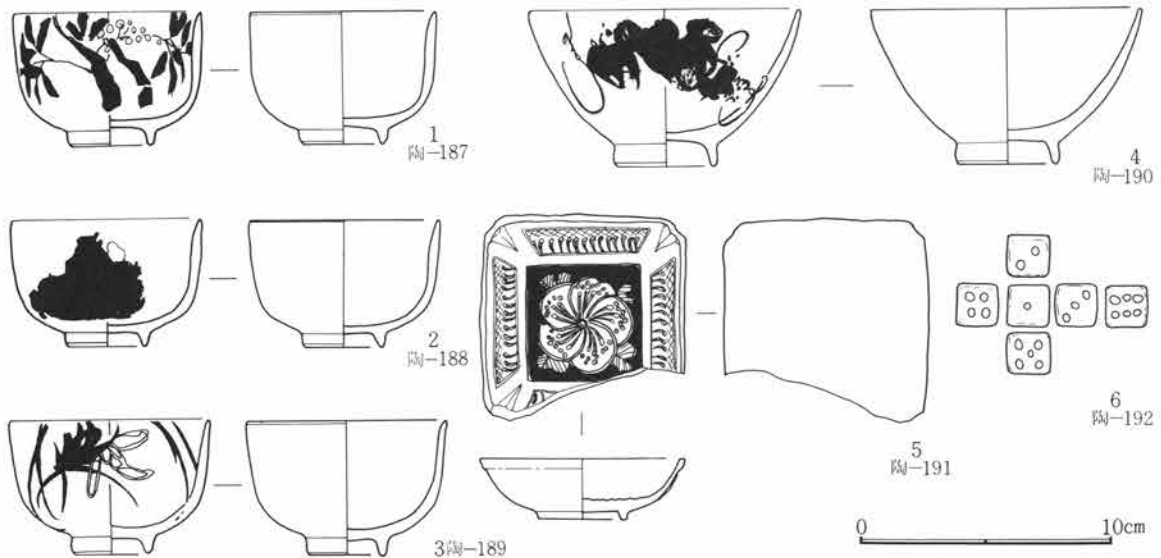
第716図-4は最も多く散見出来る。いずれも棧瓦の小口に押捺し、1点のみ軒瓦に認められる（第718図-6）。この刻印は長方形の区画内に、梅改の文字が判読出来、3の改梅との関係が示唆される。

第716図-5は1点のみ認められ、第703図-17で、扇状の区画内に右から藤、中央に判読出来ない屋号が入り、左に岡と思われる文字が観察出来る。この藤・岡の字は行書風とも楷書風とも思われるもので、恐らくは、棧瓦の生産地として著名な、藤岡と、作瓦した店の屋号を現わしているものと考えられる。

以上の5種の刻印は、押捺面の状態から金属製の印と思われるものにより施印されたと考えられる。



第726図 H区第132号土坑出土遺物実測図



第727図 H区第155号住居跡出土遺物実測図

I・J区の概要

I・J区は南北に狭長な調査区の北端部にあたる。J区は、台地上と河川敷部の調査に分けられ、河川敷部は、牛池川の右岸あたり、FPに伴う泥流により一時的に埋没した痕跡が認められる。そして、この河川敷部は、事実上の最北端の調査区にあたる。

このI・J区は、前刊書で示したとおり、縄文・弥生時代の住居が検出されており、古代の住居跡も多量に検出されている。特に、弥生時代では集落を構成する部分である。

I・J区の当該期の調査は、調査時に存在した農道により部分的に分断した状態での調査であり、他の区と同様である。この点で、同一遺構であろうと考えられる遺構も、その称号が二つに亙るものも存在し、これが、前述のH区第20号溝状遺構とI区第2号溝状遺構である。

調査自体は、J区から先行させて実施した。J区は全体的に耕作によると考えられる攪乱が著しく、遺構確認面は、VII層土上面であった。I区は、耕作による攪乱は顕著ではなかった。しかし、古代の住居が多量

に確認される段階では、確認面Ⅶ層土上面に求めるしかなかった。この段階で、Ⅱ～Ⅵ層土を除去してしまい、中世面での遺構確認が出来なかった。この点で未確認に終わった遺構は非常に多いと思われる。また、調査段階では、中世柱穴状遺構を攪乱と同様視したため、確認されたものであっても未調査に終わったものも多い。

後述する各遺構の中で、前述したH区第20号溝状遺構（以下H20溝と略す）と同一の遺構と想定されるI区第2号溝状遺構（以下I2溝と略す）とH2溝・H21溝により区画域が想定されるが、この区画域の中部から検出され当該期の遺構数が非常に少なく、部分的にしか認められない点では、上述のことを考慮していただきたい。

検出された遺構は、溝状遺構・土坑・土塚墓・井戸・ピット等がある。主体的に溝・井戸の存在がある。土坑は、前述してきたF・G・H区と同様な様相が認められ、分類等については、図表編中に示した。

溝状遺構では、方形区画を形成すると考えられるI2溝の存在があり、H11溝の走行方向に近い状態で検出されたI区1・6・8号溝が在り、2号溝を切る状態である。

後述する遺構は、H11溝以南が、D8溝・F1溝により区画される区域外にあたり、この点で、存在意義に前述してきた諸遺構とは若干の違いも想起される。

I区第2号溝状遺構

当溝は、前述したH20溝と同一の遺構であることを示した。この両者（以下I2溝として総括的に記述し、H20溝の部分は、H区分として記述する）は、H11溝・H1溝の存在による制約が考えられる。これは、H区分の南端は、H1溝とH12溝の立ち上がる部分で、空間を残し立ち上がっており、他の部分では立ち上がる状態は認められない。この立ち上がらない状態は、全体を廻る状態が必要であった点が重要であると思われる。また、調査自体の確認検出面が当時の生活面下より約1m程下がっていることから、溝幅員は検出時の状態よりかなり広いものであったことが推定され、上端部の幅員は約2m程あったことが推定される。これは、G区第2号溝状遺構の状況からの推定である。

当該の溝が幅員約2mを測り、同様な溝底を備えて廻る点で、館跡としての存在が想定される。しかし、溝自体が中間で立ち上がらずに、存在する点では他のものの存在としても解される。この館跡乃至他の同様種の遺構種を想定する場合、内郭にあたる部分の遺構の存在状態が重要な要素であり、この点で他の遺構の所見を記述した後に総括的に記述したい。

覆土の状態は、塊状地山土の存在が少なかった点で、明確な周辺の状態を想定するに至れないが、土塁等の施設を否定し得る状態も認められていない。

出土遺物は、古代の遺物のみが多量に出土している。

所産時期は、D8溝・F1溝の存在からH11溝の構築上限が14世紀後半代にあり、このH11溝と共存したと思われるH1溝・H12溝との関連が考えられる点から、当溝も14世紀後半代の構築が考えられる。また、当溝を切るI1・6・8溝（後述）が15世紀後半には存在したことが想定される点で、この年代観の妥当性が認められよう。

I区第1・6・8号溝状遺構

当該の3条の溝状遺構は、前述したとおり、H11溝の走行方向に平行する状態で検出されている。ただ、この平行する状態といっても、H11溝の直線走行部に平行する状態ではなく、屈曲して走行する部分を含めての指行方向に対しての平行状態である。

各溝は南側から8号・6号・1号であり、規模的には8号溝が大きい。また、各溝の間は、8号と6号の

第3章 検出された遺構・遺物

間が約5m、6号と1号との間が約12mである。ただ、この数値は検出面での数値であり、旧生活面では各溝の上端はさらに広がり、各溝間の数値は減少する数値であると考えられる。特に、8号溝の旧状での幅員は約2.5mを測ったと想定される。

1号溝は、その西端部が11号址と重複する状態で検出されているが、新旧関係は判然とせず、共存する可能性も残されている。

この3条の溝状遺構は、同一走行方向に在る点で共存か前後する関係であっても、それぞれの関連が想起される。そして、これらの溝状遺構の西側延長部は、現在の東国分地区の北端の地割と同一乃至平行する状態が認められ、この部分までの走行が想定される。また、地割が遺存している点では、H11溝自体から生じた地割ではなく、H11溝の規整により構築した遺構から新たな地割が生じていることが注目される。さらに、前刊書で示した、長尾憲明が大旦那となって妙見寺に寄進した梵鐘は、8号溝が西進した場合の南側約10m程の所から出土している。

出土遺物は、1号溝では当該期の遺物は皆無で、6号・8号溝では古代の遺物は多いものの当該期のものが少ない。総体的な2条の溝を見ると、常滑大甕片が比較的多い。6号溝は、土師質土器皿の2類が出土しており、14世紀後半の年代観が得られ、青磁からは13～14世紀の年代が得られ、14世紀後半が上限として考えられる。8号溝では、瀬戸・美濃製品が15世紀の年代観が得られる。また、近世陶磁器は、3条の溝により生じた地割が現代まで確認出来ることより、溝に重複する土坑等の遺構が存在した可能性が非常に高い。若し、このとおりの状態であった場合、当該遺物は後世の混入品であり、当該遺構に伴う遺物ではない。これらの年代観から、15世紀代の存在が想定され、2溝との関係からこの年代観が妥当性が有ると考えられる。

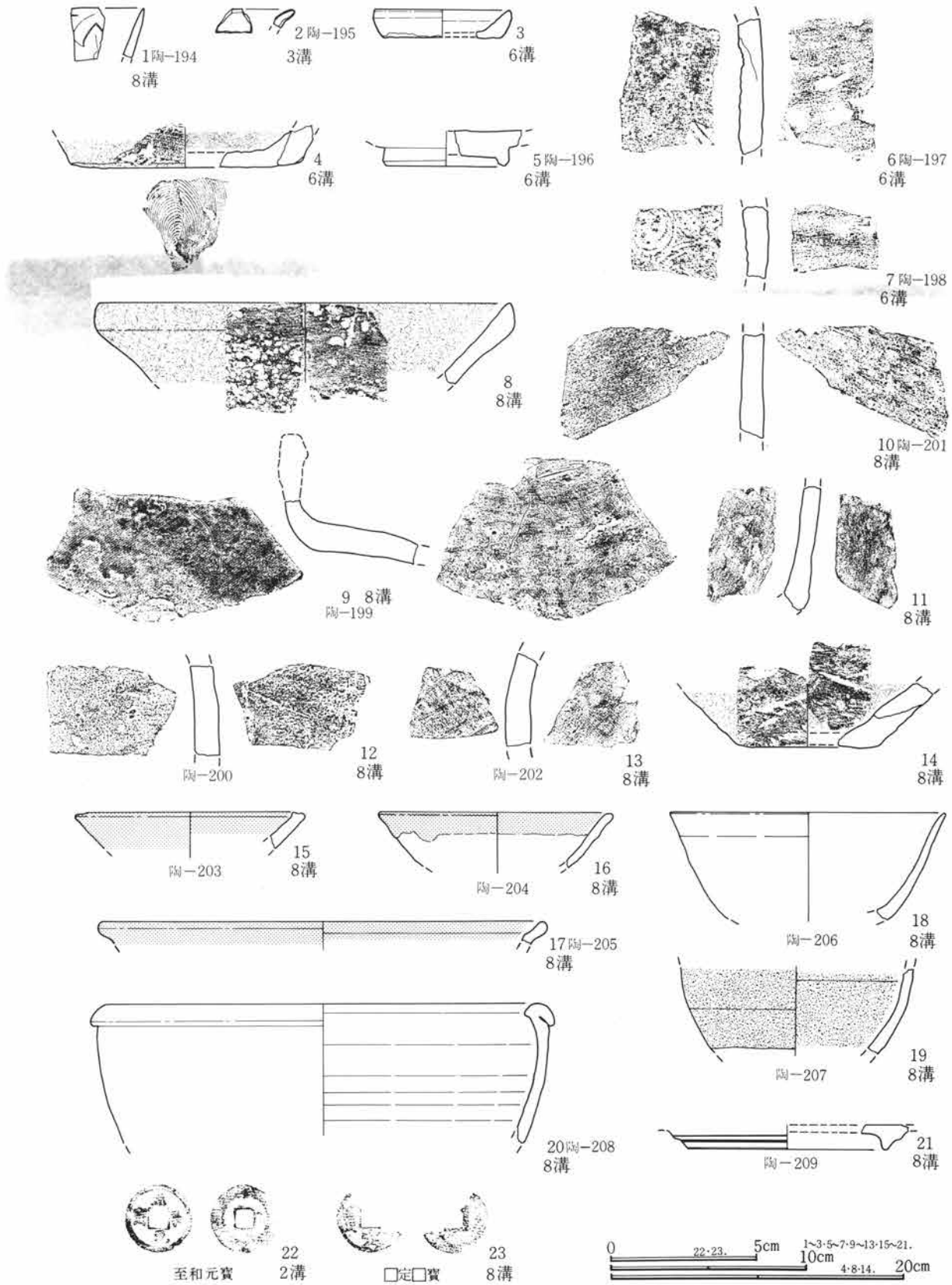
J区第4号溝状遺構

当溝は、牛池川河川敷部で検出されている。この河川敷部分は榛名山二ツ岳噴火の際のF Pに伴う泥流が層厚約2m程堆積しており、この泥流層を切って構築している。また、この河川敷部分からは、古代の住居2軒、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構4条が検出されている。そして、鎌倉時代以降の遺構としては、当溝と土坑墓(前刊書に掲載したJ2墓)、土坑状のもの1基、不明落ち込み1基が検出されている。これらの点から6世紀後半以降の土地利用にF Pに伴う泥流が一役を担った証左である。

当該の溝は、古代の溝と切り合い関係にあり、位置もほぼ重複するものである。また、地形的には、溝群より河川寄りに比高差80cm程の段を有している。この段の形成時期は不明であるが、当溝と係わるものと思われる。当溝の走行は、この段の上位側を囲む状態で弧を描き検出されているが、調査段階では、溝群を一括調査で実施したため不分明な部分を生じさせている。

この河川敷部の調査着手以前の地目は水田と一部菜園となっており、当溝が旧地目と係わることも示唆される。そして、古代の溝状遺構とほぼ位置を同じくして開削されている点では、土地の区画が古代より連続として変化無く使用されていることが判断される。ただし、古代の段階では、住居の存在により明らかなように、居住空間の一部としての存在であったことが判断され、下限として鎌倉時代以降に土地利用が変化したものと考えられる。

これらのことから、当溝は、土地利用上にその存在意義が認められ、出土遺物から埋没の上限が18世紀後半代に求められることから、灌漑を目的とすることを考慮しても、当溝は、少なくとも上述の年代観まで、その必要性が有ったことが判断される。この18世紀以降その必要性が失われたことは、下位段の水田部への灌漑の目的が達せられたことにも起因するものとも思われる。また、火輪が2点逆位で出土しているが、この状態から階段状か溝を渡る場合に設けられた橋状施設の一部であったと思われる。



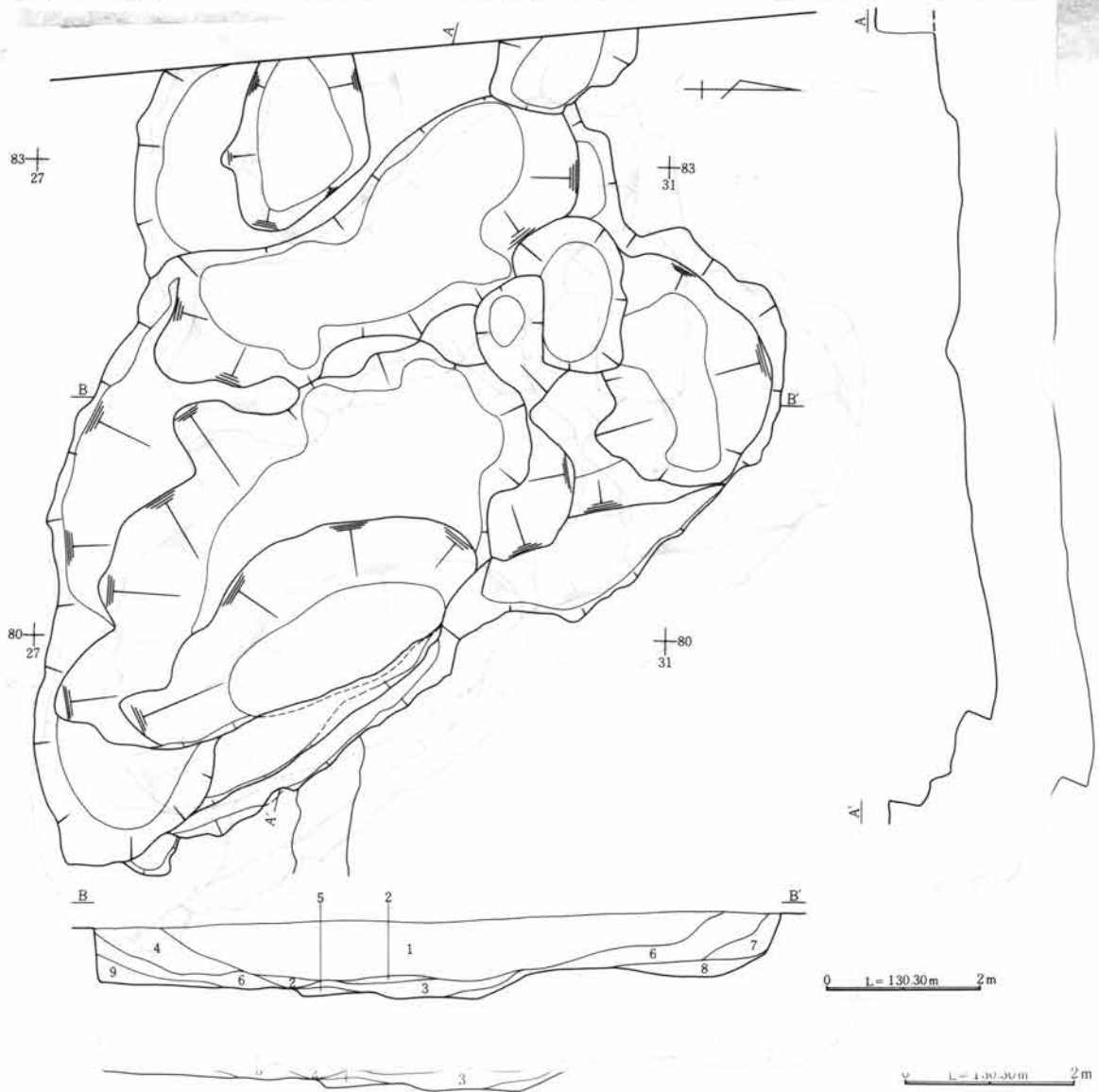
第728図 I区溝状構造出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

I区第11号址

当址はI区内西側中央で、西壁側が調査区外に延びる状態で検出され完全露呈は出来なかった。グリッドでは、28～32-I-79～84グリッド内に位置する。

平面形状は、全体に不整形形状を呈するが、底面には土坑が多数切り合う様な状態を呈しており、これに起因し平面形状が不整形形状を呈するものと考えられる。規模は、西側（長軸方向）が調査区外に延びるため不明であるが、検出部の最長部では11.16m程を測る。残存深度は最深部で1.05mを測る。覆土は、全体に、ブロック土・焼土・炭化物を含み、人為層として考えられ、恐らくは埋填されたと考えられる。出土遺物は皆無であったが、周辺遺構の状態から14～15世紀頃の所産と考えられる。



層 序

- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| 1. 黒色土-B軽石多量・粗粒状炭化物若干・粗粒状焼土若干混入。 | 5. 黒色土-B軽石通有・粒状VII層土若干。 |
| 2. " - " 通有・塊状VII層土混入。 | 6. " - " 粒状焼土微量・粒状炭化物微量混入。 |
| 3. " - " 粒状焼土微量。 | 7. " - " 粒状VII層土多量混入。 |
| 4. " - " 粗粒状焼土微量混入。 | 8. " - 5近質。 |
| | 9. 黒色土-5近質。 |

第729図 I区第11号址実測図

遺構名称	I区第3号井戸跡			位置	20・21—I-74・75グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径0.90	底径0.55	最細径0.73	最大径0.90	深度4.80	湧水位深度	夏期2.0・冬期——	
アグリ部最大径	夏期 1.8・冬期——			湧水層	——		耐水層	——

遺構名称	I区第5号井戸跡			位置	18・19—I-54・55グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径1.70	底径0.50	最細径0.75	最大径1.70	深度4.05	湧水位深度	夏期2.30・冬期3.20	
アグリ部最大径	夏期 0.95・冬期 1.15			湧水層	——		耐水層	——

遺構名称	I区第6号井戸跡			位置	17・18—I-54グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径1.95	底径0.40	最細径0.50	最大径1.95	深度5.90	湧水位深度	夏期2.75・冬期3.55	
アグリ部最大径	夏期 1.00・冬期 1.35			湧水層	——		耐水層	——

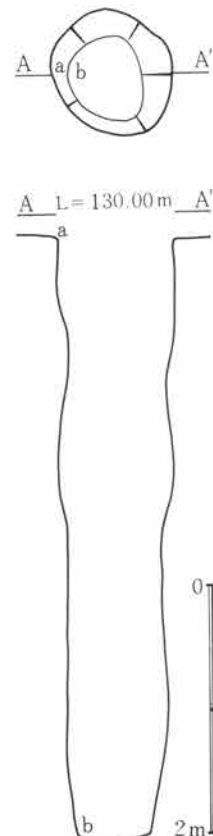
遺構名称	I区第7号井戸跡			位置	13~15—I-51~53グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径2.80	底径0.60	最細径0.70	最大径2.80	深度6.60	湧水位深度	夏期2.80・冬期3.55	
アグリ部最大径	夏期 1.25・冬期 1.20			湧水層	——		耐水層	——

所見 (I区3・5・6・7号井戸)

3号井戸は当該期の台地上の井戸中では深度が浅く、顕著なアグリが認められない点から、短期間の存在で、深度の点から夏期に伴うものと考えられる。出土遺物は皆無で、周辺遺構の状況から、所産年代は、14~16世紀の間に求められる。

5号井戸は6号井戸と接する状態で検出されている。5号井戸も前出の3号井戸同様に深度は浅いものの、底面よりやや上位に冬期のアグリが認められる。6号井戸では5号井戸との底面での比高差が約1.5mあり、6号井戸の底面が下位になる。アグリは、5号井戸同様に地山土の同一層に認められ、冬期に生じたものと考えられる。この両者の井戸は、状態から相前後しての存在と考えられる。これは、両者の深度差、接する状態から想定される。深度では5号井戸が浅く、6号井戸が深い。この深度が示すことは、5号井戸が先行したことである。これは、接する状態で存在することより、片方の井戸が深い場合、浅い方では湧水量が減少する状態が生じ、井戸機能を低下させることになる。また、浅い方の井戸が先行して廃棄された場合、壁体の崩落・湧水量の減少(湧水位深度の低下)か特殊な状況下(考古学的には判断し得ない状態)での状況が考えられる。この中で井戸本来の機能が失われ、接する状態で削井する時には、湧水量の減少が推定され、これにより、先行井戸より深く削井したことが判断される。これらのことを勘案すると5号井戸の先行性が考えられ、6号井戸は、5号井戸を廃棄した直後に削井したことが考えられる。所産時期は、常滑大甕片より、14~16世紀の年代観が得られる。5号井戸からは腰刀1振が出土している。

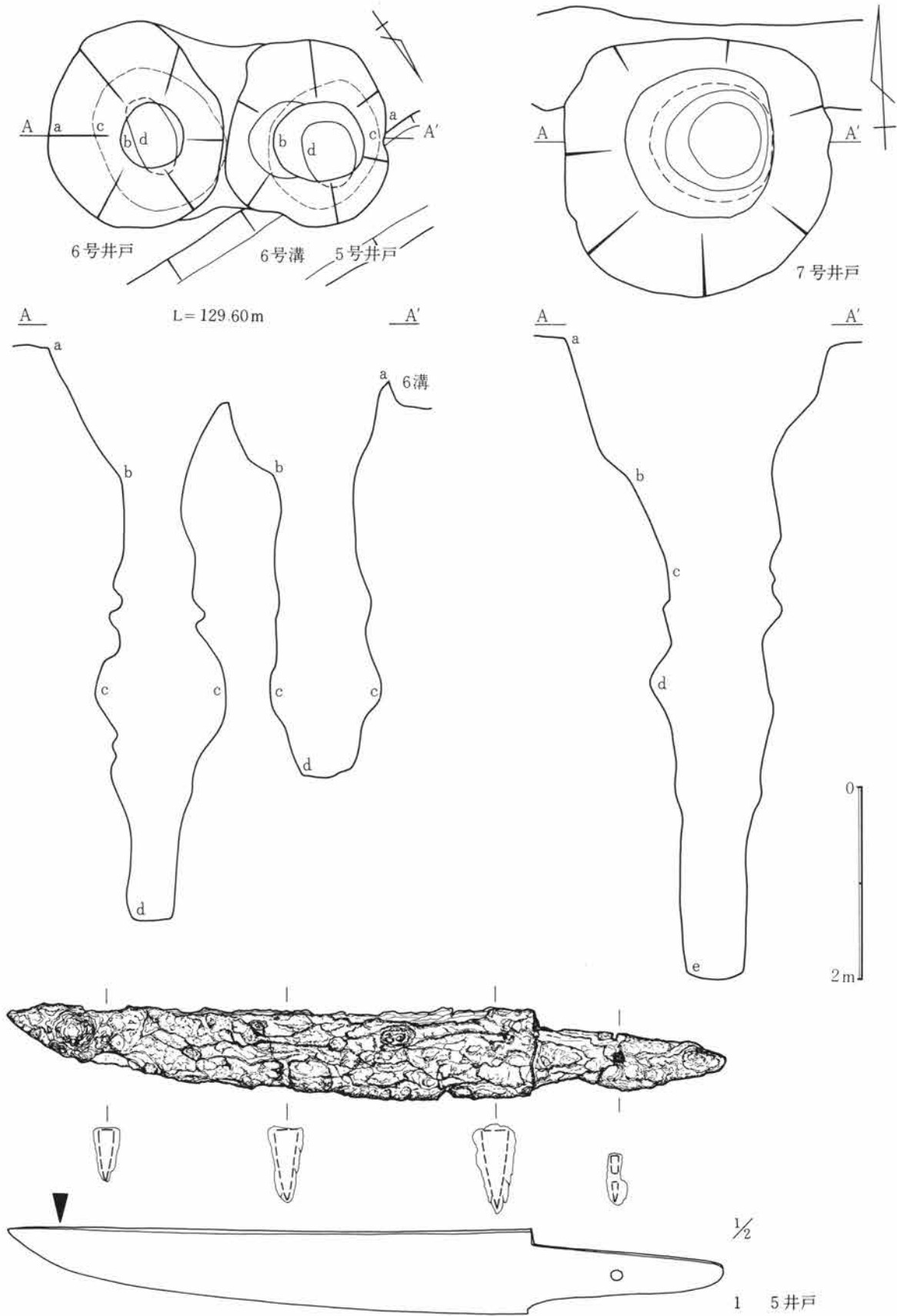
7号井戸は、上述の5・6号井戸の様に顕著なアグリは認められないが、中位程に若干のアグリが認められる。出土遺物は、遺存状態の良い内耳鍋があり、15世紀前半の所産年代が考えられ、上述の井戸とほぼ同様な年代観が推定される。これら4本の



第730図 I区第3号井戸跡実測図

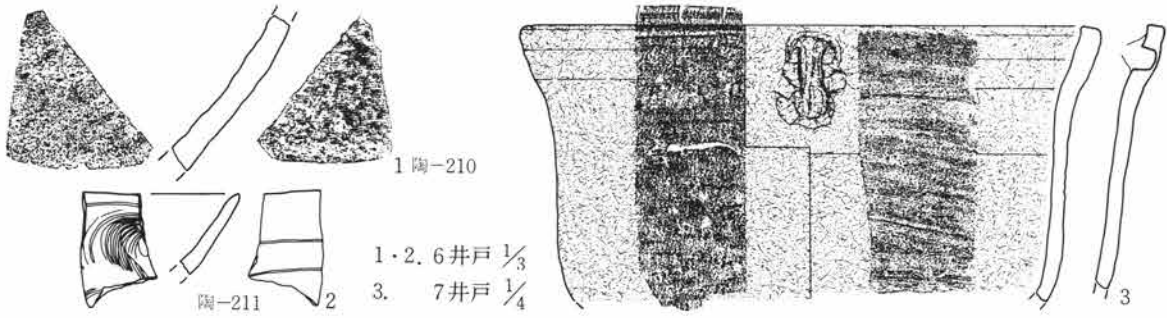
井戸からは、井戸枠等の施設を示す遺物・状況は認められていない。この点から、これら4本の井戸は、地山井筒円筒型の形態であることが判断される。

第3章 検出された遺構・遺物

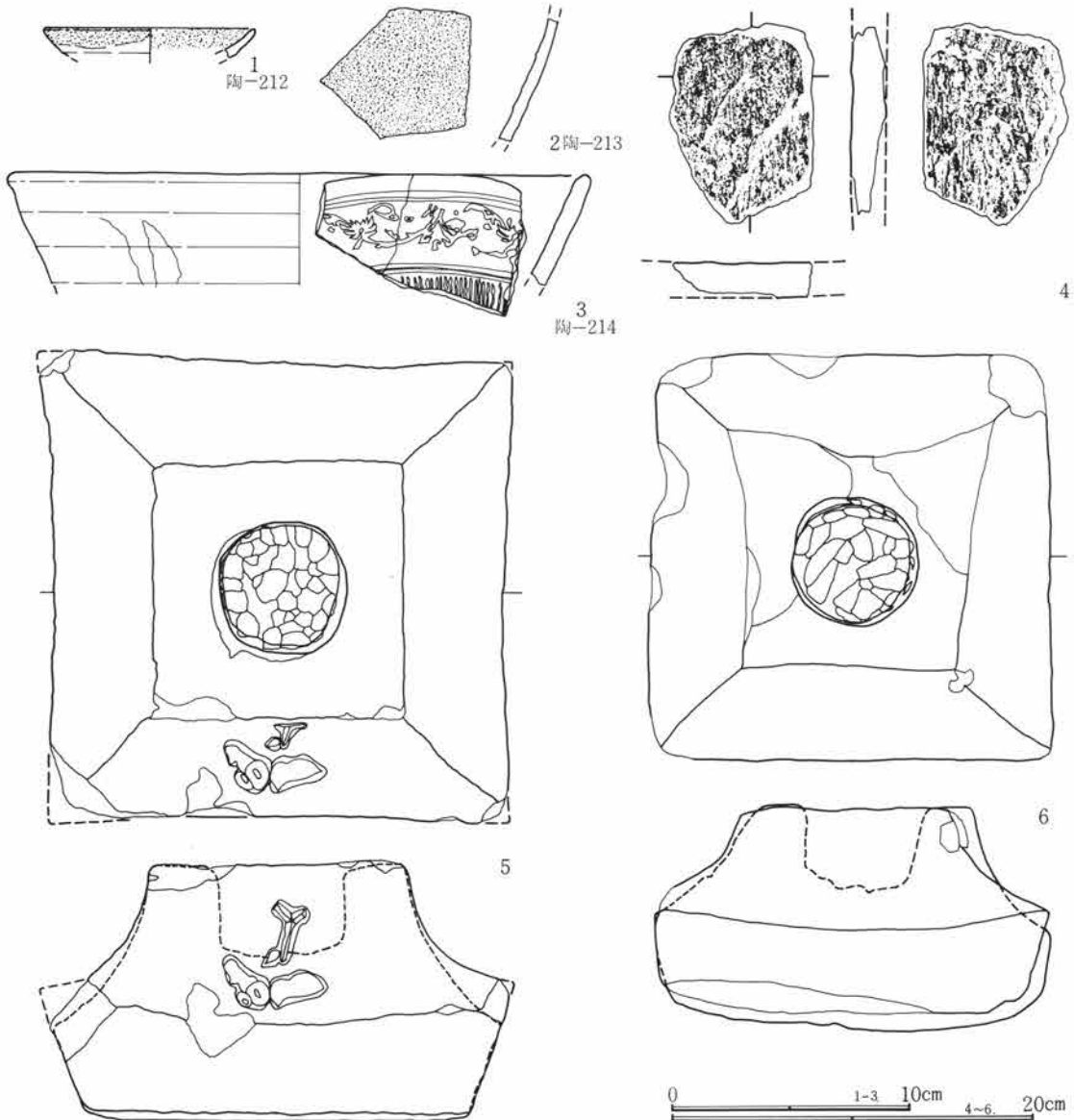


第731図 I区第5・6・7号井戸跡・出土遺物実測図

当該期の井戸で台地上で検出されたものは27本に達している。これらの井戸は、湧水位深度を異にするものの、形状・形態はいずれも共通している。また、所産時期も室町時代に限定されるものと考えられ、平安時代以後鎌倉時代を隔て、当該地域での人の居住が多かったことを示している。



第732図 I区第6・7号井戸跡出土遺物実測図

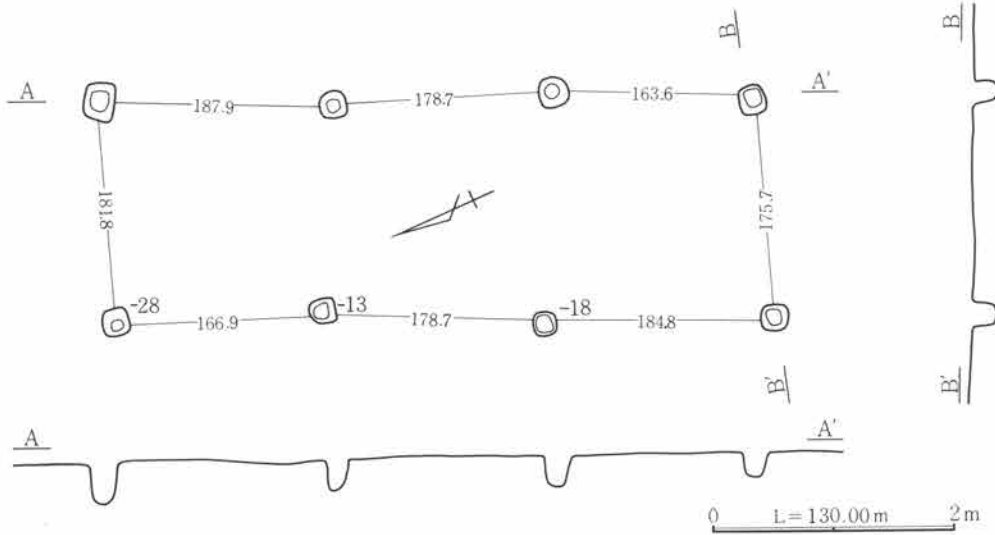


第733図 J区第4号溝状遺構出土遺物実測図

第3章 検出された遺構・遺物

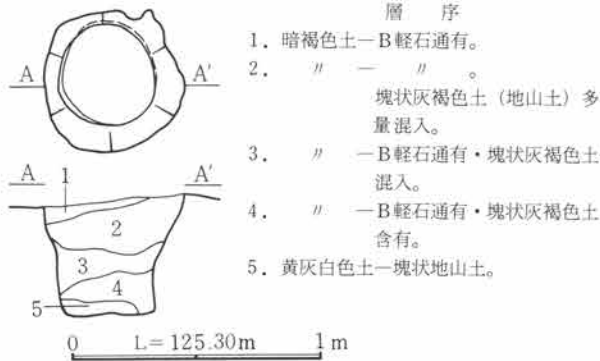
J区第13号掘立柱建物

当掘立は、1間×3間の建物で、柱間長は図上に示した。各柱間長からは、約160～180cm程の数値が認められ、一辺の総長から一単位30cmを想定した数値で除すると、18の数値が得られ、柱間が6尺になる。



第734図 J区第32号掘立柱建物跡実測図

遺構名称	J区第1号井戸跡		位置	33-J-55・56グリッド内		平面形態	円形
規模(m)	地上径1.10	底径0.70	最細径	最大径	深度0.90	湧水位深度	夏期——・冬期——
アグリ部最大径	夏期——・冬期——		湧水層	——		耐水層	——

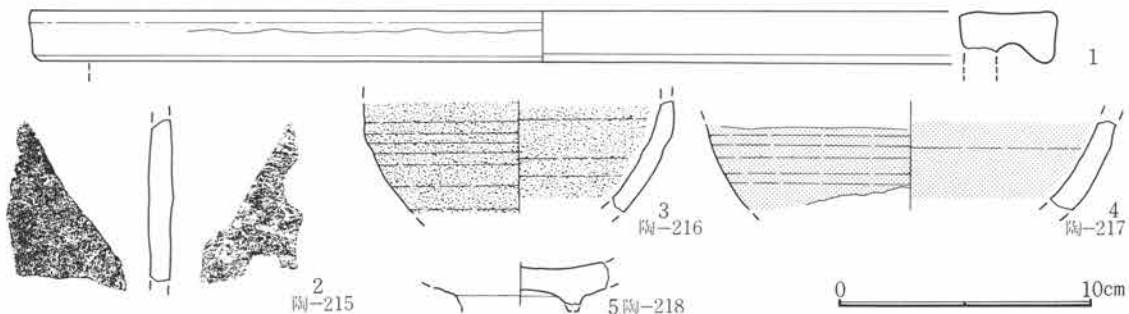


第735図 J区第1号井戸跡実測図

所見 当井戸跡は、前述した河川敷部で検出されている。

深度では前刊書で報告したZ区第9号井戸跡に次ぐ浅さである。しかし、深度が浅い点で土坑としての存在も考慮されるところであるが、調査時の湧水状態から井戸跡として把握されている。

出土遺物がない点で、明確な所産時期が把握されないが、前述した4号溝の存在や、2号墓の存在も在り、近世の所産と考えられる。また、井戸をもつての居住空間は考え難い。



第736図 J区第51号址出土遺物実測図

Ⅰ・Ⅱ区から検出した溝状遺構・土坑等について

前述した溝状遺構は主要な遺構であったが、未記述のものも存在する。この点は先述したF・G・H区と同様である。ここで未記述のものについての溝状遺構と土坑について概括しておきたい。

溝状遺構では記述した以外に20条が検出されている。これらの内で前述したⅠ1・6・8号溝と平行する状態が認められるものが3条有り、直交状態に近いものが7条在る。この両者に該当しないものが10条検出されている。前二者の場合、Ⅰ1・6・8号溝が現代まで地割の制約を生じせしめた存在から、この3条の溝より後出することが判断される。そして、称号が付されていないものは、耕作に伴うものであって、G区内で多く検出されたものと同様である。後者は、Ⅰ1・6・8号溝の制約による地割に該当しないことから、この3条に先行する存在であったことも想起される。この場合、館跡状の遺構を想定させるⅠ2号溝との関係は不明である。

土坑では、溝の状況と類似する。Ⅰ1・6・8号溝と平行乃至直交状態に在るもの、方向がⅠ1・6・8号溝との関連が認められないものであり、これらの状況から看取されることは上述の溝状遺構と同様である。

これらの各遺構の規模等の数値は図表中に示した。

北側調査区における溝状遺構の概観

検出された溝状遺構・土坑は、各区での概括したとおり各区での特徴でもあり、共通することは多い。ここで若干全体を通して北側調査区の概括をしてみたい。

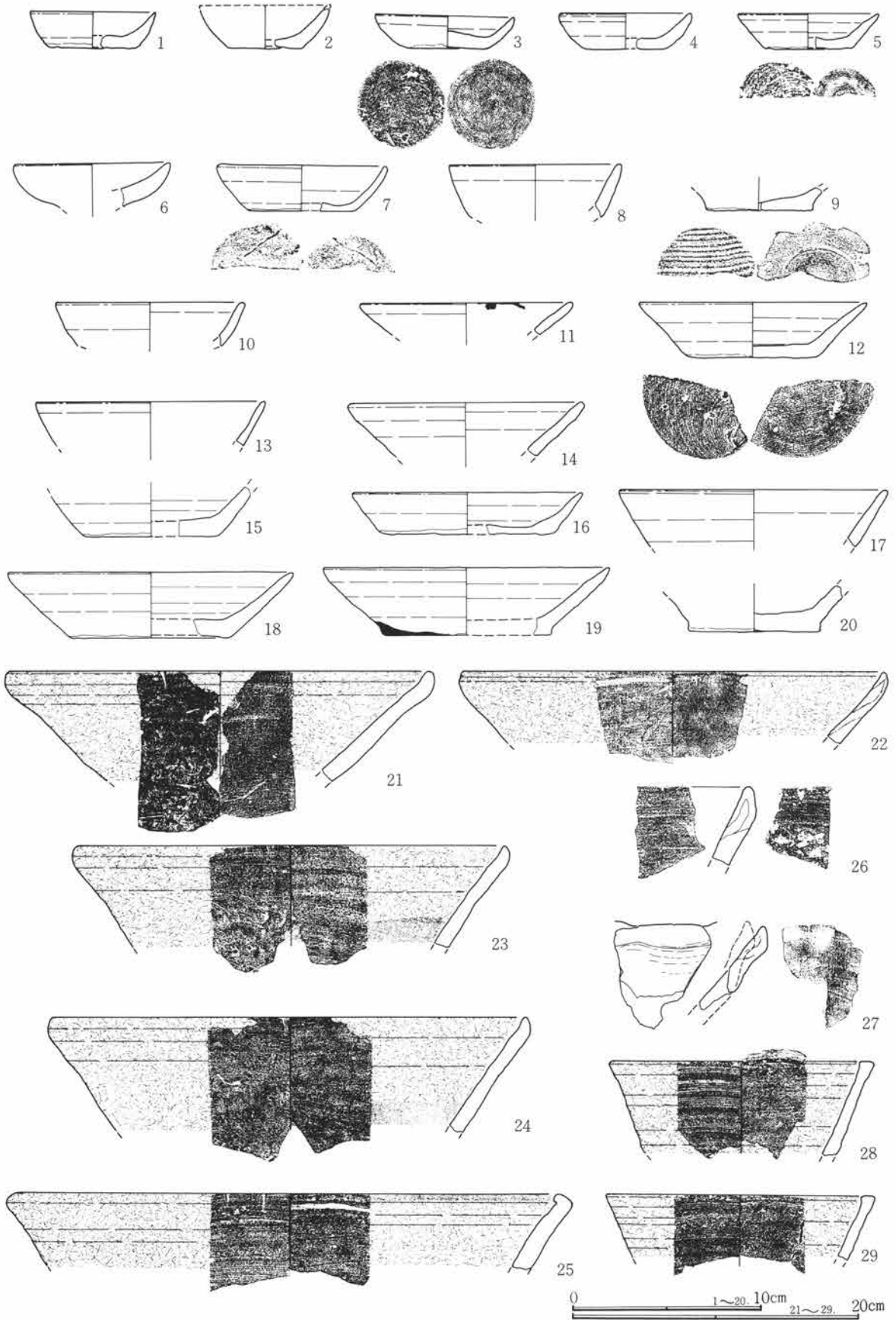
北側調査区内で、当該期で最古と考えられる溝状遺構は、埋没の下限が14世紀後半代に考えられるF2・6溝である。この両溝は古代の地割がそのまま利用された可能性が有り、鎌倉・南北朝期に存在した可能性も想定されるところであるが、遺物での証左では、板碑・陶磁器が有るものの、直接的に出土していない。

このF2・6溝に後出する存在にD8・F1・H11溝の大規模のものが構築される。この三者の溝状遺構が当遺跡で検出された各溝状遺構・土坑及びその他諸々の遺構に大きな規制を加えている。この段階が14世紀後半であり、同様の時期に主要遺構の構築が開始されると考えられ、これ以降、15世紀に入ると顕著な存在として“館状”の大規模遺構の構築頂点に達している。しかし、この15世紀代に構築された“館状”遺構も後半頃に廃棄される状態が認められる。この15世紀代の構築と考えられ諸々の溝状遺構もF1溝の制約により指向方向が認められる。16世紀代は判然としないが、17世紀以降現代に至る間、F1溝の制約下に生じた地割は一部耕地基盤整備により姿を消しているものの、その形跡は、今も尚認められ、江戸時代から昭和35年迄は明らかに室町時代の地割が使用されている。これが耕作に伴う溝状遺構・土坑により明らかである。すなわち、当該期に構築されたD8・F1・H11溝の3条の溝状遺構は、室町時代においても重要な存在であったことが示唆され、さらに、この3条の溝状遺構の開削自体、非常に重要な目的をもって構築されたことが暗示される。

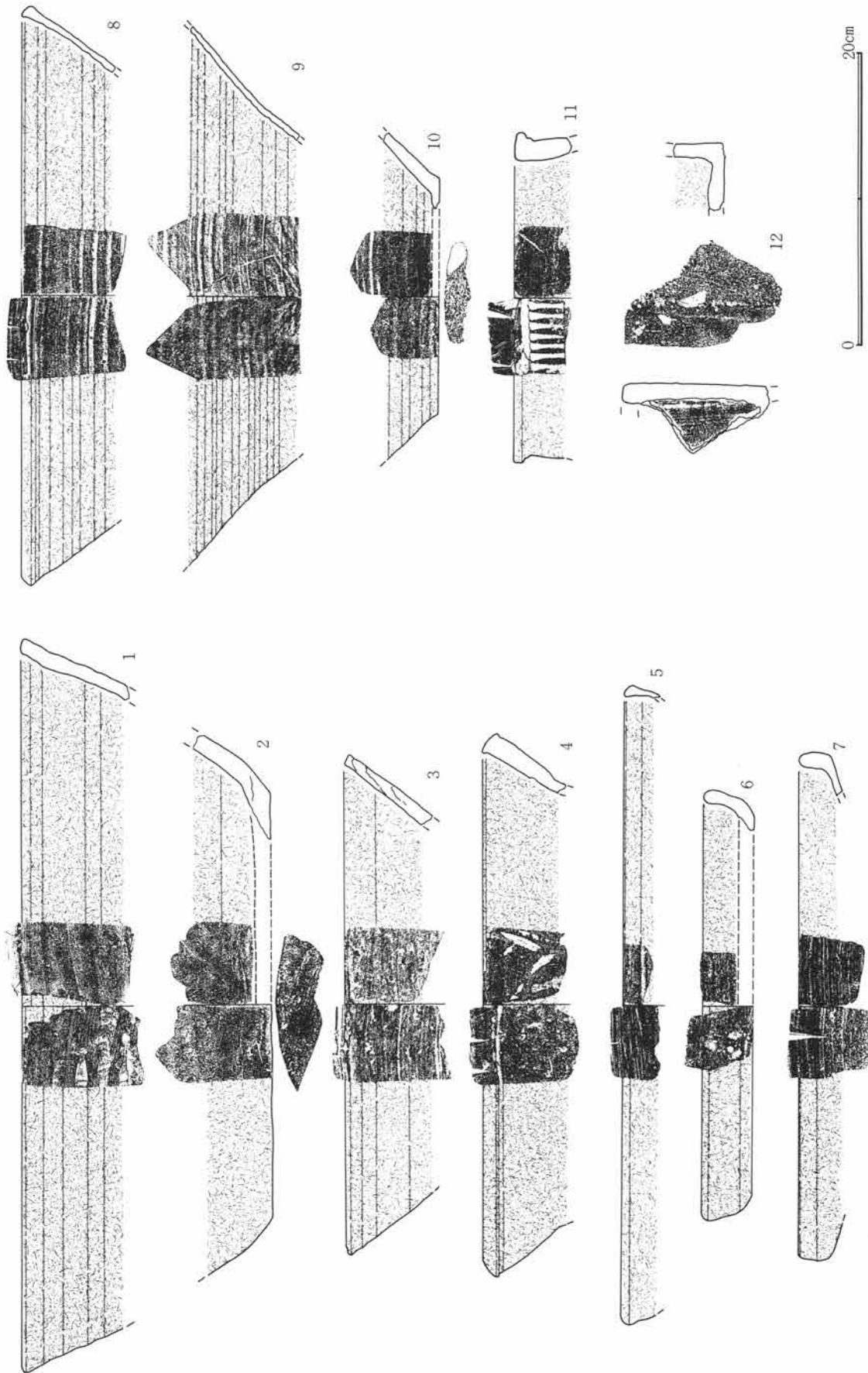
遺構外出土遺物

当該の遺物は、当該期の遺構から出土した遺物を図示したが、遺構の推定所産年代より遡るものについては遺構から除き当該の扱いとした。主としては、文化層・包含層中より出土したものである。この文化層中の扱いとしたものには、遺構確認面精査段階に出土したもので、遺構覆土から出土したものも含まれているが、その遺物を特定する方法がなかったものについては当該の扱いとしてある。包含層としては表土層も含んでの意味である。表土層撤去は、重機を使用したため、部分的に削平した文化層中の遺物含有しているものと考えられる。全体的にG区で出土したものが多く、生活の痕跡を具体的に示すものと考えられる。

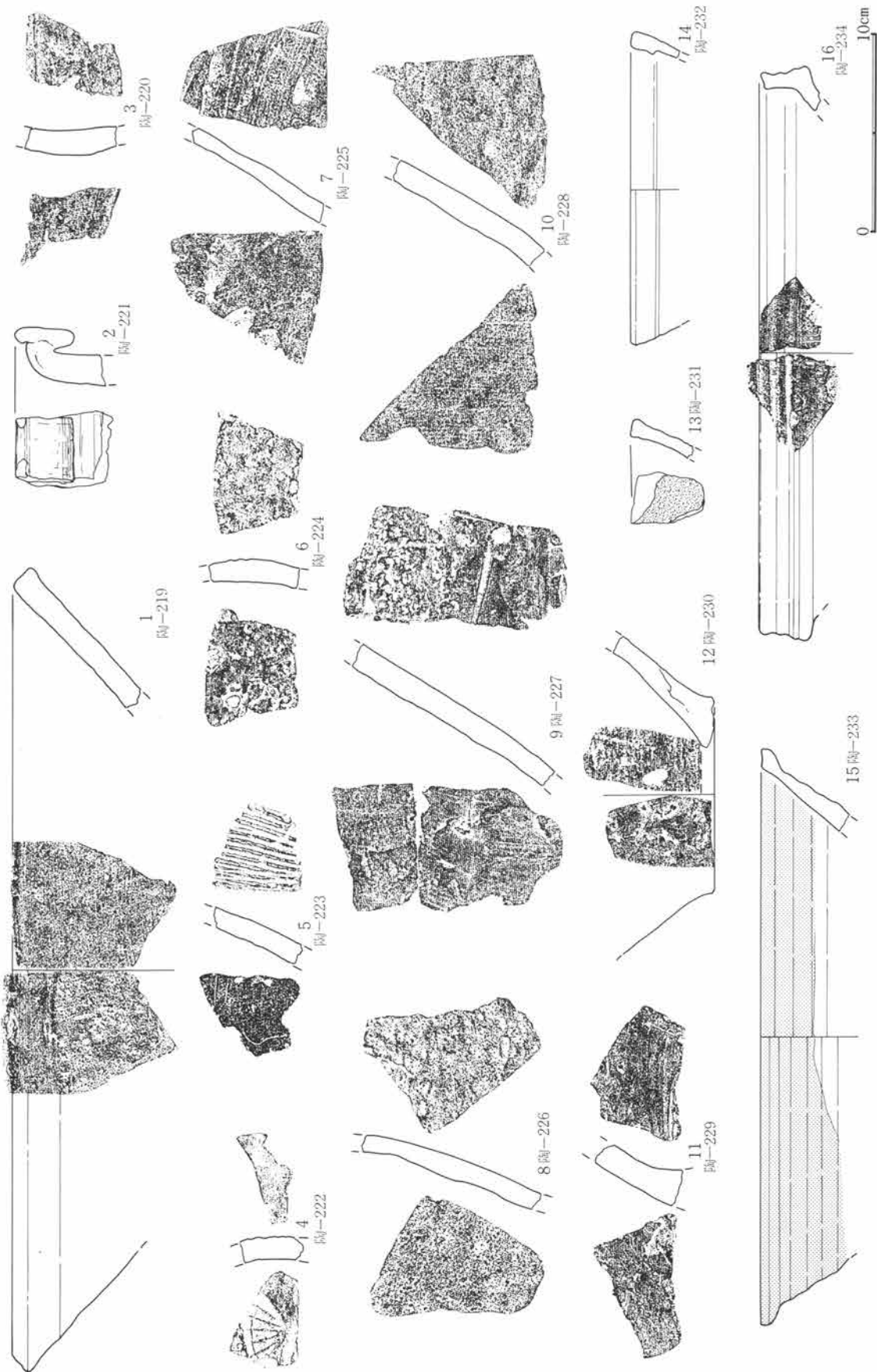
第3章 検出された遺構・遺物



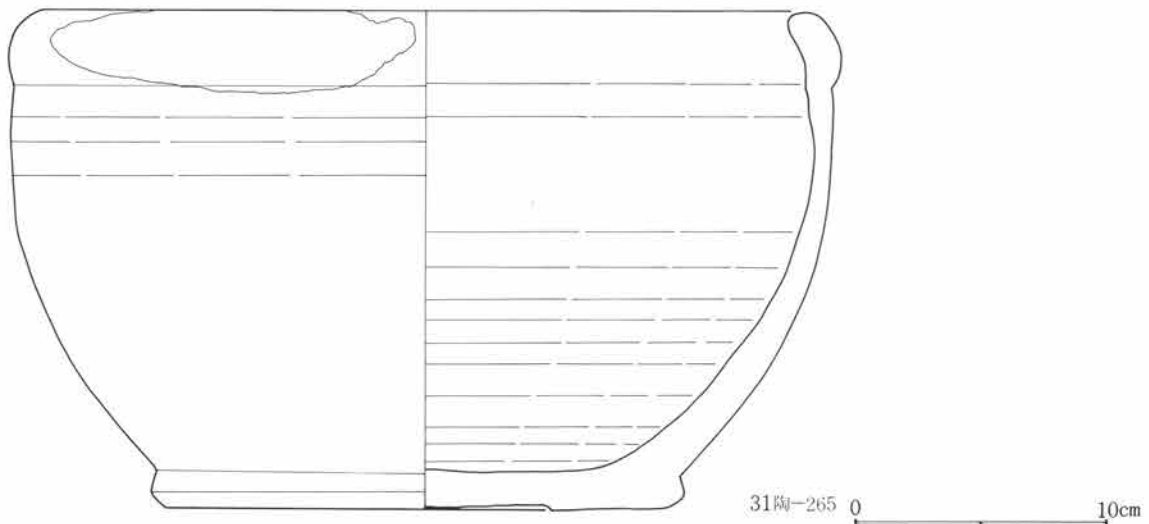
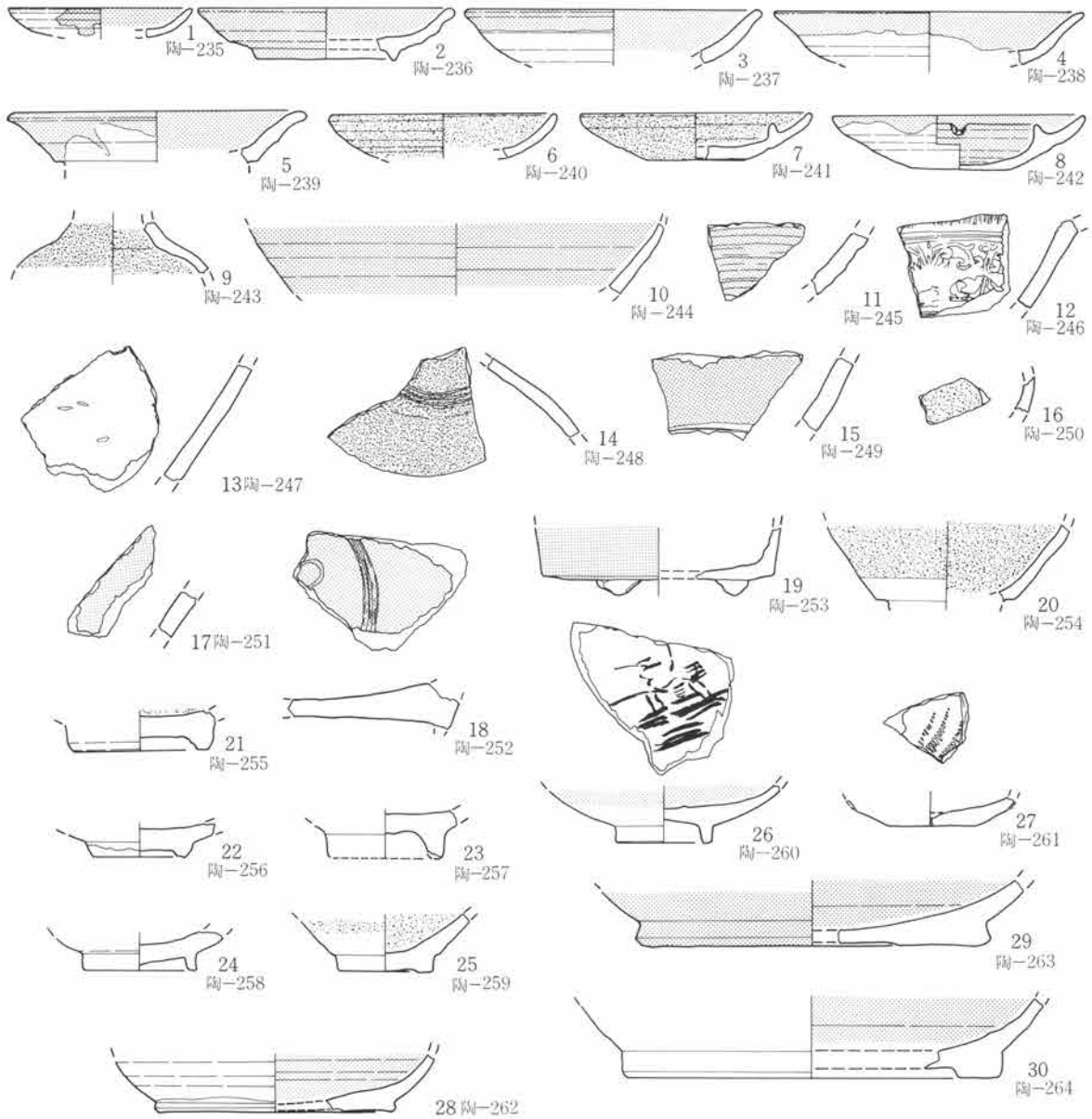
第737図 遺構外出土遺物実測図(1)



第738図 遺構外出土遺物実測図(2)

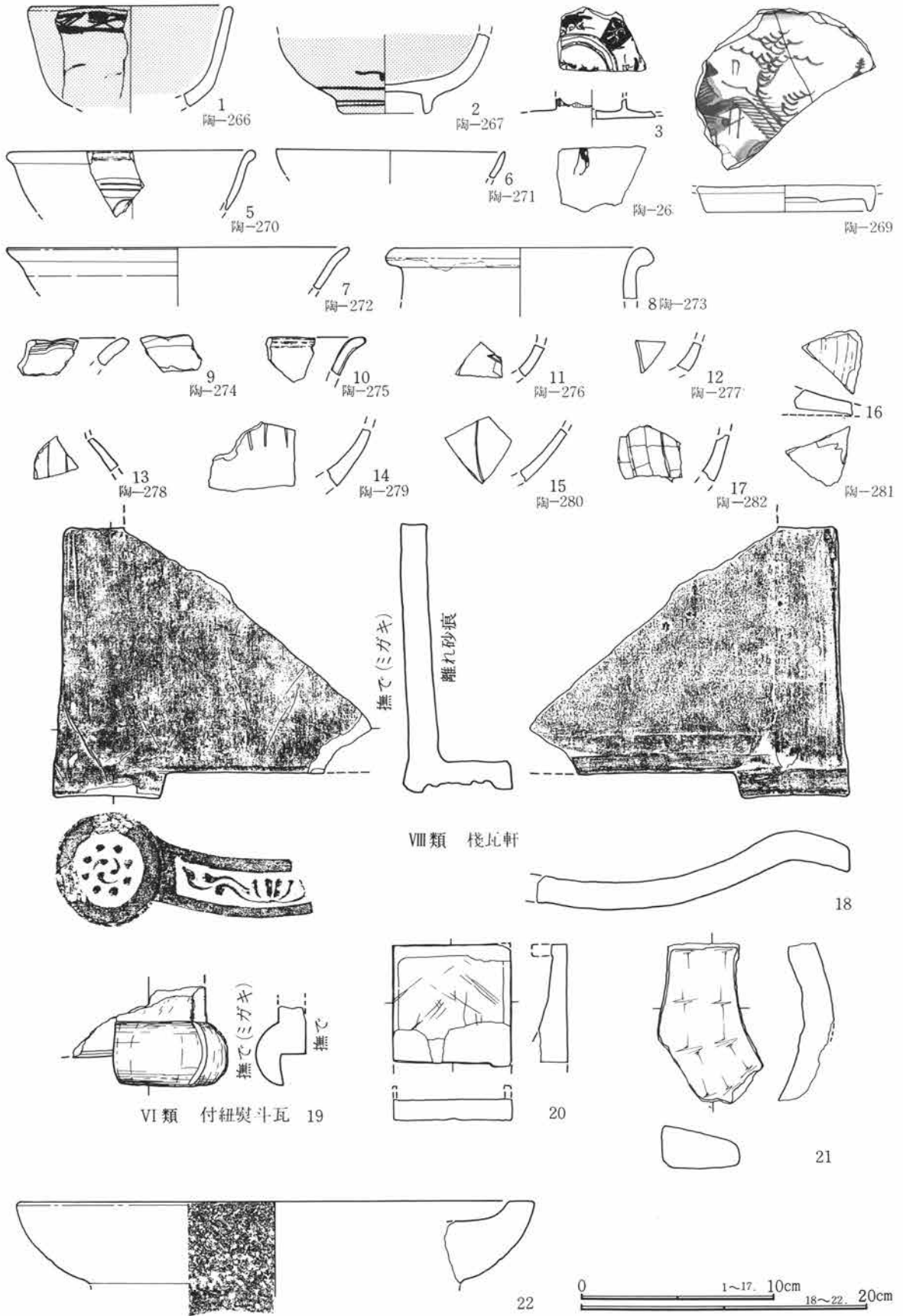


第739図 遺構外出土遺物実測図(3)

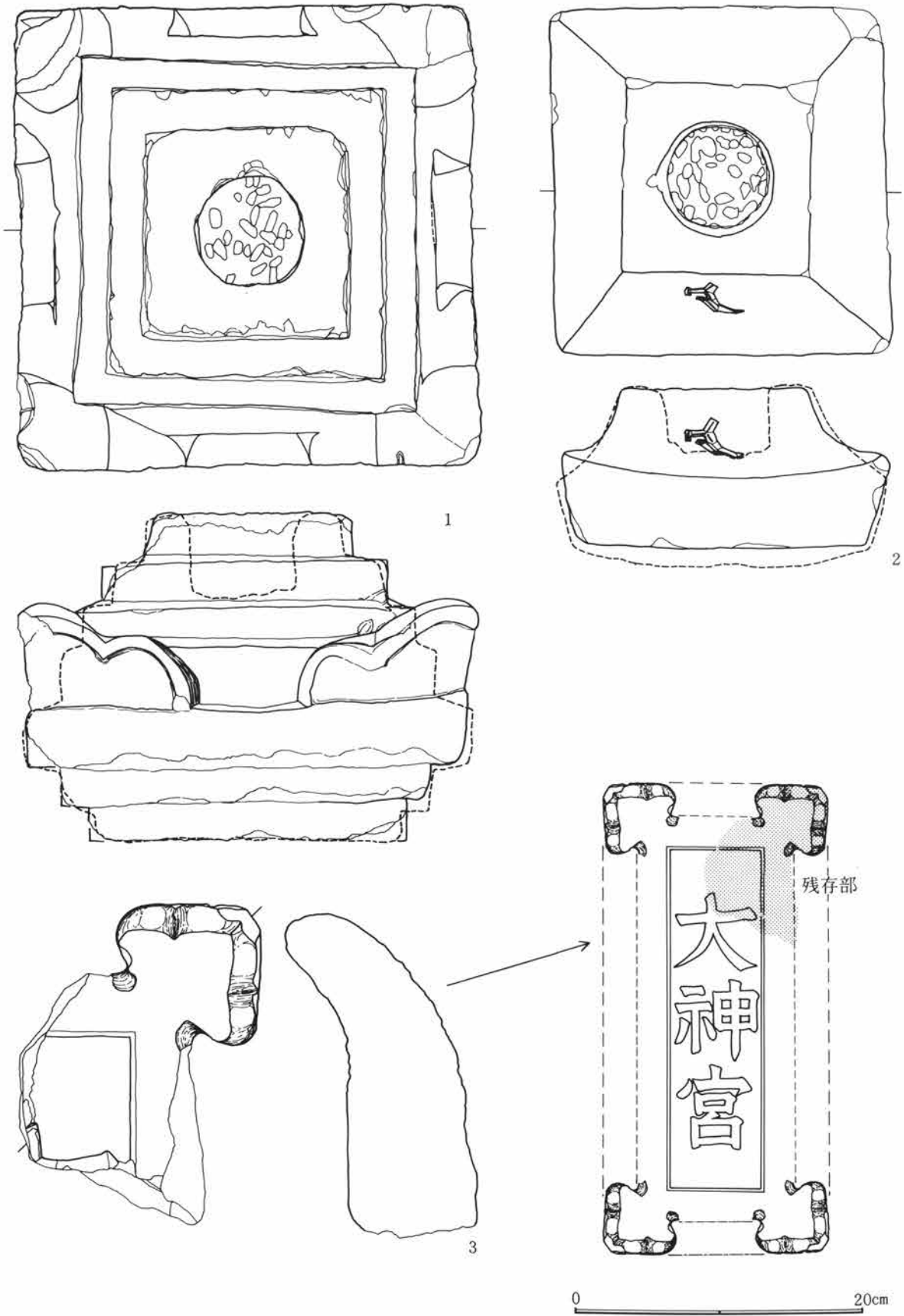


第740図 遺構外出土遺物実測図(4)

第3章 検出された遺構・遺物

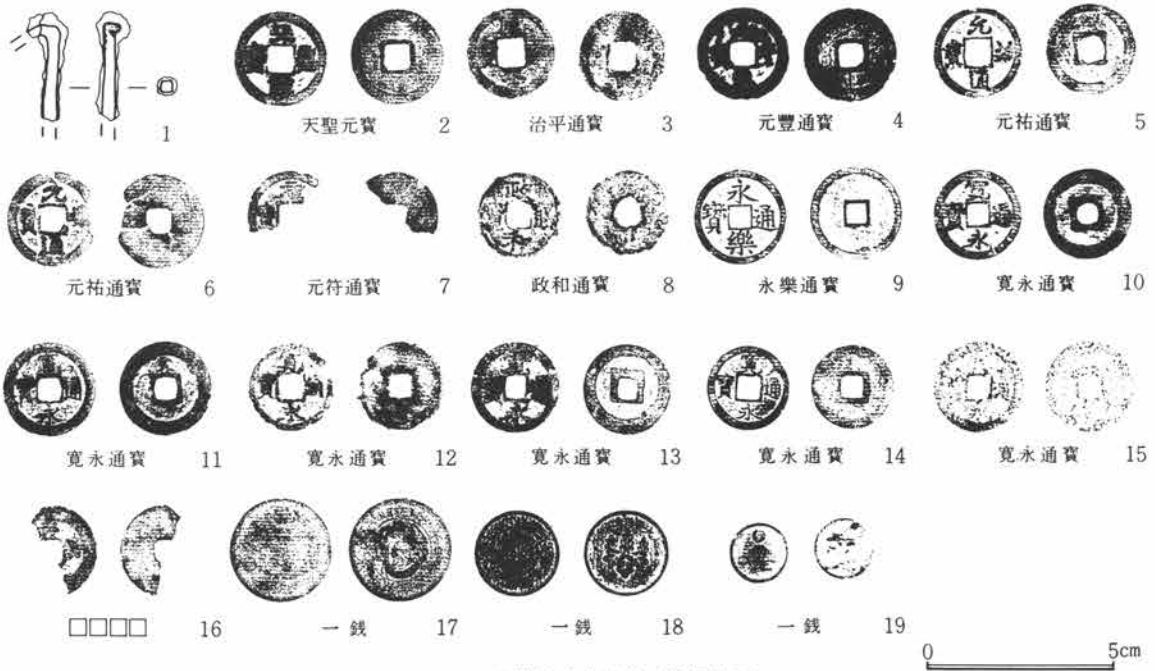


第741図 遺構外出土遺物実測図(5)

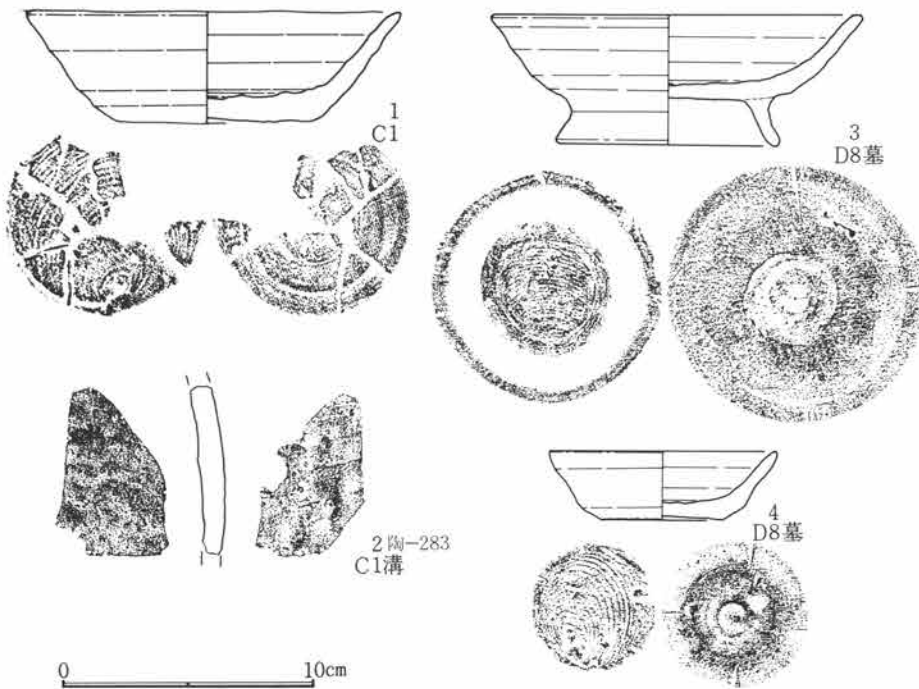


第742図 遺構外出土遺物実測図(6)

第3章 検出された遺構・遺物



第743図 遺構外出土遺物実測図(7)



第744図 南側調査区遺構外出土遺物実測図(1)

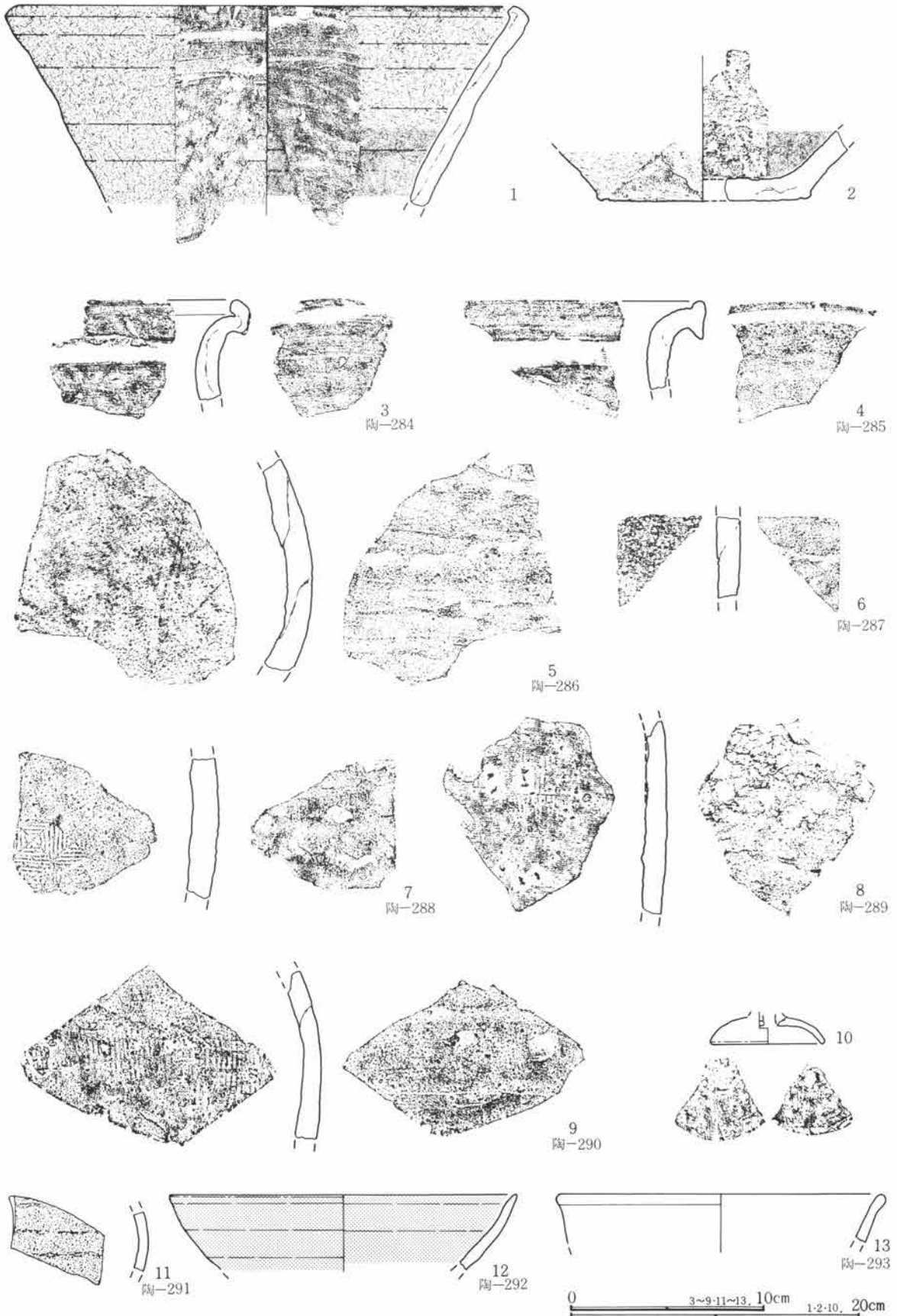
追補

前刊書中で所在不明であった遺物を図示するのと、前刊書での記述の訂正と南側調査の当該期の遺物の追加である。

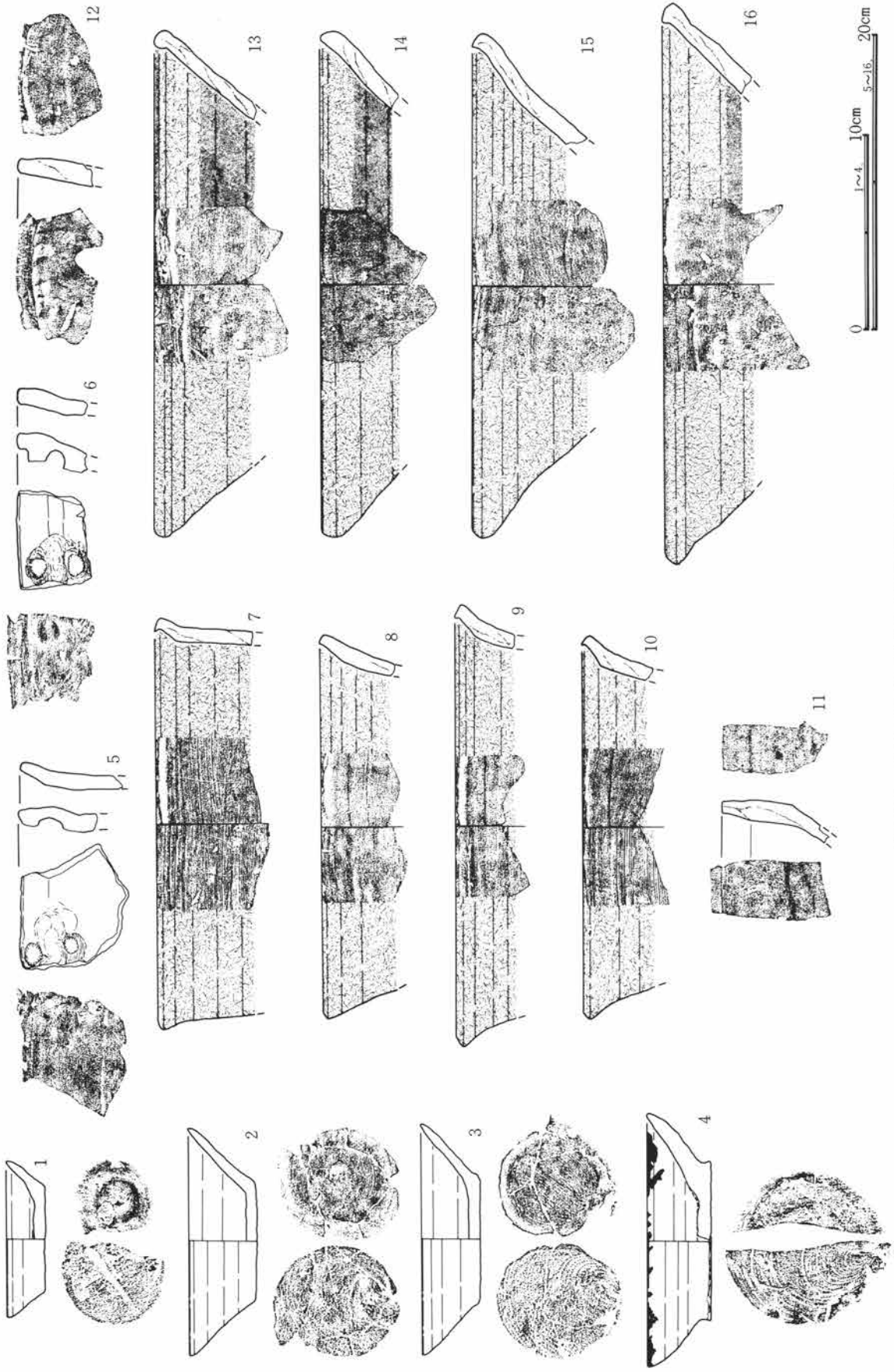
所在不明であった遺物と南側調査区での追加資料は、今年度段階で着手した、C・D区の奈良・平安時代の遺物整理実施途上で見いだされたものである。これらの中で追加資料

は、遺構・遺構外のものがあり、特にC1溝出土の焼締陶器の輸入品と考えられるものは、前刊書で示した個体と同一のものと考えられる。

訂正では、B1溝出土瓦で622頁以降で「瓦の有効面積……1000㎡、としたのは筆者の誤算で、数値としては「30㎡、ぐらいである。この1000㎡の数値を元に記述した部分は無意味になるものと思われるが、瓦葺き建物以外の存在と、鬼瓦の個体数・瓦胎土の点からも複数の存在も考慮され、昭和45年度の調査所見でも他の基壇の存在も示唆される。これらを含め今後改稿したい。また、「堤瓦」と記述したものは、衾瓦(伏間瓦)の誤記であった。併せて訂正しておきたい。筆者の浅学による不手際を御詫びしたい。



第745図 南側調査区遺構外出土遺物実測図(2)



第746図 南側調査区遺構外出土遺物実測図(3)

第4章 考察

第1節 古墳時代中期～奈良、平安時代の遺物

第1項 土器の分類と時期設定

- | | |
|----------------------|-----------|
| 1 はじめに | 4 各期の特徴 |
| 2 土器分類 | 5 年代観について |
| 3 期の設定(重複関係からの検証を含む) | 6 まとめ |

1 はじめに

本書の報告対照地区であるF・G・H(第11号溝南半)区では、古墳時代から平安時代の遺物が多量に検出されている。これらの遺物のうち、特に住居跡出土遺物を主体的に扱って、集落変遷を考えるための時期の設定を試みると共に、整理途中で気付いた点について記したい。

時期の設定については、土師器坏、甕及び須恵器坏、碗、羽釜の5器種について形態及び成整形技法からの分類を行なう。次に分類を各住居内出土遺物に還元し、住居内の共伴関係に置き替える。さらにこの住居内の組み合わせから画期を求め、期の設定に導きたい。ここで、各器種の分類にあたっては、形態変化の方向性を想定した作業仮説を伴っている。また、住居内出土土器の組み合わせを並べ替えるにあたっては、形態変化がとらえやすく、最も変化のピッチの早いと思われる土師器の甕を中心軸に据えて行った。

土器の名称については、基本的にロクロ非使用で酸化焰焼成のものを土師器とし、ロクロ使用、還元焰焼成(中間的焼成のものも含む)のものを須恵器として分類した。しかし、このいずれの概念にもあたらない土器があるのも事実である。つまり、ロクロ整形、酸化焰焼成の坏、碗であり、この中には足高高台付碗、皿と呼ばれる一群をも含む形で存在している。これらの土器は、赤く焼くことが意識されているものと考えられるが、焼成温度は比較的高いと思われ、構造窯を使用したものと考えられることから、より須恵器の概念に近い位置に置かれるものと考えられる。これらの土器は、従来ロクロ土師器や土師質土器として扱われたものと認識したのであるが、その発生等問題を含む部分と考えられることから後述したい。

器種名称については、基本的に高台を付したものを碗、付さないものを坏とし、口径に比して著しく器高の低いものを皿として区別したもので、文献等に準拠したものではなく、整理上の便宜的な呼称として使用した。

2 分類

各器種の分類にあたっては、先述のごとく土師器の坏・甕、須恵器の坏、碗及び羽釜の5器種について行った。これらは各段階において供膳形態と煮沸形態の主体を占めるものであり、住居内から普遍的に出土する可能性が高いことから、住居の所属時期判断に最も有効と考えたためである。また、分類は器形変化の方向性及び技法変化の方向性を意識した上での作業仮説である旨述べたが、器種内の系統関係等を完全に把握した上での作業でないため、異系統のものもいっしょに扱ってしまう可能性がある。しかし、このような事実は各住居内に分類を還元して、この共伴関係をみていく中で、検証されていくものと考えられる。したがってここではその誤りをおしたままではあるが、以下の分類に従って、以後の作業を進めたい。

土師器 坏

A 須恵器蓋坏の坏身模倣と考えられるものである。器形の特徴は、丸底で外稜を有し、口縁部が内傾することであり、器厚も厚い。整形は、口縁部横撫で、体部は全面篋削りを施す。口径は12~13cmで比較的小形である。

A I 須恵器蓋坏の蓋模倣と考えられるもので丸底で、外稜を有し、口縁部は外傾する。器厚は厚く、A IIに比して体部が深い。整形は、口縁部横撫で、体部篋削りである。口径は12~13cmに集中し、口径：器高は3：1に集中する。

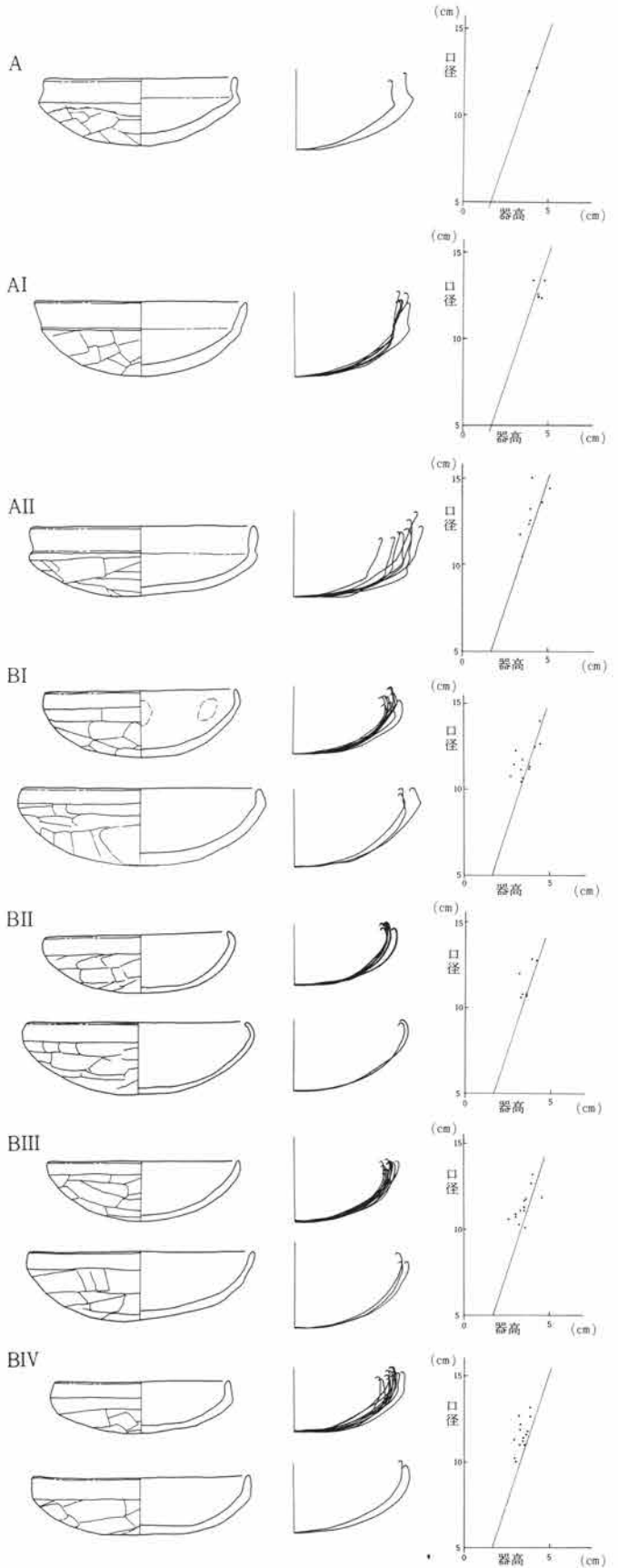
A II 須恵器蓋坏の蓋模倣と考えられるものでA Iとは、口縁部が直立すること及び、体部が扁平で浅い点が相違する。整形等は、A、A Iと共通する。

B I 丸底で、口縁部が「く」字状に内傾することを特徴とする。整形は、口縁部は横撫で、体部は周辺は円周方向、中央部は一方に篋削りを施している。同様の特徴を有するものには口径13cmを境にし2種に分けられ、同形態でさらに大形品があることから3種と考えられる。

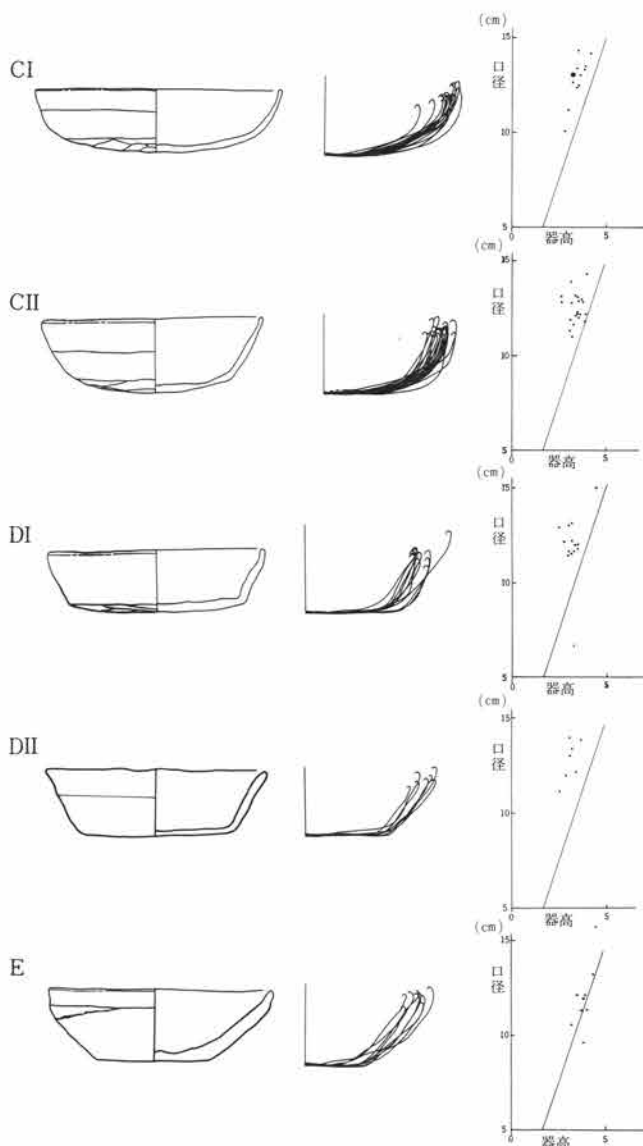
B II 丸底で、口縁部が「C」字状に強く内湾することを特徴としている。整形技法はB Iと共通で、口縁部横撫で、体部は篋削りを施している。また、出土例が少ないため明確にすることができないが、A I同様、大・中・小の3種に分けることができると考えられる。

B III 丸底で、口縁部はわずかに内湾傾向を有するものである。整形は口縁部横撫で、体部は全面篋削りである。口径10~12cmとそれ以上の2種に分離することができるが、B I・IIでみられたような大形品は検出されなかった。

B IV 丸底で器高は低く、口縁部は強く横撫でされることによって、直立する。体部は円周方向の篋削りである。B III同様口径10cm前後のもの、12cm以上の2種に分離することができるが、B I・IIでみられたような大形品は未検出である。



C I 丸底で口縁部は、わずかに内湾ぎみに外傾する。器高は3～4cmに集中し、口径は13cm付近に多い。整形技法で、口縁部横撫でと底部篋削りとの間に、削りの不明確な部分がみられB群とは明確に区別される。



C II C Iと共通する部分が多いが、口縁部は直線的に外傾し、篋削りの施される底部は、C Iに比して小形である。整形の順序は、篋削り→体部の指の押え→口縁部横撫でであり、これはD群にも共通するものである。

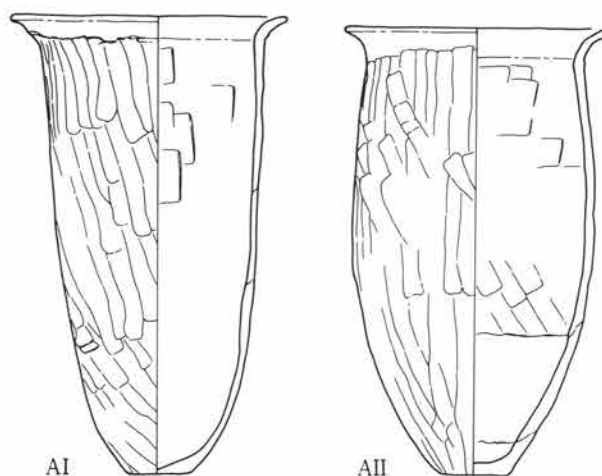
D I 底部は平底化傾向が顕著であるが、完全な平底ではない。口縁部は先端部でわずかに内湾することが特徴であり、全体としては直線的に外傾している。口径は12～13cm、器高は3cm程度に集中し、C群に比し小振りである。

D II 底部は完全な平底となり、口縁部は直線的に外傾する。この口縁部は外反するものと、やや内湾するものがあり、系統を異にする可能性もある。整形は、基本的にC群と共通であるが底部は一方の篋削りである。

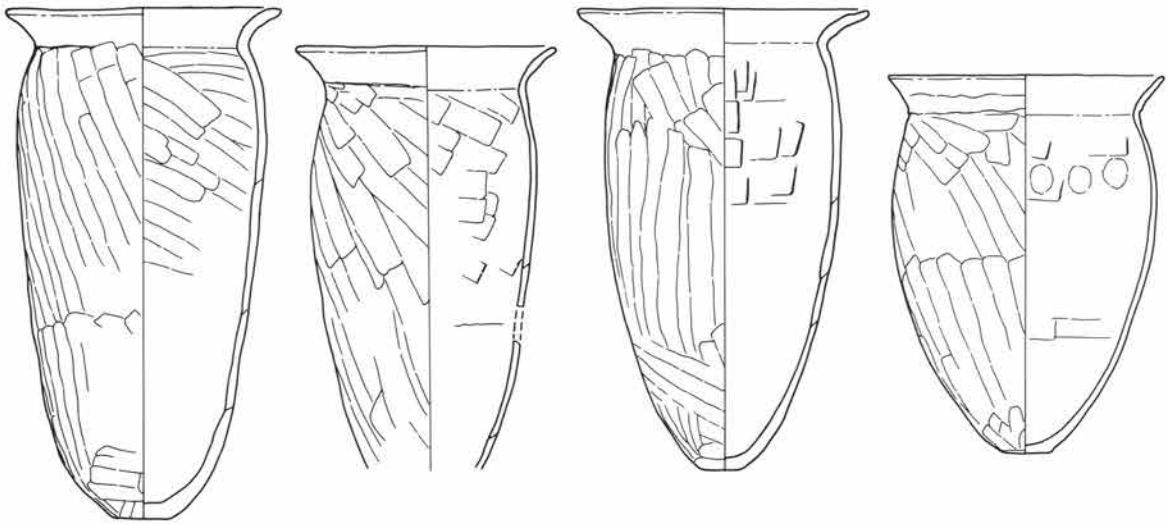
E 底部平底で、口縁部は強く外傾し先端部は強く横撫でされることにより直立する。体部の整形は曖昧で、輪積みの痕跡を明瞭に残すものが多いことを特徴としている。

土師器甕

A I 長胴の甕で、口縁部は水平方向に開き、最大径を口縁部に有するのが特徴である。整形は、胴部外面縦方向篋削り、内面は横方向の撫でであり、上半に「コ」字状の痕跡を明瞭に残している。口縁部は横撫でを施す。整形順序は、口縁部横撫で→胴部篋削りである。



A II 長胴の甕で、口縁部は強く外反する。胴部最大径はほぼ中位に位置し、口径と大差ない。整形は、口縁部横撫で、胴部外面縦方向篋削り内面は、下半斜位、上半横方向の撫でを施している。整形順序はA Iと共通であり、口縁部横撫で→胴部篋削りである。



A III

A IV

B I

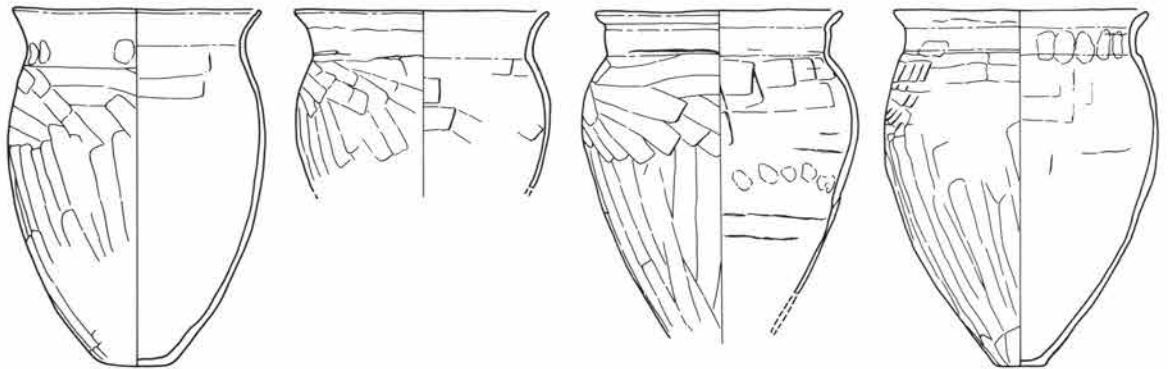
B II

A III 長胴の甕で口縁部は外反する。胴部最大径は上位に位置し、底部近くにも張りがある。最大径は口縁部である。整形は胴部外面上半斜方向、下半縦方向の筥削り、内面横方向の撫でを施す。

A IV 長胴の甕で、口縁部の外反及び胴部上半の張りはA IIIに比してゆるやかである。整形は、胴部外面斜方向の筥削り、内面は横及び斜方向の撫でを施す。口縁部は横撫でである。

B I 長胴の甕であるがA IVに比し、やや短胴化傾向が看取される。口縁部は強く外反し、胴部の張りはゆるやかで底部は小形である。整形は胴部外面縦方向筥削り、内面横方向の撫でを施す。

B II 口縁部は「く」字状に鋭く外反し、胴部上半に最大径を有する。B Iに比して短胴化は著しく、形態変化に1段階の欠落が感じられる。整形は胴部外面斜方向の筥削り、内面横方向の撫でである。



B III

C I

C II

C III

B III 胴部形態はB IIに近似するが、口縁部の外反は弱く指頭痕状の調整痕を残す。整形は、胴部上半横～斜方向、下半縦方向の筥削りで、B IIとの違いが顕著である。内面は横方向の撫でを施す。

C I 胴部上半の張りは強く、最大径もこの位置となる。口縁部の外反はB IIIよりさらに弱く、上半にわずかな屈曲部がみられ、「コ」字状口縁の萌芽とみられるような形状を呈する。整形はB IIIと同様である。

C II 典型的な「コ」字状口縁を有するもので、屈曲は極めて強い。この屈曲は口縁部と胴部との境界及び口縁部上半を強く横撫ですることによって成形されており、中間に撫での施されない部分がみられる。最大径は上半に位置し、張りは強く直線的に底部に至る。整形は胴上半部の横方向筥削りが顕著である。

C III 「コ」字状口縁を有するものであるが、C IIに比して口縁部の器厚はやや厚く、屈曲に鋭さがみられない。また、胴部上半部の張りも弱い。整形は胴部外面、内面共にC IIと共通である。

CIV 「コ」字状口縁の痕跡を止めるもので、口縁部の器厚が厚い。口唇部は外傾し弱い沈線状になるものが多い。整形はCIIIと共通。

D 口縁部は弱く外反し、「コ」字状の痕跡は止めない。口唇部は外傾し沈線状になる。胴部上半の張りはCIVに比してやや強い。

須恵器杯

A 蓋杯の杯身で、口縁部は強く内傾する。底部は丸底で回転篋削りを施す。

B 丸底で口縁部がやや内湾ぎみに直立する。D群に比して小形で、底部は手持ちの不定方向の篋削りを施す。

C 口径に比し器高が高いもので、底部は手持ちの篋削りを施す。

DI 口径：底径は5：3程度で、口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。底部は、回転篋切り後の回転篋調整を施す。

DI' 口径：底径は2：1に近く、DIに比して器高が低く、口径が大きい。底部は回転篋切り後回転篋調整を施すものと思われる。

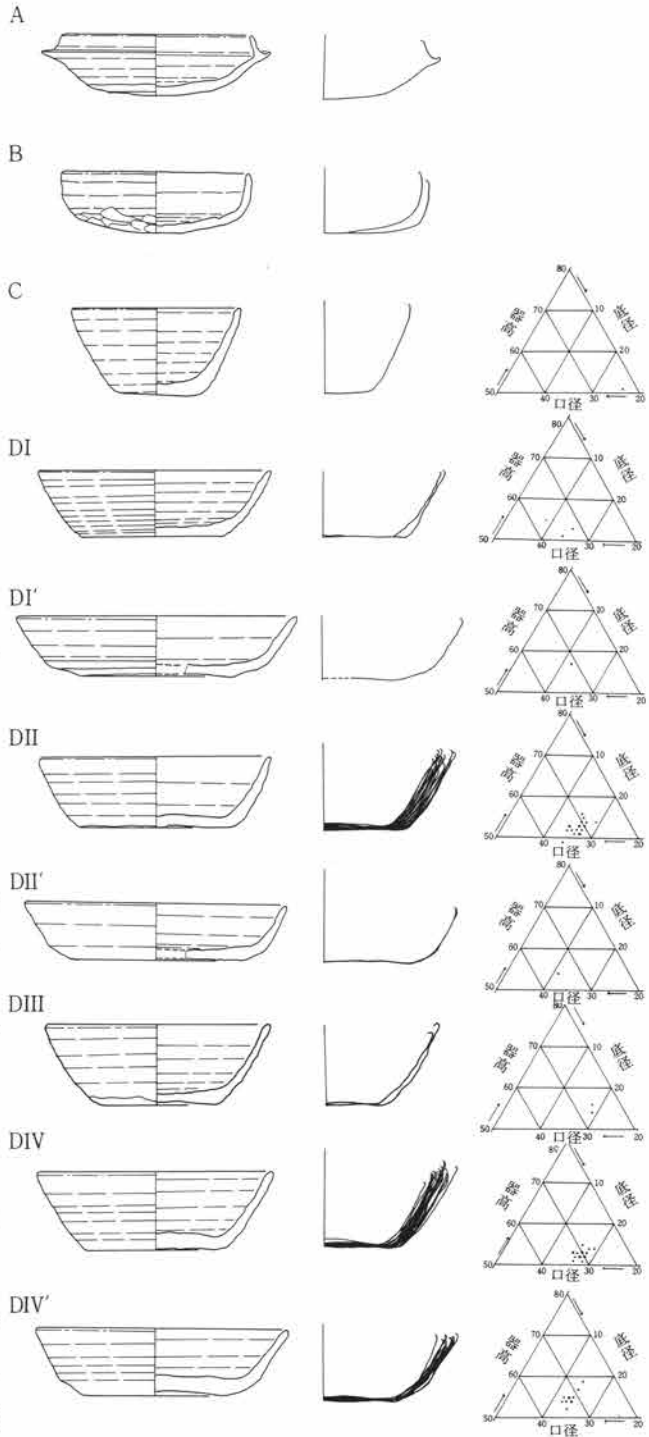
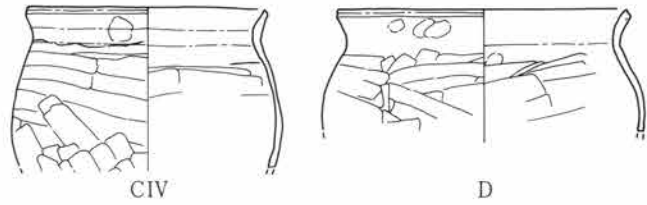
DII 口径：底径は5：3で、形態的にDIに近い。底部は、回転篋切り後未調整である。口径は12～14cm内に集中する。

DII' 底部切り離し技法及び、調整はDIIと共通であるが、DIIに比して器高の低いものである。口径は14cm程度、器高3cm程度である。

DIII 口径：底径は2：1に近く、口径はわずかに内湾ぎみに立ち上がる。底部は回転糸切り後、周辺部のみ回転篋調整を施している。例は内黒のものを含め2例だけある。

DIV 口径：底径は5：3で、器高比も含めてDIIと共通の形態であるが、底部は回転糸切り後未調整である点が顕著な違いである。口径は11～13cmに集中し、底径は6～8cmに集中する。

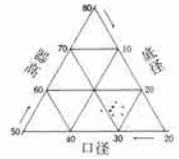
DIV' 底部は回転糸切り後未調整でDIVと共通であるが、DIVに比して器高の低いもので3～4cmに集中し、口径は13cm付近に集中する。



第4章 考 察

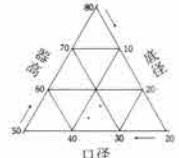
D V DII・IIIに比して全体に占める底径の割合がやや小さく、口縁部がわずかに外反するものである。底部は回転糸切り後未調整でDIVと共通する。

DV



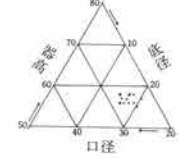
D V' 口縁部は外反しDVに近い形態であるがDVに比して器高の低いものである。口径：底径等は、DII'・IV'と近い値である。底部は回転糸切り後未調整である。

DV'



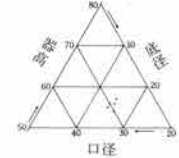
E I 口縁部は直線的に外反するもので、口径：底径は2：1で、DII・IV等に比して底径の占める割合が小さい。底部は回転糸切り後未調整で、口径は12～15cmである。

EI



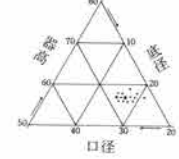
E I' 口縁部の外反傾向はE Iに共通であるがE Iに比して器高の低いものである。底部は回転糸切り後未調整で、口径は13～14cm、底径は7～8cmである。

EI'



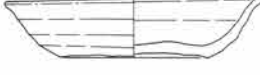
E II E Iに比し腰の張りが強く口縁部は強く外反する。底部は回転糸切り後未調整で、口径：底径は2：1でありE Iに近い形態である。口径は11～14cm、器高は3～4cmに集中する。

EII



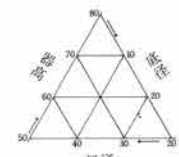
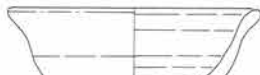
E II' 腰の張り及び口縁部の外反程度等E IIに近いものであるがE IIに比して器高の低いものである。口径は14cmに集中し、底径は7～9cm、器高は3～4cmである。

EII'



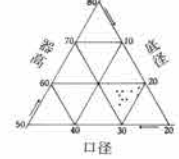
E II'' E IIに顕著に看取された腰の張りの位置が、体部中位であり、口縁部は強く外反する。また、E IIに比して底径の占める割合がわずかに大きい。口径は14cm程度である。

EII''



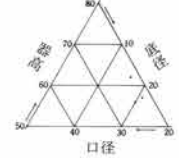
E III E IIに看取された腰の張りはみられず、底部付近から強く外反し口縁部に至るものである。口径は12～14cm、底径は5～7cmに集中している。

EIII



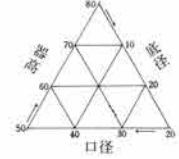
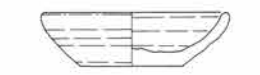
F 口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口径は11～12cmとE群に比し小形である。形態上もE群からの変化は大である。

F



F' 形態的特徴はFと共通する点が多いが、口径が9～10cm、器高が3cmと、Fよりもさらに小形である。

F'

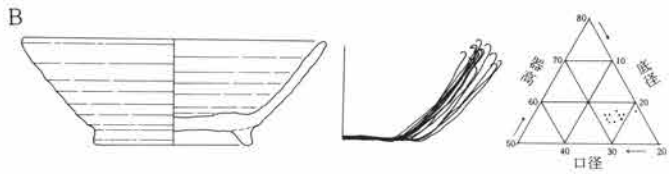


須恵器碗

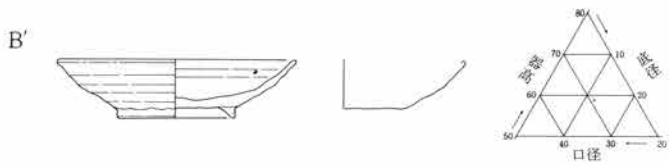
A 底部から直線的に口縁部に立ち上がるもので、口径：底径は5：3と坏D I・IIに近い値である。底部は回転筥調整後の付け高台である。高台は角高台に近い。



B 口径・底径・器高の3分比は、坏E I・IIに近い値であるが、口縁部の外反がみられない。口径14～16cm、底径5～8cmであり、坏E群よりもやや大きめである。



B' 口縁部はやや内湾しBに近いが、Bに比して器高の低いものである。例が1例のみであったため、実態を明らかににはできない。底部は回転糸切り後の付高台である。



C I 器形は、腰が張り口縁部がやや外反し坏E Iに近似している。口径は13～15cm、底径は5～8cmに集中し、坏E Iよりもわずかに大形である。高台は付高台である。



C II 器形は、C Iに比して腰の張りはやや弱く、口縁部の外反は強く先端が水平に近いものもある。口径は12～15cm、底径は5～8cmの間に集中し、規格性が強くない。



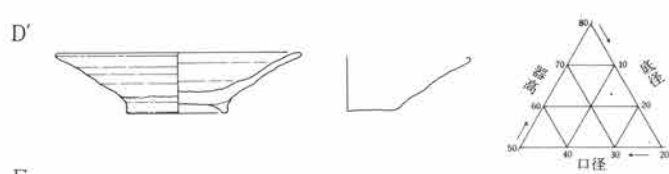
C II' 腰がやや張り口縁部が外反する傾向はC IIと共通であるが、C IIに比して器高が低く高台付皿との中間に位置するものである。口径・底径共C IIの範囲内である。



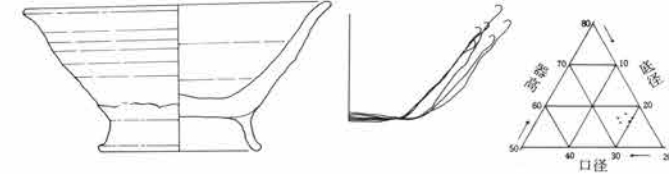
D 底部から腰に張りを有さず、口縁部まで外反するもので、坏E IIIの特徴と共通する。口径は12～14cm、底径4～7cmで、ほぼ坏E IIIに近い値である。

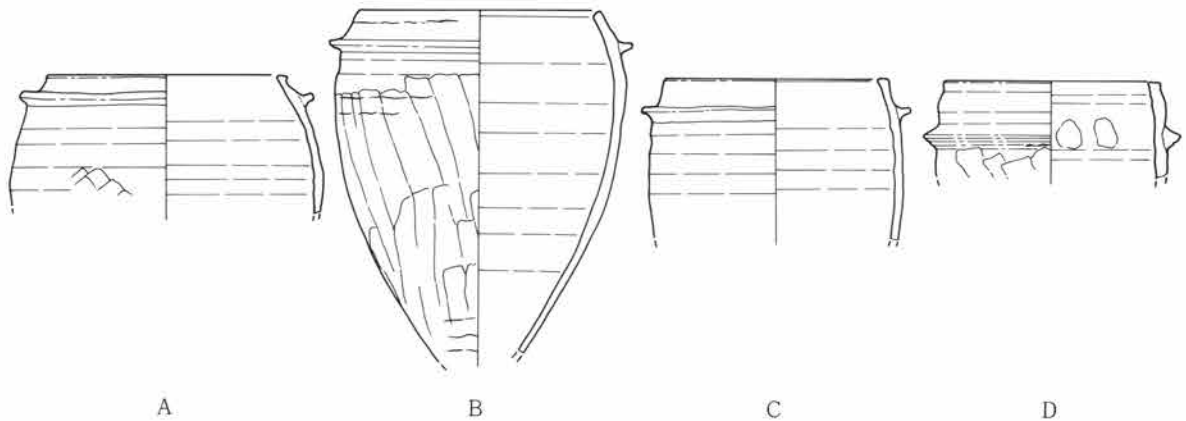


D' 底部から口縁部への外反形態はDに共通するが、Dに比して器高の低いものである。出土例が少なく全体傾向をつかむことはできないが、高台付皿との中間に位置する。



E 足高高台を特徴とするものである。腰に張りはあまりみられず、口縁部が外反する。高台は「ハ」字状に反るのが特徴で、接地部には沈線状の凹みを有している。口径14～17cmが多く、他に比して大形である。





羽 釜

- A 最大径を胴部上半に有し、鏝部はやや上方を向き、口縁部が強く内傾することを特徴とするものである。口唇部は平坦で水平となるものが多い。胴部は輪積み後のロクロ調整痕を明瞭に残している。
- B A同様胴部最大径は上半であるが、最大径は鏝部に有するもので、口縁部は内傾するがAほど強くない。また、鏝は上方から水平方向であり、胴部上半から縦方向の篋削りを施すものもみられる。
- C 胴部上半の張りは弱く、口縁部はほぼ直立することを特徴とする。鏝は上方から水平方向であり、角度的にはAとBの中間に位置する。口唇部は平坦で水平である。
- D 胴部の張りはCに比してさらに弱く、口縁部は他に比して長く、直立する。鏝は断面三角形形状で、貼付けは比較的雑である。鏝部直下から縦方向に篋削りするものもみられる。

3 期の設定

以上5器種について分類を行ったものであるが、それらを各住居出土土器に還元し位置付け後、土師器甕を基軸として並べ替えを行ったものが、第1表である。つまり、土師器甕の形態変化が時間的な変化であろうとの仮定のもとにA I→Dとなるように並べたものであるが、全く別に仮定し分類した土師器坏及び、須恵器坏も大きくとらえた場合、A→Eへ、A→Fへという流れが認められる。このことから、ほぼ時間的推移に沿って並んでいることが予想される。羽釜は形態変化を完全に促えることができず、A～Cの共伴及び、B～Dの共伴が認められるが、AとDとの共伴がみられないことから、概ねA→Dへの推移が考えられる。須恵器坏は、全く傾向がとらえられず、分類の方法を誤ったものであろうか。以上のことから土師器甕の変化に画期を求め、土師器甕が共伴せず羽釜と共伴するもの2期及び、全く時期の異なるもの1期を加え10期を想定し、I～Xの記号で表現した。

以上のものを住居の重複関係から検証を試みたが、重複する住居は多いものの、層位的に新旧関係をとらえることができたものは少なく、さらに所属時期の特定できたものは極めて少数例である。以下に記すと、G区13住→29住、51住→48住、57住→56住、58住→60住、61・79住→134・136住、77住→78住、H区28住→22住、86住→81住の8例である。これを期に置き換えると、IV期→VI期、VIII→IX期、V期→VI期、VII期→VIII期、III・VII期→IX期、VII期→VII期、IX期→IX期、II期→II期という関係が成り立つ。全期についての前後関係を検証することはできないが、流れとしてはほぼ矛盾をきたすことはない。このことから少なくともIII期→IX期への時間的推移は検証されるものと思われる。また、II期、VII期、IX期の各期内での重複例は、さらに細分される可能性を示唆するものであり、事実土師器甕の微妙な変化及び、他の要素によって2分されるものがある。各期の中でスクリントーンによる分割はこの細分を想定したものである。

第4章 考 察

4 各期の特徴

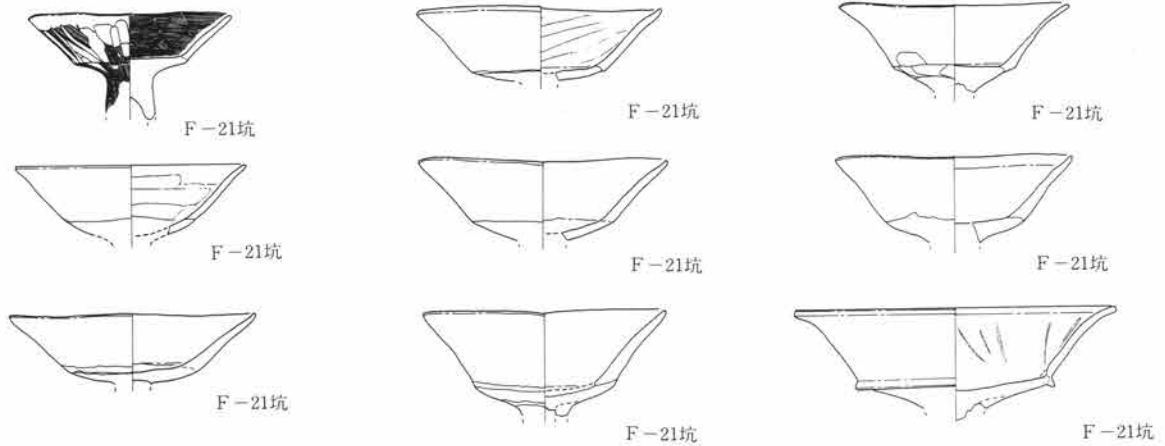
各期ごとに図示したものは、それぞれの期を最も特徴づけるとされる住居内出土の一括資料を基本としているが、器種が欠落していると考えられる場合については、他の同時期と思われる住居のものを加えて構成している。

I 期 (第747図)

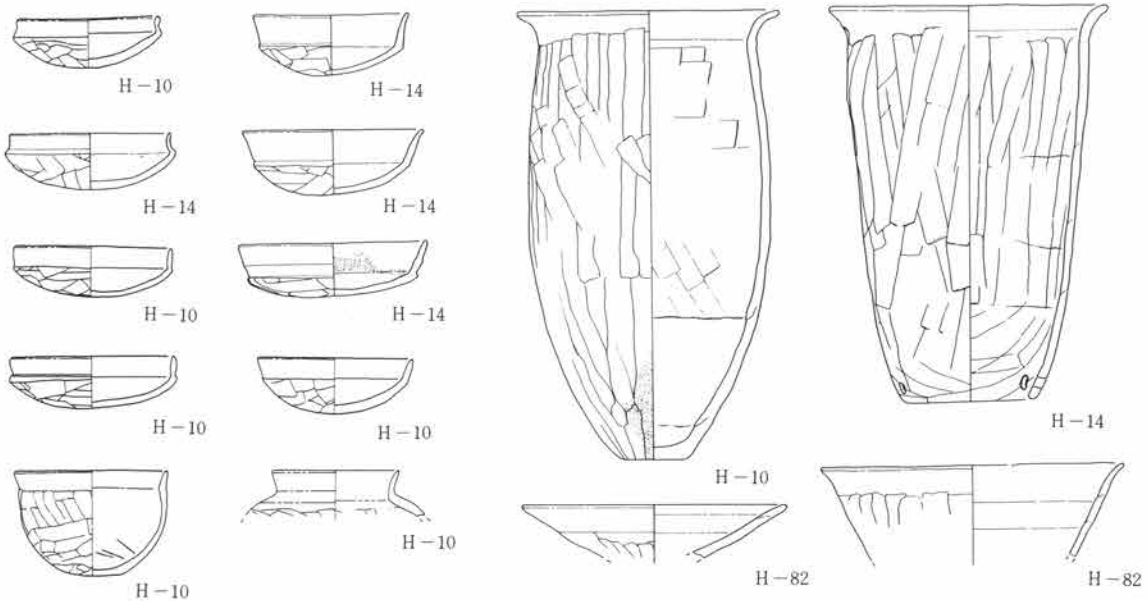
当期に属するのは、F区21号土坑だけで、当遺跡他区においても同時期の住居は未検出である。有段の坏部を有する高坏だけの出土で、全体の構成は不明であるが、下東西S J 11・12等に近いものと考えられる。

II 期 (第748図)

H区10・14・82住に代表される。土師器坏は、A・A I・A II、土師器甕はA II・A IIIで構成されるものである。土師器の他器種では、口縁部の直立する小形壺、小形の甕、坏部下半に縦方向篋削りを有する高坏、口径部横撫で、体部は縦方向篋削りを有する鉢、口縁部のみ外反する深鉢形の甕等で構成されている。須恵器は明確な共伴例はみい出し得ないが、甕及び、蓋坏の蓋の破片が出土しているものがある。当期を最も特徴づけているのは、土師器坏の構成要素が、須恵器蓋坏の蓋及び坏身模倣のものだけであることであろう。

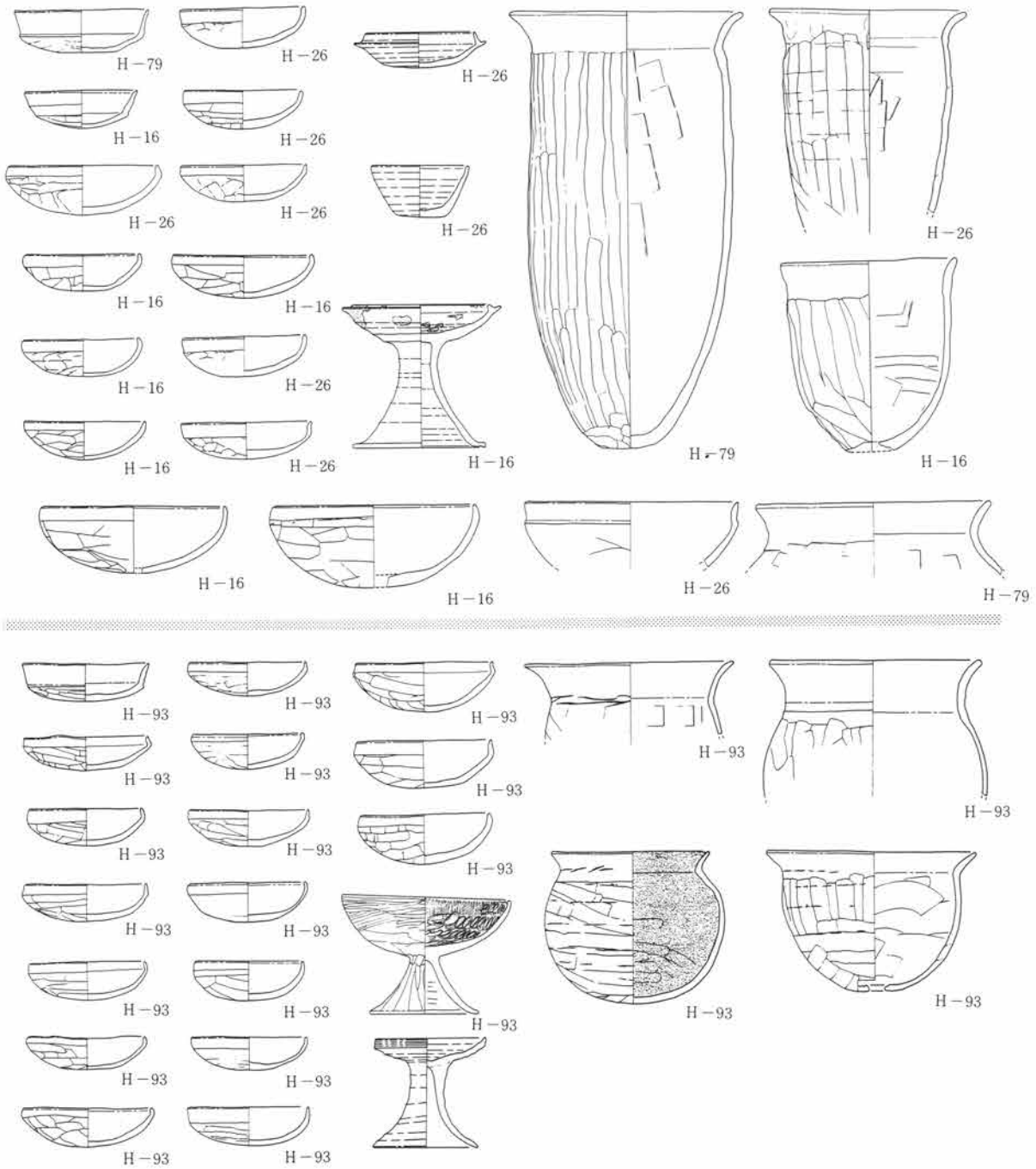


第747図 I 期



第748図 II 期

第1節 古墳時代中期～奈良、平安時代の遺物

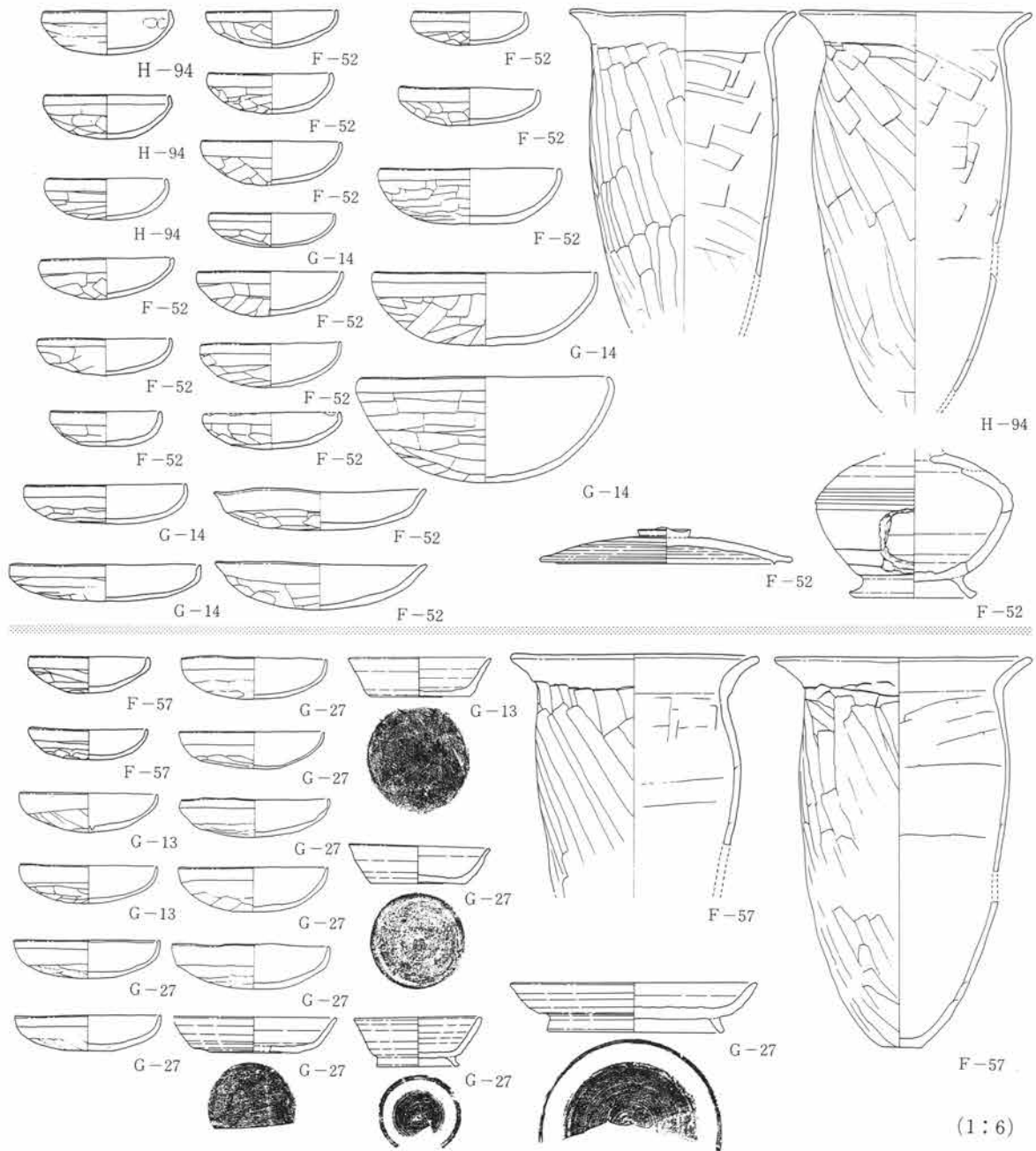


第749図 III期

III 期 (第749図)

当期は、H区16・29・79・93住に代表される。土師器坏はAII・BI・BII・BIII・BIVで、土師器甕はAI・AII・AIIIで、須恵器坏A・Cで構成されている。つまり、I期で土師器坏においてA群が主体であったものが、B群が主でA群が従の関係となっていることが最も大きな違いである。また、A群では大小があまり明確でなかったものが、B群特にBI・BIIにおいて大・小の分化が顕著で、同形態で大形の鉢を加え大・中・小の3種がセットされるものと思われる。土師器の他器種では、暗文を有する高坏、小形の甕、小形の甗等がみられる。須恵器の他器種は、坏Aに近似する坏部を有する高坏及び、受けのない高坏がみられる。構成器種の大半は土師器で占められ、須恵器は数器種に限られている。

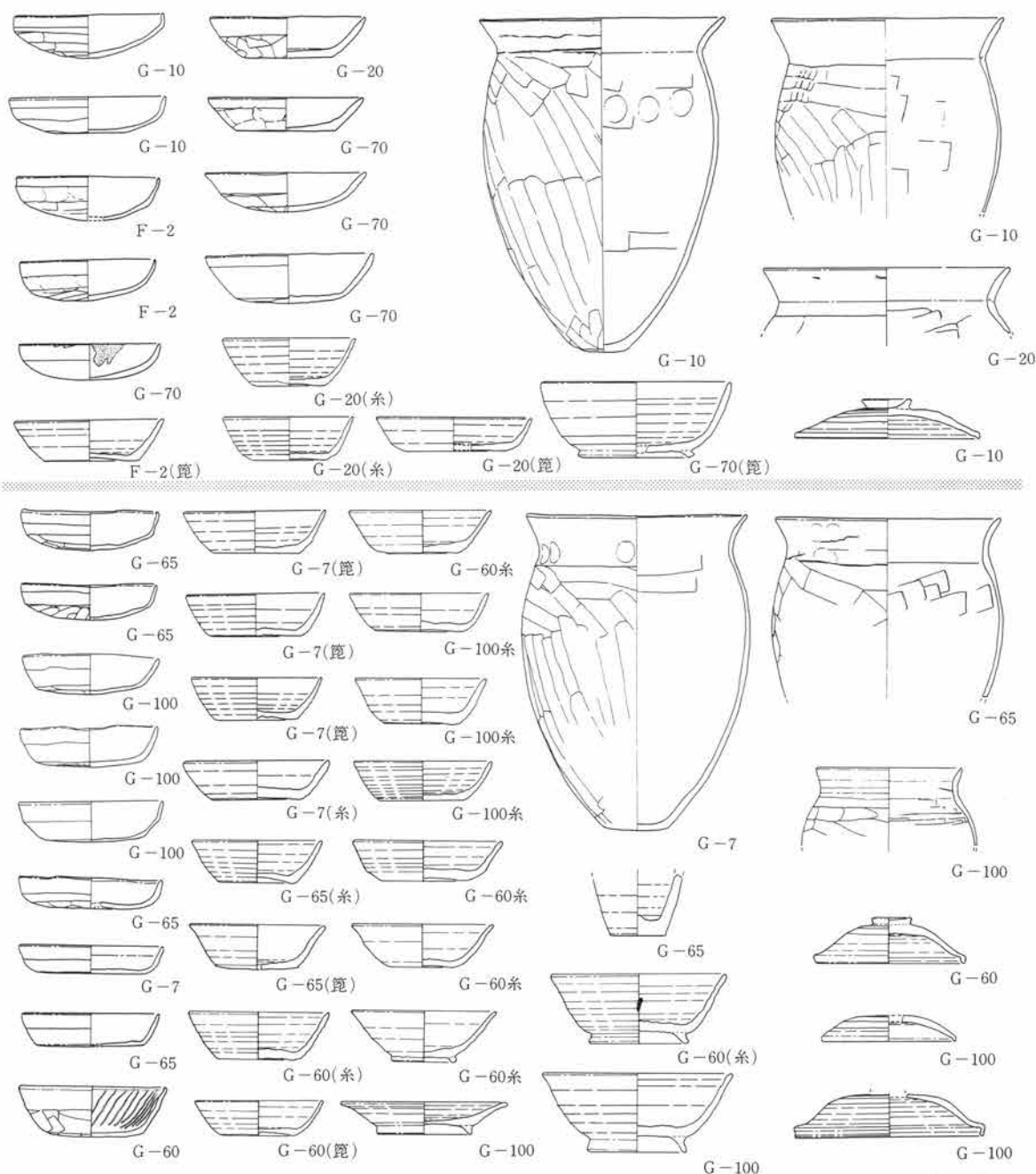
第4章 考 察



第750図 IV期

IV 期 (第750図)

当期は、F区52・57住、G区13・14住・27址、H区94住に代表される。土師器坏は、B I・B II・B IV・C Iがみられ、甕はA I・A IV・B Iがみられる。須恵器坏は、D I・D I'・D IIで、碗はAが構成要素に加わっている。土師器他器種では、坏B IIを大形にした鉢及び、大形の皿がみられる。須恵器では、かえりを有する蓋、大形の台付皿等がみられる。当期では、土師器においてIII期から器種構成を継続する前半と、坏C I及び甕B Iの加わる後半に2分することが可能である。特に前半の特徴は大形皿等の器種がセットされていること及び、須恵器の占める割合が極めて少ないことである。後半は、供膳形態に須恵器の占める割合が増加することであり、先述のごとく土師器坏C I及び甕B Iという新しい要素を具備したものが加わることである。



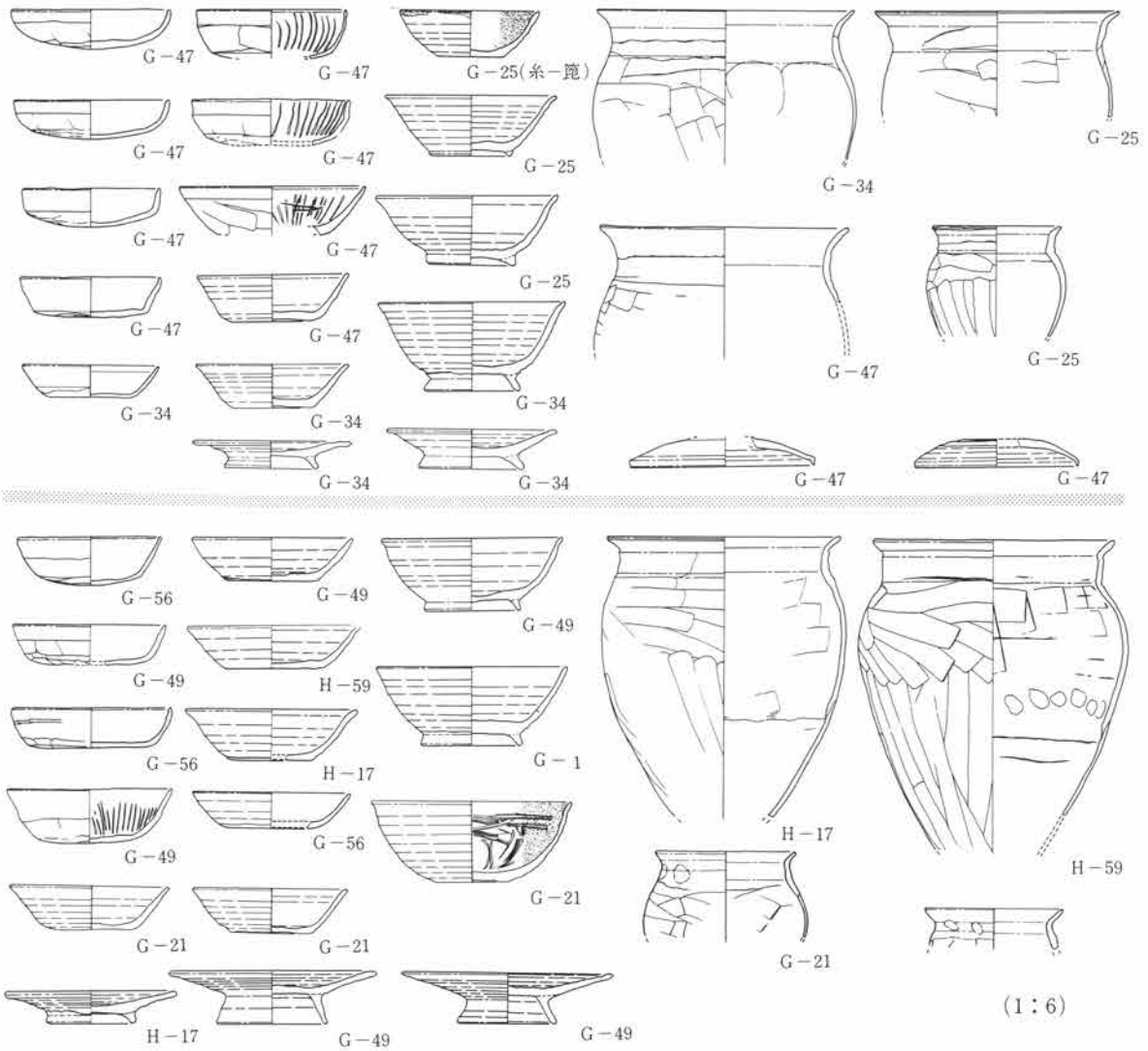
第751図 V期

(1:6)

V 期 (第751図)

当期は、F区2住、G区7・10・20・60・65・70・100住に代表される。土師器坏は、C I・C II・D I・D IIで、甕は、B II・B IIIで構成され、須恵器坏は、D II・D II'・D IV・D IV'、碗はC Iがみられる。土師器の他器種では、若干異形態で内面に暗文を有する坏が出現する。須恵器の他器種では、かえりを有さない蓋及び、大形の碗、高台付皿の他、長岡京の調査に伴ない出土している須恵器壺Gと呼ばれる器種の底部が共伴している。当期は、IV期には認められなかった土師器坏D群及び、須恵器坏D IV群等の出現、須恵器蓋のかえりの消失等に特徴づけられる。また、土師器甕の形態変化及び坏の新しい要素の出現等により、前後に2分される可能性を有している。つまり後半では土師器甕の「コ」字状化の萌芽及び坏の平底化、また、須恵器坏の供膳形態に占める著しい増加等が特徴としてあげることができる。

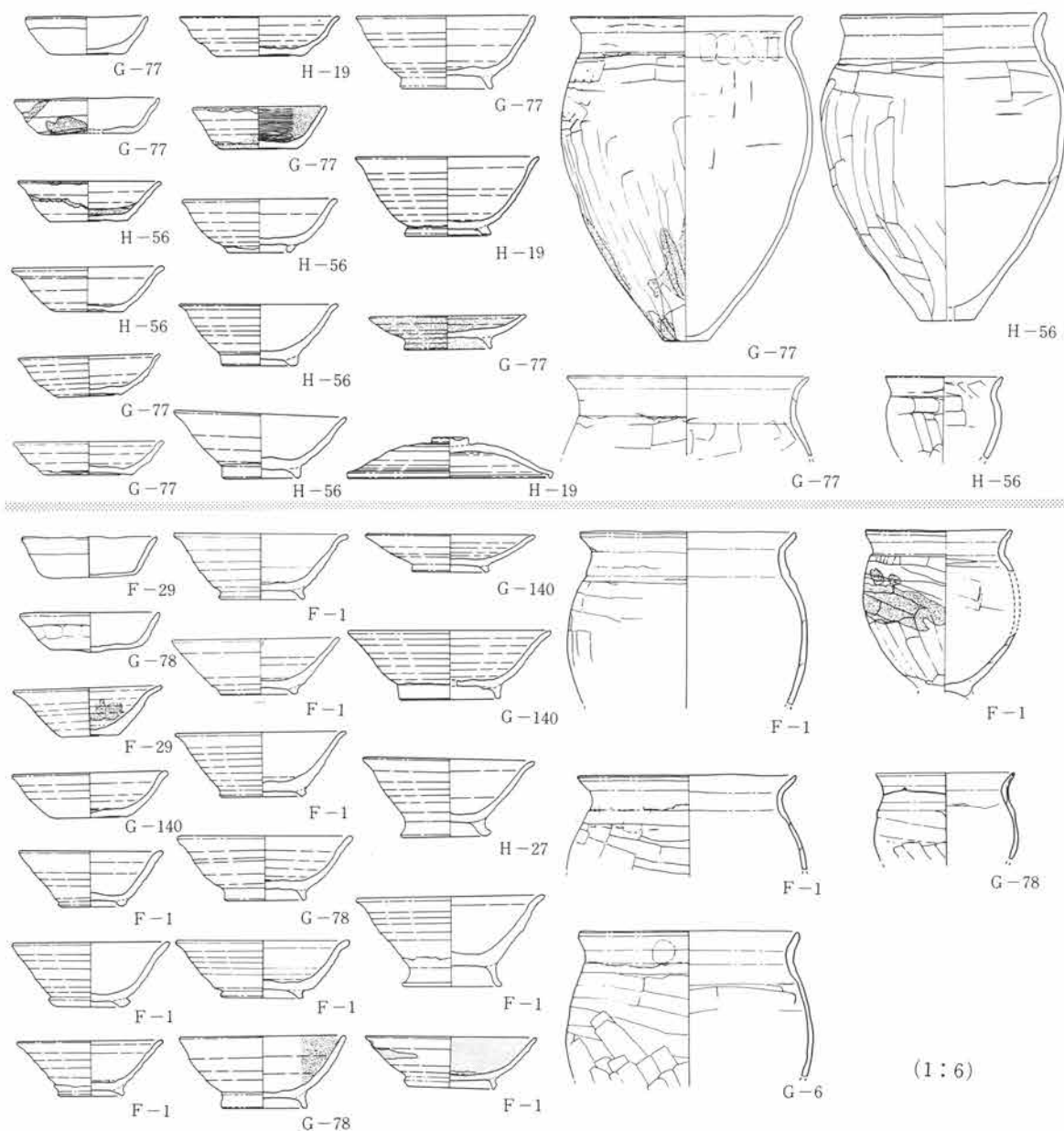
第4章 考 察



第752図 VI期

VI 期 (第752図)

当期は、G区1・21・25・34・47・49・56住、H区17・59住に代表される。土師器坏は、C I・C II・D I・D II、甕はB II・B III・C Iで構成され、須恵器坏は、D II・D III・D IV・D IV'・D V・D V'・E I・E II・E III、碗はB・C I・C I'・C IIで構成されている。特に土師器坏は供膳形態に占める割合は急激な減少を示し、平底化傾向が著しい。逆に須恵器坏の占める割合は土師器坏の減少を補完するように増加している。土師器の他器種では、V期に明瞭なセットとして加わった暗文を有する土師器坏が、比較的多数検出されている。この暗文を有する坏には2形態みられる。一方は底部やや丸底で口縁部が直線的に開くもの、他方は底部やや丸底で一段の屈曲を有し口縁の立ち上がるものである。特に前者は後者に比して器厚が厚いと共に、胎土中に金雲母状の細粒を含み、精選された感が強い。後者は同期に属す土師器坏に近似する胎土のものが多く、容易に区別することができる。また、V期にもみられた小形甕、特に台付のものが多く出土する。須恵器の他器種では、大形の碗及び高台付皿、蓋が特徴的である。その他小形で、ロクロ使用の黒色土器及び、足高高台を有するロクロ使用酸化焙焼成の皿状の器種の共伴がみられる。当期も土師器甕の変化で2分される可能性がある。つまりV期後半に萌芽のみられた「コ」字状口縁は前半さらに完成期に近づき、後半で展型的な「コ」字状口縁が完成期を迎えるものと考えられる。

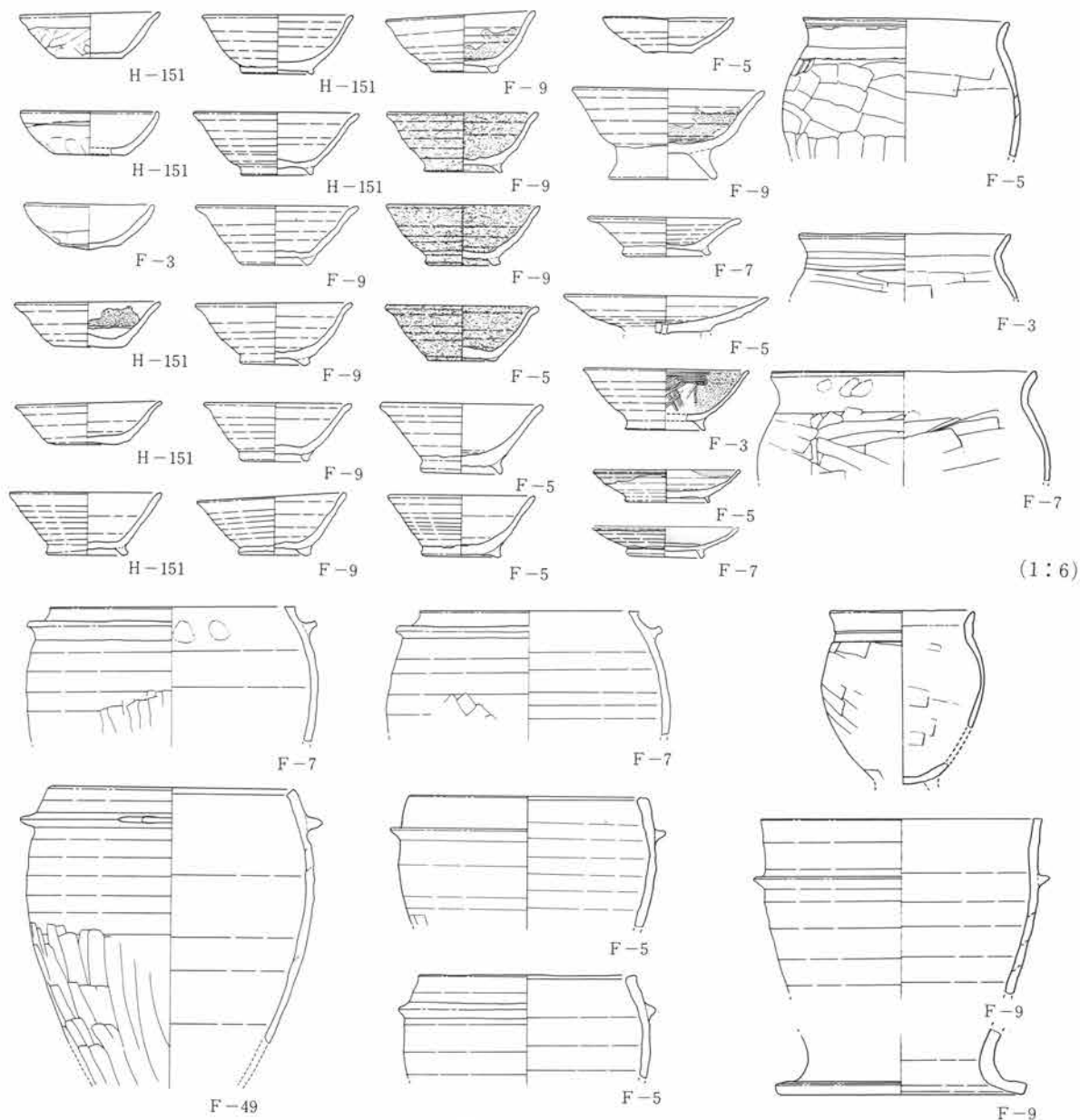


第753図 VII期

VII 期 (753図)

当期は、F区1・29住、G区6・77・78・140住、H区56住に代表される。土師器坏は、C I・D I・D II、甕は、C II・C III・C IVで構成され、須恵器坏は、D V・E I・E I'・E II・E III、碗は、B・C I・C II・D・Eで構成されている。土師器坏ではC群からD群への変化が、須恵器坏ではD群からE群への変化が看取される。また、出土土器中の須恵器碗の占める割合が増している。土師器の他器種では、台付の小形甕がみられる。須恵器では、碗の中でも量目の大きい一群が、前段階から継続している。その他、内黒の坏・碗及び内外面を黒色処理した高台付皿等の共伴が認められる。当期も土師器甕の形態変化から前後に分けられる可能性がある。つまり、前半はC III主C II従であり、後半はC IV主C III従という関係が考えられる。特に後半段階は供膳形態の大半を須恵器碗が占め、さらに須恵器碗Eとした酸化焰焼成の足高台付碗及び同様の焼成の碗がみられる他、光ヶ丘1号窯式段階の灰釉陶器碗の共伴が認められる。当期の全体傾向としては、「コ」字状口縁甕の口縁形態の崩壊段階として位置づけられる。

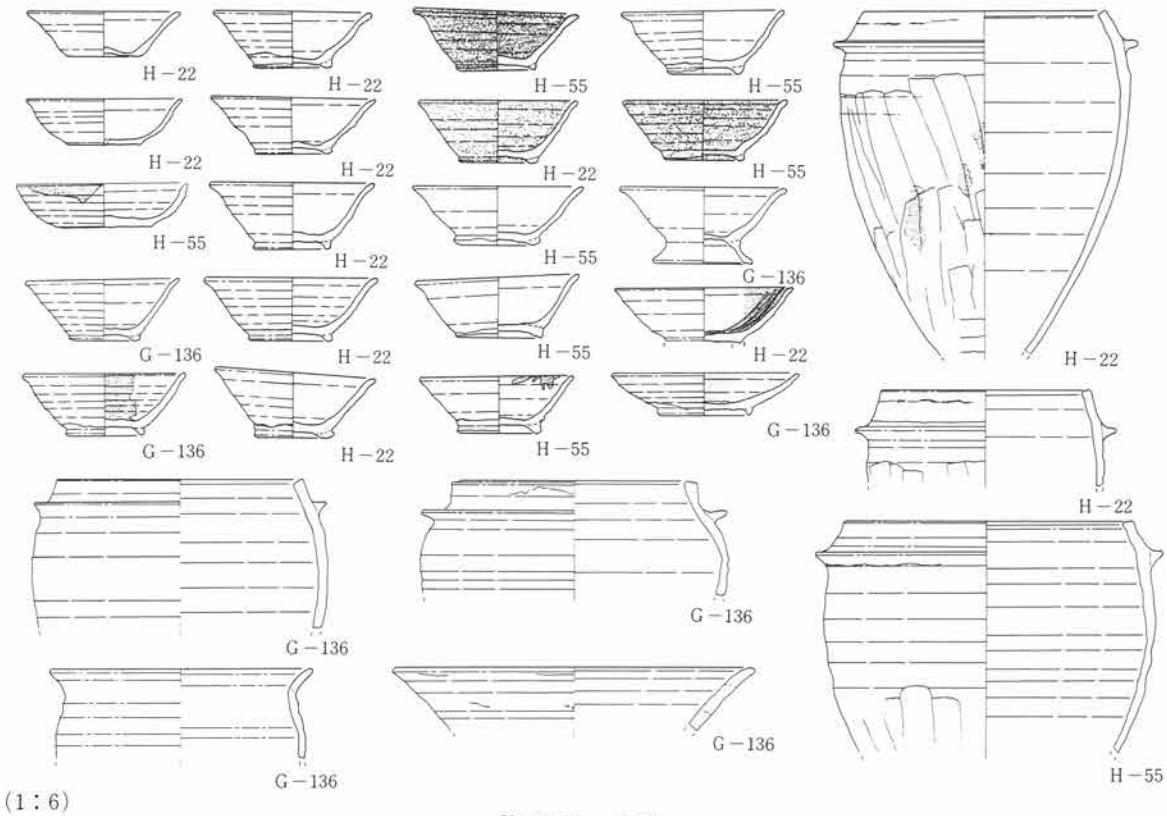
第4章 考 察



第754図 VIII期

VIII 期 (第754図)

当期は、F区3・5・7・9・49住、H区151住に代表される。土師器坏はEであるが共伴のみられないものが多い。甕はCIV・Dで構成され、台付の小形甕が残る。須恵器坏は、E I・E II・E III、埴はC I・C II・C II'・D・Eで構成され、羽釜には、A・B・Cの3形態がみられる。当期を最も特徴づけているのは、羽釜と土師器甕が共伴すること、及び土師器坏Eという前段階を特徴づけるD群から、大きな変化をしていることである。羽釜は、出現時においてA・B・Cという3形態がみられ、完全に還元された製品はみられない。その他の器種では、高台付の内黒がVII期に継続してみられ、また、羽釜に近い形態で、胴下半が水平方向に開いた甕の共伴が認められる。灰釉陶器は、当期に至って刷毛がけのものはみられず大半がつけがけへの変化がみられる。さらに、須恵器埴の中には、前段階には明瞭な例のみられなかつたいぶし焼成をしたものが加わっている。また、埴の高台部はVII期に比して雑な作りのものが多く、焼成も還元されたものは皆無に近い。その他VII期にみられたロクロ使用酸化焰焼成の一群が少量であるが共伴している。



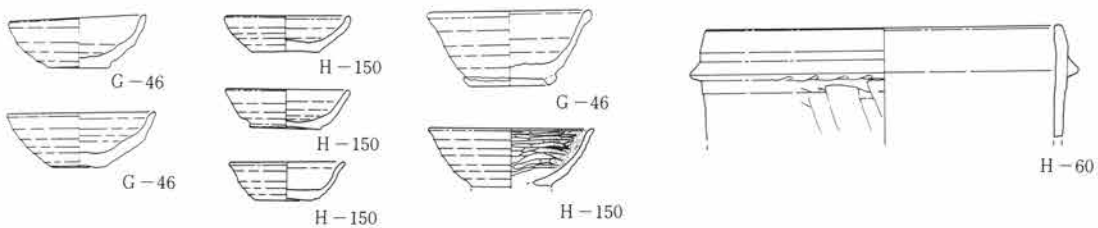
第755図 IX期

IX 期 (第755図)

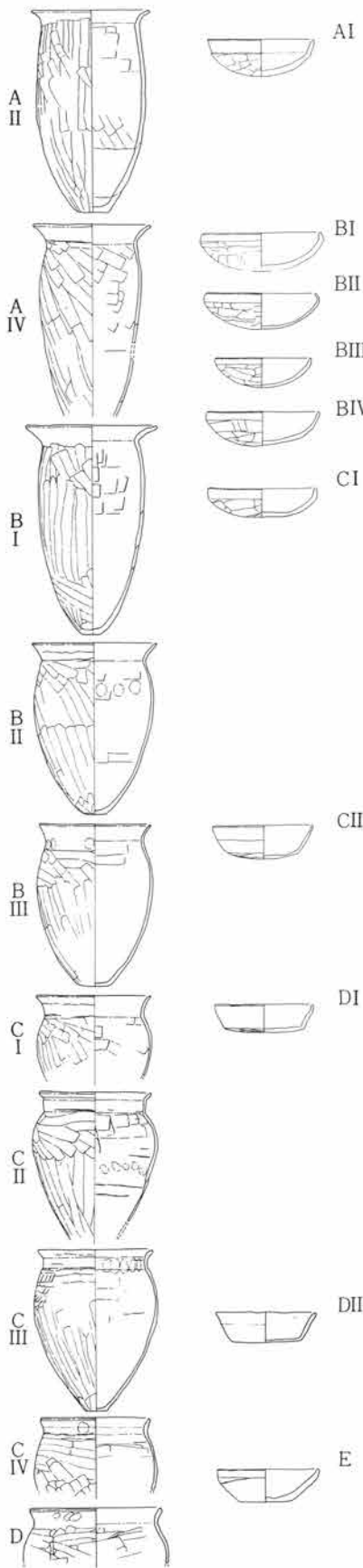
当期は、G区136住、H区22・55住に代表される。土師器坏・甕の出土は皆無で、須恵器坏はDIV・DV・EI・EI'・EII・EII'・EIII、埴はB・CI・CII・Eで、羽釜は、B・C・Dで構成されている。したがって供膳形態の大半は須恵器埴で占められている。これらの埴はVIII期同様高台部及び全体の作りも雑で、焼成も十分な還元はされず、焼締められたものもみられない。また、一部にいぶし焼成を受けたものがみられる。煮沸形態においても土師器はみられず完全に羽釜に置き換えられている。ただ系統を明確に決めかねるようなロクロ調整を施した酸化焰焼成の小形甕がセットされているが、土師器の小形甕の系譜を引くとは考えられない。その他の器種では、高台付の内黒の埴・灰釉陶器等が共伴している。

X 期 (第756図)

当期はG区46住、H区150住に代表される。従前いわゆる土師質土器と呼称されている土器群で構成される中に、作りの非常に雑で、焼成のわるい須恵器埴及び、内黒の埴がセットされている。H区150住とG区46住で出土した坏には並目に大きな違いが認められることから、さらに細分が可能とも考えられる。また、羽釜はDに近い形態であるが、つくりは雑である。



第756図 X期



以上10期の時期分類を試み、各期の特徴について述べたものをまとめると、土師器坏は、II期からIII期でA群からB群への変化が、IV期からV期でB群からC・D群への変化が、また、VII期からVIII期でC・D群からE群への変化と、大きく4段階の変遷が認められる。次に甕では、III・IV期でA群からB群への変化が、V期～VI期でB群からC群への変化と、大きくは3段階の変化とみることができるが、各群中の細分の変化は非常に漸移的变化としてとらえることができる。つまり時間の経過に沿った形態変化を示しているものと考えられる。この変化は、胴部では長胴から短胴への、口縁形態では「く」字状から「コ」字状さらに「く」字状への流れであり、整形技法的には、縦方向篋削りから、上半横方向下半縦方向篋削りへの流れである。図示したものが、この流れに沿うと思われるものであるが、B IからB IIへの変化、つまり短胴化傾向と口縁部屈曲の間には、明らかに一段階以上の欠落が感じられる。この変化を設定した期にあてはめるとIV期とV期の間に位置づけることができる。この間の変化を他の器種からみると、須恵器坏・埴の底部切り離し技法で、IV期では回転篋切り後篋調整するもの及び回転篋切り後未調整であったものが、V期では回転篋切り後未調整及び回転糸切り後未調整が主体となっており、感覚的ではあるが、回転篋切り後未調整が主体で、回転糸切り後篋調整を施すものが加わる段階が予想される。また、須恵器蓋においてもIV期ではかえりがあったものが、V期ではないものに完全に変わっている部分にも変化上のギャップが感じられる。

次に須恵器坏では、III期からIV期でA・B・C群からD群への変化が、V期からVI期でD群からE群への変化が、IX期からX期でE群からF群への変化と4段階の変遷が感じられる。また、坏ではD IとD I'との関係のように器高の高いものと低いものは並行する関係を有するものと考えられ、けして時期差を示すようなあり方を示していない。須恵器埴は形態上の変化を明確に裏付けることはできなかったが、焼成上、VI期からVII期、特にVII期以内での還元焰焼成から中性焰とでも呼称すべき焼成への変化が顕著である。また、埴には量目の小さなものと大きなものとの2つの流れが、少なくともV期からVIII期の間では追うことができる。

その他の例では、内黒の坏・埴及びロクロ使用酸化焰焼成の土器群はVI期以降少数ながら確実にセットされており、灰釉陶器埴はVII期以降に、須恵器埴におけるいぶし焼成はVIII期以降にみられる。

以上のように10期区分したものは、分類した5器種のいづれかに画期が認められる。左図は、土師器甕の形態変化に最も関係の深いと思われる土師器坏を位置づけたものである。

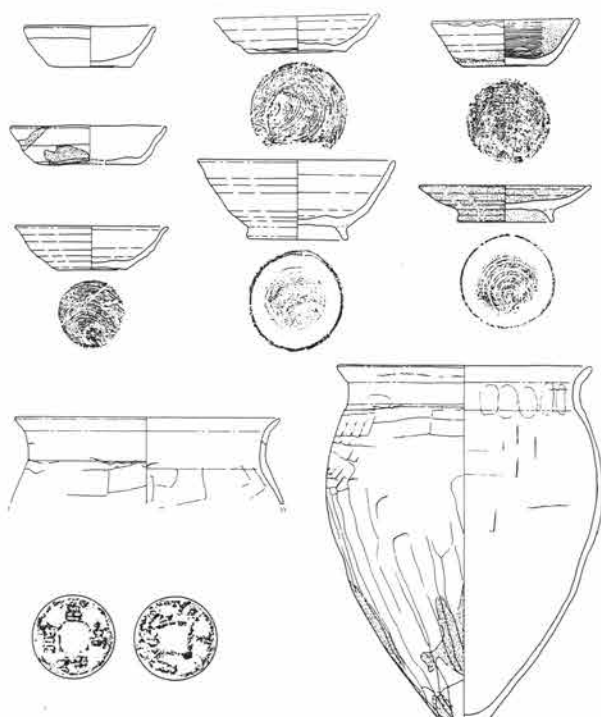
5 年代観について

各器種における画期によって設定した土器群に年代を与えることは非常に困難なことであり、土器そのものに紀年銘でも入っていない限りにおいて直接的に年代を求めることはできない。したがってそれ以外の間接的資料から年代を想定することしかできない。つまり期として設定したものには、前提としてある程度の年代観というものが想定されていて、それを間接資料によって検証するという作業となる。

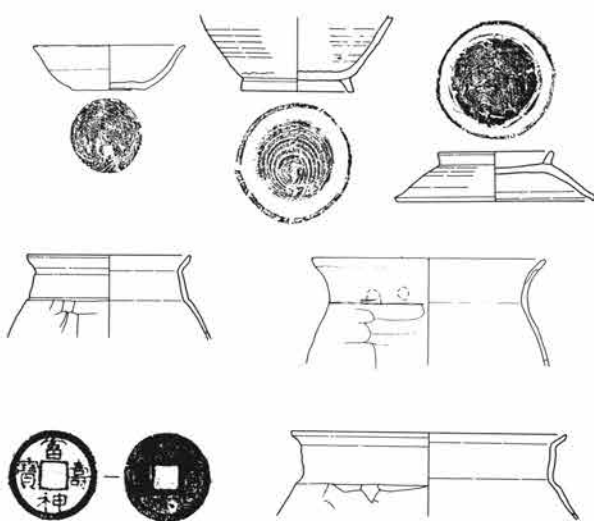
当遺跡では、I期とII期、IV期とV期、IX期とX期の間に不整合が感じられるが、それ以外の部分については、土師器甕の漸移の形態変化が追えることから連続したものと考えられる。したがって各部分における2点乃至3点の年代を押えることができれば、ほぼ機械的な年代想定が可能と思われる。しかし当遺跡において年代を求め得る資料は、G区77住カマド堀り方から出土した「富寿神宝」だけであるため、清里・陣場遺跡等で既報告の、松井田町愛宕山遺跡4住、高崎市観音山古墳周溝25トレンチ1土坑内出土資料等との比較を行ないながら、年代観を想定してみたい。

始めに当遺跡G区77住出土一括遺物は、土師器甕の形態的特徴からVII期に位置づけた。「富寿神宝」の初鑄は弘仁9(818)年であり、9世紀前半を上限とする年代が想定されるが、同様に「富寿神宝」を出土する中畦遺跡1住との比較をすると、中畦遺跡1住の遺物は土師器甕の形態的特徴からより古い様相が看取され、当遺跡におけるVI期に近い時期が考えられる。また、同じくVII期に位置づけたF区1住から出土した灰釉陶器碗は、器形・施釉技法等から光ヶ丘1号窯式段階の製品とみられる。したがってVII期は、9世紀後半に位置づけておきたい。

次にV期に位置づけたG区7住出土遺物中に愛宕山遺跡4住の主体を占める一群の土器に近似するものが含まれている。愛宕山遺跡4住出土土器は全て回転糸切り後未調整であるのに対し、G区7住出土の器高の高い一群中には、回転篋切り後未調整のものがみられ、より古い様相を示している。したがって、中沢氏が愛宕山遺跡4住出土遺物に想定した8世紀末～9世紀初頭という年代より「万年通宝」の初鑄年代である、天平宝字4(760)年により近い年代が想定されることから、8世紀後半と考える。また、愛宕山遺跡4住近似の土器は、当遺跡VI期に比較的顕著にみられ、さらにこの時期は先述の中畦遺跡1住と土師器甕の形態が近い。したがってVI期



G区77号住



中畦遺跡

第4章 考 察

は9世紀前半に位置づけられる。

次にⅧ期に位置づけたF区4住等出土遺物中に観音山周溝内土坑より「貞観永宝」「寛平大宝」その他2枚の銭を伴って出土した須恵器塚に近似する土器が出土している。銭の初鑄は「貞観永宝」が貞観12(870)年「寛平大宝」が寛平2(890)年であり、9世紀後半代の年代が求められるが、共伴した須恵器塚はⅧ期に位置づけた一群の須恵器塚に比して底径が小さく、軟質化している。また、Ⅸ期はⅧ期との器種構成上土師器が消滅するという画期に求めたが、須恵器等の変化は微細なものと考えられ、ごく接近した時期である可能性がある。このことからⅧ・Ⅸ期を含めて10世紀前半に位置づけたい。Ⅹ期は、Ⅸ期に後続するものの、変化が急で何段階かが欠落している可能性がある。しかし鳥羽遺跡S K332出土の小形の皿の出現以前と考えられることから、一応10世紀後半～11世紀前半と幅をもたせて考えておきたい。

Ⅳ期以前の時期について年代を求め得る有力な資料をもたないが、友廣氏の御教示によれば、新保遺跡D区4溝出土一括資料が、当遺跡Ⅳ期資料と土師器・須恵器相方の器形・技法共に共通する部分が多く、D区4溝出土遺物については、共伴した瓦の年代観からも8世紀前半に位置づけられるものであることから、この年代観に近い時期が想定される。しかし、Ⅳ期の前半と考えられる遺物中には、明らかに新保遺跡D区4溝よりも古い様相を示す一群が認められることから、Ⅳ期を7世紀末から8世紀前半に位置づけておきたい。さらに連続すると考えられるⅡ・Ⅲ期については、全く根拠をもたないが、Ⅱ期を7世紀前半、Ⅲ期を7世紀後半と考えておきたい。Ⅰ期については、5世紀代を想定しておきたい。

6 ま と め

以上のように分類とその共伴関係をもとに時期設定を行った。その結果今回の報告区においては、概ね5世紀代から11世紀代におよぶ遺物が検出されていることがわかった。さらに今回設定したⅠ期からⅩ期の間には、Ⅰ期とⅡ期の間には大きな断絶が、Ⅳ期とⅤ期の間には1段階程度の段階の欠落が想定された。しかしこの傾向は、当遺跡全体にみられることであるのか、当区の特質であるのか、全調査区の1/5程度の整理段階では判断できないのが現状である。また、ここで設定した時期にも、今後整理が進む中で欠落した段階の付加及び内容の変更等も予想されることから、現段階では四半世紀単位での段階を想定しながらも、半世紀ピッチでの設定に止っている。したがって当初集落変遷の追求を目的として行った時期設定でありながら、その段階に至っていないことから、より完全な時期の把握及び集落変遷については今後の課題としておきたい。さらにここでは時期設定に主眼をおいたため、遺物個々の分析・検討が欠如してしまったことも反省点であり、今後追求しなければならないことである。

註

1. 中畦遺跡1号住の「富寿神宝」出土位置は、北東コーナー一部壁外であり、この住居に伴うものであるか疑問が残る。しかし、担当した小野和之氏の御教示により、出土位置において他住居、その他他遺構との重複はみられないとのことである。したがって、時的なものも考慮すると、当住居所属と考えるのが妥当と考えられる。

参 考 文 献

- 井上唯雄 「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』8 群馬県史編纂委員会 1978
大江正行 「S K332について」『鳥羽遺跡』No.8 群馬県教育委員会鳥羽事務所 1980
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 「清里・陣場遺跡」 1981
斉藤孝正 「猿投窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナル』No.211 1982
檜崎彰一 斉藤孝正 「猿投窯編年の再検討について」『研究紀要』2 1983 愛知県陶磁資料館
渋川市教育委員会 「有馬条里遺跡」 1983 渋川市発掘調査報告書第7集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 「賀茂遺跡」 1984
大江正行 「群馬県における古代窯跡の背景」『群馬文化』199 1984 群馬県地域文化研究協議会
前川 要 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『研究紀要』Ⅲ 瀬戸市歴史民俗資料館 1984
群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 「糸井宮前遺跡Ⅰ」 1985
群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 日本鉄道建設公団 「三ツ寺遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳」 1985
坂口 一 三浦京子 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』第24号 1986
酒井清治 「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史資料館 1987

第2項 足高高台を有する土器について

整理を進めて行く中で、ロクロ使用酸化焰焼成の土器群が、9世紀段階からわずかではあるがセットされてくることに気づいた。その中で先の分類では便宜的に須恵器碗Eとして扱った足高高台を特徴とする土器は、従来から土師質土器の中で理解されていたものであり、その出現と系譜を検討することによって、土師質土器成立について1つの指標を示すことになると思われることから、ここで扱った。

足高高台を有する土器について、最初に注目したのは川上元氏であろうと思われる。名称と概念は、川上氏が「高台部は薄くて長い、しかも反りのある脚部端および口縁部がゆるやかに外反する」とその特徴を述べ、これらの一群について「足高高台付坏(皿)形土器」と呼称したことに始まる。そして時期については、第5様式第I期から第V期つまり9世紀代から12世紀後半までの消長を追うことができるとしている。また、その形態的特徴は、同時代の須恵器・灰釉陶器に求めることはできず、ロクロビキ木型を範器とするのではないかと想定した。^(川上1978)その後同氏は、法量的概念規定に言及して「全器高に対する高台部の高さの比率がおよそ30%を越す」とした。^(川上1986)次に中沢悟氏は、足高高台を付す碗について「ロクロと窯体を使用し、酸化焰焼成であるが、灰褐色を帯びている一群の土器」つまり土師質土器が10世紀後半代に4器種が完成された姿を持って登場するとし、その中の碗Cに位置づけている。^(中沢1981)このことによって群馬県においては、足高高台付碗類は10世紀後半以降の土器と認識されるようになった。綿貫綾子氏は、中沢氏の土師質土器という概念を若干拡大する中で、足高高台付の土器をIV期(11世紀後半)に位置づけている。^(綿貫1983)続いて飯田陽一氏は、土師質土器を検討し、「足高高台と呼ばれる特徴的な高台は、須恵器の系譜からは追えないもので、土師質土器独特のもの」ととらえ、足高高台付碗以外で土師質土器出現を画することが困難であると述べた。^(飯田1985)最後に坂口一氏は土師質土器を中尾遺跡の資料をもとに検討していく中で、碗Cについて「出現期こそ10世紀後半に求められるものの、XIV段階(11世紀後半)にまで継続的に認めることができる」として、中沢氏が土師質土器とした4器種のうち、出現の画期となるのが碗Cだけであるととらえた。^(坂口1986)

以上群馬県の例を中心に簡単に研究史に触れたが、本県にあつてはいずれも10世紀後半代に完成された姿として登場するとされており、川上氏が提示したものより、出現・消滅共に1世紀近い差が生じている。群馬県にあつて12世紀代の土器は資料的に少ないため、それらとの相伴関係を検討するに至っていないのが現状であるが、出現期については、10世紀後半代以前であることは確実であり、以下に検討を加えたい。

足高高台の定義については、川上・中沢両氏共同内容のことを述べているが、高台部を除く器形の特徴については、後述する器形バラエティの主体について述べたものであり、法量的概念規定についても、完成された足高高台については該当するが、出現段階のものは必ずしも当たらないと思われる。このことから高台部の高さについては、同時期の碗・皿等と比較して明らかに高台部が高いと認められるものと考えておきたい。次に整形と焼成技法では、ロクロ使用酸化焰焼成であることを上げておきたい。これは須恵窯内で結果として酸化焰焼成されたということではなく、赤焼けにすることを目的にしているという意味である。それは足高高台を付すものが、群馬県では土師質土器またはロクロ使用酸化焰焼成土器に、南関東ではロクロ土師器に、東北では、赤焼土器・須恵系土器・ロクロ土師器に、長野県では土師系什器中に分類されることが多いことから、大きな特徴とすることができる。したがってここでは、足高高台付碗・皿類を「ロクロ使用酸化焰焼成のもので、同時期の他器種と比較して明らかに高い高台を付すもの」と考えたい。

ここで当遺跡出土資料について、先述の時期設定にそくして内容及び年代観を示しておきたい。先ずF区1号住の資料は、住居中央部及びカマド周辺から出土したものである。F区1号住は北西コーナー一部で2号住との重複が認められるが、このことによって2号住の遺物が混じることは考えられないし、遺物組成から

第4章 考 察

明らかに2号住が古いと判断されることから、この遺物は一応一括遺物としてとらえることが可能である。遺物組成は、須恵器碗を主体とし、CⅢとした土師器甕及び光ヶ丘1号窯式段階と思われる灰釉陶器碗の中に、ロクロ使用酸化焰焼成の碗と共に足高高台付碗がセットされている。この住居は先の時期設定からすればⅦ期に属し、9世紀代末の年代観が与えられる。

次にH区27号住の資料は、大半がカマド周辺の床面近くから出土したものであり、重複する32号住の遺物である可能性は少ない。その遺物組成は、須恵器碗が主体で、CⅣとした土師器甕とロクロ使用酸化焰焼成の足高高台付碗が共伴している。この住居跡は、F区1号住同様Ⅶ期に含めたが、土師器甕の形態からすればF区1号住よりも1段階新しいと思われ、9世紀末～10世紀初頭の年代が考えられる。

F区9号住の資料は、住居南寄り及びカマド周辺から出土したものであり、溝との重複が認められるが、土層断面からすれば明らかに9号住が新しい時期のものであり、他の遺物が混じる要素は少ない。その組成は、いぶし焼成を含む須恵器碗を主体として、酸化焰焼成及び還元焰焼成の甕と共伴している。この住居跡は土器組成からほぼⅧ期に属するものと考えられ、10世紀前半の年代が与えられる。

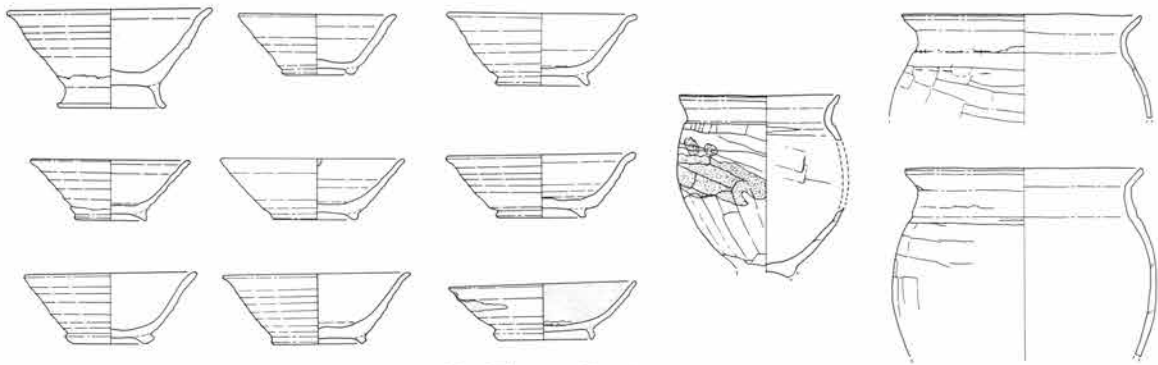
G区136号住の資料は、カマド付近から住居南半の床面近くから出土したものである。当住居は、北半で134号住との重複が認められるが、重複部分の遺物を含めていないことから134号住の遺物が混じることはなく、また、東側で重複する61号住は、当住居のカマドが残存することから、時期的に古いものと考えられ、これらの資料は当住居跡に属すものと考えてよいものと思う。土器組成は、須恵器碗・小形甕・灰釉陶器碗・羽釜の中にセットされている。当住居は全く土師器甕類を含まないことからⅧ期に位置づけたものであり、10世紀前半の年代が考えられる。

次に知見にのぼったものについて、形態分類及び年代の変遷についてみてみたい。第757・758図は、資料的に多くみられた群馬県と千葉県のを縦に時間軸をとって位置づけたものである。年代的位置づけについては、報告者の考えに従っている。図示したことからわかるように、体部の形状から両県共ほぼ6種に分類が可能である。Aは腰部にほとんど張りをもたず、口縁部がわずかに外反するもの。Bは腰が水平方向にわずかに張り出し、そこから外反ぎみに立ち上がるもの。Cは内湾ぎみの体部を有し、口縁部がやや外反するもの。Dは内湾する体部を有し、口縁部の外反しないもの。EはCに近いが体部の内湾が強く、深いもの。Fは皿状を呈するものである。また、高台部形状には直線的なもの、先端部が外反するもの、非常に長脚で先端が強く開くもの等がみられる。これらの分類は、ほぼ各県に共通するものであり、広域において斉一性を有するものと思われることから、各地域で独自に成立・発展をしたものとは考えにくい。

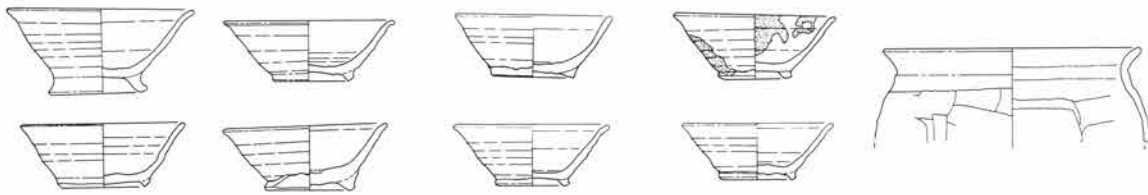
これら6タイプはそれぞれの変遷が考えられ、現状で空白の部分も資料増加によって埋められるものと考えている。器形変化について、主体を占めるA・Bの2タイプについてみると、共通して体部は深いものから浅く、高台部は低いものから高いものへと変化を示している。この変化は概ね他のタイプについてもあてはまるものである。

次に出現の時期については、当遺跡出土の第751図1が群馬県においては古い段階に位置すると考えられ、9世紀代末を想定した。この段階ではAタイプしか検出されていないが、10世紀後半代に至ってほぼ全タイプが出揃っている。中沢氏等はこの普遍的にセットされる時期をとらえて足高高台付碗・皿類の出現としたものと思われるが、中沢氏自身指摘しているとおり、足高高台は10世紀後半代には完成された姿で登場するのであって、これ以前にさかのぼることは当初より想定されたことである。これに対し千葉県では、9世紀前半代にはFタイプがみられ、10世紀前半代に至ってほぼ全タイプがみられる。つまり本県よりも出現時期・全種揃う時期共に約半世紀早いことになる。消滅の時期については先述のごとく、有力な資料をもち合わせ

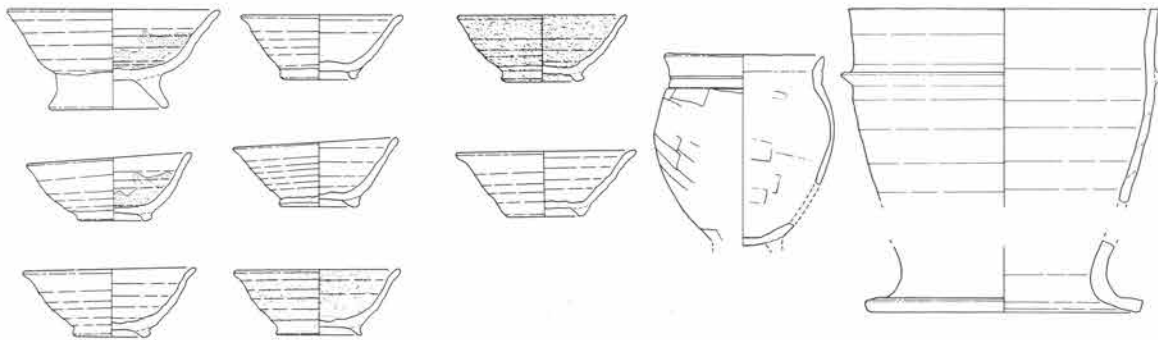
第1節 古墳時代中期～奈良、平安時代の遺物



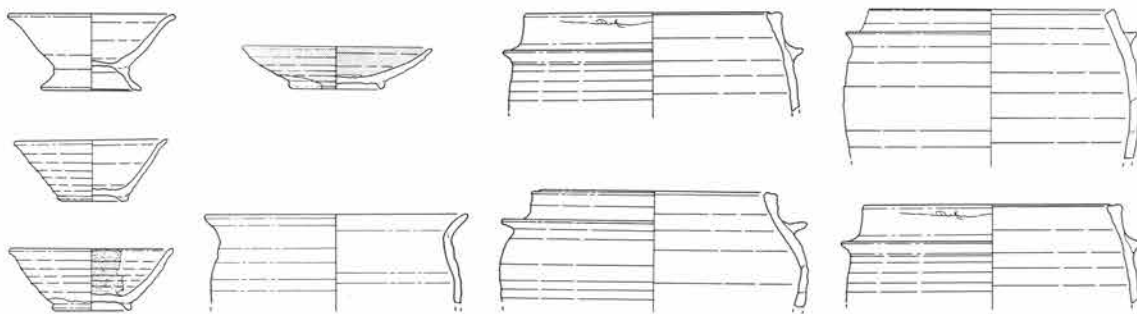
F区1号住



F区1号住



H区27号住



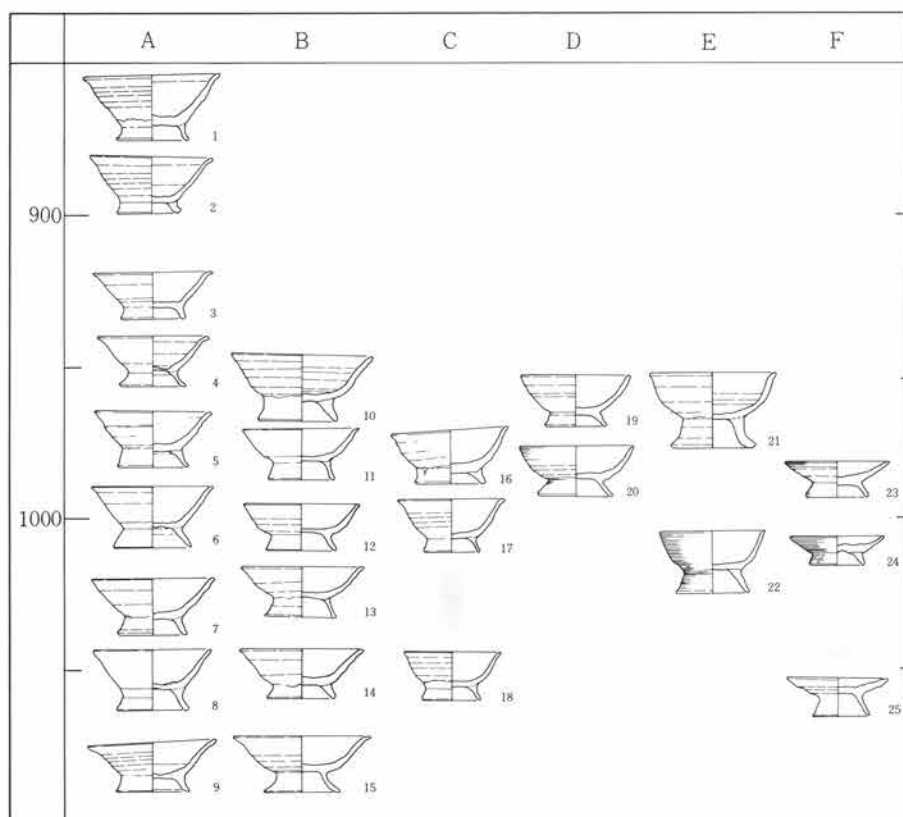
F区9号住

ないが、賀茂遺跡等で鳥羽遺跡S K332出土の小形皿に近い遺物との共伴が認められることにより11世紀後半代までは確実に残っていることがわかる。千葉県でも様相的に同じであり、前出の長野県でのあり方とは1世紀近い差が生じている。これが地域性によるものであるのかどうかは現状では不明である。

また、その分布については、川上氏が述べられたとおり東日本に濃く分布するようにもみられるが、太宰府等での出土もみられることから汎日本的に分布するものと思われる。

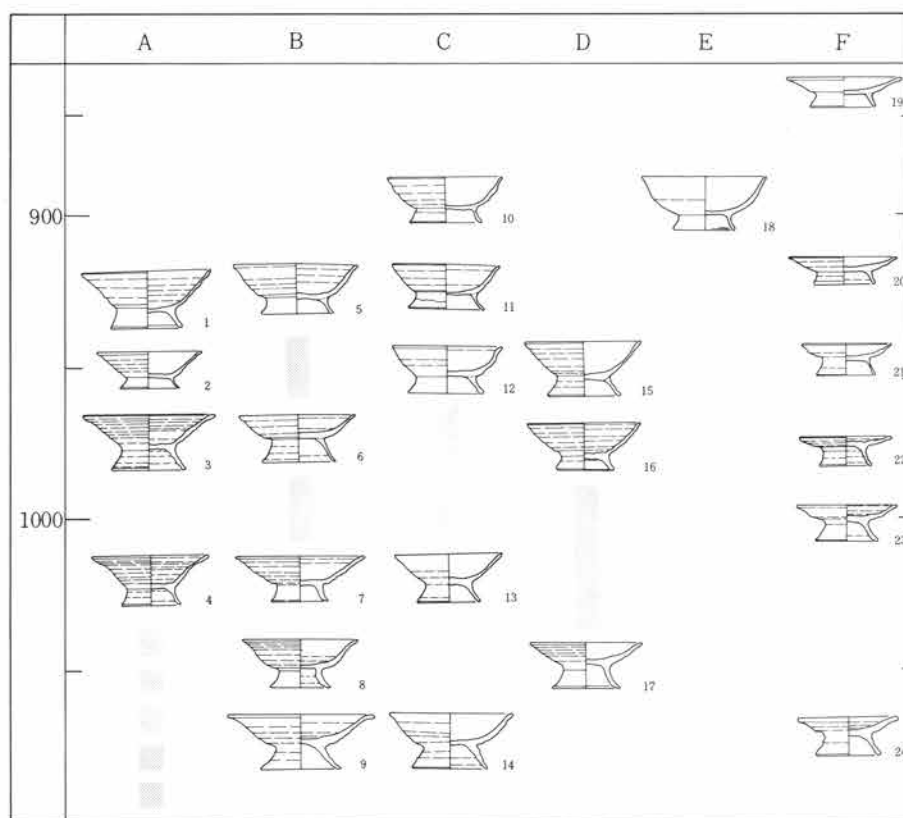
このように、中沢氏により土師質土器碗Cとして位置づけられた足高高台を付す土器群は、出現時期も9世紀代であり、器形にもバラエティがあって単純なものでないことがわかる。この足高高台を付すもの全て

第4章 考 察



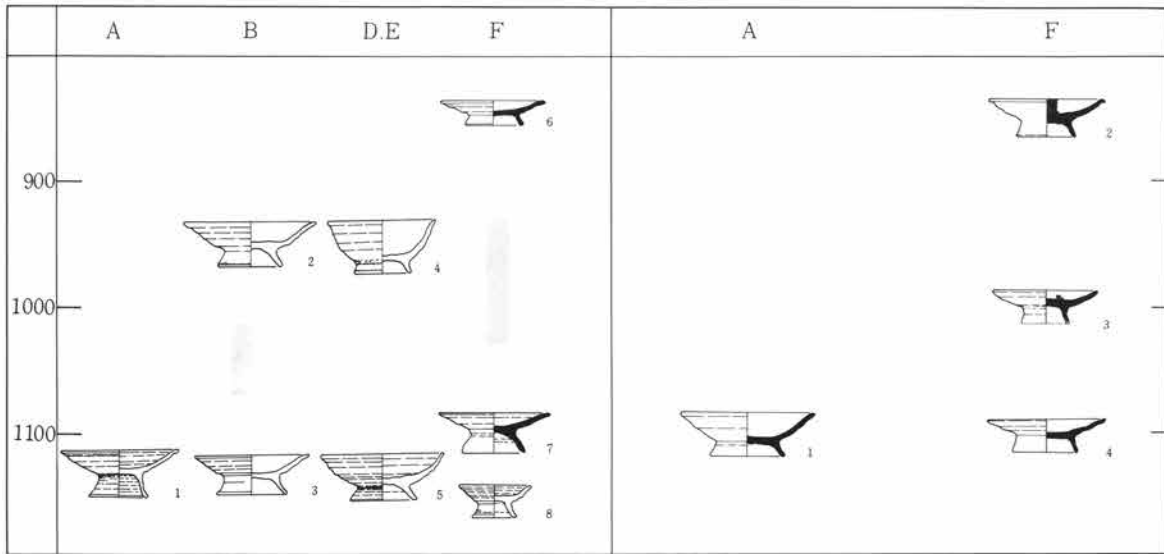
1. 国分寺中間 F-1住
2. " H-27住
3. 下佐野遺跡II 6-24住
4. 国分寺中間G-136住
5. 清里・陣場遺跡 42住
6. 下佐野遺跡II 5-49住
7. 中尾遺跡 E-37住
8. 下佐野遺跡II 4-7住
9. 荒砥上川久保遺跡
4-11住
10. 国分寺中間 F-9住
11. 清里・陣場遺跡 42住
12. 大久保A遺跡II 64住
13. 中尾遺跡 E-37住
14. " C-81住
15. 賀茂遺跡 39住
16. 清里・陣場遺跡 42住
17. 下佐野遺跡II 4-30住
18. " 5-55住
19. 賀茂遺跡 37住
20. 大久保A遺跡II 82住
21. 中尾遺跡 D-3住
22. 大久保A遺跡I 122住
23. " II 82住
24. " I 105住
25. 荒砥五反田遺跡

第757図 群馬県



1. 西寺原遺跡
2. 印内台遺跡
3. 西寺原遺跡
4. 永吉台遺跡 11焼成土坑
5. 新木東台遺跡
6. "
7. 須和田遺跡 34住
8. 加定地遺跡 74住
9. " 37住
10. 布佐・余間戸遺跡 51住
11. 新木東台遺跡
12. 羽黒前遺跡 101土坑
13. 駒形遺跡 C-1土坑
14. 加定地遺跡 82住
15. 大畑I遺跡 1 2井戸
16. 西寺原遺跡
17. 加定地遺跡 74住
18. 荒追遺跡
19. 北海道遺跡
20. 新木東台遺跡
- 21.
22. 西寺原遺跡
23. 樋爪遺跡 13焼成土坑
24. 加定地遺跡 771土坑

第758図 千葉県



第759図 長野県・宮城県

- | 長野県 | | | | 宮城県 | |
|------------|---------------|--------------|--------------|--------------|--|
| 1. 松原西遺跡 | 4. 町田1遺跡 | 7. 生仁遺跡II12住 | 1. 多賀城 SE674 | 4. 多賀城 SE317 | |
| 2. 町田1遺跡 | 5. 松原西遺跡 | 8. 大室村北遺跡 | 2. // | | |
| 3. 小島田中沖遺跡 | 6. 県町遺跡 6 14住 | | 3. // | | |

を土師質土器という概念の中で理解しようとするれば、土師質土器の出現を9世紀代とみなければならない。しかし、生産集団の変質という仮説から導き出された土師質土器という概念を9世紀代に上げることは、現象的にみても無理があるものと考えられる。そこで千葉県における出現・発展の時期が本県に比較して約半世紀早いことに注目したい。つまり足高高台を付す土器群が、ロクロ土師器生産の主体的地域で生成・発展したものであり、群馬県内で出土するものもロクロ土師器の系譜を引くものと考えたいのである。しかし足高高台付碗・皿等を含むロクロ使用酸化焙焼成の土器を主体的に出土する地域は、現在のところ把握されておらず、まして生産遺構は未検出であり仮定の域を出ない。また、出土量の少ないことは、足高高台付碗・皿類の性格によると考えられ、内面黒色処理を施す土器群同様、住居内のセットにおいて終始主体的とはならない土器群であることによると思われる。

まとめ

ロクロ使用酸化焙焼成の土器、特に足高高台を付す特異な土器について検討を試みてみたわけであるが、前述のごとくこれらがロクロ土師器の範疇でとらえるべきものであるとすれば、全てが搬入されたものでない限り、群馬県にあっても遅くとも9世紀代には、非ロクロ土師器、須恵器生産に次いで、ロクロ土師器生産という第3の流れが存在したことが考えられる。これは、中沢氏等の提唱した土師質土器成立に関して大きな意味を有している。つまり中沢氏が当初より完成された姿でセットされるとした4器種中、すでに坏・碗Aについては須恵器からの漸移的变化が、碗Bについても前時期に系統を追うことができることが、飯田・坂口両氏により述べられており、足高高台を有する碗Cだけが土師質土器出現の画期となる土器として認識されていたからである。したがって中沢氏が10世紀後半段階で急激な変化としてとらえた4器種は全て前段階からの漸移的变化の上で成立し、中沢氏も指摘した様に10世紀後半に完成されたとみるべきであろう。以上のことから土師質土器と呼ばれた4器種成立は1元的なものではない可能性が強いが、須恵器からストレートに連続するものでないことは明らかである。筆者はその生成母胎としてロクロ土師器を考えている。それは、足高高台付碗・皿類と内黒碗の存在からである。内黒の一群は足高高台を付すものに比して低火度

第4章 考 察

焼成のものが多く、併焼された可能性は弱い、ロクロ使用・酸化焰焼成という点で共通し、事実両者に共通の器形も存在している。しかし、それまで主流とはならなかったロクロ土師器生産が、主体的位置を占めるためには、須恵器生産の減少・消滅という契機があったものと思われる。つまり中沢氏が想定した須恵器工人の解体変質が原動力となっているとみるのが最も理解しやすい。つまり、須恵器生産・供給の行きづまりを打開するために、高火度に耐える粘土を必要とせず、生産の場もあまり規制されないと考えられるロクロ土師器生産への転換をはかった姿が浮かび上がってくる。この時期が10世紀後半であり、新しい要素が加わることによってロクロ土師器そのものに変化がみられるのではないだろうか。中沢氏はまさにこの時期に注目したものでありこれは吉岡康暢氏がロクロ土師器における第2段階として位置づけたものであろう。

以上主に現象面からとらえたことについて述べたが、ここで短絡的に使用した、須恵器工人の解体変質・須恵器生産の行きづまり、などの言葉に象徴される現象をひきおこした要因こそ、本来問題としなければならない点である。これらは律令制の崩壊する時期にあたっており、無関係ではあり得ないことは容易に想定されることであるが、どのように関係するのかについて論述する段階に筆者は至っていない。したがってこの問題を念頭において今後の整理を進めていきたいと考えている。

参 考 文 献

- 江刺市教育委員会 岩手県文化財愛護協会 『瀬谷子遺跡』 1971
横田賢次郎 森田 勉 「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集』 2 1976
川上 元 「土師系汁器の展開と終焉」『中部高地の考古学』 1978 長野県考古学会
栃木県教育委員会 『薬師寺南遺跡』 1979 栃木県埋蔵文化財調査報告書第23集
白鳥良一 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』 VII 1980 宮城県多賀城跡調査研究所
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『清里・陣場遺跡』 1981
服部敬史 「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古』 1 1982 東京考古談話会同人
群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『荒砥上川久保遺跡』 1982
史館同人 市立市川考古博物館 『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代土器』 1983
渋川市教育委員会 『有馬条里遺跡』 1983 渋川市発掘調査報告書第7集
群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『賀茂遺跡』 1984
群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『中尾』 1984
飯田陽一 「土師質土器について」『群馬文化』 204 群馬県地域文化研究協議会 1985
群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『太田東部遺跡群』 1985
群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 日本鉄道建設公団 『下佐野遺跡』 1986
坂口 一 三浦京子 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』 第24号 1986
神奈川考古同人会 『シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』『神奈川考古』 第21号 1986
吉岡村教育委員会 群馬県教育委員会 日本道路公団 『大久保A遺跡』 1986
房総歴史考古学研究会 『房総における歴史時代土器の研究』 房総歴史考古学研究 第1集 1987

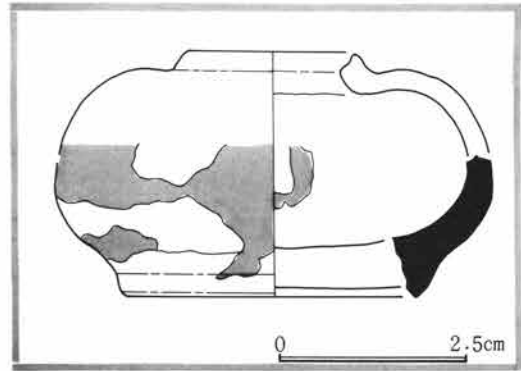
第3項 青・白磁について

今回の報告区において住居跡から6点の白磁碗の破片が出土した。この資料が出土住居の年代観に対し共存認定をし得る遺物であることの判断を、当遺跡の陶磁器を扱った大江氏に願った。この結果、いずれも中国製で、F区33号住のものが晩唐～北宋のものであり、G区21・48・50号住及びF区1井戸のものが五代～北宋のものであるとのことである。また、G区24号住及び90号住に近接するG区9号址埋土中から、9世紀代の中国製白磁碗片及び古代中国越州窯青磁片が出土しているが、鎌倉時代以降の遺構であるため詳しくは、第4節第2項を参照されたい。

平安時代以前に属す青・白磁については、現段階では扱わず全資料が出揃った段階でまとめを行ないたいと考えている。

第4項 奈良三彩陶について

G区22号住居跡からは、当遺跡において唯一の奈良三彩陶が出土している。この奈良三彩陶は、高台から胴部下位にかけての小片ではあるが、若干の検討をおこなってみた。この奈良三彩陶片の器形復元をおこなうと第754図のような底径3.8cm、口径2.2cm、器高3.2cmほどの小壺を呈すると推定される。本器の胎土は、他の奈良三彩陶と同様に夾雑物の含まれない白色を呈し、白釉はやや黄色味を帯び多少透明感に欠ける。高台部分の接地面は、釉の剝離がみられる。本器の残存部分では、緑、白釉の二色しかみられないが、奈良三彩陶小壺の施釉については、一定の規則性^{註1}があったようであり、その法則からすれば、本器も褐釉の施釉が考えられ三彩であったと推定される。内面は、透明感のない緑灰色の釉が施されている。



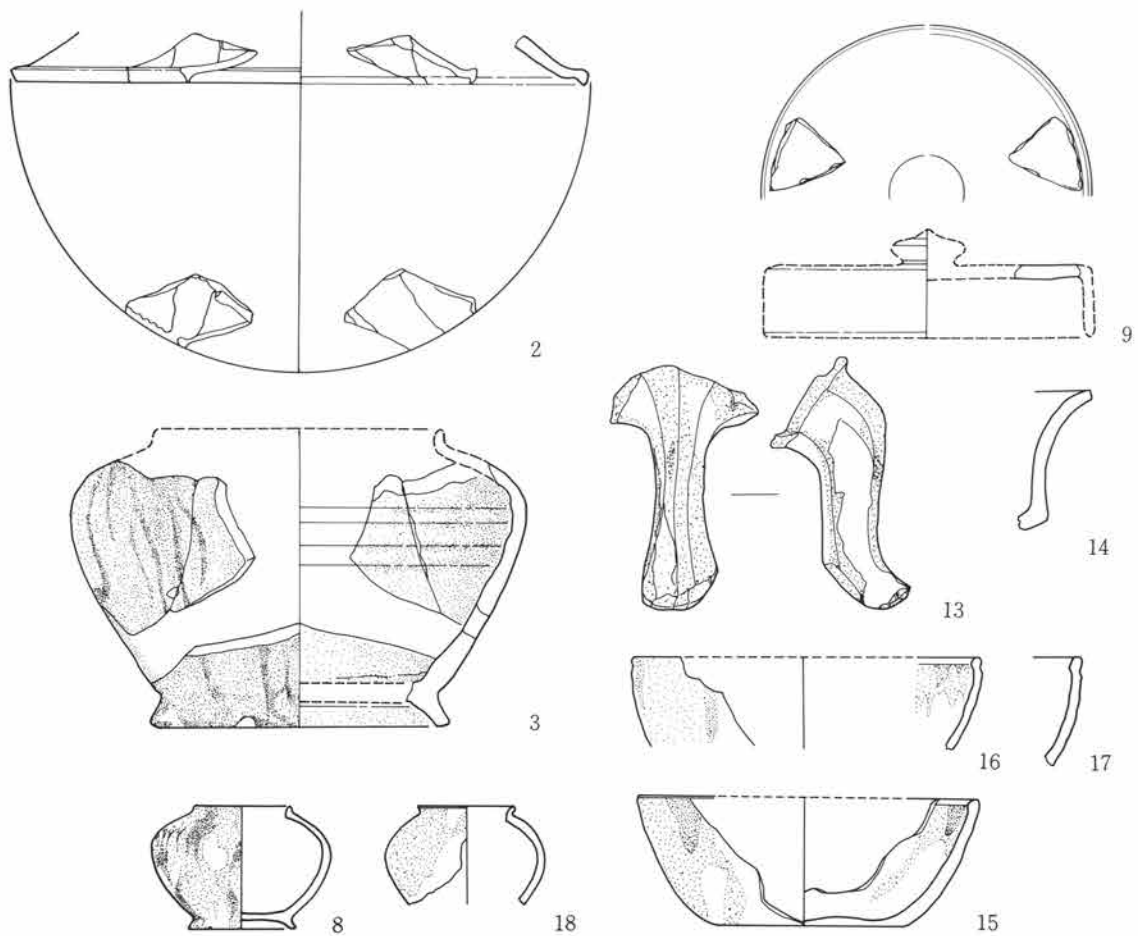
第760図 G区22号住居跡出土 復元実測図

本器は、第754図のように胴部下位が大きく開き、胴部が大きくふくらみ、高台は直立ぎみに立つ器形を呈する。奥村清一郎氏は、「奈良三彩小壺とその出土遺跡について」^{註2}のなかで、奈良三彩小壺をその形態の変化から4期に区分している。奥村清一郎氏によれば、I期は、大型葉壺形品のミニチュア化の模索がなされた段落で定型化・規格化はなされず、形態的には胴が張らず、少し肩のつく体部と、外方へしっかりとふんばる高台をもつ時期である。II期は、定型化・規格化がなされた段階で、画一的な規格品が官の要請に応じて量産されたと推測される。法量は、器高5cm前後、最大腹径6cm前後にほぼ統一され、胴部が丸く張り出した扁球形の体部と外部にしっかりとふんばる高台をもつ時期である。III期は、衰退期にさしかかった段階で、II期のものに比べ釉の発色がよくない粗悪品もみられ、技術の低下現象が窺える。法量は、器高4cm前後、最大腹径6cm前後で、胴部の大きく張り出した玉ねぎ形の体部をもつもので最大腹径を胴部中位あたりにくるのを特徴としている。高台は、外へしっかりとふんばるものとふんばりの弱い断面矩形のもののがみられる時期である。IV期は、奈良三彩小壺だけではなく奈良三彩陶全体についても最終段階に位置づけられ、沖ノ島1号遺跡出土の第II形式と呼ばれる糸切り底の二彩小壺が該当し、形態は、イチジク形に近い体部と切り離しの糸切り底と口縁部は僅かに立ち上がり、断面三角形を呈するものの時期である。年代観についてはI期を8世紀の初頭よりややくだる頃、II期を8世紀前半代から中葉にかけての頃、III期を8世紀後半代、IV期については、8世紀末葉でも長岡京遷都以前のごく限られた時期とされている。当遺跡出土の奈良三彩陶片は、奥村清一郎氏の論考からすれば、発色の悪さ、器形・器壁の厚さなどから氏のIII期に相当する。

本器の概要・製作年代については以上のようなものであるが、群馬県内の奈良三彩陶の出土例は、現在報告されているものは、第2表のように9遺跡から19点があげられる他、富岡市の上野一之宮である貫前神社に伝世する小壺が一点みられる。この内、桧峯遺跡・十三宝塚遺跡火舎獣脚部・貫前神社伝世品を除くと小片であり、器形等の不明なものもある。

奈良三彩陶を出土した遺跡の性格をみていると寺院跡・官衙跡・集落跡である。寺院跡には、上野国分寺跡・山王廃寺跡（放光寺）・上植木廃寺跡がみられる。山王廃寺跡（放光寺）は、7世紀後半の白鳳期の建立で、出土瓦に「放光寺」とへら書き、または刻印がされた瓦が出土していることから、山ノ上碑文中の「放光寺」と同一視することが妥当と考えられ、「佐野屯倉家の氏寺」と考えられている。上植木廃寺跡は、

第4章 考 察



第761図 群馬県出土奈良三彩陶実測図

第2表 群馬県における奈良三彩陶出土地一覧

No.	遺 跡 名	所 在 地	器形・部位	実測図	出土遺構	適 要	文献
1	上野国分僧寺・尼寺 中間地域	群馬郡群馬町東国分・前橋 市元総社町	小 壺	第754図	G区22号住居跡		
2	上野国分寺跡	〃	蓋		W13西側	17次調査(2片)	註3
3	〃	〃	壺		塔基壇周辺	19次・29次調査(3片)	註4
4	山王庵寺跡(放光寺)	前橋市総社町	碗 底 部		N112W 8		註5
5	〃	〃	口 縁 部		N120W 8 III層	二彩	註5
6	中島遺跡	前橋市青梨子町			表土	二彩	註6
7	薬師前遺跡	前橋市青梨子町			17~25・28号住居跡		註7
8	桧峯遺跡	前橋市上泉町	小 壺		68号住居跡		註8
9	中I遺跡	藤岡市	蓋				註9
10	上植木庵寺跡	伊勢崎市上植木本町・本関 町			S 120-E 003トレンチ		註10
11	〃	〃			N020-E 003トレンチ		註11
12	〃	〃			〃		註11
13	十三宝塚遺跡	佐波郡境町伊与久	火舎獸脚部		第III基壇周辺		註12
14	〃	〃	火舎体部		37号住居		註12
15	〃	〃	坏		南限大溝		註12
16	〃	〃	鉢		第I基壇周辺		註12
17	〃	〃	〃		〃		註12
18	〃	〃	小 壺		住居跡	二彩	註12
19	〃	〃	托		土坑 註3		14・15
20	貫前神社蔵	富岡市一之宮	小 壺		伝世品		

第1節 古墳時代中期～奈良、平安時代の遺物

山王廃寺跡と同様に白鳳期の建立で法隆寺式伽藍配置をもつと推定され、その時期は7世紀後半から9世紀におよんでいる。寺院跡・官衙跡として十三宝塚遺跡がみられる。十三宝塚遺跡は、溝・柵による区画のなかを基壇をもつ建物等が検出され、刻字瓦の出土から佐波郡衙・有力豪族の私館等と考えられているが瓦塔等の出土がみられることから寺院跡とのみかたもあり遺跡の性格については明確ではない。なお、出土土器は、8世紀前半から10世紀代のものがみられる。その他の上野国分僧寺・尼寺中間地域、中島遺跡・薬師前遺跡・桧峯遺跡・中I遺跡は、集落跡であるが、上野国分僧寺・尼寺中間地域は、その名称が示すとおり、上野国分僧寺または尼寺との関連が考えられる集落跡である。中島遺跡・薬師前遺跡は、周辺に山王廃寺跡（放光寺）・宝塔山古墳・蛇穴山古墳等や近接する下東西遺跡では8世紀初頭の官衙的遺構が検出されており古代上野国内でも先進地域であったと推定される。桧峯遺跡は、一般的な集落跡で周辺にも特段官衙遺跡なり寺院跡等は現在まで発見されていない。中I遺跡では、調査地域で検出された遺構は浅間“B”軽石降下後の遺構だけであるが、周辺地域は古代「小野郷」に比定されており、奈良～平安時代にかけての集落跡の存在がうかがえる。県内の奈良三彩陶を出土する遺跡は、以上のようなものであるが、その遺跡の性格は、寺院跡・官衙跡、それに関連すると思われる集落跡のように中央との関係がうかがえる遺跡に集中するが、桧峯遺跡・中I遺跡のような現状では一般的な集落跡とみられる遺跡からの出土もあり奈良三彩陶が官営によって製作され、賜与されたものと考えられているものであるところから、その背景なり経緯が注目される。

上野国分僧寺・尼寺中間地域をはじめとし、集落跡・竪穴住居跡からの奈良三彩陶の出土は、県内では5遺跡で出土しているが、近接する長野県・埼玉県等からも3例と2例の報告例がみられ、群馬県の例を含めると11例がみられる。集落跡・竪穴住居跡出土の奈良三彩陶の内でも遺構に伴って出土し、その遺構の年代の推定できるものは、下神遺跡・桧峯遺跡のものがあり、それぞれ8世紀後半代・8世紀中頃であり、出土住居跡の供伴遺物との年代差は、四半世紀から半世紀程度であり大きな隔たりはみられない。また、他遺跡のものも出土住居跡の年代観は、8世紀後半から9世紀前半代と下神遺跡・桧峯遺跡の例と同様である。このことは、奈良三彩陶が官営工房により製作されたものでその用途が仏事なり祭礼などの特別な用途に使用されたものであり、祭祀遺跡等の出土状態から使用された奈良三彩陶の一次的な賜与は考えにくい。また、

第3表 県内及び隣接県の奈良三彩陶を出土した集落跡・竪穴住居跡例

No.	遺跡名	所在地	器形・部位	出土遺構・位置	遺構・供伴遺物の年代	文献
(長野県)						
21	中道遺跡	上伊那郡箕輪町中箕輪	小壺蓋	5号住居址床上5cm	中道I期(8世紀代) (9世紀前半か)	註16
22	下神遺跡	松本市神林	小壺	SKKS10号住居址床面上		註17
23	前山中道遺跡	佐久市前山	小壺	住居址		註18
(埼玉県)						
24	山田遺跡	坂戸市片柳新田	火舎	33号住居跡	8世紀末～9世紀初頭	註19
25	若葉台遺跡	入間郡鶴ヶ島町富士見	小壺	B区6号住居址	8世紀後半	註20
(群馬県)						
1	上野国分僧寺 尼寺中間地域	第2表を参照	小壺	G区22号住居跡床下	VIII期 10世紀前半	
6	中島遺跡	〃		表土		註6
7	薬師前遺跡	〃		17～25・28号住居跡	8世紀末～10世紀末	註7
8	桧峯遺跡	〃	小壺	62号住居跡床面	(8世紀後半)	註8
9	中I遺跡	〃	壺蓋	表土		註9
14	十三宝塚遺跡	〃	火舎体部	37号住居中央部床面	A類(9世紀前半)	註12

第4章 考 察

奈良三彩陶を所有できた上級貴族においても奈良県小治田安万侶墓^{註21}のように副葬品として埋葬している点からも奈良三彩陶は貴重品であり、庶民の所有できるような器ではなかったことは容易に類推できることから下神遺跡・松峯遺跡をはじめとする奈良三彩陶の製作年代と堅穴住居の年代との隔りがあまりない堅穴住居の奈良三彩陶所有が正当な経路をへたものならば、その住人の地位なり権威が推し測れる。また、今日までの多数の堅穴住居跡の発掘調査における出土遺物を見ても数世代に渡って伝世されたような遺物の出土例はほとんどみられていない。当遺跡G区22号住居跡の年代は、10世紀前半代の年代が与えられ、奈良三彩陶の製作年代とは、二世紀近くの年代差がみられる。当遺跡周辺における奈良三彩陶を所有できる施設なり人は、近接した所に上野国分僧寺・国分尼寺があげられる。11世紀に記述された「上野国交替実録帳」の国分寺項^{註23}によれば、当時すでに寺域を画する築垣が南大門をはじめとする諸門とも既に全壊して修復されないままに放置されていたとみられ、国分寺の衰退ぶりが窺える。この様な状態は、相当以前からの状態であったと考えられ、当遺跡の出土遺物のなかには、本来寺院が所有していたと考えられる出土遺物が多くみられる。こうしたことからG区22号住居跡出土の奈良三彩陶も国分寺が衰退していくなかで流出したものの一つと考えられる。

註

- 1 小田富士雄 「奈良三彩小壺」『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会 1979
- 2 奥村清一郎 「奈良三彩小壺とその出土遺跡について」『京都府埋蔵文化財論集 第1集』(叻) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987
- 3 『史跡 上野国分寺跡発掘調査概報 3』群馬県教育委員会 1983
- 4 『史跡 上野国分寺跡発掘調査概報 6』群馬県教育委員会 1986
- 5 『山王廃寺跡第4次発掘調査概報』前橋市教育委員会 1978
- 6 『中島遺跡発掘調査概報』前橋市教育委員会 1981
- 7 『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報』前橋市教育委員会 1980
- 8 『松峯遺跡発掘調査報告書』前橋市教育委員会 佐田建設株式会社 1982
- 9 『森遺跡・中I遺跡・中II遺跡』群馬県教育委員会 (叻) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 日本鉄道建設公団 1983
- 10 『上植木廃寺発掘調査概報 I』伊勢崎市教育委員会 1984
- 11 『上植木廃寺一昭和59年度発掘調査概報一』伊勢崎市教育委員会 1985
- 12 『十三宝塚遺跡発掘調査概報 II』群馬県教育委員会 1976
- 13 出土遺物については境町教育委員会 坂爪久純氏より御教示を受けた。
- 14 巽 淳一郎 「陶磁(原始・古代編)」『日本の美術No.325』至文堂 1985
- 15 『長野県中央埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡箕輪町一昭和48年度』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1974
- 16 『松本市下神・町神遺跡緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会 1984
- 17 『長野県史 考古資料編 全一巻(一)遺跡地名表』1981
- 18 『山田遺跡・相撲場遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会 1973
- 19 『若葉台遺跡A・B区発掘調査報告書』鶴ヶ島町教育委員会 1984
- 20 () 付の年代は、年代についての記載がないため出土遺物より判断した。
- 21 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 『日本古代の墓誌』1977
- 22 本報告書P649~668、桜岡正信 「土器の分類と時期設定」
- 23 前沢和之 「『上野国交替実録帳』国分寺項について—その作成過程と上野国分寺をめぐる二・三の問題—」『群馬県立歴史博物館紀要 第1号』群馬県立歴史博物館 1980

参 考 文 献

- 『日本の三彩と緑釉』五島美術館編 (叻) 五島美術館 1974
田中 琢 「三彩・緑釉」『世界陶磁全集2 日本古代』小学館 1969
中沢充裕 「群馬県前橋市松峯遺跡出土の奈良三彩小壺」『考古学雑誌第68巻第4号』日本考古学会 1983
第三次沖ノ島学術調査隊 「宗像沖ノ島」宗像大社復興期成会 1979
群馬県教育委員会 『上西原・向原・谷津』1986

脱稿後、前橋市下大屋町所在の上西原遺跡82号住居跡より三彩小壺が出土していることを知った。上西原遺跡は、方形の区画溝・柵列・基壇建物跡が検出され、文字瓦・瓦塔・塑像・「寺」、「上寺」、「泰」等の墨書土器の出土がみられることからこの方形区画内は、寺院跡と推定されている。

82号住居跡出土の小壺は、表面の剝離が著しく淡い緑色と白色しか確認されていないが褐色細も施されていた否能性がある。詳細については、報告されていないため住居の時期等は不明である。



『上西原・向原・谷津一昭和60年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告一』群馬県教育委員会 1986年

第2節 古墳時代(中期)～平安時代の遺構

第1項 住居形態について

今回の報告対照区であるF・G・H(11溝南半)区では、出土土器の検討から5世紀代から11世紀代(鎌倉時代以降を除く)までの生活の痕跡が検出されている。その中で住居跡と認識されたものは、7世紀前半以降のもので約225軒が検出されている。重複が比較的多く全体形をとらえられないものも多く存在しているが、比較的状态の良いもので概ね年代のとらえられるものについて住居形態の分類を試みたい。このことによって住居形態の変遷及び、土器同様に集落形成上の画期を求め得ると考えたためである。また、住居の年代観については、住居跡そのものからは、重複関係による相互の相対年代以外求めることができないことから、住居内出土遺物によって判断し、土器分類から求めた時期設定に従って位置づけを行った。

分類にあたっては、第1に平面形態から大別し、それにカマド位置・柱穴の有無・壁溝の有無等の各要素及び便宜的に4m未満を小、4m以上5m未満を中、5m以上を大とし細分をした。住居形態とカマド形態の上には密接な関係が考えられるが、カマドについては後に詳述するのでここでは触れない。

第762図は、検出されたもので条件の良いものを位置づけたものである。空白部は理論的にはあるはずであるが、実際には検出されていない部分である。他遺跡においてこの空白部を埋める住居が検出されているが、それらは時代的、地域的な相違と理解されるものであろう。

A群としたものは、平面正方形を基本とするものであり、比較的掘り込みは深く、柱穴・壁溝及びしっかりとした貯蔵穴を備えるものが多い。また、比較的大形のものが多いことも特徴として上げることができる。









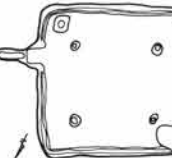



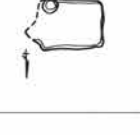


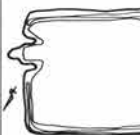
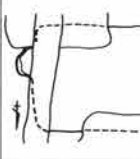
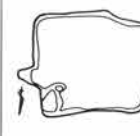
B群としたものは、平面縦長長方形を基本とするものであり、A群に次いで掘り込みはしっかりとしている。また、検出例が他に比してあまり多くないのが特徴として上げることができる。

C群としたものは、平面横長長方形を基本とするもので、掘り込みは比較的浅いものが多い。また、当遺跡において最も多く検出されており、主体となる住居形態である。このタイプの住居跡は、壁溝を有するものはみられるが、柱穴が検出される例はきわめて少なく、最大の特徴とみることができる。

D群としたものは、平面形は横長長方形を基本としながらも、カマド設置部の対方向の壁の一部が張り出すタイプである。例はきわめて少なく一般化しえないが、掘り込みの状態や柱穴・壁溝の有無から、C群にごく近い位置にあるものと考えられる。

以上平面形態から4大別したものを各要素によって細別すると、36種のタイプがみられることになる。これを、各期に位置づけたが第4表である。この表によれば概ねA群→B群→C群という流れが看取されることがわかる。A群の主体となるのはII・III期であり、中でもA-1, A-5がこの時期を特徴づけると思われる。また、A群はVI期以降にも例はみられるが、大半は小形で柱穴・壁溝等を有さないタイプである。B群はIV期以降IX期までみられるが、主体はIV～VII期と思われる。C群とIV期以降にみられ、主体はVI～IX期にあらうと思われるが、X期まで確実に継続していることがわかる。D群は例が少なく傾向をとらえるに至っていないが、先述のようにC群との関係が強そうである。

以上のことからA群はIII期までに主体があり、B・C群がIV期以降出現していることがわかる。また、X期に属すものはC群だけであり、軒数が激減していることがわかる。したがって住居形態の上からは、III期とIV期の間及びIX期とX期間の画期を求めることができる。この2つの画期は土器群の上にも明瞭に表われているが、この画期が何に起因するものであるかについては、今後整理を進めていくなかで、多角的な検討を加え、結論に結びつけたいと考えている。

	カマド中央		カマド右寄りA				カマド左寄りC		カマドコーナー部D		
	柱穴無1	柱穴有2	柱穴有2	壁溝有2	壁溝無1	柱穴無1	柱穴無	壁溝無	柱穴無	壁溝無	
4											
											
5											
4											
											

第2節 古墳時代（中期）～平安時代の遺構

縦長長方形		B-3	B-5			
}		C-2	C-7	C-10	C-13	C-14
横長長方形	C-1	C-3	C-5	C-8	C-11	
}		C-4	C-6	C-9	C-12	
張り出し有		D-1				D-2

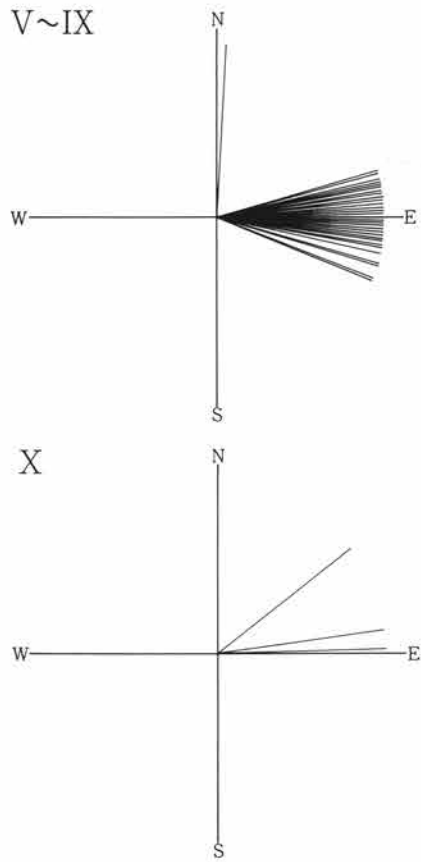
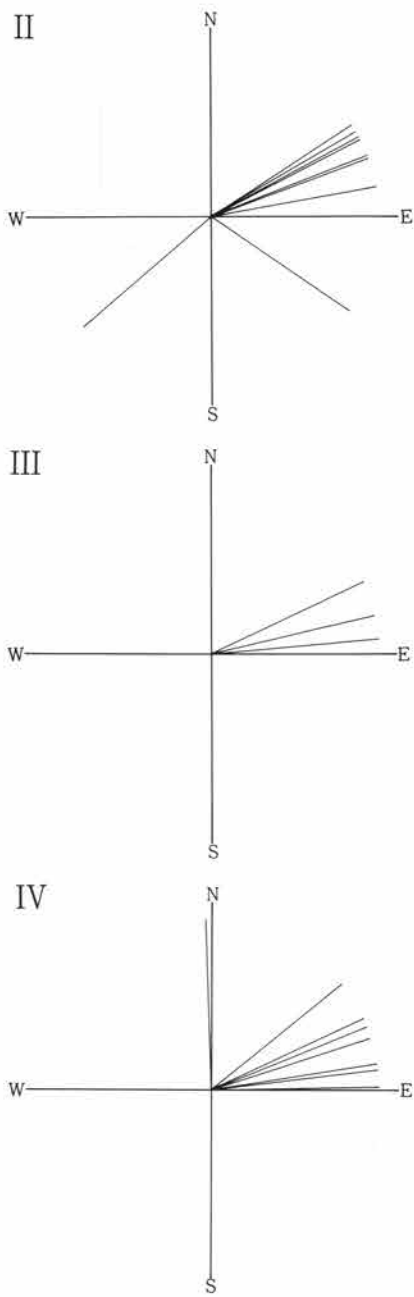
第762図 住居分類

第4章 考 察

分期	A										B										C														D		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	1	2	
II	○	○	◎		○	○																															
III				○	○		○	○	○																												
IV											○																										○
V																																					
VI			○																																		
VII			◎						◎																												
VIII			◎						◎																												
IX			◎						◎																												
X			◎						◎																												

第4表 期別住居分類一覽

○ 1 ◎ 2~4 ● 5~



第763図 期別住居主軸方位

第2項 カマドについて

- 1 はじめに
- 2 カマド研究の状況
- 3 形態分類
- 4 構築材について
- 5 形態及び年代的な変遷について
- 6 まとめ

1 はじめに

当遺跡の今回報告分であるF・G区とH区第11号溝以南の住居跡は、古墳時代後期から奈良・平安時代の約400年間に渡る225軒である。その中でカマドが附随する住居跡は181軒(その内作り替えを行っているものは6軒)に及び、年代的にも多岐に渡るために形態も様々である。そのため何らかの傾向を把握できるのではないかと考え、分類を試み、気付いたことを述べてみたい。

2 カマド研究の状況

分類を試みるに当り他の遺跡における類例及び研究等を調べたが、カマドは残存状態などの条件に恵まれないと形態や年代観を捉えにくいと、調査者によって取り扱い方も様々で、出土遺物のように詳細な考察がなされている例はさほど多いとは言えなかった。以下、何例か県内・外における例を上げてみたい。

県内では、藤岡市堀ノ内遺跡群で古墳時代後期～平安時代に渡り、住居跡の分類と共にカマドを11期に分けて形態的特徴を述べている。富岡市本宿・郷土遺跡でも同様に古墳時代後期～平安時代に渡り、住居構造を12期に分けてカマドの特徴も共に述べている。伊勢崎・東流通団地遺跡では、やはり古墳時代後期～平安時代のカマドを構築法と形態によって3類9種に分けている。堀ノ内遺跡と共に古墳時代の類例が多い。渋川市有馬条里遺跡では、カマドを年代によって古墳時代2類・奈良時代3類・平安時代3類に分類している。吉岡村大久保A遺跡II区では、カマドを4類に分けてその特色を述べている。群馬町北原遺跡では、住居跡を6期に分けて各期におけるカマドの特徴を述べている。以上、県内における比較的規模の大きい遺跡の例を上げてみたが、はっきりした分類を行っている例は少なく、住居形態と共に時期的な特色を述べている例が多い。

一方県外では、東北方面で青森県碓ヶ関村古館遺跡・永野遺跡、岩手県下羽場遺跡などで断面形態による分類が行われている。関東では、千葉県上ノ台遺跡で平面形態と断面形態を併用して5類8種に分けている。同じく、小室遺跡では壁への掘り込み方をもとに4類7種に分けている。埼玉県岡部町六反田遺跡ではカマドを10期に分けその特色を述べている。

また、多元的なものとしては、横川好富氏の「竈の出現とその背景」・谷 旬氏の「古代東国のカマド」などがある。横川氏は、カマドの分類は使用時を念頭においてなされるべきであると考え、使用時の形式で3形式、壁体への切り込みで6種に分類している。谷氏は特に熱効率を重視して分類し、各地域における年代の変遷も考察している。両氏共に出現期のカマドについて述べられており、他にも炉からカマドへの移行に関して記述されたものは少なくないが、本遺跡には相当期の例がないので参考文献として上げたい。

以上、管見に昇った例を上げてみたが、この他にもカマド祭祀などに関する記述等はあるが直接年代観に結びつけられるようなものは数少ないと言える。

第4章 考 察

3 形態分類

カマドの分類方法は既に述べたように様々であるが、本遺跡では残存状態の悪いことを考慮して、一般的な平面形態を中心に竪穴壁への位置及び一部断面等の条件を加味して行った。また、カマドの部分名称は一般的なものによるが、カマドの構築位置を示す言葉として屋内・屋外という言葉は使用せず、壁内・壁外（竪穴壁及びカマド壁）としたい。

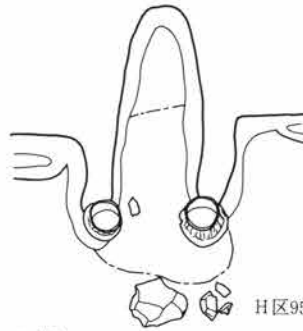
A群



H区15住

2類

B群



H区95住

1類



H区14住

2類

A群 袖を竪穴壁内に伸ばしてカマドを構築し、燃烧部と明確に区別された煙道を有さない。

1類 カマド全体が竪穴壁を掘り込むことなく竪穴内に構築され、煙り出しになると思われる奥壁部が竪穴壁と一致するものと、壁から離れるものに分けられる。本遺跡には類例はないが、他の遺跡の例を参考に、分類上必要と考えて想定する。

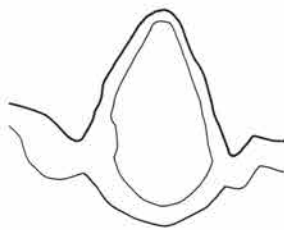
2類 1類と異なり、煙り出しに当たる部分は竪穴壁を掘り込んで作られるが、B群のように明確な煙道としては突出しない。

B群 燃烧部はA群同様に袖を竪穴壁内に伸ばすことにより構築されるが、煙道は竪穴壁を掘り込んで壁外へ横に長く伸びる。

1類 燃烧部は竪穴壁内に袖を煙道と平行に近く伸ばして造られるため、燃烧部幅と煙道幅はほとんど差がない。また、段差もあまり持たずに続くため、燃烧部と煙道部は明確に区別されない。形状は、細長い逆「U」字状となる。

2類 1類と異なって煙道は燃烧部奥壁の一段上った所から壁外へ伸びるため、燃烧部と煙道は明確に区別される。

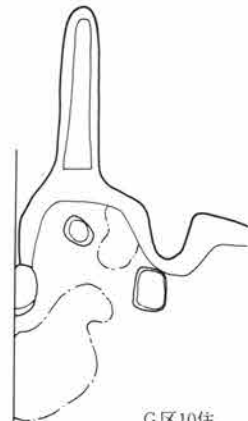
C群



H区74住

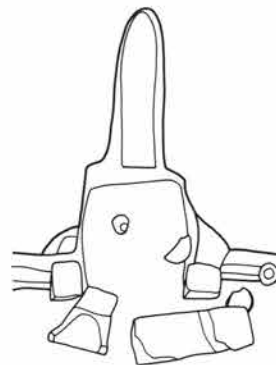
1類

D群



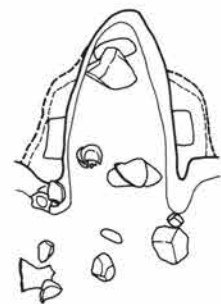
G区10住

1類



H区26住

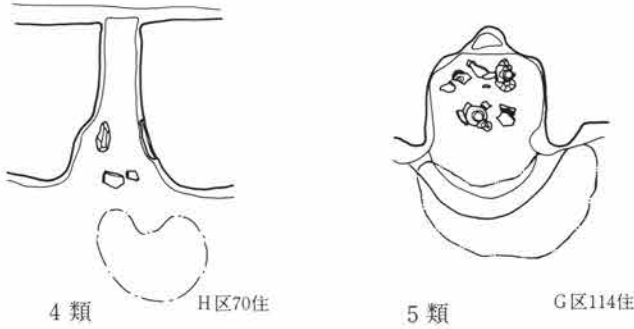
2類



H区16住

3類

D群



C群 カマドの大部分は竪穴壁を三角形状に掘り込んで構築し、袖はやや壁内に突出する。燃烧部は壁外になるが、煙道部とは明確に区別されない。

1類 C群として一群を設けたが明確な形態を示しているとは言えず、B群・D群の崩壊形かE群の一部に属する可能性も考えられる。

D群 燃烧部は竪穴壁を掘り込んで壁外に造り出し、更にそこから煙道が伸びて平面形は「凸」字状を呈する。

1類 燃烧部は竪穴壁を矩形に掘り込んで構築し、煙道は燃烧部奥壁の一段上った所から細長く伸びる。1類の特徴としては、袖がやや壁内に突出することである。

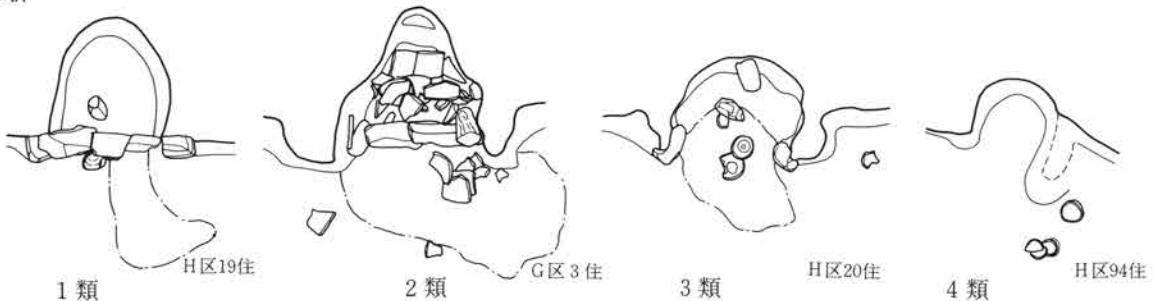
2類 燃烧部・煙道の形状は1類と同様だが、2類は1類のように袖が竪穴壁内に突出せず、竪穴壁から燃烧部へのコーナーに袖石等を用いる。

3類 3類は1・2類と異なり、掘り方のみ「凸」字状を呈する。燃烧部を構築する際に「凸」字の内側に粘土・石等を充填し、袖をやや突出させるため、平面形態は逆「U」字状になる。煙道は1・2類のように細長く伸びず、比較的短い。

4類 燃烧部は1・2類のように明確な矩形を呈さず、比較的狭い。また、煙道も1～2類のような明確な段差を持たずに続くため、形状は細長い「凸」字状となる。

5類 燃烧部は竪穴壁を矩形（やや丸味を帯びる場合もある）に掘り込み、燃烧部奥壁の一段上った所からごく短い煙道を持つ。袖の部分をやや突出させる例もある。

E群



E群 燃烧部は竪穴壁を掘り込んで構築するが、全体が壁外に造り出されるものばかりではない。B・D群のような明確な煙道を持たない。

1類 燃烧部は竪穴壁を逆「U」字状、または半円状に掘り込んで壁外に造り出す。希には矩形を呈する場合もある。袖は壁内に突出せず、竪穴壁から燃烧部へのコーナーに袖石等を用いる。

第4章 考 察

2類 燃烧部は竖穴壁を掘り込んで造り出し、袖をやや壁内に突出させる。燃烧部奥壁の上部からゆるやかな角度のごく短い煙道を持つ。構築に際しては、土器及び石等を多用することが特徴的である。

3類 燃烧部は竖穴壁を掘り込み、袖をやや壁内に突出させて構築する。形状は小形で不整形な半円状を呈し、燃烧主体は完全に竖穴壁外とは言えず、竖穴壁内外の中間となる。

4類 住居のコーナー部を利用してやや突出させて作られる、小形のカマド。

以上、5群14類に分類を試みたが、前述のようにカマドの残存状態は全体的に良いとは言えず、E群以外は類例が多くないので多少の誤りがあるかもしれないが、それは今後の報告例の増加によって補ってゆきたい。

4 カマドの構築材について

カマドを築く際に補強のため用いられる構築材については様々なものがあり、各地域及び年代などによって異なる。当遺跡においては、粘土・石・土器・瓦などが用いられており、各素材別に述べてみたい。

〈粘土（白色粘質土）〉

一般的には多用されており、補強材というよりは構築主体をなす素材で、多くは袖及び天井部に用いられるが、当遺跡では比較的使用例は多くない。カマドの残存状態が悪いので天井部に用いられて残っている例はなく、崩壊状態がセクションで看取できるものや、袖に用いられている例もあまりない。G区第14号住居跡・H区第10・26・93・95号住居跡などである。これらの住居跡のカマドは、B群またはD群に分類されるもので、他の補強材をあまり用いないA群などと共に比較的古い年代のものに用いられることが多い。しかし、今回報告分であるF・G・H区ではこの形態の遺構例が少ないが、今後報告区が北側に移るにつれて増加していくと思われる。

〈石〉

石材は当遺跡で、B・D・E群に渡る多くのカマドの袖・支脚・焚口部天井・燃烧部壁及び掛け口の補強などあらゆる部分に多用されている。大別すると加工石と未加工石に二分され、さらに加工石は地山土中に含まれているものと川原から採取したものに分けられる。当遺跡では、この中でも加工石（火山灰の堆積した凝灰岩質の地山を切り出したもの）の使用例が最も多く、次いで地山に含まれている石、そして川原石は最も少ない。地山を切り出した石材は砂質に近いため加工がしやすく、未報告区では採取跡が確認されていることなどから、入手が簡単であったので最も多く用いられたのであろう。同様の採取跡は、隣接の鳥羽遺跡でも確認されており、地域的特性を示すものとする。

〈土器〉

B群やD群に属するカマドで、袖の先端部に袖石ではなく長甕を用いる例が見られる。他の遺跡では、長甕を焚口部天井や煙道に用いたり、土器を支脚に転用する例なども見うけられるが、本遺跡ではこのような類例がない。土器を構築材として使用していることが確認できるのは数少ないが、カマド内では数多くの土器片が出土しており、土器としてではなく構築材として用いられていたものも多いと思われる。カマド祭祀との関連も考慮されなければならないが、月夜野町村主遺跡で検出されたカマドのように、天井及び掛け口の補強等に用いられていた可能性は考えられるのではないかと。当遺跡では村主遺跡に見られるようなタイプであるE群2類などの場合には、次に述べる瓦などが用いられていることから考えられよう。

〈瓦〉

当遺跡におけるカマド構築材の特色は、石に次ぐ使用例を持つ瓦の多用にある。袖・支脚・燃烧部壁・天井・煙道などあらゆる箇所に使用されている。国分僧寺と国分尼寺の中間に位置するという、当遺跡の地理

第2節 古墳時代（中期）～平安時代の遺構

的条件が大きく影響していると思われる。瓦は希にはD群に属するH区第59号住居跡などにも用いられるが主にカマドとしては比較的新しい形態のE群1・2類などに使用される場合が多い。一般的には、国分寺の荒廃に伴って入手し、使用されたと考えられるが、9世紀前半と想定されるG区第56号住居跡で使用されており、他の9世紀代の住居跡からも出土していることから、国分寺が機能していたと思われる時期からすでに入手できたらしい。運搬や修理の際に破損したものを入手したのであろうか。井戸や未報告区の住居では完形品も見うけられ、いずれにしても国分寺との関係の深さがうかがえる。

構築材全般については、一種のみを用いるだけでなく、数種を組み合わせる用いられることが多い。使用部位に合わせてとも考えられるが、手近な入手しやすいものを用いていると考えられる。

5 形態及び年代的な変遷について

カマドの形態分類をすることによって年代及び地域的特色を捉え、その上で更に編年の可能性を求めたわけであるが、必ずしも期待したような結果が得られたとは言えない。分類は前述のように、カマドの形状や燃烧部の位置を中心に行った。燃烧部壁内・燃道不明確→燃烧部壁内・有煙道→燃烧部壁外・有煙道→燃烧部壁外・煙道不明確、すなわちA群→B群→D群→E群（C群は不明な点が多いので除く）と推移すると思われたが、土器編年と明確に対応できる住居跡のカマドを抽出すると下表のようになった。

	A群		B群		C群	D群					E群				備考
	1類	2類	1類	2類	1類	1類	2類	3類	4類	5類	1類	2類	3類	4類	
I															土坑のみで住居なし
II			○	○	○										
III		○					○	○							
IV				○							○		○	○	
V						○					◎				
VI					○					○	◎	○	○		
VII									○	○	◎	○	○		
VIII									○	○	●	○	○		
IX									○	○	●	○	○	○	
X											○				

○ 1 ◎ 2~4 ● 5~

第5表 期別カマド分類一覧

A群1類は初期のカマドを想定して分類に加えたが、当遺跡には相当期のカマドは存在しない。2類は1類のやや発展した形で、他の遺跡（堀ノ内遺跡・小町田遺跡・歌舞伎遺跡など）では、1類と同じく本遺跡のI期以前に相当する古い段階に見られるのが普通である。しかし、本遺跡ではIII期に当るH区第15号住居跡に見られる。これは未報告区の状況にもよるが、初期のカマドの形態が後まで残った特殊な例かもしれない。

第4章 考 察

い。残存深度もあまり悪くはないので、他群に属する可能性は薄いと思われる。

B群は通常であればA群に次いで現われるが、本遺跡の今回報告区の中では一番古い時期に属する。G区第14号住居跡は燃焼部を壁内に持ち、短いながらも煙道を持つのでB群2類に分類したが、年代的にもIV期に属し、B群の他のカマドと適合しない。また、形態的にも煙道が直立に近い形になる可能性も考えられ、類例があれば別群として考えた方が良いかもしれない。

C群は分類の項でも述べたように残存形態はE群に近いが、年代的にB群と同様な時期にも存在するのでB群の崩壊形の可能性も考慮してC群として独立させ、この位置に設定したが、不明な点が多い。

D群は形態的には「凸」字状を呈して類似点も多いが、年代的に見ると1～3類と4・5類にはっきり二分される。2・3類はB群に次ぐ時期に存在し、特に2類の燃焼部は大形ではっきりした矩形を呈し、長い横煙道を持ち、横煙道タイプのカマドの最も発展した形と言えよう。3類は1例のみなので確実とは言えないが、表面状の形態は逆「U」字状を呈し、燃焼部は壁外に出るが袖をやや突出させることなどから、B群に近い形を示すと言える。1類はV期に類例があるのみだが、今後の報告区では2類に近い形態を示し、同様な時期に位置すると思われる。4類は1・2類と異なって小形で浅く、年代的にもE群と同時期に存在することなどから、横煙道タイプの残存形かと思われる。当遺跡にはあまり見られないが、F区第56号住居跡に見られるように、住居のコーナーまたはコーナーに近接して作られることが多い。5類は4類と共に他のD群と年代的隔たりを持つが、形状的にも極端に煙道が短く、1～4類とは排煙方法が異なっていたと思われる。

E群は当遺跡の主流をなすカマドの形態で類例も多く、この形態を細分化して年代観を捉えられればと考えたが、既述のような残存状態のために4形態に分けられたのみであった。第5表に見られるように、1～3類は年代的な差異がさほど見られず、ほぼ同時期に共存すると言える。しかし1～3類は残存状態によってはほぼ同様な形態を示す場合もあり、分類においては多少の重複も考えられる。2類はE群の中でも他類と異なり、短いながらも煙道状の煙り出しを持ち、構築材を多用しているが、1・3類についてはそのような痕跡が少なく、構造上の相違点があったと思われるが詳細は不明である。4類は住居のコーナーを利用して作られ、特に小形の住居跡に見られるが、D群4類の煙道が残らなかった状態が含まれている可能性もありうる。

以上、各群別に特色を見てきたが、改めて年代的な流れを総合的に見てみると、A群→B群→D群(1～3類)→E群・D群(4・5類)と推移してゆくと思われる。この中でも第5表に見られるように、E群の出現するIV期周辺がカマドの転換期になると思われ、これは炊飯用具である甕の長胴から短胴化への変化の出現する時期とも一致する。このカマドの変化は、調理する食物及び調理法の変化の外に、後述するように住居構造の変化との関連も考えられることから、重要な意味を持つと思われる。今後の資料の増加を待ちながら整理を進めていく上で追求してゆきたい。

6 ま と め

カマドの形態を年代的な変化と共に考えていると多くの疑問に突当たったが、その中で最も強く残ったのが住居の上屋構造とカマドの関係で、それに深くかかわる煙道部の問題である。B群・D群1～4類のような横煙道の形態をとる場合は、燃焼部が竪穴の掘り込みの内・外のどちらに構築されるかによって、壁の位置及び屋根の構造等にある程度の疑問は残るが、煙道が残存するためにその排煙機能を捉えることは比較的容易と言える。しかし、他の煙道の残存状態の悪いカマドの場合には、どのような構造で屋外に排煙していたのか不明な点が多い。

最近、子持村黒井峯遺跡の竪穴住居跡で、火山灰による良好な埋没状態によって直立に近い煙道が屋根から突出した状態で検出された。しかし、この竪穴住居跡は壁を周堤帯で囲み、周堤帯上に葺き下した屋根を土で覆った、掘り込みも深く半地下式とも言える特殊な形態をしていた。近接する渋川市中筋遺跡でも同様な形態の竪穴住居跡が検出されており、両遺跡の住居跡は共に火山灰から6世紀の古墳時代後期に属するものである。けれども古墳時代以降のすべての竪穴住居がこのような形態であったかどうかは疑問の余地があり、地域的もしくは年代的特性を示している可能性もある。一般的に古墳時代以降の竪穴住居には壁の立ち上った切り上げ構造の可能性も考えられ、カマドが横煙道の形態をとらないとすると、どのような煙道構造で屋外に排煙を行っていたのであろうか。燃烧部が竪穴の掘り込み外に突出することなく、周堤帯とある程度の深さを持つ住居ならば、黒井峯遺跡の例に近く可能かと思える。しかし、燃烧部が竪穴の掘り込み外に突出するE群については、小形化した残存深度の浅い住居に設けられることが多く、壁の位置及び煙道構造は特に不明な点が多い。

一方、今までは平地式住居が早くから普及していたのは畿内周辺で、東国では中世に至るまで竪穴住居に居住していたと考えられていたが、黒井峯遺跡や中筋遺跡では竪穴住居と併存する平地式住居が検出されている。この平地式住居に見られるカマドは壁から離れて設けられた周囲を石などで囲った簡素なもので、壁や屋根に茅材が用いられている関係上、当然屋外排煙を目的とする煙道は設けられていない。また、富士見村田中田遺跡では、古墳時代後期と思われる竪穴住居跡から同様な三方を石と粘土を用いて囲っただけのカマドが検出されている。日常的な炊事のみを目的とするならば、熱の逃げるのをある程度防いで土器を掛けられれば、このように簡素なものでも十分用をなしたと思われる。

すなわちカマドは、常時火を焚くとか、より高熱を得たいとか何らかの目的を持たなければ、煙道を設けて屋外に煙を排出する必要性は薄かったのではないだろうか。煙にも屋根や壁に用いられていると思われる茅材などの持ちを良くするという利点があって現代に至るまで農家などではいろいろがその役目を果たしてきたことは知られており、古墳時代初期までは炉を用いていたこともあり、屋内排煙にさほどの抵抗感があったとは思えない。屋内に排出された煙は、屋根に設けられていたであろう煙出しから屋外へと考えても自然だと思われる。これらのことから考えても、住居構造上から屋外排煙を目的とする煙道を持つ可能性の薄いE群のカマドに関しては、屋内排煙の可能性も考慮されなければならないのではないだろうか。残存深度・カマド祭祀による破壊等の問題はありますが、E群の2類を見ても煙出しの先に屋外に伸びる煙道が続いていたとは考えにくく、他のE群も2類以上に煙道を持つ可能性の方が低いと思われる。E群に属するカマドについては他のカマドと異なって平地式住居に見られる簡素な形のカマドの系譜を引くものの可能性と、中世以降に見られるいわゆるヘツツイと称されることの多い煙道を持たないカマドへの移行期との二つの可能性が考えられる。

このようにカマドの構造は住居構造と深いかわりを持つものと思われるが、不明な点が多い。しかし、カマドはその形態と構築位置によっては竪穴住居の構造を考える上で重要な手がかりとなるものと思われ、調査時・報告時にもっと重視されても良いのではないだろうか。

この拙文を書くにあたり、子持村教育委員会の石井克己氏には貴重な発掘成果を御教示いただいた。文末ながらここに深く感謝の意を表します。

註

- 1 煙道を持たないものをカマドと呼ぶかどうかは疑問だが、民俗例でも「カマド」・「ヘツツイ」・「クド」等呼称は様々で、語源的に見てもはっきり形態的定義と結びついていないと思われるので、一応カマドと呼んでおく。

第4章 考 察

- 2 カマドについての整理を進めていて、この外に灰面のかき出しがカマド右側に寄る例が多く見られ、時には貯蔵穴上面にまで及ぶ例もあったことと、支脚がカマドの中心よりやや左に寄る例が多いという事実が気が付いた。共にカマドの6分の1近くにまで及んでおり、使用法に何らかの傾向があったと思われるが、これに当てはまらない例も数多いため、今後の検討課題としてゆきたい。なお、この灰面がカマド右側前面に寄る例が多いという事実は、埋文月報8月号(1987)に外山政子氏も指摘されている。

参 考 文 献

- 平出遺跡調査会 『平出』 1955
小出義治 「住居と集落」 『新版考古学講座』5 雄山閣 1970
横浜市埋蔵文化財調査委員会 『横浜市埋蔵文化財調査報告書』I 『横浜市緑区東原遺跡発掘調査報告』 1972
桐原 健 「釜から鍋へ」 『信濃』第三次第25巻第11号 1973
千葉県開発庁・(財)千葉県都市公社 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書I 小室』 1973
石部正志 「考古学から見た火」 『日本古代文化の探究 火』 社会思想社 1974
和島誠一・金井塚良一 「集落と共同体」 『日本の考古学』V 河出書房新社 1974
石野博信 「考古学から見た古代日本の住居」 『日本古代文化の探究 家』 社会思想社 1975
駒沢大学考古学研究室 『先史』9 「千葉・上ノ台遺跡第II次調査概報」 1975
桐原 健 「古代東国における電信仰の一面」 『國學院雑誌』第78巻9号 1977
岩手県教育委員会 日本道路公団 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』 「下羽場遺跡」 1979
青森県教育委員会 『永野遺跡』 1980
〃 『碓ヶ関村古館遺跡』 1980
富岡市教育委員会 『本宿・郷土遺跡』 1981
大里群岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館編 『六反田』 1981
藤岡市教育委員会 『A₁堀ノ内遺跡群』 1982
群馬県企業局 『伊勢崎・東流通団地遺跡』 1982
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『歌舞伎遺跡』 1982
谷 旬 「古代東国のカマド」 『研究紀要』7 千葉県文化財センター 1982
渋川市教育委員会 『有馬糸里遺跡(沖田地区)』 1983
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『小町田遺跡』 1984
吉岡村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団・『大久保A遺跡II区』 1986
群馬町教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団 『北原遺跡』 1986
群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『大原II遺跡・村主遺跡』 1986
富士見村教育委員会 『田中田・窪谷戸・見眼遺跡』 1986
福田健司 「南武蔵における平安時代後期の土器群」 『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会 1986
福田健司 「古代から中世へ」 『東京考古』4 東京考古談話会 1986
子持村教育委員会 『黒井峯遺跡発掘調査概報』 1987
渋川市教育委員会 『中筋遺跡発掘調査概要報告書』 1987
横川好富 「甕の出現とその背景」 『埼玉の考古学』 新人物往来社 1987

第3節 鎌倉時代以降の遺構について

第1項 検出遺構について

はじめに

前刊の第1分冊と今次の第2分冊の報告書で掲載した室町時代の遺構は多種・多数に及んだ。第1分冊では、長尾氏と係わる寺院跡(長尾氏菩提寺?)等に就いて報告した。今次の報告では、大規模溝状遺構(道)・館跡と想定される一群等について報告した。本項では、今次報告の遺構の性格を考え、前刊書の諸遺構と今次分を含めた形での2・3の遺構についての意義付を行ないたい。

北側調査区内から検出された遺構について

北側調査区内から検出された遺構の所見等については、第3章第2節で先述した。検出された遺構は、群としての存在と、この群に包括されなかったものが在る。前者の群としての存在は、前述した“館、跡状であるが、H・I区内で検出されたH20溝・I2溝により囲繞区画される範囲についても館跡状のものとして考えた。しかし、この内側では建物等の存在は認められていない。後者は各部で散在する諸遺構であるが、館跡との関連性は考えられるものの、具体的には述べなかった。ここで先ず、館跡状の遺構群について考え、その後後者の一群について考えたい。

これらの館跡として想定される遺構群は、検出した各遺構の配置状態・規模・形状から想定されるものである。この館跡を想定させる要素は上述のとおりであるが、館の定義としての要素は、上述の要素を鑑みての結論である。すなわち、溝・柵列等により一定した区画域を形成し、この区画を成す内側には、ほぼ同時乃至前後する時期の遺構が検出されており、明らかに生活の痕跡が見出せる。この区画を形成する溝等の施設は、区画するだけの目的をなすものでなく、二重乃至三重に認められるものは、“防御”を考へての構築であったことが判断され、一重の場合であっても前述の状態から類推される。そして、これらの大規模と称し得る遺構群の構築自体の一単位群は、その構築に主体者たる人物の存在が考えられ、この主体者は、一単位を群とする構築が成し得た当該地における有力階層であったことが推定される。この有力階層が武士であったか富豪層であったかは別としても、有力階層が生活の痕跡を留めるこの大規模遺構が、当該期における“館、であったことはこの点からも判断され、第3章第2節中で記述したとおり、“館、状の遺構群は当該地域における14世紀後半～15世紀後半における“館、としての遺構型態があることが判断される。ここに、当遺跡で検出された遺構群は館跡として称し得るものであることを示しておく。

以下個別の館跡について記述するに当たり、検出された3ヶ所のものに各々名称を与えておきたい。この名称を冠するに就いては、検出された位置の字名を冠し、さらに、今後周辺地区での発掘調査等が進み、同一の字名地内で他の館跡が検出されることも予想されるため、字名の次に番号を付しその名称としておく。

薬師道南第1号館跡—F区で検出されたもの。中道南第1号館跡—G区で検出されたもの。高井道東第1号館跡—H・I区で検出されたものである。

薬師道南第1号館跡 (第764図)

この館跡はD8溝・F1溝・F3溝により区画される遺構群を包括しておきたい。ただ、内包される遺構には、所産時期の異なるものが多く検出されており、共存すると想定される遺構については第764図に示した。

第4章 考 察

当該の館跡の推定年代は、F 1 溝の存在と館を構成する遺構から出土した遺物により、14世紀後半から15世紀後半乃至16世紀前半までが確認出来る。この年代観の14世紀後半は、F 1 溝から出土した遺物による類推である。根拠としては、F 1 溝 I 期の西側覆土内より、土師質土器皿が多量に出土している。この土師質土器皿は、2類・7類が主体を占めるものであり、その出土状況は西側から廃棄された状態である。この西側から廃棄されている点は、F 1 溝以西に同時期と考えられる頃に生活の痕跡があったことが判断される。そして、この生活の痕跡を類推するとF 1 溝以西の遺構群すなわち、館跡の存在する部の周辺で生活があったと考えられる。15世紀後半は、F 3 溝の溝底面から出土した内耳鍋（第620図-10）の年代観であり、16世紀前半は、F 2 井戸から出土した土師質土器皿（第637図-2）から判断される。しかし、F 3 溝の埋没は、内耳鍋の年代観が上限と考えられるものの、16世紀に至り埋没があったことも考慮される。

上述のことより館は100～200年の間に存在したことが考えられるが、継続的に存在したのか、断続的に存在したのかは分明になし難い。また、土師質土器皿による年代観の傍証は、前刊書で示したとおり、精神文化に係わる一器種での存在である点から、不備な点もあるものと思われる。

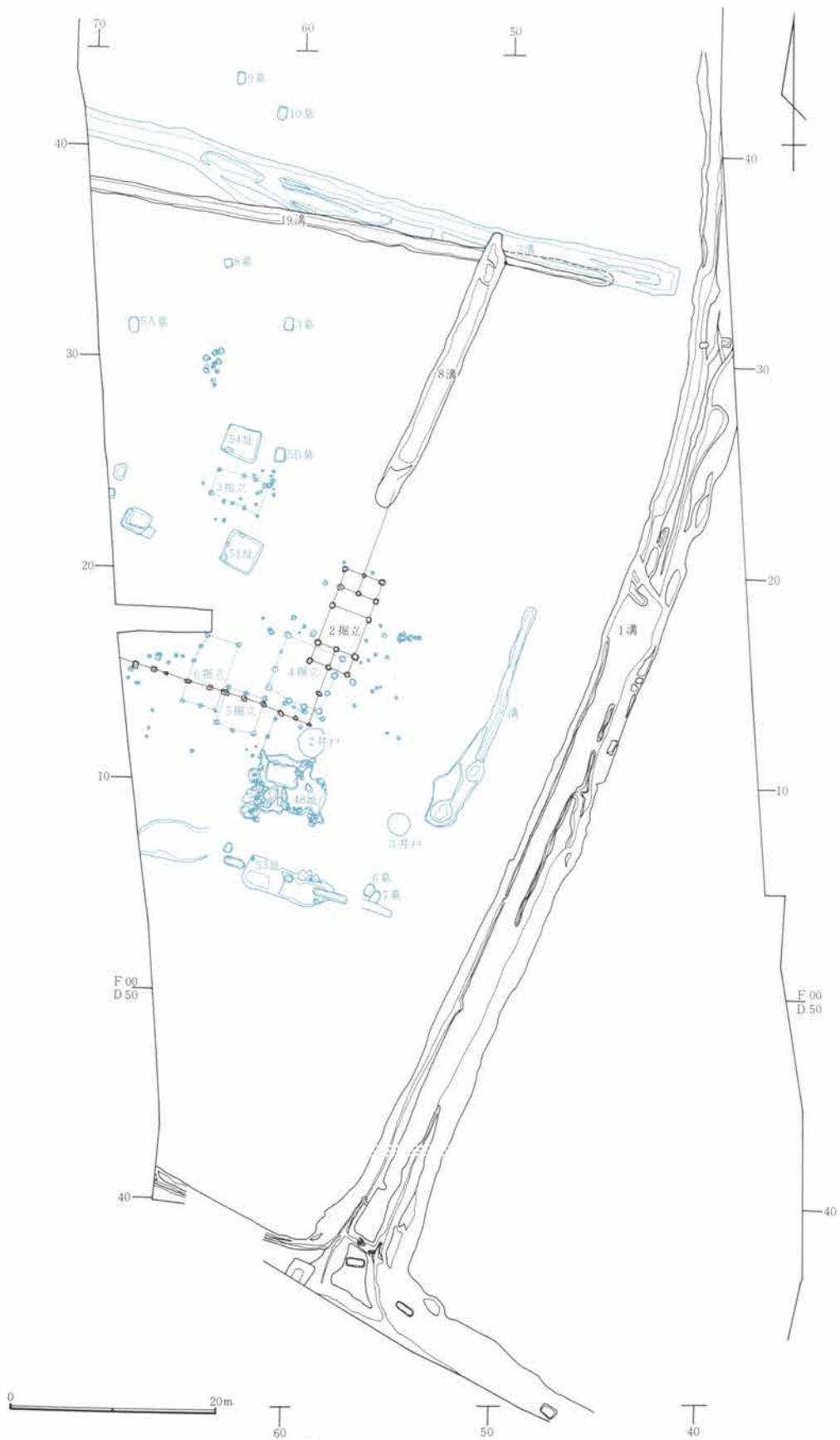
館跡の内郭と考えられる部分からは多くの遺構が検出されている。これらの遺構は、上述の存在期間内における存在である。そして、遺構自体に新旧関係が認められ、この新旧関係を明らかにすることにより、具体的な館跡の構造が明らかとなる。ここで、検出された掘立の新旧関係（調査段階では確認が為されていない）を、他の遺構との配置上の関連性から考えたい。

内郭部から検出された掘立は9棟（机上推定）あり、単独で存在する3号掘立、主軸方位の異なる8～10号掘立を除外する2～7号掘立は、主軸方位にほぼ同様な数値が認められる。この6棟の掘立のうち、2号と4号掘立には新旧関係があり、さらに6号・7号掘立と1号柵列にも新旧関係が認められる。この6基の遺構は全て2号・6号溝に後行して存在することはF 1 溝との関係（F 1 溝が2号・6号溝を切り、館跡がF 1 溝の制約下に構築されている）から明らかであり、6号掘立と1号柵列は6号溝を切り構築している。これらの関係のうち、2号掘立と1号柵列は共存したと判断されることにより、この両者と4号～7号掘立との新旧関係に集約される。

F 2号掘立・1号柵列は、配置関係から、館跡の内郭隅部を示す状態である。この両者と共存すると推定される遺構にF 8溝がある。このF 8溝はF 2号掘立西縁の延長線上に西側立ち上がりがある。しかし、F 8号溝が6号溝の北側で立ち上がっている点から、F 6溝との共存も推定される場所であるが、前述したように、F 1溝と平行して存在する点からF 6溝より後行しての存在が推定される。また、F 6溝が、F 1溝の構築直前まで存在したことが推定される点から、F 6溝の覆土の部分を開削した場合、壁に保持力がなく、崩壊することを考慮したものと考えられ、F 6溝を切らずに構築したものと考えられる。そして、この点から、F 6溝の廃棄・F 1溝の開削・館跡の構築が比較的短時間の間であったことが推定される。

このF 8溝と2号掘立の間が空白状態となるが、1号柵列の存在を考慮すると、この部分には柵列が存在したことが考えられる。しかし、未検出であることから明示し得ないが、F 6溝確認段階の不備によることも考慮し、この部分に何らかの施設を推定する場合柵列が妥当と考える。

F 8溝は、F 3溝に切られており、F 3溝の年代観が15世紀後半には存在することから、これ以前の年代が考えられる。そして、F 3溝に切られるF 19溝は、F 8溝との共存関係が示唆される。これは、両者の新旧関係が判然としなかった点と、F 8溝の主体部分がF 19溝より以南にあり、末端部が重複する状態である。この重複する部分のF 19溝の壁際底面にピットが1本検出されており、このピットが何らかの機能を有し、両者を共存状態にさせたものと考えられる。これらのことから、F 2号掘立を中心とする一群は、梯形状を



第764図 薬師道南1号館跡

第4章 考 察

呈する形状が考えられ、その存在は15世紀後半以前に求められる。

4号～7号掘立は前述の2号掘立・1号柵列と切り合い関係にあり、いずれも近接する状態で検出されているが、新旧関係は認められない。この点から共存するものと思われるが、5号・6号の状態から、軒と壁とがほぼ近接する状態である点に疑義が感ぜられ、前後する構築であったものとも思われる。この一群の中で7号掘立としたものは、建物としての存在とは考え難い部分もある。このことに就いては、第3章第2節で記述したが、2号井戸を囲む状態である点から2号井戸に付属する施設とも考えられる。また、2号井戸と48号址が共存することも想定されることから、7号掘立としたものは、冬期の季節風を防ぐことを目的として構築されたことも考えられる。この想定を元に掘立群の年代観を考えた場合、2号井戸の埋没年代が16世紀前半を下限とし、上限は15世紀後半に出土遺物から求められる。2号井戸の存続は、15世紀後半から16世紀前半の年代観が求められる。このことより、F2号掘立を一群とするものより後出性が有ることが考えられる。さらに、15世紀後半に存在したと考えられる他の主要遺物は、3号溝・9号溝が考えられ、両者の相対関係から53号址の存在も考慮される配置にある。この点から、この3者の遺構により区画域を想定することが出来る。この区画域は、上述した4号～7号の掘立群と共存したことが類推され、この区画域と掘立群により館跡の想定が出来る。これらのことは、連綿と継続する状態ではなく、断続的な状態であったことを示唆している。

上述してきた二者の時期段階で14世紀後半代から15世紀後半以前の段階を第Ⅰ期とし、15世紀後半から16世紀前半段階を第Ⅱ期としての存在形態であることが認められる。この第Ⅰ期・第Ⅱ期に分類された遺構以外に、51・54号址・3号掘立・土坑等がある。しかし、これらの遺構で存続年代観が明瞭なものはない。ただ、54号址のみに15世紀前半段階の遺物が破片化して出土している。この点では上限として15世紀前半代の年代観が考えられるものの、第Ⅰ期の館跡の存在から、出土遺物が混入品としての可能性が高く、15世紀前半が上限としてしか把握し得ない。これらの遺構は、1つの推定として、第Ⅱ期の館跡が掘立群を主体とする状況が考えられ、これにより、建物等の施設が、比較的簡易的？なものであったことが類推され、51・54号址・3号掘立が第Ⅱ期に帰属することが考えられる。

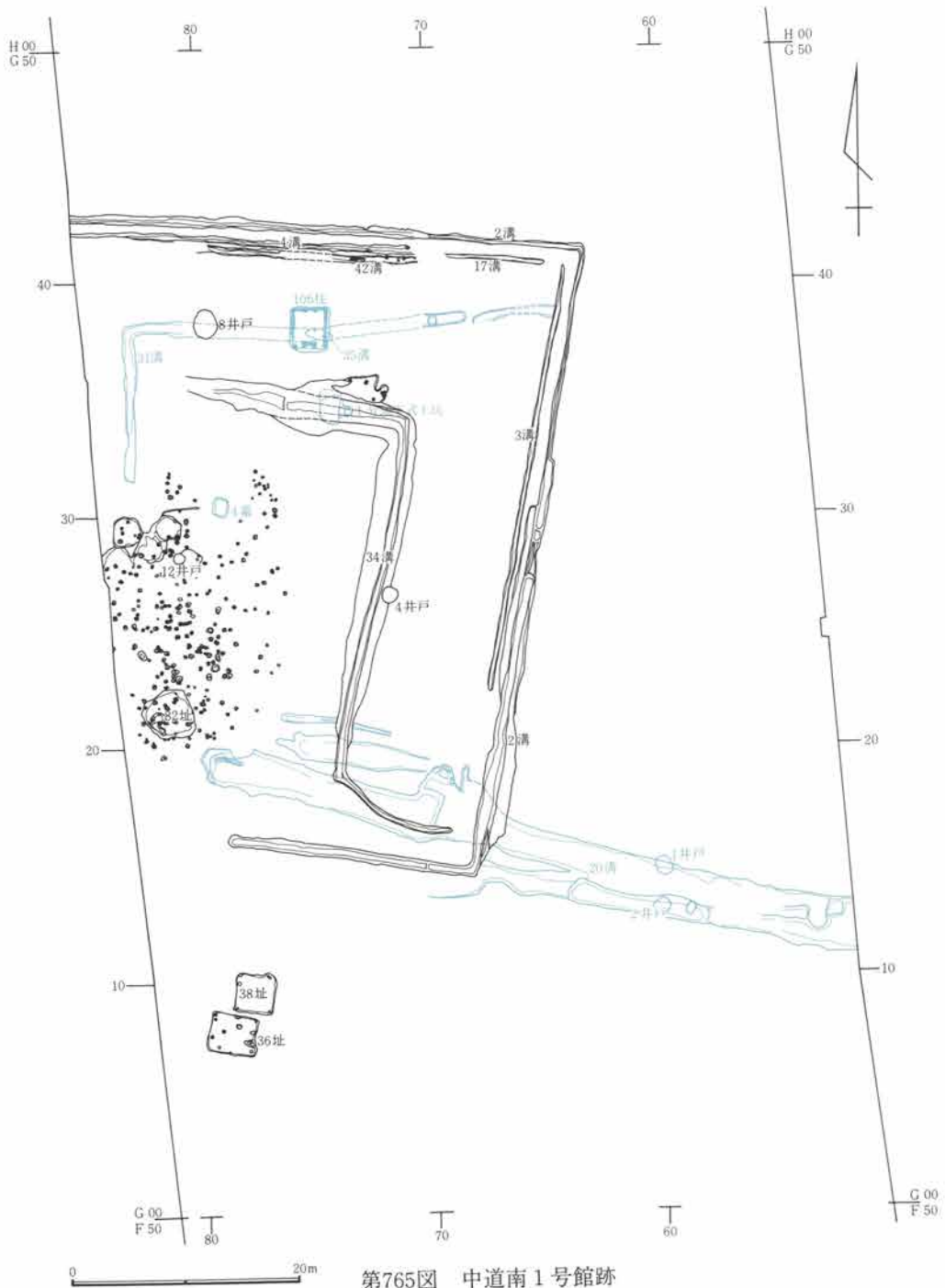
第Ⅰ期・第Ⅱ期に分別して考えられる館跡は、F1溝とD8溝により生じた地割を使用していることは明らかであり、この両溝の存在意義は非常に重要である。そして、この両溝により蔵される状態で当該館跡が存在し、後述する中道南第1号館跡・高井道東第1号館跡も同様である。この意味では、両溝は、東国分地区全体を圍繞する状態で、当該館跡の外郭としての存在が考えられる。

中道南第1号館跡 (第765図)

当該の館跡は、G2溝により蔵される状態のものを包括しておきたい。時期的には、2号溝の埋没段階が15世紀後半にあり、この年代観以前に存在していたことが考えられる。また、薬師道南第1号館跡同様に、F1溝の存在を無視出来ない状態での形態考慮が必須と考えられる。規模は、南北長約55.5m程である。

2号溝に蔵される内部には多種の遺構が存在する。これらの遺構が全て当該館跡が存続する時期に存在したとは考え難い。特に、調査区西側で34溝と切り合い関係にある27～31号溝の一群、106号址・土坑等である。これらの内、31号溝は34溝に切られ、方形を成す状態の一部のものと考えられ、東側延長部の99号土坑等を溝の痕跡と考えた場合、一つの区画域を形成する状態となる。34号溝は2号溝と共に館跡の形状を形成するものと考えられ、両溝に切られる20号溝の存在段階と同段階程での存在が考えられる。そして、31号溝の南側延長部分が、20号溝が立ち上がる部分に相対する位置関係である。20号溝自体、F1溝とほぼ同時期に開

第3節 鎌倉時代以降の遺構について



第765図 中道南1号館跡

第4章 考 察

削された可能性が考えられ、14世紀後半には存在したことが考えられる。このことから、31号溝が20号溝と共存することが想起され、一時的に遺構群として形成していたことが考えられる。この時期（14世紀後半以降で当該館跡が構築される以前）に存在が考えられる遺構として、34号溝に切られる1号地下式土坑・106号址・110号址が考えられる。この106・110号址は、31号溝の軸方位とほぼ直交乃至平行する状態であり、2号・34号溝の軸方位と、両址の軸方位に差が認められる。しかし、この逆の場合も考えられるが、38号址の埋没時期と、36号址を含め、両址は、館跡の軸と直交する状態である。この点から、31号溝と20号溝の区画と共存するものと考えられる。ただ、時期的には、14世紀後半と考えられるものの、明確な時期は把握し難い。また、この段階に考えられる遺構が少ない点から、短期間で存在が考えられる。

2号溝に蔵される内部=内郭部で検出された遺構群は、上述の遺構を除外したものと、前章で記述した土坑群を除外したものが考えられる。そして、前刊書に掲載した、4号墓が考えられる。この4号墓は、軸方位が31号溝のそれとほぼ同様である点が指摘出来、20号溝ともほぼ直交する状態にもある。また、出土した土師質土器の年代観は、15世紀初頭にあり（前刊書では5類A・Bが共伴する状態から15世紀第1四半期頃での存在と考えたが、後述の土師質土器からは14世紀末～15世紀初頭と考えられる。）、2号溝の埋没に先行することが明らかである。そして、館内部に墓を設けることは考え難く、時期的な状態での判断から、上述の31号溝の区画域に後出し、2号溝により蔵される館跡に先行するものと考えられる。さらに、4号墓は、底面に円礫を四隅に設置していることから、棺の存在が判断され、被葬者を他の土坑墓と比較した場合にその質差が考えられる。この被葬者は、31号溝の区画域に何らかの係わりがあったとも思われる。^{註1}

当該館跡は、上述の4号墓の示す年代が当該館跡の上限と推定され、2号溝の埋没段階の15世紀後半（土師質土器からは15世紀第3四半期頃の年代観とも考えられる）が、下限での存在と考えられる。

上述して来たことにより、14世紀後半代と15世紀中頃の段階での生活域の存在が認められた。そしてこの間では4号墓を介在させており、断続的な状況が認められる。そして、薬師道南第1号館跡で認められた第I期・第II期での存在形態の如くの状況が当該館跡でも認められている。しかし、31号溝による区画が館としての存在であったのか判断し難い点があり、館として2時期に分別して存在する状態ではなかったものと思われる。このことより、31号溝の段階のものを館跡として把握するものでなく、15世紀中頃に存在した館跡の前身的な区画としておくのが現段階での分析としておきたい。

ここで若干当該館跡の構造を考えてみたい。当該館跡は、2号溝に蔵される状態であるが、2号溝と平行して走行する3号・42号溝の存在がある。このうち、42号溝は北側でしか認められず、3号溝は、南側では認められていない（確認面自体が遺構底面より下位であった場合を考慮して）。この3号溝と2号溝との状態は、確認面（VII層土上面）において、両者の間隔は約60cm前後である。この間隔で当時の生活面での状態を復原すると、ほぼ接する状態となる。この状態と、覆土の状態から、土塁の存在は考え難く、何らかの施設が存在した場合、薬師道南第1号館跡の第I期で認められた柵列等が考えられる。このことは、北側の部分でも同様に考えられる。南側の部分では、覆土内に多量の塊状VII層土が認められる点と一条での存在を考慮すると、同様に柵状のものか、土塁が考えられる。この土塁を想定させる調査段階の所見がある。この所見は、20号溝と2号溝が重複する部分（第647図-4）で、20号溝の部分から出土した礫は、直線状態に配列したとも考えられる状態であり、覆土自体も非常に硬質であった。この硬質の覆土は、20号溝の埋没段階に生じたものとも思われるが、館跡の正面観が、南側の2号溝が立ち上がる状態であることよりこの南側に求められ、この正面側の遺構配置状態が他の部分より弱い感がある。この点から、南東隅（溝が一重の状態になった部分）から南側に土塁が存在した必然性も考えられる。

これらのことより、当該館跡に、柵乃至これに準ずる施設と土塁とを備えた溝により区画されていたものと考えられる。

また、2号溝が南北走行する東側の部分では、溝の底面に二様の状態が認められる。これが、深い部分と、浅い部分であり、この部分に何らかの施設を考慮してもいいものとする。具体的には、土橋・橋脚等が考えられる。ただし、土橋とした場合、溝の覆土内には、その痕跡が認められないこと等がある。この点で否定的要素となるが、この部分の状態は何らかの状況を示唆していると考えられる。

当該館跡を構成する34号溝の出土遺物のうちで、石造品関係のものが、多量の破片として出土している。この状況の中で、接合率も比較的高く状態の良好なものと少量のものを図示した。これらの破片化した石造品は、接合率が高い状況から、出土位置の周辺で破壊して廃棄したことが考えられた。この破壊行為自体は、造立者乃至造立者の子孫の行為とは考え難く、反造立者＝造立者に敵対する立場の行為としか考えられない。これは、前刊書第5章第4節第5項で記述した、長野氏と長尾氏の対峙状況下での所産であることも、館跡の年代観から想起し得る。

高井道東第1号館跡（第766図）

当該館跡は前述した館跡の如く、分明的な状態のものではなく、必然的な状態から館跡として扱った。この館跡に推定されるものは、H1溝・I2溝・H20溝により区画される範囲のものである。時期的には、H1溝をその一部に使用することより、14世紀後半代の所産と考えられ、規模は、南北長約100mである。

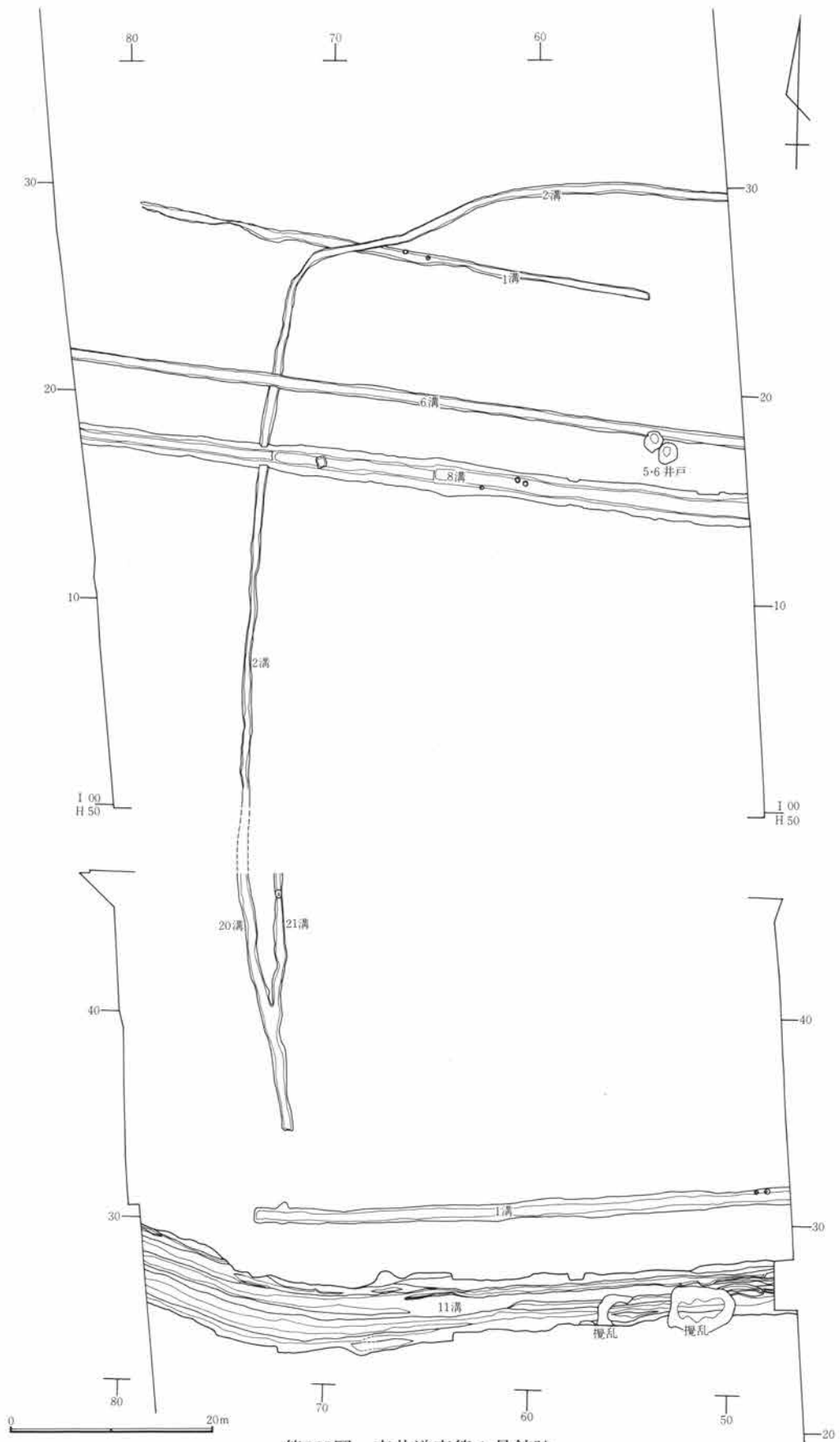
この区画域に存在する遺構で、当該の館跡と共存したと考えられる遺構は確認出来ないが、I5・6号井戸が他の井戸と形状に差が認められる点から他の井戸例よりやや遡る存在とも思われるが、不分明の域を脱せず、内部の状態については不明である。また、第3章でも記述したが、確認面自体が当該期の推定生活面より-40～-80cm程下がっており、中世ピットと思われる遺構は、調査実施をしなかったことがあり、相当数のピットを逸している。この状態での館跡の推定には、論拠に脆弱な点が多分に含まれるが、区画を成す溝自体、生活面での幅が、約2m程は有ったものと考えられる点で、意図的な空間であることが判断される。これらの点で館跡としての認定は、再考を要する所と思われる。

当該の区画域が、館跡でない場合の区画域の性格を考えておきたい。ただ、このことを記述するにはD8溝からF1溝を含め、東国分地区を含めての大きな視野から鑑みねばならないので、予めその意を記しておく。

東国分地区は、前刊書の付図16と今次の報告の付図1で示したとおり、D8溝とF1溝・H11溝等により室町時代前半（14世紀後半頃）に大きな区画域として形成されている。これは、前述の薬師道南第1号館跡・中道南第1号館跡の外郭としての存在でもある。この状況下で当該の館跡としたものは、この区画域より外側にあたり、方位的には北東方向に当る鬼門の方向である。鬼門の方向自体、清浄にされる場所である。この方位に当る場所に設定された区画域は、このことに何か係わる区域であった可能性が想定されるものの、生活の痕跡を窺わせる遺物の出土もある。また、精神文化に係わると考えられる土師質土器皿自体の出土数は、遺構全体を通して見た場合量的に少ない点があり、この鬼門に相当する位置での性格付けは一概に判断し得ない。

鬼門に係わる性格以外には具体的に示せないが、検出された他の2ヶ所の館には、厩舎の存在が考えられる。ただ、具体的な遺構としての検証はないものの、前代からの通有的な解釈から判断される。この場合、常時使用する馬を繋ぐ場である。また、館の主体者が武士乃至有力階層としての存在から、この厩舎に繋ぐ

第4章 考 察



第766図 高井道東第1号館跡

馬以外を別の場所に設けたことは、館内部での厩舎という存在から考えられ、この場所が、D8溝・F1溝・H11溝という存在により生ずる区画内部とは考え難く、これは、前述の両館跡が近接していることから窺える。ただ、この場合牧・馬場という大規模なものではなく、厩舎的なものとして考えられる。これは、区画域を形成するH20溝・I2溝が連続する溝で、生活面から底面までが1m以上あることから、外側と内側を隔絶することが重要な要素と考えられ、馬を放った場合外側に逃げない様にすることを目途したとも思われる。ただ、この場合、柵等の施設を考えねばならないが、第3章第2節に前述した状態からピットにより復原が不可能である。この厩舎他に、射場等の施設とも思われるが、いずれも判然としない。

現状では、区画を成すF2溝が北側から西側まで連続する溝であること、H20溝の立ち上がる部分ではH11溝が約3.5mの間を有し存在し、この部分に集中して開口状態が認められることが重要であり、ここにこの区画域＝館跡の性格を考える上での鍵が有るものと思われる。上述の如く、考えられる可能性のものを消去法により考えるしか方法がない。

上述してきた如くの状況では、具体的結論が示せないが、一定した区画を形成することは事実として認識されるが、今後、当該館跡を想定した部分の東側に調査の機会があった時に結論的なことが託される。今次の報告は、一応館跡としての名称を与えておく。

竪穴状遺構

竪穴状遺構は、前刊書に掲載したB46・47・159号址と、今次の報告中掲載したF51・54号址、G36・38・106・110・130号址、H2・49号址の12基が検出されている。この12基の竪穴状遺構は、形態上大きく2分される。この2分される形態の特徴は柱穴を伴うものと伴わないものの二者であり、前者をA形態、後者をB形態と呼称する。

A形態のものはB46・47・159号址、G36・38・106号址、H2・49号址の8基であり、B形態はF51・54号址、G110・130号址が該当する。ただ、G130号址は不明な点がある。

このA形態・B形態の中で炉を伴うものは、A形態でG36址、B形態でG110号址の二基のみである。また、A形態のG106号址は壁溝を伴っている。そして、A形態の柱穴の配置状態には二様の状態が看取される。この、配置状態は、片側4を基本とする8本形と、一定していない状態のもので、前者がB46・47・159号址、G106号址、H2・49号址であり、後者がG36・38号址である。

さらに平面形態を考慮すると、基調を正形状にするB46・47・159号址、F51・54号址、G38号址、H2・49号址があり、長形状にとるものはG36・106・130号址がある。これらをまとめると、第768図の状態になる。

上述した各竪穴状遺構で年代観の判定出来るものは少数例であるが、直接的に年代観の得られないものについて、周辺遺構の状況から類推される部分があるので、この年代観を示しておきたい。

B46・47号址は、近接するA1井戸と共存することが想定され、このA1井戸は、出土遺物から埋没の下限年代観が15世紀後半頃、上限が14世紀中頃に求められ、14世紀中頃から15世紀後半頃の存在と思われるが、遺物の主体が14世紀後半から15世紀初めにある点から、瀬戸焼の皿(1-455-33)は、被覆土での存在であったとも考えられる。この点で、A1井戸の存続は、14世紀後半から15世紀後半として考えておきたい。このことより、B46・47号址の年代観をこのA1井戸の年代観に相当させて考えておきたい。

B159号址は、判断資料が無いため後述する。

F51号址は、出土した播鉢の破片からの年代観は現段階では何如とも言い難い。54号址は、埋没の上限を

第4章 考 察

14世紀後半から15世紀前半に考えられるが、薬師道南第1号館跡の第I期段階（14世紀後半～15世紀前半）の存在が在り、覆土内から出土している点で、混入品としての存在も考えられる。そして、遺構の配置状態から第II期の段階に伴うと考えられる点があり、この第II期の段階（15世紀後半～16世紀前半）を下限として考えておきたい。

G36・38号址は、中道南第1号館跡の主軸を直交する状態から、この中道南第1号館跡の年代観の15世紀後半に比定される。

G106号址は、中道南第1号館跡に先行して存在する方形区画と平行乃至直交する主軸方向があり、この点で、方形区画の年代観の14世紀後半の年代観が与えられる。同様に、G130号址、H2・49号址も考えられるが、この三者は、館跡北縁の溝以北に存在し、北縁の溝の走行方向と平行乃至直交する状態で主軸方位が認められる。この点で判然としない点がある。ただ、上限を14世紀後半代、下限を15世紀後半の年代観として把握しておき、後段で考えたい。

これらの竪穴状遺構の年代観を再びA・Bの形態に置き直してみると、A形態のものは、G106号址が14世紀後半代に認められ、また、B46・47号址が考慮される。15世紀中頃には、G36・38号址があり、15世紀後半にはB46・47号址の存在が考慮されるが、上述の状況下では14世紀中頃か15世紀後半としての存在が想定される。B形態のものでは、F51・54号址の上限をとると下限をとるとはB46・47号址と共に非常に大きな違いがあり、後段で考えたい。

これらの竪穴状遺構の変遷は、現状では把握し難い部分があるが、ここで、形式学の方法を応用して考えてみたい。


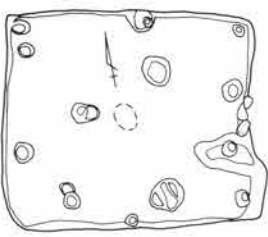
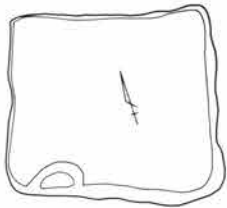
A形態・B形態は、柱穴の有無による分類であった。そして、A形態の中で、柱穴の配置状態により“定形、と考えられる状態のもの”とこれに相当しないものである。この定形に該当しないG36・38号址は、A・B形態の中間様としての存在も考えられる。この中間様のものが15世紀中頃の所産とすれば、この前段階は、形式学的にはA・B形態のいずれかが想定される。しかし、G106号址・B46・47号址がこのG36・38号址を介在させており、矛盾が生ずるものの、B46・47号址が、A1井戸と共存しないという前提があった場合には、G106号址の存在が大きく、この点で考慮される存在として考えられる。このことは、F46・47号址にも同様なことが言える。

これらの3様の竪穴状遺構は、各々の年代観の設定により変遷に大きな違いを生じさせるのは必然的であるが、分布状態には、同様種のもの近接している点で明らかに、特定の形態を有して変遷したことが判断される。ここで再び竪穴状遺構の内年代観の比定に重要なB46・47号址、F51・54号址について検討を加えてみたい。

B46・47号址は近接するA1号井戸と共存という前提であり、A1井戸の上限所産段階の年代として把握され、両址が14世紀後半での構築と判断される。F54号址と同様に14世紀後半代を主体とする出土遺物があるものの、薬師道南第1号館跡の第I期では、門を想定した部分の背後にF51号址の存在になってしまう。この点で第II期での存在として判断出来るものと思われる。この観点から、定形柱穴配置をする一群の先行性が考えられる。

上述のことを踏まえて変遷を考えると、当該地区（調査区）での出現は、定形化した状態であったものという帰結になる。

上述してきた変遷観は、竪穴自体の性格を考慮していない“形態、としての分類から変遷観を考えた。ここで竪穴状遺構の性格について考えてみたい。

分類	A		B
面 図			
備考	G区第106号址 第670図	G区第36号址 第665図	F区第54号址 第632図
年代	14C中	15C	16C

第767図 竪穴状遺構分類・変遷図

検出した当該の遺構は前述の形態差が有る如く構造上にも同様に考えられる。構造の点では、G36号址から焼土化した壁材の塊が多量に出土しており、G36号址地上部分の壁は、塗り壁、であったことが考えられる。しかし、柱穴を屋内床面に配置している点で疑問も生ずる。

床面では、全てのもが地山土VII層土中に構築しており、古代の住居と同様であるものの、掘り方の存在は認められなかった。また、床面自体が特に硬化した状況は、通常のローム土を使用する部分のものではローム土自体の硬度も有り、認め難い面がある。通常ロームを使用しない暗褐色の水成ローム土を使用するものでも硬化は認められていない。この点から常時の居住に伴う存在ではない状態であることが示唆されるものの、炉の検出されたG38・110号址では、その可能性も考えられる。(古代の住居自体でも、床の硬化は移植ゴテで感ずる程度のものである。)

当該遺構は、地下に掘削して床面を設けることが第1義としての存在意義である点から、生活面からの深度も重要な要素と考えられる。当時の生活面は、ローム土上面より約80~120cm上位に求められる。

これらの点から、床(底面)は、生活面下に1m程下位に設ける点に最大意義がある。この地下に何らか空間を設けることは、入光量の問題も有り、屋内の生活・作業空間としての存在は考え難い。ただ、古代の住居でも認められることであるが、降雨・夜間における使用は別としても、ここに、当該遺構の性格が示唆されるものと考えられる。

これらの竪穴状遺構は、二基単位のまとまりが認められるもののこれを上回る状態は認められていない。この点で、集中する状態で構築していないことと、柱穴を伴うものは、館の内郭では検出されていない。館内郭で存在しない点とG36・38号址の検出位置から館の主体者ではなく、従属民の使用としての存在も考えられる。そして、上述の住居・作業空間以外の存在として、倉庫等の存在が考えられる。しかし、G36・38号址の如く、館内郭外に倉庫を置くことも考え難いが、単なる倉的存在であったかもしれない。

これらのことを勘案すると、当該の遺構は、居住空間の一部としての存在が想定される。ただ、昼間時を含めたものでなく、館に近接して存在する点で、館の主体者に従属する人の居住空間の一部として存在したのと考えられる。しかし、これが全てと考えるのではなく、倉としての存在の可能性を否定するものではない。

当該遺構の性格付として上述のことを示したが、同様の性格を帯びる遺構種としては、掘立等の存在が考えられる。館の主体者に従属する人々の生活の場は、従属する人の立場により、その生活の場がある程度は

第4章 考 察

決定されたものと考えられる。この点から、当該期における館跡形態がさらに明らかになれば、当該遺構の意義付もより明らかになると考えられる。前述した変遷観も少数例での現状把握である点から、問題点も多い。また、想定した性格からも、その存在状態から常時定形化したものであることも疑問が残るとも考えられる。現在の結論としては、分明なものではない。

地下式土坑

地下式土坑について若干記しておきたい。これは、当該種の遺構が“墓制、の一端を担ったとされているが、西部群馬地区における通有所見として認識されているからである。

当遺跡から検出された当該遺構はC 2号址・G 1地下式土坑の2例が有る（以下C区第2号址をC地下式土坑、G区第1号地下式土坑をG地下式土坑と呼称し記述する）。この両者の遺構は、前者が15世紀後半以降・後者は14世紀後半以前の存在として考えられた。そして、遺構の性格は、覆土の状態から“墓、としての存在ではなく、“倉、的様相を強く帯びた遺構種として考えられる。当該遺構を倉として想定する理由として、先述したG 1号地下式土坑での覆土の状況もさることながら、通有の墓と解されている存在意義が認め難い点があるからである。そして、墓としての存在意義を否定する状況として当該地域の墓制の在り方を考慮せねばならない。

当該地域における主要な墓制は、前刊書で報告した土坑墓の存在が在る。そして、当遺跡の場合悉くといつていいものが土坑墓である。ただし、A 1号火葬址の如く、一部には、火葬による場合が存在したことは推定される。しかし、当遺跡における火葬墓（蔵骨器）の存在はない。県内では、寧ろ前代においてその主体がある。ただし、この“火葬、自体も、極く限定された階層におけると判断されるのみであり、蔵骨器の優劣は別としても、前代も土坑墓の存在は考慮され、古代より両者は連綿として存在した墓制であることは疑う余地は無い。また、前代において盛行した壺形軟質陶器は、蔵骨器としての使用例が多いが、当該期での焼造地は現段階では未確認であるのと、その体制自体不分明である。そして、出土地の中心は、東上野に認められる。

当遺跡の土坑墓の場合、通常死とは異なる戦乱時のものと推定されるものが比較的多く存在している。この場合を含めても、一定した墓域を有している。また、共伴遺物としても、銅銭・土師質土器皿という二大種の遺物も共通している。これらの所産年代のうち、15世紀前半代以前のものとは15世紀後半以降の土坑墓では、分布状態に特徴が認められる。特に、C区の寺院跡内で検出されているものは、15世紀後半以降瓦葺建物が廃棄されてからの構築である点からも明らかで、総体的に南側に15世紀後半以降のものが目立つ。また逆に、北側では14世紀後半以降15世紀前半代のもが目立っている。このことは、前者が、前刊書でも示したが、16世紀前半までは、寺としての機能を有している点から、寺域内部での15世紀後半以降の遺構については、寺院に付随すると考えられるものであり、C地下式土坑はこの段階の寺院に付随する遺構と考えられる。そして、墓としては、土坑墓が多く存在している点からすれば、墓＝土坑墓である。さらに付記すれば、C地下式土坑は、出入口部に黒色土の硬化土が認められる点と覆土の状態から墓とは考え難く、たとえば墓であった場合、人骨の遺存が考えられるが、人骨は検出されていない。これらの点から、C地下式土坑は、墓としての存在を否定した。

G地下式土坑の場合、館跡に先行する存在である点と、14世紀後半代の土坑墓も存在しており、状況はC区の場合と若干異なるが、土坑墓の存在は確認される。そして、人骨等の出土が無い点と、入口部の覆土の各々分層される部分が硬化している点から常に出入状態が可能であった点が指摘出来る。これらの点から、

G地下式土坑の場合も墓としての存在は否定して考えられる存在である。

墓としての性格は否定して考えた場合、G地下式土坑の所見で先述したが、地下に構築することが当該遺構の最大の意義である点から、地下での何らかの状況を利用しての存在を考えると、貯蔵庫としての存在が考えられる。ここに、当該遺構が貯蔵庫としての性格が濃厚であることを示しておく。

名称については、“地下式土坑”と付したのは、通有に使用される地下式坑との分離を考えて付した。地下式坑自体他県例では“墓制、の一部として明らかな存在例もある点により、性格を異にする遺構種に対しての考慮であり、地下に構築された土坑の意である。

まとめ

当遺跡から検出された当該期の主要遺構は、一寺院跡・三館跡である。そして、種々の遺構は、この四大遺構の周辺に検出されている点で、この四大遺構と係わりが深いものと考えられる。前刊書で報告した寺院跡は、上野守護代長尾氏に係わる寺院であった可能性が非常に濃厚な点から、その北面に位置する館跡群も、蒼海城と地続きの台地上に近接して存在することにより長尾氏に係わる存在であったと考えられる。

北側調査区で検出された、D8溝・F1溝・H11溝は、現在の東国分地区と囲繞する状態であることが考えられ、東国分地区自体が大規模な特殊な遺構群であることが考えられる。そして、検出された館跡はその東端側に位置しており、南側には、国分僧寺内に墓域としての領域を有している。この点で、G34溝内より出土した宝塔は、その形状の特殊性により、この東国分地区に非常に大きな権力者の想定が出来る。

また、国分僧寺内で検出されている当該期の遺物は、瓦以外は、当遺跡が出土した遺物の質・量共に上まわり、当該期の遺跡（遺物・遺構）の標式遺跡になることは明言出来、非常に重要な遺跡である。

これらの状況と、近接する蒼海城の存在と、守護代長尾憲明が現在の前橋市大友町に構築した大友館の存在がある。長尾憲明の守護代については、応永27年～33年の間の7年についてその任に就いていることが確認されている。この長尾憲明は、前刊書に示した梵鐘の寄進の大旦那であり、“高津長尾氏”の始祖とされている。この高津長尾氏は、上述の大友に館を備えたことにより高津の系譜が生まれた。これは、憲明が忠房の次男として、兄忠政が惣社長尾氏の嫡男としての存在であり、守護代に任ぜられたことにより新たな系譜を生じさせたものと考えられる。

この大友は、牛池川を隔てた所にあり、蒼海城の西側には、14世紀後半に大規模遺構（東国分地区）の存在があり、必然的に大友への居住があったものと考えられる。この必然性は、長尾氏が古代の国府の地に守護所として拠点を置いたのも、国衙としての存在点がある。この憲明段階には、景忠・忠房・忠政の3代に互る拠点となっている点で、周辺地区も、この3代の間により整備されたものと考えられる。このことは、F2・6溝とF1溝の関係により明らかである。そして、蒼海城周辺自体、国衙としての国分二廃寺周辺まで、上野の領国支配体制を完備する段階で重要な地域として掌握され、その体制下の中で、長尾氏の一門乃至有力被官層の拠点であったことが推察される。ただ、D8溝が、蒼海城に直接に繋がる遺構であることから、傀儡政権的な長尾氏の存在は、国人層の把握、そして国人層の被官化は、領国支配体制にとって非常に重要な要素であり、長尾氏の上野入部段階では拠点の蒼海城と共に周辺地の地硬めも共に重要なことである。この点で、東国分に在住したのは有力被官層でなく、長尾氏一門であることが考えられ、その中間に存在する寺院と墓域は、長尾氏にとって重要な位置を占める存在であることが確認される。この推定からすれば、寺院跡は、菩提寺として存在したことがより確信的なものと考えられ、国分僧寺の墓域は、長尾氏の墓所としての存在が考えられる。古代における上野国の最も重要な官寺として存在したことから、その清浄な地を

第4章 考 察

被してのことと考えられる。

検出された館跡（中道南第1号館跡）は、寺院の瓦葺き建物とほぼ同様な時期に廃されている。そして、葉師道南第1号館跡にも15世紀後半代には、一つの契機的なことが考えられる。これらのことは、寺院跡の瓦葺建物の廃棄の要因として幾つか考えたが、その中で、文明17年（1485年）頃には長尾氏と長野氏の対峙状態が国府で認められる。これは、文明8年（1476年）長尾景春の叛乱以降の国人層と守護代の状況を語っている。この国府での対峙状態の時期が15世紀後半代の第4四半期にあり、上述二者の廃棄は、この状況下でのことと推定される。ただ、中道南第1号館跡の2号溝が破壊された状態でなく、廃棄されたと考えられる点は、長野氏が張陣する過程の中で、敵方に渡る段階以前に長尾氏が廃棄したものと考えられる。この廃棄段階とその時の状況が、4点の土師質土器が示しているものと考えられ、文明8年～文明17年（長享2年）の所産時期に考えられる。そして、絶対年代に近い年代観が与えられる。ただし、推定上の想定であることから今後の調査例の増加と考察が待たれる。

第4節 鎌倉時代以降の出土遺物について

第1項 出土遺物の一括性について

当該期（主に室町時代を示す）の遺物は、近年調査例が増加する中で、扱われ方が客体的な存在であり、報告例も完器乃至これに近い状態のものだけを図示されているに留まっている。しかるに、近年の考古学の動向は、中世～近代に至る時代の遺構・遺物が着目される様になり、その研究も目覚ましく発展するに至って来ている。遺物の図化掲載は、報告書の予算等による制約が大きい点は周知されることではあるが、現状では実態が不明瞭な点においても客体的な存在となっていることも一つの事実と思われる。今次を含めた前刊書の報告では一括して出土した遺物のうちで、特に当該の所産と判断されるものを掲載した。

群馬県内における当該期の遺物は、この数年間に至りある程度明らかになってきた。それは、遺物種もさることながら、各々の序列・相対年代に言及されるに至っている。しかし、報告の中で客体的な存在であることから、各遺跡での在り方が不明である点と共存関係・共存関係についての資料が乏しいのが現状である。この点は、各遺跡の各遺構での一括性が不明瞭である点とこれらが一括の中での対比がなされていないことによる場合が多い。今次を含めた当遺跡の報告に掲載した資料は、これらの第一歩の問題点を解決する可く図示し、不明瞭な当該期の遺物を幾らかでも明らかにすることを目的とした。これは、当該期の文化を復原することが第一義であることにより、当遺跡の在り方からその一助とする可く実施した。

前刊書及び今次の報告で検出された主要遺構（当遺跡を端的に表現し得るもの）は寺院跡・館跡群とこれに付随すると考えられる一群の諸遺構である。これらの遺構から出土した遺物は報告書に掲載した。

当該期の出土遺物には、その出土状態に三様の状態が有る。この三様相には主として帰属時代の遺構覆土内より出土したもの。帰属時代より新しい遺構覆土から出土したもの。文化層・表土層（包含層）中より出土したものである。このうち、後二者は、遺構外出土遺物として扱ったものであるが、中者の場合においては、調査段階において判断した所産年代観（覆土の状態）と、整理途上で判断した年代観により、たとえ遺構内より出土したものであっても遺構から分離させた。これは、平安時代の住居から出土する縄文土器を分離させる状態と同様なことである。

本項では、最初に示した、当該期の遺構と判断された覆土内出土一括遺物に就いて、図示した遺物の一括性について記述するものである。

検出された当該期の遺構は単独で存在するもの、新旧関係による切り合い状態にあるもの、共存関係にありながらも切り合い状態にあるものの主な三者での状態が有る。当遺跡の場合、下位に存在する古代以前の遺構と鎌倉時代以降の遺構の如く、鎌倉時代以降の遺構覆土内に古代の遺物が混入することは非常に多い。鎌倉時代以降の遺構では、室町時代の遺構は見出されるものの鎌倉時代の遺構は見出せない。この点で、室町時代=14世紀中頃以降の遺物と考えられる在産土器類は、少なくともその時期に生活の痕跡があったことと判断され、14世紀中頃以降の所産の遺構覆土に14世紀中頃以前の遺物が混入しても必然性として把握される。ただし、14世紀中頃代所産と推定される遺構覆土から、12世紀～14世紀前半の遺物が出土する場合、二者の場合が考えられる。一つは、実際に生活が有るものの遺構が未検出である場合と、それらが14世紀後半以降に伝世品としてか、何らかの理由により古物を入手したことが考えられる。この場合の二者は、当遺跡では、前者に板碑があり、後者に陶磁器がある。

遺構の存在状態は、上述の三者での状況が考えられる。これにより、出土遺物の在り方にも遺構と同様な三者の状態と板碑・陶磁器の在り方を含めた五者での状態が認められる。

第3章・第4章第3項で述べた遺構の年代観は、便宜的に50年単位でx世紀前半・中頃・後半などのように、抽象的表現を用いているが、通有の場合でも必然的に慣用化されている表現に筆者自身も準じた。この一つの要因として遺構の年代観把握は、遺構埋没の上限・下限は遺物の示す年代観を元にした点があるからである。遺物自体の年代観は、その一部を前刊書でも示したが、一つの標本形態は、序列編年の中では、出現又は盛期を示している年代観であり、一個体の使用年代観は考慮していない点が大前提として存在しているからである。

土師質土器皿の場合、標準資料選定にあたっては土塚墓の資料を主体としてその年代観を求めた。土塚墓での土師質土器皿は、大半の場合完形個体が共存して出土している。しかし、他の器種の場合、完形として出土したものは皆無であり、破片化したものである。そして、土塚墓以外で土師質土器皿と共伴して出土した遺物は、思考される可能な範囲でその年代観を求め、年代観の新しい遺物が示す年代を遺構埋没の上限とした。

出土遺物（在地系土器）の図示は以下の点に留意した。個々の遺構覆土内出土のものは、共伴関係を重要視し遺存状態の良好なものか、形状特徴の図化が可能なものを掲載した。この意図は、共伴関係の把握と、共伴関係の一括性を第一義におき、前述の様に、不分明な当該期の遺物に対し、当遺跡での在り方を示した。この在り方は、各遺構の新旧関係の把握により、一括遺物を新旧関係に対比させれば、遺物の変遷序列の把握に重要な要素として理解される。

陶磁器では、先ず邦製品・中国製品の二分類を行い、取捨選択を行った。邦製品の六古窯産のものについては、遺構種の小規模なもの（例えば、井戸・竪穴状遺構・土坑等）については、細片であっても重要と判断した場合には掲載可能な範囲で図示し、この場合、出土した総てに近い量を示したが、焼締陶器においては口縁部・底部・叩き圧痕等の例を扱うことにより1個体として認定し顕著な存在のものを扱った。焼締陶器の掲載量は、全体の1割程である。また、大規模遺構（例えば溝状遺構）の場合においては、遺存状態の良いものか、年代把握に重要と考えられるものや貴重性が認められるものを示した。この場合、各遺構により差違は有るが、概ね遺構内から出土した1割～2割のものを掲載した。そして、中国製品・輸入品と思われるものはその全てを図化掲載した。石造品については、完形品、種の判別が可能な個体、製作技法や文

第4章 考 察

様表出に特徴が認められるもの、形状が特殊なものを選択し、破片であっても、他の遺物種と一括性において重要と判断されるものを掲載した。他の遺物種については出土量も少量であるので、可能な範囲で掲載乃至文章表現したつもりである。

遺構外出土として扱った遺物は、上述の状態を加味し、頁数制約の可能範囲とし、陶磁器では、全体の約0.8～1割、在地系土器類は、2.5～3割程の量を掲載した。

これらの共伴遺物は、本来の種の機能を全うしたものや転用されて使用されたものが夾雑した状態であった。この状態の中には、近接する所産年代のものが遺存状態を異にしても含まれているものと考えられる。後段では、当遺跡の一括性の在り方から出土遺物種について記述する。記述するにあたっては、陶磁器・在地系土器・石製品・石造品の順に従い各説する。

第2項 中・近世の陶・磁器について

1. 陶・磁器の選択について

本稿は当遺跡の約半分にあたるF～J区における中世～近代陶・磁器を扱ったものである。選択の方法と各個体の掲載の方法に関しては「第4節第1項出土遺物の一括性について」に示されているので参照されたい。

また、近世以降の陶・磁器の選択は各遺構に伴い年代観を得る必要性のある破片、稀少性の高い個体に限定した。このため近世以降の現象解釈はなされていない。

2. 観察について

観察については、一律、均等な意識で観察する意図から一覧表を作成した。それが第7表の陶・磁器一覧である。項目立ては、出土陶・磁器の特徴が現れるように配慮したつもりである。番号は図版内の実測図番号と写真番号に一致し、遺構単位の順番である。種別・器種のうち種別は磁器、陶器という焼物種名称を現わし、器種とを併記した。出土位置は遺構名称、出土層位などである。度目の項に記入された数値の大半は復原測値で、単位はcmで現わし、残存個体の部位も記入した。胎土は本来であれば夾雑鉱物と素地粒子を観察しなければならないが、ここでは素地の粗密を捉え、間に並をあてた。それは全遺物の粗密ではなく、製作地単位別としたものである。焼成も製作地単位別で扱い、その中で軟質・並・硬質に分けたが焼締りのある個体については硬の中に含まれる。色調は割れ口芯部の色調を捉えたもので器表面ではないが、器表面に燻のおよんだ例や、酸化・還元作用の極端な場合には記入した。おおむね橙色に近い表現であれば芯部は酸化気味であり、灰色に近い表現であれば還元気味である。器形・技法の特徴項の注意点としては、若葉色・砧手・天竜寺手など伝統的に呼称されている名称も一般理解のために用いた。

3. 観察の結果について

293点のうち中国青磁が42点、白磁が8点認められたが、陶88の白磁碗は9世紀代中国唐代晩期の所産と考えられる稀少性の高い資料であるのと本項が中世以降についてのまとめであるので、後日、陶206など時代判別に迷う例を含め稿を改めて報告掲載の予定である。

13世紀代は、⁽²⁾青磁に県内でも類例の少ない陶261同安窯系の猫搔手皿、類例の多い龍泉窯・同系の鎗手蓮弁

文碗に陶35・110・112・194、劃花文碗に陶69・70・74・165があり、また陶62の内面に印文が見られる。その他底部あるいは小片に陶121・193・196の碗、陶161の大形碗がある。出来映えとして見た場合、陶112の発色が砧手に近いほか、全体的に色調は暗い。青白磁に陶160・162がある。陶160は袋物の装飾部と考えられる部位にあるが器種は判然としない。陶162も同様で胎土・釉調から見て、同一個体の可能性がある。この2点は、いずれにしても発色も良く上手の青白磁特種器種で使用者に知識層、特権階級が示唆される。⁽³⁾白磁は陶63が口禿白磁皿の底部片と考えられるもので、上手高級品に陶273の四耳壺口縁部が存在する。陶273は使用時の砂や灰と考えられる擦痕が外面に認められ、日常生活の中で使用しうる上級階層の存在が示唆される。鉄釉は、陶32の天目碗がある。しかし時代判定をしよう口縁部片ではないので後代かもしれない。それは磁胎で釉調優れる。国産陶器に陶48・284常滑焼甕口縁部片がある。⁽⁴⁾

13世紀代の傾向としては、新田郡歌舞伎遺跡例や前回報告のZ・A～D区中世陶・磁器の出土例と異なり、鎬手蓮弁文碗数量の占る割合が少なく、劃花文碗が多い傾向にある。後種を多く含む一群は、13世紀代でも、やや古い様相の場合で今回も同安窯系の皿が存在していることから、ある程度そのことが理解される。しかし、中世前半に生産主体のある国産陶器渥美焼が今回の資料中に一片もないため、青磁劃花文碗の存在が13世紀前半の交易を背景に供給・入手したとは考え難く、また他方で常滑焼甕の存在が13世紀後半から認められるため、青磁劃花文碗の存在について13世紀から次期に伝来した可能性を考えておきたい。⁽⁵⁾

13・14世紀区分の困難な一群や13世紀後半から14世紀前半にかけての陶・磁器類は、龍泉窯および龍泉窯系青磁鎬手蓮弁文碗に陶280、同碗に陶114・277、同皿に42・118がある。出来映えは、陶114の発色が良く、砧手を呈する。国産陶磁器では叩文のある常滑焼甕片陶55・286・287・289・290があり、体部の下半で二次利用された陶129の甕下半個体が存在する。この一群に火中した例が認められ、陶114・118の釉表面に発泡化があって耐火度1250°Cを上回る火災を物語るものと考えられる。⁽⁶⁾

14世紀代は青磁に、龍泉窯・同系の鎬手蓮弁文碗陶282、劃花文碗陶270、素文碗陶94・272があり、同大皿・皿に陶64・139、同鉢に陶28・53、同小鉢に陶195、同花瓶に陶113がある。このうち陶139・282は砧手を呈し二重貫入が生じ、陶195は砧手色で出来映えが良い。天竜寺手を呈する個体に陶28・275がある。国産陶器の焼締陶器常滑焼は大甕に陶2・52・119・221、甕の叩に陶131・288、壺陶89が存在する。この段階の傾向は中国青磁に花生・大皿・鉢など碗を除く器種が見られ、製品の出来映えも二重貫入青磁・砧手色など良い個体例があり、使用者に特定階層が想定される。国産陶器では、常滑焼の大甕が出土個体の割に多いのも特色の一つである。前代に見られた火中個体は陶272・275の青磁片に観察できた。

14・15世紀区分の困難な一群や14世紀後半から15世紀前半にかけての一群は、中国陶・磁器の大半が元代と明代との分離がある程度出来るため量として多くはならず、結果的に国産陶器中の時期判定の困難な体部片に集中してしまった。⁽⁷⁾施釉陶器は瀬戸焼の灰釉瓶が陶111に、瀬戸焼か美濃焼か判別し難い例に、灰釉瓶陶11がある。常滑焼は陶8が壺と考えられ、陶4・6・50・143・197・198が甕類でそのうち4・143・198に叩文が認められる。この一群の傾向としては、初めて国産施釉陶器が現われ、陶11が美濃焼であれば、その焼造当初の製品で、内面に紐作り後水挽整形をなす点とともに注視される。⁽⁸⁾

15世紀代は青磁に龍泉窯・同系と考えられる劃文蓮弁文碗陶43・279があり、同青磁小碗陶115・116・117がある。小碗のうち陶116は八角稜をなす点と小碗の県内出土例が極めて少ない点、3個体まとまっの青磁小碗の存在などは使用時に特殊性を感じさせるものがある。発色から見た青磁の出来映えは沈んでおり、優美とは言えない。白磁は高台割込みの例とそれに類すると考えられる例が陶29・30・34・71・134にあり、陶29が小碗、他が皿と類推される。黒釉は陶135・207に認められる天目碗がある。国産の施釉陶器は瀬戸焼灰

第4章 考 察

釉平碗が陶44・45・46に、灰釉皿が陶57・203に、天目釉碗が陶40・47に、美濃焼灰釉皿が陶81に、灰釉卸皿が陶122、灰釉鉢が陶68・106・123・124・152に、瀬戸焼か美濃焼か判別し難い例に陶292の灰釉平碗、陶58の片口皿、陶33・59・146・233の灰釉鉢がある。常滑焼は、陶219に鉢が、陶3・141に大甕がある。この段階の傾向として舶載磁器は前代より減少しているが、青磁小碗や、白磁割込高台皿、天目釉碗など稀少例が存在し、使用階層にある程度の特権階層が示唆される。国産施釉陶器は灰釉の鉢類と並んで平碗の多さが目立ち、全体量からしても当遺跡の主体期の側面を窺わせる。

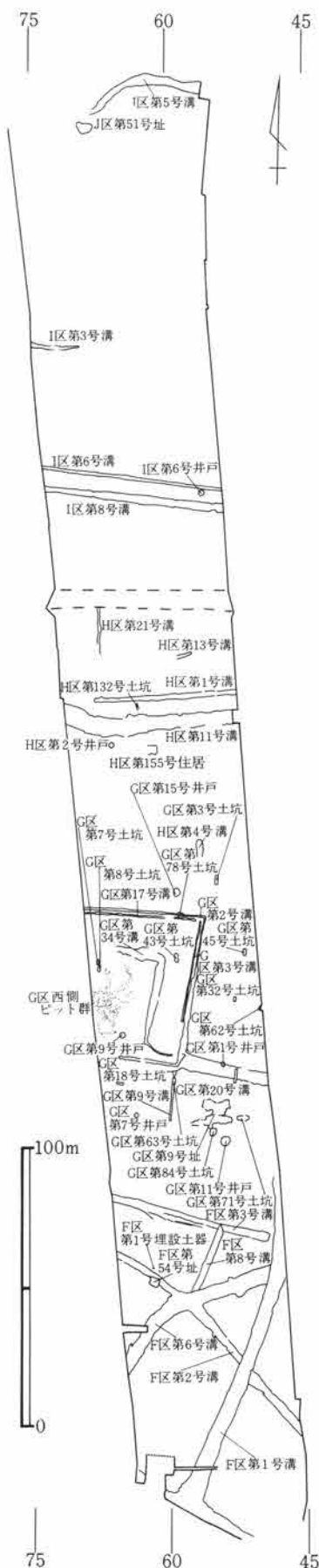
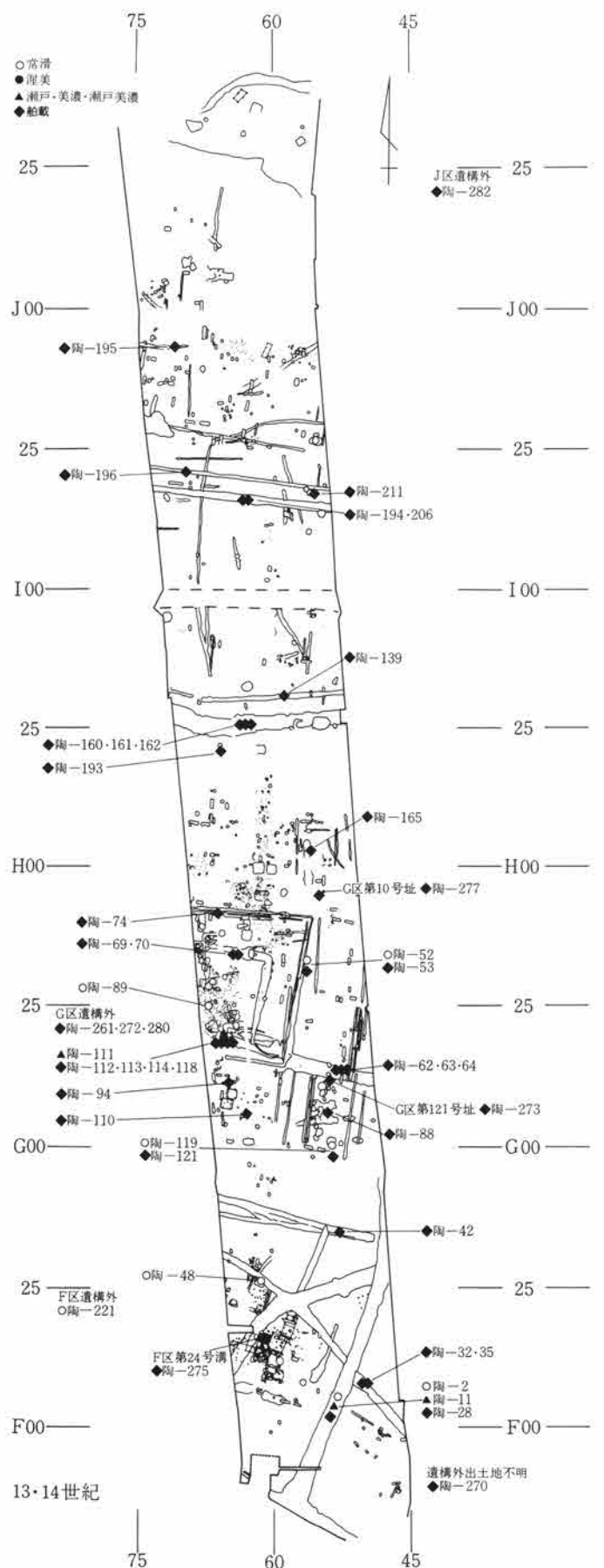
15・16世紀区分の困難な一群について、龍泉窯・同系と考えられる青磁は陶274の稜花皿があり、黒褐釉壺に陶67・166・283などの四耳壺片、焼締壺に陶167と同一個体と見える陶199・202がある。国産陶器に美濃焼灰釉平碗陶259、灰釉皿陶238が、瀬戸・美濃の耳壺片陶9が存在する。焼締陶器壺陶130、甕片陶220がある。この一群中で注意されるのは火中した陶238が認められる点で、今回の火中資料では最も新しい例である。

16世紀代は確実な個体量が減少し、中国製陶・磁器は陶154の黒褐釉耳壺が存在するに過ぎない。国産施釉陶器は美濃焼灰釉皿陶20・21・22が、同黒褐釉耳壺陶18が、瀬戸・美濃焼の天目釉碗の陶17、黒褐釉耳壺の陶87がある。常滑焼では鉢陶128が存在している。16世紀前半・後半を区分しうる例として前半に陶17・20が、後半に21・22があり、16世紀中において中世陶・磁器は整然とした形で終息してはいない。16世紀代に火中した例は顕著ではない。

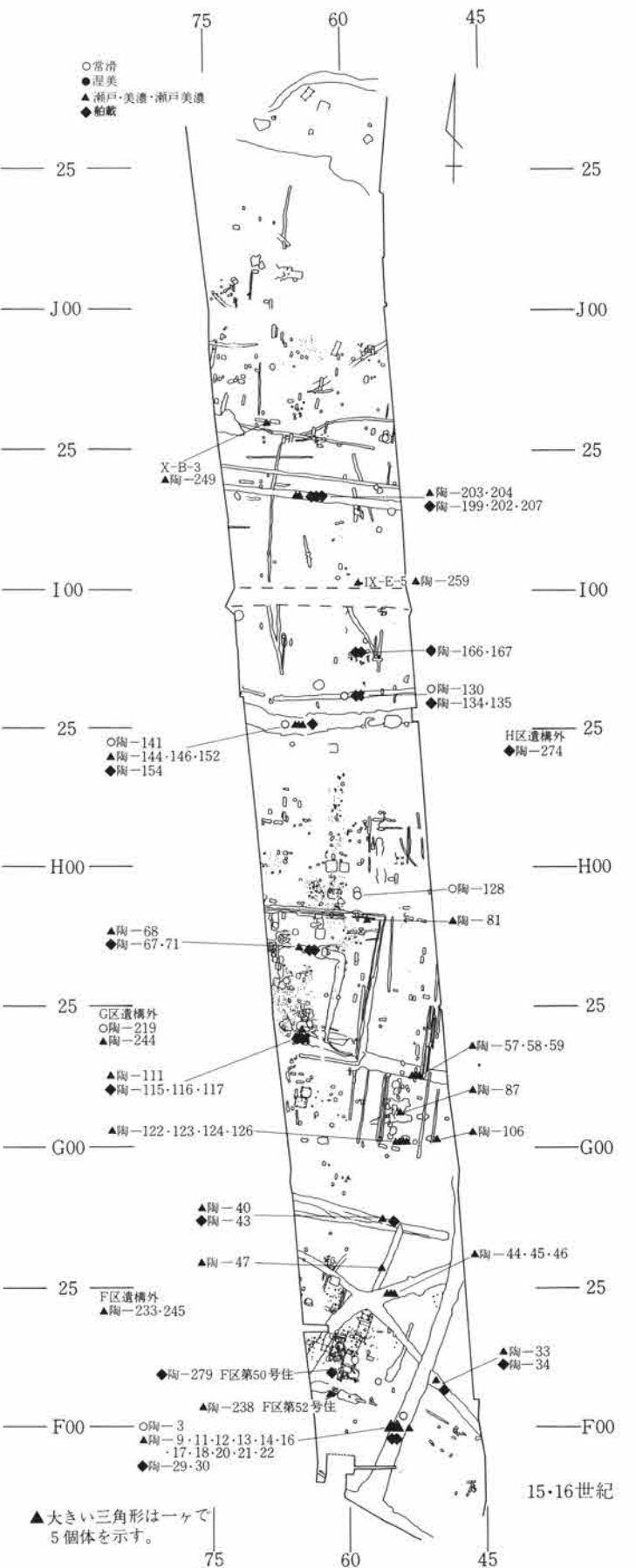
製作年代を明示しなかった陶・磁器片について中国製品は陶206の青磁碗が褐色を呈し、9世紀以前の越州窯の発色に近い。しかし、器形は、宋代の碗形状をなしており、後代と考えられるので冒頭に触れた唐代晩期の白磁破片陶88と共に後日、確認し稿を改めたい。細片で年代観の得られない龍泉窯系青磁に、陶281・276があり、陶278は青磁袋物である。黒褐釉に陶291があり壺などの袋物と考えられる。国産施釉陶器では美濃焼天目釉碗陶254があり、常滑焼では、陶5・7・10・36・37・38・39・54・56・66・73・85・86・90・107・109・120・140・142・144・155・164・168・200・201・210・215・222・224・225・226・227・228・229・230があり、器種は甕と大甕である。

4. 出土陶・磁器から見た遺跡の消長

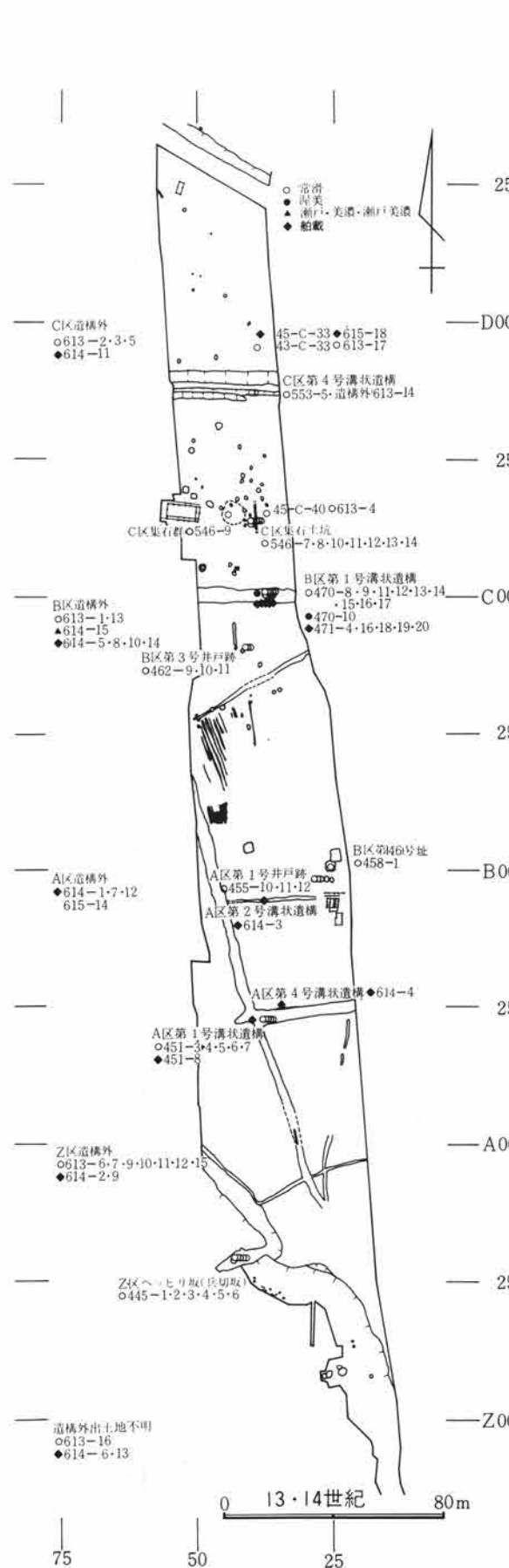
当遺跡の消長を知る必要から第7表のグラフと第768図の分布図を作成した。年代軸を上・下に出土量を左右に取った。グラフの作成にあたり配慮した点は次の通りである。扱った幅は中世に限定し、16・17世紀の2世紀の幅の中で考えざるを得ない資料もあるため、一部が17世紀に及んでいるが17世紀の実数ではない。さらに世紀を前後に区分し2世紀に跨ることを避けた。Noは各図観察表で用いた番号に一致している。記入の方法は、中国青磁、同白磁、瀬戸、美濃、常滑など編年観が明らかなものについては、それを拠所とした。判断に苦しむ個体は0.5個体ずつ2世紀に跨がせ、大まかな年代観とならざるを得なかった各個体は各世紀の中央に置いて配分した。世紀の過渡的な個体は2世紀区分の目盛上に置かざるを得ず、跨がせて記入した。なお、年代観の得難い常滑焼の体部片について記入していないので、そのつもりで参照して頂きたい。分布傾向図は本書中で掲載図示した中世陶・磁器の総てを記入したあり、そのため常滑焼を除外すれば第768図のとおり、中世における陶・磁器の消長をある程度窺うことができる。今回はまとめ稿であるので前回のY～D・Z区の第1分冊第623図中・近世陶器・磁器出土位置図、同第22表世紀別陶器・磁器出土量を再録し、その傾向について若干触れておきたい。



第768図 中・近世陶器・磁器出土位置図

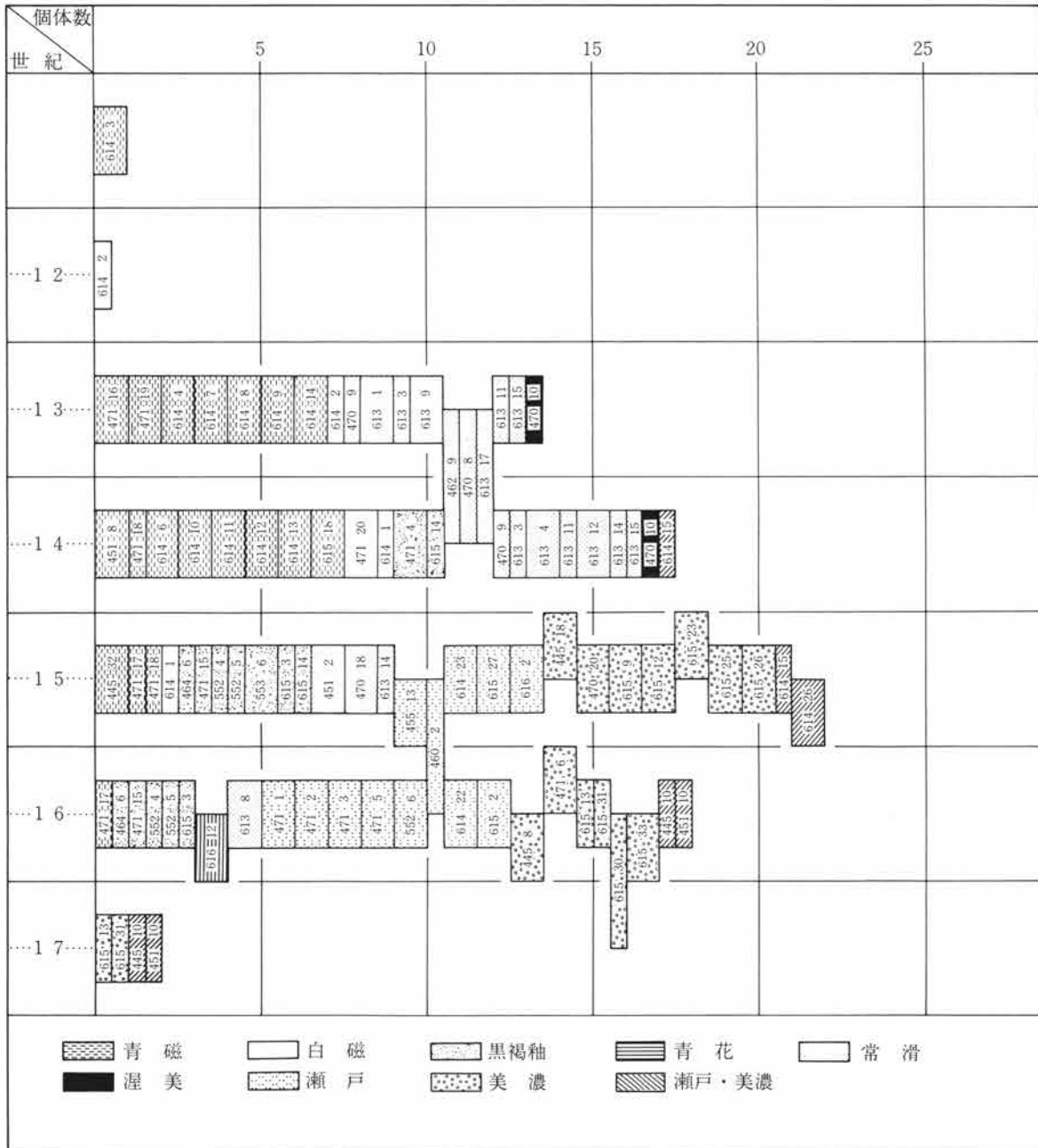


▲大きい三角形は一ヶで5個体を示す。



▲大きい三角形は一ヶで5個体を示す。

第4節 鎌倉時代以降の出土遺物について



第6表 南側調査区出土陶磁器出土量表

第4章 考 察

(1) Y、Z・A～D区（南側）出土陶・磁器の概要

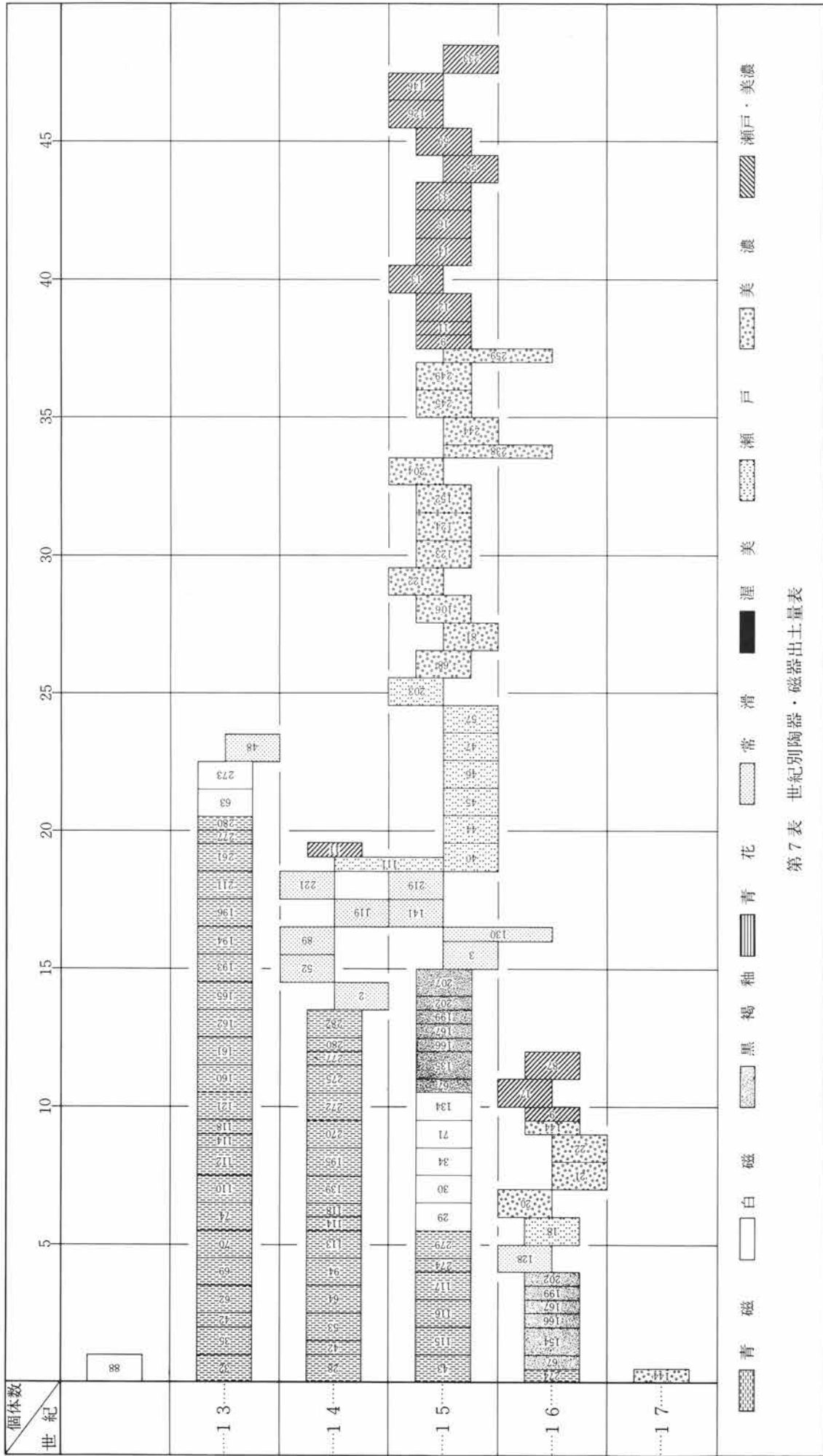
12・13世紀は、12世紀の白磁碗が認められたが、13世紀の舶載陶・磁器類は伝世品を後代の人々が他所からこの地に二次的に搬入したと考えられた。14世紀に至って陶・磁器類の他に在地製の土師質土器、軟質陶器が多出し始め陶・磁器も含で出土し居住的な意味合いでの生活感が初めて感じられるようになる。この段階に井戸跡など生活に直結する遺構も多く、13世紀代の陶・磁器もこの人々の生活の中で用いられた可能性が高い。出土陶・磁器は15世紀に向け着実に増加し続け、15世紀代は生活及び文化受容に大幅な拡大が窺え、陶・磁器の器種揃えに特殊な状況が認められた。特に美濃焼灰釉碗は器種として焼造され始めて間もない頃の製品で、量的な出土があり、それと対応するかのよう⁽⁹⁾に黒褐釉耳壺の出土があり、それぞれ喫茶用碗と葉茶壺と考えられ、その出土量は新田氏の氏寺として知られる新田郡長楽寺遺跡1号井戸跡に次ぐ量があり、その量を賄うためには相当な財力を必要としなければならず、その点から富豪層の存在を前代と比較した場合、消極的ではあるが、ある程度の存続が認められた。

遺構との関連からは、Z区は染谷川の河川敷のテラス・段丘坂などを含む遺構群で14～16世紀の陶・磁器片が比較的多く、特に国分寺作業工房の一端と考えられるテラスはその後も長期に亘って土地利用された区画のようである。A区は全体的に生活の痕跡は薄い⁽⁹⁾が、A区第1号井戸跡から15世紀後半の陶・磁器の組合せが得られ、近接して存在する第4号掘立柱建物跡、2条の垣址を含むA区東側ピット群、竪穴状遺構、B区46・47号址などが近接して存在し、距離的な関連からすれば直結した可能性があった。B区の南側に竪穴状遺構があり、その内の一箇所から15世紀末～16世紀前半と見られる瀬戸焼茶入片が出土し、竪穴状遺構の下限を示唆して重要であった。井戸跡は3・5号井戸があり共に15世紀代の陶器片が出土し、Z・A～D区の中では中世後半の出土遺物の集中地区で、15世紀代の主体生活域と考えられたが、両井戸周辺は昭和35年以前の耕作によって攪乱が顕著で、掘立柱建物の有・無は不明確であった。B区第1号溝状遺構は小見廃寺の南限大溝で、大量の中世瓦と共に13～16世紀前半までの陶・磁器類が出土し、北限のC区第1号溝状遺構に至る間の区画内からも白磁合子、葉茶壺と見られる耳壺片、碗片などが出土し、大溝で区画された領域内遺構の性格及び瓦葺建物に起居したであろう人々について有識層、富豪層の存在が示唆された。D区はC区北方に認められた13・14世紀代の陶・磁器片が出土しているが、その延びは希薄で、C区総体としても少なく、遺構量の多いF区との間に空白的な地帯が存在している。以上南区の全般傾向は15世紀に盛期があり、陶・磁器観察の成果からは地域における当該期の遺跡の在り方が16世紀に連綿と続く場合が多く、15・16世紀の中世土・陶・磁器の分離が一般的に困難であったが、前回報告でその傾向の一部が明らかとなり、地域の物質文化史に一光明を与え、その意義は大きいものがあつた。

(2) F～J区（北側）出土陶・磁器の消長

12世紀以前の白磁碗の出土は県内では前橋市下東西遺跡・国府推定地などに見られるが、中国北宋の前代に遡る例は本遺跡から出土した数点と上野国府推定地例に限られ、陶88の破片の存在は稀有な例である。出土地点は平安時代のG90号住などが近接し、当遺跡から複数例の同級を認めうる点からすれば、使用しうる背景として上野国分寺の存続期を考えざるを得ず、陶88の入手、使用、廃棄は平安時代の中でなされた⁽¹⁰⁾と類推したい。12世紀は当遺跡全般からしても遺構、遺物ともに稀薄である。

13世紀に至って遺物量は増加するが、出土して良いはずの在地製軟質陶器・土師質土器などの出土量は少なく、また搬入の製品で中世前半に主体量産期のある渥美焼も南側において1点の出土があるのみで、土器・軟質陶器・国産焼締・施釉陶器、舶載陶・磁器が必ずしも充分な組合せをもって出土していない。このため



第7表 世紀別陶器・磁器出土量表

第4章 考 察

(1)

前回報告で触れたとおり、「あえて古物を用いなくとも入手可能であったろうから、その仮定は否定せざるを得ず、前者である他所からの搬入に可能性が持たれる。」今回も同様で、一層とその感を増した。

器種として舶載陶・磁器では青磁鎗手蓮弁文碗、同猫搔手皿、白磁耳壺、同皿、青白磁装飾袋物がある。南側が鎗手蓮弁文碗が主体であったのに対し、白磁耳壺・青白磁装飾袋物など高級磁器の存在があり、北側に高級磁器を使用した人々が、それと同時に南側に7点を上回る21個(第768図)の量からして居住化当初(14世紀)の主体が北側にあったものと類推された。国産陶器には常滑焼甕が2片以上あり、他所からの搬入が、そうした大器を運びうる距離にあったと想起され、前回の所見と同様である。

14世紀代は器種として、中国青磁に碗・鉢・皿・花生があり、そのうち陶139・282は墨浸を施した二重貫入の皿で出来は極めて良く、また花生も明るい砧手に発色し、出来は優れており、北側に高級磁器を使用しうる人々の存在が示唆される。国産陶器では常滑焼甕片が5点ある。14世紀に至って陶・磁器類の他に在地製の土師質土器・軟質陶器が多く出土し、合成の組合せが成立するのもこの時期以降で、遺跡内においては居住的な意味合での生活感が初めて感じられるようになる。検出遺構のうち共伴関係が得られる例は14世紀後半代から確実に急増して認められるが、その上限をいつに求めるかが整理作業過程上の問題点となっている。陶・磁器からその始まりを求めれば14世紀前半と考えられる。14世紀代は南側(第768図)では寺院に濃く、北側(第768図)では14世紀代青磁13.5個、常滑焼5個のうち計13個がF00～H00間に集中し、薬師道南第1号館跡を中心としたその頃の生活の主体領域を抽出することができる。しかし、そこには問題がなくもなく、南側の所見に「13・14世紀の陶・磁器片の分布はほぼ一致し」、そのため「13世紀代の陶・磁器もこの人々の生活の中で用いられた可能性が高い。」としたが、北側H00以北の13世紀陶・磁器片の分布は散在傾向があり、14世紀陶・磁器の分布を欠いている。その理由は一方で在地製の14世紀前半の軟質陶器片が生活を思わせる絶対量をもって存在しているので、14世紀代のH00以北は、階層差異による現象と考えることもできる。いずれにしても陶・磁器側の検討絶対量不足であるのでさらに発展類推は止めたい。

(2)

15世紀は、中国青磁は碗・小碗があり、小碗の出土は県内において稀少であり、しかも3個体の複数例をもって存在している点は小碗に対して準宝器として儀器的な性格を感じとることができ、3点ともG区第9号井戸から出土している。白磁は、割込高台と見られる例が5点あり、それらはF00～I00間に散在散布し、15世紀代に生活領域の拡大が示唆される。黒釉の天目碗2点はH25～I25間に挟まれた高井道東第1号館跡(同館跡の周続溝の一端であるI-2号溝・H-20号溝はI-1・6・8号溝によって切られ、I-1・6・8号溝の出土遺物が示す年代観を類推すると、同館跡の構築当初は14世紀後半代にある。)とそれに近接し、館跡構築の前代に知識層・富豪層の存在が薄かった点と異なる状況を窺わせる。国産施釉陶器には黒釉の天目碗・灰釉平碗・灰釉皿・同卸皿・同折口鉢がある。前述したとおり当遺跡における灰釉・天目碗の出土は顕著なものがあり、北側においてもそれをみとめることができ、うち美濃焼は焼造が始まってから間もない頃の製品で、使用者に知識層・富豪層の存在が示唆される。それら施釉陶器の分布傾向はF00～H00間に存在する薬師道南第1号館跡・G区には中道南第1号館跡とその周辺に密である。常滑焼甕類は細片の多くを第768図から除外したが、14・15世紀が主体と考えられ、その分布は北区の全体に互っている。15・16世紀の製作年代区分に困難な例に国産・舶載の焼締及び黒褐釉耳壺が少なくとも6個体以上が認められ、南側の寺院に関連しての存在と考えられる例よりやや少ないが、分布は陶154がH区1号溝内で館跡区画内では無く、残りはいずれも圍繞溝を含む館跡からの出土で、それらの区画内に知識層や富豪層の存在が類推される。15世紀代の総体は、前代と比較すれば、南側の所見と同様「15世紀は生活に大幅な拡大と文化的な知識層、あるいは富豪層の台頭的な状況が窺える。」であった。しかし、微細に見れば、中道南第1号館跡・薬師道南第

1号館跡とその間に挟まれた地域は14世紀代に既に大幅な展開があり、15世紀代に至ってもその盛期は継続している。一方で高井道東第1号館跡とその周辺は15世紀に至って盛期を迎えているため高井道東第1号館跡の出現期を陶・磁器所見から15世紀の可能性を提起しておきたい。その点は在地製軟質陶器に見合った量があり、傍証されるのと、合成でなく一括組合せ資料も良好な形で多く存在していることから左証される。

16世紀代は舶載陶・磁器に黒褐釉耳壺があり、体部上半の外傾化を特徴と考え16世紀としたほか、僅かながら青磁稜花皿陶274にその可能性がある。国産施釉陶器には灰釉皿・鉄釉の天目碗・黒褐釉耳壺があり、数量はすこぶる減少しているが、葉茶壺として使用されたと考えられる黒褐釉壺の存在から、知識層は存在するものの財力の減少は認めざるを得ない。16世紀の国産施釉陶器を量産した美濃焼はこの時期に量産を行なう大窯段階をむかえているため、当遺跡の減少化は確実に遺跡内における生活の縮小を意味している。16世紀代の陶・磁器量が少ないので、15・16世紀の時期判別の困難な例も加えて見れば分布傾向は、館跡中心ではなく全体に散在分布し、ことにF区1号溝・H区11号溝・I区8号溝など大規模な溝状遺構から出土する傾向にある。館跡内に分布が稀薄であるのは15世紀末か16世紀初頭頃に、館機能の廃絶が考えられ重要な点である。しかし、その時点で人々がこの地から離れてしまうのではなく、F区52号住・G区9号址・G区15号井戸跡など北側南半に生活機能の一部は残っているが、それも16世紀後半以降に至っては、陶・磁器片が2点しかないのと軟質陶器内耳鍋の存在例が16世紀前半までしか認められないことからして、中世の営みの存続を、16世紀前半までと推定したい。その点が果たしてどのくらい裏付けられるかは断言できないが、今回の資料中に火中の陶磁器片を多く認めることができる。陶・磁器の釉の融点は少なくとも、1250°C以上であり、火災でも相当な火災でない限り釉変化は生じないと考えられる。したがって出土が仮に1点であっても相当な火災が想定される。火中例は南側にも増して多く、13・14世紀では青磁碗陶114・272・275、同皿118、15・16世紀では青磁小碗陶115～117、同稜花皿陶274、国産施釉陶器灰釉碗陶238、同卸皿陶122、同鉢陶124がある。それぞれF区52号住から1点、F区24号溝、G区9号井戸跡から4点、G区11号井戸跡から2点あり、いずれも遺物相互に製作年代にひらきはあってもF～G区に集中しており、その接近出土からして、度重なる火災ではなく、数度の火災を感じさせるものがある。各遺構の共伴遺物を見てみると、F区52号住・F区24号溝は古代遺構覆土層で共伴遺物はなく、G区9号井戸跡は15世紀前半の在地製軟質陶器内耳鍋片、土師質土器皿片が下限で同11号井戸跡は陶121の灰釉陶器卸皿片、陶120の同鉢から15世紀前半が下限である。また遺構に直結していない陶238の灰釉皿は、製作年代に15世紀末から16世紀初頭と考えられ、したがって、陶・磁器から得た所見は、15世紀末～16世紀初頭の頃に火災が、さらにその前代に大火があった可能性を推測することができ、前例の場合、当遺跡における中世の終末と関連する可能性もあり、その点は本稿とは別に軟質陶器・土師質土器の項も併設されたい。

註

- (1) (奈良県立橿原考古学研究所付属博物館)『奈良・平安の中国陶磁』 1984を参考とした。
- (2) 青磁については亀井明德 「九州出土の宋、元代陶・磁器の分布」『考古学雑誌58巻4号』 1973 上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会 1982を参考とした。
- (3) 白磁については森田 勉 「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会 1982を参考とした。
- (4) 常滑については赤羽一郎 「常滑」『世界陶磁全集3 日本中世』 1977を参考とした。
- (5) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『歌舞伎遺跡』 1982
- (6) 渥美については小野田勝一 「渥美」『世界陶磁全集3 日本中世』 1977を参考とした。
- (7) 瀬戸については井上喜久雄 「瀬戸」『瀬戸陶磁全集3 日本中世』 1977を参考とした。
- (8) 美濃については檜崎彰一 「美濃古陶の流れ」『美濃古陶』 1980を参考とした。
- (9) (尾島町教育委員会)『長楽寺遺跡』 1978
- (10) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『下東西遺跡』 1987
- (11) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域』 1986
- (12) 群馬県立歴史博物館 『関東の中国陶磁』 1982

第3項 在地系土器について

はじめに

在地系土器には土師質土器皿・内耳鍋形土器・鉢・播鉢・火鉢等の器種がある。前刊書では、これらのうち、土師質土器皿・内耳鍋について記述したが、後者は、大略的な把握であった。また、土師質土器皿については、15世紀以前の一群は再考を要するとして細述は控えた。本項では、当遺跡での15世紀以前の土師質土器皿と上述の器種について、一括扱いとした遺物の中から適時摘出し、性格・変遷序列を考え、相対年代の推定が可能な場合、各序列に付加し変遷観を試考してみたい。ただ、予めお断りしておきたいこととして、土師質土器皿以外は全てが完器として存在しないため、完形を想定する場合、周辺遺跡における類例を加味する。そして、主幹を成す方法としては、形式学等を用い分類し、共伴・共存状態等の調査時の状況を考慮して考えるもので、当遺跡での「在り方」を考えたい。

また、前刊書の挿図を示す場合は、1—〇〇〇—〇とし、頭に数字の1を冠し、第1分冊を表わす。

土師質土器皿

土師質土器皿の性格は前刊書で記述したので今回は割愛する。14世紀以前の当該土器は、前刊書で示した分類（以下前刊書は略する）では、1・2・7・9類が該当する。この一群は、南側調査では、主としてB区第1号溝状遺構（以下B1溝の如く称号を略する）等から出土したものであった。そして、この14世紀以前の当該土器は、当遺跡での当該段階の土師質土器皿について語るには全体量自体不十分であったため、前刊書では第2分冊中で記述する旨を示し保留した。本項では、この旨を踏まえ、今次の報告で掲載した14世紀代に比定し得る遺物を摘出し行う、また、前刊書では形式学に重きを置き、分類変遷を考えたため、大元の分類段階から派生した問題を内包させて変遷・系統・年代観について記した。この内包される矛盾を考え直し、前刊書で示した15世紀代に比定した一群を含め再考し、一部訂正を含め記述する。

また、後述する各分類は、器形の外観上の特徴と他の要素を形式学を応用し分類する点は、前刊書同様であり、これを基本として分類単位での在り方を考えたい。そして、今次は群馬・栃木県の様相を対比させ、当遺跡での当該土器の意義をより具体的にさせたい。

1・2・7・9類の土師質土器皿

当該の土師質土器皿は前刊書では第1群として扱った。この一群としたのは、全体を構成する器種群は数種の系統により構成され、現状における編年大系で把握し得る一単位年代は50年程度である。そして、この一群自体の年代観が14世紀後半の50年間に集中するものと判断した点にあった。また、共伴関係の点では、後出の第2～4群が土塚墓内での在り方にはほとんど認められなかった点にもあった。

この第1群の一群について記述する前に第1群から第4群の変遷概要を再述し第1群を把握するための目安にしたい。

土師質土器皿は、前刊書で示した分類序列から大きな流＝変遷の様子は、各群類別にみると、以下の点に集約される。

第1群

- ① 体部・口縁部が外観上内湾気味で内面では外傾し、器高値(口径+底径+器高を100とした場合の割合)が低い。
- ② ①の器高値が増し、底径値の低下。

- ③ 体部・口縁部長の増加（長い体・口縁部）。
- ④ 口縁部の外反化と、体部に強いくびれが生ずる。

第2群

- ⑤ 器高値の低下。
- ⑥ 底径値の増加と器厚の薄化。

第3群

- ⑦ ⑥よりさらに底径値の増加=口縁・体部長が短くなる。
- ⑧ 体部・口縁部の外傾化。
- ⑨ 器高値だけの低下と口縁部・体部長値の増加。

第4群

- ⑩ 口径値の低下=底径値の増加。
- ⑪ 体部・口縁部の外反化。
- ⑫ 体部と口縁部の境が分明に作り分けられ、体部は外反、口縁部は内湾気味になる。

以上12項目に要約される(大形器種における場合)。この12項目をさらに要約すると、体部と口縁部の形態変化は、内湾→外傾→外反→内湾(?)と底径値の低下をへて増加へと変化が認められる。この観点は、序列を行う前提として“形式学、を主に分類した結果であり、相互間の状況は、未解決な部分が多く内在している。特に、第1群では、全体数の点で、資料操作するには不十分な点があった。

第1群の要素自体数量が少なかった割には多く認められる。この要素を今次の報告中該当する一群を抽出し、先ず各分類に該当するものを示した後に、前刊書中で示した分類に該当しない一群を示し、第1群の様相について考え直し、第2群との係わりについて記述したい。

1類に該当するものはG34溝で2点(第654図-1・4)、I6溝で1点(第728図-3)が有る。この1類は、前刊書では1点のみの類例として扱ったが、3点の類例の増加をみた。そして、G34溝の類例は、遺存状態も良好なものであり、確実視出来る存在であることが判断される。

2類は、A~Eの枝番を付し5形態に細分した。ただ、この中で^{註2}2類Cとしたものは、15世紀後半の8類と共存する点で当該期一群から削除して考えたい。すなわち、2類A・B・D・Eの4形態である。

この4形態のものは、今次の報文中から抽出すると40個体ある。先ずこの40個体を各形態に該当させたい。

2類A F1溝(第605図-6・10・12)・F3溝(第620図-4)・F6溝(第624図-2)・F9溝(第626図-2)・G9井(第688図-1~7)・遺構外(第737図-3・4)の15個体である。

2類B F1溝(第605図-3~5・14)・F2溝(第616図-1~3)・F3溝(第620図-1)・G9井(第688図-8~10)・遺構外(第737図-1)の12個体である。

2類D F1溝(第605図-7~9・11)・F6溝(第624図-1・4)・G34溝(第654図-2)・H1井(第711図-4)の8個体である。

2類E F1溝(第605図-2・13)・F9溝(第626図-1)・F20坑(第645図-3)・H1井(第711図-1)の5個体である。

これらの各分類を行ったが、実際には分類形状の判別が何如とも言い難いものがあり(特にE類では顕著)、各分類に前刊書中の該当するものを加え、分類上の特徴を再考したい。

2類A. 丸い体部が内湾乃至内湾気味に立ち上がり、口唇部は尖っている。口径と底径の差が少ない。

2類B. 丸味を帯びた体部が、外傾して立ち上がる。口径と底径の差が少ない。

第4章 考 察

2類D. 断面三角形形状を呈し、口唇部は尖り、比較的直線的で外傾する口縁部をもつ。口径と底径の差が少ない。

2類E. 前刊書では、丸味を帯びた体部と体部下半に整形時の強い稜を有し、底部の厚みがあるものとしたが、この特徴を全て具備するものはない。むしろ、2A・2Bの中間的形状であるが、口径・底径に前三者と相違点が見い出せる。また、前三者とは、器高にも差が認められる。この点を含め、底部の作りの特徴を削除し、独立した分類の存在としておく。ただ、類例が少ないことから、この2類Eの存在意義は、土師質土器皿自体に中在する問題であると思われ、この点自体後述したい。

上述の4分類は度目値から、小形の部類に含まれている。この一群と、種^{註3}として構成した大形のものは、7類である。この7類を今次の報告から摘出したい。摘出した資料は、総数38個を数える。また、前刊書の分類に該当しないものが15個体存在する。この一群は、5類に近似するものも認められ、7類の記述後具体的に検討したい。

7類はA・B・Cの3分類がある。この一群と上述の4類と同様に示したい。

7類A. F1溝(第606図-1・3・8・10・12・14・15・20.第607図-4・7)

F2溝(第616図-7)・F9溝(第626図-5・6)・G34溝(第654図-9・12)

遺構外(第737図-16・18・19)の18個体である。

7類B. F1溝(第606図-5・7・18・19・22・23.第607図-6・8)

F2溝(第616図-5・9・11)・F54址(第632図-1・2)の13個体である。

7類C. F1溝(第606図-17・21・24.第607図-1・3)・F2溝(第616図-6)

F54址(第632図-3)の7個体である。

これらの各類の特徴を示すと以下のとおりである。

7類A. 外傾して立ち上った体部が口縁部で膨れる状態となり、丸味を帯びる状態か、直線的に外傾する口縁部を有し、内面は見込み部から緩やかに立ち上がる。断面三角形形状を呈する。口径と底径の差は少なく、器高値が少ない。

7類B. 外形は7類Aに似ているが、内面は、見込みからの立ち上がりは7類Aの特徴がなく、見込み部と体部が明確に分離される状態で鋭く立ち上がる。口径と底径の差は比較的大きく、器高値も大きい。

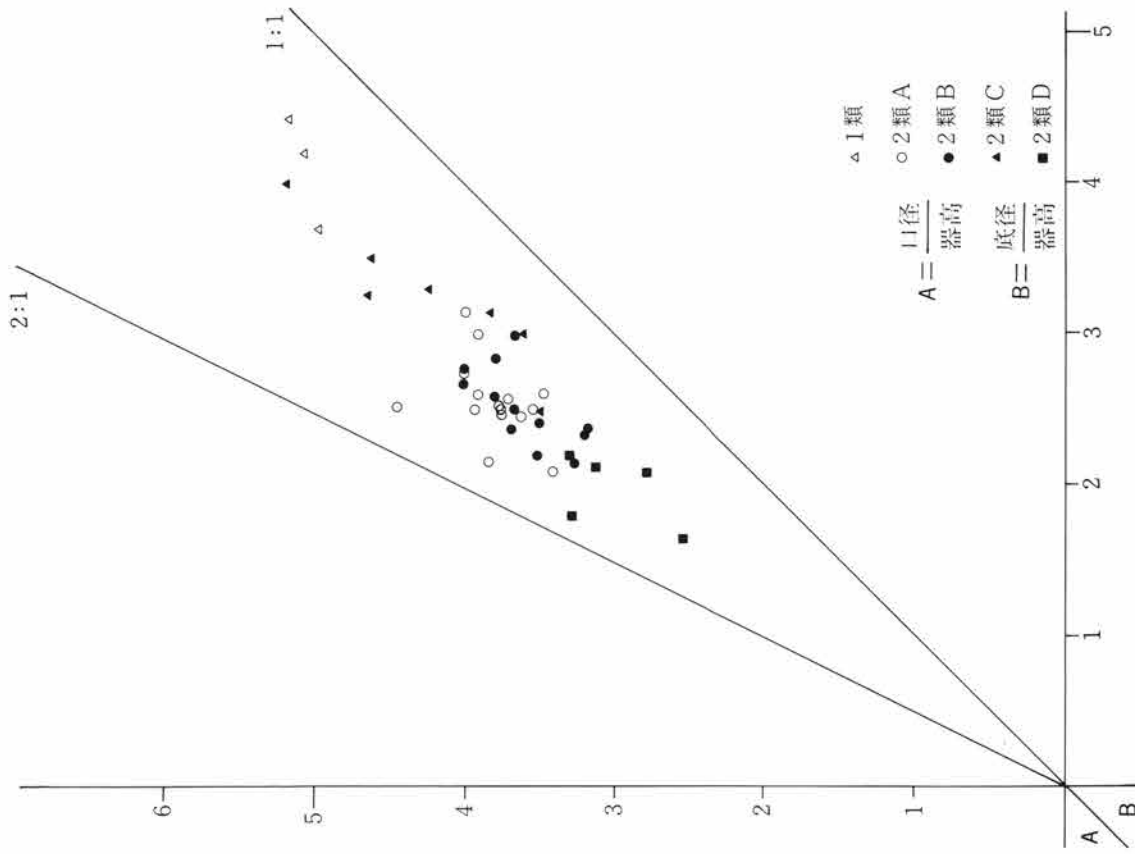
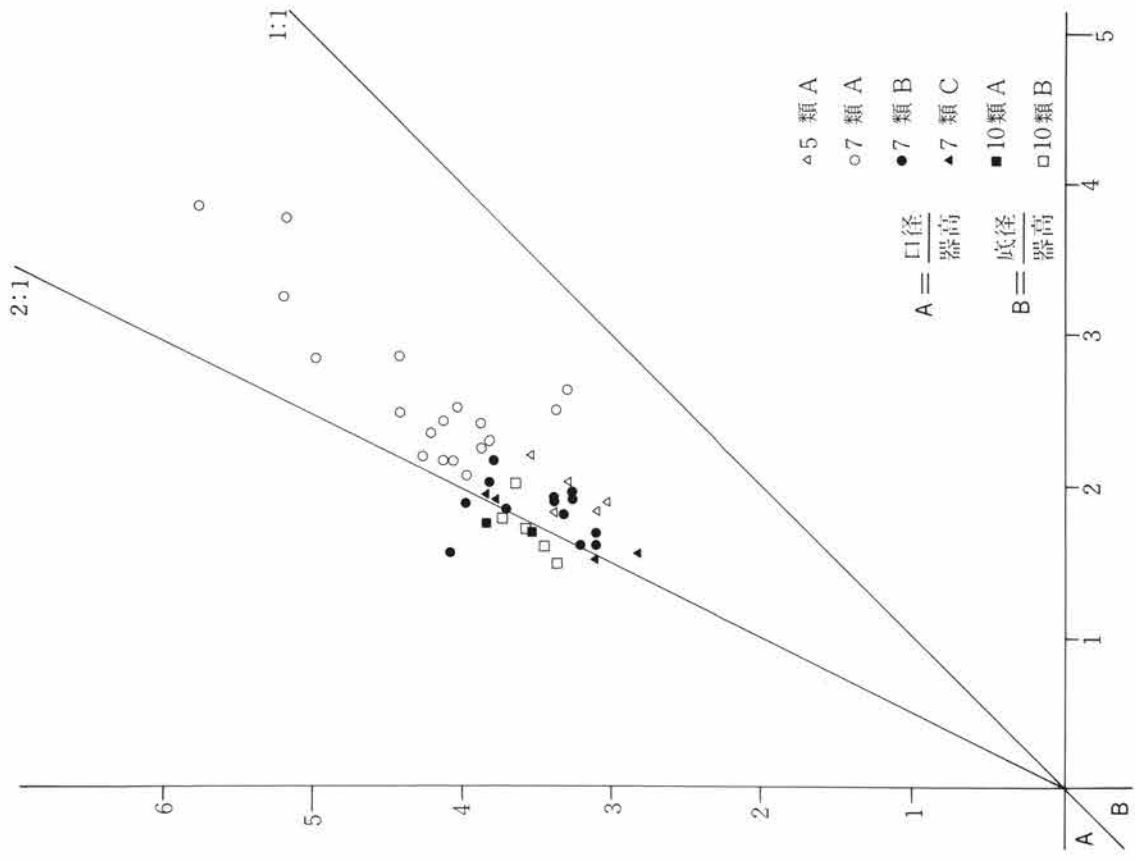
7類C. 全体的に外反化の傾向が見られる。体部と口縁部の境には、強い轆轤目を有し、体部は、外反し口縁部は外傾する。内面は、見込みと立ち上がりの境が明瞭になっている。類例は、破片個体が多いが、口径と底径の差が比較的少なく、器高値が大きい。他の類とは分別して考えられる。また、F1溝の2点(第606図-17・21)は、外傾が独特なものであるが、体部の特徴から、当該に含めて考えた。(前刊書では、口縁部が内湾すると考え7類中に含めたが、類例を集積し検討した結果、外傾する口縁部を有する一群であることが判明した。ここで訂正とお詫びをしたい。)

新たに設定し得る類別

上述してきた分類のものは、前刊書中で示した分類のものであるが、前述したとおり、この分類に該当しないものが存在した。次にこの一群の特徴を示し、前述の一群に後出すると思われる5類の一群と対比させてみたい。

既出の分類に該当しない一群は、以下の特徴を備えている。

第4節 鎌倉時代以降の出土遺物について



第8表

第4章 考 察

口縁部は外反乃至外傾し、ここに、口縁部外反化の傾向が現れている。そして、体部と口縁部は比較的長く、度目値では、5類より底径が小さく、口径と底径の差が大きい点では5類に近い。そして、見込みからの体部の立ち上がりは、7類C・5類と同様である。この一群に含まれると考えられる遺物で、前刊書中で5類Dで分類した⁶³、(昭和45年度調査の中間地域出土のもの)は、当該の分類中に含まれると考えられる。先ずこの点を訂正しておきたい。この一群に対し、分類名称として、10類と冠しておく。そして、外反形態の口縁を有するものを10類A、外傾形態のものを10類Bとしておきたい。

10類に該当するものを以下に示す。

10類 F 1 溝 (第606図—②・④・⑪・⑬・⑯・25・26、第607図—2・5)・F 2 溝 (第616図—12)、
F 3 溝 (第620図—6)・F 6 溝 (第624図—⑥)・F 9 溝 (第626図—④)
遺構外 (第737図—⑭・17) の15個体である。(○印は10類A)

上述してきた1・2・7・10類の他に9類があるが、今次の当該遺物の中には該当するものが認められなかった。

ここで、これらの一群の変遷観を考え、前刊書で示した変遷序列を再考したい。

前刊書では、次の変遷序列・系統を示したが、前述した10類の追加から生ずる変更があるため、今次はこれにより生ずる大小関係での変遷を先ず考えたい。

第1群

1 + 9 → 2 B + 7 A - 2 D → 2 A + 7 B

2 E + 7 C

3 A + 5 A 第2群

3 B + 5 B →

小形種では、1類は独立した存在として把握される。この1類の後出形として、口縁部の断面形状に類似が求められる2類Dが考えられる。

2類Aは、G 9 井戸の一括例で見られるように、2類Aと2類Bは共存関係が認められる。ただし、この点では、両者が同時間には存在していることを考慮しても、前後する存在は否定出来得ない。この点では、基本となる分類が、形式学を用いていることにより、生ずる矛盾点も内在しているとも考えられる。この2類Aと2類Bの相違点で、口縁部の内湾・外傾にあるが、度目比ではほぼ同様の数値を示している。口縁部の断面形状では、両者共に2様のものが認められる点からすれば、むしろ、同階段段階のものとして把握されるものである。しかし、口縁部形状に主眼を置いた場合には、2類A・2類Bは口縁部断面三角形状を呈するものと、均一化した口縁部を具備する二者での分類となりうる。この場合、先述した外形状の特徴の二者が共存状態になると考えられる。この分類では、2類Dの基準にし得る口縁部の断面形状との対比がなされる。この点を加味すれば、2類Dの後出形に2類A・2類Bが認められるが、さらに2類A・2類Bの内部では、口縁部断面の形状差により前後の関係が生ずるものと考えられ、両者の中でも口縁部断面三角形状を呈するものと均一化の口縁部のものでは、度目比の数値に変化が認められる。現状としては、外観上の形状を優先させ、これにより、断面形状のみで分類を行った場合、外観という基準から逸れる点もあり、類例の増化とそれ自体の共伴関係から明らかにしたい。これらのことから、2類A・2類Bは2類Dの後出形とだけしてしておきたい。

2類Eは、全体量が少ないが、小形器種の度目比の中では存在したことが確認される。また、前述したこ

とより、2類A・2類Bの中間的様相を具備する点が挙げられる。この中で、器高値が大きくなる点では、前出の一群より、7・5類の傾向から判断すると後出性が考えられる。現状としては、大形器種の変遷傾向よりの特徴で把握するしか方法がない。

上述のことを踏まえ、これを示すと以下のとおりである。

1 → 2D → 2A・2B → 2E

9 → 7A → 7B → 7C・10A・10B

ここで若干、上述に示した変遷順位=変遷経過について記述しておきたい。

通有の方法では、共伴・共存事例で具体例を論ずれば具体性も有るが、当遺跡例の場合大半が溝内での一括と、井戸内での一括である。井戸内での場合、共伴種の内耳鍋自体に年代観が不一定のものが多く、決定的と言い得るものはなかった。この点で、論拠の脆弱性は前刊書での段階と同様である。

1類のものは合計4点（調査区内全体）ある。内1点は14世紀後半代に創建の在ったと考えられる寺院跡の南限のB1溝内からの出土で、2点は、G34溝内であるが、このG34溝は、中道南第1号館跡を構成する堀であって、この館跡に先行して存在した14世紀後半代の方形区画域の存在が認められる。残りの1点はI6溝の出土であり、高井道東第1号館跡の存在が有る。この点では、出土遺構の年代観より遡る状況が認められる。そして、度目比で類似性が認められる4類D・Eとは明確に異なる形状を呈しており、4類と6類の共伴状態と6類と5類の共存状態、さらに5類と3類の共存・3類と2類の共伴状態から類推される。（前刊書第5章第4節第2項参照）ただし、突発的な形態としての存在は、考慮していないが、2類の形状特徴は、1類と共通する要素もあり、この点は否定し得ると考える。また、大小の関係でも両者に相互の対応関係が認められることなどから、1類自体が、2～8類の先行性が判断される。そして、2類での関係は、1類を先行形態とした場合、2類A・B・Dは、断面形状と度目比から、2類Dが1類の直後の段階であると考えられ、2類A・Bは形状と断面形状から二様の存在状態が考えられる。この点は、前述したとおりのものであり、外観形状・断面形状から単純に言い得ない状況とも思われる。2類Eは体部の立ち上がり部分が、7類B～Cの同じ部分の状況に類似性があり、7類自体の変遷から判断されよう。この点では大形器種の変遷に対応するものとして考え、大形器種の変遷順に相当させて考えた点にある。この点を踏まえ、大形器種の変遷を述べる段階で詳述したい。

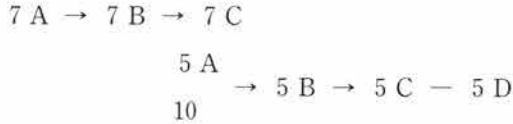
大形器種では、7類はA～Cの3分類と今回新たに加わった10類の合計5分類と、前刊書で15世紀初頭～15世紀前半での存在と考えた5類Aを加えた6分類を考えたい。ここに、5類Aを加えたのは、形状が1群の系譜にあると考えた点で再考を必要とした点にある。また、5類Cで分類した⁶³、の中間地域（昭和45年例）の改変も有り、上述の一群について記述した後に5類を含めて考えたい。

7類A・Bの差違は、器高と見込の立ち上がり部分と底径値の低下に認められる。この両者は、小形器種に対比した場合、7類Aは断面形状に類似点が認められる2類Dと、2類A・Bの同様な一群に対比される。この点から、2類Dが2類A・Bに先行性が認められ、7類A・Bの関係は、7類Aの先行性が考えられる。そして、5類に至る間の度目比の傾向からもこのことが判断される。また、度目比の点からは、7類Bが7類Cと10類より先行する形態で有ることが考えられる。また、この一連の関係には器高の均一化という変遷が認められる。また、5類Aは、断面形状から7類Aの系統種と考えられる。この系統種として考えられる点は、器内面が外傾する口縁形態を有しながらも、外面では、丸みを帯び、内湾状の形態として作られている点にあり、他の大形器種では認められない要素であることから同一の系統種として判断される。7類Cと10類では、度目比に明確に差が認められるが、両者の前後関係は明らかでなく、出土した遺構もF区内の溝

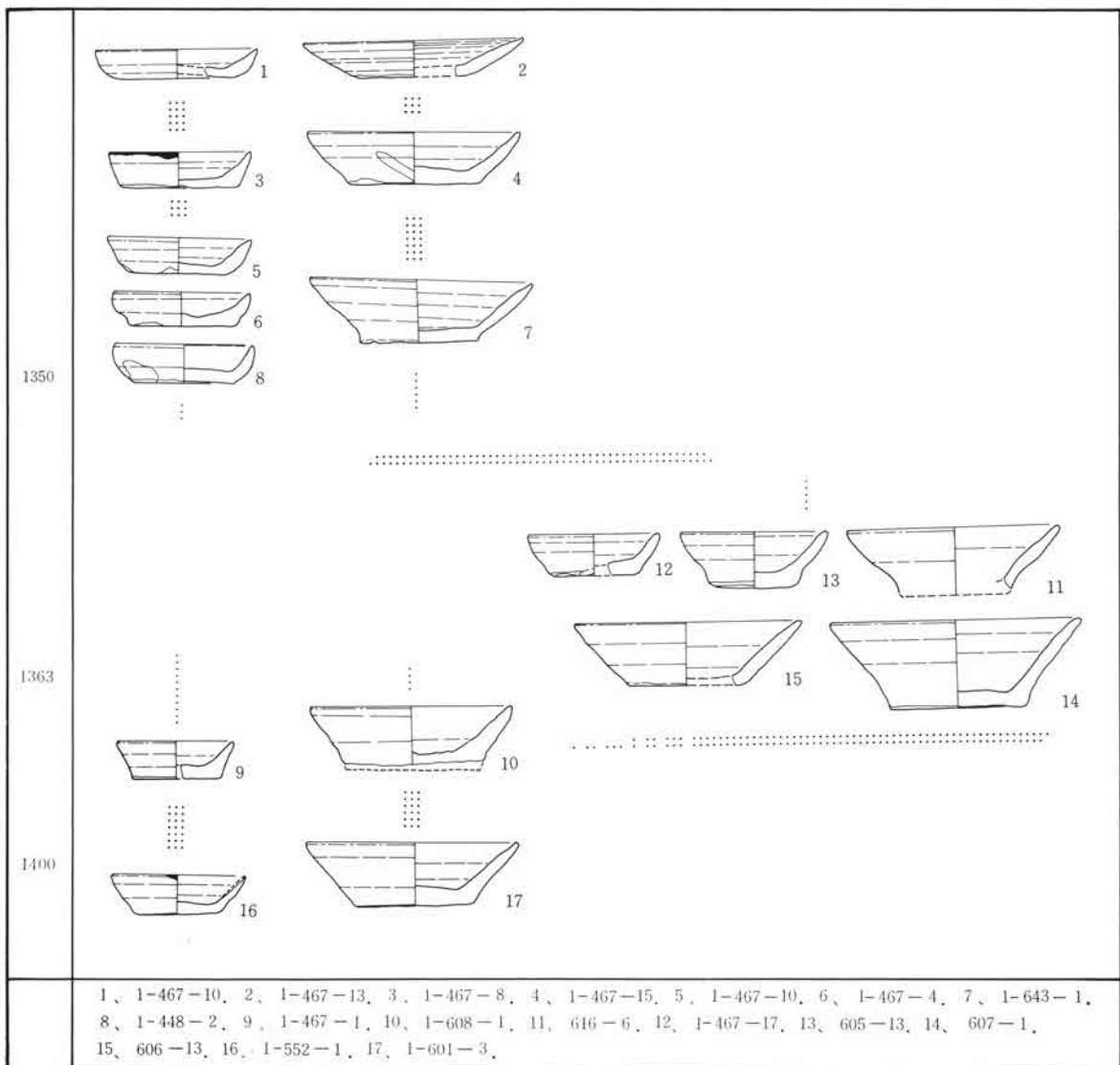
第4章 考 察

が主である。また、形状特徴から7類Cは7類A・Bの要素を継承するものと考えられるが、上述の如くの要素は、若干残すものの、他の要素が加わり生じた派生種が別系種と考えられる。10類は、当遺跡での5類Bが出現する前段階的な形態として考えられる。また、5類Bを生じせしめた形態としてこの10類と7類の系譜を引く5類Aが考えられ、非常に複雑な状態が考えられる。

上述の7類・10類・5類Aの変遷関係を以下に示す。



上述した各分類の相互の関係=系統は一部のものについて記したが、ここで総体的に図示(第769図)し、この図を説明するかたちで各系統について述べたい。



第769図 土師質土器系統・変遷図-14世紀代を中心として-

7類A・Bは前述したとおりの系統種と考えられ、7類C・10類は前者は立ち上がりから体部下半に外反状態が認められ、7類B要素を具備するものの単純に7類Bに対比して一系統のものとは考え難い。

10類は、唐突的に出現する形態と考えられる。この10類と7類とを継ぎ合わせる要素は、Bの度目比值に

しかなく、口縁形状には差違がある。この点で独立した系統種としての存在を想定せざるを得ない。ただ、この10類の出現は、7類の系統を認められる部分も一部あるものの、標準形状の設定を外反化の体部の長いものと、外傾形態の比較的体部が長いものとした場合、5類Aは外反化が生じる段階のものであるが、度目比では7類B・Cに近い値が得られる。この10類を前後する段階には、当該地域における土師質土器皿に非常に大きな画期が想定される。このことは、5類以降の統一的形状を保持することから、この段階7類A・Bから7類C・10類・5類Aへの変遷、そして、5類Bへの変遷での画期は、製作工人に大きな変質があったものと考えられる。この点については後述したい。

小形器種では、1類が度目比において著しい差違が認められるが、外観形状・断面形状では、2類へと移行する祖形として考えられる。しかし、内湾形態が外傾化への変革は、何らかの別の系統との融合か、自然発生的に出現するのかが小形器種のみでは把握し難く、大形器種との対比が必要である。

2類A・Bを2類Dの後出と考えたのは度目比の変化にあり、7類A・Bの度目比に対応させたものであるが、断面形状の状況も加味して考えた。すなわち、前述した如く、1類・2類Dの段階の口縁部は、内湾という共通要素が認められ、断面が、三角形状を呈する点にある。この断面形状は、2類A・Bにも共通して存在しており、G9井戸での在り方を見る限りでは、確実な共存状態を確認出来る。この点で、短時間内の存在も考慮されるが、器厚を均一化して作り込む一群の新たな系統が自然淘汰的に出現したとも考えられる。そして、この前段階の2類Dの以後の工人自体に世代的交代があったとも想定される。また、同一分類（外観上）の中で、断面形状の差違による細分は、形式的に分類基準を設定した点での矛盾と考えられるが両者のこの状態は一形態が変遷する中での中間の様相とも把握される。この段階での大形器種は、7類Bと7類C、10類A・Bが対応する状態であるが、7類C、10類A・Bは、短時期での系統・形態に7類Cと違いを生じさせており、このことから、この2類A・B、7類B・C、10類A・Bの段階の複雑さを物語っているものと思われる。さらに、2類Eを含め、後出形の3類A・5類Aを含め前述のとおり、大きな画期があったものと考えられる。

上野国内での状況

上野国内すなわち、群馬県下における状況をここで鑑みたい。かつて、大江氏は、関東中の当該土器についての^{註4}論述を行い、結論の一部として、4系列の存在と、15世紀代に入って関東中に統一的な器種の出現のあることを示された。前刊書では、現状の類例等を考慮し、当該土器を扱った場合、当時の政治の背景から西上野に凝縮させて考えた。そして、今次の報告は、この内の14世紀後半代に比定し得る資料について述べてきた。ここで、結論を記述する前に、東上野と下野国の状況について若干望見してみたい。これは、東上野にみる場合、長楽寺を中心とする文化圏が想定出来る点と、観応の擾乱（観応元年—1350年～文和元年—1352年）が終息すると、上野守護が宇都宮氏綱（関東管領）に移り、守護代には芳賀高名が任ぜられ、貞治2年（1363年）に足利基氏により関東管領職が上杉憲顕に移り、上野守護代が長尾忠景に任ぜられる間には、物質文化自体にも差違が生ずることが想起され、この11年間の何らかの反映が、当該土器に有ったとも思われる点にある。

東上野における当該土器資料は、長楽寺・浜町屋敷内遺跡^{註5}が知られている。この両者のうち後者は、図示されている資料が177点有る。前者は、形状特徴を判断し得るものが数点しかないため、後者を中心にして考えたい。

浜町屋敷内遺跡（以下浜町遺跡と略称する）出土の当該土器を扱う前に、この遺跡の性格付けについて若

第4章 考 察

干触れておきたい。

浜町遺跡から出土した当該土器の主体は、井戸跡・土坑・溝状遺構の覆土内から出土している。この浜町遺跡自体の遺跡の性格は、判然としていない。これは、66基におよぶ井戸と、土坑と溝の切り合い等主要遺構がこの3者に代表されることにあり、そして、出土遺物では、土師質土器皿を主体にし、多量の石臼・木製品（曲物・桶）・石製品・板碑・五輪塔等の遺物である。特に、土師質土器皿と、石臼・板碑の出土量は多くこの遺跡の一つの特徴と言い得る。出土遺物の年代観では、13世紀～17世紀の間に遺跡の盛期が認められる。また、板碑に代表される仏教に係わる遺物も多く、葬送儀礼に係わる部分も存在する点が一点挙げられる。そして、井戸跡に代表される遺構は、明らかに生活の痕跡も多く残している。また、溝状遺構の如く、土地の区画に係わる遺構も多い。

遺跡地の占地は、蛇川と八瀬川の合流する部分で、両川河に挟まれた台地の先端部に位置している。この点から、水運に係わる遺跡であろうことは編集者より聞いている。しかし、板碑を造立する段階が、14世紀前半～後半代に求められ、時間の経過の中で、遺跡の性格が変化していることが想起される。これらのことから、浜町遺跡は、14世紀代にある種の墓域的な要素があったと考えられるものの、他の部分と年代が降った場合はやはり判然としないが、館・砦としての性格も考慮される。

浜町遺跡の報告書には当該土器は177点図示されており、この内形状が確実に判断できるものを分類した。この分類に使用したものは、169点で形状による分類（断面形状も考慮した）、ただし、今報告では、細分する段階を全て記すことは出来ないため、その概要と結果について略記したい。そして、この浜町遺跡での詳述は、後日の折に表したい。

分類の基準としては、当遺跡で行ったのと同様に、形式学的方法を拠り所として、当遺跡での当該土器の所見を元に行った。主要な分類は、体部から口縁部の形状を、内湾・外傾・外反の3つに分け、さらに度目比と断面形状を考慮し最大限の分類を行った。この結果、36類に分類出来た。この分類したものと、各口縁部形態毎に度目比・断面形状毎に推定し得る変遷経過を序列してみた（この段階では、当該土器だけの共伴・共存関係を考慮した）。そして、標準形としたものの後出形は、各序列毎の共通要素を具備しており、複雑とっていい状態となった。この複雑な状態を整理するため、各系列を合体させたものを作製した。これが、付図9に示したものである。

この付図9には、大きく4つの系列種のあることが判断され、これが大江氏がかつて論じたA～Bの系列に相当するものと考えられ、大江氏の論証が確認出来た。また、今回の報文では、便宜的にこのA～Dの系列の大別名称を使用し、さらに、細分の段階のものは、数字を付した。そして、この分類に対し、当遺跡での分類形態のものと対比させたい。

この系統変遷図を筆者なりに考えた場合、各系列の基本となる標準資料後出形は、相互の形状が融合して生ずるよう感じられ、その中でも図中向かって左側の大形器種のB系列だけは、かなりの独自性を有し、展開するよう思われる。そして、この系列種の発生により、内湾形態を有するものが消滅するかの如くに思われる。

この系統変遷図中の器種を当遺跡の類例と対比させると、第9表となる。

この分類の対照表の中で“?”を記入したものは、判別し難いものか、該当するものが見い出せなかった場合について記入した。

この対比は、単に形状での対比であるので時間軸を考慮したものではない。ここで、両者の分類を具体的に対比するために、浜町遺跡での当該土器との共伴関係の得られる出土例を摘出し、付図9の系統変遷図に

第4節 鎌倉時代以降の出土遺物について

小 形	1	2	3	AC-1	AC-2	AC-3	A-2	B-1	C-2	B-2	C-2-1	C-2-3	D-1	D-2	D-3	D-6
		1	1	2A	2A? 2E?	2E?	3A?	2? 3?	2E	3B?	?	3D?	3B	3D	4A	4E
大 形	A-1	C-1-1	C-2-1	C-3-1	C-1-2	C-2-2	C-3-2	A-2-1	A-3	A-4	C-2-3	C-3-3	A-2-2	B-1-1	B-2-1	B-2-2
	?	?	?	9?	?	?	7B?	7?	7?	?	7C	7B?	7B?	10B	10B	10B
	BC-1	B-3-1	BC-2	BC-3	B-4	C-3 D-1-1	D-1-1	D-1-2	BC・D-2	D-3-1	B-3-2	D-4	D-6	B-1-2	D-3-2	
10B?	5A	10B	10B	10A	7・5?	10B-5?	5C	5C	5D	5D	6C	8B	10B	5D		

相対年代を与えてみたい。

浜町遺跡で当該土器と共伴関係の認められる資料のうちで、年代観が把握されるものは非常に少ない。共伴関係で年代観の得られた遺構例と、その年代観を示すと次のとおりであるが、年代観を得る遺物種として、陶磁器・内耳鍋・板碑など非常に限定された種類である。また、内耳鍋から得る場合、本来的には内耳鍋自体での年代観について一考必要とするところであるが、前刊書で示した変遷経過と相対年代については、ほぼ県内では共通する状態と判断されるため方法の一手段として用いる。

13号井戸—13～14世紀代の白磁1点と4点の土師質土器皿。

24号井戸—3期の内耳鍋・13世紀代の青磁1点と9点の土師質土器皿。

39号井戸—3期の内耳鍋と5点の土師質土器皿。

40号井戸—延文2年・貞□年在銘の板碑と3点の土師質土器皿。

44号井戸—2～3期の内耳鍋と6点の土師質土器皿。

52号井戸—4期の内耳鍋と4点の土師質土器皿。

56号井戸—2期の内耳鍋と1点の土師質土器皿。

20号土坑—15世紀前半瀬戸・美濃焼卸皿と1点の土師質土器皿。

3号溝 —3期の内耳鍋と13点の土師質土器皿。

6号溝 —15世紀前半の瀬戸焼卸皿と3点の土師質土器皿。

7号溝 —3～4期の内耳鍋と14世紀・15世紀中頃の焼締陶器と14世紀の瀬戸焼と15点の土師質土器皿。

8号溝 —2～3期の内耳鍋と15世紀末・16世紀前半の焼締陶器、16世紀後半～17世紀前半の瀬戸・美濃焼天目茶碗と14点の土師質土器皿。

10号溝 —16世紀後半の瀬戸・美濃焼天目茶碗と1点の土師質土器皿。

21号溝 —2～3期の内耳鍋と4点の土師質土器皿。

などが挙げられる。

これらの遺構で、溝状遺構例は、溝状遺構自体の性格が分明でない限り、たとえ一括性の認められる遺物であっても、その扱いには若干の問題を残すものと考えられるが、総体的な年代観が得られる。また、溝状遺構の一括遺物の場合、上述の如くの問題点を残し、覆土の上層（被覆土）には多々新しい段階での混入品が有る場合もあり判断にとまどる場合が多々有る。これは、溝を利用しての地割が在った場合には特に顕著である。この存在に美濃大窯期の遺物が多く、近世初頭頃までの遺物は多々混入する例が比較的多い。また、井戸跡の場合、使用→廃棄→埋没という過程の内での共伴遺物と、埋没土が時間の経過の中で“沈下、する”場合が多く、これにより上層中（被覆土）には混入する遺物も溝状遺構と同様な場合が多く、報告書中の図化掲載だけで判断する場合両者の出土遺物の一括性を把握する際の非常に大きな障害となっている。このこ

第4章 考 察

とは、浜町遺跡例においても指摘出来ることである。上述の共伴遺物例にも“混入、ではないかと考えられるものも認められ、この点を考慮して相対年代を求めたい。

浜町遺跡の出土遺物を総体的に見れば、その所産時期は、13世紀～16世紀に集中し、13世紀は中国製磁器を中心とし、14世紀は、板碑・邦製陶器、15・16世紀は内耳鍋・邦製陶器と各年代毎に、特色は認められる。これらの点からすれば、浜町遺跡出土の土師質土器皿は、多くとも、この400年間に使用された一群であることは明らかであり、13世紀の中国製磁器の段階には在地産遺物を共存させて存在したとは考え難い点から、少なくとも14～16世紀の間に浜町遺跡出土の土師質土器皿の年代観が得られる。上述の共伴遺物と、当該遺物の序列順に上限と下限を相互に考えた場合、付図9中に示した年代観が想定される。特に40号井戸例の紀年銘の認められる板碑の存在は大きい。この2者の板碑は、風化・摩滅等の状態が認められず、破壊されて廃棄されたと考えられることより(板碑自体全体的な傾向)、造立後あまり時間を経過しない段階での廃棄と考えられる。在銘の年号は、延文13年(1357)・貞治年間(1362～1367)を上限として考えられる。この40号井戸出土の3点の内2点は、付図9中では筆者がB-2・D-1に分類したものと同形態のものであって、B-2の以前に1368年を設定出来る。そして、板碑を破壊して廃棄する点から、浜町遺跡内部での大きな変質が認められる。これは、板碑の造立者に対し反造立者=造立者に敵対する者の所産であることが推定出来、B-2分類の頃を境として、浜町遺跡の土師質土器皿自体も大きな変質が看取される。このことは、支配者層の変革が考えられ、この支配者の変化により文化にも大きな影響をもたらせた点が指摘出来る。

これらのことより、前刊書中に示した当遺跡の分類と浜町遺跡の資料を分類したものを対比させた表(以下対照表と記す)は、形態・時間軸の両者での対応として把握し得る。このことは、比較的広域において当該土器種が共通基盤の上に製作されたことを物語っており、同様な形状を留める点で祖形となる何らかのものが、共通して存在したことが示唆される。ここで、この前提から当遺跡と浜町遺跡との当該土器の対比をし、その特質について考えたい。

対照表で示したもので、前述したおり判断出来得ない一群とある程度対比が出来たものの二者がある。このうち、後者について先ず若干述べたい。当遺跡の7類=C-3系列には、体部・口縁部の断面形状から7類A・Bに似ているが、基本的には異なる一群と考えられる。しかし、C-3-1などは、度目比が7類Bに近いが、7類A・B自体内面では外傾形態を示し、外形は内湾形態を示すことからその差は顕著である。そして、C-1・C-2系統については当遺跡で認められるのは年代観の差によるのか、地域差的な様相なのか不明でないが内湾形態での一群として考えられ、恐らくは地域差的な存在と考えられる。

当遺跡の9・1・7・2・10・5・3・6・4・8類は、東上野でも形態的に(同軸上の時間の中に)対比し得るものが明らかに存在したことが認識出来、このことは大江氏の指摘が再認された。このうち、14世紀代に比定し得る一群、9・1・7・2・10類は、大きな画期を介在させ、5類が出現している。この中で10類A(=B-4分類)は、一時期(短期間)のうち出現し消滅というかなり大きな画期に打出される一群であり、7・2類と共に当該土器の流通に変革があったのか、工人自体が消滅したのか、改編されたことが考えられる。

そして、浜町遺跡・当遺跡で認識される共通形態=平均的様相は汎上野的な存在として理解される。また、当遺跡の分類に対比し得なかった一群(C-1・C-2・BC・A-1～4)は、結論的に、東西上野国の平均的様相すなわち、汎上野形に該当しない一群として理解される。これは、東上野の浜町遺跡の位置の問題から派生したものと推定出来る。

東上野自体は、渡良瀬川を介して下野国と接しており、特に足利市などの栃木県南部の地域自体の様相が

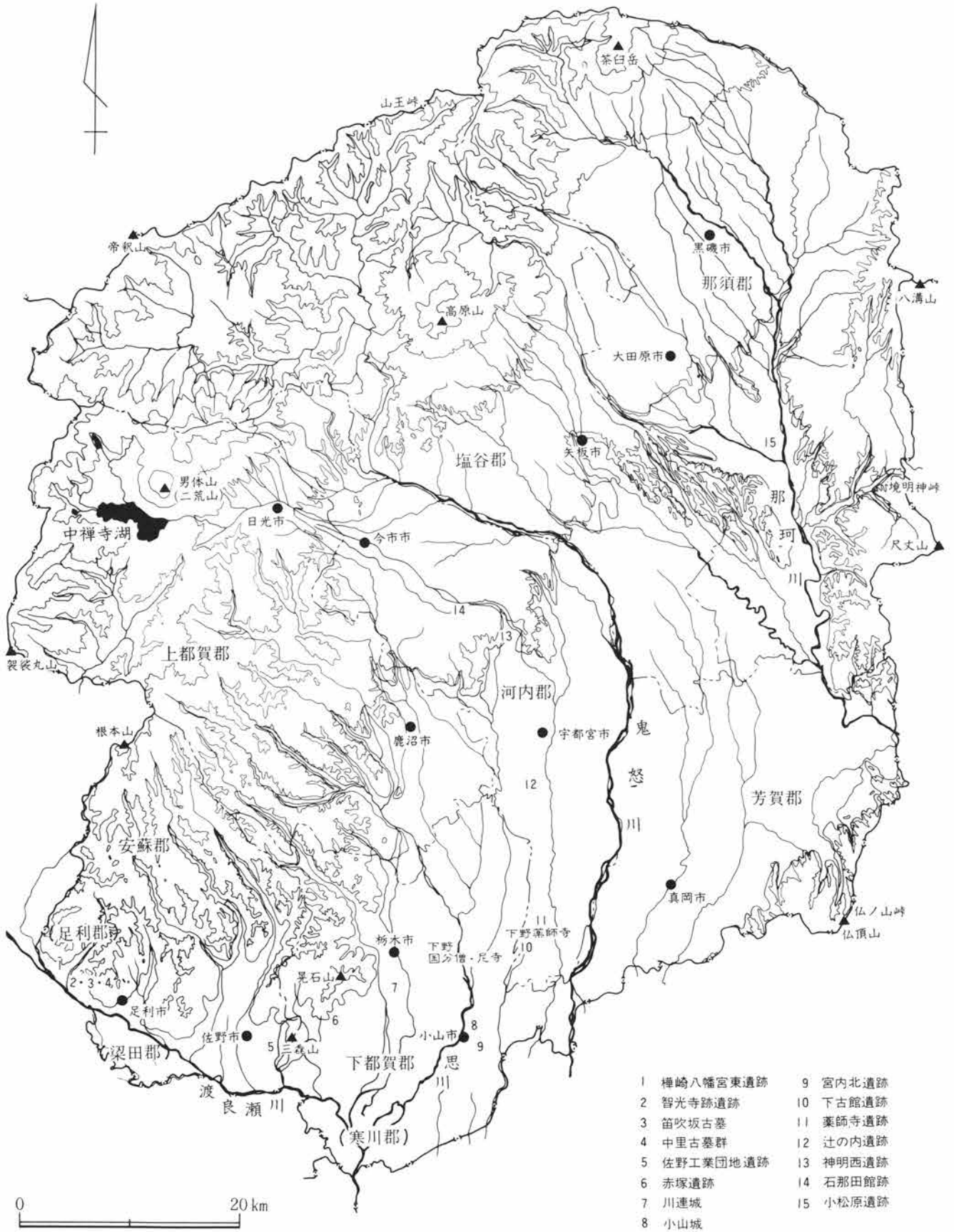
あれば、下野地域の様相が夾雑する状態であろうことが想定される。また、この足利市を中心として阿蘇・下都賀・上都賀あたりまでは、南下野と仮称する可き文化の様相展開があったことが考えられる。すなわち、この南下野は、室町幕府を創設した足利氏の出自であり、東上野の新田氏とは、足利義康と新田義重そしてその父にあたる源義国の直系の子孫にあたる。そして、鎌倉時代においては、長楽寺自体新田氏の氏寺として鎌倉五山十刹の寺として一大繁栄をなした文化と、足利市周辺に散在する鎌倉時代の寺院（鶏足寺・鏡阿寺・智光寺）に表徴される如く、二大文化圏の形成が有ったものと考えられる。

上述の点から、太田市浜町遺跡の土師質土器皿と足利市を主体とし、栃木県南部との土師質土器皿には、その当該土器が示す特徴に共通する要素が存在することが考えられる。このことは、西上野と東上野とに共通要素が存在するのと同様なことである。

この観点に立って栃木県の様相に若干鑑みたい。ただし、本稿の目的は、当遺跡の当該土器皿の様相を周辺地域と対比させ、より当遺跡の様相を鮮明にさせる点にあり、ここではあえて詳述は控えたい。この点は浜町遺跡例を扱うのと同じである。そして、分類等に用いる方法は、当遺跡や浜町遺跡例を扱ったのと同様に、主としては形式学的方法を用い、形状を主とするが、作り等の細部の点も加味しておきたい。

下野国、今の栃木県であるが、この下野国の様相を記述するにあたり、四地域に分別して考えたい。前述した如く、群馬県と接する足利市周辺の地域は源義康＝足利義康の入部により鎌倉時代を通じて一つの文化圏を形成している。この点で足利市を中心とする地域、現在の安蘇・上都賀・下都賀郡内と、下野薬師寺を従え宇都宮を中心とする河内郡、北側の塩谷・那須郡、南西部の芳賀郡の四つの大別を前提に考えたい。足利周辺以外の所は、宇都宮を中心とする河内郡は下野・上野守護宇都宮氏の地盤であり、その外域として塩谷・那須郡を考え、両地区の南西側鬼怒川により画される芳賀郡を一地域と考えた。また、芳賀郡は、宇都宮氏綱が上野守護代に任ぜられた折の上野守護代芳賀高名の出自にあたり、この地域と当遺跡における14世紀第3四半期の土師質土器皿との対比も考慮される点があるが現状で類例を見出せなかったため、他の3地域の様相について図示し、共通要素と地域差について記した後、総体的な観点から遺跡の様相を明らかにしたい。また、今次の報告は、当遺跡の当該土器の様相をより具体的に検討するため前述の太田浜町遺跡例を上げた。この下野国での類例も、今次の報告の主体となる論点にないため、検討の結果のみについて記述し、若干の所見を記すとしても、詳細については別時の折に記したい。

先ず足利を中心とする地域について考えたい。この地域での遺跡（以下遺跡は略す）は、智光寺跡^{註7}・中里古墓群^{註8}・樺崎八幡宮東^{註9}・笛吹坂^{註10}・佐野工業団地^{註11}・赤塚^{註12}・川連城^{註13}・小山城^{註14}が挙げられる。この8遺跡から146例の当該土器資料を得た。この8遺跡をその性格から分類すると川連城・小山城の城跡、佐野工業団地の館跡、赤塚の館跡関連の一般遺跡、智光寺の寺院跡、中里古墓群・笛吹坂の墓地、樺崎八幡宮東の社寺と墓地が併合したものの如く、城館・一般遺跡・社寺・墓地の4種の遺跡の性格に分けられる。この8遺跡の中で、特に多く類例を摘出出来た赤塚遺跡の類例の再分類を試みた。この赤塚遺跡は、多数の土坑・4本の井戸と3条の溝状遺構等が検出されており、出土した当該土器の大半は、2号溝であった。他に井戸跡からの出土があり、恐らくは、館跡乃至これに付随する施設での生活の場であることが考えられる遺跡である。この再分類の結果を図示したのが付図9の系統別変遷図である。周辺地区を含め、系統別変遷図を同図一5に示した。次に宇都宮を中心とする河内郡の地域について考えたい。この地域は、古代の下野薬師寺の存在が有り、上都賀郡と接し、都賀郡には、国府・国分二寺の存在があり、この関係も考慮して地域分けを考えねばならないが今後の課題として考えたい。この地域では、石那田館跡^{註15}・神明西^{註16}・辻の内^{註17}・下古館^{註18}・下野薬師寺^{註19}の5遺跡から145例の資料を得た。この5遺跡をその性格から分類すると、石那田館跡の館、辻の内の中世集落、神



第770図 栃木県に於ける土師質土器皿出土遺跡分布図

第4節 鎌倉時代以降の出土遺物について

明西の生産遺跡であるが、下古館は全体を大きく区画する溝(堀)の内側に生活の痕跡を多く留めているが、現在も調査途上であり、性格付は館なのか、集落として把握されるのか現状としては判断し難い。下野薬師寺は後世(中世)での再利用乃至寺としての何らかの機能が有ったと思われるだけで判然としない。これらの5遺跡のなかで一括例として良好な石那田館跡の類例の分類を試みた。この石那田館跡例は、館跡内部で機能した遺構が報告されており、その中に1号井戸を主体とする一括例が図示されている。そして、この一括例の中の当該土器の多くには、漢数字を墨書したものが多く、特に、1号井戸例に限れば、井戸の廃棄に伴う精神文化による所産と判断し得る状況が看取される。この石那田例を分類したものが付図9-3である。この地域を含め統括的に系統別変遷を示したのが同図-4である。

塩谷・那須郡では、小松原の3例しか認められない。この小松原例は1基の土塚墓から出土したものであり、永楽銭6枚とガラス製小玉15点が共伴している。この永楽銭の初鑄年は、1408年に求められ、付図9に示した最古の様相を示すものにこの15世紀初頭以降の年代観が与えられる。この類例は、この地域の全体を語るには資料不足の点があり、下野国全体を記す段階で年代観の与えられる一資料として扱いたい。

太田浜町遺跡の再分類と栃木県内の三地域での様相を対比させると、地域差として判断される部分が認められる。この地域差として判断されるものは、対照表の中で浜町遺跡と対比し得なかった部分の分類である。ただ、対比し得たと判断するものは相似の状態ではなく、形状を作り上げた各部の特徴を総合させた状態により判断した。そして、地域差・地域色という表現は表現上の問題も有る。本稿で示している地域差とは、上野浜町遺跡と栃木県南の地域を中心に考えた点から使用している言葉であることを示しておく。

この対比により二様の状況を窺うことが出来る。すなわち、対比がなされたものは相対的な器形として共通する形態と判断出来、対比がなされないものは地域色として認定されるものか、突発的な形態や他地域からの搬入等と考えられるものである。この二様の状態のうち前者は汎下野形として認め得るものと思われるが、太田浜町遺跡を含めて考えた場合、東上野を含め得る状態であることは言うまでもなく、前述した鎌倉時代の状況を考慮すれば、長楽寺・鏝阿寺を中心とする北関東地方的様相(上野・下野的)の一群と考えられるが具体的に論じ得る資料・他の遺物種との対比がなされていない段階としては、明定し得る状況ではないことは付記しておく。

後者は、地域色様相として認め得る状態のものと、他地域の影響を考えざるを得ない二種が認められる。地域色として考えられるものは足利市中里古墓群のC-1~C-3の分類がある。また、石那田館跡・神明西のC-2分類のものは内湾形態の浜町遺跡例のC-1・C-2分類とは異なる様相を呈している。しかし、体部から口縁部にかけての丸味が認められる点では、基本形状としては浜町遺跡などのC-1・C-2の形態のものに求められるものである。また、他地域の影響と判断されるものは、赤塚のBC系列である。このうち、BC5は口唇部を平坦に作り込む一群である。この要素のみを当該遺跡の類例内から見るとC・B系列内にも散見される。この器高値が大きく内湾形態の口縁を有するものを近県例に求めると茨城県内の屋代B遺跡などの類例に対比し得る。この点に、この形態を有する一群の主要分布域を求められるものと思われる。さらに、下古館例では1121号遺構出土の手捏の一群と1号遺構・D地区826号・A地区表土層出土例は、上野・下野の両国内では唯一の存在である。この手捏の一群は、恐らくは光明寺裏遺跡の報文中^{註21}で示されたIII類乃至白カワラケIV類に対比される一群と考えられ、12世紀末~13世紀代に比定されている。12世紀末は無理にしても13世紀前半代の年代が与えられよう。また、胎土については、俗称「ピンクカワラケ」と称しているもの同様に思われ、光明寺裏での指摘にある東海地方の工人云々の影響も考えなければならない。^{註22}

現状では手捏の当該土器は、下古館以外に上野・下野では認められない。そして、手捏と、共伴種の大形

第4章 考 察

土師質土器皿の形状より、浜町遺跡のA-1に対比されるとも考えられ、このA-1と同楕円乃至先行するものと考えられる。この一群と同様な技法により作られた一群は、鎌倉市内の遺跡で多く出土している。

上述の点を踏まえて栃木県全体としての当該土器皿の相対年代を付図9-5に付した。この付図9-5に示した相対年代は求め得る方法が微少であった点があり、その方法を含め再考される可きものと考えている。ただ、現状としては先述した浜町遺跡例からの類推として想定した。

上述してきたこれらの状況を当遺跡の状況と対比した場合について考えてみたい。また、以下に記すA・B・BC・CDは付図9-4でのものであり、前述してきたものを再編成したものである。

大形器種では、7類A・Bは、外観上内湾形態のものではあるが、体部の長さには差が認められ、同様に底径にも差が認められる。すなわち、浜町・赤塚・佐野工業団地・石那田館跡等で出土したC-1、石那田・神明西で出土したC-2の形態は全く認められないが、中里古墓群出土のCDとしたものに対比されるものの作りには大きな差違が認められる。赤塚出土のC-4は唯一9類に対比出来る。7類CはBC-5、10類AはB-2・B-3・BC-6?に対比され、10類BはBC-1～BC-3に対比される。また、当遺跡の15世紀を前後する頃で、新たな様相を向ける5類A段階にはBC-4・B-2に対比される。

この対比により、当遺跡の7類A・Bは、中里古墓群に外観上の類似点があっても、この両者に対比し得るものがないことが指摘される。このことから7類A・Bは、当時の上野・下野では、類例乃至系統をもつものはC-4の赤塚1点であり、当遺跡の9類に対比されるが、当遺跡での9類自体実態不分明な点があり、何如とも言い難い。すなわち、当遺跡の7類A・Bは本来的な系譜は他に求められることが示唆される。

また、中里古墓群のCD類は、C-1・C-3-1→C-3-2・と後出形がたどれる。そして、この一群は、比較的独自性をもって変遷しているものとも考えられ、河内郡地域で遺跡数が多い点が注意される。さらに、次の点が指摘出来る。C-1の一群中で中里古墓群の類例は器高値が少ない点が他の2地域例と異なり、この一群の祖形とも思われる。C-2の一群は、石那田・神明西遺跡で出土しており、C-1形に類似するものの、現状で宇都宮周辺で認められるものであり、地域色の一群として把握される。この2点以外については前述であり、細部での相違点から主要なことを指摘しておきたい。

まとめ

当遺跡出土の土師質土器皿は、東上野・下野における状況を望み7類C、10類A・Bは下野と共通する状態であることが認められた。そして、7類A・Bについては東上野・下野では認められない一群であることが判断された。ここで、この両者の存在についてまとめてみたい。

当該土器皿の地域の出現については、領国支配に密接に係わることが考えられた。これは、一部前刊書でも示したが、当遺跡の場合長尾氏の上野入部と係わることが示唆される。これは、出土した遺物種全てが、南北朝以降のものであることからでも類推が可能である。このことは、領国支配が支配体制の変化により文化自体にも変質があることを示唆している。すなわち、前刊書の周辺遺跡・時代背景で示したとおり、観応の擾乱が文和元年(1352年)足利直義の毒殺により終る以前には、上野国は上杉憲顕の守護国であり、守護代は長尾景忠であった。長尾景忠が守護代として確実に確認し得る資料は、暦応4年(1341年)にあり、上杉憲顕の守護は建武4年(1337年)からであり、これ以前は父上杉顕房である。暦応4年以前の守護代について長尾景忠であろうことは故勝守すみ氏が^{註23}指摘している。すなわち、1333年～1352年の18年間は当遺跡地の支配は上杉・長尾両氏により行われたことが考えられるが、実際には南北部の混乱状態の中では、その名義に在地国人層に対する効力を発揮したものと^{註24}想起される。この点は、当該地区への長尾氏の支配力が強く

影響し、文化自体に反映するのは暦応・康永年間頃（1338～1344年）と思われる。そして、貞治2年（1363年）以前には宇都宮氏綱が守護であり、守護代は、芳賀高名であった。

このことを前提として7類A・Bと7類C、10類A・B、5類Aと考えたい。

7類A・Bは、東上野・下野で対比が為されないのは、両地域の影響下以外での諸事情によるものと考えられ、これを類推すると長尾氏の第I期での上野惣社入部に大きく係わったことが推定され、この折に入植した当該土器の工人乃至職能者による所産と考えられる。すなわち、この7類A・Bに与え得る相対年代としては、前述の1345年～1352年乃至1333年～1352年の年代観が与えられる。

7類C等の種については、東上野・下野との様相から宇都宮氏綱・芳賀高名との関係から1352年～1363年の相対年代の年代観があたえられる。そして、小形器種の中で、前刊書で2類Eの標準形に示した底部の作りの厚い本書中の第605図—13に示せる様な形態（付図9—4・BC—5・6）は、恐らく栃木県の芳賀郡・茨城県にその中心が想定され、芳賀氏が守護代として与えた影響下での所産であったと推定される。

5類Aは、その特徴から、後出する5類の一群を、前段階の7類C・10類Bの夾雑状態として認められるものであり、守護代の芳賀氏から長尾氏への変革が、そのまま工人乃至職能集団に及ぼした影響とも思われる。そして、大江氏の指摘したD系統種は、5類B以降のものに対比され、上杉氏の東国支配体制^{註25}を物語る種として把握されよう。

この領国の支配体制を当該土器の相対年代として考えたことより、5類の出現を14世紀末段階に相当させて考えたい。これは、1363年以降の長尾氏の入部があり、当遺跡の寺院跡が示すように、多種の職能集団が、当該地域に入植したと考えられるが、これらの全てが一度期にあったとは考え難く、次第に入部し、寺院（小見庵寺）の完成頃から若干の時間を置いた頃が、その完備があったと推定される。そして、城下町としての都市として発展することは、物質文化が需要と供給とう均衡流通を促進させる媒葉となる。この点から、5類B以降の器種が数多く存在することより確立した段階と判断される訳である。この確立期を向える直前が1363年～1399年頃に相当させられる。この観点から5類A・Bは、14世紀末頃の存在として把握され、5類B自体は、15世紀初頭に有る存在として把握される。この以後、5類C・6類・8類が存在するが、文化の確立とその反映により、器種自体、14世紀代に代表される多種の様相が夾雑せずに独立して存在するのは、安定した支配体制の中で再編された職能集団による所産があったと考えられる。

内耳鍋

内耳鍋（内耳付鍋形土器）は、細片を含め比較的多く出土しているが、完器乃至これに準ずる形状を留めるものは無く、当遺跡での良好な遺存はF3溝・G11井戸・I7井戸出土の3例だけである。破片では、口縁部・体部・底部等の資料は多く、形状を図上で復し得るものを図化・掲載を試みたが掲載された以外にも図上で復原なし得たものは多くある。この破片化したものの大半は当該期と判断される遺構の被覆土・覆土内から出土したものであり、少なくとも遺構が存在した頃には当該土器が存在し、使用・破損・廃棄の3要素があったと判断し得るのが当遺跡における状態である。このことは、廃棄されたもののその殆どが破片化したものであることから、当遺跡での土師質土器皿とその趨勢を共にしたことが類推出来る。この点は、他の鉢類等においても同様なことが言い得る。

当該土器種の器形状における変遷とその相対年代については前刊書中で若干記述した。本稿では大半が細片乃至破片での存在であることから詳述し得る状況が無い。また、前刊書で示した変遷観も、他遺跡における類例をして標準形態としたため、当遺跡における様相は未だ具体的なものでない。この点を考慮し、当遺

跡出土の当該土器での類例を各時期に対比させて図示したい。そして、内耳鍋出現以前における状況・技法について記し、胎土については改めて在地系土器群としての観点から記述したい。

内耳鍋出現以前

当該土器は、前刊書で1～5期に分別しその古いものから順に付した。この内1期の以前については、大江氏の指摘する有孔の盤形火鉢があり、当該の内耳鍋が多く出現する状態は、鉄鍋の生産に変革が起こり、材質転換現象として土器種の系列に組み込まれているものと考えられている^{註26}。ただ、この出現がどこに有ったかは判然としないが、一時期に共通する状態でなければ当該種の齊一的分布は判断し難い面がある。ともあれ、1期以前の内耳鍋と判断されるものは当遺跡でも出土例を見ない。

当遺跡に於ける盤形火鉢形土器（以下盤形火鉢と略する）は、遺存状態が不良な点から明確に把握し得るものは少ない。この盤形火鉢を当遺跡例で考えた場合、口縁部に有する焼成以前の孔と菊花・菱形文等の押捺の認められる鉢形のもの、浅く器形的に盤形と判断されるものを充当しておく。図示したものでは15個体がある。この15個体は形状の特徴から数種の分類が可能であり、先ず分類を行ってみたい。

A類 内湾気味の口縁部を有し、口唇部は丸味を帯び内外に突帯状に作られたもので大形の菱形文を押捺する。

1-469-2、1-552-3、1-612-3、608-17、

B類 外傾乃至緩やかに外反する口縁部を呈し、口唇部は平坦で内面に突帯状に作られたもので小形の菱形文を押捺する。

1-450-1、1-468-15、1-612-5、617-7、621-7、701-3・4、

C類 B類に類似するが、内面に内耳鍋に認められるような段を作り出しているもの。小形の菱形文を押捺する。

608-12、709-1、

D類 体部が外傾して立ち上がり、口縁部は強く外傾し、内面は内耳鍋と同様な段を作り出しているもの。

1-448-3、

E類 外反する口縁部が口唇部直下で小さく内湾状を呈し、内面でも段を有する。菊花文を押捺する。

1-611-20、

以上の5形態に分類出来るが、数量が15個体が総量での分類であるのと、破片個体でのものである点から全体形状等については問題を残す。

上述の5形態の分類は、時間差をもって存在したのか、系統の差（焼造地の差）をもって存在したのか、両者を併せた状態であったのか三者の何れかである。この点では、C・D・E類の形状が後出する内耳鍋の特徴を具備する点から、時間差と系統の差があつての存在と考えられ、大きく2時期での所産であつたと思われる。しかし、D・E類が1期の内耳鍋と時間軸では併焼され共存関係にあつたことを否定し得る状況が、当遺跡では確認されなかったことから今後の問題点の1つとして残される。

問題点としては上述の他に、当該土器の孔数にも有る。すなわち、この孔自体に何らかの機能があつて施されたと考えられる点であり、数量によっては、ある種の機能をはたしたと考えられる点であるが、残念ながら、当遺跡の数例は破片個体であつたため、実数が把握されなかった。今後の資料増加と検討を待ちたい。この一群に相対年代を与えるとすれば、1期以前の14世紀中頃での存在と考えられる。

1期の内耳鍋

1期の内耳鍋は、丸底のもので口縁部が短い状態のものである。当遺跡における1期の当該土器は図示したもので17例ある。ただし、破片であるがこの17例を観察した結果、その形状から二者に分類出来、体部が直立状態に近く立ち上がるものと、外傾して立ち上がる体部のものである。量的には前者が6例、後者が11例ある。この二者には、口唇部の作りに二様有り、口唇部が丸く外反するものと平坦のものが有る。この平坦のものは、後出形の2～5期と共通して見られる。そして、これらの特徴を分類して整理すると以下のとおりである。便宜上外傾体部のものをA、直立体部のものをBとし、口唇部の平坦のものをa丸いものをbとして略記する。

1 A a (1-455-1、1-468-1、1-541-1、1-546-1、624-12、748-8～10、)

1 A b (1-455-2・3、620-9、)

1 B a (624-11、652-4、746-5・6・7、)

1 B b (1-468-3、)

である。これらは、口縁部の限られた部分での形状であり、全体形状を把握し得るものがないが、1 Aのものについては形状を想定し得る体部片がある(1-468-7・8)。外傾形態のものは、丸底から外傾して立ち上がった体部が口縁部に達する器形であったと判断される。また、直立形態のものは、丸底からほぼ直立気味に立ち上がる体部が口縁部に達したものと考えられ、前刊書で示した清里・陣場例81の形状であることが判断される。

これらの内、前述した盤形火鉢の口縁部の作りと類似するものは、C・D類が1 A aに、E類が1 B aである。また、B類の作りに類似するものが1 A aに分類した1-546-1がある。

2期の内耳鍋

2期の内耳鍋は、1期に比較し口縁部が長くなった状態であり、底部は1期と同様である。類例は図示したもので14例あり、1期同様に外傾形態のものと、直立形態の二者が共存する。分類の略称は1期と同様とするが、口唇部の形状は全て平坦なものになっている。また、外傾形態の中には、大きさに比較し器厚が厚いものがある。

2 A類 608-8・11、655-1、689-7、696-4、700-4、709-2、

2 B類 1-468-2、1-552-2、1-611-12、700-3・6、709-3、732-1、

以上であるが、A類の中には、極端に口縁部の長いものがあるが全体形状が把握されなかったため今回は細分しなかったが、今後の資料増加によっては細分される1群である可能性がある(608-8・11、700-4)。

3期の内耳鍋

3期の内耳鍋は、平底化の出現段階のものを扱うが、当該土器種の平底化が一斉にあったと即断できる状況はなく、寧ろ、2期でのA・B類の如く系統が異なる二者が、前後して平底化があったものと考えられ、3期の位置付けは、2・4期の過渡期的な様相形態として把握した方が無難と考える。このことは、3期の存在自体が、短時期内での現象形態としての存在であることが強調される。この点を踏まえ、先ず、4期の内耳鍋について記述した後に再び記述したい。

4期の内耳鍋

第4章 考 察

4期の内耳鍋は、平底の底部から内湾気味に丸味を帯びた体部が立ち上がり、体部中位程で直立し、口縁部は長く内湾気味のものと同様に外傾するものがあり、頸部は強くくびれる。この4期に該当するものが4個体は確実に有り、口縁部片を考慮すれば数量的に最も多い。この4期のものは、上述したとおり形状は1形態のみであり、形態的にも2期段階までは確実に存在した外傾形態のものと直立形態のものが融合した状態の如くの器形として存在する。そして、器厚は、全体的に均一化し薄手の仕上げになっていることが注意され、後述する焼成にも差違が生じている。4期の確実な類例として以下の5点がある。

620-10・14、691-5～7

この4期の形態のものは、唐突的なものでないことは、3期の存在により判断されるが、少なくとも4期標形態の出現は当該土器に大きな画期が存在してのことと考えられる。ここで再び3期の一群について考えたい。

再び3期の内耳鍋

3期の内耳鍋は、620-11、629-6、691-8・9の4個体が確実に視し得る。この一群は、過渡期としての存在であろうことは前述したが、少なくとも4期のものを生み出す直前形態が存在することが明らかであり、この直前形態と思われるものがG11井の第691図-8・9にある。

また、629-6、691-9にみられる口縁部の作りも、2期の709-2に見られる様に、独特のものがあり、3期自体の2期・4期の過渡期的様相が窺われる。そして、この3期の指標の平底化の段階には、1期から認められた外傾形態のものが消滅するかの様にも考えられる。これらのことは、当該土器の平底化という現象には、当該土器の工人に変質があったのか、流通自体に変化が生じ、複数種の系統で供給していたものが1箇所に限定される様になるかの如く、大きな画期を生じせしめる前段階にあたる一群として3期の存在意義がある。

5期の内耳鍋

5期に該当するものは、図示したものではH13溝の1点が認められた(709-6)。ただ、未掲載に終わったものの中には存在する可能性もある。これは、遺物の選択段階では1～5期の明確な存在は考えられていなかった点にある。ただ、当該土器種の遺存の大半(全てに近い)が破片という状態と、出土状況からすれば16世紀代での当該土器は、当遺跡において16世紀以前のもの細片化して遺構の覆土中に没する段階と考えられる。そして、5期のものは4期と比較した場合非常に少量であったことが考えられる。このことは、当遺跡における生活の痕跡自体が減少したことを示している。すなわち、前段でも記したが、当該土器の趨勢は、土師質土器皿と同様な状態が想起され、5期に対比し得る8類自体も全体量は6類より少ない点にあり、16世紀代の当遺跡の状況を物語っているものと思われる。

製作技法

当該土器の製作技法について若干所見を記述しておく。

当該の内耳鍋の基本となる成・整形技法は、粘土紐成形後轆轤整形である。この技法は鉢類でも同様であり、邦製陶器の一部の器種においても基本的には変りがない。しかし、当該土器の場合、丸底を呈するものと平底を呈する二者の存在があり、この底部の状態に起因する若干の技法差も考えられる。この点から、丸底・平底の二者に大別して先ず考え、その後、各時期の細部での状態について記したい。

丸底の一群は、底部全体が丸味を帯びるのではなく、立ち上がりの部分の周縁に平坦面を構成し中央寄りの部分が丸く突出する状態を呈している。この底面には、粗粒の砂粒が付着又は落脱した状態が認められ、²⁷“離砂、として使用された痕跡を示している。この離砂は底部全体に認められる。

丸底の成形は、轆轤乃至回転台上に離砂を敷いて置き、底部の粘土円盤一枚を“窪型、状の台上に乗せ、上位の部分粘土紐により成型したものと考えられる。すなわち“窪型、には轆轤乃至回転台の上面が窪んでいたと考えられるが、成形段階は、この整形台（轆轤・回転台）に乗せる以前に別の場で作られた可能性が考慮される。

これは、成形台上に離砂を敷き、粘土円盤を乗せて粘土紐により底部の立ち上がり部を成形した場合には、少なくとも離砂の砂流が接合部周辺に付着することが考えられる。現状では、接合部に認められるものはない点で考慮した。また、製作後の乾燥を考えると、底部を上位にしての状態は考え難く、底部を下にして乾燥させたと考えられる。このことは、窪んだ成形台を直に乾燥時まで使用したと考えられる。このことから、成形台は厚い板状のものであって轆轤整形時には、この板ごと整形したとも考えられる。いずれにしても、正位の状態^{註27}で最終整形を行った場合には、成（整）形台が窪んだ状態でなければ丸底が出来ない点があり、現状の判断としては、上述二者での成・整形が考えられる。

平底のものは、丸底同様に離砂の痕跡が認められる。そして、基本の成・整形も同様である。丸底の場合の離砂の存在は、底部の切り離しが糸切り出来ない状態にある点でその必要性は大であるが、平底の場合、通有の場合であれば、糸切りにより粘土塊からの切り離しが考えられる。しかし、平底のもの^{註27}の大半が離砂を使用しており、糸切りは認められなかった点で何らかの製作上の特質が示唆される。

この平底の一群が離砂を継承して使用するの^{註27}は、粘土塊上に粘土紐を乗せ成形するのではなく、丸底同様に底部の粘土円盤を作りこの上に粘土紐を積み上げたことが判断される。そして、前述した成形段階での状況は、丸底の一群と同じ状態が考慮されるが、整形台自体の上面は平坦である点が最大の相違点として挙げられる。

この内耳鍋の工人は、平底化の段階に至っても丸底段階からの離砂を継承して使用している点は、後述する他の鉢類が回転糸切りにより、切り離している点からすれば、技法上に大きな相違がある。このことは、内耳鍋を焼造した工人と鉢類を焼造した工人は別組織乃至別集団によることが考えられる。

各時期の細部の技法

細部での技法では、各時期を通して共通して認められるものと若干異なる部分があるが、破片個体でも多く比較出来るため、これらを部位毎に総括的に記述したい。

底部は、前述したとおり丸底と平底が存在するものの整形時には離砂を使用している。この離砂を使用する以前は、指撫でにより平滑にしたと考えられる。これは、離砂が全体に及んでいることから、旧状を認める部分は非常に少ない点にあり、一部で認められた状況より類推した。

体部は上下により差が認められるが、総体的な資料が破片個体で量的に多くない点から全てを判断し得ないが、下半部は轆轤回転を使用しないで主に粗雑な撫でを施している。この撫での範囲は、各時期で異なるものと思われ、1期では頸部周辺までであり、時期が降ると下半部にも及んでいる。上半は、轆轤乃至回転台を使用した整形であり、口縁部・内面全体が比較的丁寧に仕上げられている。また3期の段階のものには、底部の立ち上がり部分に横位の篋削りを施すものが多く、4期のものでは、下半部全体に斜位の篋削りが認められ、この篋削りの稜は、製作時の移動の際に手のあたりにより撫でられた状態に近い状態が認められる。

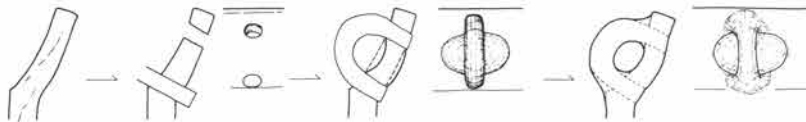
第4章 考 察

口縁部は轆轤乃至回転台使用の横撫でで仕上げられており、全体に共通する。

器厚は、3期の直立する体部のものが比較的薄作りであり、4期のものではかなり均一化した薄作りのものになっているが、1～2期のものと3期の外傾形態のものは器厚が厚い作りである。

耳部は1期の段階で内面に付けられた状態で出現し、当該土器の名称として表されている。この耳部の成形は、円柱状の棒状工具により孔を上下2ヶ所に施し、この孔にC字状の断面円形の粘土紐を挿入し、脱落防止を兼ね基部の部分のを太くして整形している。この痕跡は1期～4期まで確認出来、普遍的な技法である。

(第771図参照)



総体的には器外面より器内面が丁寧に仕上げられており、鍋としての使用を考慮しての所産であることが判断出来る。

第771図 内耳鍋耳部製作工程模式図

播鉢・鉢類・火鉢・その他

在地系土器の主要なものに前述した土師質土器皿・内耳鍋・当該土器種が有り、この当該土器種は多種に亙る。この中では、播鉢・鉢類がほぼ主体を占める。この両者のうち前者は、器内面に顕著な摩滅が認められ、播鉢としての使用痕であることが判断される。また、後者は、口縁部片で器内面に摩滅が認められないものを鉢類として扱ったが、恐らくは、播鉢として使用される可き物として製作されたものと考えられ、本稿での扱いは同一視し、播鉢類とする。そして、この両者の口縁部には片口を呈するものが一部有り、形状は片口鉢形と判断される。

火鉢は、前述の盤形火鉢を除外して考えたい。これは、盤形火鉢自体が、元来の火鉢としての機能を想定せずに内耳鍋出現以前における同様種の遺物として考えた点にある。すなわち、火鉢とするのは、主に冬期使用される“手あぶり”としての機能を有するものを指す。その他の器種は、小形の軟質陶器の一群を指すが、器種・数量も少量であり、主に上述の二者について記述したい。

当遺跡における当該土器の一群は、前述した、内耳鍋同様にその全てに近いものが破片として出土している。特に播鉢類は土師質土器皿と並び、出土量は非常に多いものの外形を復原できたものは僅かに数個体である。すなわち、図化掲載したものは全てに近いものが破片である。この場合の口径は、元來その個体が有する“ひずみ、の内におさまる誤差での形状として判断していただきたい。そして、本稿では、個体が破片である点から、詳述が出来得ない点があり、主な所見について記述する程度で、今後の資料増加に期する点大きい。

播鉢

今次の報告と前刊書中で図化掲載したものは204個体有り、出土した内の約2割程である。この中で口縁部が遺存し、おぼろげながらも形状の一部が判断されるものは121個体有る。先ず、それらを口縁部の断面形態により分類し、体部・底部に認められる“卸目、について若干触れ、相対年代を考え、後に技法について触れたい。

口縁部の断面形状は5様の分類が出来るが、状態が破片である点から、判断し難い部分がやや多かったが、筆者なりの判断で分類した。そして、この分類を表す用法として、便宜上1～5を冠し分類する。

1類 当類は、外形は外傾する口縁部で、内面は内湾気味のものであるが、口唇部は尖り断面三角形状

を呈するもので、口唇部にも使用痕が認められ特に内面側は摩滅している場合が多い。この摩滅は、全般的に他の分類のものでも同様である。

この1類に該当するものは24点で以下のものがある。

1-450-3・4、1-455-5、1-460-1、1-541-3、1-611-21・23、1-612-1・4・10・19・26、

608-15、609-1、617-8、695-1、696-1・3、728-8、737-21~24、746-1、

2類 当類は、内湾する口縁部で、口唇部は、尖るものと平坦気味になるものの二者があり、前者は7例、後者は4例の計11例ある。

1-450-5、1-455-6、1-611-17・22、609-8、650-7・8（口唇部が尖るもの）

1-455-4、1-612-6、689-9、746-12、（口唇部が平坦なもの）

3類 当類は、外傾を基調とする口縁であるが、外反状を呈するものもある。口唇部は平坦であるが、器内面側は、尖る様な状態のものと平坦だけの2者がある。（1期に類似するとも思われるが、断面では、明確な差違がある。）

1-448-6・7、1-462-8、1-464-2、1-468-11・12、1-469-1、1-546-4、1-611-2・15、608-14、617-2・6、620-17、621-1・3・5・6、638-10・12・13、

650-9~12、689-8、691-3、700-7・12、737-25、745-1・15、

4類 当類は、口縁部が外反気味の一群で、口唇部は平坦で内外面に突帯状で口唇整形時に生ずる余分な粘土をそのまま口唇形状にしている（3類の口唇部器内面に認められるものが内外面に付いた感として考えられる）。

1-448-4、463-5、1-468-13・14、1-546-2・3、1-611-16・24、

608-16、617-5、620-18、624-14、638-11、655-3・5・7・8、663-2、

700-8・10~12、701-1、738-4、

5類 当類は、4類と非常に類似するが、口唇が丸く、4類に比較し、ややごつい感がある。当類と4類を分別する場合、口唇部の摩滅もあり凶化のものでは判断し難いものが存在する。また、4・5類に該当させる場合判断し難いものも多くあったが、口唇部が肥厚する様な状態のものを当類として扱った。

1-448-5、1-611-18、

609-5、617-3、620-19・20、621-4、630-1、655-4・6・9・10、682-5・6、

700-9、746-13、

6類 当類は、口縁部が外傾し、口唇部は平坦であり、4期の内耳鍋の口唇部に類似する。類例は2点である。

638-4、700-5、

以上の6分類に分類されるが、4・5類は一括のものとも考えられる点も有り、完形個体での比較が必須である。これらの6分類のものは、土師質土器皿・内耳鍋の共伴関係から時間軸上での変遷が考えられる。この変遷観について考えたい。

変遷観について

当該種の変遷観を考えるについて、上述の土師質土器皿・内耳鍋との共伴関係から考えたい。この場合、

第4章 考 察

埋没の時間差が比較的短期間であったと考えられる遺構の一括例を中心に考えたい。

1類のものは、A 1井、G 15井のものでは一括例中に有り、15世紀後半以前に求められる。







2類のものは、A 1井の一括例中に2点有り、G 9井中に1点有る。この両者も1類同様に15世紀後半以前に求められる。

3類のものは、F 2井・B 3井・B 5井などで認められ、このうち、B 3井・B 5井での状態は、前者が15世紀初頭以前で認められ、後者は15世紀後半である。すなわち、当類は15世紀前半以前に求められる。

4類のものは、B 3井・B 5井・F 2井で出土しており、3類同様に15世紀初頭以前に求められる。

5類のものは、G 2井例があり、15世紀後半以前に求められる。

6類のものは、F 2井例があり、16世紀前半以前に求められる。

分類	1	2	3	4	5	6
断面						
年代	14C		15C		16C	

第772図 播鉢口縁部断面分類図

共伴関係では以上の年代観以前における存在であったことが判断される。この他に、溝内出土のものが有るが、年代観を把握するには若干の危惧が感ぜられるため除外した。

1・2類を出土するA 1井は、内耳鍋が第1期以降のものが出土していない点で14世紀後半代以前に求められると考えられる。これは、瀬戸焼の皿が被覆土内での存在を考慮した点での考えである。この点から、A 1井は14世紀後半代には使用されていたか、埋没の過程上にあったことが考えられ、共伴する他の遺物も14世紀後半を下限として設定し得る一群である。また、さらに井戸使用期間・埋没を考慮すれば、14世紀中頃にはその存在が考えられ、1・2類の鉢は14世紀中頃の存在としても考えられる。

上述した年代観のうち、3・4・5・6類については、下限として判断される年代観であって上限については何如とも言い難く、断面形状のみからの推定では限界と思われる。このことから技法等を考慮した段階で総括的に考えたい。

内面の卸目

当該土器種の一つの特徴として内面の卸目がある。この卸目は、底の立ち上がる部分が体部にかけて見られる。この部分は、卸目のない個体の場合であっても、最も使用痕が著しく摩滅が顕著に認められる部分であり、播鉢としてこの部分の機能上で重要な部分であることが判断され、口縁部の片口は、粉状乃至これに類する状態にされたものを他に移す場合に有効的な状態にされている。すなわち、当該土器は、底部の立ち上がりから、体部の部分と、口縁部を片口に仕上げるのが最も重要な要素である。これは、播鉢としての機能を高めるためのものである。しかし、鉢として判断されるもので、口縁部を有し卸目を有するものは僅かに1点しかないが、同様に遺存する個体であっても、卸目の認められないものや、底部であっても卸目の認められないものがあり、卸目を有するもの、ないものの二者があることが判断されるが、破片個体が全てである状況から、判断基準の段階から無理があるのかも知れないが、上述の二者の存在は、确实視される。

このうち、前者をA、後者をBとする。

この卸目は、施文具・施文状態から4種に分類される。以下、この掻目の分類を示す。分類は、アルファベットの小文字でa～dを付す。

- a類 細い卸目を縦位に施し、卸目の単位は、4本以上である（4・9本のものが認められる）。
- b類 幅の広めの卸目を縦位に施し、卸目の単位は4本以上である（4・5本のものが認められる）。
- c類 幅の広めの卸目を弧状に施し、卸目の単位は4本以上である（4・5本のものが認められる）。
- d類 幅の広めの卸目を弧状のものを交互に交差させる状態に施し、卸目の単位は6・9本が認められている。このd類の破片で交差する部分の破片からこの卸目の状態を復原すると第773図の状態となり、見込み部の円形を加えると“向橋”の意匠に類似する。また、この状態のものは、摩滅を考慮しても、器厚を他の三者と比較すると薄作りの様に思われる。

この4分類を大別すれば、直線のものとは曲線のものに分けられるが、交差状のものを独立させて考えれば、三者に約される。

この卸目を有する口縁部は、6類中に1点（第638図-4）があり、卸目はc類である。そして、5類の5類の口縁を有する図上復原出来た第620-20はa類の卸目を有している。また、d類の卸目を有する一群の口縁部を想定すると、1・2・5・6以外のものであることが考えられる（消去法からすれば）。さらにa類の卸目を有する5類が15世紀初頭以前にその所産年代が求められる点と、c類とd類が類似する点から、形状は6類に類似するものであることが想定され、器厚が薄い点も考慮される。これらの点を含めて考えると、3類中の直線的なものがd類の口縁部として考えられ、この口縁部形状の一群を新たな分類形として7類を冠したい。この7類の年代観を求めるとF2井・G11井の類例から15世紀後半～16世紀前半での存在と考えられる。

この挿鉢は、前述したとおり、その機能の向上性は変遷過程上で大きな要素であり、卸目の分類とその変遷観は、当該土器種の変遷過程を判断する上で非常に重要であることが指摘出来、掻目の変遷二器形の変遷として判断される。すなわち、卸目の施文が多くなるに従い新しい様相と判断され、変遷は1・2類→3・4類→5類→6類→7類の変遷が考えられる。

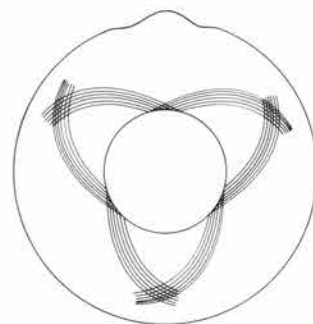
相対年代では、明確に設定し得るものはなく、共存した土師質土器皿・内耳鍋の年代観から得た埋没の下限から類推し、前述した。この土師質土器皿・内耳鍋は、前者が14世紀中頃～15世紀前半代において認められ、14世紀後半から15世紀後半に主たる存在段階があり、後者は14世紀中頃～15世紀後半代に存在が多いが、この点では当遺跡での主たる存続が14世紀中頃から16世紀前半の約230年間にあり、鉢形土器に挿鉢自体の主たる存在もこの230年間にあり、これは類推させる。

そして、上述の分類別変遷に相対年代を与えれば以下のとおりである。

- 1・2類—14世紀中頃
- 3・4類—14世紀後半～15世紀初頭
- 5類 —15世紀前半
- 6類 —15世紀後半
- 7類 —15世紀後半～16世紀前半

これらを代表する個体は付図10に示した。

その他のもの



第773図 向橋状卸目模式図

その他にしたものは、火鉢形・香炉?・鉢等があるが、主体は火鉢にある。また、香炉と確実視し得るものではなく、小形のもので筒形乃至これに近い形状を呈するものをこれに考えた。そして、これらの大半のものには印花文を施している。そして、当該のものも前出の在地系同様に全て破片のものであった。

火鉢形

火鉢形は、平面形状で円形・方形（四角形）の二者に大別され、前者をA類、後者をB類とする。そして、前者は数種の形状に分類出来るが、後者は四角形に近い形状なのか、それとも両者が存在するのか判然としない。

平面円形状の火鉢は、口縁形状により、内湾するもの、直線的なもの、外反するものの三者に分けられる。前者をa類、中者をb、後者をc類とする。このうち、

A a類 1-450-13・14・17、1-455-7、1-469-5、1-546-5、
609-6、624-15、638-14、652-8、

A b類 1-450-16、1-469-11・16・17・20、1-543-1、1-553-3、1-612-14・16・18、
609-7、624-16、738-11、

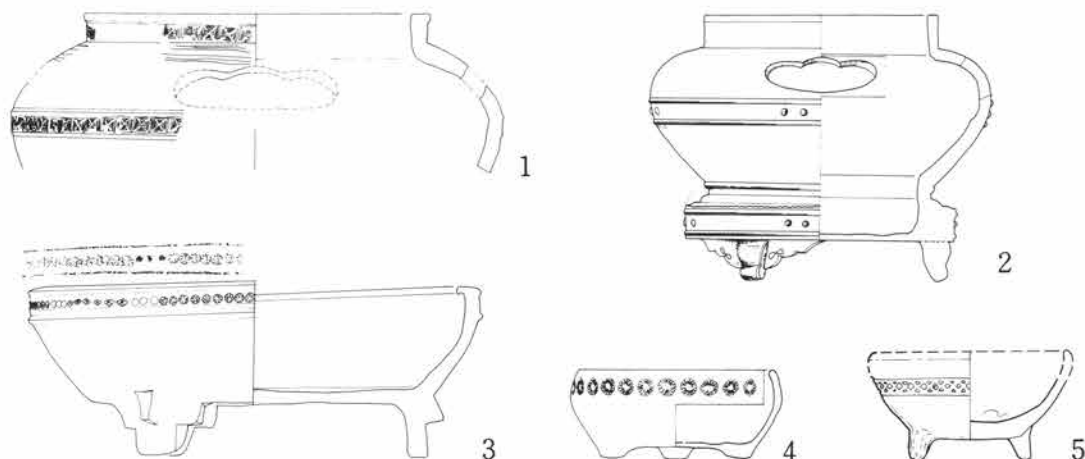
A c類 638-15、

B類 1-469-6～8・12・14・15・18・19、738-12、

この火鉢の一群に足部として加飾されたものがあり、割口の脱落痕からA・B類の両者での存在と判断され、1-469-18以外は全てA類に加飾されたものである。この足部には、規模に大小が認められ、火鉢本体の大小に係わる存在であったと考えられる。また、足部は香炉にも認められ、3本1単位のものであったことは周辺遺跡例からも考えられ、第644図-1の火鉢の底部からも窺える。

元来足部を有する意義は、内部の熱が直に接地部に伝わらないように考慮して施されたと思われるが、在地系の一群段階では、祖形のものに孫写的に加飾されたものと考えられる。

この足部には四者のものがあり、獣足の退化形態的なものと偏平なもの、円柱状のもの、円錐状のものがあり、後三者は底面に貼付された状態であるが、前二者は、削り出しなのか貼付なのか判然としない。これらの内幾つかのものを他の遺跡例から類例と完形を想定した場合の状態を第774図に示した。



1. 下東西遺跡 S D 118 2. 長楽寺遺跡出土のものを筆者が加除筆し略図的に示した。
3. 下郷遺跡 S E 03 4. 上並榎南遺跡第26号土坑 5. 国分僧寺 S E 11

第774図 火鉢類例図

また、印花文以外の加飾として、横位の平行する隆体と珠文を施すものが有る。これは、出土例からは、菱形雷文の印花文を組合わせているものと、独立した存在での三様が認められ、第775～777図に示した。

香炉？・鉢類・他

この両者は小形のもので、香炉と思われるものは3点(1-553-4、609-8、629-7)、鉢は1点(609-3)で片口のものである。この両者のうち前者が香炉としての器種であるかは判然としない。香炉とすれば胴腰・筒形の二者乃至これに類似する形態と思われるが、県内の類例を見る範囲では、外反乃至外傾形態のものが主体的であり、足部を具備する個体でない限りその判断を行い難いのが当該器種の現状である。

また、前刊書中で土師質土器香炉についての記述の中でも若干触れたが、軟質陶器の香炉は、15世紀前半頃に土師質土器へと移行している。

印花文

印花文には菱形文・雷文・円管文・菊花文・梅花文・平行格子のものが有る。このうち菱形文に2種、雷文に2種、円管文に2種、菊花文に3種、梅花文に1種、平行格子に1種の11種が見られ、菱形文には、盤形火鉢に施されるものと同一のものが有る。この意匠毎のものを第775～777図に示した。



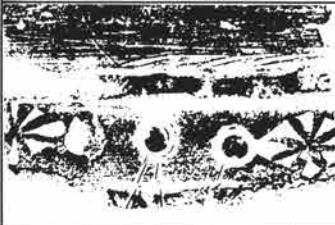

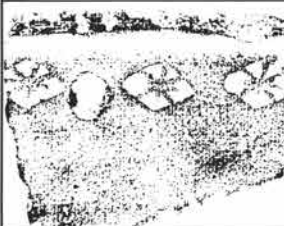



技法

当該種のものも基本的には内耳鍋・鉢と同様に粘土紐成形の轆轤整形である。ただ、底部の全体量が非常に少ないため、火鉢B類のもの以外は、粘土塊からの回転糸切りなのか、内耳鍋の如くの状態なのか明確には言い難いが、粘土板上に粘土紐を積み上げたものと思われる。これは、火鉢B類で顕著であり、この場合は、平面形状の粘土板上に体部と口縁部を成形した粘土板状に仕上げたものを貼り付けた後に撫で整形しており、外面は平滑に仕上がるためのヘラ撫で(研磨)が施されており、外面のヘラ撫で(研磨)調整は内耳鍋・播鉢・盤形火鉢以外の当該器種では共通するものである。この外面の調整は、滑沢を意識したものと考えられる。これは、当該種が、屋内で使用されるためで、内耳鍋・播鉢の様に食に通ずる厨房乃至これに準ずる生活空間の中での什器としての存在に対し、住での使用に調度としての存在の面があり、黒く燻されているものも存在する点から漆器等への意識も有ったものともかもしれない。


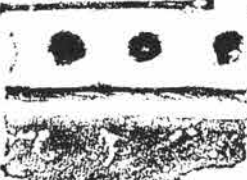
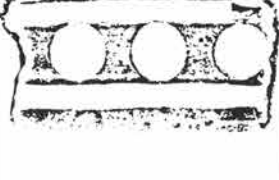

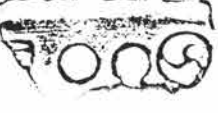

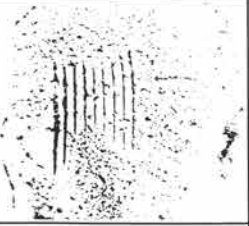

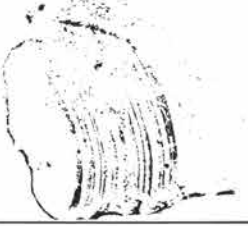




施文では、前述した意匠のものがあるが、この施文状態をみると二様の状態が認識される。これは小単位のもの連続して押捺するものと、単体を不連続的に施文するものがある。前者には小単位の雷文と小単位菊花文が有り、施文は非常に丁寧である(1-450-17、1-455-7、1-553-4)。特に1-450-17は2個1単位の珠文を貼付するが、周辺文様の乱れは認められない。後者は、大身の菊花文の連続するものを含め上述例以外のものがある。特に什器としての雑器である盤形火鉢にも押捺する菱形文と同一のものを施す例は、前者と質差が感ぜられ、文様自体の施文具の細工段階からしての質差は著しいものがある。この質差は、時間軸上での問題なのか、元来より後者のものよりやや高価な存在としてでのものなのか(時間軸では同時存在を意味する)であろう。この点で使用場所での差違もあると思われるがやはり在地系の軟質陶器であっても前者の優品性は窺われる。

相対年代

当該種の土器の相対年代は、播鉢類と同様に共伴関係でしか語れないのが当遺跡における実状である。し

菱 形 文			
1. 第609図-7			2. 第656図-4
	拓影図 火鉢の口縁部。 8分割の菱形。	施文具側拓影図 施文具側は肉置きが良い。	拓影図 花瓶の体部。 中段にパルメット文。 4分割の菱形。
			施文具側拓影図 隆線状に文様。
菱 形 文			
3. 1-第450図-11			4. 第612図-5
	拓影図 1と同一の施文具。 菱形文の間に珠文を配す。	施文具側拓影図 珠文は正円。	拓影図 有孔盤形火鉢の口縁部内面。 8分割の菱形。
			施文具側拓影図 偏平な施文具。
菱 形 文			
5. 第621図-7			6. 第709図-1
	拓影図 有孔盤形火鉢の口縁部内面。 8分割の菱形。	施文具側拓影図 左右の切り込みが不完全。	拓影図 有孔盤形火鉢の口縁部内面。 11分割の菱形。
			施文具側拓影図 不規則な切り込み。
菱 形 文			
7. 第624図-15			8. 第608図-17
	拓影図 有孔盤形火鉢の口縁部内面。 8分割の菱形。	施文具側拓影図 切り込みが奇麗であるが、天地・左右の切り込みは後の切り込みか？	拓影図 有孔盤形火鉢の口縁部内面。 8分割の菱形。
			施文具側拓影図 天地の切り込みは不完全である。

菊花文			
1.	1-第553図-4	2.	未掲載
			
拓影図 香炉(?)の外面。 中房を有する13弁。	施文具側拓影図 肉置きが浅い。	拓影図 火鉢の外面。	施文具側拓影図
菊花文			
3.	第611図-20	4.	1-第469図-5
			
拓影図 鉢形の口縁部内面。 中房を有する16弁。	施文具側拓影図 4分割法の4倍により彫る。	拓影図 鉢形の口縁部内面。 中房のない16弁。	施文具側拓影図 先細り状に彫る。
重郭文		雷文	
5.	1-第450図-17	6.	第652図-8
			
拓影図 火鉢の口縁部。 重郭文は連続して押捺する。 珠文を2つ配す。	施文具側拓影図 重郭の彫りは精緻。 珠文も正円で丁寧に施文。	拓影図 火鉢の口縁部外面。 連続して配する。	施文具側拓影図 彫りは精緻。
重郭文と斜格子文		斜格子	
7.	未掲載	8.	第738図-11
			
拓影図 火鉢の体部。 連続して押捺する。	施文具側拓影図 雑な彫り。	拓影図 火鉢の口縁部外面。 不完全な押捺。	施文具側拓影図 断面三角形形状に彫る。 単位数は不明。

珠 文			
1. 第609図-8		2. 1-第469図-6	
			
拓影図 香炉(?)の体部外面。 竹管状の刺突。 右端は一ツ巴か?		拓影図 火鉢の口縁部外面。	
施文具側拓影図 珠文は正円。		施文具側拓影図 珠文は正円。	
珠 文		卸 目	
3. 第629図-7		4. 1-第450図-10	
			
拓影図 香炉の口縁部外面。 右端に三ツ巴文。		拓影図 6本1単位。	
施文具側拓影図 珠文・三ツ巴文は正円。		施文具側拓影図 施文具の断面は四角形。	
卸 目			
5. 1-第464図-4		6. 第617図-9	
			
拓影図 9本1単位。		拓影図 9本1単位。	
施文具側拓影図		施文具側拓影図 4に同じ。	
卸 目			
7. 1-第450図-12		8. 1-第468図-18	
			
拓影図 7本1単位。		拓影図 6本1単位。	
施文具側拓影図 4に同じ。		施文具側拓影図 4に同じ。	

かし、その共伴関係においても非常に脆弱であり、唯一共伴例では1-455-7のA1井での類例であり、前述の施文の丁寧なものである。また、このA1井の共伴による年代観は問題点があるが、一応14世紀中頃に想定させて考えられる。そして、菱形文を押捺するもので盤形火鉢を共通するものは、盤形火鉢の年代観を相当させて考えられる。すなわち、上述の両者は実際の時間軸上では共存するものと判断される。

菊花文の粗雑な感と受けるものは、前刊書(1-542-6、1-631の上段)で示した瓦製の宝珠と通ずるものと考えられ、瓦製宝珠の年代観である。14世紀後半年代を相当させられるものと考えられる。他のものは、この14世紀代での存在と考えられ、瀬戸窯で13~14世紀の間で認められる印花文の盛期での所産段階であったものと考えられる。また、この点での年代観は大江氏の^{註28}指摘にも有る。

火鉢形の問題点

火鉢形の問題点とは、当該のものが確実に火鉢として使用されたかにある。この点では、内耳鍋と同様であるが、南北朝以降、唐物が盛行する文化現象がある。当時の支配者層にはこの「唐物」を受け入れようとしたことが当遺跡でも認められ、特に天龍寺青磁の花生は希少性が高いことなどから、当遺跡の文化層の高さを物語っている。

火鉢形の問題点というのは、火鉢として確実に判断し得るものが極少数であった点にある。これは、火鉢として確定し得る使用痕の問題である。ただ、火鉢の場合の使用痕は、擂鉢の如くの顕著な使用痕がない点にあり、むしろ、転用されない限りにおいては、器面の摩滅はほとんど認められない筈であり、むしろ、摩滅が認められず、二次焼成的な被熱痕が唯一の使用痕と考えられるが、通有には被熱による器面の変化は認め難いものである。この点に当該土器の確実なる認定がし難い点がある。

また、当該種の転用として植木鉢としての存在が想起される。これは、上述の唐物文化の反映と考えられる訳であり、特に大形のものは、該然性もあるものと思われる。ただ、この転用し得る状況は、軟質陶器以外の火鉢を所有し得、天龍寺青磁などの希少性の高いものを入手出来得る階層であり、植木・盆栽を生活の中に取り入れられる有力知識層に限定してよいと考える。この点は、通有な状態でなく、特殊事例としての存在であり扱いとなるが、当遺跡の場合、3ヶ所の館・寺院の存在と長尾氏の存在により、この特殊事例も有り得ると考えられる。

さらに、方形火鉢形は、器高が10cm内外と浅く、この中で火を起こす場合、やや無理の感があり、火災などの危惧もある。

これらを勘案すれば、転用の可能性はあるものと考ええる。ただ、植木鉢としての器種の存在がなかったということではなく、入手が比較的困難であったと考えられ、転用は、必然的な状況下でのことと考える。

近年絵像学として発達している分野の観点からすれば絵巻物中に多くの花生植木鉢があり、建物内外での様子が窺える。特に慕婦絵・祭礼草子等室町時代成立のものに多く見られる。この観点、すなわち、近年特に絵像学と称し、発展・注目される分野自体は、日本史の民衆史の中から発達したが、絵巻等も遺物として扱える範囲であり、類例が少ない特殊事例での扱いとなっても、考古学からの観点からの扱いも必要であると考ええる。

胎土

胎土については前刊書中で若干記述したが、総括的に記述したい。この記述にあたっては、土師質土器皿の一群と、内耳鍋・擂鉢類・火鉢形等での二者の状態^{註28}で記述する。また、その状態は、口絵2を参照してい

第4章 考 察

ただきたい。

在地系土器の胎土を観察する主旨を若干記しておきたい。

土器・陶器・磁器の胎土観察は、それらを焼造した地域を認識する有力手段であり、陶器の中でも灰釉の釉調でもある程度は判別が可能でもある。胎土は、陶器・磁器では、明確に焼造地域を判断されるものもあるが、これは、胎土の特徴による所見であり、同様に、群馬県内古代の主要窯跡群の製品は胎土を観察することにより、ある程度判断出来る。この古代の場合は、物としての流通を判断する場合に非常に有効であり、各窯跡群の焼造器種を知ることが出来るばかりでなく、その成果は非常に大きい。

所謂“中世在地系土器”は、現状では器種の存在が知られ、変遷観も概ねのところが明らかになりつつある。当該の一群は、少なくとも県内産品として考えられる訳であるが、これらの胎土との特徴を考察することにより、焼造地の判断が出来、中世の窯業の実態の一部を復原することが出来る。これは、当時の社会状態を明らかにする上で、非常に重要な手段と成り得、地域史に寄与する点も非常に大きいといって過言ではない。そして、単なる序列編年は、その時間単位を把握するための一方法にしか過ぎなく、考古学が目指す次元はより上にある筈であり、焼造地毎の分析がなければ、究極の目的達成には至れない。この点を鑑みて胎土の観察を詳細に実施した。

胎土は近年科学的分析により成分組成を数値で示しているが、これ同等の肉眼観察を詳細に記述した例は非常に少なく、且つ実施している人も極限られた人である。科学的胎土分析は、全ての土器に実施出来ない所から、肉眼による観察が非常に重要であることは言うに及ばないが、あながち軽視されているのが実態である。これらの点から、当遺跡出土の土器類に対し詳細に亘って観察した主旨がある。

土師質土器皿

当該土器の胎土は、前刊書中で二者に分別して考え、中間的なもの（AではなくBでもないC）の3種で考えた。そして、今次の報告の観察表中では、Dを追加した。先ず、Dについて記した後に総括したい。

Dは、A・B・Cに該当せず、最も白味の強いもので、指で触れた場合、指に胎土の粉が多く付着し、“よごれる”といった状態の胎土の生地土である。発色は白味が強いが、桃色がかった様なものも含まれている。夾雑物はシルト・赤褐色粒子（橙褐色粒子）・半透明鈹物粒子・黒色鈹物粒子・白色鈹物粒子・白色粒子等を含むが、後四者が多く含むものは“砂粒・細砂粒”として表した。

このAの生地土を使用する胎土は、14世紀代に否定される一群中に特に多い。この14世紀代のものは、前述したが複雑な様相がある。前刊書中ではこのDの設定がなかったことと、14世紀代に比定し得るものの総体量が少量であったため、Aで分類したものもある。このD自体はA同様に、鉄分の非常に少ない生地土であることは発色から判断されるが、発色の点で大別すれば前刊書の分類の二者である。このDを使用する発色の一群は、所謂白土器（白カワラケ）と称する一群に対比されるものとして考えられる。しかし、所謂“赤・白”の発色による当該種の存在は、当遺跡では、単一時間内でその存在を確認することは出来ないが、8類bの一群中にはA・Bの顕著な存在があるが、赤・白の系譜上のは考え難く、前刊書で示した領地支配の変革から生じた現象としてとらえた。この点で、“白土器”として専らに作られたとするには問題がある。ただ、この一群が、白土器の系譜のものであることは考えられ、当該地域における元来の赤・白の併存はなかったものと考えられる。すなわち、二者の土器座による作り分けがなかったことを示唆するものと思われる。

軟質陶器の胎土

軟質陶器の胎土は、各器種毎の分類でなく継続的に分類し、観察表中においてA～N類として記述した。これは、最大限よりやや少ない分類であるが、共通する点が多く、違器種であっても同一と判断される胎土も有り、分類により類別して考えた。

先ず各分類（A～N）についての基準的な特徴を記述した後に総括したい。

- A類、類別は比較的少数例であるが、次の夾雑物、角閃石（黒色鉍物粒子）・角粒状黒色鉍物粒子・白色微粒子・角礫（細粒）・粗粒円礫を含むが、全体的には、`砂っぽい、胎土であり、砂粒を多く混入するものであり、この砂粒が上述の夾雑物である。発色は、中性焰の場合、橙色味が強い。
- B類、類例は多く、内耳鍋に多い。夾雑物は以下のものがある。角粒状黒色鉍物粒子・白色微粒子・白色鉍物粒子・微粒雲母・赤褐色粒子・角礫（細粒）を含み、比較的白色微粒子が多い。中性焰の場合発色は、褐色味が強い。
- C類、B同様の夾雑物を含むもので、還元焰焼成のものである。このため赤褐色粒子が黒色粗粒子状になっている。B・C共に`砂っぽい、胎土であり、比較的比重が軽い（手で持った感触）。
- D類、類例は少ない。角閃石・透明鉍物粒子・半透明鉍物粒子・黒色鉍物粒子（黒雲母？）・白色微粒子・細粒角礫等を含む。比重は重く、砂質味があり、恐らくは、シルトの粗いものをシャモットとして使っていると考えられ、酸化焰焼成の場合の発色は白っぽい。
- E類、類例は多く、特に擂鉢に多い。夾雑物は、角閃石・白色鉍物粒子・透明鉍物粒子・白色微粒子・細粒円礫・細粒角礫・赤褐色粒子・黒色鉍物粒子を含む、やや砂っぽい感がある胎土で、酸化焰焼成の場合の発色は、橙褐色を帯びる。
- F類、類例は少ないが、火鉢形類に多い。夾雑物は、角閃石（多）・黒色粒子・白色微粒子・細粒円礫・透明鉍物がある。比重は比較的軽い。還元時の発色は淡い灰色～やや褐色味を帯びる。
- G類、類例は多く、擂鉢類が最も多い。中性焰・還元焰両者があり、焼成の差により黒色粒子か赤褐色粒子となる。夾雑物は、角閃石（少）・黒色鉍物粒子（微粒）・白色微粒子・透明鉍物粒子・赤褐色粒子・白色鉍物粒子・細粒角礫を含む、酸化焼成部の発色は、橙～赤橙を帯びる。比重は重い。全体的に緻密である。
- H類、量的には多くない。夾雑物は、角閃石・黒色粒子（多）・白色鉍物・透明鉍物・半透明鉍物・白色微粒子・雲母微粒子があり、絹雲母片岩系の破片が入るものもある。全体的に、粉っぽい胎土である。比重は比較的軽い。
- I類、1点のみで香炉？にある。黒色鉍物粒子・白色粒子・雲母が入り、稀に金雲母が入る点が他の雲母と異なる。密であるが比重は軽い。
- J類、D類に類似する。夾雑物はD類と同じであるが、胎土全体の砂質味が少なく、ややきめ細かく緻密である。
- K類、類例は少ない。やや焼き締まったもので夾雑物はE類と同様である。恐らくE類の焼き締まったものと思われる。
- L類、類例は少ない。夾雑物は、角状の黒色鉍物粒子・角閃石・雲母・絹雲母片岩片・細粒角礫・細粒円礫・赤褐色粒子を含む。中性焰焼成のものは赤橙色の発色であり、H類と類似し、Hと同一の胎土と思われ、Hが還元焰焼成で、Lが中性～酸化焰焼成であると考えられる。
- M類、類例は少ないが、B・C類に類似する。夾雑物は、礫類以外は同じで比重が軽い点でB・Cと同様

第4章 考察

である。

N類、類例は少ない。全体的に粉っぽく所謂「瓦質」に近い。夾雑物は少なく、微粒砂としてのシャモット内の黒色鉱物粒子・半透明鉱物粒子・白色微粒子が僅かに含まれる。

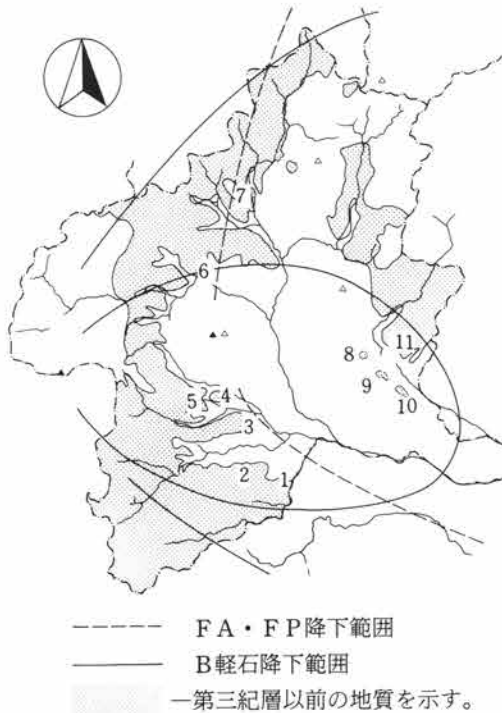
上述してきた各分類毎の胎土の特徴は、夾雑物自体の量にも及ぶものであるが、口絵を参照していただきたい。上述の中で同一と判断されたD・J類の中には、盤形火鉢と火鉢形大形器種が印花文を共通して存在している。

これらは、素地土を焼成したものであり、すくなくとも、胎土に含まれる夾雑物等は素地土の段階には含まれていたことは判断される。しかし、生地土の段階で何がどのくらい混入しているかを判断することも胎土から産地を推定する上では、非常に重要である。

以下、分類した胎土の推定生産地を示すが、この推定するにあたっての判断理由について若干記しておく。

筆者は、国分寺中間地域の調査に従事することにより、多くの瓦について観察する機会を得た。近年の研究では県下には、11地区の窯業遺跡群が現地踏査・調査等により明らかにされている。そして、この窯跡群で焼造された製品の内、特に瓦当文を有する瓦は、県内のどの地区乃至窯で焼造されたかがある程度判明しており、男・女瓦でも共通する胎土・採集資料により須恵器同様にある程度までの産地の比定は出来る状態^{註29}になってきた。この所見は、現状で群馬県における窯跡の調査自体が遅れている現状では、逆説的に理解するしかない状況での所産でも有る。各分類の胎土の産地比定は、古代瓦・須恵器等の所見に基づくものである。ただ、肉眼による所見のため、おおざっぱな分類としておきたい。これは、古代の遺物と比較した場合、明確な確信が持てなかった点にある。特に吉井地区以外の藤岡・乗附としたものは、明確になし得なかったことから、両者の包括状態であることを付記し、さらに、太田系としたものは、下野も含めて考えられるものである。(第778図参照)

これらの胎土は、素地土を精製して焼成されたものであるが、この素地土は、工人集団毎にある程度は共



1. 藤岡古窯跡群
2. 吉井古窯跡群
3. 乗附古窯跡群
4. 秋間古窯跡群
5. 里見古窯跡群
6. 中之条古窯跡群
7. 月夜野古窯跡群
8. 雷電山古窯跡群
9. 笠懸古窯跡群
10. 太田金山古窯跡群
11. 桐生古窯跡群

通したものであったと思われる。これが、時間軸に対比させても同様な様相は窺える。これらのことから、太田地域を中心とする一群は、主として14世紀代のものに多く、吉井・藤岡地域は、15世紀以降に多く、特に、内耳鍋4期以降は主体が吉井地域に集中することが推定される。また、前刊書では、瓦の胎土と対比させたが、同一と判断されたものは極限定されたものだけであった。

15世紀における吉井・藤岡・乗附地域での中世在地系土器＝軟質陶器の展開は、在地領主の経済的な面で多大な影響を及ぼせたものと推定され、14世紀以降に台頭のある小幡氏・高山氏・寺尾氏等の在地國人層

吉井系 B C G K M
藤岡・乗附系 F H L
太田・栃木系 D E I J N

第778図 上野における室町時代主要窯業産地図

の経済的基盤の一部は、これらの窯業生産にあったものとも思われる。

在地系土器（土師質土器皿・軟質陶器）のまとめ

在地系土器のうち、土師質土器皿は、14世紀代には東上野・下野の様相が強く認められることが判明した。この要因として領地支配者の変革による所産であることが考えられた。すなわち、貞治2年（1363年）以降上杉・長尾氏による上野の支配体制が確立されるまでは、南北朝時代の名称に代表される如く、混乱した世情の中での状態であったものと考えられる。この上杉氏の領国支配形態の確立される段階には（14世紀第4四半期）、前刊書でも若干示したが、新たな文化の展開があったものと考えられる。この上杉氏の領国支配体制の確立後、土師質土器皿は、少なくとも汎北関東的に斉一化される段階にあたり、文化の大きな画期となっていることが窺える。そして、この頃に期を同じくして出現する内耳鍋は、斉一的に出現しており、前代の系譜とは別に新たな器種として爆発的に上野国内に広まったものと考えられる。この出現と広がり自体は、当時の需要例が受け入れ易い必然性があった点にほかならず、革新的な存在として出現があったものと判断される。しかし、この内耳鍋の出現は、在地系土器の一群に祖形を見ることが出来ず、唯一盤形火鉢がその前身的な存在として考えられるものの、一線を異にしている。これらの点からすれば、唐突的に出現することが考えられるが、大江氏の指摘の材質転換現象の考慮もなされることである。しかし、鉄製内耳鍋の実態が判然としない点で、今後に託される大きな課題の一つである。

播鉢は、主体が14世紀にあり、15世紀段階では、吉井・藤岡地域での焼造と考えられるものが多く、太田地域の焼造が減少したか、搬入が少なくなったかが窺われるが、供給の状態にも変化があったことも想定されることであるが、総体的に吉井・藤岡地域での生産になったものと思われ、工人自体にも移住または新たな工人集団が入植したことも示唆される。また、14世紀代の播鉢類は、太田地域での焼造品が多い点と、後出形には口唇部形状に大きな差違が有る。そして、播鉢の存在意義は、固形乃至粒状のものを粉状に出来ることであり、播鉢の増加は、食文化の中にも大きな変革様相をもたらしたものと考えられ、また、粉にした食物自体は粉の状態では食せず、二次的に加工する原料として作られたものと判断出来る。この粉より作れるものとしては、麺類等の食物がある訳であるが、その実態を窺える資料の出土はなかった。しかし、県内では長楽寺に伝わる^{註30}「永祿日記」には、食物についての細かな記載がある。ただ、この永祿日記自体の成立が、16世紀中頃であり、年代的に問題もあるが、おおよそのところは変化がなかったものと思われる。また、粉・粉の加工品自体保存食として利用された。急場での食事・携行する場合での食物を作る元に最適である。これは、14世紀の南北朝時代に戦乱の続く中では不可欠な食料源として重要なものである。この14世紀での播鉢の盛行はここに要因が求められる。また、15世紀段階では播鉢の減少が認められるが、この頃になり後述する石臼があり、^{註31}「喫茶」の茶臼が、播鉢と融合する状態で多く作られる様になったものと思われ、これにより播鉢の減少化があると考えられる。ただ、石臼自体は重いものであり、携行には不便であり、ある程度の携行用に容易な点か、安い価格で供給出来たかにより、その存続があったものと思われる。

また、播鉢の場合、摩耗と欠損という二大欠点があり、これを充足し得る石臼は、それなりに需要も大きかったものと考えられる。そして、前刊書でも示したが、15世紀後半頃から土師質土器皿で器厚を薄く均一化する現象が認められ、同様に播鉢・内耳鍋にも15世紀後半以降に器厚が薄く均一化の現象が共通している。これは、三者に共通する現象としてとらえることが出来る。

これらの在地系土器群の生産は、領地支配の中で組みこまれた状態であったことは明らかである。

しかし、在地系土器は工人があって作られるものであり、これらの工人が前代から上野において系譜がた

第4章 考 察

どれるのか、新たに入植したのか問題点の一つとして残される。ただ、当時の当該種以外の工人が他の製品分野においても存在した訳であり、総体的には傾向の中から推察される部分がある。

前代での在り土器の工人は、それが焼造し残した製品によりその存在が判断され、前代に盛行のある壺形のものがあるが、壺形のもので南北朝以降認められない。しかし、元応2年(1320年)在銘の鉢の存在は新たな器種として存在であり、鎌倉時代末期に在り土器に何らかの変革があったものと考えられる。

上述してきたこれら軟質陶器には二次焼成を受けているもの、特に播鉢類が幾つかあり、この中には破片段階でのものと破片化以前での2者が有った。この二次焼成を受けた破片からは、かなりの高熱を受けたと思われるものが含まれており、陶磁器の所見にある火災の可能性は考えられる。この二次焼成を受けているものは、15世紀後半に比定されるものがやや多く、14世紀代のものにも数点認められ、そして、16世紀以降と考えられるものは認められない。この点では、火災があった場合、14世紀から15世紀代に数回あったと思われるが、14世紀の遺物が、15世紀の火災で二次焼成を受けたことは充分考慮される。この点で、15世紀後半代での火災は考えられる。

16世紀では、正統長尾系図の中に、武田氏の惣社攻略の折、^{註32}“永禄6年3月18日菩提寺焼亡”の記載があり、この菩提寺が前刊書で報告した小見廃寺であった場合、16世紀代の火災も考慮される。また、C3井内からは柱材と考えられる角材(1辺12cm程)の先端だけが焼け焦げた状態で出土している。この類例以外では、炭化材は出土していない。さらに、各遺構の覆土内でも炭化物の混入は多くなく、覆土からは、周辺で大災があったことを推定し難いが、G36址は、火災により消失した可能性がある点から、これらを類推すれば火災の有った可能性は否定出来ない。

背影からすれば、15世紀後半代には、長野氏が国府に張陣しており、またC区内の土塚墓の被葬者が、この長野氏の対陣の折に戦死した可能性もある点から、火災とすれば、この辺りに要因が求められる。しかし、結論的に言及し難い。

第4項 腰刀について

北側調査区内遺構に伴う鉄器は腰刀一点である。前回報告の南側を加えると、腰刀2点、鉄鏃2点となり、以上が当遺跡出土の中世鉄器の総量である。

腰刀

腰刀は第731図-1のとおり欠損はなく、鋒・物打・鉤元・棟区・刃区・目釘穴・茎尻などの各部の状態を良く留めている。

量目は全長25.0cm(8寸3分3厘)、刃部長18.3cm(6寸1分)、茎長6.7cm(2寸2分3厘)、棟の重ね0.9cm、両区から目釘穴芯までの長さ3.0cm(1寸)、目釘穴の径0.3cm(1分)、茎の棟側の最大の重ね0.7cm、刃側の最大の重ね0.4cmを測る。

形状は小刀^{ちいさなたな}で平造りである。鋒^{きつさき}は大切先で鋒^{みくら}は枯れているが、内反傾向がないので研磨耗りは少ないと考えられ、鋒形状は本来に近いと推測される。茎形状はX線透視の結果、瘦せた丸尻で、区については棟・刃区の刀身側と茎側との間に茎側の送^{おくり}が浅く、作込に甘さが窺える。その甘さは全体観についても最大幅が刃区より3cm物打側に近い位置にあり、若干、異形の感を呈するところにも共通性がある。棟・刃区の深さは

両部ともに0.6・0.5cmと近似しており、割込の作業労力は高かったはずである。

棟は錆化のため、丸・平・庵・三ツ棟が明瞭でないが、丸・庵・三ツ棟であるほど肉置が富かではないので実測図作成の際には平棟として図化した。刀身^{ひら}平の肉置は顕著な錆化のため明瞭ではないが、中世砥石の在り様（日常雑用刀を研としたら）と切先研磨の方法から平肉を置かずに^{ひら}平を設けることは極めて困難であるため、蛤刃形状となるのが自然であり、当然肉置はなされていたと推測される。茎の肉置は、平の肉盛りが錆化不明瞭であるが、棟側が厚く、刃側が薄い。

鍛・刃部については、鍛は全体に錆ぶくれが極めて顕著で、秋刀魚を見るようである。棟に沿った個所には錆割が発達しているため芯金を用いて鍛造した可能性もある。平の錆化の方向性は柁方向で鍛目もおそらく同様であろうと考えられるが錆ぶくれの状態からすれば精鍛であったとは云い切れない。焼刃は、実測図矢印にわずかながら切先⁽¹⁾に俯向く変換部が認められ、以下、鉤元側に向け、わずかに反る傾向があるので、しっかりした刃渡しがなされていたと推測され、反りは、錆化現状で0.15cm程である。

拵に関しては区に一線が残り、鞘と柄との拵境と考えられる。しかし木質の遺存はない。拵は、中世⁽²⁾にあっては、呑口拵と合口拵とがあり、前例は前回報告の第462図-12・高崎市吹屋遺跡村東館址例などがそれで、合口拵は本例がそうである。中世の場合、合口拵の腰刀には鉤の付く例と、日常的な雑用刀などに鉤を欠く場合がある。本例は鉤の痕跡がなく、刀身自体の鉤元の重ねで鞘に固着させたと判断される。身幅で固着させるには最大の幅が、刃区から3cm物打側に寄った位置にあるため鉤元の幅での固着は無理である。鉤は本来は刀身を鞘から浮かせ、刀身の錆化防止の機能を果たすためにあり、本例の作込の甘さ、拵に鉤を欠く2点をもってその機能を雑用刀の範疇で捉らえたい。製作年代は大切先であることから刀姿様式上14世紀と考えられる。

鉄は、再生されるため、中世の雑用刀の伝存は極めて少なく、しかもほぼ同時代に製作されたと考えられる前回の例と合せて二口は地域における小刀および拵としての腰刀の在り様を知ることができ、その存在に必要な意義が認められる。

註

- (1) 伝存刀の多くにこの変換部を認めることができるので一見されたい。錆身であっても同様と考えられる。
 (2) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「元島名・吹屋遺跡」1982

第5項 石製品・石造品について

石製品

石製品は、土器・陶磁器の総量と比較すると少なく、また、個体遺存の悪いものが多く、破片化した状態である。この点では、土器・陶磁器と同様であり、入手から使用・破損・廃棄の三要素が有ったと判断出来る。

出土した種類は、白（茶白・粉挽き白）・擂鉢・石鍋・砥石・硯・凹石である。以下各種毎に記述する。

茶白

茶白は上白1点、下白10点が出土しているが、下白10点中9点までが粗い材質のもので粉挽き白と同様の石材である。また、9点がはんぎりの部分の破片である。目の残るものは2例あり、いずれも8分割の目を施している。

第4章 考 察

また、はんぎりのもので把手部分が1点のみ出土している。(706—12)

出土地は、B5井2例・B1溝1例・F1溝3例・F2井1例・F3井1例・G20溝1例・H11溝1例と遺構外1例であり、共伴遺物からは14世紀～16世紀代の所産であることが推定される。

粉挽き臼

粉挽き臼は、23点を図示したが、細片等を含めた場合の全体から4割程度の量である。上臼は8点、下臼は15点ある。

出土地は、上述の茶臼と共通するもの以外では(B5井を除く)、F48址・G2溝・G1井・G9井・G11井があり、総体的にF・G区に集中するが、B1溝5例も多い。目の分割は、8・6の二者が有り、判断されるものでは、8分割5例、6分割4例が有る。また共伴遺物からは14～16世紀の所産であると判断される。

この茶臼と粉挽き臼では、前者が喫茶に伴う遺物であり、後者は、一般生活の中で使用される遺物である。前者は、有力階層の存在を示唆する遺物種であり、多種での遺物からも共通して示唆される。後者は、特にF・G区に集中する点では、館跡の検出された部分であり、恐らくは、この館に係わるものと思われる。

播鉢

播鉢は、14例の出土があり、形態にも幾つかのものがある。いずれも平縁のものであり、いずれも片口を有するものと思われる。底部の形状には、ハの字状の高台を有するもの、直立気味の高台を有するもの、高台を付さないものの三者がある。出土例での完形個体ではG11井戸内からの出土がある(692—11)。破片では、B1溝4例・F1溝2例・G34溝2例・G2井1例・H11溝4例の13点である。唯一完形個体のG11溝は、出土した数例のもの以外と異なり、外面ハツリ成形の器面のままで仕上げ状態となっており、他例の棒状鑿仕上・磨き仕上の状態のものとは異なっている。

この播鉢の相対年代を得るための確実な共伴例では、G2井・G11井の15世紀後半が認められ、軟質陶器の播鉢の減少期にもあたる。

石鍋

石鍋は1点出土している(1—616—15)が、二次的に破片状態を転用している。温石等の転用も考えられるが判然としない。

砥石

砥石は、25点図化掲載した。この25点は全体の8割に近い量である。これらの中には近代の所産と判断出来るもの4点を含む。いずれも金属器の砥石と思われる。

共伴遺物から当該期の所産と判断されるものには、16点が有る。他に判然としないものは5点有る。この内で16点のものには大小の二者があり、大形のは断面山形状を呈する状態のもので使用面も多く、砥石自体の砥ぎ減りが著しい。小形のは、棒状の断面四角形を呈するもので、著しい使用は認められないが、2点ある。他のものは破片である。

この両者は、大きさの点で手持砥と判断される。前者は、研磨主体が小形のものと思われ、大形のを大刀・腰刀・槍等に求めた場合、小形のは雑用的な製品であったと思われる。また、断面山形状のもの

は、近年の調査・報告例でも資料の増加が多く、当該期の特徴的な砥石と思われる。

硯

硯は2点出土しているが、1点は遺構外扱いのものである。G73坑出土のもの(679—23)は、使用痕が顕著である。この両者共に明確な所産は明らかでないが、14～16世紀代での所産・使用・廃棄と考えられる。

凹石

凹石は図化掲載したものは19点で出土量の約6割である。これらの凹石の内大半が自然礫の一面に“穴”をあけている。穴は、大半のものが摩滅しており、使用痕とも思われる。また、この使用痕とも思われるものは、その状態が顕著なものとは顕著でないものの二者がある。この内、顕著でないものは成形時の凹凸が若干残っている。平坦面が使用に伴って窪んだものとは考え難く、鑿等の工具による成形が考えられ、使用による器面の摩滅があるものと思われる。また、“穴”には、礫の規模に比例せず礫の規模と穴の規模との関連はないと判断される。

共伴遺物からは、G2溝・G34溝(5点)・G2井(他はB1溝・C集石・F1溝・G3溝)の15世紀後半段階が廃棄される状態であり、完形であっても廃棄される点では注意される。

この凹石は、従前より不明石製品として扱ってきており、用途も判然としない点があるが、津金沢氏の指^{註33}摘する粉碎用としての用途が主体と考えられるのが当遺跡での用途と考えられる。この用途としての理由は、上述の“穴”の使用痕状のものからである。

また、軟質陶器製の擂鉢内で粉碎には、固形物の大きさ・硬度により使用の限界があり、擂鉢内部で粉碎出来ないものに当該の凹石を使用し、細かに粉碎した後に軟質陶器の擂鉢を使用したものと考えられる。この凹石が、15世紀後半に完存物であっても廃棄されるのは、他の粉碎器種の出現によるものと思われ、15世紀後半代には擂鉢の減少がある。

そして、このことを裏付けさせる減少であり、15世紀以降の石臼の盛行は、これに代わる二役的な存在意義にあると考えられる。

石造品

石造品として扱った器種は墓石等のものであり、五輪塔・宝篋印塔・宝塔・板碑である。これらのものは、元来墓域乃至これに準ずる区画域内での造立であり、出土したものは、この両者のいずれでもないものが多く、溝・井戸等から出土している。これらの点から当遺跡出土のもので、C区内に検出された小見廃寺以外での出土のものは、二次的に移動・転用も考えられる。以下各種毎に若干記述する。

五輪塔

五輪塔の各部は、下から地・水・火・風・空輪からなるが、作りの場合も風・空輪以外は個別に作られており、通有例との差違はない。これらの4部位のうち、比較的年代観の与え易い空風輪を主に若干記す。

地輪は、1点のみでC16墓から出土している。注意される点では、上面の中央部がやや摩滅しており、上位の水輪との擦れにより生じたものと考えられ、水輪の底径を想定する上で重要な観察点である。この擦れている部分の範囲から水輪の規模を想定すると、C集石出土のもの(1—544—7)ぐらいと判断される。ただ、両者は石材の相違から別個体である。

第4章 考 察

水輪は、天地両面の窪んだ状態で仕上げられており、上位の火輪・下位の地輪の接合部のふくらみを考慮してのものと思われ、全体を造立した場合火輪の軒の反り等を外観上で立体的に見せることを考慮してのものと思われる。

火輪は3点有るが、分類はし難い。しかし、空風輪と受ける穴の部分の整形は、全て同一の手法を用いている。この整形は、側部を棒状の丸鑿で縦位に面取りし、底面は棒状工具により槌打整形している。この手法は、宝篋印塔の笠部の相輪受部にも認められる。

空風輪は、5点を図化掲載した。他に4例ほど有るが出土地不明であったため除外した。この5例の空風輪には四者での形状分類が出来、便宜上A～Cを冠して分類する。

- A. 風輪が短く、内湾状態で立ち上がり、空輪は丸味が強く、空輪が大きいためB 1溝例1点(472—7)。
- B. 風輪が直線部で長く、空輪は丸味が強いものでF 1溝例1点(612—7)。
- C. 風輪が直線部で長く、空輪も比較的直線的に作られたもので、C16墓・南側調査区遺構外の2例(582—2、616—17)。
- D. 全体的に直線的で、円柱状に近い。空輪は宝珠部の上位に稜線が入る状態まで直線的で、上半部が下方に反るもの、C集石群で1例(544—6)。

この四者での分類は、形状での分類であるが、これが単純に変遷したとは考え難く、工人集団が複数存在した場合は、その工人集団毎の特徴(形状での)差により生ずるものであったかも知れない。通有の場合、五輪塔の年代観は、この空風輪により与えられる場合が多いが、形式学的に序列をすれば、A～DかD～Aのいずれかであるが、通有所見からはA～Dの序列があると思われる。また、具体的な年代観をもってすれば容易であるが、いずれも明確な年代は、示し難いが、上限を示せば14世紀中頃で、下限を示せば15世紀後半～16世紀前半であることと考えられる。

宝篋印塔・宝塔類

宝篋印塔は多く出土しているが、宝塔類は宝篋印塔より少ない。このこの宝塔類としたものものは、多層塔・宝塔を含めるものである。これらは五輪塔と同様な出土状態で二次的に移動していると思われるものが大半で、C集石例以外は全てこれに該当すると思われる。

また、出土した大半がG34溝であり、破片化したものであった。この破片化の状況については前述したが、故意に破壊された状態である。完存状態乃至これに準ずる状態のものは、C集石例で3点あり、相輪2点(1—542—7・8)・笠部1点(1—544—1)である。しかし、G34溝例は、宝塔も含まれており、G34溝出土の相輪で、水煙が付し宝珠直下の部分でない限り宝篋印塔として判断し難い部分がある。

相輪では、伏鉢・請花・九輪・宝珠の各部を、総体的に対比すれば、各々での差違が判明し、相違点を分析すれば変遷観も判断されると思われる。しかし、それを対比し得る個体数がないが、宝塔の相輪との対比がなされる。

宝塔の相輪は、3点いずれもC集石から出土している(1—543—2・3、1—542—9)。この3点は水煙を付する点で多層塔乃至宝塔の相輪であるが、各部の作りは当該種のもの共通したと考えられる。そして、C16墓例(1—581—3)は、この水煙付のものと類似形態として判断される。しかし、他の類例は各部の形態が異なっている。代表的な点を示せば、伏鉢等の蓮弁形状・九輪の表出方・宝珠の形状である。蓮弁の形状では宝塔の相輪が蓮弁の意匠を直接的に表出し、肉置きを意識した状態で文様の輪郭を広くとっている。そして、宝篋印塔ではそれらを写した状態のもので、写実性に欠け、表出も前者が幅を広くするが、後者は、

線状に細い。九輪では当該例が各層を幅広に表出するのに対し、宝篋印塔例は細沈線表出になっている。宝珠では、直下の請花と合わせて考えた場合、五輪塔の空風輪に対応して判断される。宝塔がA類で宝篋印塔がD類に対比される。これらの点から、両者の所産時期の問題も有るものと考えられ、各部位の作りの丁寧さから宝塔例の先行性が考えられる。この3者の宝塔例の作りの状態は、周辺地域で類例を求めても類例は無い。また、出土地が小見庵寺の寺域内部から出土している。そして、これらを勘案すれば寺院の建立直後の頃の所産と思われる、14世紀後半代の所産と推定しておきたい。また、前述した五輪塔のA類も宝珠形態の類似点から同様14世第4四半期の所産と推定しておく。また、C集石出土の完存個体2点は、土塚墓の構築が開始される以前として15世紀後半代以前での所産であると考えられる。またG34溝出土の一群も、先述した中道南館跡の廃棄年代からすれば、15世紀後半を下限として考えられる一群と判断される。

笠は、宝篋印塔で12例・宝塔で2例ある。前者は同一個体の破片と考えられるものを考慮すれば、10個体分の出土があるが、全体形状を窺えるものは2例であり(1-544-1、742-1)、両者は形態差と言える程の差が認められる。宝塔では2個体有り(第658図と図示しなかった隅部だけの個体)、これに伴う塔身(658-7、660-1等)から応永14年(1407年)の銘があり、15世紀初頭頃の1つの形態として位置付がされる。この笠は、露盤の格狭間部を連子窓状に表出し、赤色顔料を塗布している。屋根部の降棟の形状が火輪とは異なる点は、前に記述した。そして、残存する屋根の面は水磨きにより仕上げられている。また、棟の垂木を二重に表出している点で県下に多く分布する赤城塔のそれとは異なる。現在、県下での当該期の類例で、筆者の知見では国分寺僧寺に1例のみあるだけである。

宝篋印塔の年代観をもとめる場合の要素である隅飾突起は10個体で5種の分類が出来る。この5種の分類を便宜的にA～Eを冠して示すと以下のとおりである。

- A類、隅部の立ち上がりが直角に近く、低いもので上縁部の加飾は2段の弧線をなし、中心例先端は魚の尾鱗状になっている(612-6、617-17)。この両者には連子窓状の加飾をしている。
- B類、隅部の立ち上がりは外傾化があり、低いもの(742-1)。上縁部の装飾は、A類に似ているが尾鱗状のものが認められる。
- C類、隅部の立ち上がりが外反気味乃至外傾し、高い。上縁部は1段の弧線で表し、先端部は1段の階段状を呈するもの(657-9・10)。
- D類、隅部の立ち上がりが強く外傾するものと、外傾気味の二者の状態があるが、上縁部の加飾が1段の弧状を呈し、先端中心例は渦巻状を呈するもの(1-451-21、708-6)。
- E類、Dに類似する形状であるが、さらに隅飾突起円に渦巻文の突帯を加飾し、A類同様に連子窓状の加飾をするもの(1-544-1～4)。

上述の5分類の中で全体形状が把握される2例(B類・E類)の全体形状の差について若干考えたい。

B類のものと、E類のものでは隅飾突起が基本的には違いがあるが、軒の上位の露盤にも差が著しく認められる。B類のものは軒部の上位と下位では各露盤の高さが一定に近い状態であるのに対して、E類のものは上位の部分は均等性がなく、高く不一定的の状態である。また、連子状の窓の部分は、A類で一部確認出来るが、格狭間の部分にも加飾されている点が特徴付けられ、さらに、隅飾突起の中心例の渦巻状の加飾も特徴の一つである。

この両者の形状差の要因として、時間軸の差・工人の系譜の差・両者での差での大きく三者があり得る。この点と判断するには全体量と共存遺物での観点から考えなければならないが、B類のものは表採品であり、この点を論ぜない。ただE類のものはC区集石群から出土し、連子窓状の部分には、赤色顔料が鮮やかに残っ

第4章 考 察

しており、造立後間もない状態でさ中に埋まったものと考えられる。この出土地のC集石群は小見廃寺の瓦葺建物で廃されて以降武田氏の上州攻略の間に形成があり、上限を15世紀第3四半期、下限を16世紀中頃に設定出来る。

塔身・基礎・蓮台は、G34溝の出土例から個体数は多いが、図化自体に限界なものが非常に多かった。このG34溝出土のもので図化掲載したものは全体量の3割程である。

宝篋印塔の塔身では正四角錐を基調にすると考えられ、中央部に月輪を施すものと格狭状間区画により形成する二者が認められる。前者は、708—4で、後者が657—13・14であり、両者共に梵字を施すが、判読は不可能である。

宝塔の塔身は2個体あり、いずれもG34溝の出土である（658—7、660—1等）。このうち、第658図—5は、応永14年丁亥□月10日が判読出来、両者の所産年代が1407年頃と類推し得る。全面縦位の区画内に梵字を刻むが、梵字の種類も $\text{𑖀𑖃𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈𑖉𑖊𑖋𑖌𑖍𑖎𑖏𑖐𑖑𑖒𑖓𑖔𑖕𑖖𑖗𑖘𑖙𑖚𑖛𑖜𑖝𑖞𑖟𑖠𑖡𑖢𑖣𑖤𑖥𑖦𑖧𑖨𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇𑦈𑦉𑦊𑦋𑦌𑦍𑦎𑦏𑦐𑦑𑦒𑦓𑦔𑦕𑦖𑦗𑦘𑦙𑦚𑦛𑦜𑦝𑦞𑦟𑦠𑦡𑦢𑦣𑦤𑦥𑦦𑦧𑦨𑦩𑦪𑦫𑦬𑦭𑦮𑦯𑦰𑦱𑦲𑦳𑦴𑦵𑦶𑦷𑦸𑦹𑦺𑦻𑦼𑦽𑦾𑦿𑧀𑧁𑧂𑧃𑧄𑧅𑧆𑧇𑧈𑧉𑧊𑧋𑧌𑧍𑧎𑧏𑧐𑧑𑧒𑧓𑧔𑧕𑧖𑧗𑧘𑧙𑧚𑧛𑧜𑧝𑧞𑧟𑧠𑧡𑧢𑧣𑧤𑧥𑧦𑧧𑧨𑧩𑧪𑧫𑧬𑧭𑧮𑧯𑧰𑧱𑧲𑧳𑧴𑧵𑧶𑧷𑧸𑧹𑧺𑧻𑧼𑧽𑧾𑧿𑨀𑨁𑨂𑨃𑨄𑨅𑨆𑨇𑨈𑨉𑨊𑨋𑨌𑨍𑨎𑨏𑨐𑨑𑨒𑨓𑨔𑨕𑨖𑨗𑨘𑨙𑨚𑨛𑨜𑨝𑨞𑨟𑨠𑨡𑨢𑨣𑨤𑨥𑨦𑨧𑨨𑨩𑨪𑨫𑨬𑨭𑨮𑨯𑨰𑨱𑨲𑨳𑨴𑨵𑨶𑨷𑨸𑨹𑨺𑨻𑨼𑨽𑨾𑨿𑩀𑩁𑩂𑩃𑩄𑩅𑩆𑩇𑩈𑩉𑩊𑩋𑩌𑩍𑩎𑩏𑩐𑩑𑩒𑩓𑩔𑩕𑩖𑩗𑩘𑩙𑩚𑩛𑩜𑩝𑩞𑩟𑩠𑩡𑩢𑩣𑩤𑩥𑩦𑩧𑩨𑩩𑩪𑩫𑩬𑩭𑩮𑩯𑩰𑩱𑩲𑩳𑩴𑩵𑩶𑩷𑩸𑩹𑩺𑩻𑩼𑩽𑩾𑩿𑪀𑪁𑪂𑪃𑪄𑪅𑪆𑪇𑪈𑪉𑪊𑪋𑪌𑪍𑪎𑪏𑪐𑪑𑪒𑪓𑪔𑪕𑪖𑪗𑪘𑪙𑪚𑪛𑪜𑪝𑪞𑪟𑪠𑪡𑪢𑪣𑪤𑪥𑪦𑪧𑪨𑪩𑪪𑪫𑪬𑪭𑪮𑪯𑪰𑪱𑪲𑪳𑪴𑪵𑪶𑪷𑪸𑪹𑪺𑪻𑪼𑪽𑪾𑪿𑫀𑫁𑫂𑫃𑫄𑫅𑫆𑫇𑫈𑫉𑫊𑫋𑫌𑫍𑫎𑫏𑫐𑫑𑫒𑫓𑫔𑫕𑫖𑫗𑫘𑫙𑫚𑫛𑫜𑫝𑫞𑫟𑫠𑫡𑫢𑫣𑫤𑫥𑫦𑫧𑫨𑫩𑫪𑫫𑫬𑫭𑫮𑫯𑫰𑫱𑫲𑫳𑫴𑫵𑫶𑫷𑫸𑫹𑫺𑫻𑫼𑫽𑫾𑫿𑬀𑬁𑬂𑬃𑬄𑬅𑬆𑬇𑬈𑬉𑬊𑬋𑬌𑬍𑬎𑬏𑬐𑬑𑬒𑬓𑬔𑬕𑬖𑬗𑬘𑬙𑬚𑬛𑬜𑬝𑬞𑬟𑬠𑬡𑬢𑬣𑬤𑬥𑬦𑬧𑬨𑬩𑬪𑬫𑬬𑬭𑬮𑬯𑬰𑬱𑬲𑬳𑬴𑬵𑬶𑬷𑬸𑬹𑬺𑬻𑬼𑬽𑬾𑬿𑭀𑭁𑭂𑭃𑭄𑭅𑭆𑭇𑭈𑭉𑭊𑭋𑭌𑭍𑭎𑭏𑭐𑭑𑭒𑭓𑭔𑭕𑭖𑭗𑭘𑭙𑭚𑭛𑭜𑭝𑭞𑭟𑭠𑭡𑭢𑭣𑭤𑭥𑭦𑭧𑭨𑭩𑭪𑭫𑭬𑭭𑭮𑭯𑭰𑭱𑭲𑭳𑭴𑭵𑭶𑭷𑭸𑭹𑭺𑭻𑭼𑭽𑭾𑭿𑮀𑮁𑮂𑮃𑮄𑮅𑮆𑮇𑮈𑮉𑮊𑮋𑮌𑮍𑮎𑮏𑮐𑮑𑮒𑮓𑮔𑮕𑮖𑮗𑮘𑮙𑮚𑮛𑮜𑮝𑮞𑮟𑮠𑮡𑮢𑮣𑮤𑮥𑮦𑮧𑮨𑮩𑮪𑮫𑮬𑮭𑮮𑮯𑮰𑮱𑮲𑮳𑮴𑮵𑮶𑮷𑮸𑮹𑮺𑮻𑮼𑮽𑮾𑮿𑯀𑯁𑯂𑯃𑯄𑯅𑯆𑯇𑯈𑯉𑯊𑯋𑯌𑯍𑯎𑯏𑯐𑯑𑯒𑯓𑯔𑯕𑯖𑯗𑯘𑯙𑯚𑯛𑯜𑯝𑯞𑯟𑯠𑯡𑯢𑯣𑯤𑯥𑯦𑯧𑯨𑯩𑯪𑯫𑯬𑯭𑯮𑯯𑯰𑯱𑯲𑯳𑯴𑯵𑯶𑯷𑯸𑯹𑯺𑯻𑯼𑯽𑯾𑯿𑰀𑰁𑰂𑰃𑰄𑰅𑰆𑰇𑰈𑰉𑰊𑰋𑰌𑰍𑰎𑰏𑰐𑰑𑰒𑰓𑰔𑰕𑰖𑰗𑰘𑰙𑰚𑰛𑰜𑰝𑰞𑰟𑰠𑰡𑰢𑰣𑰤𑰥𑰦𑰧𑰨𑰩𑰪𑰫𑰬𑰭𑰮𑰯𑰰𑰱𑰲𑰳𑰴𑰵𑰶𑰷𑰸𑰹𑰺𑰻𑰼𑰽𑰾𑰿𑱀𑱁𑱂𑱃𑱄𑱅𑱆𑱇𑱈𑱉𑱊𑱋𑱌𑱍𑱎𑱏𑱐𑱑𑱒𑱓𑱔𑱕𑱖𑱗𑱘𑱙𑱚𑱛𑱜𑱝𑱞𑱟𑱠𑱡𑱢𑱣𑱤𑱥𑱦𑱧𑱨𑱩𑱪𑱫𑱬𑱭𑱮𑱯𑱰𑱱𑱲𑱳𑱴𑱵𑱶𑱷𑱸𑱹𑱺𑱻𑱼𑱽𑱾𑱿𑲀𑲁𑲂𑲃𑲄𑲅𑲆𑲇𑲈𑲉𑲊𑲋𑲌𑲍𑲎𑲏𑲐𑲑𑲒𑲓𑲔𑲕𑲖𑲗𑲘𑲙𑲚𑲛𑲜𑲝𑲞𑲟𑲠𑲡𑲢𑲣𑲤𑲥𑲦𑲧𑲨𑲩𑲪𑲫𑲬𑲭𑲮𑲯𑲰𑲱𑲲𑲳𑲴𑲵𑲶𑲷𑲸𑲹𑲺𑲻𑲼𑲽𑲾𑲿𑳀𑳁𑳂𑳃𑳄𑳅𑳆𑳇𑳈𑳉𑳊𑳋𑳌𑳍𑳎𑳏𑳐𑳑𑳒𑳓𑳔𑳕𑳖𑳗𑳘𑳙𑳚𑳛𑳜𑳝𑳞𑳟𑳠𑳡𑳢𑳣𑳤𑳥𑳦𑳧𑳨𑳩𑳪𑳫𑳬𑳭𑳮𑳯𑳰𑳱𑳲𑳳𑳴𑳵𑳶𑳷𑳸𑳹𑳺𑳻𑳼𑳽𑳾𑳿𑴀𑴁𑴂𑴃𑴄𑴅𑴆𑴇𑴈𑴉𑴊𑴋𑴌𑴍𑴎𑴏𑴐𑴑𑴒𑴓𑴔𑴕𑴖𑴗𑴘𑴙𑴚𑴛𑴜𑴝𑴞𑴟𑴠𑴡𑴢𑴣𑴤𑴥𑴦𑴧𑴨𑴩𑴪𑴫𑴬𑴭𑴮𑴯𑴰𑴱𑴲𑴳𑴴𑴵𑴶𑴷𑴸𑴹𑴺𑴻𑴼𑴽𑴾𑴿𑵀𑵁𑵂𑵃𑵄𑵅𑵆𑵇𑵈𑵉𑵊𑵋𑵌𑵍𑵎𑵏𑵐𑵑𑵒𑵓𑵔𑵕𑵖𑵗𑵘𑵙𑵚𑵛𑵜𑵝𑵞𑵟𑵠𑵡𑵢𑵣𑵤𑵥𑵦𑵧𑵨𑵩𑵪𑵫𑵬𑵭𑵮𑵯𑵰𑵱𑵲𑵳𑵴𑵵𑵶𑵷𑵸𑵹𑵺𑵻𑵼𑵽𑵾𑵿𑶀𑶁𑶂𑶃𑶄𑶅𑶆𑶇𑶈𑶉𑶊𑶋𑶌𑶍𑶎𑶏𑶐𑶑𑶒𑶓𑶔𑶕𑶖𑶗𑶘𑶙𑶚𑶛𑶜𑶝𑶞𑶟𑶠𑶡𑶢𑶣𑶤𑶥𑶦𑶧𑶨𑶩𑶪𑶫𑶬𑶭𑶮𑶯𑶰𑶱𑶲𑶳𑶴𑶵𑶶𑶷𑶸𑶹𑶺𑶻𑶼𑶽𑶾𑶿𑷀𑷁𑷂𑷃𑷄𑷅𑷆𑷇𑷈𑷉𑷊𑷋𑷌𑷍𑷎𑷏𑷐𑷑𑷒𑷓𑷔𑷕𑷖𑷗𑷘𑷙𑷚𑷛𑷜𑷝𑷞𑷟𑷠𑷡𑷢𑷣𑷤𑷥𑷦𑷧𑷨𑷩𑷪𑷫𑷬𑷭𑷮𑷯𑷰𑷱𑷲𑷳𑷴𑷵𑷶𑷷𑷸𑷹𑷺𑷻𑷼𑷽𑷾𑷿𑸀𑸁𑸂𑸃𑸄𑸅𑸆𑸇𑸈𑸉𑸊𑸋𑸌𑸍𑸎𑸏𑸐𑸑𑸒𑸓𑸔𑸕𑸖𑸗𑸘𑸙𑸚𑸛𑸜𑸝𑸞𑸟𑸠𑸡𑸢𑸣𑸤𑸥𑸦𑸧𑸨𑸩𑸪𑸫𑸬𑸭𑸮𑸯𑸰𑸱𑸲𑸳𑸴𑸵𑸶𑸷𑸸𑸹𑸺𑸻𑸼𑸽𑸾𑸿𑹀𑹁𑹂𑹃𑹄𑹅𑹆𑹇𑹈𑹉𑹊𑹋𑹌𑹍𑹎𑹏𑹐𑹑𑹒𑹓𑹔𑹕𑹖𑹗𑹘𑹙𑹚𑹛𑹜𑹝𑹞𑹟𑹠𑹡𑹢𑹣𑹤𑹥𑹦𑹧𑹨𑹩𑹪𑹫𑹬𑹭𑹮𑹯𑹰𑹱𑹲𑹳𑹴𑹵𑹶𑹷𑹸𑹹𑹺𑹻𑹼𑹽𑹾𑹿𑺀𑺁𑺂𑺃𑺄𑺅𑺆𑺇𑺈𑺉𑺊𑺋𑺌𑺍𑺎𑺏𑺐𑺑𑺒𑺓𑺔𑺕𑺖𑺗𑺘𑺙𑺚𑺛𑺜𑺝𑺞𑺟𑺠𑺡𑺢𑺣𑺤𑺥𑺦𑺧𑺨𑺩𑺪𑺫𑺬𑺭𑺮𑺯𑺰𑺱𑺲𑺳𑺴𑺵𑺶𑺷𑺸𑺹𑺺𑺻𑺼𑺽𑺾𑺿𑻀𑻁𑻂𑻃𑻄𑻅𑻆𑻇𑻈𑻉𑻊𑻋𑻌𑻍𑻎𑻏𑻐𑻑𑻒𑻓𑻔𑻕𑻖𑻗𑻘𑻙𑻚𑻛𑻜𑻝𑻞𑻟𑻠𑻡𑻢𑻣𑻤𑻥𑻦𑻧𑻨𑻩𑻪𑻫𑻬𑻭𑻮𑻯𑻰𑻱𑻲𑻳𑻴𑻵𑻶𑻷𑻸𑻹𑻺𑻻𑻼𑻽𑻾𑻿𑼀𑼁𑼂𑼃𑼄𑼅𑼆𑼇𑼈𑼉𑼊𑼋𑼌𑼍𑼎𑼏𑼐𑼑𑼒𑼓𑼔𑼕𑼖𑼗𑼘𑼙𑼚𑼛𑼜𑼝𑼞𑼟𑼠𑼡𑼢𑼣𑼤𑼥𑼦𑼧𑼨𑼩𑼪𑼫𑼬𑼭𑼮𑼯𑼰𑼱𑼲𑼳𑼴𑼵𑼶𑼷𑼸𑼹𑼺𑼻𑼼𑼽𑼾𑼿𑽀𑽁𑽂𑽃𑽄𑽅𑽆𑽇𑽈𑽉𑽊𑽋𑽌𑽍𑽎𑽏𑽐𑽑𑽒𑽓𑽔𑽕𑽖𑽗𑽘𑽙𑽚𑽛𑽜𑽝𑽞𑽟𑽠𑽡𑽢𑽣𑽤𑽥𑽦𑽧𑽨𑽩𑽪𑽫𑽬𑽭𑽮𑽯𑽰𑽱𑽲𑽳𑽴𑽵𑽶𑽷𑽸𑽹𑽺𑽻𑽼𑽽𑽾𑽿𑾀𑾁𑾂𑾃𑾄𑾅𑾆𑾇𑾈𑾉𑾊𑾋𑾌𑾍𑾎𑾏𑾐𑾑𑾒𑾓𑾔𑾕𑾖𑾗𑾘𑾙𑾚𑾛𑾜𑾝𑾞𑾟𑾠𑾡𑾢𑾣𑾤𑾥𑾦𑾧𑾨𑾩𑾪𑾫𑾬𑾭𑾮𑾯𑾰𑾱𑾲𑾳𑾴𑾵𑾶𑾷𑾸𑾹𑾺𑾻𑾼𑾽𑾾𑾿𑿀𑿁𑿂𑿃𑿄𑿅𑿆𑿇𑿈𑿉𑿊𑿋𑿌𑿍𑿎𑿏𑿐𑿑𑿒𑿓𑿔𑿕𑿖𑿗𑿘𑿙𑿚𑿛𑿜𑿝𑿞𑿟𑿠𑿡𑿢𑿣𑿤𑿥𑿦𑿧𑿨𑿩𑿪𑿫𑿬𑿭𑿮𑿯𑿰𑿱𑿲𑿳𑿴𑿵𑿶𑿷𑿸𑿹𑿺𑿻𑿼𑿽𑿾𑿿𑀀𑀁𑀂𑀃𑀄𑀅𑀆𑀇𑀈𑀉𑀊𑀋𑀌𑀍𑀎𑀏𑀐𑀑𑀒𑀓𑀔𑀕𑀖𑀗𑀘𑀙𑀚𑀛𑀜𑀝𑀞𑀟𑀠𑀡𑀢𑀣𑀤𑀥𑀦𑀧𑀨𑀩𑀪𑀫𑀬𑀭𑀮𑀯𑀰𑀱𑀲𑀳𑀴𑀵𑀶𑀷𑀸𑀹𑀺𑀻𑀼𑀽𑀾𑀿𑁀𑁁𑁂𑁃𑁄𑁅𑁆𑁇𑁈𑁉𑁊𑁋𑁌𑁍𑁎𑁏𑁐𑁑𑁒𑁓𑁔𑁕𑁖𑁗𑁘𑁙𑁚𑁛𑁜𑁝𑁞𑁟𑁠𑁡𑁢𑁣𑁤𑁥𑁦𑁧𑁨𑁩𑁪𑁫𑁬𑁭𑁮𑁯𑁰𑁱𑁲𑁳𑁴𑁵𑁶𑁷𑁸𑁹𑁺𑁻𑁼𑁽𑁾𑁿𑂀𑂁𑂂𑂃𑂄𑂅𑂆𑂇𑂈𑂉𑂊𑂋𑂌𑂍𑂎𑂏𑂐𑂑𑂒𑂓𑂔𑂕𑂖𑂗𑂘𑂙𑂚𑂛𑂜𑂝𑂞𑂟𑂠𑂡𑂢𑂣𑂤𑂥𑂦𑂧𑂨𑂩𑂪𑂫𑂬𑂭𑂮𑂯𑂰𑂱𑂲𑂳𑂴𑂵𑂶𑂷𑂸𑂺𑂹𑂻𑂼𑂽𑂾𑂿𑃀𑃁𑃂𑃃𑃄𑃅𑃆𑃇𑃈𑃉𑃊𑃋𑃌𑃍𑃎𑃏𑃐𑃑𑃒𑃓𑃔𑃕𑃖𑃗𑃘𑃙𑃚𑃛𑃜𑃝𑃞𑃟𑃠𑃡𑃢𑃣𑃤𑃥𑃦𑃧𑃨𑃩𑃪𑃫𑃬𑃭𑃮𑃯𑃰𑃱𑃲𑃳𑃴𑃵𑃶𑃷𑃸𑃹𑃺𑃻𑃼𑃽𑃾𑃿𑄀𑄁𑄂𑄃𑄄𑄅𑄆𑄇𑄈𑄉𑄊𑄋𑄌𑄍𑄎𑄏𑄐𑄑𑄒𑄓𑄔𑄕𑄖𑄗𑄘𑄙𑄚𑄛𑄜𑄝𑄞𑄟𑄠𑄡𑄢𑄣𑄤𑄥𑄦𑄧𑄨𑄩𑄪𑄫𑄬𑄭𑄮𑄯𑄰𑄱𑄲𑄳𑄴𑄵𑄶𑄷𑄸𑄹𑄺𑄻𑄼𑄽𑄾𑄿𑅀𑅁𑅂𑅃𑅄𑅅𑅆𑅇𑅈𑅉𑅊𑅋𑅌𑅍𑅎𑅏𑅐𑅑𑅒𑅓𑅔𑅕𑅖𑅗𑅘𑅙𑅚𑅛𑅜𑅝𑅞𑅟𑅠𑅡$

損した板碑で、二次的に転用されたと考えられるもので、転用時の再調整（割れ口の研磨）が認められるものに以下のものがある。

1-473-2、613-1、624-1、682-1、709-12がある。これらは、転用があったものであるが、その用途は判然としない。

上述のもの以外では、破片以外で個体の形を比較的良く形を留めているものは、井戸内からの出土が主で、F1溝内出土のものを含め7例ある。そして、上述のF1溝出土のもの（613-1）は、向かって右側部が円形に削り込まれた状態で最調整が認められ、遺存の良いものが井戸内から出土していることを類推すれば、転用の一例として、井戸枠等が考えられる。これは、板碑自体が板状の状態でも強度も比較的ある点にあり、生活面での井戸に伴う施設として利用されたものと考えられる。

破片状態のものは上述の遺存の良好なものの一部であったとも考えられるが、同一個体を認定し得るものはなかった。

これらの板碑が、二次的に転用される段階としては、15世紀後半代に埋没の下限が考えられる井戸例が多く、この点から井戸の使用を考慮した場合15世紀前半代頃に転用の始まりが在ったと類推し得るのが当遺跡での所見としておきたい。また、この要因として、在地の支配体制の変革が大きな要因として惹起するが、各個体の年代が明確でない現状は推定の域を脱せないが、示唆に足る要素と考える。

塔婆

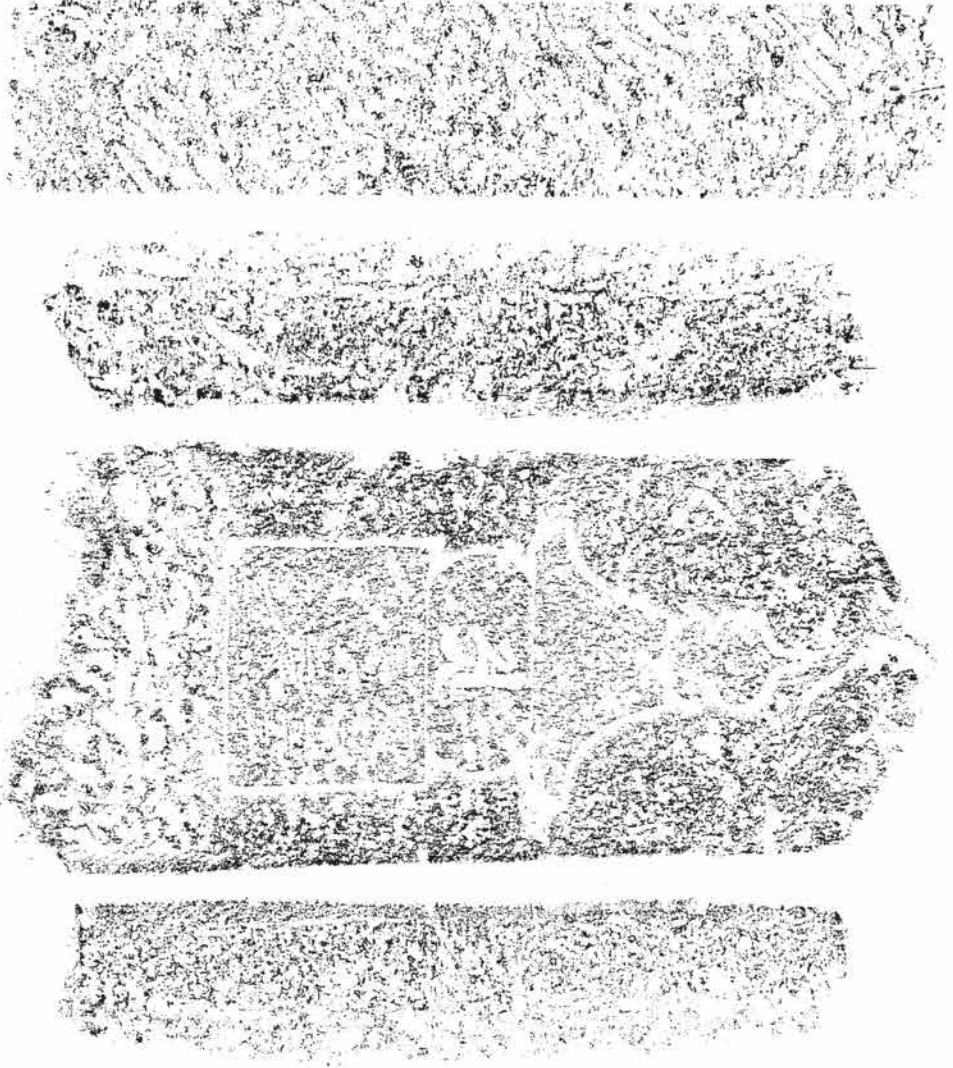
塔婆は1点のみ出土している。この表面には、沈線により五輪塔を表出している。そして、表出された五輪塔は、様相上古式と判断されるものであるが、鎌倉時代に降るものではないと考えられる。紀年銘はない。

この類例として国分僧寺に2例あり、1例はS K02^{註34}から出土したもので写真により示されている。このS K02例の五輪塔は、前述した五輪塔の風空輪のA類と同様の空風輪を刻んでおり、共伴した至徳2年（1385年）在銘の宝篋印塔の年代をすれば、現状での上限として考えられるがやや遡るものと思われる。今一つの類例は、図化等の掲載はなかったが、資料提供を受け、今次の報告中に図化させて戴いた（第779図）。

この類例には紀年銘が刻まれているが、判読し難く、應仁・慶仁とも読め、私年号とも思われるが、應仁とした場合、下端の“子”を干支とした場合に、応仁2年戊子（1468年）として判読される。この二者の類例を合わせ塔婆型の五輪は三例の資料となる。筆者の管見では、現在西上野での類例はこの4例であるが大^{註35}御堂例を考慮すれば5例の類例である。

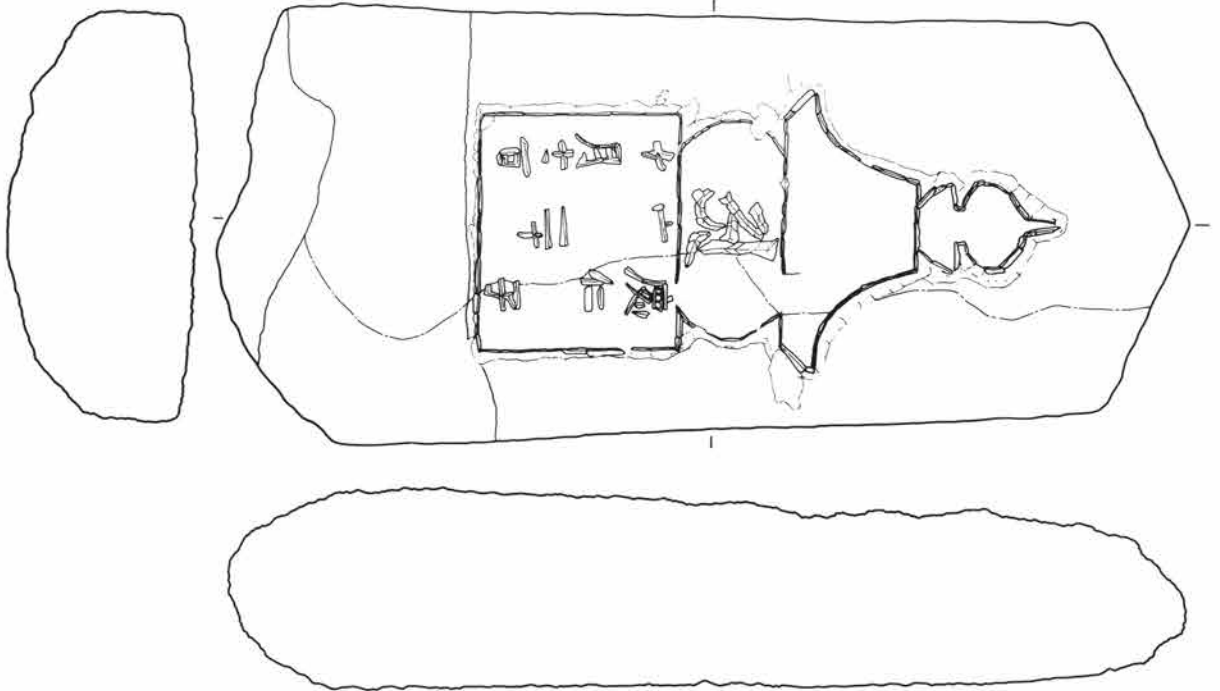
この三者の類例は、14世紀～15世紀代の年代観が得られているが、この年代観は、当遺跡出土の五輪塔の年代観と一致している。

上述してきた石製品・石造品は、当遺跡の14～16世紀にある盛期、特に14世紀後半～15世紀代を主体とする存在であることは少なくとも確認出来、一部のものについてはある程度の年代観も得られる。これらの石造品・石製品を含め、在地系土器群と共に変遷状態を考慮し、年代毎の組成図として付図10に示した。この付図は、在地産品の年代毎の組成を主眼に置いた。そして、当遺跡で破片の状態であるものについては、完形としての類例を周辺遺跡から求め、周辺遺跡で重要と判断されるものを併せて掲載した。



燻部分

この類例には、造立以後に倒置され左上部分が
地表面上にあり、被熱により燻が認められる。



第6項 総括

総括

当遺跡の調査により得られた所は前述したとおりであるが、各種毎に記述した点があり、遺構・遺物を総合的に記し総括としたい。

当遺跡の代表的な遺構(群)は、小見廃寺・薬師道南第1号館跡・中道南第1号館跡・高井道東第1号館跡がある。また、これら以外では、A1溝・D8溝・F1溝・G20溝・H11溝の大規模なものが在り、他に独立した存在で井戸・土坑・土塚墓がある。また、館跡は、F1溝・H11溝による大きな区画内に存在し、この区画域で、館跡外部で検出された遺構であっても館跡との関連付けはなされる遺構であり、むしろ、館跡と館跡の間に存在する空間地帯はどのような性格付けがなされるかが大きな問題である。

これらの館跡のうちで、14世紀後半から存在した薬師道南第1号館跡は、F1溝出土の土師質土器皿の年代観から類推したが、この土師質土器皿の様相は、第1項中で記述したとおり、下野の様相が強く認められた。この様相が7類C.10類A・Bであり、この分類の所産時期は14世紀第3四半期頃を比定した。すなわち、文和元年(1352年)～貞治2年(1363年)には守護代が芳賀高名に任ぜられ、推定した2類Eの様相が芳賀氏の出自地域に中心があるとした点から、少なくとも支配体制の変革がある程度影響しての所産であったと判断された。このことから、F1溝出土の下野様相は、薬師道南第1号館跡の周辺地で存在したと推定出来、この14世紀第3四半期頃に支配体制の変化があったものと類推出来る。そして、実際に芳賀氏が当遺跡地周辺に入部したかは不明としても、南北朝後半では、在地一揆の掌握も守護代に課せられた重要な点であることから、西上野・北上野(利根・沼田地域を指す)の一揆を掌握する地点として惣社周辺はその重要性を帯びたと考えられ、さらに貞治2年以降に長尾氏が白井に拠点を設けるのは単に越後との要所ではなく、北上野の国層統括の場としての意義も惹起される。ここに、芳賀氏乃至芳賀氏の一門が入部した可能性が想定される。

また、F1溝は、14世紀第3四半期の遺物が第I期の覆土内で存在する点では、開削がこれ以前に求められるが、第I期の覆土自体に含まれる遺物が、薬師道南第1号館跡を構築時の整地に伴い廃棄されたものと考えの方が必然性があり、同溝に切られるF2・6溝の存在が、むしろこの14世紀第3四半期に存在したと考えられる。そして、このF6・2溝が芳賀氏の入部段階^{註36}で構築があったものと思われる。また、14世紀中頃に比定し得る軟質陶器の一群中の一部は、この芳賀氏の入部頃に伴って搬入した可能性も想起され、特に、太田周辺地区での焼造製品のものも可能性も有り得ると思われる。これは、土師質土器皿の7類C.10類A・Bに対し得る一群である。逆説すれば、14世紀中頃の軟質陶器の一群の一部は、搬入なくして当遺跡での存在は無く、時代が降った段階で搬入したとしても、“搬入”としての存在は変わり無く、この14世紀中頃に搬入し得る状況は、前代の鎌倉時代から継続的に営まれた遺跡でなく、14世紀に入り唐突にその展開が始まる事から、当該地域での支配体制の変革にほかならず、特に当該地域が国衙領の存在であった点から、在地国人層の次元でなく、これらを統括する階層であったことは類推出来、上野国衙領が中院家の知行であったものが応永10年(1403年)に上杉憲定に領掌される必然性は、この応永10年以前における当該地域の重要性は前述の一揆に対する統括が重要な観点^{註37}として考えられる。この一揆は、平一揆・白旗一揆・藤一揆が知られるが、観応2年(1351年)の笠懸野の戦-康安元年(1361年)畠山国清の乱-貞治2年(1363年)の宇都宮氏綱・芳賀高名の乱-康暦2年(1380年)の小山義政の乱、等で一揆の存在は重要であった点に裏付けられる。そして、ここに14世紀中頃における当該地域の意義が認識される。

第4章 考 察

また、7類A・Bの土師質土器は上述の一群とF1溝内で共伴が認められ、B1溝内でも出土はあるものの、7類C・10類A・Bの共伴はない。この点では、7類A・Bの後出性も考慮されるところであるが、上野・下野の全体的な様相の中では、認め難い。この7類A・Bの存在は前述した他地域からの系譜によりその存在が考えられる点より、少なくとも、下野様相の一群が当遺跡に入る段階以前の領地支配に係わると思われ、文和元年（1352年）以前における長尾氏の存在が想起される。この点は、当該地域に文和元年以前に長尾氏の入部ないし長尾氏による支配があったことを示唆している。実際には、文和元年以前は長尾忠景が守護代である。しかし、勝守氏は、文和元年以前には長尾氏の惣社入部はなかったと^{註38}考えておられる。これは、観応2年（1351年）長尾忠景が世良田に駐屯するという表現上から判断されている。しかし、この観応の擾乱の折は、対宇都宮氏（尊氏方）に対することであり、南北朝の混乱段階での西上野の掌握はその前半期でも必須であった訳である。必然性からすれば文和元年以前における当該地域掌握は上杉氏から長尾氏に託された重要な任務であったと考えられる。この観点からすれば、文和元年以前において長尾氏が当該地域に入部があったことを示唆する遺物であると考えられる。

この上述の2点の点から、薬師道南第1号館跡第I期は、成立が1363年以降に想定され、これ以前は、長尾氏・芳賀氏により、当該地域掌握に係わった地域であることが類推出来る。

この第I期は、前刊書中で示した時代背景の第II期に該当し、長尾氏が上野に安定した基盤を築く段階での所産である。

館跡の第II期は、その状態から前刊書中で時代背景で示した第IV期に該当する。この期は、長尾氏の失墜・長野氏の台頭があり、長尾・長野両氏の国府での対峙以後の存在であり、館跡としては、脆弱と思われる状態のものである。

中道南第1号館跡部分で存在するG20溝・G31溝を中心とする方形区画域は、中央部程にG4号土塚墓が存在しており、或は、このG4墓の墓域を区画するものであったのかも知れないが、G4墓の所産が14世紀末に想定される点と、中道南第1号館跡が15世紀初頭頃に構築がある点からすれば、墓域上に館を構築する不可解な現象があり、また、14世紀後半の軟質陶器の出土がG区内で多い点から、この部分での生活域の考慮も必要である。これらの点を勘案すれば、判然としえない状態であって、明らかにし難いが、G106・110址のそ存在からすれば生活域に伴う何らの施設として考えられる。

これらの14世紀第4四半期に想定される遺構は、在地系土器をもたらした人々の所産により存在したと考えられる。この在地系土器が14世紀後半以降西上野（吉井・藤岡・乗附地域）での焼造が増大する点は、在地での需要を賄う点と周辺国への流通商品としての存在意義があり、さらにこの状態は経済面での発展も含まれる。この14世紀後半以降に西上野における生産の増加は、支配体制が安定した状況下である。具体的には山内上杉氏の支配体制が整う状況であり、守護代長尾氏による上野統治によるものである。この安定自体、長尾氏にとっても不可欠なものであり、山内上杉氏被官・長尾氏被官の国人層掌握も進んだものと思われる。

この長尾氏が在地国人層の統治の中で、経済的な安定もなければ掌握も無理がある。この点で有力被官である小幡・高山・寺尾・瀬下等の、吉井・藤岡・乗附地域の国人層に対し、政策的に軟質陶器焼造についての便宜をはかった点が想起し得る。この点は、工人集団乃至有職能者を他地域から施入する状態であるが、単にこの状態を放任したとは考え難く、何らかの統括的場自体をこの地域に及ばせたものと思われ、ここに、平井城の存在は大きい。この平井城は、永享の乱（永享10年）の折には上杉憲実はこの平井城に拠っている。また、長野氏を筆頭とする上州一揆に対する楔的意義があったものと考えられる。

すなわち、政治的に軟質陶器は、長尾氏の国人層掌握のための手段としての物であり、これを政治的に利

用し、上州一揆の中心部に直轄地的な場を設けた「材料」としてあったと推測される。

これに反し、文化の面では、在地で土器文化を高めた点と、播鉢・内耳鍋の如く、食料が比較的安定した状態で供給があったものと思われる。

また、吉井・藤岡地域に当該しない長野氏の場合は、この軟質陶器の特権的な扱いからはずれるが、他の物質での面で優遇があったかと考えられるが具体物がない。この点では、地域の国人と同様であるが、木製品等での面で何らかのものがあったかとも思われる。しかし、15世紀後半の長尾景春の叛乱の折、長野氏も景春に追従し、国府で長尾氏と対峙する点では、長尾氏の支配体制に不満が大きかった点があったと考えられ、目に見えない部分では、上述の点にあったものと思われる。

石製品・石造品では、南北朝期まで盛行した板碑が、15世紀代には消滅する。この現象は、軟質陶器の盛行とやや逆行した状態であり、少なくとも、板碑に係わる工人が新たな石造・石製品の出現に係わり改変されたことが考えられる。特に板碑に代わる如く多く造立される五輪塔・宝篋印塔等の存在は、これら板碑工人が改変された可能性が大きい。また、当遺跡例が初例の宝塔などは、上野における工人によるものとは考え難く、直接・間接はあっても、石工工人にとって変質は考えざるを得ない。そして、粉挽き白・播鉢（石製）などは、前代からの系譜が考え難い面からも類推出来る。

ただ、蒼海城が都市として発展する段階がこの15世紀代にあり、物質文化の面が、物の流通を促進させる場でもあるが、工人・職能集団自体もこの都市部で生活があったと考えられることから、一概に全ての工人が国人層の配下にあったと考えるものではない。特に、刀剣・甲冑などの工人は長尾氏の直接的支配下に有ったと考える。

長尾氏が文化の面で上野に貢献した点は、上述の点を中心に有ったと考えられ、当時の家内制手工業を殖産工業的にしたことが類推される。この点で、長尾氏の存在意義の一面があったと考えられる。

おわりに

第1分冊・今次の報告で扱った遺物は多種・多量に互った。しかし、従前においては、当該期以降の遺物は客体的な存在であり、実態自体も判然としなかった点が多い。ここに鑑一括性を重視し、図化掲載を行った訳であるが、資料自体の状態が不良なものであった点から、今後の資料増加に託する点が多いのも実態である。しかし、当遺跡から検出された遺構遺物は、周辺地域に於ける当該期の遺跡と比較した場合、質・量共に突出しており、当面は当該期の基準的資料となりうる存在であり、ここに当遺跡の最大の意義がある。当遺跡の意義・背景等を考えるに当たっては、故勝守すみ氏の諸論文の多くを参考とした。これらの中で、長尾氏に関する全てに近いことを文献1～11に拠った。当遺跡の存在意義を語る場合には、長尾氏の存在が不可欠であり、この長尾氏に就いての研究成果により多大な意義付けが出来た訳である。ここに氏の偉業を感じ入る次第である。

生前に発刊された、長尾氏に関する論考の集大成である「長尾氏の研究」は、地域史の究明にとって大きな足跡を留めており、今や故人となられている氏の業績を畏敬したい。しかし、現在では入手の困難な文献になっている。そして、同書中の「長尾氏研究の成果と課題 六 結び」に記されている、今後託する課題の一部でも引き継がせていただける我々は任重く、そして道も未だ遠い。また、その一部でも担えたら幸に思う。

第4章 考 察

引用・参考文献及び註（第3節第1項、第4節第1・3・5・6項）

- 1 勝守すみ『長尾氏の系譜について—その展望』『群大史学』第9号 1963
- 2 勝守すみ『室町時代における上野守護の研究』『群馬大学紀要 人文科学篇』第4巻 1954
- 3 勝守すみ『関東長尾氏の研究（1）』『群馬大学紀要 人文科学篇』第13巻 1964
- 4 勝守すみ『関東長尾氏の研究（2）』『群馬大学紀要 人文科学篇』第14巻 1965
- 5 勝守すみ『関東長尾氏の研究（3）』『群馬大学紀要 人文科学篇』第15巻 1966
- 6 勝守すみ『関東長尾氏の研究（4）』『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第16巻 1966
- 7 勝守すみ『山内上杉氏の領国支配と守護代（1）—長尾氏を中心として—』『群馬大学教育学部紀要 人文社会科学編』第18巻 1968
- 8 勝守すみ『関東長尾氏関係文書集 第一』郷土研究史料第二十二輯 練馬郷土史研究会 1968
- 9 勝守すみ『未刊史料「永祿日記」について』『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第23巻第4号 1973
- 10 勝守すみ『未刊史料「永祿日記」について（続）』『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第24巻第3号 1974
- 11 勝守すみ『長尾氏の研究』関東武士研究叢書 第6巻 1978
- 12 峰岸純夫『東国における15世紀後半の内乱の意義』『地方史研究』第66号 1964
- 13 峰岸純夫『戦国時代の「領」と領国—上野国新田領と後北条氏』『慶応義塾志木高等学校紀要』創刊号 1969
- 14 豊田 武『中世の関東』『下野史学』第8号 1956
- 15 佐藤博信『戦国期における東国国家論の一観点—古河公方足利氏と後北条氏を中心として』『歴史学研究 1979年度大会別冊 世界認識における地域と民衆』 1979
- 16 永田永世『上野名跡志』嘉永6年（1853）
- 17 堯恵『梅花無尽蔵』『続羣書類従』第12輯下 続羣書類従完成会 1925
- 18 藤田元春『尺度綜考』 1929
- 19 後藤守一『〔考古学講座〕原始古代の武器と武装』雄山閣 1930
- 20 豊國覺堂『東國分發掘の梵鐘に就て』上毛及び上毛人第218號 1935
- 21 跡部直治『宝篋印塔』『佛教考古学講座』第2巻 雄山閣 1936
- 22 跡部直治『寶塔』『佛教考古学講座』第3巻 雄山閣 1936
- 23 稲村坦元『板碑』『佛教考古学講座』第5巻 雄山閣 1936
- 24 久保常晴『鰐口』『佛教考古学講座』第8巻 雄山閣 1936
- 25 永原慶二『東国における惣領制の解体過程』『史学雑誌』第61編第3号 1952
- 26 奥野高広『前期封建制と撰銭禁令』『国史生活史研究』2 吉川弘文館 1959
- 27 豊田 武『武士団と村落』 1963
- 28 澁澤敬三『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻 神奈川大学日本常民文化研究所編 1966～1968
- 29 萩原龍夫『中世利根川文化圏と宗教』『歴史教育』第15巻第8号 1967
- 30 前澤輝政『足利智光寺址の研究』綜芸舎 1967
- 31 飯田嘉一郎『中国古尺集説』綜芸舎 1969
- 32 奈佐勝臯『山吹日記』校注 萩原 進 『群馬県史料集 第6巻 日記篇（II）』群馬県文化事業振興会 1971
- 33 新井司郎『縄文土器の技術』中央公論美術出版 1973
- 34 久保常晴『火葬墓の類型と展開』『新版仏教考古学講座』第7巻 墳墓 雄山閣 1975
- 35 野村幸希『関東』『新版仏教考古学講座』第7巻 墳墓 雄山閣 1975
- 36 大脇彦彦『関東（9）鉱工業』『日本歴史地理総説 中世編』藤岡謙二郎編 吉川弘文館 1975
- 37 小林健太郎『関東（10）商業』『日本歴史地理総説 中世編』藤岡謙二郎編 吉川弘文館 1975
- 38 石田茂作『総説』『新版仏教考古学講座』第1巻 雄山閣 1976
- 39 日野一郎『関東』『新版仏教考古学講座』第3巻 塔・塔婆 雄山閣 1976
- 40 千々和 実『板碑』『新版仏教考古学講座』第3巻 塔・塔婆 雄山閣 1976
- 41 坪井利弘『日本の屋根瓦』理工学社 1976
- 42 坪井利弘『図鑑屋根瓦』理工学社 1977
- 43 橋崎彰一『瀬戸』『世界陶磁全集3 日本中世』 1977
- 44 小泉袈裟勝『ものさし』ものと人間の文化史22 法政大学出版局 1977
- 45 『尊卑分脈』第二・三・四編『国史大系』 1977
- 46 久保常晴『続佛教考古学研究』ニューサイエンス社 1977
- 47 中田 英『地下式土塚研究の現状について』神奈川考古2号 1977
- 48 『鎌倉大草紙』『新校羣書類従 第16巻』巻第382 名著普及会 1977
- 49 法隆寺『法隆寺の古瓦』 1978
- 50 上原真人『古代末期における瓦生産体制の変革』『古代研究』13・14 元興寺文化財研究所考古学研究室 1978
- 51 下原重伸『鉄山秘書』（三枝博音校訂 鉄山必要記事 復刻『日本科学古典全書 5巻』 1978）
- 52 伊藤一美『長尾景仲について』『歴史手帖』第6巻第8号 特集上野地方の歴史 名著出版 1978
- 53 三輪茂雄『白（うす）』ものと人間の文化史25 法政大学出版局 1978
- 54 半田堅三『本地下式土塚の類型学的研究』伊知波良2号 1979
- 55 宮崎 博『近世における本瓦の製作技術について』『貝塚』25 物質文化研究会 1980
- 56 井上恵一『武蔵における後北条氏の商業統制』『関東中心 戦国史論集』東国戦国史研究会編 1980
- 57 加藤 哲『後北条氏の宗教政策—武州八王子領の場合』『関東中心 戦国史論集』東国戦国史研究会編 1980
- 58 稲垣晋也『赤土器・白土器—中世「かわらけ」の編年』『大和文化研究』8号 1980
- 59 橋崎彰一『美濃古陶のながれ』『美濃古陶』 1980

第4節 鎌倉時代以降の出土遺物について

- 60 千々と和『金石文からみた中世の東国—中世東国の社会と文化』『歴史学研究 1981年度別冊 地域と民衆—国家支配の問題をめぐって』 1981
- 61 古河市『古河市史資料』中世編 1981
- 62 坪井利弘『古建築の屋根瓦—伝統の美と技術』 1981
- 63 駒井綱之助『かわら日本史』雄山閣 1981
- 64 北西 弘『一向一揆の研究』春秋社 1981
- 65 宮本常一『絵巻物に見る日本庶民生活誌』中央公論社 1981
- 66 五来 重『絵巻物と民俗』角川書店 1981
- 67 元興寺文化財研究所『中・近世瓦の研究—元興寺篇』 1982
- 68 今井泰男『信濃の鉄』(上) 銀河書房 1983
- 69 坪井良平『鎌倉時代の梵鐘鑄物師』『歴史考古学の研究』収載 ビジネス教育出版社 1984
- 70 坪井良平『中世鎌倉梵鐘鑄物師考』『歴史考古学の研究』収載 ビジネス教育出版社 1984
- 71 坪井良平『梵鐘の鑄造地』『歴史考古学の研究』収載 ビジネス教育出版社 1984
- 72 井上哲郎『戦国期における「半国」について—西上州を中心として—』『立教日本史論集』第3号 立教大学日本史研究会 1985
- 73 遠藤元男『中世手工業の諸問題』『古代中世の職人と社会』収載 1985
- 74 鎗水柏翠『古河通史』上巻 1986
- 75 町田 洋・新井房夫・森脇 広『地層の知識 第四紀をさぐる』『考古学シリーズ』8 東京美術 1986
- 76 丹治康明『東播産瓦』『第5回中世土器研究集会資料』中世土器研究集会 1986
- 77 森田 稔『東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心に—』『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986
- 78 池上 悟『地下式墳瞥見』『立正史学』第59号 1986
- 79 群馬県教育委員会『群馬縣史』第1巻 1927
- 80 石田文四郎『沼田町史』沼田町史編纂委員会 1952
- 81 『元総社町誌』元総社町誌編纂委員会 1955
- 82 『総社町誌』総社町誌編纂委員会 1956
- 83 『国府村誌』国府村誌編纂委員会 1968
- 84 『子持村史』子持村教育委員会 1968
- 85 山崎 一『群馬県古城墓址の研究』上巻 1971
- 86 山崎 一『群馬県古城墓址の研究』下巻 1971
- 87 山田武麿『群馬県の歴史』 1974
- 88 『箕郷町誌』箕郷町 1975
- 89 『藤岡のかわら史』藤岡瓦沿革史編纂委員会 1977
- 90 山崎 一『群馬県古城墓址の研究』補遺編 上巻 1979
- 91 山崎 一『群馬県古城墓址の研究』補遺編 下巻 1979
- 92 大江正行『群馬県と周辺地域の中世土師質土器Ⅲ』『群馬考古通信』第7号 群馬県考古学談話会 1980
- 93 『第3回 関東古瓦研究会 研究資料No.3』関東古瓦研究会 1982
- 94 『新田町誌』第4巻 「特集編 新田荘と新田氏」新田町・新田町誌刊行委員会 1984
- 95 近藤義雄『箕輪城と長野氏』上毛文庫4 1985
- 96 『子持村誌』上巻 子持村誌編さん委員会 1987
- 97 群馬県教育委員会『上野国分尼寺跡発掘調査報告書(昭和44年度調査概報)』 1970
- 98 群馬県教育委員会『上野国分寺周辺地域発掘調査報告—僧寺尼寺中間地域の考古学的検討』 1971
- 99 群馬県教育委員会『上野国分尼寺跡発掘調査報告書(昭和45年度調査概報)』 1971
- 100 尾島町教育委員会『長楽寺遺跡—世良田小学校改築工事に伴う発掘調査—』 1978
- 101 高崎市教育委員会『元島名遺跡—圃場整備事業に伴う元島名遺跡群の調査報告(2)—』高崎市文化財調査報告書第6集 1979
- 102 高崎市教育委員会『矢島遺跡—御布呂遺跡—圃場整備事業に伴う浜川遺跡群の調査概要(1)』高崎市文化財調査報告書第7集 1979
- 103 高崎市教育委員会『寺ノ内遺跡—圃場整備事業に伴う浜川遺跡群の調査概要(2)』高崎市文化財調査報告書第13集 1979
- 104 群馬県教育委員会『中世墓と伴出遺物』『鳥羽遺跡No.5』 1979
- 105 群馬県教育委員会『下郷—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集—』 1980
- 106 前橋市教育委員会『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』土地改良事業実施区内埋蔵文化財発掘調査概報 1980
- 107 富岡市教育委員会『稲荷森遺跡発掘調査報告書』 1980
- 108 群馬県教育委員会『史跡上野国分寺—寺域確認発掘調査概要—』 1981
- 109 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『清里・陣場遺跡』昭和50年度県営畑地帯総合土地改良事業清里西部地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 1981
- 110 前橋市教育委員会『清里南部遺跡群(III)』土地改良事業実施区内埋蔵文化財発掘調査概報 1981
- 111 富岡市教育委員会『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』 1981
- 112 群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査概要2』 1982
- 113 群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『元島名B・吹屋遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 1982
- 114 群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査概要3』 1983
- 115 群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査概要4』 1984
- 116 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『県立文書館遺跡』県立文書館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1984
- 117 群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査概要5』 1985
- 118 藤岡市教育委員会・藤岡市農業協同組合『F,業師原』 1985

第4章 考 察

- 119 高崎市教育委員会『宿大類遺跡群IV 村北・矢島前・村東遺跡』高崎市文化財調査報告書第61集 1985
- 120 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『浜町屋敷内遺跡C地点』県営浜町住宅団地に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1985
- 121 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上並榎南遺跡』信越本線北高崎・群馬八幡間烏川橋りょう改良工事事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告 1985
- 122 群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査概要6』 1986
- 123 高崎市教育委員会『宿大類遺跡群VII 矢島町村西・増殿遺跡』高崎市文化財調査報告書第71集 1986
- 124 高崎市教育委員会『矢中遺跡群IX 下村北・砂内遺跡—昭和60年度矢中地区団体営團場整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概要』高崎市文化財調査報告書第77集
- 125 山武考古研究所『関泉樋南遺跡』 1986
- 126 群馬町教育委員会『北原遺跡』—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-I)— 1986
- 127 群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査概要7』 1987
- 128 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『下東西遺跡』—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集— 1987
- 129 新田町教育委員会『東田遺跡』新田町文化財調査報告書第9冊 1987
- 130 栃木県教育委員会『佐野市工業住宅団地内遺跡 発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財報告書第3冊 1970
- 131 前澤輝政『中里古墓群の研究』 1973
- 132 栃木県教育委員会『神明西遺跡』 1973
- 133 栃木県教育委員会『下野葉師寺跡発掘調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告書第11集 1973
- 134 栃木県教育委員会 日本道路公団東京支社『石那田館跡』栃木県埋蔵文化財報告書第17集 1975
- 135 栃木県教育委員会『茶臼塚古墳群 小松原遺跡 県営團場整備事業地内遺跡発掘調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告書第27集 1979
- 136 栃木県教育委員会『下野国府I—昭和51～53年度発掘調査概報—』栃木県埋蔵文化財調査報告書第30集 1979
- 137 栃木県教育委員会『下野国府II—昭和54年度発掘調査概報—』栃木県埋蔵文化財調査報告書第35集 1980
- 138 足利市文化財総合調査団・足利市教育委員会『足利市総合文化財調査 年報—I』 1980
- 139 鎌倉市教育委員会『光明寺裏遺跡』 1980
- 140 栃木県教育委員会編 財団法人栃木県文化振興事業団発行『赤塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第36集 1981
- 141 栃木県教育委員会『辻の内遺跡 道路建設地内発掘調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告書第39集 1981
- 142 栃木県教育委員会『下野国府III—昭和55年度発掘調査概報—』栃木県埋蔵文化財調査報告書第42集 1981
- 143 足利市文化財総合調査団・足利市教育委員会『足利市総合文化財調査 年報—II』 1981
- 144 小山市教育委員会『市史跡小山城跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第12集 1982
- 145 栃木県教育委員会『下都賀郡大平町 川連城跡—県道栃木・藤岡線道路建設地内発掘調査報告—』栃木県埋蔵文化財調査報告書第48集 1982
- 146 足利市文化財総合調査団・足利市教育委員会『足利市総合文化財調査 年報—III』 1982
- 147 鎌倉市鶴岡八幡宮『研修道場用地発掘調査報告書 鶴岡八幡宮境内の中世遺跡発掘調査報告書』 1983
- 148 財団法人栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区—昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概報—』住宅・都市整備公団 小山・栃木都市計画事業 栃木県埋蔵文化財調査報告書第55集 1983
- 149 足利市文化財総合調査団・足利市教育委員会『足利市総合文化財調査 年報—IV』 1983
- 150 兵庫県教育委員会『魚住古窯群』 1983
- 151 財団法人栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区—昭和58年度埋蔵文化財発掘調査概報—』住宅・都市整備公団 小山・栃木都市計画事業 栃木県埋蔵文化財調査報告書第61集 1984
- 152 小山市教育委員会『宮内北遺跡 緊急発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第16集 1985
- 153 財団法人栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区—昭和59年度埋蔵文化財発掘調査概報—』住宅・都市整備公団 小山・栃木都市計画事業 栃木県埋蔵文化財調査報告書第71集 1985
- 154 明石市教育委員会・平安博物館『魚住古窯址群発掘調査報告書』 1985
- 155 妙見山麓遺跡調査会『神出・神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』 1985
- 156 財団法人栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区—昭和60年度埋蔵文化財発掘調査概報—』住宅・都市整備公団 小山・栃木都市計画事業 栃木県埋蔵文化財調査報告書第79集 1986
- 157 財団法人栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区—昭和61年度埋蔵文化財発掘調査概報—』住宅・都市整備公団 小山・栃木都市計画事業 栃木県埋蔵文化財調査報告書第86集 1987
- 158 氏家町教育委員会『勝山城II 氏家町勝山城跡発掘調査報告書一付・シンポジウム「勝山城とその時代」—』氏家町埋蔵文化財調査報告書第2集 1987

註

- 註1 溝は、墓域を形成する溝であったかも知れない。
- 註2 2類Cは、外観上内湾形態で2類に包括されるが、度目比で他の2類と異なっている。また、共存関係からも他の2類に認められない様相である。また、この類別に対比し得る大形器種は認められなかった点で今後の検討を有するものと思われるが、下東西遺跡の80-G-28出土(822頁-36)の大形器種は、形状から4類に対比し得る。この類別は体部・口縁部が内湾するもので、図示されたものを実物と比較すると、実物の丸味がより強いものである。この4類に対比し得る類別は、当該の2類Cに対比し得るとも思われるが、2類C自体の器厚の点で問題点を残しており、所属時期を明定し得ない点から、類別増加を待ちたい。
- 註3 大形器種としたものは、二者が有り、前刊書の第642図の中央列の如く、より大きい一群が有る。この点では、"小形・並形・大形。"として考えられ、本稿中で示している大形は並形と対比されるが、上述三者での大形は、現段階では明確な意義付けを行わなかった点で今後再考したい。
- 註4 文献92。
- 註5 文献120。
- 註6 文献92。
- 註7 文献30。

- 註8 文献131。
- 註9 文献146。
- 註10 文献146。
- 註11 文献130。
- 註12 文献140。
- 註13 文献145。
- 註14 文献144。
- 註15 文献134。
- 註16 文献132。
- 註17 文献141。
- 註18 文献148・151・153・156・157。
- 註19 文献133。
- 註20 文献135。
- 註21 文献139。
- 註22 文献139。
- 註23 文献1・3。
- 註24 笠懸野の戦いの様に、守護代側についていた国人・一揆は戦の後半の様子を見て、大島義政側につき、長尾氏は敗走している。この点からは、始めの段階で守護代側（長尾氏）につく点は足利直義の関東での支配力を物語っているが、やはり始め段階に足利直義麾下の守護代に付くのも、この守護代としての名義に有ったものと考えられる。
- 註25 室町幕府の機構では関東に対して、鎌倉公方を配し東国10ヶ所の知行を行わせている。この中で上杉氏の存在は、鎌倉公方より実権を有し、実際面での権力は上杉氏による統治であった。ただ、室町時代を通じて、関東の状況は決して安定したと言え得る状態でないことは、諸例の戦いにより窺える。ただ、汎日本的に見た場合、東国という小単位内での事象であり、東国全体はやはり、上杉氏による統括内でのことと判断され、室町幕府に於ける上杉氏の存在は大きなものであったと考えられる。
- 註26 文献109。
- 註27 この場合、成・整形が平坦で、成・整形台から取り外した段階から以後のことは考慮していない。すなわち、平坦な台から取り外した後、地面乃至乾燥させる場所の窪みに砂を敷き、この段階で底部に丸味を付けた可能性も有る訳である。
- 註28 文献127。大江正行「中世土・陶・磁器」『下東西遺跡』第4章第4節
- 註29 当該の胎土による産地の比定は、中世における在産窯業生産の実態を、遺跡の出土資料より明らかにするものであるが、古代の如く資料自体が多くない点で危惧を感じ得る。しかし、一方法としての意義はある。
- 近年古代遺物（土器中心）の編年が試考されている。特に、窯跡群の所在地と隔絶する地域（特に国府の周辺地域等を指す）では、全ての土器の中で、遺跡周辺で焼造された以外のものは全て各窯跡群からの搬入品であり、ここに供給と需要の関係、すなわち、流通というものが存在することは周知のとおりである。特に、その顕著なものに瓦がある。この如く、遺跡内出土の遺物を一次的に扱うには、単なる編年学として、遺跡の時間でのものさしでしかあり得ず、また、内在すると思われる矛盾自体を、単線的に無意識の内に納めているものとする。さらに、突発的形狀のもの自体を“違系”と扱い、内在する問題の抽出もなされていない面等、様々な問題点を内包させている。
- 産地を比定する意義は、現在の群馬県下における各窯跡群の調査資料が少ない段階では、逆説的に遺跡からの判断も要求がなされる訳である。そして、これを踏まえれば、遺跡から出土する“量”は各窯跡群の供給実態が把握されることになる。さらに、この点では、社会的背景を示唆するに足るものがある。換言すれば、各窯跡群毎の供給を考慮した編年に出発点があり、これを原点としての遺跡の性格付けも生ずる訳である。また、本来遺跡毎の編年はここに立脚する筈である。すなわち、編年することが目的ではなく、一つの遺跡から得られる所見を最大限求める場合の一手段としての認識を再認する必要がある。
- 反面、この観点での論述は、大江正行氏が「群馬文化199号」で表した“群馬県における古代窯跡群の背景”は、我々が目指す点であり、考古学からの文化・政治を分明にせんとした唯一のものであると考える。
- さらに加えれば、胎土分析の科学的方法を実施した場合、これに基づく所見を、各遺物に与えなければ、元来の意味は忘却されてしまう。ただ、性急に求めるのではなく、少なくとも分析資料と非分析資料との対比の記述を懇願したい。
- これらのことから、古代史における、考古学が扱わんとする遺構・遺物から、文化・政治・思想等のあらゆる面での復原が可能と成りうるものとする。そして、ここに当遺跡出土の14～16世紀の遺構遺物からの所見を求めた。
- 註30 文献109。
- 註31 文献9・10。
- 註32 長尾貞治氏が写した系図を拝見させていただいた。この系図中に菩提寺の記載が有るのは、唯一、この記事のみで、長尾景致の部分に註書きされている。
- 註33 文献127。津金沢吉茂「石製品について―用途不明石製品―」『下東西遺跡』第4章第5節―6
- 註34 文献111。
- 註35 筆者実見 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団において調査途上である関越自動車道（上越線）地域の大御堂遺跡に有り、右島和夫・綿貫鋭次郎・船藤 亨の三人の御行為により記した。
- 註36 この入部の意味は、本文中でも示したが、実際の芳賀氏だけを示すのではなく、一門乃至被官の人も含む。
- 註37 一揆自体は戦の様子によりその帰属が判然としなかった場合が多く、最終的に優勢側に付く場合が大半の様である。この点では、在地の国人存続に必要なことであったと思われるが、上杉・長尾両氏、宇都宮・芳賀両氏もこの一揆の状況による労苦は受けている。
- 註38 文献1・3。

上野国分僧寺・

尼寺中間地域(2)

《本文編》

一関越自道車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第20集一

昭和63年3月25日印刷

昭和63年3月31日発行

編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1番1号
電話(0272)23-1111

印刷／朝日印刷工業株式会社
